THE LIBRARIES
COLUMBIA UNIVERSITY

EAST ASIAN LIBRARY
JAPANESE COLLECTION

博文館編輯局校訂

校訂

眞田三代記

全

東京 博文館藏版

續帝國文庫第一編

解題

曩に帝國文庫五拾編刊行完く了る、我國印刷出版の事ありて以來、實に無前の大業たり。然るに江戸時代昇平二百餘年、作家輩出し、名篇傑著甚だ富む。選探する所既に多しと雖も、滄海の遺珠極めて少からず。湮滅蠹蝕日に漸く相踵かんとするを想へば、轉た續刊の急務たるを覺えしむるものあり。仍て當初の志望を貫徹せんため、更に五拾編を發行する事となりぬ。

本編收むる所は眞田三代記、日本武士鑑の二部とす。眞田三代記は幸隆、昌幸、幸村三世の戰伐を記述し、作者詳ならずと雖も、

T231
v. 1

校訂 眞田三代記總目錄

第壹編

第一　眞田家系の事、幷甲州石和合戰の事
第二　眞田德王丸元服の事幷武田加賀美確執の事
第三　眞田幸隆智計の事幷加賀美夜討敗軍の事
第四　原小幡敗軍の事幷相木森之助勇力の事
第五　眞田幸隆相木を生捕る事幷眞田幸義病死の事
第六　平賀成瀨鹽川合戰の事幷飯室右京亮討死の事
第七　後柏原院御即位の事幷眞田一計を施す事
第八　武田勢勇戰の事幷福嶋山縣討死の事
第九　武田勝千代誕生の事幷勝千代幼稚妙才の事
第十　勝千代父信虎と不和の事幷勝千代丸元服の事
第十一　武田信虎海野口城攻の事幷平賀妻女白絹勇力の事
第十二　大膳大夫晴信智計の事幷海野四郎武勇の事

演義體歴史小說こしては、亦一名作こして數ふべきものたり。是れ眞田氏一門の人物事業傳ふべき者多きに由るも、亦作者の筆致文藻之に副ふが爲たるこご知るべし。

日本武士鑑は難波の隱士、一雪こいふ人の作にして、元祿九年の刊行に係る。一雪の何人たるは未だ詳ならずご雖も、思ふに當時の俳諧師などなるべし。眉輪王以來復讎に涉れる今古の事實を綜記したるものにして、以て武士道砥礪の鑑に供せんが爲の作なるこご、自序を讀みて知らる。文辭簡樸にして誦すべく、亦一好著たるを失はず。

明治丁酉臘月

質軒居士識す

第十五　戸石合戰山本妙策の事幷眞田勝敗を計る事
板垣饗應黑白分る事幷村上義清景虎を賴む事
第十六　須野原兄弟義清を計る事幷幸隆村上勢を皆死しにする事
筧虎秀怪力の事幷幸隆村上勢を破る事
第十七　樂岩寺佐栗燒死の事幷村上義清上田原合戰の事
村上義清大敗軍の事幷長尾景虎を賴む事
第十八　幸隆智計景虎を苦しむ事幷眞田信綱武勇の事
長尾景虎難戰の事幷彈正忠幸隆薙髮の事
第十九　幸隆苅屋原の城を攻落す事幷眞田昌幸初陣高名の事
武田信玄木曾を討事幷眞田昌幸勇戰の事
第二十　昌幸伊奈九郎兵衛を討事幷木曾義昌武田と和睦の事
一徳齋信玄を諫める事幷武田勢大敗軍の事
第廿一　一徳齋上杉謙信を破る事幷昌幸宿砂筒にて謙信を討事
謙信甲府へ和を請ふ事幷上州相州攻の事
第廿二　北條氏康出馬催促の事幷山本眞田諫言の事

第八　今井貞國切腹の事并眞田信綱出生の事
信虎晴信を廢せんとする事并晴信今川へ密使を送る事
第九　板垣甘利信虎を欺く事并晴信父を廢する事
眞田幸隆晴信を難ずる事并幸隆古市賴母に對面の事
第十　武田晴信幸隆を憎む事并石原小六死刑の事
眞田幸隆村上勢を破る事并相木森之助武勇の事
第十一　山本勘介生立の事并眞田山本對面の事
海野次村討死の事并鵜野相摸坊武勇の事
第十二　長尾猿松丸武勇の事并晴信山本勘介對面の事
山本勘介眞田を勸る事并山本晴幸眞田を說く事
第十三　眞田幸隆甲府へ赴く事并筧重兵衛眞田に仕へる事
信州小田井合戰の事并眞田幸隆妙計の事
第十四　武田諏訪和睦の事并賴茂主從誅戮の事
跡部左馬助自害の事并鹽尻峠合戰の事
板垣信形敵の謀計に乘る事并眞田信綱初陣の事

第三十　眞田昌幸智謀北條勢を破る事并荒川多目戰死の事
木下秀吉遠計信玄を欺く事并眞田昌幸木下が謀計を碎く事

第貳編

第一　眞田一計秀吉を欺く事并昌幸信玄に諫言の事
小山田信茂軍議の事并信玄小田原へ雷發の事
第二　武田勢名倉城攻の事并名倉下野守戰死の事
小山田信茂敗軍の事并昌幸萬全の謀計を述る事
第三　信玄再度小田原へ發向の事并相摸川合戰の事
松田尾張守敗北の事并石弓箭之助が事
第四　相州酒匂川合戰の事并眞田昌幸奇計の事
北條氏忠敗軍の事并大道寺地雷火を伏る事
第五　北條方謀計相違の事并眞田馬場山縣手分の事
眞田昌幸松田を破る事并謙信川中嶋へ出陣催しの事
第六　武田勢小田原退口の事并山縣馬場後殿の事
富永四郎左衛門謀計の事并北條方諸將手分の事

川中嶋合戰軍議の事并眞田遠計符合の事
第廿三　武田信繁諸角山本討死の事并謙信信玄の旗本へ切入事
眞田昌幸雨の宮を渡す事并穴山源覺討死の事
第廿四　眞田昌幸宇佐美を討事并一德齋病死遺言の事
眞田昌幸遺言を受先君に謁する事并布下彌四郎武勇の事
第廿五　信玄嫡子義信と不和の事并眞田昌幸忠言の事
武田義信逆心今川合戰の事并隱謀露顯方人召捕るゝ事
第廿六　飯富兵部少輔切腹の事并織田信長勝賴を聟にする事
武田信玄上州廐橋を攻る事并眞田信綱夜討の事
第廿七　眞田信綱後殿を望む事并木辻別右衛門勇戰の事
今川北條合體鹽留の事并上杉謙信武田へ義使を送る事
第廿八　武田信玄駿府亂入の事并眞田昌幸斥候の事
眞田昌幸妙計今川敗軍の事并岡部忠兵衛戰死の事
第廿九　德川家康公信玄へ使者を送る事并眞田智計演說の事
德川家掛川城攻の事并山縣三郎兵衛勇戰の事

第十五　武田勢三州勢を破る事并德川源君即智の事
毛利父子只來合戰の事并鈴木越後守落命の事
第十六　二俣落城の事并武田勢味方ヶ原出張の事
味方ヶ原合戰三河勢敗軍の事并織田德川の諸士戰死の事
將軍義昭公より御敎書を賜はる事并武田勢諸城を落す事
第十七　武田信玄病死の事并諸將へ遺命の事
北條家の諸將評議の事并杉浦甲府へ使者の事
第十八　眞田僞計北條の使者を欺く事并德川源君長篠攻の事
武田勢敗軍の事并眞田兄弟忠諫の事
第十九　武田勝賴長篠出張の事并大須賀小谷逆心の事
眞田信幸初陣の事并大須賀隱謀露顯の事
第二十　織田信長長篠出張の事并眞田馬場山縣忠諫の事
馬場信房勇戰の事并山縣昌景力戰の事
第廿一　武田家勇將討死の事并眞田兄弟戰死の事
馬場信房勇戰討死の事并笠井筑後守忠死の事

第七　武田北條三増合戰の事并眞田即智手分の事
御湯見薩摩守勇戰の事并諸將接戰の事
第八　淺利信音勇戰の事并甘利淺利戰死の事
第九　御湯見薩摩守戰死の事并武田勢歸陣の事
客星出現昌幸諫言の事并信玄客星の事を陰陽師に尋る事
第十　信玄自己の像を造る事并眞田昌幸明智の事
上杉北條甲信へ發向の事并直江柿崎夜討の事
第十一　武田勢惣敗軍の事并昌幸北條勢を欺く事
北條勢敗軍の事并謙信信玄箕輪合戰の事
第十二　謙信智計退口の事并眞田幸村誕生の事
遊謦吳道論議の事并布下貞家兩僧に說事
第十三　兩僧氏政に和睦を勸る事并小田原諸將籠城の事
武田勢高天神城攻の事并小笠原氏助勇戰の事
第十四　鈴木越後守防戰智計の事并武田勢數度敗軍の事
眞田勢美濃圍六を生捕事并昌幸即計足助落城の事

第三十　小宮山數馬眞田に逢事并三國峠合戰の事
眞田與三郎幸村明智の事并幸村直江杉浦を伏する事
幸村北條の大軍を破る事并上田籠城の事

第三編

第一　信州上田合戰の事并瀧川明智兩將諫言の事
第二　織田德川北條上田城惣攻の事并鷄卵の謀計寄手大敗軍の事
眞田幸村智謀の事并寄手火攻敗走の事
第三　德川織田兩將軍議の事并寄手再度惣敗軍の事
古田依尾上田拔懸の事并古田次郎兵衛討死の事
第四　上田城の寄手軍令を定める事并穴山安治幸村に諫言の事
昌幸幸村が即智を感ずる事并幸村智計寄手を破る事
第五　羽柴秀吉中國より上田へ赴く事并秀吉信長公と物語の事
羽柴秀吉城中へ赴く事并眞田父子忠心を顯す事
第六　羽柴秀吉和睦を調ふる事并幸村寄手へ武器を送る事
土屋九郎右衛門忠義の事并明智光秀逆意を企つる事

第廿二　眞田安房守甲府へ來る事并眞田長坂口論の事
武田北條婚姻を結ぶ事并昌幸奇謀を立る事
第廿三　眞田上杉謙信に說事并春日山城中騷動の事
武田勝賴越後表發向の事并直江山城守對陣の事
第廿四　土屋初鹿野夜討の事并眞田昌幸即謀の事
武田上杉兩家和睦の事并三郎景虎切腹の事
第廿五　眞田沼津に新城を築く事并德川北條兩家發向の事
武田勝賴富士川を渡る事并源君即智の事
第廿六　三河勢敗軍の事并昌幸北條勢を破る事
膳の城素肌攻の事并高天神落城の事
第廿七　木曾義昌謀反の事并武田の諸將變心の事
小山田岩殿に籠城を勸る事并勝賴人質を燒殺す事
第廿八　小山田兵衛尉逆心の事并小宮山內膳兄弟の事
小山田數馬上田に赴く事并勝賴父子天目山に籠る事
第廿九　勝賴父子最期の事并眞田上田より發向の事

第十五　佐々內藏之助逆意の事幷妙見嶺合戰の事
近藤善之助父の敵を討事幷眞田犬山城主を欺く事
第十六　幸村奇計犬山落城の事幷太田林齋討死の事
眞田智計深尾の砦を攻落す事幷稻垣讃岐守最期の事
第十七　北條氏政犬山の城へ發向の事幷眞田即智北條勢を退ぐる事
眞田勢諸將勇戰の事幷武田幼君病死の事
第十八　昌幸祿を辭して忠誠の事幷石田治部少輔遠謀の事
石田治部少輔奸計の事幷太閤御父子不和の事
第十九　聚樂御所諸將評定の事幷秀次公御發足の事
石田直江密計を談ずる事幷太閤秀吉公薨去の事
第二十　徳川源君深智の事幷上杉沓指原に新城を築く事
徳川源君關東御發馬の事幷石田天下の諸侯を集る事
第廿一　眞田父子別れて上田に歸る事幷後藤又兵衛遠計の事
黑田孝高法體の事幷長政福嶋正則を說事
眞田昌幸父子大謀內意の事幷信幸內密に安中口を圖る事

第七　眞田昌幸幸村が才智を試みる事幷眞田勢沼田城へ發向の事
眞田沼田の兵と合戰の事幷初鹿野傳右衛門勇戰の事

第八　武田兵衛尉落馬の事幷中條勘右衛門大言の事
名和無理之助變心の事幷沼田開城の事

第九　德川源君御幣川村巡見の事幷土屋信次忠義の事
武田彥太郎自殺の事幷秤座守隨由緒の事

第十　眞田昌幸秀吉を論ずる事幷與三郎幸村的言の事
眞田信幸本田の娘を娶る事幷名和新左衛門惡心の事

第十一　近藤善五兵衛橫死の事幷黑瀨忠助忠死の事
眞田兄弟羽柴援兵の事幷野田城中軍議の事

第十二　由利鎌之助武勇の事幷眞田勢諸將接戰の事
穴山小助鎌之助を生捕る事幷鎌之助眞田に隨身の事

第十三　眞田北之庄着陣の事幷幸村明智地雷火を知る事
柴田ノ謀計相違の事幷修理進勝家滅亡の事

第十四　幸村即智筏工夫の事幷淺香鄕右衛門生捕るゝ事

第三十　眞田隱岐守思慮の事幷信幸信尹後殿の事
信幸信尹上田に赴く事幷昌幸父子上田開城の事
昌幸父子紀州九度山に退去の事幷山本九兵衛幸村が寢所へ忍ぶ事

第四編

第一　眞田治幸山本九兵衛を生捕事幷山本九兵衛眞田に從ふ事
大坂城中大評定の事幷大野治長江戸に赴く事
第二　大坂城中騷動の事幷片桐駿府へ發向の事
片桐且元深意を談ずる事幷大御所上洛の事
第三　清正大坂に着する事幷清正秀賴公へ上洛を勸る事
片桐且元地藏尊の告を夢る事幷富田釆女を幸村が舘に遣はす事
第四　幸村且元智計符合する事幷大御所碩儒惺窩を招かるゝ事
富田野呂毛谷大見隱謀の事幷野呂七之助妻に別れを惜む事
第五　富田信濃守隱謀露顯の事幷平三郎弓勢の事
富田以下滅亡の事幷大佛殿造營の事
第六　幸村片桐且元を訪ふ事幷且元關東へ赴く事

第廿二　眞田信幸勇氣の事并左衛門佐幸村即智の事
　　　　眞田安中を越上田に入る事并本多信幸を說事
第廿三　眞田信幸上田に使者を送る事并德川大納言江府雷發の事
　　　　昌幸父子上田出張の事并安中合戰大筒の事
第廿四　鷲尾次郎助勇戰討死の事并關東勢先手敗軍の事
　　　　三好清海爲三兩將戰功の事并鎭目市左衛門戰死の事
第廿五　大久保忠隣安中砦を攻落す事并幸村地雷火を以て關東勢を破る事
　　　　關東勢諸將評定の事并三國嶺合戰の事
第廿六　小宮山淺香僞りて降參の事并松崎藤兵衛敵を欺く事
　　　　由利鎌之助僞りて降參の事并幸村奇謀手配の事
第廿七　佐野外記信房忠死の事并關東勢上田惣攻の事
　　　　幸村謀略大軍を退くる事并眞田稻苅陣の事
第廿八　關東諸將接戰の事并幸村石田が滅亡を知る事
　　　　昌幸幸村密計を談ずる事并幸村十度鎗の事
第廿九　幸村大須賀を討取事并別府信幸が許に使者の事

第十四　大御所住吉へ出馬爲給ふ事幷米倉泉州陣廻り事
第十五　大御所再度御陣廻りの事幷眞田勢蘆叢より起る事
第十六　大久保忠敎鎗摺鎧の事幷蜂須賀家中評論の事
稻田九郎兵衛忠義の事幷長門守即智の事
第十七　蜂須賀父子大坂着陣の事幷穢多ケ崎夜討の事
樋口本間勇戰討死の事幷蜂須賀穢多ケ崎を乘取事
第十八　松平勘十郞討死の事幷薄田隼人勇戰の事
石川主殿頭軍議の事幷石川九鬼船借用の事
第十九　石川主殿頭伯樂ゲ淵乘取事幷關東勢鰻谷を攻る事
九鬼向井安宅丸を乘取事幷九鬼向井功を爭ふ事
第二十　大野道犬中之嶋を遁る事幷織田有樂齋憶病の事
後藤又兵衛薄田隼人神崎接戰の事幷大御所茶臼山御陣替の事
第廿一　後藤基次眞田が心を圖る事幷眞田諸將に心中を明す事
眞田治幸父に諫言の事幷幸村一人茶臼山へ忍ぶ事
大御所危難廊下鐵砲の事幷幸村御陣を遁るゝ事

第七　片桐且元駿府に赴き申開の事幷安藤本多且元を圖る事
三女江戸へ赴く事幷且元歸城の事
第八　織田常眞石川嘉右衛門大坂城立退の事幷木村重成且元が屋敷へ到る事
片桐且元幸村を重成に勸むる事幷堺中の嶋合戰の事
第九　多羅尾井口七度ヶ濱合戰の事幷百姓一揆の事
片桐出雲守痛手を負ふ事幷明石掃部介眞田が山莊に到る事
眞田勢白晝に和歌山を通る事幷龜田大隅追討大敗軍の事
第十　後藤又兵衛入城の事幷長曾我部入城の事
塙團右衛門武者修行の事幷直行入城の事
第十一　小幡勘兵衛入城の事幷大御所御進發の事
新將軍御進發の事幷城方諸方手配の事
第十二　幸村文珠院大門坊燒討の事幷關東勢敗軍の事
幸村一騎大御所を襲ふ事幷關東勢攝城を圍む事
第十三　藤堂陣所へ毎夜鐵砲の事幷本多雲州恥辱の事
本多出雲守穢多ヶ崎見積の事幷幸村蘆叢へ忍ぶ事

眞田幸村忠言の事幷大御所寛仁の事

第三十 關東勢大軍番手攻の事□眞田拔道の事

第五編

第一 關東勢番手攻幸村手配の事幷幸村秀頼公を矢倉へ勸る事

第二 十干十二支諸將手別の事幷眞田二重塀計議の事

出丸合戰眞田後藤武勇の事幷秀頼公御仁心の事

第三 大御所井樓にて危難の事幷眞田大助同內記弓術の事

幸村拔道より茶臼山へ夜討の事幷紅屋市右衛門奈良漬名譽の事

第四 關東の寄手惣敗軍の事幷大助夜討新將軍家御危難の事

後藤又兵衛叙任の事幷小幡勘兵衛入墨追放の事

第五 片桐市正高野山へ登る事幷眞田大助火砲を試むる事

後藤庄三郎登城の事幷淀殿勇氣返答の事

第六 眞田大野軍立て爭論の事幷兩公御危難旗本諸人戰死の事

幸村越前忠昌へ末廣を贈る事幷稻田九郎兵衛佳例の事

第七 勅使參向兩軍和睦の事幷木村使節茶臼山にて勇威を顯す事

第廿二　安藤治右衛門陣廻りの事并佐竹勢鴫野表出張の事
飯田左馬之助父子討死の事并本多出雲守勇戰の事

第廿三　矢野和泉守戰死の事并木村重成鴫野表武勇の事
重成正木小山を殺す事并後藤基次今福出張の事

第廿四　木村重成勇戰の事并後藤基次佐竹勢を破る事
木村重成上杉勢を破る事并木村定勝を追事

第廿五　木村後藤二度掛の事并關東勢大敗軍の事

第廿六　關東勢出丸手配の事并幸村奧村を謀る事
眞田幸村遠計の事并幸村秘書を忠昌に與ふる事

第廿七　關東勢眞田丸を攻る事并幸村數度奇計の事
關東勢番手攻の事并幸村奇計小畑を欺悶出す事

第廿八　眞田が明智關東勢を欺く事并幸村小畑を拷問する事
關東勢黑門口に發向の事并幸村奇計關東勢再度敗軍の事

第廿九　幸村御旗本を切崩す事并大仁村御危難の事
大御所即智の事并眞田隱岐守幸村を說事

第十五　笈川八内三好爲三功を成事并關東の眞田兩人大御所の危難を救ふ事
大御所堺に潜居爲し給ふ事并織田助四郎久野吉左衞門が事
第十六　長曾我部關東勢を打破る事并眞田河内守兄弟遠智誠忠の事
中根隼人大言幸村を驚かす事并眞田七人の影武者の事
第十七　淺井周防守内通露顯の事并七人の眞田討死の事
御宿勘兵衞戰死の事并眞田隱岐守病死の事
第十八　大坂城惣攻手配の事并幸村天文を觀る事
小笠原信濃守討死の事并伊藤丹波守信義の事
第十九　本多忠朝荒川と勝負の事　寺澤兵庫頭原隼人正夜討の事
并幸村謀計の事
第二十　寺澤憤戰の事并原隼人正武勇の事
第廿一　今福合戰の事并平野陣火砲の事
大御所譽田山へ落給ふ事并後藤基次大御所を怯かし參らす事
第廿二　本多忠朝大勇の事并大野小三郎が事
本多忠朝討死の事并穴山小助身代討死の事

第八　幸村密計關東を謀る事幷穴山小助危難を遁るゝ事
幸村秀頼公に將來の事を洩す事幷三女兩使駿府下向の事
三女兩使關東の智謀に落入事幷青木民部少輔秀頼公の簾中に付らるゝ事
第九　法隆寺放火筒井隼人正不覺の事幷大野主馬介眞田と賭軍の事
大野主馬介憶病の事幷塙岡部武勇戰死の事
第十　眞田父子關東の諸將を破る事幷大助奇計神崎の寄手敗軍の事
第十一　淺野九鬼金森紀州落の事幷後藤木村大助が遠智を感ずる事
眞田大助任官辭退の事幷後藤出陣の事
第十二　井伊木村合戰の事幷木村長門守重成戰死の事
安藤長三郎が事幷片山勘兵衛戰死遠藤手柄の事
第十三　薄田隼人兼相戰死の事幷豐浦村百姓喜六の事
大御所龜井村にて危難に遭給ふ事幷大久保彦左衛門水野五郎左衛門至忠の事
第十四　三好爲三入道奇計の事幷關東勢平野表陣取の事
平野燒討關東諸勢敗軍の事幷大御所必至危難に遭れ給ふ事

眞田幸村薩州にて病死する事并評論

第廿三 幸村が首實撿の事幷越前家一番乘の事
眞田奇謀治幸勇戰の事幷木村主計頭出馬の事
第廿四 孕石廣瀨討死の事幷龜井軍の事
小笠原兵部大輔戰死の事幷長曾我部危難の事
第廿五 明石掃部介討死の事幷水野日向守勇猛の事
增田毒氣の鐵砲を以て夜討の事幷增田影武者と爲て自害の事
第廿六 眞田河內守兄弟稱譽に預る事幷幸村奇謀を殘す事
眞田幸村秀賴公を伴ひ薩州へ落る事幷嶋津家由緒の事
第廿七 關東方より城內へ使者の事幷宮內卿の局自害の事
幸村火龍の謀計を殘して敵を破る事幷速水甲斐守父子討死の事
第廿八 長曾我部父子の事幷石ヶ谷十藏の事
越前家一番乘の事幷落城に付手配の事
第廿九 秀賴公に代つて木村切腹の事幷城中諸士自害の事
關東勢大坂凱旋の事幷大坂城中番手固めの事
第三十 三好兄弟戰死の事幷新將軍牧方危難過書船の事

校訂 眞田三代記第壹編

第一　眞田家系の事幷甲州石和合戰の事

夫惟みれば兵法は悖逆を治るの要道凶賊を罪するの機械なり我朝人皇九十五代　後醍醐帝の治世に當り井出左大臣　橘　の諸兄公の後胤　楠　河内判官正成の智謀に於ては子房孔明をも欺くべき英傑の聞え有ければ　帝正成を御依賴あつて當時の逆臣相摸入道を亡さんと謀り給ひしに正成元來智仁勇の三德を備へたる名士なりしかば　帝に仕へ奉つりさしも强勇の凶賊を亡し終りて天下を一度治ると雖も足利尊氏　北朝の勅を受て軍を發し　宸襟を惱し奉つる正成是を征せんと計りけれども惜哉事成ずして攝州湊川に戰死す其子帶刀正行父の志ざしを繼ぎ再度帝位を復せんと殘黨を語らひ藤井寺の合戰に勝利を得ながら此功半にして四條繩手に戰沒す舍弟正儀猶父兄に繼で　南朝を守護し逆徒を討んと謀ると雖も天の時至らず終に　南朝悉皆く亡び足利の天下と成り然れども正成正行正儀三代の志操は國家を以て己の任となし忠を王室に盡し義を三軍に唱へ身は一墓の下に朽ると雖も芳名を萬世に耀かせしは諸人の知所なり爰に眞田彈正忠幸隆の三男安房守昌幸豐太閤に奉仕せしより二男左衛門佐幸村其子大助幸安に至迄三代の間豐

校訂眞田三代記總目錄 終

棒を打振敵兵十六人迄薙倒し猶も敵中へ駈入ける河野傳八遙かに見留天晴の敵や逼すまじと鎗を捻つて駈來り眞一文字に突懸る初鹿野心得たりと棒を以て受留双方暫く戰ひしが初鹿野いらつて傳八を一打に薙伏たり幾田三郎兵衛是を見て同く馬を交へけるに初鹿野少しも躊らはず彼の棒を眞向に差翳し幾田が冑の八幡座をしたゝかに打ければ何かは以て堪るべき幾田馬より落血を吐て死てけり跡部方是を見て色めき立ければ信昌勇んですはや軍に勝たるぞ進め〳〵と勵され初鹿野小幡原飯富を始め一同に打出れば跡部方一支えもせず散々に逃走るを大將信豐大いに怒り自ら鎗を以て叩き立敵五騎迄突て落し猶も勇を顯しける故武田方は射手を揃へ八方より射立けれ共元來楯なしの鎧なれば矢立事なく紛々として飛返り信豐一人に駈立られ武田方既に敗軍と見えける折から海野が末孫眞田次郎三郎幸義最前より此體を見て思ひけるは我忠心の矢先假令鐵石なればとて貫らずと云事あらんやと三人張に十五束三伏の矢を番ひ楯の蔭より引絞り南無八幡大菩薩南無新羅大明神此一矢にて渠を射さしめ給へと暫し祈念して飄と放せば過たず信豐が胸板を射貫しければ何かは以て堪るべき信豐あつと言樣馬より落て死したりけり幸義駈寄首搔落し大音揚眞田次郎三郎幸義跡部信豐を討取たりと呼りければ大將討れて諸卒何ぞや堪ゆべき皆散々に敗軍せしにより太郎信昌勝鯨波を揚て歸りける夫よりして甲府を悉々く治め又上野介が嫡子豐次を生捕首を刎て父と俱に梟首せられけり扨此度跡部を討取たるは幸義な

臣家に忠を盡し事古への楠公にも愧ざる所あり抑々眞田が姓氏を尋るに清和源氏の庶流海野小太郎幸氏の後胤にして幸氏は木曾冠者義仲の臣なり義仲の嫡男清水冠者人質と成て鎌倉へ送らるゝ時海野小太郎之に從ひ鎌倉に行然るに義仲逆心の聞え有に因範頼義經をして討せらる其時清水冠者も賴朝の計らひにて誅を加ふ海野幸氏是を無念に思へども爲べき樣なく其後武田清光に匿まはる清光海野が英雄を知客分と爲置たり依て幸氏が子孫武田家に仕へ苗字を眞田と改め累代の長臣に列す武田清光より十七代伊豆守信盛の嫡子太郎信昌三歳の時信盛卒去し家老跡部上野介後見となる信昌十五歳に至らば武田の家督を繼せんと約せしが信昌既に十五歳になり早家督相續の儀を催促ありしを跡部聞て信昌は元來暗弱にして大將の器量なしとて相續を發さず剩さへ武田の祖新羅三郎義光より傳はりし重寶を悉皆く取て返さず是に因て信昌大いに怒り跡部を誅せんと家臣小幡入道今福權右衛門飯富帶刀原大次郎を始め八百餘騎にて押寄たり此時跡部石和の邊に砦を構へ双方合戰に及ぶ然るに信昌は古今に秀し弓勢なれば楯の蔭より射出す矢に跡部が勢ひるむを怒り上野介身には楯なしの鎧を着し諏訪法性の兜を着て朱の釆配を採何に方々信昌が弓勢縱令古への爲朝に增るとも敵は一人なり何ぞ恐るゝに足んや只一駈に揉破れと下知しければ此詞に勵され岩井五郎河野傳八幾田三郎兵衛を始め皆々鎗を以て突崩しければさしも剛勇と聞えし笠間喜藏も討死す是を見て武田方より初鹿野次郎と名乘一丈ばかりの

古今稀成英雄にして智謀自然と備はりたる勇士なり則ち眞田幸村より四代前の祖なり幸義未だ無妻にて暮しければ信昌則ち曲淵庄左衛門が娘を幸義に嫁せしめ男子出生す名を德王丸と號す是を彈正忠幸隆と云

●傳に曰く海野幸氏は木曾義仲滅亡の後武田に隱れ居ると雖も忠臣は二君に仕へずとて嫡子幸國を清元に預け置其身は所々を順行しけるとぞ去に因て海野の家系別に之あるとなん

第二　眞田德王丸元服の事并武田加賀美確執の事

然程に武田大膳大夫信昌は跡部上野介を討亡ぼし威を近國に振ひ人德を以て人和を得られしかば諸民慈母を慕ふが如し然るに信昌天命の盡る所にや二十五歳にて卒去す執權山縣左衛門清元がはからひにて信昌の弟竹王丸十三歳にて元服させ武田信綱と名乘て家督相續す此時眞田幸義の嫡子德王丸も元服させ次郎三郎幸隆と名乘ける未だ幼年たりと雖も兵書を暗誦軍學武術に達し父の弓勢に劣らず古今獨歩の英士なれば父幸義大に悅び末賴母敷思はれけるが甲斐守信綱是も久しからずして卒去す然るに子息松壽丸を家督として武田左京大夫信虎と云此人短慮にして幼年の頃より假初の事にも近習を手討なとにし兎角我儘にぞ暮しける武田家の一族安田淺利逸見一條南部秋山板垣下山加賀美勝沼櫻井小左手曾松於曾牧山を始め歷々あり下山其頃穴山とい

れば恩賞あらんと皆々思ひけるに其後沙汰もなく只不興氣に打萎れ在けるゆゑ或時家老山縣左衛門清元信昌の前へ出て君既に跡部を討て國中治り御滿足成べし次に眞田が此度の高名御賞美も有べき處然はなくして御不興成は如何成事にて候やと申ければ信昌是を聞て不審道理なり我心に悦ばざるは此度逆心信豐が着せしは正く祖先新羅三郎より傳はりし楯なしの鎧なり假令唐土の養由が弓勢なりとも裏かく事を得ざる重寶なりしを今眞田が一矢にて射貫したれば末世に至り楯なしの威力衰へぬる事歎かはし然れば信昌一命を捨て楯なしの鎧を試し見んと思ふなりと申されけるを清元諫めて其は御諚とも覺ず候假令信豐鐵楯の内に居るとも主に背く逆臣何ぞ忠心の矢通らざる事あらんや是怪しむに足ずと申けれども信昌是を聞入ず武田五郎七武田十郎三枝式部三人を呼出し汝等隨分〳〵精心を勵し我を射るべし主從の敬ひを厭ひなば其罪を糺すべし其謂は彼楯なしの鎧を試さんと云ふなりとて是を着し床机に懸りければ三人も主人を射る事故心後れ如何はせんと猶豫ければ道理とは思はれけれども態と怒りを顯し汝等若我を射ずんば自害すべしと有ければ三人是非なく弓矢を取竊かに鏃を拔御免有れとて射たりければ其矢悉く飛散けり依て信昌大いに悦び扨は楯なしの鎧の威力衰へざりしとて幸義が忠志の弓勢を感じ當座の恩賞として左文次の太刀を給りしかば幸義面目を施したり其後將軍家より信昌を大膳大夫兼甲斐守になされける是に因て幸義を左京亮になされ信州佐久郡岩尾の城を預けらるゝ是

て此事を密に探せけるに全く加賀美四郎が逆意にあらず其故は信州葛尾の城主村上頼平は年來武田家と不和にして此頃武田の一族加賀美四郎が家人石原小六郎と云者己が武勇に誇り四郎が寵愛の小性に磯田磯松とて美男ありけるが小六郎度々口說けれども磯田曾て聞入ず主人の寵愛に誇り小六郎につらく當りければ元來高慢の小六郎なれば耐へずして磯松を一討にせんと切付しに磯松も拔合せ暫し戰ひしが小六郎に何とて及ぶべき磯田終に切伏られければ小六郎漸く執心を散じけれども主人の怒りを恐れ其儘逐電し甲府に來り信虎を賴みけるに信虎素より小六郎が武勇を聞及びける故早速召抱へける加賀美四郎是を聞て大に怒り信虎方へ使者を遣し此度拙者家來石原小六郎不義ありて逐電し候處其許へ罷り越候由此方へ返し給はりたしと申入ければ信虎大に怒り石原事假令不義ありとも此方へ賴み來りし者を何迚返すべきやと權柄に返答す四郎聞て大に怒ると雖も流石門葉の棟梁なれば胸をさすり居ける所を石原は己が不義を押隱し却て信虎に讒を搆へ申けるは加賀美四郎内々葛尾の城主村上頼平と心を合せ隱謀を企て候と申けるに依固より思慮なき信虎なれば其實否をも糺さず森山九郎大夫を以て加賀美へ使者に立此度四郎殿には累代の恩を忘れ骨肉の好を捨賴平と心を合せ信虎を亡さんと巧まるゝ由此意趣何事ぞや悉く是を聞ん若不審なきに於ては迅速に甲府へ來り誤りなき旨申開かるべしとの事なりければ四郎申けるは何の意趣あつて今更村上へ一味致し候はんや身に取て覺えなく候我察する

ふ此穴山左衛門佐信行が姉を信虎の室に致されければ人皆御館と尊敬す且又信虎が家臣には山縣河内守信清馬場伊豆守虎貞工藤下總守虎豐内藤相摸守虎堅此四人を老臣として原能登守友胤小幡山城守虎盛小山田備中守抔一人當千の勇士なれば信虎我居間の屏風唐紙抔皆竹林を畫かせ我は猛虎なり迚近臣には皆虎の字を名乘せけり信虎己が威光に誇り一族安田淺利逸見勝沼櫻井小左手を始め大形攻亡し其所領を奪ひ取て我有となし勢ひ遠近に震ひける此時眞田幸義是を見て心の中に大に悲しみ幸隆を呼で申けるは夫積惡の家には必ず餘殃ありといへり今見る信虎公の振舞我一族を亡し其所領を奪ひ假初にも近臣を手討にする事和漢倶に大將たる人の身持にあらず抑々武田家は新羅三郎義光より數代續きたる名家なるに今此時亡んとす然るに應仁より以來天下一日も寧からず英雄蜂の如く起り豪傑蟻の如くに集り國を奪ひ境を侵し合戰止時なく或は亡び或は起り隣鄕には木曾諏訪村上の輩ら當家を目懸押領せんと謀る信虎公是に心付ずして我儘に身を持人の恨みん事を憚らず誠に悲しむべき哉我老衰の身となり武田家の滅亡を見る事殘念なりと老眼に涙を浮めければ幸隆も倶に落涙して主家の成行を悲しみ兩人閑談に及びける所へ甲府より使者として音田彌六左衛門來りて此度一族加賀美四郎逆意の聞え有を以て小幡入道日淨原大隅守兩大將として誅戮せんと欲す夫に付眞田幸隆も倶に加勢あるべき者也と委細に述ければ幸義畏まり候と使者を返し其後加賀美が逆意心得ざる所なりと家臣別府治部をし

て右に伏置若本陣に火の手見えなば敵の裏へ廻りて突崩せと謀計を敎へ又海野伊勢崎に百人を添左に伏我身は五十人を從へ本陣に殘りける扨も此時加賀美四郎益晴は家臣日根野源兵衛落合彌次兵衛相木森之助を始め一人當千の勇士を集め申けるは扨も此度武田勢小熊谷に陣を取たる由然れば明日當城へ攻來るべし敵然迄大勢とも聞えず先んずる時は人を制し後るゝときは人に制せらるゝと云り軍は明日と心得油斷の處へ夜討を懸んと思ふ早々用意すべし敵は地の利を知ず又行軍の勞れ有ば深更に打入一人も殘らず打取と馬に枚を含ませ皆冑の天邊に白鳥の羽を挿せ天地の合言葉にて小熊谷の陣へと押寄たり武田方は豫て用心爲ければ少しも騒がず鬨を合せて馳向ふ武田方より多賀左近將監と名乘加賀美方田村卯兵衛と一番鎗を合せけるに多賀は大剛の者なれば終に田村を討取しに是に續いて武田勢曾根甚内木戸將監を始め鎗を捻て突懸り爰に顯れ彼所に走り防ぎ戰ひけるが加賀美勢の中より相木森之助迚大剛の者洗皮の鎧に鹿の角の前立打たる冑を着し四尺許りの大太刀を打振多賀左近に渡り合双方劣らぬ勇士なれば暫時勝負も見ざりしが相木が打太刀にて左近が鎗を切折たり左近鎗を捨て刀に手を掛る所を森之助隙さず切捨しかば左近二に成て失にけり又武田方に武勇の名を得し岩村助三郎と名乘大太刀を打振切て入加賀美方よりは落合源兵衛是を見て天晴の敵なりと渡り合て戰ひしがいざや組んと兩人太刀投捨引組しが互に劣らぬ大力なれば上に成下に成良暫し捻合うち落合力や増りけん終に岩

に館殿の御前に奸曲の族わつて我を讒する者か又は先頃石原小六郎舘の御救ひを嬉敷存ずる餘り輕薄の心底を以て讒し且は別心に事寄斷絶せしめ我所領を押領せんとの工みならん我毛頭僞りなければ甲府に參るに及ばず此方へ御越わらば僞りなき段申述べし夫とも我を亡さんとならば軍勢を差向らるゝに及ばす腹切て所領を參らすべしと返答す使者森山立歸り此旨を申ければ信虎猶々怒りて此度四郎を誅伐せんと工みける由を別府治部委細に幸義へ語りける幸義扨こそ我推量の通り果して信虎公我儘なる事武田家の滅亡近付けりとて夫より病氣なりと言立此度の加勢にも出ず嫡子幸隆次男幸綱の兩人に穴山小左衛門伊勢崎五郎兵衛を差添二百餘騎にて小熊谷の陣へぞ遣しける

加賀美四郎夜討の事并幸隆智計の事

然程に小幡日淨原大隅守兩人信虎の命を受加賀美を誅せん迚總勢五百餘騎頃は永正十六年三月下旬加賀美が城の二里北なる小熊谷へ陣を取ける所に眞田次郎三郎幸隆弟海野四郎幸綱穴山伊勢崎兩人を從へ三百餘人にて來りしかば小幡大に悅び倶に軍議を廻しける幸隆が曰く定めて合戰は明日ならん然すれば敵より今宵夜討もあるべきぞ方々用心して然るべからんと申ける故各々其用意をなして待懸たり幸隆我陣へ歸り穴山を呼百五十人を差添小熊谷より一里許りを經

第三　原大隅守小幡日浄敗軍の事并相木森之助勇力の事

斯て小幡入道原大隅守は小熊谷の合戦に打勝と雖も是幸隆が智計に因てなれば易からぬ事に思ひ加賀美が城を攻んと先陣には高木主水川嶋佐次兵衛猪股九八八百餘騎城際に着や否や鬨を作りて揃と一時に攻寄たり城中にては待設けたる事なれば同く鬨を合せ精兵とも矢倉を押開き散々に射立ければ武田勢猛しと雖も是に射縮められ互に人を楯にして色めきける是を見て城將四郎益晴舎弟幡之助晴成相木森之助と倶に大手の門を押開き無二無三に切て出るに武田勢色めき立我先にと敗走す川嶋佐次兵衛大音揚腹黒き味方の振舞かな我と倶に討死して名を後代に止めよと踏堪へ〳〵加賀美方へ切入しが大勢に取籠られ五十餘人の者共一人も殘らず討死す原大隅守是を見てあたら武士を見殺しにせし奇怪さよ一人も引な〳〵と下知をなし射れ共突共事ともせず三百餘騎にて駈入ければ城兵共の中より嶋原帯刀中根多門二百餘人にて切て出鯰江頼母之助浮田五郎の勢百五十餘人と火花を散して戰ひたり素より必死と極めし城兵なれば武田方攻厭倦で見えたれども鯰江頼母之助は相木森之助に渡り合暫く戰ふ中森之助は長刀の名人にて終に頼母之助を馬より切て落しける是に氣を得て寄手を切崩しければ原小幡も防ぐに力なく小熊谷の陣へ引取ぬ此時幸隆は後陣にあつて徐々と勢を纏め味方の陣へぞ引入ける諸人是を見て天

村を引敷首を掻んとする所に助三郎が弟助十郎馳寄て落合が冑の内に手を入引仰むけ終に首をぞ取たりける懸る所に加賀美方一手の勢左の横合より村中へ打出ければさしもの武田勢大に周章既に敗せんとする時眞田幸隆豫て期したる事なれば少しも動ぜず相圖の狼煙を揚ければ右に穴山小左衛門左に伊勢崎五郎兵衛海野四郎幸綱鎗襖を作り打出ける中央には眞田幸隆紅の末濃の鎧に大半月の前立打たる兜を着し采配を取て下知しながら眞一文字に駈破れば是に力を得て武田勢我も〳〵と進みける故加賀美勢不意を打れ大に敗軍して我先にと逃走るを小幡入道嚴しく下知を傳へ一人も殘らず打取と進みければ加賀美勢の中より西久保左京取て返し大に戰ふ此時眞田下知して味方は地の利を知ず難所へ僞引敵大返しに返しなば味方難儀ならんと能程に軍勢を引上けり然程に加賀美四郎は夜討を仕損じ夥多の郎等を討れ無念遣方なけれども餘儀なく居城に引入たり小幡入道原大隅守は勢ひに乘じて敵城を十重二十重に取卷攻立けるが入道思ふやう昨夜眞田が奇計なくば我々大に敗軍すべし年若の眞田に助けられけるこそ安からね此度彼に先陣させなば又もや謀略を以て攻落さん事必定なり然すれば功は眞田一人にあつて我々將たるの甲斐なしとて幸隆を後陣に殘し此度は已一人高名を立んと思ひ一向軍議を知せざれども眞田是を少しも怒らず只冷笑て後陣にぞ扣えける

糸縅の鎧を着し朱の半月の二尺ばかりの大指物紅ゐの母衣を懸る多田三八正虎今日の一番乗なりと城中へ切入ける城兵正木多治見三八を切落さんと内曽に突入けるを三八は無双の勇士なれば事ともせず乗越るはづみ鎗の柄に取附難なく塀を乗入正木を討取たり是に續て跡部勝五郎城中へ乗込んと働らきしに相木森之助衛と走り寄跡部を切伏首を掻落す此時信虎かれを見よ方々半月の指物は多田三八と覺ゆるぞ早一番乗を致したり二番は跡部なるぞかれ討すなと大音に下知しければ内藤相模守山縣河内守小幡原横田鎌田等一同に乗込だり城兵其防ぐに術盡ければ皆な二の丸に引籠り射手を揃へて散々に防ぎける爰に原大隅守頭日我働きにて落城せざる事を無念に思ひ足輕の内足十兵衛とて大力の者ありけるが是を呼で汝何卒して此門を破り申すべしと言ば十兵衛打點頭矢面に立出ける其時寛が物の具には白身縅したる厚金の鎧に五尺許りの太刀を横たへけり寛ふたりを見廻しけるに材木數多ありける中に二丈許りの松の丸太を取て是を振揚げ門の閾の傍りを莚や〳〵と五六度も突けるに扉碎けて門は左右に開きたり寛打笑ひいざ御入あれと云に大隅守大いに悦び一番に押入る是を見て小幡内藤横田鎌田我も〳〵と打入ける城將四郎心は猶猛に逸れども防ぐべき術盡ければ既に切腹と見えける所に相木森之助矢十筋ばかり鎧に打懸馳來り此体を見て大に驚き刀をもぎ取諫めけるは死は一旦にして易し生は得難し先此所を落延御命を全ふし重ねて本意を遂し給へと諫めける四郎漸くに承服して本丸へ火を懸含弟

晴眞田の退口戰と感じ合り時に甲府にては小幡原の兩將加賀美の城を攻脹倦ける由聞えければ信虎大に怒り四郎か武略何程の事あらん察するに是は村上に後詰を賴んで氣を屈せず戰ふと見えたり其儘に差置なば村上後詰して難儀に及ぶべし一時に蹈破り城中一人も殘らず撫切にして見んずとて山縣河内守虎清内藤相摸守虎賢原能登守横田備中守鎌田織部多田三八以下三百五十人を引卒して先祖新羅三郎義光より傳はりし旗の寫し黑地に朱の丸中に横筋諸へ朱にて武田菱の紋付たる大旗を眞先に押立攻寄ける城將四郎是を見て何に方々此度は大將信虎自身に來れりと覺ゆ此大將極めて心荒くして一時に揉落さんとすべし假令敵攻掛る共我下知なき内一人も打出る事勿れ只精兵の射手を撰み矢柄を惜まず射出すべし萬一敵兵謀計を以て欺引とも夫に乘べからずとて家々の紋付たる幟を羽重ねに立並べ敵の寄するを持懸たり大將信虎強勇の若大將なれば眞先に下知して驅出し城際に到りければ埋草を堀へ投込〳〵揉潰さんとせし所城兵時分はよしと矢倉迫間を一同に押開き差詰引詰箸下りに散々に射立ければ甲州勢何かは以て堪るべき先鋒五十餘人矢庭に射縮められ色めきけるを大將信虎少しも恐れず無体に下知を傳へ敵は數日の籠城に力勞れ射る矢と雖も裏かゝず纖筋なりとも鎧に受留胄を傾け一足も引べからず我此所より能見居るぞや後難を思ひ義を守り一寸も攻口を寬ろぐべからずと下知しける故軍勢共に埋草を堀へ投入〳〵攻近づく之に因て多田三八鎌田織部を始め我も〳〵と進んだり中に名黑

が後へ廻り熊手を打懸馬より引落さんとしけれども少も屈せず穴山が熊手を振拂ひ眞田を目懸追駈る所を草尾長藏走り寄て相木が馬の前足を薙ければ森之助勇なりと雖も鞍坪に堪り兼倒と落けるを得たりと皆々手取足取搦めんとするを相木は足を揚て三人迄蹴殺したり然共大勢折重なり終に繩を懸生捕ければ幸隆大に歡び早々我陣へ引せけり此等の間に加賀美四郎兄弟落失ければ先城中の火を消させ大將信虎諸軍に令して勝鯨波を揚夫より加賀美が一家櫻井兵部之丞が城をも攻落し勇み歡び甲府へ歸陣したりけり扨も眞田幸隆は我陣へ歸り自ら森之助が繩を解賓客の座を讓り恭々しく之を扱ひ扨も御邊の主人加賀美殿此度無實の罪に因て家滅亡する事是全く信虎公の近臣に佞惡の族ある故なり然ども假令ば月の曇るに同じ何ぞ再度晴ざらんや暫く時節を待給はゞ四郎殿の家再興の手段もあるべし夫迄は我館に客分にて居給ふべしと色々利害を説ければ森之助眞田が情に泪を流し良禽は木を撰んで棲勇士は主を撰んで仕ふと承はる某し勇士にはあらね共助命の恩謝する所を知ず願はくは犬馬の勞を致さんと申ければ幸隆大に悦び主從の盃盞をぞなしにける是後に眞田家隨一の臣と呼れけり幸隆は相木を伴ひ我が領國へ歸りしに父幸義此頃老病次第に重り療治相叶はず見えける折からなれば早々父の病症を訪けるに幸義幸隆を枕邊に呼近づけ此度の合戰如何と尋ねける故幸隆委細に城攻の樣子を申述幷びに相木森之助を召抱へし始末を語りければ幸義大に驚き誠に其方は我及ばざる英才後世賴母敷思

幡之助を伴ひ落延たり森之助今は心安しいざや最期と志ざし件の大薙刀を振廻し眞先立たる敵の中へ只一騎切て入其体勇しくこそは見えたりけれ

眞田幸隆相木を生捕事并眞田幸義病死の事

此時眞田幸隆は後陣に在て見物して居たりけるが家臣穴山小左衛門を呼で申けるは今日の合戦寛十兵衛が勇力天晴に思ふなり原大隅守は人を知ずして斯る者を足輕に召仕ふ事拙なし方便を廻らし寛を我家來にせずんば有るべからずと申ける所に今落城と見えて本城に火懸り焔々と燃上る煙の中より一人の壯士大長刀を打振大音揚遠からん者は音にも聞城方に於て鬼神と呼れし相木森之助とは我事なりと名乘かけやにはに十八騎迄切て落しければ寄手此勢ひに怖れ近寄者ぞなかりける眞田幸隆は遙かに是を見て我此者を生捕て郎等にせんと自身鎗をとつて立向ひけるに跡より穴山小左衛門伊勢崎五郎兵衛をはじめ十三人引續いて進みける此時原が家人寛十兵衛相木に近より既に戰かはんとする所を幸隆眞一文字に馳來り寛そこ退眞田幸隆是に在と十兵衛を追退鎗を捻つて突て懸る相木莞爾と打笑ひ眞田殿と聞からは我相手に不足なしと人交もせず兩人暫らく戰ひしが眞田僞りて逃行處を相木は遁さじと追かけ腹黑し返せ〱と呼りければ眞田一足二足踏止り戰ふては退き又戰ひては退き七八度も操りける間に伊勢崎穴山の兩人相木

張守原大隅守横田備中守小幡入道安間三右衛門多田三八白畑助之丞を始め其勢三千餘騎甲府を出て鹽川を前に當陣を取双方此川を越て戰はんと白眼合て扣えたり然るに武田方逸雄の若者我も〳〵と鹽川を打渡り一同に敵陣に押懸鬨を作ると齊しく横田備中守多田三八一番に鎗を入たり是に續いて武田方我も〳〵と入亂れ四方八方に戰ひける然ども未だ勝負も見えざる所に敵方より松山小太郎と名乘て朱の具足を着し打て出多田三八を目懸鎗を合せければ三八少も騒がず渡り合しが三八いらつて突出す鎗に小太郎胸板を貫かれ二言と言ず死してけり續いて木田權右衛門三八に突てかゝるを横田聲を懸三八此敵は我に任せよと横様より權右衛門を突伏たり平賀方勇なりと雖も此兩人に馳立られ色めくを見てすは軍には勝たるぞと跡部尾張守安間三右衛門等眞しぐらに切て入平賀成賴逆る味方を勵まし汝等此所一寸も退かず討死せば我黃泉にて其褒美せん引な〳〵と下知しければ井田傳兵衛福井多八嶋木工助荒井大學我も〳〵と取て返し火花を散して戰ふたり爰に武田方白畑助之丞は五尺ばかりの大太刀を提げ敵を七八騎切て落し大音揚鎌倉權五郎景政が末孫白畑助之丞景明とは我事なり我と思はん者は進み寄て勝負せよと呼りける信濃勢の内飯室右京亮國定と名乘白畑に渡合双方劣らぬ勇士なり白畑聲懸如何に國定太刀打はむだなるし組討にせんと兩人馬を寄て無手と組兩馬か間にどうど落上を下へと揉合ける然るに國定力や増りけん終に白畑を取て押へ首を掻んと腰を探るに最前馬より落たる時差添の身

ふなり然るに又信虎公日々惡行增長し一族を亡し給ふ事是滅亡の時いたれり我思ふに其方が其智計を妬んで佞臣等信虎公へ讒言せん事計り難し因て此後は一計をも施す事なかれ只々常人となつて高みより眺居て若國に一大事あらば其時汝が智囊を振ひ國家を助け申べし此事呉々我が意に違ふ事なかれと遺言し永正十六年八月二十六日行年六十九歲にて病死せり法名龍岳院義樹大禪定門と號す幸隆父の家督を繼家臣には穴山小左衛門伊勢崎五郎兵衛別府治部右衛門遠山又六相木森之助近藤愛之助由井屯を初め一騎當千の者を隨へ仁義五常を守り諸民を撫育しける故皆人悅ばずと云事なし斯る戰國なれ共岩尾の民は太平を樂みけり

第四　平賀成瀨鹽川合戰の事幷飯室右京亮討死の事

扨も眞田次郎三郎幸隆は父の家督を續此趣きを甲府へ訴へけり爰に平賀修理亮は年來武田家と領地を爭ひけるが信虎今一族の加賀美櫻井を滅亡し所領を奪ひ又は恩顧の老臣を縛り首或は手討等になし傍若無人の振舞なれば恨み憤ふる者多し平賀此由を聞て是こそ願ふ所なりと家臣井田傳兵衛福井多八嶋木工助荒井大學を初め屈竟の逞兵四千五百餘騎を引卒し若御子を打越駒井迄出張し追々攻來る趣き聞えければ武田方大いに驚き早々是を亡さんと甲府へ注進す信虎少も驚ず平賀の弱兵ども何程の事あらんとて馬塲伊豆守板垣駿河守工藤下總守萩原常陸介跡部尾

五代の　寶位を繼給ふ抑々此君の御母は准三后幼子蒼玉門院と申奉つる寛正五年甲申十月二十日降誕在まし文明十二年十二月三日　親王宣下を蒙らせ給ひ同く二十日前左大臣の小河の亭にて元服在まし明應二年正月六日三品に叙せられ同く十月御即位あつて　後柏原院と申奉つる年號を元龜と改元有り斯て今年大永元年迄既に二十一年に成と雖も御即位の禮行はれず去ぬる應仁の亂より以來天下一日も穏かならず日本六十餘州に軍止時なく皇威衰微して御即位の大禮を助け奉つる者なし之に依て三條内大臣實隆公此事を歎かせ給ひ何卒して御即位の大禮を行はんとて當時本願寺顯如上人は福祐に暮されければ實隆公密に上人に談じられしかば御即位料として上人より砂金十萬兩御用立られける是に因て御即位の大禮を行はれけり　帝此度顯如上人の計らひを御悦びの餘り永代二品親王の宣下を成下さる扨も此事甲府へ聞えければ嘉悦を申上んと右京大夫信虎眞田次郎三郎を使者として京都へ登せける幸隆上京し　禁庭へ此度の嘉悦として砂金五十兩卷物百本甲州絹二百反進獻し奉つる旨奏しければ　帝御感斜ならず傳奏を以て　勅諚ありけるは斯る戰國の御嘉悦として砂金其外種々貢獻なす條神妙の至りなりとて信虎を從五位下左衛門尉に任せられ使者幸隆を彈正忠になされける幸隆面白を施し甲府へこそは歸りけれ此時今川義元の幕下にて遠州高天神の城主福嶋上總介と云者巳が威勢に誇り今川家の計略を以て甲府を亡し所領を奪んと伯父山縣淡路守を先陣として嫡子常陸介と倶に駿遠兩

は抜て鞘計りなれば如何はせんと猶豫所に白畑得たりと下より刎返し終に國定を討取たり然るに飯室が郎等二十餘人此体を見て主人の敵遁さじと白畑を目懸切て懸る助之丞は最前よりの合戰に身体勞れける故既に危く見えける所に初鹿野傳右衛門白畑を救はんと諸卒を下知して景明危ふく見えしぞ助けよ〳〵と喚ひて追立ければ飯室が郎等右往左往に敗走す此間に白畑は漸々にして後陣へ引入りける武田平賀の合戰今を最中と見えける所に板垣駿河守馬塲伊豆守は百餘騎にて敵の横合より馳入攻太皷を打立〳〵突崩しける故平賀勢後陣より崩れ立て名胡川さして敗走す此時一人の勇士南蠻流の半弓を腰につけ大身の鎗を提げ平賀修理亮成頼が家臣由利市兵衛國早なりと呼つゝ突て入武田方よりは三枝妥清と云者四尺五寸の大太刀を抜て市兵衛に渡り合戰ふ所に由利は聞ゆる大力なれば三枝を掴んで五丈許り投付ける武田方是を見て大に恐れけると雖も板垣馬塲が横鎗に平賀方總敗軍と成ける故市兵衛今は是迄なりと駈破り〳〵何國ともなく落行けり

後柏原院御即位の事幷信虎遠州勢と戰ふ事

人王百四代　後土御門院は去る明應九年九月二十八日御年五十九歳黒土に於て崩御ありしかば泉涌寺に葬り奉つり御法諱は正果院と號し奉つる同く十月十五日　皇子勝仁親王踐祚在まし百

に切て懸る山縣騒がず渡り合しが終に小幡の長刀を巻落し胸板ぐさと突貫しける小幡が郎等守山小兵衛牛窪大六馳來り主人の敵と打て懸る山縣兩人を相手に右と左へ突落し大に勇を振ひける然共必死を極めし武田勢なれば山縣も終に敗して二丁餘り引退く時に日も暮ければ武田方にも軍を治めけり此日武田方にて討死の者二十八人手負百十餘人に及びければ信虎も力を落して見えたりけり

第五　眞田幸隆一計を施す事幷福島山縣討死の事

扨も武田信虎は福島山縣と飯田川にて合戰に及び少し勝口を取と雖も信虎悦ばざるに幸隆は京都より歸來り　朝廷信虎を從五位下左衛門尉に宣下有し趣き言上しければ信虎喜悦限りなく天恩を拜せし後此度合戰の次第を一々語られけるに幸隆陣中を立出て敵の備へを詠め夫より軍師萩原が陣に行我此度一計あり足下之を用ひ給はゞ我之を計らんと云に萩原其謀計如何と問に幸隆されば今宵此方より和議を申入なば敵定めて承知すべし其故は旅行の勞れといひ昨日の一戰に敗せし事且又永陣の中自國に變あらん事を恐るゝならん然して敵の油斷を見濟し討なば一戰に破るべしと云萩原大に悦び此謀計必らず妙なり早々行ふべしと云時眞田聲を密め此こと某しが申たりと沙汰あるべからずと口を留我身は陣所へ歸りける扨も常陸介は使者を以て山縣淡路

國の勢を引て下山筋を押來り甲州へ攻入んとす然るに信虎は惡逆日々に增長し諸人大に恨み一門の人々を始家の子郎等と雖も已々が身構へして世の有樣を詠め居る折柄なれば誰有て此敵を支えんとする者なし皆々已が居城を守り居て更に馳來る兵なかりしかば大將信虎大いに憤はると雖も詮方なく只惘れ居るばかりなり斯りし程に敵の先陣山縣淡路守十日市場迄押寄近日甲府へ押寄ると聞えければ信虎今は小勢たり共打て出戰場に尸を曝さんものと覺悟を極め出陣す此勢僅に二千餘人にて千早の邊に打出飯田川を前に當て對陣する事數日に及ぶ然ども敵は地の利を知ざる故左右なく打ても懸らず足輕迫合にて數日を送りける爰に武田方萩原常陸介は軍慮に賢き者なるが一の謀計を廻し甲府の町人其外國中の百姓を集め色々に染なしたる旗を拵へ館の後長禪寺山或は和田山抔に立續け夜は篝火を燒後詰の來る樣に計らひ萩原其翌日飯田川原を打臨み今日こそ山縣が首を申受んと下知ありしに多田横田我も／＼と川へ打入ければ山縣是を見て射手に下知し五百餘人鏃を揃へ引詰／＼射させけれども甲州勢少も屈せず鎧の袖をさし翳し難なく川向ふに打上り山縣勢の中へ面も振す突て入四角八面に薙立多田横田が鞏ら敵十三人迄切て落しける大將信虎是を見てあれに見ゆるは多田横田ぞ彼討すなとの下知の隨ひ馬場山縣跡部穴山工藤内藤萩原等我も／＼と打入／＼双方大合戰となる山縣淡路守は大剛の者なれば自身鎗を提げ近付敵を突拂ふ武田方にて一騎當千と呼れし小幡入道是を見て大長刀を提げ淡路守

るより父の敵遁さじと追來り山縣が冑を丁と打然共鍛善ければ疵付ず山縣打れながら引廻さんとする所を丁々と打居ければ山縣眼暗み鞍の前輪に俯向機小幡馬を寄て無手と組兩馬が間に落重り山城守山縣を組敷終に首をぞ揚たりけり山縣勢是を見て大將討れぬれば散々に敗走す此時眞田幸隆數多の首を討取り猶も進んで大將福嶋を討んと馳廻りけるを福嶋が勢幸隆を中に包んで揉立けるゆゑ大將信虎大いにあせり眞田を討すな駈合せて救へ〳〵と下知なすにぞ我も〳〵と馳合す又相木森之助は福嶋に渡り合火花を散して戰ふ中原が足輕寛十兵衛福嶋が乘たる馬の跡足を摑んで引倒さんとしければ上總介振向處を森之助彼大長刀を以て切て落す此勢ひに乘て武田方大浪の寄る如く追討八方に切散し勝鬨揚て徐々と引取福嶋山縣兩將の首を得ければ信虎大に悦ばるゝ折から甲府より男子誕生との注進を聞信虎愈々勇み立早速甲府へ歸陣せられたり

武田勝千代誕生の事幷勝千代幼稚妙才の事

扨も左衛門尉信虎此度の合戰に打勝諸將を率て凱陣なし早々出生の兒を見るに玉の如き男子なり我合戰に勝利を得たる時誕生せし事扨々吉兆なりとて幼名を勝千代と號らる此兒後に其名を四海に轟かしたる武田大膳太夫晴信入道信玄とて誠に奇代の名將なり其頃京都には將軍義植

守が陣所へ申遣しけるは此度双方一戰に及ぶと雖も元より貴殿と當方に於て一向何の意趣もなし然れ共武門の習ひ人數を出せし上は勝負を決せん事論を俟ずと雖も今十月にして寒氣甚だし徒らに諸卒へ霜雪の苦みをさせんより双方一旦和議をなし明年暖氣に成を待て快よく一戰を遂申度候此儀承知あるや否やと申送りける山縣是を聞て素より自國も氣遣しければ明年の合戰願ふ所なりと思ひ先本陣に行て福嶋に對面し信虎此度和議を乞ふ如何せんやと云に上總介も同心なりければ此趣き承知の旨返答に及びける故使者立歸り常陸介に斯と達す萩原爲濟したりと悦び夫々準備し翌朝東雲の頃多田白畑横田鎌田など密かに押寄ける山縣は昨日の和議を誠と思ひ何の備もなき所へ武田勢二千餘人吶と喚いて突入ければ山縣大に驚き扨は敵の謀計に落しぞ打出て驅破れと自身鎗を以て突て懸る然共不意を討れし事なれば諸卒周章狼狽戰ふ術なし山縣怒つて腹黑者の振舞哉我に續けと無二無三に突て廻るに奈川郡次郎土肥彌三郎佐田甚兵衛神原頼母等百騎ばかり我も〳〵と引返し戰ひける所武田方相木森之助海野六郎等五六十人横鎗を入ける中に相木森之助例の大長刀を以て淡路守に切て懸るを見て神原頼母主人の馬前を遮り森之助に馳向ふを森之助は只一刀に頼母を薙落し淡路守に打て懸る山縣暫し戰ひしが相木が勇力に叶はず退かんとする所に奈川郡次郎佐田甚兵衛等主人を助て掛隔つ森之助此兩人と戰ふ中山縣は落行味方に誘引れ心ともなく引行所に先達て淡路守に討れし小幡日淨が嫡子山城守友貞夫と見

の坊大に驚き扨々栴檀は二葉より香し流石は信虎公の若君なりさらば教導申さんとて七書を出し讀しめしに勝千代嬉しげに是こそ我望む書なりとて晝夜怠りなく讀しとぞ光陰は矢の如く勝千代十二歳の時或夕暮廣椽に出けるに日頃立置處の木馬身震して勝千代と呼勝千代不審に思ひ彼木馬の側に行何用にやと尋ねけるに木馬曰く軍術と劍術とは何れか是なるやと云勝千代されば軍術劍術何れもよし是こそ劍術の妙なりと云樣拔打に丁と切ければ手應して何やらん椽の下へどうと落けり勝千代聲懸怪物を討留たり出合〳〵と呼れければ小性今井市郎手燭を以て能々見るに大なる狸なり扨又或時信虎勝千代次郎兩人を伴ひ下屋敷にて罪人をためしけるに先一番に信虎左文字の刀にて二つ胴を切其後勝千代に切よと有ければ勝千代辭退し控えける信虎次郎切とありければ次郎少も辭退なく手際に切落しけり信虎勝千代に向ひ弟は能いたしたり汝早く切と再び命じければ勝千代漸々立上り土壇に向ふや否や面體俄に變り手慄ひ足戰きける故諸人如何と見物するうち果して切損じけり信虎大に怒り拳を固め勝千代を散々に打居らる近臣抱留ければ信虎以の外に怒り次郎の手を引て奥へ入給ふ其後勝千代起上り砂を拂ひしが面色元の如く少も恐るゝ氣色なし是こそ俗に云能ある鷹は爪を隱すと眞田幸隆此事を聞て大に悅び此君こそ天下に名を揚る良將と成給はんと只管勝千代の成長を待たりけり是凡人の知所にあらず智勇の良才なり是を量り知者は眞田幸隆而已なり古今の名將といひつべし

公沒落まし〳〵故法住院義澄將軍の一子義晴公此頃播州に隠れ座しけるが呼迎へ奉つり足利十三代の將軍と仰ぎ奉つる然るに因て細川が威勢日頃に百倍せしとかや時に大永六年四月七日後柏原院崩御まし〳〵第一の親王を寶祚につけ奉つり是を　後奈良院と申奉つる爰に西國の浪人井上新左衛門と言者異國より鐵砲の傳習を受來り是を製造して信虎に調す信虎未だ見ざる物故新左衛門に命じ是を打せ見るに其音雷の如く其玉的を貫く事實に烈しければ扨々軍器には最上の利器なりとて井上を師として家中へ習はせければ是よりして信虎の軍威日頃に百倍し四隣皆恐けるとかや幸隆も此事を聞家臣別所治郎右衛門に命じ井上に其術を習せける軍の備へ立是より一變して鉄砲を先に進ませ其跡に弓鎗と段々に組合せたり然る程に信虎向ふ所敵く何事心に任せざる事なしと甚だ其勇に誇り我意増長し我未だ懐姙の様子を見し事なければ之を試んとて女の腹を裂せ男女の境を見て快よしとて既に十三人迄腹を裂たり因て老臣山縣河内守馬場伊豆守等種々諫めければ信虎却て兩人を手討になしける由を聞て眞田幸隆大に歎き是武田家滅亡の時節なりと斷念其身病氣と申立出勤せず舍弟海野六郎幸綱を甲府を出し置しとなり扨又武田勝千代丸は幼少より才智衆人に勝れ八歳の時師の僧長禪寺一卷の書を出し是は玄恵法師の作り置れし庭訓往來といへる物なり是を讀習ひ給へと申勝千代暫く見て師の坊に對ひ文字を知には此書よしと雖も武將の要とする物ならず何にても軍旅に達すべき書を教へ給へと有ければ陣

のとは何事ぞ其事は父が心にあり勝千代なくば家督は二男次郎に譲らん子の身として親の意を侮る憎き奴哉打放し吳んと使者に立たる田村金彌を引掴んで備前兼光の刀を拔より早く大袈裟に切殺し猶も怒りの餘り內藤大學を呼勝千代に切腹させよと申付られたり此時勝千代少も騷がず子として父より切腹を命ぜらるゝに何ぞ辭せんやとて已に自害と見えける所に小山田備中守馳來り刀をもぎ取父君一旦の御怒にて死を給ふ共御自害ある時は却て孝道にあらず先々此所を一度退ぞき是より信州岩尾の城主眞田幸隆が許へ立退給へ其後如何樣にも御詫申上御不和ならぬ樣に仕つるべしと諫めければ勝千代然らば汝に任せんと今井市郎一人召連岩尾の城へぞ退きける幸隆此由を聞是は勝千代君我智に迷ひ父を輕しめ給ふ所なり假令我理ありと雖も馬一疋の爲に大道を失ひ給ふは何事ぞや夫合戰の勝敗は大將の一心にあり何ぞ馬鎧に關らん是小器なり此後とても能々愼み給へと諫め勝千代を一間に籠置て津賀山齋宮淺見次郎を召連甲府へ行先信虎常に歸依し給ふ春巴和尙と云曹洞禪僧を賴み同道して登城したりけり信虎は此度勝千代甲府を逃去しを幸ひとして二男次郎に家督を讓らんと思ひ居ける所に眞田幸隆幷に春巴和尙の兩人來り勝千代君の御事和順なし給へと理を盡して詫ければ信虎も詮方なく澁々ながら宥されける眞田大に悅び夫より岩尾に立歸り勝千代の前に出以後必ず私しの智を人に見せ給ふな愚鈍たる体にもてなし何事も二郎殿より劣り給へ御成長の後は某し存ずる旨有とて吳々も諫言いたし夫

第六　武田勝千代父信虎と不和の事幷勝千代元服の事

既に虎は三歳にして牛を喰ふとかや武田勝千代未だ幼年なりと雖も天下に英名を轟かす良将と成人なれば行跡他に異なり眞田幸隆是を見て此人こそ四海に名を止め給はん事必定なりとの先見宜なる哉茲に勝千代父信虎と不快の事出來せり其故は信虎豫て鬼鹿毛といへる名馬あり此馬の丈八寸八分一度鞭を打時は十丈の堀をも飛越ける程の駿馬なり勝千代此馬を所望に思はれ父信虎の許へ小性田村金彌を使として何卒鬼鹿毛を給る樣にと乞申されし處信虎之を承知せず勝千代當年僅に十三歳なれば何ぞ斯る荒馬に乘得んや來年元服させなば當家重代の旗楯なしの鎧義弘の太刀左文字の刀同じく短刀悉く重寶を讓り與べし此旨申せと田村金彌を返されける勝千代再度金彌を使として當家重代の寶物皆々御讓り下さるゝ由難有く存じ奉つれども私し所存には御旗楯なしの鎧は義祖新羅三郎殿より相傳の品なり其外太刀等は家の重代なれば御家督を讓られ候はん時こそ頂戴仕つるべけれ假令來年首服を加へ候共部屋住の中は爭か重寶を給はるべきやさすれば御返事に及ばず候鬼鹿毛の儀は只今より乘習ひ若年には候得共御後備へなど快よく踏へ初陣の術にも致さんと存じてこそ所望仕つり候なれ因て何卒鬼鹿毛を下され候得と申されければ素より短慮の信虎大に怒り家の重寶讓らんと言に是を不足に思ひ家督を讓るの讓らん

おやつり一時に乗破らんとすれ共城中寂然返つて音もなく十分に敵を引寄迫間を一同に押開き差詰引詰散々に射ける故武田勢色めき立て見えける處に敵城より女一人現れ出是は平賀入道が妻女白絹と申者なり此處へ押寄られしは武田殿と相見え候遠路遙々の御出に付聊か御馳走致さんと云ひながら二十八にて持來りし大石を輕々と提げ投出しける有樣古への樊額女も是には何ぞ及ぶべき武田勢矢庭に五十八ばかり壓に打れ血を吐て死したりければ大に備へ亂るゝ處に城門を押開き大將平賀入道百餘騎を從へ打て出ければ武田勢散々に成て引退きけり其後再度攻ると雖も果敢々々しからず是に因て軍はなかりし處に大雪ふりしかば三十餘日城を徒らに眺居たりけり荻原常陸介は信虎の前に出申けるは此間の大雪例年に増て降續き馬足自由ならず殊に此城の大將平賀入道は大剛の者にて妻女白絹が怪力誠に恐るべき所なり殊に城兵三千餘人楯籠り候由なれば味方は八千餘人ありと雖も皆遠路の勞れありと言此間よりの合戰攻屈倦たる事なれば中々落城の儀あるべからずなれ共俄攻に仕つらば攻落す事も有べけれ共味方大に損ずべし然すれば勝利あつても益なし年内最早日もなく一先歸陣あつて來春重ねて城を攻られ然るべしと申にぞ信虎申けるは其方が諫め尤もなりと雖も我若年の時より斯取卷たる城を其儘にて引歸したる事なし若又我歸陣せば城中より追打すべし其時悔る共甲斐あるまじと申されければ荻原敬來石重ねて其事にて候軍慮に賢しき城兵なれば却て追打は懸申まじ又追打を懸たり共何の

より甲府へ歸しけれ共信虎左右心解ず假初にも勝千代には憂目を見せ次郎に家督を讓らんと思ひ立れける勝千代は眞田が諫言を守り兎角氣拔の樣にもてなしければ郎等に至る迄所詮此君家督相續叶ふまじと次郎へ仕ゆる者多し然れ共勝千代是を恨む樣子もなし然るに信虎の聟今川義元の取持を以て勝千代に元服いたさせらる時に天文五年三月五日なり其頃京都將軍は義晴公にて上野中務大輔淸晴を以て甲州へ遣され將軍家の御諱の一字を給り武田太郎晴信と名乘せ暫くして勅使轉法輪三條右大臣甲州に下り給ひ晴信を大膳大夫兼信濃守になされ公賴公の息女を勅諚にて晴信の內室になされける

武田信虎海野口城攻の事幷平賀妻女白絹勇力の事

扨も此時武田左衛門尉信虎は海野口の城を攻落さんと發向ある附隨ふ人々には嫡子大膳大夫晴信二男次郎信繁穴山伊豆守板垣駿河守跡部尾張守飯富兵部少輔原能登守甘利備前守加藤駿河守敎來石民部眞田幸隆の代りとして海野四郎幸綱穴山小左衛門等都合八千餘騎頃は天文五年十一月十一日海野口に押寄ける抑々此海野口の城主は先達て敗軍せし平賀修理亮なり入道して源心と云力量は七十人力にして勇猛の大將なれば武田勢押寄けると雖も少も動ぜず家臣平賀刑部左衛門安田玄蕃を始め持口〳〵を固め射手を揃へ待懸たり然るに武田勢は嚴重に備へ足輕を以て

田勢此城を攻落さん事思ひもよらず然れば此方より甲州へ赴き先敗の恥辱を雪がんと大に酔に乘じ寐所へ入て休みけるは平賀の運の極まりなりと後にぞ思ひ知れける

第七　武田晴信智計の事幷海野四郎武勇の事

天文五年十二月二十七日武田左衛門尉信虎海野口を引退き甲府へ歸陣有けるに嫡子晴信幸綱と倶に是より海野口へ攻寄んと下知せられければ海野四郎大に驚き晴信の智計を感じける晴信幸綱に向ひ敵城を取ながら然せる功もなく引退かんは武門の恥辱なり假令此所にて討死し尸は海野口の土となる共名は後世に明かならん晴信が初陣の功を立るは此時なり進めや〳〵と采配を取て下知あれば海野四郎穴山小左衛門今井市郎飯富三左衛門跡部大八を始めとして我も〳〵と無二無三に攻寄ければ何かは以て堪るべき平賀入道を始め皆々敵は甲府へ歸陣せしと聞熟睡せし事なれば周章狼狽ものゝ用に立者一人もなく大將平賀入道は鎧引懸切ては出るものゝ甲州勢は大軍と思ひ氣後れして進み得ず其他の者に至ては戰はぬ先より妻子を引連逃出るを海野四郎穴山小左衛門當城の一番乘と名乘塀に取付乘入けるに平賀刑部左衛門安田玄蕃を始め落失たれば大將入道大いに怒り今は是迄なりと黑糸縅の鎧に白綾にて鉢卷し四尺三寸の太刀を眞向に翳し大音に名乘けるは平賀修理亮入道源心今ぞ最期の手並を見せん我と思はん者は近寄ヤット

恐れかあらん大返しに返して打取べしと申ければ信虎然らば其儀に任せ明朝未明に引取んと用意しけり此時晴信父の前へ出て申けるは明日の後殿は某しに仰付られ下さるべしと申されしかば信虎大に笑ひ晴信は臆病なる事を言者哉追打を懸まじと申を聞て後殿を願ふ可笑さよ假令父が申たり共此儀は次郎と申てこそ武田家の總領なり中々二男信繁は斯様の馬鹿なる事は言ぬぞと申されけれ共晴信強て願れけるにより此上は望みに任すべしと信虎免しければ晴信則ち後殿の用意に及び海野四郎方へ使者を遣し其許も我と共に後殿し給はれと頼まれしかば海野も是を聞扨々晴信殿は臆病なる人哉追討懸られん事を恐れ我に加勢を乞る我兄幸隆常々晴信を後世の英雄と言るゝは大成目鑑違ひなりと打笑ひて晴信の陣へぞ行たりける時に天文五年十二月廿七日の曉天に武田信虎軍勢を引て海野口を退き甲州へ引返さる嫡子大膳大夫晴信海野四郎幸綱三百餘騎にて後陣に殘り備へけり然るに晴信は其前夜幸綱に向ひ其許の手勢にて武具馬具を能仕替兵粮一人に付三人前用意し且又極寒の時節なれば打立期に上戸下戸に拘らず酒を少々呑過し箇様に下知を加へられよと申されけり海野承知して我より手勢に其用意を致させける幸綱密に呟きけるは晴信は愚鈍たる事をいふ人哉此大雪に中々戰ふべき樣なければ敵の追打思ひも寄ず夫に用意とは扨も〳〵臆病の人哉と謗言〳〵其用意を調へける然るに城中には甲州勢引退く事を聞て大に悦び虎口を寛げ此程の軍勢を休息せんと皆々甲冑を脱て打寄酒宴を催しける何條武

さして高名とするに足ず是皆幸綱が功なり海野無りせば何ぞ平賀を討事を得ん其上己は先海野口に止り居て使者を遣すべきに平賀を討取より直に逃歸りしは是晴信が憶病なりとて此度初陣の功を稱せず日頃に十倍して父子の中不和なりければ諸將皆々苦々敷ぞ覺えける扨も武田晴信は初陣の譽れなれば彼の源心を石の地藏に刻ませ大門峠に安置し同人の太刀は常に弓の番所に飾り源心が太刀とて晴信一生置れけるとなり且又此度海野口の働き天晴なるにより信虎晴信兩將より幸綱に感状を給ふ其文に曰く

今二十七日午の刻海野口の城主平賀入道源心が首討取候段神妙に候彌々可抽忠勤者也

天文五年十二月廿七日

晴信 判

海野四郎殿

四郎は面目を施し信州岩尾へ歸陣しけり

今井貞國切腹の事并眞田信綱出生の事

武田左衛門尉信虎武勇萬人に勝れし猛將なれば一己の勇に誇り忠臣の諫めを用ひず屢々人を害する事ありしが信虎常々寵愛しける白山といふ猿信虎が常に人を手討にせられけるを見習ひ或時信虎の脇差を提げ走り出たるを誰も知る者なかりしが今井杢之助貞國鷹の間と云所に只一人

仁王立に立たりけり坂田十郎是を見て五尺許りの太刀を打振入道に切て懸る源心少も動ぜず二三合戰ふと見えしが坂田を眞向より胸板迄割付たり續いて鳥飼宗藏磯山九八兩人鎗を以て源心に突て懸るに鳥飼が鎗を潜磯山が鎗の千段卷を摑で引寄一刀に薙伏返す太刀鳥飼が胄の眞向に切付たり其早き事電光の如し之を見て海野四郎幸綱眞一文字に馳來り切て懸るに源心も聞ゆる勇士成ば請つ流つ暫く戰ひしが勝負付ねば互に太刀投捨て引組たり然共源心思ふ樣斯なりし上は討死する我身なり今此者惜き勇士なれば是を助けて我首を與んと覺悟し源心態と海野に組敷れける故幸綱源心が首打落し立上らんとする所に我夫の首を返せとて小櫻縅の鎧を着長刀を水車に廻し平賀が妻白絹なりと名乘かけ海野に切て懸る幸綱源心が首を投捨落たる太刀を取ながら切結ぶにさしもの海野も支え兼既に討るべかりしを晴信下知して總勢一同に討て懸り海野を救ひ跡部大八郎を以て白絹を討んとすれ共馬乘の達人なれば中々手に合ず女一人の爲に甲州勢駈立られ攻厭倦でぞ見えたりける此時幸綱の郎黨望月鉄之助は鉄砲の名人なるが白絹の有樣を見楯の蔭より狙ひ澄し切て放せば過たず白絹の胸元へ血煙立て打込だり何かは以て堪るべき馬より眞逆樣に落ければ其後支ゆる者もなく終にぞ城を乘とりける晴信悅び跡部大八郎を以て甲府へ注進し諸勢を率て凱陣されければ諸大將是を聞て大に驚き晴信初陣の高名末賴母敷と一同信虎へ嘉儀を申けるに元來信虎は晴信を忌心有ば更に悅ぶ色なく此度晴信海野口の城を取し事

思ひ信虎に申けるは小澤事此度貞國が切腹を恨み密に君を害せんと謀り候御用心有べしと告ければ心荒き信虎實否をも糺さず小澤を呼出し大音揚汝不便を加へ榮耀をさせ置しに今度汝が兄貞國縛り首にも申付べきの所慈悲を以て切腹させしを有がたしとも思はず密に我を害せんと謀るは何事ぞ汝大惡心の女めと大に怒つて申ければ小澤身に覺えなき事なる故只驚くゝ而已にて一言も云事能はずさし俯向しを信虎衝と立寄小澤の黒髪引摑み左文字の刀を拔より早く提切にせられたる有樣無慙と云も餘りあり依て小澤が怨念其夜より信虎の寐間の傍らに立と雖も信虎の勇氣にや恐れけんさして災ひもなさゞりしがおさきは怨靈つきまとひ終に七日の内に狂ひ死に死せしとかや爰に又幸隆の妻女男子を産ければ幸隆大に悦び德太郎と號く是即ち源太左衛門信綱なり又其頃海野幸綱病死したるにより幸隆大に歎き菩提院に葬り法名を大道院興圓定門と謚號し穴山小左衛門が一子六郎の器量ある事を知り此者を海野の名跡として相續させたり扨又甲府には今井兄弟を害せられける故一家中の者信虎を恨み疎じ思ひ〳〵に他國へ立退者其數を知ず因て信州更科の城主村上義淸同國深志の城主小笠原左馬助長村其外近國の諸侯武田家の浪人を抱へ入甲府を攻亡さんと窺ふ故甲府の危き事風前の燈火の如し

第八　信虎晴信を廢去せんとする事幷晴信今川家へ密使の事

當番して居けるに頃は天文六年六月十一日暑氣甚だしく杢之助長日に疲れ眠り居ける處に此猿脇差を引拔貞國が後より肩先を切掛たり暑氣の時分ゆゑ白き帷子血に染ければ猿は血を見て驚き啼叫ぶを貞國大に怒り拔手も見せず彼猿を一刀に切殺したり此音を聞て鎌田織部小山彦四郎安間三右衛門等立出ければ貞國怒つて右の次第を述る中に此事早くも信虎聞て大に怒り猿は畜生の事故何ぞ分別あらんや然るに我秘藏の猿を殺せし事我を切たるも同前なりとて其儘杢之助を追放せられけり依て此時杢之助が嫡子彌四郎未だ三歳なりけるを家臣布下文吾と云者密かに是を抱きて立退岩尾の城主幸隆を頼みけるに幸隆不便に思ひ是を隱まひ育てける後に布下彌四郎定家とて古今の勇士に成末は幸村に仕へ入道して鐵山と號しけり信虎は今井が家を沒収し一旦追放したりし貞國を捕へ縛り首を打べき由命じけるを長臣甘利備前守是を聞て貞國が今度の科尤も輕からずと雖も畢竟相手は畜生なり畜生の爲に人の一命を斷べからず又今井は數度の合戰に軍功を顯し候者なれば宜敷御勘辨有べしと申けるに信虎是を聞入ず我猿の代りに今井の命を取にあらず上を輕んずるが故斯は申なり然ど汝が諫る旨もあれば彼に切腹申付べしとて日向左兵衛栗原兇藏兩人を遣しければ貞國豫て覺悟の事なる故見事に切腹いたしけり爰に今井が妹に小澤とて美人の聞え高く信虎の妾となして寵愛他に異なりしが小澤此事を聞て大に歎きけるを同じ妾の内に於さきといへる女此体を見て常々小澤が殿に愛せらるゝを妬み居けるが幸ひと

既に自害と見えければ板垣押止何故の御自害に候ぞやと申にぞ晴信歎息して我孝の至らざれば
こそ父に見放され嫡男に生れながら弟に家督を取れん事恥辱の至なり所詮生て甲斐なき身なれ
ば潔よく自害せんには如じと涙を落して申されければ板垣夫は御短慮なり恐ながら臣が申上る
事を能御聞われ父公是迄の御行跡を見奉つるに女の腹を割馬塲山縣を御手打に成れ今井貞國に
切腹致させ小澤を殺害し御一族を亡し給ふ事古今の大惡狂人に等しきなり先々御心を鎮て甘利
備前守飯富兵部少輔の兩人を召れ御相談有て然るべしと申ける故晴信涙を拂ひ我汝の異見に從
はんと申されければ板垣大に歡喜決して御短見有べからずと倶に涙を流して退出したりけり扨
後晴信は甘利飯富を密に呼で此度父の仰せ如何すべきと申さるゝを聞て飯富眉を顰め御家の一
大事こそ出來せり今諏訪村上小笠原を始め近國の强敵當家を倒さんと計る最中なるに智勇兼備
の御嫡男を追退げ給はゞ御家臣の中も彌々父君を恨むる者多からん然ば其虚に乘じて一戰にも
及ばゞ當家の滅亡近きにありと甘利飯富顔見合せ居たりしが甘利飯富に對ひ申けるは豫て其許
には懸る事も有んかと云れし儀を今こそ君に申上んは如何にと有ければ飯富道理なりと同意し
晴信の耳に付て斯樣〳〵になし給へと勸めけるに晴信大に驚き汝等は我を天下の惡逆人になさ
んと計らふや其儀ならば寧我自害して死するに如じと申されければ兩人口を揃へ新羅三郎義光
公より數代續きし武田の御家滅亡に及ぶ時なれば此企て全く不孝ならず御先祖への大孝行と云

武田信虎は己が豪氣に任せ人を輕んじ纔の科にも是を罪し數代忠勤の家をも分ちなく我儘の計らひあるに因て人々之を疎み敵地へ迯去者もあり又晴信の人和を得大將の器備りしとて傾き此君に仕へんと望むも有臣下心々に成行ども信虎は左右嫡子を疎んじ二男次郎に家を讓らんと思はるゝと雖も世間の聞えを憚り何がな晴信に罪を拵へ追退けんと思ひ居られたり頃は天文七年正月元日新年の慶賀として信虎嫡子晴信二男信繁三男信連其外臣下には穴山伊豆守馬場民部少輔教來石民部少輔萩原常陸介山縣跡部淺利小山田の輩らを始め皆々列座しける時信虎中央に座して盃盞を取上すつとほし晴信へさすべき所然はなくして次男信繁にさし夫より三男信連にさし其後臣下へ與へけるに因て晴信大に面目を失ひ退出ありければ臣下の面々互に面を見合せ退出致しける其月二十日信虎板垣駿河守を呼で申されけるは晴信儀は今川治部大輔義元の吹擧に因て大膳大夫兼信濃守に任ぜられしなり然るに晴信其成長至たく愚にはあらね共邊鄙に育し事なれば何やら田舍風に思はるれば是より姉聟の方へ行今川の家風を見習ひ萬事上品の作法をも稽古有樣に申せと仰せらるゝに板垣承知して晴信へ斯と申せしかば晴信聞て答もなく面色を變じ手を拱きて居られしが良有て板垣に向ひ扨は父君斯迄に我を疎じ目にも見えぬ所へ追退けんとし給ふかや汝には定めて內意も有つらん包まず語れと有ければ信形は晴信の側近く進み寄申も恐多く候得共君を追退け御家督を信繁君に讓り給んとの思召にて候と聞より晴信差添を拔て

て早世す依て同腹の弟善俸寺といへる禪院に出家しておはしけるを還俗させ今川の家督をつがしむ是從四位下治部大輔兼駿河守義元なり室家は武田信虎の第一の女にて晴信の姉なり義元釋門を出て父の業を受しより文武兼備の良將なりとの聞え高く何卒三河尾張の兩國を切取り一度上洛せんと思ひ立一向軍略を廻らしける處へ武田晴信の使者として今井一郎保春來り密書を渡し父信虎を廢去せん事を申送る因て義元熟々思慮あるに我既に天下一統の功を成んと思ひ立と雖も甲州の舅武田信虎は勇猛の將なれば我が幕下に屈すべき者にあらず然すれば今晴信が密計に與し晴信を家督とする時は我が幕下同前にして心の儘なり然る時は天下一統の功迅速に成就すべしと思ひて承知のよし今井に密書を渡し歸されけり今井立歸りて義元承知の由申ければ晴信先板垣甘利の兩人に談し兩人豫て巧みし事なれば信虎の前に出此度晴信公を廢去あらんとの企て恐れながら此儀は君の御誤りかと存じ奉つる其故は信州に木曾村上小笠原諏訪相州に北條上州に上杉等皆々當家を倒さんと計る族なり然れ共君の威風に當り難く手を束ね時の變を窺ふ處なれば今晴信公今川家へ參らるべき事を頻に御催促あらば御孝心深しと雖も萬一や害心を含み給ふまじきものにも非ず萬一然ある時は信州の諏訪頼重は伯母聟の事なれば此人の方などへ逃げ行たまはゞ晴信公の御手の者は勿論心を通はし奉つる者は皆隨從申さんか然る時は臣下二つに別れ騷動仕つらば諏訪頼重は時を得て村上小笠原等に諜し合せ當國へ亂入せん然ある時は

又萬民の苦しみを救ふ事是に過ずと兩人種々に諫めければ晴信良心落居し樣子なれども何共答へなく其儘奥へ入れけり扨も飯富板垣の兩人は信虎の前に出今度晴信公へ仰の趣き何樣にも父公の御意に任すべき由仰せられ候と申述ければ信虎打笑ひ我申通りに隨はんと申や夫は晴信能分別なり若相背くに於ては首を刎てなり共我存念を晴すべしと申されける扨又晴信は甘利飯富の申せし事未だ何とも仰られざれば穴山伊豆守甘利備前守小山田備中守板垣駿河守飯富兵部少輔等種々相談に及び猶又晴信の前に出父信虎を今川義元の方へ廢去させ晴信を家督に立ん事臣下一同の望みなりと詞を盡して諫めしかども晴信は子の身として父を廢する事中々聞入られね共老臣の面々誓文を捧げて晴信の爲に勸めける故先今川へ密使を遣はさんとて今川一郎保春を以て駿州へぞ赴かせける

板垣甘利信虎を方便事幷晴信父を廢する事

抑々今川家の先祖を尋ぬるに淸和天皇六代の後胤八幡太郎義家公より五世の孫左馬頭義氏朝臣是足利の元祖なり次男四郎國氏は父吉良長氏の所領を相續す是吉良今川の先祖なり國氏より三代の嫡孫從四位下上總介範氏は足利將軍尊氏に從ひ元弘建武の合戰に軍功あるによつて駿河國を給はり府中に居城す夫より七代今川上總介氏照父修理大夫氏親の家督を嗣しかども不幸にし

て然るべしと勸めければ晴信聞て如何樣其方共の言葉理に當りて覺ゆるなり我曩祖新羅公の御寶の御罸を蒙ぶる者ならば何ぞ吉の鬮に當らんや早々用意せよと宍山伊豆守に命ぜらる時に諸臣相談して萬一凶といふ鬮出なば晴信公父君を呼歸し給ふべし然る時は御家の禍ひなりとて吉の字の鬮而巳拵へ晴信へ奉つれば晴信三度迄鬮を取りしに吉の字而巳出たり扨は神明も許させ給ふ處なりとて同月十七日屋形へ移られけり斯る事とは夢にも知らず信虎は駿府へ到られしに義元は計り設けし事なれば厚く饗應ながらも一間へ押籠置し故信虎案に相違して怒ると雖も爲べき樣なく月日を送られける處に義元の室家男子を產む信虎が爲には初孫なれば是を寵愛せられける内に甲府の事も打忘れ却て安樂に住し玉ひけり此男子成長の後今川氏實と申されける

第九　眞田幸隆晴信を難ずる事幷幸隆古市賴母に對面の事

然程に武田大膳太夫晴信は甘利飯富等が計ひに依て父信虎を廢去し板垣甘利飯富小山田宍山を始め老臣等君を補佐し國中の政事を治ければ誰有て左右の一言を發する者なく舍弟左馬介信繁同孫六郎信連小幡山城守淺利式部少輔諸角豐後守敎來石民部少輔小山田彌五郎長崎左右衛門安間三左衛門鎌田五郎左衛門横田備中守多田三八白畑助之丞我もくと晴信へ目見えして仕へぬ者ぞなかりける其中に信州岩尾の城主眞田彈正忠幸隆は此度晴信父信虎を廢去されし事を聞て

君彌猛に思し召とも是を防ぎ給ふ御術有まじ遠き慮かりなき時は必ず近き憂有と申せば能々御思慮の上晴信公を今川家へ遣はされん御計略こそ有まほしけれと詞巧みに述ければ元より淺智の信虎此事を聞て大息つき只默然として言葉なし此時甘利備前板垣駿河も差俯向思案に暮し体にもてなし暫くして申けるは君の御賢慮を承まはり安堵仕つり度候と申ければ信虎困じたる体にて汝等が申につけて心付しが然る時は一大事なり如何して晴信を廢すべき汝等思案もあらば申し聞せよとありければ兩人爲濟したりと心中に悅び御尋なれば言上仕つるべし君先に駿府に御入有て那方より使者を以て御招きあらば辭み給ふ事は豈有まじ依て晴信公駿府へ赴き給ふ所を捕て押籠給はらんに何の仔細か候べき其節は小人數にて參る樣我々詐略仕つるべし此留主の間は臣等相守り候べければ御氣遣ひあるべからずと申せしかば如何樣此儀道理なりと甘利板垣の辨舌に謀られ然らば我先駿府へ行き其當日中にも一左右を致すべし其時晴信を遣すべしと申含晴信をば穴山伊豆守に預け留守居は次郎信繁を殘し天文七年三月九日信虎甲府を立出らる御供多人數は却て宜しからずと穴山伊豆守が指揮に因て近習小性下々に至るまで百人に過ず御供人には石原小六安田主膳松井太郎兵衛穴山權太郎跡部國右衛門細川帶刀溝口源之助堀九郎衛兵等なり扨此時晴信は現在の父を廢さるゝ事なれば只默然としてのみ在しければ穴山板垣甘利等詞を揃へ然程まで思し召切給はぬ事ならば御家の寶楯なしの鎧御旗の前にて御鬮を拈給ひ

此罪を糺され然るべしと申述ければ晴信實にもと思され古市賴母といへる者を岩尾へ差立らる賴母命を受て岩尾の城に到り案内を乞ければ則ち古市を呼入らるゝに賴母本丸へ通り見れば中央には眞田幸隆傍らには相木森之助穴山小左衞門海野六郎伊勢崎六郎兵衞別府治部左衞門望月玄蕃を始めとして眞田家の臣一騎當千の勇士星の如く列座せり古市賴母は甲府よりの使者なればば定めて饗應せんと思の外座席をも下の方に設けらる古市は甚だ不平に思ひながら座に着ば幸隆是を見て我君命を輕蔑るに非ず晴信公既に人倫の道を背き給ひ父を廢去し己が榮花を思ひ給ふ是一國を治る君の身持に非ず武門の掟を背き上に有りながら斯樣の無道を行ふ時は何を以て下の不義を制せんや其方達も近臣の身として是を諫めざるは何事ぞと以ての外に憤怒の面色なりければ賴母口を開くこと能はず呆れ果たるばかりなりしが良有て賴母申けるは此度諏訪賴茂小笠原長時既に鎌梨河原韮崎まで出張す加勢有て然るべし且又今度主人晴信公家督をつがせ給ひ萬民を撫育あるゆゑ是まで反きし諸侯も皆嘉儀を整へ目見仕つる中に數代恩を受し其許何故あつて嘉儀の使者をも送られざるや其旨趣を承はれと晴信公仰なりと申述べければ幸隆大に怒りされば信虎公目出度御隱居あつて晴信公家督相續あらば假令某し重病たり共杖に縋りても嘉儀を整へ申べきに何ぞや我意に任せて父を賺し拵へ今川義元方へ遣し押込置其留守の間に曲て館へ押入り家督相續抔とは馬鹿〳〵しき所爲ならずや外の人はいざ知ず某しに於ては承では

大に驚き子の身として父を廢する事古昔より未だ其例しを聞かず我晴信公の成長し給ふを見るに是こそ武田家を興すべき人よと指を折て猶成長を待つ其甲斐もなく扨々人倫の道を失なへり假令惡人にもせよ我親たる人を廢し給ふ事是天下を治る大將の器にあらず嗚呼天下の人に惡名を得給ひたり斯る大將に從はんは武士の本意にあらず兎角敵にも付ず味方にも付ず其安否をば計らんと是より病氣と披露し一向に出仕せず此度の嘉儀に使者をも送らず何ぞ父を廢する不孝人に是を目出度しなんぞと嘉儀をなすは何事ぞ一國を治る主として斯樣の行跡なせば若下々の者斯る不孝をなす時何に是を制せんや假令我が首を切るゝとも此君に仕る事武門の本意にあらず跡部飯富甘利小山田穴山など歷々揃ひながら此惡逆を勸むるとは何事ぞやと殊の外に怒り是より武田の下知に從はず當時信州の村上諏訪小笠原の面々再三武田と戰ふと雖も利を失ひければ兎角時節を待ち居ける所に今度晴信父を廢去せしと聞えければ皆々大に悅び此虚に乘て攻入んと小笠原長時諏訪頼茂兩家の軍勢都合九千五百餘騎天文七年七月上旬信州諏訪筋を押出し甲斐八幡城山鎌山を右手になし鎌梨河原韮崎迄攻入けるゆゑ甲府の騷動大方ならず是に依て晴信軍勢を催促有けるにぞ我も〱と馳せ集る中に眞田幸隆一人に一向沙汰なかりしかば小山田備中守晴信が前に出て申けるは此度諏訪小笠原の兩勢韮崎まで攻入しゆゑ幕下の諸侯我も〱と馳集る中に眞田幸隆は此度の嘉儀に使者をも進らせず御催促にも應せず言語同斷と存候急ぎ

扨も大膳大夫晴信は小笠原長時諏訪頼茂の勢を防がんと軍勢を催促ある處に古市頼母岩尾より立歸り幸隆が擧動君を輕んずる趣きを語りければ晴信大に怒り渠我が若年なるを侮り輕んずると見えたり我まづ此賊を討ずんば有べからずと怒られしを飯富兵部大いに諫め君かならず幸隆を輕んずる事なかれ渠は若年より兵書を熟讀軍術に達せし事張良孔明にも増るべし殊に渠は村上勢の押へなり未だ小笠原諏訪と一戰もせざる内味方と合戰あらんは不吉なり先々捨置給ひて然るべしと言葉を盡して申ければ晴信漸々怒りを止め眞田なきとて勝敗は時の運なり何ぞ渠一人を頼むべけんやとて幸隆が事は捨置六千百七十餘騎を引率して打立たり敵軍は九千六百餘騎韮崎に陣取双方秘術を盡し戰ひしが飯富板垣原など一騎當千の勇將千變萬化して戰ひけるにぞ終に諏訪小笠原の兩陣敗北して二千餘人討れ又甲府勢も今井一郎をはじめ千五百餘人討死す然ども此度の合戰に打勝晴信甲府へ歸陣せられける然るに先主信虎の時譏者の爲に甲府を立退し加賀美四郎同幡之助櫻井兵部少輔等止事を得ず村上義清に從ひ居たりしが此度晴信家督相續の事を聞て密使を甲府へ送り立歸りて忠勤を抽ずべき由を申入れければ晴信仁徳を施し我惡名を遁れんと思ふ折節なれば早速承知ありけるにぞ皆々歸參に及びけるが加賀美四郎は晴信に對面して某し計らざる惡名を受既に當家と合戰に及びし事是偏に石原小六と云る者己が罪を遁れん爲信虎公へ讒しけるに信虎公實否をも糺さず押寄給ひ夫のみならず櫻井まで滅亡せしは全く

ゑまじと申ければ古市頼母此言葉を聞て幸隆殿には皮相の論にて其實を知り給はず信虎公既に晴信公を甚だ惡ませ給ひ廢せんとて小山田備中守に申付られ晴信公を今川家へ押込させ次男左馬介信繁殿に家督相續させんとの企てなりよつて晴信公自害せんとし給ひしを備中守押止め飯富甘利穴山の面々晴信公を勸めて父を廢せん事を計りしなり然れ共晴信公聞入給はず再三辭退有しかども無理に勸て飯富甘利等早信虎公を今川家へ參らせたり故に此事晴信公の所爲にあらず然共晴信公得心なかりしかば老臣方の勸めに依御旗楯無の鎧の前にて吉凶の鬮を取給ひしに三度まで吉に當り給ふ是曩祖新羅公の勸め給ふ處ならずや且又斯云ばとて飯富甘利が惡にも非ず是迄信虎公の行跡を見給はずや是天罰なり何ぞ晴信公の不孝と云を得ん篤と怒りを止め給ふべしと辯舌に任せて申ければ幸隆呵々と打笑ひ然ば新羅三郎義光公より傳りし楯なしの鎧の前にて鬮取りしなど丶云事此幸隆知らざると思ふかや是小兒を欺き賺す所存なり何ぞ取に足らんや然樣なる言語聞も忌はし早々歸るべしと苦々敷申捨て奥に入ければ古市頼母爲べき樣なく傍を見れば相木穴山海野望月別府等をはじめいづれも勇猛の臣眼をくばり扣え居る故頼母大に恐れ早々岩尾を出て甲府へこそは歸りけれ

武田晴信幸隆を怒る事幷石原小六死刑の事

亡させしは何事ぞ言語に絶たる大悪人如何して腹癒さんと益晴小六が鬢を引摑み振廻しければ根津申けるは斯極悪人は某し致し様こそ候へとて太き荒縄にて首を縊りて士卒に持せ左右より縄を緩めては引締〳〵ては緩め八九度も同様になしければ石原が苦悶云ばかりなく見る人心地よしとぞ云合へり斯て加賀美櫻井両家の面々存分に責懲み其後首を刎たりけり是よりして加賀美櫻井の両家無二の忠臣とぞなりにける又眞田彈正忠幸隆は甲府に從がはざると雖も元來忠臣なれば敵にも付ずして武田家の樣子をのみ聞居たりしが晴信は韮崎の合戰に打勝てより疾心驕り京都より美婦を呼び集め晝夜遊興に日を送られける諸大將此體を見て大に驚き苦々敷事かなど小山田甘利飯富など種々諫めけれども一向に用ひられず既に行跡不埒なりければ見る人禍ひ近きに有わはれ忠臣出て能君を諫め奢を止め給ふ樣に致し度ものなりと私語きあへりしとぞ

第十一　眞田幸隆村上勢を破る事幷相木森之助武勇の事

武田大膳大夫晴信は韮崎の一戰に勝利を得て心慢じ京都より朧と云る美女を呼び下し晝夜酒宴を催し且又禪學を好み惠林寺雄高和尚法性寺の策言和尚など云る禪僧を集め日々詩作をなし武備に怠りければ郎等等諫めけれども聞入ず兎角酒宴遊興に日を送りける所此事岩尾にて眞田幸隆聞くより扨こそ父を廢せし化の皮顯はされたることと笑止なれ誠に長臣等の計ひにて自身斯る

同人が所爲なれば恨を晴し申度候只今は駿府に在る由なれば何卒小六を我々に賜はるべしと申けるに晴信是を聞れ夫こそ易き事なり然れども渠父の傍らに侫り居る事なれば如何して是を呼び寄んや我招くとも加賀美櫻井此方に在と聞ば來るまじと少し思案の体に見えければ小山田備中守進み出夫こそ易き事なり先達て信虎公駿府へ赴き給ひし事は暫時の間といふ事にて附從ひしなれば安田松井穴山跡部石原をはじめ妻子共皆當所に在是を人質となして皆々立歸るべき由密書を遣はされ然るべし然し加賀美櫻井の兩家は此所に在ては惡かるべしとて信虎公へ附從ひし者ども立歸るまでは加賀美櫻井は穴山左衛門信行が方に匿れ居ける斯て晴信公よりの密書駿府に到りければ皆々是を見るに信虎公を捨置き立歸りなば是までの通り祿を與へんとの事なれば皆々大いに喜悅甲府へこそは立歸りける中にも小六は慾深き者なれば今度甲府より密書の趣きには石原小六事豫て武勇の聞え有により歸參なさば八幡に於て五千貫の地を與へんとの事なり石原小六大いに悅び我何ぞ斯樣に押込られ給ふ信虎公に仕へたりとも益あらんやと取る物も取敢ず一番に拔出し甲府へ歸りけるに豫て諜し合せし事なれば櫻井兵部少輔が家臣根津新兵衛命を受途中に待伏して石原を何の苦もなく搦め捕早々信宮山の麓へ連行きければ加賀美四郎同舍弟幡之助等待受皆々集り中に取籠けるにぞ石原小六大いに歎き此は何科有てと云せも果ず四郎益晴大いに怒つて何科とは卑怯なり日頃我が恩を受けながら却て主人に讒言し當家の類族を滅

岐守矢野伊豆守の兩人士卒に下知し此寒風にては眞田方も自然と心怠たりよもや此川を渡るまじと油斷するは必定なり早や川を渡して敵を破るべしと云つゝ其勢五百餘騎一度に川へ颯と打入りけるに水上は淺瀨なりと雖も肌膚を貫くが如き寒風を少しも厭はず英々聲を出して矢野伊豆守向ひの岸へ打上りける然るに伊豆守が云しに違はず敵兵は皆々焚火にあたり油斷せし事なれば大に驚き敗する處を矢野は眞先に立て下知なすを相木森之助鎗引提げ馳向ひしが叶はずして五丁ばかり引退く伊豆守下知してすは敵は色めくぞ追討にして生捕やと散々に追て行く金山隱岐守は是を見て伊豆守に後るゝな續け〳〵と進みける隱岐守下知して疾軍には勝たるなり手柄は仕勝ぞや進めや進めと眞一文字に追崩し伊豆守に續いて切立しが後陣に一聲の砲音聞えしかば怪みて後方を見れば村上勢の陣々爰彼處に火燃上りければ金山矢野の兩人大いに驚き此は如何にと猶豫處を眞田勢一同に取て返し相木森之助は獅子の荒れたる勢ひをなし村上勢を十二三騎突て落し尙も勇を奮ひ馳廻るにぞ何かは以て堪るべき村上勢散々に敗走する處に枯蘆の茂りし蔭より鐵砲を列べ打に放掛穴山小左衞門海野六郎打て出勇をふるひ戰ひけるに矢野伊豆守は所詮叶はぬ處と覺悟を極め眞田方の馬武者二騎に渡り合ひ火花を散して戰ひしが遂に二騎共に切て落し一方を切り破り遁出んとする機相木森之助にはたと出逢ひ双方暫時戰ひけるが森之助一聲叫んで突鎗に伊豆守胸板を貫かれ二言と云ず死してけり斯伊豆守が討死する間に隱岐守は

惡事を成ざる君ならば爭か父を押籠置美女を集め酒宴遊興に耽り禪僧と詩を作り面白しとせんや是晴信の化の皮顯れし處なりと嘲り居けるに信州更科の城主村上左衞門督義清は晴信遊興に日を送り且眞田幸隆と不和なる事を聞よりも此虛に乘て攻入るべしと長臣金山隱岐守龍貞を大將として千七百餘人を以て眞田が籠りし岩尾の城へ押寄ける是は村上義清が謀略なり今幸隆甲府と不和なれば加勢をせざるは必定なり然る時は幸隆降參するか又は落城するかの二つなり萬一降參せば眞田を案內者として甲府へ攻入らんと思ひ斯は計りし者なり斯て村上勢我も〳〵と押寄岩尾の此方なる成瀨川まで攻寄ける此時幸隆は城中にあつて諸士と軍談して居ける處へ眞田が斥候の者共おひ〳〵に此事を注進す幸隆少も動ぜず村上勢押寄たりとて何程の事や有べき敵は何れまで攻寄しやと尋ねければ斥候の使番淺見甚藏進み出疾成瀨川の邊に旗の手見え候早々御出馬有つて然るべしと言を聞幸隆然ば其準備をせんと頃は天文八年正月二十八日相木森之助に百五十人を授け成瀨川へ打向はせ穴山小左衞門海野六郎に百五十人を授け謀事を示して遣はし其後別府治部左衞門に百五十人を授け是へも謀計を敎へ三方へ遣し自身は伊勢崎五郎兵衞望月玄蕃根津甚左衞門を從へ二百餘騎にて徐々と押出す斯て金山隱岐守は成瀨川を前に當て待所に眞田方の猛將相木森之助百五六十騎の勢を率し川を隔て陣を取る然るに去年より雪深くして未だ早春なれば寒風肌膚を透し敵味方共寒さに縮合其日は暮しける所に村上方の先陣金山隱

更に取得もなき者なるにより父も餘りに敎へ厭倦て椽より庭へ蹴落しけるに勘介何とかしけん左の股を石にて打ち是より跛と成しが勘介倩々と思ひけるは我同じ人と生れながら斯く淺間敷何を習ふと雖も悟らず扨々口惜き事かなと無念骨髓に徹しける誠なるかな人の一念金石をも徹すと夫よりして父が敎導一を聞て十を知る程になりたりける是器用なる人の習ふは心入薄く不器用なる人一心固ければ却て其奥義を知る勘介が後世の程こそ頼母しけれ扨も山本傳次郎幸三我熟學せし處の極意を悉皆く敎へ勘介十八歳の時父傳次郎は死去せしかば勘介は父が敎へを守り切磋琢磨の功を積皆其奥義を極め今年廿一歳にして父にも增り往古の張良孔明にも恥ざる程に至りたれども元來浪人なれば貧なる事は云ん方なく暮しける爰に今川義元の家臣朝比奈兵衞とて元は生實家の臣なる故折節三州牛窪に來り勘介の父幸三にもたび〳〵音信致しけるが幸三の嫡子勘介は若年なれとも文武兩道に熟練したる者に付主人治部大輔義元に勸むる樣某し古朋輩にして當時三州牛窪に住す山本幸三と申者の嫡子勘介未だ二十一歳の若輩と雖も父の極意を熟練し城取陣取等は孫呉が妙術に達し誠に奇代の名士なり君召抱へ給ふに於ては豫て御大望の一方をも補け奉つるべき者にて候と申ける義元是を聞て然樣なる者ならば召抱へ度思ふ間早々我に對面致さすべしと命せられけるにより兵衞は直樣山本勘介を呼び寄せ庭前に出して義元に對面致させける勘介熟々義元の體裁を見るに苟且にも人を輕んじ己が勇猛を頼む擧動あり

危險命を助り成瀨川を這々に渡り陣の前に來りて見れば又眞田方伊勢崎五郎兵衞望月玄蕃根津甚左衞門討て出て四角八面に切て廻るに此方よりは別府治部左衞門關を作り討て出つゝ驅廻りけるにぞ村上勢彌々敗走し途方にくれて散亂す大將金山隱岐守は辛き命を助かり更科指して迯げ延たり眞田幸隆は先軍を治め敵兵の捨たる武具馬具兵粮に至るまで盡々く分捕なし徐々と岩尾へ歸陣す誠に眞田が深智の程恐れざる者ぞなかりける

山本勘介生立の事幷眞田山本に對面の事

爰に山本勘介と云者あり生國は三州牛窪の者にして山本傳次郎幸三と云る浪人の悴なり父傳次郎は生實御所の臣下なりしが生實家滅亡の後此牛窪に空く光陰を消りけるに一人の男子を設けしかば傳次郎大いに悅び何卒して此悴天晴の武士に取立ん者と思ひけるにより蝶よ花よと育しが疱瘡を病み已に死せんとする事度々なり幸三大に悲しみ種々と療治を盡し神佛を祈りけるが誠に其甲斐有て漸々本腹致しけれ共疱瘡右の目に入て終に眇目となれり然ども命恙なければ父母の喜悅び限りなく撫摩りて育けるが父傳次郎武門に於ては城取陣取悉皆く其奥義に達し寔に孫呉が秘術を極め劍術は達人にして誠に古今珍らしき武士と謂つべし然に勘介疾十五歲になりしかば文武の兩道を敎へけるに生得不器用にして何を敎導するとても今日敎ゆれば翌日忘れ

臣下共は定めて高名の勘介なれば其風儀人に異なる處有べし如何なる人ぞと皆々擧て待居けるに案に違ひ小兵にて色黒く顔は疱瘡の痕つき右の眼潰れ加之跛なりければ見る人皆大に驚き私に笑はぬ者ぞなかりける勘介は幸隆に對面し其人相を能見るに誠に人を能懷け謀事を能して百萬騎の大將に爲共などか過ち有ん自然と勇威備りて有ければ勘介大に敬して倶に軍事を談ずるに孫呉が秘書は勿論諸家の兵法一つとして知らずと云事なし幸隆も又大に勘介の人となりを尊み夫より互に四方八方の物語りをなし諸國の大將の品格を評し今川義元に對面し遂に用ひざるの次第を語りければ幸隆大に歎じて扨は義元最早家運の盡きけるよな天性は常に依て堅ければ天然自然に發明し大身の家より産れ出て無藝なる者世に多し其義を以て論ずる時は結句小身の家に身を寄せたる勇士は亂臣の思ひをなし一度大身の主人に奉公し身を立て家を興さんとの念願なれば藝道に達し臨機應變の妙は假令孫呉が書籍を手に取らず共本性の明智を以て悟るに至らずと云事なし然るに義元是を悟らず誠に魯鈍な大將かなとて幸隆は大いに勘介を賞しける勘介太だ辭讓して某し何ぞ大將の器に當らんや眞田殿こそ天晴仲樂が奥意を極め玉ひしと双方徳を稱し合ひ其日の興は止みにける是より山本勘介は岩尾の城に逗留すること十日餘りにして幸隆に申けるは某し國に在頃より貴君の高名を聞今度此地に來り思はず數日を送りしと雖も猶諸國巡遊の望あれば一度發足なし御縁もあらば重ねて貴顔を拜すべしと暇を告ければ幸隆も

是必ず國家を亡ふべき人なりと思ひ義元も朝比奈兵衛の勸めに因て勘介に對面ありし處右の目潰れ加之跛にして顔は疱瘡の痕つきて左の眼大く丈は漸々四尺二寸見苦しき事譬ん樣もなく義元大に笑ひ斯樣の片輪者殊に牛窪の民家に育ち爭で軍慮に達せんや且亦城取陣取に熟せし程ならば一生に一城をも保つ名士とも云べけれ共未だ何れの大將をも承はりしと云事を聞ず斯る下賤の山本勘介何ぞ重器に當らんや且又劍術も當流に増る事なし斯の如き不具なる者にして此義元が大業を助けん抔とは片腹痛き次第なりとて一向に用ひ給はず山本勘介も強て奉公を望ざれば夫より諸國に赴き地の利要害の處まで盡く知り且又當代の良將をば盡々く試み九年の間修行致しける頃は天文八年に至て信州岩尾の城下に來りけるに旅人の話しに此間當處の領主眞田幸隆村上勢と合戰あり脩樣〳〵の智計を以て勝軍せりと私語ければ山本勘介是を聞て大に驚き心中に思ひけるは眞田が陣立奇々妙々にして我に増る處ありとはじめて感じ何卒して此眞田に對面せんものと岩尾の城門に案内して申けるは我は三州牛窪の住人山本勘介と申者なり何卒眞田殿に對面仕つり度態々推參致したりと申入ければ海野六郎此由を聞て必ず然樣なる者を城中に入るべからず先敗を雪がんと村上方の廻し者なるは必定なり牽生捕て拷問せんとて立上る折節幸隆立出て此事を聞き大に是を制し必らず短慮事勿れ吾常々牛窪に山本勘介と云る豪傑ある事を聞及ぶなり鹿略なき樣是へ通すべしと有りける故早々勘介を本丸へ請じける眞田が

て坂輪川迄押寄敵陣を見れば越中勢八百餘騎鎧の袖を引違へ甲の星を輝かし殺氣凛々として扣たり然共爲景入道强氣の者成ば少しも屈せず直江甘粕を左右に隨從無二無三に敵中に切て入海尻も諸卒を下知して諸共に入亂れ八九度揉合しか共更に勝敗分たざれば爲景入道下知して國の存亡は此一戰に有引な〳〵と自身敵中に馳入て縱横に戰へば何かは以て堪るべき海尻が勢大に敗北し一里ばかり引退く長尾入道是を見てすは敵は色めくぞ進めや〳〵と下知しければ長尾勢我劣じと追討皆々分捕高名し猶も備へを亂して追駈たり海尻越中守此時只一人馬乘据是に越中守在腹黑も後を見するは何事ぞや引返して討死せよと自身鎗を取て戰へば勝沼五郎飯田三藏村上源次を始め取て返し大いに戰ふたり然共敗せし越中勢何條堪らるべきや狼狽亂る所を越後勢に取圍れ百餘人討死す海尻次村も自身敵中を馳回れ共叶はずして味方に引立られ思はず引退く所に越後勢の中より蒲原靭負と名乘て海尻勢を眞一文字に懸破り夫に引せ給ふは次村殿と見て候蒲原靭負是に在返させ給へと呼はるに元來强氣の海尻成ば少しも動ぜず莞爾と笑ひ駒の頭を引返す所を蒲原急に馬を驅寄鎗取延て海尻が大口の端れを突に次村大に怒り突れ乍ら其鎗を手繰寄んとする所に蒲原が郎等臼井早太大太刀拔て海尻が馬の後足を切付ければ馬上に堪り兼眞逆樣に落る處を早太押へて首を掻落したり爾も强氣の海尻成共一戰に討負剩さへ靭負の爲に討れて大將無れば殘兵思々に迯失けり爲景入道道七は思ひの儘に打勝軍を引んと思しが此處に乘

名殘りを惜みて吾願くは貴公と共に何時迄も軍事を語らんと思ひしに今別れん事甚だ惜くは思へども是非に及ばず必ず再度御尋あれと互に別を惜みつゝ袖を分ちければ國境迄で望月玄蕃を附添へて送らせける勘介は幸隆が欵待を感謝なし夫より諸國を修行する事三年にして牛窪にぞ歸りける山本勘介後に甲府へ仕ゆる時先第一に眞田が事を發言せしは此時器量を計り知り居ればなり

第十一　海尻次村討死の事幷鵜野相摸房夜討の事

然程に武田大膳大夫晴信は只管幸隆を悪み誅伐せん事を思るゝと雖も村上義清諏訪頼茂小笠原長時と合戰間隙なかりければ其儘に捨置れ村上勢も眞田が籠りし岩尾の城を攻落さんと巧共幸隆が軍慮賢きを恐れ手出しせず扨越後國高田の城主長尾爲景入道道七とて近代無双の剛將在ける又越中の國海尻粂太夫と云者己が強勢成に任せ越中一ヶ國を討亡し海尻越中守次村と改名し國中を横領しながら越後の國も隨へんと國境に出張して民屋を放火し其勢八千餘騎にて押寄る爲景入道是を聞て大に怒り海尻次村汝が勇に矜他國を隨へんとは不屆至極なり先や此賊を爲景向て一戰に打破らん者をと直江團右衛門甘粕攝津守柿崎源太郎を始として五千餘騎馳向ふ城中には直江大之進兼定を殘しける頃は天文十一年六月の事なれば折しも暑氣强けれ共高田を立

長尾猿松丸武勇の事并晴信山本勘介に對面の事

扨も越後勢は思ひも寄ぬ賊徒の爲にさしも強勇の長尾爲景入道討死しければ殘卒散々に敗走し這々高田に逃歸ける依て高田の留守居直江大之進兼定始大將討れ給ひし事を聞て上下の騷動大方成ず皆々闇夜に燈火を失ひし如く忙然として惘果たるばかりなり此時爲景の嫡男猿松丸僅かに十三歲成しが此事を聞と齊しく小太刀を抱込逃歸りし人々に向ひ父を討せて汚面〳〵と逃歸りたるは何事ぞやと大に憤ほりければ皆々面目を失ひ赤面するを見て猿松丸曰く汝等父を討せし事其罪救免難と雖も暫く首を預け置べきにより父の仇を報んと思ば我に從ひ軍功を立此度の恥辱を雪ぐべし功有ば是を免さん功無ば軍終つて後首を刎んと未だ幼年の猿松丸に諫られ諸卒一同に舌を卷て屈伏す因て天文十三年六月下旬軍勢漸々二千二百騎許りの小勢にて打立給ひける誠成哉此猿松丸後に上杉彈正大弼輝虎入道謙信と號し武名を天下に轟かし武田信玄と双び稱せられし名將なり猿松丸は直江大之進を先陣として甘粕主膳柿崎與五郎山吉三彌神宮惣藏を始前後に從ひ直に不禮川に打出らる玆に賊將鵜野相摸房は瓜生大傳を始め賊徒等三百餘人を從へ勝軍を賀し遂に越中全國を押領しけるに因て始め討死せし海尻か殘黨皆々相摸房へ從ひ仕ければ其勢一萬二千餘騎と成兵粮武具山の如く成ば相摸房忽ち心驕り瓜生大傳を軍師と定め諸卒を

て越中の國を切隨へんとて牟禮川と云所に陣取ける此度海尻討死し諸卒思ひ〳〵に逃行中に鵜野相摸房とて山中を徘徊する大盜人同類二百餘人海尻が威勢强ければ止事を得ず隨從て此合戰に加はりたりしが敗北せしまゝ或山に逃込隱れて居たりし處手下の内に瓜生大傳と云者中には否々軍の勝負は勢の多少に寄べからず爰に馳散し彼處に現はれ攻向らば爭か破らずと云事有間じと大傳が勸めに因て大將鵜野相摸房瓜生大傳を始め手下の賊徒二百人我も〳〵と牟禮川へ忍び押寄たり扨越後勢は今日の合戰に打勝海尻を始め千五百餘級の首を得悅ぶ事限り無是に依て酒宴を催し大將長尾爲景入道は大に醉て前後も知ず臥居たりしに夜半子の刻頃八方より鬨を作り鵜野瓜生を始として切込ければ何かは以て堪るべき越後勢上を下へと騷動す此時長尾入道醉臥居けるを郎等助起し漸々馬に乘ける處へ瓜生大傳馳來り大太刀を以て切て懸り傍成郎等を切倒し爲景入道を馬より引落し首搔切て大音揚越後大守爲景を瓜生大傳討取たりと呼はれば是を聞て越後勢一支も無敗走するを散々に追討するに直江園右衞門甘粕攝津守柿崎源太郞等主人と共に死せんと思ひ〳〵に取て返し花々しく討死す賊將鵜野相摸房瓜生大傳長尾爲景が首を取大に悅び各々分捕して勝鬨を揚徐々と住家に引取ける惜哉越後勢勝矜りたる爲に賊徒に打敗られし耳ならず大將爲景迄討死なせし事所謂冑の緒を締るを忘れたるなり

の如く屢々敵味方戦ひを成と雖も勝負分ず是味方に能軍師なき故なり三千の兵を以て成るべき城も軍師の智略に因ては三百人にして能保つべし是皆天の時地の利を知て臨機の掛引に據處なり然れば何卒能軍師を得給はん事緊要なりと申ければ晴信熟々聞て誠に此儀望むと雖も未其軍師を得ずと云時飯富兵部席を進んで申けるは爰に一人の軍師有願くは此人を用ひ給へと晴信夫は何と申者ぞと尋給ふに兵部答へて然ば三河の國牛窪の住人山本勘助と申者にて城取繩張を始め孫呉が兵儀に達し誠に希代の軍師なりと云を聞て晴信夫は先達て我が姉婿今川義元に對面せし不具者か飯富然候傳へ聞楠正成は五尺に足ぬ小男なる由強ち身の不具に寄べからず此勘介未時を得ずして菴原安房守宅に寄食す是を用ひ給はゞ必ず全き功有んと勸ければ晴信暫時打案じゝが然らば其方宜に計ひ候へと有ければ飯富承はり小山田備中守を使者として山本を招がれける時に勘介心中に武田晴信は父の信虎を廢去し既に天下の人口に懸し人成ば我が仕べき主君に非ずと思ひ再三辭退に及けれ共備中守種々言葉を盡し利を分て勸ける故止事を得ず然らば先晴信公へ御目見の上にて奉公の約束致すべしとて甲府へ赴きける故晴信は吉日良辰を撰んで勘介に對面有に勘介は態と我器量を隱し古き麻上下を着し短き脇差を差て白洲より椽側に這上れば晴信中央に有て殊更に足抔延し其擧動大將の行跡に非ず勘介晴信の体相を見に色白くして鼻高く兩眼盈にして光星の如く自然と備りたる勇智の大將なり勘介謹んで頭を下る時に晴信

指揮させ其身は遊君を集め日夜酒宴をなし舞歌ふて樂みける處に越後勢先敗の恥辱を雪んと彼が油斷を見濟し喚き叫んで攻入ける故賊將相摸房を始め瓜生大傳大に周章鞅掌ける其上大將爲景討死せし事成ば越後勢は中々寄來事有間じと思し處成ば是は何れの敵ならんと騷動爲事大方ならず素より集り勢の事成ば一支も支得ず右往左往に敗走す猿松丸是を見て敵は色來ぞ此虛を拔さず駈破れと烈敷下知を傳るにぞ我も〳〵と敵中に切て入思ひ〳〵に高名す瓜生大傳は踏止り〳〵勇を振ひ戰ながら敵は小勢成ぞ大返に返し合せよと下知すれ共耳にも入ず我先にと迯失たり大傳强勇なりと雖も只一人大勢に取卷れ遂に馬場金彌に生捕れ大將相摸房は柿崎與五郎に討れたり是に因て長尾猿松丸は思ひの儘に打勝諸將を引具して歸陣有先瓜生大傳は父の敵成ば庭前に引据自ら首を打落し父の亡靈に手向て後諸將を招き申されけるは纔一時にさしも手强き敵兵を切靡け父の仇を報せし事我がなせし處に非ず是皆各々の武功に據處なりとて夫々に感狀を賜り其上杯盞を擧て其功を賞美有りければ皆々其意を感じけり扨猿松丸夫より父の家督を繼元服して長尾太郎景虎と名乘るゝ此時甲府には武田大膳大夫晴信有て村上小笠原諏訪勢と日々の合戰止時なく然るに天文十三年元朝晴信には諸將の年賀を受畢て後老臣板垣駿河守飯富兵部少輔甘利備前守を呼出し扨も數年村上諏訪小笠原三家と戰ひ挑むと雖も未一家をも討滅を得ず如何して此敵を亡し國家を安んずべきや各々良策も有ば我に敎へよと申されけるに板垣進み出仰

しかば今は止事を得ず承知の答へに及びける是に依て再び目見えの事を申せしに晴信聞て大に悦び此度は威儀を糺し禮を盡して勘介に對面せられ種々饗應有ければ勘介謹んで某し元より民家に育ち無才無能成共幸ひに用ひ給はゞ君の爲に力を盡さんとて主從の杯盞を成其後晴信に向ひ岩尾の城主眞田幸隆は定て君能用給ふらん合戰の時は如何成奇計を回し候やと問晴信答へて然ばとよ其眞田は右左我命に從はず却て我を輕んじ言語同斷の曲者なり故に罰せんと思へ共隙無が儘に捨置たり其方を得たる事こそ幸ひ先幸隆を征伐せんと大に怒申されしかば山本案に相違し是は如何成事ぞや眞田幸隆が大才上は天文下は地の利に通じ謀畧は七書の奥義を明かにし秘術計畧皆是を業とす斯る軍師の有乍ら用ひ給ずして下賤成某しを嘉せらるゝは何事ぞや最近を捨て遠に走るに似たり早々眞田を迎へ軍慮を共に計せ給ふべし何事有て然様に眞田と不和に成せ給ひしやと申せばさしもの晴信此返答に詰りて言葉なく赤面し指俯向暫時く思案されたりしが漸々答へらるゝ樣誠に軍師の言葉理に當れり何卒再び幸隆我が爲に力を盡す樣其方を頼むなりと云れければ山本然らば某し岩尾へ立越て説諭仕つらんとて急ぎ岩尾へ赴きけり此時幸隆が家室幷に妾共に懷妊有天文十二年六月家室安産男子出生せしにより幸隆を始め皆々大に悦び童名を德太郎と號く是後に眞田兵部丞昌輝と名乘しは此人なり扨又同年七月十一日妾出産す是も男子にして胎内に居る事十三ヶ月色艶迄赤く他の子より大く幸隆悦び取上見れば顏に七ツの黑

之を見て汝味方と成て我を助よと而已仰ければ勘介謹んで其御答は追々申上べし今日は先御目見え仕つり有難き由を申退出す或人云軍師を得給ふに斯る体裁を致されし事如何んと問ば彼平親王將門俵藤太秀鄕を味方に招れし時秀鄕將門の器量を探らん爲來りしに將門餘りの嬉さ故髮を片手に持乍ら對面致されしとかや秀鄕是を見て斯る周章たる大將に與し詮無事とて是より貞盛に味方致しけるとかや斯樣の例し有故晴信態と斯る体裁にして山本に對面有しとなり誠に遠計良智の大將と申すべし

第十二　山本勘介眞田を勸むる事幷山本眞田を說事

斯て山本勘助は晴信に見參せし後小山田の屋舖へ歸りしに備中守何卒勘介を晴信に隨身させんと思ひ厚く待遇し貴殿晴信公に隨身有に於ては四海を切隨へ萬民を安んじ平天下の大功必ず成んと申ければ山本申は賤劣某しを斯饗應給ひ其上軍師に爲んとの事未熟の某し存じも寄ぬ處なり又恐れながら晴信公の御相貌奇有と雖ども先は四海を治るの器に有まじ然れ共幕下に眞田幸隆と云名士あり乍ら何故是を用ひ給はざる哉能之を用ひ給はゞ自身又晴信公の爲に犬馬の勞を盡すべし然すれば天下を掌握せられん事必ずなしとも申されまじと聞て備中守増々感じ然ば其幸隆が事は我等も然樣存ずるにより貴殿と倶に晴信公へ說申さん依て武田家に隨身爲給へと勸め

れたしと申ければ眞田大いに感じ貴殿の諫言骨髓に徹したり全く此幸隆晴信公を恨み憤ほるに非ず何卒して天下に英名を揚させんと思ふ故なり然し今度貴殿の勸なくば眞田も埋木と成んを盲龜の再び浮木に着し嬉しさよと大きに悅び最前より申せし事は皆僞りなり常々晴信公の行跡を聞て涙を落さぬ日もなかりしが頃日越後の大守長尾爲景入道賊徒の爲に討れしを其子猿松丸纔か十三歲にして父の仇を報じ家督相續して長尾太郎景虎と改名す是こそ古今の强勇天下に英名を轟かし晴信公と首きを爭ふ相手成べし後世恐るべし〳〵悲哀は晴信公の行跡と云て又落淚數刻に及けれども頓て幸隆承知しければ山本喜悅何卒甲府へ來られ晴信公を助け忠を盡し名將に仕立られよと呉々賴み置山本勘介は甲府へ歸りける

眞田幸隆甲府へ赴く事幷筧十兵衞眞田に仕る事

扨も山本勘助は眞田幸隆が奥意を知篤と說得て甲府へ歸り此趣きを晴信に申述ければ晴信大に悅び汝が計ひに因て我圖らずも二人の軍師を得たり是劉玄德の臥龍鳳雛二人を得られしに似たりとて晴の一字を山本に給はり晴幸と名乘せ百貫の地を宛行はる此時傍らに原加賀守昌俊默然として居たりしが晴信に向ひ勘助未是ぞと云功勞も無に斯樣の高祿を與へ給ふは何事ぞ是一家中不和の基成べし早々祿を取上追出し給ふべし其故如何と成は今川家にさへ用ひ給はぬ勘介當家

痣有眼の光星の如く成長せば古今の勇士共成べき人相なり童名を與三郎と號す是後に其名を四海に轟かせし眞田安房守昌幸とて諸葛孔明共仰れ眞田左衛門佐幸村が父なり斯る所へ山本勘介來れりと告ければ幸隆大に悦び急ぎ對面す勘介は下座に着て禮を陳る時幸隆是へと申ければ山本謹んで下賤の身として尊席に上る事御免有べし其故は是私しに有ず主命成ば是非なき處なりと申ければ幸隆是を聞て貴殿主命とは誰を主人と頼れしやと問山本答て扨は未御存じなきや甲府の大守武田大膳大夫晴信公に隨身仕つると云幸隆心に悦び勘介隨身せば武田再び大功を成んと思ひけるを押秘し打笑つて山本氏の器量を以て晴信公に隨身とは如何なる事ぞ既に父信虎公を廢去し夫を恥ざる愚鈍者貴殿も知るゝ通此眞田は武田家數代の幕下たりと雖も見限り果て今此仕合せなり定て貴殿の入來は晴信に勸俄かに輕薄を以て此眞田を呼寄んとの事成べけれど不德不孝の主人の祿を食ふ眞田成と思はるゝかと申ければ勘介も理に伏し暫時く言葉もなく眞田の顏を熟視居たるに兩眼より涙を破落〳〵と零けるを見て勘介心に悦び御一言理に當るに似たれ共能思ひ給へ貴殿の御先祖海野小太郎幸氏より數代武田家の旗下と成假令晴信公惡にもせよ是を見限るは臣たる道に背くべし古へ唐土の臣下比微氏の紂に於るが如き不道成君にも忠を盡すは臣の道なり然ながら父を廢去せらるゝは子の道に非ずと雖も是板垣甘利の老臣等主家を大切と思ひ致せる處なれば何卒貴殿の怒を止晴信公に忠を盡し君々たらず共臣々たるの道を盡さ

師の詞とも覺えず長尾景虎如何なる者ぞ此晴信が目には蠅も同樣なり何ぞ我に爭ふの器有んやと高慢成体に見えければ幸隆心中に危ぶめども押返して詞も出さず先其日は退出したりしが誠に幸隆の眼力後にぞ思ひ當りける斯りし程に幸隆は先祖より隨身の武田家故所詮是非無事と思ひ晴信へ無二の忠義を盡しけり扨又原大隅守病死し加賀守昌俊家督を相續しけるに筧十兵衞と云者先達て加賀美の城落城の時城門を打破りし大功有共故大隅守敢て是を賞せず其儘に打過けるを筧大いに恨みけれ共爲べき樣なく快よからず居たりしが同じ家中に正木藤馬と云る者の姉を大隅守妾とす依て弟成ば皆人藤馬に諂諛けれ共筧は強勇成者故却て正木を輕しめ名を呼ず馬鹿〳〵と呼けるを藤馬聞て大いに怒大隅守に是を告るを大隅守扨々其方達は愚痴成事を云者哉然樣成事を恨なんより戰場に於て功を爭ふべしとて聞流しにて置れける大隅守病死の後家督加賀守昌俊に正木藤馬媚諂らひ兄弟の如く交りければ幸ひと思ひ筧が事を讒して村上勢と心を合せ欺り討んと計などと申ける故心淺き昌俊誠と思ひ筧を害せんと催しけるを十兵衞に告る者有て是を聞大いに怒藤馬が退出を待請門外にて一刀に切殺し行方も知ず落失たり是より筧信州へ立越岩尾の城主眞田幸隆に仕へ無二の忠臣なり則ち孫有難波合戰の時筧十兵衞と名乘て只一騎家康公を追駈鎗を附しは是なり誠に眞田が深智恐るべき謀慮なりと皆人感じけるとぞ

に於て高祿を與へらるれば世の人甲府には武士なき故斯樣の不具者を抱しなどゝ笑はれん事口惜かるべしと云ければ晴信莞爾と笑ひ汝が不審道理なれ共我此度勘介を抱しは全く一朝一夕の事に非ず我以前勝千代たりし頃より成長の上は四海を掌握せん事を望み小山田備中守と心を合せ國々の英勇を招き我が旗下に從へんと思ひし故三州牛窪へ立越山本勘介とは疾より主從の約を成り勘介爭か駿府に止らんやと云れしかば原加賀守大いに驚き誠に君の大才某しの及ぶ處に有ずとて退出致しける是山本晴幸豫て支る者有ん事を計りし故晴信へ支る者有ば斯樣々々に申させ給へと密かに申置し處とかや然ば山本が先見を以て原加賀守が晴信を大に恐れ鬼神も知ざる謀略なりと感じけること道理なれ扨も眞田彈正忠幸隆は山本が扱ひに依て甲府へ參勤し晴信に謁しければ晴信大に悅び眞田を請じ申されしけるは我愚昧にして忠臣を知ず己が我意を以て良臣を失はんとせり幸ひに我が過失を赦し是より國家を補け四海を治るの籌策を運さん事を望むなり幸隆宜く晴幸と俱に圖られよと申されければ眞田熟々聞て言語は飾安く心實は飾難し君誠に天下を併呑し萬民を安じ將軍職に昇んと思ひ給ふか晴信點頭き云にや及ぶ今汝と山本二人の軍師有何條向ふ處破らずと云事有んや眞田是を聞て勘介は其器に當る共某し何ぞ其器に當らん定て君にも聞給はん今度越後の大守長尾爲景賊徒の爲に亡しを其子猿松丸父の仇を討て家を繼恐らくは此人智勇の大將成ん某し甚だ是を恐る君御油斷有べからずと云晴信冷笑ひ是は守

城を離る事一里ばかり小室口にぞ備ける然るに逸り切たる甲州勢是を見るより鬨を作り無二無三に攻懸に小田井方は豫て期したる事成は少しも動せず先手五百餘騎を從へ朝比奈善三郎は甘利蘆田の三千餘騎備へし中へ切て入東西南北へ駈通り散々に駈立ければ甘利蘆田大に敗して引退くを二陣の飯富兵部少輔平原河内守三千餘騎にて入代るに朝比奈は後陣の佐田長順と入替り佐田は直樣飯富平原と火花を散して戰ひしが飯富方の家臣竹本武兵衛と云者鐵砲の達人にて楯の陰より狙ひ澄して佐田長順を打たりけるに何かは以て堪べき長順胸板を打拔れ馬より眞逆樣に落けるを竹本武兵衛鐵砲投捨走寄て首を取然る所に一人の大將紫裾濃の鎧に鍬方打たる兜を着し四尺三寸の大太刀を拔翳し金覆輪の鞍置たる荒駒に打乘三千餘騎を前後左右に備へ叢群立し甲州勢の中へ面も振ず切て入小田井の城主小田井又六郎とは我が事なりと名乘忽ち馬武者三騎切て落し猶も勇を振つて薙立ければ飯富平原も駈立られ後陣へ雪頽掛に板垣駿河守望月伊豫守入代り戰ふを小田井大音揚我今日は是非晴信の首を見ずんば引べからず進め〱と下知しながら十字に驅拔巴の字に廻り終に旗頭の備も突破り本陣に近付ければ武田菱の旗遙か彼方に見えしにぞ小田井大に悦び那こそ晴信の本陣なれ先踏破りて晴信の首を取と獅子奮迅の如く眞先に駈入ければ難無武田勢を切散し本陣に打入たり然れ共小田井勢は今朝よりの戰ひに勞れ共今武田菱の旗を見て射れ共突共事ともせず爰を専途と切結び二千餘騎の勢今は僅か五百餘人

第十二　信州小田井の城合戰の事并眞田幸隆妙計の事

武田大膳大夫晴信は山本勘助晴幸眞田彈正忠幸隆の兩人を得て悦ぶ事限り無前々より爭ひたる信州諏訪を亡さんと天文十三年十一月中旬其勢八千餘騎を率て信州に發向す蘆田下野守を始として小室内山岩尾前山依治平原望月等未だ戰はざるに我も〳〵と降參して晴信の旗下に屬する者擧て數へ難し是に依て晴信の威勢遠近に震ひ皆々恐ずと云者なし爰に碓氷峠の此方輕井澤より平尾岩田村への通路小室通の追分に小田井の城と云有此城主小田井又六郎信蔭舍弟次郎左衞門蔭利と云此者而已武田家に隨はず然に依て每度武田家より降參致べき由を申されけれ共左右是を拒に依て近國の見懲しに先此小田井を攻亡さんと同年極月十八日降參の兵を合せて一萬五千餘騎先陣は甘利備前守蘆田下野守二陣は飯富兵部少輔平原河内守三陣は板垣駿河守望月伊豆守中軍は大膳大夫晴信小幡山城守を前に備へ右には山本勘介晴幸左には眞田彈正忠幸隆後陣は武田孫六信連工藤櫻井淺利加賀美等我も〳〵と備を立打立たり小田井又六郎是を聞元來晴信諏訪家の高恩を請たる事莫大なるを何ぞや今是を討んとは斯る不義不道の晴信に從はんや假令骸骨は此土に曝す共後世に惡名は殘すまじ然し居ながら敵を待んより半途に出て戰はんとて舍弟次郎左衞門を城に殘し其身は井田藤平森山九郎朝比奈喜三郎佐田長順等を率る其勢三千餘

兼光が打たる太刀を當座の褒美に與ける晴信既に小田井を攻落し城代を置て甲府へ歸陣したりけり

武田諏訪兩家和睦の事并頼茂主從誅戮の事

扨も眞田彈正忠幸隆奇計を以て易々と小田井の城を乘取ければ皆人始て幸隆の大才を知たり爰に信州の住人室賀入道圓達丸子三左衛門矢澤修理大夫根津宮左衛門武石民部之助小泉又市とて大剛の者六家諏訪頼茂の旗下にして此度武田晴信一戰に小田井を亡し威を隣國に振は由本眞田兩士方を盡す故猶諏訪をも押倒さんと計るに頼茂も又武田を亡し諏訪家の長久を祈らんと甲府の間を窺ひ居たり眞田幸隆此由を聞て諏訪家を亡さんには先室賀丸子矢澤根津武石小泉の六家を謀らば諏訪家を討に易かるべしと密かに根津左兵衛靑木喜一三好權藏三人を諏訪の領内に入込せ室賀根津武石小泉矢澤丸子の六家は武田方に心を寄せ主家を押領せんと計るなどと流言させければ頼茂が目明し是を聞て主人に斯と告しにより頼茂大いに仰天し早々堀左馬之助を呼で此事を語り如何せんと有ければ左馬之助夫は最易き事なり六家敵に心を寄るならば何氣無体に彼等を招き力者を席上に隱し置相圖を定て六家一人も殘らず討取禍ひの根を絶て其後武田と有無の合戰然るべしと申ければ頼茂道理とて六家を招きけるに此事如何してか六家に知する者有

に打なされ其餘の者皆淺手深手を負ぬは無死生を忘れて勇を振ひ本陣深く切入しに是は如何に本陣には大將なく左右に山本勘介晴幸原能登守友種三千餘騎整々と備たり小田井又六郎は案に相違し呆然として立たる處へ最前打散したる武田勢後の方より鬨の聲を揚ひた〳〵と攻懸れば前よりは山本原淺利櫻井加賀美の新手鬨を作て揉立るに勞れ果たる小田井勢途方を失ひ猶豫折柄又平尾岩田村の方より武田菱の旗を押立武田大膳大夫晴信眞田幸隆武田孫六信連三千餘の勢にて鬨の聲を合せ攻詰十重二十重に取籠ければ小田井又六郎呆れ果口惜や敵の謀計に落入たり然共何程の事か有んと此方を破り彼處を砕き出んとすれ共敵は目に餘る大軍なれば出可樣も見えざる處眞田の郎黨相木森之助小田井を目懸切て懸に又六郎も心得たりと渡り合兩人劣ぬ勇士にて暫し勝負も見えざりしが又六郎は數度の戰ひに疲し故終に相木に討れけり是に依て小田井勢朝比奈善三郎森山九郎飯田藤平等一足も引ず討死す依て甲府勢は直樣小田井の城へ押寄たり然る所に大手の門を開て別府治部左衛門城將小田井次郎右衛門が首に采配を添持出て晴信の前へ持參せしかば晴信始め諸將大いに驚き晴信幸隆に向ひ是は如何成る謀計を以て易々と城を乘取しやと云れければ眞田莞爾と打笑ひ軍は敵の不意を討に利有某し君と平尾の方へ廻し時此三人に申付早城將は討取城は我手に入置しと申けるに板垣甘利を始め各々感ぬ者は無りける扨も此度さしも勇成小田井又六郎を討取たる相木森之助の働き古今無双なりと晴信大に感られ備前

非ず然らば今より互ひに和議を調へ交りを厚うすべしと申送りければ頼茂諸將を集て評議なしに左馬之助申けるは數年晴信と勝敗を爭ふと雖も未勝負を決せずして士卒共に勞合戰止時無れば萬民塗炭の苦しみに伏然らば此度和睦して武田家と交りを深くし給ふ時は當家の長久是に過す且又晴信眞田山本の兩士を得てより戰ふ毎に勝すと云事無殊に當家の幕下に在し者近頃過半武田に仕へ候へば此度の和議幸ひたるべく候と勸めしにより頼茂異議無和睦を調へ所領の境は萬木を限りとして契約し終に和を結びける是に依て諏訪頼茂甲府に赴き此度の歡喜を晴信へ申ける頼茂は淺智の人なれば此度の和議を誠と思ひ一ケ月の内に三度迄甲府へ參られ武田家にても種々に饗應有三度目の節待遇とて大藏太夫に申付能を興行させられける武田大膳大夫晴信の傍邊には板垣駿河守甘利備前守山本勘介飯富原跡部淺利を始め列座して見物す諏訪頼茂方には細川頼母小栗善彌服部三吾堀與膳を始め僅か十人に過ず頓て八嶋の能始りければ頼茂餘念なく見物して居らるゝ体を見濟し勘介萩原彌右衛門に目配せしければ彌右衛門心得衝と立て用有氣に頼茂の傍らを通ると見えしが腰刀を拔手も見せず肩先より乳の下迄切下アッと云て倒るゝ所を疊掛て討取たり是を見て頼茂の郎等細川頼母小栗服部堀を始め大いに驚きしが我も／＼と晴信を目掛主人の復讐と切て懸けれ共板垣甘利小山田等に支障られ悉皆く討死す是偏に山本勘助の計りし所なり是等の間に頼茂の郎等青木太兵衛は手早く主人の首を奪此場を逃去出家して

ければ各々是を聞て大いに驚き是は武田家反間の謀事成ん然れ共頼茂愚將にして知る事なく全く我々を亡さんとす諏訪の家運此時に谷つたりいざや身を遁て武田家に降らんと室賀丸子矢澤根津武石小泉の六人は手勢七百餘騎を引具し武田家にぞ降りける此事頼茂方へ聞えければ大に怒て逃せし事の殘念さよと愈々誠に恐れける愚將の程ぞ是非もなし頃は天文十九年正月八日の事なりしが甲府には專ぱら諏訪家を亡さんと評議取々成處に信州諏訪より六家の面々七百餘騎を引具し武田家に降參の由を申入ければ晴信山本勘介を呼て此事如何にと尋られしに勘介大に不審し室賀と云丸子と云諏訪家無二の忠臣なり然るを俄に降參する事心得難し若や謀計にも有んかと眉を顰ければ眞田傍邊に在て大に笑ひ我が謀計既に成り諏訪家の滅亡近に有と申ければ晴信山本共に愕然て其故を尋しに幸隆然ば諏訪家無二の忠臣たる六家某し此者共を前に失はんと思ひ根津左兵衛青山喜市三好權藏等を以て敵地に流言なさせしに頼茂愚にして此六家を亡さんとす然に依て此者共身を遁んと思ひ降參せしなり必ず怪み給ふ事勿れと申せしかば勘介大に感じ眞田殿斯る大功を立給はゞ勘介又計略を運らさんとて其後晴信に一計を勸めければ晴信早速跡部左内を以て頼茂方へ申送られけるは數年諏訪家と武田家矛盾に及と雖も元來頼茂と晴信とに於て更に恨無且又晴信の爲には正く伯母聟にして近き一家たり尤も父信虎未和議を調へざる内に晴信家督相續す依て止事を得ず合戰を挑しと雖も筋無事に士卒を苦むる事大將の本意に

が數刻の戰ひに多宮齋宮守口左衛門を始め討死して漸く五百餘人ばかり殘りたり大將祝も今は是迄なりと難波源左衛門越谷傳兵衛伊奈半兵衛等を左右に從へ眞圓に備へ甲州勢の眞中へ面も振ず突て入縱横無碍に駈破り駈通り七八度揉合しが伊奈半兵衛は下山伊勢守と組で差違へ是を始めとして一足も引ず皆々討死す其間に大將祝左馬之助は普交寺に馳入腹搔切て失たりけり甲州方も下山伊勢守を始めとして五百餘人ぞ討れける然其伊奈勢を破り祝難波諏訪伊奈越谷曲淵を始め凡そ七百餘騎の首を得て諏訪の城を乘取勝鬨を作りて甲府へ歸陣しける此軍散じての後晴信は彼頼茂の息女今年十四歲に成容顏美麗なる事世にも稀成聞え有ければ是を妾にせんと云れけるを板垣甘利大に諫め女成共敵の胤御無用なりと申けるを勘介聞て否々今此息女を妾と成給ひ男子出生も有ば諏訪家相續の事も有んかと彼家に殘りし諸士共歸伏致すべしと申ければ晴信終に頼茂が息女を妾と成し最も寵愛厚かりけり然ば後晴信の一子伊奈四郎勝頼と云しは此息女の腹に出生有し男子なり扨も此時小笠原右京大夫長時木曾左馬之頭義昌は數度の戰ひに討負しかば何卒武田家と有無の一戰を遂んと長澤兵部を先陣となし八千餘騎を率ゐ鹽尻峠を打越て出張す又上田口へは伊奈新九郎武重三千餘騎にて陣取たり此由甲府へ聞えければ晴信公聞給ひ先甲府を出馬わつて諏訪に到り當所の城主小山田備中守が城に入て手分を定め伊奈新九郎の手は板垣駿河守眞田彈正忠五千餘騎にて向はせ自身は鹽尻峠に向ふに付相隨ふ人々には甘利備

皆空と改め近江國信樂に遁れ庵を結びて一生道心堅固に暮しけるとなり

第十四　祝左馬之助自害の事幷鹽尻峠合戰の事

然程に諏訪賴茂は山本勘介が謀計に陷入甲府に於て討れければ諏訪家の者共大に憤ほり卒や主の敵き武田晴信を打亡さんと祝左馬之助を大將として難波源左衛門多宮齊宮守口左衛門越谷傳兵衛曲淵才次郎諏訪喜右衛門伊奈半兵衛同久松を始め三千餘騎馳集り是非とも此鬱憤を散せんと逸りける晴信此由を聞小賢しき者共一人も殘らず討取とて舍弟左馬之助信繁に板垣駿河守望月若狹守下山伊勢守を添其勢五千餘騎甲府を打立信州諏訪へと押寄ける此時伊奈勢は甲州勢押寄ると聞て敵を城下に引寄ては叶ふまじ中途に出て戰はんとて尾河湯脇上諏訪を打越て普文寺に待掛たり甲州勢は花原を打過宮川安國寺村を右手に見て細窪を越普文寺近く押寄る伊奈勢は是を見て少しも猶豫なく無二無三に切入射れ共突共厭はゞこそ思ひ切たる事なれば今を最期と突廻るに流石の甲州勢も散々に突破られ四五町ばかり引退を武田左馬之助大音揚如何に伊奈勢勇を振ふ共主人を討れし殘卒何程の事か有ん引包で攻立よ一人も殘らず討取と鞍上に衝立上り下知爲は板垣望月下山我も／＼と取て返し伊奈勢を中に包て攻立る然共最期と思ひ詰たる伊奈勢成ば少しも屈せず東西南北に駈拔千騎が一騎と成迄も引な引じと恥しめ合勵まし叫んで戰ひし

板垣信形伏勢に陥る事并眞田信綱初陣の事

然程に小笠原長時木曾義昌の兩將山本勘介が計略に掛り大に敗軍すると雖も伊奈新九郎の陣中は靜り返て見えたりしに陣中俄に騷動し申の下刻には悉皆く引拂ひける是に向ひし板垣は眞田に向ひ今井奈勢悉皆く引退く故某し追懸て見んと申ければ眞田聞て只今俄に引取事不審なり是を追なば必ず敵の計策に陥入べし無用／＼と制しけるを板垣今山本勘介既に木曾小笠原の大敵をだに討破るに是等の小敵假令謀計有共何ぞ恐るゝに足ん頓て敵の首を並て見せ申さんと云ながら荻原與三右衛門同次郎三郎小熊備前守八木原新藏成瀨又左衛門古川宮内山本六郎兵衛を始め三千餘騎を引具し眞一文字に追懸たり是を見て伊奈新九郎は取て返し後殿を成敵を侮る体にて徐々と引て行にぞ大剛の板垣成が自ら下知して眞田は此板垣が功を嫉で敵に計略有と雖も小笠原木曾の破を聞て何ぞ計略を成間あらんや續や者共と揉に揉で追懸たりしに日既に暮んとする時毒蔽ひ朦々として物の間色も分ざるに伊奈勢十分に敵を僞引時分は宜ぞと相圖の太鼓を鳴すと其儘取て返し大に戰ふを板垣少しも猶豫ず眞先懸て敵兵を切倒し勢ひに乘じて薙廻る此時伊奈勢又々相圖と覺しく貝を吹立て爰より三百人彼處より二百人と八方より伏勢起り立板垣を中に取籠鐵炮を連發しに打立ければさながら闇夜の如くにて敵味方も分ず矢庭に板垣が長臣小

中守諸角豐後守原加賀守父は晴信の旗本右は栗原左衞門尉穴山伊豆守左は小山田左兵衞武田左馬之助後陣は日向大和守小宮山丹後守勝沼入道今川伊勢守長坂左衞門尉逸見左京南部石見守惣軍一萬五千餘騎搗尻峠に打向ふ敵兵木曾小笠原の者共は此度こそ十死一生の合戰せんと思ひ定し事成ば甲州勢の旗を見るや否や無二無三に切て掛先備へ甘利諸角の兩將此處を專途と戰ひしが叶ひ難くて引退くを原加賀守入代り散々に相戰ふ然共敵兵強くして味方色めくを見て晴信の右備栗原穴山の兩將横合より揉立しかば敵兵浮足に成て長時の旗本へ雪頽掛るに甲州勢大に氣を得てすはや敵は色めくぞ此機を外さず討取と甘利諸角原栗原穴山等追立〳〵進ければ小笠原長時大に焦立腹黑者共の有樣かな返せ〳〵と下知しければ長澤兵部荒尾新兵衞吳服式部を始め取て返し兩陣互に入亂れ火水に成て戰ひければ血は流れて淵を成骸は積で丘と成然る處に小山田左兵衞尉武田左馬之助の兩將は山手より裏道を傳ひ後陣に備し木曾義昌が陣に突入し故木曾勢思ひも寄ぬ事故ば此勢ひに駈破られ裏崩れして敗走す小笠原勢も是を見て大に驚きすは敵は後へ回りしぞ包まれて討るゝなど我勝に引しかば山本時分は宜ぞと下知爲ば小宮山丹後守勝沼入道今井伊勢守長坂左金吾逸見左京南部入道左右の山陰より討出しにぞ何かは以て堪べき木曾小笠原の兩勢散々に逃行處を甲州勢追詰〳〵討取て分捕高名種々なり今日味方へ討取首數六百二十九級とぞ聞えける

武田家へ降參し其年暮て明れば天文十五年三月上旬武田晴信は先信州小縣郡戸倉の城を攻んこて出張の用意有所に眞田幸隆は此節眼病を煩ひ岩尾に歸り療治中なれば陣代として當年十三歳の德太郎信綱を大將となし後見に穴山小左衛門別府治右衛門海野六郎を差添へ逞兵五百餘騎甲府へ遣はしける晴信大に悦びて是を後陣に加へ甲府を立て小諸に着此所にて諸軍の手分を爲に木曾小笠原の押へとして舍弟左馬之助信繁幷に穴山伊豆守小山田左兵衛日向大和守足輕大將には小幡山城守金丸若狹守を始め下諏訪の鹽尻口に向はせ伊奈勢へ板垣駿河守原美濃守を差添諏訪の內花岡小見山輕部に備へさせ飯富兵部少輔小宮山丹後守多田淡路守を添て碓氷峠に向しむ是は上野の國上杉憲政村上に內應有由を聞て斯備へたり晴信の惣軍僅か四千百七十餘人甲府の留主居は武田孫六信連勝沼入道なり斯て敵地に到りければ早速犀川の左手に陣を構先陣の大將栗原左衛門蘆田下野守相木市兵衛川上入道依治尾張之助福澤監物其勢千五百餘人にて戸倉の城に押寄る抑も戸倉の城と云は山城にして後ろの峯高く右に當て池有左りは戸倉の鄕後ろは皆深田なり此度戸倉の城を攻ると聞ば義淸自身後詰せんも量り難しとて甘利備前守横田備中守同彥十郎加藤駿河守千五百餘人にて之に備へ猶又後詰の途中押への爲小山田備中守を脇備として大將晴信公の旗本は曾根七郎兵衛軍師山本勘介安間三左衛門を従へ後ろ備へは諸角豐後守眞田德太郎信綱なり扨又戸倉の城には村上の旗下雲井十郎左衛門を大將とし馬淵權十郎植田民部之助

熊備前守成瀨又左衛門を始め枕を双べて打倒さる板垣勇なりと雖も終に叶ず敗走するを見て伊奈新左衛門武則板垣に切て懸る板垣是非無戰ひしが既に危險見えける處を駿河守が郎等萩原二郎三郎八木原新藏助來つて討死す其間に板垣危險命を助り這々迯行處を又々伊勢森小六牧野清兵衛が三百餘人馳出板垣を中に包で討んとす板垣の郎等古川宮内山上六兵衛兩人血戰して討死す然れ共板垣は圍みを出る事能はず敵斯迄に謀計有とは思はざりしにと云つゝ呆然として立たる處に一手の勢討て出る中より長刀を水車の如く廻し伊奈勢の武士大將森小六を切て落し殘兵を追散して板垣信形を助く信形驚き是を見れば眞田の郎等相木森之助なりければ我眞田殿の謀を用ひず斯敗軍に及びたりとて大に恥眞田が智略を感じける伊奈勢は謀りし如く勝軍して皆々喜悅引取ける扨も板垣駿河守は敵の謀略に陷入頼み切たる郎等四十八人討死し其外士卒は數を知ず僅に其身も危き處を森之助に助られ這々味方の陣に歸り幸隆に面會し今日の合戰に貴殿の助け無んば敵の爲に討るべき者をと恥入たる体にて申ければ眞田然ばこそ其許數年の軍に馴て不覺を取ざれ共今日敵の謀計に當られしは餘り勇に逸り給ひし故なり然共勝敗は平常なく我々も度々斯る不覺を取しなり強ち足下耳の誤りならずと宥ける扨も此度武田勢大に小笠原木曾の兩軍を破り思ひの儘に勝利して村上領の内田中海野戸倉邊の民家に放火して天文十四年六月四日甲府に歸陣す此度も又小笠原家の内塩尻刑部左衛門小曾左馬之助和田志摩守福並舍人を始め

に突入と進むを見て甲州勢の中より緋縅の鎧に淺黄の母衣を懸たる武者大音に、清和天皇の後胤横田備中守が嫡男彦十郎政次なりと名乘彼卯の花縅の鎧を着したる武者に突て懸るを彼の武者莞爾と打笑ひて是は村上義清が臣に鬼神と呼れたる小嶋五郎左衛門虎一なり近寄て見知置とて四尺三寸の大太刀を拔て渡合火花を散して戰ふ有樣双方劣らぬ勇士成ば暫し勝負も見えざりしが横田が焦つて突出す鎗を如何してかに請損じ小嶋は撞と倒るゝを起しも立ず首搔落し味方の陣へ馳入しは又比類無働きなり是に依て村上勢思はず一二段引ける處に樂岩寺右馬之助自身鎗を取て甲府勢を逐遣に三騎突落し喚き叫んで戰ふにぞ大將義清も身を揉で下知をなし我旗本を以て晴信が旗本へ切入晴信が首級を見ずんば有べからず進め〳〵と驅立ければ敵味方鍔を割鎬を削り切先より出る火花は電光石火三時餘りも戰ひしがさしも甲陽に名を得し甘利横田と雖も小は大に敵し難く終に切崩されて二三段引退城の右手成池の中へ追込られ右往左往に成る處を見濟し城中より雲母十郎左衛門馬淵權十郎植田民部之助等城門を開き打て出栗原左衛門が備へ突入ければ栗原大に敗して後陣に扣へし川上入道が備へに雪頽懸れば川上も遂に崩れて相木禰澤平澤が勢共に引立られ甲州勢既に總敗軍に成んとするを見て横田甘利の兩將踏止り此處を破られなば大將の旗本危し日頃の恩を思はゞ討死せよと呼はり〳〵切結び終に兩將共此處にて討死す依て武田勢彌々僞立散々に敗走しければ晴信も今は是迄なり心能最期の一戰せんと來

等惣軍二千餘騎にて楯籠る甲府方栗原蘆田等一番に城際に攻寄早乘入んとする所を城中より一度に弓鐵砲を射出し大木大石を投掛必死に成て防ぎたり此事更科に聞えければ村上義清大に驚き早々後詰せん迚樂岩寺右馬之助小嶋五郎左衛門を先陣として逞兵九千五百餘騎直に打立揉に揉で馳來り甘利備前守横田備中守が千五百餘騎にて備へたる中へ眞一文字に切て入甲府勢豫て期したる事なれ共敵は目に餘る大軍成は何かは以て堪るべき既は敗せんとしけるを横田備中守は陣頭に進み出此戰ひは豫て期したる事なるぞ腹黑びれて笑はれな掛れ進めと下知爲ば我も我もと恥しめ合敵の矢玉を掻潜り突つ突れつ戰ふにぞさしもの村上勢も戰ひ勞て見えにけり

第十五　戸倉合戰山本妙策の事幷眞田勝敗を計る事

扨も武田大膳大夫晴信は戸倉の城を攻落さんと栗原左衛門蘆田下野守相木市兵衛川上入道等を向はせ自身は村上勢の後詰を防がんと横田備中守甘利備前守加藤駿河守を差向しに村上義清大軍にて先陣の大將樂岩寺右馬之助小嶋五郎左衛門が猛勢に味方切破られんとしけるを横田備中守が下知に依て各々取て返し防ぎ戰ひければ勝敗未だ分たざりしに敵兵樂岩寺右馬之助烈敷下知して甲府勢は我地に骸を曝しに來たれり一々首を取て高名せよと呼はり／＼戰ひけるに村上勢の中より卯の花緘しの鎧に鍬方打たる冑を着し朱の采配を打振／＼此處を切崩し晴信が旗本

板垣饗應赤黒を分つ事幷村上義清景虎を頼む事

斯て武田大膳大夫晴信は大敵を一戰に打破り味方は横田備中守甘利備前守の兩將を討せ其他數輩討死したりと雖も敵の首級二千六百餘を討取しは全く山本勘介が妙策なりと大に感じ勝鬨を揚る處へ六文錢の旗を押立長刀の鋒先に首を貫き一隊の軍勢出來しは是眞田が猛將相木森之助なりければ晴信大に驚き汝何とて此處へ來りしぞと尋ねられしに森之助謹んで申けるは眞田幸隆眼病にて打臥居此度の軍に外れ候事を安からず思ひ戶倉更科の地理を熟々思ひ運らし候に味方小勢なれば村上の大軍に一度は切崩され難儀に及び候はん成共山本御陣に在ば戶倉口の裏手を回り義清の旗本へ切入事は心得居べし然る時は村上勢敗走し義清更科へ引返さん仍て我に代りて更科の右手より義清の歸路を討べしとて某しに謀計を申含め候故某し五百餘人を引率して更科の右手に忍び居し處果して義清敗走し城へ逃入んとせしに付打掛りて次將富田備後守を討取罷り歸り候と首を實檢に備へければ是を聞て晴信大に喜悅且驚愕恐る可哉眞田幸隆其身は岩尾に在乍ら當所の勝敗を計る誠に鬼神不思議の才智なりと甚く感じられ夫より甲府へ歸陣されしが此度の合戰に甘利横田が討死を他處に見做たる栗原左衛門川上入道等太だ臆病の至りなり其が爲味方難戰に及び功臣を亡ひし事成ば其罪輕からずとて所領を沒收し其身は追放したりけ

倉丹後守蘆田下野守を左右に備へ勝誇りたる村上勢と火水に成て血戰す此間に山本晴幸は諸角豐後守が三百餘騎を隨へ戶倉口の裏手を回り村上義清か旗本を心ざし馳たりける義清は今甘利横田が首を得て大に悅び此度こそは晴信が首を見る時節到來せりと勇喜悅大いに寬ぎ居たりし所へ山本諸角が三百餘騎どつと喚て切入しかば義清が旗本是は如何にと狼狽廻り上を下へと混亂す山本得たりと縱橫に駈立大將義清を討取んとて總勢五百餘人火水に成て戰ふにぞ村上の旗下散々に亂れしかば義清を討んずものと晴幸は東西に馳廻れど終に廻り逢ずして敵兵百餘騎を討取勝鬨を揚て軍を治めける扨も村上義清は思ひ懸無敗軍して諸卒數多討れしかば大に憤ほり今一度取て返し敗軍の恥辱を雪がんと更科の麓にて馬立直しければ樂岩寺右馬之助富田備後守大谷內匠助總勢五千餘騎踏止り大返しに返して向はんとする處に更科山の裏手なる松の茂みより白地に六文錢の旗を颯と山風に吹靡せ三百騎ばかり討て出で眞田彈正忠幸隆是に在て義清を待と云より疾く大長刀を水車の如く廻して村上勢を薙立富田備後守を一刀に切落し勇を振ふて戰ひしかば此處にも伏兵有と村上勢一支もせず更科へとぞ引入ける然るに幸隆左而已是を追ずして富田備後守が首を長刀に貫き晴信の前に到る是誠の眞田に非ず相木森之助なり幸隆は眼病にて打臥居ると雖も地の利を量り勝敗を知りしは誠に古今の智將と云べきなり

無人々は竊々面目を失ひ竊鼠〳〵と退出し誠に希有なる饗應やと笑ひの種とぞ成にける爰に又村上義清は先達て敗軍の恥辱を雪がんと思ひけれ共我が微勢を以て武田と戰はん事所詮叶ひ難しと種々心を苦しめける所に越後國の大守長尾太郎景虎は父の敵を討てより未だ若年たりと雖も臣下には直江山城守甘粕近江守など云一騎當千の勇士を從へ威を遠近に振ひしかば村上義清は此長尾景虎を賴まんと三木新左衛門を以て景虎に助力の事を依賴入ければ景虎先使者を請じ置長臣直江山城守を呼んで此事如何と評議をせられしに兼續今年十六歲なりけるが暫時思案なし今甲府の武田晴信其勢ひ廣大なり謀臣には山本眞田の兩將有是を恐るゝには非ざれ共元來武田家と何の意趣もなきを今新に敵國を設るも良策に非ず然れ共村上より賴み來るを承知なき時は武田を恐るに似たりと雖も又村上に助力爲可謂なし仍て當國の中に村上家の領分一郡有是を當館に贈る時は如何にも助力成るべき旨仰遣はされ然るべし村上此一郡を當館に送らば味方し給へ是居乍ら國を得る謀計にて候と申ければ景虎大に悅び此事我心に適へりとて其旨三木新左衛門に答られければ三木は立歸り景虎返事の趣きを申せしに義清大に駭然未だ合戰をも爲ざる内に領せし一郡を與へん事思ひも寄ずとて其儘に打捨置れけるにより村上の長臣藥師寺右近之進清三義清に申けるは何故一郡を惜み長尾景虎を賴み給はざるや景虎幼年たりと雖も今天下に晴信に敵すべき人は景虎一人なり故に長尾家を味方とし給ふ時は山本眞田假令智計有共何

り扨も天文十五年は別て數度合戰有しと雖も甲府勢何時も勝利を得ければ皆々勇ますと云事なし殊に板垣駿河守信形は剛勇の大將成ば此上にも甲府勢を何分勵さんと思により廣き假屋を建來る十月六日諸將へ申入度旨有と觸けるに依諸將士我も〳〵と參會なすにぞ信形は亭主の役とて衣服を改め立出式禮畢て後此度各々へ申入事餘の儀に非ず數度合戰に高名せられし方々を饗應仕つり度一同を招待申せしにより今日は平常の例に拘はらず陪臣たりと雖も手柄有人には高座を與へ其優劣を分別申なり銘々恥辱を思ひ給はゞ隨分高名致さるべしとて先座を改めけるに原美濃守飯富虎昌小幡虎盛を始め數度軍功有し人々は皆上座に据晴信の舍弟武田孫六信連今福善九郎跡部大炊之介長坂左衞門を始め貴豪と雖も軍功無人々は眞田が郎等和木森之助筧十兵衞などの下座に居らせける故軍功なき人々は甚だ面目を失なひけり其後饗應も三段に區別上の部は朱椀にて三の膳附中の部は朱椀にて二の膳附下の部は黑椀にて本膳ばかりなり上中の膳部は魚鳥を使ひ結構なり下の部は皆麁末成精進料理を進めければ武田跡部今福長坂を始め大いに赤面して不興氣にぞ見えにける其後信形席上に出て申けるは今日の饗應は斯が事の樣なれ共決て然に非ず數度の合戰に一度も敵の首を取ざる方々は慈悲心深くして後生を大事に懸給ふ故に殺生を好まれざると覺ゆ然樣成人々は平生五戒を保ちて精進し給ふらん其御方に信形魚鳥を與へ破戒をさせんは本意に非ず夫故斯は計らひ候と申ければ軍功有者は一入興を催し賑ふと雖も軍功

早々に御出馬然るべしと申ければ幸隆大いに怒り夫合戦の習ひに何ぞ寒暑節季を厭んや敵の備へなきを討てこそ大功をも成者なり幸隆に於ては甲府の加勢を借ず義清と九死一生の合戦を致さん其故に先達て戸倉城の軍に外れし事殘念さよ汝物云事勿れと大いに怒ける須野原制して必ず無用〳〵村上數度甲府勢に破らるゝと雖も今既に長尾家と和議を調へたれば是迄とは違ふなり必ず輕しめ給ふ事勿れと云ば幸隆大いに怒りて村上義清長尾景虎と和議せしとは大い成僞りなり是味方を恐れしめん爲斯は云するものならん夫を知ずして誠とゝ爲味方の諸卒を惑しむる事其罪赦免難しと云ながら幸隆直と立て須野原を取て押へ鐵の軍扇を以て脊中を續け打に打ければ若狹の脊割て血出る事瀧の如し依て若狹は面目を失ひ其所を退出せり扨も此時村上義清は葛尾に籠り種々と軍議を成處に岩尾の城主幸隆の臣須野原惣左衛門來れりと報ず義清不審乍らも惣左衛門を奥へ請じ其故を尋るに然ば眞田幸隆己れが智に誇り臣下を見る事土芥の如く一昨日幸隆軍議の席に於て某し兄にて候若狹守を自ら鐵扇を以て打据たり兄の恨み骨髓に徹り是迄勵し軍功も水の泡と成今にては幸隆我等兄弟を害せんと計ること扨々殘念至極なり然るに御舘には德を布仁義を專一として能臣を養ひ給ふ由願はくは我々兄弟を不便と思し用ひ給はゞ犬馬の勞を盡さん然し我々未岩尾の城内に在ば暫時く故郷に歸ると僞り城を拔出來りて候若君の御勢三百騎ばかり某しに御借下さらば某しの供廻りに仕立城中に入本丸に火を懸て幸隆が首を得

ぞ恐れん疾く長尾に一郡を與へ味方に附給へと再三諫言けれ共義淸用ひざれば淸三爲べき樣無く退出しける然るに信州岩尾の城主眞田彈正忠幸隆漸々眼病平癒しける處に村上義淸長尾景虎と和議をなして武田家を攻んと計る趣きを聞て大いに驚き呆然として有けるが景虎村上の領する一郡を乞けれ共村上承知せざれば藥師寺淸三再度諫言致しけれ共義淸用ひざる事を聞て大いに悦こび扨又村上の臣下にも恐ろ敷は藥師寺なり我此人を計りて亡さんと種々に智謀を運らしける

第十六　須野原兄弟村上を謀る事幷眞田村上勢を鏖しになす事

然程に眞田彈正忠幸隆は何卒村上勢を欺き藥師寺右近之進を退けんと種々工夫を廻らしける爰に眞田が臣下に須野原若狹守弟惣左衞門とて剛强の者有ける此兩人を幸隆密に招き我何卒村上勢を破らん事を心懸ると雖も義淸が良臣に藥師寺淸三と云智勇の武士有我先此者を退けんと計に手便無如何致して是を害せんやと尋ければ須野原若狹守申けるは是に一ツの謀略有明日斯樣〳〵に計らひ給へと謀計を囁きければ幸隆手を拍て感じ此謀計極めて妙なりとて其翌日幸隆の前へ須野原兄弟を呼如何して村上勢を破らんやと軍議を致しけるに須野原若狹守進み出て申けるは然ば今年も早寸陰に及び候得ば假令自餘の勢を以て攻給ふ共墓々敷事は候間じ何分來春

たり村上勢何れも勝手を知ざれば惣左衛門は何國へ行れしやと不審に思ひ尋る折柄三の曲輪の上より村上勢遥々入來により馳走の爲矢玉少々進上申と云聲諸共四五十挺の鐵砲を連發しに打下しければ藥師寺驚きて見上るに中央には眞田幸隆須野原兄弟穴山別府相木寛海野望月を始め手を拍て大いに笑ひしに藥師寺清野等扨は敵の謀計に陷りしぞ何とかして門を打破り遁れ出んとしけれ共須野原の下部に立出し事なれば然るべき武器も携へざる故門を破る事叶はず右馬之助六郎次郎を始め皆々齒噛を成只鐵砲の的になりて打れけるこそ無慙なれ幸隆は大いに悦び藥師寺清野が首を甲府へ送り事の次第を訴へしかば幸隆が計策により味方一人も損せず敵兵三百餘騎を一人も殘らず討取事抜群なりと晴信を始め聞人舌を振ふて稱しけり扨も此時武田晴信は既に信州征伐の評定ありけれ共今年も最早算へ日なれば來春軍を起さんと評議一決成處へ岩尾より村上勢藥師寺清野を始め三百餘騎の首を送りければ晴信大いに感悦有鎧二領名馬二匹を恩賞として眞田幸隆へ送られける

筧十兵衛虎秀怪力の事并幸隆村上勢火攻の事

扨も村上左衛門督義清は斯る事とは露知ず須野原が首尾を遅しと待處に細作の者追々立歸り此度眞田の郎等須野原兄弟味方に參りしは大い成僞りにして二の城郭まで藥師寺清野を引入鉄砲

る事方寸の内に有若功有ば重く用ひ給へかしと言葉に花を咲せ述けるに義清是を聞て大いに悦び武田家柱礎とも頼むは山本晴幸眞田幸隆なり其一人を亡す妙計俄かに出來る事天より我に勸め給ふ所なり是武田家を滅亡時節到來せり從はずんば有べからずと須野原惣左衛門を大いに待遇されける然るに樂岩寺右馬助は此席に在けるが此樣子を見て夫眞田幸隆は僞りの謀計多し必ず是を誠と仕給ふなと云ば義清大に笑つて須野原の申來る所何條僞はりならんや是こそ天より此義清に命じて眞田幸隆を討せ給ふ處なり見よ岩尾の方へ遣し置たる細作頓て告來るべしと云詞も終らざるに村上方の細作立歸りて申けるは此度眞田幸隆須野原若狹守を席上にて打擲致しければ若狹守無念の体にて我陣へ歸り候と云事を告來りければ義清大いに悅び然ばこそ須野原惣左衛門が降參實なりと云て翌日須野原を呼出し此度其許が降參我能其誠成を知仍て三百餘騎を貸んと云に惣左衛門然ば其三百餘人も尋常の諸卒にては事行はれまじ其故は眞田が臣にも相木森之助筧十兵衛穴山伊勢崎海野別府望月有然れば君の臣下にて一騎當千と聞えし藥師寺右近之進こそ然るべし是を大將として三百騎御借有と申ければ村上道理なりとて藥師寺を大將として足輕頭清野六郎次郎友澄は大力の聞え有を以て是を添られ惣左衛門に備前長光の太刀を與へければ須野原仕澄したりと藥師寺淸野が三百餘人を我が供廻りに仕立葛尾を立て岩尾に歸り割印を渡して城門より二の曲輪內へ到りし時前後の門を鎖し須野原は何國へやらん行方を失ひ

るを悠々と振廻し陣頭に進み出只今の御舉動天晴と見請て候是は村上勢の中にて人にも大剛と呼れたる増尾新藏とは我が事なり聊か技術の程を見給へヤッと云より早く打て懸れば筧は是を聞て呵々と打笑ひ汝知ずや漢土の樊噲我が朝の朝比奈とも力を爭ふ筧十兵衛虎秀なるぞ先汝をも捻首にせんと云ながら増尾が打込棒を掻摑み諸手を懸て曳やと引に増尾も聞ゆる大力成ば双方暫し捻合しがさしもに太き樫の棒も洗箒の如くに捻切たれば増尾は衝と馬乘居筧にむづと引組だり筧は騒がず揉合しが双方聞ゆる大力なれば兩馬も足を立兼て組だる儘に落重なり猶も暫らく揉合中筧の力や優りけん頓て増尾を取て押へ首を掻としけるが何とか思ひけん郎等を呼立手取足取繩をぞ掛たりける然ば村上勢は大剛の勇士一人は討れ一人は生捕れけるを見て殘兵共氣を挫き引揚しかば筧が働きにて其日の軍は止にけり其夜眞田幸隆は諸將を集め何卒樂岩寺を討取んとて手分なし南の方鐘が峯の右手には相木森之助に火藥燒種等を多く用意させ專ら火攻を心掛て伏置次に海野六郎別府治部右衛門に五百人を添左の木立の間に皆鐵砲を用意して伏置又筧十兵衛虎秀の一手は鐘が峯の後にぞ伏置ける斯て穴山小左衛門望月玄蕃が五百人は夜明方に森嶋まで押出して備へたり此時村上勢の大將樂岩寺は昨日の戰ひに保田は討死し増尾は生捕られければ兩腕を取られし如く呆然として在けるが然とて義清の前にて申したる廣言有ば鈍々とは歸られず如何はせんとさしも勇剛の大將たる樂岩寺も少し憶して見えにける所に夜の明る

を以て一人も殘らず討取て候と注進しければ義清大いに仰天なし暫く詞も無りしが頓て岩尾の方を白眼詰惡き族等の擧動哉能も此義清を欺りしな見々我汝の城を踏潰し此恨みを晴さずに置べきかと踊り上〳〵て怒りけるを樂岩寺大いに諫て申す樣必ず然迄に怒り給ふまじ殊に岩尾の如き小城を攻るに御大將の御出馬にも及ぶべからず此度藥師寺が弔ひ軍は此樂岩寺が向ふべし見給へ程なく幸隆が首引提て立歸り候はんと人もなげに申けるを聞傍らより增尾新藏進み出て願くは某しも共に參らんと申ければ義清大いに悅び兩人向はゞ我何ぞ憂んや早々幸隆が首を見すべしとて五千餘騎をぞ授けらる依て兩人早々準備をなし葛尾を立て岩尾へと押寄けるに眞田幸隆は此度村上勢の向ふ事を聞よりも斯こそ有めと先其手配りをなさんとて海野六郞筧十兵衞に五百餘騎を添森嶋の此方に陣を取村上勢の先鋒には左栗三河之助千七百餘騎此所迄押來り双方暫し白眼合て居たりしが眞田方より海野六郞眞先懸て討て出れば村上勢よりも保田多兵衞と名乘て鋒先三尺ばかりの大身の鎗を引提出海野と追つ返しつ戰ひしが保田は聞ゆる大剛の者なれば海野の鎗を刎返し胸板の邊りを鎗の石突にて突たるにより海野は馬より逆樣に落る處を既に鎗にて刺んと爲時一人の武者馳來り急遽に保田多兵衞を引摑み我が鞍壺に引据英やと首を捻切たり海野驚いて是を見れば眞田方に名を得し筧十兵衞なれば敵味方共皆舌を震し恐戰慄誰有て馳向ふ者もなき所に紺糸の鎧に六十四間の星兜を着し樫の木の一丈餘りの棒に鐵の筋金打た

として燃上る樂岩寺右馬之助を始め佐栗諸口井田の軍勢前後の敵に圍れて防ぐ樣こそなかりけり

第十七　樂岩寺佐栗の兩士戰死の事并村上義淸上田原合戰の事

扨も眞田幸隆の謀計に欺かれ樂岩寺右馬之助佐栗三河之助諸口井田の輩ら鐘が峯の難所に包まれ前後左右より攻立られければ村上勢勇なりと雖も出る事能はず鐵砲に打縮められ樂岩寺佐栗諸口井田を始め千五百騎火の中に燒死にたり此趣き甲府へ注進ありしかば皆々大いに勇み立村上が滅亡近きに有定めて此仇を報ぜんと義淸自身岩尾へ向ふべし如何に幸隆智計有共彼大軍に叶ふまじければ大將早々御出馬有て此虛に乘村上が本國迄も征伐有と飯富板垣等勸むるにぞ晴信實にもと同じられ天文十六年丁未八月二日眞田を援んと甲府を出馬され上田原に着陣ある扨又村上義淸は賴み切たる樂岩寺右馬之助佐栗三河之助等又候眞田の爲に討れ以ての外に怒り早々眞田を征伐せんと準備する所に晴信自身上田原に出張しけると聞て敵に義淸が鋒先を侮られん事の口惜さよ其と云も近來味方の將士を多く討せし故なれば此度晴信上田原へ出陣せし事願ふても無幸はひなり我旗本を以て晴信が旗本へ打入快よく有無の一戰を遂べしと云けるに傍らより小沼川舍人進み出去年眞田に討れし藥師寺淸野は勿論當春討れし樂岩寺佐栗は何も一騎

や否や眞田方望月玄蕃が五百餘人一同に鬨を作り討て懸るを村上勢の先陣佐栗三河之助が千騎同じく鬨を合せて懸合せければ望月勇なりと雖も衆寡敵せず散々に逃走るを見て村上勢是に氣を取直し敵は色來ぞ此程の恥辱を雪ぐは此時なり一人も殘さず追討にせよと進みければ眞田方穴山小左衛門入替りて大いに戰ひしが是も叶はず敗走しければ樂岩寺大いに勇み藥師寺保田が弔ひなり此機を外さず幸隆を討取と勢ひ懸て追討す穴山望月は逃迷ひし樣にて岩尾へは歸らず鐘が峰をさして敗走するを樂岩寺は何國迄もと追ひ行けるに佐栗三河之助は樂岩寺に向ひ若此敵を鐘が峯迄追行給ふ時は極めて眞田が謀計に當らん早々引返し給へと止めければ右馬之助聞て實忘れたり岩尾へ引べきを鐘が峯の方へ逃るは一物有恐るべし〳〵と馬を止むる處へ穴山望月取て返し戰ひては走り〳〵ては戰ひ或ひは罵り又は嘲りければ物に堪へぬ樂岩寺は佐栗が諫をも打忘れ無二無三に追行處に鐘が峯の坂中にて一聲の鐵砲響くと其儘峯の後ろより筧十兵衛虎秀眞先に進み五尺六寸の大太刀を打振〳〵五百餘人吻と喚て打出るに村上勢驚破敵の伏勢在ぞと騷動しけるを見て今迄敗せし穴山望月大返しに取て返して筧と供に攻戰ふ村上勢は思ひ寄ざる事なれば散々に切崩され後ろへ歸らんと爲ば左手の岡より海野六郎別府治部右衛門の精兵鐵砲の筒先を揃へ打出すにぞ村上勢又大いに驚き周章狼狽途を失ひ只的に成て死する者數を知ず漸々遁れ歸らんとする者は相木森之助往先へ柴薪を積で燒立るに折しも山風烈しく熖々燒々

三千五百餘人を五手に分正奇の機變を圖り金皷を鳴して攻寄る斯と見るより村上勢は重る恨み有故我先にと打て掛り切ども突ども事ともせず切入〳〵揉立ければ板垣駿河守が郎黨に一騎當千と呼れたる曲淵小左衛門三科肥後守廣瀨鄕右衛門の三人面ても振ず村上勢に突て入東西南北に薙立突立命を惜まず戰ふにぞさしもの村上勢も崩れ掛らんとするを見て村上方原田十郎左衛門八木惣八相野一齋を始めとして曲淵廣瀨三科と鎗を合せ陽に開き陰に閉千變萬化に切結びしが終に曲淵小左衛門は八木惣八を突落し廣瀨鄕左衛門は相野一齋を薙倒し三科肥後守は原田十郎左衛門を討取たり然なきだに亂れ掛りし村上方の先鋒一度に嗵と崩れ立二の見の備へ雪頽掛るに二の見の備も是が爲に押崩され右往左往に敗走す板垣駿河守は能程に敵を追散し其身は人數を纏め味方を離れて悠々と此日討取たる百五六十級の首を實檢して居たりしは誠に不敵に見えたりけり爰に今朝の合戰に討死せし八木惣八が兄に安中一藤太と云者有しが我が弟を闇々と敵に討せし事を殘念に思ひければ猶も斥候の爲に板垣が陣を窺ひ見るに信形味方を離れて今首實檢して居るを見て是は天の與へと大いに喜悦早々陣へ歸り上條織部を談合五百餘人を二手に分旗指物を卷て此方なる藪陰より敵の後へ廻り嗵と鬨を作りて打入しに信形少しも騷がず馬引寄て打跨り僅か百騎ばかりの勢を八方へ下知して戰ひけれども味方を離れし小勢故士卒此處彼處に隔られ信形勇なりと雖も散々に打なされ敵の圍みを出ん樣もなく今は是迄なりと太刀眞甲

當千の勇士にて其節討れたる諸卒は皆々剛勇の者共なり依て今殘る所の人々は未だ指る武功も無左右若手の者共而已多ければ甲州勢の場數を經たる勇士に掛合せん事心元なく其上山本眞田の謀士有ば今軍を出すとも味方捗々しき勝利も之有まじ然爲ば遠慮有て然るべしと眉を顰て申けるに義清大に怒り我此度の合戰は強ち國を爭ふに非ず只管眞田か晴信の首を得ん事を欲するのみ依て此度は勢の多少を論ぜず只我と死を同うせんと思ふ輩らは從ふべしと申されければ逸り雄の若輩共は我も〳〵と馳集りし程に其勢都合七千餘人葛尾の城を首途し榊の道より千曲川を打渡りて上田原に對陣せり武田方にては村上勢の旗の手を見るより眞田幸隆は大將晴信の前に出て申けるは何卒此度の先鋒は某しに仰付られたしと望みけるを晴信心に思はるゝ樣此度義淸出陣の事は全く眞田を惡み有無の合戰を心懸ると見えたれば彼が鋒先必ず猛勇ならん幸隆萬一討死をもせば如何が成んと遠慮を廻らし幸隆は小荷駄を守り候得と有しかば眞田は是非なく後陣にぞ控えける晴信手分を成に先鋒は板垣駿河守二陣は飯富兵部少輔小山田備中守同左兵衛尉武田左馬之助信繁なり其次は晴信の本陣となし右に山本勘介甘利新藏左りに馬場民部少輔内藤修理亮後陣は眞田彈正忠幸隆家嫡源太左衛門信綱相木森之助寛十兵衛望月玄蕃海野六郎八百餘人從ひたり晴信の旗本より五丁下つて原加賀守昌俊三百餘騎物見の如く開て備へを立る是は山本勘介が軍配なり是を眞田家にては締備へと云とかや斯て八月廿四日辰の刻先鋒板垣信形が

以て兜の眞甲を礑と切を晴信も拔合せ二打三打々合しが晴信二三が所負傷を受痿む處を義清付入〳〵切立るにぞ晴信既に討れんと爲處へ相木森之助大長刀を水車の如く廻し義清が乘たる馬の平首へ切付しかば馬は屏風を倒す如く倒る處を森之助續て飛下り義清が首を取んとする折から樂岩寺兵太夫由井惣兵衛尾上九兵衛等懸隔り主人義清を中に圍で引揚るを甲州勢は村上を討取首を搔よと下知しながら何地迄もと追掛たり

村上義清大敗軍の事幷義清景虎を賴む事

然程に村上義清は危險命を諸卒に助られ漸く味方の中へ引退きしが眞田幸隆は村上勢の本道を斷切て義清葛尾に歸らば討て捨んと待懸たり義清は乘替の馬に乘て葛尾指て引行所に白地に六文錢の旗押立て信州岩尾の城主眞田幸隆義清の首を申受ん爲是に待と云ながら眞先に筧十兵衛虎秀大太刀を振切て出れば村上勢此所にても又大いに敗北し本道を塞がれし故葛尾へ歸る事能はず漸々辛き命を助りて猿が馬場の峠を下桑原へ打出夫より古市へ渡りて深山に分入峯へ登り谷へ下りて越後の國へぞ落られける扨も甲州勢は村上義清を一戰に破りけれ共古老の勇將板垣駿河守討死し其外士卒千七百餘人討れたり然共思ふ儘に敵兵を破りしかば勝鬨を揚甲府へ歸陣されたりけり依て此事を聞傳へ降參する人々には伊奈新九郎同新左衛門高坂彈正井上主馬戸倉

に指縣上條織部と戰ふ所に安中一藤太を始め八方より鎗襖を作つて突掛ければ信形數ケ所の疵を蒙り遂に討死なしたりけり村上勢是に氣を得て惣軍一度に取て返し甲州勢に討て懸るに二陣に備へし飯富小山田武田等備へを操出し双方火花を散して戰ひしが名にし負ふ甲州勢の事なれば暫時の中に村上勢を切崩し颯と捲り返せば村上義清は豫て此度こそ九死一生の軍して晴信と勝負を決せんと思ひ居たるに今味方の追返さるゝを見て萌黄縅しの鎧に裾金物繁く打たるを着し金の鍬形の前立の冑を着正宗四尺三寸重代の太刀を佩村雨と名付たる鹿毛成名馬に悠然と打乘て村上天皇の後胤村上左馬頭源義清是に在我と思ん者は義清に從ひ高名せよ今日こそ晴信幸隆の首を見ずんば一寸も引まじと兵士二千餘騎を前後左右に從へ群集立たる甲州勢の中へ無二無三に突入晴信の旗本目掛て驅立る有樣阿修羅王の荒たる如く薙立〳〵馳廻るに勝誇りたる甲州勢も是に近附者無れば難無晴信の旗本に切入大將は何所ぞと見渡す所に股野新兵衛小家喜市早尾多八を始めとして此處ぞ大事と踏止り日頃の恩義に報ゆるは此時なりと村上に切て懸る義清少しも猶豫ず彼の正宗の打たる太刀にて切て回るに鎧兜の嫌ひなく袈裟掛或は車切俎上の瓜を割如く此太刀先に向ふ者一人として命を全うする者なし義清は何卒晴信に出會んと彼方此方と見廻す處に卯の花縅しの鎧に諏訪法性の兜を着て黑き駒の太く逞しきに金覆輪の鞍を置せ紅ゐの厚總懸て打乘たるは是こそ晴信なりと見るよりも義清は眞一文字に馳寄件んの太刀を

立は如何候や承知致し度と申されければ義清然ば晴信は父信虎に優りて軍慮に賢こく其上山本眞田二人の謀士有て軍畧を助るにより尋常の敵に非ず隨分御用心有度と云を聞景虎然ばこそ聞及びたる名將なり我先信州に打出親しく晴信が軍立を窺はんと直江柿崎甘粕を引從へて惣勢六千餘人同年十月九日に春日山を首途して信州に出張し敵地を彼是放火して武威を示されければ此事甲府への注進櫛の歯を引が如し晴信大いに驚き早々諸將を集め評議を成に山本晴幸眞田幸隆の兩人進み出景虎は戰國の龍なり相手に取ては恐べき敵なり景虎に勝たりとて功成ず負る時は大成味方の耻辱なり兎角軍を大切にして負ぬ樣こそ肝要なれ小勢成とて侮るべからず勇は項羽に勝り智謀は張良孔明を欺く侮どり難き大敵かなと申ければ晴信も道理と同意なし眞田山本の指揮を守るべしと觸流し頓て晴信甲府を出馬と定められけり

第十八　眞田幸隆智計景虎を窘むる事并眞田信綱武勇の事

長尾景虎は村上義清に賴まれ六千餘人を引率して信州海野原に出張す此事甲府へ注進ありしかば武田大膳大夫晴信甲府を進發有て小諸を越同じく海野原に對陣す然るに長尾景虎の方より吳服兵左衛門と云る者を晴信の陣へ使者とし此程上田原の一戰に村上義清敗北し我が方へ來り何卒再び葛尾へ歸城致させ吳よと身不肖成景虎を賴まれ候處我が家義淸とは數代懇意の中なりと

左衛門綿貫左京大夫須田齋宮高梨右衛門仁科瀨塲要人を始めとして村上旗下の面々甲府へ參勤しければ是より甲府の威勢强大にぞ成にける扨も村上義淸は上田原の合戰に打負桑原より古市を過山路を漸々と越て越後路に到り春日山の城主長尾太郎景虎の城中に立越對面を乞れける此時景虎は十八歲になりけるが義淸に對面して其故を尋ねられけるに義淸眞田に欺かれ藥師寺淸野樂岩寺佐栗の四將を討れしより今度上田原の戰ひには有無の一戰を遂んとして遂に晴信の旗本へ切入十が九迄仕課せしに殘念成哉又眞田が臣相木森之助に支られ晴信を討事能はず我が本城葛尾に歸らんとすれ共眞田幸隆に道を遮られし故歸る事を得ず所詮切腹と思ひしか共死するは安しと恥辱を忍び是迄參りたり貴殿と我とは先祖より武威を爭ひし中成共今此義淸宿念を捨て降參す希がはくは再び我本國葛尾の城を取返し賜はらば生前の悅び是に過ず其替りには越後に候所の所領を悉皆く進せんと餘儀もなく賴みけるを景虎聞て其許定めて御聞も有んが父にて候爲景入道道七は加賀能登越中越後の間に武名を輝し北州の顯名を成と雖も不運にして遂に越中の賊徒に討れぬ其時景虎猿松丸とて十三歲成共遂に父の敵を討て暫時恨みを散ず然と雖も此景虎何卒父の存じ立を續で加賀能登越中を從へて後上洛し將軍義晴公へ謁し奉つり天下の權を掌ころに握り武名を四海に輝かし名を後代に殘さんと思へ共若輩の景虎に賴むとの御一言何とも默止難く候得ば何事も打捨晴信と一戰し頓て其許を葛尾へ歸城成しめ申べし然乍ら晴信の軍

が陣に切て入る此時兩軍入亂れ血戰數刻に及びける所俄に景虎が後備へより亂れ立大いに騷動なすを見て甲州勢すはや敵は色來ぞ追打にせよやとて我も〳〵と勢ひ懸て追駈るを眞田幸隆是を制して追しめず今敵の俄に崩れ立は是景虎が謀略なりとて甲州勢を纏めて堅く備へを立逃る敵を追ざる所に相木市兵衞蘆田下野守は如何が思ひけん眞田が下知を聞入ず遠く味方を離れて追懸たり景虎は十分敵を人馬を勞らし一度に𠮟と取て返しければ相木市兵衞蘆田下野守案に相違し一戰にも及ばず散々に逃走るを長尾勢の中より宇美佐駿河守横鎗を入て突伏〳〵相木市兵衞に突て懸る市兵衞心成ずも戰ふ處に又右の方より山吉玄蕃介𠮟と喚いて駈出蘆田下野守に突て懸る蘆田相木の兩人魂しひを失ひ肝を冷て既に山吉宇佐美の爲に討れぬべく見えし處に六文錢の旗を押立て長尾勢の横合より討て入縱横に切散して相木蘆田を救ひ出し猶も宇佐美河駿守の勢と戰ひ勇を振ふ事人なき所を行が如く東西南北へ切散し十八騎迄切て落し荒にあれたる有樣は是即ち眞田が勇將覚十兵衞虎秀なり依て景虎も覚が働きを見て長追すべからずと輕く軍を引上たり覚虎秀なくんば相木蘆田の兩人遁れ間敷命なりしと兩人面目を失ひ晴信の前に出て其罪を乞けるに晴信大いに怒り汝等眞田が下知を用ひずして多くの諸卒を失へることそ安からぬ軍法に行ふべき奴成ども今日は免し置の間此恥は後日の戰功を以て補ふべしと申されければ相木蘆田大いに恥入て引退く晴信山本眞田兩人を呼んで今日の合戰を以て景虎は如何成者なるや汝

雖も餘儀無頼まれし事を用ひざるも武門の義理に疎きが如く成ば是非なく此度出張に及所なり今斯樣に對陣し諸卒を勞せん事此方最も好まざれば村上義淸を再度葛尾へ御返し有に於ては景虎軍を收め歸陣致すべし此事承知なきに於ては是非なく一戰を快よく遂候はんと理を盡して申送られけるに山本眞田も此趣きを聞て事理分明なるを大いに感じける所晴信の返事に景虎殿今度義淸に賴まれ當地へ出張の由神妙に存る所なり然れ共義淸を葛尾へ返さば軍を引んとの事一應道理なれども弓矢の上にて切取たる城を謂れなく返さん事晴信が首胴に付て有中は決して成間敷候併しながら此方より軍は仕掛間じく其方より御掛有ば是非無一戰仕つらんとぞ答へらる景虎聞て然は是非なき事なりと合戰の用意に及びければ晴信の方にても夫々手配りを定められ先右の先鋒は小山田備中守相木市兵衛望月甚八蘆田下野守左の先鋒は小山田左衛門尉小督甚八鹽尻五郎左衛門二陣は栗原左衛門須田淡路守次は晴信の旗本勢後備へは眞田彈正忠同源太左衛門信綱旗本の右の方飯富兵部少輔是は鋒花は備へたり旗本の前備へは馬場民部少輔内藤修理亮日向大和守勝沼入道穴山伊豆守武田左馬之助信繁是は雁行に備へたり跡備へは原加賀守昌俊なり是を見て長尾景虎は龍の丸備へに成て晴信の旗本へ切入んと計れける越後勢の先鋒長尾左近之助正景甲州勢の先鋒小山田備中守と散々に戰ひしが正景打負引退く入替りて直江山城守柿崎和泉守同上總之介の三將は小山田左衛門が備へに突て掛る甲州勢栗原左兵衛尉は甘粕近江守

眞田源太左衛門に突て懸る信綱も鎗を以て立向ひ双方暫し戰ひしが宗左衛門信綱が鎗を薙落し一突に突んと付入所を信綱若年なれども早業の者なれば身を交して宗左衛門が鎗を奪ひしに宗左衛門太刀へ手を懸る所を只一突に突倒し頓て首をぞ取たりける

長尾景虎難戰の事幷幸隆薙髮の事

然程に景虎は眞田が智計に當り爰を先途と戰ひしが元來不意を討れし事成ば越後勢大いに敗して討死手負數を知ず右往左往に成ける處に景虎の前を遮り一手の勢出來れり是は眞田幸隆にして伊勢崎五郎兵衛望月玄蕃增尾新藏を從へり此增尾は村上義淸の臣下なれども去年森嶋の合戰に筧十兵衛生捕大剛の勇士なるにより利害を說て幸隆の臣下にぞ成にける扨景虎は爲べき樣なく幸隆をば甘粕山吉等を以て防がせ後は柿崎宇佐美直江を以て戰はせけると雖も難所の山路と云暗夜にて打太刀さへも見えざれば双方討死爲者數知ず散々に血戰す然るに筧十兵衛は越後勢を切散し景虎の旗本へ切入大將を討取んと見廻る所に端なく行合たれば筧は雷の落懸る如き聲を出して景虎ござんなれと討て懸に景虎相手には惡き敵なりと思ひ道を奪て引外せしかば筧獅子の怒りを成汚穢し返せと追駈るを柿崎孫次郎始め四五騎群々と懸隔たり筧に向ひ突て懸る十兵衛大いに怒り孫次郎を一刀に切て落し其外佐々權八幾田平五郎布下藤田等皆々筧に討れたり

等知たるかと問れしかば山本眞田兩人答へて景虎が英名豫て聞及ぶ果して渠の爲所良計あり是より景虎と戰ふ時は必ず敵を侮り給ふべからず景虎に負るならば味方の恥となり勝たりとて强ち功成ず其故は景虎未だ若將なり扨々六ケ敷對陣にて候と申ければ晴信も誠に然こそ思ふとて是より大いに恐れけり此時又景虎も武田勢の固き事を知長く陣を張て白眼合と雖も詮無事と思ひ景虎其夜陣拂ひし柿崎和泉守山吉玄蕃を後殿となして春日山にぞ歸られける尤も敵の慕はん事を恐れ篝りを多く焚せ景虎對陣の體に見せられけるを眞田幸隆は此樣子を考へ知て景虎に一肝を冷させせんと家嫡源太左衞門信綱相木森之助海野六郎寛十兵衞穴山小左衞門等に其勢三百餘人を授け鐵砲の鍛練を撰み唐割峠に埋伏させ渠を喰止んと計りけるを長尾勢斯る事とは知ずして越後を指て引行機唐割峠に指懸りし所景虎遙かに此山の體を星影に透し視て大いに驚き怪しき山の姿たかな今山間に殺氣立昇るは必ず敵の伏勢あらん誰か有斥候仕つれと聲の終らざるに相圖と見えて一聲の鐵砲響くと其儘峠の方より大小砲を一時に打掛ければ越後勢大いに恐怖し矢庭に五十人ばかり生死は知ず倒れたり景虎扨こそと備へを立驚く味方を制せられ敵は定めて小勢成べし冑の鉢を傾け鎧つぎして矢玉を避け楯を被いで登攻れと下知せられける程に越後勢楯を被ぎ曳々聲を出して我も〳〵と攻登るに六文錢の旗颯と靡かし眞田信綱相木穴山海野寛一騎當千の者共切て出當るを幸ひ薙立〳〵戰ひけるに越後勢の中よりも阿保宗左衞門鎗を取て

なり後陣は蘆田下野守栗原左衛門備へを立ければ景虎方にも魚鱗に備へ柿崎甘粕直江山吉等順序を追て操出し双方鐵砲を打掛矢を射違へ煙りの下より鎗を合せ此度は敵味方とも名を惜み義を重んじ命は鴻毛よりも輕んじ互ひに引な引じと恥しめ合ひ揉合〳〵入亂れ鎬を削り鍔を割切先より出る火は電よりも烈しく血は流れて川をなし骸は積で丘と作り良二時あまりは霾ふり天を覆ひ馬蹄に血を濺ぎて戰ふ中日は西山に沒しければ其日は双方引鐘を鳴して軍を治めけり翌日景虎より使者を以て越中能登の邊を懸たく候間晴信殿にも暫く軍を治め給はるべしと申送られけるにより晴信聞て其許越中能登御働きの儀道理に候其中は此方も合戰を止候べし然し義清を本領へ御返しあらん事御無用にて候此儀を思ひ止り給ふに於ては兩家和睦して倶に大望を助合候はんと答られけるに依て双方陣拂ひして各々歸國せられけり其後同年十二月廿日晴信は禪僧桃首座當松庵を招て卦を取せらるゝに其卦吉なりと有ければ晴信遂に翌年二月十二日入道せられ此旨を三條中將實綱卿を以て則ち帝へ奏聞あり晴信則ち道號を德榮軒法名は信玄と號す此時同く入道する人々には原美濃守は淸岩と云山本勘介は道鬼と云小幡入道同意と云長坂左衛門は釣閑と號す眞田幸隆は一德齋と改む是より嫡子源太左衛門信綱を陣代として甲府に勤仕す其後信玄景虎と每度合戰をなし勝負互にありと雖も皆眞田家に關係少なきに依て爰に畧す

景虎僅かに危險所を免れ只一騎馳行處に何處共なく鐵砲の玉飛來つて馬の平首を討拔馬は屛風を返す如く倒れ景虎も田の中へ落入ければ漸々這上る時武者一騎驅來るを敵か味方かと星影に透視れば直江山城守兼續なり景虎大いに悅び景虎なるぞと聲を懸しかば直江驚き馬より飛で下我馬に景虎を乘て越後を指て落行處に追々柿崎甘粕宇佐美山吉追付來りしに早夜も白々と明渡りたり景虎思ひの外の敗北して早々越後へ引入らる眞田幸隆は思ひの儘に敵を刧かし勝鬨を執行ひ討取し首級六百餘級を持せ勇み喜悅び歸陣をなし晴信の前に出て此樣子を申述首共實檢に備へければ晴信を始め諸將皆々大いに感じ誠に眞田は鬼神も怖るべき良將なりと稱ぬ者こそなかりけれ晴信今度信綱が働きを聞れて甚だ感じられ誠なるかな虎の子に犬は無と此事をや申べし信綱の後世賴母敷思ふなりとて國俊の打たる太刀を手自賜はりたり斯て其年も暮て明れば天文十九年三月二日武田晴信甲府にて軍議あり再度小笠原木曾を攻らるべしと甲府を進發し給ひける此時長尾景虎は先敗の恥辱を雪んと越後を立て關の山を越長沼へ討て出られける此事武田方へ聞えければ晴信然らば景虎と對陣せんと猿が馬場に打上り深志の道を取切て本陣をぞ据られける景虎も又長沼を押出し越後路を押來りて犀川を前に當善光寺山を押上り旗本を備へられ翌日甲府勢は桑原より打出ければ景虎も犀川を渡して懸りける甲府勢の右備へは飯富兵部少輔左備へは小山田備中守眞田幸隆なり晴信の前備へは左馬之助信繁穴山馬場內藤淺利日向諸角等

手一時に鬨の聲を揚て押寄る然共城兵少しも驚かず敵を十分に木戸際迄引付一時に迫間を開き弓鐵砲を揃へ射出し打出しける程にさしもの眞田方も是に辟易し色めき立處を城門を押開き城將太田彌助持定木辻別右衛門中根宇右衛門本間九郎等我も／＼と突て出散々に駈立ければ寄手二三段押返さるゝを見て眞田喜兵衛昌幸は此度初陣の高名を爲んと紫き縅しの鎧に白星の冑を着し鋒先二尺餘りの大身の鎗を引提勝誇りたる城兵の中へ面も振ず割て入縱横に駈破る有樣實にも不思議の武者と見えたる折から城兵の中より坂井名八景國と名乘黑革の鎧に四尺餘りの大太刀を眞甲にさし翳し薙立／＼切て廻りしが端なく昌幸に出會たれども景國は眞田が如何にも若武者なるを見て爲指者とも思はねば其儘行過んとしけるを昌幸聲を懸如何に眞田喜兵衛昌幸を知ずや引返して勝負せよと鎗を捻て突て懸る景國莞爾と打笑ひ悄らしき小冠者の擧動哉率や此世の暇を取せんと大太刀振揚切て懸れど昌幸が鎗先尖くして近寄べき樣なかりければ景國心大いに驚き乍ら戰ふ所に昌幸が鎗先景國が眼先を放れず電光の如く閃かし景國が冑の眉庇を突上げ忍びの緒を引切て仰冑に成けるを景國着直さんと爲處を昌幸英やと一鎗に突落して遂に首をぞ取たりける昌幸は初陣に剛勇と聞えし坂井名八を討取て大いに悦び退かんと爲所に本間九郎は昌幸が働きを見て天晴の若武者遁すまじと鎗を捻て突て懸るに昌幸心得たりと馬を返して鎗を合せ十七八合戰ひしが更に勝負も分たぬ所に布下彌四郎馳來り昌幸の過ち有ん事を恐本

第十九　眞田苅屋原の城を攻落す事幷眞田昌幸初陣高名の事

頃は天文二十一年東國管領上杉憲政累代北條家と雌雄を爭ひけるが遂に打負て越後國へ落行長尾景虎を賴み我が姓氏及び管領職を讓り本意を達せん事を望まれしかば景虎悅んで承諾長尾を改めて上杉彈正大弼と名乘れける其後足利將軍義輝公御諱の一字を拜領し名を輝虎と改め法體し上杉彈正大弼輝虎入道謙信とぞ號されける謙信憲政と倶に上野國へ打向ひ所々の戰ひに打勝上杉の勇名を顯し軍場に隙なかりける爰に信州岩尾の城主眞田彈正忠幸隆入道一德齋時分は宜とて八月二日岩尾の城を打立上杉の旗下太田彌助持定が楯籠りし苅屋原の城を攻んと三千五百餘騎にて向ひける相從ふ人々には子息源太左衞門信綱一男兵部之丞昌輝三男喜兵衞昌幸（昌幸今年十四歲にて初陣なり）臣下には穴山小左衞門入道源覺伊勢崎五郎兵衞望月玄蕃允十兵衞虎秀相木森之助昌續同森右衞門昌綱布下彌四郎貞家（今年十六歲）海野六郎增尾新藏を始めとして一騎當千の逞兵なり岩尾の留主居には別府治部右衞門三好左衞門根津甚左衞門を始め千餘騎を殘されける此事苅屋原へ聞えしかば城主太田彌助持定は早速春日山へ注進し防禦の備へに及びけり此太田彌助は上杉方にて一騎當千と呼れし大剛の者にして郞等には木辻別右衞門本間九郎中根宇右衞門とて類を集る者共五百餘人にて楯籠る眞田方三千五百餘騎を三手に分大手搦

はや業三十餘合戰ひしが更に勝負も分たねば相木聲懸牽や組んと長刀投捨驅寄ば此方も太刀を投捨て双方無手と引組だり互に名を得し勇者と壯者暫し揉合居たりしが相木力や勝りけん遂に木辻を取て押へ首を掻んと爲けるが何とか思ひけん腰より用意の繩を取出し別右衛門を生捕後陣にこそは送りけれ城兵勇成と雖も眞田の猛將に驅立られ散々に成けるを見て城將太田彌助今は是迄なりと思ひ究し事成ば殘兵二百餘人を眞丸に備幸隆の旗本へ切入自身勝負を決せんと大將を目掛喚て駈出し不動國行が打たる三尺六寸の太刀を以て當を幸ひ切て廻るに持定が切先に向ふ者如何なる鎧兜も瓜を割が如く十八人迄切て落し猶も勇を振しかば人無き所を行に齊しく既に幸隆の旗本近く切入處に筧十兵衛は持定が横合より躍出豫て名は聞つらん筧十兵衛虎秀是に有と大太刀を打振て立向ふ太田彌助是を見て望む處の敵なりと双方馬を進め陰に閉陽に開き丁々發止と打合しが元來大剛の十兵衛成ば未十合ならざるに持定が太刀を打落せば差添に手を懸し所を十兵衛透さず打込太刀に冑の眞向より胸板迄割付られ血煙立て死てけり大將討れければ士卒は思ひ〳〵に落行けるを中根宇右衛門は斯とも知ず戰ひ居たりしが大將討れしと聞て今は是迄ぞと眞田勢を切散し右往左往に薙廻るに眞田方増尾新藏樫の木にて拵へたる一丈ばかりの棒に筋金打たるを取延逃る敵を追廻る所にはたと中根に行逢たり双方望む所と討合しが中根は先刻よりの戰ひに勞れたれば遂に増尾に討れけり依て眞田は勝鬨を作り討取首共取持

間に切て斯るを昌幸發打と白眼此敵は我者なり主の高名を奪事勿れと云ながら猶も本間と爭ひしが終に本間を突伏たり斯て坂井本間兩人の首を鎗に結付徐々と引れける是を見る者皆天晴の若大將やと感せぬ者ぞ無りける此日の戰ひに眞田方三百餘人討れ城兵を討取事百餘人なり眞田入道一徳齋は計らずも士卒を多く討せしにより一つの工夫をなし諸卒に命じて近郷の藪を切しめ竹束と云物を拵へける其丈七尺にして三尺廻り位に束ね是を突立其間に矢狹間を開き車を付て鐵砲を防ぐ准備となし進退自由ならしむ今日の軍に諸卒を數多鐵砲にて討れし故明日の合戰には此竹束を以て鐵砲を防ぎ城中へ乘入んと工れし謀計なりと扨も翌日未明より眞田勢竹束を眞先に押立攻寄る城兵昨日の如く弓鐵砲を以て射立打立けれ共寄手少も恐れず竹束を擔連〳〵矢玉を防ぎ攻詰る處に眞田一徳齋下知して筧は無か森之助は居ぬか早城乘せよと呼はるを聞て相木森之助筧十兵衛の兩人竹束の蔭より踊り出空堀に飛入〳〵城門を押破らんとなしける機から城將太田彌助城門を八文字に押開き討て出る是を見て眞田勢中を開き引包で皆殺しにせよと八方より攻立〳〵取籠たり然ども城兵木辻別右衛門は大剛の者なれば眞田方の騎馬武者三騎迄切て落し猶も勇を振て見えけるに相木森之助是を見て天晴の敵なり斯樣の者を討取てこそ我手柄とも云れなんと例の大長刀を水車の如くに廻して木辻に討て斯る木辻斯と見て是ぞ眞田家に其名聞えし相木ならん天晴剛の者我が相手に不足なしと太刀拔翳して渡り合ひ双方劣ぬ手練の

本道鬼申けるは進事早き者は退く事も迅速なり洗馬大隅守何の故も無して味方に參る事當國の武威に恐れてなり然りと雖も渠今降る共後に必ず背ん其時は木曾退治の妨害成べき間一旦降參を免出仕致すべき時早く誅給へと勸ける信玄道理と思ひ豫て用意し給ひける明れば天文二十四年正月洗馬大隅守政秀郎等には富松左京田原甚六松山大學など百人ばかり從へて甲府へ出仕致しけるに此方は豫て期したる事成ば一蓮寺と云日蓮宗の寺に寄宿させ置信玄の下知を以て其夜甘利左衛門尉晴長入道長坂入道釣閑等七百餘人にて押寄たり彼方は思ひも寄ぬ事なれば洗馬が郎等共大に驚き寺中は鼎の沸が如く上を下へと騒ければ富松左京田原新兵衛同甚六松山大學等百餘人拔連て切て出當を幸ひ散々に切立しかば寄手も大勢敵亂軍に討るゝ者も多かりける洗馬は郎等皆々討死しけるを見て今は是迄なりと覺悟の體なりしが死は一旦にして安く生は難し遁るゝだけは遁れんものと寺僧の衣を奪ひ取て頭巾を深く被り逃行僧に紛れ宛裏門より逃出しに元來夜中の事成ば咎むる者もなく一蓮寺を遁れ出信玄を深く恨み此仇を報せんと身を忍んでぞ居たりける甘利長坂の兩將は洗馬を討洩し安からず思けれ共爲べき樣なく此由を信玄へ申立ければ信玄少も動じ給はず何條是等の鼠輩何百有共恐るゝに足んやとて甘利左衛門尉晴吉に洗馬の城を賜りける其後信玄木曾を攻んと專ら其用意にぞ及ばれける抑々信州木曾と云は山より山に連續岩石峨々として古松老檜生茂り樵夫ならでは通ふべき道もなく案内者は有乍ら人數を寄

せ苅屋原の城を破却して岩尾へ歸城なしたりけり

武田信玄木曾征伐の事并安房守昌幸勇戰の事

扨も武田大膳大夫晴信入道信玄は越後謙信木曾義昌小笠原長時等を何卒誅伐せんと種々軍議を廻し給ふ所に岩尾の城主眞田彈正忠幸隆入道一徳齋苅屋原の城を攻落し大將太田彌助持定を始二百餘級の首級を送り悉皆く實檢に備へしかば信玄大いに其功を賞し給ふ且又喜兵衛昌幸未幼年にして坂井名八本間九郎の兩將を討取たる事天晴の働きなりとて喜兵衛を安房守に成れ感狀をぞ賜りける其文に曰

去る八月五日於二苅屋原城一首二ッ本間九郎坂井名八を討取候段神妙に候彌可レ抽二忠勤一者なり仍而如レ件

天文二十一年八月　日　晴信入道

信玄　判

安房守殿

依て眞田安房守昌幸父子面目を施して岩尾へこそは歸りける爰に信州洗馬の城に洗馬大隅守政秀と云者有數代木曾義昌が幕下たりしが俄に心變じて何の故もなく信玄に降參を乞たるを聞山

左衛門木曾十郎右衛門海方伊織など云一人當千の者共城門を押開一度に噉と切て出る安房守昌幸は希代の勇將にて倉橋左衛門と鎗を合せ戰ひ十合餘りにして遂に倉橋を突て落し猶も敵中に進ける眞田源太左衛門同兵部丞の兩人は弟に先を越れじと同く勇を振て切崩せば城兵防ぎ兼て皆城門へぞ追込る然ども狹間より弓鐵砲を雨霰の如く射出し打出し大木大石を投掛此所を専途と防ぎけれ共武田勢是を事ともせず必死に成て攻詰〳〵難なく一の曲輪を攻破りける

第二十　眞田昌幸伊奈九郎を打事幷木曾義昌武田家と和睦の事

扨も武田勢は原隼人佐が先陣に依て木曾の難所を患なくして大軍押寄ければ木曾勢大に騒動しける處に眞田源太左衛門同兵部丞同安房守の三人原の人數に押並んで攻寄ければ郎等には筧十兵衛増尾新藏相木森之助穴山入道伊勢崎入道海野六郎など一騎當千の輩ら我先にと進しかば遂に一の曲輪を乘取猶二の郭へと進む所に木曾勢の中より伊奈九郎とて大剛の者有しが洗革の鎧に大半月の前立者紅ゐの母衣を懸九尺ばかりにして重さ十六貫目の鐵の棒を輕々と振廻し腹黑味方の振舞かな一足も引ず討死せよと呼はり〳〵眞田勢に打て懸其有樣第六天の荒たる如く忽ち七八騎薙倒せしにより近寄者もなき處に眞田昌幸衝と馳寄宜敵被來れと突て懸るを九郎は是を見て優き小悴哉と云樣件の棒にて微塵に成と打たりしを昌幸靡らりと身を替し右に乘拔左り

べき便りを得ず術に盡たる堅城なり然れども信玄何とかして木曾征伐有んと甘利左衞門馬場民部少輔內藤修理原隼人佐同彈正忠昌綱山本入道道鬼眞田源太左衞門信綱舍弟兵部丞昌輝同安房守昌幸等を大將として御嶽の城を攻させらるゝに斯る難所の多ければ誰も進得ざる所に原隼人佐昌勝進出某がし父加賀守は甲州白旗の住人なりしが先君信虎公よりして武田家無二の忠臣と稱られしに或時異相成山伏來て千切形の城取を敎へ此城取を所持する時は如何なる山中に分入とも迷事なしとて秘傳を授け其後山伏は行方知ずなり終ぬ然れ共父昌俊其城取の委細を得ずと雖も是を馬印の紋とし其後某しへ相傳して是を眞先に押立行に何時も山中に迷事なし依て此度の先陣は某しに仰付られなば彼千切形の馬印を眞先に押立進候はんと申ければ信玄早速許されしにより先陣は原隼人佐次は眞田源太左衞門同兵部丞同安房守なり昌幸は若武者の事成ば人に先をせられじと士卒を下知して進れける其次に武田左馬之助甘利左衞門馬場民部少輔豐原春日內藤跡部今福等にして惣勢五千五百餘騎我も〱と進ける所聞しに增る難所の山道なれども原隼人佐が先陣に從ひ行に木曾義昌が籠たる御嶽の城の大手へこそは出にけれ眞田兄弟は眞先懸て我も〱と攻入んとす御嶽の城中には本道は關を据たり閑道は甲府勢案內知ぬ事なればよもや是迄攻來るまじと思の外何時の間にやら寄來りければ是は何處より勢の湧出たるぞやと大に騷動する事斜成ず然るに眞田兄弟は早城門を打破つて一番に乘入んと爲所に木曾方繪江左京倉橋

助十五歳に成けるを使として城中に送けるに城將木曾義昌は今生涯せんと中央に座し長臣今井駿河守兼祐大庭季之丞手塚右馬之助を始め累代重恩の家臣七十三人左右に列して最期の盃盞を取し所に眞田兄弟の方より穴山小助と云者使者として參りたる由通達す義昌是を評議有に今井手塚大庭を始め何れにも其使者に對面し給ひ仔細御尋有べしと申により頓て眞田が使者を案内させければ小助進んで申けるは抑々主人眞田家の祖先海野幸氏は御當家の御先祖義仲公の臣下なり清水殿に仕て鎌倉に殘と雖も木曾殿御討死の後は清水殿鎌倉にて誅せらる其時幸氏頼朝公を討んとて暫時武田逸見の冠者に身を寄しが遂に其功成ずして病死せり其緣に因て今は武田家の幕下なりと雖も御當家は舊の主君なり其御家を見殺にせんは本意成ず此後武田家と唇齒の交際を成給はゞ眞田兄弟身に引受て信玄に達し御本領安堵相違有べからずと述しかば義昌始め是を聞渴魚の水を得たるが如く悦び義昌小助に向ひ此上は宜く眞田氏兄弟に賴入と有しかば穴山小助は暇申て城中を退去し此由を眞田に達しければ昌幸夫より大將の本陣に參て義昌和睦の事を扱ひけるに信玄是を許されしかば早速和睦調ひ木曾侯の本領安堵せしめ且又信玄の息女萬里姬は美人の聞え有により義昌へ送らんとの約束迄調ひ信玄は甲府へ歸陣せられける是偏に昌幸が寸謀より斯兩家睦じく治りしとて木曾殿は眞田昌幸が智恩を感じ長臣大庭季之丞が秘藏娘を自身仲人せられ安房守へ送られける是則ち眞田伊豆守信幸同左衛門佐幸村兩勇の母は大庭季之

に馳須臾支て逃行を伊奈は遁さじと追懸るを又對戰ては逃出し請ては引外しては走り十分敵の急迫を見澄し腰に付たる宿砂筒を取より早く振返り九郎が咽喉を打抜ければ流石猛勇と聞えし伊奈も一聲叫んで死たりけり昌幸馬より飛で下首を上たる有様は誠に希代の働きなり

此宿砂筒と云は火繩なくして打鐵砲にして父幸隆より相傳を受當時世に類ひなき軍器なり

此時寄手は眞田が働きを見て昌幸討すなと惣勢一時に進みしかば木曾方爲べき樣なく大庭兵部少輔古川妙寛を始め皆々血戰して義昌が腹心等思ひ〳〵に討死す義昌今は最期の一戰快よくせんと緋緘の鎧に龍頭の甲を着し三條の小鍛冶が打たる刀の渡り一尺八寸の長刀を打振旗本百騎許り引具し渦卷立たる甲州勢に面も振ず切て入大音上て名乘けるは　淸和天皇八代の後胤木曾帶刀先生義賢の嫡男朝日將軍木曾義仲が末流左馬頭義昌今日討死の技倆を見て汝等が手本にせよと忽ち二三騎懸落勇を振て切立駈立八方へ追散し近寄者なきを見て今は罪作に何かせん潔よく生害をなさんとて徐々と本丸指て引退く時に眞田昌幸兄信綱昌輝の兩人に向ひ今木曾殿最期の一戰と見討て出られたり抑々曩祖海野小太郎幸氏と云は　淸和天皇第五の皇子四品貞元親王七代の孫にして帶刀義賢の嫡男木曾義仲の家臣たり然爲ば數代隔絶と雖も君臣の好あり然るに目前見殺しにせんこと我々が本意に非ず何卒して晴信公と義昌公を和睦成しめて兩家相續の助けとせんは如何がと申ければ信綱大に悦び是こそ正論なり率や我々扱はんと穴山入道が三男小

れば先使に來し金德齋を切て北條を亡し給へと申ければ信玄太だ氣色を損じ北條家は我と數年合戰なせしと雖も今氏政は我婿にして唇齒の交際をなす其上上野を切取ん事は我が豫て望む所なり今更氏康と變ずるの理あらんや汝再たび無益の口を開く事勿と以の外に怒らるゝと雖も一德齋少も動ぜず是は君の仰なれども武田家數年謙信と勝敗を爭ひ給ひながら未是ぞと云功を成す殊に今虎昌の說處は德川織田を始め國々を攻取んと云るれ共越後一ヶ國の謙信さへ未討勝得ざるに爭でか他國迄易々と攻取事のなるべきや古人の語にも勝べきものは攻るに有勝べからざるは守に有とは斯樣の事を申なりと諫るに信玄は猶威猛高に成汝我意を背く慮外者免し難しと云乍ら太刀を取て立給へば眞田笑つて君今太刀を取給ふは此一德齋を殺さん爲成か眼前軍の利害をも知たまはず殊に父を廢去し國を奪大不孝の刃何ぞ幸隆が身に立べきやと大に嘲りしかば驚破事こそ起らんと見處に御前に詰居し近臣等君を圍無理に奥へぞ引入けり幸隆大に笑ひ斯る無法の君には仕へ難しとて信綱昌輝昌幸三人の子息を伴ひ甲府を立て岩尾へぞ歸りける此時山本道鬼は風邪にて屋敷に引籠り居けるが此事を聞と取物も取敢ず出仕し信玄の前に出ければ信玄山本の語を待ず今度眞田が無禮を悪り早速兵を以て岩尾を攻潰し眞田父子を罪せんと云るゝを聞晴幸入道大いに歎き君諫むる者を見給ふと仇の如くなれば臣又君を見る事怨敵の如し眞田父子無りせば武田家何ぞ斯樣る事を得んや今隣國に猛將勇士在と雖も武田家に指す者なきは是

丞國秀が娘なり

一徳齋信玄に諫言の事幷武田勢大敗軍の事

爰に上州箕輪の城主長野信濃守武州岩槻の城主太田美濃入道三徳齋兩人は上杉憲政の幕下にして武藏上野を切隨へんとて度々北條氏康と合戰に及ける所に氏康熟々思案して我領國往々は謙信に攻取れん是を防ぐには悴氏政が舅信玄をして先謙信を押へさせ我は長野信濃守太田三徳齋を心能攻亡ぼし其後謙信を退治せんと謀り弘治三年二月二日家臣大藤左衛門入道金徳齋を使者として甲府へ送り此度氏康軍を發し太田入道を征伐すべし其時貴邊は長野信濃守を誅伐在て上野を攻取給へと申送られければ晴信此儀如何返答せんと諸將を集評議在に飯富兵部少輔進み出此度北條家より申來るこそ幸ひなり早速軍を發して長野信濃守を亡し其後今川徳川北條織田佐々木朝倉淺井等の逆徒を悉皆く征伐し又謙信をも其間に退治して四海の逆亂を鎭め天下を掌ころに握り日本の武將と仰れ給へと申けるに晴信入道大に悦び汝等長野誅伐を止んと思ひしに虎昌の云所我が心に適りと申されけるを眞田一徳齋聞て某し思案には飯富殿の心底とは雲泥の違なり其故は此度北條氏康より申來りしは君と謙信と雌雄を爭はせ兩國の勞れし時是を討て甲信越の三ヶ國を幷せんとの巧みなり甚だ恐べき事ならずや何條氏康如きの謀計に欺かれんや然す

突伏信玄を介抱なし後陣を指て漸々引返す是に依て甲州勢大いに破れ右往左往に引返す然るに謙信此事を聞と直様信玄の歸り道を遮らんと川中嶋へ出張す又信玄此由を聞て今は歸るべき道なく後には長野信濃守追來り前には大敵謙信道を遮りしかば此所に至て眞田が諫言的中せりとて悔まるゝと雖も如何共詮方なく呆然として立けり

第廿一　眞田一徳齋謙信を破る事幷昌幸宿砂筒にて謙信を討事

忽々の謀略は爲べからず惕々の心は長ずべからず扨も武田晴信入道信玄は眞田が諫を聞ず上野に軍を發し箕輪を攻られしに城兵強くして味方敗北し數多の諸卒を失ひ甲府へ逃歸らんとしけるに上杉輝虎入道謙信此事を聞川中嶋迄出張して武田の歸路を取切ければ信玄前後に敵を請身体谷り如何共爲術なく信玄諸將に向ひ我眞田が諫言を用ひずして斯る難儀を引出し何面目有て甲府に歸り眞田山本に對面せんや今潔よく此所にて討死し名を末世に輝かさん諸將も忠を思はゞ我と倶に討死し最期の勇名を稱られよ我黄泉の下にて其功を賞すべしと云れければ元來剛強の甲州勢少しも猶豫せず君と倶に討死せんと各々覺悟を極頃は弘治三年五月十六日川中嶋に出張し此所の後殿は上杉勢の押甘利左衛門晴吉武田太郎義信と定め川中嶋の方へは飯富兵部少輔今福善九郎を指向越後勢柿崎和泉守八千餘騎にて扣たる中へ𠵅と喚て突入に柿崎態と敗し

全く眞田と云る謀臣在が故なり此度眞田が諫言は皆理の當然なり早々眞田を呼返し彼が諫に付給へと種々に申なだむれども信玄一向に取用ひず弘治三年三月二日二萬餘騎を引率して上野に發向在此事を箕輪城主長野信濃守政藤聞て北武藏の軍勢八千餘騎を率ゐ先陣は猪股右京太夫農祖小太郎一千餘騎牛尻に陣を取甲州勢は馬塲飯富諸角甘利を先鋒とし笛吹峠を打越牛尻に對陣爲事三日にして双方白眼合て居たりしが三月十二日の未明に甲州勢は長野方農祖小太郎豐國の陣に押詰嫡男太郎義信甘利左衛門の兩將無二無三に攻掛りければ上野方甲州勢に氣を吞れて色めき立を大將小太郎采配打振立直さんと爲所へ武田太郎義信走り懸て小太郎豐國に突て掛り受つ流しつ暫時戰ひしが終に豐國を突て落し頓て首をぞ上たりける甲州勢大に勇一人も餘さじと二萬餘騎潮の湧が如くに攻掛る故信玄の旗本透たるを見澄し長野の長臣大石主殿助が八百餘騎思も寄ぬ裏手より信玄の旗本に突て入處に同じく小幡日向守倉野爲右衛門も八百餘騎左方より突て入微塵になれと攻立しかば信玄の旗本散々に駈靡さるゝと雖も先陣は遙に隔りたれば救事能はず大石が郎等望月澤次郎と云者指物甲かなぐりすて敵勢に紛れ込大將信玄を目懸鎗を捻て突て懸ければ信玄大いに怒己推參なりと云さま太刀拔翳し合打たり望月は大剛の勇士なればば烈しく繰出す鎗先信玄の大口の端れをぐさと突に流石の信玄なれども痛手に堪兼馬より仰樣に落る所を得たりと望月鎗取直し突んとするを萩原彌三兵衛駈來り後の方より望月を只一鎗に

郎等寛十兵衛虎秀と見るより望む敵社入來成我高名にせん物と大太刀を以て透間なく切懸に謙信是を睨まへ下郎推參なりと云樣發し〳〵と戰ふを見て越後方江間藤左衛門是は勿体なしと馳來り兩馬の間へ割入ければ十兵衛大に怒藤左衛門を只一刀に切て落し猶謙信を追掛たり柿崎和泉守の二百餘人衛と駈出て虎秀を遮りしかば其隙に謙信は御幣川を渡りて犀川に到越後口に歸らんと急ける此時川中嶋は合戰最中にて謙信に從ふ者僅か百餘騎に過ず犀川近く赴さける所に後より眞田昌幸の一手追來り增尾新藏樫の木の一丈ばかりの棒を打振越後勢を散々に駈立ければ越後勢の中より瓜生勘次郎とて大剛力の者增尾を討んと切て懸に增尾は件の棒にて瓜生が眞向を微塵にせんと討掛るを瓜生は馬上の達人成ば縱横に馬を乘廻し大太刀にて請つ流しつ戰ひしが增尾夾やと聲掛裾を拂へば瓜生が馬の跡足薙て人馬諸共屛風を倒すが如く倒るゝ所を起しも立ず一打に打殺す是を見て越後勢過半は川へ追込れける又眞田安房守は豫て待得たる宿砂筒を以て謙信を撃んと味方を離れ只一騎物の陰より狙寄啣と打けれども謙信運や強かりけん胄の吹返に當ければ其響きに目眩めき馬より逆樣にぞ落けるを眞田方は是を見てすは謙信は死たるぞと関の聲を作攻詰ければ越後勢大いに驚き我先にと逃出し犀川へ追入られ溺る者數を知ず然共安田上總之介上田多門北條安房守等謙信を助川を難なく渡しける續て眞田勢川を渡し追物成ば謙信爰にて討るべきに眞田昌幸は越後の殘兵後を取切ん事を恐れ引鐘を鳴して軍を收ける

て引退くを飯富今福麾を振て敵は色めくぞ追や〳〵と云所に越後方の山吉玄蕃五百餘人敵の横合へ打入ければ甲州勢又是に立切れ旗本と先陣と離々に成けるを見て謙信指揮を傳へ直江山城守柿崎和泉守甘粕近江守等を進て飯富今福の後へ廻り信玄の旗本へ攻入ければ甲州勢大いに亂れ立咄嗟信玄此處にて最期と見えける所に東條山閣村上田原の邊に數萬の旗翻へり鬨の聲夥多敷聞え廣瀨の渡り近邊より越後口を取切體に見えければ謙信大に驚き扨は眞田山本等我が歸國の道を立切と見えたり疾彼を追拂へとて後殿は山吉直江の兩將に任せ次第〳〵に引退くを見て信玄敵は今引取と見えたり此機を外さず追討にせよと今迄敗せし甲州勢一度に取て返すを直江山吉少しも動ぜず追來れば取て返し退けば心能引ける故に難なく御幣川迄引取來や川を渡て越後へ歸らんと致しけるに此方成盧原より一聲の鐵砲響く程社あれ六文錢の旗を翻へし眞田安房守昌幸增尾新藏海野六郎穴山父子五百餘人此方よりは眞田源太左衛門信綱舍弟兵部之丞昌輝筧十兵衛相木森之助伊勢崎入道嫡子藤五郎別府治部右衛門等大砲を一時に發し懸潮の湧が如く切て出ければ越後勢大きに駭然柿崎駿河守は心成ずも戰ふ處に廣瀨の方より眞田彈正忠入道一德齋山本勘介晴幸木辻別右衛門根津甚左衛門望月玄蕃是又五百餘人鐵炮を打立〳〵横樣に攻立謙信の旗本に亂入するを謙信少も動ぜず敵は小勢成ぞ引包んで一人も餘さず討取と指揮しながら小豆長光とて重代の太刀を拔翳し自身眞先に懸て進近付敵を三騎迄切て落しければ眞田の

中能登加賀を切隨へ亡父の供養に供へ又上杉憲政を上州平井へ永住させ度と思ふにより此儀同意有ば兩國の幸ひなりと有ければ信玄此事を聞先使者を客間に留置諸將を招き評議されしに原大隅守今福善九郎兩人進み出て此度上杉の方より和睦を乞事是實の和議を成に非ず先達て川中嶋に於て彼方敗せし以來此方を大いに恐れしと見えたり依て今使者を差越所ならん然る時は此方より軍を起し有無の一戰を爲に於ては謙信が首を得るば必定なり疾く合戰の用意然るべしと嚴しく申けるを山本勘介聞て原今福兩將の云るゝ所一應道理の樣成共其は大いに相違せり先達て川中嶋の一戰に勝利を得し事は僥倖に眞田が謀計の圖に中りし所なれば全く味方の勝利と云に非ず就ては今彼より和睦を乞事願てもなき幸ひなり早々此和睦を調へられて然るべし萬一此事を疑はれなば岩尾へ人を走眞田に尋られて後返答然るべしと申けるに信玄は今度の儀内心進まね共先達ての失誤あれば眞田に問迄もなしとて和睦に決し上杉の使者脇坂帶刀を呼出し同意の挨拶に及び此方よりも金丸筑前守を使者となし同年五月十五日牛嶋の渡より四五丁大室の方へ寄川を隔て和睦の對面なすべしと申送られける然程に謙信信玄兩將は日限にもなりければ上杉彈正大弼景虎入道謙信は金小牌繭黄緘の腹卷に緋の法衣仕立の陣羽折を着し坂東黒と名付たる名馬に紅ゐの厚總かけ徐々と乘出る左右には柿崎直江甘粕宇佐美脇坂を始筑摩川を隔て扣えたり又此方よりは武田大膳大夫晴信入道信玄白糸緘しの鎧に法性の冑は取て馬脇に持せ緋の

此時謙信は早乙女の星冑を着せしかば彼玉裏欠ず恙なしとは申せ共落馬の時腰を打て自由成ず越後に歸りて保養致されける叉後に殘りし越後勢も戰ひ大いに難儀して直江甘利山吉宇佐美等も且戰ひ且走り漸々に越後へこそは引揚たり甲州勢一旦敗軍せしも眞田の救ひに依て大いに勝軍をしてければ信玄眞田に向我此度軍師の詞を背危ふかりしを救ひに依て無事に歸國する事を得たるは面目無次第なりと申されければ幸隆入道然ば定て上野の國を攻取給ひ候はんと存是迄山本と倶に御迎に參りし所に此始末故微勢を以て漸々越後勢を追退て候依ては早々御歸陣在と晴幸諸共に申述ければ晴信答る言葉なく甲府にこそは歸られけれ是誠に眞田の智計古今獨歩と言つべし

謙信甲府へ和睦を乞事幷上杉相州攻の事

然程に武田信玄は此度眞田が智計を以て敗軍の名を穢さず思の外に勝軍し甲府へ歸陣せられけるが其後上杉謙信は境を侵す風聞もなく弘治四年二月上旬に至り謙信の方より脇坂帶刀を使者と爲甲府へ申來る趣きには年頃武田上杉の兩家弓矢を爭ひし事偏へに村上義淸に謙信依賴し武門の意氣地を以て止事を得ず致所なり然るに賴まれし義淸既に病死せし故其勞皆水の泡と成然れば恨みもなき兩家干戈を動かし士卒を苦しめんより以後和睦して脣齒の中と成其後謙信は越

地へ手出し致すまじと立派に答へて使者を歸されければ謙信は大に悦び直江山城守甘粕近江守を留主居として急上洛いたされける玆に又太田美濃守は主人上杉民部大輔憲政を大將として總州刀根川迄攻來り北條の幕下千葉新助が籠りし佐倉の城を攻取ければ北條父子仰天して居る處へ武州忍河越兩城皆攻取れたりとの注進に彌々驚き甲府へ一の宮隨巴を使者として此度上杉勢某しが領内へ攻來り候何卒貴殿越後へ御出馬有ば彼必ず歸國すべしと申遣りければ信玄諸將を集めて此事如何にと相談有所に山本勘介眞田一德齋の兩人大に制して申は若越後の約を背給ふ時は必ず後難有偏に謙信の歸國迄は御出馬の義御無用なりと再三諫ければ此事承引難き由を一の宮へ答へられ相州へ歸されける然れば氏康父子是を聞再度隨巴を押返し甲府へ遣はし自然御出馬無に於ては北條家滅亡此時に有とて又々越後を討ん事を催促に及ける

第廿二　北條氏康出馬催促の事幷眞田山本諫言の事

上杉民部大輔憲政太田美濃守入道三樂齋は大軍を發して武總の地へ亂入し佐倉金澤忍河越の城を悉皆く攻落し猛威を奮北條を押倒さんと攻立る故氏康一の宮隨巴を以て再度甲府へ遣はし越後へ出馬の事を賴けれ共豫て謙信上洛の留主中は領内へ攻入間敷旨約束在しかば其儘に打捨置れける處に北條氏康は越後勢に窘められければ猶又使者を以て出馬の事を賴けるに信玄今は是

衣に赤地の錦の袈裟を掛連錢月毛の駒に打乘悠々と立出原馬場高坂跡部今福土屋金丸其外附從ふ謙信遙に是を見るより内甲を見られじとか思はれけん馬より飛下り床机に腰を掛られければ信玄は己が勇に誇て馬より下もせず是は珍しや上杉氏我等へ對し下馬に及ばず早々馬に乘給へと大聲に呼はりければ謙信大に怒一言の答へもせず其儘馬に飛乘營中にぞ歸られける金丸筑前守是を見て謙信太だ立腹の体なりと申ければ信玄然事有べし此方より望まざる和睦なれば却て宜と云て大いに笑ひ甲府へ歸れしは實に是非も無事共なり此時眞田幸隆は岩尾に在しが甲府よりの沙汰に此度謙信斯樣〳〵の趣きにて双方和睦在んとの事なりと告ければ晴信公と謙信和睦有て力を戮る時は凡天下に敵無らん是武田家の繁榮之に過ずと大に悅び居られける所に五月十六日又八來て告けるは筑摩川にて對面有し所に信玄公無禮有に依て又和睦破れたりと申ければ一德齋天を仰ぎて歎息し得失一時に定難し又一ッの憂を引出せり悲いかな武田家の滅亡遠からずと申居たりける然ば双方和睦破れてより上杉武田度々對陣すと雖も果々敷戰ひもなく永祿四年二月上旬上杉家より再三使者を送る其故は謙信將軍義輝公に御禮申さん爲今年上洛の望有是公義の事にして私しの儀に非ず貴殿上を重ずるの心あらば某し歸國までは我が領内へ出張御無用に候此儀貴殿承引なきに於ては餘儀なく上洛を止まるべし此條自然承知有ば謙信快然上洛致すべしと申送られければ信玄是を聞謙信殿此度御上洛の思ひ立神妙なり貴殿歸國迄は其領

落しける由聞えしかば謙信大いに憤怒我十四年の其間此坊主に出抜るゝ事幾度ぞや實に反復表裏の者とは晴信の事なり我急ぎ信州に出馬し彼と手詰の一戰を遂ずんば有べからずと齒噬をなし躍上つて歸國を急ぎ直樣陣觸をなして永祿四年辛酉八月中旬柿崎和泉守甘粕近江守直江山城守本庄越前守柴田周防守山吉玄蕃北條安藝守等を始として都合其勢八千餘騎を引率し信州へ亂入し西條山に陣城を構海津の城を足下に見下し一攻に攻潰さんと武威を示されけるに高坂彈正は海津の城を守り居たるが大に駭き此旨早々甲府へ注進なしけるに信玄然こそ有らんと速かに打立惣勢二萬七千餘騎浦野を押通り四月廿四日櫻が馬場の北に當茶臼山に打登り千曲川雨宮の渡を足下に見下し越後勢の兵糧の道を取切たり時に眞田の家臣梁田新平とて舊伊賀の國の住人にて忍の名人在一德齋豫て召抱置けるが是を以て西條山へ忍ばせ敵陣を窺はせけるに謙信が士卒已に兵粮の道を立切れ皆々大に駭然此西條山に飢死せんかと哀居けれ共大將謙信は少も恐る氣色なく却て悦びの色顯れ小性松波太之助北條三彌などと云者に謠を謳はせ自身皷を打て酒宴を催し居られければ梁田新平是を見て大に駭然急ぎ立歸りて幸隆に對面し某し謙信が陣屋に赴き其體を窺ひ候に越後勢兵粮の道を立切れて諸卒は大に哀みたる體に候得ども大將謙信は酒宴を催し自ら皷を打て居られ候と告しかば幸隆呆然として色を變じ扨々恐しきは謙信なり是死地に入て必至の勝敗を爭ふと見えたりとて急ぎ本陣に到山本勘介に斯と通夫より嚴く二十九日海

非に及ばず速かに越後へ亂入せんと高坂彈正忠昌信を先鋒として三月十七日に陣觸有けるを聞眞田幸隆山本晴幸兩人信玄の前に出申けるは此度越後國へ亂入の事先達てより申上る通り御見合せ有て然るべし其故は今北條氏康上杉太田に窘められ當家を賴處なれば暫時此處にて御出馬の形狀を成て態と亂入せず謙信歸國を待給へ其内北條家遂に憲政に亡されなば是願ふ處の幸ひなり所詮北條氏康永好宜を通ずる者成ず隙を視て當家を押倒んとの氣色も相見え中々恐るべき事に候此儘捨置れなば一ッには後難を退け二ッには謙信が約を破らず三ッには軍勢の勞を助當時是に過たる謀略なし依て越後へ御馬を向給ふ事勿れと詞を盡て諫けるに信玄暫時無言なりしが其方達の申所道理なりと雖も我が娘は氏政が嫁なり殊に孫をも儲たれば北條若上杉に亡されなば孫子の存亡も計難し親の身と爲て是を見殺にせんや謙信が約を破りたり共何條然事の有べきかとて兩人の諫言を用ひず强て出馬と定められし故眞田山本も今は諫る力もなく心鬱々として退きしかば信玄は豫て觸示せし如く八千餘騎を帥ゐて越後領へ亂入し鰐が嶽の城を攻落せしにより上杉憲政太田美濃守の兩人大いに駭然忍河越酒匂佐倉の城々を捨置早々越後へ引返しければ氏康大いに喜悅で一の宮隨巴鳥居嶋之助の兩使を以て甲府へ禮謝に及ばれける是より前上杉謙信は上洛して將軍義輝公に謁し奉つり北國管領に任ぜられ將軍御諱の一字を賜り輝虎と改名し萬端首尾能越後へ歸國爲んとせし處に武田信玄約を背て太田切迄亂入し鰐が嶽の城を攻

れける

川中島合戰軍議の事幷眞田遠計符合の事

扨も勘介晴幸入道道鬼が智計に因て諸將の手分定ければ皆々其準備を成其中に信州岩尾城主眞田一徳齋は此事を聞て西條山の方を窺ひ急ぎ大將信玄の前に出て申けるは山本道鬼が手分に依て大正大奇の備へ道理に候へども謙信武勇と云智謀と云當時兼備の大將なれば此術には乘べからず此方が實の旗本川中嶋に在事を知ば大正の軍勢を十分西條山に引受置雨の宮の渡を渡て朝懸に川中嶋へ仕懸不意に旗本へ切入ば是味方大いなる難儀なり宜く堅密の謀略に預り度候と申述しかば信玄急ぎ道鬼を召て此事如何と申されけれども山本少も動ぜず成程眞田の異見も道理に候へ共謙信我が勇に誇遠計なし如何ぞ然樣なる智計有や敵を輕蔑者亡とかや此程より死地に入ての擧動知べきなり見給へや謙信が首を得る事方寸に在と事も無氣にぞ申ける一徳齋も心には覺束なしと思へ共道鬼程の者の仕損じはよも有まじと我陣に歸つて其夜の子の刻に兵糧を遣ひ明朝卯の刻に合戰を始る用意をなす信玄の旗本は丑の刻に打立川中嶋に押出し西に向て犀川より一里東の方三枚畑の坤の方に備を立越後勢の口を切崩さんと備へたり眞田一徳齋は左右心元無思ひければ子息源太左衛門信綱に相木森之助望月玄蕃の兩臣を附て百五十人を旗本に殘

津の北廣瀬の後を打越て軍勢を海津の城に引入越後の糧道を開き又候梁田新平を以て敵陣の様子を窺はせけるに此度は先日と事變り諸卒は兵粮の道開しを大に喜悦けれども謙信は如何にも打悄て物思はしき體なれば新平立歸りて一德齋に通ける幸隆尙々恐れて誠に古今の剛將なりと感じける扨又山本勘介は信玄の前に出抑々此度謙信八千餘騎の小勢を以て深死地に入戰ひの危險を見て恐ず安さを見て患ふ是必死の相有誠に大切の合戰にて候然ば先味方二萬餘騎を二手に分て一萬二千餘騎を大正の備へと爲是大將の旗本と見するなり其大正の備へを以て西條山を攻なば謙信負ても勝ても西條山より川中嶋へ出來り善光寺の渡しより犀川を心指て引取るは必定なれば其時實の旗本は大奇となして八千餘騎の備を以て是を討ば謙信が首を見ん事必定なりと謀略を説ければ信玄莞爾と笑ひ誠に汝が妙計理に當れり大正の備へには誰をか遣し候はんと有ければ晴幸謹んで先其備へには飯富兵部少輔馬場民部少輔高坂彈正甘利左衞門小山田彌三郎小幡尾張守小山田備中守蘆下田野守相木市兵衞に一萬二千餘騎を添軍師として眞田一德齋を遣はされ然るべし大奇の旗本前備へは飯富三郎兵衞左は武田左馬介穴山伊豆守右は内藤修理進諸角豐後守左り脇備へには原隼人佐武田孫六入道逍遙軒右は太郎義信望月三郎淺利式部惣軍八千餘人とすと云に信玄是に同ぜられ其手配悉皆く定りければ信玄は山本勘介を遊軍として味方弱からん方を救はしめらる是に依て山本が謀りし如く諸將に此事を達せられ急ぎ合戰の準備に及ば

府方には川霧の深きがまゝに眼の前越後の勢の押寄しを夢にも知ず在ける處に良卯の刻に及ぶ頃朝霧漸く晴渡り南の方を見渡せば眞先へ竹の丸に三羽雀の大旗大根の打懸の大馬驗を押立越後勢雨の宮の渡しを打渡りしと見えて姥捨山の東川中嶋の廣野に忽然として扣たり武田勢大いに駭然驚破謙信は幸隆が遠計に違ず雨の宮の渡より此處へ出たりとて皆々恐怖の色を顯しける信玄も扨こそとは思ひ乍ら先浦野源之丞を呼謙信の備を見て來れと有ければ浦野は畏まり候と馬に飛乘一鞭に馳行篤と謙信の備を窺ひ罷り急ぎ立歸り必ず驚愕かせ給ふべからず敵兵は次第〳〵に越後へ引取候と申けるに信玄眉を顰謙信程の者が宵より川を渡り乍ら故無して越後へ引取べき筈なし是は豫て傳へ聞上杉の車掛りにて有べし扨々大切の備成ぞや急ぎ山本道鬼を招き來れと有に山本は何か軍議を爲し居けるが謙信巳に川中嶋へ出張しと聞て南無三寶幸隆が遠慮を知ずして仕損せし事こそ安からねと急ぎ大將の前に出ければ信玄大いに驚きし體にて先に幸隆が申せし如く謙信雨の宮の渡しを越我ば旗本へ切入んとす如何して是を防がんやと仰ければ晴幸入道暫時思案し申けるは此道鬼は是迄數度の軍慮に斯る失錯無りしに此度眞田が異見を聞ずして難儀に及ぶ事某し何の面目有て再度眞田に面を合され申べきや尤も今防ぐべき術盡たるには有ねども謙信の備を見るに勢氣優て唯黑雲の起りたるが如く必死の相顯れたり然し一工夫して謙信が備へを防西條山へ向ひし味方を待受なば此軍勝利疑ひなし是大奇の備を割て大工

し置次男兵部之丞昌輝三男安房守昌幸と臣下は筧十兵衛增尾新藏海野六郎穴山入道同小助安次由利權太夫根津甚左衛門伊勢嶋五郎兵衛入道木辻別右衛門別府次郎右衛門布下彌四郎貞家を始として三百餘人西條山の寄手に加り第三番に備たり先鋒は高坂彈正飯富兵部少輔四番は甘利左衛門五番は馬場民部少輔六番は小山田備中守七番は松木市兵衛八番は蘆田下野守九番は小山田彌三郎十番は小幡尾張守惣勢一萬二千餘騎なり然るに其夜上杉謙信は高櫓より海津の城中に煙の兩度立けるを見て扨は信玄大正大奇の兩備にて一手は西條山を攻させ又一手は我川中嶋へ出越後へ引ん時を待受信玄の旗本を以て我を討んとの謀略なり信玄然樣の事ならば我今宵の中に雨の宮の渡を越て思ひも寄ぬ川中嶋に打出信玄に肝を冷させせん者をとて諸將に向今度の合戰こそ謙信が生前の面目に關はる軍なるぞや義を重んじ忠を思ふ方々我馬前に於て身命を捨戰はれよと下知を傳へ甲府勢と摩違ひに打立八代の渡しを渡り川中嶋へと打出らる其刻未だ寅の刻なり越後がたの先鋒は柿崎和泉守二陣は上杉謙信左りは舊村上義淸が家臣本庄越前守柴田因幡守右は山吉玄蕃北條安藝守後備へは甘粕近江守次は直江山城守小荷駄奉行として備させ精兵僅八千餘騎謙信秘術の備立にして一陰一陽の法なれば一備へ敵に當る時は先の一備後に繰返し屈伸往來首尾相助るの陣法なり俗是を車掛りと云次第〳〵に信玄が旗本指て進來る頃しも秋の末成ばまだ東雲の川風に朝霧深く立蔽散殘りたる樹々の葉の雫に弓筈喰濕し敵寄るとは白露の甲

に何時果べしとも見えざりけり然ども不意を討れし事成ば武田方大いに敗走するを見て武田左馬之助は我が討死爲べき期到來せりとて紺糸の鎧を着し紺の母衣に法華經の文字書たるを掛たりしが是を解て鞍の前輪に縛付連錢葦毛の馬に朱鞍を置三間柄の鎗を取て群集たる越後勢の中へ眞一文字に只一騎進んだり是を見て大將討すなと信繁が郎等五十騎ばかり後に續て駈入ける然るに越後勢の中牧野甚彌と云者信繁を討んと横合より太刀を翳し打て懸る信繁大いに怒て甚彌を一鎗に突殺し猶敵中へ突て入甚彌の弟爲藏目前に兄を討れて口惜く思ひ鎗を遶取信繁に突て懸る信繁少も騒ず二三合突ふと見えしが信繁一聲喚いて突出鎗にて爲藏が馬の太腹を突貫されば馬は跳上りさま倒れる時爲藏立上んと爲處を信繁一鎗に突伏けり爰に藪田善次郎とて鐵砲の名人ありしが信繁の働きを見て已討取て高名にせんと鐵砲を以て狙寄切て放せば過たず信繁が咽を打貫けるに信繁馬に堪ず眞逆樣に落る處を善次郎走り寄首を搔切て引行を信繁の近習山本妙之助追懸來り透さず藪田を切殺し主人の首を取返しける時に諸角昌清は信繁の討死爲を見て我も後れじと敵中へ切入十六騎に手を負せ亂軍に討死す甲州勢は信繁昌清が打死の後は彌々敗走なすと雖も穴山伊豆守飯富三郎兵衛は少も備を亂さず遂に敵を切崩す所に原隼人武田孫六入道跡部大炊介今福善九郎の備へは越後勢柴田因幡守北條安藝守の兩將に切崩され廣瀨の渡しに追込れ水に沈溺者數を知ず依て此時武田方は穴山飯富二備而已殘ける山本勘介は先刻より諸方

の備へを待受る故味方待の備と唱へ候と申ければ信玄然らば宜く計ひ候へと仰けるにより道鬼畏まり候と須臾の間に備を立變謙信が車掛りの堅陣を防禦術をぞ運しける

第廿二　信繁諸角山本の三將討死の事幷謙信自身信玄が備に切入事

眞田入道一德齋が申せし如く謙信雨の宮を越て川中嶋へ打出られしかば山本勘介は此度の合戰眞田に仕負る事を安からず思ひ忽地味方の備を立直し謙信を喰止んと計ける先武田重代の旗は嫡男太郎義信が前に立させ大將の纏孫子の旗は信玄の床几の元に立置謙信が寄來るを待所に上杉の先備へ柿崎和泉守が一手飯富三郎兵衛内藤豐後守が備に會釋もなく切て掛り双方千變萬化して戰ひ東西南北縱横に追捲り追返し暫時揉合しが内藤豐後守が備へ遂に亂れて敗走するを内藤大いに怒り腹黒者の擧動や今日の合戰は大將の御身の上ぞ年頃の報恩に討死せよや人々と自身鎗を取て突て入ば是に勵され諸士噇と返し合せて戰ふ處に上杉方北條安藝守本庄越前守の兩將左右より挾んで揉立ければ遂に叶ず大崩れと成し時又越後勢須田安田山吉の三將は左馬之助信繁諸角昌清が備へに切て入是より双方亂軍と成て東西に馳違ひ南北に駈廻る其形狀血は混々と流れて洪河となり骸骨は累々と堆で山岡の如く名將と智將の軍成は敵味方身命を捨て戰ふ程

打乘三尺六寸の小豆長光と云名劒を眞向に指翳し味方を放れて只一騎武田義信が備に切て入敵二三十騎切て落し難無駈脱て信玄が旗本に切て入遙に見るに信玄は白糸の鎧諏訪法性の冑を戴き緋の衣に錦の袈裟を重て南蠻鐵の團扇を馬手にとり信玄と同じ行裝の武者七人皆床几に掛居たるに流石の謙信も惘果孰れを信玄孰れを晴信と暫時眺て立れしが頓て謙信眞一文字に馳寄第三番目の床几に掛たる武者へ切て掛に是誠の信玄なれば却て信玄騷がず彼の團扇を以て謙信の太刀を請留るを三太刀迄重ねかけて打込れければ驚破信玄討れつびやう見えける所に金丸平八郎原大隅守の兩人二百人ばかりにて謙信と信玄の間を取切戰ふにより謙信大いに怒り猛虎の荒たる如く彼の長光の太刀にて切拂ふに鎧兵器も瓜を割が如く瞬間時に三十六騎切て落し東西に駈破ると雖も大勢に取切れし事成ば終に信玄と物分れになりしを原大隅守は遁さじと追掛靑貝柄の鎗にて謙信が總角と思ふ處を礑と突けるに重宜さまゝに通らず大隅守再び鎗の鐓きにて謙信が馬の鞦ひを打ければ名馬成共大いに驚愕跳上り樣倒れしに謙信馬と共に倒るゝ所を大隅守得たりと馬より飛んで下謙信に組付しを謙信大力の猛將成ば大隅守を引摑で三間ばかり投たりける然ども謙信危き處に越後勢北條山吉の兩將五百餘騎にて馳來り謙信を馬に打乘引包で退くを左りの方より六文錢の旗を翻へし眞田源太左衞門信綱相木森之助望月玄蕃を左右に從へ大將上杉殿へ眞田信綱見參せんと云さま三人張の重籐に十三束三ッ伏の征矢を鏃際まで引絞り

を下知して廻りしが味方大半敗れしを見て我大切の軍を仕損じ數多の大將を討せし事何面目あつて眞田に對面せんと一筋に思ひ詰て黒皮緘しの鎧におなじ毛の甲に枇杷の葉の前立打たるを着し山本流の鍵鎗を取て敵中に突て入附從ふ人々には條野九八郎前波藤平久留嶋左兵衛瀧口輪藏を始め百五十騎晴幸の前後を圍ひ四方八方に馳廻り北條安藝守が千餘人を難なく切崩し山吉玄蕃が二千餘人に切て入千變萬化に戰ふ有樣鬼神の如くなれども追々從兵も討死し今は漸く七八十騎に成しかば流石軍師と仰がれし山本勘介入道道鬼も最早是迄なりと最期の覺悟をなしければ西條山へ向し味方の歸る迄も堪ずして自身敵十四五騎討取其後終に腹掻切て失にける之に依て打殘されし郎等皆同時に討死す甲州勢に初鹿野源五郎とて大剛の士有けるが大將の旗本危難と見て最も討死と覺悟を極め一族郎等七十三人白き布に南無阿彌陀佛の六字を書たる笠印を付先へ進みし甘粕近江守が備に切て入射ども突ども一足も引ず遂に打死なしたりけり斯りし程に謙信は思ひの儘に勝軍すると雖も左右間取る中に西條山へ向し敵兵我小荷駄を切崩しなば大事成とて森惣兵衛を使として直江山城守が陣へ軍の樣子斯々なれば信玄の首を得るは此時なり今暫時堅固に敵を支え候へと申送るに直江山城守は軍旅に馴たる者成ば千曲川の流を堰止專一防戰の用意をなし居る趣きを聞謙信今は心安し然ば信玄が旗本へ切て入勝負を一時に決せんと六十四間の星冑を脫捨白練の鉢卷し紺糸の鎧の上に萌黄緞子の法衣を着し放生月毛と云名馬に

しと一同猶豫居たる處に卯の花縅しの鎧に鹿の角の前立物の兜を着たる武者一騎川端に立現れ眞田安房守昌幸雨の宮の一番乘をなし味方の爲に瀨踏をせんと呼はつて渦卷たる川水へ滲ぶとこそは打入たり昌幸馬上の達者なれば白波立て渡りけるに水深ければ馬の平首も隱れ終には馬の首と甲の鉢ばかり白波の中に見えしにぞ一德齋手に汗を握り穴山寛は居ずや那助よと鞍上に衝立上つて下知しければ寛十兵衛穴山入道梁田新平布下彌四郎を始めとして我も〳〵と馬を打入けれ共中々底深ければ馬の足立兼て皆漸々にして游がせける隙に眞田昌幸は難無川の向に打渡り武者振ひして莞爾笑ひし有樣は誠に希代の勇將なり直江是を見て驚破敵は川を渡るぞ矢玉にて縮めよと下知なすを眞田昌幸鎧の袖を翳て亂箭を防と雖も已に危險見えける處へ寛十兵衛穴山伊勢入道布下梁田望月根津等追々に馳合ければ高坂彈正蘆田小幡小山田飯富馬場相木跡に續て押渡り一萬二千の大軍一度に掛りしにより直江が備へ遂に切崩されてけり又川中嶋なる信玄の旗本は敵の後口より亂るを見て驚破西條山へ向ひし味方の歸しぞ引包で一人も遁すなと下知なせば今迄敗せし甲州勢俄に勇氣を增て打懸るに眞田源太左衛門是を見て時分は宜ぞと相木森之助望月玄蕃進めやと眞先掛て攻ければ謙信も今は必死と成て馳向ふ當を幸ひ切立〳〵散々に合戰す眞田昌幸は謙信を仕留んと鎗追取て縱横に馳回る又穴山入道は北條新左衛門と戰ひしが新左衛門鎗を穴山に突落され馬を返して逃行處に穴山入道源覺是を見て穢き者の有樣や返せ返

瓢と放せば謙信が肩の外れに射中たり謙信其箭を折掛し儘太刀打振て引返すを山吉玄蕃北條安藝守等懸隔り眞田に切て掛る信綱先相木森之助に山吉を防がせ望月玄蕃を北條と戰はせ己は謙信に打て掛るを謙信は能程に此所を外して本陣へ引返せしかば眞田も然のみ追ずして備へを立直しける是は一徳齋西條山へ向し跡にて合戰有ば我歸るまで待謙信を狹み討にせよと申ける故信綱斯樣に見合居遲く出て働きしなり尤も一ッには十分敵を疲勞せて一戰に破らん爲なりとぞ

眞田昌幸雨の宮渡の事幷穴山入道源覺討死の事

然程に西條山へ向し人々は斯る事とも知ずして空濠を攻越んと控しに眞田が家人梁田新平望月宇八根津金兵衛と云者を若や謙信川中嶋へ出張事も有んかとて筑摩川の邊に殘置れし處幸隆が遠計に洩ず上杉雨の宮の渡しを越ける事を聞より疾馬にて眞田一徳齋が陣へ行注進せしかば一徳齋聞て遙に川中嶋の方を見れば黑煙天を蔽鬨の聲矢叫びの音遙に聞え合戰最中と思はれけるゆゑ布下彌四郎靑山又六を以て此事を陣々へ觸させ率や我々一時も疾く空濠を攻破り謙信が小荷駄を奪ひ彼を狹討にせよやとて眞田父子眞先懸て進みければ高坂彈正馬場民部少輔飯富兵部少輔蘆田下野守甘利左衛門尉小山田彌三郎同備中守小幡尾張守相木市兵衛等我劣じと驅出〳〵千曲川に來て見れば豫て直江山城守が堰留置しにより水深うして底をも知ぬ川成ば渡べき樣な

落んと爲處を昌幸石突にて胸板を突けるに駿河守眞逆樣に落けるを昌幸一鎗に差殺し首を取て見れば謙信には非ずして駿河守なり扨も越後勢は大崩れと成て犀川の方へ引けるを我も〳〵と追討す眞田兵部丞昌輝も拔群の戰勢して下次郎と云者を討取其外一德齋の手には首數百餘級得たり仍て信玄大いに喜悦と雖も此度の戰ひに舍弟左馬之助信繁諸角豐後守山本勘介入道道鬼初鹿野源五郎を始として能諸將夥多く討れければ以ての外に悲まれける眞田の手にても老功の忠臣穴山入道源覺討れければ一德齋の愁傷大方成ず然ども嫡子小助安治は北條新左衞門を討取ける武勇父にも優しと幸隆不覺涙に哽ける扨も此度の合戰謙信信玄の勝敗何れが勝共負共定難し然共信玄始終胡牀を離ず居られければ武田方の勝成んと云も有又旗下の將士多く討取たれば上杉方勝なりと云說もあり其は看客の高評にある而已旣に其年の暮信玄一人の男子を擧く是は先達て滅亡せし諏訪賴茂の娘を信玄が妾にせられける所に其妾の產しなれば寵愛なし後諏訪の家督として伊奈四郎勝賴と名乘せける扨また其年も暮明れば永祿六年正月に至りて一德齋何となく老病に冐されしがさしも古今の智將と呼れし幸隆なれども黃泉の迎ひ來りては生を延る手術もなく實に敢果なきは人の生死なり幸隆已に命終らんと見えける時密に三男昌幸を呼近づけ子を見る事親に如ず兄信綱昌輝在と雖も汝が高才是に優りたれば天晴君の御爲にも成べき者になり幸隆此度の病氣是命數なるに因て汝に遺言爲聞　汝我に代て是を守れよ　抑　晴信公は幼年よ

せと追駈しが源覺が馬何とか仕たりけん膝を折て倒れければ源覺眞逆樣に落ける所を新左衛門馬引返し源覺を切んと馬上より切先下りに切付しに穴山運や盡たりけん眉間を切割れ起る事叶はず其内に北條家の家人馳來り穴山が首を掻切ける新左衛門大に喜悦引返さんと爲處に一人の小冠者後より聲懸父の敵遁さじと太刀打振て切て懸新左衛門自讃しや此童子生捕て召仕んと引返し大手を廣げて追廻るに童子と思ひの外太刀打烈しく遂に新左衛門を馬上より切て落し首を取て鞍の前輪に付猶も敵中に馳入しは誠に勇士と見えたりけり是則ち小助安治なり

第廿四　眞田昌幸宇佐美を討事幷眞田一徳齋病死遺言の事

然程に川中嶋の合戰は謙信不意に討掛りければ甲州勢已に全く敗せんとしける處に西條山へ向し諸將引返し眞田一徳齋を始め後陣に切入しにより謙信必死と成て戰ひながら犀川の方へ操引に引るゝ機謙信味方を放れ高野左馬之助和田喜兵衛僅三騎にて引揚らる跡は直江甘粕北條山吉を始め離れ〴〵と成て戰ふ處に眞田安房守は越後勢の中を右往左往に駈廻り謙信を討んと思ひけれ共是ぞと目指敵もなかりしが紺糸の鎧に同毛の甲を着したる大將犀川の方へ引て行を見て是こそ謙信よと思ひ鎗を撚て追掛後ろ樣に突て懸れば謙信には有で宇佐美駿河守なれども昌幸は謙信ならんと思ひければ一際烈しく突出す鎗に左の膝を充分に突れ宇佐美は鞍坪に擄り得ず

ずも延引す我死たりとも早速其方計らふべし且又我熟々後世を慮に猛將多く在と雖も天下を治る大才なし誠に此逆亂を治る者は尾張三河兩國より出るなるべし是こそ幸隆が明言と思ふべし武田家の滅亡旦夕に有恐るべし〳〵と昌幸に遺言なし七十四歳を一期として永祿六年岩尾に於て病死せり子息共は云も更なり一門郎等歎き悲むと雖も斯て有べきにあらざれば慶雲寺へ埋葬法名英譽院殿淸雲仁翁大居士と號す子息源太左衛門信綱父の家督を繼次男兵部之丞昌輝は病身なり三男安房守若輩なれども父の遺言を守り岩尾は兄信綱昌輝に任せ置其身は密に布下彌四郎貞家を引連岩尾を出て駿府に赴き圓福寺に行信虎に面謁しければ信虎不審氣なる体にて遙々此處に來り我を訪者は何成者ぞと尋らるゝに昌幸謹んで某しは眞田彈正忠幸隆が三男安房守と申者なり父幸隆此程相果候節某しを呼近づけ我死後は我に代て信虎公を訪進らせ尊顏をも拜し且又上總介樣御用をも承まはるべく武田の御家に數多の臣在と雖も新しきを得て古を忘る徒而己なれば先君を訪進らする者一向なし某し父に代りて幸隆が無二の心を知せ進らせよと申て候と涙ながらに云ければ信虎入道世にも喜悅我諸臣の諫言を聞ずして短慮の餘り近臣を害せし罪來つて斯の姿になりたれば強ち人を怨る事もなし子息信玄は我に勝勢威猛く古今の勇將なりと風の便に我子の勝軍を聞ては喜悅しく思ふぞや然るに幸隆は誠に無二の忠臣にして汝を以て尋しむる事世にも嬉き事ぞかし是成は幸隆が申越たる上總介信澄なり今年二十三歳になれども甚

り才智優れし大將なれども大い成瑕瑾あり御父信虎公を廢し又其勢ひ廣大成に乘じて奢侈に長じ美女を數多集め音樂酒宴に沉りて軍議を忘れ武門に生れ乍ら禪學を好事是智將の爲處に非ず然し乍ら禪學も諸惡莫作諸善奉行の道に寄べきを然は無して詩作問答を好座禪をなす是何事ぞや且又諸將を見事芥の如し必ず恨背く者は敵方へ內通せん是大い成害ひなり汝我に代て諸將を馴附能君を諫むべし扨又先達て駿府へ廢去せられし信虎公今は圓福寺と云禪寺に引籠り物憂活計を成るゝと聞其故は去永祿三年五月十九日今川義元上洛せんとて尾州桶狹間に於て織田信長の爲に討れて後家嫡氏實國を治る處に父の仇を報ぜんとも思ず民を苦め榮華に驕我意を振ひ寵愛の美童元服して三浦右衛門尉と云此者に萬事を計はせ重代の老臣を擯斥しかば終に長臣朝比奈兵太夫迄も氏實を恨疎んず加之先主義元が寵愛の妾に菊鶴と云美婦あり三浦此菊鶴に密通して愈々權威を振ふ義元存命の間は信虎公を大切に致されけれども義元討死の後は是を輕め誰在て尊まず信玄と內通なし今川家を亡す心有などと讒言爲者ある故信虎公今は入道して圓福寺へ移り淺猿敷暮しにて住せ給ふ事を聞然るを信玄公には是を聞流しにして御身は歡樂に暮したまふ事誠に不孝の御擧動なり信虎公駿府へ廢去せられし後妾腹に男子と女子を產男子は信澄君女子は義元在世の時我娘となされ今出川大納言晴秀卿の御簾中に座居給ふ然るに信澄君同く父信虎公と諸共に在ますにより幸隆何卒此御父子を迎へ奉つらんと思ふ處に合戰止時なき故に思は

扨も眞田安房守昌幸は信虎入道に面謁し父が忠心を陳ければ信虎大いに喜悦上總介を眞田に預け上京の用意あるに昌幸申けるは上總介殿は昌幸預り候得ば御氣遣ひ有べからず快よく御上京を遊されよ道中の附人は幸ひ布下を召具せられ然るべしとて昌幸は上總介を伴ひ暇を告上下十六人にて甲府に歸り信虎は布下彌四郎始め眞田の從者二十人ばかりにて明日京都に赴かんと用意有處に此事如何して洩けん今川氏實に告者ありければ氏實大いに駭き三浦右衛門尉を呼評議するに是迄信玄此國を攻ざるは信虎父子在故なり夫を密に連歸るは異心を懷き當家を押倒さんと爲所存ならん疾今宵の中に追手を遣し信虎入道を生捕給へと威猛高に成て宣ければ元來愚昧の氏實ゆゑ何の思慮もなく曲淵庄左衛門を大將として二百餘人圓福寺にぞ押寄たり斯る事とは毫知ず信虎入道布下貞家を始今川へ洩ざる樣に旅行の支度を調へて臥居たる處に曲淵が軍勢四方より鬨を作りて押寄たり侍士寺僧皆々大に仰天し上を下へと騷動す信虎入道猛將なれば枕元の太刀追取て立上り信虎歳七旬に餘りたれども太刀打は古へに劣るまじ恩情を忘れて向 逆徒先や微塵に爲者と牙を噛で怒られけるに彌四郎貞家躍り出鷄りを割に何ぞ牛の刀を用んや貞家參りて蹴散さんと最前賜はりたる國俊の太刀を横たへ腹卷ばかりして討て出る是に續いて眞田が從者二十人切先を揃切て懸を曲淵下知して敵は小勢なるぞ一人も遁さず討取よと十重二十重に取圍む布下彌四郎は獅子の荒たる如く當るに任せて切捲るを曲淵庄左衛門の舍弟庄九郎は大

だ柔弱なる生質なり誰にも有此悴を預る者在ば我は身を屈て居んよりは京都に上り今出川大納言殿は我婿なれば此方へ行て老體を養はんと思ふなり汝此處に來りしこそ幸ひ此信澄を預り歸り信玄は兄の事成ば宜く推擧して小祿をも與へ吳らるゝ樣賴むなりと打悄て云れしかば昌幸は不覺に落淚なしさしも猛將と呼れ給ひし信虎公の御在樣こそ方見けれ且又是に召倶し候は布下彌四郞と申て父より我に仕へ此者の父は則ち君に討れし今井貞邦が嫡男に候父幸隆を依賴遁參り候を某し方に養ひ置候處に只今にては大剛の者に罷成候と申ければ信虎公彌四郞の手を把給ひて大に歎信虎智淺く汝が父を害す事皆佞臣の爲處なり必ず父の敵と思ふなと古への事を語り歎かれける貞家大いに駭然我が父不幸にして君の御手討に逢事强ち悔に足んや君故に死するは臣の常なり黃泉の父只今の御言葉を聞ば定て成佛致すべしと神妙に申述ければ信虎黃金冑並びに來國俊の太刀を持出でゝ冑を昌幸に與へ太刀を布下に賜ふて申されけるは已に我心に懸一子を眞田に預ぬれば此上に思ふ事少しもなし是より片時も早く京都に上て老を養ふべきなりと二品を與へ是を信虎が遺物と思ひ吳られよと落淚數刻に及ばれけり

昌幸父の遺言を守り先君に面謁の事幷布下彌四郞武勇の事

にて養育致せり又信玄は嫡子義信を疎じ末子伊奈四郎勝頼を寵愛なすにより嫡子の威勢次第に衰微頼勝に阿り諂ふ者多し眞田昌幸此事を大に歎き諫んと思ひ甲府に來り早速登城なしければ信玄遙に安房守を見て能こそ來れり幸ひ庭前の桃花今盛なれば後園に諸將を集め酒宴を催し軍勢を慰めんは如何にと何日になき機嫌成ければ昌幸平伏し是は好機の參上此儀然るべしと申けるに信玄後園に出給ひ美酒佳肴を集て諸將を招く其人々には甘利左衛門飯富兵部少輔馬塲民部少輔跡部大炊介今福善九郎長坂入道釣閑小山田備中守眞田安房守を始め宗徒の諸將居並び中央には晴信入道右は伊奈四郎勝頼左りは孫六入道逍遙軒皆座席を設け酒宴を開き庭前の桃花爛熳と咲亂れ春色映はぬ方もなく盞盃の數も巡れば諸將士勞を忘れて興に乘じ己に酒酣はに及ける時昌幸座中を眺め信玄の前に進み出義信公は何故此座には見えさせたまはぬにやと問申に信玄答へて然ば義信は我が心に應せざる事有故此座を省きしなりと有しかば昌幸大いに歎きて暫時言葉もなく居たりしが漸々に首を上前車の覆へるを後車の戒めと承まはる我が父既に病死せし砌り某しに遺言致し候には君己に御嫡子を擯けんとの萌しあり是先君の君を廢せんと爲給ひしが如し義信公元來過失もなき大將成ば臣下の中是を他處に見る者而已は有べからず必ず腹心の病生ずる憂ひあらん先達て川中嶋の合戰の時も義信公御働きを御覧遊ばされずや天晴君の御後に立給ふべき勇將とてそ存じ奉つれと諫ければ信玄大いに笑ひ流石幸隆が悴程有て此信玄

剛の者成ば彌四郎を討んと馳向ふに貞家莞爾と笑ひ我が敵には似合ね共向ふ事の優しやと二三合戰ひしが布下が打太刀を請損じ冑の眞向より胸板迄割付られ二言と言ず息絕たり庄左衛門是を見て眼前に弟を討せ何條堪へんや諸卒を下知して布下一人を取卷所に一人の法師武者紫き縅の鎧に白練絹にて鉢卷し四尺餘の大長刀を水車に廻し群集たる今川勢を四方八方へ追捲るにぞ布下是に力を得て倶に敵を切崩〱追討しければ庄左衛門手勢を過半討れ駿府を指て迯返りしにぞ布下彌四郎も寺內に立戾り見れば曲淵を切捲りしは信虎にして古へに劣ぬ猛將なりと人々感じ合り此時布下彌四郎申けるは再度敵兵の押寄るは必定なり早々京都へ赴くべしと其用意を調度圓福寺をぞ打立ける今川氏實は曲淵が敗北して歸りけれども再度討手の沙汰にも及ず其儘に捨置たり然程に武田信虎は京都に着せしかば今出川大納言晴季卿の方へ赴き頓て布下は暇を給はり甲府へこそは歸りけれ何者か爲たりけん一首の狂歌を今出川殿の門に書付たり

　婿入を未せぬ先に舅入菊亭よりは武田入道

是は今出川殿を菊亭殿と號しける故なり

第廿五　武田信玄家嫡義信と不和の事幷眞田昌幸忠諫の事

扨も眞田安房守昌幸は父幸隆の遺言を守り駿府に到り信虎に面謁し武田上總介を預り歸り岩尾

に斯と物語りしけるに元來此曾根は惡智侫惡の者成ば大に怒り義信に種々惡事を勸けるゆゑ勇猛短慮の義信なれば牙を嚙で大に恚憤密に謀反の企に及びける曾根周防守は腹心の者を談合けるに此隱謀に與る人には長坂源五郎初鹿野小兵衛松村豐後守を始宗徒の面々三十餘人に及びける時に長坂源五郎進み出先日桃の宴の座にて眞田昌幸義信公の御事を諫言致したる事有ば定て是も一味仕つらん誰にてもあれ岩尾に使して眞田を味方に加へなば是に過たる喜悅は有まじと申ければ曾根周防守是こそ屈竟の事なり早々使者を遣さるべしと申により義信大谷刑部左衛門の辨舌勝れたるを撰み岩尾へ遣はしける是より先眞田昌幸は岩尾へ歸り武田上總介信澄并びに兄源太左衛門兵部之丞の兩人に對面し此度信玄に諫言を入れし事共を申聞せ我屋敷へ歸り居たる所一兩日過て大谷刑部左衛門密使として來り對面の上申けるは信玄公近來嫡子太郎殿を憎み次男勝賴を以て家督に立られんと内々御巧有のみならず義信公を害せられんと計り給ふ是に因て家老飯富兵部曾根周防等の老臣先君信虎公の例に習ひて信玄公を廢し奉つり義信公に家督御相續なさしめ進らせんと相談一決せり昌幸殿にも義信公を捨たまはざる情け有ば同心あられたしと陳述ければ昌幸大いに驚き惡き使者の口上かなとは思へ共色にも出さず御使者の趣き承知仕つりぬ然し昌幸が一存にて御味方も申難く兄信綱昌輝にも申聞せ追付是より御返事申候はんとて大谷を返し直に兄信綱の許に往義信より使者の趣申聞豫て此事起らんと存じ候處果して義

に向ひ諫言だてこそ可笑けれ我既に甲信を手に入飛騨上野も良半國づゝ切從へ勢ひ勇猛なるにより老臣たりとも誰在て我が面を見る者なし然るに何ぞや乳嗅き嘴喙を以て諭さんとは殊に義信は我が悴なり他人の敎を受んやと信玄大いに憤怒て深殿に入れければ酒宴も是限にて皆々退出致しける跡に昌幸歎息なし座をも立兼暫時落涙せし處へ長坂釣閑來り眞田殿は何を然樣に歎きたまふやと聲を懸けるに昌幸答へて武田家の危險事旦夕にあり恨むらくは飯富跡部馬塲を始め老臣達君を諫ずして滅亡を待斯る不忠の輩ら多きがゆゑに君には我を若輩なりと侮慢申事を用ひたまはず此上は昌幸劒の上に臥て諫言爲には如ずとて諸肌寛げ己に自害と見えければ長坂周章ヤレ待れよと眞田殿と刀を押ゆるを昌幸振放し君の爲に死するは武士の習ひなり何ぞ支える事のあるべきと兩人爭論ひけるを信玄走りいで天晴なり昌幸汝若輩の身を以て斯まで我を思ふ事過分なり我今我が非を知以後は謹むべきぞ昌幸自殺を止り忠勤を盡べしと云れければ昌幸ハッと平伏し未熟の某しが申せし事を御用ひあらんとは實に有難き御事なりと嬉し涙に暮たりしが再び改めて酒宴を催し眞田を饗應れければ昌幸大いに喜悅頓て岩尾に歸りける扨又飯富兵部少輔は其夜我が屋敷に歸り能々思ひけるに今日の座席に於て眞田が諫言誠に理に當ると雖も我是を思ふに御嫡子義信公の器野天晴國に保全べき君成共信玄公勝賴殿を寵愛深ければ聊かの事ありとも惣領を廢し賴勝殿に家督を讓れんこと必定なりと思ひければ義信の傅役曾根周防守

隱謀は一味有と勸しかば元來愚昧の氏實なるにより別に思慮もなく義信へ一書を送り必ず本意を遂させんと起證文を添て遣はしける義信是を見て喜悅既に我大望成就せりと飯富曾根長坂を始め酒宴を催し居られけるが義信申さるゝは斯今川家味方に方人有上は是に過たる喜悅なし然し父信玄公は中々祖父信虎公と違ひ智謀深き人成ば如何して欺き申さんやと有ければ長坂源五郎進み出さん候戰國の最中成ば越後か飛驒か何方にても御出馬有ん時を考へ留主の中に甲府城を攻取家督し給はゞ信玄公を惡く思ふ輩ら御味方に參るは必定なり其時和平を入信玄公をば諏訪の城に押込隱居なさしめ義信公には甲府を治め給はんは如何にと手に取如く申けるを飯富虎昌眉を攢めて此事然るべからず然樣なる時は不義不孝の名を義信公一人負たまはん奚ぞ其不義の大將に付從ふて忠を盡す者有んや然れば先義信公には若輩なれども昌幸が來るを待て宜く評議せられ然るべしと其日は評定止にけり然程に眞田安房守は何卒信玄義信父子の中を和順にせんと思ひ甲府へ來けるが先信玄へ謁し申けるは兄にて候信綱愚弟を以て申上候何卒御父子不和の事是御當家の破滅の基に候へば何分宜く御賢慮有べき御事なり且又御嫡子義信公は我々に暫時御預け下され度臣不才たりと雖も良からぬ御事は御諫言をも加へ御得心なさるゝ樣計らひ候はんと謹んで申ければ信玄是を聞れ扨々其方は念の入たる者哉我既に桃の宴の折柄委細は聞屆けし處なり何條義信とて勝賴とて我が子に相違なき者を疎略に爲べき樣なし昌幸未だ若輩成

信公に隱謀を勸る者有て信虎公の例に傚ひ御父公を追出し家督を繼ん企てと一決にし由此答如何計らひ申さんやと語ければ信綱暫時工夫なし是こそ大事なり信玄公へ申ては義信公を我々が讒言して殺も同じ事なり然とて聞発しに爲時は主君の御身の上大事なり双方倶に全きを計るには義信公へ御異見を申上御親子和順爲の外はなしと申ければ昌幸然ばとよ兄君の御思慮も某し心中も同じ事なり急速甲府へ往て和議を調和申さんとて夫より昌幸は早々甲府へ赴きけり

義信逆心今川家合戰の事并隱謀の人々生捕るゝ事

然程に武田太郎義信は飯富兵部曾根周防守長坂源五郎等を始め逆心を勸ける故若輩と云勇氣壯盛なる質成ば神速に同意有て先君信虎を父晴信の廢されしに傚ひ岩尾與市と云腹心の武士を使として駿府へ遣はし氏實を方人に賴れけるに今川家にては此事を三浦右衛門を呼議せられければ三浦大いに悅んで是こそ今川家に取ては吉事なり信玄其威勢近國に震ひ向ふ所破らずと云事なし近々に上洛を遂天下を掌握せんとの心底在然は當家をも攻潰さんと謀る事必定なり然るに家嫡義信隱謀を企望信玄を廢せんと爲事是天より武田の領國を當家に取と與へ給ふ所なり依て此度の企望に一味有て信玄を廢去せば自然武田は幕下なるにより甲信の勢を催し德川家を攻靡け先君義元公の敵織田信長を攻亡し天下を掌中に握る事此時に有必ず〱取外し給ふな此度の

屋敷の塀を乘越んとしけれども元來能肥りたる男故越事能はず彼是なす中生捕れたり

第廿六　飯富兵部少輔切腹の事幷織田信長勝頼を婿に取事

善事門を出ず惡事千里を走とかや武田太郎義信は曾根周防守が勸に依て逆心を起し父信玄を廢せんと今川氏眞を賴み專ら隱謀を企てられしが此事早くも露顯して村松長坂初鹿野の三人生捕れたり然るに飯富虎昌は斯共知ず閑所にて書を讀居たりし所へ舍弟三郎兵衞昌景急遽く入來りしにぞ虎昌怪みつゝ何事かと尋けるに昌景兩眼に涙を浮め兄君何故に重恩の君を廢去せんと逆意を企て給ひしぞや是臣たる者の忍びざる處にして不忠之より大なるはなし且我家は代々忠臣と呼れしに今其名を汚し不忠不義の人となり給はゞ如何なる企てあり共成就する事なし早々思ひ止まり給へと歎き諫めしと雖も虎昌然わらぬ体にて某し先君の時より戰場に赴き君の馬前に於て命を塵芥よりも輕んじ大敵を追退けし事其數を知ず然るに我今更何の不足ありて不忠不義の行ひをなし家名を汚さんや汝何を以て斯る不淨の語を出すやと申ければ三郎兵衞涙を拂ひ此度太郎義信君父信玄公を廢せんとて今川と談合逆心の企てあり其謀主は飯富虎昌なりと既に事露顯に及びしなり之にても不淨の事に有ざるやと詰れば虎昌默然として詞なく指俯向しかば三郎兵衞直と膝を進め斯なる上は是非もなし軈て此方へも討手向ふべければ討手の來らざる中に

ば子と云者を持ざる故斯樣に心片詰る能々勘辨致すべし流石に幸隆の子ほど在て憶せず我を諫る段過分なりと申さるれば昌幸は有難き仕合なりと御禮申信玄の前にて諸方の手配の軍議に數刻を移す處に義信の横目付坂本武兵衛萩原豐後守兩人急遽しく走り來り何やらん密意を書付て出しければ信玄是を見て俄に顏色を變じ汝武兵衛一人も迯さず召捕べしと怒るゝに坂本萩原兩人畏まり神速退出す昌幸怪く思ひ信玄に對ひ如何成事の出來て然樣に怒せ給ふやと問に信玄大息吐て義信已に我が老臣飯富兵部少輔傅曾根周防守を談合此信玄を廢去せんと今川家に謀じ合せし段確に聞ゆ之に依て徒黨の者を今坂本萩原に申付生捕にせんと計しなりと顏色焔火の如く見え給へば扨は事露顯しけるか我思慮大いに相違致したりと思へ共駭然たる體にて此儀一大事の御事に候へば必ず粗忽の御成敗有べからず篤と實否を御糺しの上御賢慮有べしと申置て眞田は此所を退きける旣に義信隱謀露顯しければ坂本武兵衛萩原豐後守は捕手の人數を引連一味の人々に馳向ふ先坂本武兵衛は初鹿野小兵衛方へ行何氣なき體にて君より密意有て參りしと申ければ小兵衛疾其氣を覺り扨は此度隱謀露顯しと側成刀を提て迯んと爲を坂本武兵衛手早く捕て押へ繩を掛たり扨又萩原豐後守は村松方へ赴しに折節長坂源五郎來合せ此度の密談を爲居る處へ萩原來つて對面を請ければ何事やらんと立出るを萩原が家人石原兵藏村松豐後守を捕て押へ頓て繩をぞ懸たりける其外家内の男女十六人搦め捕に長坂源五郎大いに周章迯出んとて村松が

き然共此事虎昌が身に取て覺えなき旨兼々申置切腹仕つりて候因て申譯の爲首を尊覽に入奉つる又兄弟とは申乍ら某しは一向存ぜざる處なれども人々の疑ひ思はん事も如何なれば御前にて自害仕つらんと已に切腹の覺悟に見えければ信玄聲懸ヤレ遽まるな昌景其方の忠節は豫て知事成ば何ぞ疑ひ思ふべきや必ず過ちなすべからずと止められ虎昌が首を見てさしもの信玄聲を曇らせ屢々の戰功我に代て勞戰し忠烈の士も運拙く不忠の名を取自害せし心の程の不便さよと涙を浮べ給へば諸將も袖をぞ潤しける是より山縣の家督を飯富に與へられ山縣三郎兵衛昌景と改名させられたり是は先達て信虎の爲手討に逢し山縣河內守虎清が名跡絕し故なり扨又曾根周防守長坂源五郎の兩人は國堺にて梟首せられ其外村松豐後守初鹿野小兵衛等は誅せられ武田義信は禁獄にぞ極りけり却て說美濃尾張兩國の大守織田彈正忠平信長公は織田備後守信秀の二男にして幼年の時より大志ありて誠に希代の猛將成しが元祿三年の春尾州鳴海桶狹間に於て今川義元を一戰に討亡し給ひ續いて齋藤龍興を押倒し美濃尾張兩國に威を振ひ次第に郡國を蠶食し遂に天下を掌握せんと思はれしか其近國にては武田大膳大夫晴信入道甲信兩國に威名を轟かせしかは一朝一夕には亡し難し因て先暫時は和議を結び置ざれは我が大望の妨害と成べしと思ひ種陣計策を運らされける所信長の臣下に木下藤吉郎秀吉と云者在尾州愛智郡中村の百姓彌助と云者の倅なりしが天禀の才智に長じ孫呉が秘書は深く學ばねども自然其奧義に達し深謀遠慮圖に

潔よく切腹あられよ某し御身の首を以て君の御前に出不忠なき申譯致し其場にて腹掻切ん急ぎ用意あれと急立れば虎昌も實にもと思ひ諸袒脱て腹十文字に掻切しかば昌景泣々介錯し其首を袖に押包信玄の御前へこそは急ぎけれ扨も虎昌切腹して舎弟三郎兵衛首を討て大將の御前へ參つたりと聞えしかば荻原豐後守五十人を引具し曾根周防守が宿所に押寄たり周防守方にては思ひ寄ざる事なれば家老梁田彌太夫鎧も着ず素肌の儘追取刀にて躍出近寄者七八人矢庭に切倒し猶も勇を振ふにぞ梁田一人に切立られ近寄者なきを見て荻原下知し渠勇成共一人なり手に餘らば鐵砲にて撃殺せと言程こそあれ雨霰の如く撃懸るにより其身鐵石に有ざれば亂軍に打立られ立縮みにぞ死たりける此間に曾根周防守始め七八十人鎧を着し我も〳〵と打て出秘術を盡して防ぎけるが矢玉に打縮められ遂に討取れしか共曾根周防守同嫡子兵衛尉の二人猶も屈せず戰ふ處へ萩原豐後守の家臣萱野又七郎周防守を目掛て打て掛れば周防守心得たりと渡り合少間戰ひしが如何爲たりけん周防守遂に生捕れければ兵衛尉今は是迄と覺悟を極め群集敵中へ驅入て討死をぞなしにける斯て武田太郎義信は辻六郎兵衛を以て早速座敷牢に押籠たり此時三郎兵衛昌景は大將の御前に出虎昌が首を出し大に歎き申けるは我が兄にて候虎昌儀先君信虎公より仕奉つり數か度の軍功を盡し厚恩を蒙り奉つる事山よりも高く海よりも深し然るに如何成天魔の魅れしか此度太郎義信公の隱謀に與し君を廢去爲奉つらんと謀りし事不忠とや云ん不義とや申べ

十歳の事成は婚姻を執行ふべき娘を持ず爰に妹婿濃州苗木の城主遠山甚太郎が娘を豫て養育置之を勝頼殿へ進らせ永く親しみを結び度候と禮を厚くし之を述ければ信玄聞て大に喜悦我日頃寵愛の勝頼成ば何卒似合の嫁もがなと思ひ居けるに今天下に名を得たる信長殿を舅に取ん事是に過たる喜悦なしと早速承知ありければ織田掃部介は急ぎ岐阜にぞ歸りける此時眞田安房守昌幸は甲府に在けるが此儀を聞て太だ不快の體にて布下彌四郎に語る様此度岐阜より勝頼公へ婚姻の事を勧むるは是信長天下一統の望ありと見えたり然共武田家は容易攻難きを知に依て信長が家人木下藤吉郎とやらん云者專一軍慮に賢きと傳へ聞ば渠が指圖にて娘を御食に飼晴信公を欺かんと欲する所なり彼の藤吉郎とやらん如何様に計畫共我而已は欺き得じと大音聲にて罵詈ければ布下制して君は物に狂ひ給ふか然程に思ひ給はゞ早く信玄公に諫言有べしと申に昌幸首を振て信玄公既に約を結び給ふ上は諫むる共益なしと布下が云を用ひざれば彌四郎すべき様なく先々岩尾へ御歸りあれと勸るにより眞田實にもと思ひ夫より暇を乞て岩尾へぞ歸りける斯て同年十一月十三日岐阜より信長が養女信州高遠の城へ輿入相濟是より織田武田の兩家は水魚の交際をなし兩家の臣等萬歳をぞ唱へける翌永祿九年正月十三日京都より比叡山明闇院の阿闍梨尊觀綸旨を捧て甲府へ來り信玄に大僧正の號を給ふ是豫て望みし事成ば其喜悦斜ならず時に謙信二萬餘騎の勢を以て北條氏康が領分へ亂入し相州地方所々を打破り放火して歸陣する事度々成

當ずと云事なし誠に古今稀なる智士なりと既に其名を遠近に轟し桶狹間の一戰には敵將義元を討取稻葉山の城攻には洲股川の砦を築奇功異勳屢々あるにより信長公此度の事も相談ありしに秀吉謹んで某し熟々思ひ候に今武田の勢ひ廣大にして今川義元如きの輩らに非ず最も先達て川中嶋の一戰に山本勘介討死し其後眞田一德齋は病死致せしと雖も未だ臣下に智勇の士多く勿々容易は攻亡し難し然とて此儘に差置なば往々は邪魔にもならん因て一旦唇齒の交際をなし置我が君の御望み成就の際に至りなば信玄如きの者を討事容易かるべし今和議をなすに幸ひの事あり其故は信玄嫡子を退け四郎勝賴を愛す然に依て我が君の御姪婿遠山甚太郎殿の御息女を君の御養女となし婚姻の儀を申入らるべし然して事調ひし上は又如何樣とも謀略ありと囁きければ信長聞給ひ誠に妙計なりとて織田掃部介に萬事を云含め甲府へこそは遣はされけれ

信玄上州廐橋城攻の事幷眞田信綱夜討の事

頃は永祿八年九月九日織田信長の使者掃部介甲府へ來り信玄に面謁の上申出すやう信長未だ對面は致さずと雖も武田家の英名は豫て承知する所なり信長近來尾濃の兩國を切隨へ付ては貴領信州木曾に境界を接しぬれば民百姓の往來迄も互に申分之なき爲且は日頃武功の秀名なるを慕ふの餘り伊奈四郎殿へ信長が娘を送り舅婿の交際を致し度候へ共信長嫡子たる奇妙丸さへ漸く

寄一時に鐵砲を打懸空堀に飛入〳〵一揉に乘入んと爲ば城中大いに騷動し驚破敵は朝懸と見えたるぞやと一時は周章けれ共豫て準備爲たる事成ば狹間に押伏たる鐵砲を一時に𠳿と撃放し大木大石を投出せば眞田勢打倒され或は手足を損じ死する者數を知ず然共勇に矜りし信綱成ば一寸も引な〳〵と眞先に進み難なく塀を乘越ければ逸大將は城中に乘入給ひしぞや大將討すな續け〳〵と乘入けるにより城中は釜中の沸が如く上を下へと騷動すれ共大將謙信少しも動ぜず假令敵討入たりとて小勢成べし取圍んで討取との下知の下より犇々と群り十重二十重に圍みしかば信綱勇なりと雖も多勢に叶ひ難く數ヶ所疵を負已に討れつべく見えける處へ猛將木辻別右衞門刃の徑三尺許りの大斧を片手に打振ながら馳來り近寄敵を切て拂れば是に恐れて近寄者なかりしゆゑ別右衞門信綱昌輝の兄弟を後に擁て一方を切破らんと當るを幸ひに切て廻るを謙信遙に是を見て大に驚かれ是凡人に非ず斯樣の者を討んとて我兵を多く失はん事無益なりと一方の木戶を開かせければ別右衞門欣喜眞田兄弟を救ひ東門より走り出るに誰あつて追者なく寄手我も〳〵と逃出たるは見苦しかりし在樣なり謙信圖らず勝軍され首員百五十級生捕二百人あり此中に眞田方に賴切たる別府治部右衞門望月玄蕃も討死し信綱朝掛を爲損じ大いに力を落し陣中に於て疵所の療養をぞ致しける

ければ北條氏康此事を難儀に思はれ甲府へ使者を送り御加勢あるに於ては上州廐橋の城を攻落し度候と申送られしにより信玄早速許容ありて急ぎ出陣を觸られたり從ふ人々には甘利左衛門尉山縣三郎兵衛伊奈四郎勝賴相木市兵衛馬場美濃守等其勢十萬餘騎岩尾へも催促あるに依て眞田源太左衛門信綱同弟兵部之丞昌輝家人に望月玄蕃同宇八別府治部右衛門穴山小助木辻別右衛門等を始千五百餘人甲府にぞ加りける頃は永祿十年九月九日上州廐橋の城に押寄十重二十重に取卷一息も繼ず攻潰さんと揉に揉で攻ると雖も城中には上杉彈正大弼謙信自から將として家臣には甘粕直江等の勇將を從へ楯籠られしかば少しも痿む氣色なし寄手手を替品を替千變萬化に攻ければ其城中にも又是に應じて防ぎし故寄手方便に盡ければ竹束を便りに擔ぎ連攻詰しにぞ謙信之を見られ急ぎ下知を傳へ狹間の外れより明松を投出さすれば何かは以て堪るべき甲府勢の手先隙間なく築並べたる竹束に火燃付周章狼狽處を城中より吃度見澄し大將謙信眞先に突て出ければ甲府勢嘞と崩れて敗せんと爲處に此方より眞田源太左衛門信綱千五百餘人の精兵を以て無二無三に横鎗を入揉立るに越後勢は中を割れじと早々城中へ引取ける之に依て此後甲府勢然迄攻ん共せず徒らに城を守つて居たりしが眞田信綱諸士に向ひ徒らに城を見物して居んより明朝拔懸し城を乘取んと思ふは如何と申ければ望月玄蕃別府治部右衛門等言葉を揃へ此儀然るべしと申により皆々用意をなし眞田の一手千五百人味方に知せず其夜子の刻に打立廐橋の城下に押

是を見れば眞田源太左衞門信綱なり信玄仰けるは汝先達て朝掛の時數ヶ所疵を蒙り數多の士卒を失ひしならずや夫に又此度の後殿を望やとあれば信綱兩眼に涙を浮べ父卒してより是ぞと云功をも立ず且父より相傳へし忠士を數多討せし事是に過たる不覺はなく候夫故何卒此度の後殿を勤敵追懸なば信綱死に換て防ぎ先敗を雪ぎ度候と如何にも思ひ込だる體にて述るを信玄聞れ流石幸隆が惣領なり然らば後殿を勤め候へとて夜刄丸と號し來國行が打たる赤銅作りの太刀を手自給はりければ信綱大いに欣喜三度頂戴して御前を退き我陣へ歸ると其儘此太刀を諸卒に見せ如何に方々此度信綱に後殿の役を命ぜらるゝに若眞田は腹黑敵やと後指を指れなば末代までの耻辱而已ならず先敗の耻を雪ぐ事もなるまじ依て眞田家の浮沈は此時なり我と共に討死して名を末代に留よやと下知を傳へければ穴山小助安治本辻別右衞門を始として諸卒に至る迄心を金石の如く固め後殿をぞ勤ける扨甲府勢先陣より次第〳〵に引取を見て越後勢の斥候より早速告しかば謙信是を聞れ敵引上なば其儘に致すべしとて捨置れければ直江山城守兼續急ぎ謙信の前に出甲府勢所詮叶はずと存じ軍勢を引上候により追討を懸なば宜しからんと申ければ謙信否否今日の敵は必ず追事勿れと止られければ直江爲べき樣なく我が陣に歸りける所に甘粕近江守直江が陣へ來り今敵兵甲府へ引退きしが利根川を越は必定なり之を追討せば必ず信玄が首を得べし然るを何故に追給はぬぞと云に兼續答へて然ば我も斯存ずるにより本陣へ參りて追討の事

第廿七　眞田信綱後殿を望む事并木辻別右衞門勇戰の事

爾程に眞田源太左衞門信綱兵部丞昌輝は厩橋の城へ夜討を懸しと雖も寡は衆に敵せずとの諺ざの如く城中の大軍に當り難く信綱昌輝數ヶ所疵を蒙り已に危險見えける處へ猛將木辻別右衞門大斧を以て大勢を驅散し眞田兄弟を難なく救ひ出せしと雖も眞田方にて賴切たる望月玄蕃別府治部右衞門を始數輩討死を遂剩さへ夥多く生捕れける是に依て源太左衞門は氣力を失ひ呆然として是より戰ふ心もなく只城を守りて居たりける又謙信は生捕たる者を皆庭前へ呼出し汝等今首を刎ん事安しと雖も各々其君に忠義を思ふの心より斯生捕れしならん然るを強ち是を殺すに忍びず因て命を助け返す間是迄の通り主家へ忠を盡し助命の恩を思はゞ重て主人の馬前にて討死せよとて皆々繩を解酒を飮せて眞田が陣へ返されける是を聞人皆感じて誠に天晴の大將なりと譽ぬ者こそなかりけれ此事本陣へも聞えければ信玄思案し此城何時落べき共知ず其を強て攻なば味方數多亡ぶるばかりにて所詮勝利あるべからずと思ひければ諸將を呼集め甲府へ歸陣なさんとて評議在と雖も謙信後を慕はん事を恐れ後殿は誰にか申付べきと坐中を見渡さるゝ所に馬場美濃守進み出此度の後殿拙者仕つらんとの言葉終らざるに又甘利左衞門尉晴吉進み出否拙者心得候はんと兩人爭ふ時遙末座より此度の後殿は某しに仰付られよと望者あり誰成らんと

扨も直江山城守甘粕近江守の兩將は若干の諸卒討れて厩橋の城に歸り謙信の前に出此趣きを述今日大將自身追討を懸給ひなば天晴信玄が首を利根川にて討取べきに惜い哉我々小勢にして敗軍致したりと申ければ謙信笑て定めて後殿は眞田にてぞ有つらん然に依て我追討を止たりと申されければ直江甘粕大いに駭然君の深智我々が及ぶ處に非ずとて陣所にぞ歸りける謙信夫より一月許り此城に居られしが北條安藝守を以て城を守らせ其身は越後へ引取れけり扨又武田信玄は此程の事故に付嫡子太郎義信に切腹を仰付られしに義信豫て覺悟の事成ば清潔切腹を遂らる義信時に三十歲上下惜まぬ者はなかりけり今川氏實は豫て謀じ合せし隱謀露顯して太郎義信飯富虎昌曾根周防守を始として誅罰ありしと聞て以ての外驚き何卒して此憤ほりを散さんものをと寵臣三浦右衛門尉に此事を議せられけるに三浦暫時思案して爰に良一計あり其故は今相州の北條氏康公既に信玄と唇歯の交際をなすと雖も正敷君の爲には舅君なれば使者を遣して氏康公と心を合せ兩家の領民に觸示して武田の分國へ食鹽を送る事を禁止せば甲斐信濃上野は海なき國成は鹽なき時は國民大に難儀せん其虚に乘じて軍を發しなば信玄如何に勇ありとも梅酸の湯に沈溺事案の中と事も無氣に申ければ元來思慮なき氏實成ば是こそ妙計なりとて早速使者を相州へ送り密意を委曲達しられければ北條氏康は我が婿氏實の事なれば直樣承知して兩家心を合せ鹽を止て甲斐信濃上野へは一切送らせざれば彼の國々の民大いに難儀なす趣きを信玄聞て太だ

を申上ると雖も君堅く止め給へり依て餘儀なく控えたりと申せば近江守笑て眼前逃る敵を見遁す事や有べき大將許可無とも我々が手勢を以て追懸なば敵を喰留ざる事の有べきや神速給へと云直江も同意し兩人は手勢五百人を引具し鬨を作て追懸たり此時眞田信綱同弟昌輝は後の方に鬨の聲聞ゆるにぞ扨は早敵近付しと見えたり定て謙信多勢にて追來るならんと木辻別右衛門穴山小助に備へを立させ待懸しに敵勢僅五百許りにて眞田が備に鉄砲を打掛無二無三に突入ければ信綱自ら諸卒を勵し夜叉丸の名劍にて當るを幸ひ切て廻る是に續いて木辻別右衛門大斧を片手に打振切擲れば直江が精兵切立られ備へ亂るゝを見て甘粕近江守横さまに切入しに眞田勢色めくを兵部丞昌輝穴山安治兩人勇を震ふて戰ふにぞ直江が郎等に横田孫八とて大力の勇士六尺餘りの大太刀を引拔木辻を目懸て切て懸る別右衛門少しも動ぜず斧を振て兩人二三十合も戰ひしが横田孫八太刀を打落され馬を返す處を木辻躍り懸つて斧を取直し眞向より切付しに血煙立て死てけり是を見て越後勢又色めく所を信綱大いに下知を傳へ大返しに取て返し切て懸りければ一支えもなく廐橋指て引退く眞田は追事を止め徐々と引揚けり此隙に先陣二陣三陣と段々利根川に馬筏を造りて渡し終る故信玄無事にて引揚られけるは偏に信綱が勇に寄處なり

今川北條合戰鹽止の事幷謙信義使を送る事

上旬に至り男子出生ありしと雖も難産にて内室卒去あり然共男子は恙なければ歎きの中の喜悦にて即ち太郎信勝と名付幼名をば竹王丸とぞ申ける然るに十一月廿七日に至て織田信長の使者として織田掃部介甲府に來り姫君死去の事を弔ひ今年七歳に成給ふ姫君を申請信長が嫡子奇妙丸に配耦度候御得心に於ては信長が本懐たるべしと申送られけるに信玄異議なく承知の旨答に及ばれければ眞田源太左衛門は甲府に在けるが居城の岩尾へ此趣きを通せしにより安房守昌幸此事を聞て大に驚き是ぞ信長が深き計略なり一刻も早く止めずんばあるべからずと岩尾は兄兵部丞に預け置昌幸は早馬にて布下彌四郎一人を召連一散に馳來り兄信綱に對面す信綱大に不審何故其方は早馬にて來りしぞ異變にても出來たるやと尋ねければ昌幸大息継て申けるは我が在城に變事なし甲府に異變有故急ぎ馳着たりと答るに信綱不思議に思ひ甲府も隨分穩當なり何とて異變のあらんや其は全く風聞成ん昌幸笑ふて信長より使者は來らざるやと云ば信綱然ば信長よりの使者は姫君を申請度旨申來りしなりとの答へに昌幸重ねて此度姫君を送る事後々に至りて大なる害とならん因て之を止めん爲に來りたり兄君早々此儀を明らめ信玄公に諫言あれと勸ければ信綱も横手を礑と拍て汝が妙論理に當れりとて夫より兄弟連立主人を諫めんと大將の御前に出にけり

怒り曾て我が娘を氏政に嫁せしを以て氏政は我が婿なれば是迄數ヶ度加勢をもし兵糧をも送りしなり夫に何ぞや今川氏眞と諜じ合我國を苦しむる事こそ安からね急ぎ北條を攻敗らんと軍議を運らされける處に謙信の方より太田石見守を使として信玄に達し度事ありとて來りしと通じければ信玄扨は戰書にても送りし成んと對面あるに石見守謹んで申けるは主人謙信承まはり候は近國の諸侯其許を憎み御分國に食鹽を入るゝ事を止め候由近頃卑怯の擧動に存候是末代迄武門の笑ひ種と成べし何樣近國の腰拔大將達弓矢を以て敵對成難き故然樣なる臆病の謀計ならでは其許を傷る事成難きなり然ながら第一民の困難見るに忍びず依て謙信が國元より如何程成とも鹽は差送り申べき間入用程御申越なさるべく併ながら下民の情として自然高直に鬻候はゞ其段此方へ御申越有べし屹度申付下直に致させ如何程なりとも相送らせ申べく候謙信に於て然樣成卑怯の擧動は致さぬ處なり只運を天に任せ戰場に於て勝負を決せんとこそ存じ候と懇切に申送られしかば信玄大いに感じられ御深切の一儀仰下され信玄忝けなく存じ候然らば鹽入用の節は御領分へ申遣すべし宜敷頼み入候とて太田石見守を返され夫よりして甲信上野に至る迄信玄が領分へ謙信方より追々鹽を運送致されける程に是迄よりは却て鹽相場下直に成ければ今川北條の兩將が折角の計畧も皆空事に成しに依此後は如何して窘めんと評議區々なり扨又當時伊奈四郎勝頼の内室は織田彈正忠信長より嫁せられし姫君なりしが去る春の頃より懷妊され十一月

藤吉郎と云謀士在此度も定て渠が計ひ成べし當時諸侯多き中にも當館は威勢廣大なる故急速にに攻難きを知て重縁を結び己が大望叶ひなば直に其儘兵を起し當家を討んとする謀計成事鏡に掛て見るが如し然れば疾く信長の約を棄上杉謙信と和議を調へ共に心を合せ上洛を遂信長の大望を妨げ給ひなば四海を併呑したまはん事君の方寸にあり萬一此處に於て迷を取るれば當家は信長の喰物となり申さん疾く計略を運らされ然るべしと言葉を盡して諫ければ信玄聞て誠に其方が申條一理有と雖も信長實に重縁を結び永く我が家を慕ふに相違なし其故如何と云に毎度信長より此方へ小袖を入て送る唐櫃は黒塗にして武田菱を蒔繪に書たる其體甚だ細密にして金銀を鏤めたり又其櫃を削見るに皆無類の堅地なり其上此方よりは二年に一度も使者を送らざる處に信長よりは一年に七八度づゝ必ず音物を送れり其音物皆々念の入たる珍物珍器なり是信長誠の心成ば斯様に念を入るにより何條僞りの有べきやと云れければ信綱是を聞て理に伏したる體に見えし時昌幸大いに嘲笑ひ狐人を化すに化すと見せて化さんや是信長が計略なる事君能察し給へ信玄是を聞て我心既に決せり昌幸多言爲事勿れとて用ひ給はねば昌幸長歎して盛なる時は人を制し衰ふる時は人に制せらる油斷大敵是非もなき次第なりと云ば信玄笑て汝夫等信長を恐るゝか我より見る時は群集たる蟻の如く後にわるとも恐るゝに足んやと云に昌幸又云んと爲處を信綱急遽く止めて信玄に向ひ君の御明察を承きはり我々安堵仕つり候誠に宜き儀にて目出度

第廿八　武田信玄駿府へ亂入の事幷眞田昌幸斥候の事

偖も織田彈正忠信長は遠山甚太郎が息女を我養女として信玄の次男勝頼の内室とされし處此度難産にて卒去ありしかば再度彼の秀吉に計られしに秀吉申は夫こそ易き事なり信玄七歳に成候娘の在由然れば御家嫡奇妙丸君の御家室に約束あらば愈々信玄入道を欺き易く候と述ければ信長同意され掃部介を以て此事を申入られしに信玄異議なく承知の由を申されけるに付信長大いに喜悦我が謀計疾成り然れば結納の印を送るべしとて虎の皮三枚大和錦三十卷純子百卷厚板百反紅梅織百反金蒔繪鞍十背韋皮二百枚鳥目千貫是又掃部介を使者として甲府へこそは送られける此時眞田源太左衛門信綱舍弟安房守昌幸は信長の計略なる事を知て兩人信玄の前に出で申けるは此頃織田信長殿より姫君婚姻の儀申越れし由君は如何御返答遊ばされしやと申ければ信玄然ば今信長は將軍義照公を執立奉つり上洛を遂威勢四海に震ひ朝日の登が如し然に依て信長の嫡子奇妙丸に我娘を配耦るの事承知の趣き申送れり奇妙丸を我婿として婿舅の交際を成ば武田家に取て喜悦き事ならずやと左も嬉しげに見えければ眞田昌幸兄信綱へ頻に目配せしければ信綱其意を悟て申ける樣君知し召すや信長は僞り多き大將なり齋藤龍興愚將にして終に信長に欺かれ譜代の功臣をして龍興を怨せ稻葉山の城を攻取候事偏に僞り多き證據なり渠が家臣に木下

眞田妙計今川方敗軍の事幷岡部忠兵衛討死の事

然ば眞田昌幸は布下相木寛の三人を引連て内府山より見下せば今川上總介源の氏實三河遠江駿河三ケ國の軍勢三萬餘騎を隨へ駿府の城を押出るに先陣は飯原安房守新里式部少輔千五百餘人にて澤田山金澤の邊に陣し岡部忠兵衛倉橋内藏助が五千餘人八幡平に陣取たり依て其餘の諸兵跡に續て野に滿山に蔓延兜の星を輝かし鎧の袖を引連旗指物を飜へし今川氏實が本陣は清見寺の邊にありければ昌幸篤と見積り頓て馬引返し本陣に來り信玄の前に出て敵兵の備へ斯樣〳〵と申演ければ信玄篤と聞畢り汝是を如何して破らんと爲やと問れしに昌幸謹んで某し早其設け爲置り依て術方は斯の如しと密に告けるに信玄點頭是定めて功をなさん然れば我は備へを立ん汝は早く向ふべしと仰あれば昌幸命を受て兄信綱と共に手勢五百餘人引率して内府山へぞ趣きけり信玄は先先陣を山縣三郎兵衛甘利左衛門二陣は四郎勝頼跡部大炊助今福善九郎旗本押へとして土屋惣藏金丸等なり信玄下知し興津の川上より横山通りを打立れける今川勢は八幡平に待懸たり然ば双方近接と疾鐵砲を擊懸矢を射違へ命を惜まず矢玉の限り射立擊立しかば今川家にて勇士と聞えたる岡部忠兵衛小倉内藏之助陣頭に進出諸卒を下知し今日は各々存亡を極る大切の軍ぞや日頃君の高恩を思ふ輩は今我が君の御馬前にて清潔討死せよといひ〳〵備に山縣の備へ

候と祝して昌幸を伴道下陣致したり其後信長より頼の印として數多音物を送りければ愈々約極りたり此時に當て上杉管領入道謙信は相州の北條氏康と和睦して氏康の七男三郎を養子となし上杉三郎景虎と名乗せしが謙信思はれけるは元來我信玄と度々合戰すと雖も是ぞと云仇なし只村上義淸に頼まれしより事起りしなり今一度和睦をなし信玄承知せば心を合して上洛を遂んものをと和睦の事を申入られける此頃信玄は織田家と婿舅の交際をなし是を能事と思ひ居られし折柄なれば上杉への答へには抑古へより老たるを尊敬は父の如くと承まはりければ信玄を父と思ひ人質にても送られなば和睦なし申さんとて使者を返されしかば謙信此趣きを聞れ大いに怒り此謙信に對て歲の長少を論じ無禮の返答如何ぞや此上は最早是非に及はず信玄が首を見ずんば我死共口を閉ぐまじ惡き心の坊主哉と躍り上りて怒られたり是より信玄とは讐敵の如くなりけるは是非もなき次第なり然程に信玄は專ら四海を併呑せんと計れ先上洛の事を思ひ立れければ手初に今川義實を攻亡さんと甲斐信濃上野の勢を六萬餘騎催し同年十二月六日甲府を出陣ある附隨ふ人々には山縣三郎兵衛を先陣として甘利左衛門眞田源太左衛門同安房守諏訪大炊介今福善九郎是等を宗徒の大將として駿州に打出ける信玄眞田昌幸を呼で其方內府山に登り敵の備を見定我に知せよと云れけるに昌幸畏まり候と布下彌四郎相木多八筧金五郎始め百餘人を引率して內府山へと赴きける

山傳ひに忍び行一時に鬨を作り懸氏實の本陣へ突入しに思ひも寄ぬ事なれば氏實を始皆陣中が敵と成し心地して驚破味方に反心の者在て裏切を爲とて上を下へと騷動す氏實元來憶病の大將なれば是を誠と心得大いに周章家臣三浦右衛門を引連駿府を指て迯行にぞ眞田昌幸は我が計略の如く敵は迯るぞやと大いに歡喜爰に現れ彼處に鬨を作り多勢の討入し如く見せければ駿府勢我先にと迯て廻り元來大軍の敗れたる習とて親討るれども是を救ふに遑なく子死すれども是を助る事能はず武具を捨馬を乘放し裸體に成て迯る者數を知ず見苦しかりける在樣なり爰に岡部忠兵衛は黑皮の鎧に桃形の甲を着し三尺餘の大身の鎗を引提迯る諸卒を下知して言甲斐なき者の有樣哉是ばかりの敵に何ぞ斯恐るゝ事の有んや宜々迯る者は足手纏と大身の鎗を捻て甲府勢に突て入忽地十六七人突落しければ增田新藏是を見て天晴敵よと樫木の棒に筋金入たるを眞向に翳して岡部忠兵衛に打て懸る忠兵衛莞爾と笑ひ優しき者の振舞や先此世の暇取せんと鎗取延て渡り合三十餘合戰ひしが岡部爭つて突出す鎗を增田は身をそむけしかば草摺の外れに突入しと雖も薄手なれば新藏ひるまず棒取直し岡部が甲を微塵に成と打据けるにさしも大剛の忠兵衛成共大力に討れし事成ば目眩心も消て鞍坪に堪りかね差俯向所を新藏得たりと棒を投捨無手と組に忠兵衛も大力なれば兩人暫時揉合しが互に馬を乘放し兩馬が間に落重り上に成り下になり捻あひしが終に新藏忠兵衛を取て押へ頓て首をぞ掻切たり是に依て駿府勢頼と思ふ岡部討死せしか

眞一文字に切て入三郎兵衛は大功の者なれば少しも騒がず掛合せ千變萬化して双方火水になり戰ひしが未だ勝負も見えざる處今川方に牧野上總介横合より打て掛る是を見て甲府勢よりも甘利左衛門尉が千餘人死骸の上を乘越〳〵攻戰ひ互に名を惜む勇將なれば追つ返して入亂れ此所を專途と揉立しが甲府勢の二陣に備へし武田勝頼跡部今福の三千餘人吶と喚いて切懸れば今川勢堪へ兼て岡部小倉牧野を始め大いに崩るゝにより今川方飯原安房守新里式部少輔が二千餘騎勝頼等が備へ横鎗を入當るを幸ひ薙立突立追捲りければ勝矜たる甲州勢も少し白けて見えたりしが山縣始の勇將共切入〳〵守返しければ飯原新里等の今川方も叶はず敗して引退くを氏實遙に見やり味方は色めくぞや救へ〳〵と下知有ば今川七族の瀬名陸奥守同中務少輔朝比奈備中守葛山式部大輔を始我も〳〵と三千餘騎轡衛を列べて突て懸る甲州勢も鬨の聲を作て爰を破られじと戰ひける此時眞田源太左衛門信綱は木辻別右衛門望月卯八郎根津甚左衛門塚山七兵衛を眞先に進せ二百五十餘人瀬名陸奥守朝比奈備中守葛山式部大夫が後内府山より突て下り一驂に駈破りければ今川勢大いに狼狽驚破敵は後へ廻りしぞや二手に分離て戰へと備へを引分んと爲處へ眞田方布下彌四郎貞家穴山小助安治近藤權之助荒川太兵衛二百餘人吶と喚いて岡部忠兵衛小倉内藏之助が備に切て懸る是に依て今川勢小勢の敵に駈立られ此方彼方と懸隔り十方に戰ひける此間に眞田安房守昌幸增田新藏別府太郎海野六郎相木多八筧金六郎等三百餘人を引率して裏

燼とぞ成にけり將軍尊氏より代々今川家の所領にして榮華に矜し府中の城も氏眞が代に至て野原と成事實に人間の榮枯は一夕の夢なること淺猿しくも又敢果なけれ扨も今川氏眞豫て德川三河守家康より人質として舍弟松平源次郎を預り置けるが是をも打捨落失ければ信玄矜愉て我が陣に留置けり然るに今川の殘黨駿州山西花澤の城には小原肥後守藤枝の一色には長谷川次郎右衛門遠州掛川の城には朝比奈備中守在り此掛川の城へ今川氏眞落來りて賴ければ朝比奈一議にも及ばず本丸へ請じ防戰の用意を調へ三千餘人にて楯籠りける爰に三州岡崎の城主德川三河守家康は舍弟源次郎を駿府に置去せし事を憤り其勢七千餘人にて菅沼次郎右門近藤登之助鈴木三郎大夫を始遠州井谷に差置れ其身は濱松端輪の法華寺に馬を立られ植村與三郎山岡半左衛門を兩使として信玄に申送られけるは德川自分の手勢を以て掛川へ押寄氏眞が不仁不義を誅伐す、きにより其代りには大井川を隔て遠州は德川切取申べし信玄殿には駿州を切取玉へとの口上にれば信玄聞て兩使を止此儀如何と評議有しかば眞田信綱大いに怒て申けるは如何成ば德川斯樣に無禮なる我々粉骨を盡し今川を一戰に驅破りしにより譬ば羽を取し鳥の如くなりたる氏眞を討て遠州を取んと云や言語同斷則ち家康が人質此方に在使の者の首を刎人質を切て捨よと罵さけるを信玄聞て其方が申處道理とは申ながら駿河遠江未だ切隨へしにも非ず今川家の殘黨未彼方此方に在然すれば此度の事先德川に任せ家康に遠州を取せ置て其後德川を亡すに何條難き事

ば右往左往に敗走なすを甲府勢は追詰〳〵一人も殘らず討取と息も吐せず進みける今川氏實は此時漸々七八十人にて落られける處に後より鬨の聲を動と作り眞田源太左衛門信綱が勢烈しく追懸しかば氏實今は戰ふ事も能ず一鞭加へて迯走る耳元へ雷の落懸る如き大音揚今川氏實迯る事勿れ木辻別右衛門見參せんと呼はり大斧を打振て向ひければ氏實膽魂ひも身に添ず戰慄恐れて我を助けよ〳〵と呼はる聲を聞松野坂之助踏止まつて木辻に渡り合討死なしければ此間に氏實三四十間迯延たる所に飯原安房守三百人ばかりにて走來り大將の大事此所なりと踏止り一足も引ず討死しけるにより大將氏實危險生命を助り府中の城へ迯入けり今朝迄は三萬餘の大軍成共今は漸々三百餘人に成にけり

第廿九　徳川家信玄に使者を送る事幷眞田智計演舌の事

扨も今川氏實は眞田昌幸が智計の爲に敗軍し三百餘人に過ざる小勢にて府中の城へ迯籠りけれども賴み切たる朝比奈備中守は居城掛川へ引退き岡部忠兵衛は討死し其外諸將一族郎等落失ければ此處にて各々生捕るゝを待んよりは掛川の城に落行んものをと今川上總介氏實三浦右衛門尉瀨名賴母朝比奈兵太夫を始めとして漸々五六十騎にて落失けり斯りし程に府中は忽ち明城となりければ甲府勢我も〳〵と亂入城に火を掛しかば折節山風烈しく餘煙四方に吹覆ひ一時に

す亡ぶと申家康謀略もなく智勇もなしと見ゆれども頓て天下に縱橫して英雄の名を顯さん誠に恐しき大將なり信玄笑ふて汝如何なれば德川が器量を知たるや昌幸答へて家康元來詞少くして人を馴附賞なしと雖も人擧て進み罪する事なくして人能法を守る是人和を得たる人なり譬ば漢の高祖に等く寛仁の長者と云べし然に依て昌幸豫て此家康天下に名を得ん事を知夫を君輕蔑給ふ事並々の大將と思ひ暫時遠州を切隨へさせて後我攻取んなぞ承まはり候事を笑ひ候なり但し昌幸が誤りて候か君必ず御油斷有るべからず又恐しきは織田信長なり能々見給へ頓て結婚の約をされし事失錯にして武田家の仇になり必ず渠に亡されん事を歎き候と誠心の涙混々と袖を潤しけるゆゑ信玄暫時默して閑居られしが嘘と大息吐道理なる汝が一言予今は得心致したり然ながら既に織田と婚姻の儀約したる上は今更申ても由なし予思はず勇に矜ぬればこゝに德川を輕んじたり此上謹むべし爾若輩なれども諸國の大將の氣質を能知たるは如何成事ぞやと問れければ昌幸泪を拂ひ父幸隆の遺言に合戰の肝要は能諸國の大將の氣質を知地利を考へ臨機應變の智を以てせよと申せし故我臣下の中に梁田新平と申者に十六人を付て諸國に廻し置地理の繪圖大將の生質何の合戰は斯樣〳〵と一々圖を以て我に知せし故大將の氣質幷に臣下に何某と云者智あり勇あり弱なりと皆々知て候と申ければ信玄太だ感じ我此年になれども未だ斯る深智の謀臣を見ず扨々賴母しき心中やと歡喜ばれ計らずも信玄斯る忠臣を得たり此後は何條天下に我と

の有べきやと云に信綱如何にも君の御威勢破竹の如し然れば徳川に遠州を取せ置其後是を討取給ふも易かるべしとて兩使へは承知の趣きを返事して歸されける然るに其席に昌幸居たりしが一言をも云ず信玄の顏を見ては密に笑ひ兄信綱を見ては笑ひ居たりければ信玄昌幸が若輩の身として我を輕んじ冷笑ふこそ惡けれと思されしかども此席にては何も申されず諸將退散せば昌幸一人を呼で今日我を輕蔑し罪を糺さずんば有べからずと思ひ諸將の退出を待つけ早々昌幸一人急に呼出すを眞田は信玄の召なりと聞て猶笑ひながら前に出來るを見るよりも信玄怒聲にて如何に昌幸汝今日徳川方より兩使を差越今川氏實が楯籠れる掛川の城を攻んと申送れり然に依て我徳川に之を攻させ其代りには遠州を攻取べしと許したり汝が兄信綱は徳川が申條を怒り兩使を切て捨人質を殺せと云は忠臣なり然れども我は思慮有故に徳川に承知の趣きを申遣す處に汝は何の異見も云ずして只此信玄を笑ふや若輩の身を以て利口に言廻し我を欺くとも此度は免難し覺悟致せと大に怒て申さるゝと雖も昌幸少しも恐れる氣色なく強成者は表に顯さずとなり弱者は表に強を見するとも弱が如し強ち怒給ふ勿れ某しが申事篤と御聞あつて其後死罪になりとも行ひ給へ死を恐るゝは大丈夫の爲處に非ずと云ば信玄是を聞て然らば其申譯を致せよと敎圍ば昌幸面を正して申けるは君豫て徳川を輕んじたまふ家康が心を知し召るゝかと問に信玄が曰只彼は廣忠が長男なれば渠を見る事芥の如しと云るれば昌幸然ばにて候敵を輕蔑者は必

原を出陣あり相随ふ者共には北條陸之助松田新三郎同尾張守牧野入道一庵大嶋伊賀守大道寺駿河守多目周防守荒川豐後守成田下總守千葉之助國胤原式部少輔松本次郎右衛門内藤大和守を始として惣勢四萬八千餘騎薩陲山八幡平蒲原三嶋まで段々備へを立野山に慢蔓し有様は誠に勇々敷ぞ見えにける信玄此事を聞より然ば此方よりも打て出此敵を破らんとて山縣三郎兵衛を先陣として甲州勢は先北條が後詰を遮らんとて信玄には沖津山に本陣を据ければ先陣は沖津川を前に當控へける山縣三郎兵衛昌景は如何にもして此度の合戰に比類なき働きをなし眞田安房守に耻辱を與んと思ひ我が手勢二千餘騎を引率し沖津川を一番に打渡さんと致しけるに折しも睦月の事成ば餘寒未だ嚴敷川端には氷張詰て水の冷たき事云ん方なし然に依て山縣の士卒川中まで押出し頃は寒氣身心に徹り弓鐵砲を撃んにも手屈りて打事能はず鎗長刀を遣んにも屈伸自由成ず然ば大に諸卒は困しめども山縣追立々々無二無三に北條家の先陣松田尾張守が備へに蒐違な撃掛煙の下より突入ければ松田は豫て期したる事なるゆゑ中を開て山縣を取込一人も餘さじと戰ひしかば昌景勇なりと雖も敵の多勢に包まれ大に苦戰に及びし處を荒川豐後守見澄し山縣を打取んとて三郎兵衛に切て懸るに昌景心得たりと鎗を取て渡り合秘術を盡し爭ひしが荒川も大剛の者なれば双方馬を馳違ひ七十餘合戰ふと雖も三郎兵衛が鎗先鋭くして精心亂れざれば荒川も持あまし馬を返して逃げ行を山縣大いに怒て腹黑返せ々々と追驅んとする處に松田新三郎五

敵對者あらんやと申されるに昌幸重ねて某し此術計を成事皆父幸隆の敎訓し處なれば奇とするに足ず候得共恐しきは信長の臣下に木下藤吉郎と云謀臣在て我父と同樣に間者を入諸國諸將の心を探知候此陣中にも秀吉が間者五七人は入込居べし君御油斷有べからずと申ければ信玄大に驚き何樣恐るべきは秀吉なり昌幸其方宜敷陣々の用意を致せよとて盃盞を給はり數刻の軍議に及ばれたり良あつて昌幸恩を謝し我が陣所にぞ歸りける信玄遙に昌幸が後姿を見て扨々父と云子と云天晴の器量者かなと感賞され幸隆の事をや思ひ出されけん涙含で深所に入れける此時山縣三郎兵衛次の間に控居けるが餘り昌幸の利發成を憎み己此度の合戰に比類なき働きして眞田が鼻を開せ呉んと思ける是より山縣眞田と遂に不和にぞなりにける

德川家掛川城攻の事幷山縣三郎兵衛勇戰の事

扨も德川家の先陣には酒井左衛門尉忠次石川伯耆守賴正鳥居彥右衛門尉元忠大久保七郎右衛門忠世大須賀五郎右衛門康高松平右近石川日向守家成本多平八郎忠勝榊原小平太康政是等宗徒の大將として掛川の城へ押寄十重二十重に取卷晝夜を分別ず攻ければ城中の千餘人防ぎ兼て見えたりける扨も此時相州の北條氏康は我婿氏實をば武田信玄に攻破られ掛川へ逃籠たるを德川勢大軍を以て攻詰ると聞て大に驚き我是を救はずんば有べからずとて永祿十一年正月十八日小田

陣に歸けり

第三十　昌幸智計北條を破る事幷荒川多目兩將戰死の事

眞田安房守昌幸は薩陲嶺倉澤山に控えける敵兵を篤と見積り我陣に歸りて兄信綱を招かんとて使を遣はしけるに信綱は穴山木辻淺見根津望月樫山など云一騎當千の兵八百餘人にて昌幸が陣に來るを見て頓て酒宴を設けしかば信綱不審汝如何成謀計を以て此大敵を破らんと思ふやと問けれは昌幸笑ふて計畧は密なるを良とす故に今爰に云ず先酒を呑給へと有にぞ信綱心に此度は如何なる謀計をか用ゆるならんと思ひつゝ居たりしが昌幸暫時して布下彌四郎を呼其方は是より此近邊にて酒を求め來るべしと命じければ布下畏まりて急ぎ諸方を駈廻り數多の酒を求め來るを昌幸大に悅び悉皆酒樽の鏡を打拔せ是に柄杓を添諸卒を呼出し如何に汝等今日は別て餘寒甚難し因て皆々打寄此酒を飲寒氣を凌ぐべしとて兵糧の大釜にて味噌汁を沸させ一人毎に柄杓を與へければ皆々大いに悅び大將よりの御免しにて寒氣を凌ぐ嬉さよと我も〱と酒を呑舞もあれば謠ふもありて然も勇ましくぞ見えにける信綱若々しき體にて昌幸に對ひ是は抑陣中に於て諸卒に酒を飮しめは必定過ち有らん此儀は無用成べしと云ば昌幸答て先々見給ふべし我一計ありとて士卒を呼何と皆々酒を飲寒氣をも忘れしかと問ば皆一同に然候大將の御情にて寒氣

百騎にて懸隔て双方暫時戰ひしが是も叶はず引退く所に納入代て成田下總守が五百餘人三郎兵衞を中に取込餘さじと戰ひけり昌景勇なりと雖も數多の敵に當りければ身體疲勞し諸卒を引連引揚んとて色めきければ驚破敵は引色なるぞ追撃にせよと云程こそあれ北條勢勢ひに乘じて追懸るに三郎兵衞昌景は追來敵を追返し／＼數度取て返しけるが其身も數ヶ處疵を蒙り白糸の鎧も緋縅となり月毛の駒も紅栗毛に變しかば北條勢も昌景が今日の戰ひを見て舌を震はし然迄長追もせざりしゆゑ昌景も漸々と引退き鎧に立矢を折掛しまゝ大將の前に出直餘り敵を輕んじ今日斯る負軍を引出せり願くは軍法に所し給へと申ければ信玄昌景が手を取て大に歎かれ我が手足共思ふ其方此信玄を思へばこそ全體を斯樣に破られしなりと云つゝ自ら昌景が疵に我が口を當て血を嘗藥を與へられければ見る者皆大に感じ此大將の爲にこそ各々命は惜からじと思ひけれ是ぞ信玄眞田昌幸が諫に德川家は人和を得しと聞て心を改め將士の心志を得べき爲斯なせしなり扨も信玄は山縣が疵を保養の爲後陣へ止此度は眞田安房守昌幸をして先鋒を代らしめらる昌幸命を請て布下彌四郎相木多八郎筧金八增田新藏を從へ山縣の備を預りける然るに山縣三郎兵衞後陣に止りけるが眞田我備へを預りしと聞よりも大に心憤ぞほり信玄を怨みける玆に又昌幸は手勢僅かに二十八騎を從へ敵陣を見積山縣敗して後は北條勢大いに勇み薩陲嶺倉澤山に陣を取山風に旗指物を翻へし悠然として控たり昌幸密に敵陣を窺ひ何やらん打點頭馬を返して我が

打据られ馬より眞逆樣に落る處を新藏棒直取し起も立ず打据遂に首を搔切たり多目周防守是を見て新藏を目懸て馬を馳けるを增田は同く周防守と戰はんと爲折から木辻別右衛門聲懸馳來り增田ばかり手柄して木辻は何と成者ぞや此敵は我に任せよと馬を駈入て多目周防守に切て懸る周防守聞える勇將なれば大身の鎗を撚て木辻に突て懸別右衛門は彼大斧を以て打拂ひ〳〵兩人暫時戰ひしが周防守が鎗遂に千段卷より切折れ周防守鎗投捨太刀を拔て懸る處を得たりや賢しと斧を以て擊入しに鞍坪迄切割れ二ツに成て死てけり專敗せし北條勢此兩人討死せしかば一返しもせず引て行穴山增田木辻の三將は猶も追行けるを昌幸引鐘を鳴して急に軍をゝさめ敵の捨たる旗指物鎧兜太刀の類まで悉皆分捕させ我が陣に歸り信綱に對面して討取たる首を見せ夫より大將の御前に出今日の勞働を言上し增田新藏木辻別右衛門多目荒川兩將を討取たる事を申のべければ信玄是を聞れ天晴の擧動なりと當座の褒美に兩人へ太刀一振宛下されける信玄には此度眞田が勞働を感悅有て酒宴を催されし處斥候の者ども馳來りて眞田が僅の勢に北條方數多の大將を討せし事を憤ほり此度は大將氏康自から勝負を決せんとて八幡平迄打て出たりと申ければ眞田昌幸信玄に向ひ假令氏康打て出たりとも恐るゝに足ず然ども氏康は婿今川氏實を救はんと云は僞りにして其實駿府を攻取ん志操ゆゑ味方强ち戰ひに隙取は益なき事なり今一度手痛き合戰して是を機に甲府へ御歸陣有て然るべしとぞ申ける信玄誠に予も然こそ思へり併ながら一

を凌ぎ手足暖なり候と舌皷を打て笑ひ樂むを見て昌幸指し那見よ方々薩陲嶺倉澤山の峠等に備し敵兵然こそ寒き事ならめ弓を引にも鐵砲を撃にも手屆り進退自由ならざらん平場に居る爾等さへも寒氣嚴重故酒にて暖まりし成ずや此勢ひに那敵を一當々んは如何にと申ければ皆々踊上つて勇立是こそ望む處なれ酒を給ひし其代り功名して敵の首を肴に又々祝の酒宴を仕つらんと力足を踏で悦びけるに昌幸下知して然ば打立べしと眞先懸て馬を出せば我劣じと三千餘人酒の勢ひに川を渡り薩陲嶺へ押登る折節雨霰降て其寒さ事云ん方なし然ども眞田方事共せず喚き叫んで押來る昌幸が謀りしに違はず雨霰降て寒氣殊に嚴敷ければ峠に控えし北條勢寒氣を凌がん爲皆々峠を下りて民家に入陣所々々は旗指物のみ建置て一人も居ざりしかば昌幸下知して早く小屋々々に火を懸て鎧武具を望次第分取せよ各々高名は此時なりと大音に呼はれば皆々日頃の勇に十倍して陣々に火を懸しにぞ北條勢大いに肝を消僅かに殘りし兵士も我先にと逃走るに眞田方の猛將木辻別右衞門增田新藏の兩人勇を顯して逃行北條勢を追詰々々縱横に切て廻るに北條方の狩野入道一庵は逃行味方を追返し腹黑者の狀態や敵は小勢成ぞ引包んで討取やと呼はり々々戰ふにぞ北條常陸介松田次郎兵衞荒川豐後守の三將此詞に勵され引返す處增田新藏例の樫の棒を打振荒川豐後守に撃て懸るに豐後守大太刀を指翳請つ流しつ双方劣らず戰ひしが增田怒て打込棒にて豐後守が鍬形半分より肩先掛て打下したり豐後守勇なりと雖も大力の新藏に

後より一度に放掛ければ北條の陣中驚破夜撃こそ入たれと上を下へと騒動する眞田勢鬨の聲を作り爰に現れ彼處に隱れ縱横無碍に切て廻りながら昌幸相圖の火の手を上たり甲府勢是を見て扨こそ相圖ぞとて四郎勝頼廿利左衛門尉跡部大炊之介長坂釣閑一萬五千餘騎鬨を作りて攻寄ればば北條方前後の敵に取圍まれ所詮叶ずと思ひ命辛々小田原指て敗走す甲府勢は逃るを追懸各々手柄をぞ顯しける眞田は軍を治め大將の御前に出是を機に歸陣の事を勸ければ信玄先勝鬨の式を取行ひ甲府へ歸陣せんと諸勢を纏引揚つゝ勝手明神と云社の前へ來掛りしに信玄の馬忽地跳上り信玄落馬有ければ近習の諸將大いに駭きて介抱なせしに然迄の事もなかりしかば乘物に移られ此社は何と云神ぞと尋ねられしに近習の者答て是は勝手大明神と稱へ候と申ければ信玄思す樣勝手と云神の前で我落馬せし事如何にも不審やと心に懸つゝ甲府へ歸られける爰に織田彈正忠信長は義輝將軍を京都へ上洛なさしめ威勢畿内近國に震ひ何卒天下一統の志ざしを立んと思れける處なれば何分武田信玄が威勢當り難きにより百方と心を碎き給ひけるが家臣木下藤吉郎秀吉其身京都に在ながら諸國に間者を入國々の變を窺ひける然るに此度武田信玄今川を攻潰し北條の後詰と戰ひしが眞田昌幸と云者智計を以て北條家の大軍を破り其後甲府へ歸陣の途中信玄勝手大明神の前にて落馬致せし事を委曲告來りければ秀吉大に喜悦既に信玄が命數を縮る時至れりと密に一首の歌を作りて甲府へ遣し間者に是を謳はせ何國ともなく流行せける其歌に

る其翌日信玄には四郎勝頼を大將として甘利左衛門尉長坂入道釣閑跡部大炊介を差添惣勢一萬五千餘人にて八幡平に撃て出る敵兵は眞田に昨日切立られ多目荒川の兩將を討せし事を安からず思ひ双方箭合せを射違へるや否や鬨を作りて散々に戰ひける跡部大炊介は眞田が敵中へ深々と切入を見て我も手柄を顯さんと日の丸の指物を押立て三百餘人敵中へ切入と雖も北條方は昨日の敗軍を雪んと思ひ居ける事なれば思ひの外切廻られ跡部は四度路に成て見えけるを長坂釣閑是を救はんとて馳入倶に大敗して引退き跡部は敵中に取巻れ已に危險見えける處に四郎勝頼甘利左衛門尉一萬餘人の大軍敵の中軍を切破り遂に跡部を救ひ出し是より双方入亂れ追つ捲つ戰ひしが既に夕陽に赴きければ双方ともに引揚けり

木下藤吉遠計を以て信玄を欺く事并眞田昌幸木下が遠計を拆く事

然るに其夜眞田源太左衛門信綱同安房守昌幸は宍山木辻望月根津增田を從へ其勢千五百餘人倉澤山の腰を廻り大筒小筒を多く持せ北條氏康が本陣の後へ出しは夜も三更の頃なりしが暫時敵軍を窺ふに晝の戰ひに勞れ果篝火焚捨大に油斷の體成ば眞田喜悅時こそ好れと大小砲を本陣の

秀吉こそ面悪けれ我此返報に一の書翰を以て秀吉が肝を冷させ呉んと大いに怒れば信玄昌幸が豫て云し智略を感じ古今に又と得難き名士なりとて信州上田の城を與へしにより昌幸恩を謝し是より上田の城へ移轉しが其後昌幸何やらん書翰を認めて京都へぞ送りける

頼む甲斐なきにつけては誓ひなし勝手の神の名こそをしけれ
信玄は落馬の後種々と心に懸て晝夜案じ煩ひ若や我命數限りし兆候にや有んと樂しまざる折柄甲府近邊怪き歌の流行たり頼む甲斐なきに付ては誓ひなし勝手の神の名こそ惜けれと謳ひければ信玄扨は我命限りける前表なり我大望水の泡と成けるかと此事を寐ても覺ても苦になし日増に疲勞致さるゝに付諸方の名醫を集て種々療治を加らるゝと雖も其甲斐なく今は食事も進まねば甲府の諸將大いに驚き扨は此程何國共なく怪き謳の流行出せしは此前表の始にて有けるかと皆々恐れを成ざるはなかりけり眞田安房守是を聞て扨は織田家の猿冠者我君を欺きしな乞や我君の病を癒さんとて甲府へ來り急ぎ登城して信玄の病床を訪奉つりしに信玄頼み少なき體に在しければ昌幸進み寄君の御病體は如何に候やと伺ひしに信玄答へて甚だ苦し我此度は所詮本復覺束なしと聲を曇らせ宣へば昌幸是を承まはり君の御病氣の根元を直さん良藥あり之を用ひ給はゞ忽ち平癒すべしと聞信玄起直りて夫は如何なる良藥ぞやと尋ね給ふに昌幸答へて御病根は頼甲斐の歌に候はんと申せしかば信玄驚き汝我病の根元を如何して知たるぞや昌幸笑ひて是信長の臣下木下が謀事にして是ぞ人を欺く子房が智略なり君必定欺られて萬金にも替難き尊命を失ひ給ふ事勿れと申せば信玄限なく悦び汝が一言に因て我が病氣既に治したり疾々北條を討て上洛を遂豫ての望みを遂んとあれば昌幸も倶に欣喜童子が歌を以て我君の命を縮んとせし

校訂 眞田三代記第貳編

第一　眞田一計秀吉を欺く事幷昌幸信玄へ諫言の事

敵を知り己を知る者は戰ひ必ず勝と宣なる哉眞田安房守昌幸未だ年若なれども能彼此の機を慮り北條の大軍を追崩し勝利を得たりしかば武田信玄大いに喜悅と雖も斯北條と度々戰ひを交へる中に若や上杉謙信其虚を襲はんも謀り難し早々歸陣すべしとて取て返し勝手大明神の社前を通行の時如何なしけん落馬ありし事甚だ以て不吉なりと君臣共大に心を痛めける折から織田信長の臣羽柴秀吉此由を傳へ聞時こそ來れ遠計を以て信玄を害せんと計りしを眞田昌幸早くも此事を悟り主君信玄に諫言なし秀吉が謀計を摧き其後京都へ書簡を送る此時羽柴秀吉は京都の政事を掌どり居たりしが甲府へ入置し間者より信玄此方の謀計に當り病床に打臥し由の注進を聞て心中大に悅び我が謀事既になれり信玄を亡ふは今此時なりと獨笑みして居たりし處信州上田の城主眞田安房守より使者入來の由告しかば秀吉怪み昌幸は漸々此頃上田の城を與へられしと聞しに何用有て我が方へ書簡を送りしぞ是全く緣者たる織田武田なれば定めて通例の見舞成べしと使者を呼入昌幸が書簡を披きしに他の文言はなく只一首の和歌あり

校訂眞田三代記第壹編終

怒り給ふぞと申げれば秀吉大に笑ひ是僞りなり斯る智將を何ぞ闇々亡なはんや見給へ秀吉が恩を施し頓て幕下に付ん者とて眞田が使者を重く饗應早々返簡を認め返されける深意の程こそ凄まじけれ時に永祿十二年六月なり斯て眞田は使者の歸りしと聞急ぎ呼寄京都の樣子を尋ね秀吉より如何返事せしぞと披き見るに其文体甚だ叮嚀にして怒りの心少しも見えざれば昌幸心中に怖れを懷き誠に秀吉は池中の龍に等き武士なりと彌々內心に感じたり此時小田原の北條は數度武田と鉾先を爭ひけるが武田方諸士の手分をなし諸方の道を取切て攻る体を爲ければ北條方是を見て諸軍を彼方此方と分遣せしにより小田原本城は殊の外無勢になりけるを武田の細作窺ひ知り急ぎ歸りて斯と告しかば信玄大に悅ばれ我此度諸方より小田原を攻る体を見せし事は小田原の兵を減せん爲なり然るに氏康父子此謀計に乘て諸方への手配をなし小田原の兵勢減せしは是我が謀計成就せり急ぎ軍馬を發せんとて高坂彈正忠正信に六百餘の勢を加へ上杉勢の押へとして海津の城を守らせ置信玄自分將として一萬餘騎を從へ迅速に小田原へ發向せんと定められける處に昌幸此由を聞急ぎ登城して信玄に謁し當年は暑氣甚だしく然るに軍を起されなば陣中にて諸卒病を受對陣心に任すまじ然共勝利と云慥成處を見定めなば進退暑寒に因べからず君には何を御目的にて軍を發さんとは爲給ふぞやと申せば信玄答て我遠計を以て北條が枝葉の城々へ軍馬を向る體をなすは是僞りにして實は小田原の軍勢を減じさせ無勢なる所へ押寄て

難波津の蘆わけ舟にをどされて　菅の庭鳥立さわぐなり

秀吉是を見て良暫時考へしと雖も當時は軍事に紛れて未だ歌學の心懸なかりしかば更に其意味合點行ず繰返〳〵讀居たりし所へ竹中半兵衛重治來りければ秀吉悦び竹中好所へ來りたり武田家の臣眞田昌幸方より斯怪き歌を送れり某し按ずるに我が不學成を侮り体もなき歌を以て我を迷はし返事の樣子を探らん爲成べし憎き眞田めが振舞哉乞や引裂捨んと大に怒りけるを竹中制して眞田昌幸は未だ若輩なれども中々尋常の者に非ず何ぞ童蒙の戯れをなすべきや而歌は何と申送りしぞと尋ぬければ秀吉彼の歌を出し竹中に見せられければ治重之を篤と視て眉を顰め難波津の蘆わけ舟とは誰を指たる辭かは知らず菅の庭鳥とは歌道の秘密にして蛙の事と聞及ぶ立騷ぐとは心得ずと考へ居しが暫く有て手を拍一度は駭き一度は感じ扨怖ろしきは眞田なり先達て君の遠計により甲府表にて童謠を流行せ信玄が心を苦しめしを彼必定此方の謀略なる事を知て斯る蛙のなす如き事は幾度行ふとも昌幸が蘆分舟となつて謀略の穴を見顯はし立騷がせんとの事なるべしと申ければ秀吉直立上りて憤ほり我遠からず昌幸が生首見ずんは有べからずと以の外に立腹爲給ふにぞ竹中笑つて昌幸は忠臣なり信玄在事を知て信長公在する事を知らず臣として君の爲にするは理の當然なり斯る智謀の士を味方になすこそ良將の工夫なれ何故に然は

なるを窺ひ攻る事を知らざらんや然れども甲府勢諸城を攻る眞似をなす故若やと危み斯は手配りなしたるものなり君必ず侮り給ふべからず兎角前後に心を付給へ北條上杉何れも深計あり欺きて攻懸らば大なる破れを取べしと申せしに信玄然らば如何して能らんやと云るれば昌幸答て君には兎角國家を保ち仁恩を以て百姓を撫育し諸將を勞ひ心安く時の來を待給へ昌幸及ばず乍ら一計を以て北條上杉の兩家は戰はずして勞らせん事掌中を返すが如し其時變に應じ一度に攻給はゞ忽地破る可なり必ず御心を苦め給ふ事勿れとの詞に信玄も心迷ひて決し兼終に其日の軍議は止にける然るに眞田が歸りし跡へ小山田兵衛尉信茂參上せしに信玄何やらん工夫の體に見えければ信茂進み寄君には何を御思案遊ばし候やと申に信玄小山田に向ひ我此度遠計を以て小田原へ軍馬を發せんと思へ共眞田安房守强て之を止む其も又一理ある故に我心未だ決せず思慮を運らす處なりと有しに小山田問て眞田は如何申て止め候や信玄曰く眞田は專ら謙信を恐れて此軍無用なり今暫時軍を止め國を護りて動く事なく見合せなば戰はずして上杉北條の兩家を破る籌策ありと云り之に依て心中如何せんと迷ふなりと云るゝに信茂問ふて君には眞田が詞當れりと思ひ給ふか又軍を發さんと思召けるやと申に信玄云にや及ぶ我が心偏へに軍を發せんと思へばこそ斯は工夫なすなり小山田聞て然らば御思案にも及ぶまじ迅速に兵馬を發し給へと申に信玄猶躊躇恐くは眞田が申如く敵方に備わらん事を恐るゝ故未だ心決せずと仰するを小山田

直に小田原を攻破らん然る時は根を斷ち葉を枯すの道理にして支城の降らん事立て待べし今氏康小田原の勢を諸方へ手分なすは既に我計略に當れり依て迅速に軍を發し小田原へ攻入んと思ふなり是汝が云目的なりと有ければ昌幸眉をひそめ此儀誠に遠計ならずして大なる誤りなり其故は上杉謙信豫て北條と交りを結びたれば君萬一小田原を攻給ふと聞ば必ず其虚を襲ふべし此手當は如何に候やと申に信玄冷笑て若輩者の過言なり老功の我何ぞ斯程の事を倥らんや上杉勢を防ぐ爲高坂を以て海津の城を守らせたり之に因て後を遮らるゝ憂なしと云れしかば昌幸又其軍勢幾何ありやと問信玄六百餘人を殘せりと答へらる眞田面を正し上杉は智勇兼備にして古今の英雄なる事今天下に双ぶ者なし然るに僅の小勢を以て是を防がんとは是如何成事ぞや若謙信が爲に海津の城を攻取れ甲府へ亂入されなば何樣の術あり共勿小田原等を攻給ふ事なるべきや扨々覺束なしと申ければ信玄も此言葉に心付暫時思案にこそは及ばれけれ

小山田信茂軍議の事幷信玄小田原へ雷發の事

斯て眞田安房守が軍議にさしもの信玄も當惑の體なれば昌幸膝を進め最前も申上る如く君の御目的相違仕つると申せしは此度北條氏康小田原に在處の勢を所々に分遣す手配りは謙信既に武田の後に備しが故なり殊更北條家には大道寺駿河守松田尾張守の老將あり武田方小田原の無勢

馬前に出て此度の出陣直ちに小田原へ寄せんよりは敵の備未だ整はざる名倉城に發向有て然るべしと申ければ信玄莞爾と笑ひ給ひ流石は幸隆が悴天晴の軍慮なり我も然こそ思ひつれ汝先陣仕つれと命せらるれば信綱昌輝の兩人畏まりて打立ける處に山縣三郎兵衛進み出て此度の合戰は先鋒に進み天晴高名せんと豫々心掛て候へば何卒某しに先陣仰付られ下さるべしと願ひけるに信玄首を振否〳〵先陣は疾眞田に申付たり因て二陣に進むべしとありしかば山縣昌景心中大いに怒りを含み退出たぞなしたりける

第一　武田勢名倉城攻の事幷名倉下野守戰死の事

扨も武田信玄は眞田信綱同昌輝を先鋒に進ませ二陣は山縣三郎兵衛三陣は甘利左衛門尉中軍の前備へは伊奈四郎勝頼夫より晴信入道信玄の旗本後陣は小山田諏訪衆都合二萬八千餘人永祿十三年六月廿八日府中を出馬ありて武州江戸葛飾へと發向あり其道々の民家へ放火なしつゝ名倉の城へ向れたり此名倉の城には北條方名倉下野守正俊立籠れり因て先手始に此城を攻落し其後小田原へ亂入せばやとて惣勢既に城を取圍み鯨波の聲を發して攻掛〳〵城際迄到る處城中豫て待設けたる事なれば狹間の陰より弓鐵砲雨霰と連發に打掛此處を泉途と防しかば大手に向ひし眞田が先手矢玉に射縮められ矢庭に討るゝ者數を知ず是を見て跡に備し眞田勢攻厭倦で只城

冷笑眞田が言葉一理あるに似たれども其一を知て其二を知らず古語にも云ずや先んずる時は人を制し後るゝ時は人に制せらると今君の遠計の如く眼前に北條の無勢なるを知り乍ら之を餘所に見る事やある且又既に北條も上杉も當家と數度合戰に及ぶと雖も未だ曾て負色を見せし事なし因て上杉に於ても武田方の鋒先は豫て知つる事なれば事何ぞ足長に甲府へ攻入んや然れば高坂の押へにて事足ぬべし其間に君は小田原へ攻入給へ某しは是より郡內に歸り精兵を以て武州戸取山より向ひなば假令敵方如何成奇計あり共何ぞ攻られずと云事やある追付北條父子が首を見ん事信茂が鋒先にあり眞田が樣に恐れなば何時を期して合戰すべき必ず渠が言葉に迷ひ給ふ事勿れと勸めしかば信玄手を拍て悅び汝が言葉極めて我心に適へりとて直に諸將へ觸られ近日出馬の用意あるに昌幸は退出より兄源太左衛門方へ到り今日信玄を諫めし事共を語り居る處へ信玄愈々軍を發せんと有て陣觸の使者來れりと聞昌幸駭き早速使者に對面し此軍は誰が勸めしやと問ば使者是全く小山田信茂なりと答てぞ歸りける跡にて昌幸は信綱昌輝に向ひ事爰に迫りしは是非もなき次第なり斯なりし上は某し是より海津へ到り高坂と共に謙信が勢を防ぐべし兄君達には此度の軍斯樣々々に仕給へと計策を申置て其身は直樣海津へ赴かんと事を甲府へ告置翌日手勢百五十騎信玄より加勢五百騎合せて六百五十騎を率し海津の城へ赴きけり信玄は眞田が諫めを聞入ず出馬の用意を整へ已に發せんとせられし時眞田源太左衛門信綱兵部丞昌輝兩人

突碎かれ何かは以て堪るべき呀と叫ぶや否馬より落て息絶たり此勢ひに辟易しけん山縣勢大に亂れんとするを三郎兵衛大太刀を眞甲に差翳し下野守に切て掛るに名倉は眞柴を討取猛勇盛んの折成ばシャ威稜しの有様や汝も倶に冥途の客になし呉んと云儘に上段下段と戰ひしが名倉勇なりと雖も數刻の戰ひに身體勞れ山縣が尖き太刀打を對戰鑓鎗の柄中を切折れ太刀に手を懸る處に山縣得たりと大喝一聲雷の如く切付しに名倉は眞甲より胸板迄割付られ血煙立て馬より撞と落ければ頓て首をぞ取たりけり是に因て名倉が殘兵右往左往に敗走なすを追立〳〵分捕高名數知らず遂に難なく名倉の城を攻落し手始め好と勝鬨を作り勇氣凜々として直樣綱嶋まで押來りし頃は早日も西山に傾きしかば勝手知らざる敵地へは深入無用なりとて其夜は爰に陣を据てぞ居たりける斯て北條家には此度武田勢亂入に依て氏康大に駭かれ諸將を招き甲州勢破竹の勢ひをなして攻來る如何して是を防がんと有ければ大道寺駿河守松田尾張守詞を揃へ豫て上杉に好宜を通じ交際を結び置しは斯る時の爲なり急ぎ使者を送り信玄が後を襲せ其後此方には方術何程もあらんとて先上杉家へ使者を以て斯と申送られしに謙信異儀なく承知せり扨又信玄には諸軍を率ゐて武州へ出張なし名倉の城を攻る事急なりと注進櫛の歯を挽が如くなれば氏康加勢として北條陸奥守氏照に橫地監物布施出羽守等二萬千餘人を差添て之を遣はし武田勢若又〻[illegible]よりも攻入事もあらんか然すれば戸取山は難所なれば此處に伏兵を置敵の大軍を切崩すべしと

を打守り居たれば信綱大に怒り我主命を奉て先手に進み乍阿容〳〵と城を守り居こそ易からぬ我に續や者共と鎗追取て眞先に進み打懸る矢玉を事共せず鎧の袖に受留〳〵進けれは相木寛増田穴山別府根津望月等の勇士ども主人に勵まされ我も〳〵と攻登れば城中爭か堪べき難なく三の曲輪を乘取れ城兵二の丸に引入猶死力を盡して防ぎ戰しかばさしもの眞田勢少し勞れを生じ始の勝を好機にして一息吐んと扣る折柄山縣三郎兵衛は此度の先陣に進み高名せばやと思の外眞田に先を越れし事如何にも殘念なりと心中に怒を含み居し故時こそ得たれ乞此城を攻落し眞田に鼻を明せんと五百餘人の精兵を引具し入替りて只一揉と攻懸る城將名倉下野守今は此城保ち難し潔よく一戰して討死せんと心を定め城門を開かせ大將下野守淺黄糸の鎧に金の芭蕉の前立打たる兜を着し屈竟の精兵三百餘人を前後に從へ山縣が備に面も振ず切て入右往左往に切立〳〵自身鎗を取て突廻れば山縣勢突立られ散々になる所を山縣が家人石川九郎兵衛と云者鎗を捻て名倉を討んと突懸る下野守優き者の振舞やと二三合戰ひしが終に石川を一鎗に刺貫く是を見て眞柴鬼市兵衛と名乘刃の徑二尺餘の大斧を打振名倉を目掛打て懸を名倉は心得たりと請流し須臾は支え戰ひしが下野守思ふ樣此敵勿々我が及ぶ所に非ず一計を以て討取んと態々鎗の手を亂し馬を返して迯出せば眞柴は是を誠と心得討取て我手柄にせん者と斧を振上追駈るを名倉は謀り得たりと心に悅び十分に僞引寄振返り樣英と鎗を突上しに眞柴が内甲より頭腦をかけて

事なり我ならで本陣を守る者非じと手勢五百餘人にて北條勢の大軍へ割て入右に當り左を破り漸やく信玄を救ひ出し備へを立直し信綱昌輝の兩人信玄に向ひ兎も角一先軍を收め給へと勸めしかば信玄實にもと思はれ然らば疾く引取べしとて山縣馬場を後殿となし敗兵を引纏め甲府を指て引退かれたり兎角して夜も白々と明渡れば北條方は一夜討懸て思ふ儘に勝利を得今は追討を懸るにも及ばじ是を好機に歸國せよと勝鬨を作りて歸陣をぞなしたりける此時小山田兵衛尉信茂は我こそ此度北條方を一戰に破りて稀代の手柄を顯し眞田めに鼻明せんと郡內の軍勢五千餘人を引具し武州戸取山に指掛り先陣既に川原宿迄進みし處忽地一聲の鐵砲響くや否や戸取山の切所より右に松田左に大道寺眞黑に成て討て出ければ小山田信茂大に駭き周章狼狽大方成ず備を立よと下知すれども敵は目に餘る大軍と云殊に待設けし事なれば得たりや應と散々に駈立けるに味方は是に引換小勢と云思ひ寄ぬ事なれば大に亂れ右往左往に敗走す此時小山田が老臣潮田右京大音聲に呼る樣何條此勢何程の事か有ん只一揉に駈散せと鞍上に立て下知する處に松田が鐵砲組窪新十郎と云者鐵砲を引提つか〳〵と歩み寄眞向目懸けて打放せば呀と云ひて潮田右京は馬より眞逆樣に打落されて死たりけり爰に小山田が家臣に秋月八郎兵衛とて名を得し勇士ありけるが窪が有樣を見て取り此は易からぬ事なりと群集たる北條勢を打破〳〵獅子の荒たる勢ひにて息をも繼ず駈立れば松田大道寺が精兵共秋月一人の猛勇に切立られ散々に敗せんと

の事なり北條氏照は後援の役を蒙り勇み進んで馳行處早名倉城は攻落されしと聞て暫時思案し名倉落城に於ては定めて敵兵驕怠たるの心を生じ今宵は然迄用心も致すまじ然れば敵の不意に乘じ此大軍を以て夜討を懸なば一汐付ぬ事は有べからず乞其手配りを爲よやとて白鳥の羽を以て合印となし是を兜に差又合言葉を定め愈々手配り整ひければすは打立よと下知の下より我後れじと小佛坂を越て綱嶋の本陣に押寄ければ氏照の軍慮に違はず武田勢名倉の一戰に打勝て諸卒大に勇み悅び今宵敵兵の向はん事は夢にも知らず篝を焚捨何の用意もなく殊に眞田信綱は父にも舍弟にも似ず心悠なる者なれば此夜討の備も心懸ざりし者なるに始め名倉の城を攻ん事を信玄へ勸められしは是皆弟昌幸が申殘したる謀事なりとぞ時に北條方は易々と小佛坂より甲州勢の後へ廻り時分は好ぞと云儘に英々聲を揚て攻入たり然ば軍事に怜悧き武田勢も今宵夜討の入べしとは思ひ寄ざる事故大に駭き騷ぎ殊に本陣へ切入たりしかば愈々周章狼狽所に北條方横地監物が五千餘人本陣を切破り〳〵信玄遁すな生捕と無二無三に攻立しかば何かは以て堪るべき信玄の旗本上を下へと迯迷ひ散々に敗走す

小山田信茂敗軍の事幷眞田昌幸萬全の謀計を述る事

旣に此時は眞田源太左衛門同兵部丞大に周章すは大將の旗本大切なるぞ弟昌幸が申せしは此

り因て我不肖と雖も此意を襲今天下糸の亂れたる如く東に北條北に上杉西に織田南に徳川等英雄豪傑の輩出して雌雄を爭ふ之を切鎮め武名を四海に轟かし武田の天下となさんと欲す如何なる籌策を以てせん如何に〳〵と在ければ昌幸答へ申けるは匆々一朝一夕にして此大敵を一時に破り天下の大亂を鎮むる事能はず兎角君には先にも申如く甲信を保ちて時の來るを待給へ古し三國の世魏の曹操呉の孫權蜀の玄德と各々別れ英雄蜂の如く群卒蟻の如く勃興て合戰止時なし時に諸葛亮龐統仲達周瑜抔比類なき者共出て互に天下を爭ひしが終に一に歸して司馬炎之を取是獨司馬炎が强きに非ず何ぞ呉魏蜀に勝んやなれ共天此人に治を授け給ふものか終に天下を定めて三國を亡さしめたり治極る時は亂生じ亂極る時は治生ず君甲信だに安んじ給はゞ頓て治を生じて武田の天下とも成べしと譬を引て金玉の謀事を奉つりければ信玄誠に汝が申所當然の理にして萬全の謀略なりと表には悅びの體を見せけれ共心中甚だ快よからず只管に天下を定めんものと急ぎけるは我が命數の限りある事を知ず只及ばぬ天下を望みけるこそ憂悒かりける事共なり

第三　信玄再度小田原へ發向の事并相模川合戰の事

去程に眞田安房守昌幸は君に諫言を奉つりし所信玄も理の當然なるに表には眞田が勸めに隨が

する所に三浦宮内少輔北條河内守等新手を以て繰出せばさしもに亂れたる松田大道寺が備又立直して攻戰ふ是に依て秋月九郎兵衛心は矢猛に思へ共防ぐ事能はずして終に亂軍の中に討死せしかば北條勢勝に乘て駈立〳〵攻付ければ小山田勢は散々に切破られ這々圍みを切拔て蜘蛛の子を散すが如く郡内指て敗走す然るに眞田昌幸は海津の城に在て種々軍慮を運らし若謙信裏切せば秘計を以て防がんと思ひける內早甲府勢北條方に切立られ敗北しけりと聞よりも然こそ有べし併上杉出陣せざる中にて仕合せなりと心中に悅び甲府の城にぞ歸りける斯て信玄倩々思はるゝに此度眞田安房守が諫言を用ひずして出陣し北條に打負大に失敗を取しは殘念の至なり如何してか會稽の恥を雪がんと思案に暮て居られし折柄眞田安房守が歸りしと聞早々呼寄如何にも恥入たる面色にて誠に汝が言しに違はず利なくして敗軍せり是全く汝が諫めを用ひざるより斯る失敗を取しにて實に殘念の至りなりとわれば昌幸笑つて君の見給ふ所甚だ以て相違せり某しが申せしは只上杉が後を襲ひ攻ん事を怖しのみなり夫に謙信は出張なくて却て北條勢の夜討に敗し給ふ之昌幸が計らざる所なりと申ければ信玄只心中大に屈して再度昌幸と軍議爲べきぞと毘沙門堂の閑所へ招きて扨信玄申さるゝは如何に昌幸豫て汝も知る如く我が先祖武田大膳大夫義信右幕下賴朝公にも從はず獨立の志ざし深かりしが運氣を計り迚も叶はざるを知り止事を得ず賴朝に從ひ甲信を守て安んじ給へ共遂に素志を遂給はざる事如何にも遺憾の至りな

條を攻んものと其儘諸將へ陣觸を爲し軍を出す議に一決せらる既に此時八月中旬なりしが眞田昌幸此事を聞て大に駭き君を諫て此事を止めんと取物も取敢ず急ぎ登城し拜謁を乞けるに信玄は今昌幸に對面なさば又々妨げ致す事有べしと逢給はねば昌幸詮方なく兄信綱昌輝に對面して此度信玄公又候諸士の勸めに依て軍を出さんと仕給ふ事扨々是非もなき次第なり北條は一朝一夕に易々と攻落さるべき者に非ず此度發向ある共捗々敷勝利は有まじ併ながら少しは地の理に叶ふ處あれば小田原迄は亂入有て然るべし又諸將も先日脆き負を引出したれば此度は耻を雪がんが爲手柄をなす事も有んか某し此度も海津に於て上杉勢を押ゆべき筈なれ共少々仔細あれば小田原へ向ひ候間兄君達は海津へ赴き構へて海津を能守り給へ若し謙信出陣なくば早々御知せあれ某し奇計こそ有と申ければ昌輝答て其方の云るゝ所道理に聞れ共理に當らず其故は我々に海津の城を守らせ其身は小田原に向ひて高名せんとは甚だ我が心に適はず然樣なる腰拔役は誰になり共致させよ我々は此度先手に進み先敗の耻辱を雪がずんば有べからずと聞て昌幸誠に兄君の思召は然こそ候はん成共勿々然樣に非ず又海津の城を守る事腰拔業との仰なれ共全く戰ふのみ忠義と云に非ず謙信程の強敵を防ぎ給ふは是英雄なり某し此度小田原へ赴くは人口を塞ん爲なり其故は安房守は軍を嫌ひ尻込する抔と申者も有らん因て我此度こそ比類なき働きして小田原迄切入華々敷合戰すべく思ふなり然ながら小田原迄切入事は易しと雖も勿々城の落し難きと

へども心中には先達て岡嶋の敗軍を口惜く思ひ居られ如何は爲んと其儘に打過軍馬を出し給はざりける然るに小山田信茂は何とぞ此度君に軍議を勸め我先鋒に進み戸取山にて敗軍なしたる耻辱を雪がん者と思ひけれ共甲府にて何の沙汰もなきは全く眞田が諫言に再度出馬の催しも止しならんと心中に深く之を殘念の事に思ひけれども先日君に軍を勸めし其甲斐なく敗軍せし事なれば此度は何共云ひ出す事能はずと密かに長坂跡部山縣が方へ内意を申し送りけるに何れも先敗を快意からぬ事に思ひ居る所なれば此事を聞より道理なりとて夫より各々打寄て謀合せ急ぎ甲府へ赴き信玄に謁し申述けるは今や上杉謙信は武田の鋒先に恐て未だ軍を出さず北條は此間の勝利に氣を得て何の備も有べからず然ば此圖に乘て急に軍を進め給はゞ必定北條方周章狼狽小田原へ逃籠り候はん其時我々粉骨して切入なば小田原を攻潰す事いと易からんと思ひ皆一同に陣觸を相待所今迄何の御沙汰もなきは抑々何等の事にて候や今天下に其勢ひ破竹の如き者は織田信長なり然るに渠德川と合體なせしは是甲府を攻る兆しなり夫に阿容々々北條方を差置き給ふ事前後には上杉德川あり左右には織田北條の大敵あり此大敵は如何成謀計あり共容易には防ぎ給ふ事能はず偏へに甲信の危き事旦夕に迫れり夫に何ぞや安閑と手を束て滅亡を待給ふや君能爰を考へられ早々軍馬を發し北條を攻亡し其後上杉を討給なば假令信長如何成る方術あり共何ぞ恐るゝに足らんやと事も無げにぞ申ける信玄熟々聞て忽地に心解け是妙計なり急ぎ北

ゆる松田尾張守なり何程の事かある一掛に掛散せと鬨を揚て攻掛らんとする所を眞田昌幸大に制して渠必ず侮るべからず松田は聞ゆる智將なるぞ殊に川を後に出張たれば是背水の陣に等し篤と虚實を覘ひて後軍を出し給へ此度は先敗に同じからん事を恐るゝなれば迂濶に事は爲難しと眞田が下知に隨ひ足輕を出して矢軍を始めけるが双方共に進まず既に其日も暮果て捗々敷軍もなく互に小迫合にて有しが翌朝武田方内藤修理是を見て昌幸の諫め甚だ過てり松田とても何程の事か有ん我一戰に川へ追詰日頃の手並を見せんずとて手勢二百五十騎馬の鼻を並べて打て掛るに松田勢の後陣崩るゝと見えしかば内藤勢大いに勇み驀地に切て入り爲て遣たりと喚き叫んで攻入所に松田が後陣忽地先陣と變じ内藤が後ろへ廻り前後より攻懸れば内藤勢案に相違して狼狽騒ぐ時しもあれ松田が勇士石弓箭之助とて以前は大力量の相撲取にて後に松田が郎等となり一二を爭ふ勇士なるが一丈餘の樫の棒に筋金の入たるを輕々と引提内藤が備に人交もせず打て入矢庭に十二三騎薙倒す是を見て内藤勢は勇氣を失ひ道を奪ふて逃んとし向ひ戰はんとする者は無りける石弓箭之助逃るを討立散々に薙廻る所計らず内藤修理に出會たれば石弓望む敵ござんなれと棒を横へ打て懸るに内藤は是非なく戰ひしが石弓一聲叫びて内藤が大刀を打落すに内藤大に仰天して馬に鞭打逃行を石弓大に怒を發して内藤程の大將が後を見する事やある引返て勝負せよと呼はる聲は雷の如く耳元に聞えければ内藤は慄へ怕れて鞭を落し最も危く見え

且上杉勢其後を立切後援をなす樣を知らしめ迚も北條を亡す事の難きを君に示し奉つり又諸將の眠りをも覺させんと思ふが故なり構へて功を貪るには非ず故に兄君には高坂氏と心を一にして謙信を能防ぎ給へ此度は前に小田原へ向ひ給ひし樣なる古き軍にては是なく鍔を割の一戰ならん何を成も忠義ならずやと言葉を盡して申けるにぞ信綱聞て昌幸の申所一理あり然らば我等兄弟は謙信を喰留べし汝は必ず功を立よと云ければ昌幸平伏して天晴成仰せ兄人必ず敵を侮り給はずして功を顯はし給へと立分れ昌幸は早速信玄に謁し此度は兄兩人我に代り海津に於て上杉を防ぎ候と申せば數ならね共某し小田原へ向ひ御先手に進み候と申ければ信玄大いに悅ばれ汝來らば我れ何をか恐れんとて吉日を撰びて出馬せんと既に元龜元年八月廿五日伊那四郎勝賴を始め眞田馬場山縣内藤甘利相木小山田の人々都合二萬五千餘騎を以て揉に揉で瀧山の城を攻立〱犇けども城將は北條氏照勇猛の大將なるに依て能防ぎければ甲府勢日々夜々討るゝのみにして捗々敷軍は無りける眞田昌幸熟々と城を見て此城並々にては落べからず先此所には押へを置早々相模川を打渡り酒匂川迄攻入んとて馬場美濃守を押へとして殘し置幸津前川を指て押寄進み戰ふ其威勢火炎の如くなれば北條方喰留んとて堪へ戰ふと雖も遂に甲州勢に切り立られ退くともなく相模川迄引たりけり甲州勢は勢ひに乘て追掛〱小田原迄一揉に揉んと進む處に相模川の手前に行方錢の紋付たる旗押立其勢八千餘にて備たるを武田方は是を見て那こそ聞

提近寄敵を五六人矢庭に突落せば此勇勢に怖れ誰一人追者なかりしかば松田は戰ひを好まず引退くを肝要と只突崩し〳〵馳通るを山縣怒て我松田と組打して渠が首を取か我が首を渠に渡すか二ツ一ツの決戰せんと無二無三に切て懸り互ひに死を輕じ秘術を盡して戰ひしが山縣は武術に勝れし勇士なれば難なく松田が鎗を千段巻より切折たり松田今は叶はじと引返す山縣勢ひに乘て追懸松田已に危く見えし所に石弓箭之助主人を討せじと横合より討て懸るを山縣少しも騷がす憎き奴めが振舞哉巳れ故に可惜敵を討洩したり率や松田が代りに汝が首取て得させんと互に怒り猛つて戰ひしが山縣が打込太刀に石弓が持たる棒は中程より切折たり然れ共石弓之を事共せず折られながらも猶も怒て打合けるが山縣が太刀鍔元よりぽつきと折たりしに山縣隙さず差添の太刀を拔きて打合双方勝負は見えざりしがさしもの山縣も少し怯や草臥けん受太刀になる所を石弓得たりと付入ければ既に危ふく見えたりしに武田方に名を得し初鹿野傳右衛門黒皮の鎧に金の兜の前立物香車の指物(初鹿野が香車の指物は敵に向て引ぬとの意味なるよしなり)晃びやかに大山の動ぎ出たる如く山縣か馬前に卓然と隔り御免候へ此敵は初鹿野傳右衛門申請たり山縣殿には後陣に入て休息われと申にぞ山縣は敵を初鹿野に渡して退き石弓は猶も初鹿野に渡り合火花を散して戰ひける

ける折しも山縣三郎兵衞昌景內藤に代りて三千餘騎を從へ石弓を打留んと打て出れば松田か方よりも大道寺因幡十餘人を率し石弓を助けんと喚き叫んで打出たり

松田尾張守敗北の事并石弓箭之助が事

然ば內藤修理大に敗北せしを山縣三郎兵衞入替て戰ひしかば山縣討すな者共と一條右衞門大夫信龍海老尾白倉依田應戶我先にと討て出れば小幡上總介甘利左衞門千五六百餘人横鎗と成て松田が備に突て入縱横自在に突廻ると雖も松田は名を得し勇士なれば少しも動ぜず夫々に下知を傳へて防ぎければ武田方攻厭倦で見えにけり爰に眞田昌幸は郎等根津新兵衞種行增田五郎の兩人に指圖を爲し綱嶋村鹿子木村の民家を打碎き筏を數百拵へさせて相模川の下流より軍勢を渡しければ之に續いて伊奈四郎勝賴武田孫六入道跡部今福等我先にと川を渡り松田が後陣へ鐵砲を霰の如く打懸ければ松田勢大に狼狽如何はせんと周章騷ぎ後を防がんとすれば前なる敵を防ぐ能はず今は前後より攻立られ途方を失ひ呆れ果てぞ居たりける信玄は遙向ふにて大聲揚敵の後には我精兵向ひたり一人も殘らず生捕にせよと鞍上に立て下知あれば素より猛りし武田勢倍倍勢ひ強く勇氣凛々として攻立ればさしもの松田勢大に雪頽右往左往に亂れ立を夫遁すなと山縣三郎兵衞五百餘騎にて取卷たり尾張守は赤糸の鎧に白星の兜を着て三尺許りの大身の鎗を引

陰に精兵を埋伏させ味方は川を隔て是を防ぎなば定めて武田方の若者川へ馬を打入〳〵渡るべし其時十分敵を川中迄渡させ置堤の陰より現れ出弓鐵砲の名人を優り射立打立川中にて亂るゝ所を馬の鼻を立並べ打入〳〵進みなば何かは以て堪るべき假令武田方勇なり共など一溜りも有べき一騎も生ては返すまじ此儀如何と事もなげに云れければ大道寺駿河守大に感じ流石は御當家の四男程有て宣ふ所感じ入候なり然共味方萬一敗し崩るゝ事あらば其用心もなかる可らず其時は川端に打て出前後に敵を受たる武田勢右往左往に亂るゝ所を常陸之介殿には酒匂川の渡より切て出給はゞ何條信玄を討取ん事袋の鼠も同前ならんと申けるに一座皆妙計なりと申にぞ然らば其備をなせとて我も〳〵と打立ける此時甲府勢は酒匂川迄出張し向ひを見れば三鱗の旗二流川風に飜り楯板を打並て備たり馬場美濃守是を見て何程の事有べき川を渡れと呼はりければ長坂釣閑跡部大炊之介今福善九郎等何の思慮もなく我も〳〵と押合〳〵川渡に馬を打入進みける北條方には豫て設けし事なれば此体を見て楯を打捨旗の手を亂し未だ戰はざるに我先にと北けるを長坂跡部然も有ん臆病共武田勢の鋒先に何條汝等叶はんや夫遁すなと川の淺深も厭はず無二無三に馬を入川中に至る頃忽地一聲の鉄砲響くと齊しく堤の陰より五百餘人弓鐵砲の名人立現はれ峯下りに射立打立飛散る矢玉は雨霰の如く面を向べき樣もなきに長坂跡部今福が勢は手負死人數知れず先に進みし味方の勢前には鐵砲に打挫がれ後陣には我も〳〵と鐵砲の音を

第四　相州酒匂川合戰の事并眞田昌幸奇計の事

偖も松田尾張守は軍術に賢き大將なれば相模川の合戰に一の計議をなすと雖も武田方の剛敵に難なく川を渡られ前後の敵に圍まれ山縣と勇戰して既に危く見えし所に石弓箭之助主人松田を助けんと山縣に懸向ひ勇を奮ふて戰ひし程に山縣も勞れ武者と成り今は斯よと見えければ初鹿野傳右衛門山縣に入り代り石弓と火花を散して揉合しが新手と云勇力無双の初鹿野なれば十合許り戰ひし中石弓は山縣に切折れたる樫の棒も既に手元ばかりに打折ければ是を投棄太刀に手を掛る所を初鹿野馳寄無手と組付き兩方暫時捻合しが馬より下へ岸波と落て上に成下になり組づ解れつ揉合ける然るに初鹿野の力や勝りけん終に石弓を取て押へ首搔切て直立上る是に依て北條方大に敗して退くを勝に乘て武田勢散々に追懸難なく酒匂川迄攻入り小田原へ切入は今の中なりと喚き叫んで攻寄たり此時北條氏康には小田原に在て安き心もなく相模川の軍には味方利なくゝして引退き松田は敗して何方へ落しか音信を聞ず既に武田方酒匂川迄攻入しかば如何して此大敵をば防がんやとて北條左衛門佐氏忠同常陸之介大道寺駿河守北條長綱入道幼庵等を召て軍議有に氏忠進み出松田素より老功の將成共合戰の體古風にして敵の相模川の下を渡る事に心づかざりし故敗北せしならん某し素より兵書は讀ざれ共倩々案ずるに酒匂川の此方なる堤の

たり北條方には思ひも寄ぬ眞田勢に破られて右往左往に須賀村の方へ敗走しけるを眞田勢は勝に乘て鬨を作り敵は色めくぞ夫遁すな者共進めと短兵急に追掛れば一據りもなく須賀村の渡しに追込れ溺れ死す者數を知らず這々にして小田原へこそ逃歸る是に於て眞田も軍を收め須賀村に馬を立兵粮を遣ひ居たりしに斯とも知らず酒匂川の渡しには北條武田火花を散し戰ひけるが北條方死力を顯はし攻懸れば難なく武田勢を岸に捲り上信玄が首を取は此時なり進めや〳〵と下知をなしつゝ既に信玄の本陣を襲はんとする所に北條方の本陣に火の手見えて炎々と燃上りければ氏忠大に駭き此はそも如何にと呆れ果たる計りなり

北條氏忠敗走の事幷大道寺松田地雷火を伏る事

斯て眞田安房守昌幸は北條勢の後より本陣に火を懸しかば北條方折角十分の勝利を得しと雖も此體を見て大に驚き狼狽騒ぎければ武田勢此機に乘勇を振ふて攻掛れば北條方前後に敵を受大に破れ後へも引れず前へも進ゝず進退茲に谷り九死一生の塲合に至りしかば北條氏忠も今は最期と心を決し大道寺と諸共に大太刀打振切て入り群る敵を薙立〳〵漸々に一方を切破り命辛々川を渡りて小田原へぞ引返しける武田勢は勢ひに乘て酒匂川を打渡る先陣には初鹿野傳右衛門山縣三郎兵衛馬塲美濃守段々に備を立て渡りける處に眞田昌幸威儀を正して平伏す信玄此體を

聞て疾先陣には軍始まりたり進めや進めと押合ければ後へも引れず前へも進めず川中に漂ふ所を北條氏忠見濟して屈竟の兵二千五百餘人川へ颯と打入〳〵攻ければ武田の勢何かは以て堪らんや長坂跡部途方に暮て戰ふ事能はず淵瀨を厭はず馬に任せて遁し程に落馬して水に溺れ見苦しかりし事共なり山縣三郎兵衛大に怒り言甲斐なき者共の有樣かないで昌景が武勇の程を見せんずと渦卷波を蹴立て敵に渡り合追つ追はれつ川中にて七八合も揉合ける信玄馬上に是を見て危し〳〵山縣討すな續けや者共と下知有ば諸角九郎三郎内藤修理筒井紀伊守我も〳〵と山縣が加勢をなすに北條方よりも大道寺駿河守二千五百餘人打て出川中にて火花を散して戰ひしは目覺しかりける有樣なり此時北條常陸助氏英酒匂川の下須賀村の渡し場にて川上に鐵砲の音するは必定合戰ならんと耳を澄して聞所に今戰ひ最中と聞えて鬨の聲矢叫びの音夥多く聞えければ時分は好ぞ信玄の本陣へ横樣に切入れよと我も〳〵と進む所に一叢茂りし森の陰より一つ雁の旗を颯と靡かし五百騎ばかり駈出たり氏英是を見て何者なれば我勢を妨ぐるぞ一人も遁すなと馬を並べて駈立れば備を左右に排きて大將一人顯れ出武田方に眞田安房守昌幸のあるを知らざるかと鎗を捻つて突いて懸る北條方にも大岡甚之丞別木藤司と云ふ者兩人眞田と鎗を合す所に昌幸大岡を只一鎗に刺殺す返す鐓にて別木が突板かつしと突けば馬より撲と落るを昌幸夫れ首取れと云捨て又敵中へ割て入しに根津新兵衛増田三郎望月宇兵衛等我先にと主人に續いて駈入

兵強くして中々當り難く此樣子にてはとても喰止る事叶ふべからず然る時は敵必ず小田原へ亂入すべし併ながら豫て上杉謙信とは交りを厚なし置たれば此度こそ加勢を乞甲府へ亂入致させなば信玄急ぎ歸陣を爲べし其時我々追討せば勝利有らん事必定ならんと云しに松田答て成程夫も一應道理なる軍慮なれ共我按ずるに酒匂川の一戰より敵兵は勝に乘て何の辨へもなく小田原へ逆攻來り鴻川村に陣を張て味方の虛實を計るべし其時に至り陣屋に火を放ち敵を鏖しに致さんは如何にと有りしを大道寺聞て是誠に妙計なれ共中々其如くには參るまじ寧ろ田嶋村の此方に地雷火を伏置敵勢の之に當り周章騷ぐ所を駈立なば爭か小田原に亂入する事叶はんやと事もな氣に申ければ松田手を拍て是妙計なり然らば一刻も疾く其手段致すべしとて夫より一色表を離れし田嶋村に地雷火をぞ伏たりけり

第五　北條方謀計相違の事幷眞田馬場山縣手分の事

然程に甲府勢は酒匂川の一戰に勝利を得て勢ひ破竹の如く小田原指て押寄ければ小田原にては北條家の浮沈此時にありと譜代老功の臣我も〳〵と馳集り防禦の用意をなしける中にも大道寺松田の兩人は密に田嶋村の近邊に地雷火を伏置甲府勢押通らば鏖ろしにせんと計りしは恐ろしかりける計策なり斯ること共知らざる武田勢は潮の涌がごとく小田原に亂入し昌幸田嶋村の方

見て大に驚き汝如何成ば此敵の後へ廻りしぞ昌幸然ばにて候誠に北條方の兵を用ゆる事駭き入て候今日の合戰は味方を深々と川中へ僞引入鐵砲にて打縮め色めく所を討て出散々に打惱せし故某し按ずるに敵の謀計は是ばかりにては候まじ定めて深き謀計有んと存じ此邊の土人に就近邊の間道且此川の渡口等を尋ねしに是より十丁下に須賀村と申所に渡場ありと聞より扨は北條方此渡しを越て御本陣を襲ふ事有んと存此方に埋伏せしに按の如く北條勢御本陣を目掛來りしを思ひ寄ぬ所より馳出敵の狼狽騷ぐを難なく須賀村の渡しへ追込尙も追て川を渡り敵の後へ廻りて本陣に火を懸後陣を開き候故此川を易々と渡る事を得たりと色を正て述ければ信玄聞て大に悅ばれ能も計りしなり斯敵を易々と破り此處迄押寄しは是全く汝が功によると賞美あれば諸將皆々眞田が智慮の深さを感じ若も眞田の謀計無んば只今の如く北條勢に切破られ又も後陣より新手を以て攻られなば我々危かりし所なりと皆々舌を震はし怖れける夫より小田原へ攻入んとて押寄る中にも眞田昌幸は此虛に乘じて小田原へ攻入ずんば有べからず進めや進めと下知しつゝ揉に揉で小田原指て亂入す小田原にては此趣きを聞市中は云に及ばず近在近鄕に至る迄上を下へと騷動し老たるを扶け幼稚を負て城中へ逃籠るあり又は遠く曾根曾田鴻川村邊へ我先にと迯走て其騷動釜中の沸が如し此騷ぎに一色表伊佐板口の枝城は皆々小田原の城に集りける斯て松田尾張守は相模川の一戰に討負大道寺駿河守と會合して軍議をなすに大道寺云樣此度は敵

り然る上は籠中の鳥網代の魚殺さんも生さんも皆此信玄が心にあり然れども我苟くも源氏の嫡流なれば天下の亂を治め奸賊を亡して普く四海を掌中に入れん事を思ひ敢て無辜者を故意殺戮せんとは思はざるなり今汝等が主人たる北條は我敵なれども汝等に罪はなし嘸や古郷にある妻孥等案じ煩ひ晝夜涙の乾く間もなく歎き居らん誠に不便の至りなり我是を思ひ今汝等を免し返す間古郷へ歸て無事に父母妻子を養へよと有ければ是を聞て生捕の者共は皆地に拜伏して涙に暮敗軍の我々汚面〻と小田原に歸り他人に後指を指れんよりは寧斯る仁心ある主將に降參なし犬馬の勞をも盡したくと存じ候なりと異口同音に願ひければ信玄も良涙に暮て言葉なく指俯伏て居たりしに眞田安房守側より神妙なる願ひ乍ら此陣に留りて降參せば汝等が忠は立ざるの道理なり夫よりは早く小田原に立歸りて吾主北條殿へ忠を盡し此恩は戰場にて報ずべしと申ければ皆々地に拜伏して助命の御恩何時の時にか忘るべきやと躍上りて悦ける夫より眞田は皆々に酒を飲しめ頓て生捕し節着せし鎧冑太刀鎗馬具指物に至る迄殘らず取揃へ渡し早々歸れと申にぞ皆々禮謝して馬に打乘悦び勇み小田原指て歸りける信玄跡にて此謀事好しと雖ども罪なき諸卒を無解に殺す事不便なりと落涙して有しを眞田笑つて豈天下を定むる者斯る小事に心を痛めんや天下の爲には替難しと空嘯いてぞ居たりける然程に彼の放免れし小田原勢は勇み悦び馬を早めて歸る途中も只信玄の仁心を感じつゝ既に田嶋村に指掛り是にて先一息繼べしと馬より

を眺むれば陽氣炎々として日に映じいと不審く見えければ昌幸先陣へ使者を送り精兵を留め置て自から信玄が前に到り扨小田原の勢此度の軍利なくして引退くと雖も小田原にも松田大道寺なぞは古今に秀でし英士なり因て端なく味方を深々と小田原迄引入るゝ事は是一計有ての事と存じ候怪さは田嶋村に當り陽氣炎々として日に映じ見えけるなり是敵方に地雷火を伏しと覺えたりと眉を顰めて申ければ信玄大に駭き給ひ今宵田嶋村に陣を据んと思ふ所なるに萬一然樣の事有ては味方一人も遁るゝ事叶ふまじ然ば道を替て發向すべしと有ければ眞田答て假令今道を變しとて中々油斷すべき敵ならざれば寧ろ此道より進みし方然る可しと申ければ信玄不審して斯怪き道を進まんとは如何の事や君子は危きに近づかずとこそ言ふなれと有りければ眞田答て然ればにて候夫につき某し一計を案出し候此謀事こそ用ひ給へと云に信玄其謀事早々我に敎へよとありければ眞田畏まり候とて軈て諸卒に命じて此度相模川の一戰に生捕たりし三百餘人を信玄の前へ呼出し昌幸信玄の膝元に寄て斯樣〳〵と言上せしかば信玄限なく悦ばれ諸卒に命じて生捕たる者の捕縛を解免させ此内に主將たる者ありやと問けるに三人進出て一人は弓頭齋藤數馬一人は鐵砲頭窪田利平治一人は同武藤新吾と各自姓名を申ければ信玄彼らに向ひ凡君臣の道は大將も諸卒も皆其主に報ずるをこそ義あり信ありと云ふなり嗚呼汝等人の臣として死を顧みず是義なり汝等生捕れしと雖ども是れ決して臆病のために非ず運拙くてこそ擒とは成たるな

尾張守大道寺駿河守は斯る事とは露知ず揉に揉で進む所に思ひも寄ぬ松蔭に雁金の旗二流風に靡かし許多の軍勢整々と備たりしを松田先陣に進みこれを見て味方には見馴ぬ紋なりと怪む折柄若武者一騎其間近く動ぎ出て高聲に呼けるは此手へ向ひしは北條方の智將と聞えし松田殿と覺えたり斯申某しは武田家に於て眞田一徳齋が三男なる安房守昌幸なり此度我々を小田原へ引入給ふは極めて良計ならんと存じ先達て相模川酒匂川の兩陣にて生捕置たる諸卒を先陣に進ませ地雷火の先驅致させたり然るに因て北條の方々此火の手を見給はゞ此道へ御出あらんと存じ先刻より待受しに遲かりし事哉いざ昌幸松田殿へ見參に待受の御馳走を振舞申さんと後の方を招きければ數百挺の鐵砲一度に噋と打掛ければ松田勢思ひ設けぬ事なれば大に敗して後陣の方へ雪頽かゝる大道寺是を見て何程の事かあらん此敵を打破り信玄の旗本へ無二無三に切入と轡を並べて五千餘騎喚き叫んで攻立れば昌幸も穗先二尺の大身の鎗を捻つて大道寺に突て懸る續いて蘆塚忠八根津新兵衛吳服最上望月增田相木寛の面々勇を奮つて突入り大道寺が備を何の苦もなく切崩せしかば右往左往に亂れ立小田原指て敗走す眞田方は勢ひに乘て終に城下迄亂入し民家に火を掛燒立れば跡に續いて甲府勢我劣らじと小田原に亂れ入しに松田大道寺は命辛々城中へぞ逃入たり扨亦北條氏忠は德間井指て押行所に山縣馬場の兩軍に出會思ひも寄ぬ事なれば一支へもせず大に敗し小田原指て逃歸るを山縣昌景赤皮の鎧に金銀の星冑を戴きて眞先に鎗引提

下側なる家居に立寄て休息なすに此邊の百姓等は此度甲府勢小田原へ亂入すると云ふ沙汰を聞き皆々近郷の山々に隱れ只の一人も住者なければ皆存分に休息し軈て小田原へ歸らんと立出て此所を離れ堤を四五丁程過ると齊く一聲の鐵砲雷の如く響くと思ひし其間もあらず大地より火焔と一度に砂石を打上げ四邊は一圓眞黑に成て白晝忽地暗夜の如く其中に彼の者共は脫る間もなく面部手足のきらひなく燒爛らし見る〳〵三百餘人一人も殘らず燒死せり不便とも殘酷き事どもなり是を見て小田原の松田大道寺等はすはこそ甲府勢落入りたり那見よと手を拍て笑ひ悅びつゝ時分は能ぞ者共甲府勢の燒殘りし者酒匂川へ迯げ落ん間一人も遁すなと大道寺の下知に一萬五千餘騎は曾我山を廻り酒匂川を指て進みける北條氏忠も同じく一萬五千餘騎にて曾我山を廻りて德間井より進みければ大將氏康父子大に悅び今や信玄の首討て來るならんと舌打して待居ける爰に信玄は此火の手を見るよりも山縣三郎兵衛馬場美濃守の兩人其勢都合五千餘騎にて德間井に向はせ眞田安房守昌幸同舍弟隱岐守の兩人は同じく其勢五千餘騎にて曾我山の押へとなし双方へ手分をしてぞ遣はしける

眞田昌幸松田を破る事幷謙信川中嶋へ出陣催しの事

偖も眞田昌幸は田嶋村の地雷火を難なく避け却つて兩道より攻掛る手術をなして待居しに松田

せられたり海津の城中大いに周章すは上杉勢出張したり急ぎ此由を小田原へ注進せずんば一大事ならんと早馬を以て此旨注進せしとぞ聞えけり

第六　武田勢小田原退口の事幷山縣馬場後殿の事

然程に上杉輝虎入道謙信は軍議を廻らし信州川中嶋に出陣せんとて善光寺の渡より御幣川を越て出張わりければ海津の城中には高坂彈正忠眞田源太左衛門同兵部丞等豫て之を喰止んと用意し早馬を以て此旨を小田原の陣へ告しかば信玄大に驚き急ぎ諸將を召て軍議せらるゝに馬場美濃守申けるは上杉は普通の敵に非ず然るに甲府の城今空虚なれば如何して之を防がんや早々御歸城然るべし後殿の儀は某し構へて助才之有るまじと申ければ山縣進み出て某しも倶に後殿の加勢仕つらんと申にぞ信玄何樣馬場山縣兩人にて後殿せば何をか案ずる事あらん然らば引取べしと有りしに昌豊申けるは豫て斯あらんと存じ候故北條攻の事は捗々しからずと御諫言申たりされども今と成て十が九は仕課せ乍ら無解に甲府へ歸陣あらん事殘念の至りなり此度小田原を攻落さずば再度小田原へ馬を入る事叶はず本意なき事には候はずやと長歎息なしければ信玄大いに怒り我れ此度甲府を出でしより北條家に對し敗軍の名を取し事なし然るに再度小田原に亂入する事能はずとは如何なる事ぞと詰りければ眞田涙を流し申けるは謙信は中々尋常の將に

大音聲にて氏忠逃る事勿れ尋常に首を渡せと追掛る氏忠聞て馬引返し何條逃る事あらん來れや來れと三尺餘りの大太刀を打振て只一人踏止り山縣に渡り合ければ山縣大に悦び願ふ敵ぞ御參なれと馬を寄て二三合戰ひける是を見て氏忠の家人伊津浦喜間太取て返し主人を隔て打て懸るを山縣焦て憎き己其處退け主人こそ相手なれと云ふを喜間太打笑ひ戰場に相手を撰ぶ事やある伊津浦が手並を見よやと云儘に山縣が眞向微塵と切付る山縣怒て返答にも及ばず打下す太刀を鎗にて受留引ぞと見えしが只一突に伊津浦を刺貫きしかば氏忠目前に家來を討れ大に怒り又山縣と戰ひしが山縣の猛勇にさしもの氏忠已に危く見えし處に北條方六郷丹下木曾九郎水口隼人渡邊忠右衛門岩間左市抔皆々取て返し戰ふ間に氏忠漸々危さを遁れ小田原へ引退かんとせしに武田方早くも小田原へ亂入し道々を支へければ小田原へ入事能はず終に一色の城へ引入ける是より甲府勢小田原の城下へ亂れ入攻詰〳〵晝夜合戰止事なしと雖も堅城と云殊に必死を盡して守りし事なれば中々落城に及ばず徒術に數日を送りける此時上杉謙信は飛騨口の植松丹後守が逆心に因て之を攻め難なく一戰に植松を誅して越後に歸陣ありし所此度武田信玄小田原に亂入し北條を攻る由を聞き大いに驚き然らば我甲府の空虚に乘じて川中嶋へ出張せん然る時は信玄必ず歸陣すべし是一つには北條を救ふ計略一ツには信玄歸り來らば我之を討て日頃の本意を達せんと爲るなりと軈て直江山城守兼續甘粕近江守杉原常陸之介を始め一萬二千餘騎を從へ發向

打ち挫がんと踊上りて申ければ信玄大に感じ給ひ此兩將こそ武田家の柱石なり能々後殿致すべしと有りしかば兩人畏まりて御前を下り夫より小田原の神社佛閣を悉皆放火して後に止りければ武田勢は次第〳〵に後陣より引退きける

富永四郎左衛門智計の事幷北條方諸將手分の事

扨も眞田安房守は深計ありと雖も山縣馬場に言消されて是を告る事能はず我陣に歸り獨歎じて武田の運も是迄なり我萬全の計議を述けれ共皆其全き深意を知ず斯くまで妨げられしこそ殘念なれ定めて此度引退きなば三增峠にて勇々敷軍有べしと思ひければ己も後陣の備を願ひける此時北條方には上杉出軍と聞傳は武田勢引取んいざ此所にて打留んか彼所にて打止んかと評議區區なりしが時に末座より富永四郎左衛門勝邦進出て申けるは斯る武將方の中へ物言すは慮外なれども老功の將たる松田大道寺氏は何故に言葉を出し給はざるや某し不肖なりと雖も熟々考ふるに這度武田勢引退く共後殿は勿々普通の大將に之あるまじ然るを浮か〳〵追討なさば敵に謀計有て却て味方多く討れ申さん然るに因つて始には少々足輕を以て追駈させ敵の後殿踏留りて戰はゞ信玄三增峠より相模川へ引退き候はん其時味方思ひ掛なき桶尻梁原深堀抔の所々に大軍を伏せ置一手は中津川荻野を後に取り信玄が左右より本陣を攻掛なば如何に甲府勢勇なりと雖

非ず味方今北條を攻るに聞き彼我が軍の勢力猛きを慮ばかり之を緩ふせんとて打出し事必定ならん然れば今爰を引退き彼と鋒先を交へなば彼には待設けたる軍ゆゑ其利彼に在り味方は旣に遠征に勞れ然のみならず今甲府口へ引退き給はゞ北條方再び勢ひを增し三增峠にて追討を掛る事疑ひなし然る時は匆々通例の後殿抔にては覺束なく存じ候なり此議もしも御取合なき時は再び小田原へ打入の期何の時にか之れあり候やと山縣馬塲を尻目に掛けて述べ立てしかば（昌幸が再び小田原へ打入の期何の時に有るやと云ひしは甲府に客星の見れしを以て豫じめ信玄の命數を知りての事か但しは外に仔細ありて斯くは云はれしか何れにも不吉の兆となりし事は後にぞ思ひ知られける）馬塲美濃守座を進め眞田殿の一言は甚だ以て味方に弱みを付るといふものなり斯る合戰の巷に於て人の下に身を屈め居ば終には幕下と成べし凡武門に生ては愚將も天下を望む是何ぞ珍しからん況てや我君旣に武威盛んにして父君信虎公にも勝り民を撫育し給ふ事堯舜に似たり何ぞ天下を定めざることあらんや今四海瓜の如く割麻の如く亂れしに天信玄公を生ぜしめしは國家を治め令んとの意なる可し夫に何ぞや一度爰を退くと雖も再び小田原に打入る期なしとの事有んや見給へ再度北條を攻なば某し先陣に進み氏康父子の首を見參に供へんと申ければ山縣昌景側よりいしくも申されし者哉斯る心掛こそ有度所なれ假令北條方三增に伏勢したりとて何程の事有べき踏破りて打通り先甲府に立歸り邪魔爲す上杉を攻亡し其後北條を

六萬騎も控しと見え候へば相模川を渡る事は思ひも寄ずと告しかば信玄大に駭き後陣の樣子を聞せけるに山縣馬塲引退かんとせし所北條勢少々追討を掛しを蹈破り酒匂川を越し津久井の城主内藤大和守大軍にて進り合戰甚だ急にして難儀に及ぶ由告げたりしかば信玄左右に敵を受今は防ぐべき方術も無しと暫時沈案して居たりけり

第七　武田北條三増合戰の事并眞田即智手分の事

偖も北條勢は手配り既に整ひ甲府勢を待掛しに信玄既に三増迄來り北條方の多勢嚴重に備しを見て初めて駭き給へば諸將も大に仰天して何れより軍を掛て此敵を破り引退かんやと思案に暮て只後殿の音信を聞所に山縣馬塲の軍勢小田原を陣拂ひして引退く時に小田原の城中より佐倉太郎左衛門と云者五千餘人を率ゐて追討を掛しに山縣一懸に追散して冷笑ひ是式の追討を掛たりとて何の恐るゝことかあらん眞田が案じ過せしこそ可笑けれなどゝ誇り顔にて根小屋の町に差掛らんとする所に津久井の城より内藤大和守が軍勢八千餘騎急に後陣と旗本との中を取切馬塲山縣に討て懸るに後殿の精兵大に慌て俄に備へを立て防ぎ戰ふ所へ又も北條方松田尾張守八千餘騎にて攻來りければ馬塲は引返して之に當り山縣は内藤を防ぐと雖も何も思ひ寄らざる事なれば散々に追立られ右往左往に散亂して這々命を助り信玄が旗本にぞ追付ける武田方今は四方

も敗す可此時追討を嚴くし津久井の城内藤大和守方へ早馬を以て知せ横合より攻立なば爭か信玄の首を見ざらんやと理を盡して申ければ是を聞諸將富永出來したりと闇夜に月を得たる心地せし程に氏康も此謀計我心に能適へりいしくも申たりと感悦し早々其手當ある所に此度一色の城へ逃退たる北條左衞門氏忠歸り來り我既に敗軍し當城へ引入んとせし處武田勢に支へられ止事を得ずして暫く一色の城に引籠る所夜前甲府勢の圍み解て候間渇魚の水を得し心地して只今當城へ歸り來り候と云へば氏康此度の手分方を委細申聞せしに氏忠勇み立某し敗軍致し候所なれば願くは此度こそ一方へ向られ候へ先敗の耻を雪き度と申にぞ氏康悦び夫より津久井の城へ此度の軍議を申遣し其後手分を定めける先三增町を右に見て樋尻口へは北條左衞門大夫氏勝を大將として甘繩上總介岩城式部少輔佐倉備後守薄井内匠之助富永四郎左衞門其勢一萬五千餘騎なり粟津口へは北條安房守氏邦を大將として遠山刑部大輔深谷内記御湯見薩摩守其勢一萬六千餘騎なり深堀口は北條左衞門佐氏忠を大將として上田暗礫齋成田下總守其勢一萬二千餘騎なり横合より中津川を後に取り本陣を目掛備しは北條陸奥守氏照を大將として川越筑前守秩父新太郎原式部松山釆女其勢九千五百餘騎なり此備立に小田原勢勇を增し此度こそは武田方を一擊に打て落さんと雀躍してぞ待掛たり武田方は斯るべしとは夢知らず次第〳〵に引取難無酒匂川も打越て既に三增峠に掛らんと爲所に斥候の者馳來り申けるは北條家の軍勢四段に構へて其勢五

條氏忠には武田左衛門佐五廿七郎兵衛長根刑部左衛門白倉喜左衛門初鹿野傳右衛門の五備を以て防がせ粟津口北條氏邦が備には一條右衛門大夫武田孫六入道逍遥軒尾曾喜市兵衛小山田備中守の四備を以て防がせ樋尻口北條氏勝が備には淺利式部少輔信音内藤修理甘利左衛門の三備を以て防がす但し此陣には小荷駄を附添せしなり信玄の本陣には原隼人佐岐田左馬助信豊眞田安房守左右に備へ津久井の城の押へには小幡上總介信定小笠原掃部大夫の二備にて防がす是に於て眞田下知を傳へ何れも大切の備なれど取分小荷駄を守る事肝要なり随分血戰さるべしと勵しければ淺利信音進み出て今日の合戰に萬一も我備破れなば某し一人にて大將の見參は仕つるまじ死に替て小荷駄は川を一番に渡さすべしと悠然として云しは流石淺利與市義遠が末と人々賞し合り此詞に違はず果して樋尻にて戰死せり然程に北條方より氏照一番に打て出れば武田方には伊奈四郎勝賴馬場山縣蘆田跡部我も〳〵と討て出る中にも跡部大炊介手勢五百餘騎にて北條方秩父新太郎重茂が備に馳掛れば新太郎は赤糸縅の鎧に大鍬形打たる冑を戴き白母衣を背負大太刀を打振り出來ば大炊介高聲に甲府勢の中において跡部大炊介と云弓矢取ての剛者有を知らざるか汝等如きは相手に足らず此手の大將は北條氏照殿と覺えたり是へ出られよ花々敷勝負して諸人の眼を覺させんと廣言吐て控えければ秩父新太郎莞爾と笑ひ相手に成か成ざるか鋼鐵の程を試みて其上廣言吐給へと件の大太刀眞甲に指翳して切て懸る跡部鎗を取て二三合戰ふよと

に敵を受け如何して爰を切拔甲府へは歸らんやと呆れ果たる有樣なり此時原隼人佐武田左馬介の兩人進み出て斯る時こそ眞田を召れ方術を御尋ね有て然るべく候と申ければ信玄道理に思はれ急ぎ昌幸を招き寄如何に昌幸北條勢何國より廻りけん此難所を支え我が歸途を遮斷斯前後左右に敵を引受け防ぐべき方術盡たり汝奇計あらば早々告知らせよと有ければ昌幸打笑ひ北條勢は豫て軍法に練たる智將多し此備なくんば有べからず然ればこそ曾て三增峠にて勇々敷軍あらんとは申せしなり果して斯の如し北條方一旦味方を小田原迄引入しは是兵の寡きに非ず諸方へ分兵せしと上杉の後楯あるに因るなり然るに分兵の者此度の合戰を聞き皆々歸り來り五萬餘の大軍となり此三增迄出軍せしは我領内にて最も難所なる所なれば斯山路を越て廻りし者なり何ぞ珍しとせんや是を防がんには先備を廿五段になし小荷駄を大切にして切崩されざる樣本陣と共に右に押行大將を撰みて敵を防がせ其隙に先一番に小荷駄をば相模川を越せ其跡に信玄公夫より先陣は後陣に讓り段々に引の手段なり然れども敵の備へ多ければ心得惡くては敗を引出し本陣迄破らるゝなり能々注意せずんばあるべからず且又津久井の押は大切なり敵の備を見るに桶尻粟津深堀の内一方亂て見るは正く本陣へ切入備なる可御心得なされ手分有可と共に述ければ信玄誠に汝が奇謀能我が心に適へり然らば備を立よと其手分をぞ致されける先北條氏照が備には伊奈四郎勝賴山縣三郎兵衛馬場美濃守蘆田下野守跡部大炊介の五備を以て防がせ深堀口北

御湯見は當國御湯見の城主にて古今無双の勇力なれば鋲を打詰たる鐵棒其重さ十八貫なるを片手に引提薙廻るに何かはもつて堪るべき之が爲に打据られ又は冑の鉢を打破られ人馬共に死する者數を知らず斯りし處へ武田逍遙軒圖らず行合たりしに御湯見是こそ望む所の相手なりと棒打振て懸りけれは逍遙軒大に驚き一合せもせず馬を返して逃走す御湯見大に怒り斯る大將の身として一合にも及ばず逃るとは卑怯の擧動引返して勝負あれと呼はり〳〵追懸ると雖も逍遙軒は鞭を上後をも見ずして走りける御湯見は猶も追掛け高聲に叫びければ逍遙軒南無三寶討れたるかと馬より眞逆樣に落ければ是を見て一條右衛門大夫尾曾喜市兵衛馳來りて救ひ助け御湯見と散々に戰ふ處に粟津口より北條安房守遠山深谷を左右に從へ御湯見に力を合せ戰ひける斯て北條左衛門大夫氏勝は甘繩上總介を先陣に進ませ桶尻口より攻掛れは武田方には甘利左衛門晴義一齊に馬を進ませ勇を奮ふて馳向ふ之に續いて諸將も豫て眞田に大切の備なりと勵されたる事なれば勢ひ込んで戰ひける北條方にも此桶尻は武田勢を喰留る咽喉の地なる故鐵砲にて打竦め只一時に攻付よと佐倉備後守五百餘人に鐵砲を打せ黒煙の立たる中より吶と喚ひて切て掛る其勢ひ破竹の如くにして勿々當り難く甘利左衛門が勢大に亂れて引退ぞきし程に小荷駄の備危ふく見えければ淺利式部少輔信音豫て信玄の前にて誓言し言葉に違ず淺黄縅の鎧に桃形の甲を戴き浪風と名付し荒馬に打跨り二尺七寸の太刀に白柄の長刀搔込んで小荷駄を助んとゆらり

見えし內鎗を眞中より切折られ是は叶はじと馬を返して引退くを秩父大に打笑ひ廣言にも似ぬ卑怯の振舞引返して勝負せよ返せ〳〵と呼はりけれ共跡部は慄ひ怖れ鞭迄捨て敗走せり是を見て蘆田下野守引續いて秩父と戰ふと雖も同じく當り難く引退きければ物に堪へぬ若武者伊奈四郎勝賴大に怒て赤母衣を脊負しまゝ片鎌の鎗を追取り突て掛るに馬塲山縣等我も〳〵と進め共秩父は更に動ずる氣色もなく戰ひしかば陸奥守それ秩父討すな危し〳〵と諸將に下知しければ川越筑前守松山采女原式部の面々打て出追つ捲つ戰ひしかば何時果べき勝負とも見えざりけり

御湯見薩摩守勇戰の事幷諸將接戰の事

斯て北條氏照伊奈勝賴の手に軍始まりければ深堀口北條左衛門佐氏忠成田下總守上田暗礫齋打て出れば武田左衛門佐初鹿野傳右衛門甘曾根白倉の軍勢懸合せて戰ふ中にも初鹿野は例の香車の指物を押立眞先に進み上田暗礫齋に突て掛れば上田透さず受流し二三合戰ふよと見えしが叶はずして引退く處へ成田下總守五千餘騎にて入代り戰ふたり此有樣を見て武田左衛門佐下知して諸軍を進むれば北條方よりも諸將我も〳〵と進み出て戰ひ双方の騎馬馳違ふ音鐵砲關の聲は宛然數千の雷の如く聞えて凄然く粟津口よりは北條安房守氏邦遠山刑部大輔御湯見薩摩守打て出れば甲州方よりも武田孫六入道一條右衛門大夫尾曾喜市兵衛小山田備中守打て出戰ふ中に

身して戰ふと雖も我身は云に及ばず諸卒も多く疵を負身躰自由ならず已に敗せんとしければ甘利下知して言甲斐無者の有樣かな只此所にて潔よく討死せよ汚面〳〵生存命甲府に歸りて誰に面を合さんと思ふぞよ來れ〳〵と自身鎗を取て戰ひしが早心力勞れ戰ふべき勢ひもなく進退爰に谷りしと見えし所に淺利歸り來つて甘利を助け御身は深手を負給ひしと見受たり本陣に續いて退き給へ我は踏留まつて討死すべしと云ければ甘利笑つて同列の討死爲すに何ぞをめ〳〵と引べき我も共に討死せんと云ひしを淺利制して否〳〵死するのみを忠義とは云はざるなり今は某しこそ討死の時なれば御邊には主君の先途を見屆けて後兎も角もせられて可ならんと云ひければ甘利大に怒り貴殿の命も我命も命に於ては同じきなり夫に何ぞや某しには引退け自身には死せんとは餘り言ひ甲斐なき事を承知はる者かな斯る事を承知はる我に非ずいざ冥途の御供致さんと潔よく引返しければ淺利も其決心に感じ夫より兩將僅かに手勢五百人にて群り立たる敵中へ切て入り偏に北條氏晴と刺違へ死なんものをと思ひしに佐倉備後守が舍弟佐倉五郎清氏は勇力の大將にて甘利を目懸切て掛れば甘利得たりと渡り合少間勝負も見えざりしが甘利は今朝よりの合戰に大に勞れ少し請太刀に成て跟蹌く所を清氏爰を懸て切入〳〵終に甘利が兜の鉢をしたゝかに打たりけり打れて瘁む所を清氏無手と組着終に双方捻合しが清氏力や勝りけん甘利を鞍に引寄難なく首を揚たりけり是を見て淺利式部少輔今は是迄なりと大音聲にて甲斐源氏の

〳〵と打出件の長刀水車の如く振廻して簇り立たる北條勢を右往左往に薙立切立駈廻りければ薄井が郎等に樋口榮竹と云者淺利と見るより天晴好敵なりと太刀打振て切掛れば淺利で參なれと只一撃に切て落す續いて富永四郎左衞門が手の者由利兵太馬嶋三平の兩人淺利に突て懸る淺利は猶も屈せずして暫時が程は戰ひしが軈て此兩人をも切て落せし此勇猛に北條勢大に駭き淺利に切立られ浮足に成所を淺利は得たりと取て返し散々に戰ひける此隙に內藤は小荷駄を追立追立相模川に運搬せ旣に半途迄運びける時北條上總之介三增町まで打て出切散さんと駈廻るに內藤修理大に仰天して防ぎ戰ふと雖も敵は目に餘る大軍なれば小勢の味方にては匆々防ぐ事能はず己に敗走せんと爲し處に鯨波の聲の劇しきを聞つけ淺利は甘利に跡を防がせ取て返しける道にて甘繩上總介が勢に出會大に驚き此處を切散されなば味方の惣敗軍と成べし我に續いて防げや者共死や〳〵と下知をなし眞先懸て甘繩が軍勢を難なく切散しける

第八　淺利信音勇戰の事幷甘利淺利戰死の事

斯て淺利式部少輔信音は今日の合戰こそ我存亡に係れりと思ひさしも勇なる北條甘繩が備を難なく駈破り內藤修理に向ひ我は是より又桶尻に馳歸りて甘利左衞門尉が備を援くべき間早く小荷駄を送られよと云捨て桶尻にぞ向ひける時に甘利左衞門は佐倉薄井富永を相手となし粉骨碎

蘆田跡部爰を破られじと防ぎける然共敵は大軍と云殊に秩父新太郎など一騎當千の勇士多ければ匆々當り難く是に依て此手も切崩され己に總敗軍に及ぶ所勝頼大に怒り此の有様にては何の面目有て我父君に對面せんや我も共に討死せんと味方の備を離れ自身鎗を取て敵中に突入突入驅廻れば是に連甲府勢我れも／＼と取て返し命を惜まず戰ふたり此間に信玄は相摸川の方へ引退きけるが御湯見薩摩守遙に之を見て是こそ望む敵なりと鐵棒を振立／＼打て入此方も武田左馬介此敵旗本へ近付ては叶ふまじと八百餘人にて取て返し御湯見を禦ぎしかど御湯見勇を奮ひ何の苦もなく右往左往に切立れば左馬介切崩されて敗走す眞田安房守之を見て防ぎ難きを察し先薩摩守を討て禍ひを除かんと馬の頭を立直し御湯見を目がけ打入けり

御湯見薩摩守戰死の事并武田勢歸陣の事

眞田安房守昌幸は御湯見を旗本へ近付まじと三百餘人にて取て返しければ薩摩守是を見て何程の事わらん踏破つて通らんと切て入眞田此時鐵砲の達人なる郎等の相木荒次郎と云者に謀計を授け置ければ相木身には雜兵の鎧を着し陣笠にて顏を隱し足輕に紛れて徘徊し隙を窺ひ御湯見を只一撃と狙ひしに御湯見は斯くと知らざれば勇を奮て打て懸る眞田は一支えも爲ず逃出すを薩摩守大に怒り腹黑返せと追懸る然るに足輕の雜兵後に立現れ薩摩守が備を支えしかば御湯見

門葉に淺利與市義遠の末流式部少輔信音命を此處に捨て名を後世に留めん事を思ふなり我と思はん人々は來り給へ首を參らせんと呼はりければ薄井等の中より丸久世太郎兵衛佐藤他十郎等十三騎にて打て懸る淺利信音打笑ひ優き者の有樣や率此世の暇取せんと云も敢ず太刀振上て兩人を相手に打合けるが淺利一喝一聲切込太刀に佐藤は脆くも切落され續いて丸久世太郎兵衛と戰ひしが丸久世の焦て切込太刀に淺利は眞甲を切割れ今は是迄なりと盲目打に切結ぶと雖も數ヶ所の痛手の爲に終に丸久世に討れて果にける却說甲府勢は小荷駄を難なく運搬旗本既に相模川へ引退きし所に早桶尻破れたりと聞大に怖れを懷きし時內藤修理身を揉で申けるに甘利淺利の兩將は忠義の爲に戰死せり夫に何ぞやむ〳〵逃退んと爲るや內藤修理是にあり返せ〳〵と自身鎗引提て戰ひしかば是に激まされ我も〳〵と五百餘人踏留まつて防ぎける此時粟津口に向ひし北條氏邦驚破敵兵は桶尻を破られて引足に成たるぞ疾く此備を踏破りて急ぎ信玄が旗本に切入と鞍上に直立ち下知しければ御湯見遠山深谷の面々打入〳〵掛立るに何かは以て堪るべき一條右衛門大夫武田逍遙軒の備も大に敗しければ尾曾喜市兵衛踏留つて戰ふ內初鹿野傳右衛門も同く取て返しける處に御湯見薩摩守例の鐵棒を片手打に打て懸る市兵衛之に渡り合戰ひしが御湯見力に任せて打込棒に曾尾木は眞甲打割られ血を吐て死したりける是に依て此手は大に破れ深堀口の武田左衛門佐も是に連て敗走し北條氏照伊奈四郎勝賴が備のみ殘りしかば馬場山縣

とや思ひけん高聲に呼はり富永四郎左衛門今こそ戰死するなり我最期を見置て汝等死る時の手本にせよと終に大太刀を口に啣しまゝ馬より逆樣に落貫かれてぞ死したりける是に依て北條勢彌々敗走せし程に秩父新太郎重茂手勢八百餘人にて後殿す甲府方も長追せず其まゝ歸陣しければ北條勢這々の體にて小田原に引退きける倩も此度の合戰は何れを勝何れを負とも定め難く臨機應變の手術多くして信玄必死と心を痛め如何あらんと思ひける所に眞田が智略に依て難なく甲府へ歸陣有しかば信玄淺からず眞田を稱し夫より川中嶋に出張し謙信を防がんとの軍議を始めしに昌幸申けるは此度君甲府へ御歸陣之れ有らば謙信何ぞ久く川中嶋に留まらんやされば君自身向ひ給ふに及ばず何れなり共御一門の御方に旗を立向はせなば謙信旗の手を見て早速越後へ歸陣仕つるべし君甲府に在まさば謙信何ぞ合戰を好まんや又味方も然のみ追討を懸るに及ばずとて理を盡して諫めしにより武田左馬介信豐に五百餘騎を差添て向はせしかば果して謙信其旗の手を見て早く越後に歸陣せしに因り左馬介も兵を纏めて甲府へぞ歸りける

第九　客星出現昌幸諫言の事并信玄客星の事を陰陽師に尋ぬる事

抑も上杉謙信は智謀深き名將なれば三増峠の合戰を聞時こそ得たれと川中嶋に於て軍議を決し

彌々怒り鐵棒振上打て廻れば颯と開き又犇々と立塞る處に雑兵一人近々と鐵砲携へ後より切て放つに過たず御湯見が咽を打貫ば御湯見は呀と云て馬より落る處を相木立寄り首掻切りて眞田が郎等相木荒次郎御湯見薩摩守を討取たりと呼はりし程に眞田安房守が備吶と返し殘軍を散々に切散しける之を見て小山田備中守蘆田下野守一條右衛門大夫武田左馬介原隼人跡部長坂五甘我も〳〵と取て返し防ぎければ北條勢又切崩されて猶豫ふ所を眞田下知して敵は引色に見ゆるぞ早く切入て高名せよと眞先に進みしかば之に續いて我れも〳〵と打て入りしに北條勢大いに駭き狼狽騷ぎ蜘蛛の子を散すが如く瞬く間に反昌と云へる所まで逃走りける又氏邦氏忠は軍破れて津久井の城へ籠たり此時富永四郎左衞門は今日の備こそ妙計なりと心に慢じ始めの程は大に勝利を得ると雖も味方遂に敗軍を引出しけるを見て心中大に憤ほり所詮此儘小田原へは歸られじと手勢三百餘人にて引返し一條右衛門大夫が備に切て入右に突左に當り獅子の如くに暴廻れば蘆田下野守が郎等石原左金吾我討取んと四郎左衛門に切て懸り兩人暫時戰ひしが石原肩先を切付られ馬より撞と落之を見て蘆田釆女天晴好敵なりと鎗追取つゝ突懸る四郎左衛門少しも動せず太刀打振て戰ひしに釆女鎗の穂先を切落され太刀に手を懸る處を富永手を差伸し鎧の袖を摑んで鞍に引寄片手に差揚前なる堀の深みへ打込ける下野守目前に我寵臣の討るゝを見て堪忍兼諸卒を勵し切て懸るに四郎左衛門死者狂ひの戰ひに數ヶ所の痛手を負しかば今は叶はず

然ながら古へより客星の出現する事其例し少なからず是れ不吉なる事とは雖ども期る時は君仁政を行ひ民を撫育し徳を脩め萬事に御謹愼ある時は妖災も其跡を絶つべし武威盛んなればとて其武威に慢じて戰ふ時は是不吉の端緒とは成るなり見玉へ眼前今川義元の如き英氣炎々として太刀風に向ふ者なかりしを以て其武威に誇り織田信長と桶狹間に戰ひしが終に一戰に打負戰死せり斯の如く我が武威に慢じて戰かふ時は假令變妖無しと雖ども爭で全き事を得可けんや望み廣大ならば命數も考ふ可なり又先達ても申如く先德川織田と交りを厚くし上杉北條を幕下と爲さば四海に恐るゝ敵之れなく因て萬民を安んじ國政を正うする事得可きなり然共我領內へ亂暴する者有時は早々之を誅し四海の變に應じて天下をも定むるの計策有まほしけれと落涙して諫めければ信玄良暫時工風の体にて有けるが我老年に及び死を待の年にして彼是思を廻らす事子孫の繁榮を殘さん爲なり縱令命數限る共何ぞ恐るゝ事あらんや命限りは合戰して英名を四海に殘さんとこそ思ふなれ汝何程諫むる共我聊かも聞入る事なしと以ての外成不機嫌にて怒りの顏色面てに顯れ深殿にぞ入り給ひける信綱昌輝大に昌幸を制して汝何故に斯る放言をばなせしやと詰りければ昌幸大息して武田家の滅亡近きに有と頭に落涙爲居るにぞ愈々信綱昌輝恐れ駭き昌幸を連て歸館致しける跡にて信玄熟々と思案に與安部兵庫之助と云陰陽師を召寄て客星の事を尋けるに兵庫之助答へけるは古へより客星の出る事度々ありて偶然吉事ありと申せ共是を例

急ぎ甲府に亂入せんと其手當をなしける所に信玄終に三增峠の圍を解て甲府に歸陣せし由を聞かれ案に相違せしと雖も流石の謙信是を恐れず我此度當地へ出陣したるは北條を援るか然なくば甲府へ亂入せんと思ひしに信玄甲府へ歸陣の由なれば强ち合戰を好むに非ず信玄豫て我武威を知る故此方の分國へ亂入爲事非じ夫に何ぞや無解に信玄と合戰を結び徒爾に軍勢を增專有らんや早々軍を止めよとて兵を率して本國越後へ歸られける是深き意味有る事とかや武田左馬助信豐も眞田が敎置し事なれば海津の城に兵を入替其後眞田源太左衛門同兵部丞と倶に甲府へ歸陣致しけるに然るに此頃專ら噂するは數年合戰止時なく萬民水火に陷り塗炭の苦しみをなす時節なるに去年より東天に烟氣を屬する客星出現し今年の夏に至れ共尙消ずして光輝明らかなれば此上如何なる變事の起るやらんと上下とも安き心なかりける然れば信玄にも此事の心に懸かりしにや眞田兄弟を御前に召れ奈何に眞田只今招く事餘の儀に非ず去つ頃より東天に客星の現はるゝは不吉成や又吉例成や汝等能々故事を考へ吉凶を明白に申逃べしとありければ信綱昌輝何と答て宜らんと顏見合せて居たりしに三男安房守申けるは先年より打續き國中變異多く天變地妖止時なし是凡事に非ず其故は應仁の亂より于今百餘年の間天下麻の如く亂れ上は一天の君より下萬民に至る迄一日も安き心なく彼に背き是に忤ひ法令早晩亂れ天下の諸侯國郡を爭ひ信義の道絕え果互ひに怨敵となりて騷動止時なし我國現時の景況實に異國にも耻べき次第なり

らず佛師には數多金銀を與へ其後彼像を中央に直し諸將を招きて申されけるは我既に老年に及びぬれば命數も近きに有ん切ては後世に我姿を殘し置んと豫て佛師に申付彫刻させし處既に成就せり然れば我が無後は各々力を協せ悴勝賴を弼け武田家の隆盛を謀るべし又勝賴には老臣の强ひ諫る事あらば父が命と思ひ愼んで之に從ふべし必ず身を高ぶる事勿れと最懇切に遺命ありしかば諸將等皆拜伏して只落淚に及びける長坂跡部の兩人進み出て誠に君の御姿を後世に遺し給はん事此像だに在まさば君御在世も同じからん御當家萬々歲此上なしと頻に賞讚せしかば眞田安房守長坂跡部の兩人に向ひ各々方は君の肖像を造らせ給ふを賞贊給ふと雖も是大に然らず隣國の諸侯國郡を奪はれし者は今君の武威盛ん成故小笠原村上諏訪の殘黨等首を屈めて或は北條上杉なんどに身を隱し居れど甲府に變もあらば日頃の鬱憤を散せんものをと手に唾きして俟者其數を知らず今にもあれ君御病死と有ば諸國の大軍此虛に乘じて押寄來るは必定なり然る時は我々種々に手術を廻らし防戰なす共若も敵亂入せば先此像を鞭打せん憖ひに像を拵へ却て後世に恥を殘す事有んも計られず誠に益無事なりと申ければ長坂釣閑跡部大炊之介は何と答る辭もなく閉口して居たりしが信玄熟々之を聞給ひ誠に眞田が申所至極せり我既に病死と云ば近國の諸侯競ひ來り先甲府に亂入し是こそ日頃遺恨に思ふ信玄が像なりとて必ず手足を切離し首を落し候半斯く讎の手足に懸られん事こそ殘念の至りなれ由なき事を爲たりと太刀拔放し已に彼

と爲は誤りなり斯る種々の天變地妖あるは是天より凶事を知らしめ給ふ所ならん今君は武威盛にして天下を知食さんとの勢ひなれども俚諺にも滿れば缺ると申せば諸事御謹愼ありて然るべし古へより高家貴族の滅亡し榮枯地を替るは凡て斯樣の時なれば身を愼み天命を守るに如ず今や　朝廷の舊例公武の制法悉皆廢れ神道は日に衰へ異端月に起る誠に危き時節なりと憚る所なく申ければ信玄此趣きを聞昌幸が諫言今こそ心中に當りけん只茫然として居給ひしが暫くありて熟々思案し我假令命數盡て死する共斯武威を近國に振ひければ我姿形を後世に遺さんと運阿彌と云佛師を召て我像を彫刻すべしと仰付られける豫て信玄自ら居間を毘沙門堂と名付中央に毘沙門天を安置しけるが前に六尺餘の大鏡を据置是に姿を映して刻ませ廿日の間引籠り玉ひしに既に肖像は成就致しける

信玄自己の像を造る事幷眞田昌幸明智の事

然程に武田晴信入道信玄は獨り熟々考ふるに此度客星の出現せし事は眞田が諫言且兵庫之助が申所に據ば是全く武田家滅亡の時來れり嗚呼天我を亡せり命なる哉是非もなき次第なり切ては後世に我姿を遺さばやと思はれければ佛師運阿彌を呼で自己の像を彫刻させしに日を經て成就致しける是に依て鏡に映して篤と覗給ふに扨似も似たり實に生るが如くなれば信玄喜悦大方な

第十　上杉北條甲信へ發向の事并直江柿崎夜討の事

扨も昌幸が明智に因て信玄の木像を不動にして甲府善光寺に藏め置しが果して天正十年の亂に織田父子并に徳川氏甲府へ亂入すると雖も此像有事を知らざりし事誠に眞田が明智と謂ふ可きなり因て今に至る迄此尊像殘れりとぞ然程に元龜元年の九月上旬に當りて北條氏康上杉と謀し合せ甲府を攻んとて其手配り頻りなりとの事上杉方へ聞えければ謙信大に悦び時こそ得たれ此度は是非とも信玄に一泡吹せて吳んず者と大に勇み春日山の城を雷發して信州上三輪迄發向せり北條も居城を打立尾布迄出軍なし所々に放火し今にも甲府へ亂入すべき勢ひなり是に依て甲府方にてはすはや合戰始まると上を下へと騷動するのみならず双方の注進櫛の齒を挽が如くなれば諸將も大に驚き急ぎ登城して色々評議あるに出縣三郎兵衞進み出て北條勢假令大軍にて攻來る共數度武田の武威を知たる事成ば深々と攻來る事は有べからず臣案ずるに謙信こそ勇々敷敵なり然れば北條勢は智謀深き眞田氏を以て之を禦がせ上杉は君自分御出馬有りて征伐せられ其後北條を攻給はゞ然るべく候はんと言上す是は日頃眞田を憎みしを以て北條の大軍へ向はせ若敗せば笑はんものと邪意を含みしものならん之を聞より佞奸邪智の長坂釣閑跡部大炊之介も此議然るべしと頻に申ければ信玄眞田兄弟に向ひ我上三輪に至り上杉を防ぐ間其方共は北條を

像を切捨んと爲給ひしを眞田昌幸大に制し暫時御待有べし可惜肖像を今無解に切捨給はん事こそ本意ならじ願はくは某しに給はらば有難しと謹んで申ければ信玄何に致すやと問はれしに昌幸答て臣所存御座候へば何は兎もあれ給はるべしと乞けるにぞ信玄も何か仔細のある事ならんと思され然らば汝に與ふべしと其まゝ眞田に給はりける夫より眞田御暇を告て此木像を我舘に持歸り一間の閑所に引籠り一七日の後信玄並びに諸將を我舘へ請待せしかば皆々何事ならんと到り見るに座敷の正面に不動明王を安置し香花燈明明らけく誠に生るが如くの尊像なれば皆々拜をなし信玄公を招待するに何故不動の像を祀られしやなど囁きつゝ美酒珍肴の待遇に一同大に興を催し酒既に酣はに及んで信玄笑を含み昌幸は何故に不動明王の像を祀しぞ汝が信仰する故なるや昌幸答て君には那を不動明王と御覽ありしや信玄大に笑ひ給ひ縄を持劒を携へ後に火炎を負は何ぞ不動明王に非ざるや昌幸笑ふて那こそ先達て乞受奉つりし君の肖像なり是某しが工夫を以て斯くは致せしなり不審なし給ふ方々能聞給へ折角君の御彫刻有し木像を打砕きて捨んは夫こそ君の思召を反古になすと云ふ者なり斯不動に造り直せば像も捨らず敵兵も不動なれば罰を恐れて迂濶には手を出す事之れ有るまじ然れば君の御姿損せずして後世にまで傳はらん昌幸が捨て捨ざるは先斯の如しと有しかば一座の諸將皆感じ入り暫時は言葉もなかりけり

遣はすべしとあれば昌幸有難しとて聴て長根諸共其勢二千餘人北條勢の大軍へ打向ひける斯て昌幸甲府を發向爲ければ信玄も三輪に出馬有て是に從ふ人々には武田左馬之介信豊同孫六入道逍遙軒穴山伊豆守入道梅雪一條右衛門大夫續て原隼人佐馬場山縣伊奈勝頼小山田備中守眞田源太左衛門同く兵部丞跡部大炊之介長坂源五郎蘆田下野守小幡上總介小笠原掃部大夫尾曾喜五甘白倉等其勢二萬八千餘騎にて川中嶋より三輪に向ひ謙信と對陣せり謙信は小田原に通じて双方より挟み討んと計りし事成ば此度は信玄何方へ赴く共採立て攻ん者と相待所へ斥候の者より信玄は此方へ向ひ小田原勢の押には眞田安房守を遣はしたりと告ければ謙信此由を聞て直江山城守柿崎和泉守の兩將を呼で今宵甲府勢陣を張ば其備なき所へ一夜討懸敵軍の鋭氣を挫き見んは如何にと有りしに直江柿崎道理なりとて其用意をなし甲府勢陣を張ば夜討を懸んと相待たり信玄旣に三輪に陣を張下知を傳へて今宵敵方夜討を懸んも計り難し隨分用心堅固に致すべしと觸示されしに先手なる白倉勢は長の歩行に人馬勞れ何の備もなかりける然るに上杉勢は其夜子の刻に直江兼續柿崎和泉が勢五千餘騎馬に枚を銜ませ甲府勢の陣前に到り斥候を出して窺ふに白倉五甘尾曾喜の者共何の備もなく只捨篝のみ焚居たるに時分は好ぞと轡を並べ吶と喚びて攻掛れば白倉尾曾喜の勢大に仰天敗亡し我も〳〵と逃出すを鬨の聲にて驅立れば兩勢亂れて本陣に雪頽懸る大將信玄豫て夜討の覺悟あれば山縣三郎兵衛を出して敗軍の勢を援け本陣より

押へ我歸陣迄持堪可し此義如何と有ければ眞田兵部丞早其氣を察して勝敗は豫じめ期し難き事なれば確言は仕つり難しといまだ言終らざるに昌幸冷笑ひつゝ兄君の言す條過てり北條勢如きの大軍は某し一人の手勢にて屹度防ぎ候はん謙信こそは匆々容易の敵に非ず兄君主君と共に三輪に向ひ給へと端然として申ければ信綱昌輝大に怒り陣中に僞言なし我々大軍にて向ひてさへ心元なき北條勢を汝一人の手勢にて防がん抔とは兄を閣きたる過言なり免し難しと敦圉荒く申ければ昌幸某し何ぞ僞言を以て君を欺き候はん必らず防がんと存ずる故申なり我が一命は素より君に捧し者なれば此度北條と戰ひ防ぐと雖も力能はざる時は討死致す迄の事なり斯申せばとて死を輕んずるには非ず君命を重んずるが故なり大敵を見て恐れず小敵を見て侮らざるは是武士の習ひなれば北條の大軍を見る事蟻同然踏破つて見すべきなりと常になき傍若無人の答を爲しゝは是偏に山縣跡部長坂等の心を挫かんが爲に斯は申せしなり信玄も常に變りし眞田が廣言若や討死にても致しなば如何なりと思はれ其日の評定は止にける昌幸は猶も其翌北條勢を防ぎ度由書面を以て言上せしかば信玄訝しく思召れ昌幸を招かれて此度汝僅かの小勢を以て北條勢を防ぎ度由を願ふは甚だ以て不審する所なり那なる謀計か之有るや委しく語れよとありければ昌幸謹んで仔細は軍終りて相知れ申べき間是非〳〵此段御許し下されたしと何事も云ざれば信玄斯ては定めて奇計あらんと思ひ然らば北條勢へ向ふべし然り乍ら長根肥後守に千五百人相添

勢ひに乘り鬨の聲にて攻立れば馬場山縣も共に引立られて二三里ばかり敗走せり上杉勢は尙も追掛しに直江山城大音揚此大軍を小勢にて深々と追懸若も敵大返しに取て返さば味方一人も助かるまじ引や〳〵と鐘を鳴し軍を脩めて謙信の本陣にぞ引取ける是に於て甲府勢又々備を立直して控たり其間に夜はほの〴〵と明掛りければ鷲尾瀨兵衛此紛れに信玄を討んずものと彼方此方と窺ふ內旣に夜は全く明たりしに是非なく靜々と引取りながら我一人にて斯程の敵を破りし事稀代なる高名かなと獨言しつゝ勝賴の陣前を通りしに伊奈九兵衛に行逢ひたり九兵衛心得ぬ曲者かな物印しもなく步行にて密々陣中を窺ふは必定謙信の廻し者成らんと諸卒に命じて生捕んと爲けれ共瀨兵衛は手剛き者なれば卽時に五六人を切散す九兵衛大に怒り自身太刀を拔て切り合散々に戰ひ瀨兵衛が目の上へ切付しかば瀨兵衛力盡き終に伊奈が爲に討れける九兵衛は彼首を携へ勝賴の前に至り始終の働きを語りければ勝賴は敵ながらも鷲尾が働きを感じ定めて名ある者成べしとて本陣に送りける是よりして双方軍を止め暫く白眼合て居たりける是時眞田安房守昌幸長根肥後守の兩人は二千餘騎にて屋布に赴き小田原勢と對陣す北條右衛門大夫是を見て大に笑ひ甲府勢大軍にて向ふべきに僅かの小勢にて向ひけるこそ淺はかなり一懸に攻破れと早々に用意なしければ松田尾張守入道大に制し小敵なりとて侮るは兵道の誡むる所なり敵の擧動を窺ひ機に乘じて攻掛る可しと控へたりしに眞田安房守は別府若狹伊勢崎森十郎石田郡次抔

打出し上杉勢と戰ふたり爰に柿崎和泉守の郎等鷲尾瀬兵衛とて大勇力の者ありけるが此度の夜討にこそ信玄法師が首引提て歸らん者と工みける故初めの白倉勢の敗軍の中へ紛れ込難なく本陣に到り窺ひける

武田勢惣敗軍の事并昌幸北條勢を欺く事

武田信玄には豫て覺悟の夜討なれば其用意有けれ共先手白倉尾曾喜の油斷より本陣近く敵を引受たり然れ共旗本には武田左馬助一條右衛門大夫馬場美濃守伊奈勝頼の備へ堅固に控たれば最前白倉勢に紛れ込し鷲尾瀬兵衛信玄に近寄事能はず那方此方と本陣を窺ひしが此時長坂源五郎父釣閑が代りとして陣中に在此體を見て怪み此者必定本陣を窺ふ曲者ならん夫れ生捕と下知しければ鷲尾今は必至となり四尺に餘る太刀拔放し近寄者三四人切倒せば長坂源五郎是を見て鎗追取突て懸るに敵は名に負鷲尾なれば鋭き穗先を事共せず二三合戰ひしが何とか爲けん源五郎鎗の穗先を切折られ叶はじと逸足出して逃行を遁さじ者と追掛れば源五郎元より短才の慌忙者なれば何心なく大に叫び本陣に敵兵紛れ入たるぞ用心せよと高聲に呼はれば最臆せし甲府勢扨こそ謙信が謀計に當りしぞと敵を誰とも見分ずして右往左往に敗走す夜軍の事なれば人皆疑惑し或は同士討し又は味方の逃る足音に敵追掛るかと慌忙狼狽逃惑ふ斯て本陣亂れければ上杉勢

騎にて山手を廻り左右二手に分れて押寄たり北條勢は思ひも寄ぬ不意を襲はれ鯨波の聲を聞よりも慌忙狼狽き太刀兵具よと云儘に鎧を着ても冑なく繋げる馬に打乘鞭打もありて上を下へと騒ぐ處へ鐵砲を打掛〳〵無二無三に攻懸れば北條勢一支へも成らず先を爭ひ逃出したり大將北條右京大夫氏康同左衛門佐氏忠大に駭き今は戰ふも益なし引や者共と云程こそあれ主討るれ共郎等之を顧りみず親討るれ共子之を助けず我先にと敗走しければ馬に踏れ人に押されて死する者山際に押詰られ人手に掛らんよりはと自害するもありて手負討死數知れず散々になりて小田原迄引退きける然るに眞田方は一人も損せず敵の捨たる武具馬具旗幕指物に至迄悉皆く取納め甲府を指て悠々と引退く扨も小田原勢又も敗して引退きし由謙信の陣へ聞えければ謙信扨は謀事又々相違せしなり然れ共我此度の陣を此儘に引退きなば信玄跡より追討を懸くべし又長逗留したり共北條勢敗せし上は敵方に勇氣増味方には利あらず何分早く越後に歸るべし然共此まゝ引取ん事殘念なりと九月廿五日の早朝先陣には甘粕備後守三千餘人宮田治部木庄越前守柿崎賴母隨ひ二陣には柿崎和泉守千五百人宇佐見駿河守古田河内守從ひ上杉彈正少弼輝虎入道謙信家嫡上杉太郎景虎（景虎は北條氏康の息輝虎の養子なり）後陣には直江山城守北條右衛門大夫惣軍勢九千五百餘騎雁行に備を立て打て出る武田方よりは先陣山縣三郎兵衛三千餘人白倉左京蜂谷右衛門名和無理之助隨り二陣武田左馬之介信豐三千餘人五味才藏石田左司馬蜂谷五郎兵衛

に命じて其夜陣中に松明三百ばかりを燈し那首這首徘徊致させければ北條勢之を見て驚破敵夜討を懸ると覺ゆるぞ油斷するなと用心して在る所に陣中に近付事二町許りにして松明一時に打消ければ四邊は忽ち闇夜となり黑白も分たざるに北條勢今や寄來るらんと待ども〳〵何の沙汰もなく其まゝ夜は明たりければ餘りに訝しく思ひ夜前松明の消し邊へ人を出し見するに跡形もなく不審乍らに扨止ぬ然るに其翌夜又〳〵松明を五百ばかり燈しつゝ押寄來る勢ひに北條勢今宵こそ攻來るぞと急ぎ用意を爲所に犇々と間近く攻來るかと見れば又も一度に消失たり斯く爲事五七口に及びければ北條勢は大に心氣勞れ晝夜寐事能はず心身茫然として居たりし第八日目の夜は松明も見えざりければ扨は今宵は來らぬぞ帶紐解て眠れやとて前後も知らず臥たりけり

第十一　北條勢敗軍の事幷謙信信玄箕輪合戰の事

然程に眞田安房守昌幸は北條勢と對陣し松明を以て敵を欺きし事夜毎なれば北條勢晝夜寢る事能はず斯くする事旣に八日に及びければ身心勞れ果皆々申けるは是眞田が味方を悩すの謀計にして攻寄る事は非じなど申合ひて油斷しけるに其夜は松明の見えざりしかば早今宵は來らじと皆打寬ぎて臥たりしに眞田が斥候此由を窺ひ濟し斯と告しかば昌幸大に悅び敵我が籌策に乘たるぞ今宵こそ北條勢を破るべしと先一方へは長根肥後守千餘騎一方は眞田安房守昌幸同く千餘

ざらんや且又人として孝を知らざるは是何事ぞ不孝は地獄の種とかや汝幼年よりして父を廢し國郡を押領す是汝が大罪なり見よ〳〵久しからずして數代續きし甲府の榮地も狐狸の巣窟と成て其跡をだに吊ふ人なきに至らん憐むべし〳〵吾れ今佛に替りて汝が罪を責む汝今より心を改め善道に赴き上杉が幕下とならば子孫を永からしめん早く心を傾け味方に降り甲府に歸て安樂を極めよと最と惡しざまに罵りければ信玄大に怒いかなれば謙信斯く無禮の言を發するぞ誰か有る那謙信を射落せと下知すれば畏まり候と先手より鐵砲を打懸〳〵喚て掛れば上杉の陣よりも同く鐵砲打出し双方入亂れ兩陣新手を入替〳〵戰へ共何れも名に負龍虎の勢ひに勝負は未だ見えざりけり

謙信智計退口の事幷眞田幸村誕生の事

兩陣兵結んで今朝午の刻迄息をも休めず戰ふと雖も未だ勝負も見えざりければ互ひに人馬を憩はせて再び入亂れ戰ひしに其日も早夕陽に赴き合戰は明日と定めたり其夜上杉謙信は急ぎ後陣より段々と操引にして夜中に軍を越後へ引取ける然るに武田方は斯る事とも知らざれば早朝より又戰爭の用意を爲ける所へ斥候の者立歸り謙信既に夜中軍を收め越後へ引取しと告ければ信玄色を損じ大に嘆息し我又謙信に誑かされたり斯と知ば夜前直に追討を懸可きものを殘念をて

隨へり三陣馬場美濃守小山田備中守甘利次郎三千餘人本陣には武田大膳大夫晴信入道大僧正信玄伊奈四郎勝頼孫六入道逍遙軒一條右衛門大夫穴山伊豆守梅雪等なり後陣に控へたる二萬九千餘騎を魚鱗に爲て押出す其間一町餘りにして上杉入道白糸緘の鎧に龍頭の冑を戴き陣頭に現れ出高聲にて信玄に申べき事あり是へ出られよと呼はりける信玄聞て同く陣頭に立出る其粧ひは白糸緘の鎧に諏訪法性の冑を戴き南蠻鐵の團扇を携へ馬を出して控えたり恁て謙信遙かに鞭を揚如何に信玄其許には既に甲信の兩國を握り武威先祖に劣らず天晴本望玆に達せしと見ゆるなり然るに何なれば無名の軍を發し民を苦め諸卒の軍勞を厭はざるや法師の事なれば慾を忘れ足る事を知り幸ひに後世をも願ふべきに忝計り出家にして心は盜賊に等し見玉へ北條氏政は眼前其許が聟ならずや其聟たる氏政が領地へさへ度々馬を出し罪なき民屋を燒き財寶を奪取る等の事言語に絶たり抑々佛法には五戒あり五戒の內前の如きは偸盜戒なり又諏訪頼茂を誅して其領國を押領し剩さへ息女を無理に我妾となすは是邪淫戒なり老年に及び佛事を嫌ひ晝夜淫亂大酒に耽り國政を治ざるは是飮酒戒なり永祿四年の頃ほひ某し將軍義輝公へ御禮の爲上洛せし時歸る迄は領內へ軍を出し給ふ勿れと盟約を立て置しに其跡にて我領內を攻る事是る妄語戒なり隣國に軍を出し無解に合戰をなして多くの敵味方を亡す是殺生戒に有ずや斯く五戒を犯しながら法衣を纏ひ禪學を爲すと言ふは實に馬糞を錦へ包みたるに同じ恁る邪念の者爭で佛罪を蒙ら

破る誠に稀代の働きなりと大に賞し夫より甲府へ歸りける然ば眞田安房守此度北條方に向ひ勝利を得て莫大の功を顯はせしを以て信玄も殊の外重く待遇し或日眞田を召汝が此度の功勞こそ鮮少ならず定て勞れも生せしならん因ては暫時上田に歸り軍勞を慰むべし我も軍を暫らく修め軍馬の調練すべしとて其他の諸將にも暇を賜はりければ眞田を始め諸將僉持城にぞ歸りける此時昌幸は信州上田の城に於て男子を産先達て源次郎とて既に六歳になりし男子の有りしに此度も男子なりしかば昌幸甚だ悦び與三郎とぞ名付ける（是後に眞田左衛門佐幸村と名乘末代にまで英名を輝かせしなり）時に元龜元年十月上旬の頃とかや爰に山縣三郎兵衛昌景は甲府に於て暇を賜はり駿州山西の押へとして江尻の城に歸りけるが此頃は武田德川の兩家最と睦まじく互ひに音信を通じ居ける所に山縣巳が勇に誇り德川の領內遠江國城東郡の米穀を我領內の藤枝へ運搬せ或は辻彌兵衛和田嘉助抔と云剛勇の者共に命じ折々民屋へ亂入し又は放火し狼藉の振舞有しかば德川源君大に怒らせ給ひ我既に大井川を畵り領すべしと約せしに奈何なれば山縣我領內へ亂入し民を苦め兵粮を運ぶや言語に絕たる曲事たり其儘には差置き難し急ぎ軍を發して誅せんと聽て五百餘騎にて山縣を討んと謀り給ひける

第十二　遊譽與道論議の事并布下貞家兩僧に說事

そしてけれど呟きながら是非なく終に軍を收めて甲府に引歸しける折から向ふより三鱗の旗數本秋風に飜翻し二千餘騎手に首引提又は鑓の鹽首に結付然も勇ましく進み來るを見て先手の軍勢大に駭き扨こそ眞田打敗け北條勢國中に亂入せしと見えたるなり如何はせんと急ぎ信玄に通じければ信玄顏色土の如く何と答への言葉もなく呆れて在りしに山縣三郎兵衞四郎勝賴進み出て某し等考ふるに謙信が引退きしは僞りにて又攻來るは必定なり然る時は假令引返すとも其詮あるべからず此上は君を始め奉つり運を天に任せ此北條勢と一合戰仕つるより外なしと心を決して申ければ信玄大に歎じ眞田昌幸は幸隆が悴にして兵道にも達したれ共若輩たるの悲しさに今日斯軍破れ甲府迄北條勢に攻取れしならんと天を仰ぎて後悔の樣見えけるに眞田信綱申けるは臣是を案ずるに味方敗軍せば必ず注進有る可き筈なるに今斯の如きの有樣は甚だ以て心得ず某し見屆來り候はんとて急ぎ馳行暫らく有て立歸り笑ひを含みて只今是へ北條勢參着せりと申にぞ信玄不思議と見給ふ所に眞田安房守昌幸數多の首を馬前に獻じ北條勢を破り立歸り候なり此首共は甲府に於て實檢に備べきなれ共御迎ひがてら此所迄參向仕まつり候と申にぞ信玄始め諸將哼と息を繼安堵の思ひをなしたりけり信玄指さし然るにても那の旗指物は敵方の紋なり何故に指て來れるやと問ければ眞田答て斯樣〳〵の手段にて候と申に長根肥後守側より昌幸が謀事を委細に言上しければ信玄大に感じ給ひ我は上杉の夜討に欺かれ眞田は夜討を懸て北條勢を

六歳を一期として逝去あり法名大聖院殿東陽岱公居士と號しける眞田昌幸之を聞き笑を含て扨は北條を從へる時節到來せりと頻りに謀事を催しける處に源君には山縣の我國郡へ亂入せるを殊の外憤り玉ひ此上は我織田信長へも通じ此鬱憤を散ずべしとて夫より武田家に離れ織田氏と合体し信玄を討んと謀り給ふに信玄此事を聞と雖も少も動ぜずさらば織田と德川の中を絶せ德川を亡し引續いて織田を降參なさしめ其上直に上洛を遂日頃の大望を達せばやと種々工夫を凝しけり爰に眞田昌幸は布下彌四郎貞家に謀事を示して相州小田原に到らしむ布下貞家主命を受て小田原に立越密に福傳寺に到り遊譽和尚に對面して申けるは某し儀は武田家の陪臣布下彌四郎貞家と申者なり此度和尚へ密に對面を請ひ密談申べき其仔細は某し生國は小田原の產にて北條家には屢々恩誼を受し者に候是に依て一大事を告申さんとするは今北條武田の兩家雌雄を爭ひ渠を討之を害し互ひに龍虎の戰ひ止時なしと雖も兩雄は並び立ず遂には一國亡びなん然るに當時武田家の威勢廣大にして戰へば勝攻れば取先達て相模川酒匂川の一戰にも此小田原迄攻入危ふく當城も攻潰されんとせしに上杉勢川中嶋へ出軍せしに因て甲府勢歸陣せしなり然るに今氏康病死せらるゝとの事甲府へ聞えなば信玄速かに亂入すべき事眼前なり然ば北條家の安危此時にあり聞く貴僧には智識の聞え隱れなく其上人を助る事多かりしとの由なれば事の發らぬ其前に早く氏政に和睦を勸め此災厄を脫るゝ樣爲し玉ふ可し然すれば我も亦主人昌幸を勸めて和

山縣三郎兵衛昌景は山西押へとして在乍ら已が勇剛に誇り君の命をも受ずして城東郡の人民を惱まし其上辻彌兵衛和田嘉助抔に命じて人家に放火し亂暴狼籍甚しければ徳川源君憤り玉ひ憎き山縣が振舞哉我旣に大井川を劃りて領せんと約し且先達て今川氏眞掛川籠城の時も遠州一國は我武威を以て切取んと言ひし事あるに旁々以て此儘には差置難しと源君眞先に進み榊原小平太康政本多平八郎忠勝大久保七郎右衛門石川紀伊守酒井左衛門等に命じ五百餘人の兵を以て日坂金谷を打越押寄たりしに山縣三郎兵衛之を聞急ぎ用意をなし二千餘人にて討て出金谷に於て戰ひける徳川勢の內よりは本多忠勝武勇の聞え隱れなき勇士なれば大太刀を拔翳し無二無三に切立しに山縣が勢散々に打捲られ右往左往に成所を源君下知して敵は色めくぞ懸れや〳〵と呼はるに山縣が先手辻彌兵衛少しも動せず防ぎ戰ふに昌景下知してソレ辻を討すな續けや者共と呼はれば和田嘉助磯江源五兵衛森本喜三我も〳〵と勇を顯し進みける徳川勢此有樣を見て思はず後陣より敗走し山縣が勢に追駈られ本多も是に引立られ金谷坂を越て引退くに源君も餘儀なく掛川の城へ逃入り給ひける是よりして武田徳川の兩家不和とこそは成にけり是偏に山縣が所爲なれば天晴罪すべき者成共日頃寵臣なれば信玄之を怒らず流石は山縣なり徳川を追駈しは潔よくも出來したりと大に賞美し江尻の城を與へしとなり眞田昌幸此由を聞より又こそ害を引出したり扨々是非もなき事哉と獨り呟き居たりける時に今年十月十五日北條氏康急病發り五十

れば遊譽は即ち呉道を伴ひ我寺に歸り布下に對面なさしむれば布下は仕濟したりと心に悦び歸を奮ふて兩人を賺し早々氏政公に和睦を勸め給へ我も又能きに圖るべしと彌四郎は暇を告て甲府にぞ歸りける

兩僧氏政に和睦を勸むる事幷小田原諸將籠城の事

然程に福傳寺結願寺の兩僧は密に氏政に對面して扨も父君御逝去の事武田信玄聞及び此度越後口を堅く守らせ大軍を以て攻來る由に之あり父君御在世の時だにも相模川酒匂川の合戰に味方利あらずして敵小田原へ亂入し僅に謙信の援あるを以て味方辛くも免れたり然るに此度は父君既に逝去ありて未だ涙の袖も乾かざるに信玄大軍を以て攻來ると有りては何を以て大敵を防ぐべきや何卒君御賢慮を廻らされ兩家和睦を調へ北條の家名を失ひ給はざる樣致し度是れ一ッには萬民の苦みを助け二ッには先祖累代の家名を失はず三ッには味方の軍勞なく一矢だも費さず居乍らにして萬全の策を得るならんと色々に勸めければ元來勇氣の乏き氏政なれば斯と聞より大に仰天し兎角宜敷賴み入間是より其方等は甲府に赴き和睦の儀を取計らはれよ家老一族には知らする事勿れと呉道遊譽の兩僧をして甲府へ遣せしに兩僧も悅んで早速甲州へ赴きけり此時眞田昌幸は布下歸りしより信玄に對面し北條氏政頓て和睦を乞申べし其時必ず快よく許し給へ

睦を調へ兩家脣齒の交りをなし互ひに助け助けられ敵を防ぐの因縁に爲し申さん是兩全の計略と存ずる故密に是を告るなりと眞顏に成て述けるにぞ和尚も豫て氏康逝去せし故信玄再度亂入せん事を恐れ居たりければ布下が言葉骨髓に徹せしと雖も故意と取合ぬ體にて其許の一言道理なれ共出家の身にては武邊の意氣地は知る所に非ず我等之を如何ともする能はずと答ければ布下打笑ひ僧なればとて國家の存亡に關らずと言ふ事やある我聞和尚は氏政と師弟の約ありとか然らば猶更以て宜敷分別もあらんと存せしに斯空氣たる言を宣ふ樣にては誠に北條家の運も此時に盡さん佛を賴んで地獄とは是ならんと呟き乍ら既に歸らんとしければ和尚急に之を止め這は餘りに短氣なり先暫く待玉へ外に談ずる人もありと云ひつゝ布下を客屋に止め置夫より結願寺吳道和尚の方へ行密々に布下の事を語れば吳道和尚篤と聞て是全く眞田とやらんが謀計成べし必ず實とし給ふなと申ければ遊譽の曰否とよ疑ひを生じて用ひずんば信玄必定小田原へ亂入すべきなり然る時は北條方此度は如何して防がんや吳道の曰然らば此事を一家中へ相談致さん遊譽笑つて今川氏實は累代の領國を信玄に押領せられ漂泊の身と成て憤怒止時なし又北條長綱入道幼庵は我悴新三郎を蒲原の城にて信玄が爲に攻殺されたり然れば此者共皆信玄を恨て生乍ら其肉を喰はん事を思ふなり何條和睦を調ふる事を悅ばんや只家中には深く隱し我々密に氏政公に說べしと云ば吳道手を拍て道理なり一國の大事は此所にあり我も又能謀り申べしと言ひけ

ざれば大熊備前守を密かに呼んで此事共を委細に語りしに大熊も元來臆病武士成ば有無の了簡にも及ばず斯る御事に候はゞ先武田と和睦を結ばれ其上にて上杉と手切有て然るべしと申にぞ氏政も實にもと思れ此度は大熊備前守が妻女小宰相は氏政が乳母なるに依て此女性を福傳寺結願寺の兩僧に差添て再度甲府に到しめしに終に和睦調ひ追て人質を差遣し申べき旨に事一決したりけり時に小田原の諸將此事を聞よりも大に駭き北條長綱入道同左衛門大夫氏勝同陸奥守氏照秩父新太郎松田尾張守大道寺駿河守等打連氏政に諫言しけるは今武田と和睦之れ有に於ては今川家より味方に加はりたる諸將皆裏返りて當家の怨と成候はん且又父君御在世中仇敵たる武田家へ遽に和睦を調へ給はゞ隣國の徳川家抔愈々以て當城を圍み候はん兎角此度の和睦は思ひ止まり玉ひ上杉と諜し合せ再度武田家と有無の一戰有べしと皆一統に勸むると雖も氏政聊かも用ゆる氣色なければ今は諸將も詮方なく斯る主人を持永く汚名を受んより我々武田と有無存亡の一戰を遂んと夫より三萬餘騎合体して湯川戸倉山中韮山等の城に思ひ〳〵に楯籠り合戰の用意をなす武田信玄此由を聞て大に駭き急ぎ眞田昌幸を呼で尋けるは北條氏政既に和議を調へ乍ら再度合戰の用意をなすは奈何成事ぞや昌幸笑つて是氏政臆病にして和睦すれ共諸將和議を憤ほり斯は籠城致せし成ん何程の事や有べき昌幸一紙を以て此者共を鎭め候はんと眞田は我舘に歸りけり

と申せしに信玄笑つて累年互ひに怨を含む北條武田何ぞ今と成て俄に和睦を申送らんや眞田答て某し謀計を以て既に敵を欺きたり一兩日中には必ず申來るべしと打笑ひつゝ申ければ信玄限りなく悦び北條我に和睦して力を助けなば我又何ぞ心置事あらんやなど語り居し所に果して小田原の福傳寺結願寺の兩僧來れりと披露せしかば信玄早速對面して事の樣を尋ねしに兩僧進み出愚僧共使者として參りし趣きは元來北條武田の兩家恨みなかりしに今川を隱匿しより互に仇を含むの中と成り數年合戰止時なく或は勝或ひは敗れ未だ孰れを如何とも言はざれども氏政は固より信玄公の聟にして云ば親子の中も同前なり然るに妻女世を去りてより父氏康武田家と合併の約を破りて双方龍虎の威を振ふ事とは成しが這般父氏康病死して氏政の世と成りし上は何卒以前の約に返り武田家と和睦して親子の交りをなさんとの存慮にて候へば願くは此處を能推量有て和睦の儀御聞入之有度然る上は氏政を幕下同前に從はせ候はんと辨舌滔々と述ければ信玄聞て奈何にも申さるゝ通り氏政の心實なるに於ては信玄豈是を許さゞらんや然れ共我謙信と多年怨を含み居る事なれば氏政我と和睦せんと思はゞ上杉と手切有て然るべしと返答に及びければ兩僧畏まり候とて軈て小田原に歸り氏政に此趣きを告しかが氏政案ずるに先達て武田勢小田原に亂入せし時上杉無んば北條家危ふかりし然るに今謙信と手切を爲さば謙信の怒りを發する事必定なり其上萬一も武田家約を破り押寄來る事有ば如何して防ぐべきやと心中安から

故籠城なすや是君に向ひ弓を引んと欲するに均しと罪を責て申送りければ諸將等無念乍ら主命背き難く今は是非なく我々武田にこそ怨み有て斯籠城には及びしなれ何ぞ大恩請し主家へ矢を放んや然るを主人へ敵する樣沙汰せられては諸人の嘲り末代の汚名遁れ難しとて無念を堪へ籠城の沙汰は止ると雖も松田尾張守北條長綱入道大道寺駿河守等は扨々云甲斐なき事哉何ぞをめ〳〵と武田家に從はんや見よ〳〵武田家に變らば縱令主命に背く共大軍を以て攻懸らんと心中には深く憤ほると雖も陽には然せる體なく先は氏政の心に隨ひ終に和睦と定まりける爰に於て遊擧和尚諸事都合能取繕ひければ布下に此由申聞け甲府へ返しけり依て此度は氏政無二の心を知しめんと舍弟左衛門佐氏堯清水太郎左衛門笠原能登守大藤金五郎の四人を人質として甲府へ送りける信玄大に悦び先北條と和平なりし上は是よりして三河を攻んと頃は元龜元年二月十六日信玄甲府を出發して遠州城東郡高天神の城に攻寄る城主は德川公の御内にて武勇の將小笠原與八郎氏助總に二千餘人にて籠りける所に甲府の大軍攻來る由を聞しかば諸卒に向ひ我苟くも多くの士の中に撰み出され當城の主將と爲りし上は假令百萬の敵押來る共力限りの戰ひなし當城を枕として討死と覺悟を極めたるなり然れば這度武田勢押來らば汝等も此一戰に亡骸を城外の土となし名を後世に留めよと說き諭し今や敵押來るかと待所に武田方の先陣穴山伊豆守梅雪山縣三郎兵衛昌景六千餘騎にて城下に押寄一揉に攻落さんと鬨の聲を作りて攻懸る小笠原は

第十三　武田勢高天神城攻の事并小笠原氏助勇戰の事

斯て北條氏政は既に武田信玄と和睦を調へしが諸大將は之を怒り我々何ぞ手を空くして安閑と彼が幕下同前に腰を屈めんや命は義に依て輕し潔よく戰死して武門の譽を顯はさんと金石に比しき義心を堅め所々に籠城なしければ信玄大に駭き如何せんと眞田を召て評議せしに昌幸之を鎮めんと書簡を認め布下に持せ密に小田原に遣しける布下彌四郎再度小田原に到り福傳寺遊譽和尙に對面して先達て貴僧甲府へ來り信玄公へ直談の上氏政殿より和議の事を述られし所此度諸將各所に籠城なし專ら合戰の用意あるは是如何成事ぞや出家は武門の事を知ずとの事なれども武門には斯る未練の僞りなし出家の道には僞りを申ても苦しからず候やと理を詰て申ければ遊譽大に駭き愚僧全く此事を知ず成程這般和睦の一條は家老一族衆へは深く隱し置給ひし故定めて片意地成者共籠城致せしならん愚僧宜敷計ひ申さんと布下をば寺に留置急ぎ登城して此由申上ければ氏政答て然ばとよ皆々我命を請ずして籠城の沙汰に及びしなれ如何して此事を止むべきや遊譽笑ふて君は是一國の主譬ば日月の如し臣は是草木なり草木は日月の惠みを以て茂り又は花實を結ぶ斯る大恩ある主君に背くは偏に君の威權なきが故なり何故に威を示し命を重んずる樣には仕給はざるやと申ければ氏政も實にもと思ひ大熊備前守を以て諸城へ遣はし汝等何

機となし穴山伊豆守を押へとして殘し置是より足助の城へ向ひける此城主は鈴木越後守美濱團六とて是も智勇兼備の剛將なり其勢僅に二千五百餘人にて楯籠り甲州勢來りなば信玄に肝を潰させ吳んずと今や遲しと待掛たり斯て信玄は足助の城に間近く攻寄せ是を窺ふに用意も指て堅からず城兵も小勢にて中々一日も持堪ゆべき體ならねば信玄大に悅び是式の小城何程の事や有あはれ一日も持堪へよかしと打笑ひ急に攻る用意もなく寬々と控へける鈴木越後守是を見て仕濟したりと悅び其夜五百餘人を從へ密に城を出て弓鐵砲を先手に備へ武田の陣へ押詰一度に吶と鬨を作りて攻懸る武田勢は油斷して臥たりしに鬨の聲を聞て周章狼狽鎧よ馬よと揉返す所に美濱團六大薙刀を水車に廻し眞平地に打て入當るを幸ひ薙立れば武田勢此勇猛に當り兼右往左往に亂れける山縣昌景馬場信房是を見て六千餘人に下知を爲吶と喚て切て懸れば美濱態と引返す武田勢は勝に乘て何國迄も遁さじと勢ひ懸つて追懸しかば美濱猶も引退くを城中より屹度視澄し三百餘人の新手一度に吶と打て出美濱を救ひ戰ふ中山縣馬場は頻に下知を傳へ諸卒を勵ましければ皆松明を燈し連ね犇々と塀際に押詰て我乘越んと爲所を豫て用意の大木大石數をも知らず投下せば群集寄手の六千餘人忽地之に打挫がれ手負死人の山をなせりさしもの山縣馬場の兩將も不意と云夜中の事なれば攻厭倦で控へし所に思ひも寄ぬ左右の岸より輪違の旗馬印颯と指上鈴木越後守仲綱五百餘騎にて馬場山縣が後陣へ會釋もなく鬨の聲と諸共に吶と喚て突て

豫て待設けたる事なれば者共等鷲破防げと下知なせば城兵得たりと數百の大石を雨霰と投落しけるにぞさしも大軍なる穴山山縣が勢瞬く隙に五六十人打倒され後陣の方へ亂れ懸れば小笠原氏助是を見て敵は色めくぞ討て出よと云程こそあれ鷺坂一角相原九郎五郎五百餘人城門を滑と押開き一度に喚て討て懸れば小勢なりと侮つたる穴山山縣大に亂れ散々に成て迯出す二陣には眞田源太左衛門同兵部丞二千餘人入替り新手を以て横鎗に突て懸れば鷺坂一角相原九郎五郎一支へも支へずして駈破られ旗の手亂れて見えしかば先手に敗せし穴山山縣取て返し双方より攻立しに鷺坂一角大音に下知して豫て討死と覺悟したるぞ此手に於て死ねや〳〵と鞍上に立上り諸卒を激し〳〵突て廻る眞田兵部丞是を見て横合より一角を目掛曳と突ければ一角鎧の間隙を突れ既に馬より落んとせしを乘直らんとする所に眞田透さず引組で何の苦もなく鞍に引寄首搔切てぞ落しける是を見て相原九郎五郎物をも言ず切て懸る眞田片手には一角が首を提げ片手に鎗を取て戰ふ所に穴山伊豆守遙に見て相原を射落さんと矢頃を定て切て放せば過たず相原が肩先へ深く射つけしかば相原堪へず馬より撞と落にける是に依て城兵散々に亂れ城中へ引入んとせしを眞田穴山山縣等付入んとすれ共流石小笠原が勇兵なる故且返し且戰ひ皆靜〳〵と引取けり小笠原與八郎口惜き事に思へ共敵は大軍味方は小勢なるに是非なくも打て出る事勿れと下知なし堅く守つて居たりけり武田勢は毎度戰ひを挑ども城兵取合ねば信玄先鷺坂相原を討取しを

んかと用心せられたるこそ道理なれ時に鈴木越後守は高矢倉に登り敵陣に向ひ奈何に信玄能聞け我汝が陣中の隙を窺ひ既に寢所迄忍び入けれ共汝よく寢入りて在りしかば其を無狀〳〵殺すは死人を刺も同前なりと一命を助け死を免して歸りしなり是鈴木仲綱が仁心ならずや然らば我追討は致すまじき間助命の恩を思ひ早々に引退き申べし若是を聞入ずして長陣せば一人も殘らず鏖殺しにせんと呼はりければ是を聞て諸大將大に怒り憎き鈴木が言葉哉早く惣攻にして揉潰せと二方の攻口より我先にと押寄るを得たりや應と高塀の上より熱湯を大柄杓にて汲注れば何かはもつて堪る可き武田勢手足たゞれ半死半生と成て鎧物具脱捨て備を亂し迯迷ふを城兵共は之を見て手を拍箙を敲き笑ひける武田勢は僅の小城を攻て數多の軍勢を損じ悔み怒ると雖も爲べき樣なく諸將も今は長陣せば味方損ずるのみにして其甲斐有るまじければ先此城には押へを置て吉田の城を早く攻られ然るべしと申上れば信玄此議正當とは雖も斯くばかりなる小城一個をも攻兼て味方度々敗北せしと云れなば武田の武威を墮すに似たれば如何はせんと無念を懷き色々に考へ在られし内早所々の敵城へ此事聞えて此度足助の籠城強くして武田勢攻落す事能はざるにより此機に乘じて四方より挾み討んと淺香井阿次利田代八桑の六ヶ所に堡砦を構へ武田勢の通路を塞ぐとの事なりしかば武田方は愈々氣を失ひ今は早く歸陣せばやとの評議なる所へ眞田安房守昌幸同舍弟隱岐守信尹兩將二千餘人にて馳來れば信玄大に悅び汝能くこそ來れり

入其勇猛に當り難く一支も支へずして馬塲山縣捨鞭打て這々後陣へ迯入けるは見苦しかりし有樣なり鈴木は大に打笑ひ追留の鐘を打て勢を纒め捨置たる旗指物武具馬具に至る迄悉皆取收め悠々と引取しは軍事に長たる振舞なり此時眞田內藤を始め是を防がんと來りしか共早城中へ引取しかば是非なく兩人も引返し陣を堅固に備へたり

鈴木越後守防戰智計の事幷武田勢數度敗軍の事

偖も武田勢は此度思寄ざる鈴木越後守が勇戰に切捲られ馬塲山縣も爲べき樣なく何卒此恥辱を雪がんと戰ひを挑め共城兵は堅く守つて更に戰はざれば城を白眼で控へける鈴木越後守は忍びの術に達せし松野彌兵衛と云者を招き今宵信玄が閨に忍び行斯樣〳〵に爲す可しと吩付ければ彌兵衛畏まり候とて頓て信玄の陣に到り彼方此方と窺ひ見れ共流石用心堅固にして忍び入べき方術もなく暫時躊躇所へ下部一人蝶の紋付たる灯燈を持來れば是幸ひと遣過し後より引捕へ何の苦もなく縊殺し割符を奪ひ陣門に到りて件の割符を渡し夫より本陣へ忍び入信玄が居間の柱に「鈴木越後守信玄が一命を許す」と書付て歸りける翌朝信玄之を見て大に駭き何者の仕業にやと色々詮議なせども更に知れざれば扨は敵中に忍びの名人有て斯は爲せし者ならん是偏に陣中怠り有故なりとて夫より夜廻り嚴重申付自身にも寢ずして晝夜油斷なく若も忍びの者入來ら

ば闌六大に怒り物をも言ず長刀打振切て懸る戦ひ未だ央ならざるに昌幸が手勢亂れ掛つて引退きしを闌六は是眞田が謀事ならんと馬を留めて立たりしかば源太左衛門信綱入替りて戦ふたり美濱又も信綱を散々に薙立れば信綱叶はず馬を返して颯と引跡へ又兵部丞入替り同く戦ひを交へしが是も叶はず引退く然共美濱闌六は謀事を恐れて追討せず時に眞田が郎等布下彌四郎荒川内匠又立向ふて引退けば今度は闌六我を忘れて追行を昌幸充分に深入させ鷲破と相圖の鐵砲を響せければ南無三寶計られしかと美濱引返さんとする折柄眞田昌幸鎗を捻つて突き懸り十合餘りも戦ふ所に布下背後より太刀を翳して切懸れば闌六は前後に敵を受乍ら少しも恐るゝ事なく戦へば眞田信綱同昌輝左右より突て出れば闌六勇なりと雖も今は叶はずとや思ひけん一方を切破り遁れ歸らんとなす折しも昌幸焦つて追駈持たる鎗を投付れば過またず馬の尻にぐさと立馬は堪らず躍り揚れば闌六馬より撞と落つ落る所を荒川も續いて馬より下透さず寄て無手と組終に美濱を生捕しかば眞田下知して引鐘を鳴させ早々軍を收むれば敵兵散々になりて城中へぞ逃入たり諸將是を見て眞田が働きを賞し信玄も此合戦に勝利を得先敗の色を直して昌幸が軍功を感賞なし笑坪に入て居たりけり然ば城將鈴木越後守仲綱は片腕と頼みし美濱闌六の生捕れしに大に力を落し色々と工夫を廻らし密かに眞田が方へ矢文を以て串送りけるは某し茲に籠城を爲す事は敢て主人の高恩に報いんとには非ざるなり只幕下たるの故に因る事なれば是迄の罪を

とて當足助の城主鈴木越後守能防いで味方數度敗せし由語りければ眞田昌幸眉を顰め岡崎の諸將の內に智謀逞ましき人は酒井忠次大久保忠世此兩人なり奈何成計略有て味方を惱ますやと尋ければ信玄斯樣〳〵なりと事詳細に語りければ昌幸大に駭き是陣中の龍なり殺さずんば有るべからず我明朝他の兵を交へず我手勢にて鈴木と一戰すべしとて退出し夫より其夜手分をなし右軍には兄源太左衛門信綱に相木穴山望月を差添左軍には兵部丞昌輝に增山森覓等を相添昌幸自から眞先に進み打て出んと用意をぞなしにける

第十四　眞田勢美濱團六を生捕事幷昌幸即計足助落城の事

然る程に眞田兄弟は手勢三千五百餘人にて翌朝足助の城へ攻掛る眞先には眞田昌幸鎗を横たへ馬を跳らせ如何に鈴木越後守汝僞りの謀計を用ゆると雖も大軍にこそ的當せん今日は眞田安房守昌幸汝が武術を試驗ん爲手勢計りにて向ふたり謀計を用ひずして明らかに某しが太刀の鋼を試し見よと大音に呼はつたりしに城中は靜り返て音もせず守將越後守諸卒を制し堅く守つて出合ざれば昌幸之を見て彌々聲を揚敵には恐れて出合ぬか偖は正しく武田武士の腕前には遠州武士の及ばぬと見えたるなりと飽迄に廣言放つて扣へたり是を聞て物に堪へぬ美濱團六五百餘人を相從へ城門を開て打て出れば昌幸打笑ひ汝は鈴木に非ず我相手には不足なりと呼はりけれ

後守仲綱矢倉に現れ眞田なるか能も來れり我此度美濱團六を生捕れ之を取返さんが爲に一通の矢文を送る所に汝誠として放ち返せしこそ可笑けれ城を渡さんと僞りしを浮々來る狼狽者此城を受取んとならば首を渡せと笑ひける昌幸答て昨日の矢文は其僞りなるを知ると雖も兄を敬ふの儀を書載わりければ假令僞りにもせよ夫を其まゝには爲し難く然るに由て團六を返し遣はせしなり然るに汝は今更約に背き僞りなりと云はれしは誠に人面獸心と謂べきなり既に團六が一命を助け歸したりしに此恩を報ぜんと爲ざるに於ては團六とても武士道立ず彌々此理聞入ずんば目に物見せて吳んずぞ早々降れ如何に〳〵と呼はりければ流石の鈴木も此理に責られ何と答ふべき言葉もなく差扣へ居る所に美濱團六仲綱を勸めて奈何に眞田が申其降參の儀は無用なり阿容々々城は渡さじと聽て南の矢倉に現れ出しを昌幸見るより合圖の小旗を飜へせば件の大筒の一度に嘞と鳴り渡り大地も崩るゝ計り震動して美濱が登りし南の矢倉は黑煙に覆れ眞黑に成て中段より崩れ落見る間に炎焔々と燃上れば矢倉に在し五十餘人は微塵と成て失にけり城中の諸卒周章狼狽吾を慓ひ肝を潰し是は〳〵如何成事ぞやと狼狽騷ぐ其紛れに眞田信綱同昌輝同信尹我後れじと城中へ乘入〳〵既に三の丸迄亂入せり武田の先手馬場山縣跡部長坂是を見て同く續いて攻登り城中へ亂れ入鈴木越後守今は早防ぐ事能はず終に降人と成て出にける眞田則ち相礼し眞實降參の旨信玄へ言上せしかば入道信玄大に悅び鈴木が本領其儘に賜はりけり既に

免し玉ひ且圍六は某し常に兄と敬ひ置し者なれば此者を免し歸されし上は降參仕つり候べしと有りしを昌幸熟々見て獨り點頭圍六を引出して自分繩を解免し右の矢文を見せて斯の如くなればば直に足下を歸すべし某しが得心の事を宜敷語り給へ明日城受取に參るべしと申せしかば美濃大に悦び然らば明朝御越あれと約しつゝ城中へぞ歸りける此由を聞き兄信綱昌幸に對面して何故生捕し圍六を返せしぞと尋ねければ昌幸件の矢文を出して越後守より斯申越せしにより返し候と云ば信綱笑つて是鈴木が謀計にて圍六を取返すべき方便なりと申ければ昌幸某し斯と知つれば社斯計ひしなりと答ふ信綱怒つて謀計と知乍ら何故に返せしや昌幸さればにて候謀計は敵の謀事に就て立るを善とす案ずるに鈴木は強ち邪智の者に非ず其故は信玄公の居間へ忍び入程の方便を爲しながら殺しも爲ざるは是味方を引寄せん爲の心術たる事知る可きなり圍六を又も生捕ん事袋の鼠を押ゆるよりも安し美濃を返せしは鈴木を釣出さんが爲なりと申せしに信綱猶も得心の色なく出て行昌幸は布下荒川相木等に命じ其夜城の南手へ大筒三挺を持せやり我明朝小旗を動かさば此大筒を城の矢倉へ打掛よと下知を含め宵より是を遣はし置翌朝昌幸は五百餘人の者に小具足を着せ自分は猩々緋の陣羽織を着して城下に到りける武田勢此由を聞眞田は鈴木に謀られしぞと呟き乍ら日頃の手柄を奪はんと知ぬ体にて眺め合て居たりける昌幸は城に向ひ昨日約せし如く早々城を明渡し給ふべし眞田安房守昌幸請取に來りしと呼はりければ鈴木越

ひ安々と城際に攻寄て皆々空堀へ飛入〳〵鬨を作りて塀に登れば城中大に駭き騒ぐと雖も城將菅沼は油斷なき大將なれば透さず弓鐵砲を掛並べ雨霰と打ち下す其中を奥平が嫡子九八郎信昌は塀を乘越近寄敵を七八騎切て落し續いて保科彈正忠松岡三河守城中へ切入〳〵終に曲輪を一重攻取ければ大手よりも是を見て劣らじ者と寄手の大勢打共突共厭はゞこそ無二無三に攻入〳〵戰へばさしも菅沼新八郎も前後の敵に當り難く本丸へ引入たり此時吉田の城より野田城の危かりしを知り急ぎ野田城の後詰せんとて本多石川大久保酒井榊原小笠原植村の面々に五千餘騎を差添て德川源君自分出張わり是を見て伊奈四郎勝頼八千五百の勢を率して馳向ふ大久保七郎右衛門石川伯耆守五百餘騎にて馳出勝頼と戰ひしが多勢に叶ず引退く本多平八郎忠勝五百餘騎にて入替り勇を奮ふて戰ひし有樣目覺かりし次第なり榊原小平太康政力を助け爰を專途と戰へば此勇猛に當り難く勝頼の八千五百餘騎蜘の子を散すが如く右往左往に逃散たり山縣跡部是を助けんと馳向ふて戰ひける此間に信玄は眞田兄弟を從へ野田勢の後に當る淺谷山に旗を指揚鬨を動とぞ上にける是を見て野田勢大に駭き後陣を先鋒に出し吉田の城へ引んとす勝頼馬を立直し諸勢に下知し敵は色めくぞ懸れや〳〵と采配打振進めければ本多平八郎酒井左衛門尉兩將手を盡して勇戰せしかば此隙に德川方惣勢を纏め山手に沿て引取ける所に鐵砲を響し眞田信綱穴山梅雪双方の峯より大石を雨の如く投下し〳〵松明にて道を塞ぎ攻立れば吉田勢防ぐ

足助落城に及びしかば淺香井大沼の諸城は未だ攻ざるに明渡し阿次利田代は降參して武田の勢ひ雷の如く成にけり其外八桑の城主伊豆三郎祐國は自害して城兵皆々落失是に依て六ケ所の堡砦皆々片付しかば夫より野田の城へと向ひける當城には菅沼新八郎定光楯籠りたり武田勢十重廿重に取圍み晝夜の別ちなく攻ると雖も菅沼元來譽れある大將なれば防禦の方術拔目なく堅く守つて防ぎける是に依て流石の武田勢大軍なりと雖も大に攻厭倦でぞ見えにける

武田勢參州勢を破る事幷德川源君即智の事

斯て武田勢は數度の勝軍に勇み悅び野田の城に押寄晝夜を別たず攻ると雖も城兵堅く防ぎける程に寄手も攻厭倦で見えければ保科彈正忠正直秋山伯耆守晴近坂西兵衛松岡三河守等此度眞田昌幸足助の城を攻落せし事を羨やみ此野田の城は吾儕にて攻落さんと四將評議をなし當城の後より夜討を掛て城中へ乘入んとせしに保科正直此城の搦手は山續きにして嶮岨なる事は鳥も翔り難き程なれば勿々乘入り難からん此道は奧平美作守案內なりと云ひければ秋山晴近然らば奧平に談じて夜討を掛んは如何にと云ふに一同然るべしと聽て奧平を招き談せしに奧平は我能此案內を知り乍ら夜討の事は更に心付ざりしが誠に此事宜しからんと答へ率や今宵一攻なすべしと其勢五千餘人山手より城中へ乘入一手柄せんものと四將何れも手ぐすね引奧平が案內に從

第十五　毛利父子只來合戰の事并鈴木越後守落命の事

扨も吉田勢は此度武田方に破られ既に危ふかりしか共終には天下を定め給ふ洪福在ます君なれば諸將踏留まりて防ぎ戰ふ其中に殘兵を纒め徐々と引入らせ給ひけり然りと雖も馬塲山縣が付入らん事を遠慮わりて後陣へ回られ城中へ入りながら彼唐土三國の戰ひに諸葛亮が仲達を退けし即智の計略に倣ひ城門を開き置しに馬塲山縣之を見て深き謀事とやわらん馬を進めず樣子如何と窺ひしが德川公は高矢倉に登り莞爾笑ひ座し給ひしに武田勢愈々不審なす所に最前踏留りて戰ひし本多忠勝大久保忠世酒井忠次石川伯耆守等我先にと馳歸り馬塲山縣が後より鬨と喚いて攻懸れば馬塲山縣も心得たりと渡り合戰ふ内に城中よりも是を見て喚き叫んで打て懸れば名に負馬塲山縣も前後の敵に取圍まれ大に亂れて引退く此隙に諸將皆々城中へ引入ければ源君にも御喜悦在まし今日の合戰は危き事多しと雖ども無難にて歸城せしは斯樣々々の謀計にて敵を挫きしなりと宣へば各々顏見合せ誠に君の洪福限り無と何れも萬歲をぞ唱へける此時馬塲山縣は漸々に軍を收め敗兵を集めて五丁程も退さし所武田勢我も／＼と馳來る中にも眞田昌幸眞先に進み奈何に馬塲山縣の兩將定めて大將を討取つらんと尋ぬれば兩將答て然ばよ吉田の城へ追詰付入にせんとせし處に早くも城中に入て橋をも引寺門をも閉ず大將は高き矢倉に登り献

事能はず大に崩れ這々の體にて敗走し漸々と道を奪ふて三町許り走りければ又火の手を上て眞田昌輝馬場信房が勢打て出るを戸田左衛門尉一西踏留まり必死と成て戰ふ間に百騎二百騎打連て吉田の城へ引取んとせしを武田勢は遁さじと大木大石を以て向ふの道を取切れば引べき様更になし此方より遁れんと又馬を立直せば山の頂上より弓鐵砲を打立射立信玄峯に現はれ出奈何に吉田の兵共早く降れと呼はつたり大久保植村小笠原の面々是を聞て少しも動せず爰を討破つて駈通れと獅子の荒たる勢ひにて打ども射れども事共せず大木大石を飛越刎越死を恐れず近寄る敵を薙立打据難なく切破り吉田を指て引退く源君此體を遙かに見給ひ近習ばかり七八騎召連敗軍を引入させんと采配取て鞍上に立給ひ早引入よ〳〵と頻に下知を傳へらるれば朱に染し諸將追〳〵引來るを纏め早々引取せ給ひける跡を慕ふて馬場山縣八百餘騎を引具し餘さじと追來るを源君には諸勢殘らず城中へ引取らせ後殿して城内へ入せ給ふ然れ共橋をも引せず城門を開かせ自分矢倉に登りて床机に掛り欣然として居られしは深意ありける計略なり馬場山縣は追ながら城下へ來りしが此體を見て若や謀計わらんかと左右なくも進まず信房昌景も己が智慮に迷ふて控へたりしに遙に矢倉の上には德川源君少しも臆する氣色なく只輾爾と笑せ居給ふ有樣は誠に深計有氣にぞ見えにける爰に於て馬場山縣暫時躊躇其内に思はず時刻を移しけり

て渡り合又入亂れて戰ひける毛利成宗と次男なる成定は大勇剛の聞えありし者なれば大太刀を眞甲に翳し群集敵中へ駈入て當るを幸ひ雜兵士卒の會釋もなく瓜割胴切腰車四方八方薙立打立切捲る此勇戰に當り難く蘆田下野守等散々になりて颯と引笠原清水下知をなし我々主命に依て武田家の加勢に來り何の仕出したる事もなく汚面〳〵と歸らん事殘念なり良敵の首取て國許の土産にせよと諸卒を勵まし楯の蔭より鐵砲五百挺を連發に打懸る毛利成定勇を奮ふて馳廻るに鐵砲雨霰の如くなれば面を向べき樣もなし然ども厭はず進む所に一個の玉飛び來りて頬先に當れば何堪らん馬より落るを毛利新七見て大に怒り寵愛の悴を目前に討せて叶はんや續けや者共と北條勢に切て入終に亂軍の中に討死す是に依て只來の砦は北條勢に落されけり又毛谷七之助は未だ飯田の砦を守り居けれ共既に只來攻落されしかば今は防ぐに詮なしとて毛谷は砦を捨て迯失ぬ依て武田勢大に利を得て手始め好と勝鬨をこそ上にけり此事三河へ注進ありしかばいで後詰せんとて源君本多酒井榊原大久保石川等を始め其勢四千餘騎を從へ三日野川迄出馬ありし所に早兩砦攻落されしと聞今は無益なり併しながら此所迄出張せし事なれば有無の一戰を遂んと有けるを酒井左衛門尉是を諫め此儀宜からず敵は大軍と云殊に信玄なり且又先日の合戰に敗れし味方なれば諸卒の心未だ勇まず然るに敵は先に戰ひ勝て勢ひ甚だ壯んなり此度の御一戰は實に以て危き事なり先々御引取有て織田家の援兵を乞受其後愉快合戰を遂られ然るべしと

然として控へし故我々謀略あらん事を疑ひ數刻を移す所に思ひ掛なく岡崎の諸將立歸りて後の方より攻掛け是を見て城中よりも打て出前後の敵に當り難く必ならずも引退きしと語りければ眞田聞より大に歎じ是敵の謀計なり其時に我々ならば疑ひなく切入て城中の大將始め一人も遁す間敷者を是非もなき次第かなと申すにぞ馬場山縣も俄かに心付誠に孔明が仲達を退けし類ひの計略なりしを遠慮したること殘念なれど切齒をなして悔たりけり是より武田勢は二月より四月迄長陣を張ると雖も何の仕出したる事もなければ一日昌幸信玄に向ひ一旦御歸陣有て再度攻られ然るべしと申にぞ信玄も道理なりとて夫より陣拂ひをして甲府に歸陣有て爰に於て此度の合戰に軍功ありし眞田を始め諸將へ恩賞を行ひける斯て德川家康公には追討をも掛ずして云る樣這般甲府勢一旦引取と雖も必ず再度攻來らん因ては只來飯田に砦を構へ守らすべしとあつて毛利新七成宗毛家七之助康國等に命じ二千餘騎にて固めさせ且又二俣の城には中根平左衛門を籠らせ要害堅固に構へたり斯て同年十二月上旬武田信玄は再度軍を發し德川を攻潰さんと發向なす其先陣には天野宮內右衛門蘆田下野守兩人望みに依て是を務む二陣には北條家より加勢したる清水太郎左衛門笠原兵衛尉なり毛谷七之助は武田勢の寄來るを今や〳〵と待受けし處に敵押寄せ來りしかば大敵を事共せず無二無三に切て廻る武田勢も同じく火花を散し半時ばかり戰ひしが相引にして暫時息を入れし程もなく鐘を打鳴し双方より鐵砲少し放つや否や鎗を振

つ逆賊射落せと下知しければ河原重兵衛と云る屈竟の剛兵心得たりと三人張の弓に十三束三ツ伏の大雁股の矢を番へ滿月に引絞り切て放てば過たず鈴木が眞甲より射貫ければ何かは以て耐ふべき鈴木は馬より眞逆樣に落て死失けり城兵一度に吶と笑ひ逆賊鈴木が有樣を見よやとて箙を敲き鬨を作つて切り出る後陣に扣し蘆田山縣馬場相木我劣らじと城兵に向ひ合せ馬を進て鎗刀を交へ双方勇を顯し痿まず去ず大に挑み戰ひけり

二俣落城の事幷武田勢味方ヶ原出張の事

眞田信綱同昌輝は此度の合戰に指る高名も非ざれば何とか人に勝れし手柄せばやと思ひ弟昌幸を呼で相談せしに昌幸答て某し熟ゝ案ずるに此城元來山城にして水に乏し只西南の山手より三ヶ野川の水を引入るのみなれば今宵右の水の手を斷絶攻る時は戰はずして落城すべしと申ければ兄弟大に喜悅しさらば其用意せんと急ぎ陣所へ歸りける此折しも武田勢は新手を入替短兵急に攻ると雖も城兵勇み誇つて容易に攻落す事叶ひ難く兎や角と時刻を移せしが早日も既に西山に傾きし故互に軍を收めて引取けり寄手の諸將攻あぐみ明日は如何して戰はんと色々評議すると雖も指たる方術もなく皆々工風を凝しける時に眞田兄弟は諸卒を從へ鋤鍬を持せ西南の山手に到り昌幸篤と地の理を考へ堀らせけるに果して一丈許りにして水を取べき筧有ければ扨こそ

申ければ源君篤と聞玉ひ汝が申所理ありと雖も敵の旗の手をも見ずして引取らん事卑怯の至りなりと聞入れ玉はざるを忠次謹んで是は君の仰とも存じ奉つらず候臨機應變は兵家の常なり退く事あり進む事あり爰を能御分別ある時は此たびは何分一先御引取有べしと強て諫め申上ければ源君聞し召實に道理なりとて本多忠勝を後殿として遠州濱松に引上給ひけり此時甲府勢は我も〳〵と驅來り中根平左衛門が守りける二俣の城へ攻懸る伊奈四郎勝賴穴山入道梅雪武田左馬之助五千餘騎大手より揉に揉んで攻立る然れ共豫て防禦の備へ嚴重にして城兵透間もなく防ぎしかば何時果べきとも見えざりける然るに今度降參せし鈴木越後守は此度の合戰に勇々敷手柄を顯はし譽れをなさんと思ひしかば手勢三百餘人にて搦手へ向ひ味方を離れて如何に城將中根平左衛門に申可事ありと呼はれば城將中根矢倉に上り我に物言んとは抑も何者なるぞ鈴木越後守馬上より今汝に一言告んと思ふ事あり汝は某しと倶に當國の幕下たりと雖も恩顧を受しにも非ず然るに由なき力立てして武田と戰ひ累代の家名を失はんより早々城を開き降參せよ我是迄の好に命は助け得さすべし若我言葉に違ひなば立所に汝が首を取べしと高聲に呼はれば中根聞て大に笑ひ何者かと思ひしに不義を構へ降參せし臆病者の鈴木成か汝耻かしとも思はず厚顔くも某がしに對面せんとは云しぞ凡武門に於ては不忠不義を以て第一の汚名とす汝が臆病に引當て某しをも同樣に不義に引入んと爲すこそ奇怪なれ何ぞ日を同うして論せんやと言ひ返しつ

門林佐渡守水野下野守毛利河内守秀頼等を將として一萬三千餘騎を從へ其上梁田出羽守に三千餘騎を差添都合一萬六千餘騎をぞ遣されければ源君甚だ御悦喜在まし早々御出陣の御用意をぞなし給ひける

第十六　味方ヶ原合戰三河勢敗軍の事幷織田德川の諸士戰死の事

然程に元龜三年十二月廿三日武田信玄は大軍を引卒して味方ヶ原に出張あれば德川源君にも此度の合戰小勢にては敵し難き事なればとて織田信長に援兵を乞給ふ所信長早速承知有て佐久間信盛平手甚左衛門などに一萬六千餘騎を差添援兵として送られけり德川源君大に御悦喜在まし此勢にては武田を禦ぐに何ぞ難き事あらんやと直に出陣有て對陣に及ばれける此時眞田安房守は信玄に向ひ此度の合戰某し熟々考ふるに德川を亡す事此一擧にあれば味方必死を以て力戰すべき時なり然れば其方便なくんば叶ふべからず先先鋒には小山田馬場山縣を進申さん德川勢は素より剛勇の者なれば必ず此手を破らんと進むべし其時味方態と引退き若手の大將家康一番に進み來らん其機を外さず横鎗を以て旗本に切入らば如何なる德川勢たり共唯一戰に破るべし然りながら是偏に諸士の働きに依候なり戰ひは謀事を先にすと申すは此度の合戰をこそ云ふなれ

と其筧を取出し水の手を遮斷て仕濟したりと悅びつゝ陣中へ歸り何知ぬ體して翌朝諸將へ觸出し今日の戰ひには火矢を以て敵の矢倉に射懸中さん遠からず城兵水盡き禦ぐ事叶ずして落城に及ばんとて聽て用意を整へ火矢を打掛しに敵城には急に水一合も來らざれば中々防ぐ事能はずして矢倉三ヶ所迄燒落されしかば中根大に呆れ果扨は水の手を取切られしか殘念なり是正く武田家にて智將と呼れし眞田昌幸が計し事ならん斯なる上はとても籠城叶ひ難しと心を決し三日目の夜に紛れて搦手より落失けり武田勢斯る事とは夢にも知ず例の如く攻寄けるに城中靜り返つて音もせず人氣わりとも見えざれば扨は城兵夜に紛れて落失しかと堀を飛越し塀を乘越我先にと込入けるに武具馬具など取散し城兵一人もなく落失し故信玄不審して當城何故に斯俄に落城せしぞと尋ね給へば諸將答て城中を見るに水の手絕て水乏しくなり候によりて落失しものならんと申上れば信玄誰が水の手を取切しぞ是正く火箭を勸めし眞田成べし扨々物に拔らぬ勇士なりと大に感じ給ひける既に二俣の城落去せしかば率濱松の城を攻よとて諸手愈々勇み天にも昇る如く十二月十二日濱松より一里此方なる味方ヶ原に出張し大菩薩山に本陣を据られ濱松勢を見下しける其勢ひ廣大にして朝日の登るが如くなりされば濱松は螢火の微々たるに異ならずと雖も皆々心を鐵石に比して少しも動ぜず勇氣を抱いて待受たりしが那にせん其勢少なければ織田家へ援兵を乞せらる信長此由を聞きて加勢を遣すべしと有て佐久間右衛門尉信盛平手甚左衛

抦伊奈四郎勝頼眞田源太左衛門信綱同兵部丞昌輝横鎗と成て徳川の旗本に突入れば徳川勢支ふる能はず亂れ騒ぐ所を土屋惣藏安部加賀守内藤修理高坂彈正又横鎗と成て突崩せば徳川勢三方に敵を請狼狽騒ぎ大に敗して已に危く見えし所に本多平八郎鳥居彦右衛門幷びに織田家の援兵平手甚左衛門佐久間右衛門尉林佐渡守水野下野守毛利河内守取て返し防ぎ戰ふたり之に因て南北に旌旗靡き東西に汗馬馳違ひ骸は積で丘をなし血は流れて川をなせ共勝負更に見え分ず中にも土屋惣藏信恒は若武者と云勇猛の士なれば今日の合戰に良大將の首を得ばやと手勢を離れて只一騎黄糸緘の鎧に白星の冑を戴き大身の鎗を横へて彼方此方と馳廻る處に一人の黒糸鎧に赤母衣掛金の采配を打振〱諸將に下知なす者の有樣天晴大將と見えければ土屋心中に是徳川殿にぞ有らんと夫に控へ給ふは天晴大將軍と見奉る身不肖なれども武田の臣土屋信近が家嫡同苗惣藏信恒と申者なり率參らんと聲掛つゝ鎗を捻つて突懸る彼大將打笑ひ優や是へと太刀拔翳し我こそ織田家より徳川家への援兵として向ひたる平手甚左衛門成種なりと名乘や否掛合せ龍虎の如く秘術を盡して戰ひしが土屋が付入突鎗を平手請外して鎧の透間をぐさと突れさしもの平手も馬上に堪らず眞逆に落る所を惣藏馬より飛で下押へて首を搔落し鎗の嘴首に括り付采配を捧て勝頼の前に出しければ勝頼大に感じて率此勢ひに馳散せと下知せしかば武田勢大に勇み縱横無碍に切立れば徳川勢大に敗し蜘蛛の子を散すが如く犀村或は犀ケ嶽へと逃迷ひ源君が旗

と申ければ信玄大に感じ誠に汝が軍略我意に叶へりとて夫より軍を始めらる一番には小山田兵衛信茂千五百騎許り黒煙を立て徳川勢に切て入り續いて馬場美濃守信房諸卒を勵まし蓦地に小笠原與八郎氏祐が手に切て入り火花を散して戰ふたり馬場は聞ゆる智勇兼備の大將なれば鎗を取て眞先に進み氏祐に突て懸る氏祐も名に負勇將なれば同く鎗を合せて玆を專途と戰ひしが馬場が武術に當り難く馬を返して引退く馬場怒りて汚なし返せと追掛れば何かは以て堪るべき氏祐が勢は右往左往に切崩され既に本陣に雪頽懸らんとせしかば徳川源君諸將に下知して中根はなきか内藤はなきか早く武田勢の中小山田が備を切崩させよ然すれば馬場が勢も自然と崩る可なりと鞍上に立て軍配有ば内藤三左衞門中根平左衞門畏まり候と五百餘騎にて無二無三に突入り其勢ひ破竹の如くなればさしもの小山田も終に内藤中根に切崩され散々に成て敗走す馬場信房之を見て小山田を助けんとする所を徳川勢遮り〳〵止むれ共馬場之を物の數ともせずして蹈散し駈通り中根内藤が備に横鎗と成て突入難なく中根内藤を一捲りに駈散して小山田と一手に成り徳川の本陣を目掛て切入ければ本多平八郎忠勝鳥居彦右衞門五千餘騎にて打て出馬場と小山田とに立別れ散々に戰ふたり此時徳川源君眞先に打ち出縱横無下に切立ければ武田勢算を亂して敗走せしにぞ徳川勢大に勝誇つて武田の旗本を切崩さんと駈入しに山縣三郎兵衞徳川の旗本と見るより望む所の敵なりと小踊して釋會もなく切て入酒井左衞門尉忠次と馬を交へ戰ふ折

りと雖も恥る所なりと只一人長谷川山口等四人の骸の許に來り一足も引ずして討死せしは町人乍らも天晴頼母敷又珍らしき振舞なり

將軍義昭公より御敎書を賜はる事幷武田勢諸城を落す事

斯て德川源君は味方ケ原の合戰に敗軍し漸々にして濱松の城に歸陣し給ひければ武田勢は勝鬨を作り勇み猛りて甲府へ歸陣しける抑々斯の一戰は武田方勝に乘じ濱松へ押寄なば然るべき勝利有るべき處に高坂彈正偏に織田家の援兵を怖れて信玄へ歸陣を勸めしは是れ武田家の不運にして德川家遂に天下を掌握し給ふべき好運にや然れど德川勢には犀ケ嶽の難所に懸り敵の追討を怖れ我先にと急ぎし程に思はず谷間に落入死する者其數を知らず是に依て主從離々に成て敗走す是眞田が智謀のなす所にして誠に凡將の及ばざる所なり扨武田信玄は今は吾天下に恐るゝ敵なければ早々上洛し望みの如く征夷大將軍の任に昇り足利將軍幷びに織田信長をも誅して武田の天下となさんものをと思はれける折しも足利將軍義昭公より上使來りて織田德川武田の三家和睦之れ有可き樣にとの趣きなれば眞田昌幸信玄に向ひ此度將軍より上使の來りしは是天より武田家に運を授けし所以なり其故は這般將軍家より御扱ひありしを幸ひ此下知に從ひて速かに織田德川と和睦せられ人質を取置き後日違背有を待て將軍を擁して楯となし直ちに

追詰よと馬場山縣内藤眞田小山田土屋跡部長坂潮の湧が如く追駈れば德川勢終に大敗軍と成て右往左往に散亂し源君にも今は危く武田勢に取籠られ已に討れ給はん樣に見えし處に鳥居彥右衞門元忠只一騎取て返し必死と成て防ぎ戰ひしが數ヶ所の淺手深手に馬にも堪らず心は彌猛にはやれ共心身勞れ已に危くなりし折柄鳥居四郞左衞門元春廿騎許りにて取て返し兄元忠を助け踏止まつて戰ひしが如何に勇なりと雖も多勢に少勢叶はずして郞等十四人と同じ枕に討死す爰に信長に勘氣を受し長谷川橋助山口飛驒守加藤彌次郞佐脇藤八郞の四人の者共は浪々の身となり久しく德川源君の方に居たりし故源君も客同然にして養ひ置給ひしかば此度の合戰に四人の者御供致しけるに德川勢大に敗し平手甚左衞門鳥居四郞左衞門討死して已に旗本危く見えければ長谷川三人に向ひ奈何に方々我々旣に主君の勘氣を受しと雖も早晚は御免の事有る可しと相待所に未だ其沙汰もなく思はずも永々德川公の恩澤を受たり然るに今公の危き事累卵の如し此期に及びては命は義に依て輕し奈何にや我々四人骸を味方ヶ原に曝し名を後世に殘さんはと申ければ山口佐脇加藤の三人實に道理なりと夫より四人取て返し山縣が備に切て入枕を並べ討死せり此時尾州淸洲の甲冑匠玉越小十郞と云者豫て長谷川橋助とは朋友の交りなりければ見廻りの爲來りしに此四人討死せし事を聞て大に歎じ我朋友の討死を聞乍ら阿容〳〵淸洲に歸るは町人な

が此夜眞田昌幸本陣に在て君の寢所へ參向し篤と病體を伺ひけるに齒二枚拔て口中に腫物を生じ痛み甚だしかりしに信玄は昌幸が來りしと聞玉ひ病を扶けて起直り然も嬉氣に昌幸に向はれ汝能こそ來りしより數多ある諸將の內にも眞の忠義と謂ふ可きは馬場山縣の兩人と汝の三將なるが其中にも常に片腕と賴みしは其方なり我此度の病氣は迚も存命心元なし我若し死せば數年の怨敵國々より蜂の如く群り攻入事必定なれば吾死せし後三ヶ年の間は深く秘し置き四郎勝賴を守立適れ天下の武將となして信玄が日頃の大望を遂さす可き樣賴むは全く其方なり然れ共運拙くして滅亡の時來りなば是非もなし其時は汝殉死すべき命を存在武田家の血脉後世に絕ざる樣に賴むなり新羅三郎より數代傳はる當家の浮沈は一切汝が心に任す事なれば此義吳々も賴み入り候なり昌幸と兩眼に淚を泛め昌幸が手を把て遺言せられしかば昌幸も坐ろ淚に暮はてゝ暫時言葉も無りしが良有て頭を上譜代重恩の昌幸此御答へは何と申上げ奉つらん不肖の御責無きのみならず身に餘りたる大事の御遺託爭で心神を盡し之に亟に死を以てせざらんや臣倩〳〵頃日天象を見晝夜心安からざりし處に此度御發病との事につき偖はと驚き御心中をばし伺ひ奉つらんと伺候仕まつりし事なれば萬一も君百年の御後と成らせらるゝとも昌幸何ぞ危害には計らひ奉つらんや竊かに惟みるに孫六入道殿は正く御舍弟と申し君に似させ給へる事なれば是を幸ひ君に仕立敵を欺き申べし然れども北條は今味方に合體すと雖も君御逝去と聞上は必らず敵と

二家を亡し給はゞ多くの軍兵なくして天下を定むる事誠に掌を返すより易しと申述しに信玄如何思はれけん昌幸が諫言を用ひ給はず上使上野中務大輔秀政に和睦の事を御斷りとなり却て織田德川を讒する訴狀をぞ捧られたり是に依て信長よりも訴狀を差上て信玄を難じられける（兩家の訴狀は諸書に見えたるを以て爰に略す）爰に又秋山伯耆守は我手勢を以て濃州岩村の城を攻落し城將信長の六男御坊丸を生捕て信玄に奉つりければ信玄大に悅び我日頃の望み成就するは此時なり早く上洛を遂天下を定むべしと聽て夫々の用意を整へ先吉田の城を落落さんと心懸給ふ中早馬場山縣手勢を以て野田の城を攻落し城主菅沼新八郞松原與一郞は逃失しと告ければ愈々武田家の武威破竹の如く遠近に轟き尾州の平尾玄蕃駒場丹後孕石主殿由井市之丞同く彌衛小林正珠鶴ヶ瀨安左衛門波合備前守木造道壽高岡寺重彌杯聞ゆる鄕士四百騎五百騎づゝ引卒し思ひ〳〵に降參しける故武田勢勇氣倍々加りたり時に元龜四年四月十一日未の刻に至り信玄遽に病氣發し大に重て苦しみ給へば恩顧の醫師肺肝を碎き色々に手を盡して治療せしと雖ども其甲斐なく次第〳〵に重らせ給ひける

第十七　武田信玄病死の事并諸將へ遺命の事

偖も信玄は病愈々重りて今は心身惱亂し給ひければ諸將大に心を痛め色々と評議に及びける

三ヶ年過て後恵林寺に改葬を爲す可し水葬する事必らず〳〵一座の外へ洩す事勿れ（信玄が本條の如く水葬の事を遺言ありしは深き計略の有る事なれ共筆頭の盡す所に非れば之を略しぬ）且又勝頼は是より我に代て武田の家を襲ぐ事なれば忠臣を父兄の如く尊み佞臣を埃の如く輕んじ必らず倶に賞罰を謹み矢て家系を汚す事勿れ諸將も又勝頼を我と思ひて忠を盡されよ然すれば是れ武田の後榮も各々の力に頼りて衰へざる事なれば此儀偏に頼入とありしかば恩顧の重臣皆々頭を垂て涙袖を沾し臣等假令死す共奚ぞ積恩を報せざらんや武田家の有ん限りは忠を盡し聊か二心有る容からずと異口同音に御請申せしかば信玄は殊に嬉しげにて猶申されけるは山縣馬場眞田土屋長坂跡部小山山初鹿野等は取り分け有功の將なれば互に心を一にして不和を引出す事勿れ惣じて國家の滅亡するは皆不和より事起るぞかし早や遺言も是迄なりと云も果ず眠るが如くに目を閉給へば諸將皆々抱き付しに信玄發と目を開き口惜や日頃の大望叶はずして命數爰に終るとは眞田はなきか昌幸汝武田に刃向ふ敵原は皆擊亡ぼして我亡魂を慰めよアラ口惜やと言はれしまゝに又絶入給ふをソレお藥よソレお水よと醫師山本法印玄流半井法眼進み出で御介抱に及びけれは信玄又も目を開き硯持來よとありけるにぞ早々料紙を奉つる信玄筆を執て辭世に曰く

大抵任他肌骨好

なる事鏡に懸て明らかなり然る時は先君の遺命なりと申立上杉に交りを結びて之を禦ぎ申さん謙信は元より義勇の將なれば斯と聞し上は忽地無二の中と成事疑ふ所之れなく然ある時は北條織田遂に怖るゝにも足ざる樣相成べくと申ければ信玄聞給ひ奈何にも我こそ上杉を敵として戰ひつれ今汝が云如く我死せし後は謙信を賴まずんば大なる禍ひ目前に起らん能も義計を案せし者哉と賞し給へば昌幸押返して君此儀を良しと思召なば明日諸將を召れ御遺命を御示し有て然る可く存じ入候なりと申ければ信玄打笑心安かれとばかりにて又病床に倒れ給ふ昌幸其夜は我陣に歸らず詰居たり扨翌日信玄は子息四郎勝賴葛山三郎信貞仁科五郎信盛舍弟孫六入道一條右衛門大夫信龍兵庫之介信實穴山入道梅雪武田上野介を始め一門の人々譜代の重臣を枕邊に呼集め遺言申渡されける樣には偖も諸將等よ我是まで長の年月天下に縱橫して奸賊凶徒を攻亡ぼさんと爲せしは萬民塗炭の苦みを救ひ上萬乘の君より下卑賤の者に至る迄安穩ならしめんとの大望にて上杉北條織田等と每度勝敗を決する所其功未だ立ずして此度病に罹り命旣に旦夕に迫れり是天年を我に假さゞる事なれば誠に是非もなき次第なれ共吾死したりとて三ヶ年の間は必らず深く秘して世間に知らする事勿れ然れども謙信は義に堅き大將なれば吾が遺命なりと申して和睦を申入る時は合体する事必定なり上杉だに和睦せば餘の敵將は恐るゝに足ず此事背くに於ては武田家の滅亡旦夕にあり偖又我死せし上は甲冑を着け兵杖を持せ諏訪の湖水に沈め置き

功の松田が一言に諸將是れ妙論なりと感じ夫より杉浦中務少輔を使者として音物など多く取持せ甲府へぞ遣はしける此時甲府には信玄病死ありし後武田四郎勝頼を武田家の棟梁と仰て諸將信玄に仕る如く尊敬なせしかば跡部大炊介長坂釣閑今福和泉などと云佞臣共は勝頼に諂諛ひ威勢増長して諸事の計ひも此者等の扱ひと成りける處に未一ケ月も過ざるに北條家より信玄の病氣見舞として使者杉浦中務少輔來りしと通じければ勝頼大に驚き是れ必ず父君の病死を聞て窺ひに來りし者ならん如何して此使者に返答せんと長坂に尋ねられしに長坂申けるは只何となく慇懃に待遇し返され候へ假令北條御病死を知て攻來るとも何程の事か有べき當家の手並は豫て知たる事なれば中々攻來る程の儀は候まじと事もなげに申ければ勝頼も然るべしと有る處に眞田兄弟山縣昌景馬場信房急遽く登城して此度北條家の使者へ何と返答相成る可きやと長坂に尋ねしに長坂爲たり顏にて斯々なりと語りければ山縣大に怒り眞田氏始め我々にも知せずして大事を專斷せんとするは以の外なり其元達の知所に非ず、云ひ捨て軈て四將は勝頼に密計を奉つりし後杉浦を勝頼の御前に出しければ勝頼珍らしや杉浦殿能こそ來られたり北條殿より深切の御見舞忝けなく存ずるなり父信玄には岡部の陣所にて病に罹りしが其後種々治療に手を盡せしを以て此節は大方全快せり此体ならば頓て織田家と有無の一戰をも遂らる可き間其節は北條殿へも援兵を賴申べし其旨主君へ、宜く達し呉られよと何氣もなき挨拶に杉浦案に相違して呀と平伏

不レ塗ラ紅粉ヲ自ラ風流

と書了て天正元年四月十二日申の下刻五十三歳を一期として命終り玉ひぬれば一門譜代の面面に至るまで暗夜に燈火を失なふ如く皆一同悲歎にこそは沈みけれ斯て有可きに非ざれば諸將は殘らず陣拂ひして甲府に歸陣し信玄の喪を深く秘しける故知者更になかりけり

北條家の諸將評議の事并杉浦甲府へ使者の事

爰に北條氏政は信玄の武威に恐れ先達てより幕下同然に從ひありしが此頃誰言ふとなく信玄病死せしとの噂頻りなれば大に悅び時こそ至れり早々甲府へ亂入して備へなきを討破らば父祖の舊國甲信を復し日頃の望み成就すべしと急ぎ諸將を集め評議あるに大道寺進み出て信玄假令病死する共甲府には御舍弟を人質に遣はし置れたれば無解に攻寄る事叶ひ候まじ其上武田家には智謀の臣多ければ信玄を病死なりと披露し他國の敵に之を聞せ悅んで亂入するを奇計を以て討んとの謀略なるやも計り難く候故風聞のみにして軍を出されん事然るべからず篤と虛實を明らめ給はん事肝要ならんと申ければ松田聞て駿河殿の御意見道理なり然りと雖も萬一信玄彌々病死に極まらば此虛は捨置難きにより先見舞の使者を送り信玄に對面して歸る樣致す可し其時全くの病氣ならば對面致さん若また對面を謝絶らば是必定病死なり此議如何と申ければ流石に老

く良わつて信玄御面會致さんと告るにぞ杉浦案内を乞て馬場山縣眞田の歴々に隨ひ深殿に至り一間を隔てゝ伺ふに信玄紫頭巾に純子の小袖二重錦の夜具の上に座し給ひ後には小姓相木釆女増田幸松左右の坐には穴山梅雪入道一條右衛門大夫武田左馬介同下野介等を始一門一族譜代の長臣列座せしに杉浦ハッと平伏なす信玄見給ひ杉浦氏なるか能も北條殿には予が病を訪はれしかな老病なれば是限り成んと豫て覺悟せし所未だ盡ざる命數にや此程は大方全快いたしたり此體にては頓て德川との一戰も愉快致されんと思ふなり立歸られなば此由を主君へ宜く取成あれ太儀〳〵と寛然たる有樣にて申されければ杉浦醉を押へて平伏しながら之を見るに紛ふ方なき武田信玄なりければ欺かれしとは夢にも知ず恐れ入て申けるは先以て御全快の體を拜し恐悦に存じ奉つる德川御征伐の爲め御出陣あらば不調法乍ら相應の御用仰付られ下され度しと答へける信玄過分なり兎角病中なれば是にて辭する間其方にも退出有つて休息致されよと言葉少なに挨拶され杉浦も拜伏して退出し其夜は甲府に宿し翌朝暇を告て小田原にぞ歸りける然程に北條家にては杉浦が歸るを今や〳〵と待所に杉浦歸り來り氏政の御前に出て信玄病死と申すは全く相違にて候某し正しく對面致し候所病氣も早全快に趣けば近々德川へ軍を向けんと物語りこれ有り候と申にぞ北條氏政大に駭き我大道寺松田が敎へに隨はすんば信玄が爲に恐しき目に逢べき所なりと驚怖一方ならず是より武田家には無二の心底をぞ盡しける爰に德川源君は信玄の病

なしけるが此所にて對面の事を願ひ見んと愈々平伏氏政儀父公の御病氣如何と某しを以て使者となし遣されし處追々御快愈との事先以て大悅に存じ奉つる就ては恐れ乍ら御病苦を扶けられ中務に御對面下されなば重々有難く國元へ歸り主人へ御尊体の趣きを篤と申聞度候右の段御取成頼み奉つると謹んで述ければ勝頼扨こそと心にうなづき杉浦殿には御念入るゝ段道理に存ずるなり土屋惣藏父公へ伺ひ來れと有ければ杉浦倍々不審して胸を痛め居たりしが暫時ありて土屋惣藏只今の趣き信玄公へ申上し所夫へ參り對面致すべきなれども病中の事なれば杉浦殿を病床へ伴ひ有るべしとの仰なりと述ければ杉浦大に疑ひシテ見れば信玄未だ存命と見えたり危し〳〵慢然軍を出さば飛んだ辛き目に逢ふ所なりアヽ腸たが動搖ぞ扨々恐ろしき事なりと心中に深く恐れつゝ別間に引れ行ければ馬場山縣等立出て御使者御苦勞との挨拶了り頓て山海の珍味を出して酒を侑め穴山内藤其外の諸將皆々立出種々に饗應し酒を強しかば杉浦も思ひ寄ず沈醉に及び彼是と數刻を移しける

第十八　眞田僞計北條の使者を欺く事幷德川源君長篠攻の事

恪て杉浦中務少輔は早や酒も分を過せしかば頻りに辭退なすと雖も諸將猶も勸むるに辭するは却て無禮と思ひ又も數盃を傾けゝる内はや日も夕陽に傾きければ殿中に燭臺を照す事白晝の如

倏然様なる手緩き事や有べき我一戰に家康が首を取て父の手向と爲べきなりと居丈高に成て申されければ眞田信綱猶も諫め申して這は那なる御事にて候ぞ馬塲の申さるゝ處誠に理に當れり先君の遺命にも上杉謙信を頼むべしとありし程なれば徳川は捨置給ひて急ぎ上杉へ使者を立られ和議御調へ之れ有る可し然る時は徳川にまれ織田にまれ御自家を恐るゝ事鬼神の如く指す事も叶ふべからず然るを其根組をも堅め給はず只血氣にのみ狂擧せ給ふは大將のすべき所に之れ有らずと理を盡して述べけるに勝頼初めて心付誠に眞田が諫言なくんば一大事を過る所たるなり然らば先上杉と交りを結び其後軍を出すべしと評議ある所に長篠の圍甚だ急にして後詰延引あるに於ては落城近きにありと告來りしかば長坂釣閑進み出て馬塲眞田の申す處忠諫には似たれども眼前味方の城を敵に攻落さるゝを餘所に見過すべけんや急ぎ軍を出し玉ひ然る可し勿論其手立は一手は武田逍遙軒に馬塲穴山を差添濱松の城を攻べき形容にて出軍させ一手は左馬之助に山縣小山田を添へ長篠の後援として差向此兩手を以て前後より徳川勢を取込みなば家康勇なりと雖も首を授くる事掌の中に有るが如くならんと申ければ淺智の勝頼又心を翻へし長坂が云所道理なりとて遂に此議に一決し孫六入道に千五百餘人左馬之助に三千五百餘人を差添二手に別れて向せける馬塲山縣眞田も今は諫べき樣なく眉を顰て歸館しけるが眞田信綱は何とやらん心進まず昌幸が方に到りて此由を物語れば昌幸聞より大に歎じ這は如何なれば斯く俄や

死を聞て大いに悦び此機を外さず甲府へ攻入んと議せられし處に此度北條より使者を送りて窺ひしに信玄病死と云は僞はりにて全くは存命なりとの沙汰頻りなれば其眞僞を糺さんと武田の領內駿河國岡部を放火せよとて源君自ら出張して五百餘人の足輕に申付岡部の風上より火を掛燒立させ其儘濱松の城に歸らせ給へば榊原本多申けるは君今岡部の城を放火し早速引退き給ふは何事ぞ源君笑はせ給ひ我信玄の病死を知と雖も猶其虛實を糺さん爲岡部を放火せしなり誠信玄存命ならば軍は出すまじ若病死ならば勝頼は智淺き大將なれば軍を出す事必定なり然れば武田勢彌々討て出る事あらば斯樣〳〵に致すべし自分は是より長篠に籠りし小泉源次郎諸家一葉軒の兩人を攻べしとて大須賀五郎左衛門本多平八郎同作左衛門榊原康政菅沼小大膳土井豐後守等には當城を守らせ酒井左衛門尉大久保七郎左衛門石川伯耆守菅沼新八郎小笠原與八郎氏助抔を引連長篠の城へ押寄ける然るに城將小泉源次郎諸家一葉軒防禦の備をなし固く守りしかば籠城數日に及びけれども容易落べき體も見えざりけり然程に勝頼は德川勢長篠を攻ると聞て大に怒り速やかに後援せんと諸將を集めて軍議わるに馬場美濃守進み出て申けるは先君亡び給ひて未だ間も有らざるに軍を出され候は甚だ然る可からず既に父公病中なりと披露に及ばれける所なれば假令德川勢傍若無人に働くと雖も捨置るゝに何程のことか有らん城を明渡して甲府へ退くべしと小泉諸家の兩將へ仰渡さるべしと諫めけれ共血氣壯んの勝頼なれば大いに怒りて何

城兵は不締を懐き見て在しに小泉は其儘降参に及びける是を見て家康公大に悦び早速城に入給ふに諸家が郎等八人家康公の前に出て小泉が諸家を討たる事柄を訴へければ家康公笑はせ給ひ然こそ有べし我素より小泉が心を知なれば用ひる心底なし頓て首切て渡すべし然共事急には整ひ難し然わらぬ體にて我に從ひ居るべしと寛仁の待遇に諸家が郎等も今は是非なく四十餘人皆德川にぞ從ひける斯る處に武田左馬之助馬場美濃守小山田兵衛尉二千五百餘騎を率ゐ後援として向ひけるに早城將は德州方に降りしと聞今は由なしと其儘甲府に歸陣致しける又逍遙軒の一手は德川の後を遮らんと濱松の城より向ひ來る所に德川勢大須賀五郎左衛門本多平八郎同作左衛門榊原小平太等控へたりしを見て逍遙軒何の思慮もなく手勢五百餘騎鬨を作て攻入りければ本多作左衛門重次大に怒り憎き武田方の振舞かな卒德川勢の刃の切味知せんと大太刀拔て片手薙に切て廻り矢庭に七八騎まで切て落し十三人に手を負せければ之を見て本多平八郎忠勝榊原小平太康政鳥居元忠土井豐後守我も〳〵と馬を並べて薙廻れば元來思慮なき逍遙軒大に敗して右往左往に引退く山縣穴山馳來り防ぎ戰ふと雖も叶はず敗軍に引立られ四途路に爲て敗しければ本多等の面々跡追掛て來しに武田勢散々になる所へ雁金の紋付たる旗押立て眞田兄弟布下彌四郎增田相木寛荒川等三百餘騎にて馳來り德川勢に切て懸れば今迄敗せし武田勢忽地氣を得て鬨を作り喚き叫んで戰へば勇み立りし德川方もどつと崩れて濱松さして退きける甲府方は思は

甲府より軍を出さば敗軍するは明かなり其上舊君御病死の事迄敵に知すると云者なり何故に諫め給はざるや信綱答て我此事を只管に諫めけれ共聞入給はざれば是非もなしと云ば昌幸大に怒り長坂何故に由なき舌を振ひ君の心を迷はすぞや我再度諫言を申さんと已に登城爲んとする處に早孫六入道左馬之助出陣せしと告ければ今は詮なし此上は我々兄弟濱松の方へ向ひ味方の敗軍を援けんと手勢三百餘騎にて眞田兄弟三人は直に甲府を打立ける

武田勢敗軍の事幷眞田兄弟忠諫の事

徳川勢は長篠の城を十重廿重に取圍み晝夜の別なく攻立しに城中堅く守り能防ぐと雖も素より信玄の死去有りしに心怯れて後詰の來るを待ども〳〵來らざるに小泉源次郎諸家に申けるは所詮當城に久き籠城は叶ひ難し潔よく敵に降參し命を全ふせんは奈何にと申しければ諸家大に怒り我等今日迄君恩を辱けなくし老命に及びながらも一方の將に撰ばれし身を以て何とて阿容阿容降參し末代迄の汚名を殘さんや腹掻切て死なんこそ武士の本意なれと答へければ小泉恥入て何の應答もなく在けるが思ひ返して言葉も掛ず拔打に切て懸る諸家心得たりと刀に手を掛んと爲所を小泉突入り首を丁と打落し片手に指し上げ我に背く者は斯の如しと大音聲に呼はれば城中皆々怖れ慄へ誰一人叛く者無りしかば小泉悦び驕て城門を開き諸家が首を指上て出でければ

代丸の葉殘りて諸人袖を濡すとかや然程に長坂跡部の兩人は勝頼の座下に在て晝夜奸佞を專らとし酒色を勸め勝頼を誑かし己に諛ふ者には恩賞を與へ逆ふ者には罪を誣無二の忠臣たる小宮山内膳を始め數多の人々を放逐するなど我儘の振舞増長して是が爲め馬塲山縣内藤甘利眞田等不和を起し度々殿中に於て口論に及びしかば眞田兄弟種々勝頼へ諫言し早く長坂跡部を退け給ひ浪人せし小宮山内膳等を元の如く召返され給へと勸むれども勝頼一向用ひ給はざれば眞田兄弟大に歎じ武田の滅亡近付たり然共臣として君の不義を餘所に見るべきや七度諫めて聽ざれば臣死すと云は爰なりと又も勝頼の御前へ出先昌幸申けるは先達てより臣等種々申上ると雖も御聞入なきのみならず我々登城致し候へば又諫言ならんと一向御對面なく是奈何成御事ぞや既に御祖父信虎公御一族と不和にならせし故時の老臣們武田家の滅する時節至れりと安からぬ思ひをなすと雖も偏へに忠臣の諫言を用ひ給はず剩さへ今井内藤馬塲山縣を御手に懸られ惡逆日々に增長なし給ひしかば先君信玄公老臣の勸めに任せ信虎公を廢し再度武田家の繁榮をなし給ふ其千辛萬苦譬ふるに物なし然るに君は居乍らにして武田家を襲ぎ給ひ國郡も夥多しく忠良の臣も多く保ち給ひし夫に何ぞや長坂跡部など云小人を愛して忠良の臣を猥に疎んじ玉ふは誠に臣等の解せざる所なり早く長坂跡部の兩人が首を刎ね小宮山等を召返し給はずんば武田家の滅亡近きに在と忠義に凝たる眞田が諫言に勝頼も其時は只茫然として在せしかば眞田兄弟扨は聞入

ず眞田に危さを助けられ勝軍となつて引取りけり是に於て眞田源太左衛門信綱兵部丞昌輝安房守昌幸は鎧をも脱ず直に登城して君に目見申上る樣は武田家は新羅三郎より數代甲斐源氏と稱して天下に汚名を受ざる名家なるに今君が御代と成て御武運先君に及ざるは誠に臣等の見るに忍ざるなりと落涙に及びければ勝頼大に怒り軍の勝敗は時の運なり此度長篠に敗せしと雖も奚ぞ某しの武運先君に及ばずとせんやと怒給へば安房守昌幸長篠にての敗軍は合戰の慣ひなれ共兵書にも彼を知己を知る時は百度戰つて百度勝と云り淺智の爲敗を取る事こそ淺はかなれと申ければ勝頼愈々怒り佩刀に手を懸既に斬うよと見えけるに昌幸少も怖れず諫を入るゝは臣の道に候へば忌み憚からず申上げたりしに聽かせ玉はずして諫者を殺さんとならば臣何ぞ命を惜まんや然りながら父祖の家を忘れ軍法に疎く先君よりの重臣が諫言をも用ひず佞臣の長坂跡部などを愛し酒色に沈湎せられなば武田家の滅亡も早や近づき候はんと歎かはしく存じ候なりと或ひは諫め或は歎き勝頼の袖に取着諫めしは誠に絶類の忠誠とこそは見えにけれ

第十九　武田勝頼長篠出張の事并大須賀小谷逆心の事

爰に作手の城主奥平美作守父子は武田家に背き德川源君に隨ひければ勝頼大に怒り人質仙千代を鳳來寺の金剛堂に於て磔に掛けることそ情なき事共なれ然ば今の世迄も夏山の遊仙寺に仙千

方に我勇猛の程を見せんずと心を鐵石の如く固め待掛たり此時岡崎の大須賀五郎左衛門が一族彌十郎と云者元來大膽不敵の曲者なるが倩々思ひけるに我立身の望みありと雖も祿抵くして年來の大望なり難し今武田家に內通して此度裏切せば勝賴何ぞ重く用ひざらんやと爰に逆心を起し內意の者を語合顏を以て友を集め旣に小谷甚左衛門山田八藏など心を合せ早一味合體なりしかば彌十郎大に悅び急ぎ此事武田方穴山梅雪方へ申送りけるに穴山大に悅び直樣此旨勝賴に通じければ右の書面熟々見終り手を拍て笑壺に入此度の軍に敵將の首を見ること嬉しけれ大須賀裏切なすに於ては合戰の後三河一國を宛行ふべしと書て彌十郎方へ遣はしける此事を聞より武田勢は此度の合戰こそ敵を破る事我々が功にありと大に勇み又眞田信綱は此旨を上田に在ける昌幸が方へ申送りける

眞田信幸初陣の事幷大須賀隱謀露顯の事

眞田安房守昌幸は上田に引籠り病氣保養して在ける處に此度長篠攻始まるとの事を聞き如何あらんと案じ暮しけれども病の爲に身體自由ならず種々に手を盡して居る所へ長篠の戰場より兄信綱の書簡到來し此度岡崎の大須賀彌十郎內通して裏切せんとの事なれば必定味方の勝利なるべしと書栽たり昌幸一見して大に笑ひ大須賀は思慮なき者なれば必ず此事成ずから寺夫が爲味

給ひしと心に喜び猶も種々に心を盡して退出す勝頼は眞田兄弟歸りければ長坂跡部の兩人を召し申されけるは今日眞田兄弟頻に諫言を申し汝等兩人が首を刎て小宮山を呼び戻せと迄に言ひたりしが是れ奈何成事ぞや長坂跡部此由を聞て涙を流し誠に林中の高木は風の爲に折るゝとかや我等君の寵を蒙るが故に諸將皆是を羨み某し等を無實の罪に沈めんとは爲すなり某し等不忠の名を得て誅せられんより寧今より御暇を願ひ何方へなりとも身退き申べし是非もなし此儀偏に願ひ候なりとサモ大人しげなる容貌にて眞田が諫めを沮みしかば淺智の勝頼之を聞て大に驚き我汝等が忠義を知何ぞ疑はんや扨は眞田が小宮山を勸むるは贔屓の沙汰成と彌々長坂跡部を愛し眞田が諫言を聞入給はざるは武田家滅亡すべき前表とこそ知られたり扨又奥平美作守同九八郎武田を背きて同國長篠の城中に立籠りければ勝頼之を攻めんとて天正三年五月中旬甲府を出陣せり此時眞田昌幸は病氣にて居城上田に歸り居合せざれば其外の隨ふ人々には武田孫六入道信連穴山入道梅雪一條右衛門大夫信龍武田左馬之助信豐同兵部亟信實馬場美濃守信房山縣三郎兵衛尉昌景内藤修理亮昌豐小山田兵衛尉信茂原隼人佐跡部大炊之勝資眞田源太左衛門信綱同兵部丞昌輝土屋右衛門尉信近小山田備中守小幡左衛門尉甘利三郎四郎望月甚八郎安中左近高坂源五郎長坂左金吾を始め其勢二萬五千餘騎遠州平山を越て濱松本坂を經長篠表へ出張せり此事長篠の城中に聞えければ奥平九八郎信昌素より大剛の勇將なれば少しも動ぜず天晴武田

是非に勸めて一味させんと山田が言葉を聞入ざりけり此時山田思ひけるは彼大事を企てながら猥りに他へ內事を漏す樣にては究竟事見れて我等三族を罪せられん事必定なり彼れ斯くばかり淺智ならんには今は與し難し寧ろ心を飜へし此由を告知せて恩賞に預からんと後とも云はず早々に岡崎三郎信康へ注進せしかば信康大に驚き源君へ斯と言上せしに源君聞召少しも騷ぎ給はず大須賀五郎左衛門を召れて仰けるは其方が甥の彌十郎は內應を企てたり汝が心は奈何にやと問はれしに五郎左衛門大に驚きテモ甥の彌十郎に斯く淺ましき事ありとは某し一向に存じ申さゞるなりと答へければ源君然こそあらん併し此事必ず漏すべからず漏さば此者共逃去べしと仰けるに五郎左衛門畏まり候とて御前を下り軈て彌十郎を呼寄せ酒など出して四方山話しを爲しければ彌十郎は我謀計の洩たる事とは夢にも知ず幸ひの酒宴と思ひ醉に乘じて申けるは伯父君には此度の合戰何れが勝何れか負と思ひ給ふぞ五郎左衛門笑つて臨機應變何ぞ勝敗を前以て知る可んや彌十郎此度の勝敗は某し篤と案ずるに御當家こそ勝利ならんと存ずるなり五郎左衛門否々武田家は兵多く根足り威勢遠近に振ひ加之智將に富し事なれば御當家の恩賞少ふして君を恨み君臣一和せざるの比に非れば味方の勝利覺束無と何やらん主を恨む體に申しければ彌十郎是屈竟なりと大に悅び伯父君よ實は某し事既に武田家に內通して內應を爲んと謀りしなり然れば伯父君にも某しに同意爲し給はゞ遠州一ヶ國は乞受て必らず參らすべしと申ければ

方の敗軍心元なしと大に歎息し兩手を組で此度の合戰を案じ居たりし所へ源次郎信幸當年十六歳なりけるが立出て申樣父君には此度長篠の勝敗を案じ給ふか昌幸是汝等が知所に非ずと云ければ信幸答へて願くは某し布下荒川を從へ此度の合戰に參り度候何卒許し給へと乞しかば昌幸大に悦び思はざりき斯る勇子の我が家に出んとは然らば千五百餘人にて長篠へ向ふべしと即時に荒川内匠根津新兵衛布下等を相添へ長篠へぞ向はせける其翌日昌幸は少しく快よく庭園に出て杖に縋り水邊を眺め居る折柄後堂に小兒の聲にて孫呉の兵書を讀む聲せしかば怪み乍ら障子の隙より覗き見るに與三郎にてありければ大に驚き彼は病身者なりし故成長の程如何やと思ひしに我日頃源次郎に敎へしに餘所乍ら聞き覺えしと見えたり斯く聰明なれば後必ず高名を顯さんと獨手を拍て感じ入り斯く兄弟共勝れしこそ末賴母敷と思ひけれ扨も眞田源次郎信幸は手勢千五百人を率し長篠へ參着しければ勝賴陣所を出て厚く賞し夫より大須賀が相圖を今や〳〵と待居ける此時大須賀彌十郎は小谷甚左衛門山田八藏等と謀し合せ一時も早く裏切して勝賴に勝利を爲さしめ三遠の兩國をば我物にせんと猶も我一族大須賀五左衛門の功ありて賞少なく主君を恨むの心あるを幸ひ是を勸めて同意させ可く存じ山田八藏に談せしかば八藏大に制して無用なり〳〵五郎左衛門は元來德川家開國元功の忠臣なれば何ぞ二心あらんや之に一味を勸むるは謀計を漏す種なりと押止むるを彌十郎打笑ひ何條然事のあるべきや五郎左衛門は我伯父なれば

何分今一應仰遣され然るべしと申述ければ然らば汝等能に計ふべしとの事に本多小栗承まはり直に早打を以て岐阜に到り後援の儀を乞猶矢部善七に内意を語りければ信長聞給ひ然らば早々出張せんと嫡子中將信忠次男北畠信雄神戸三七郎信孝柴田修理進勝家佐久間右衞門尉信盛明智日向守光秀羽柴筑前守秀吉瀧川左近將監一益徳山五兵衞丹羽五郎左衞門長秀池田紀伊守金森五郎八水野下野守三好宗兵衞鯰江若狹守蒲生飛彈守父子森勝藏長一不破河内守丹下備前守稻葉伊豫守前田又左衞門野々村三十郎河尻與兵衞佐藤六左衞門青山新七佐藤市左衞門の面々五畿内攝津河内和泉の勢十一萬五千餘人を率して出軍に及びければ源君淺からず悦び玉ひ此勢ひにては敵軍を破らん事手裏にありと仰けるに信長調伏の連歌を爲んとて諸將其外俳諧師を召れて

松高く竹たくひなき五月哉　　信長公
白くは見えぬ卯の花重ね　　夕庵
入月も山かたうすく消果て　　紹巴
おたを盛りと見ゆる秋風　　信長公

とありて源君にも一句との事なれども源君は何とも詠せられざるは深き御心にてぞ有けん折しも五月は種々と合戰有ける此時に酒井左衞門尉忠次進み出て甲府勢大軍なりと雖も長篠の押へとして勢を一手に纏め今鳶巣山に陣を据二千餘人にて籠城を爲す事なれば今宵密に間道を經て

五郎左衛門扨はと思ひ返答にも及ず其儘取て押へければ彌十郎大に驚き是は何と仕給ふぞと言せも果ず五郎左衛門面色を變じ聲を荒らけ憎し汝斯る大惡心を起して高恩を破らんとする事我最前より之を知と雖も僞りて主君を恨む體に會釋しに果して汝此言を吐出せしなり率伯父が繩目に懸り主君の御前へ來れと直に生捕て御前に到れば折柄本多忠勝も小谷甚左衛門を生捕て來りけるに源君此者共の一族十六人を竹鋸の刑罪にぞ行ひ給ひける

第二十　織田信長々篠出張の事幷眞田馬塲山縣忠諫の事

然程に大須賀彌十郎小谷甚左衛門の兩人は思ひも寄ず奸計の見はれて生擒れたる儘敵方の見る前に引出され竹鋸りの慘刑に處せられしは是與平仙千代を誅せし酬ひとこそは知られたり斯て武田勝頼は大須賀が內通を聞き敵を破る事掌中に有と悦び居たりし處に彌十郎陣前に於て竹鋸りの刑に行はれけるを見候は逆謀の見はれしかと大に驚き案に相違して居たりける此時源君は信長へ後詰の勢を再度申送られしか共其沙汰なかりしかば大に怒り給ひ信長の心底心得難し先に姉川の軍より此方よりは數度加勢致す所此度我長篠に於て一大事の合戰に及ばんとするに彼れ加勢を出さゞるは以の外の振舞なり信長斯る反覆の者ならば乞や是よりば武田と一味して織田の一族を亡ぼさんと宣ひけるを小栗大六郎本多作左衛門の兩人諫めて御怒りは然る事ながり

之助を大將として三枝勘解由左衛門飯尾彌太右衛門五味與兵衛名和無理之助眞田兄弟を殘し置長篠の押へには高坂源五郎小山田備中守小泉源次郎二千餘人にて備へたり此三方の固めに兵を分遣はしければ勝頼の本陣甚だ以て小勢なるにより重臣馬場山縣諫言を加へ達て歸陣在かしと申けれ共勇氣盛んの勝頼一向に聞入給はず大軍を怖れず小敵を侮らざるは軍法の極意なり何ぞ斯く計りの大軍恐るゝに足んや我一番に打崩して見すべきぞと勢ひ込で見えけるに跡部長坂等側らより實に此敵何程の事か候はんやなどゝ頻りに油を灌ぎ掛しかば彌々勝頼勇みけり恁て鳶巣山に在りし眞田信綱同昌輝立歸りて申けるは某し此度敵陣の備を見るに極めて鳶巣山の間道より我後を取切の摸樣なり其故は强ち軍を進めず陽に弱を示して陰に勇氣自から顯れたり是偏に遠計ある所以にて候然れば小勢と云殊に三方の固めに味方一致せざる時は味方死地に陷り候なりと述しに長坂進み出で死地に入て戰ふならば大軍をも打破るべし其上我君の威光四海に輝く奚ぞ恐るゝに足んやと事もなげに申ければ勝頼大に悦び能も申たり長坂汝が云所我心に適へり再度諫むる事勿れとありければ信綱大いに歎じ是非もなき次第なり君の威光四海に輝く程ならば今歸陣あるに爭か敵追討せんやと獨り呟きつゝ猶も種々に諫を入れけれども勝頼は不興氣の體にて歸陣の事は武田家敵を恐るゝに似たりとて用ひ給はざれば馬場山縣眞田等今は詮方なくと思ひ此上は我々此度の合戰に一命を擲ち名を後世に止めん跡部長坂の佞人們忠臣の討死

御向ひあらば一騎も洩さず討取べし是ぞ韓信が三秦を取し謀略にて候なりと申述べしかば信長大に怒り給ひ汝等何ぞ是を知ん今日の謀計は某し德川殿との胸中に有なり汝那なれば我々を輕んじ斯る非計を猥に申出し諸卒の心を迷はすぞ不屆なりと申されしに酒井答ふる言辭なく閉口して控えける然るに其日の評議一決せずして皆々退出し跡にて信長木下を召れ奈何に秀吉今日酒井が申せし謀計は如何なるや秀吉答へて此謀計窮めて宜からんと存せしなり渠は地理を能知し者なれば渠に精兵を加へて鳶巣山に向はせ然るべしと申ければ信長打笑ひ我も然は思ひつれ共諸卒の洩聞ん事を怖れ斯は計らひしなりとて則ち酒井を召れ今日汝が申せし謀計は誠に妙論なれ共衆聞を恐れ呵り止めしなり汝定めて地理を委細知つらん然れば六千の兵を引て賴勝が後を押へよと申されしかば忠次畏まり候と是に依て金森五郎には佐藤六左衛門靑山新七加藤市左衛門を差添五千人にて間道より鳶巣山へ廻らせ夫より五月廿一日の黎明に兩家の軍備を堅めし其次第は三河の先手竹廣の前には大久保七郎右衛門同次右衛門松平周防守二の見には松平主殿助松平和泉守菅沼小大膳松平玄蕃頭土井豐後守八劒の右の手には鳥居彦右衛門元忠大須賀五郎左衛門本多作左衛門本陣には內藤四郎左衛門植村出羽守榊原小平太本多平八郎と夫々に備を立て織田方にては左の先手の佐久間右衛門尉瀧川左近將監羽柴筑前守明智日向守右の先手は前田又左衛門尉佐々內藏助稲富平左衛門塙九郎左衛門柴田修理進なり甲府方は鳶巣山には武田兵庫

採て眞一文字に手勢拔撰て五百餘人大久保七郎右衛門が六千餘人の眞中へ面も振ず切入たり大久保兄弟鎗追取戰ふと雖も其勇氣に敵し難く鎗を中より切折れ周章狼狽猶豫所を山縣得たりと太刀指繋し一喝一聲切付れば次右衛門が着たる厚鐵の冑一寸ばかり切込だり是に依て心消々となり馬にも堪らず既に落んとせし所を名和一學糟谷與一兵衛馳來り主人を助け戰ふたり山縣昌景大の眼にて發打と白眼憎き奴めが振舞かな大事の敵を討洩したることそ安からぬ乞己等此世の暇を取すべき觀念せよと云儘に名和一學を只一刀に切て落し返す太刀にて糟谷を切捨猶も次右衛門を追蒐しに兩人の家來討死の間に危き所を免れて大久保は我陣に引取けり山縣は獅子の怒りをなし無二無三に大久保が備に切入んと諸卒を下知して亂入す

第廿一　武田家勇將討死の事幷眞田兄弟戰死の事

扨も山縣三郎兵衛昌景は大久保が備に突て入勇を奮ふて戰ひしかば大久保が備へ遂に敗して我先にと柵内へ引入けり山縣勇みて敵退くぞ付入て駈崩せ那に見ゆる敵を追拂へと下知すれば山縣家に於て一二を爭ふ勇士廣瀬鄕右衛門小菅五郎兵衛の兩士無二無三に柵の内へ切入ければ三河勢敵し難く遙々になりて正樂寺の方へ引退くを追掛〱已に本陣近くなりしかば榊原小平太康政本多平八郎忠勝同作左衛門大久保七郎右衛門忠世備を堅めて防ぎける山縣死物狂ひにて那

を見て得心せよと皆口々に廣言して自巳〲の持口へ立歸る勇士の心ぞ比類なき

馬場信房勇戰の事幷山縣昌景力戰の事

時に天正三年五月廿一日兩陣相對し旌旗は天に翻飜鎗長刀は秋の薄の穗に異ならず兩勢劒と鬨を作りしは恰ら百千の奔雷一時に落掛る如くなり武田勢の先手馬塲美濃守は豫て討死と覺悟せし事なれば卯の花絨しの鎧に鍬形の冑を着し手勢五百人を率ゐて閑房山の前に出で遙に向ふを見れば佐久間右衛門尉五千餘人吹貫の馬驗を押立嚴然として控えたりしに馬塲は能き敵なりと無二無三に突て入四方八方に薙立瞬間に百餘人討取勇を奮ふて驅立る名に負馬塲が必死の鋒先にさしもの佐久間四途路に成て見えたる所に瀧川左近將監六千餘人是を救はんと馬塲が兵に突懸る武田方内藤修理も斯と見るより八百餘人を一手に纏め勇を奮つて驅入れば三河勢の小栗大六郎淺井六之助麻布次郎右衛門三百餘人進まんとして馬塲内藤が勇戰に見送れ引退く瀧川が陣より柴山五作淺井雁之助香村善七等内藤修理に討て懸る内藤怒つてもの〲しやと云儘に鎗を捻て柴山を突落し返す石突にて淺井を撥返し又香村を刺殺しければ此勇に當り難く偵の瀧川突立られ柵の内へぞ引入ける佐久間が兵も馬塲に切立られ右往左往に敗走し命辛々引取ける山縣昌景は生て再度主君に對面益なしと赤糸絨の鎧に桃形の冑緋純子の陣羽織を着し銀の麾扇を

ひければ羽柴秀吉瀧川一益六千餘人にて打て出で双方入亂れて戰ふ中にも五甘掃部は羽柴秀吉が陣に突て入れば淺野彌兵衛長政打て出勇を奮ふて戰ひしが何の苦もなく五甘を切て落し首搔切て揚にける斯と見るより内藤大に怒りて淺野を目掛馳寄處を三川の勇將朝比奈彌太郎是を見て那こそ内藤御參なれと楯の陰より狙ひ寄火蓋を切ば過たず左の眼を打貫しかばさしもの内藤馬より落る所を彌太郎首を取て指上たり原隼人は大剛の勇士なれ共運盡ぬる悲しさは敵方より嚴く打出す鐵砲に太刀に手も得懸ずして打落されける安井左近も亂軍の中に討死し今は武田方大敗軍と成り眞田源太左衛門信綱同昌輝手勢二百餘人打て出防ぎ戰ふ折柄森武藏守長一明智日向守不破河内守德山五兵衛八千餘騎にて眞田勢と勝頼勢の中を取切り是に依て眞田兄弟今は是迄なりと心を固め勇氣日頃に十倍して薙伏捲り立向ふ者を突落し人なき所を行如き最期の一戰目醒しくこそ見えにけれ昌輝は黑糸縅に金の雁金紋打たる鎧を着し鎗を馬の平首に打掛大音揚人皇五十六代　淸和天皇第一の皇子滋野の末流海野小太郎幸氏が後裔眞田彈正忠幸隆が次男同苗兵部丞昌輝が最期の程を見て汝等が運盡き死する時の手本にせよと群集立たる敵中へ驅入り突き入り續く郎等には望月卯兵衛根津小吉彌玉井兵助筧金六海野太郎兵衛森兵之助早見左衛門等百餘人森武藏守が備を目掛けて打掛る森も暫時は鬪ひしが終に崩れて佐久間が備に驅掛るを織田中將信忠馬を出し此敵何程の事やらん丹羽柴田淺野等は早く鐵砲にて打縮め裹む

方此方と駈廻る折柄榊原康政鎗を以て突て懸れば山縣得たりと渡り合散々に戰ひ本多作左衛門續いて懸る山縣は兩方に敵を受乍ら物數ともせず受つ流しつ上段下段と猛威を顯はし劣らじ負じと力戰す本多榊原戰ひ倦で見えし所へ本多忠勝大久保忠世山縣を目掛打て掛れば山縣四方に敵を受今は危く見えしか共少も痿まず戰ひしが思ひも寄ず敵方より鐵砲二百挺打出す是に依て山縣が勢大いに亂れ右往左往に逃走る勝誇つたる三河勢大いに笑ひ汚なし山縣返せ〳〵と聲々に呼はりつゝ追掛る中にも菅沼太郎兵衛安井彥太郎兩人眞先に追掛たり山縣昌景敵に聲を懸られ何とは猶豫すべきやと即時に取て返し渡り合よと見えしが終に菅沼を切て落し返す刀に安井を打ば安井叶はじとや思ひけん一支えにも及はずして退く所を山縣透さず追駈て無二無三に切て落す是を見て大久保が勢爰を先途と打掛る鐵砲に山縣は臍の下を打貫れ急所なれば堪り得ず馬より眞逆樣に落る所を大久保方植村太藏走り寄て首掻切立上らんと爲を志村又兵衛得たりや遁さじと駈寄て終に植村を切伏難なく首を取返しける山縣既に討れしかば武田の先鋒散々に敗北す武田左馬助跡部大炊介小幡左衛門尉望月甚左衛門甘利三郎次郎飛田左京踏止つて鬪ふと雖も叶はず只一騎に切捲られ足立もなく逃て行望月信家一人踏止まり何ぞ危さを見て遁れんや山縣が討れし所にて死を同くせんこそ武士の本意なれと其場を一寸も去ず討死す扨梁田前には內藤修理原隼人安井左近武田孫六入道和田森右衛門五甘左近永根賴母之助松本一悅等織田方に向

馬場信房勇戰討死の事幷笠井筑後守忠死の事

去程に眞田源太左衛門同兵部丞兄弟は比類なき勇戰して花々敷討死を爲しければ敵方勇み誇りて潮の湧が如く兩勢勢ひ猛に攻立れば武田勢死の解し如く本陣へ雪頽來りしを土屋右衛門尉信近是を見て一條右衛門大夫信龍に申けるは先日信玄公御逝去の砌殉しも殉死せばやと存せし惜からぬ命を今日迄存命たりしに今は武田方危急の一戰と成りたる上は信近に於ては討死して恩澤に酬ひんと存ずるなりと云も敢ずに池田紀伊守蒲生忠三郎が備に打て入終に切崩し猶も明智と丹羽が備に驅入ば之に續いて金丸十郎猶井作兵衛等勇を奮ひ戰ひしに敵方より打出す鐵砲に信近を始め皆々一所に擊倒されて討死す是に依て武田方諸將數多討れ大敗軍となる所に馬場美濃守少しも動せず備を嚴重に堅く守りて防ぎける其形相流石老功の勇士と見えて天晴なり此時酒井左衛門尉忠次は主君幷に信長の命を受鳶巣山より山手の間道を越て武田の要害鳶巣山に打て出勇を奮ひ驅立れば勝頼は前後に敵を引受今は危く見えし所に鳶巣山の大將武田兵庫之介三枝勘解由左衛門も討死せしかば此手も碎け敗亂し既に本陣も危しとて勝頼は捨鞭打て甲府を指て逃走る是を見て兩家の勢勝鬨を揚勢ひに乘て追掛る勝頼今は討るべしと見ゆる所に山縣右兵衛笠井掃部等四百餘人踏止まり主人を落さんと命限り防ぎ戰ふと雖も勝誇たる敵兵なれ

所を一揉に駈敗れど鞍上に立て下知あれば三人が備より手だれの者三十餘人筒先揃て打立れば眞田が勢は望月を始め皆亂軍に討死す昌輝は只一騎猶も敵中に切入〳〵森を目掛て戰ひしが鎗を切折れ太刀打振て渡り合火花を散して戰ふ所に眞杉喜市右衛門と云者物蔭より狙ひ濟して動と放せし鐵砲に血煙立て眞田昌輝馬より眞逆樣に落るを眞杉走り寄り遂に首をぞ揚げたりける是を見て根津新兵衛駈來り眞杉を突伏首取戻して引返す斯とも知ず眞田信綱は淺黃糸の鎧に白星の冑を着し大太刀を片手に提げ羽柴明智が陣に切て入其樣恰も猛虎の怒れる如くにて向ふ者一人も助らず此時明智方より四王天又兵衛正實と名乘大鐵棒を輕〳〵と引提信綱目掛て出來る信綱大に笑ひ汝信綱を知ざるやと云儘に戰ひを結び終に正實危く見えし所に溝尾勝兵衛進士作左衛門明智左馬介等信綱に打て懸る信綱大敵に取卷れ爰を先途と防ぐ所に弟昌輝既に討死と聞より今は存命て何にかせんと敵中に喚び入り相木森右衛門根津門平鷲峯六藏望月亘乾玄札岡部三十郎勇を奮ひ我も〳〵と戰へば柴田瀧川が勢切立られ既に敗せんとする所に脇坂甚内平野權平力を盡して戰ひければ之が爲眞田方多く討れ信綱が賴み切たる郎等共皆々討死して今は主從十三騎とぞ成にける源太左衛門今は是迄なりと一簇繁茂たる森の中へ駈入て右十三人の者どもと腹搔切て死たりしは天晴勇々しき振舞なり

秀吉も自ら討出て猛虎の怒りを成す勝頼是を討んと思へ共勿々當り難く初鹿野土屋に防がせ眞田等を從へ引退く秀吉斯と見るより弓に矢をはげよつ引て切て放せば勝頼の馬の正中射通したれば馬は屛風を倒すが如く打僵れ勝頼堪らず眞逆樣に落て立上らんとする所に十二三人取込既に危く見えたる折節笠井筑後守眞田源次郎取て返し此敵共を追立勝頼を筑後守の馬に乘其身は歩行立と成て秀吉の陣へ切て入散々に防ぎ戰ひしが大勢に取込られ終に討死を遂たり勝頼は危き命を助り漸々十町許り落延ければ秀吉も射損じたる上は追討したりとも其功無しと引返し勝頼も命辛々甲府を指てぞ歸陣せり

第廿二　眞田安房守甲府へ來る事幷眞田長坂口論の事

扨も長篠の合戰に武田勝頼惣敗軍と爲るのみならず諸將數多討死し勝頼悄々と甲府へ歸られしが心中大いに悔み我既に眞田信綱が諫言を用ひざるより父信玄公在す時だにも終に覺えぬ敗軍して數多の勇將を失ひし事返す〲も口惜けれ我を諫めし者共皆々討死せしは武田家の武威衰へけるかと思へば誠に討死せし眞田信綱こそ不便なれとて彼の兄弟が跡を弔ひ猶又高坂彈正幷びに一條右衞門大夫等を呼び敗軍の耻を雪んとの評議に及びける處に此砌眞田安房守は上田の城中に在て病氣未だ癒ず兎角戰爭の事心に掛り病床を出て障子を開き遙に長篠の方を望み天

ば何條以て堪る可き切發かれ一人も殘らず討れけり此隙に初鹿野傳右衛門笠井筑後守土屋惣藏等漸々二百騎許りにて蹶つ轉びつ我先にと道を奪ふて迯走るは見苦しかりし次第なり兩家の勢は大文字の馬驗武田菱の旗を見て那こそ勝賴なるぞ一人も餘さず討取と聲々に鞭を揚て追懸る馬場美濃守是を見て今こそ討死なして主人を落さんものと引返して大音揚げ六孫王經基の嫡孫攝津守源の賴光より四代源三位賴政が後胤馬場美濃守信房なるぞ討取て高名にせよと名乘懸〳〵追來敵中へ割て入最期の一戰花々敷敵味方の目を驚かし終に討死をぞ遂にける時に享年六十三歳とかや眞田源次郎信幸は布下荒川根津等手勢千餘人にて長篠の押として居たりしが引拂つて鳶巣山に來るに伯父信綱昌輝兩人の討死を聞て大に驚き本陣に到れば早散々に打崩され勝賴を始め皆落去しに跡を慕ひ甲府を指て退く所柳田出羽守か勢に取込られ大に戰ひしか共多勢に無勢敵し難く遂に根津新兵衛は討れ荒川布下等漸々切拔信幸共〳〵三百餘人散々に敗して勝賴に追着ける扨長篠の城中よりは奥平九八郎信昌七百餘人にて打て出武田方の押高坂源五郎信秀と戰ひしが高坂遂に討死して諸卒は散々敗走す此時勝賴は甲府を指て退く所に羽柴筑前守秀吉千五百餘人を率ゐ追駈來り大音揚夫へ退き給ふは勝賴公にて在ますかや見苦くも敵に後を見せ給ふか羽柴秀吉是に在返させ給へ見參せんと呼はりければ勝賴聞より馬の頭を引返し羽柴が郎等蜂須賀彦右衛門赤野左兵衛等に討て懸れば初鹿野傳右衛門土屋惣藏掛隔て勇を奮つて戰ひ

や是より甲府に赴き兄上達の弔ひ軍を爲し花々しく我も討死せんと急ぎ用意を調へければ諸卒大いに驚き御長病後の御身にして遙々甲府に赴き給ふ事然るべからずと止むれ共昌幸一向聞入ず甲府を指て打立ける然るに長病の上なれば路次に於て氣絶する事度々なれば皆々又も諫めて頻りに止めけれども昌幸聞入ず長篠の方を見遣て信綱昌輝の討死を云出し無端に涙を催しつゝ進まぬ道を辿々て漸々甲府に到り直に登城せしかば勝頼は昌幸が來れると聞より死たる信綱昌輝に逢心地して如何に安房守病苦も厭はず能こそ來れり扨面目もなき此度の敗軍後悔も詮なき次第なりと涙に暮て語りければ昌幸兎角の言葉もなく同じく涙に暮れて胸撫下し先々御安泰にて御歸國の段恐悦に存じ奉つる然れ共山縣馬場等の討死は君にも嘸や御殘念に思召れん昌幸も此度病氣にてあらずば兄等と倶に討死致すべきに生殘り候段何程か口惜く存じ奉つると申ければ勝頼一向の答もなく赤面して見えにける長坂釣閑進み出で如何樣合戰の慣ひ勝敗は定め難し傳へ聞漢楚七十餘度の戰ひに高祖一度も利あらざりしが終に項羽を烏江に討亡し四百餘年の基業を開くとかや然れば此度長篠の一戰に味方敗するとて眞田殿高坂殿など在すれば何ぞ死したる小兒の年を數ふるが如き敗軍を悔むこと有んや只々宜敷計略こそ有まほしと申ければ昌幸長坂に向ひいか樣貴殿の一言面白し所詮長篠の一戰を申出したりとて今更是非なけれ共併し貴殿に問度事こそ候なり抑々此度の戰ひには我兄を始めとして外諸將にも勝ざるを知て歸國を勸め

文を觀るに衆星粟を蒔たる如く四方に光を輝かして見え渡りしかば昌幸暫時眉を顰て眺め居たりしが忽地驚き嗚呼味方は早敗れて我兄達始め數多の諸將は討死せし事疑ひなし我病痾とは云ひながら斯る大切の合戰に出る事能はざるは諸將に對して何面目あらんや寧快よく切腹せんものと思ひ込たる一筋に心氣勞れて橫にカッパと倒れければ侍臣共大いに驚きソレ氣付よ藥よと取々に介抱なし暫時有て生氣付只此度の合戰に外れし事のみ悔み居けるが果して長篠の戰場より長男源次郎信幸が使者來り三笠馬場山縣內藤土屋笠井安中原などを始め諸將等討死し殊に伯父信綱昌輝殿にも戰死の由を注進せり昌幸使者に向ひて大いに怒り我兄君達討死あらば悴源次郎も何故君の馬前に於て討死せざるや阿容々々と衆に外れ注進とは以ての外の事なり平生武術文學を好みつれば人並にも生立べしと悅び我代りとして長篠表へ遣はせしに雜兵の首一ッだも取り得ず剩さへ戰場に於て伯父を見殺にし自己一人助かりしとて昌幸何として之を歡ばんや抑戰場に赴くからは命は草露の風に均しく死しての後の譽れこそ覺悟有る可き所なるに斯不得心なる悴を我子抔と後世に云れんこそ穢らはし此以後は何方へなりとも相越し我城中へは一切歸るべからざる樣申聞せよと以の外の腹立にて使者に返答なしければ使者は悄々歸りける跡に昌幸身を揉急り我兄上は此度長篠に於て討死しけるに弟の昌幸は虛病を搆へ上田の城中に安閑と身と遁れ居たりしなんど世の人口に掛らん事の口惜さよ良々空しく病ひの床に切腹なさ

するものならば運に依ては天下を定めん運なく共甲信兩國を保つ事易かりなんと語りければ高坂始め膝を打て此儀尤も妙計なりと評議忽ち一決せり

眞田北條婚姻を結ぶ事幷昌幸奇謀を立る事

然程に眞田昌幸が一言により早々使者を越後へさし立て又北條へも使者を送り妹を乞ければ氏政大いに悦び相談忽ち整ひ終に妹を甲府へ送り勝頼の妻女とは爲したるなり謙信も嫡男景虎は氏政が弟なるを以て北條家とは交り深き所ゆゑ父子の交りせんとの事早速承知ありて和平致されける是より武田家は長篠の軍に諸將數多討れ威勢衰へしか共再び勢ひを立直し安堵に思をなしける事是眞田昌幸が一國の安危を思ひ一言を以て民を安からしめ武田の威勢を落ざる樣に計ひしと人々悅び合りしとかや是よりして三ヶ年程は合戰もなく國家安寧なりしかば甲信の人民大に富榮え剩さへ豐年うち續き兵粮も多く備はりければ勝頼長篠の鬱憤を晴さんはこの時なりと頃は天正六年の正月眞田高坂等を招きて評議あるに昌幸は先年病氣の爲長篠の大事の軍に向ふ事叶はざりしかば早晚は先敗の恥を雪がんと思ふ所なれば何時迄安閑と手を束ねてあらんより急ぎ兵を發して長篠にて討死せし諸將の仇を報じ玉へと勸めしに高坂も早三ヶ年の間合戰もなく兵粮兵卒共に足りしに就ては早々出軍然る可し因ては先長篠の城にある奧平九八郎を攻落

しに何者か是を支へて戰ひを勸めしぞ長坂跡部此返答に行詰り顏赤めて閉口す斯と見るより昌幸大いに怒り刀に手を掛兩人に向ひ馬場山縣内藤原安中我が兄等を始め諸將士の討死せしは畢竟和殿達が業なり此昌幸には耳あり目あり長篠陣中の儀皆々承知せり夫に何ぞや斯る一大事を過ち乍ら恥かしとも思はず口を開く事言語に絕えたり返答如何にと詰寄ければ長坂跡部一言の答にも及ばず急ぎ奥へ逃入ば昌幸猶も怒り君の明を暗ます佞人們切て捨んと拳を握り勢ひ込で立ければ一條右衛門大夫高坂彈正忠中に立ち入り種々と眞田を鎭め夫より評議に及びけり昌幸申けるは先根本を治め而して後軍を發しなば織田家を攻なん事易からん然りと雖も今國に病あり其病根を除かずんば合戰なす事難かるべし先病根と云は北條氏政上杉謙信なり此兩家は動すれば勢ひに乘して此國を取んと謀るゆゑ先此兩家と厚く交誼を結び其後三州へ軍を懸ん事然る可し急に長篠の讎を報ぜんとする時は却て敗を引出すの基とも爲る可しと言さわやかに述ければ勝賴は長篠の敗軍より大いに心後れ如何樣とも能に計へよとありければ高坂云く此兩家と今如何して合体せんや眞田答へて誠に心安き事なり先謙信は仁義の心ある大將なれば情を敷きて父子の約を結び北條は氏政の妹未だ何方へも嫁せざるに幸ひ君も簾中在まさゞれば之を迎へて一家の好みを固め玉ふ可し斯の如くする時は織田勢何萬騎にて向ふ共恐るゝに足す又三河りも深々と當國迄は軍を入申すまじ是根本を治むるの理なり而して後天下の變を窺ひ一度に

第廿二　眞田上杉謙信に說事幷春日山城中騷動の事

斯て眞田昌幸は諸人の勸めに因て越後への使者辭する事能はず直に越後に赴き春日山の城に至り案內を云入しに謙信早速に面會し珍しや眞田昌幸這般は奈來成事ありて來れるやと有ければ昌幸謹しんで遙末座に平伏し某し參上仕つりし事餘の儀に非ず君にも知し召れし如く先達て長篠の一戰に武田の諸將數多討死仕つり勢ひ日を追て薄く殊更織田とは互ひに恨を含む中に候へ共武田方微にして且兵糧乏しく是を討事能はず願はくは御當家の威を借て仇を亡さんと存ずる所なり就ては君大軍を以て織田を攻降し玉はゞ味方は北條家と合體して三州を攻申べく存じ候此儀御承知下されなば武田の仕合せ此上なしと述けるに謙信聞て笑を含み甲州には三ケ年合戰なく殊に豐年續きたり然るに何を以て兵糧乏しとは申さるゝや其上軍將には穴山梅雪一條右衛門大夫小山田信茂跡部信資長坂釣閑等の勇士あり旗下には木曾義昌抔あれば威勢薄しとも申されまじ然るを我に軍を發させ織田を討せんとは其意を得ず昌幸然ればにて候御不審の儀御道理に候へども抑々濱松の後楯なるは信長なり因て之を三方より攻る程ならば濱松勢織田を救ふ事能はず遂には兩家滅亡仕つらん謙信笑つて汝は軍略に勝れし者と聞つるが何故に斯敵を欺くぞや虛實定めなく臨機應變なるは合戰の常にして豫じめ勝敗計るべからず然るを三方より敵を

し直樣濱松に押寄せ信長援兵として向ひなば上杉家に後を遮らせ信長の後詰延引する其間に濱松を攻ん事は奈何やと勇み切て述けるを昌幸是を聞て誠に彈正殿の御言葉道理なり然れ共濱松の城主は先君にも名將と怖れさせ玉ふ程なれば如何ぞ容易攻落さる可や某し案ずるに濱松の賴とするは信長なり因て其織田を亡して後濱松へ取懸るに於ては戰はずして降るべし高坂云く如何して織田を攻んとし給ふぞや昌幸先上杉家に軍を勸め越後佐渡飛驒能登加賀上野等の國々の大軍を興させ信長を攻させなば信長何程勇なりと雖も之には當り難く其後此方よりは北條家と勢を合せ濱松へ押寄申すべし然る時は濱松勢恐怖して小田原に加勢を乞ふ事必定ならん其時味方は上杉の勝敗を篤と見定め或は進み又は退き敵の鋭氣を挫ぐべし是孔明が呉の兵を以て魏を敗りし計策なりと辨舌撓みなく述しかば滿座の人々大いに悅び眞田殿の遠計は味方矢一本捨ずして敵を敗る良計なりと感じける是に因て越後へ使者を立て謙信に軍を起させんと使者の人を評議する處一條右衛門大夫進み出某し案ずるに此使者は尋常ならぬ大切の場所なれば憖ひの者にては覺束なし然る上は眞田殿ならでは然べからず勞を厭はず越後へ赴き上杉に軍を起させ織田家を敗る謀計を行ひ給へと勸むるにぞ座中擧つて實に尤もなりと一決し彌々昌幸を上杉方へ赴かしめんと皆々之を勸めける

日山へぞ集りける去程に昌幸は甲府へ立歸り事の由を言上し軈て北條氏政に諜合せ濱松を攻る體をなせしかば濱松の城には此旨を聞き信長と合體して己に用意ある所に謙信大軍を催し織田を攻るとの事なりければ大いに驚き如何して防がんと評議に日數を送る中早北條武田は長篠表迄出張し謙信は陣代として直江山城守を美濃口迄出張させ其身は春日山に居たりしが頃しも天正六年三月九日率や明朝出陣せんと觸させ既に其用意ある折柄謙信廁に行き風と病を受身體安からざれば侍臣大に驚き種々介抱なし醫療を盡すと雖も終に天命の期する所にや夫れより病床に臥て十三日の巳の刻に至り四十九歳を一期として空しく果て玉ひけるこそ是非もなき次第なり是に依て越後勢大いに周章し春日山へぞ引取ける爰に謙信の甥なる喜平治景勝倩々思ひけるは既に伯父謙信病死致されし上は上杉の家督は三郎景虎が物と成べし然れど景虎は元北條氏政が弟なれば管領たる此上杉家を讓らん事口惜けれ我は正しく謙信の甥にして長尾氏なり然らば我こそ上杉家を押領せんものと直江山城守柿崎和泉守を談合本丸に楯籠る三郎景虎大いに怒て北條丹後守宇佐見彌太郎等諸共一の曲輪に籠りける是より騷動となりて上杉の家中二ツに分れ戰ひを交へし内三郎景虎遂に戰ひ負て越後の府中に引退くを遁さじと安田上總介甘粕近江守等追うち致しける景虎は宇佐見彌太郎北條丹後守等が越後新善光寺に陣を据て追來る敵を防ぎける其間に幸ふして府中の城に迯入急ぎ北條家へ使者を馳て援兵をぞ乞ける折柄武田勢は長篠

挾み討なば敵滅亡せんなどゝは是何事ぞ謙信ぞ奈何成者と思ふて斯樣成淺慮の事を言ふて大切の軍を發させんとは爲したるぞ眞田是を聞て謙信の顏を熟〲眺め莞爾と笑ひければ謙信怒て汝何をか笑ふや昌幸某し外に笑ふ事なし只君の智なきをと申しければ謙信彌々怒り信玄を始め諸國の武將共に至る迄懼れを懷きし此謙信を何ぞ智勇なしと謂ふや眞田猶も打笑ひ君然程智勇の才在まさば何とて斯は信長を恐れ給ふや君は既に加賀能登越中越後飛驒上野を領し乍ら信長を亡す事能はず手を空くして居給ふは正しく信長に當り難く思す事ならんと辨に任せて述べければ謙信汝我を嘲哢事何ぞ太甚しきや乞で吾れ自身信長を撃て思ひ知らせんと居丈高になりて申されければ眞田然らば此由主人に申聞北條家と談合大軍出馬の手當をなさんと返答なしければ謙信點頭汝國に歸らば必ず共に時日を移す事勿れと夫より眞田は御前を立ち甲府にこそは歸りけれ跡に謙信只一人熟々思案を運らされし處直江山城守柿崎和泉守甘粕近江守等來りて申けるは眞田が來りし事は味方の兵を以て敵を敗る事にては候はずや謙信答へて如何にも然り我是を知と雖も今迄織田と合戰を決せんと思へ共濱松勢の後詰せん事を恐れ控へ居たりし處此度計らず北條武田にて濱松を攻んと有是天より織田を亡ぼされんと爲したるなり夫に何ぞや軍馬を發せざるの事有らんやと有りければ甘粕柿崎直江等屈伏し君の謀計匆々以て某し等の及ぶ所にあらずと夫より出軍の用意をぞ爲にける然れば上杉の軍勢大いに勇み國々の大軍我も〳〵と泰

を府中の城に追籠め是に依て北條丹後守宇佐美彌太郎新善光寺にて防戰致し候は偏に某しが加勢を待しなり然るに氏政國政多端にして加勢する事能はず願はくは勝頼公加勢として越後へ向ひ景勝を亡ぼし景虎に上杉の家を相續させ給はるべしと申送りける勝頼使者を留め置早々諸將を集め評議ありしに高坂座を進み此儀何分北條家の願ひに任せ上杉に攻懸らん事然るべし其故は景勝兄と定めし景虎を害せんとする事是不義なり急ぎ御用意あれかしと申ければ一同も此議然るべしとて承知の旨返答に及びしかば使者還りて斯と申しけるに氏政大いに悦び加勢として北條治部大輔富永三河守太田大膳等を始め一萬餘人を甲府表へ遣しける勝頼は此勢を後陣へ控えさせ小山田兵衛尉一條右衛門大夫信龍跡部大炊介土屋惣藏長坂釣閑眞田安房守等二萬五千餘人にて越後國へ發向す時に天正七年三月十五日とぞ偖も北條丹後守は新善光寺に於て景勝が兵と合戰すと雖も双方劣らぬ勇士なれば勿々捗々敷軍なく其内景虎方には北條家幷びに甲州勢の援兵來るとの由を聞き直江山城守兼續先此陣を早く敗らずは有らずと須田大炊之介杉田主馬等に五千餘騎を差添へ夜中に善光寺の鍬取に遣はし双方より攻懸れば北條宇佐見不意を討れし事なれば大いに狼狽騷ぐ所に須田大炊之介杉田主馬命を輕んじ戰へば北條丹後守終に討死す是に依て春日山の勢勇み猛り散々に切崩せば宇佐美も大に敗して府中の城へ逃入ける直江柿崎大いに勇み城を十重廿重に取圍み即時に攻落さんとなしければ城中にも長岡式部宇佐美彌太郎安田

表に出張して高坂一條眞田等種々に軍議を運らし居たりし所眞田が陣中に之れ有る杉の大木風も無きに中程より折たりしかば昌幸は呀と云て倒れ臥諸卒周章騷ぎ這は如何爲し玉ひしぞと助け起しければ昌幸漸々本心に復し頻りに歎息してアヽ武田家の運命も盡きたるかな我是まで心を砕き種々に謀計を廻らしたれども其甲斐もなく上杉謙信には死亡せしと見えたるなりアヽ天なる哉と歎息更に止ざれば郎等共は不審に思ひ那なれば謙信死亡せしとは言はれしぞと寄り〳〵囁き居たる所へ上杉より早馬來り謙信三月九日より病床に臥して同く十三日に病死せりと告來れば北條武田の面々大いに恐怖し然る事の候や斯ては味方此所へ寄たり共詮有るまじと先達て長篠の敗軍に懲たる武田勢は我先にと甲府を指て引退く北條勢も今は是非無とて小田原にこそ歸りけり天運の盡る所とは云ながら此時上杉謙信病死もなく大軍を以て双方より攻掛らば織田徳川只一戰に攻敗られんものを武田家滅亡の時來り斯る變事の起る事誠に是非もなき事なりけり

武田勝頼越後表發向の事并直江山城守對陣の事

偖て武田四郎勝頼は甲府に歸陣し猶も軍議をなす所に北條家より使者を以て此度上杉謙信病死に付我弟三郎景虎家督たるべき所謙信の甥喜平次景勝俄に逆心を起し上杉家を押領し其上景虎

敵にあらず夜討をなさば極めて其用意あるべし勝頼聞て汝が言ふ所甚だ過てり直江如何して今宵用意すべきやと云ひしに眞田は答へも有ず冷笑ふて出にけり然程に土屋初鹿野の兩人は手勢三千五百餘人を以て其夜初更の頃ほひより用意をなし飯山より直江が陣に押寄たりしに篝火少々燒捨たるばかりにて用意の體も見えざれば土屋初鹿野大いに悦び扨は敵合戰は明朝と油斷致せしものならんいざ打掛らんと三千五百の精兵吶と鬨を作り攻懸りしに陣中には人影だにも無く眞闇なりければ土屋初鹿野始め不審し居たる處一聲の鐵砲響くと齊く此方よりは柿崎隼人五百餘人打て出彼方よりは安田下總守同じく五百餘人後よりは甘粕近江守前よりは直江山城守須田大炊之介杉原常陸之介惣勢三千餘騎各々潮の湧が如く打て出ければ何かは以堪るべき土屋初鹿野が勢大いに討れ辛ふじて飯山の陣に逃げ歸る直江が勢は是を見て謀計有んを氣づかひ長追もせず元の陣に引返しける扨も土屋初鹿野は敗軍を引て本陣に歸りければ勝頼は初めて眞田が申せし事を感じける偖て又昌幸申けるは奈何に土屋初鹿野殿今一度直江が陣に夜討を懸られよ初鹿野申けるはいや我々初め大いに敗られたれば今一度參らば今度は生て還る事叶ふまじ土屋申けるは然に非ず何は共あれ今一度夜討を掛けて見申さんと勸められ初鹿野心ならずも又三千五百人の新手を率して押寄ける然程に直江が陣には夜討を破り手始めよしと悦び陣中にて酒宴を催し明朝は早く押出さんと其用意をなしければ再度夜討來らんとは思ひも寄ぬ所へ鬨の聲

釆女北條越後守等防戰嚴重して匆々攻落す事能はず如何せんと軍議を運らす折柄甲府勢越後の飯山に出張すと聞て景勝大に駭きいそぎ直江を呼て此儀を談ず直江申けるは府中の城落し難しと雖も恐るゝに足ず此城の落ざるは只北條の後詰を頼みと思ふが故なり然れば先當城には押を置て我は是より須田大炊之介安田上總之介杉原常陸之介を引て飯山に立向ひ甲府勢を敗るべし然る時は當城戰はずして落べしとぞ申ける是を聞て景勝大いに悦び汝が云所我心に適へり早く甲府勢を敗るべしと有しかば直江山城守三萬餘騎を引具し既に飯山に向ひける武田勢斯と聞より大に勇み直江何程の事やある只一掛に踏敗り春日山の城を攻落し高名せんと手に唾して待掛たり直江は飯山より三里此方に陣を取武田の先手土屋惣藏初鹿野傳右衛門急ぎ勝頼の御前に出て申けるは上杉勢直江山城守三萬餘騎陣を出し候なり何卒我々今宵夜討致し度存ずる間御許し下されなば敵を一時に攻敗り候はんとぞ願ひける

第廿四　土屋初鹿野夜討の事幷眞田昌幸即謀の事

土屋惣藏初鹿野傳右衛門兩人は直江山城守に今宵夜討を掛度と願ひけるに勝頼道理に聞れ敵の備なきを討は軍法の奥義なり早々其用意を致すべしと命じければ土屋初鹿野の兩人悦びて退出せし後へ眞田來りて謁しければ勝頼今宵夜討の事を物語るに眞田大いに笑ひ直江兼續は尋常の

數多金銀を持せ長坂釣閑跡部大炊之介等に賄賂を贈り和睦の事を賴ければ元來强慾の兩人なれば大いに悅び賄賂の金銀を納め和睦の事を只管勝賴に勸めければ氣に入の長坂跡部が申所なれば諸將に談ずる迄もなく早速承知の返答に及びける是に依て越後より再度直江山城守を以て越後布三千反黃金一萬兩兵粮五千石を送り永く敵對致さゞる誓紙を差出し且兼續願ひけるは景勝事未定まれる內室なし何卒君の御妹君を主人へ下されなば猶々力を添て四海の賊徒を平定し天下を二個に分ち東將軍西將軍と天下に仰がれ候はん事日頃の希望なりと言葉を巧みに申ければ素より淺智の勝賴大に悅び我妹を景勝に送り共に一家の好を結び其後義兵を起さんと互ひに約束有て夫より盃盞を下されける兼續有難しと頂戴し其後土屋惣藏に向ひ此間の夜軍天晴の武勇感ずる所なりと申ければ土屋は面目を施し夫より兼續は春日山の城に歸りける此度の和睦は昌幸少しも知ず直江が歸りし跡にて之を聞き大いに歎じ兎角武田家の運命も盡ぬるかな北條と又も不和になりては大方ならぬ一大事を引出せりと一人心を惱ますと雖も早和睦調ひし上は是非なしと其まゝ打捨て居たりける去程に勝賴は上杉景勝と和睦ありしかば北條治郞大輔太田大膳の兩將今ははや此陣に在も益なしとて一萬五千餘の勢を引具し本國小田原へぞ歸りけり

武田上杉兩家和睦の事幷三郞景虎切腹の事

聞えしかばアハヤ又夜討來りしぞと上を下へと騷動し太刀よ鎗よと犇く所に土屋惣藏初鹿野傳右衛門勇を奮ふて攻掛れば瞬く間に大敗し春日山を指て引退ぞく直江山城守馬を返して者共返し戰へと下知すれ共敗軍の習ひに聞入る者一人もなく主を見捨子を顧りみず我先にと逃る程に討るゝ者其數を知ず右往左往に敗しけるは見苦しかりし有樣なり其中に土屋は勇猛の若武者なれば直江と見るより大いに悅び追駈來り夫へ引給ふは直江兼續なるか土屋惣藏是に在見苦しくも敵に後を見する法やある引返して信經が太刀の切味試されよと片手薙に薙廻れば直江は是非なく取て返し二三合戰ふ所に信經が太刀鋭くして直江が冑の吹返をしたゝかに切付尖頭餘りて左の目眦に切込み流るゝ血しほ眼中に入ければさしもの直江既に危く見えける所に柿崎隼人百五十餘人取て返し土屋を目掛戰ひしに土屋の力や增りけん柿崎は終に討れて果にけり然程に甲府勢は思ひの儘に勝を得て難なく飯山に引取しは誠に眞田が智謀寸分違はずと人々感じ入り既に本陣に至り勝軍の由を言上しければ勝賴大いに悅び諸將を賞し就中眞田昌幸は臨機應變の智將なりと感稱一方ならず直江山城守は手もなく負て春日山の城に引退き倩々工風を廻らすに今味方大敗せしかば此機に乘み景虎は府中の城より勝賴は飯山の城よりして打て出攻來る程ならば此城の落ん事心元なし然れば先一旦勝賴へ和睦を乞上野半國を遣はし眼前の禍ひを脫れなば勝賴之を悅び北條家と手切して三郎景虎を亡ぼすべしと景勝にも此事を達し軈て辨舌好き者に

しけるも虚ならず兩人常に邪慾を恣ひまゝにして民を虐け色を貪りければ甲府の諸民憎み誹り此度越後より歸陣ある道の傍側に何者が爲たりけん一首の狂歌を立た其歌に

無量やな國を寂滅する事は
越後のかねのひゞきなりけり

此時甲府には高坂彈正病に臥したりしが終に癒ずして死し其外良臣次第に亡び殘るは眞田一人のみにて其餘は長坂跡部等我儘を振ひければ中には北條德川に內通する者ありて皆々一致の心なかりけり然れば家臣等疑惑を生じ彼を誹り是を讒しける程に是ぞ破滅の基と成ること淺ましけれ此時北條氏政は上杉景勝を撃んとて勝賴方へ此由言ひ送りしに彼は景勝に一味し舍弟景虎を府中の城にて攻亡ぼせしとの事を聞き氏政大に怒り急に和を破り武田を亡ぼさんと夫より松田大道寺北條右衛門大夫同陸奧守と謀し合せ軍勢を催ほしける程に我も〳〵と小田原に集合甲府へ出陣の用意をなしにける其時松田尾張守申けるは某し甲府方諸將の樣子を承たまはるに長篠にて數多の大將討れ其後高坂彈正は病死し殘るは只眞田安房守小山田兵衛尉二人なり然共大敵を怖れず小敵を侮らず奇謀を以て少しも屈せざる者は眞田一人なりければ先是を退け其後大軍を以て向ひ給はゞ戰はずして甲信の兩國手に入り申すべしと述しかば氏政實に汝が申處理に叶ふと雖も眞田は勿々謀計多き者なれば之を退くるの方難からんと申されしに松田笑ふて某

武田四郎勝頼は上杉景勝と和睦調ひければ勝頼直に諸將を引連春日山に到りて盟約を結び夫より府中の城に向ひ三郎景虎を攻んと有けるにぞ景勝大いに悦び然らば出陣致さんと手勢三萬五千餘人府中の城へ押寄ける城將三郎景虎大いに怒り勝頼は眼前の身寄なり某しを見捨て利慾に迷ひ景勝に助力する事誠に武門に耻べき振舞なり人外とや云ん我此城を枕とし骸骨は原野の露と消すとも魂魄は此世に止め勝頼が積惡を懲ずんば有べからず汝等英名を四海に殘さんと思はゞ我に從がへ命惜くは捨て落よ我少しも恨みずと勢ひ立て下知しけるに宇佐美彌太郎本庄清七郎北條安房寺增尾頼母等城中に殘りて二心なき者共二千餘人籠城致しける然程に武田上杉の軍勢府中の城を十重廿重に取圍み晝夜の別ちなく攻ければ城中必死を盡し是を專途と防ぎけるに寄手の方死する者數多く城中は弱りし氣色も見えざれば寄手攻厭倦で見えたる所に北條安房守先達て丹後守が討死を安からず思ひ城門を押開き手勢百餘人を以て大太刀を水車に廻し敵中に切入思ふ程戰ひしが擊出す鐵砲に當り終に討死致しける是に依て寄手の者共城の塀を乘越〳〵攻上る城兵宇佐美彌太郎今は防ぎ難く是までなりと郎等一族千餘人にて戰ひける城將景虎も手足と賴みし家の子郎等皆々討死なしければ今は是迄と本丸に駈入腹掻切て亡びける是に依て殘兵も思ひ〳〵に討死し即時に府中落城に及びければ上杉景勝武田勝頼春日山の城に歸りて一兩日逗留し其後勝頼は甲府に歸陣せり偖も此度の和睦は長坂跡部賄賂に依て調ひしと云觸

れば小山田左らば其眞田が送りし書簡を所持致されしや忠兵衛如何にもと僞りの書簡を出して與へければ聽て忠兵衛を客室に止め置き直に此由を言上す長坂跡部之を聞き折こそ好けれと側より種々に讒言を搆へけるにぞ勝頼大いに怒り急ぎ眞田を呼べしと使を馳せしに昌幸は何事やらんと周章登城致しけるに勝頼怪からぬ面色にて昌幸汝奈何成ば此勝頼を滅亡させんとは謀るぞや其儘には閣き難し如何に〳〵と詰られしに昌幸大いに駭き是は那なれば斯る事宣ふぞ由なき讒者の勸めに因りて此昌幸を疑ひ給ふは何事ぞや頼勝愈々怒り汝が隱謀既に露顯して隱す事能はず然るに讒者の業なりとは猶も自己が罪を掩はんと爲か眞田答へて何條此昌幸に二心あらんや然るを御當家を亡す抔との事思ひも寄らず候何ぞ證據にても候や勝頼證據呼はり物嗅し昌幸打笑ひ君無根なき事を斯く疑ひ玉ふ時は却て內より害を生ず可し證據もなきに何故昌幸を疑ひ給ふぞ勝頼證據見たくばソレと小山田を視玉へば小山田懷中より書簡を取出し如何に昌幸之覺えありや眞田取上一見し冷笑ひ是反間の謀事なり是式の謀事に迷ひて忠臣の胸中を疑ひ給ふものならば君の御爲に忠を盡す程の臣は一人も殘らず敵の爲に退けられ國家を盗む讒者のみ押領せん左ある時は武田家の滅亡如何にして之を防がんや今にもあれ德川織田の兩勢甲府へ亂入せば誰か防禦の任に當らん先君御在世には諸將多くして自然と武威も盛んなれども奈何なれば君の御代となりては斯く武威の衰へしぞ僅に殘りし眞田迄敵方の謀計に落入て失はんとは偖も

し一葉の紙片を以て之を退け申べし氏政限りなく悦び然らば其謀計急ぎ行はれよと有ければ尾張守畏まり候と聽て御前をぞ退出したりける

第廿五　眞田沼津に新城を築く事并徳川北條兩家發向の事

扨も北條氏政は勝頼が不義を憎み密に大軍を催し討取んと評議しける所に松田尾張守申けるは先反間の謀略を以て勝頼と眞田の間を隔て勝頼の手を借て眞田を亡ぼし其後軍を發し給ふ可し然すれば武田家を亡す事嚢の物を探るよりも猶易しと勸めければ氏政大に悦び然らば汝宜敷計らひ候へと有しかば松田は岡部忠兵衛と云者に謀計を授けて甲府に赴かしむ岡部先小山田兵衛尉信茂方へ到り對面して申けるは主人松田尾張守御當家の一大事を注進致し候其故は此度眞田安房守昌幸内々にて北條家へ申送り候は武田勝頼無道にして既に上杉と合体し長坂釣閑跡部大炊介小山田兵衛尉等は權を以て我儘を振舞諸將を塵芥の如くなす是案ずるに武田家の運盡る所なり然に依て所詮斯る暗君に仕へんより寧心を御當家に寄んと存ずる間速かに大軍を以て甲府へ亂入あるべし昌幸内より發して武田を滅亡さん因ては此恩賞として信州一國を賜はるべしと書簡を以て逐一に申來り候然れども北條家には今妹君を送られ武田家とは一族たるに因て主人松田尾張守某しを以て告知しむ處なれば偏に事を穩便に御計ひ有て然る可しと誠しやかに申け

め既に大方成就しければ甲府より勝頼見分として長坂跡部土屋小山田初鹿野を從へ沼津に到着あれば昌幸城中に伴ひ入二三日逗留ある此時北條氏政は勝頼を深く恨み攻亡ぼさんと思へ共眞田が奇計に恐れて軍を得出す事能はず評議に月日を送りける所に武田方此度沼津に新城を築くと聞きて是天の與へなり普請調はざる所を大軍を以て攻寄なば眞田如何に智深き者なり共爭でか禦ぐ事叶はんやと聽て軍勢を催しけるにぞ北條陸奥守申けるは假令眞田小勢なり共等閑の敵にあらず今德川正く眞田を滅ぼさんと思ひ給ふ所なれば先德川と和睦して其後兩家より一度に攻掛ること宜しからんと諫めければ一座此儀道理なりと同し遂に德川家へ使者を送り事の由を申し述べしに源君には深き思慮の有らせければ早速御得心有て直に用意を調へ給ふ北條氏政大いに悅び薩摩守を先陣として其勢四萬五千餘騎小田原を進發して沼津へ出張す此時沼津の城には昌幸勝頼を饗應し一兩日逗留ある所なれば勝頼大いに勇み北條何程の事やある我旗本を以て打敗らんと直に對陣に及びける程に北條勢は案に相違して見えにける德川源君然らば我も發向すべしとて石川大久保平岡本多酒井榊原を隨へ其勢五千餘騎にて濱松の城を發し途次諸城を陷いれ手始めよしと既に由井の倉澤へ出張ありければ火を放しつゝ沼津の方へと發向せり

武田勝頼富士川を渡す事幷源君即智の事

〳〵先君には生れ劣り給へる御所存かなと兩眼に涙を浮べ誠を顯し諫めければ勝頼忽地悟り給ひ手を拍て大に感じ天晴昌幸なる哉北條氏政舍弟景虎を此勝頼に殺されし故先其方を殺させ其後大軍を以て甲府に亂入し此怨恨を報せん爲僞狀を以て申來りし事ならん憎き氏政が振舞勝頼を是程の事知ざる者と蔑視しか乞然らば此方より軍を發し小田原へ亂入し我武威の程を見せんずと躍上りて怒りければ昌幸彌々落涙し流石信玄公の御種程有て明智の程駭き奉つる只口惜きは佞奸の讒者共左右に在て暗弱にし奉つるなりと憚りもなく述ければ長坂跡部は赤面して控え居る勝頼重ねて小山田に北條家より使者に來りし者の首を刎よと下知あれば昌幸止めて必ず麁忽ばし仕給ふな某し計ふ可き事こそ有りとて軈て使者を搦めさせ眞田が前に引出して眞田之に向ひ汝は松田が家臣成や松田は誠に大なる愚者なり斯る淺慮の謀計を以て此昌幸を退げんと爲すこそ可笑けれ主君勝頼公を個ほどの暗君なりと思ふか甲府には三尺の童子も反間の謀計位は能知なり汝今殺す筈なれ共某し取り成しを以て一命を助け返す間立歸りて尾張守へ言へ今少し兵書を讀て軍を出せよと汝は今此處にて懲し遣さんと夫より忠兵衛が繩を解せ亂暴に打倒しければ忠兵衛は頭を抱へ鼠の迯るが如く小田原指て歸りける斯て昌幸勝頼に勸る樣今伊豆駿河の境に一城を築きなば味方頗ぶる便り好からんと申けるに勝頼も實にもと思はれ汝宜敷計らふ可と有ければ昌幸急ぎ伊豆駿河の境なる沼津に新城を築きける頃は天正八年五月より普請を創

先々控へさせ給へと申ければ勝頼鞭を揚長坂が頭を打何ぞ是式の川を恐れんやと押續いて亂りしかば是に依て我も〳〵と乘入り難なく向ふの岸へ打上り直に徳川の陣へ急ぎしか共富士川に支えられ彼是と隙取しかば日も西山に傾きける此時徳川勢は由井倉澤より嶺を打越伊豆に陣を移されしに早日は夕陽なる折しも源君大久保忠世に向ひ汝は早く軍勢を引揚濱松へ退く用意せよと有ければ忠世駭き味方既に勇み立ちしに今歸國せよとの事誠に殘念にて候と申しければ源君怒り給ひ汝が知る所にあらず遙かに引揚よと叱りければ大久保は是非なく兵を率ゐて退きぬ時に平松老齋近吉と云ふ者源君に向ひ味方地の理を知らず此所に深々と陣を据る恐らくば敵寄來らば支えるの術なからん早々御歸陣有て然るべしと申げれば源君誠に汝我胸中を能知りたり我も然思ひし故直に大久保に陣拂ひ申付たり汝も急ぎ用意せよと有りしに平松畏まりて用意をなし頓て源君にも濱松へ退き給ひければ諸卒不思議に思ひ我も〳〵と陣拂ひして引退く然るに武田勢は徳川勢の引しとは夢にも知らず道を急ぎ既に伊良の陣に來り見れば敵一人もなし勝頼不思議に思ひ若敵の謀計にてもやあらんかと怪み小山田兵衛尉に此事を問給ふに小山田申けるは徳川は頓智不思議の大將なれば浮々進み給ふ事勿れと止めしに長坂跡部等も共に止めければ勝頼依違していまだ決せず兎や角と時刻を移せし折柄此所の者申けるは徳川勢には急に慌忙しく歸陣せりと聞て勝頼然らば追掛打取と下知ありしに三千餘騎の精兵ども勇み進んで追掛た

然程に眞田安房守昌幸は陣中に在て諸方を打眺め居たりしが遙由井倉澤の方に當りて火の手見えければ奈何成事やらんと思ふ所へ德川勢五千餘騎にて由井倉澤迄亂入有し由を告來れば昌幸然ばこそと悅び此度沼津の城を築くも德川を引出さん事を思ひしが扨は北條の差圖に依て是迄出たるか長篠の返報するは此時なりと急ぎ勝賴に向ひ德川既に由井倉澤迄出たり某し向はずんば有べからず君は此城を固め北條を抑へ給へ某し德川を敗りて長篠の鬱憤を晴さんと申ければ勝賴我等德川に當らん程に其方北條を喰留よと有りしかば昌幸然らば君は三千餘騎を率ゐて向ひ給へ某しは手勢三百餘人にし北條を敗り候はん勝賴の云く北條は四萬五千の大軍なり汝三百餘人にて敗んとは如何に昌幸其は某しの胸中に之ある事なれば決して御氣づかい玉ふなと申すに勝賴訝しとは思へども三千餘騎にて德川勢に向はんと富士川まで來りしに頃は五月廿日にて霖雨降續き白浪岸を洗ひ渡るべき樣もなかりける勝賴下知して昔佐々木梶原の兩人宇治川の先陣に名を輝かせり誰かある瀨踏せよと有ければ櫻井源五兵衛和多太郞粕屋逸平下知の下より今日富士川の瀨踏は我々なりと一度に吶と渡りければ引續いて百餘人我も〳〵と乘入しが逆卷水に押落され一人も殘らず底の水屑と成しか共勝賴は少も撓まず土屋はなきか初鹿野よ渡れ〳〵と下知あれば兩人馬に鞭打跳り込しに千五百人我も〳〵と渡りける勝賴も已に馬を乘入んとなしければ長坂大に駭き轡に縋り前車の覆へるは後車の戒めにて候最前櫻井和多の溺れし有り

駭き迯給へば初鹿野大いに怒り大將には何國へ迯給ふぞ御首早く渡さるべしと呼はれば源君耳にも聞入ず馬に任せて迯給へば初鹿野追着振り回す太刀の切先はや馬の鞍壺に當る事三度源君今は生たる心地なく既に危く見えし所に夏目次郎右衛門と云者馳來り初鹿野を目掛討てかゝる初鹿野大いに怒り夏目を只一刀に切て落す其隙に源君一町餘り迯延漸々危急を遁れ給ふ是に因て徳川勢大いに亂れ武田勢も討死手負數知れず血は流れて川をなし骸は積で山をなす勝頼大いに勝利を悅びされど夜軍と云敵地の案内知れざれば長追無用と急に軍兵を引揚られけるに此軍誠に徳川方の危き事累卵の如しと雖も富士川の障へに甲州勢一歩を後れしこそ天徳川に祚ゆるの兆と知られたれ扨武田勢は伊良の陣に其夜を明し翌朝直に沼津へ引返しける此時呂幸は三百餘騎にて北條の四萬五千餘騎に向ひける其備立には荒川布下望月等を始め鐵砲の手練五十人を撰出し謀計を授けて打立せ殘る二百餘騎にて黄瀬川に出陣す北條勢是を見て扨こそ眞田勢此方へ向ひしと見ゆるぞ斯くばかりの小勢にて向ひしこそ蟷螂が斧に等しと打笑ひつゝ逸り切たる北條勢我も〳〵と黄瀬川を打渡り喚き叫んで打て掛れば眞田勢一支えも支えずして敗走せり北條勢勝に乘て進みける程に陸奥守も勇み猛りて追掛けしが既に日も夕陽に傾きければ松田制して眞田は恐ろしき智將なり引退くは極めて深き謀計あるべし早進み給ふ事勿れと止めしを陸奥守打笑ひ假令謀事あるにもせよ何程の事あらず我眞田が首を取て見すべしと猶も進み行折

り

第廿六　三河勢敗軍の事幷昌幸北條勢を敗る事

然程に武田勝頼は長坂釣閑跡部大炊之介土屋惣藏林平六原隼人初鹿野傳右衛門小山田兵衛尉等を從へ伊良へ寄來られしに早徳川勢は濱松指て引退きしと聞猶も三千餘騎を勵まし勇み進んで跡追せたり徳川源君は豫て陣拂ひして退く時は勝頼追討を懸ん事必定なりと後殿を催がされしに本多平八郎忠勝榊原小平太康政兩人願はくは某し等後殿仕つらんと申出で後陣に其儘控へたり斯りける處へ遙か向ふの方より數多の松明燈しつれ大浪の如く寄來れば兩人馬を立て備を固て待掛たり武田の先陣初鹿野傳右衛門雷の如きの勢さにて本多平八郎に打て懸れば本多は之に渡り合暫時戰ひを結びし內土屋惣藏榊原康政に打て掛る康政心得たりと拔合せ火花を散して戰ひければ何れ勝負の見えざる所に小山田信茂も康政に打て掛る此勢ひに本多榊原堪り兼大に敗して引退くを武田勢遁さじと追駈け來り終に旗本へ切入ける勝頼遙に見て大いに悅びスハ家康が首取て日頃の恨み長篠の返報を晴さんと無二無三に追ければ徳川勢大いに敗して右往左往に散亂しける土屋初鹿野小山田我も〳〵と旗本へ突て入れば今は徳川方危く見え給ひけるにぞ諸將此所を大事と身命を惜まず戰ふ中に初鹿野は難なく旗本へ突て入り大將目掛て切て掛る源君

々攻落し難く勝頼是式の小城を攻るに何程の事やある只一揉に攻敗れと惣勢一度に攻掛れば城中には防ぎ兼てぞ見えにける

勝の城素肌攻の事并高天神落城の事

然程に勝の城は武田勢に取圍まれ已に危く見えける所に城門を開き北條右京太夫が郎黨田中政之丞飯山十郎兵衛と名乘鎗を捻て突入ければ武田勢大いに討れ引退きける其翌日武田勝頼大いに怒り是式の小城を攻兼るこそ口惜けれ今日は我を始め素肌と成て攻立んとて勝頼鎖帷子に純子の陣羽織ばかりを着し向ひければ土屋初鹿野其外の者共我も〳〵と素肌にて續きける昌幸君を諫めて此は何事にて候ぞ大將たる者素肌にて城を攻ると言ふ事之れ有る可きや必ず共に御無用なりと止むれ共聞入ず一番に進み給へば土屋初鹿野原なんど逸り切たる若武者無二無三に攻立る城兵は敵の素肌なるを侮り我討取んと進む所に土屋惣藏力量を顯はし大太刀を打振薙たて〳〵切廻れば城中より飯山十郎兵衛鎗を取て突て懸る惣藏少しも痿まず太刀をかざして切てかゝる飯山も聞ゆる勇士なれば暫時戰ふと雖も勝負は更に見えざりけり惣藏聲掛いざや組んと云儘に互に鎗太刀を捨無手と組えいや〳〵と揉合しが土屋が力やまさりけん難なく飯山を取て伏首を掻切立上り土屋惣藏信經今日の一番乘と高らかに呼はりしは天晴勇々しき次第なり初鹿野

柄何國共なく鐵砲の玉飛來り陸奥守が頰を打貫き治部少輔が胸板を碎きしかば何かは以て堪る可き兩人共馬より落て死たりけり是を見るより北條の大軍は大崩れと成り黃瀨川に堪り得ず小田原さして引退きしは見苦しかりし有樣なり誠に眞田が深謀圖に當り小勢を以て大敵を破る事是眞田家極意の軍術にして窺ひ知る事能はざるなり斯て眞田は沼津へ引退き翌朝直に勝賴の許に到り合戰の次第を逐一に語りければ勝賴大いに悅び酒宴をなして祝しける勝賴申されけるは富士川の難なくば家康を討ん事掌中に在しものを口惜や時刻移りて討洩せしなり其方は奈何なる謀計を以て大軍を敗りてや扨々駭き入し武略哉と歎息されければ昌幸答へて北條家の大軍を敗りしは某しの功にあらず君德川に當りし故なり夫に付恐ろしきは德川なり彼地理を知り機を察して未だ戰はざるに歸陣せしは其武略臨機應變の方術に當り敵乍らも感ずべき所なり信玄公にも東海一の名將と恐れ給ひしが實に御道理至極なりとぞ申ける斯て數日逗留ありて甲府へ歸陣有ける程に眞田は沼津に城を築き成就して武田左馬之介を籠らせ置き其身は上田へ歸りける

扨も九月上旬に至り勝賴は東上野大胡の城其外山上の城膳の城の三ヶ所を攻んとて一條右衛門大夫信龍小山田兵衛尉武田上總介土屋惣藏眞田安房守原隼人跡部大炊之介安中林等を始め一萬餘騎にて發向あり先膳の城を攻落せとて取圍む此城には膳四郎左衛門同伯耆守を大將として二千餘騎にて籠りける武田勢犇々と攻掛りけれ共城中素より要害善して兵粮矢玉多かりければ勿

第廿七 木曾義昌謀反の事幷武田の諸將變心の事

古聖言へる事あり君は船なり臣は水なり水能く船を泛むと雖も又能く船を覆へすと實や武田勝賴は酒色に耽り佞臣を愛して忠臣を疏じ功有る者も敢て賞せず自己が武威を恃みて萬民の眉を顰むるをも顧りみざれば諸將士心を離し退ぞき去らん事を思ひける程に斯ては如何と眞田一條穴山など種々諫言を入ると雖も勝賴一向に用ひられざれば一條穴山は所詮武田の運も是迄なりと兩人心を合せ密に濱松に內通し後榮を思ひけるこそ是非もなし頃しも天正九年七月勝賴は長坂跡部が勸めに依て韮崎に一城を築き新甲府と名付て奉行を眞田昌幸に命せらる昌幸大にい駭き是は奈何成事ぞや武田家數代甲府に相續ありし所君には何故韮崎に一城を築き給ふぞ別に深慮在ましての御事にやと申ければ勝賴聞て我倩々考るに織田德川は日々に威勢强大にして數度我領地へ亂入す然るに當家は馬場山縣內藤を始勇臣數多討死し其上高天神用宗の二ヶ所も落城し剩さへ濱松勢近國に威を振ひ北條も同く威勢盛なれば甲州にても要害の城を築かずんば敵の侮りを蒙んこと口惜し然に依て韮崎へ城を築かんと思なり今にてもあれ三方の敵亂入せば此城に籠り防戰して敵を敗らんと思ふも是國家の安危を慮り永く社稷を保たんが爲なり汝怪しむ事勿れと宥ければ眞田此由を聞きて淚を流し昔年楠正成は城を以て城とせず思慮を以て城とす

は土屋に先をかけられ無念に思ひ夜叉の荒れたる如く敵兵を駈敗り太刀疵を受朱に染ながら城中に切入ければ林平六郎引續いて駈入ける然れども素肌の哀さ三騎が中に取込られ終に討れて果たりし其外甲府方にて名を得し勇士七十四人討死す誠に此合戰は勝頼の不覺とこそ聞えけれ爰に眞田昌幸は荒川布下を從へ搦手より進み水の手曲輪より一度に城中へ攻入ければ城兵は思ひも寄ぬ事ゆゑ大に駭き狼狽騷ぐ所に我もくと攻入る程に城將膳四郎左衞門同伯耆守は終に防ぐ事能はず本丸に入り腹搔切て死したりけり然る程に城兵は解体し忽ち落城となりしかば勝頼甲府へ歸陣せられけれども味方手負死人の多きを以て殊の外に歎きしとかや此折から跡部長坂等の我意を惛みて身退きし者數多有しかば勝頼の武威自然衰へ北條德川は朝日の如く勢ひ盛に成りしこそ誠に武田家の運盡る兆なるらん爰に宍山入道梅雪一條右衞門大夫の兩人は如何思ひけん德川家に心を通じ武田家を亡ぼさんと企てける又初鹿野傳右衞門は數度武功有と雖も長坂跡部に讒せられさしたる恩賞無りければ恨みを含みて君臣不和となる德川源君此事を聞給ひ大に悅び然らば此隙に高天神を攻よと頓て本多榊原大久保酒井大須賀等を從へ一萬餘騎にて押寄せければ城將岡部丹後守横田甚五郎等防ぎ戰ふ事能はず甲府へ援兵を言送りけれ共甲府は君臣安からず援兵の沙汰無りければ岡部丹後守今は是非なしと自害して果しかば高天神は落城に及びけり德川家は勝を得て悅び勇み濱松へと引退きけるは實に勇々敷ぞ見えにけり

意頻なりければ此由忽ち甲府へ聞え勝頼大いに駭き是は如何せんと評議ある所に長坂進み出是木曾左馬頭義昌が內通ならん捨置難し早々討手を差向味方の見懲しに誅し給へと申ければ勝頼聞て急ぎ召捕と有ければ武田左馬之介信豐某し參りて誅すべしと乞しにぞ勝頼悅ばれ然らば神保治郎を添差遣はす間早々義昌を誅せよとて三千餘騎にて向られける義昌大いに怒り何程の事あらん只一駈に踏殺さんと鳥居嶺に五百餘人陣を張せ熊井源五兵衛成瀨岩之進等に鐵砲手だれの者五百餘人を撰ばせ嶺に並べ置武田方の寄せ來るを待かけ一度にどつと打下し〱防ぎければ一つとして外るゝはなく將棊倒しに打据られ死する者數を知らず左馬之介散々に敗して引取ければ義昌は思ひの儘に勝軍して討取所の首級を織田方へ送り急ぎ御出馬あれと催促す然程に信忠は七萬餘騎を率ゐ進發し濱松よりも三萬五千餘騎駿河口へ發向す北條氏政は四萬五千餘騎飛驒口へは金森五郎八三千餘人伊奈口へは信長十一萬二千餘騎總勢合せて廿六萬餘騎とぞ聞えける斯て諸方の大軍雲の如く攻め來りければ武田方の者共大に駭き勇者も勇を施こす事能はず智者も其智を回らさず只呆れて一言をも出す者なく其中にも一條右衛門大夫穴山梅雪武田左馬之介等は豫て敵と心を通じて居れば此評議にも出合ねば勝頼は何と云べき言葉もなく一人茫然として在しかば小山田兵衛尉進み出で由なき事に隙取んより敵を防ぐの手當こそ肝要ならんと勸めしかば勝頼然ばと伊奈高遠の城へは仁科五郎晴清小山田備中守羽田九郎次郎渡邊金太夫小

と申されしとかや然れば今韮崎に堅城を搆へんより佞臣を遠ざけ忠臣を愛し給はゞ是ぞ奈何成强敵なり共恐るゝに足ず此眞田に於ては新甲府の奉行御免下さるべしと固く辭退して歸りける是眞田も諫言の行はれざるを察し爲可き樣なく今は禍ひを避んと斯くは辭退に及びしなり勝頼は更に又曾根内匠之助に奉行をぞ命じらる其後長坂が計らひにて濃州岩村の城にて生捕し信長の六男御坊丸を返し和睦あれとの勸めに從ひ勝頼眞田小山田にも相談なく返されしかば信長大いに悦び慇懃に返答して使者を返さる勝頼は信長の悦びしと聞き早織田家とは和睦調ひしと思ひ心を弛め晝夜酒宴を催して在りける内新甲府の城築造につき甲府城を破却して一條信龍の屋敷に住しける玆に木曾左馬頭義昌は信玄の頃より幕下たりしが當勝頼とは何となく不和にて有しが倩々武田の運を察し見るに勝頼は忠臣を擯斥奸臣を用ひ國政を亂す愚將なれば滅亡せん事近に有ん我汚面〳〵爰に居り倶に家系を失はん事殘念なりと頓て濃州苗木の城主苗木久兵衛尉を以て織田中將信忠へ申送る樣は主人勝頼暴惡にして長臣等が諫言を用ひず我意に誇り上を輕んじ下を苦しめ是に依て家運傾き滅亡の時到れり既に老臣も二心を起しける所に勝頼之を意ともせず佞心長坂跡部等が勸めに依同國韮崎に新城を築き是迄の甲城を破却せしなり然れば此機を外さず大軍を以て攻入らるゝに於ては義昌内より手引仕つらんと述べしかば信忠大いに悦び急ぎ此由を信長へ申上られしかば信長も悦喜在まし然らば迅速に大軍を以て發向せんと其用

りしにつき是まで度々御諫言申上ると雖も少も御聞入なく今更となり誠に是非もなく候夫に付某し愚案を廻らすに死は一旦にして易く生は難し御自害は何時にても相成り申す可くにつき今一度御運定めの爲上州吾妻の城は要害堅固なれば此城に御籠城在て然るべしと申ければ勝頼聞て誠に其方が申所我心に叶へり如何にも吾妻城に退き防戰すべし然らば汝は是より上田に歸り兵糧の用意を爲し萬事宜敷計ふべしとありければ眞田は畏まつて夫より上田にこそは歸りける

小山田岩殿に籠城を勸る事幷勝頼人質を燒殺す事

然程に眞田昌幸は上田に歸り勝頼は吾妻へ引退く用意ある所に小山田兵衛尉申けるは某し愚案を回らすに御一族長臣迄逆心を起す中にて候へば遙々と上州へ引退き給はん事宜からず萬一昌幸俄に心を變じなば如何し給ふぞや何卒篤と御賢慮を廻らされ某しが在城郡内岩殿は要害善く殊更兵糧矢玉の用意も澤山なれば一先是へ退き給ふ方然るべしと忠義顏にて勸めければ勝頼又々心迷ひ如何はせんと思案の体に長坂跡部豫て眞田と不和成を以て是屈竟と口を揃へて小山田の申條然るべしと頻に勸めければ勝頼遂に小山田が言に從ひ然らば小山田は早々郡内に歸りて其用意に取かゝれと有しゆゑ小山田は急ぎ我城へぞ歸りける時に天正十年三月朔日長臣小山田彦三郎何國共なく逃走す勝頼大いに怒り所詮是まで取り置し人質は差し置も無益なりと曲輪

菅五郎兵衛を籠られ深志の城には馬場民部少輔信頼（信頼は信房が甥なり父討死の後家督す）多目治部右衛門鞠子の城には諸角兵部尾代越中守田中の城には蘆田下總守を向はせける扨勝頼は其勢僅か二萬許には快よく勝負を決せんと勇み給ひしが一族臣下に至る迄俄然に心を變じ逃失ければ今は旗本三千人許りと成りしに勝頼大いに駭き此小勢にては奈何にして敵の大軍を防がんや先々新甲府に楯籠らんと來られしが未普請調はざれば此城にも入事能はず如何はせんと途方に暮て居給ひければ長坂釣閑申樣昨日迄二萬内外の勢なりしに今は三千に過ざる寡兵となりしは誠に是非もなき事なれば此上は信州一國を織田へ遣はして和睦を整へて君は是より甲州一國を保ち御家滅亡せさる樣爲し給へと只管に勸めけれ共勝頼何の答もなく指俯向て在せし處嫡子太郎信勝は未十六歳にてありけるが長坂が申を聞大いに怒り奈何に長坂汝は巧言を以て忠臣を讒し退け穴山と云腰拔と心を合せ武田家十九代相續する甲府の城を破却させ新甲府の城を築かせ其普請も未調はずして此時宜に及び永く天下に父君を愚將と云せん事皆汝等が計ひなり武田家運盡て一族一門に見限られし上は何ぞ阿容〳〵織田へ降參する事有んやよしや降參するとも今に至りて何ぞ織田降參を聽ん汝再び言ふ事勿れと言捨て夫より父に向ひ名も無き者の手に懸らんより早々御自害候へと勸めければ並居る諸將眞田を始め皆々鎧の袖を濡しける昌幸は暫時口を閉て在しが稍ありて信勝に向ひ流石名將の孫君潔よき仰せられかな某しも斯なる事と知

と悦びけり然程に勝頼は天正十年三月三日郡内岩殿指て急がれし折しも高遠落城して仁科自害の由告來りしかば勝頼大いに歎じ扱は高遠もはや落城したりしかと頻りに心を惱されしかば下方彦作と云者勝頼に向ひ先君信玄公今川氏眞と合戰有し時氏眞は味方の旗色も見ずして引退きし事今に世の胡盧となれり然るに君此度敵の旗色も見ずして退き給ふ事是氏眞に等き御振舞にては有ずや郎君信勝君の仰せられし如く潔よく御生害有ま欲と憚りもなく諫めしかば長坂釣閑是を聞て大いに怒り汝奈何成ば無用の事を云出して君を嘲るぞや夫打殺せと云儘に長坂が郎等共駈寄彦作を打殺したるは淺ましき事にぞ見えにける夫より勝頼は梶尾を經て鶴瀬に馬を向けられ小山郷に着給ひて小山田が知せを今や〳〵と待けれ共更に何とも音沙汰無日數五日が間居給ふ處に鶴瀬より岩殿の通路へ逆茂木を引たりければ勝頼之を見て不審に思ひ此逆茂木は敵を防ぐ爲なるや某し此所に在事よもや知らざる事はあるべからずと土屋惣藏をして早く岩殿に伴ひ入よと有しかば土屋畏まつて逆茂木の前に到り君玆に來れり早く岩殿に伴ひ申されよと云入れば逆茂木の陰より忽地鐵砲を打出す土屋惣藏大いに怒り憎き小山田が擧動哉當家譜代の長臣として早心を變じ我君を此所へ釣寄討んとは僞せしか天罰の程今思ひ知らせんと既に小山田が柵に切入んとせしが又思ひ返し命を私しに捨ん事忠に非ずと憤はりを押へて取て返し小山田變心の由勝頼へ申上れば勝頼大いに怒り頭髮逆立扱は小山田兵衛尉謀反せしか我日頃渠には他に

に置し木曾義昌が人質の老母幷びに妹を引出して磔刑に懸其外所々の人質九百餘人を燒殺し僅に忠義無二の臣下より取り置く處の者計りへ金子を與へて歸しける其後阿部加賀守土屋惣藏長坂長閑跡部大炊之介を始め三千餘人を引具しさしも美麗を極めし甲府の金殿玉宇を一朝の烟と燒捨岩殿へ赴き給ふ事見る人坐に袂を濕ほすとかや

第廿八　小山田兵衛尉逆心の事幷小宮山內膳兄弟の事

斯て勝賴は小山田信茂が勸めに依り郡內岩殿に楯籠らんと數代續きし甲府の城を燒捨打立給ふぞ果敢なければ然る程に松尾の城主信濃守は小笠原に降參し飯田の城主保科彈正忠は德川に深志の城主馬場民部少輔は城を捨て落失せ大嶋の城主日向主膳は暇を乞て退散す其外の小城堡は敵攻ぬに退き今は高遠の城計り殘りしに織田信忠率や此城を攻落せと小笠原掃部大夫森武藏守團平八郎川尻肥後守等が勢二萬餘人を從へ押寄しに城將仁科薩摩守は豫て期したる事成ば小山田備中守渡邊金太夫羽切九郎次郎春日河內守今福又右衛門畑野源左衛門今福筑前守神林十兵衛等三千餘人の勢にて楯籠り必死となりて防戰す然れども寄手は大軍を以て入代り〳〵攻戰ひければ小勢の城兵防く事能はず仁科薩摩守今は是までなりと本丸に入り自害して果たりける殘る軍卒是を見て小山田を始め城中一同腹搔切て死しければ忽地落城に及びける程に信忠手始よし

しを願ひければ勝頼内膳を近く招き内膳數馬の兩人なるか我過つて佞臣の讒言を信じ汝等兩人を遠ざけしこそ返す〴〵も面目なし汝を讒せし者共は落失しに汝兄弟は君臣の好を思ひ斯まで運盡たる勝頼を捨ず最期の供せんとは神妙と言ふも餘り有るなり汝が心志は早是にて勝頼能う知りたり然る上は汝等には老母も有由なれば是より古郷に歸り予に盡す忠の心を以て老母に孝養を盡す可し志ざしの程は過分なりと兩眼に涙を浮めて申されければ小宮山兄弟言葉を揃へ我々君の御先途を見屆け御最期の御供こそ願はしけれ老母は今年七十五歳と成しも皆是君より賜りし恩祿に因み候事なれば我々兄弟殉死致し夫が爲老母餓死に及ぶ事の候共彼も同じく忠に死するの道理に當り候へば惜む所に之無く是非〴〵御供をこそ願ひたしと只管に申ければ勝頼何の返答もなく唯落涙してぞ在しける

小宮山數馬上田に赴く事并勝頼父子天目山に籠る事

然程に武田勝頼は小宮山兄弟が忠を感じ涙に沈み居られしが良有て涙を拂ひ申されけるは誠に數多ある臣下の内にも忠を思ふ者少なきに偖も此勝頼を主人と思ひける兩人が心志こそ嬉しけれ然らば兄弟の内一人は最期の供をなし一人は我末子勝千代を翼け眞田昌幸が在城上田に赴き我最期をも告げ昌幸と心を合せて武田の血脈絕ざる樣取計らひ呉よ此事呉々も賴み入るなりと

超て恩を加へしに我が衰運を付こみ背きしとは偖々見限り果し人畜かな是を思へば昌幸が上田に在て嘸や待らんアヽ天道に見離されたる哀しさよ今は眞田に對面も成がたく所詮我運の盡る所是非もなき次第なりと拳を握り齒嚙をなして歎かれたり斯りける處へ兵衛尉が甥なる小山田八左衛門三十人の郎等を率して勝賴が馬前に來り伯父兵衛尉は君に叛き不義の振舞に及候へども某し事は之に同心致し候事勿々に思ひも寄ず候故拔て是までは來り候間然る可く高慮を回らされ御最期の御供に仰せ付られたしと眞實面に顯れて申しければ勝賴其志ざしを感じて先陣に加へらる然るに八左衛門何時隙を伺ひ信茂が人質を盗み迯失けるこそ伯父に增りし逆賊なれ偖も其翌日小山田勢は逆茂木の間より頻に鐵砲を打掛れば勝賴今は早何方へ落給ふべき方術もなく運を見限りし者共長坂跡部を始めとして我先にと落失殘りし者は纔に四十三人となりければ勝賴愈々怒り長坂跡部の兩人は迯すべき者ならず夫追掛よと有ければ安西平左衛門土屋惣藏の兩人矢庭に追掛しに土屋惣藏跡部に追付一矢にて射落し首を取て歸りける斯て勝賴今は是迄なり花々しき一戰をなし其後生害せんと心を決し三月十日鶴瀬の奥なる田の庄へ潜みたまひ之に從がふ面々には秋山紀伊守同じく源藏土屋惣藏福井豐後守安西平左衛門小笠原下野守等僅に四十三人なり爰に小宮山内膳は豫て長坂釣閑が讒言に依て浪人となり居たりしが此度君の敗軍を聞せめては御最期の御供に預らんと思ひ舍弟數馬を引連勝賴の在ます田の庄へ來り勘氣御免

岩下右近同左膳小山田大學寺嶋藤藏甘利彦五郎曾根内膳雨森織部安西平左衛門同十左衛門同源五郎河村又兵衛小丸五郎助同十郎兵衛同吉次郎淺羽古近榎並新藏山本杢助皆井小助岩井源藏齋藤作兵衛大龍寺麟岳和尚同弟子圓座主小山田平左衛門都合四十人なり然ほどに織田方の大軍既に甲府に集り先此度武田家を背きて降りたる小山田兵衛尉信茂同八左衛門の兩人を大惡逆者なれば生置べきに非ずとて即時に首を刎られ率天目山に寄押勝頼父子を誅せよと河尻肥後守を先陣として織田の大軍我も〳〵と天目山へ押寄ける勝頼は今最後の酒宴盛んなる處に織田の先陣河尻肥後守が釣鐘の馬印見えければスハ者共花々しく一戰して死後の高名を見せよと勇氣は常に彌増して下知せしかば秋山民部少輔同彌十郎小山田平左衛門同彌助齋藤作藏等の面〳〵我々此敵を駈敗り候はん暫時御見物あれと云捨て勇み進んで天目山を下り信長の大敵を今や〳〵と待懸しは勇々しくも又花々し

第廿九　勝頼父子最期の事幷眞田上田より發向の事

扨も河尻肥後守は天目山の麓に近付武田勢の僅六騎ばかり馬を控えて待懸しを見呵々と打笑ひ是ほどの者何かはせん皆打取と下知すれば千六百餘人我も〳〵と進みしかば小山田平左衛門同彌助の兩人弓を抱込み杉の木を小楯に取て射立しに空矢とては一筋もなく瞬間に十三騎まで射

跡は涙に暮給ひしかば兄弟の者誠に有難き御諚にて候然らば弟數馬には是より勝千代君の御供して上田に赴き尊命を傳へ申させんと云ば數馬之を聞き成ほど御道理なる事乍ら此御使者は兄上參られよ某しは御最期の御供仕つらん內膳怒つて汝は兄の言葉を背くか某しこそ君の御供に立て至當なり數馬否某しなり否我なりと互ひに口論絕ざれば勝賴制し給ひ兩人共劣らぬ忠臣感じ入ぬ併しながら兩人斯く爭ひ居ては際限無につき鬮取りにしては如何にと軈て鬮を取けるに數馬鬮に當りければ是非なく勝千代君を伴ひ上田を指て出て行勝賴幷に兄內膳は是ぞ今生の別れとて乏ばしは涙に泣沈むこそ理りせめて哀れなり夫より數馬は間道を越上田を指て赴きける勝賴今は心易しと天目山へぞ籠られたり斯て織田信長は織田七兵衛尉信澄矢部善七郎菅谷九右衛門堀久太郞長谷川藤五郞福富平左衛門長岡與一郞蒲生忠三郞氏鄕蜂須賀兵庫頭池田紀伊守同三左衛門明智日向守筒井順慶齋氏家源太郞竹內久作武藤助十郞原彥三郞不破河內守高山右近阿閉淡路守中川瀨兵衛尉以下十一萬餘の兵を調へ信長は根羽に着し中將信忠は甲府に滯陣せられしかば勝賴天目山に在て今こそ信長父子と戰ひ潔よく討死して骸を巖頭に曝し名を萬天に揚ばやと頓て最期の酒宴を催さる其人々には武田太郞信勝阿部河內守土屋惣藏秋山源藏親久（十六歲なり）金丸助太郞（土屋惣藏が弟なり）秋山紀伊守同十三郞（十六歲なり）小原丹後守嫡子忠五郞秋山民部少輔同彌十郞沼井常陸介小宮山內膳小山田彌助小原下野守同惣十郞多田新藏同覺助

汝が父信玄豫々上洛の希望ありと雖も遂に其志ざしを遂ずして病死せり然るに汝が代となり今信長に討れし事嘸口惜くや思ふらん然り乍ら是も又天運の然らしむる事なれば必ず共に恨むる事勿れ父子が首は京に上せ我も跡より上洛して對面せんと笑ひて兩眼を閉しとかや夫より首を長谷川宗信に持せて京都へ遣し中將信忠は甲府に止まられたり却て説小宮山數馬は君の安否兒の動靜を瞬く際も忘れかね進まぬ道を悄々と田道畔道たどりツヽ行く後より敵の聲噪がしく河尻肥後守手勢引具し追駈來り落武者遁さじと切て掛るに小宮山は豫て期したる事なれば少も恐れず僅六人必死と成て切り掛ればさしもの敵勢叶はじと引退く小宮山倩々案ずるに今敵勢一旦は退く共又追來る事必定なり然る時は此小勢にては叶ふまじ我々死せば我君の御存念を失ひ兄人の義をも破らん忍ぶ身の忠義を神も助けざるやと四邊を見るに幸ひ辻堂の有ければ是屈竟の所と思ひ勝千代君を蓮臺の下へ隱し其身は椽の下に潛み居たりしに案に違はず河尻が勢我も〳〵と馳來りしが辻堂に心づく者一人もなく遙か向ふへ追行たり此時上田には昌幸君を吾妻の城に引入ばやと兵粮矢玉を城中へ運び甲府の樣子を聞しむる所に君には小山田長坂跡部等が勸に從ひ岩殿に籠城せられしと告ければ眞田大に怒りアヽ那なれば君には昌幸が言を用ひ玉はず岩殿に入玉ふや一族だに心を變ずる此際にたとへ岩殿に入玉ふとも小山田等必ず心を變じ君を欺き討ん事必定なりと呟きける所へ既に小山田謀反して勝頼鶴瀬に迫り天目

落したり是に依河尻が勢進み兼て見えし所に秋山齋藤等の四人は一時に河尻勢に切て入り勇を奮て戰ひしが衆寡敵し難く終に四人共敵中に討れ果たりけり小山田平左衛門同彌助の兩人は猶も射立て心は彌猛に逸れ共射る矢の盡て今は是迄なりと刺違へて死たりける然れば河尻肥後守は大に勇み本陣を目懸て進みし程に四郎勝賴は黑糸の胴丸に吉弘の太刀を佩冑は故と脫しさゝ右には土屋惣藏左には太郎信勝を從へ卅餘人の兵を前後に備へて河尻が勢に切て入四方八面に薙立切立獅子奮迅に荒廻れば何かは以て堪るべき河尻が勢大いに亂れて終に麓へ捲られける爰に甲州の降人辻彌兵衛は密に天目山の後に廻り鐵砲を嚴敷打立しかば本陣に留まりし小原丹後守金丸助太郎等敢なく討れて死せしにより勝賴今は是迄なりと敵兵を數多討取歸りて見れば味方は僅十二三人再び敵に當りて又來て見れば今は早八騎にぞ成にける是に於て勝賴は長男信勝妻君北條氏其外諸將士諸共差違て果玉ひけり時に天正十年三月十一日勝賴行年三十七太郎信勝十六歲アヽ名家と聞えし武田の家も名殘は一朝の烟りと消え討れ給ひし末路の程こそ哀れとい ふも餘りあるかな斯て勝賴父子が首級瀧川之を本陣に持參し大將の實撿に備ければ信長大いに喜悅せられ勝賴の首對面致すべしとて床几にも凭らず平座にして實撿せられんとするは無禮にこそ見えにけれ河尻は勝賴父子の首を持出けるに首の相貌常の如く兩眼を開きて白眼居たりし有樣は干將莫耶が眉見尺も斯やとばかりに思はれけれ信長は首を手近く取寄如何に勝賴珍しや

ざ然らばと四百餘人を前後に從へ上田の城へ歸らんと既に三國嶺へ懸らんとせし折柄是は如何に上杉景勝此所に出張し上田へ歸る眞田を妨げんと直江山城守柿崎和泉守甘粕近江守三千餘人鐵砲弓矢を構へて待掛たり先手に有し別木勝藏沼田小新這は一大事と急ぎ昌幸に告しかば安房守大いに怒り何程の事あらん一揉に打破れと云程こそあれ別木沼田吶と喚いて切入らんと嶺を爭ひ登る所へ甘粕が備より豫て用意の大木大石を投懸ければ眞田勢の色めくを見て上杉勢五百餘人打ていで切立しかば沼田小新別木勝藏踏留りて戰ひしが遂に堪らず大いに敗して逃下ればば昌幸駭き斯る小勢をだに敗る事能はざれば爭か織田北條の大軍に當る事を得んや我假令死する共此敵を敗らずんば有可からずと遙か絕頂を見上れば上杉の旗指物山風に吹靡き楯の陰には鎧の袖を引違へ弓鐵砲の備亂さず控へたりしは恰ら謙信の陣に異ならず昌幸後には織田の大軍あり前には上杉の軍に支へられ進退茲に谷まりければ天を仰いで歎息し如何はせんと案じ居たりし其處へ次男與三郎幸村進み出で斯ばかりの敵恐るゝに足ず某し辨舌を以て此圍みを敗らんと申ければ昌幸驚き汝奈何成謀計有て斯は申すぞ幸村某し三寸の舌を以て味方の矢一筋も損せず此敵を退け申さん昌幸偖は其謀計を聞かんと云しに幸村父が耳に就き囁きしかば昌幸手を拍て大に悅び誠に汝は穎才なり急ぎ其謀計行へと許しければ與三郎は穴山岩千代を召具し黑糸の腹卷に萌黃緞子の陣羽織を着し身輕に立出で頓て徐々と嶺を登り上杉が陣前に到り大音にて

山へ籠り給ふとの注進に眞田扨こそ一大事出來せり率や君を救はんと上田を立て天目山にぞ向ひける從ふ者には嫡子源次郎信幸次男與三郎幸村望月卯右衛門根津新兵衛海野六郎兵衛別木勝藏沼田小新分部勝兵衛其勢四百餘人城中には隱岐守信尹に六百人を添て守らせける

小宮山數馬眞田に逢ふ事幷三國嶺合戰の事

既に眞田安房守昌幸は天目山へ向ふ折柄河尻肥後守が勢五百餘人勝に乘て馳來りしが圖らず眞田が旗の手を見て肥後守馬を進め大音聲にて其處に來るは眞田昌幸と見受たり汝が主勝賴は既に天目山にて討死せり然るに汝誰爲に戰はんと爲や斯る無益の戰ひをなさんより早く我に降參せよ命ばかりは助け呉ん辭むに於ては討取べしと呼はれば眞田莞爾と笑ひ命は義に依て輕し蠅蟲の如き汝等を怖るゝ眞田に非ず目に物見せて呉んずと云程こそあれ眞田勢一度に吶と切て懸れば言葉にも似ず河尻勢大に崩れ這々に敗走せしかば眞田勢逃さじと彼辻堂邊迄追かけ敵數多討取て兵粮を遣ひ居たりし處小宮山數馬辻堂にて危きを免れ息を詰て居たりしが今此體を見て大に悅び勝千代君を伴ひ昌幸が前に到り勝賴が遺言の事等落もなく物語れば昌幸呀とばかりに倒れ伏しゝが良ありて勝賴公には勇に誇り遂に忠臣を數多失ひ國を亡ぼし玉ひし事今更何と爲す可き樣もなく誠に是非なき事どもなり此上は吾遺命を奉じ若君を守立武田家を再興させんい

は謙信公の御賜にして智勇兼備と承まはりしに何故斯は無禮にて候ぞや鎗長刀の刃を見はし弓鐵砲の筒先に揃へて嚴に備へられしは只一人の幸村を恐れしと見受候誠に卑怯なる御扱ひかな見給へ某しは太刀刀も帯せず參向せしに何故恐れ給ふぞ景勝大いに赤面し夫より眞田を近く招き言葉を和げ汝爰に來るは何用ありや幸村謹んで某し此處に來る事餘の義に非ず主人勝頼公天目山に栖籠られ織田の大軍を引受既に戰ひ危しと聞大に驚き何卒之を救はんと急ぎ上田を發向せしに早亡び給ひしと聞無念骨髓に徹し臍を嚙とも其詮なければ一先上田に歸り旗を揚んと此處まで引返せしに斯遮り給ひしかば上田に歸る事あたはず然るに因て此處御通し下され度と此儀申さんが爲め推參せり武門の習然る可く御思慮あらまほしと言葉巧みに述ければ直江山城守冷笑ひ眞田安房守は天晴の智將と聞つるに大いなる僞者かな其故は已上田に在て主人勝頼小山田に欺かれ郡内岩殿にも入事叶はず天目山へ籠りしと聞俄然に驚き城を出て勝頼亡しと聞ながら殉死をもせず再び上田に歸り安樂に世を送らんと爲るは誠に武門の恥と爲す所なり我君爰に在て汝等が歸るを妨げ一人も遁すまじと爲じ給ふに驚き汝如きの小倅を以て欺き通らんとは扨扨淺墓成工みにて候なり早何も聞に及ばず早々歸るべし首を取て捨る汝なれ共今日は助け返す戰場にては許容なじと傍若無人に申ければ幸村笑つて誠に事の譯を知らざれば然こそ思すらんが夫には深き仔細の有る事抑々我君は信玄公にも劣り給はぬ智勇兼備に在ませども長坂釣閑跡

信州上田の城主眞田安房守昌幸が次男與三郎幸村景勝公に見參すべき事あり暫時筒先を除られよと申ければ上杉勢是を聞急ぎ本陣へ告しかば景勝直江を呼び此旨を申さるゝに直江承まはり是必ず敵方辨舌を以て此圍みを解んとて來りしならん早く追返しあれと申にぞ甘粕近江守否〳〵幸村を追返し給ふは甚だ臆したるに似たり兎も角も呼入て味方の勇氣を示し彼が申し條を一切用ひ給はざる樣せられて然る可しと申せしかば然らば幸村を此方へ通すべしとて頓て之を呼び入れ直江山城守杉原常陸介甘粕近江守柿崎和泉守本庄越前守を始甲冑を帶して座し左右には鎗長刀弓鐵砲を構へ其備へ嚴重にして待居たり幸村は案內を聞て岩千代に向ひ汝は此所にて待べし我一人通らんと太刀を脫て渡しければ岩千代是甚だ危き事なり某し御供致すべしと申ければ幸村笑つて生死は某しが胸中にあり汝等が知る所にあらずと悠々として陣中に入ければ岩千代訝しながらも陣外にこそは留まりけれ

第三十　眞田與三郎幸村明智の事幷幸村直江杉浦を伏する事

然程に眞田與三郎幸村は旣に陣中に入樣子を見るに景勝は緋縅の鎧に龍頭の冑を着し床机に凭りてサモ寬然として幸村を遙に見遣如何に安房守が悴幸村何用有て此へは來りけるぞや幸村答へもなさず唯冷笑つて居たりしかば氣早の景勝大いに怒り汝何をか笑ふ幸村答へて抑々景勝公

へける杉原常陸介進み出て如何に與三郎汝辨舌を以て圍みを解んとすれ共上杉の陣は辨舌にては通れまじ只明らかに戰ふて通るべし上杉家には能研淸したる名劔あり汝が身を以て試みん幸村笑つて其名劔こそ見度と云ば杉原怒つて金剛兵衛が鍛錬たる氷の如き一刀をズバト引拔幸村が前に差付ければ幸村見向も遣ず此劔は誰を切劔にて候ぞ杉原天道に背く者を切劔なり幸村天道に背くとは誰ぞ杉原武田四郎勝頼の類ひなり幸村何故に我君を天道に背くとは云ぞ天道に背く者は勝頼公には非ず外に在なり上杉の臣杉原常陸介是なり杉原大いに怒り讒言たり幸村何とて我を天道に背くとは言しぞ幸村然ればサ其故を聞せん我父昌幸は謙信公を勸めて織田を討んと軍勢を催し既に用意調ひ發向に定まりし所謙信公急に病を發して死し玉ひしかば軍は其儘に輟しに付ては景虎君は御養子なれども景勝殿一旦弟と成り玉ひし上は景虎君こそ御代を襲がれ然る可きに然はなくして景勝殿專横に景虎君を追ひ出し玉ふ事誠に天道に背けり然るに依り我君勝頼は北條氏政が妹聟たるを以て景虎の請みを承け吾が父等を從へ春日山に向ひ飯山に出軍せし處景勝殿數度戰ひ負給ひければ直江山城守を以て武田家へ和睦を請はれ其後兄を誅して上杉の家督を繼給ふ事誠に言語同斷の事には候はずや然れども勝頼は仁慈の厚き大將なれば強ち之を責たまはず請を聽れて北條方を離れ上杉方に和談せられたり是に因て景勝殿の威名廣大なり若其時我君の聞入なくば春日山は攻落され景勝殿何を以て上杉の家督を襲ぎ給ふ事を得可き

部大炊之介宍山入道一條右衛門大夫小山田兵衛尉武田左馬介等が奸佞の輩ら諂諛を以て君を輕蔑にし忠臣を退くる等言語に絶し擧動有に因て心亂れ玉ひしかば我父昌幸種々と諫言すれ共聞入なく剰さへ君臣不和となり對面なかりし故餘義なく控たりしに諸將皆逆心を起し事甚だ差迫りしかば吾父吾妻に籠城の儀勸め申せしに是に隨ひ然らば汝は上田に歸り兵粮の用意せよとわりしを以て上田に歸り其用意を調へる中早くも小山田跡部長坂等吾妻に入る事を支へ岩殿に籠城を勸む是に依て勝頼公鶴瀬に到り小山田が迎へ入るを相待たまふ内小山田忽地逆心を起し君を討んと計るに依り我君天目山に籠らせ給ふ程の難儀に及びし事なれば父昌幸之を知る由の有る可き樣なく今日の仕合とは成りしなり然るを不忠の樣に云るゝは是誠に云ふ人こそ知らざるの過ちなり斯く申とて君を嘲るにはあらず誠に我君岩殿に籠らんとせられしも道理無に非ず岩殿は天下無双の名城にて上州吾妻駿州久能の城とさして劣らざれば其機に當ての思慮なり且又我父殉死せざる譯合は尋常の者の知る所に非ず古語に言ずや死は一旦にして易く生は難しと父昌幸が殉死せざる所以は勝頼が次男勝千代君を守立上田に歸り織田德川北條の大軍を取控ぎ武田の家系を再度取返し甲信の大守となさんと思ふが故なり是誠に爲し難きの忠に非ずや然るを未練がましき事に言るゝは奇怪の事に候なり直江殿には執權の職に在乍ら何故斯る匹夫に拘しき事を言るゝや返答如何にと問詰ければ流石の直江兼續答ふべき言葉もなく閉口してたゞ控

留んと控へたり昌幸斯と知らざれば大いに驚き是は抑如何に漸く上杉の大軍を遁れしに今又北條の勢控へたり偖も難儀なる事共かな然らぬだに其勢四萬五千と聞からは假令孔明張良が才あり共何ぞ此圍みを解事を得可けんや今は討死の期到りしならんアヽ是非もなし武田の微運人力の及ぶ所にあらずと大いに歎じければ幸村聞て父君には如何なれば斯く怖れ給ふぞ某しを以て觀る時は上杉は小勢なれども破り難く北條は多勢と雖も群集虫の如し只一戰に破るべしと申ければ昌幸打笑ひ然らば其謀計を聞ん與三郎斯樣〳〵なりと申ければ昌幸大いに悦び夫より無紋の旗六流を取出し北條方松田尾張守が紋所の永樂通寶の錢形を畫せ置き先一手は荒川内匠に七十人差添て件の旗を指せ其外布下彌四郎眞田源次郎穴山岩千代眞田與三郎等に皆同じ旗を指せ其夜子の刻に吶と鬨を揚て北條の陣へ夜討を掛しかば北條方大いに駭き驚破や夜討ぞと見ればは松田が定紋なれば扨は尾張守謀反せしと犇きける程に陣々大いに騒動して同士討相討上を下へと返しける仕濟したりと眞田は兵を纒め此紛れに道を開き上田を指て歸りける北條勢は眞田が謀計とは夢にも知らず狼狽まはりて小田原へと引取けること愚なれ扨も昌幸はまだ妙齡なる幸村が智謀を以て上杉北條が大軍の圍を解て易々と上田へ引籠りければ昌幸大に感じ與三郎初陣に僅四百餘人にて北條が四萬五千を破りし事前代未聞の功なれば今より此吉緣に因みて我家の紋所は持出せし六流の永樂錢を象り是までの定紋なる雁金の外に六連錢に改めんと彌々是を

や、然らば則ち武田は景勝殿には大恩のある間なりさるを勝頼の滅亡したればとて其恩をも省みず此所に出張ありて父等を遮ろとは是何事にて候ぞ是景勝殿の心より出たる事にあらず皆其許等が勸めしならん然れば則ち天道に背きしとは其許等が事なればイザ此劒にて其許が首を切り謙信公に奉つれ是ぞ似合たる忠氣なり如何に〳〵と申ければ杉原は只茫然と閉口してぞ控へたり斯と聞より景勝大いに感じ天晴成かな幸村汝來りて我に説ずんば我天下に笑はる可き所なり汝早く歸れ我直に陣拂ひして春日山に引取るべしと申されければ幸村大に悦び誠に君は仁才智勇の大將なり何時かは此恩を報んとて幸村は再拜して直樣陣外に出にけり表に待居る穴山岩千代幸村が歸りの遲を大に案じ如何と思ひ居ける所に與三郎立歸り兩人直に昌幸が陣所に戻りける

幸村北條の大軍を敗る事并上田籠城の事

扨も昌幸は幸村が歸るを今や遲しと待所に漸々にして歸り來りければ樣子那にと尋ねしに然々の由物語りければ昌幸大いに感じ直に四百餘人の軍勢を從へ嶺に赴き見れば景勝が軍勢次第〳〵に越後をさして退きぬ昌幸扨てこそと悦び三國峠を難なく過て笠ゲ城へと急ぎ行道途敵の動靜を案じつゝ已に城近く到しに此所には北條右京大夫氏政四萬五千餘人にて出張し眞田を打

校訂 眞田三代記第三編

第一　信州上田合戰の事幷瀧川明智兩將諫言の事

一盛一衰は春秋の廻るが如く新羅三郎より數代續きさしも甲信に武威を輝やかせし武田家も勝頼が代と成て終に逆臣小山田が爲に欺むかれ天目山にて滅亡するこそ是非もなし扨又小宮山數馬は主君幷びに兄の遺命に寄つて勝千代君を助け參らせ信州上田の方へと落行しに圖らずも追手の大軍に圍れ既に危く見えける所に未だ天道の棄玉はざるにや端無くも眞田父子に出逢ひ夫より上田に歸らんとするに上杉北條が大軍に支へられ又も危ふかりしを眞田幸村が奇代の謀略に助けられ終に上田へ達せしなり是に依て德川織田北條は眞田が上田に籠城せしと聞て何ほどの事やあらん一揉に踏破れと言儘に大手の方よりは織田信長同信忠搦手には北條氏政笠ケ城より攻懸る扨又德川勢は安中輕井澤口より攻寄る寄手の軍勢二十餘萬騎蟻の如く蜂の如くに攻懸れば城中にも俄に其勢千二百餘騎を押立て大軍を少しも恐れず籠城しける眞田父子が勇氣の程こそ冷まじけれ去程に大手搦手の大軍我も〳〵と城際に押寄せ城中を見てあれば思ひの外に用意薄く只北の方越後の山續きに少しく亂杭逆茂木を引のみなれば匆々一日も持堪たゆべき體も

定紋とは爲たるなり斯て織田信長は甲府に在しが河尻肥後守方より此度眞田昌幸天目山の勝賴を助けんとて半途まで出たりしに天目山落しと聞て上田に籠城せり捨置に於ては勇々しき大事ならんと申し送りける信長笑ひ給ひ眞田僅の小勢にて上田に籠城せしとて何程の事あらん我一揉に打破らんと夫より上田に發向ある同國松本には右大臣信長同中將信忠明智日向守丹羽五郎左衛門河尻肥後守織田源五郎瀧川左近金森五郎八梁田出羽守を始十五萬餘騎輕井澤には徳川勢酒井榊原大須賀本多鳥居大久保一柳奥平等五萬餘人にて押寄る笠ゲ城口には北條右京大夫氏政松田尾張守北條民部少輔沼井下野守等四萬五千餘人にて押寄る大手搦手都合其勢廿五萬七千餘人とぞ聞えければ眞田智謀あり共千騎に足ざる小勢にては籠城忽々危くこそは見えにけれ

校訂眞田三代記第貳編　終

昌幸兼て木辻別右衛門と云鐵砲の達人に云ひつけ大將と見成ば撰み討に致せと拾匁筒を與へける程に木辻は未申の櫓より遙に中將信忠を狙ひ鎧の透間を擊ち貫んと火蓋を切てヒヤウと放せば信忠の運や強かりけん玉は外れて右の腕の小手の透間を掠りけるにぞ人々大に驚き斯る小城と侮りしは不覺なり眞田が智謀いか成事の有んも計り難ければ一先御引揚有るべしと勸めければ信忠も尤なりとて夫より陣を拂はせける此軍寄手は手負死人三百七十餘人と聞えしも城中には一人の淺手の者も無りしとぞ斯て信忠は本陣に歸り今日の眞田が振舞を父信長に物語り有りければ信長大に怒給ひ何條眞田が鼠輩として此信長を侮りしぞイデや我明朝自身向ひて眞田父子が首を討取んと以の外に怒り給ひければ明智日向守光秀大に制し眞田は通例の將に非ず智謀計略の多き人なり然るを然樣に輕んじ給ふ事大い成僻事なり御思慮ありて然る可しと述ければ信長カラ〳〵と笑ひて我向ふ所は天下に敵なし武田勝賴甲信の兩國を保ち武勇の臣に富み兵粮山の如しと雖も夫さへ天目山にて攻亡す程なれば其が幕下たる昌幸等の如きは何ぞ怖るゝに足んやと明智が言を聽き給はざれば瀧川も側より恐れながら我君の仰せ誤れり昌幸は智謀深く又次男與三郎と申す者僅か十四歲なれ共先日上杉景勝が三千餘人の圍をも辨舌にて押通り又北條氏政が四萬餘の大軍も難なく謀計にて驅通りし程の恐しき者にて候へば必ず輕んじ給ふ事勿れと繰返し諫けれども信長彌々笑て聽給はず汝等は其十四歲なる與三郎が恐しきか扨々臆病なる

無かりければ逸り男の織田勢是を見て梁田出羽守金森五郎八五千餘人を率ゐ鬨を作りて攻登る頃は天正十年三月廿三日の朝まだき中將信忠是を見て梁田金森は先掛すぞ續けや者共と自身眞先に進み給へば瀧川左近明智日向守丹羽五郎左衛門降將蘆田下野守此城を攻落し我軍功に爲ん物と先を爭ひ塀下に集る其勢三萬五千餘人梁田金森が三百餘人と同時に懸り塀に手を懸登らんとする有樣にあはや此城攻落されんと見る處に昌幸兼て籠城の用意に城の後の山を伐せ大木を積置たれば時分は好ぞと言儘に一度に切て落せしかば何かは以て堪る可き三百餘人を始として此大木に押倒され一人も殘らず打殺されける程に先手に進む梁田金森案に相違し足元亂れて見ければ仕濟したりと櫓より雨霰の如く弓鐵砲を以て打すくめ大手の門をさつと開かせ六文錢の旗一流眞田隱岐守信尹甥源次取信幸郎等松浦七郎荒川勝藏畔柳九藏望月太郎左衛門等二百餘人一度に吶喊て攻掛るにぞ金森梁田驚き乍ら戰ふ處に相圖と覺しき一聲の鐵砲響くや否や又も後の山手に埋伏したる六文錢の旗顯れ出で緋縅の鎧鍬形の冑金の釆配を打振て三百餘騎打て出ればば眞田安房守昌幸郎等酒井甚助筧金六海野六郎兵衛田沼喜兵衛高木芙允等我も〳〵と鬨を作り同く打て出る是に仍て先手大に亂れ梁田金森終に切崩されて引退ければ中將信忠大に怒り是程の小勢何程の事や有一人も遁すなと眞田が勢を討んとすれば早城中に引入たり信忠彌々怒り打破らんとすれ共又大木の落ん事を恐て誰近付者も無城を白眼んで立たりけり此時眞田安房守

野源八等を始めとしてその勢三萬二千二百餘騎扨又笠ゲ城よりは北條右京大夫氏政同陸奥守氏照同左京大夫氏房同兵部少輔氏則同玄蕃丞氏光松田尾張守入道大道寺駿河守北條龍淵齋入道今川喜平次義忠日比備中守大悲筑前向井將監長沼源左衛門望月伊勢梶川平馬鞠子兵庫土塚齋宮北條新四郎氏清中根松千代同軍兵衛大井田日向守別府兵太夫等其勢五萬人惣勢貳十一萬五千餘人三月廿四日卯ノ刻に上田の城へと押掛し有樣は古へ唐山の張巡が睢陽に圍れしも斯やとこそは見えにけれ此時城中には廿三日の夜に到り昌幸一族郎等を集め申しけるは我不肖なりと雖も主君勝頼公の遺託を蒙りしを以て幼君勝千代君を守立參せ武田家を再興致さんと當城に籠し處德川織田北條の三家大軍をもつて前後を圍み既に今日織田方梁田金森の兩將打出たり然る上は元來堅固成ざる當城成ば敵の爲に打破られ亡君の望も達せず我々も獄門の木に頭を曝さん事有も計られず是誠に口惜き次第なれ共武の家に生れては歎く可き所に非ざるなり方々にも人は一代名は末代隨分と未練の行跡無く勇しき防戰して英名を四海に轟かされよとサモ潔く申されければ一座の者共誰一人臆する者なく勇み猛りて皆此義に同じける然るに與三郎幸村進み出で申けるは誠に武の家に生れし者成れば忠に依りては死する共珍らしからぬ事なれ共偖も父君には命二ッ有て明朝死を究給ふとは宣ふか昌幸怒て汝幼年の身として何條父が言を嘲弄るぞ命二ッ有かとは奇怪の一言なりと申しければ幸村然ばにて候今父君討死し玉はゞ武田家の再興は誰か

者共かな我今霄搦手の笠ケ城輕井澤の徳川等へ諜じ合せ明朝卯の刻より此上田を二十萬の大軍を以て總攻にせん眞田智謀有共何條堪へんや眞田の首を得る事早近きに有んと事もなげに申ければ瀧川明智の兩將赤面して退出致しける

第一　徳川織田北條上田城惣攻の事并鷄卵の謀計寄手大敗軍の事

斯て信長は瀧川左近明智日向守が諫言を聞入玉はず青山與惣を軍使として笠ケ城北條が方へ遣し明朝卯の刻惣攻に致さんと申送り又森蘭丸長安を輕井澤口徳川源君の方へ遣はし北條と同時に惣攻に及ばんと言ひ送りしかば兩將共に承知の旨返答有りしに信長大いに悦び夫より先陣には丹羽五郎左衛門長秀柴田修理亮勝家金森五郎八蘆田下野守明智日向守瀧川左近將監平手中務少輔前田又左衛門利家森勝藏長一中將信忠織田源五郎信益同赤千代長谷川於竹前田玄以法印蒲生忠三郎氏鄕淺井周防守安中玄蕃頭鈴木杢頭中陣には織田右府信長其勢十三萬二千七百餘人なり輕井澤口よりは徳川勢先手は大久保七郎左衛門忠世同新八郎忠敎大須賀五郎左衛門康正本多作左衛門重次平岩七之助親吉酒井左衛門尉忠次本多平八郎忠勝榊原小平太康政井伊兵部少輔直政菅沼新八郎定且小笠原與八郎氏助奧平美作守信昌松平下總守康重三浦右京眞壁藤彌日

守信尹笠が城へは與三郎幸村何れも三百餘人を率ゐて鬨を作り攻め掛れば盲人に均しき寄手の面々働く事能ずして我も〳〵と敗走し同士打爲もあり踏れて死するもありて一萬五千餘の軍卒雪頽かゝつて落されしは見苦しかりける有樣なり

眞田幸村智謀の事幷寄手火攻敗走の事

然る程に與三郎幸村は僅か十四歳にして寄手の大軍を一計に敗りしかば城中の者は鬨を作りて引退さける寄手はさして死する程の者は少なけれ共大に敗走して歸りければ信長心中安からず不興氣にて在しける又德川源君は敗軍により陣々に觸られけるは暫らく城攻の事は停止らる可しと有しかば織田北條方にても同じく攻寄する事を止め遠攻に致しければ城中にては遠攻との由を聞き昌幸是には大に難儀して種々と工風を凝ける處に幸村父昌幸に申けるは三方の敵兵遠攻に爲を父君には是を患ひ給ふか昌幸答へて遠攻に逢ては所詮兵糧に事を欠んされば籠城は心元なく之に依て患るなり幸村冷笑ひ今宵某し敵兵を欺むき必ず一汗流させ申す可父君には本丸に在て篤と幸村が計らひを御覽有れと申しければ昌幸然ば汝宜敷計らへと申しけるこそ昌幸が大膽幸村が不敵何れも類ひ稀成英智なれ幸村は夫より松浦七郎荒川勝藏畔柳九藏海野六郎兵衛望月太郎左衛門等に命じて城の後の山續きへ炎々と松明を點させ上田の城より越後路へ落行く

之を引受る者有らんや然に仍て命二ツ有やとは尋參らせしなり昌幸暫時打案じ汝が申ところ一理あるに似たれ共今三方の大軍蟻の如く當城を圍みしかば假令孫呉の術ありとも爭か此圍を解事を得可んや仍て死を究めしなり幸村笑つて大敵も恐るに及ず小敵も侮り難き事あり父君には那なれば斯ばかりの大敵を恐れ給や昌幸曰我既に防戰の術に盡きたり幸村曰く某し防戰仕つらん昌幸驚き何として防ぎ候ぞ幸村頓て郞等に命じて數萬の籠を前に置たれば昌幸不審ながらに是を見れば皆鷄卵を容れたり昌幸打笑ひ是小兒の戲れ何條此大軍を破る術に用んや幸村某し豫て此鷄卵の謀計を思ひ付領內より取寄置たり昌幸曰此鷄卵を謀計有とは如何幸村聽て鷄卵一ツを採小刀にて之を割中の黃白を去て此中へ煎砂を入れて合せ紙を水に浸り割口を卷て昌幸が前に出し敵勢城下に寄來らん時此目潰を以て敵に擲けなば皆盲人同前となり手に立者は有ざる可と申ければ昌幸悅び汝が奇才我感ずるに餘りあり迚夫より直樣鷄卵を大將雜兵の別なく與へて謀計を授けたれば數刻を經ずして數萬の目潰成就致しける程に櫓々に十籠廿籠ヅヽ取備へ置寄手遲しと待掛たり翌れば三月廿五日の朝まだきより三方の寄手は吶と鬨を作りて押寄せ鍵繩打懸勇みに勇んで攻立るに城中より時分は好と件の鷄卵を相圖と均しく擲出せば何條もつて堪るべき冑面頰のきらひ無く當り次第に碎けしかば煎砂は兵士の眼に入てさしもの勇夫も暗夜をたどるに異ならず城中よりは之を見濟し時分は能ぞと松本口へは眞田源次郎輕井澤口へは隱岐

さわぎ峯に傳ひ谷に彷徨ひ人馬上を下へと騒動して猛火の中に苦しむ樣は地獄の責も斯や有んと恐ろしなんと言ふ計りなし斯と見る内に杭木に結付し松明燃え燼して地に落ければ豫て設けし地雷火一度にドッと發しければ何條以て堪る可山は皆火炎と成て燃上る是に因て徳川織田北條の軍勢燒死する者員知ず僅に大將分の者ばかり漸々にして遁出たり此謀計に罹りて死する者八百餘人手負二千六百餘人とぞ誠に怪有の謀略なり幸村は工し謀計圖に當り思ひの儘に勝軍して城中に引退しに寄手は充分に欺かれ味方を數多燒殺されければ彌々恐れて今は城を攻んとする者一人もなく只身搆へに用心して遠攻をぞ致ける此時徳川源君には熟々此體を見て此小城に久敷大軍滯留する時は天下の恥辱此上なし其上本國に主無を窺ひ諸國の逆徒蜂起して後を攻なば是社天下の一大事ならんと深く心を廻し今一度惣攻をして快く勝を決せんと聽て織田信長の陣所へ赴かれける

第三　徳川織田兩將軍議の事幷寄手再度惣敗軍の事

偖も信長幷に信忠は味方の大軍なるを頼みて上田の城を小城なりと侮り兩度迄攻ると雖も眞田父子が奇計に當り難く攻落すこと能ず只遠攻に數日を經し内又も芦田金森が地雷火の爲に散々打すくめられしかば大いに恐怖して居られける處に徳川源君入來たられしかば大いに悦び給ひ

体を爲しければ北條勢是を見て扨は眞田昌幸籠城叶ひ難きを察し越後路へ落行者成らんいざや追駈武具を剝取るべしと一犬虛を吠れば萬犬實を傳の習ひに一人斯と言出せば聞者これに附會し是れ眞田は上杉が方へ落行と覺えたり如何樣追駈高名せんと思慮淺き面々我も〳〵と笠ケ城の後より松明を目當に進ければ北條陸奥守氏照大道寺駿河守松田尾張守等他に先を越れじと押合〳〵追かけ行て三四里を過ぎ越え遙に見れば明松の光りは四邊に滿て峯々晝の如くなりしに松田風と心づき諸將に向ひ若や眞田が僞計にては無か人を遣して見せ給へと有しに斥候の者を出して見せければ大松明を峯〳〵の杭に結付たる計りなれば斥候の者斯と告しに北條勢大きに怪み居たりし處へ三千餘の軍勢來りければ不審しと能々是を見れば織田勢蘆田下野守平手三左衛門金森五郎八淺井周防守が軍勢なり大道寺松田尋ねけるは各々方は何故に夜中此處へは來り給ひしぞ織田勢答へて然れば我々上田城の動靜を日夜窺ふ處に夜々松明を燈し連ね越後路へ落行故討留んと來りしなり然るに軍兵とては一人だも觀えず只明松の爰彼所に結付しのみなれば不審に存じ爰に窺ひ居りしに思も寄ず貴軍に逢りと答へければ大道寺松田某し等も御同然なりとて共に不思議と眉を顰る處に徳川勢菅沼新八郞小笠原與八郞等二千餘人にて馳來り是も同じく右の趣きにて不審せり斯ては長居も無益なりとて諸勢は陣に立歸らんと今來し道へ差掛りしに這は那に道は一面火炎となりて歸る可き樣も無りければ諸勢は大に仰天し如何はせんと狼狽

んと爲るなりと未だ言も終ざるに筧金六郎立歸り敵軍の備へ此度は竹束を夥多しく用意仕つり候と申けるにぞ一座皆幸村が言語に違はざるを感じける然程に城中には松明を夥多用意して櫓々へ積置今や寄來ると待掛たりしに四月朔日寅の一刻に及んで徳川勢は輕井澤より織田勢は松本北條勢は笠ヶ城より上田の城下に犇と押寄一度に鬨を作りて攻掛る其勢ひ孤城は只一潰しとこそ見えければ徳川源君下知を傳スハ打掛れと有し程に先手には竹束を荷ひ跡には棒の太さを提げ目潰の鷄卵今や降り來るかと待處に城中は鎭り返つて音もせず寄手十分城に近づきし頃一聲の鐵砲響と齊しく三方の櫓より松明を投出せば油を注ぎし如き竹束は見る〳〵炎々と燃上り寄手の者共驚き騒ぎ消んとすれども消ればこそ散々に成て我先にと本陣に歸りければ此度も亦敗軍とぞ成にけり是に仍て寄手は安からぬ事に思へ共すべき樣なく切齒を鳴し拳を握り城を白眼で再び遠攻に致しける爰に織田勢の中に大和國の住人古田次郎兵衞正久と云者元來勇氣劇しき者成が味方眞田が小勢に惱され數度敗軍するを我一人の恥辱と思ひ日頃の朋友同國の住人依尾傳右衛門秀三と云ふ者の陣處に到り語りけるは此度徳川織田北條の大軍斯る小城を攻ん迚數日を費やし其上眞田が智計に惱され度々敗軍する事誠に口惜きことには非ずや是偏に武門の恥辱成處なり天下の嘲り此上無し然るに因て拙者は當城に拔掛して潔よく討死せんと思ふゆゑ貴殿は日頃より兄弟の厚情有ば此事を告んと是までは來りしなりと語りければ傳右衛門聞て打

直に請じて夫より色々と軍談有けるに源君申されけるは某し熟々案ずるに武田勝頼滅亡して後殘れるは只此上田なり然るに是程の小城を數日攻て落す事成らざる時は天下の人に笑れ我々が武威を失ふに似たり然れば迚今更打捨て歸らば功を一簣に欠と言ふ者ならん然るに因て今一度有無の一戰を試み當城を攻落さんと存ずるなり仍て再惣攻めの義有まほしと述られしかば信長實に尤もなる仰に候某しも然思ふなり然れ共惣攻を致しなば又々鷄卵を擲出さん事氣づかはしと有りし〳〵に源君此度は竹束を以て楯とし鎧の袖を額に翳して是を防ぎ塀に乘入程ならば何條恐るゝ事候はんやと事もなげに申されければ信長如何樣此儀然る可し何分長滯留は本意に非ず攻懸るより外なしと夫より德川源君は輕井澤の陣へ歸り給へば信長直樣笠ヶ城の北條氏政が方へ申送られ四月朔日寅の一刻より攻懸んと用意せり扨又城中には敵陣の彼是騷動するを見て再び惣攻有らんと急ぎ此由を與三郎幸村に告ければ幸村聞よりも櫓に上り敵陣を見渡し夫より筧金六を呼で申けるは汝五六人の軍卒を引倶し德川織田北條の陣中を伺ひ來るべし筧畏まりて出行ぬ此時眞田源次郎信幸弟幸村に申けるは先日鷄卵の謀計を以て敵を破ると雖も再び用ゆる事叶ふまじ這般は汝何を以て大軍を防ぐや幸村笑て曰虛成る時は實と成り實成時は虛を以てする是兵家の活法なり先日煎砂に懲果たる敵兵此度は其用意有事必定なりされば此度は松明を以て投出より外有まじ其故は敵必らず目潰を恐れて竹束の楯を用意す可し然るに因て擲松明を用ひ

期の用意を調へける然程に夜も丑の刻頃に成ければ依尾傳右衛門密に己が陣屋を拔出上田の城へ赴きける其夜の出立には今日を最期と黄糸縅の鎧に紅の母衣を脊負ひ白柄の長刀を提げ銹月毛の荒馬に跨りて紫の厚總を徐々と抱繰り只一騎上田の城下に到り脇目もふらず立たりけり斯りける處へ古田治郎兵衛は白足毛の馬に跨り黑糸縅の鎧を着し淺黄の母衣を脊負ひ大太刀を帶して同じく城下に到り古田を見るより後より聲をかけ待兼しぞ古田殿昨日申せし事必ず心に懸玉ふな最前より此處に待合せ共に討死と覺悟致せしなり率此方へと呼はるにぞ古田は大いに驚き扨は依尾殿にて在ますか斯る事とは夢知ず今まで恨居たりしこそ面目なし然ば名乘ん諸共にと兩人鞍上に突立上り大和國の住人依尾傳右衛門秀三古田治郎兵衛正久他に拔懸して此處に討死し骸を戰場に曝して名を萬世に傳ゆるぞ我と思はん者は首取て功名せよと同音に名乘ければ城中よりは是を聞きスハヤ寄たるぞ打取と櫓の狹間より見下せば郎等をも連ざる二人の騎馬武者なるに城兵は意ともせず葉武者なり只鐵砲にて擊殺せとアハヤ銃口を向んとするを望月太郎左衛門押止め麁忽すな若武者達某し案ずるに是程多き敵の中より只二人拔懸て來りしは天晴の功の者と存ずるなり何條殺すに忍びんや其まゝにて置るべしと潜まり返つて有ければ古田依尾大いに怒り最前より呼はるに城中には聞えざるか但しは此兩人を怖れしか早々打て出よ如何に〳〵と呼立れ共城中よりは更に何等の答も無ければ兩人今は堪忍なり難しと馬乘放ち堀に

笑ひ扨も珍らしき事を聞者哉徳川織田北條の大軍是程多き其勢すら眞田父子が智謀に及ず斯數度敗軍する其中に我等一兩人討死せざるとてナド恥辱と言ふ事の候や貴殿の申さるゝ處太ばだ過たり斯申迚某し命を惜に非ず殊に貴殿とは兄弟の交際を結ぶ事成ば討死にと云ば倶に死すべきなれ共此度貴殿の仰は一向犬死同樣に存ずるなりと笑ければ治郎兵衛は心中大に憤ほり一言の挨拶もなく直に座を立我陣にぞ歸りける

古田依尾上田へ拔懸の事并古田治郎兵衛討死の事

斯て古田治郎兵衛正久は日頃兄弟の交りを結たる依尾傳右衛門秀三に吾が存念を嘲られ無念を懐きて陣所に歸りける跡にて依尾は熟々思ひ廻すに我古田が言を打消し歸したりしが若や渠此秀三を命惜さに日頃の好を打破りて却て人を嘲りし抔とゝ我を恨みやせんかと心付ては憖ひに理解をいふて歸したるこそ我誤りなれ元來律義の古田なれば明朝は必ず城下へ拔懸討死する事疑ひなし然ば我今宵古田より先へ拔懸潔よく討死して我誠心を見せん者をと郎等にも知せずして密に用意をぞ調ひける然るに古田治郎兵衛正久は依尾が一言を憤ほり日來兄弟の交りを厚うせしは全く渠を武功の者と思ひしに某しが明朝討死せんと言ひしを犬死なりと笑ひし事全く己が命惜さに我を嘲哢し事ならん斯腰拔とは知ずして是迄親しみける事殘念なれと立腹し愈々最

是ぞ父御の紀念かと見るに涙もせき敢ず右衛門七郎大音にて某しは當城に拔懸せし古田治郎兵衛正久が嫡男右衛門七郎正榮なり父正久の討死と聞き爰へは來りたり早く城門を開きて明らかに合戰われ首を渡し候はんと莞爾と笑ひ立たりしは天晴勇士と見えにける是を聞て城中より海野六郎兵衛は正久秀三が首を取出し如何に古田殿の子息父の討死と聞き當城に拔懸して同じく討死せんとは天晴健氣なりされども討死せし父が心を察するに汝を後に殘し置しは再び汝を以て君の用に立んと思ひしなり然れば今爰にて空しく果なんより後日君の馬前にて潔よく命を捨るこそ一ッには父の心にも叶ニッには忠義の道全からんイザ引取れと言ふまゝに古田依尾が首を投出しければ右衛門七郎は思はずハッと愁傷し軈て父の首を取上げ如何に父君何故に最期の御供には連給はざるや一日も孝の道を立る事叶はず今は斯く淺ましき御顏を拜すこそ悲しけれ何ぞ生存命て樂しからん追つけ三途の川の瀬踏仕つらんと云儘に鎗を取直し呼はりけるは何故城門を開かぬぞ開かずんば打碎き通らんぞと威猛高に成て怒けるを郎等和田久右衛門と云もの轡に縋り御怒は然る事なれ共城中より申す處も道理なれば先々御心を宥められ後日君の馬前にて御討死こそ願はしけれと理を盡して申ければ血氣に逸る正榮も道理に逼切齒をなしつゝ退きける此時に當り德川源君には織田の陣に在ましけるが依尾古田が討死を聞て落涙し給ひ信長公に宣ひけるは今朝依尾傳右衛門古田治郎兵衛上田に向ひ討死せし事は全く味方大軍を以て此小

飛入高塀に跳り入んとする處を城中よりスハヤ拂ひ落せと鎗長刀を追取て拂はんとするを古田は得たりと柄に取着て終に內にぞ飛入けり續て依尾傳右衛門も飛入り兩人聲々に呼はり〳〵切て回れば城兵共は大に驚き中に取込討んとすれば當を幸ひ切惓り薙回り矢庭に城兵六人までを切伏たり是を見て畔柳九藏根津又九郞海野六郞兵衛荒川九郞等も切て出るを兩人は事ともせず此者共に渡り合火花を散して戰ふ內に九藏が力や增りけん古田は太刀をホッキと計り打落され飛退去て差添に手を懸る處を九藏拜打に切つけ胸板迄割下ければ古田は討れ果にけり此方は依尾根津又九郞と戰ひしが同じく討れて果たりけるこそ哀なり此度寄手大軍の內城內へ切入しは此兩人許りなりければ諸將之を聞き誠に武勇の擧動かなと賞ざる者社無りけれ

第四　上田城の寄手軍令を定める事幷穴山安治幸村に諫言の事

義を見て爲ざるは勇無なり依尾は古田が心中を察し遣り兩人諸共城中に切入討死せしこそ誠に勇氣の擧動なれ然程に此由依尾が郞等に聞えければ郞等は大に驚き主君を討れて何後榮を賴んや共に戰場に出て潔よく討死せんと我も〳〵と用意を成處に古田が嫡男右衛門七郞正榮は今年十七歲なるが此度父に後れしを深く恨み郞等二十六人を引連身には卯の花緘の鎧を着し白綃にて鉢卷し片鎌の鎗を引提城下に到り遙に城の邊を見れば父と依尾の兩人が先に駈たる駒の跡

御事哉と諫ければ幸村打笑流石は老功能も諫めしなり然れ共我始めより斯様の事有んと思ひ居れば既に謀計を定置たり汝必らず煩ふ事勿れ安治進みより偖は此大軍を防ぎ玉ふ深計のましますか幸村手を拍ち謀計こそ有るなり安治シテ其謀計は那なる事に候や自然焼眉の急に迫り侮りの御振舞有ては勇々敷御大事にて候と申ければ幸村怒て麒麟も老ぬれば駑馬に劣とかや汝が如き如何ぞ我心中を知る事を得んやと礑と白眼付れば安治一言の答も無くて退きぬ其跡へ隠岐守信尹来り幸村に申けるは我聞く三方の敵軍既に惣攻の支度をなすと是當城の一大事なり是迄は敵當城を小勢なりと侮り度々敗を取しと雖も此度は諸卒に至る迄義を金鐵に比し死を鴻毛より輕んじて攻寄せ來る事なれば城兵如何に勇なりと雖ども長籠城の疲れに防禦せん事何共心許なし依て城中の者共は死を究めたるが偖も汝は如何に思ひしぞとサモ悄乎として尋ければ幸村は是を聞き否とよ此儀爾怖れ玉ふに及ばず此幸村には思ひ設けし謀計こそ候へば必ず／＼御安心あれかしと更に危ぶむ氣色有ざれば信尹は大に驚き其謀計こそ聞きたしと云ふに幸村打笑ひ謀計は鬼神へも洩すべからず追付相知申べしと後は餘談に成りければ信尹は心許無思へども又と答ふる言葉もなく我持口へと歸りける

昌幸幸村が即智を感ずる事并幸村智計寄手を破る事

城を在る事勇無に似たりと天下の人口を思てならん兎角此儘にて攻る者成ば次第〳〵に勢ひ衰へ諸卒の勇氣悉皆く挫け四方の逆徒蜂起して後には悔共甲斐勿らん何分再び諸卒の勇氣を勵まし假令城中より那なる奇謀を現はし味方を惱すとも少しも痿まず一度にドッと攻寄するこそ今の謀計ならんと勇々敷宣ひければ信長公實にもと思れ御邊の敎に有ずんば爭か大功を遂らる可き然りながら是迄の法令にては再び攻る共利有まじ此度は生死を必とし是非共城を攻落すか然なくば我々滅亡するか二ッ一ッの方便こそ然るべしと兩將軍評定一決し軈て此趣きを笠ケ城にぞ達しける然程に此度は陣々へ嚴敷き軍令を下し此度の城攻には武夫一人討取らば黄金五十枚を與へん物頭の首を取ば同じく百枚大將の首を取ば百貫の地を宛行ん其上首は望に隨ひ遣すべし扨又敵に後ろを見する者あらば有無を問はず忽ち首を刎べしと軍令夫々へ觸示しければ諸手の面々此度こそ天晴一番に乘入んと勇まぬ者は無りけり斯て此由城中へ聞えければ扨こそ此度は軍令嚴重なれば如何がして防んやと城中眉を顰めて樣々に評議すれども一決せず人々途方に暮て居たりしに幸村は一人寛然として少しも憂へず酒杯酌で樂み居ければ穴山小兵衛安治幸村に向ひ敵是まで數度敗軍を爲せしに因て此度は必死となりて惣攻を爲んとするに味方は長の籠城に氣疲れ心倦み今は何共防戰の方便に盡たれば此度の合戰には皆討死と覺悟を極居り候に君には只一人酒宴を爲て樂み給ふは何事ぞや若しも敵の大軍に御心を奪はれ給ひしか淺猿敷

感じ是誠に妙案なり急ぎ其用意われと云ひ捨て立歸りける然るに夜は追々に更渡りければ幸村海野六郎兵衛增田荒次郎畔柳九藏望月太郎左衛門筧金六穴山岩千代等に命じて陣處に人糞を運ばせ馬の飼料を煮る鍋釜を取寄て其中へ汲込櫓々に持運ばせければ皆々殊の外に迷惑しイヤイヤ此臭き物を運ばせられては堪らぬぞアラ胸惡し息が呼吸ぬテモ吾儕が鼻には別條ないかナドと呟やきながらも主命なれば是非もなく頭を搔々大釜鍋に汲入れ櫓々に運びける斯て又其糞を煮立よと有ければ皆々仰天しコハ幸村君には狂氣し給ふか是迄數多奇計もあれど斯る汚穢事は思ひも寄らず兎角吾等こそ誠に難澁なれと面を皺めて小言ブツ〳〵言ひ合りしを幸村は耳にも聞入ず夜の明るを今や〳〵と待ける處に寄手の大軍は明朝こそ城に攻入分取高名爲さん物をと手ぐすね引て待居ける斯りける處に夜も白々と明渡れば寄手の方にはスハヤ時刻至りしぞと曳や〳〵の聲と一度に攻登る幸村は斯と見るより令を下して聲をも立せず有ければ寄手は暫し見合て居たりしが軈て一度にドツと掛り我先にと塀に取付乘破んとする處に城中よりは今ぞ相圖と覺しく鐵砲を櫓々より百挺許打懸けるに寄手は大軍の事なれば少しも恐れず進めやすゝめと呼はりて入楷子を乘越え〳〵城中へ亂れ入有樣は凄然かりける次第なり

第五　羽柴秀吉中國より上田へ赴く事幷秀吉信長と物語の事

偖も幸村は三方の寄手惣懸と聞き愈々悦び少しも驚く氣色無く小兵衛安治隱岐守信尹等の過慮を意ともせず只大言を放つて待遇しに源次郎信幸亦來りしかば幸村笑ふて兄君にも防戰の計議を尋給ふか信幸如何にも然り汝如何成謀計有て此敵を防がんと思ぞ幸村只點首計にて答もせざれば信幸威猛高に成て汝聊かの謀略をもつて敵を計りしより慢心を生じ此兄を輕んずるかと申ければ幸村愈々笑ひ何條兄君を輕んずる事有んや只敵を恐れ給ふを笑ひ候なり信幸怒て誰か此大敵を恐れざらんや汝那なれば敵を恐るゝを笑ふとは言ぞ幸村さん候蟻の如き寄手何ぞ恐るゝに足んや見給へ某し屹度敵を取挫がんと言へば信幸は其儘退出す時に夜は早亥の刻に成ければ幸村一休せんと枕を取寄寢んとするに海野六郎兵衛望月太郎左衛門進み出て今にも押寄ん敵兵を控へながら防戰の手立も無く寢られんと仕給ふは誠に危ふき事に候と諫めければ幸村大に怒り汝等軍を出すには吉凶の刻限ある事を知らざるかと云ひつゝ又寢んとする處に本陣より父昌幸來りて如何に幸村明朝の防戰は如何に方便を爲せしぞ幸村答へて先父君の心を聞ん昌幸暫く思案して申けるは古へ楠正成千早に籠り關八州の大軍を以て押寄ると雖も遂に落城せざるは是智の然ら令むる所なりされば當城も智を以て守らずんば恐らくは危からん幸村答へて如何さま父君の仰らるゝ處は兵道の體なり今愚子は其用を以て防がんと爲るなり昌幸用とは何を以て防禦んとするや幸村限りなく笑ひ實は斯樣〳〵なりと耳元により囁きければ昌幸手を拍て大に

多の逆徒を誅して美作迄切入吉川駿河守と對陣する處に甲州より飛脚到來し武田勝頼同太郎信勝討死との趣き幷びに信州上田の城に眞田父子籠城致したるとの注進なりしかば秀吉大いに悦び我既に晝夜心を安せざるは武田家なるに既に攻破られて滅亡せしと有る上には眞田父子上田の籠城何程の事や有らん是己と滅亡を速く事なりと嘲笑ひして居る處に再び飛脚到來し上田城は德川織田北條の三軍を以て晝夜攻れ共城兵强うしていまだ落城せず剩さへ寄手敗走する事度々なりと告來れば秀吉顏色を變じ何成ば斯手ぬるき事なるや上田程の小城に然程艱難事合點のゆかぬ次第なり何日までも斯て有りなば諸國に逆徒蜂起し天下の一大事生ずべし然れば我れ是より上田へ向ひ平定成しめ其後當城へ發向せんと夫より陣中には蜂須賀彥右衛門家政竹中久作を留め我身は淺野彌兵衛長政脇坂甚内安治平野權平長康糟屋助右衛門等を引倶して發向し程無信州上田へ着して先信長公の父子に對面し堅固を賀し勝軍を悦び夫より合戰の樣子を尋けるに信長公委細を語られけるに秀吉大いに驚き誠に信玄在世の時より英名高き昌幸が振舞實に智將にて候かなと歎息しければ信長公猶も幸村が是までの有し事ども殘りなく物語られしに秀吉掌を拍ち將門將を出すとは是の謂ならん誠に後世恐るべき者なりと暫時感賞して在しが稍有て申けるは眞田父子此大軍を引受て少も屈せず籠城する事是何事か望み有に相違なし假令當分の籠城叶ふ共此大軍を引請居ては其智張良の如く其勇樊噲の如しと雖ども爭で何日までも保つ事を

然程に寄手の面々は此度の合戰こそ唯此城を枕に討死して名を天下に顯さんとて勇氣日頃に一倍し城中より射懸る矢玉を少しも怖れず曳や〳〵と攻寄ければ瞬く間に塀は敵なく押倒されて敵軍亂れ入べく見ける處に與三郎幸村海野六郎兵衛穴山岩千代何れも同樣の出立にて寄手の口々へ手別をなして現はれければ寄手はスハヤ與三郎が出たるぞ謀計有ん迂濶に攻るな〳〵と皆上を望みて居たりければ織田中將信忠大いに怒り與三郎が現れし社悅びなれ射て落さんとは爲ずして望め居るとは何事ぞ乞信忠が弓勢の程を見せんずと三人張の强弓を滿月に引しぼり切て放せば過またず幸村が胸板に中らんとしけるを幸村早くも身を替し閃りと避れば胴の脇腹を削りて飛行たり寄手は是を見て力を得今まで痿みし者共もドッと一度に亂れ掛れば幸村日の丸の扇子を颯と開て相圖しければ城兵共破落〳〵と櫓に現れ長き柄の柄杓にて彼の煮立し糞を汲ては懸〳〵て防ぎければ寄手の者は目鼻口の嫌ひなくあびせられ臭さは臭し熱さは恰ら焦熱地獄に異ならねば今迄必死を究めし者共等勇氣も精も失果て只我先にと鎧武具を脱捨て押合へし合馬に踏れ太刀に躓づき前の目當も眞暗三方迯出せしこそ笑敷も又哀れなり扨寄手は此度も大いに敗軍して元の陣中に引退きければ織田御父子德川源君は一向に何の言葉もなく只惘れ果てぞ在しける然程に此後は攻んと云者誰一人も無空しく時日を送る內はや四月も中旬と成ける處に爰に織田の功臣羽柴筑前守秀吉は中國の毛利征伐として先達てより下向し別所小三郎をはじめ數

して居たりし處へ秀吉は家臣淺野彌兵衞を召連上田の城門に到り高らかに呼立て織田内大臣信長殿より城中へ申し入べき事有て羽柴筑前守秀吉使者に參候せり早く城門を開きて案内あれと申し込めば此由幸村に達す幸村は部卒に命じて城門を開かせ通路の掃除を丁寧ならしめ萬事に心を用ひ本丸にて父と共に對面せんと其用意整ひければ卒此方へ通されよと有し時增田荒次郎進み出て申けるは承はれば羽柴筑前守秀吉は元松下嘉兵衞元綱が草履を摑み居たりしに僅かの智恵を以て高祿を受立身せしとぞ然るに今日城中へ來り候は必ず城内を見積らん爲成べし決して入給ふ事勿れ且又是非共御入有に於ては客屋にて切殺し給へ是後の憂患を除く捷徑なりと勸むれば幸村打笑ひ汝等が心にては然こそ思ふべけれ其羽柴が今城中に來る事我が望む處なり隨分と無禮無樣に取計らひ出迎ひ致し候へと申渡し其儘本丸に到り父昌幸と同じく衣服を改め威儀を糺て待居たり斯て秀吉は城兵の案内に隨がひ靜々と城中に入て四邊を見れば掃除萬端いと丁寧に行屆き諸卒並居て法令も殊に嚴重に見えければ秀吉深く眞田が所置を感じ旣に本丸に入ければ穴山小兵衞望月太郎左衞門等出迎ひ直に奥へと請じける秀吉は怖るゝ躰更になくズッと進みて遙に向ふを見ば眞田昌幸同舍弟隱岐守信尹嫡男源次郎信幸舍弟與三郎幸村皆武具を脫時服にて着座せり安房守頓て秀吉に向ひ織田公よりの御使者御苦勞に存じ入り候なり卒是へ進まれ玉へと座を讓り禮儀を亂さず陳ければ秀吉謹んで申しけるは此度主君信長某しを以て使者

得べけんや是程の事を知ざる眞田にては無に籠城致す事必らず仔細こそ候はん某し城中へ罷越眞田父子が心中を尋ね來り其上攻るとも和睦するとも仕つらんと眉を顰めて申けるに信長公汝城中に到らんと云事誠に危ふし城中に行事を止め只一日も早く攻落す事を圖れよと有しに秀吉否く何は兎も有立越て實否を糺し候はん信長公頻に止め城中に到らん事必らず無用なりと免し玉はざれば秀吉打笑ひ眞田決して無方の振舞は之れなく候なり某し必らず黑白を糺し來る可くにつき暫時御暇玉はれよ仇に弓矢を損ぜんより安全の計議を成ん事望ましきには之無くやと軈て秀吉は御前を退去致しけり

羽柴秀吉城中へ赴く事幷眞田父子忠心を顯す事

然程に羽柴筑前守秀吉は自身城中に入て父子が胸中を承知はらんと既に陣所にて其用意を調へしに瀧川柴田丹羽金森等此由を聞き秀吉城中に到りなば眞田が爲に殺されん事疑ひなし犬死せん事歎かはしと皆々止めけれども秀吉は更に聞入ず軈て城に到らんとしければ城中には斯と聞より大いに驚怖し秀吉は天下に隱れなき智將なり此者新手を率ゐ來るならば恐らくは嚴く攻よせ味方一揉に押潰されん抔取々に評定爲しけるに與三郎幸村は一人秀吉が來たりしを大に悦び我々父子が深き處存は秀吉成では知者なし秀吉來りし上は我々が本望成就疑ひ無と獨り

に及ぶ共何卒此君成長の後は元の如く甲府を給ひ武田家の家督仰付られなば是勝頼の遺命叶ひし次第なり是だに叶はゞ其後は我々父子首を信長公へ進上する共思ひ殘す事更に之れなく叶はぬに於ては此上何百萬騎を以て攻め來り玉ふ共引受て思ふ程防戰し其後討死と覺悟究めし處なり願くは貴殿此旨宜なに信長公へ御中立られの程賴入處なりと餘義もなく申ければ秀吉も其忠義の心中を聞て思はず悲歎落涙を催しけるとかや

第六　羽柴秀吉和睦を調ふ事幷幸村寄手に武具を送る事

偖も眞田父子は數日大軍を引受少しも屈せず防戰に手術を盡し居たりし處に羽柴秀吉中國より引戻りて眞田が籠城を仔細有らんと信長に請ふて城中に來り委細を尋ねければ昌幸武田家相續の事を返答に及びける程に秀吉も流石其誠忠を感じ落涙數刻に及び稍有て申けるは斯有んとは某しも疾く打察し候處今は親しく胸中を承まはり了解いたし候斯る御望みは相見互の事ゆゑ某し必らず主人信長に申し達し如何樣にも取り計ひ申さん隨分御心易かるべしと夫より種々の談話の上羽柴は陣所に歸りけり眞田父子は城門迄送り出其後本丸に戻りければ隱岐守申しけるは今日羽柴の來りしは城中を見透し攻寄せん爲成可を何故に免しては歸し給ひしぞ昌幸答へて是れ詩當の心を以て解く可らず秀吉は下賤より出たれ共智謀深きに因て天下に威名を轟かし人皆

とし各々方へ申送られしは各々方の御主人勝頼殿の御父子天目山にて滅亡せられ玉ふ事無念には思されんが是皆天運の然らしむ處なれば戰國の習ひ誠に已を得ざるなり然るに甲信の武士我も〳〵と膝を屈し命を請ふて降參せざる者之れなく或は所領を自ら差出し開城する者其數を知ず然るに貴殿御父子は誰とて後詰を爲る者もなきに此小城に籠城して大軍を防がるゝ事誠に天晴の御振舞には之れ有れども已に孤軍援無きに至りては徒爾に殪るゝを待に過ざるのみ然ればば茲籠城は畢竟何の爲の籠城に候や必らず仔細こそ有らん承はり參れとの事に由りて某し參りたり義の爲の籠城と成ば及ず乍ら秀吉如何樣共望を叶參らせん間得々御語り有りて然る可しと眞實面に溢れて陳べければ昌幸聞より大に喜び實に足下の御尋肝に銘じ辱けなく存じ候なり主君勝頼は佞臣小山田信繁が爲に驅詐れ天目山にて自害せしより我々及ばぬ事とは思ひ共當城に籠城致す事全く天下の大軍を引受け合戰致す所存にては之れ無主人勝頼の遺命を守つてなり今にては遺命の道立つに及ばゞ何ぞ濫りに合戰を好まんや遺命の道立ざるに於ては假令我々如何樣の身と成とも此城を枕として忠に死するより外これ無く候なりと精忠の一言サモ立派に答へしかば秀吉手を拍て大に感じ斯有んとこそ思ひしに果して我察せしに違はずと再び言葉を改ためシテ其遺命とは何事にて候ぞ委細仰られよ主人に達して宜く計ひ參すべし昌幸申す事候なりと夫より今年七歳に成給ふ勝千代君を伴ひ出し是社勝頼の二男勝千代なり假令武田家一旦滅亡

成ば甲州に於て十萬石を宛行ふべし且又眞田は後見として當上田城に於て五萬石を遣すべしと認め朱印を捺て秀吉に渡されければ秀吉是を懐中し再び城中に到り右の誓紙を出し是を昌幸に渡しければ昌幸悦ぶ事限りなく夫より秀吉を上坐へ請じて源次郎與三郎の兩人をして種々と饗應致させける此時與三郎が熟々と秀吉の人体を見に丈は五尺に足ず顏面は猿の假面に肖て眼中に瞳子二ッと頰端に黒痣七ッ有り然れども其容貌は無端英雄の氣象顯はれて天晴天下をも掌握べき骨柄なれば幸村大に感歎して思らく此人後には必らず四海を保ち民の塗炭を拯ひ武威を天下に轟かすべき大將とは成るならんと獨り心に歡こびて深く其德を慕ひ尊信致しければ秀吉も幸村が骨柄を見にいまだ十四歳の若輩なりと雖ども色白くして鼻筋高く脣は紅ゐを染出して眉の間廣く尋常の人相に非ざれば秀吉以爲是れ奇童なり必らず三畧六韜の兵道も學びしならん誠に古今絶類の相貌かなと暫時は一人感賞して末頼母敷とぞ思ひけり扨又眞田が郎等望月宍山別府海野筧青山畔柳等も席に列なり各々秀吉に目見して和睦の賀を祝ひ互に數盃を傾けゝる處に昌幸やがて秀吉に向ひ其許が奇才の御扱ひ有るに非ずんば我々何日迄も籠城して望を遂せざる而已ならず遂には城中にて討死すべかりしに天未だ我々を捨給はずして此大悦を降しける事死すと雖ども此恩忘却致さんやと申しければ秀吉是は近頃痛み入し御挨拶を承玉はりし者かな全く以て某しの功に非ず貴公等が精忠の致す所なりと互に丹き心を敷ていと懇切の應對は英雄

彼が奇才なる事をよく知ほどの者なればこそ我々が籠城するを必らず望有ん事と打察し敵の中をも怖れずして城中に入來り委細を聞て立戻りしは實に英雄の心事磊々落々として鬼神も壯烈に泣く計り感じ入りたる事共なり斯る秀吉なれば何條僞りを言んや必ず疑ひ給ふ事勿れと言ふに信尹兄君の仰せ理わるに似たれ共秀吉が再びの返答こそ疑はしなど、呟き居たり扨羽柴秀吉は本陣に歸り信長公に對面して申けるは眞田事は拙者が推量に違はず斯く籠城いたす事全く故主の遺命を守りての事にて候彼現に守立て居りし勝頼の二男勝千代を席へ直し申けるは玆勝千代を成長せしめ甲州に於て元の如く所領を給はり武田家再興なし下さるに於ては己が首は何時たりとも君に献ずべしとの儀にて申す處流石道理に相聞え人臣と爲りては斯くこそ有り度是に引かへ小山田長坂跡部等は皆是亡國の奸臣とこそ存じられ候然れば眞田の如きは無解に誅戮を加ふ可き者ならねば願はくは彼が精忠を察しられ請を允して武田家再興の誓詞を遣され御和睦の事呉々も望ましく候爾ある時は眞田は大恩を感じ幕下の如く隨身せん事必定なれば其時君には早く當地を御陣拂ひありて逆徒原の起ざる樣何角の御仕置せられ夫より御上洛の事然る可く存じ候なりと理を盡して申ければ信長公も度々の智謀に手懲せし折柄なれば如何にも眞田が云に任せ汝宜しく計らふべしと有しかば秀吉然らば君の御自筆を遣され眞田父子をして本領安堵の義仰付られ候樣いたし度と請ひければ信長公實にもとて軈て自筆を揮はれ勝千代十五歳に相

郎に讓て其許宜しく沼田を攻取候へと有りしかば昌幸委細承知仕つると申し陳夫より城中にぞ歸りける

土屋九郎右衛門忠義の事幷明智光秀逆意を企つる事

昌幸は遂に忠を損ずる事なく秀吉が計ひを以て和睦全く調ひければ寄手の大軍思ひ〳〵に陣拂して本國に歸る中にも北條氏政は上田より信長公に暇を告て小田原に歸陣し德川源君には信長公の勸に因て本國には歸り給はず信長公父子と倶に上洛有けるにぞ上田城中より望月太郎左衛門穴山岩千代之に隨從し終に寄手皆陣拂ひと爲り甲州平定せしかば國民悅びをぞ唱ける

編者曰く秀吉上田城に扱ひを入れし事は當時秀吉中國出征中の時日里程等に參照して頗る疑ひの念無き能はず然れど其顛末を記せる事諸本略同じきを以て編者猥に之が削除を爲さず且此事既に大閤記にも疑ひを存して之れ有ば錄して以て後日博雅君子の訂正を俟のみ

爰に天目山に於て勝賴と討死致しける土屋惣藏が郎等に土屋九郎右衛門信次と云者あり生質正直にして良計深き者なるが主將武田勝賴天目山に籠り給ひし時主人政經と共に生害せんと天目山に到りしに惣藏九郎右衛門を密に招き汝今爰にて死するを而已忠義と思べからず今勝賴公の御三男彥太郎君は上田に落給ひし勝千代君と同年成共御妾腹の事ゆゑ三男に立せ給ひて甲府に

の氣象自づと顯はれ奧床しくぞ見えにける恁て秀吉は坐を辭し旣は本陣に立歸らんと爲しければ昌幸父子等は送り出で慇懃に挨拶して頓て御禮の爲大將の御前へ至りしなば其許よしなに取成願ひ奉つると城外に迄送り出別れけり偖秀吉が計らひにて旣に兩陣和睦調ひければ城中は言に及ず寄手の軍勢迄悅び一方ならず久々の軍勞を休めんと皆々歸國の用意を爲しにける眞田與三郎は先達ての戰爭に人糞を打懸け寄手の軍勢を防ぎし時敵の者共の脫捨置し武具馬具を皆城中へ運置き其手〳〵の標を付け置しを取出させ德川織田北條と三方の手へ是を贈りしかば寄手の兵卒等はとく失なひしと思ひしに再び戾りしかば偖も眞田と云る人は能物を貯蓄置ける哉旣に汚穢に染し物品さへ斯く取置きて歸さるゝと云ふ事注意きの事とは云ひながら我々に取りては是社耻の上塗と云ふ者なりと中には眞田を憎む者も有りけるとかや此後城中よりは此度和睦整ひしに因昌幸幷びに子息源次郎信幸次男與三郎幸村三人大將信長公の陣に抵り此度の禮を申し陳べ今より永く幕下となり忠勤を抽んで申さんと誓を立て信を表しければ信長公にも大に眞田が誠忠を賞しける昌幸更に申けるは上州沼田の城は某し曾て築き置候城にて候へば只今よりは上田城を開き改めて沼田へ移り度志願につき仰ぎ願はくば此儀御聞屆け有らまほしと請ければ信長公笑ひ給ひ上州沼田の城は武田家の降臣竹由新兵衛と云者籠り居る事なれば強ち當城を開きて立越るに及ばず攻落して遷られよ別して家嫡源次郎は聰明なる骨柄なれば上田は源次

下にては有ずや然るに其徳川を饗應せん迚餘の結構なるは何事ぞ若此信長を招きなば如何成饗應か致すぞと以ての外成顔色に光秀は只恐れ入て在りしが軈て首を揚げ是は思ひ寄ざる御憤ほりを爲し給ふ者かな某し謹んで考ふるに客たる者を敬ふは是人倫の常なり然るを斯怒らせ給ふは恐ながら是偏執の尊慮と察し奉つり候なりと申しけるを信長大いに憤怒偏執とは何事ぞ憎き一言発し難し夫誰か在明智が面を打挫げよと宣へども誰有て立者無かりしに森蘭丸長康ツカツカと進み出で上意なりと云ふまゝに明智が襟髪引摑み鐵扇にて額をしたゝかに打ければ額破れ鮮血迸ばしり光秀面目を失ない退出す是ぞ明智が大恩を忘れ謀叛すべき根元とこそは成にけれ是より徳川源君には安土に一兩日逗留ましましけるが何分本國の政道心元無く思され歸國致し度と御暇を願ひ給ひけるに信長公仰けるは豫て貴君御望みの有事なれば信州一ヶ國は其元に進せ申さんとて誓紙を渡され就ては本國へ御歸國の事は先暫時御延引有べしと其まゝ安土に留め置れける處に四國の大將長曾我部宮内少輔元親が方より飛脚到來し誰にもせよ一人大將を遣され下さらば四國も切隨へ候はんとの書狀到來せり信長大に悦び然ば幸ひ徳川源君を差向んとて此由源君に仰せられしかば源君直樣安土を發向し泉州堺迄打立給ふ此時中國には羽柴秀吉高松の城を攻毛利吉川小早川等と戰ひ最中なりしが何分右府公の御發向待ち入り候なりと數度催促有りければ信長公にも然らば我中國に發向せでは叶まじと忽ち其用意を整へ上洛ありて本能

在ますが我君の此處にて討死せられ幷びに我々殉死せし上は彦太郎君は探し出されて害せられ給はん事必定なり然れば汝は是より甲府に落行彦太郎君を守立武田の家名をして再び世に顯はせよ是社討死するより拔群の手柄なり御次男勝千代君は今上田に在ませば御身の上氣遣ひなし只彦太郎君社危險けれ偏に身を盡して守護せよと事を譯たる遺命を受て九郎右衛門は是非なく〳〵も直樣に天目山を切拔て甲府に來り彼彦太郎君同じく母公幷に主人土屋惣藏が妻女同く息男平三郎(今年十歳)を伴ひて甲府を立退信州善光寺の邊なる御弊川村にぞ住居せり九郎右衛門世の治る迄人に知れん事を恐れ身を落して百姓となり鎧に替る野畔衣にて雨露は冑の夫ならで菅笠のすげ無くも世を凌ぎ手には慣ざる鋤鍬執りて見陰も無茅屋には女中郎君を我子なり我妻などゝ世間に披露を爲しつゝも時の至るを涙ながらに待にける扨も此時織田信長公は徳川源君と倶に上洛して參內し朝敵退治の賀儀を奏聞し直樣安土に歸りたまひて源君の饗應役を明智日向守光秀に仰せ付られたり是より先に羽柴秀吉は中國征伐繁多なれば信長公に暇まを告再び中國に發向致しける此時明智光秀は徳川源君の饗應役を承まはりけるに信長公仰せられけるは萬事麁末無き樣に致すべしと有ける程に光秀左右と心を用ひ器物道具に至迄善盡し美盡しけるを信長公內見有るに餘り明智が周旋の鄭重にして饗應の諸具目を驚かしける程なるに信長公大いに恚憤給ひ明智を御前に召れ如何に徳川を饗應致せ迚其法を知ず徳川たとへ客分にもせよ我幕

立出て申けるは父君には天文を窺はれ給ふ樣見受しが今夕の天文にては信長公の身の上に變事起りしと存ずるなり然れども厄星は光りを永く保つ可らず是逆徒忽ちに亡ぶ可き兆なり父君には逆徒を何人と思ひ玉ひしぞ安房守偖は汝も天文を見しや幸村然り客星は誰と御覽成れしぞ昌幸手を組み今天下に信長を討べき程の者は恐くは明智光秀成か幸村光秀如何成ば君を討べしとは宣ひしぞ昌幸然れば光秀は智謀深く其上膽力強大なりと雖も心底の奸は匆々信長如きに仕へ居る者に非ず且又常々不和なれば逆心を儲へし事有可きに信長は却て光秀が大才を嫉む是變を生ずるの根元とこそ思ふなれ幸村手を拍ち實に豚兒が心も爾存じ候なり偖明智彌々主君を討奉つりしと有る上は其まゝには捨置れず如何爲可や昌幸武將は名を以て身を立主君を討たる逆賊豈一日も天下を保たんや幸村然ば此賊を討んとする者は誰何にて候ぞ昌幸答て汝まづ誰とか思ふ幸村答て豚兒熟々考ふるに此折柄に方りて明智を討滅ぼし織田家を興し身を立んとする者は今中國に出陣せし羽柴筑前守秀吉こそ其人成べし昌幸笑て信長に仕へし諸將は獨り羽柴一人のみならず柴田勝家瀧川一益佐々成政丹羽長秀前田利家其外數多の武將ある中に羽柴一人明智を討べき大將と云ふは抑も如何の事や殊に秀吉は今中國にて高松の城攻最中なり柴田瀧川佐々なんどこそ手を束て有べきに非ず然ば秀吉如何ぞ明智を討事を得可けんや如何にと昌幸我子の才智を圖り見んと尋ける幸村少も疑はず答へけるは柴田瀧川佐々抔の面々は勇は勇なりと

寺に旅宿せられしに明智光秀丹州龜山より京都へ亂入し本能寺へ押かけ主君信長を弑殺に及びしは實に天正十年六月二日なり嗟明智が逆謀天人共に免す所に非ざれば不日に誅を蒙る事應報の速やかなる懼る可きかな

明智光秀德川饗應の司命ぜられしより君を怨みて遂に本能寺にて弑逆の罪を醸す一件は太閤記等に委しければ爰に略しぬ

眞田昌幸幸村が才智を試むる事幷眞田勢沼田城へ發向の事

明智日向守光秀は聊かの意趣よりして重恩の主君を討奉つり剩さへ禁庭へ押逼て將軍の號を乞請惟任將軍の高位に昇り京都の町人共を我手に靡かせ威勢漸やく振ひしかば大和河内攝津丹波近江の隣國より馳集る大小名京都に充滿て夥多しくぞ見えにける斯て信州上田には眞田安房守昌幸諸卒を撫恤民に仁慈を施こして永籠城の勞を慰さめ居たりし處に六月朔日の夜昌幸閑處を出て風と天文を見に都の方に當りて將星現はれ其光皓々として見えしに西の方より厄星來り忽然將星を覆ひ暫時して將星厄星の爲に光を失ひ其形ち全たく消失たり昌幸大に驚愕扨は京都にて大變有しか將星社正く右府信長公の身の上に有んと暫くは空を眺て居たる處へ與三郎幸村

武田家の浪人共は皆此竹由を頼みて城に籠る者五千餘人に及ける中にも勝頼恩顧の者共には初鹿野傳右衛門名和無理之助中條勘右衛門保科源右衛門赤坂才藏近藤越後守等武勇烈きに似もやらず敵兵に箭一筋だも射掛ずしてをめ〳〵と沼田の城に逃籠るは苦々しき事どもなり眞田安房守は豫て信長に沼田の城を所望致置たる事成ば此間に攻落し我物に爲んとて京都へは弟隱岐守信尹を上せ秀吉に勝軍の賀儀を調へさせ我身は夫より軍勢を率ゐて上田の城を出發し上州沼田へぞ押寄ける相隨ふ者共には望月太郎左衛門別府若狹穴山岩千代海野六郎兵衛筧金六穴山小兵衛白山藤六根津又九郎畔柳九藏荒川九郎高木貞吉を始として其勢三千五百餘人何れも勇を皷し沼田城の近邊りまで攻寄る此事城中へ聞えければ竹由新兵衛諸將に向ひ申けるは當城は先君勝頼の代よりして某し城主として數年保ち來りしに勝頼公不幸にして天目山に亡び給ひしかば直に織田家に降り本領安堵の御書を得武田兵衛尉君を當城に守立置處に眞田昌幸己が武威に矜り當城を攻落し我物にせんと計ること惡き振舞なれ然るに早近き川邊まで攻寄たるよしなれば今は勇々敷大事なり率や此方より打出て眞田勢を挫ぎ彼が父子の首を取其上上田の城に押寄攻落して我物にせんは如何にと然も傍若無人に申ければ中條勘左衛門保三貫殿の言るゝ處道理には似たれども是甚だ然らざるなり抑々當然に武田兵衛尉信宗を守立ると云も此人は素鷲尾源吾が二男にして孫六入道逍遙軒の內室の弟なりしを信玄公の計ひとして武田の苗字を賜りしに

雖も是血氣の勇にして取に足ず何條光秀を得討取事の叶はんや秀吉は今中國にて合戰最中なりと雖も信長公變死と聞かば直樣奇謀を運し京都に攻上り光秀を討ん事明らかなり其故は彼れ先達て當城を德川織田北條の大軍にて數度攻懸りしか共敗する而巳なる中を一人城中に來りて我々が望を叶んと一言を以て軍を取鎮めし才智こそ是れ他の者に勝れし證なり然れば光秀は討者は羽柴ならずして外には之れ無きと存じ候なりと語ければ昌幸大に感じ汝が奇才は既に我心に等し恐くは違まじとぞ賞たりけり果して信長弑逆に逢ひ中國にては秀吉早くも安國寺を談合清水長左衛門難波傳兵衛等に切腹させ高松の城を攻落し其後毛利家と和睦して京都に攻上り明智光秀を山崎にて一戰に打亡し京都を靜謐に治めける誠に眞田幸村いまだ十四歲の妙齡なりと雖も斯く迄前見の立ちし事末頼母敷穎才とこそ知られたれ

秀吉中國を引拂ひ山崎にて明智と合戰せし顚末は本書の關する所に非ざれば太閤記に讓りて爰に略しぬ

爰に沼田の城は眞田昌幸勝頼を勸て德川北條を防ぎ支障る爲心を籠て築きたる一城なり此城には長坂が計ひとして竹由新兵衛保三を籠置ける竹由は元來奸曲の者にして阿諛諂諛ふ小人なれ共長坂釣閑に取入遂に段々立身して沼田の城主とは成にけり然るに勝頼天目山にて亡給ひける時も主君を助んとはせずして敵の旗の手も見ざる内に急ぎ織田の手に降參し身を遁ける程に

を作りて馳せ向ひ先眞田が勢を見に三千餘りと見えければ皆控へけるを武田信宗陣頭に顯れ如何に此處へ來られしは眞田安房守昌幸成ずや如何成ば臣下の身として君を討んとは爲し給ふぞ假令武田家滅亡すと雖も當城には某し在るなり無道の振舞其まゝには捨置がたし心を納め君臣の禮を思ひて降參せば永く領分を保べし爰聞入ず刃向ふとならば天誅立どころに加はる可し如何〳〵と呼はりければ眞田勢は沼田方の討て出しを得たりと悦び信宗の廣言を憤ほりッヽ昌幸陣頭に出て珍らしや信宗偖汝は如何成ば此眞田を臣下と言ひ給ふや抑々汝は鷲尾源吾が二男にして武田の氏族成ず然るを信玄公深く憐み給ひ連枝の中へ結こみ武田の姓を免し名乘せ給ひしかば皆御家門と稱し尊敬するも皆信玄公の大恩成ずや然るに勝頼公天目山にて討死の時だにも是を救はず逃去りて早く敵に降り當城に潜まりし事未練至極の振舞なり斯る卑怯の事有を恥かしとも思はず今又顯れ出て主君呼はりを爲す事其意得がたし此まゝ討死せば冥途にて信玄勝頼の兩公に何の面目ありて對面せんや逆賊疾く退と大に怒り罵詈ければ信宗一言も無馬を返して陣中へ逃込ければ眞田勢スハや進めと根津又九郎充任眞先に三尺五寸の大太刀を翳し沼田勢の直中へ割て入り忽ち騎馬武者三騎に手を負せ猶勇を振て働くにぞ續て望月太郎左衞門別府若狹海野六郎兵衞筧金六増田荒次郎松木庄兵衞根津甚兵衞宍山小兵衞畔柳九藏荒川九郎我も〳〵と進みければ沼田勢は只一捲に切立られ西東へと敗する中に初鹿野傳右衞門只一騎跡に留り味方

因り諸將も皆御家門と稱し奉つる譯なれど元別姓の人なり夫は兎も角も彼の眞田は織田德川北條三家の大軍にて攻立てさへ少しも屈せず防戰したる程の名將なるを輕々敷討取んと抔とは誠に思慮なき事なれば先眞田方へ使者を送り城中の者決して罪無の由を告て和睦を爲し潔ぎよく當城を明渡し立退こそ穩當ならん夫共彌〱籠城し渠と戰はんとならば我々は三族を誅せられん事必定なりと申げれば竹由保三大いに怒り汝那なれば無用の舌を振ひて諸軍の心を迷はすぞ勝賴亡てより身を屈る所なく當城に逃來りて此竹由に養育はれ助命の恩を受乍ら斯る譫言を吐くこそ奇怪なれ誰か有勘左衛門が首を刎よと呼はれば初鹿野傳右衛門大に制し未軍をも出さぬ先に味方の大將を切殺さん事は誠に門出の不吉なり暫時は命を助けられよと申ければ竹由然らば初鹿野の申すに任せ此場は命を助け置なれどもおしつけ眞田父子を討取て歸陣の後は首を刎べきぞ夫迄命を預け置なり待て居よと然も憎氣に罵り夫より軍事の評議に時間を移し其手配りをぞ致しける

眞田沼田の兵ご合戰の事幷初鹿野傳右衛門勇戰の事

然程に城中にては中條勘左衛門諫を聞ず竹由新兵衛手配を致しける武田兵衛尉を惣大將となして初鹿野傳右衛門名和無理之助保科源右衛門高坂源五郎其勢五千三百七十餘人一同に打て出關

戰ふと雖も既に危ふく見えければ高坂源吾保科源左衛門赤坂才藏近藤越後守の四將是を見て何條初鹿野を見捨んやと三百餘騎にて取て返し眞田方に割て入初鹿野を救ひ出して城の方指て迯行に遁さじ物と追懸る高坂源吾信明今は叶はじとや思ひけん取て返し討死す續いて赤阪才藏も引歸して穴山小兵衛に渡り合勢ひ込で戰ふ處に穴山が怪力に當り難く才藏遂に生捕る初鹿野は重傷に堪らず暫らく軍勢に混りて落行しが軈て心を取り直し斯ばかりの傷に引退ぞくは殘念なりと又々勇威を顯して眞田が旗本に切て入父子の首を取んと喚き叫んで働きける穴山岩千代是を見て最前より武勇衆に超えし初鹿野傳右衛門本陣を目懸て切入るこそ主君を窺がふ曲者なり乞々討取て手柄にせんと五人張の强弓に鷲の羽の大蟇股の矢をはげ杉を小楯に引しぼり狙ひを定めてヘウと放つに初鹿野の運や强かりけん前に立たる赤松次郎が喉をグサと貫ぬきしに次郎は堪らず馬よりダウと轉げ落てぞ死したりけり初鹿野は是に驚き戰ふては退き退きては戰ひ七八度揉合ける中近藤越後守保科源左衛門も討れぬと聞き今は是迄なりと遂に傳右衛門は一方を切拔け何處共無落行けり

初鹿野傳右衛門は沼田の合戰に打負何處ともなく落行て暫時は山林に身を隱し居たりしが後年に至り德川源君に仕へしに源君初鹿野が武勇を愛し厚く召仕ひ玉ふとぞ聞えける

扨も沼田の方にては賴み切たる初鹿野傳右衛門は落失高坂源吾後藤越後守保科源左衛門は討死

を制し汝等大敵を見て恐れず小敵を見て侮らずと云ふ事忘れしか斯ばかりの敵に後を見せるとは何事ぞ目釘の損せん限りは思ふ存ぶんに戰ひて討死をせよ我に續けと呼はり〳〵眞田が勢を七八騎まで切て落し勇を勵まし馳來れば眞田勢是を見て音に聞えし初鹿野傳右衛門我討取んと爭ふ中にも畔柳九藏槍を奮て突て懸る初鹿野心得たりと太刀を眞甲に翳し切て懸れば畔柳槍を捻りて受流し直ちに突懸れば初鹿野手早く太刀にて拂ひ槍の鋒先を打折たり折れて九藏は南無三寶と太刀に手を掛け拔んとするを初鹿野得たりと大喝一聲眞甲より拜打に切付け兜の八幡座をしたゝかに打破りしかば九藏は忽ち血を吐て馬より落るを初鹿野又も切付る是を見て荒川九郎穴山小兵衛白山藤六三人助來りて戰ひ此隙に畔柳は漸々後陣に退きけるが此手疵重くして翌朝終に果けるとかや斯て白山穴山荒川増田等は猶も初鹿野を取卷戰へ共初鹿野は聞ゆる勇將なれば少しも屈せず兩人を左右に引受け請つ流しつ戰ひける有樣は實に大勇とこそ見えにけれ

第八　武田兵衛尉落馬の事幷中條勘左衛門大言の事

然る程に沼田勢は一旦眞田方に切立られ敗走に及んとする處に初鹿野傳右衛門一人踏留り勇を振ふて戰ひ畔柳九藏を始八騎まで切て落しける程に荒川九郎穴山小兵衛白山藤六等又來りて初鹿野を中に取込討洩さじと爭ひ戰ひしかば初鹿野は猶も疲まず武勇を顯し奮進突擊力を盡して

牢にまで爲られしが今城中には才智の者も見えざれば願くは右の中條勘左衞門を呼出して彼に能計らはせ給へと申ければ竹由元來無智短才の者なれば無理之助が云に任せ中條を呼出し自ら繩を解敬ひて申けるは某し才智に乏しく誤つて足下の諫を用ひず軍を出して多くの味方を失なひ殊に勇將初鹿野傳右衞門は落失せ其上城兵は纔に千二百餘人となり且又主將武田信宗は落馬の爲に死し高坂保科等は討れ今更如何ともす可き樣なき此場合と成し事なれば希がはくは某しが不束を免て計略を敎へ給へと有しに中條勘左衞門打笑ひ遠き慮ばかり無時は必ず近き患あり先達て我云し事を用ひずして我を捕へ獄舍へ入置今更難儀と成て又我等に謀事を問ひ給ふとも何として謀計の立つ可きや竹由心中には怒と雖も今の難には替難しと無念を忍堪て如何に中條殿腹立は道理なれ共一體先日殺さんとまで爲したりしも人の止むるとは言へ今日迄獄舍に置しは全く殺すに忍ざるに依てなり然らば然程に某しを恨み給ふ事も有まじ又武田家滅亡の時より其許にも某しを頻りに賴みし故止事を得ず今日迄養ひ置ぬされば全く恩なしとも言れまじ人として恩を知ずんば畜生にも劣るとかや貴殿斯る恩有をも忘れて今某しに仇を成給ふか中條目を瞋し已能も某しを愚哢するぞ先達て危きを察して謀略を陳るに却て某しを討んとし諸將の止るに依て已たりしが當時汝何と謂ひしや暫く首を預ると云て獄には繫ぎしならずや然るに今靦然しく謀略を敎へよ抔とは武士道に似もやらぬ事ならずや又某しを養ひし恩ありとは何事ぞ某し

し赤坂才藏は生捕れける程に惣敗軍と成て右往左往に落ける中にも武田兵衛尉は名和無理之助一人從者七八騎を召連沼田城に引取りけるを眞田勢急に追來りければ信宗は生たる心地もなく戰ひ怖れて幾度か馬より落んとしけるを名和無理之助大に怒り是は如何成御事ぞや是程の敵に恐れ玉ふ程ならば何ぞ此度の惣大將には立給ひしぞ斯くまでの大敗を引出せしも餘りに眞田を輕めしに由てなり其憶病と謀略なき故此形狀に爲られし事口惜くは思さぬかと信宗が乘たる馬の尻を鞭にて叩きければ馬は驚き跳上るに信宗叫とばかりに鞍に堪らず落けるが如何はしけん血を吐て其まゝ息は絶たりけり淺猿しと言ふも餘りあるかな然れば名和無理之助も大に驚きけれど爲べき樣なく其まゝ引立て味方に誘れ漸々にして沼田の城中にぞ迯入ける偖も城兵は始め五千三百七十餘人と聞えしが大いに討れて今は漸々城中に歸る者三百有餘人とぞ是に引かへ眞田の勢は大いに勇み武田信宗は落馬にて死し高坂源吾保科源左衛門赤坂次郎近藤越後守高木貞吉の五人を始め許多の敵兵を討取且又穴山小兵衛が赤坂才藏を生捕ければ皆々悅び此體成ば頓て沼田を攻落さん事何の仔細か有んと各々勝閧を作り野陣を張て其夜は休息致しける然程に城中には今日の軍に利を失ひ多くの大將を討れ漸々城内には千二百人には過ざる軍兵と成りしかば竹由新兵衛は大いに驚き此勢にては敵兵を防がん事思ひも寄らず如何はせんと議する所に名和無理之助申けるは此度の軍に付ては先達て中條勘左衛門が諫言を入れしも聞入なく剩さへ入

れば誰一人謀計を陳者なく茫然として只眞田が勇戰に恐るゝ而已なり其中に名和無理之助申けるは某し存ずるには兎角城門を開て眞田が臣下と成忠義を盡さんと思なり此義如何に候やと云ひ出しければ座中の諸士是を聞て所詮眞田に降參せずんば有べからず眞田方には正しく勝頼公の御二男勝千代君在ませば我々臣下と成共苦しかるまじと思ば却て忠の道にも叶ふ可しとて皆之に同じければ竹由は案に相違し暫く言葉も無りしが漸々にして申けるは成程名和殿の申さゝる處道理なれ共一旦手向爲したる上は我々俄に降參する共眞田匆々聽いれまじ夫よりも今暫らく當城に籠居るなれば其内には織田家徳川家より援兵を差送りて當城の難儀を助くる事必定ならん然らば降參して眞田に當城を明渡さん事無用たるべしと申ける無理之助打笑ひ眞田何ぞ我々を疑はんや夫に付一ツの謀略あり竹由大に悦び願はくは早く敎へ給へ無理之助安き事なり一人の首を贈らば忽ち心を寛して降參を受べし竹由誰が首を贈る可きや無理之助汝が首なりと云へば竹由大に仰天し是は何事ぞやと面色を變じて逃んとするを無理之助押止め何ぞ逃け給ふや某し名は無理之助なれ共口には決つして無理を云ず汝が首一ツにて城中千二百餘人の命助かる事なれば莫大なる隱德には非ずや然れば是無理ならず道理至極の譯合ならん是より我名を道理之助と改むべしと言ふかと思へば竹由を取て押へ夏猶寒き腰の一刀拔はなし柄も通れと刺し貫けば竹由は七轉八倒座席は忽ち血汐に染みて目も當られぬ有樣に皆人大に恐れをなし夢の如く

が當城に來りしは全く武田信宗の在せし故なり恩を知ざるは畜生にも劣るとは汝が事なり大恩ある武田家を背き小山田信茂に依賴て命を免んと降を乞當城に在事橫道とや云ん惡極人とや云ん卑怯未練の曲者なり汝如きに爭一計だも敎んやと飽迄惡口爲しけるは先日の遺恨とぞ知れける竹由は大いに怒り已如きに何ぞ謀事を聞んや聞ずとも事は欠ず候てと言樣太刀拔放して立向へば中條愈々打笑ひ汝如きの刃物にて焉んぞ此中條を仕留る事を得可んや慌てゝ自分に怪我すなと又も嘲哢る中條を物に堪へぬ竹由は只一討にと切懸る中條騷がず身を背け太刀を奪ひて立ければ竹由の近侍數十人立出で中條を縛めんとするを中條力に任せて二三人を投散し奪ひし太刀にて竹由が眉間へバッサリ切付るを得たりと引組む名和無理之助中條を取て押へ一刀に切殺しけるは天晴勇々敷見えにけり竹由は辛ふして起上り名和無理之助に向ひ其方の救に逢はずんば某し中條に討れん處誠に其方こそ命の親なりと三拜する有樣は見苦しく社見えにけれ

名和無理之助變心の事幷沼田開城の事

兩虎爭ふ時は一虎其弊に乘て兩虎を喰とかやされば中條竹由の兩人爭論に由て竹由は中條が爲に疵を蒙り既に危險見えけるを名和無理之助中條を討て竹由を助たれば竹由大に悅び中條が死骸を寸段に刻み無理之助を賞しけるが夫より座靜りて種々と防戰の評議に及びけるが中條在ざ

とぞ名乘ける是に因て遂に沼田の城を乘取り上田より勝千代君を伴ひ昌幸爰に居住す頃は天正十年七月十四日目出度沼田の城に移り上田の城は嫡子源次郎信幸に守らせけるとぞ

第九　德川源君御幣川村巡見の事幷土屋信次忠義の事

偖も眞田安房守昌幸は沼田の城を攻落し武田勝千代を伴ひ當城に移り上田の城は家嫡源次郎信幸眞田隱岐守信尹等に守らせける斯て此年も暮て翌る天正十一年二月上旬に德川源君には先年領せし甲信の領内を巡見せんとて酒井左衞門尉大久保新八郎平岩七之助榊原小平太本多平八郎等を隨へられて本城を出發せられ先信州善光寺へ參詣せらる時に本多平八郎善光寺に安置せる在昔難波堀江の津より上りし靈像を覽に供へしかば源君殊に是を尊信せられ開帳有て後世の事迄願ひ給ひぬ夫より歸國有んとて酒井忠次を召て尋ね給ひしは我聞先達て天目山にて亡びし土屋惣藏が家臣此邊に隱れ住よし汝は知ざるや忠次畏まつて則ち此所の者を呼で云々の由を尋ければ里人答て那にも土屋九郎右衞門と申者今は武士を捨て農民となり御幣川村と申す所にわびしき住居致し居候と申しければ源君聞し召不便なる哉さしも名高き九郎右衞門も今は土民と成し事嘸や殘念なる可し我本多榊原二人を召連立寄る可しと有ければ兩人制して御無用なり今こそ土民とはなり果れ共元は武田の餘類なれば如何なる野心有らんも計り難し兎角其儘に御歸

にぞ思ひける無理之助は直樣竹由が首を掻切ッと立て大音聲に申けるは如何に汝等是より當城は名和無理之助領する間是迄の如く我に從ふべし若聞入ざる者は竹由をもつて手本と爲す可し如何にや面々と呼るに誰かは是に恐れざらん皆首を低て臣下と成んと願ければ夫より無理之助は千二百餘人の臣下を從がへ主從の杯盞を取替し竹由が首を其夜眞田の陣へ送りける眞田昌幸大に悦び其儘沼田の城下に詰寄ければ名和無理之助城門を開き着込計りにて千二百人を隨へ立出る昌幸は源次郎同與三郎其外望月太郎左衛門穴山小兵衛同岩千代荒川九郎增田荒次郎白山藤六を隨がへ城中に入ければ名和無理之助本丸に請じて申けるは竹由新兵衛は無道にして君家に背き當城に於て織田家に降る條不義とは存じ候へども某し武田兵衛尉信宗に隨心候故是非なく當城に在所幸ひ貴軍の攻め來られしにつき降參を勸る事度々なりと雖も竹由聞入ず因て止事を得ず隨ひて合戰を致す處理無して敗軍し夫故又々降參を勸れ共同じく聞入ざる故遂に夜前竹由を討て降參仕つる因ては是より無二の忠義を顯し候はん間願くは一旦の罪を赦し給へと申しければ昌幸之を聞き兼々武功の譽れ高き無理之助殿能も出られたり言るゝ處一々道理に叶へり然れば是より貴殿は勝千代君に仕られよ我々とは同じ朋友と存ずるなり且又當城は某し先達て上田開城の節信長公に乞受し所なり是より勝千代君を守護して某し當城に移べしと有ければ無理之助大いに悦び然らば是より勝千代君に忠勤を盡さんと無理之助を改名して新左衛門幸繁

ひ出して其許が意を煩はしたり決て心に懸る事勿と云ど心中には悦び給ず苦笑ひして居給ける所に十一二歳の美童茶を上つりけるを源君見玉ひ信次に向ひて是は其許が男なるや信次謹んで愚息にて御座候恐れ乍ら御見知下し置れたし源君名は何と申すや平三郎と申候アヽ能悴を持たるよなと熟々と見玉ひ聽て信次に再び宣ひけるは其許には主人惣藏天目山にて討死の時倶に死す可き筈なるに其義なく農民と成りて賤しき業に露命を繋ぐは不審と思ひ居たりしが今こそ其許が誠の忠義を見出したり此平三郎と云を其許が悴といふは僞りならん是こそ土屋惣藏が遺子に非ずや家康が眼力よも違ひは有まじと有けるに信次打笑ひ仰には候へ共圣く以て拙者が悴れに相違なし討死仕つらぬ次第は某し死せば誰とて亡主の弔らひを爲者之れ無きに因り戰場を遁れ當地に閑居致し候事にて尊命の程は思ひも寄らぬ事にて候と申ければ源君否とよ然樣に陰すに及ばず土屋が悴なりとも殺すには非ざるなり我是を側近く召仕はんと思ふなり信次僞は何をか包み申さん實は尊慮の通り主人惣藏が嫡子に相違之れ無候と申ければ源君感じ給ひ扨こそ土屋が胤たる平三郎よな我今同道して歸る程に隨分心志を勵精まし後世に名を揚よと有ければ信次有難しと夫より酒など差上けるが元より賤が家の事なれば下物とては蒲公の味噌あえ位の事なかりしも源君一入興に入給ひ何に信次我も斯樣に民家に暮さん事を羨間敷思ふなり浮世に離れて嘸や心の儘ならんと打興じたまひしに信次も寛然ぎて尊命なれども古歌に「山里を浮世の外に

國有可と申ければ源君打笑ひ愚やな汝夫萬卒は得安く一將は得難し土屋九郎右衛門程の者今武門を退り民間に潜みしも是れ主の爲に守るの志ざし深ければなり仍て立寄臣下と爲し連歸らんと思ふなれば汝是を止る事勿れと是より御幣川村に立越郷人の案内に從つて土屋が庵を訪ひ給ふに軒端は朽ちて雨さへも支え兼たる賤が家に憂き世を忍び打萎れて有かひ無きの其樣に源君坐ろに感涙を催し案内を乞れければ折節九郎右衛門信次在宿にて急ぎ外の邊に走り出慇懃に尊み聽て一間へ請じけるに源君信次の武名を殊に賞美ありければ信次は主君の討死を語り出して落涙しければ源君にも御袖を沾し給ひしが稍ありて信次に向はれ偖も其許には主を失ひ嘸や無念に思ふべし然共蛟龍終に地中の物ならず風雷を得て天に昇るとかや夫忠臣は二君に仕ずと雖も是もまた時と事とに因るなり見給へ羽柴秀吉は比類なき武將なれ共元は松下嘉兵衛か草履取なり然るに織田信長の如き能き主を得ればこそ武名を四海に轟かすに至りしならずや然れば其許一旦は土屋惣藏の臣となり斯る形狀と零落すればとて今にてもあれ能主を取り日頃の忠功を顯はしなば一ヶ國や二ヶ國の切取り爲らざる事有まじ此儀篤と思案を回らされよと有けるに信次氣色を變じ是は尊命とも覺えぬ者かな大丈夫の精心假令泥を飲砂を喰とも再び主人を取可き事の候はんや富貴を貪り天下に不忠の名を取るは某しの望に之なく土民と成て暮さんこそ望む處にて候とサモ潔よく答へけるに源君大いに感じ給ひ勇士は然社有りたき事なり由なき事を言

出したり是武田勝頼が忰にて有らんと點を指れて信次拜伏し包みても甲斐なし願はくば御憐愍をたれ給へと聲を放つて歎けるにぞ源君も共に落涙せられ忠なる哉土屋義なる哉信次斯まで實ある其許の忠臣を何ぞ破て害せんや乞彦太郎とやらんに對面せんと有ければ再び源君を奥に請じ彦太郎に對面にぞ及れける

武田彦太郎自殺の事幷秤座守隨由緒の事

偖も源君には威儀を正し上座に着き酒井榊原本多平岩侍坐し土屋九郎右衛門は彦太郎に紅葉色の袖振に上下を着させ大小儼然粧ほひて直と前に進ませければ源君見給ひ彦太郎近く來れよと招き給ひ偖も父勝頼殿によく似たるかなシテ當年幾何に成り給ふや答て曰く十一歳なりと源君手を伸し脊を撫て父勝頼天目山にて生害なし孤と成て永の月日を送る事嘸やわびしく思ふらん今にも此家康四海を切鎭めなば先其方を一番に取立一ヶ國の主ともす可き間其時は適れ父の汚名を雪ぎ名を萬天に輝かされよと慰諭せられしに信次は唯有難しと涙に暮れて居たりけるが彦太郎は面を正し恐れながら是迄の如く捨置れ候こと御慈悲にて候と申ければ源君暫らくは歎息し在昔唐山の孟母三度居を替しと言ふも道理なるかな勝頼が悴なれば一國の主と爲さんと云ば悅ぶ可き筈なるに然は無して民家を望む事是幼年より民家に住馴し故なり嗟呼斯く迄賤しく

住居せよすまぬ思ひは心なりけり」とやらん承まはり候へば色かゆる松風の音淋しき住居なすども浮世の苦勞は矢張遁るゝ事叶はぬ者に候へば樂しとの事も候はずなど餘念なき譚たりに源君興じ給ひて今日は何に無き鬱散せり何れも摘草のもてなし賞翫せりと大いに悅び給ひ頓て土屋を召呼れ

雪消て世に出る土屋日の惠み　　源　君

かついろ見ゆるはなの白妙　　土　屋

野も山も春は來にけり霞にて　　酒　井

と三吟を爲し給ひ笑談數刻に及び既に時刻移りければ源君は信次に別れを告て立歸らんと爲し給ふ時土屋信次に主人平三郎は未だ幼少なる事なれば汝後見となりて一緒に來れよと有りけるを信次は首を掉り斯迄世を遁れて賤家に農業して麁飯に身を養ない春秋を送りし者の何として富貴を望み候はん此儀は赦し給はれかしと固く辭に是非もなく源君は平三郎のみを召連庵を立出門外にて馬に召されんと仕給ふ所に年の頃十一歳許りなる童子身には麁服を纏ひ柄頭解れたる墨塗鞘の脇差を帶し麥小屋の中にて源君を見て双眼に泪を浮べ居たりしを見玉ひ再び土屋か庵室に立戻り那の麥小屋の内に居るは何者に候ぞ信次那れこそは某しが誠の悴にて彥太郎と申候源君笑せ給ひ主人の後見を辭して民間に有んと言ふ事審かしと思ひしに果して汝が心中を見

な今が今とて那なれば斯る事を宣ふぞ既に御嫡子も出生の事成れば御成人を樂みに暮し給と申けるに彦太郎は只打點頭てありけるが其後信次が居ざる間を窺ひ當年廿五歳を一期として佛前に向ひ腹搔切て果られしこそ哀なれ斯とは知らず信次は立歸り此体を見て大に驚き然にても口惜しき御事哉と暫時は涕に沈みしが歸らぬ事に是非もなく野邊の送を濟せて後は遺子の一子を又も彦太郎と名付け生育し中德川源君此事を聞込れ不便とな思されしか于時元和元年此彦太郎を呼出されて心の中を尋ねられしに彦太郎は只平伏て今は某し世に望みの候はねばお慈悲には此儘にして玉はれと申すに源君も歎息しアヽ血に混はれば朱になるとは此事か是非もなし名家の子孫も田家に生長し哀さに今の一言早此上には言ふ事なしと因て武臣には取立玉はず東三十三ヶ國の秤座を免され住居を大津に與へて姓を守隨と改めさせ其後江戸京橋具足町に屋敷を賜はりしとかや

眞田安房守秀吉を論る事幷與三郎的言の事

偖も眞田安房守は京都の噂を聞しむるに秀吉信長公の葬式を取行ひ信忠公御嫡子三法師丸の仰とて柴田佐々瀧川德川の人々に耻辱を當へたる事共聞えければ昌幸次男幸村を呼で申けるは此度京都に於て羽柴秀吉逆臣明智を山崎にて討たりしより以來威を隣國に輝かし既に天下を望の

成者かなと蔑然給ふを彥太郎莞爾と笑ひ仰はさる事成ども全く然樣の事に非ず父勝賴天目山にて逆臣小山田に謀れ生害せしと雖もこの根を尋ぬれば織田信長と公との謀略なり然れば我成長せば以前恩顧の兵卒を集めて織田德川の兩家を打亡し首を父が墓に手向んと思ひ居りし處織田は明智が爲に滅亡しければ今敵と狙ふは公一人なり其仇敵たる公の祿を受ば再び父の仇を報ずる事あたはず然に依て唯此儘民家に暮し度候と申せしなりと答ければ源君を始座中の人々皆一同に落涙なして感じける源君涙を拭ひ給ひ流石は勝賴が胤程有て神妙なり成長の上は今の言葉に違ず見事此家康の首を討て父に手向られよア丶明才なるかなと寬仁大度の仰に信次其外の者皆感涙をぞ催しける斯て源君は土屋平三郎を伴ひ歸國せられ其後此平三郎を民部忠直と改めさせ武功の勇將なればとて常陸土浦の城主九萬五千石に封ぜられしとかや爰に彥太郎晴忠は當年十一歲成しに翌年より風と病を請足痛を煩ひ步行叶ず多病にして在りしが二十歲の頃ほひ信次が娘と契り男子出生有ければ信次大に悅び養育す然るに或日彥太郎土屋に向ひ申されけるは我十一歲の時家康公に對面して述置し一言あれば恩顧の臣を語ひ德川と一戰を遂んと思ふに斯く病身となりては叶まじ幸ひ上田に眞田居城して在れは武田再興の事は氣遣無く存ずる間我は病身にて何迄露命を繫がんも殘念なれば切腹して死んと覺悟せしなり因ては此悴を何卒世に立呉よ然共德川家に仕へる事は萬々思ひ止まれと有ければ信次大に驚きコハ口惜き仰を蒙ふる者か

柴田が爲に滅亡せんとぞ申ける與三郎打笑ひ父君兄上の賢慮理に似たれ共愚子が所存と大に違へり秀吉明智を山崎に討果してよりは天下を望むの氣有と雖も強ち君を廢し上を侵さんとの心有にわらず既に信長公の舍弟信雄は先達て北畠の養子と爲られ同じく三七郎信孝は神戶藏人友成の養子と爲られければ信忠公の跡目は此兩君相續すべき樣なし仍て信忠公の息男三法師丸を以て織田の家督として立る事是我儘に非ず順道なり且又柴田瀧川等が羽柴を惜は全く林中の高木風の爲に傷む道理にて明智を安々と討たる功を嫉妬故なり是不忠とは謂ふ可からず然るに信雄信孝を家督にせんと工しは皆私欲にして臣の道に叶ざるなり斯く理非の分明なるに奸徒の申し分を秀吉少しも怒らずして歸られしより身に災ひを蒙らんと爲ければこそ其返報に　勅命を以て君の葬式を取行ひ柴田瀧川に耻辱を與へし事決して我儘とは謂はれざるなり且秀吉十分威勢を張り早天下を掌握爲したる形を見せしは諸將の心を釣らんが爲にて是計略の一ッなり又山崎にて手柄の大將幷びに巳れが郎黨まで信雄信孝より先に燒香させしは軍に心を勵す爲にて是計略の二ッなり又信雄信孝の兩人に三法師の命なりとて燒香を支へしは是政道に私し無を示す爲なり抑々三法師丸は既に織田家の棟梁成れば何ぞ君命を重んぜざらんや斯く忠義を主として良計を立るも畢竟柴田が勇氣を挫ぎ怒を起させ所詮軍を起せて打亡さん爲なり大軍を指揮するには是程の心なくては叶ふ可からず誠に恐る可きは秀吉なりと辯舌流るゝ如く說しかば昌幸是

萌有ける故柴田佐々瀧川等評定の席にて羽柴を呼寄一言半句の誤り有ば害せんとて佐久間玄蕃盛政と云力者を歸して秀吉を討と謀りしも秀吉は彼の恩義と云ふ二字を守りて勝家が無禮を憤ほりもせず望みに任て長濱の城を勝家に與へ首尾能歸舘せり是等の大才誠に秀吉は頓て天下を掌握するの人と見えたり然程成秀吉が此度信長の追福として葬式を執行ひ勅命を以て織田の家門幷に諸臣を國々より招き寄せ己が勇威にて柴田を挫がん爲勅命なりとて日岡嶺より御家門家臣等の差別無く從者を退け持鎗持弓より外入るゝ事を許さずと觸置しに追々洛中に入り來る人々には北畠信雄神戸信孝德川源君柴田勝家瀧川一益佐々成政佐久間玄蕃丹羽五郎左衛門前田又左衛門金森五郎八梁田出羽守中川瀬兵衛高山右近池田の一統筒井順慶森武藏守等皆々上京して日岡嶺に來りしに前の次第なりければ皆々無人にて洛に入り其上信長の尊骸を大德寺へ葬り御供する面々の中にも秀吉は假官とて大納言の格式を以て輿に乘り信雄信孝等は馬上と爲す事是君臣の道を失ふと云者なり且又大切なる主君の燒香場に於て山崎にて戰功有し丹羽中川高山等には燒香を許さず其外信雄信孝勝家等は不忠なりとて是又燒香を妨げ樣々なる我意を振ふ事大將の行ひに非ず其上德川氏に迄燒香を妨げて恥辱を當ふるとは甚だ其器に非ず折角明智を討たる忠志も是が爲に水の泡と成り秀吉が滅亡も近きに有らんと昌幸眉を顰めて語りければ源次郎信幸大に驚き父君の御骨髓に徹し候思ふに秀吉が行跡眞に以て大將の器に非ず恐らくは

て穴山小助安治と稱し父小兵衛一家中を招き悴が元服の賀を祝ひしに小助是まで數度の合戰に軍功多き事なれば新左衛門も其席に來り且幸村と同年なるに因つて上田よりは眞田隱岐守信尹望月太郎左衛門増田荒五郎畔柳兵七筧金六等も沼田に來りける爰に眞田隱岐守の家臣に近藤善五兵衛と云ふ者一人の娘を持て有りしに此娘頗ぶる美婦にして其譽れ隣國に隱れ無く今年は丁度二八の春のまだ咲揃はぬ花の香りの馥郁と婀娜たる粧ほひ人は知らじな我が悴こそ相應からめと父の小兵衛が親の心の切なるより或日近藤善五兵衛を招き呼びさても貴殿の御息女は隱れなき賢娘にて在ますを不肖の悴に斯と申すは近ごろ以て赤面の至りに候へども願はくば妻に申受け某しは隱居して老を養ひたしと存ずる間苦しからずば賢娘を某に給はりたしと申しければ善五兵衛も兼て穴山小助が軍功を聞居る事なれば大いに悦び是は〳〵辱けなき仕合某し兼て能聟をがなと思ひ居りし處へ幸ひなる哉器量拔群にして世に知るゝ處の小助どのが如き好聟を得んとする事常々の願ひ是に過たる事あらじ御言葉に甘へ不束成る娘なれども御所望に任せて進上仕まつらんと申しければ小兵衛大いに悦び互に約束を堅めて祝賀の吉日をぞ撰びける斯て在りし内沼田殿の修繕終りけるに昌幸何成る所存成るや沼田城は源次郎信幸に與へ家臣根津新兵衛別府久左衛門を差添へ置き其身は與三郎幸村と倶に又上田にぞ移りける時に信幸徳川の勇臣本多平八郎忠勝が娘を水野隼人の媒妁にて配偶に立て沼田に於て婚禮の式取行ひければ安房守

を熟々聞き實は兄弟の才智を試さん爲斯く言ひ聞せしに汝が申す所此昌幸が心中に符合せりと大に感ける斯て座に居合せし人々退きければ幸村又申やう某し其節申さんとは存れ共事に紛延引せしが先達て沼田の城を開し節名和無理之助今迄養育し竹由新兵衛を討て降參致せし由なるが斯樣の者は又背き易き者に候得ば早く誅し給ふ可と申けるに源次郎信幸是は弟が申條相違せり渠は元來竹由が臣に非ず元武田の臣なり故ありて暫く竹由に身を寄居る內竹由變心するに因て止事を得ず討て降參せり殊更今は勝千代君の臣と相成り居る事なれば何條渠に逆意有んや殊に沼田の城落去の後父君移り給ひて再び又當城に來り給ふと雖も沼田城いまだ普請成就せざるに事を早まるは得策に非ざるなり賞は速かに罰は遲く爲よとかや能々心して然る可しと述べしかば安房守いか樣信幸が申す如く新左衛門降參して未だ月日も立ざる事なればまづ捨置くこそ宜からめ誅する事は何時にても易き事なりと有しに幸村も是非なく口を閉て退きしが是ぞ災厄の種となりしとは後にぞ思ひ知れける

眞田信幸本多の娘を娶る事幷名和新左衛門惡心の事

名和無理之助は既に沼田の城主竹由を討て眞田の臣下と成り名を新左衛門と改め其まゝ城を守り居て城中の大破を修繕して在りし折柄穴山小兵衛が嫡子岩千代沼田に於て元服を加へ改名し

に之を聞けば先頃申し掛し妻女の噂をして取々に笑ひ合ふ聲の頻りなりしかば新左衛門クワッと怒り扨は善五兵衛某が後妻所望の一件を家内に漏して我を嘲哢か悴甚七郎が手前と云殘念なる事哉と切齒を爲して歸りける又翌日悴甚七郎登城して歸り道に何心なく近藤が表を通りしに近藤が下部八助と云る者甚七郎が後ろ姿に指差して那れ社新左衛門殿の子息甚七郎殿なりわの樣なる立派な悴を持乍ら旦那の息女を後妻に望むとは扨々抱腹の至りなり子息の嫁にこそ乞可き筈ならん抔と口さが無く笑ける聲甚七郎が耳に入りければ甚七郎は不思議なる事を申者かなど審しくは思ども夢にも知らぬ事なれば其儘我宿に歸り父に向ひて今日近藤が宅の前を通りしに下人共が斯樣々々に笑ひ申せしは何故にて候やと尋問ければ新左衛門心の中には怒ると雖も流石夫とも言難く夫は汝が聞違成可し然せる事の有可やと云紛らせしが心中には彌々憤ほりを催しけるとかや

第十一　近藤善五兵衛横死の事幷黑瀨忠助忠死の事

己が恥辱を匿さんとして却て大なる惡謀を爲し終に身を破る者其數を知ず名和新右衛門幸繁は年にも恥ず戀慕の餘り近藤が娘を後妻に所望せしに望みの叶はぬ而已ならず却て赤恥を與へられしを意恨に含み折柄近藤が家内の噂を立聞き猛火の如く怒を發し左や右と心を苦しめ居たる

も大いに安心をぞ爲しにける爰にまた沼田の城付名和新左衛門は隨分と忠勤を抽んで在しかば信幸が心に適ひ段々立身し城中の者今は肩を幷ぶる者も無き程の威權となりしに或時新左衛門善五兵衛に向ひ凡そ人の妻と申す者は譬ば家の梁にして無ては成らぬ物ぞかし某し今年四十五歳に相成れ共一旦持し妻は倅甚七郎を産落せし時産の爲死沒夫より倅を繼母に掛るが不便さと今迄無妻にて暮しけるが倅も早廿五歳と成ば今は心に懸る事もなく就ては何卒貴君の御息女を拙者には給らずやと申ければ善五兵衛思ひ掛なき問ひ尋ねに一度は愕き二度は呆れ三度目は開いた口の閉がらざる事凡そ半日許りにして偖答へけるは是は思ひも寄ぬ仰を承まはる者かな賢息甚七郎殿こそ早廿五歳にも成せ給へば然る可き妻をもと御尋ね有る可き處に然はなくて貴殿御自分の妻を御懇望せらるゝとは餘りと申せば如何なり其は兎も角も愚娘事は先達て穴山小助に約束致し置たれば最早何れへ那樣にも爲し難し然樣に御心得下されよと味はひも無く言放しけるに元來剛氣の新左衛門大いに怒り憤ほりしが心を鎭めて何樣老功の御一言御尤もにぞ候ひけると赤面しながら別れしが新左衛門はとかくに娘を忘れかね然るにても惡き善五兵衛が一言かな日頃想ひを積む甲斐の無きのみならず老耄と侮どり我を恥かしむる事奇怪なりと心の内に燃るが如く思ひけるこそ身を亡ずの基ゐ成りけり或時新左衛門植村茂兵衛が方へ行き歸るさに近藤善五兵衛が表を通りけるに家內にて頻りに新左衛門が噂して有りしを新左衛門立留りて竊か

すの種なり靜まれヱと叱りしに次郎助も大いに怒り曩日まで武田家の物頭とも仰れし身を以て今は如何成は同輩たる眞田に隨ひ近藤を然程に恐れ玉ふぞ云甲斐なき御事かなと立上るを新左衛門懇諭の慊し壁に耳岩の物言ふ世の中と譬もあれば此事若し他に漏れては日頃の恨み晴すこと能はず却て身の災難を請可き間必ず他言爲事勿れと制し止むるに次郎助彌々怒り然程に口惜き御心とは遺憾し何は免まれ捨置き難しと甚七郎諸倶父に向ひて近藤を討ん事を逼りけるに新左衛門兩人が心底を得と考へ汝等兩人斯くまでに思ひ込みし事なれば我に代りて近藤善五兵衛を討果して我が恨みを晴し吳よと申しければ次郎助大いに悅び乞善五兵衛を討んと謀りけるが此事他に漏なん事を恐れ暗討に爲んか如何爲哉と案じける時に新左衛門工夫を運し其夜俄に用事有り迚近藤を招きけるに元來正直なる近藤斯巧み有んとは夢にも知ず定めて公用の內談成んと承知の由を申送りける故新左衛門は種々の珍味珍肴を調へ置またく次郎助を遣し申送りけるは今宵御來臨を願ふ段御苦勞の事に存じ拙者方より參上致す可き所今日不快にて何分餘儀なく御老體を煩はし候儀扨々不禮の至御高免下され度と然も叮嚀に申送りければ善五兵衛は新左衛門が實義を感じ何心なく若黨黑瀨忠助草履取萬藏兩人を召連夕方より名和が屋敷へ赴きければ胸に一物ある新左衛門は大に悅び先奧に請じ種々と饗應ける程に善五兵衛も案に相違し思はず數盃を傾け加之ならず忠助萬藏も同く饗應に預かりて有りし中黑瀨忠助は最初より名和が

處に悴甚七郎が尋につき恨み彌々骨髓に徹し在にも在れず關所に入て獨倩々考ふるに我は元武田家浪人組の隨一にして軍功他に勝れ足輕數十人も預りし身分にて今主人と頼む眞田とは元と同輩の身なり主君滅亡なせば社眞田が臣下と成り果れども近藤如きの鼠輩に迄嘲哢らるゝ事有る可きや良々渠を討果し此意恨を晴し呉んと憤怒の餘り知ず〳〵高聲に罵詈けるを悴甚七郎障子越に立聞して思へらく何の譯かは知らね共父が立腹の體にては近藤善五兵衛は必らず父の恨み有る人と覺えたり然れども隱して我に語り玉はざる處を見れば仔細こそ有ん如何はせんと途方に暮て居たりしが若黨次郎助入り來りて囁きけるは父君の近藤を恨み給ふ其次第は斯樣〳〵の事にして昨夜近藤の表にて家内の者怪からず嘲哢り笑ひ剩さへ今日郎君の御物語りにて彌々怒を重ね玉ふ故の御腹立なりと語りけるにぞ元より血氣の甚七郎聞と等しく大いに怒り憎き近藤めが振舞かな我父を嘲哢る事言語同斷なり我れ父に代りて討果し此恨を散せんと呼はりければ新左衛門斯と聞より仰天し由なき詢言いひ放ちて面目もなし悴が耳に入れしこそ吾過ちと後悔しつゝ面を和らげ汝必ず怒る事勿れ近藤は當家の老臣にして軍功多き者成ば叨りに麁忽を爲し玉ふなと額の汗を拭ひつゝ說き諭しけるを甚七郎答へて君恥かしめらるゝ時は臣死すと承まはる何ぞ人の子として父の恥辱を捨置く可きや父の代りに某し馳參り善五兵衛を一討に仕つり鬱憤を晴さんと立上るを新左衛門大いに制して逸まるな悴我勇氣に矜りて人を侮るは身を亡

成て彼の野原を行懸しに何の間にかは名和主従先へ廻り三人拔連切て懸るに思も寄ぬ事成ば善五兵衛は新左衛門か爲に只一刀に切倒され忠助是はと拔合せ三人を前後左右に請つ流しつ戰ひけるに其中下部萬藏も醉たる儘にヒヨロ〳〵しければ忽ち甚七郎に討れける然れ共忠助は日頃嗜む武術の手練に飛鳥の如く戰ひしか共多勢に無勢敵し難く數ヶ所の疵を蒙りければ今は是までと必死に成て切立〳〵なしけるに新左衛門が頰端を切付たり次郎助大に驚き忠助が股を突所を忠助首筋を取て押へ引寄ながら肋の邊を刺貫く甚七郎後より忠助を討んと爲を忠助同く前に引又討んと爲が數ヶ所の疵に眼眩み後ざまに倒れければ甚七郎乘懸りて忠助が息道を刺んとして過つて突損じ漂ふ所を忠助却て甚七郎が咽をグサと突立しかば甚七郎の息は絕たりけり新左衛門是を見て矢庭に忠助が首を打落し我家へ立歸らんとしけるが悴といひ次郎助まで討れ我身も面体に疵を受たれば所詮此所に居る事叶はずと思ひ定め此場より出奔して後佐々内藏助方に行き終に其が臣下とぞ成にける

眞田兄弟羽柴援兵の事幷野田の城中軍議の事

斯て城中にては名和新左衛門が近藤善五兵衛を討たりとの事に上下一同大に騷動す夫より眞田源次郎は種々評議を爲し先名和新左衛門が詮議を致させ近藤善五兵衛事は橫死爲たる事成ば所

饗應心得ぬ事と始終心に油斷なく眼を配りける所に勝手の方にて甚七郎次郎助の兩人如何して討んやなどゝ囁やきけるを聞付忠助大いに驚き扨こそ一大事なりと萬藏を見れば泥醉して前後も知らず臥居るにぞ直ちに奥へ踏込み主人の樣子を窺ひしに主人は今を盛りと能の舞して在ければ是幸ひと忠助は止むる人を掻き除けてイヤ僕れも興を添へんと推參せり免したまへと言ふまゝに難なく奥へ馳入て主人に向ひ只今即刻御歸宅あれと勸めければ善五兵衛大いに怒り汝那なれば不禮にも此席へは立入しぞと云に忠助急度目配せ爲ければ善五兵衛然ば退出〳〵と既に立歸らんと爲ければ新左衛門は仕損じたり如何爲んと思ひけれども忠助が顏色常ならず四邊を視まはし指でも觸らば切殺さん有樣なるに是非なく其まゝ歸しけり偖て夜も早亥の刻を過ぎたれば甚七郎次郎助氣をいらだて斯くまで謀りし事なるに此儘止みなんは殘念なりと用意そこ〳〵に追駈出でしが道の端に三四丁程の野原有り近藤は其處まで來り忠助に仔細を尋ねしに斯樣〳〵の企てありて御身の上の危さに無禮失禮を省みる隙もなく夫ゆゑ斯くは無理に伴ひ申たりとて新左衛門が屋敷にての事を語るに善五兵衛泥醉の餘り大に笑ひ往昔唐土の曹操は珍營と倶に董卓を討損じ都を去て本國に歸る途中或家に身を隱せしに家の主人猪子を屠り饗應せんと庖厨にて立働き居たりしを曹操コハ我を殺す事ならんと家内の男女七八人を切殺し汚名を末代にまで殘したり汝も其如く聞違ひを爲し成べし何條然程怱忽を爲名和に有んやと舌も廻らぬ程に

の事多端なるに因て山崎の軍に出軍せず然れば此度の戰ひに應援せずんば秀吉に報ゆるの義を失なはんイザ加勢を差向んと沼田の眞田源次郎信幸幷に次男與三郎幸村に穴山小助別府若狹筧金六增田九郎同荒次郎畔柳兵助太田彌兵衛木辻別右衛門野呂兵部東坂式部月形兵馬眞田甚三郎を附隨從しめ秀吉が援兵として本城を發向し野田の城下に到りし所城將菅沼諸人に向ひ眞田もまた敵なり其敵を汚面〳〵と城下を通さん事何とも殘念なり我々城中より打て出で眞田勢を切崩し援兵を妨けん此事如何にと言ひければ勇臣由利鎌之助基幸進み出尤もなる君の仰かな何ぞ眞田勢を悠々と城下を通さんや某し久しく君の恩を蒙り乍ら未だ寸功をも立ざれば幸ひ此敵に向ひ眞田が首を取て日頃の恩に報いんと然も勇ましく申けるを並河玄蕃大いに制して無用なり貴殿の一言は只血氣の勇にして甚だ危し眞田與三郎は未だ若年成ども先年上田籠城の時德川織田北條の大軍を度々破りたる程の智者なれば輕々しく打出で首を得んと爲は蟷螂が斧猿猴が月に齊しからん那なる謀計あらんも知る可らず手出しゝては却て謀計に中らん只速かに城下を通し災ひを避くるには如じと流石老功の臣理を盡て諫めしは尤もにこそ聞えけれ

第十二　由利鎌之助武勇の事幷眞田勢諸將接戰の事

野田の城主菅沼新八郎定盈は援兵を支へんと諸將を集め評議しければ由利鎌之助基幸己が勇を賴

領を取上ける然るに善五兵衞が嫡子甚之助友幸當年十一歳に相成父が横死を憤はり仇を討んと謀れども今戰國の際と言殊に幼年の事成ば母姉諸倶宍山小兵衞方にて養はれ時を得て父が仇を討んと空く月日を送りける此事上田に聞えければ眞田幸村扨こそ名和新左衞門朋友を撃て背きたり是偏に我眼力に違はず渠最前沼田を明渡したる時今まで恩を受たる竹由を撃て味方に降る事逆心有る者の所行誠に容し難き物かなと一人壁を惡視て歎息せり此折京都にては羽柴秀吉北國柴田を誅せんと發向あり先陣中川瀨兵衞清秀高山右近長房は既に柴田と對陣す柴田方よりは佐久間玄蕃盛政柴田權六郎出迎へ接戰す

天正十一年四月二十日の夜羽柴秀吉賤ヶ嶽の合戰に加藤虎之助片桐助作平野權平脇坂甚内糟屋助右衞門福嶋市松加藤孫六七本鎗の功を顯し終に佐久間盛政を生捕柴田方大いに敗軍す此時柴田勝家は討死と覺悟を極めしを毛受庄助同茂右衞門大いに諫めて我身勝家と名乘討死せんとして主人を北の庄の城に落し翌二十一日毛受兄弟賤ヶ嶽にて討死せり勝家は危きを遁れ北の庄の城に引籠りける此事亦太閤記に詳らかなり

此事上田に聞えければ眞田安房守大いに驚き先達て當城織田德川北條に圍れ既に危ふく成りし所へ羽柴秀吉我等の胸中を察して和睦を勸めしかば今にても勝千代君成長あらば武田家の再興を成しむるは此羽柴なり然るに信長公逆臣明智が爲に弑せられ秀吉中國より引返せし時も當國

も軍略なき者かな我羽柴秀吉が援兵として通るを打止んと成ば菅沼自身出べきに名もなき者に此眞田を討せんとは愚なり乞や一騎に揉破れと下知する程こそあれ豫て魁けを望みし増田兄弟太田彌十郎木辻別右衛門我も〳〵と打て出鬨を作りて攻懸るに何條以て堪るべき由利が備は忽ちにして打破られ惨々に敗走す眞田勢大いに勇み此勢ひに野田の城も攻落し通らんと勇み進んで追立る然るに思ひも寄ず後よりわり菱の旗一流れ颯とさし上其勢三百餘り旗本には一人の大將黑糸縅しの鎧に桃形の冑を戴き三ッ團子の前立物を輝かして鎗を横たへ紅の母衣掛て追來る眞田勢大いに狼狽誰ぞと見れば大將近付儘に呼はりけるは是は大職冠鎌足の後胤由利次郎信基が次男鎌之助基幸と云者なり我已に一計を以て汝を欺りたり眞田は何處に在りや首を渡せと呼はるにぞ眞田勢大いに驚き取て返せば今まで敗せし鎌田が勢も同じく取て引返し勢ひ勇みて來りしかば眞田與三郎幸村既に由利を十分に破りしと思ひの外に欺られ大いに怒り例の槍を追とりつゝ鎌之助に突て掛らんとする側らより増田九郎正金長刀打振て由利に立向ふ鎌之助大喝一聲雷の如くに勢ひ立ち鎗を柄長に礑と突ば増田は早くも身を翻し長刀を奮て請流し由利も同く身を反け直樣眞田に突て掛れば増田は長刀の鐓にて之を支へ直樣突入を由利鎌之助長刀の柄を片手に摑み鎗にて増田を突けるに突損じて鬢の端を突けるにぞ何かは以て堪るべき増田は馬より轉げ落起上らんと爲所を木辻別右衛門増田荒次郎兩人太刀を翳して増田正金を庇ひ立向

んで眞田勢を破らんと云けるを老臣並河玄蕃に止められ大いに怒り氣色を變て申けるは由なき事を言ひ立て味方に弱みを起さする事奇怪なり先年眞田上田に籠城して三方の大軍を度々破りしは是三方の諸將智少きが故なり秀吉來りて辯舌を以て和睦を說しかば立どころに和睦調ひたり若此時和睦爲ざる時は眞田は城中にて餓死せん所なり然れば眞田幸村が智の深さに非ず羽柴といふ智者有に因てなり此基幸が目より見る時は黄口の小兒に均し何ぞ恐るゝに足んや見給へ鎌之助打向ひて信幸幸村の兄弟を一握りにして歸らんと大言を放ちしかば並河玄蕃嘲笑貴殿の恐に引競べて眞田を蔑視らるゝは何事ぞ鎌之助威猛高に成て某し萬一眞田に打負て歸らば此首を刎給へ決して卑怯未練は言ざるなりと誓書を認め定盈に渡しければ定盈悅び汝が武勇は豫て知る所なれば恐らく眞田を討損ずる事有まじと酒宴をなして待遇しける此時眞田は野田口に發向しけるが定めて城將菅沼打て出で我々が援兵を妨げん此所に待居て見合すべしといふ處に案の如く先手の斥候野田の城邊より立歸り由利鎌之助と云る者味方の兵を支へんとて城外に出張せりと告ければ與三郎幸村打笑ひ菅沼の臣下如きが何として此眞田の兵を支へんとは爲しけるぞ城外に出けるこそ可咲けれ乞や打破りて通るべしと三町許りを隔て對陣し向ふを見れば由利が備其勢三百騎ばかり長蛇の備立にて眞田勢に打て懸る勢ひなり幸村左右に尋ねて此所に出張するは何と言へる者ぞ答へて是こそ菅沼が臣由利鎌之助と云者なり幸村大いに打笑ひ扨

んと空嘯いて云けるゆゑ玄蕃は苦笑ひして城中にぞ歸りける

穴山小助鎌之助を生捕事幷由利基幸眞田に隨身の事

由利鎌之助基幸は今日の戰ひに早勝を得たる心地して手勢を集め酒など汲樂みて居たりけり此時眞田勢は種々評議爲ける中にも與三郎幸村は由利が猛勇なるを賞何卒味方に爲ものをと工夫を凝しけるが軈て穴山を呼て明日の戰ひには斯樣々々に致せよと一計を授け置偖翌日は未だ夜も明ざるに由利鎌之助手勢を引卒して眞田が陣に向ひ穴山とやら早く出て首を渡せと呼はれば穴山小助紺糸縅の鎧に白星の冑背には紙籏へ磔罪の姿を寫し由利鎌之助と書付たる指物を翳して立向ひ是は待兼しぞ由利氏と太刀打振て切り懸れば由利も聲かけ互に負じ劣らじと暫時接戰してけるが穴山小助僞り負て引退く鎌之助大いに怒り汝我を欺くや欺くとも何欺く事の叶はんやと又も戰ひを交へしが孰れ劣らぬ猛將成ば勝負は更に見えざる所に穴山何とか爲たりけん持たる太刀を取れしに鎌之助得たりと槍を取直し只一串と突かゝれば穴山急に一鞭當て逃行を鎌之助逃しはせじと追駈つゝ何處へ迯るや返せ々々と呼はりて思はず追行十町許りも來りし處に穴山一飛向ふへ避くれば由利も同じく續かんと急るはづみに七八人の手勢諸倶阱穽へぞ落入たり由利は驚き扨は謀計にて有りしかと切齒を爲せ共奈落の底とも覺しき程の深き穴にて有け

ふ鎌之助少しも騒ず左右に木辻別右衛門増田荒次郎を支へ猛虎の威を振ひ戰ひしかばさしもの木辻増田兩人も戰ひ倦みて見えけるが是を見て畔柳兵七野口兵部入代りて戰ひしかども是も叶はず色めくを目賀田本馬植田久左衛門青田專助引代りて力戰すれども勝事能ず幸村は鎌之助が大勇成を見て頻に味方に成んと思ひける然るに穴山小助安治他に抽で丶大太刀を稻妻の如く打振鎌之助と戰ふ事五十餘合に及びしが互ひに勇猛の者なれば少しも屈せず其日の午の刻より始まりし戰ひ既に日も西へ傾くと雖も更に勝負の見えざれば由利鎌之助聲を懸て汝と我と戰ふて勝負を決せんと思へ共見らる丶如く日も夕陽に及たれば今日は軍を收め明日早く戰ふべし然りながら望みと有ば假令夜と雖どもひきはせまじ穴山答へて然らば明朝早く戰ふべし某しは眞田安房守昌幸が譜代の臣穴山小助と云者なり見覺え居よと申ければ鎌之助手を拍ち若輩の身として健氣にも能く答へしぞ武術も天晴なる汝敵ながらも感じ入なりと云ひつ丶軍を引上ければ眞田勢も諸倶に元の所に陣をすゑ其夜は堅固に固めける由利鎌之助戰ひの樣を城內へ申送りければ新八郎定盈大いに悅び陣見舞として並河玄蕃を遣しけるに並河は由利が陣中に到り貴殿今日の戰ひに勇を振ひ給へども未だ勝負を分たず眞田は今聞ゆる謀略多き者なれば必ず輕んずる事勿れと云ひしに鎌之助眼を嗔らし其許何故に眞田を恐れ味方の勇氣を挫き給ふぞ今日の戰ひに眞田を欺りし事我才智成ずや然れば何條眞田を恐れん明日は是非とも兄弟の首を實檢に備へ候は

しく主君の祿を喰作ら其功も無上剰さへ主君の臣下百餘人を汝が一心に因て命を失なはせなば是に過たる不忠あるまじ如何にと問はれて鎌之助泪を流し我並河が諫めを聞入ずして此破を引出したれば何ぞ生存命て面目有んや願くは首を刎給へと云しに眞田與三郎幸村諸卒に下知して繩を解しむ由利彌々歎きて大丈夫奚ぞ助命を乞はんや早く殺し給へと云ひけるを眞田制して汝が降參は決して不忠には非ざるなり却て忠に成る可きなりとて百餘人の生捕を引出し幸村一人〳〵に向ひ汝等皆誅すべき者なれども由利鎌之助が降參に仍て助命致す間野田に歸り菅沼に忠義を盡せよと申ければ皆々頭を叩きて悦び野田の城へぞ歸りける由利鎌之助は其高恩に己事を得ず終に降參して眞田が無二の臣とぞ成にけり

第十三　眞田北之庄着陣の事并幸村明智地雷火を知る事

偖も眞田源次郎信幸同與三郎幸村の兩將は野田の一戰に由利鎌之助を生捕利害を說て我が臣下となし夫より賤が嶽へ急ぎ趣りしに早合戰終り秀吉北之庄へ發向せし由なれば信幸兄弟合戰に遭ざる事を殘念に思ひ跡を追ふて秀吉の陣に赴きけるに秀吉大いに悦び早速兄弟に對面ありければ眞田申す樣某し先達て山崎合戰の節御加勢として出軍の心得にて候處速くも明智は誅に伏したりとの事故思ひ止まり此度こそ早々馳せ參じ寸分の功を立てんと急ぎ手勢を引纏め野田ま

れば爲可き樣なく其上右の足を鞍にて打ちける故に働く事も自由ならず終に安治が爲に生捕れける斯と見るより兼て設けし眞田が伏勢一度に顯はれ百餘人程を難なく生捕りける程に其餘は皆散々に成て城中へ迯入ける城將管沼新八郎大いに驚き打て出で眞田と戰はんと云ければ並河玄番無用の軍を爲し兵を損せんより眞田を早く御通しあれ眞田を討んとして若も當城までも攻取れなば是に過たる恥辱はなしと種々諫めければ定盈今は是非なく無念を堪へて休みたりけり眞田勢は暫時城下に扣へしが城中より矢一筋も射出さねば扨こそと生捕を中に圍み白晝野田の城下を押行に城中にては切齒をなし拳を握り打て出んと犇け共並河匆々許さねば詮方無堪へて城下を通しける其日は眞田勢白澤に野陣を張追討せば防がんと用心堅固に構へ信幸幸村中陣に在て偖由利鎌之助を引出せしに鎌之助は繩を懸られ乍ら目を瞋らし牙を嚙で立出る幸村是を見て如何に鎌之助汝何程圖るとも此幸村を欺く事叶んや先年織田德川北條の大軍さへ防ぎ支へしを以て視る時は此城の如きは群る蟻の如し汝今我爲に生捕と成たれど降らば宥さん降らずば不便成共一命を取ん如何にと問ひ詰れば鎌之助大いに喚んで忠臣二君に仕へず何ぞや降參せん早く首を切と云ふにぞ幸村笑ひて汝忠臣と云は二君に仕へざるをのみ忠臣と思ふや今汝降參せずんば生捕し者共は悉皆く誅せられん又汝降參する時は殘らず助け歸さん是其方が一心に由て百餘人の命を保つと保たざるの次第に及ぶ事なれば此場に臨で孰れか忠何れか義と思ふぞ汝久

り迷惑の樣面に顯れければ秀吉何となく幸信を其まゝに置き直に與三郎幸村を招きける此折しも注進の者來り勝家は如何成事にや北の庄の城下に自ら火をかけて燒拂ひ裸城にいたしけると告しかば秀吉彌々不審を懷き勝家已が城下を燒拂ひ裸城に爲す事如何成故ならんやと疑ひの念晴れざる處へ眞田幸村參上と云ふまゝに秀吉直に陣中へ請じて申されけるは先刻信幸殿來られ敵に地雷火の謀計有よし語られしが此事恐らくは其許が見顯はせし事と推察せしに因て招きしなり願はくは具に語り聞されよと有ければ幸村打笑ひ足下大衆の主將と成り給ひしに斯程の事を知玉はずや某し昨日の夕かた入日の光を察るに地より陽氣の立昇るを見て地中に地雷火の伏ある事を知る今眼前に此事を知り玉んとならば是れ見玉へと焔硝を取寄せ地に落せば忽ち煙と成て失にけり秀吉舌を卷き身を縮め敵の斯る謀計を爲に於ては如何して此災ひを避んやと怖れしかば幸村然程に怖れ玉ふに及ばず夫には斯々の工風ありと耳に口寄何やらん囁き軈て陣所〳〵には生捕の者ばかりを入置き味方の者は密に一里許り引退かせ雜兵に命じて彼陣所〳〵に人有體に篝を焚せ退かせける斯て夜に入り柴田勢は斥候を出して窺はしむるに秀吉が陣は地雷火の上に据有りしとの事に偖こそと時刻の來るを待ち居しが時分はよしと火口を切ればアラ恐ろしや耳も割裂く計りなる百千の雷は宙に轟ろき四邊は砂石梨地の如く見る〳〵陣營は焔となつて燃揚りしかば哀れや生捕の者共五百餘人は黑焦となりて死せし事寔に八大地獄も斯やらんと目

で來りし處城將菅沼新八郎定盈討て出しに是非なく取合延着に及び承はれば早御引揚との事に付分疏の爲是へ參向せり此上勝家退治の先鋒は某し兄弟にて必らず功を奏せんと存じ候間此儀然る可く御聞取り給はる可しと述べければ秀吉大いに感じ遠路を厭はず出軍せられし段近ごろ以て忝けなしシテ武田勝千代君にも御堅固なるやと互の會釋も事了りて夫より秀吉眞田兄弟に戰ひは明日なれば先暫らくは休息せられよとて陣所の指揮有りしに其陣所は塗杭を立て澁紙にて上を覆ひし假陣なれども眞田勢は遠路の草臥に率や休息せんと入り込み兵粮など傳へ居たりしに幸村我陣に入て夕陽の照すに眼を配り不審をなして申けるは夕陽の光地より立昇り陽氣と混合に成るは正しく地中に陽氣を包含し事紛れなしア丶恐ろしき勝家が謀略かなと掌ころを拍て歎じける斯と聞より源次郎も大いに驚き偖は敵地雷火を設けしならん如何せんと申しけるに與三郎敵の謀計に就て味方に謀畧を立なば何ぞ怕るゝに足んや然れ共此由早く秀吉公へ言上あれと勸めしかば信幸取物も取敢ず秀吉公の前に到り某し陣中に在て考ふるに勝家は正しく地雷火を埋めしと覺え候なり此謀計は孔明周瑜が魏の大軍を赤壁にて鏖殺しにせし手段に能く似たり實に恐ろしき謀畧にて候能々御用心あれと申けるに秀吉は少しも騷がず柴田勝家何條然程の深計あらんや然れども軍慮に鋭敏き眞田殿の申さるゝ處何か夫には見認し事の候耶と問ひ詰められて信幸は元來幸村より知りし事を我考がへの樣に云放ちたる跡なれば解明す事に口訥

けり然るに谷主計松尾三七郎鈴木又兵衛の三人は大いに怒り猿面の匹夫名を偸み國を押領しながら大言を吐と雖も勇夫たる者惡んぞ汝に從はんや廉者は渴しても盜泉の水は吞ざるなりと云返しければ秀吉ソレ討取と有りしに加藤清正福嶋正則片桐且元瞬く間に谷主計を切放し續いて掛る若武者鈴木又兵衛大太刀を水車の如く廻して片桐に渡り合片桐得たりと戰ひながら馬を返して引退ぞけば又兵衛大いに怒を發し返せ〳〵と追懸行機を考へ片桐背へ振歸り曳やと拂ふ太刀先に又兵衛頰骨を切付られ漂ふ所を疊掛何なく又兵衛を切落し首搔切てぞ立たりけり此方には松尾三七郎福嶋と最前より戰ひしが是も同じく討れてけり是に因て柴田方は這々に城中へ引退き羽柴方は勝矜つて夫より北の庄の城を十重廿重に取圍む斯て秀吉は其翌朝城内へ使者を送り勝家に降參ある可き樣申入るゝと雖も勝家は流石武勇の大將なれば降參の事は耳にも聞入れず今は切腹せんと覺悟を極め偖使者に向ひ某し事降參の儀は天地所を變ずと雖どもやはか肯ふ事非ざれども妻は是主家信長公の御養女なれば願くは我死せし後妻子眷屬の扶助は請ふ所なりと申しければ使者は立歸り秀吉に斯と反命せしに秀吉此事を聞玉ひ勝家が勇氣を感じ筒井順慶を以て承知の趣きを申送りけるとなり

因に曰く勝家の妻は先年信長公御在世の時遠山勘太郎が娘を養女とせられ淺井長政に送られし處長政軍に打負しかば信長此妻女を取返し更めて勝家へ送られ小谷の方と申されしは即

も當られぬ有樣なり北の庄よりは是を見て驚破羽柴勢を仕留しぞ討て出て逃る大將あらば討取ど勇み進んで五千餘人火の手を目當に馳向ふに陣々には死殘りし者共喚き叫びて有りけるを柴田勢味方の者とは夢にも知らず心地よや秀吉も那の中に燒死しならんなど呟きて悅び居たる後より鬨の聲諸共に眞田源次郎同與三郎堀久太郎筒井順慶梁田出羽守等我も〳〵と討て出しに柴田勢は思ひも寄ぬ事なれば一支へもせず城を指てぞ逃げ込みける

柴田勢謀計相違の事幷修理進勝家滅亡の事

秀吉は幸村が計ひに因て危難を遁るゝのみならず柴田勢を散々に打挫め大いに勇み居たりけり柴田方にては工み有て城下を燒拂ひ置きしに味方敗北して城に歸らんとする時燒殘りの家に火起り道を遮ぎられ城に入事能はず城兵谷主計松尾三七郎鈴木又兵衞等驚き是を見れば中央に緋縅の鎧に鍬形打たる冑を着し金の采配を把て羽柴筑前守秀吉千顆瓢簞の馬印を押立て五色の吹拔指物を翳し左右には加藤虎之助福嶋市松脇坂甚内平野權平片桐助作糟谷助右衞門加藤孫六石田佐吉大谷慶松等を從へ敗兵を追ひ來りて秀吉城兵に向ひ勝家汝地雷火を用ひ秀吉を欺き擊んと爲れども秀吉爭で斯る事有を知らざらんや汝今降參せば宥さん降らずんば一人も遁す事無誅せんと然も寛然たる有樣にて呼立ければ柴田方の者共只夢の如くに恍として降を乞ふ者多かり

第十四　幸村即智筏工夫の事并淺香鄕右衛門生捕るゝ事

佐々内藏介成政は羽柴が討手を引受潔能一戰して家の存亡を定めんとて佐々彌三郎種村增田武十郎富森兵部等に命じ神邊川の要害を守らせ其勢一萬餘人にて羽柴が兵と對陣させしに羽柴が先鋒百五十餘人溺れ死しければ秀吉再び筏を組て押出させしに早瀨の川なれば逆卷水に誘れて筏は向ふの岸に着ず漂ふのみなれば中々人馬を乘り入るゝ事能はず秀吉爲方盡て見えける處に此時眞田與三郎幸村篤と川を窺ひ見るに向ふの岸高くして巖石多き故筏岸へ着ざる事を思ひ急に思慮を運らし筏の兩端を藁繩にて嚴しく卷きつけ試みとして雜兵を二三人乘せ渡しけるに幸村が思慮に違はず難なく彼の岸に着たりけり幸村は是を見て扨は好ぞと眞先には眞田與三郎幸村續いて鎌之助穴山小助增田九郎同荒次郎畔柳兵七郎木辻別右衛門根津新兵衛野呂兵部等閑を作て之に乘り込み渡りければ羽柴下知して眞田勢渡しぞ續けと云に金森梁田丹羽筒井三好等我も〳〵と討て懸り勇を振ひ戰へば要害を賴みし佐々が軍勢一支へも成ずして敗走し大聖寺指て引退く羽柴が諸將是を見て分捕高名此時なりと勢ひ勇みて追行ける此時佐々彌三郎踏止まり者共潔よく討死して名を殘せ後を見せて笑はれなと少しも痿まず下知しければ是に勵まされ增尾武十郎富森兵部等三百餘人一度に返して接戰す是を見て眞田に從ひ來れる鎌之助是こそ名ある

ち此婦人なり

斯て勝家は城中にて切腹なし小谷の方も續いて自害せられ北の庄も遂に秀吉が爲に乘取れければ今は誰か秀吉を恐れざらんや我も〳〵と降參を乞ける中に佐々內藏介成政は豫て柴田に與し加州大聖寺の城に楯籠り居ければ秀吉此序に攻落さんと直さま加州へ發向す佐々は此由を聞き秀吉向はゞ此方にも其用意を爲べしと先加州第一の難所たる神邊川に柵みを結岸には屈强の者を撰みて固めさせ敵を今やと待掛たり抑々此神邊川は急流にして水色藍より青く川岸の岩石は峨々として劒の如く一人是に立向へば千騎も足を容る〻事能はず要害言ん方なき此處へ佐々彌三郎種村增尾武十郎宮森兵部等豫て聞ゆる武勇の者共其勢一萬三千餘人にて兜の星鎧の袖を日に輝かし鎗長刀を薄の穗の如く建列ね旗指物は春野に敷し草花の如く然も凄然く控へたり斯りける處へ羽柴秀吉柴田を討て其勢ひ破竹の如く數萬の大軍を引卒して目先まばゆく此川岸に打臨み敵兵の群り居るを見やりつ〻何條是しきの川瀨に痿まんやイザ進めと下知あるに死を恐れざる土岐又次郎樋口藏人其勢百五十餘人にて馬銜を揃へ渦卷く深瀨へ跳り込めば何かは以て堪るべき百五十餘人の者共皆一同に押流され一人も殘らず溺れしこそ不覺なりける事どもなれ斯と見て秀吉は急に邊近き在家を毀ち多〻の筏を造らせ再び川を渡らんと其用意をぞなしにける

是を見て天晴無双の者哉乞此者を手に入ばやと自身鎗を把て味方を離れ馳向ふ郷右衛門乾と見て幸村が幼顔なるを打笑ひ優美くも來る者哉佐々が臣淺香郷右衛門なるぞ乳臭き汝某しを何と思ひ違へしや雀の鳳を狙ふに似たり大人氣なく我何ぞ手を下さんや早く退き助かれよ汝を討て何かせんと口惡しく嘲哢せるを幸村聞て少も怒らず猶も打て掛るに淺香今はせひなく此世の暇取せんと彼の棒を振て拜み打に打ければ與三郎身を背けて是を避け此方を打ば那邊へ閃り那邊を拂へば潜脱け馬上の達人幸村が虚々實々の働きにさしもの郷右衛門大いに呆れ始めて驚くばかりなり

佐々内藏介逆意の事并妙見嶺合戰の事

淺香郷右衛門は眞田與三郎とは夢にも知ず幼年者と侮りて程よく挨待居たりしが斯ても武術の手練なるに大に驚き今は手緩くは爲し難しと心中怒りを起し是程の若武者何程の事あらん只一撃に打殺して勇を見せんと馬より飛下歩行武者と成て眞田が馬の諸足薙ければ馬は堪らず倒れしに幸村秘術を盡せども己に危ふく見えける處へ穴山小助飛鳥の如く駈來り淺香を目懸突て懸る郷右衛門大いに怒り小怜悧き汝等と猶も勇を皷して幸村安治を左右に引受戰へば郷右衛門も大いに勞れ持たる棒を取落して太刀にて受んとする處を幸村安治馬より飛下無手と計りに組付

者成ん乞や首にして我手始めの手柄に爲と鎗を拈つて突て懸る增尾武十郎礑と睨み某しは增尾權頭兼房の後胤伊勢守兼繼八代の子孫增尾武十郎兼家と云者なり幼年より諸方の合戰にて屢々勇名を顯せし某しに匹夫の身として打て掛る段大膽なり早く退け近寄て二ツなき首を失ふなと呼はれば鎌之助大いに怒り汝等如き端武者にして長々敷家系を云は先祖の恥を顯すなり我こそは眞田方の內にて由利鎌之助基幸と云者なり鎗を試みて後廣言を吐べしと云儘に鋒頭を突付け渡り合ふ武十郎心得たりと獅々の威をなし眞向より碎かんと打入を鎌之助鎗にて受け留め互に負じ劣らじと火花を散して戰ふ內に鎌之助一聲叫んで突鎗に何かは以て堪らんや武十郎は胴を突れて馬より落んと爲しけるが勇氣の武十郎突れ乍らも鎗を摑みて引寄するに鎌之助力を極め終に馬より突落して首を取是を見て富森兵部穗先二尺の片鎌鎗を提げ基幸を目懸て來る所に穴山小助傍らより顯れ出眞田の舊臣穴山安治是にありと鎗を拈つて立向ふ富森兵部大に怒り汝何故に支ゆるや增尾が敵を討んと思ふに退ぬかと罵るを安治笑つて戰場にて何ぞ敵を撰んや味方は味方敵は敵なり何ぞ一人をのみ敵とせんやと言ひ込めしに兵部理に服して戰ふ中兵部は穴山が力に挫れ持たる鎗を卷取れ太刀に手を懸んとする所を穴山曳いと云儘一槍に刺殺す爰に淺香鄕右衛門は其力量二人に過武術拔群なる屈强の武夫にして筋鐵入し一丈の樫の棒を橫たへ敗軍の中より唯一人踏止りて近寄武者は皆棒にて打散さんず其有樣凄然くぞ見えにける與三郎幸村

の儀は別に大將を撰みて出軍させ當城は堅固に固られ然るべしと申しければ成政悦んで汝が言に非ずんば大なる害を引出さん處なりと此時末席に在りし一人の者進み出て某し久敷君恩を蒙りて未だ寸功をも報ぜず因ては此度の大將は某しに仰付られたし然わる上は必らず秀吉が大兵を打破らんと申しけるに成政驚き是を見れば武田武士にて名和無理之助今改名して名和新左衛門幸繁なり成政悦び寔に汝大將となりなば我何をか憂へん然らば三千の軍兵を宛行はん宜敷捷を奏せよと有りければ新左衛門は軈て軍旅を整へ大聖寺を立て清洲の城へと赴きける此時上田の城中には眞田安房守昌幸此由を聞て然らば秀吉に援兵せんと沼田の城主眞田伊豆守信幸同與三郎幸村弟隱岐守信尹に命じ穴山小助望月兵衛根津甚平筧金六增田次郎由利鎌之助淺香郷右衛門(今眞田に從へり)木辻別右衛門別府若狹畔柳兵七郎野呂兵部赤坂式部月形兵三小宮山數馬植田久左衛門穗入一學拓植元八等其外の勢合せて三千五百餘人を附し尾州をさして打立しむ幸村道すがらに佐々成政變心して清洲へ援兵するよしを聞き早速に謀計を運らし間道を經て何國ともなく赴きける佐々の城中にては兎角軍慮怠り漸々にして名和新左衛門三千餘人の兵を從へ清洲へ赴かんと加州妙見嶺へ懸りける處に一聲の鐵砲聞ゆる程こそあれ向ふの坂を遮る者ありて新左衛門驚き是を見れば其勢五百餘人ばら〳〵と現れ出て鐵砲を打懸〳〵待懸たり新左衛門大に怒り扨は野武士共が支ふると覺えたり一踏破りて通らんと勇に矜りし新左衛門鎗を提げ眞

を鄕右衛門心得たりと組合しが終に力弱りて組敷れ難なく兩人に生捕れける鄕右衛門生捕られて佐々方は敗軍となり力なく〳〵大聖寺へと引籠りけるに羽柴が軍勢は彌々勇氣立昇り大聖寺の城を圍み立て晝夜血戰に及びける程に内藏介終に力屈して和睦とぞ成にける斯て秀吉は柴田佐々の兩將を降し京都に歸陣ある先眞田兄弟は此度の戰爭に拔群なる軍功有ければ織田三法師丸に代り秀吉より源次郎を伊豆守と爲し武具一領金二十枚與三郎幸村には國廣の太刀一振名馬二疋を當座の褒美として與へられ國許へ歸り休息有可と有ければ眞田兄弟は面目を施し居城を指て歸國せり爰に北畠信雄は德川家を語合逆心の色を顯はす頃は天正十一年五月の事にて犬山の城には太田次郎右衛門松本傳兵衛を籠置前には木曾川の要害を取り七ヶ所に砦を築き天晴秀吉と勝敗を決せんとすれば德川源君には本多榊原酒井平岩等を引從へ小牧山に本陣を据長久手砂川に出張せらる其勢四海又も亂れんとぞ見えにける斯て大聖寺の城主佐々内藏介成政は諸將を集て評議しけるは我先達て秀吉と和睦し隨身すると雖も食する者は其器を損せず棲者は其樹を枯さず恩を蒙りて恩を知ざるは人に非ず我數年織田信長公の祿を食乍ら何ぞ逆心たる秀吉に從ひ信雄公に背んや這回信雄公の企圖を幸ひに公に援兵して秀吉を亡ぼさんと存ずるなり因て我是より當城を出發す可しと申けるに彌三郎種村實に御道理には候得ども當城を打出給へば軍略に賢き彼秀吉必らず空虛成を付込み不意に軍を掛て此城を攻落さん然れば信雄公へ援兵

汝は恩人竹由新兵衛を討て降参せし未練者なれば切も刀の穢れなれども一旦朋友の親昵有れば首を討て取せんと互の舌戰事終り既に戰はんとする所に穴山が後より如何に名和新左衛門幸繁汝能も我父を討て卑怯にも脱げ失しぞ斯く言ふ我は汝に討れたる近藤善五兵衛が悴善之助なり見忘れしかと身には小櫻縅しの鎧を着し紅ゐの絹にて鉢巻し馬にも乘ず未だ十三歲の小童にて有りければ名和新左衛門是を見て打笑ひ優美くも敵呼はり乞や現世の暇取らして吳んずと鎗を拈つて立向ふ善之助心得たりと小太刀を翳して立たるは蟷螂が鐵輪に向ひし有樣なり新左衛門は意ともせず小倅を討んに馬上に在るは長者げなしと馬より飛び下突て懸るを善之助太刀にて接戰上段下段と秘術を盡して戰ひし內新左衛門面倒なりと力に任せ柄長に突き出す槍先を善之助身を翻し太刀振り上て付入りに新左衛門が鎗を三尺許り切折たり幸繁是はと大に怒り槍を抛捨太刀に手を懸拔んとするを得たりと突き入る善之助手早く手元へ入よと見えしが拳も通れと胸板をぐさと計りに突たりければ急所の痛手にさしもの新左衛門堪りかね仰向にドウと倒るゝを取て押へて父の仇思ひ知やと善之助終に首をぞ掻切たり穴山安治大いに悦び能も討たる者なる哉と直樣本陣に首を送り實檢に供へ善之助を伴ひて幸村が前に到る扨又其外の者皆鐵砲にて打縮められ一人も殘らず討たれしかば妙見嶺の墜ろしと後の世までも云ひ傳へける偖も幸村は間道を廻りて思ひのまゝに佐々方の軍勢を討とり夫より討れたる者共の懷中を取調べけるに三

先に進ば我も〳〵と軍兵共跡に從ひ打向ふ新左衞門敵兵に近づき能見れば六文錢の旗押立信州上田の城主眞田昌幸立出けるに名和新左衞門は驚愕仰天戰ふ氣色は更になく戻らんとすれば早跡の坂にも六文錢の旗何本となく飜へりて其勢千五百餘人筒先揃へて待懸たり新左衞門大いに呆れ進むもならず退くもならず進退爰に極つて如何爲んと倉皇しが屹と心を決しつゝ今は是迄なり一方を切破り我勇力を顯はさんと從卒に向ひ既に前後を敵に圍まれ九死一生の場合と成たれば所詮遁れぬ此最期に一人なりとも敵を打取冥土の土産に爲す可ぞ我に續けや者共と傍若無人に下知なして眞田が勢に打入驀地に戰へ共不意を打れし事なれば擊るゝ者數を知ず死骸は積で山を築血は流れて川を成し紅波楯板を泛ぶる其中を死物狂の新左衞門賁育の勇に立廻る有樣は凄然かりける事共なり

第十五　近藤善之助父の敵を討事幷眞田犬山の城主を欺く事

偖も名和新左衞門幸繁は淸洲へ援兵の途次妙見嶺にて眞田が勢に圍れ血戰して甚だ勞れ暫時息を休めんと元の所に來り味方を見るに千五百餘人討れて跡は輕疵重傷數知れず其内穴山小助安治突て出で新左衞門に立向ふ新左衞門猛虎の荒たる勢にて如何に穴山先達てまでは一味の朋友たりしが今は互に敵同士なり然ば快よく一戰を遂勝敗を決すべし一寸も退事勿れと穴山打笑ひ

元なしとて總勢を城外に留穴山のみ手廻り二三人にて入城有べしと有りしに穴山然らば早く城門を開き入られよと云ふに林齋答へて夜中の事ゆゑ城門は開きがたし此繩に取付上り玉へと太繩を下しければ眞田方にてはしてやつたりと穴山小助を始め由利鎌之助淺香郷右衛門畔柳三七郎布下彌四郎根津新兵衛別府若狹等屈强の者七八人を名和が臣下に出立たせ繩に縋りて城中に入り込けり

幸村奇計犬山落城の事幷太田林齋討死の事

眞田與三郎幸村は難なく犬山の城主を欺き味方の勇將を城中へ引入させ夜の更るを待たる所に早丑の刻にも成しかば大手口へは眞田隱岐守信尹同伊豆守信幸筧金六郎野呂兵部望月宇兵衛千五百餘人搦手には眞田幸村木辻別右衛門根津甚兵衛赤坂式部穗入一學小宮山數馬植田久右衛門栢植元八郎千五百餘人同時にどツと鬨を作りて犇めきければ城中大いに騷動しすは夜中押寄たりと倉皇けるを大將林齋少しも驚かず何ほどの事有べきいでや狹間配りをなさんと櫓に出て下知する所に城中は釜の湧が如く其内本丸二の曲輪は一面に火となりて炎々と燃え上りければ太田林齋大いに怒り偖こそ宵に佐々が援兵なりとて城中へ入たるは秀吉が廻し者にて有しならん悪き者共かな一人も殘らず討取と下知する間に穴山小助由利鎌之助淺香郷右衛門布下彌四郎

千人の割符あり幸村大いに悦びさらば此割符を用ひて尾州犬山の城を攻落し我が英才を顯さんと軈て犬山さして向ひける頃は天正十一年五月の下旬眞田が軍勢犬山に着し夜中木曾川を渉りて城下に忍び入りけるが此時城中には太田次郎右衛門清洲の陣へ到りて留守なるにより次郎右衛門が舍弟林齋並びに松下傳兵衛城を堅固に守りける係て眞田方の軍勢は六文錢の籏を隱し佐々成政の籏指物を押立て城下より呼はりけるは大聖寺の城主佐々成政深く信長公の厚恩を思ひ援兵として三千餘人を差向たり路次にて少しのせり合有て夜中ながら來りたり早々城門を開き入られよ我こそ成政が臣名和新左衛門幸繁なり早く開門〳〵と呼はりける此よし本丸に達しければ傳兵衛林齋に向ひ佐々成政三千餘人の援兵を此城へ遣はしけるよしいかゞ計ひ申さんや林齋聞よりも是大切の事なり動もすれば敵方より斯樣の謀略を爲す事有ば能々取糺し申べしと云ひしに松下制して何條さる事の有べきや疑はしくば明朝まで城外に置たまへ林齋然れども若誠の佐々が兵ならば城外に置たるをいきどほり急に本國に立歸るべし我是を試みんとて林齋自ら櫓に出て松明をふり呼はりけるは佐々成政殿の援兵に相違なくば割符有るべし出されよといふに穴山小助進み出で申けるは某しこそ新左衛門幸繁なり早く門を開き給へ割符は是にありと鎧の引合より件の割符を取出し疑ひ給ふ事勿れとさし上れば櫓より繩をつけてつり揚げ松明に照し篤と改め見るに相違もなき佐々方の割符なりければ疑ふべうも非ざれども夜中に來る事の心

殘兵共は是を見て頭を押へ命ちを乞ひて震へ怖るゝ計りなり是に因て眞田は軍勢を取り纏め諸卒を休息爲さしめたり爰に太田次郎右衛門は斯ともしらず清洲より手勢五百餘人にて本城へ歸る途中にて犬山落城の事幷に舍弟林齋討死せしとの事を聞て大いに怒り復び清洲に歸るは臆したるに似たりいざや是より犬山に押よせ討死せずんば有べからずと言けるを鳥飼主税大いに制して死は易く生は難し先清洲に歸り今死する命をもつて忠を後日に盡し給へと云けれども次郎右衛門は怒り面色に顯はれ主君信雄公數多ある臣下の中より撰み出して某しを犬山の城に置かれしを故なく敵方に奪はれ何の面目か有て清洲に歸り信雄公に申し譯致さんや死可期に死せざれば死に增るの恥あり何引歸す事の候やつゞけ〳〵と言まゝに眞先かけて進みければ是非なく諸卒も進みける斯て城下に至りければ次郎右衛門が嫡男清太郎大音に呼はりけるは太田次郎右衛門の父子此所に來つて首を眞田に渡さんとおもふぞ早く城門を開きて打て出首うけ取と呼はれば城中には此よしを聞き眞田下知して狹間の板を開雨の如くに弓鐵砲を打出しけるを太田父子少しも騷ず塀に取付登らんとするを城中よりは大木大石を投出し防ぎけるに太田が諸卒過半は打据えられて落行者も多かりける然るに城兵はとかくに打て出ざれば太田父子進み戰ふ事能はず退ぞくも據る可きの所なければ今や運の盡なりと馬より飛下腹十文字に掻切て甲斐なき最期を遂たりけり斯くて犬山城乘とられし事清洲の方に聞えければ信雄大いに驚きてコハ一大事

別府若狹畔柳兵七郎根津甚兵衛城中の那首這首へ火を懸け勇を奮ふて切て廻るに城兵は之が爲討るゝ者數をしらず松下傳兵衛大いに怒り何程の事有ん迯すなと接戰する所に城外の火の手愈〱熾ん成けるに眞田方は猶も氣を得て恰ら傍りに人無き如く城兵は內外の敵に圍まれて途方にくれたるばかりなり松下傳兵衛下知して今は防ぐの術盡きたるなり一人も生んと思はず我れに隨ひ討死せよ進め〱といふ程に郎等は必死になつて戰ふ內はや城外の敵軍一方の塀を乘破り我も〱と亂れ入る松下傳兵衛自身大太刀を打ふり近寄る者を切立〱駈廻る所へ出で合ふ敵方の剛將淺香鄉右衛門槍をひねりて突て懸るを松下御參なれと散〱に戰かへば淺香怒りて曳やと一聲突出す槍の鋭きに松下咽を刺し貫かれ呀と叫んで死したりけり是によつて城方大敗となり降る者夥多ある中に太田林齋は是まで諸手の戰ひを見て有しが早城兵も賴み少なに討れしかば今は是迄と紫き純子の陣羽織を着し大太刀を水車のごとくまはして顯れ出で當城の大將太田次郎右衛門が舍弟三郎兵衛入道林齋とは我事なりいで某しが最期の一戰能く見よと會釋もなく切て廻り矢庭に七八騎を薙落し猶も勇を振ふて戰ひける由利鎌之助之を見て天晴なるかな入道林齋最期の一戰イザ我相手に成らんと鎗を取て突て懸れば林齋透さず渡り合ひ互に猛虎の怒りをなし追つ卷つ戰ひしが由利が突出す鋭き鋒先に林齋膝口グッサと突れて堪り兼てヨジ〱〱〱漂浪く處を付け入て馬より落して由利鎌之助副刀引ぬき難なく首をぞ揚げたりける

第十六　眞田智計深尾の砦を攻落す事幷稲垣讃岐守最期の事

爰に尾州犬山の續き深尾の砦には織田方の老臣稲垣讃岐守溝口玄蕃等五千餘人にて堅めける眞田勢は先此砦を攻落さんと用意を整へ發向せんと爲る事稲垣讃岐守が方へ聞えければ讃岐守大いに驚き溝口玄蕃に向ひ眞田兄弟犬山の城を攻落し其勢ひに乘て當砦をも攻んとて發向するよし如何して是を防がんと爲らるゝや玄蕃打笑ひ少も憂ひ給ふ事勿れ眞田とても鬼神に非ず某し出て戰はん讃岐守眞田は決して侮る可らず某し思ふには出て戰ふことなく堅く守りて清洲よりの援兵を俟ち眞田が勢を取まき前後より攻る程ならばいか程眞田智勇なりと雖ど何條以て堪らんや是良計には非ずやと云ふを玄蕃打笑ひ然程に敵を恐れてはいかにして戰ふ事成べきぞ某し眞田と鋒頭を交へ兄弟の首をとつて勇猛の程を知らさんと讃岐守の止むるを聞入ず千五百餘人を率して砦を出發せり眞田勢は是れを見て幸村に敵砦を離れ出張せりと告ければ幸村うち笑ひ此砦を攻落す事我方寸にありと急に軍を進れば先陣穴山小助望月玄蕃鬨を作りて攻かゝる溝口の臣下浮田新五郎和原堅助同じく鬨を合せ控へたり頃は天正十一年九月廿五日の早天秋風は樹樹の梢を吹散し木曾川の流紅葉を泛べて眺望は一入珍らかなれども世は戰鬪の止む期なく殺伐の氣の絶ざれば誰とて是を奇しとも思はざる事こそ是非無りけれ偖深尾にては讃岐守玄蕃が出

なり捨置がたしと瀧川右京大夫森伊豆守船越主計に八千餘人を添犬山の押へに充てしめ夫より德川に使者を送りて出軍の催促に及ばれける此時羽柴筑前守秀吉清洲へ進發爲んと其用意を調へ有し處へ眞田兄弟犬山の城を攻落したる由注進有りければ大いに悅び堀尾帶刀吉晴を以て犬山に送り勝軍の賀をのべける與三郎幸村堀尾吉晴に對面して申しけるは某し當城を攻落して候へば是より秀吉公には早く小牧長久手に御出軍相成り德川と一戰をいどまれ候へ淸洲の信雄は某し當城に於て必らず拒絶申す可し勿論北條氏政も極めて出張あらんなれ共是らは恐るゝに足ず兎角小牧にて勝敗を決し給ふ迄は何ヶ月にても某し屹度御後楯と成り御難儀に成る可き敵は追ひ拂ひ申さんと語りて堀尾を歸しける堀尾立歸りて此由秀吉に語りければ秀吉眞田が勇膽を感じられ實に大丈夫の正言眞田の如きは絕て無くして僅かに一人有るのみと大いに賞して夫より秀吉は小牧長久手に赴かれける幸村の言辭素より狐疑する所あらざれども若冠の一人に意を介せず大事の軍に顧慮する所なきは豐公の氣宇實に磊々落々日月の皎然たるが如く進取退守其度を得て衆の屬望を來す事誠に宜なりとこそ思はるゝなれ斯て秀吉文武の大將を引率して小牧に發向在しと聞眞田伊豆守同與三郎等犬山に在て織田方が構へたる五ヶ所の砦を攻落したれば心安く籠城して先深尾の砦に押寄せんと其用意をぞなしにける

に内通して主人信雄を害せんと謀るなり然るに汝等此事を知らざればこそ軍を發して今捕れとは成たるなれ然れば是より屹度心を改め味方と成稻垣と倶に忠誠を盡す可し此事違背なくば命を助けかへさんと有りしに玄蕃心に驚きながら命惜さの餘なれば聞よりも猶頭を下然る事の候上は助命の恩德といひ爭か背き申さん是より稻垣と倶に主人信雄を討て首を奉つる可しよろしく恩賞に預らんと答へしかば幸村大いに悅び馬武具を還し與へければ玄蕃は心に笑ながら馬にうち乘頓吉左右申さんと勇みすゝんで歸りける此時砦には稻垣讃岐守軍の勝敗如何なるかと心を苦め居ける所に打漏されの者共立歸り戰ひの始終を語り玄蕃は生捕れたりと云ければ讃岐守大いに驚き扨こそ己が血氣に誇り生捕れけるこそ是非なけれ然らば清洲へ使者を送り加勢を乞んと軍使を仕立て清洲へ送らんと軍議區々〳〵なる所へ門を叩いて溝口玄蕃立歸りしとの注進に此旨稻垣に告ければ稻垣は不審顏にて生捕と成し溝口なんぞ立歸る事の有る可きや夫とも全く歸りしとなれば是外ならず眞田彼が心を推し命を助け暗はすに利を以てして此稻垣までも欺かんとせしならん彼を城中へ入る事なかれと有しかば守兵の者玄蕃を中へ入ざるに玄蕃心に邪智を懷き扨は稻垣我歸りしと聞て入ざるか是極て眞田に一味し內通の有る事なれば用心すると見えたるなりいでや押て城中へ入彼を討て此憤りを晴さんと思ひければいかに稻垣何故につれなきぞ我歸りしには仔細あるなり一大事を語り候はん程に早く中へ入られよと云て休ざれば

張を深く悔み勝敗如何有んかと心を苦るばかりなり溝口玄蕃は勢ひ立ち眞田が首を打取て日頃の勇氣を見せんものとて兵を下知し自らも鑓を取て眞先に進み相手を撰ばず驀直に戰ひければ眞田が先手穴山望月何とか爲けん大に崩れて散亂す是を見て浮田新五郎和原堅助勢ひに乘て追駈る後陣に續いて溝口玄蕃悦びの色を現し追駈るに眞田方は備を亂して敗走するを溝口得たりと眞先に進み行所に敵方の相圖と覺しく一聲の鐵砲ひゞく程こそあれ右よりは由利鎌之助木辻別右衛門左よりは淺香鄉右衛門近藤善之助その勢五百餘人にて討て出中を取切攻ければ時分はよしと穴山望月一度にどつと引返せしに溝口は中に圍まれ呆るゝ計りに狼狽まはりいかゞはせんと思ふ所に迅雷の如く由利鎌之助鑓を横たへ突て出玄蕃が馬の太腹を刺し貫けば馬は屛風を倒すが如く傍にドッサと僵れければ鎌之助槍を捨馬より飛び下玄蕃をムヅと取て押へぐる〳〵卷にして生捕ければ殘兵今は力なく砦をさして逃退けり眞田は急に軍を收め生捕たる玄蕃を陣中へ引すゑ申けるは時を知ずして軍を出し繩目の耻を受嘸口惜からんと慰むれば玄蕃首をたれて言葉なし幸村又汝命を助り度思ふや助り度と思はゞ我が言ふ事に從ふ可しと云ければ玄蕃答へて一命をだに許し給はらば如何樣の事なりとも仰せに從はん幸村下知して繩を解せ然らば汝起證文を書や玄蕃何とも仰せに任せんと夫より起證文を認めければ幸村悦んで斯る上は何をか疑はん內密を申聞する間違背す可からず實は此砦の主將稻垣讃岐守は犬山落城の節より味方

北條氏政犬山へ發向の事幷眞田即智北條勢を退くる事

兵は駿速を貴ぶ遲回せば弊え從つて生ず況てや主客其勢ひを異にし客として堅城に臨み久しく異鄕に頓する時は將領勇なりと雖も兵杖鋭なりと雖ども難易夫主兵に孰與ぞや偖も北條氏政は此度の亂を聞て首鼠兩端を搆へ如何しけんと考がへしが德川源君とは多年の交際厚かりければと屹度心を決し四萬五千餘騎の兵を率して長久手の陣に赴きければ源君大いに悦ばれ多年の懇情を思ひて遙々援兵に赴かれける段辱けなし然れば何とて尾州清洲に赴かれ織田信雄の援兵こそ願はしくと餘儀もなく申されしに氏政早速承知して清洲へ赴き信雄に對面し後援に出張有し事を申されければ信雄大いに悅び玉ひ然らば何とぞ是より犬山の城へ向ひ眞田兄弟を攻落して秀吉が後を絶切下されよと賴みける北條氏政心には先年上田にての戰鬪に眞田が智計の程を懼れて所詮敵し難しとは思ひけれども斯言ふ事も成ねば承知の由返答に及びて發向し先陣には北條陸奧守同左京大夫松田筑後守大導寺駿河守等其勢四萬五千餘騎にて尾州犬山に出張す頃は天正十一年九月晦日とぞ斯て此由犬山へ聞えければ城中にては由利淺香穴山等の面々北條勢を徹塵に爲んと勢ひ勇みて任けるを幸村制して北條氏政たとへ何百萬騎を以て來るとも謀計を以て打挫ぐ時は矢一筋玉一顆だも費さずして退くべし各々の如く討て出んと爲る時は衆寡敵

是非なく中へ入にける玄蕃本丸に入て稻垣に對面するに讃岐守は顏色和らがず汝我に背きて軍を出し多くの兵を失ひ剩さへ眞田に降參して當城に歸るは必ず謀略を施さん爲なるべしと問ひ詰られて玄蕃は案に相違し怒りの聲を荒らげ己こそ眞田に內通して信雄公を害せんと謀る國賊なり秘すと雖も我よく之を知りたるなり夫に何ぞや我を疑ひ今の惡言抑々汝は眞田と一味の約束をなし剩さへ主君信雄君を討敵に面を下る所存イデヤ思ひ知らせんと云まゝに拔手も見せず一刀に讃岐守に切付しかば老將の哀しさ讃岐守は肩先を切さげられ立得ん事も叶はずして踠く處を玄蕃押へて首を刎ぬ是を見て讃岐守が郎等逸見兵藏怒りの眼をむき出し玄蕃に切て掛りければ玄蕃透さず渡り合ふ偖は危ふし者共俟てと玄蕃が郎等主を助けん勢ひにて逸見に打てかゝりければ讃岐守が郎等も主の仇逃さじと双方意趣の滅多打暗込み打の撿束なく敵と間違へ味方を薙ぎ味方ならんと油斷の內に腦天割れて釘ぬき立泣もあり叫ぶもありて蘭竹大騷動の折も折眞田勢は砦の八方より鬨の聲を揚て攻かゝるに砦の者共何とて手出しの成可きや夫れ寄手よと云ふ計りなるに眞田勢は皆塀をこえ堀を埋て込入〳〵する程に何かはもつて堪らんや難なく砦を攻落して再び玄蕃を生捕其外三百餘人を討取ければ勝鬨を揚げ砦を破りて犬山の城へ凱旋す此よし清洲へ聞えければ織田信雄大いに仰天して德川へ援兵を乞事急なり

條勢今は勞れ果て那なれば眞田斯く人を惱ますや扨々難儀なる役儀に當りし事かなと呟々云ふも理りなり斯て北條勢は兩夜迄眠らざれば次の夜は堪へかねいざや今宵は寢らんと枕に就んとする處に陣觸嚴敷く今宵も又々眠られず是非なく扣へ居たる處に又始まつた例の松明消とも焚とも勝手次第と早捨置きて見もやらず假寢などして有し處に鯨波聞えければ扨は今夜は討出しかソレ防げ追散らせと手ぐすね引て待ども〳〵宛から狐狸の妖怪の如く跡方なく成りにけり斯の如くなる事既に七晝夜に及びければ北條方の諸卒身心憔悴して戰ふ心もなく頻りに歸國を思ひ出せし事誠に眞田が詭計の圖に當りしや开は次の件に說き誌さん

第十七　眞田勢諸將勇戰の事并武田幼君病死の事

往昔楠正成天王寺に於て宇都宮公綱の討手として向ひしを奇謀を以て引取せし事人の能く知る所なり眞田犬山の籠城も之に稍彷彿かな北條勢は犬山の城を取圍みて城兵の打て出るを今日よ翌日よと相待ども松明の謀計に誑惑され日を經れども戰ひを合せざれば軍奉行松田尾張守氏政が前に出て申けるは先年勝頼沼田の城を築きし時味方眞田に追立られし謀計此度の事に同じきなり是逸を以て勞を討んと爲すの謀計然れば此度は斯樣〳〵に致し候方然る可しと耳に就て私語ければ氏政手を拍て大いに歡び是良計なりと夫より北條陸奥守に一萬騎を援けて峯々谷々

し難き道理にて假令勝軍なす迄も味方を損ずる事幾何ぞやはやまる事勿れと一向に手當も爲ずして在ける心の中こそ不敵なれ斯て北條勢は深尾の邊に野陣を取夜討不意討の用心最も堅固になし合戰は明日と互ひに戰時を取定む然れども諸卒は只眞田が謀計有んを恐れ若も地雷火の發りはせぬか何とやらん煙り臭しなど云合て安き心も無りけり松田尾張守陣々を廻り夜討等を氣づかひ令を傳へて陣中寢る事を禁め武具兵器を取揃へ待居けれ共何の沙汰もなく既に五更頃に及びける際犬山城中に松明夥多敷輝やかし連ねて見えければ扨は眞田夜討を掛るぞと銃には玉を込弓には矢をはげ楯板を竝べ連て今や〳〵と待處に其松明初めは二百許と見えけるが次第次第に消失て遂に全く亡なりければ北條方大きに怪しみ是眞田が謀畧なり定めて是へ打て出でんか否々後より襲ひ來らん用心〳〵アラ怖らしやと寒心ものにて待共〳〵來らず彌々怪み其内夜も明放れて見れば眞田勢一人もなく北條勢猶も不審晴かね其日も終日合戰せず夜に至れば北條方は前夜の松明に心をゆるさず今宵は如何と窺ふ處に同じく松明輝かせ然も此度は其勢一萬も有んかと思はれしに北條勢今宵こそ安心ならずと片唾を呑んで待居けるに又も松明次第に消え前夜に同じく終に一ツも無成しかば北條勢倦み果て扨々五月蠅松明かな寢るにも寢られず勞れし眼を毎晩〳〵引つられ迷惑千萬の事かなと呟きながら其夜も同じく寢る事能はず遂に拂曉に成りければ今日こそ合戰成んと各々勇んで敵の打出すを待かけしに更に樣子だにも有ざれば北

命令し舎兄伊豆守木辻別右衛門望月増田筧相木根津等諸共間道を經て北條勢の後に討て出鯨波を作りて攻ければ北條勢大いに驚き憖ひ淺香を圍しが邪魔と成前後に亂れ狼狽騷ぐを眞田勢は之を見濟し長追して益無と凱歌を擧て歸陣す北條勢も夫より小田原へと歸りけり是氏政が深き所存の有所とぞ聞えける爰に德川源君には秀吉と和睦になり織田信雄も同じく和睦有ければ是に因て眞田は犬山の城を開いて織田方に返し徐々と京都に上り秀吉に對面す秀吉大いに眞田が軍功を賞して信幸幸村の兩人へ白銀作りの太刀一口宛を手づから與へ幸村に向ひて若將なれども古今に稀なる奇才匆々我が及ぶ所に非ず後年然てこそと想ひやる併兄伊豆守には本多忠勝の娘を迎へられしと聞けども其方には未だ緣談の事を聞ず如何にて在りしやと尋ねしかば幸村面を正し仰せの如く未だ若年の拙者なれば妻は迎へ申さず兎角愚父の命に從ふのみと申せしに秀吉笑ひて爰に某しが臣下に大谷刑部と云者あり一人の娘を持り其心廉直にして父母に孝行を盡し今年十四歳にて恰合其方が妻に宜しければ秀吉が媒人と成り嫁せしめんと思へども陪臣なれば如何に候や兄伊豆守にも本多が息女を娶る是とても同事成ば秀吉斯く勸め申すなり如何思ひ給ふやと有しに幸村聞て有難き仰せ某しは承知仕つれ共父昌幸が存慮を承給はり得心の上は如何樣とも仕つらんと述べ置き夫より眞田兄弟は暇を請て上田沼田へと歸陣致しける斯て幸村は上田の城に立歸り諸人に此度の合戰の始終を物語り其上秀吉が大谷刑部の息女を媒人せんと有し

に埋伏させ北條勢悉々く東國に歸ると沙汰して陣々を引拂はせ備立を堅固にして相州指て引退く此事犬山に聞えければ眞田伊豆守大いに悦び夜々の謀略に厭忌敵本國に引退くと見えたり勞を討は此時なり者共進めと既に用意を調へける與三郎幸村制して申けるは松明を以て夜々敵を欺きし事先年上田城に楯籠し時案し用ひし謀略なれば敵方の能く知所なり然るを又行なひしは敵方之に就て立る謀計有可し其を種とし此方より之を破らんと爲しなり信幸大いに驚き然れば如何して破らんや幸村聲を潛め斯樣〳〵なりと呀やきければ信幸打點頭誠に汝が謀畧某しが及ぶ處に非ずと夫より手分に及ける此事北條方には夢にも知ず潛に一萬餘騎を埋伏し殘りは皆東國へ引拂ふと見せ掛退きつゝ今や追手の來るならんと靜かに打立し處へ眞田勢三百餘人鯨波を作りて追來りし故北條勢スハと見れども餘りの小勢に疑ひながらも戰ふ處追手の大將淺香鄕右衛門大音に呼はり見苦敷も北條方には一戰の手合もなく敵に後を見せ給ふか引返して勝負有と驀地に討て掛るを大軍の北條勢豫て工みし策有ば一支へにも及ばすして嵐に木の葉を散すが如く無造作にも敗軍しければ淺香彌々氣に乘て追行處に一聲の鐵砲響〳〵と齊しく北條の伏勢一度に起り淺香を中に取圍む鄕右衛門少も騒がず勇を振て戰ひしに今迄敗せし北條勢謀計圖に當りしと各々勇みて爰を專途と打掛れば流石の淺香も前後の大軍に圍まれて既に危く見えにける此時幸村城中に在て敵の伏兵起ると聞淺香を討すな早く淺香を救ひ來れと由利鎌之助穴山小助に

として和州法隆寺に在けるとの事に昌幸法隆寺に抵り對面す秀吉先勝千代の死を弔ひ夫より暫くは久濶の閑談に耽り偖大谷が娘を娵ちせん事を申されしに昌幸此儀某しの意に適ひ誠に望む所にて候得ば此度上京せしも第一に此事願はんと存じての事にて候程に然る可く願ひたしと領承す其後秀吉更めて昌幸に向ひ其許には數度の軍功有に因て信州に於て十萬石の地を知どり給ふべし即ち三法師君に代りて教書をまゐらせんと有ければ昌幸深く辭して申けるは重恩の君に別れし而已ならず再興爲んと思ひし勝千代君にも早世ありし上は某し獨生殘りて榮譽を承るとも誠に樂み之無く矢張是迄の五萬石にて身を安んずる方望みにて候間此儀固く辭し奉つると情を布きて受ざりける忠誠の心の中こそ凉しけれ秀吉頻りに感じ入り暫時落涙に及びけるが夫より秀吉は昌幸に向ひ然れば其許には上田に歸城し北條の寄手を押へられよ我は是より諸國の逆徒を從へ薩州迄も平治して其后北條を從へんと思ひければ夫迄は呉々も北條を押へられ候へと有ければ昌幸委細承知の旨返答に及び軈て別れを告て先京都へ上り二條の城に到り織田三法師君に拜謁して其後京都の北一條大宮の宇多下野守成親が屋敷にて休息致しける此成親は昌幸が室の父なりければ下野守久々にての對面を悦び孫幸村が才智謀略世に隱れなき事ども物語りて丁寧に饗待しける抑々宇多下野守は甲州家の幕下にして長女を眞田に嫁せ次女は白畑竹之丞へ遣りけるが白畑は病死せし故次女は歸りて下野守が方に居ける下野守は織田家甲州へ亂入し勝

事共を語りければ昌幸篤と聞て申けるは傳へ聞大谷刑部吉隆は由緒正しき者にして幼年より秀吉公に隨ひ忠功他に超たる由なれば我も常々其英名を慕ひ居し處幸ひ秀吉媒妁して其娘を汝に娶せんと云ふ事誠に願ふ所には有ずや此儀早速返答有て然る可し我久敷秀吉に面會せざれば色々の謝禮かた〴〵參向して此由をも申し入んと既に用意を調へける處に武田勝千代君常々の病痾の此程に至り大病と相成り醫療手を盡すと雖も其効驗なく終に天正十二年四月十一日一朝の露と消給ひけるこそ頼みがひ無き事どもなれ眞田父子の歎き一方ならず武田家の再興今は早誰を頼みて日頃の素懷を遂せんや呼是非も無き事かなと天を仰ぎ地に臥て泣哀しめ共其甲斐なければ遺骸を法泉寺に葬り法會萬端式の如くに取行ひ法謚を凉風朝夢幼覺大居士と號しける勝千代當年十二歳なりしとかや

昌幸祿を辭して忠誠の事幷石田治部少輔遠謀の事

實にや歎きても詮はあらしな會者定離生者必滅の世の習に壽夭の程は名將とて知るよしもなく長の年月を撫育して家門を再び起させばやと丹精凝せし昌幸が忠義の心は敢なくて勝千代が千代の其名も頼みなく化世の客と成りけるに何とせん方泣々も例の如く喪も終りければ昌幸京都に到り秀吉に對面せんと急ぎ用意を整へ早くも京都に着し間合せしに秀吉此時紀州征伐の手當

を有たれん夫天下は一人の天下にあらず即ち天下の天下なり我君秀吉公元は尾州愛知郡中村の百姓彌助が忰日吉とて賤敷者たるに今は關白職に昇り其武威四海に轟きて一人も頭を上る者なし我も元賤と雖も先祖は大職冠の後胤なれば是より大望を企て運に乘じて天下を取ん事古今將軍の例に倣ひて視る時は敢て理の無き筋にも有まじイデ是より一臂を奮ひ日本六十餘州を手に握り子孫の後榮を圖らん併ながら斯る大望を成遂んには一人の力能及ぶ所に非ず天下の諸侯を語合ひ賤敷交はり我腹心となし置てこそ良計ならん然れ共今我君秀吉公には幼年の頃より大恩を承し事故背く事成難し秀吉死去の後こそ我宿志を成し遂んと爰に非望の念を起し時節遲しと待居る心ぞ不敵なり然るに此事を語らはんと爲に他の諸將は兎に角眞田を手に入れずんば到底事容易なるまじ何卒此者と入魂を結び腹心と爲て事を圖らはんと思へども兎角近付べき方便なく種々心を苦めけるが宇多下野守は昌幸の外舅なるに因て三成是に取入て眞田に入魂せんと何時となく下野守に懇意し剩さへ彼の白畑より還り居る昌幸が妻の妹を乞請己が妻と致しける是三成が深き謀計なりしとかや

第十八　石田治部少輔奸計の事幷太閤御父子不和の事

大奸は忠に似たりとかや石田治部少輔三成陽には頗る忠の色を示すと雖も陰には天下を掌握せ

賴小山田に誑られし時より織田の幕下と成今又秀吉に仕ふ秀吉此度紀州發向にも家嫡平三郎を代りとして遣はし其身は老を養ふて京都に殘りしとかや斯て安房守昌幸は兩三日宇多が方に逗留して其後上田に還りける爰に羽柴が家臣石田治部少輔三成は此時紀州表へは向はずして京都に殘り有けるが此三成は江州石田村の百姓某の兒佐吉と云者なり容顏美麗にして絶世の美童なりけるに依て羽柴秀吉長光寺より伴ない歸り小性に使はれけるが段々立身して今は佐和山の城主と成り其後山崎合戰の節明智方の勇將四王天正實を討て二萬石の加賞に預り漸く威勢を振ひける然れ共只秀吉の寵愛を受る而已にして未だ職掌有ざるに平生天下の治亂古今盛衰の事を打案じ以爲く凡そ世に名將勇士は多けれども天下を我掌に握る事は誠に難き者なり右幕下賴朝天下の惣追捕使と爲りしも三代實朝に至りて公曉法師の變あり夫より北條天下に跋扈し高時入道宗鑑が世に至りて上を輕んじ下を惱し遂に新田義貞が爲に一族を東勝寺に於て誅戮せられ是より暫く天下後醍醐天皇に歸し小康と云ふ間もなく新田足利權威を爭ひ天下再び亂れ足利朝敵と成てよりは彌々國土麻の如く楠は湊川にて討死し義貞は越前の黑丸にて亡び尊氏征夷大將軍の任に昇り世を繼ぎ義輝の時に至りて逆心三好松永が爲に害せられ其後義昭の世と成り遂に宇治牧方の戰ひに於て天下は信長の有となり幾くも無くして信長亦逆臣明智が爲に討れ明智又我君の爲に討れて今の天下は三法師君の物たりと雖も十が九は我君の掌握に歸し早晩は全たく天

李夫人貴妃も斯やと計り思る丶其性さへもいと温柔くして既に早二八の春の花盛りと成し頃秀吉は其が色香に心うばはれ遂に側女に引寄て朝暮之を寵愛し則ち此女を淀君と申ける時に文祿元年の末に懷妊有て同二年八月廿日安々と產落したる玉の如き男子こそ是秀賴にて在ましける爾時秀吉は已に六十歲に及ばる丶と雖も未實子の在さぬに這般淀君男兒を擧られしかば其悅び大方ならず是より淀君の寵愛彌々深く成けるより遂に關白秀次を疎み給ふぞ果敢なけれ斯て石田治部少輔三成は此時佐和山にて十八萬石を領し其身は五奉行の列に加はり居ければ人皆尊敬を爲しけるに石田は豫てより逆意の望み深く秀吉死去の後は大望を一時に發せんと思ひけれ共兎角秀次の在ますを忌み先此君を失ひて後難を除去んものと思ふ所に淀君男子を出生せしかば石田大いに悅び是天の與ふる賜なりと折々淀君の許へ參り只頻に落淚して申けるは世の習ひとは申しながら正敷此若君こそ天下を保ち給ふべきに御連拙なくして遲く生れ給ひ御一生秀次公に腰を屈めて仕へんと爲らる丶は秀吉公の御種なりし甲斐もなく御傷悲しき事ぞもなり是と申も果報つたなき御生れかなと愁を含んで申しければ淀君流石に女子の淺はかにも石田が言葉を誠と思ひ折しも秀次が關白の職に在て富貴身に餘り榮花幷び無き體を見て心中に深く姤みを起し何卒して秀次を失ひ世をば我が子に襲せん物と夫よりは何となく秀次の事を折々秀吉公へ讒言有けるにぞ石田は得たりと一人心に悅びつ丶又秀次方へも頻りに秀吉の事を讒言し恐れ

ん事を思ひ竊に心を碎きて我が味方を甲乙と考へ居し內何れにも眞田安房守を腹心と爲ずんば便り惡からんと先宇多下野守が娘を我が妻となし昌幸と緣者の因を結び之を入魂の種子にして夫よりは專に託へて度々上田に赴き或は秀吉よりの使者などに立言葉巧みに交りしかば昌幸も只何となく親みけり斯て秀吉公は位官益々高く其威勢旭の昇るが如く成ければ彌々天下を併呑せんと紀州の根來四國の長曾我部薩州の嶋津家征伐の事を志ざし先薩州を攻んと爲に薩州には伊集院新助等の勇將有ければ本願寺の顯如上人を語合ひ法を弘むると稱して上人を彼地に遣はし地理間道を探らせ夫より不意に擊入り難なく鹿兒嶋を乘取引續いて北條氏政を攻潰し天下の勁敵是に於て稍平定に赴きければ更に是より朝鮮明國をも打從へんと宿昔の素懷を爰に現はし關白の職を秀次に讓り我身は太閤と稱して夫より黑田小西淺野加藤立花等を從へ朝鮮國へ攻入り武威を輝かせしこそ例し少き大將なり爰に故信長公の御養女小谷の方は(初めお市の方)淺井下野守久政が嫡男備前守長政に嫁し既に三人の女子まで設けられしが長政朝倉に與して滅亡し小谷の方女子を携へ再び信長公の方へ歸り夫より柴田勝家に嫁し三人の女子は勝家養つて我子となし在ける內に主君信長公明智が爲に亡ぼされ其後勝家秀吉と不和になり遂に北の莊にて合戰に打負け滅亡せし折小谷の方も共に城中にて自害せられ其節三人の女子は秀吉に養育の事を賴みしかば秀吉之を承知し携へ歸りて育てしに孰れも容顏美麗にして中にも姉娘は嬋娟たる事

頃は文祿五年七月上旬諸將聚樂の御所に集り評定有けるに熊谷大膳亮進み出て申けるは昔より父子兄弟不和となり患難互に其身に加はる事有と雖も事直なる時はいつか疑心晴て初に還るものなり然れば此度伏見への御召も是讒者の搆へし事なる可きに付御身に覺えなき事其父君へ能々御申開き相成る上は差たる事之無る可く候間唯速かに伏見へ御出向有て父君に御對顏然るべしと事もなげに申けるを白井備後守打笑ひ熊谷殿の一言は唯其儘の事なり某し惟みるに這般の御召は秀吉公表向君の罪を糺さんには殿下の騷動とも成べきを氣遣はれ何となく伏見へ招き寄て直に押込參らせんとの謀計なるに相違なかる可く誠に危ふき事にて候得ば伏見へ御越の事は見合させられ是より直に比叡山に登り山門に御楯籠りあれ然すれば秀吉公必らず驚かれて出張有ん間其時君罪なき由を仰せ譯られなば父君殿下の大事には替難くと思され遂に御和睦調ひ自から名も正敷候はん此儀如何にと申ければ座中手を拍て大いに感じ誠に白井殿の申す處良策ならん然ば早々その御用意有かしと申すに秀次公にも悦ばれ是より山門へ引退き白井が謀略を行なはんと有ける時一人の大將踊り出手ぬるし／＼我こそ良計を述んと入り來るに諸人驚いて是を見れば木村小隼人が男同重範なり秀次公汝如何成良策有や早く告よ木村先んずる時は人を制し後るゝ時は制せらるゝとかや今當家の兵五千餘人之れ有れば先使者に來りし堀尾前田が首を刎ね夫より伏見の城に押寄可し讒言の爲疑ひを受し事成ば所詮遁れぬ時宜なるに人

ながら君はまだ養君にて渡らせ給へば父君所詮天下は御讓り之れ有るまじ殊に淀君内々君を害し我子の代と爲んと圖り給ふ事某し竊に是を知り侍りぬと言葉巧に申ければ秀次公も此言に魔まされ心に危みを生じて父君と兎角和らぎ給はず内心に恨みを懷きて獨立の事を思ひ立給ひしこそ破滅の基と知れけれ然るに秀次公其身關白職に在ながら酒色に長じ我意を張老職白井備後守木村常陸介熊谷大膳亮等諫言を加けれ共一向聞入給はず荒淫日々に增長爲ければ秀吉公終に此事を憤ほり秀次其職に在ながら我儘の振舞をなし上を侮り下を苦しめ父に不孝を爲し且禮を亂す條不屆至極なれば速かに誅を加ふべしと有しに前田德川の兩君言葉を揃へ秀次公御事御養子なりとは雖も既に關白の職に昇られ殿下は御父君なれども御隱居同然の御身分にて候へば秀次公の罪を御糺しとの事表向に相成り候ては秀次公方へも一味同意の者相集まり天下の一大事をも生ず可くと苦慮に堪へず候得ば唯何となく伏見へ招かれ其實否を御糺の方然る可と諫めければ大閤此儀尤もなりとて夫より前田德善院法印堀尾帶刀吉晴の兩人を以て聚樂に在ます秀次公へ伏見に於て尋ねべき事あり早々來るべしとの嚴命を下しければ秀次公大いに驚き扨こそ身の一大事なりと急ぎ諸臣を召れ評定にぞ及びけり

聚樂にて諸將評定の事幷秀次公沒落の事

難し寧ろ是より高野山に登り暫く父の怒を避け御心の和ぐを待て申し開きを爲すべしと心を決し直に高野をさして落給ふこそ哀成れ是を聞て今迄伏見の首尾を伺ふ武士共大いに力を落し爰に在ても益なしとて高野へ赴き又は知人親戚の方へと思ひ〳〵に落失けり

第十九　石田直江密計を談ずる事幷太閤秀吉公薨去の事

斯て秀次公には聚樂へも歸り給はず直に高野に赴かれしかば是に依て聚樂に集まりし軍兵共大いに力を落し皆散々と成て今は白井熊谷木村其外僅七十人許りと成ける處へ太閤より福嶋左衛門大夫正則同河内守正俊兩人を遣はされ聚樂の御所を受取しむ是に依て白井熊谷木村等思ひ思ひに退散してさしも全盛なりし聚樂の堂宇も今は見る影なくなりて淺間敷樣とこそ成にけれ秀次公の公達三人北の方其外妾婦等の三十餘人は石田治部少輔が手にて嚴敷獄中に捕へられぬ扨高野山へは討手として福嶋正則父子堀丹後守一萬餘人を率ゐ直に立向ひて麓迄攻寄ける此時秀次公は所詮遁るべき術なしと覺悟をせられ佛前に向ひて落髮なし討手遲しと待給ふ福嶋正則直に高野山に登り坊に到りて秀次公に對面し父君の仰せを委細に述ければ秀次公少しも騷ぎ給はず速かに切腹を爲し果にける續て近習小性十八人同時に切腹して殉死しけるを正則篤と見屆け秀次公の首を以て京都へ歸り秀吉の實檢に供へしに秀吉公怒り猶も散せずして首を三條河原へ

手に阿容〳〵死せんと爲るは丈夫の恥る所なり寧ろ運を天に任せ伏見に一旦攻寄て運有ば恐れながら大閤をも討取ん萬一運盡負し時は潔よく腹搔切て死せんのみ然るに何ぞ拙なくも叡山に迯登り寄手の爲に苦しまんや如何に〳〵と勇氣面に顯れ云ければ各々は暫時呆れて居たりけり然るに秀次公を始皆秀吉公の武威に恐れて一言を發する者なしや丶有て秀次公玉は碎けても形を失はず竹は燒ても節を損せず我一旦父と賴みし秀吉公假令無理非道を宣ひ我を罪なきに刑せられんとす共何ぞ勿體なくも父に向ひて弓を彎事有べけんや死生命有り富貴天に在り父君の爲討るゝに於ては子の道として少も悔る事なしとて前田堀尾に承知の旨返答を述られ夫より支度を整へ伏見へ赴き給はんとて從士は遠慮の爲纔に三十人を召連軈て伏見へ赴き給ふに今迄は無二の忠臣と見えし面々俄に心を變じ妻子を引連東西へと落失る者多かりしとかや斯て聚樂の御所は白井熊谷木村の諸將之を固め秀次公には住なれし聚樂の御所を立出て伏見街道大佛の邊を過させ給ふ處に遽に町々騷が敷成しかば秀次公怪しみ何事ならんと窺へば近江大和攝津の武士共腹卷に小手臑當して弓鐵砲鎗長刀を手挾み小路〳〵を固めしに秀次公大いに驚き給ひ斯の如くにては迚も父太閤の御前には參られまじ定めて爰にて害されん扨こそ木村が諫めを用ひざるこそ愚の至りなれと今更木村が謀計を思ひ出されしも誠に甲斐なき事なりけり秀次公思ふ樣所詮道にて雜兵の手に掛らんとならば潔よく自害爲こそ本意なれども死は一旦にして易く生は

にむせび久敷世を遁れ太平を樂と思ふ其間も無く又々弓箭執る可き時節到來と爲らん事是非もなき事共なり汝必らず他意を出す勿れと云ひ捨て奥へ入にける此折から秀吉には朝鮮征伐として諸將を彼地に渡し自らも肥前名護屋迄出張有しに朝鮮打負て和睦となり諸將朝鮮より歸り暫く事治りて靜か成しに再度事破れて又々諸將朝鮮へ渡海す然るに慶長三年八月の初つかたより太閤風と所勞に打臥れしが追々に重症と成れしに諸將大いに心を痛め色々に醫療其外手を盡されけれ共今は大いに疲勞強く成れしかば前田利家德川源君其外五奉行等を招き寄られ我れ松下が下郎たりしより織田に仕へ夫より戰場に百辛萬苦を積遂に位關白迄に至りし事誠に人臣の極と謂つべし然るに今は命數限り有て早黄泉の旅に赴かんとす我子秀頼今年六歲に成ぬれば德川前田の兩將は秀頼が後見と成て天下を治められ十五歲にも相成ば其時天下を秀頼に渡し給はれよ此儀偏へに賴み入なりと吳々の遺命を承て德川前田の兩將答へ申さるゝは御氣遣ひ爲給ふ事勿れ若君御成長の有迄は不肖ながら天下の政務は某し等兩人にて御引請仕つり御成長の後必らず還し奉つらんと堅く約束を爲られ夫より大老五奉行各々血判して誓詞を捧ければ太閤にも滿足せられ遂に慶長三年八月十八日六十三歲を一期として伏見桃山の城に於て薨じ給ふ是に因て尊骸を洛東阿彌陀ヶ峯に葬り國泰祐松院殿と號し其後　勅諚有て豐國大明神と神號を下されけるは誠に稀世の榮達なり

獄門に梟られ剩さへ簾中公達乳母妾三十餘人の者を獄門の前にて穢多の手に掛首を討しめしは無慚なりける事どもなり鳴呼秀吉那なれば罪を族人婢妾に迄及ぼすや君子は其事を惡んで其人を惡まず秀次罪誅に當らば誅して可なり焉んぞ他に及ぼさんや四海を有の君として佞臣の讒に迷ひ利弊の辨別なきは淺猿しかりける次第なり斯て石田三成は非圖の念愈々深く智謀の武士に交りを結び其内にも上杉景勝の老臣直江山城守兼續は智勇の聞え高かりしかば之にも深く取り入り文祿四年春の頃密に天下の大事を語り合しに兼續申けるは太閤薨じ給はゞ我は東國に旗を揚ん御身は上方にて起り給ふべし而して德川前田を討亡ぼし速やかに天下を握らんものと互に密謀を定めて立別れ夫より石田は奸計を以て奥州會津の城主蒲生飛驒守氏鄉を毒殺し一家中に騷動を起させ太閤に讒言して百二十萬石を沒收し其子忠三郎秀行に十八萬石を與へ宇都宮へ國替をさせ其上にて三成太閤へ申けるは奥州會津は大切の場所にて普通の大名にては保ち難し此城を保つ者は上杉景勝こそ然る可けれと云ふに太閤實に道理なりとて夫より上杉を會津に移す此時信州上田にては昌幸幸村民を休め士を養ふて四海の安危を考へ上州沼田にも信幸信尹同じく休養して在ける處に京都の騷動紛々と聞えけるにぞ昌幸父子大いに歎じ再度天下の亂起らんと薄氷を踏むの思ひをなし眉を顰めて居たりける時に慶長元年或夜幸村天文を察るに太閤の命數巳に盡て奸臣世を奪ひ四海亂るべき象なれば幸村父の前に出て世の狀況を物語りしに昌幸淚

にと有けるに石田心に思ひけるは我大望あれ共此所にては却て難かる可し幸ひ佐和山に立歸れとは事を謀るに最上なり是天の與するならんと心に悦び如何樣とも御下知に任せ候はんと答へければ源君直さま石田に暇を遣し給ふ此時側はらに本多忠勝在けるが源君に向ひ石田は度々君を討んと謀りし逆賊なれば七將の望みに任せて渠を害させ後難を避け給ふこそ好らんに其まゝ佐和山に歸さるゝは是虎を野に放つに異ならず早く石田を誅し給へと申せしかば源君笑はせ給ひ汝由なき事を云者かな殺すべき石田を生すは萬一の時用に立んが爲なり我天下を握るの種は渠なり早く七人の諸將を招くべしと有けるに忠勝は只平伏して在りけるが然にても如何成謀略にやと一人意を碎き考ふるも更に其由を知事なし夫より七人の諸將加藤肥後守清正福嶋左衛門大夫正則黒田甲斐守長政加藤左馬介嘉明淺野左京大夫幸長池田三左衛門輝政細川越中守忠興源君の前へ平伏しければ源君之に向はれ其許等石田三成を討て宿意を散せんと思はれ願ひ出し事甚だ宜からず如何にと成ば石田は元來江州石田村に出生し下賤なる者ながら故太閤の寵を承け佐和山に於て十八萬石を領せり是全く故太閤の寵あるが故なり然るを私意の爲害せんと爲は是故太閤の意に背き畢竟不忠の廉に陷いる事に候はずや然れど彼を其まゝ差置なば却て宜しかるまじと此度彼が役儀を放ちて佐和山に隱居させたりされば各々方の宿意も晴るならんと理非明白に述られしかば一同御尤もなりと承知なしたるに源君も限りなく悦び給ひ此騷動は靜りけ

德川源君深智の事幷上杉香指原に新城を築く事

斯て秀吉公薨じ給ひてよりは若君秀賴の後見として德川前田の兩將代る〴〵に伏見より大坂に到り政務に私意なく心を盡れしかば兩將の威勢は旭の昇るが如く是に因て石田治部少輔種種と工風を運らしけれども兎角邪魔と成は德川源君なるに因り此君を失はんと爲しけれ共天の祐くる名將なれば數度の難を遁れ給ひ石田は只怏々として居たりけり然るに石田には斯る大望の有ながら名將たる加藤福嶋黑田脇坂平野等とは不和にして互に恨み罵りける故本意を遂ざるも誠に宜かる事共なり偖て其翌年前田大納言利家病死ありしかば天下の政務は悉皆く德川源君の取計ひと成彌々威勢輝きける石田内々長束增田小西等と密談して源君を討んと爲れども未だ討べき手段も無りし内に淺野黑田加藤福嶋等の七人大いに石田を恨み德川源君に宛て〻石田を我々に賜れと連判にて願出しに源君も是には當惑せられ如何計はんと思はれけるが屹度一計を案じ出し石田を召れて申されけるは此度故太閤の諸將其許を賜はれと斯の如く連署にて願ひ出たり然れ共此家康罪もなき御邊を故なく彼等に渡す事は能う爲まじと思へども七人の者其元を害せんと爲る時は何共制する事能はず然るに因て家康考ふるに其許役儀を離れ佐和山へ歸り暫く休養して在ならば此害を免れて世も安く過されなん喬木の頂きは金丸の恐れ有とかや此事如何

油斷を窺ひ害せんと謀れ共何事もなく水口にて石田が長臣嶋左近燒討を掛んと爲すをも早く察して夜の内に馳通り此難を遁れて既に野州宇都宮迄到着せらる

石田が逆意源君の危難宇都宮迄出張の事共は他書に讓りて略しぬ

偖も上杉追討として集り來る軍勢には福嶋左衛門大夫正則息刑部正元掃部正賴池田三左衛門輝政同備中守長吉堀尾信濃守吉晴羽柴越中守忠興(本姓細川)淺野左京大夫幸長田中兵部少輔吉政藤堂和泉守高虎加藤左馬介嘉明中川修理大夫秀重馬有玄馬頭豐氏蜂須賀阿波守家政生駒讚岐守政一織田源五郎長益九鬼大隅守嘉隆金森出雲守長近仙石越前守久秀黑田甲斐守長政三好新左衛門入道淸海同新兵衛入道爲元等其勢五萬八千餘騎野に滿山に滿みちて雲霞の如く群りけるにぞ源君は上杉を征討せん事瞬く間に有と勇み給ひけり爰に眞田安房守は此趣きを傳へ聞石田直江が謀略とは夢にも知ず扨こそ大變出來せり我は故太閤の恩を蒙りて未尺寸の功をも報せざればイデヤ上杉の逆臣を討て年來の恩に酬んと沼田へも此由を達し安中にて一手に成宇津宮へと發向し源君に謁して五百餘騎を以て討手に加はりけり此時會津にては德川方の大軍押寄ると聞き大いに驚き假令當城鐵壁の如しと雖も三方の大軍に攻立られては爭防禦のなる可や降參より外道なしと色々と由なき評議なしけるを景勝は是を聞て大いに驚ろき急ぎ直江を呼びて汝我を勸め新城を築かしめしは却て德川へ不審を起させたるなり剩さへ德川の使者に對して大言を吐き

り斯て石田三成は增田長束小西等を會合して種々叛逆の密意を談じ其後佐和山へ歸城し會津の直江山城守が許へ密書を贈りて先約の如く逆意の色を立られよと勸るに直江は待設けし事成ば主人景勝を勸め何分當城は大切の堅め成ば要害無ては叶ふまじ案ずるに香指原に新城を築れて然るべしと申すに景勝聞かれ然らば德川方へ問合せ其上にて築く可しと有りしを直江打笑ひ天下の爲に領內へ要害を築くに何ぞ德川家へ伺ふ事の候や只速かに築立有れと遂に新城を築きしかば隣國より京大坂へ飛札を以て上杉景勝逆心せりと注進にぞ及びける

第二十　德川源君關東發馬の事幷石田天下の諸侯を集る事

奧州會津の城主上杉中納言景勝此度直江が計ひにて香指原へ新城を築き專ら合戰の用意を爲しけるに上方の間者共德川方へ注進し上杉逆意を企て國中に新城を築きけると告ければ源君大いに驚き給ひ上杉若逆意を企つる時は天下復大亂と成ん篤と其實否を糺さずんば有可からずと使者を送りて尋ねらるゝ處直江大言を以て罵詈の返答を致しければ扨は噂に違はず逆意に相違なしと使者立還りて此由申立しかばスハ一大事なりと彌々上杉追討の爲め諸國の軍勢を催ふし本多中務大輔酒井左衞門尉榊原式部大輔井伊兵部少輔松平美作守土屋右衞門大久保兄弟等の五千餘騎を率ゐ京都を打立關東へと發向有しに石田長束の面々折を見計ひ道々にて御馳走と稱し

大いに悦び徳川を討ち亡さん事掌中に在と彌々濃州關ヶ原を合戰の場と定め先手始めに伏見の城を攻落さんと夫より總軍を率ゐ發向にぞ及びける

眞田父子別れて上田へ歸る事幷後藤又兵衛遠謀の事

徳川源君は上杉征伐として宇津宮迄出張有ける處に上方より飛脚を以て石田三成逆意を企て天下の諸侯を語合君を害せんとて十三萬餘騎の大軍を率ゐ既に伏見の城を攻落したりと急を告來りしかば源君は大いに驚かれ斯て有なんには今爰に集りし諸將福嶋黑田加藤細川蜂須賀淺野眞田其他大小名に至る迄皆故太閤の高恩を蒙りし者なれば此面々にさへ心容されず味方と賴む者は僅五千餘騎に過ざれば今は吾が運も是までにて有ける歟如何はせんと暫くは眉を顰られしが諸將の心を引見んとて黑田淺野等其外の諸將を招かれ申されけるは諸將にも聞及ばれけん此度石田逆心を起し天下の諸侯を語合此家康を討んと企つる由然れ共家康は先君太閤の遺命に因て秀頼君十五歳に成給ふ迄は前田と倶に天下の政務を行ふ所なり然るに未幼年に在ます秀頼君を楯に取事を擧んと爲は石田には何なる名義を以て斯は計らふや其意を得ず極めて知石田我意を以て逆謀を企てしならん就ては家康已事を得ず此所より引返し攻登りて石田と勝負を決せん心得なり各々方は素より故太閤の高恩を受られし者成ば假令石田逆謀にもせよ家康に從つて大

彌々騒動を引出したる段是如何なる事ぞや抑々汝は父謙信公より無二の長臣となり智謀と云何暗からぬ故に父君も豫て汝を敬ひ國家の政務を汝に任せて米澤に於て三十二萬石の領主とまで爲されしに非ずや此高恩を忘却して汝却つて我に惡事を勸め逆臣の名を取すこそ大惡無道の振舞不束なりと涙を流して怒られしを直江山城守は意ともせず嘲笑ひて君には何とて斯程卑怯なる事を宣ふぞ臣不肖なれ共先君謙信公の御注目に預りし事故君を將軍職に昇し奉つらんと日頃心を惱まし漸く此度謀計を定めたる事なれば假令徳川何萬騎にて向ふとも之を破る事直江が方寸の内に之有候得ば必らず〳〵驚かせ給ふ事勿れと耳に口寄石田と合躰の事ども委細咄やきしかば景勝は始めて事の樣を知り然らば其手配りを致すべしと爰に心を決して頓て一家中に觸を廻し專ら合戰の用意を爲したりけり直江は夫より佐和山の城へ急便を以て豫て談せし謀計の如く徳川勢今途中迄發向しぬれば貴所早く上方にて旗を揚られよと申し送りしに石田は疾に諸國へ觸を遣し當時の勢ひにては家康なか〳〵秀頼公に天下は讓る間敷き間今の内徳川を誅す方然るべし幼君よりも此儀御下知ありと軍勢を招きしかば諸大名は石田が惡逆とは夢にも知ず秀頼公の御爲成と心得大阪に馳集る其人々には毛利中納言輝元岐阜中納言秀信嶋津兵庫守義弘筑前中納言秀秋備前黄門秀家長曾我部土佐守盛親立花飛驒守家重宗對馬守義知小西攝津守行長脇坂中務大輔安治を始其勢十三萬八千餘騎頃は慶長五年七月十九日大坂にぞ集りける三成は

計り候へと申ければ忠勝笑つて此事君御心を勞させ給ふ事勿れ眞田如何成謀略有り共上田へ歸る事叶ひ候まじと申上る源君驚き給ひ汝如何成謀計や有忠勝斯樣〳〵に候と耳口ければ源君其義誠に良計なり一時も早く行ひ候可と有しに忠勝畏まりぬと勇臣梶金平七里長九郎と云へる兩人に命じて裸馬に打乘せ晝夜の差別なく沼田の城中信幸が妻おすみの方へ遣はし何やらん密書を贈りける是本多が深き謀計なり爰に福嶋黒田淺野等の面々には源君へ返答の儀に付種々評議すると雖も石田が下知に從ふを快からず然りとて大坂に弓を彎は道に違ふなど取々に言爭ひし內黒田が長臣後藤又兵衛基次長政の前に進み出抑〳〵故太閤天下の事を德川前田の兩將に任せ置幼君秀頼を託して薨去有しが前田は旣に病死して今殘るは德川君一人なり然らば此天下は必らず二ツに分るべし因て某し熟考するに此度は先石田を討亡ぼし其後秀頼公の十五歲に成給ふ時德川君彌々天下を返さゞるを見て德川君の罪を鳴し天下の諸侯を語合之を誅し其上にて天下の事は如何樣にも圖る可き事ならんと申しければ長政大いに悅び福嶋淺野蜂須賀等に此趣きを談ぜんと直さま福嶋が陣にぞ赴きける

第廿一　黒田孝高法體の事幷長政福島正則を說事

抑々後藤又兵衛基次が主人長政に勸めし謀計は主家をして天下の主に爲んと思ひ立し事にて其

坂方に矢を放つ事は能う有まじイザ是より大坂へ參られ早く家康を敵に引受られよ家康少しも恨む所には非ざるなりと皆夫々に暇を賜りければ諸將各々色を失ひ顏見合せて在ける內黑田長政進み出て此度思ひも寄ぬ上方の大變我々元來豐臣神君の高恩を蒙りし者なれば大坂方に弓矢を放つ可き道は之れ無き所なれども眼前石田が下知と有りては何分合點の行ぬ事ども多く候ゆゑ只今の御諭しについて即座の御答へは仕つり難し一度陣に歸り篤と思案の上存じ寄申上候はんと述べけるに面々も是に同じて何分御返答暫く御猶豫有べしと各々陣屋〳〵に歸りける扨も昌幸は陣に歸り一族を集め申しけるは此度思ひも寄ぬ石田が謀叛の次第は幼君秀頼公の御爲と有て天下の諸侯を語合し事なれば誠に勇々敷一大事と存ずるなり他は知ず此安房守は是より引返し上田に歸りて德川君にも付ず大坂へも付ず居ながら其合戰を見るべし勿論大坂に在ます幼君の御大事と有らば隨分と力を盡す可し畢竟石田が逆意には與せざるなり併しながら諸將の評議も之有る事に付信幸信尹は當所に在て諸將の申旨に隨ひ德川方に忠勤を勵む可しと申含め穴山近藤青山別府海野寛相木增田畔柳由利木辻三輪淺香を從へ其身は二百五十餘騎にて源君に暇を請ひ上田へぞ歸りける源君には昌幸が上田へ歸りけるを何共心得難き事に思され本多忠勝を招きて福嶋淺野蜂須賀等の面々未だ一人も答へなきに眞田一人は他に相談もなく伊豆守隱岐守の兩人を殘して上田へ歸るとの事合點行す是必ず石田に與せし者ならん汝彼を上田へ歸さぬ樣

る可との事有ば先此度は家康公に随ひ石田を討て日頃の意趣を晴し此後秀頼公十五歳に成給ふを待て家康公彌々天下を讓らざる時は兵を發して家康公の罪を鳴し之を討伐して其上天下の萬端を定めんと申しければ正則此儀道理成と承知し他の面々に告しにぞ旗頭たる福嶋正則得心の上は誰か否と云ん評議爰に一決し急ぎ此事返答を申さんと源君の本陣へぞ赴きける

眞田昌幸父子大謀內意の事幷信幸が室安中口を固むる事

德川源君が今の有樣は只運を天に任せらるゝより他事なく夜も早巳の刻に及びて諸將の返答も未だ有ざれば福嶋黑田淺野蜂須賀等は必定變心爲し大坂方に身を寄し事ならんと大いに歎じ思はず聲をあげて呼び給ふ所へ黑田長政參上せりとの注進に限りなく悅び給ひ早速奧へ請じければ長政直に入來りて申けるは我々先達て罪を糺し誅せんと迄願ふ程の石田にて候へば假令秀頼公の御名を藉て逆意を振ふ共何ぞ是に與せんや願くは君に随ひ黑田福嶋等と眞先に進み此奸賊を征討仕つらんと評定一決せしに付此義言上に及び候と述べしに源君長政が手を取て此家康を然程迄に思はるゝ段忝けなし我死する共忘れず此恩賞には平定の後筑前一ヶ國を貴殿に參らせんと大いに感賞せられ吉光の一刀朧夜と云を當座の褒美に賜はりければ長政は面目を施し陣所へ歸り此趣きを後藤に語れば後藤は大に歡び然ば事の手筈に取掛らんと急ぎ用意を調へける

仔細といつぱ長政の父官兵衛勘解由次官孝高は智謀衆に超し良將にて常に天下を望み有けるが或時秀吉公孝高を召れ酒宴を催し尋ね給ふは如何に孝高今天下に英雄豪傑多く有と雖も天下を保つ可程の者は誰と思ふや孝高打笑ひ某し如き者の爭でか之を知る事を得べけんや秀吉公我試みに論ぜんと思ふなり先言ふて見給へ孝高已を得ず某し考ふるに當時天下に威名高く天下をも掌握すべき者は中國の毛利輝元成べし秀吉公莞爾と笑ひ誠に輝元は　平城天皇の皇子阿保親王の後胤關東の執權大膳大夫大江廣元十五代の裔元就が孫にて今十餘ヶ國を切從へ其威破竹の如くなりと雖も是皆父祖の餘德にして輝元が器量の爲るに非ず然れば何ぞ天下を保つ事叶はんや其外に一人有知ざるや孝高驚いて問ふ秀吉公眼前に在と孝高眼前とは何れに居るや秀吉公即ち其方なり孝高大いに驚き額に汗を流して何條愚昧の某し斯る大器に當らんやと答へしが孝高は我胸中を太閤に見拔れ針の莚に座する心地して其日の酒宴を退出し我舘に歸り所詮太閤に見拔れし上は我身の命も危しと夫より世を悟り直さま入道し是迄の望みを水の泡に爲んと云心にて如水と號し家督は子息甲斐守長政に讓りて隱居せり此事又兵衛豫て知り居ければ此度心中に大望を企てしなり然程に長政は基次が勸に依夜を冒して福嶋が陣に赴きければ福嶋大いに歡び奥へ請じて評議の事共尋ねしに長政答へてされば某し存ずるに假令大坂へ弓矢を向る事能はずと雖も石田の下知には隨ひ難し案ずるに故太閤の遺命に幼君十五歳に成給はゞ天下は此君に讓

信幸は關東方と成り父昌幸は大坂方と成て上田に立歸る昌幸は其方が爲には舅なれ共敵方となりて上田に籠らば天下の一大事と成べければ安中に關門をする眞田父子を上田へ通す事勿れ此儀其方に告る間 夫信幸が忠節を翼け早々其用意有べし油斷すべからずと認めたりおすみの方驚きながらも承知の旨を返書に認め密使を歸し夫より直さま家老根津甚兵衛望月宇兵衛加嶋權之助等を引具しておすみの方自身中陣に備へ沼田の城には深江庄兵衛瀧川茂兵衛を留め置三百餘騎にて安中へ出張せしは勇ましかりける振舞なり是宇都宮にて忠勝が德川源君に囁さし謀計なり斯る事とは夢にも知らず昌幸幸村は穴山小助由利鎌之助淺香鄉右衛門近藤無手之助青山彌七郎別府若狹海野六兵衛穴山新兵衛筧金六郎相木森之助增田九郎同荒次郎同虎之助三好惣兵衛畔柳九郎明石又七郎三輪琴之助木辻別右衛門根津甚八同庄之助笈川八內野呂兵部赤坂式部筧政右衛門間部日向馬塲惣市猪口半兵衛梁田新八目方兵馬岩野左京種ケ嶋丹三郎小宮山數馬穗入登之助松崎藤兵衛植嶋東馬植田久右衛門春田傳助惣勢五百餘騎にて已に安中に臨みける處に山の難所に砦を構へ亂杭逆茂木大石大木を以て立塞ぎ柵の蔭には弓鐵砲を揃へて旗幕には六文錢の旗を翻がへしいと嚴重に備へを爲て有ければ眞田勢大いに驚きソモ如何成敵にやと能々見れば正しく沼田勢なれば急ぎ此趣きを中陣の昌幸にぞ達しける

是に於て關東勢は大に勇みイデヤ是より引返さんと慶長五年七月下旬野州宇都宮を陣拂ひして濃州關ヶ原へと赴きける誠に德川家天下を握るべき洪福の程自然の事と思はれける爰に眞田昌幸は宇都宮に於て信幸信尹の兩人を殘し幸村を引具して上田に歸る道すがら語りけるは太閤の遺命に因て前田德川の兩君秀賴君の後見と成りしが前田氏は旣に病死し天下の政務は唯德川の心にて執行ひ給へば此上秀賴君十五歲に成せ給ふ共家康君天下を讓り候事勿々有可らず然れば天下に亂を生ずる奸臣有かしと思ひ居たる處に此度石田氏佐和山にて秀賴公の名を藉り亂を發し上杉は會津にて逆意を起す段好き時節到來せるなり因ては先石田が逆意に與し家康君を討て其後石田を誅せんと最易かるべし且又宇都宮に集り居る福嶋黑田淺野蜂須賀等是皆故太閤恩顧の者共なれば是も大坂に屬すべし然る時は家康君關ゲ原に出張有とも上方の大軍を以て攻立ん事石を以て鷄卵を推に異ならず早く上田に歸り籠城して關東より秀忠が進發するを支へ申さん其内には德川石田が爲に滅亡せん是豐臣家の後難を遠くる謀計なり伊豆守隱岐守の兩人を德川方へ殘し置たれば家康心を弛め萬々首尾全からんなどゝ密談なしつゝ夜を日に繼で上田へ赴きける然るに上州沼田の城には信幸が妻本多忠勝が息女おすみの方夫に代りて國政を司どり用心堅固に城を護る處七月廿日の夜に宇都宮より父本多忠勝の密使梶金平七里長九郎の兩人馳來り書面を城中へ贈りけるをおすみの方不思議に思ひ急ぎ開き見るに此度石田が逆意に付汝が夫

にもせよ戰國の習として安々御通し申す事爲し難く斯る場合に至りては骨肉の間却て事六ケ敷候へば心苦しき事ながら彌々御通りと成らば一戰の御用意有れかしと此旨舅御へ宜なに傳へられよと申ければ別府大いに驚きコハ思ひ懸なき仰を承まはる者かな此度父君の上田へ歸らせ給ふは父君には素より故太閤の厚恩を受られし御事ゆゑ大坂方へ弓を彎せ給ふに忍びず因て上田へ歸城なしけれども兎角諸將の評議も心許なしとて乃ち信幸信尹の兩君を德川の方へ殘されし事なれば然まで御疑ひには及び候まじと申しければおすみの方大いに怒り汝我を女と侮り辯舌を以て欺むかんと爲るか欺くとも爭で欺むかれん夫の爲に留守を護るに何とて安々領內を通さんや此事早く父上に申上よと言ひ放ちければ別府は力なくも其儘立歸り昌幸が前へ出て此趣きを申ければ昌幸大いに怒り憎き婦の一言かないでや此關を打破りて押通らんと威猛高に成て憤りければ幸村傍はらより立出で必ず御怒りを發し給ふ事勿れ我々此關を打破り候事はいと安き事に候へ共兎角唯今の處にては味方一人も損ずる事宜しからず穩便にして通らんとこそ願はしけれ今一度某しより言葉を以て申し送らんと昌幸を宥め制して別府を呼出し汝今一度敵陣へ赴き斯樣〳〵に申し開けと申ければ別府は最初の使者に手懲りして迷惑には思ひけれども主命なれば是非なく再び安中へ赴き案內を申入るにおすみの方此度は大いに怒り必ず陣中へ入る事勿れとて取合ざるを別府種々に賴み漸々にして陣中へ呼入らる別府陣中に至りて見れば弓鐵砲の

第廿二　眞田信幸の室勇氣の事幷左衛門佐幸村即智の事

然程におすみの方は安中に出張して昌幸が上田へ歸る道を嚴重に立塞ぎ要害を守りて上田勢を一人も通さゞりしかば昌幸大いに怒り子の身分として父に敵對段奇怪の至りなり踏破りて打通れと下知しければ幸村大いに制して是には正しく仔細有らん嫂の事成ば何分此方より使者を送りて上田へ歸る由を告げ唯關を開き候樣にと懇切に仰せ遣されて候はゞ那か父君に刃向ふ事有べきや兎角穩便の御振舞然る可しと申しければ昌幸然こそと心付別府若狹を使者として事の次第を委細に申含め遣しければ若狹は直ちに安中口へ赴き陣に至て昌幸が使者別府若狹來りし由を通じければ家老根津甚兵衛立出んと爲けるをおすみの方押止め其許出るに及ばず我身自ら返答すべしと立出て直に別府を陣中へ通しければ別府謹んで御父君樣より仰越れ候は此度仔細ありて上田の本城に立歸らんとする所に何なる譯柄にや此處に關を設けて我が軍勢の道を支へられし事甚だ以て其意を得ず舅の事成ば陣中に待請て饗應をも致す可にさは無して却て戎器を輝かし敵味方の色を顯はす事戰國とは云へ近頃不審千萬なり早く關を開き通すべしとの御事にて候なりと述ければおすみの方之を聽き御父上の仰せ御道理には存じ侍れども此度宇都宮に於て夫信幸は關東に從ひ父上には石田方に一味爲し給ふと有しに就ては天下の爲假令舅御の御事

て感ずる計なり

眞田安中を越上田に入る事并本多忠勝信幸を說事

別府若狹昌秀は漸々安中の關を開かせ心に歡び陣に歸りて昌幸に斯と申ければ昌幸大いに歡び然らば通らんと軍勢を引纒め安中口の陣に到りける陣中よりはおすみの方立出で昌幸幸村を請じて樣々に事の仔細を敷幷べ夫より久敷打絶御對面申さゞる事なれどいと丁寧に挨拶し昌幸も久々の情を陳べ軈て尋ねけるは去年孫を儲し由なるが此陣へは伴ひ來らざりしや初孫の事なれば上田へも連來るべきに亂國の習ひ是非もなしと云はれければおすみの方歡びて此陣へ連來り候只今初の御對面願ひ候はんと乳母を呼出し今年二歳に成ける源次郎を昌幸が前に差し出せば昌幸一目見るより抱き揚げ淚を潸然〱と流し扨も〱信幸に能う似たるかな其名さへ源次郎と付しは信幸が幼名實に能も心付候かなと其悅び一方ならざれば幸村も共に歡びの色を顯はし賞そやしけるにおすみの方は我子を譽らるゝ事の嬉しさに心も打解關を悉皆ゝ開きて昌幸を難なく上田に歸しけり斯て眞田伊豆守は斯る事とは夢にも知らず關東方に隨ひて宇都宮の陣に在けるが本多忠勝密に信幸に語りけるは父昌幸弟幸村の兩人上田へ歸るは偏に大坂方に心を通じ籠城せん爲なるべし如何となれば石田治部少輔三成の妻は御身が母公の妹なり且又弟幸村が妻も

固め嚴重にして少しも油斷有ざる樣子に怯ながらも入來るにおすみの方遙に別府を見て如何に別府最前言葉を盡して返答せしに何とて再び來しぞ別府答てさん候再び參る事餘の儀に非ず父君には異心なし疑ひを散じて關を開かれ候へとの事なりと云しかばおすみの方彌々怒り親にもせよ夫信幸の爲には敵と成し上田の兵を奈に申すとも安々關を通さんや早々歸れ由なき詢言申すまじと味もなく追出せしかば別府再び何とも申し樣なく誠に七人の子はなす共女に心許すなとは此事なり信幸公の御心察し入ぬと呟きながら次の間へ立出ればおすみの方是を聞き聲を放ちて別府氏暫時待れよ只今は何と呟きしぞ別府イヤ何も申たる事なしおすみの方哂ひて卑怯なり匿すに於ては其儘には歸すまじ疾言ひ給へと手早に長刀抱へ込ズッと夫へ出られしに別府今は是非なき體にて如何にも只今七人の子はなす共女に心許すなと申たり其故は信幸公御父昌幸公と互に吳越と成て別れさせ給ふも此度の合戰關東方勝利を得ば信幸公父君方を庇陰はれ大阪方勝利たる時は父君信幸公の方を救はれんとの御謀計を約されし事なれ共奥方には正敷本多忠勝殿の御息女にて在ます故信幸公此事を隱し置れし事と存じ候なり誠に深き御賢慮かなと申ければおすみの方聞より大いに驚き扨は我夫信幸公には自らを敵方の娘なりと疑ひ給ひて奥儀を告させ給はざりしか恨しき事哉と暫時躊躇て在しが屹度心を定め關を開き申べし父君御心易く御通りあれと申されよと打て變りし一言に別府は生たる心地して扨こそ幸村の謀計當れりと始

はつと平伏て心中に此君こそ一命を差上惜からずと爰に猶も無二の志操をぞ生じける夫より兩人は暇を申し受て江戸に在ます秀忠卿の許へ赴かんと急ぎ支度を整へ出立し先安中へ立寄り父弟の兩人に對面して諫言を加へんと日を急ぎ安中に來たりて見ればはや兩人は此關を越え上田へ籠りしと聞き信幸案に相違して一先沼田の城へ歸へりける信幸が此行一兩日を早からしめば昌幸等安々安中を踰る事能うまじきに斯く行違ひしてこそ後に至りて一家二つに引分るゝ基ゐとは成にけれ

第廿三　信幸上田へ使者を送る事幷徳川中納言甲府出發の事

偖も信幸信尹の兩人は二百五十騎を引卒して安中に到りて見れば父弟は早上田に入しとの事に一まづ沼田に歸り直さま江戸へ赴かんと道を急ぎし處に思ひも寄ず向ふに我家の定紋を染出したる旗風に翻へり其勢百騎許にて沼田の方に進みしかば不審しく思ひて間しむるに餘の人ならず内室おすみの方にて有ければ信幸大いに驚き列を離れて追付如何成故に出馬はせしと尋ねければおすみの方も大いに驚き兎角の會釋もそこ〳〵に偖も情なき良人かな假令我身は關東方の本多の娘に有るにもせよ一旦他家へ嫁したる上は何ぞ所天を打捨て携貳の候や幷を御推量も匆々に御氣遣の有る事とはテモ聞えませぬ御事哉と泣つ恨みつかき口說は信幸再び驚きてコハ

大坂方の大谷刑部少輔吉隆が娘なれば旁々以て大坂方に與し候事疑ひなし然れ共御身は正敷此忠勝が聟たる故此陣に殘し置たる事なり然る上は御身は引分れて隨分と當君に忠を盡されよ依ては何卒昌幸幸村を宥め大坂方を背きて關東に隨ふべき樣に計ひ給へ此事偏に御身の心中に在り必らず麁略に思ひ給ふな殊更昌幸幸村の兩人を上田へ歸し置時は主君の爲御身の爲後々の災厄なり能々思慮せられよと言葉を盡して申しければ信幸大いに驚き某しは素より大坂方に與する事之れ無く飽までも關東に忠を盡さんと思ひ居る事なれば父弟の兩人へは何にも諫言を加へ申すべし先某しは直さま關ヶ原に向ふべけれ共中納言秀忠公に參候して木曾路より打立ち頓て源君に拜謁仕つらん父弟の事は必ず必ず關東方に歸伏致させ申べし殊に伯父にて候隱岐守は豫て源君に隨ふの心有ければ是をも伴ひ參るべしと答へしに忠勝大いに悅んで然らば跡より參られよ萬端違ふ事勿れと申して立歸り此事委細に源君へ披露なしければ源君限りなく歡び給ひ急ぎ眞田を召れて申されけるは汝務めて忠を盡せ我死す共忘るまじ且又父昌幸弟幸村の兩人は予を捨て上田へ歸ると雖も之を恨むるに及ばず其故は兩人の心に取りては故太閤の高恩を思ふて假令石田が逆意にもせよ大坂に向つて弓矢を放つは爲に忍びざるの處より餘儀なく引籠りしならん是大丈夫の勇なり義なり其心志深く感じ入る所なり然れば此事少しも心に掛ず偏に此家康を捨ずいつ迄も變心なく忠を盡くし候樣賴むなりと兩眼に淚を浮めて申されしかば信幸信尹

其後信幸は江戸に赴きける近藤次郎右衛門は上田に到り城中に入ん事を乞ければ幸村下知して塀の上より長き綱を下沼田よりの使と有ば從者は入事を許さず一人此綱に取付登り候へと申させしに近藤次郎右衛門是非なく從者を城外に殘し綱に取付引上られて城中に入本丸に到りければ中央に昌幸ツト出で怒れる顔色にて親子の道を斷て無道に與し變約の關東方に隨ひ剰さへ安中にて我軍の上田に歸を支へ其上今日其方を當城に來らしむるは全く此昌幸を關東に引入んとの事成べし以ての外なる倅が心底何ぞ德川に隨身せんや近藤如何にと有しかば近藤は何と答へん樣もなく默然として居たりしかば夫追出せと亂妨に城外へ追出され使の口上一言の申し出も成り難く悄々として沼田にぞ歸りける斯て江戸中納言秀忠には源君よりの飛札に依て木曾路より關ケ原に出張せんと軍勢を催促有程なく江戸に馳集る人々には本多佐渡守正信大久保相模守忠隣森右近大夫忠政毛利民部大輔高政中山藤兵衛尉直純有馬修理大夫義純佐竹右京大夫義宣伊達陸奥守政宗北條相模守氏直奥平美作守信昌同九八郎家昌小笠原隱岐守土井大炊頭鍋嶋信濃守山内土佐守本多隼人佐松平信濃守松平土佐守樋口内藏介眞田伊豆守同隱岐守高山伯耆守等を始として惣勢十三萬七千餘騎江戸表を發向して木曾路を差て赴き給ふ此由信州上田へ聞えければ眞田父子偖は秀忠大軍を率ゐ彌々出馬に及びしか此回の軍こそ一大事なれば此大軍を喰止むるの手段施略には成り難し手始は何にて合戰を挑まんと種々に評議を運しける所幸村申ける

何事を申さるゝぞや父君幷びに弟幸村は舊恩を思ふて大坂に從ふと雖も某しは德川君の重き御情に依て關東に隨ふなり併ながら全く父弟を見捨るに非ず何卒諫言を加へ關東方に隨へんと安中迄赴きしにはや上田に入城の由を聞しゆゑ力なくも一先沼田に歸らんとする所に思ひも寄ず其方に逢ぬるゆゑ不思議に思ひ尋ぬるなりと申ければおすみの方答へて此度石田が逆心に因て父君ならびに幸村殿上田に歸らせたまふ事なれば安中に關を設けて是を支ゆべし然る時は信幸を跡より遣す間必ず〳〵怠慢事勿れと父忠勝より申し越有るにつき兵を引連安中迄出張し新關を構へて待かけ隨分堅固に守る所父君方より別府若狹來りて斯樣〳〵に申せし故扨は我夫妾に御心許されぬかと御恨み申すも此事にて候何故に始めより御申聞は下されずやと申しければ信幸暫時憮然として在しが稍あつて我全く然やうの心有に非ず是正敷我弟幸村に僞り謀られしものならんと聞よりおすみの方拳を握り大いに怒り扨は欺かれしか口惜や斯る事とは夢にも知らず夫に不覺を取せしかと切齒を爲すを信幸制して元來幸村は僞計の多き者にして十四歳の時に上杉北條の圍みを破り難なく上田に歸りし程の事有れば女將の固め位は打破りても通る可きを言葉を以て通りしは是穩便を第一と爲し事ならん然れば必ず怒る事勿れと慰めの言葉に漸やく安堵なしたりけり斯て信幸は沼田に歸り兵糧等の手配りして夫より江戸へ赴かんと近藤次郎右衛門に命じて上田へ遣はし父君に斯樣〳〵諫言して關東方に隨心有樣に取計らへと申含め

を塞ぎ君の出張を妨げ申候とぞ告たりける秀忠大いに驚き給ひ眞田伊豆守を召れて上田の昌幸父子道を遮り進軍の妨げを爲す由なり然れば是を打破りて通る可きなれども日數を費さば關ヶ原の合戰に後るゝ事の心許なければ其許上田に使者を立て昌幸に道を開き通さする樣計ひ候へと有しかば信幸畏まりては候へ共父昌幸弟幸村の兩人は迚も某しが説得を聽入可とは思はれ兼候間此上は某し先陣に進み討て出假令上田勢如何程の奇計を爲と雖も眞先に打破りて道を開き申べしと勇氣面に顯れて申ければ中納言涙を流され偖も父君の宣ひしに違はず父弟の大坂方に在をも顧りみず關東に從ひて無二の忠勤を爲す事實に開國の元功と云可なり嗚呼忠なる哉と感賞せられ稍あつて然れば其許には後殿を爲せ先手は森右京太夫たる可しと有しに信幸は心ならずも後陣にぞ加りける是偏に秀忠の深き賢慮とぞ知られける斯て諸手の勢揃ひ調ひければ二陣には本多佐渡守三陣には大久保相摸守松平土佐守等惣勢十三萬餘騎安中に差掛り向ふを見れば眞田勢百五十騎程左右の山の手に砦を築き大筒三挺銃口を揃へ待掛たりしに森右京大夫一番に進みスハ一懸に追崩せと鞍上につゝ立揚り下知すれば關東勢五百騎許關を發て進む所に三挺の大筒一時に動と鳴渡れば黒烟四方に散亂して面に進む五百餘騎皆擊据られて飛散ける此有樣に其餘の勢も重傷輕疵の數多く散々に成て打負しかば後陣は其まゝ進みかね軍評議に日は早巳に暮にける森右京大夫は今日の大筒に落胆し本陣に歸りて此趣きを言上致しければ秀忠暫時は口

は江戸よりは木曾路を進軍して關ヶ原に後援を爲す事なれば當城にて支へんより安中松井田邊迄押出し候方然るべし其上敵の旗色次第又々引戻すとも遲かるまじと評議一決し夫より穴山小助近藤無手之助依田兵部山下清兵衛齋藤佐太郎別府若狹の六人に百五十騎を添安中の東西に砦を構へさせ關東勢到らば一人も殘らず討取んと左右に大筒を備へ後陣の一手は春田彌十郎海野六郎兵衛穴山新兵衛筧金六增田九郎同荒次郎畔柳九藏の七人同く百五十騎を率ゐて松井田宿の左右に砦を構へ安中若破れなば玆にて防がんと用意し同じく一手は由利鎌之助明石又七木辻別右衛門三輪琴之助野呂兵部植田久左衛門赤坂式部の七人是亦百五十騎にて輕井澤をぞ固めける扨又城中には小宮山數馬岩野左京穗入登之助種ヶ嶋丹後猪口半兵衛間部日向守等二百五十騎月方兵馬松嶋藤馬淺香鄉右衛門等は二百餘騎にて口々を固め遊軍には幸村根津甚八貞盛筏川平內盛春百五十騎羽州龜田の領主三好新左衛門入道舍弟新兵衛入道百五十騎にて控へ本丸には昌幸其勢二百餘騎惣軍都合千二百餘騎勇み進んで待かけたり

昌幸父子上田出張の事幷安中合戰大筒の事

扨も關東勢は十三萬七千餘騎にて頃しも慶長五年七月廿五日中仙道を深谷まで發向ある所に斥候の者ども立歸りて信州上田の眞田昌幸小勢とは云ながら既に輕井澤松井田安中に砦を構へ道

兵衛尉森右近大夫等跡に續いて控へたり信幸はイデ此手を破り秀忠公の御感に預らんと眞先に進みて下知する樣例へ敵は父弟にもせよ順逆の爲互に鋒頭を接するなれば者共一寸も引なしと勵ましけり

評に曰く眞田幸隆大砲三門を製し死に臨み子昌幸に告て云く汝苦戰の時此砲を用ひよ尋常の戰爭に決して用る事勿れと昌幸之を領承し深く倉庫に納めて用ひず然るに其後太閤多くの金銀を抛擲ち數多の大砲を鑄造させければ是より諸國に此品多なりて今は秘藏するも益なき事と成たれば幸村即ち之を用ひしなり然るに幸隆が製せし品は木を以て造りし物故二度は用ひ難し此度の合戰に翌日忠隣の目を愕かせしは幸村が即智にて材木を切倒し遠望に實物と見せ掛しとなり

第廿四　鷲尾次郎助勇戰討死の事幷關東勢先手敗軍の事

去程に眞田左衛門佐幸村は關東の大軍を挫かんと安中に大筒を据て敵兵を打破り再び後の山手に於て大筒の仕掛に敵の膽を寒からしめ頓て不意に後より攻破れと手筈を定めしかば穴山近藤の兩人は右の方に埋伏し山本齋藤の兩人は左の方に埋伏して其日の軍を今や遲しと相待ける斯て信幸信尹は豫て父昌幸に聞及びし故大筒の再び用に立ざる事を知と雖も倘先を揃へて山の手

を閉て在せしが偖其大筒にて手負死人は何程有しぞと有しに忠政然ばにて候其大筒は響ごく雷の如く五六丁が間は黒煙となり丸は火煙の中に散亂して即死する者凡二百餘人手負百餘人其外煙に咽びて物の用に立ざる者數知ずと申し延べけるに秀忠舌を卷扨々恐敷もの哉兎まれ伊豆守を呼來れと有しに信幸頓て參上す秀忠之に向はれ今日眞田方にて安中に搆へし大筒とは何と云武器なるか其許知たるや信幸笑つて此大筒は父昌幸造りしにも非ず祖父幸隆心を勞して工風せし物なり豫て父昌幸申候には此武器は至難苦戰の時にてこそ用うべし常の合戰には用ふ可らずと秘置き小勢を以て大軍を破る器物にて候併ながら一度發して再び用ゆる事能はず其故は一度發せば筒碎けて用を爲ず今日用候上は最早後日の用には立申さずと答へしかば秀忠笑ひ玉ひ扨は怖るゝに足ず然ば明日攻破らんと急に大久保忠隣に一萬五千の兵を添其翌日又々安中へ向はせける所に大筒は元の如く三挺懸りて有ば忠隣大いに悸れて進み得ず本多佐渡守尋ねて何故に進み玉はざるや忠隣あれ見玉へ昨日伊豆守が申せしと違ひ又新成大筒懸れり是は如何にと申されければ本多正信實にもと驚き本陣へ歸りて此由を言上致しければ秀忠公再び信幸を召れ尋ね玉ふに信幸眉を顰めて祖父幸隆より傳來するは三挺より外無りしかば新に有べき樣なし願くば某し先陣に進み樣子を糺し候はんと申しければ秀忠然らば其許能見屆け來るべしと有しに信幸畏まりぬと同隱岐守と倶々五百餘騎にて安中に馳向ふ本多佐渡守大久保相摸守松平土佐守中山藤

夫の面々一萬五千餘騎にて働きける砦よりは別府若狹依田兵部命を捨て戰ふと雖も敵方の威勢強くして已に砦破れんと見えける處に後陣の方より黒烟を立て鬨の聲聞えければ眞田森大久保本多松平一萬五千餘騎大いに驚き扨は本陣危きぞ援はずんば有べからずと我も〳〵と引返せば右の方より穴山小助山本清兵衛鐵砲を雨の如くに打掛〳〵鬨を作りて討出し左の方より齋藤佐吉郎近藤無手之助鎗を横たへ穗先を揃へて突て掛れば關東勢前後に切立られ足元亂れて見えけるに砦よりも依田兵部別府若狹討て出れば敵勢今は三方より掛散されて右往左往に敗走せり

三好清海同爲三勇戰の事幷鎭目市左衛門戰死の事

此時秀忠卿は中根口の陣所に在て先手の勝利を悦び居られし處に思ひも寄ぬ山手より鬨の聲響き六文錢の旗高崎板鼻邊より後陣へ向つて攻寄來り安中よりは同じく本陣指て押寄せ羽州龜田の領主三好新左衛門入道清海同新兵衛入道爲三小宮山數馬種ケ嶋丹後五百餘人右に備へ左には眞田左衛門佐幸村由利鎌之助淺香郷右衛門根津甚八植田久左衛門五百餘人一手は松田彌十郎淺野六郎兵衛木辻別右衛門三輪琴之助筧金六間部式部穗入登之助五百餘人同じく秘術を盡し攻立るに關東勢は大いに恐怖し落行者こそあれ進まんと爲者一人もなく戰はざるに敗走することこそ見苦けれ斯と見より秀忠卿は奥平美濃守中山藤兵衛北條相摸守本多隼人佐等八千餘騎にて高崎差

に据有ば如何成幸村が謀計にて再び用ふるやと少し心に臆したれ共何程の事有んと眞先掛て進みければ大久保本多松平の面々我も〳〵と寄せ掛け已に砦際迄來りける時信幸例の大砲を能々見れば是れ正物には非ずして材木を敷き幷べたるなれば信幸莞爾〳〵と打笑ひ扨こそ我が考へに相違なしと始て安堵の思ひを爲し敵は僞りの謀計を設けしぞ我に續けとて敎圍荒く下知すればば幸村コハ叶はじと雨の如くに矢を射掛れ共沼田勢は事ともせず我先にと進みしかば上田方より鐵砲の達人依田兵部と云者狙撃に敵八人迄を打倒せ共沼田方の勢は死骸を乘越〳〵進みける爰に信幸が郎等に鷲尾次郎助中根但見黑瀨孫七郎中山九郎次とて四人の剛の者他人に勝れて切入七八度迄驅立けるを依田兵部是を見て憎き振舞哉いで一討に此世の暇取せんと狙を濟して火蓋を切れば過たず鷲尾が左りの脇腹を打貫けり鷲尾は呀と云つて馬に堪らず眞逆さまに落けるが流石に大剛の者右の手を突き立上る所を砦より依田が郎等彌八郎走り出六手と組鷲尾痿まず左の手にて彌八郎が鬢毛を攫み暫時揉合爭ひしが深手負たる悲さに鷲尾は身體自由成ずしてアハヤ彌八郎が爲に討れんと爲ながら又も起掛るを彌八郎組伏首を切てぞ立たりけり鷲尾は無念の餘りにや首を切る〻時彌八郎を發打と白眼で其首生るが如くなりければ彌八郎恐敷思ひ其日の暮頃狂ひ死を爲たるとかや信幸は眼前に味方の剛臣を討れたる口惜さに矢玉を怕れず亂杭逆茂木を引退〳〵終に敵中へ攻入りければ是を見て本多佐渡守大久保相模守松平土佐守森右近大

を避ながら互に秘術を盡し合ひ暫時は挑み戰ひしが清海は持たる棒を切落され叶はじと思ふ所を宗茂得たりと太刀取延し冑の天邊を打挫しかば清海は餘りに打れて眼暗み神亂れ鞍壺に據て居たりしかば宗茂は太刀投捨てむづと組付曳や〳〵と揉合しが鎭目の力量や勝れけん清海を取て引寄アハヤ首打落さんとせし後より三好爲三走り來り市左衛門が鎧の袖に手を掛て引倒さんとすれば鎭目は片手に清海を攫み片手に爲三と揉合互の勝負見えざる中老體の果敢なさ二人の敵に當り難く鎭目は終に討れける然れど鎭目が討死に因り秀忠には危き處を遁れ給ひ高崎まで引取れければ關東方の大小名追々に馳付程無く三萬五千許りの勢に成にける扨又上田勢は此時勝鯨波を揚依田兵部宍山小助近藤無手之助齋藤左十郎山本清兵衛の面々を殘して安中の砦を護らせ其他は皆々上田へ引揚たり爰に大久保相摸守忠隣急に佐原源右衛門望月多宮の兩人を呼て申けるは平山熊谷成田か拔掛けせしも死を輕んじ名を重んぜしなり然れば我々も今霄手下の者を引具し襲ひ打て砦を乘破り天晴手柄を立んと思ふなり此儀如何にと問ひ掛られて佐原望月誠に之こそ望む所なり必らず今霄は砦を夜討して攻落さんと夫より種々に評議を爲し頓て夜討に馴たる剛の者七十三騎を撰み立て密に用意を調へける頃は九月廿三日の夜忠隣七十三人を引具し馬には枚を銜ませ砦へと押寄ける上田方は此度の勝軍に氣を撓まし更に用意も爲ざりければ忠隣密に悅び味方の大軍度々の敗軍に夜討の事を心付者一人も無きに我こそ思ひ當れりと七十三

て落玉ふ後より馬烟を立て一人の大將八尺許りの樫の棒に筋鐵繁く打たるを片手に引提又一人は大野太刀を振て馬を躍らせ追駈來り夫へ往るゝは中納言殿と見受たり我こそ羽州龜田の領主新左衞門入道清海同新兵衞入道爲三なり卑劣も後を見せ玉ふかな引返して勝負をされよと近寄來れば奥平美濃守信昌取て返し新左衞門入道に切て掛る清海待設けたる事成ば件の棒を打振て眞向微塵と打掛る信昌得たりと秘術を盡して受つ流しつ戰ひける新兵衞入道爲三は君を追けるに久下右衞門重國と云者三十騎にて取て返し爲三に打て掛る爲三大いに怒つて太刀を打振片手薙に切廻るに久下は馬の頭を割付られ馬と共に倒るゝ處を起しも立ず爲三入道一刀に久下を切て捨たりけり是を見て高山伯耆守百五十餘人にて取て返し爲三入道と火花を散して戰ふに同じく堪ず切崩されて敗走す此時奥平信昌は三好清海が爲に切立られて敗走するにぞ三好兄弟は秀忠を討取は此時なりと勇み進んで追駈たり爰に德川方の勇臣に鎭目市左衞門宗茂と云者時に亭年七十八歳に及びぬれ共勇猛他に勝れ力量飽まで剛なるが君の御身の大事此時なりと五尺餘りの大太刀を水車に振廻して只一騎取て返し我は中納言殿の御内に鬼神と呼れたる三河の國の住人鎭目市左衞門宗茂と云ふ者なりイザ來れと大音聲に名乘もあへず切て入り矢庭に三好が兵三騎まで薙落し猶も勇を振ふて清海入道に立向ふ清海之を見て願ふ處の敵なりと例の棒打振て鎭目を目掛け討て掛れば鎭目は馬を乘違へ太刀にて受留切入ども此方も聞ゆる清海入道手早く之

一潰しに爲んと打て掛るを待設けたる上田勢弓鐵砲を射掛撃掛防ぎければ何かは以て堪るべき的に成たる關東勢三十七人將棊倒しに打挫がれ色めく處を柵門開いて近藤穴山筧畔柳等二百五十餘人馬銜を揃へて討て出れば大久保勢此四人に切立られ颯と計りに引ければ入替りて松平土佐守鍋嶋信濃守三千餘騎にて是を防げば穴山小助猛虎の暴たるが如く鎗を取て突て廻り當るを幸ひ突落せば矢庭に十三人迄打取り此勢ひに關東勢は避易して誰一人近付者も無りける爰に關東勢の中より石黑釆女松下小兵衛と名乘て二人馬の鼻を並べ討て出る穴山安治少も動せず二人を左右に請け鎗にて暫時戰ひしが松下を突て落し續て石黑をも突落す其勇猛は當り難く見ゆれ共關東勢は大軍成ば新手を入替攻立るにさしもの穴山筧畔柳等身體つかれて見えければ依田兵部齋藤左十郎春田彌十郎百騎にて打て出で穴山等に入替りしに穴山等は是に讓りて砦にぞ入にける扨又本多佐渡守中山藤兵衛尉は又々二千餘騎にて攻掛れば砦の方より穴山新兵衛海野六郎兵衛山本清兵衛百餘騎にて渡り合ひ本多中山を相手となして双方火花を散し戰ひしが孰れも劣らぬ勇猛に颯と開いて相引す一方には信幸信尹三千五百餘騎にて切て掛るを砦より別府若狹増田九郎同荒次郎百騎にて渡り合其内信幸が陣より中根旦見岩瀨孫七中山九郎次先を爭ひ勇を振つて戰ひしが終に上田方切崩されて砦の内にぞ入りにける關東方は勝利を得たる事成ば追々此趣きを本陣に注進しければ秀忠の悦び限りなく關ヶ原へ出陣して比類なき功を立るは此時

三八同時に鬨を作て逆茂木を引破り我も〳〵と亂れ入りければ砦を守る者スハ夜討なりと狼狽皇倉上を下へと返す處を大久保勢無二無三に切入り勇を振つて戰ひたり

第廿五　大久保忠隣安中の砦を攻落す事幷幸村地雷火を以て關東勢を破る事

斯て大久保相摸守忠隣は安中の砦へ押寄鬨を作りて攻掛れば砦の中より鐵砲を雨の如くに射掛れ共寄手は之を事共せず打入〳〵攻ければ思ひも寄ぬ不意を討れて上田勢大に亂れ後陣より松井田へと北るも有又は討れて死するも有て今は防ぐ可き手術も之無に穴山近藤依田山本齋藤等の大將力なくも逃る味方に引立られて敗走せり之に依て忠隣は安々と安中の砦を攻め落し此趣きを急ぎ本陣へぞ達しける中納言いたく歡び給ひ忠隣が功を賞しける程に忠隣は大いに面目を施し然ば此勢ひに乘松井田の砦をも攻落さんと其翌日忠隣先陣に進めば松平土佐守森右近大夫眞田伊豆守同隱岐守鍋嶋信濃守本多佐渡守同上野介五萬千餘人松井田さして攻掛る此砦には增田九郎同荒次郎春田彌十郎海野六郎兵衛穴山新兵衛畔柳九藏等の面々と安中の敗將穴山小助近藤無手之助依田兵部齋藤左十郎山本清兵衛別府若狹を合せ其勢三百五十餘騎にて關東勢の攻寄るを鐵砲の筒先揃へて待掛たり此方は大久保の軍勢宵の勞も厭はず吶喊掛つて柵へ押し寄せ

呑んと爲玉ふ所に後より眞田幸村又々顯はれ動き玉ふな秀忠と敦圍荒く突て來るに秀忠卿南無三寶アラ恐ろしやと急に迯出し玉ふを幸村怒て突掛る穗先鞍の山形をぐさと貫きければ已に危く見えける所に横合より松平土佐守鍋嶋信濃守三千餘騎慕地に馳來り幸村を中に圍て支へければ秀忠卿虎口を遁れ漸々高崎迄退き玉ふ上田方は此度も大いに勝利をして安中の砦を取返し勝鬨を作りて退きける

關東勢諸將評定の事幷澁峠合戰の事

斯て秀忠卿は數度の敗軍に今は爲べき樣なく諸將を招て種々と評議せられけれども眞田父子に支られ急に關ゲ原に赴く事叶はず大いに心を痛め給ひて在し處へ本多佐渡守進み出て申けるは末座の某し異論鳴呼が間敷候へども申さゞるは忠に非ず善惡は放言の後評論あれ某し案ずるに斯く眞田父子が爲に時日を費しなん事誠に味方損有て益なし然のみならず關ゲ原の方餘りに延引せば折角打出給ひし甲斐も之れ無迚も眞田父子の奇謀には何日爰を打破る可しとは思ひ寄ず候へば只當處は此儘にして道を東海道に替させ給ふ事然るべしと述ければ秀忠卿大に怒り給ひ汝無用の言葉を發して諸將の心を迷はしむる事勿れ眞田如きが此所を固めしとて秀忠東海道を迂回なば末代までの笑ひと成なり一日二日關ゲ原へ延引して出たりとて何ぞ不都合の事有る可

なりと夫より諸軍勢は松井田へ遣はし本陣には五千餘騎を餘し日も已に午に及びたれば兵粮を傳へんとて陣々に湯を沸し兎角する内怪や地中に物音の凄然聞えければ皆々不思議と思ひつゝ四邊に心を配り何となく騒立しに秀忠は直さま馬に打乘本陣を出給ひければ是に續いて旗本の面々も馳出す是時早し地中より百千の迅雷天に向つて吼るが如く大地を裂き火焔を吐て迸しりしかば是が爲に燒死する者數知ず秀忠卿は身を震はし何處ともなく落給ふ處に六文錢の旗颯と顯はれ眞田幸村是に在秀忠逃る事勿れ引返して勝負あれと紺糸縅しの鎧に鹿の角打たる冑を戴き皆朱の鎗を捻りつゝ五百餘人にて突て掛れば關東方大いに驚き是を見れば續いて由利謙之助淺香鄕右衛門笈川八内植田久左衛門猪口半兵衛馬塲惣市木辻別右衛門野口兵部三輪琴之助等勢ひ猛に打て掛れば秀忠卿天我を此處に亡し給ふか如何は爲んと倉皇られしに中村式部大夫稻垣攝津守跡見藤八千葉十次郎松山金兵衛田簔貫兵衛二階堂牛松等百七十餘騎取て返し幸村を支へしかば幸村は諸軍を此敵に向はせ我身は只一騎秀忠の跡を追掛たり關東方の諸軍は地雷火の響きに落膽し途方に暮て居たりしが主君の御行衛心に懸り東西彷徨爾にして戰はんとする者一人もなく狼狽騒ぐも道理なり松井田口に向ひし諸將は本陣に火の手揚りしと聞きスハ一大事と引返すを上田勢時分はよしと打て出勇を振て戰ひしかば關東方大いに打れて敗走に及びけるこそ見苦けれ此時秀忠卿には何地とも無く落玉ひけるが餘りの暑さに水を求めて馬抄に汲上げ已に

大石大木を一度に切て落せば大久保本多が勢是が爲に討倒されて即死する者數を知ず其外弓鐵砲を射掛しかば大久保本多が勢今は支へ兼て見えければ本多佐渡守手勢僅三百餘人無二無三に切入〳〵味方を離れて進みけるを中陣より秀忠卿御覽有あれへ攻登るは誰なるやと尋ね給ふに駒木根内膳さん候あれは大久保忠隣本多隼人の敗軍せしを本多佐渡守自己に進み出て候秀忠卿扨は昨日の評議に彼中條の立ざるを怨て耻を雪がんと討死を爲すならん可惜武士を眼前に見殺しにせん事殘念なり討すな續けと下知有ければ小笠原信濃守毛利民部少輔中山藤兵衛 伊達陸奥守等五萬八千餘騎にて揉に揉で攻登る佐渡守は此處社討死の場と覺悟を極め後陣の續を待もせず既に敵近く迄押詰ける

第廿六　小宮山淺香僞つて降參の事并松崎藤兵衛敵を欺く事

命は義に依て輕しとかや本多佐渡守は手勢を以て敵を攻落さんと無二無三に押寄ける處に小笠原等續て攻掛りければ眞田勢粉骨碎身して防ぎ戰ふと雖も已に攻落さる可き有樣なるにぞ關東勢は勢ひ猛く攻立けれども日も夕陽に及びければ敵の僞計も危ふしと軍を收めて引揚たり佐渡守殘念には思へども夜に入ければ是非に及ばず元の陣所に歸りける其夜上田方の守將淺香鄉右衛門小宮山數馬が方より關東方大久保が陣へ矢文を射贈りけるに大久保が夜廻りの者拾ひ取り

きや無用の言を吐く事勿れと大いに怒り給へば本多は面を赤めて閉口す大久保相摸守申けるは某しも又本多殿の如く御怒を蒙らんかは知ね共申上たき事こそ候愚案ずるに是まで數度幸村が謀略に當り敗軍すると云ふは全く安中松井田の要害に砦之れありし故なり然らば是より間道を潜かに回り直ちに上田の城下を押通り參らんは如何にと申ければ森右近大夫大いに笑ひ砦だに攻落し難きに何ぞ本城の上田を通る事能はんやと申ければ秀忠卿笑ひ給ひ孰れもの考へ宜しく候へ共相摸守が申處我が心に能適へり然ば此砦は其儘にして直ちに上田の城下を押通り松本へ掛らん就ては信幸此道の案内者爲可しと有て安中には押への兵として森右近大夫七千餘人にて固め夫より總勢は上田を指て打立けり扨先陣には大久保相摸守本多隼人佐案内には眞田伊豆守同隱岐守其勢一萬五千二陣は本多佐渡守鍋嶋信濃守松平土佐守其勢二萬三千中陣は秀忠卿有馬修理大夫奥平美濃守小笠原信濃守北條相摸守毛利民部少輔中山藤兵衛　尉　伊達陸奥守等を始として都合十三萬餘騎澁峠を打越んと麓まで來りて見れば此時上田方にては昌幸豫て斯有べしと思ひ要地に砦を構へて小宮山數馬淺香郷右衛門植田久左衛門月形兵馬築田新八德嶋東馬春田專助松崎藤兵衛に二百餘騎を附添澁嶺迄出張させたりしを關東勢何時の間に敵此地へ來りし事やと能々見れば眞田が定紋の籏三流れ山風に飜へり二百餘りの勢扣へたりしに大久保本多は何程の事有べき一掛に討破れと下知の下より我も〳〵と眞先に驅進む上田方は斯と見て豫て用意の

しや松崎藤兵衛シテ其方には何故に縛めを承しやと言に藤兵衛嬉しげなる面色にて先は御堅固に渡らせられ恐悦に存じ奉つる夜前の矢文は定めて御覧有つらん夫故に某し砦を脱出參る處に思はず人に胡亂者と疑はれ生捕れて候委細の事は某しが襟に縫込て有之候と云に信幸下知して襟を解しむるに一書あり披き見るに

昨夜密書を以て申遂り候通り砦に火をかけ御味方に參るべく候間此段宜敷秀忠卿へ御執成願ひ奉つり候猶又委細は松崎に御尋ね下さるべく此上御疑念も御座候はゞ人質を差上申すべく候以上

八月十九日

小宮山花押

淺香

是を見て信幸暫時考へしが軈て莞爾と打笑ひ幸村又奇計を構へしかな是迄久敷幸村が軍配を知る汝僞る共何ぞ欺かれんやと有に松崎面を正し然も有んかと存候へばこそ人質を出さんと有なり此上何か疑ひ給ふべきや一體我々が眞實に降參せんと思ふ譯は幸村己が智謀に慢じ諸卒を蔑如り猥りに我意を張り罰ありて賞なく忠勤を爲す者却て疎まるゝに立到り剩さへ小宮山淺香の兩人は元來眞田家の譜代と云にも非ず故に密に談合して矢文を贈しなり夫を何ぞや僞計とは迷惑至極の事にて候此上疑ひ給はゞ此松崎藤兵衛を討て成とも不審を晴し給へ併餘りに不審爲

主人の前に持出しければ大久保不思議に思ひながら披き見るに

密書を以て申入候我々眞田が催促に隨ひ止事を得ず此所を固居候へ共元來眞田は我意を振ひ諸卒を憐まずして或は手討などの振舞有之候依て我々眞田に叛きて關東方に降參せん事を望み候へども恐くは疑ひを生じて赦し給ふまじ願くは疑念を散じ宜敷御推擧下さるべし御免あるに於ては砦に火を掛其紛れに打出で御味方に參る可く候尚明日松崎藤兵衛を以て更に申入可く候以上

慶長五年八月十八日　小宮山數馬
淺香鄕右衛門

と有ければ忠隣不審ながらも若此事誠ならば眞田を破り關ヶ原へ出張する事いと安からんと心に喜び直樣本陣に出て矢文を秀忠卿へ奉つるに秀忠卿篤と見て甚だ不審し給ひ昌幸は僞りの謀計多き者故此矢文の事誠に疑はしと有けるに信幸進み出て案ずるに小宮山淺香の兩人は皆新參の降參者なり然れば斯樣の書を贈りし事全く疑はしとも思はれず何にもせよ松崎藤兵衛が來るを待給ふてこそ然る可しと述ければ秀忠卿尤もなりとて其日は軍を止て待所に松平土佐守の陣中より怪敷者なりとて雜兵一人を縛しめ來れり秀忠卿見給ふに長短く鼻開き一眼盲てサモ賤げ成る者なりければ扨は此者は松崎ならんと早速信幸を呼て尋ね給へば信幸一目見るより珍ら

に由利鎌之助進み出て某し生捕となり赴かんと云しに幸村大いに歡び然らば其方赴き給ふ可し就ては斯樣〳〵と密計を諜しければ委細承知して退ぞきける斯て小宮山淺香は幸村が謀計を聞て勇み悦び用意を整へしとは夢にも知らず關東方には松崎を歸して樣子那にと待處に夜は已に亥の刻とも覺しき頃ほひ敵の陣中騷動して謀反人〳〵と叫び同士討を爲す有樣なるに關東方備は疑ひも無く松崎が降參なりと猶も樣子を觀てゐる所に松崎藤兵衛生捕の者一人を馬に縛め息喘切て關東の陣に來り申けるは御約束の通り眞田方の勇將由利鎌之助を酒宴に事寄せ生捕て來り候此折に小宮山と淺香と同士討を爲し小宮山の負けし振を示して逃歸し置たりしは跡にて眞田父子をも討んとする計略を通らし候なりと誠しやかに申し述べけるにぞ秀忠卿大いに歡び給ひて松崎に當座の褒美として金作りの太刀一腰を與へ給へば藤兵衛固く辭して申けるは御褒美有難くは候へ共押付眞田父子が首を取て後拜受仕つらん我々斯御味方申上は先諸將疑ひを散ぜられ寸時も早く敵陣へ寄せ給へ已に砦は淺香の手に入て有ば上田は裸城にて候程に今は神速の御謀計こそ肝要なれと勇み切て申しければ秀忠卿大いに淺香を賞し然らば先手より追々に立向ふ可と有て大久保松平本多中山伊達等五萬八千餘騎にて進みける其後秀忠卿生捕の由利鎌之を引出させて見給ふに長は六尺五寸に餘り眼は銅色の如くにして眉毛逆に上り誠に古今の英雄と見えしかば其勇猛の程を惜まれ此者我に隨ひ忠誠を盡しなば天晴大功を立るならんと思され

して過り給ふな信幸聞て汝が云所僞りならずと云證據有や藤兵衛如何にも僞りならざる證據を見せ申さん先此繩を解給へ信幸下知して繩を解しむ松崎直さま雜兵の刀を取すらりと拔て腹に押當己に自害と見えければ信幸驚き汝何故に死するや松崎遙に砦の方を白眼付憎きかな小宮山淺香の兩人我を欺き己が逆心に勸め込み犬死を遂さすること殘念なれ我死せば惡鬼と成て汝等を取殺さんと已に腹を切んとするを信幸止めて然らば僞りにては無や藤兵衛然迄疑ひ給ば五臟を切破りて見せ申さんか信幸大いに歡び汝が其心實ならば先砦に歸りて小宮山淺香兩人が人質をさし越よ藤兵衛承知して立んとするを秀忠卿止め給ひ予最前より篤と聞に汝等眞田に叛きて味方に降らんとは神妙なり併しながら彌々味方に來らんと思はゞ主將昌幸か又は名高き大將かの首を討て來るとも生捕て來る共此三ツの内の一ツを功に立て來らば人質を出すに及ばず恩賞を與へて取立遣はす可と有ければ松崎委細畏まり候御下知の如く取計らひ來る可しと返答なして松崎は本陣へぞ還りける

由利鎌之助僞り降參の事幷幸村奇謀手配の事

然程に松崎藤兵衛は本陣に立歸り此趣きを申ければ小宮山淺香の兩人幸村に斯と告しにぞ幸村暫時打案じ偖は一人生捕れて關東の陣へ到らざれば事叶ふまじ誰をか此生捕には爲可きと有し

りなせよとて用意ある夫より大久保本多中山毛利松平の人々は手分を定め其夜の合圖を待居ける扨又城方には關東方の様子を得と見濟し先城外には穴山近藤左右に分れて控へ城中には阡穽を穿ち其外要地へは三好淸海同爲三の兩人を配り夫々の用意殘る方なく整ひしとは關東勢夢にも斯事を知ずして夜に入り相圖いかにと待掛たり斯りける處に亥の刻とも覺しき頃無紋の提灯に火を點じ相圖を爲にぞ關東勢備こそと先手に進みし五萬三千餘騎我も〳〵と南門に押寄ければ難なく扉を押開き毛利民部少輔三萬餘騎にて一度にドッと進しに彼の阡穽に落入りければ其驚き一方ならず途方に暮て居たりしが後陣には斯とも知らず進め〳〵と押掛りけるに橋は央より瓦亂〳〵と落しかば爰に臨みし千餘人も皆堀の中に蠢く所を城中より見濟して狹間を開き一度に大木大石を投込〳〵弓鐵砲を射出しければ何かは以て堪るべき是が爲に死する者數知ず斯と見より穴山近藤左右より三百餘人にて討て出竪横に切て廻るに夜中と云思ひ掛なき關東勢は同士討するも多かりけり

第廿七　佐野外記信房忠死の事幷關東勢上田惣攻の事

扨も關東勢は眞田方に欺かれ先手は阡穽に落入り後陣は橋より堀の中へ投込れ進退谷まりける處へ由利淺香の兩人時分はよしと打て出で四方八面に馳廻り陣々に火を掛鬨を揚て馳來りけれ

鎌之助に向ひ汝如何して生捕とは成たるや鎌之助胸を打切齒を爲して申しけるは淺香郷右衛門酒宴を催し我に酒を强て醉臥しめ生捕と爲つて斯る恥辱を與へしなり憎くき彼奴日頃の厚恩を打忘れ君に叛き敵方に内通する段大惡無道の振舞何れ安穩に置べきと猛り叫びて詈りければ秀忠卿聞給ひていかに鎌之助汝今我臣下とは成ざるや鎌之助打笑ひ君の爲には忠に死し親の爲には孝に死す何ぞ二君に仕ふ可きと申しければ最前より傍らに聞居し眞田伊豆守進み出で如何に鎌之助汝は元菅沼の臣なりしが往年野田の一戰に打負菅沼家を負き眞田方に降參して忠勤を盡しながら今更何ぞ忠臣二君に仕へずとは謂ふや早く心を翻へして當君に仕へ後榮を樂しむべしと云にぞ鎌之助答ふる詞なく默然として伏ければ秀忠卿重ねて汝今信幸の云ふ如く心を翻へして味方に隨ふや又は隨はずして首を刎られ恥を受るや如何に〳〵と有ければ鎌之助今は是非なき體にて然ば御味方に隨はんと答へしにぞ繩捕の者に命じ急ぎ繩を解せ夫より主從の盃盞をなし山利は關東の陣にぞ止まりける斯て澁嶺の要路開けたれば是より直ちに上田に押寄せ一驅に本城を攻落さんと關東勢勇を皷して打出で旣に城下に着し三方より攻掛りしに城兵は堅く守りて軍を出さず昌幸は城中に在て豫て工みし謀計を小宮山に授けゝる程に小宮山は又々密に敵陣へ矢文を射かけ彌々今宵兩手の櫓に相圖をなし城門を内より開く間其時一度に進み入給ふ可し某しは城中に在て眞田父子が首を取て獻ずべしと申送りければ秀忠卿悅び給ひ然らば其手配

ば佐野外記今は是迄なりと一段聲を張揚て早く秀忠が首を取て功名せよと云も終らず德嶋遂に首を取三人の者共吐息をつき扨々中納言殿には今迄聞ぬ力量哉と暫時は感じ入にけり斯て早夜もほの〴〵と明渡りければ幸村下知して兵を悉皆く城中へ引揚げ休め居たる所に岩坐明石德嶋の三人首に猩々緋の陣羽織を添て幸村が前に据夜前敵の大將秀忠卿と戰ひ討取候なりと恭々しく申しければ幸村知人を呼て首を見せけるに名も無き者の首なりと云ければ三人の功は空敷成にけり此時關東方の討死は相良左衛門杉原帶刀大口又兵衛戸澤石見守增尾七郎同八郎佐野外記戸澤金八郎根淵兵馬松平因幡守森田治部等を始めとして八百餘人手負は數知れずと聞えたり斯て秀忠卿は危きを遁れて終夜落延給ひ遙の山手に至て葵の旗を指揚ければ四方に散し大小名之を見て馳集まり十二萬餘の大軍立どころに集まり翌日巳の刻に本陣を構へ給ひ夫より諸將を集めて評定に及びける爰に藤井傳右衛門と云者末座より進み出て未だ諸將の御發言も有ざるに嗚呼ケ間敷候へども御免あれと申けるを伊豆守はツたと白眼推參なり藤井無禮有可らずと一言に叱り付られ藤井は赤面して退きける時に大久保申けるやう眞田父子は謀計多くして匆々容易には攻落す事成難し然れども關ケ原へ出張の途次何時迄も當城の爲に日を送り居らば關ケ原の御陣萬一御不勝利なる時は進退爰に谷るなり因ては誰彼を論ぜず當城を攻落すべき良計有ば述られよと有ければ大村和泉守信時は某し案ずるに敵戰ふ毎に勝と雖も砦を失ひ要害を取れけれ

ば關東勢は前後に敵を受け上を下へと狼狽廻りコハ叶はじと一方を切拔け引んと爲れば爰にも三好清海同爲三関を作りて討出しに關東勢は唯夢かと計り驚いて最早爰にて亡びん耶と或は歎き或は震へ戰ふ氣力も無りし處に三好兄弟入交もせず切て入中にも馬塲惣市正直と云者大將秀忠卿を討取り今宵の手柄に爲ん物と郎等六人引具して竪横に突て廻るに果して秀忠卿に行逢ければ願ふ所の幸ひなりと物をも言ず槍を捻つて突たりしに秀忠卿の運や強かりけん鎗の穗先ポツキと折たり惣市コハ口惜と太刀を拔て切て掛る此間に秀忠卿は急ぎ此塲を遁れ給ふに又岩坐左京明石民部德嶋藤馬の三人七八騎にて追駈來り今は危く成り給ひければ旗本に在し佐野外記信房と云者進み出て斯く危急の御塲合と成ては御陣羽織の猩々緋は目立て宜しからず恐れながら某しに拜領仰せ付られ候へと申ければ秀忠卿道理成りとて直に佐野へ與られしに佐野は三度押戴き是こそは外記が此世の晴着にて候君には萬々歳に長壽ましませ外記替て此御難を救ひ奉つり候はんと云捨て只一騎踏止り中納言源の秀忠今討死と覺悟したるぞ我と思はん者は近寄て首を揚よと呼はりければ是を聞て岩坐明石德嶋の三人我討取て手柄にせんと喇喊掛るを必死を極めし佐野外記事ともせず三人を左右に引受け勇を振ふて戰ふたり三人は得たりや應と突て掛るに德嶋は持槍を切折られ明石は太刀を受流され岩坐が鎗は片手に攫まれ三人四度路に成ながら德嶋は手早く太刀を拔て佐野が後より左の腕を切落す續いて岩坐槍を手操て横腹を突貫け

思ひ是より密に流言して伊豆守は敵の城中に内通し味方を破らんと工し由風聞爲しける程に此沙汰陣々に聞え人々伊豆守を怪み出し若や敵方にては無かなどゝ疑ひければ秀忠卿急ぎ眞田兩人を召れて予汝を疑ふには非ざれ共味方の者種々沙汰致し先達て淺香郷右衛門由利鎌之助僞り降參して本陣を燒たりし事も皆伊豆守承知にて爲しめたりしなど云傳へて五月蠅事にも候間衆疑を解く爲に暫らく其方二人は安中に退き此陣を遠ざかれよとありしに信幸信尹心ならずも是非なく引取安中の陣にぞ退きける是よりして關東勢は只徒らに城を圍みて居る事成れば諸將氣を屈して何卒早く事分れ有かしと思ふ所に城中にては此時眞田父子敵の勞れたるを察し部卒を數多城外に出して早稻田に赴かしめ稻穗を苅取せしに寄手の面々是を見て扨は城中には兵糧盡たると覺えたりイデ追駈て討取と云まゝに大久保本多一萬餘騎にてどつと吶喊押寄る此時部卒は稻を苅取束になして脊負立んと爲る所なれば追駈來りし者道を塞ぎて聲々に呼はりけるは不敵なるかな城兵共此大軍を引受て稻を苅んとは不覺なりと云儘に切て掛れば部卒等何かは以て堪るべき刈たる稻を打捨我先にと城中へ迯入ける寄手大に笑ひ扨々迂濶なる城方の振舞かな拙くも此有樣と口々に罵りながら打捨たる稻束を本陣に持歸りける斯て夜に入り人々眠に就んとする時頻りに焔硝の匂ひ爲しければ不審と東西尋ね回りし内晝の軍に取歸りし稻の束より火燃出して陣々に移りければ偖は又眞田が謀略に當りしかと急に狼狽騒ぎ出しける所に城内より

ば落城近きに有ん其上分内狹き城成ば兵粮も早乏しからん兵粮乏しき時は兵働く事を待ず然れば今より力を一にし四方より取圍んで候へば奈に敵謀計を盡すと雖もなどか攻落さゞる事有ん哉と申しければ秀忠卿聞給ひ誠に信時が云所至極せり何分惣攻にして見んと有ければ諸將皆々此議に同じ夫より翌日十二萬餘騎早天に上田の城を取圍み楯をつき竹束を出し我も〳〵と已に城際にまで押寄せ鯨波をどつとぞ作りける然共城中には鳴を靜て取合ざればソレ掛れと云程こそあれ我先にとから堀に飛入〳〵塀を乘越んとぞ爲にける

幸村謀計を以て大軍を退くる事并眞田稻刈陣の事

扨も關東の大軍は上田の城を十重二十重に取圍みから堀に飛入〳〵塀に登て已に城中へ乘入んと爲ける所に城兵共塀の上に立現れ豫て用意せし竹の皮を幾許となく投出すを寄手は更に事ともせず拂ひ除〳〵て來りける所に長き柄杓にて熱騰りし白粥を注ぎ掛しに其粥軍兵の鎧武具の隙間より肌に寖透軍兵共は熱に耐へ兼ねアナ苦しやと逝出せば投捨ありし竹の皮に辷り人馬共に燒爛れ本陣迄一卷りに敗走す此日の合戰にはさして死する程の者なけれ共熱粥の爲總身爛れて苦しむ者多かりしとかや是に依て關東勢は關ケ原合戰に追付事能はず心ならずも上田の城下に集りて徒らに日に送りける爰に藤井傳右衛門は先達て伊豆守に恥辱を與へられし事を無念に

猶へ廻る中に於て毛利民部少輔は大將秀忠卿の御行衛心許なしとて爰彼處と手を盡して尋ね回る内風と穴山小助に行逢ひしかば大いに歡び討取て手柄に爲んと名乘かけしに穴山も好き敵ならんと聲を掛城方に於て穴山小助安治とは我事なりイザ尋常に勝負あれと大喝一聲雷の如くに槍を捻つて突入るを毛利は心得たりと馬を弓手に乘廻し太刀拔合せて切向ふ穴山は聞ゆる槍の達人なれば突ては扱き／＼ては突馬の太股を强く貫きければ馬は屏風を倒すが如く片邊へドッと倒れしにぞ毛利は堪らず轉げ落しに穴山得たりと鎗取のべ鎧の隙間を差貫首搔切て引返す一方には松平土佐守同下總守五千餘騎にて葵の紋の旗を押立て來りしに三好爲三是大將秀忠卿ならんと旗を目當に飛鳥の如く馳來るを松平下總守氏照道を遮り長刀振立出ければ爲三は是を見て望む處の敵なりと太刀打振て眞向二ッと拜み打になしけるを然は爲ぬと氏照長刀取延しガッチと計り請止て互に二三合戰ふ處に爲三猶も進で切付しかば哀れや氏照胸板まで割付られ空を摑んで死したりけり是を見て殘兵は右往左往に散亂す土佐守は怯なる氏照の討死を見て身震なしつゝ逃走りける伊達陸奥守政宗は片倉小十郎伊達直高田井河内同賴母石川大和茂庭右衛門等五千餘騎にて越後路へ赴かんと爲を城方の主將左衛門佐幸村二百餘人にて横さまに旗本へ切入呼りけるは眞田左衛門佐是に在政宗殿に見參せんとドッと吶喊突入ば政宗は少しも動ぜず眞田成ばとて鬼神にはよも有まじイザ見參せんと引返して戰はんと爲に片倉石川等我も／＼

は三方の城門を開きて一手は眞田左衛門佐幸村春田彌十郎筧金六郎別府若狹野呂兵部海野六郎兵衞三輪琴之助笈川八内三百餘騎一手は穴山小助近藤無手之助相木森之助增田九郞岡荒次郞由利鎌之助畔柳九藏木辻別右衞門根津甚兵衞赤坂式部間部日向築田新八三百餘騎一手は三好新左衞門入道淸海同新兵衞入道爲三種ヶ嶋專助岩倉左京小宮山數馬柘植內藏淺香鄕右衞門松崎藤兵衞德嶋藤馬植田文左衞門三百餘騎三方より攻寄ければ關東勢諸戰はんとする者なく皆々小諸を指て敗走す秀忠卿は又々危ふきを遁れ同勢と諸共引き退ぞき給ふ所に向ふより例の如く六文錢の旗押立て三百餘騎押來りければ秀忠卿扨は幸村成べし嗚呼天なる哉早叶ぬぞ皆討死の覺悟を爲よと下知せらるゝに是敵には非ず伊豆守隱岐守の兩人火の手を遠く望んで怪しみ押來りしなり斯と見て秀忠卿は蘇生の思ひを爲られ夫より信幸に連られ一先追分迄退き敵鋒を避しとかや

第廿八　關東勢諸將接戰の事幷幸村石田が滅亡を知る事

斯て中納言秀忠卿は已に眞田が爲に討れ給ふべき所を譜代の臣下が忠義の爲に助けられ危き場を遁れ伊豆守が三千餘騎と追分迄安々と引取り給ふを他の諸將は斯る事とは知らずして皆上田の城下を彷徨て誰を敵彼を味方とも辨へず同士討するあり火に燒れて死するあり騷動のみに狼

扨眞田幸村は上田の城に在て飽まで秀忠卿を支へ關ヶ原合戰の間を隔き石田に勝を得させんと種々謀計を運らし居たる處或夜幸村陣屋を出て天文を察るに星次の頗る異ければ幸村早速卦を立て占ふに石田方の軍利なくして敗北せし事明かなれば幸村甚だ驚き扨は是迄盡せし精力も水の泡と消失しか殘念なり口惜や然るにても此上徳川家の威勢盛んになり天下を握る事有りとも命全き内には豈徳川家に天下を授けんやと大いに歎き一人心を焦だて軈て父に談せんと急ぎ本丸にぞ赴きける

昌幸幸村密計を談ずる事幷幸村十度鎗の事

斯て幸村は石田方の敗軍を知急ぎ本丸へ赴き父昌幸に向ひ涙を流して云けるやう豐臣の天下已に滅亡の時至れりと昌幸之を聞き計策は人に在り成敗は天に在と孔明が謂たるも宜なる哉石田方が是迄盡せし計策敢て俺なるに非ざれども天大坂を右けず徳川家の運を開きしは是我々の奈何とも爲可き樣なき所なり然れば今より關東に降を乞命を全ふして後日秀頼公十五歳に成給ふ時徳川家天下を讓ざらんには其時こそ我等再び天下に顯れ宿怨を徳川家に報いんと思ふなり夫までは謹んで息を屏け必らず俺忽有可らずと申ければ幸村父君の仰せ御道理に存じ候兎角我等此世に在る限りは徳川家に易々天下を保たせ申さんや就ては先當城を引拂ひて斯樣〳〵致さん

と取て返し楯と成て拒ぎしかば此方よりも三輪琴之助進み出で政宗を目掛て突て掛れば石川賴母得たりや應と立塞がりしを琴之助は事ともせず鎗を捻つて石川と渡り合ふて戰ふ所に幸村は政宗を目掛て突て掛る片倉は幸村を三千餘騎にて支ゆると雖も眞田が鎗先鋭くして矢庭に十三人突伏られたり然共政宗は恐るゝ體更になく接戰せんと立向ふを石川大和馬銜に縋りコハ何故の御振舞ぞや千金よりも重き御身を以て匹夫同前に命を輕んじ給ふことと返す〴〵も口惜き御事なりと無理に引立退ければ幸村今は長追するも無益なりと相圖をなして城中へ引取ける此度稻を苅て敵に奪はせ其稻より火發りて敵陣を燒し謀計は稻束の中へ火藥を仕込しにて之を幸村稻苅の陣と名けしとぞ是より後は關東勢深く眞田が謀計に恐れて城中の兵糧盡るを待合戰せんと心ならずも關ヶ原に到る事能はず晝夜安き心もなく徒らに野陣を張て數日を送りけることぞ是非もなき次第なれ

爰に慶長五年九月十五日德川の軍關ヶ原に於て石田治部少輔三成と大合戰に及び石田方には浮田嶋津小西安國寺立花等大軍を以て備立を爲し是に引替德川方は小勢にて出で立ち其勢ひ危ふく見えし處に金吾秀秋變心して裏切有しに依り遂に德川方の勝利と成石田三成小西安國寺等皆生捕れ大谷等の勇將悉皆く討死したる一件は昌幸父子の立入らざる戰ひにつき爰に略しぬ

りと眉間を突ば正重其儘死したりけり幸村手早く首を揚んとする所に六騎許りを引具し來る一手の者太刀を拔て幸村に討て掛る心得たりと幸村此武者に立向ひそも汝は何者ぞと尋ねしに彼の武者答へて三州の浪人蒲次郎冬次と云者なりと又も兩人火花を散して戰ひしが蒲次郎は聞ゆる勇者なれば組討せんと聲かけしに幸村莞爾と打笑ひ夫こそ望む所なりと鎗投捨れば此方も同じく太刀を捨馬上ながらに六手と組然れども幸村は宛ら鞍より生たる如く押ども引ども動かざれば冬次身を揉急る處を幸村腕を差のばし冬次を取て押へ鞍に引寄難なく首をかき切たり夫より幸村少し休らひて味方の諸將の働きを眺め居たる所に森右近大夫長刀を打振名乘かけ切て掛れば幸村之に立向ひ二三合戰ひしが森が持たる長刀を卷落し一太刀あびせんずる有樣に森も今は叶はじと一鞭當て引返す幸村大に怒りて卑怯振舞を爲す者かな斯る未練の事成ば何ゆゑ初に名乘り掛しぞ笑止なりと呟き居る所に牧野帶刀福嶋主膳十三騎にて討て掛るを幸村得たりと鎗取直し兩人を左右に受け鐓を以て福嶋が胸板を強く突ければ福嶋馬に堪らず落たりしに返す穗先を水野に向け唯一鎗に刺貫き又來る麻生太助瀧川平馬望月一學の三人をも討取ける斯て暫らくは休息を爲し四邊を見囘し風と向ふを見れば三ッ葵の旗指物風に翻へりしかば扨は本陣ならん是ぞ望む所の敵なりと馬を速めて押寄しに大須賀七郎左衛門輝秀と名乘て大身の鎗を馬の平首に引添獅子頭の胄を猪首に着なし眞田を目掛て唯一騎近々と馳來り逃るな幸村と呼かけつゝ

と密談數刻に及びける其翌日幸村所詮合戰するも今日限りと諸將に命して穴山小助近藤無手之助出利鎌之助淺香鄕右衞門と倶々三百餘騎を從がへ夫々手別を爲し敵の本陣に切入んと打出たり此勢ひに關東勢偵が十三萬餘の大軍と雖も少し萎みて見えにける然共新手を入替〳〵攻戰へば四邊は鮮血泉を爲し尸は積で丘の如く修羅の巷も斯やらんと思ふ計りの有樣なるに敢死の城兵愈々勵しく戰へば大合戰とぞ成にけり幸村は雜兵に目も觸ず皆朱の鎗を引提て四邊に眼を配りつゝ三百餘騎にて突廻る內に淺黃糸緘しの鎧に白星の冑を着し大太刀を拔て三ツ柏の旗を持せ金の亂玉の馬印を押立て馬に跨り顯はれ來る者あれば幸村屹と見て鎗を捻つて突掛れば彼の武者聲をかけ此所へ來るは何者ぞ幸村怒つて我こそ上田の城主昌幸が次男眞田左衞門佐幸村なるぞと呼はれば彼の武者莞爾と笑ひ扨は能敵かな我は三州苅屋の城主須藤伊賀守利里なりと互に名乘て討合けるが双方手强き勇將なれば勝負は更に見えざる處に利里怒て切入を眞田は早くも身を替し利里を取て引寄鎗投捨て總角を引摑み宙に指上げ汝等主を討せじと向ひし敵忠臣なりイザ得させんと三間許擲出しければ利里が郞等群り來り主に取付き介抱せしを幸村は其儘見向きもせず此所を駈拔け向を見れば其勢四十騎許にて扣へし者有けるに幸村又も進んで突て掛れば此武者名乘て我は丹後宮津の城主水野釆女正正重なりと云せも果ず幸村鎗を取て打合兩將暫く戰ひけるが幸村怒て突入鎗に正重は鎗を卷落され太刀に手を掛拔んとするを幸村得た

事共なり眞田は已に十分關東勢に勇威をしめして悉皆く城中へ引取其夜昌幸別府若狹を呼て汝は是より關東の陣中眞田伊豆守方へ往斯樣〳〵計へと申付たりしに別府委細承知して其夜直に城を出唯一人伊豆守が陣に赴きける此折から關東勢は終日の戰ひに勞れ且は數度の敗軍に關ケ原へ出張爲る事も叶はず如何は爲んと伊豆守が陣中に在て種々と評定に及びける所に陣外より唯一人案内を乞者有ければ伊豆守が士卒怪しみて何者成ば陣中へ密に來るやと問しに彼の者答へて某しは當君の臣下の者なり忠義を述ん爲に來りたれば此旨主君へ宜敷告給はれといふに士卒然らば其許の名は何と申すぞ別府若狹と申し候なりと答へしに士卒扨は音に聞えし別府殿かと急ぎ此由を伊豆守に告ければ伊豆守打笑ひ又しても弟幸村が謀計を爲んとして別府を差越たるか敵の謀計に就て謀略を行ふ事苦しからず是へ通すべしと有ければ則ち別府を信幸が前に連出る信幸怒つて汝城兵の身を以て何故に我臣下とは云ぞ若狹謹んでさん候君の御父は是某しの主君なり然れば某しに取りては當君も亦某しの君たる事ゆゑ乃ち臣下とは申たり信幸彌々怒りて然らば汝先達て父弟上田へ入城せし時我妻を欺き安中を開かせ通りしは何事ぞ臣下たる者の主を詐はり欺むくこと有べき如何に〳〵と詰られしに別府は打笑ひて偖々信幸公には何故に斯る愚かなる事を宣ふや宇都宮御陣より一旦御父子分れさせ給ひて合戰を結ばれしと雖も骨肉の御間柄は切申すなど某し父君の祿を食み父君の臣下となりて居れば君よりの仰付られを受

件の鎗を以て幸村に立向へば幸村も同く鎗を合せ互に戰ひを始めたり

第廿九　幸村大須賀を討取る事幷別府若狹信幸が許へ使者の事

幸村は石田が滅亡を知て花やかに軍を爲し十分に味方の勇威を示し其上降を乞ひ命を全うして秀頼公の十五歳に成給ふを待義兵を擧て天下を覆へし豐臣の世と爲さん工み必至を盡し當る敵を事ともせず爰を專途と接戰なしけれ共敵は流石に大軍なれば入替り〳〵新手を出して戰ひたる程に幸村は自身十將と渡り合或は討取又は手を負せ勇威を振ひ戰ひし內敵方大須賀七郎左衛門輝秀に行逢双方望む敵なりと鎗を取て突入〳〵七八度迄も掛合しが大須賀は幸村が武術に當り難く無念に思ひ急に一策を思ひ出し鞭を打て逃出でければ幸村跡を追來るに大須賀得たりと振返り樣幸村に鎗を當ければ幸村閃りと身を替し左の手にて輝秀が鎗の千段卷を確と握り右に持たる鎗を取延既に輝秀を突んとす輝秀は鎗を取れてはつと思ひコハ仕損じたりと持たる鎗を打捨て太刀に手を掛け向かはんと爲る其所を幸村急に鎗取伸し拳も通れと突ければ大須賀は目鼻より血を迸せ敢なき最期を遂たりけり已に此時日も夕陽に及びければ幸村軍を收めて城內へ入ければ諸將も同じく城中へ引取ける今日の戰爭には關東勢二千餘人城兵二百餘人の討死有しとぞ抑々幸村籠城して自ら血戰を爲す今日の如きは前後絕て無りしに斯働らきしは誠に勇々敷

語りければ信尹之を聞き眉を顰めて申けるは汝何故に斯は匆忽なる振舞を働らきしぞ今上田方とは敵味方と爲と雖も其方の父我の兄たる昌幸殿より差越したる使者なれば隨分と敬して然る可きに非ずや何は兎もあれ能く使者の者に父が極意を聞き虚實を取糺すこそ肝要なれ我察するに別府が忠孝の二ツを全くさせんと云ふは上田の城を明渡し父并びに幸村が助命の願ひを立んと爲したるも知る可らず若輩の振舞返す〴〵も其意を得ずと理非を解かれて信幸始めて前非を悔い急ぎ別府を追掛させて呼戻し再び陣中に請じて如何に若狹某し若輩の心得違ひにて傍若無人の取計らひを爲し近頃以て面目なし匆忽の段寛し呉よと有ければ別府心に悅び然らば降參の儀は如何爲し給はる可きや信幸額ひに汗を流しつゝ何卒父の極意を語り聞せよと申ければ別府今は心安しとて進寄て申けるは倩も昌幸公御父子斯籠城爲し給ふ事は只豐臣家の大恩を思され石田大谷等が逆意の事とは知り給ひけれども兎角大坂方に刃向はせ給ふに忍びず是非なく今までは東軍に御敵對相成れども既に石田方は關ケ原合戰に打負しと有る上は最早何を頼みに籠城せんや是より御父子は山林へ引籠り身を安樂に太平を樂まんとは思されけれども流石御幼年より住馴し上田を所縁も無き者に明渡されん事の口惜さに依て我悴方に此事頼み入との御事にて某しを此使者に遣はされしなりと言葉を盡して述ければ信尹信幸顏見合せ扨は此事眞實なるや別府何ぞ御父子の中に僞りの候べきと答へしかば信幸偖は委細承知致し候なりとて別府を歸し夫

け使者を勸めしに何ぞ僞りを申可や唯君命を述たる而已にて候其を君には何故に斯父君を輕んじ給ふぞ君の孝は何れに在やと申せしに信幸赤面して暫時言葉なく有しが稍有て申けるは然らば汝忠義を述んとて來るは如何成事ぞや憶ふに幸村が巧みし謀計を行ひに來りしならん別府勃然としてコハ情なき君の仰かな忠義を述んとの事は決して然やうなる事に非ず委細は爰に候なりとて懷中より書翰を取り出し渡しける信幸不審には思ひながらも取て開き見るに思ひ掛なくも降參致さんとの書面なりければ信幸顏色烈火の如く怒り書面を寸々に引裂て申ける樣先達て由利淺香松崎の三人降參いたすと云て大いに君を欺き剩さへ南門の伏兵を以て味方を散々に惱し不覺を取せしに又も降參の事を申して伊豆守を欺かんと爲る段以ての外なる幸村が所存なり汝長居せば予は見せじと居丈高に成て罵りけるを別府は少も怖れず虛實の二ツは軍事の習ひに候之を識別するを良將と申すなり先達ての事は是虛なり今日の事は是實なり今君の忠孝を全く爲らる可時に當り既往の事を擧て斯く怒り給ふとは御身の爲に不取なり御思考有て然る可しと申しけれども信幸は怒り止まらず別府を陣外に追出して夫より伯父隱岐守に此由を語りける

眞田信尹思慮の事幷信幸信尹後殿の事

眞田伊豆守信幸は父昌幸が降參の書を引裂き剩さへ別府を陣外へ追出し急に此由を伯父信尹に

森右近大夫を差添へ三萬餘騎にて上田を押へさせ夫より十萬餘騎の大軍を引率して上田の城下を出發せられ關ヶ原へと赴かれける扨眞田伊豆守同隱岐守の兩人は上田の圍みを未だ解かず其内降參の事有べしと唯接遇の戰備を爲して時を移し居ければ上田の城兵も同じく其心にて兩三度討て出で暫らく戰ひの形を爲しける內秀忠卿は尾撃の顧念なく關ヶ原に出張し給ひける倩此度上田にての戰爭は關東方誠とに思ひ寄ざる事にて殊に苦戰の事其多かりければ皆何れも怖れざるは無りける

秀忠卿の關ヶ原に出張せられし時には既に石田滅亡して關東方十分の勝利有り源君には京都に上られ給ひしかば秀忠卿も續いて上洛せられ御父子御對顏の上秀忠卿頻りに眞田信幸信尹が働きを賞し給へば源君も殊に其功を賞されける其內信幸信尹の兩人も上洛爲しければ源君兩人を召出され何成共褒美は乞に任せんと有しに兩人謹んで申しけるは微功の某し等何ぞ恩賞を望み候はんや只願はくは父昌幸弟幸村が一命を御赦し下さる樣仕つり度然ある上は某し等上田に相越し利害を解聞せ降參を致させ候はん此儀偏に願ふ所に候なりと申ければ源君大いに感賞せられ然らば望みに因て其通り許すべしと有ければ兩人は頓て暇を賜り上田の城へ向ひけるとなん

夫より眞田伊豆守同隱岐守は上田の戰ひを程よく濟せ急ぎ秀忠卿に追付參らせんと道を急ぎ京

より急ぎ秀忠卿の御前に出て申しけるは當上田城堅固にして是まで味方負軍のみ打續き數日を重ねて關ケ原御出張も大いに遲滯せる段某しに於ても殘念に存じ入り候然るに當城將は某しと骨肉の間柄なる故諸將も常々心を置き候へども忠の爲には私情を變ゆるの道理なし就ては明日の合戰には某し一命を的にして城を攻落すか又は討死を爲すか二ツ一ツの戰ひを爲し假令城を攻落し得ずとも城下を乘破り候はゞ君には大軍を引率して早く關ケ原に御出張有べし信尹信幸進んでは先驅と爲り退きては後殿と爲りて始終萬端天晴大功を立んと存じ候間御願はくは日頃の御疑念を晴され我々二人に御任せ下さる可と述けるにぞ秀忠卿兼て兩人が忠誠を知給ふ故此上は宜敷計らひ候へと有しに兩人大いに歡び急ぎ我陣に歸りける扨別府は城中に歸りて信幸が心中を語りければ昌幸父子然らば明日の合戰の用意をせよ併乍ら明日の合戰には矢は根を拔鐵砲は玉を込ると勿れと下知して相待ける扨翌日に成しかば眞田伊豆守同隱岐守兩人は手勢を引率して上田に向ひ閧を作りて攻掛れば城中より彼の弓鐵砲を射掛打掛れども少しも疵を蒙る者なく信幸信尹の兩人扨は昨日別府に云越しは全たく虛にては非ざりしぞと城下の砦を攻落せば城中よりも討て出三四度追つ卷つ戰ひし內城兵は難なく信幸信尹に切崩され城內へ颯と引揚たり此間に信幸は本陣へ使者を送り敵方の軍勢を城中へ追込て候へば昨日申上げし如く早く關ケ原へ出張せられ給へと再度申送りければ秀忠卿然らば關ケ原に打立んと信幸信尹の兩人に

を見せ大軍を阿容々々通し給ひしぞ今は早關ヶ原の軍も大坂方の敗走と爲り關東の權威日々に增長しければ此度の籠城に就き必定誅戮として討手の大軍向ふべし然るに其軍の用意もなくして唯酒宴を爲て晝夜樂み暮し給ふは狂氣ばし爲し給ふやコハそも如何成御趣意ぞや承まはらんと申しければ昌幸大いに笑ひて否々狂氣にも非ず怠るにも非らず是には深き謀計有事なり安治問て其謀計とは如何なる事にて候や昌幸されば今語りて聞せ候はん抑も此度數度敵に討勝ながら故々敵を易々と通せし事は是逸を以て勞を討の謀計なり其ゆゑは此度石田大谷小西安國寺等天下の諸侯を語合關ヶ原に出張するは豐臣の天下を望まんとするには非ずして唯德川を憎み亡さんとてなり是故太閤秀吉公には秀頼公を德川と故前田とに托され同公十五歲に成せ給はゞ天下を讓り給はれしと約束有しに前田は既に病死して今は德川氏一人天下の權威を專らにして賞罰を取り行ひければ假令秀頼公十五歲に成給ふ共やはか天下を渡さんやと思ひしに因てなり然れば某し石田に組し此城に於て江戸の秀忠卿を喰止關ヶ原合戰の間に合ざる樣爲し德川を易々と三成に打せんと思ひしに計らずも天德川に與し石田は終に打負しかば今は合戰を好まず是より當城を退ぞき山谷に身を寄て秀頼公の御成長を待んと思ふなり其時に至り德川彌々天下を讓らざれば加藤福嶋淺野蜂須賀等を語合ひ義兵を擧て德川を打亡さんと爲る事是昌幸が胸中に有と始て心術を語りければ穴山は實にもと承知して退ぞきぬ折から眞田伊豆守同隱岐守の兩人上田

都に上りて父弟の命を乞ひ軈て上田に立戻り城中に入らん事を通じければ上田にも豫て約せし事成ば城門を開き兩人を本丸へぞ請じける

第三十　信幸信尹上田に赴く事并昌幸父子上田開城の事

爰に慶長五年九月關ヶ原の一戰に德川方勝軍と爲給ひ其勢ひ破竹の如く夫より上洛有て石田小西安國寺等を梟首し猶も武威を振はれければ大坂方の大軍秋の木の葉を散すが如く或は亡び終に天下は德川家の掌に歸せし如く權威日頃に十倍せり斯て秀忠卿は眞田信幸信尹が忠貞を賞し源君も大いに此兩人を賞し給ひて恩賞の事に及びしに兩人は祿を望まずして父弟の命を乞ける源君猶も其志ざしを感じ給ひて然らば汝上田へ赴き昌幸幸村を蟄居させ城は其方保つべし且此度の軍功に因て昌幸が領地は其方へ遣す間自領三萬石と併せ保つ可しと有て本領安堵の暴附を賜はりたり因て昌幸父子は紀州九度山に退去との事に極まり此旨信幸に申渡され信幸畏まりて是より上田の城へと赴きける此時上田には諸將兵卒關ヶ原の戰ひに大谷小西石田安國寺等打負けて皆誅せられたりと聞き今は當家滅亡の時なりと何も頭を交へ顏色土の如くになりて歎き悲しめ共父子は寬然として酒宴を催し更に愁ふる氣色無りければ穴山小助進み出て昌幸に向ひ關東勢數度敗走して匆々關ヶ原に赴き候事能はず然るに如何成ば信幸公に内通有て負色

眞田伊豆守は又も父弟に向ひ九度山に赴き給ふ樣勸めしかば昌幸如何にも豫て望む所なれば聊か命に背く事有可らず早々退き閑居を樂まん間此旨宜敷主君に傳へられよと云ふて夫より郎等の内無二の忠臣なる者二百七十餘人を引具し年頃馴たる上田の城を立出て紀州九度山にぞ赴きける隨從ふ人々には穴山小助安治を始め近藤無手之助友幸眞田彌十郎定國同備太郎定俊別府若狹昌秀海野六郎兵衛利三穴山新兵衛實宣筧金六宗丘相木森之助政輝增田九郎正令同荒次郎友重同虎之助定九三好新左衛門入道淸海同新兵衛入道爲三畔柳九八郎淸延明石又七郎信舟由利鎌之助幸若三輪孝之助友一木辻別右衛門國重根津甚平秀盛宮川八內盛俊野呂兵部久政間鍋日向入道快然赤坂武部猪口半兵衛寛政右衛門岩野宇兵衛月方兵馬依田兵部種ヶ嶋丹後眞田甚三郎齋藤佐太郎別府虎之助小宮山數馬稻楊内藏之介穗入愛之助松崎藤兵衛德嶋藤馬明石民部入道善然春田專之助沼田久助稱田又左衛門淺香鄕右衛門等都合二百七十五人涙ながらに上田の城を離れつゝ遂に馴ざる紀の路なる九度山にぞ退きたり是よりして上田の城は伊豆守信幸之を保ち沼田の城は叔父隱岐守信尹之を保ち昔持城に住しける斯て昌幸幸村兩人は二百七十餘人の郎等を所々方方へ分ち住居させ九度山には穴山小助別府若狹の兩人其外を合せて主從僅か八人にて住しける翌年七月廿四日幸村が室大谷刑部が娘波江男子を平産す則ち名を大助と呼び後に治幸とぞ名乘ける幸村は出家に於て大助を養ひ生育爲しける内慶長七年に至りて波江は果敢なくも病の床に

に來りて城中に入ん事を通じければ昌幸扨てこそと悦び城中へ入にける夫より信幸は奥へ通り父弟に面會し久敷音信を絶し事どもの一伍一什を述べ舊懷の情面に顯はれ暫時は他語に及ばざりしが稍あつて伊豆守父に向ひ合戰の習ひにて我君關ヶ原の戰ひに勝利を得られ已に天下の覇者と成給ふに因て不才某にまで恩賞を與へんとて仰けるは汝が忠に因り父昌幸弟幸村は助命し紀州九度山へ閑居申つけ當城は信幸に賜はる可との事にて候然れば台命の是非もなき事につき暫らくは紀州九度山に御引退き有て世の濁れるを避られ御閑居を樂まれ候方然るべし時至らば伊豆守又よしなに計ひ候はんと辭を和らげ申しけるに此時末座より聲荒げ何ぞ此城を阿容々々渡す事の候や彌々信幸殿城を受取んと成ば請取ぬ先に御首を申受け其後城を渡し候はんイザ某しが刃の切味試みられよと叫跳り出る者有ければ座中大に驚き是を見れば由利鎌之助基幸なり昌幸大に怒て汝如何なれば主を差措不禮を働くぞ其處退けと制しければ幸村も諸共に之を制し如何に基幸城を渡と渡さゞるは時の運に因るなり今は假令台命なく共退去して太平を樂まんと爲に何ぞ城を渡す事に然ほど怒る事の有可やと種々に慰諭ければ基幸漸々にして座に直りけり

昌幸父子紀州九度山へ退去の事幷山本九兵衛幸村が寢所へ忍ぶ事

幸村に打向ひ我死するとも法體になす勿れ甲冑を着せ兵仗を持せ紀の川に沈むべし呉々此事を忘るゝなと云終つて遂に六十七歳を一期と爲し睡るが如く息絶たり幸村は歎き悲しめども歸らぬ事の是非無れば遺命の如く甲冑兵仗を粧ひ夜に紛れて人知ず紀の川へぞ沈めける其後常に着せし衣類を尸位とし野邊の送を營み法諡を正譽千雪居士とぞ號しける斯て幸村は斬衰の喪に籠り居て父が菩提に餘念も無く居たりしが如何はしけん其後は何となく呆然として恰ら氣拔爲たる者の如く何を問ても答へなく大助今年六才に成と雖も文武の教は云ふも更にて唯氣隨氣儘に捨置たり斯る幸村が有樣に里人等噂しけるは眞田幸村と云人は日本に二人となき俊傑大將と聞つるが爺を失ひ妻に離れて愚に復りたる者なるか氣の毒なる事なりなどゝ取々に云傳へけるとなり幸村は久しく閑散の身と成て爲す可き業も無りければ木綿糸を取寄紐を組て賣鬻ぎ是を家費に充てゝ日を送りける爰に德川源君は此時旣に征夷大將軍の職に昇られ國々の大小名をして大坂へ朝する事を停止し關東へ參勤有可樣令を下しければ大坂の衰態に引替て關東の威勢は旭の昇るが如く榮枯盛衰は世の常とは雖も僅かの大閤の偉功も今は朝露の消なんと爲す大坂の有樣に心有る人々は坐に袖を濕しけり偖も源君は專ら秀頼公を誅除して天下を永く子孫に傳へんと豫て此事を心に思されけれ共肥後の熊本なる加藤肥後守清正大坂の執權片桐東市正且元幷に紀州九度山の眞田安房守昌幸同左衛門佐幸村等如何成密計有やも計られずと容易は此事を口外

打臥し歸らぬ旅に赴きしかば幸村の歎き一方ならず涙ながらに野邊の送りも例の如くに相濟し夫よりは大助を猶も愛で痛はりて其が生長をぞ待たりけり斯て光陰に關守なく既に慶長十一年の春に至りて昌幸はフト風の心地に打臥しが老體の身の力薄く病痾は次第に差重りて羸瘦の樣の常ならねば幸村は殊に氣を焦り醫藥治療は言ふも更なり加持祈禱に至るまで殘る方なく手を盡せども生死命ある世の掟にさしも剛氣の昌幸なれども今は息さへ絶々に成ければ幸村を枕邊近く呼寄て幸村汝能く聽け我太閤の高恩を忘却せず早晩は德川を討亡し再び豐臣家の天下に恢復爲しめんと日頃其事のみ打案じ是まで長の年月を送りけれども命數の限り有るは是非もなく早黃泉の客と爲んとするなり汝も能知る如く假令秀賴公十五歲に成給ふとも家康豈天下を讓る事有らんや然るに今年は秀賴公も既に十四歲に成せ給ひければ我今一二年生延たらんには本懷を遂げ得可きに今逝く事の口惜さよ然れど汝我宿志を繼ぎ旗揚を爲し果るに於ては我復思ひ遺す事有ざるなりと淚を拭ひて遺言せしかば幸村熟々聞て大いに歎きコハ何事を仰せらるゝや是程の御病氣にて何ぞ果させ給ふ事の有べきや御心を取直され隨分御安心有て明年頃の天下の動靜を篤と御覽ぜられん事こそ願はしけれと申ければ昌幸眼を屹と睜き我命已に盡んと爲に何とて斯く迂濶なる事を言るゝや我死したる後は孫の大助を能く翼け後日必らず德川の天下を覆へし家康の首を以て此昌幸の手向にせよ唯口惜は眼前是を見ざる事よと暫時歎息なしけるが又

校訂 眞田三代記第四編

第一　眞田治幸山本九兵衛を生捕事幷山本九兵衛眞田に從ふ事

雲を呼び雨を起す蛟龍も蟄する時は螻蟻に制せらる幸村は幼稚より各所の强敵を打挫ぎ威名を遠近に轟かせしが時運の未だ到らざるにや三成亡びて身は山間の明月を友とし世事は捨て問ざる者の如く成ければ之を見之を聞者嘲り笑ふも道理なる哉幸村は父昌幸が死去せし後は麁服を纒ひ出ては畑に出て農作し夜は紐を組て業となし色黑く形窶て其樣一方の大將なりしとは更に見えず又嫡男大助は川に漁し山に駈り何學ぶ事も無く髮を亂し手足を猿の如くに荒しかば里人等は餘りの事と呆れ果誰とて之を侮らざる者無りけり當國和歌山の城主淺野但馬守は忍びの者より此由を聞き關東へ斯々なりと事の一伍一什を申し立しかば源君此報を得て偖は幸村も父昌幸が死去せしに因て愁傷の餘り白痴者に成たりしかと一旦は悅び給しが又熟々と考へられしに智將と聞えし幸村が如何に落魄し及び父を失ひしとて斯樣に白痴と成事の有可きや是外ならず彼陽に愚を示して此家康に油斷をさせ不意に討んと爲す遠圖に相違有まじテモ怖ろしき心根かなと案じ出されては身も毛を欹つ計に思されて再び淺野に命を下し假令幸村白痴の體有るにも

せられず中にも九度山の眞田を殊に氣に掛られ紀州和歌山の城主淺野但馬守に命じて能々眞田に心を配り候へと有しに但馬守是を承はり毎日數十人を忍ばせ九度山に到りて眞田が振舞を窺はせしに眞田今は俗に云白痴者の如くにて田畑を耕し紐を組て日を送り悴大助に物教へさへ怠り夏は裸體にて髮を亂し紀の川に水を浴冬は雪を履て山中に猪熊と戯れ其様他念有りとは少しも見えざれば忍の人々も唯呆れたる計にて此事を折々主家但馬守方へ告けるに但馬守少しは安心しけれども兎角心底の程不審く思ひて翌慶長十二年に至り家臣の内にて忍の術に長し山本九兵衛時經と云ふ者に命じ汝眞田の方に立越え幸村父子を伺ひ密に害せよとて不動國行の太刀を與へければ時經心得候とて件の太刀を帶び密に九度山なる眞田が館に忍び込み様子如何にと窺ひける

校訂眞田三代記第三編　終

地に之を云んや早く殺せ〳〵と呼はれば大助怒て汝今之を云ずとも我能之を知り汝は當國和歌山の城主淺野但馬守に囑託られ來りしならん其故は但馬守には豫て關東より竊に某し父子を殺せとの命を受居りし事なれば早晩は刺客の來る事と思ひ居しなりと正鵠を指たる大助が一言に九兵衛は何と答も無て在りければ大助重ねて汝は今殺す可き者なれ共汝が相貌を察するに忠義の者と見受しかば一命は助け遣はす可し因ては我々父子が有樣は必らず〳〵他言する事有可らずと申ければ九兵衛答て某し事を誤まる上は何の顏有て主人方へ立歸る事を得んやイザ此手を緩められよと云つゝ跳起き兩肌脫で已に斯よと見ければ幸村急に進み寄り逸まるな汝言聞す事こそあれと制せしに九兵衛は之を耳にも入ず覺悟の樣の見えてければ幸村大に感じ誠に汝が忠は尋常の者の及ぶ所に非ざるなりシテ汝が姓名は何と申すぞ山本九兵衛と申なりと云ひしかば幸村如何に山本とやら汝我に從ひ忠を盡す心有ざるや九兵衛答て忠臣は二君に仕ず何ぞ其許に仕ふる事有んやと云ければ幸村莞爾と打笑ひ是柱に膠する論なり古英雄も云ずや事務を知るは俊傑に在と時に應じ機を察するこそ肝要なれ汝我々を討んとして忍び入しに既に倅大助に組敷れたれば忠の爲死せしも同じ事なり然れば此上我方に仕へしとて奚ぞ不忠と云事の有可き此儀を了解なく猶も死せんと爲は犬死同樣にて誰か其死を主人方へ好に告る者有んや如何に〳〵と問詰られて九兵衛は心ならずも心を變じ從ひ申可しと答へしかば幸村父子大に悅び夫より互に

せよ油斷ならぬ者なれば欺かれざる樣能々探索有可しと申し渡されしかば淺野も斯と心付き夫より手を替品を替へ幸村が心中を探ると雖も更に不審しき樣子の有ざるに種々と內議を爲ける時に山本九兵衛進出で某し今一度忍び入り窺ひ來らんは如何にと申しければ但馬守然ば汝に豫て與へし國行の刀を携へ寧そ幸村父子が首討て來れと有しかば九兵衛は急ぎ支度を整へ軈て九度山に赴き幸村が舘に忍び入夜に紛れ藪の茂に耳を澄し樣子如何にて窺ふに早寢入しと見え靜まりて有ければ猶も納戶に立入り尋ねしに寢所とては相知れず夫より外面を見渡せば少し離れて小廬の有しに立寄りて透間より窺ひ見ればコハ如何に幸村は常に替り燈火の下に紙を以て張拔銃を幾許となく製し居けるに九兵衛大いに仰天し偖は我君の察しに違はず幸村が白痴は僞りに相違なし大助は何處に在やと見回すに大助今は十四五歲にて是又見臺に打向ひ六韜三畧を繙へし精神凝して讀居たるに九兵衛は再び驚き今は匆々捨置ては後日の災ひならんと屹と心を定め太刀拔放ち戶を蹴破り大助と聲掛しまゝ拜み打に切て掛れば大助心得たりと打出す太刀を見臺にて抑へ付隻手を以て襟髮を摑み向ふへ撞と擲出せば九兵衛急所を打挫きて其儘悶絶爲したりけり此物音に幸村刷毛を差置き立出で見れば大助は九兵衛が首筋を取て押へ汝が今宵忍び入るとは疾より之を知りたれば搦め捕んと故々此處に籠りしなり汝何者の賴を受け無法にも我々父子を害せんとは爲ぞと詰りければ九兵衛答て我事を仕損じたる上は假令害せらるゝ共何ぞ白

因て大評定に及ばんと千畳敷の廣間に集る其人々には中央に秀頼公同じく母堂淀殿右の坐には執權片桐東市正且元野々村伊豫守重成郡主馬亮良則中村式部少輔氏春眞野豐後守頼包堀田圖書介勝喜伊藤丹後守重俊青木民部少輔其外群臣列座せり左の座には古老の三人織田平の信雄入道常眞同源五郎長益入道有樂齋大野美濃守入道道犬次には信雄の嫡男兵部大輔信良次男出雲守高長長益の嫡男丹後守長正次男武藏守尚長道犬が嫡男修理亮治長次男主馬亮治房三男小三郎治村平古主膳南條中務牧嶋玄蕃母利九郎兼助薄田隼人兼相木村源吾重成の後見智徳院源十郎の面面威儀を正して控へたり良有て大野道犬進み出て先君太閤四海の亂逆を鎭め天下を掌握し給ひけれ共不幸にして當君の御生長に遭給はず薨去せられしかば徳川前田の兩將に天下の政事を任せられしに前田氏の死後は徳川氏専ら其職に當り威權復其右に出る者有ざれば先約の如く天下を讓り給ふ事勿々思ひ寄らぬ事爲可し然ば先よりの沙汰を待ず此方より使者を立此事催促有て然る可しと申ければ織田常眞等も此儀宜しからんと云し程に片桐且元も誠に此方より使者を立催促有ん事然る可し就ては此使者は誰人か相勤申す可やと問しに大野治長願はくは某し相勤申たしと答ふ且元昔日此役儀に當られ給ふ事然る可らずと云しに治長何故然は言給ふぞ且元さん候此使者は實に至重至大の事にして容易の儀にては役儀を全うし立歸る事能はず其故は家康殿には兎角大坂方の手抜を見出し夫を廉に立て軍を發し大坂を亡さんと深く考へ居られし事な

君臣の義をぞ結びける斯て幸村九兵衛に向ひ今君臣の義を結びしとて山家のわび住居且は無祿なる某しなれば汝に扶持する事も叶はず殊に何たる役儀を勤さすると云事も有ざれ共是には深き大望の有事なれば何れ後日呼寄る相圖迄は播州姫路に於て醫を業と爲し居る穴山雲洞軒と云る者の方に身を寄せ居らる可し其雲洞軒と云るは即ち我家來なる穴山小助安治なれば我の割符を携へ行んに少しも不都合は之無きなりとて軈て割符を取出し渡しければ九兵衛今は是非無も件の割符を携へて姫路を指て赴きける夫より幸村父子は愈々軍書に眼を晒し時節の來を待たりけり斯とは知らず淺野但馬守は山本が歸り來るを今や遲しと待けれ共何の音信も無きに不審を懷き更に人を遣はして尋ねさせけり斯て其年も過ぎ明れば慶長十二年丁未秀頼公彌々十五歳に成給ひければ幸村今年こそ德川家康天下を讓り給ふ年なれ共何れ易々とは讓り給ふまじ然らば國家の動亂近きに發らんと豫て製し置し紙銃の數を猶も增してぞ居たりけり

大坂城中大評定の事并大野治長駿府に赴く事

太閤薨じてより星霜茲に十閲年歳丁未に次る慶長の十二年は秀頼公彌々十五歳に爲せ給ひければ大坂の大小名本年こそ德川家は天下を當君に讓らる可と日夜其沙汰を待ける處に早八月と成けれ共何の沙汰さへ無りければ諸將或は疑ひ或は激し斯ては所詮天下の事覺束なしと是に

言ふ事を夫我朝頼朝始て覇を關左に唱へしより北條足利尋で起り其後織田豊臣之に代ると雖も革命に方りては有徳の者興り無徳の者亡ぶ然れば天下を有つ者は皆徳の有無に因事にして此事獨り我朝のみに非ず異朝も亦然るなり宜なる哉天下の人の天下なりとは家康不肖なりと雖も久敷天下の任に當りて未だ甚だしき失徳せし事を覺えず然るに此天下をして頓かに秀頼君に還附せよとの事はヨシ家康承知して還附爲るにもせよ秀頼君一旦職を失し天下の動亂となり萬民を再び苦ましむる事有ば其罪は誰に歸するぞ此家康に歸する事勿論ならん大坂には斯程の心得有て天下を請取んとは爲ける耶其心得有て汝等能く秀頼君を守護すると有る上には何日なり共天下は讓り渡さん此儀如何に思ひけるや威に恐れ口を閉ては後日の爲に惡かりなん疾返答有と寛嚴二つの諭命を受て兩使は何と答もなく顔見合せて平伏たり源君重て兩使に向ひ汝等兩人異存無くば早く立歸りて此事諸將に申されよ申す事は是までなりと云捨て其儘深殿に入らせ給へば兩使は唯茫然として悄々其場を罷りけり

第一　大坂城中騷動の事并片桐駿府へ發向の事

然程に兩使は使命の叶はぬを免やせん角やと思ひけれ共再び何と爲可き樣も無く大坂へと立歸り事の由を語りければ諸將等之を聞き暫時言葉も無りけり時に片桐治長に向ひ貴殿出立に臨み

れば一言半句の誤りより大事に及ぶ事有を恐れてなりと云しに治長勃然として曰く言るゝ事の如きは某しも知り居るなり何ぞ是敷の事を恐れんや我家康の許に至り天晴家康を説て天下を受取り當君に將軍の任を請うけ目出度歸城致す可し其時萬一家康許容無に於ては死を潔ようして使命を辱めざる而巳と勇み立て申しければ道犬も進み出いしくも申したる哉且元殿此使者は倅に命じ給へと申しければ淀殿も共に且元に勸め立てしに且元今は是非もなく進まぬながら是に從ひ然ば副使を添んと野々村伊豫守を之に充彌々兩人使者の役とは成にける偖て兩人は直に支度を調へ出立し駿府へ着せしかば翌日早速に登城し大坂よりの使者の旨通じければ聽て定めの席に案内有て夫より源君面謁に及ばれける兩使其席に立出るに中央には源君左右には井伊本多酒井榊原を始め竹腰山城守安藤帶刀三浦長門守成瀨隼人正近藤登之助兼松又四郎等の面々列を正して扣へたり兩使は發と手を突き恐れながら君の健全に渡らせ賜ふを賀し奉つる偖此度小官等秀賴の命を受け使者に立越し次第は古太閤末期に及び遺命有て秀賴十五歳に成給はゞ天下を還さるゝ樣約し置れし處今年早くも秀賴十五歳に成たれば豐臣の天下を御讓り相成度此儀言上仕つり候なりと述けるに源君小首を傾け給ひて家康齡已に七旬の坂に近き耳も遠く成りて兎角聞取惡ければ近う寄て今一度申し述られよと有しに治長再び前の如く述ければ源君兩使にむかはれ汝今豐臣の天下を還せと云しや治長 命の如に候源君汝聞ずや天下は一人の天下に非ずと

答に及びし處何と聞違へしか其後承まはれば武具兵粮を調へ剩さへ諸浪人を召抱て軍の用意を爲との趣き是如何なる事に候や汝は執權の職にも有事なれば斯樣なる事隨分と注意有べきに然は無て若輩なる秀頼を語ひ非義の振舞に及びける段甚だ以て其意を得ざるなりと氣色を變へて問ひ詰られしに且元は少しも怖るゝ樣子なくコハ思ひも寄らぬ仰を承まはる物哉武器の銹たるを磨き損じたるを繕ひ又兵粮を用意仕つる事は武道の常にして珍らしからず且諸浪人を召抱候事は諸臣の内にも病者死人及び長の暇を願ひ出る者數多有ければ役儀にも欠る事之有り其上御約束の通り早晩天下を御讓り有らせらるゝ時には人數も不足致候故夫等の爲人數を增置候事に候えば旁々以て御不審を蒙る儀毛頭之無候然るに斯る事仰られ候には恐れながら君側に奸者有て臣を讒せし事と想像仕つりぬと寛然として述ければ源君は暫時默然として在せしが頓て氣色を直され給ひて流石は片桐なるかな能も申譯致したり夫にて余も心解たり夫は偖置此度汝を呼寄せたる事は全く以て此儀計りの事に非ず秀頼には未だ定まれる内室も有ざるに幸ひ予が孫女は淀殿の姪に當り秀頼に相應き樣覺え候間婚儀を結ばんと思ふなり汝如何思はるゝぞと申されければ且元大に驚き思ひの外なる君の仰を承まはり先は御疑ひの念晴させられ小官の悦び是に過ず御婚儀の事萬事畏まり奉つり候然れども此事今小官の一存にて聢と御答も仕つり難く候間何れ大坂へ立戻り評議の上御返答仕つり候はんと述ければ大御所實に道理なり然ば立歸りし上

死を潔よくして使命を辱しめずと云れしは如何に候やと云れて治長赤面し座にも堪らず退きたり織田信雄同有樂齋の兩人大いに怒り家康斯る心体なりとは奇怪の至りなり然らば大坂より義兵を擧げ早々に德川を攻亡し秀賴公の御代に成ん物と居丈高に成て申ければ且元大に制してコハ織田殿の御思慮とも覺えぬ者かな家康が斯る返答せられしは是大坂より事を發させ而して後罪を鳴し攻立んとの企てなり努々短氣の思ひ立有可らずと諫めけれども織田大野等聞入ず夫より糧米武具の用意を爲し其上諸國の浪人を招きければ和久半兵衛御宿勘兵衛等の面々を始め一時に五百有餘人の者大坂にぞ來りける京都諸司代板倉伊賀守此由を聞付け大に驚き急ぎ此由關東へ注進に及びければ源君竊に悅喜ましく〱偖こそ大坂方我謀計に罹れりイザ是よりは執權片桐を招き言辭の誤りを把て大坂を罪に陷し秀賴を討亡して天下をわが掌に歸せしめんと思され急に使を馳せ片桐を招かれしかば片桐は急に登城し秀賴公并びに淀殿へ斯と申立しかば淀殿色を變じ其方關東へ赴かば家康が謀計に當りなん此事止り給はれと申せしに大野道犬も進み出で其許再び參りなば又々家康に言ひ伏せられ却て災ひの種子と成ん此事無用たる可しと申せしかば且元莞爾と打笑ひ某し深き謀計あり必らず案じさせ給ふなと云つゝ其場を退き急ぎ支度を調へ片桐は駿府へと赴きけり夫より城中へ斯と通じければ大御所急ぎ引入られ直に御逢有て且元に向はれ如何に且元先達て大坂より大野を使者として天下を讓る可き樣申越れしに付云々と返

み
斯て大坂の諸士等は此度孫女の入輿せられしに付天下を讓られ給ふ事早近きに在んと歡びの眉を開き居たる處に片桐且元は却て之を歡ばず寢食をも安んぜずして物案じの體なれば嫡男出雲守且家父に向ひて此度關東の御孫女御入輿につき遠からず天下をも秀頼公へ返し給ふ事とて諸將歡び居るに父君には何とて然樣には憂ひ居給ふやと問しに且元涙を浮めて申けるは汝等麁忽にな聞給ひそ此度御孫女の入輿有しは德川殿の深き思慮ありし事故何とて天下を讓り給ふ事の有可きやア丶豐臣家の運の盡ぬる果かなと歎息なしければ出雲守は大に驚きソハ如何なる事に候哉と押返して問けるに且元答て是汝等の知る所に非ずと云捨てければ傍らより舍弟貞隆進み出て且元に向ひ唯今兄君の仰に因て某し愚案を運らすに此度の御輿入は家康殿秀頼公を聟と爲し置き後日秀頼公天下を讓らざるを怒りて軍を發しなば子として外舅に弓を彎と謂ふを罸とし討亡さんとの策ならん夫のみならず婚儀を結び給へば大坂方の諸侯油斷し且孫女より常の動靜の能知らる丶事故何角を深く考へられての遠圖ならんと存ぜしなりと申ければ且元掌を拍ち大に驚き汝が申處實に我考へに同じと答へければ貞隆再び兄君には然程敵の意中を知り居れながら何故に婚儀を整へたまひしや且元是反間の謀計なり貞隆且家如何なる反間に候やと摺寄ければ且元聲を潛め虎穴に入ずんば虎子を得ず家康は大坂方に油斷させ思ひも寄らず軍を發さん

早速返答せよ使者の役目太儀なりと有て氣色殊に麗はしく爲せられ時服一重を賜はりければ且元は面目を施し聽て暇を申受け急ぎ大坂へと立歸りけり

片桐且元深意を談ずる事幷大御所上洛の事

偖も且元は一言を以て難きを開き易々と大坂へ立歸り此度の趣きを逐一に諸將に述ければ織田信雄進み出家康殿孫女を秀頼公に嫁せしめ給との事は是天下を讓り給はんとの深慮なる可し此儀早速御返答有て然る可しと申ければ有樂齋道犬等も實に然る可しと評議忽ちに一決しければ青木民部少輔信重伊藤丹後守重俊の兩人を使者として再び駿府へ遣はし御孫女を秀頼に送らる可き事秀頼に於ても承知せられし旨言上に及びければ源君幷に秀忠公にも悦喜まし〳〵然ば吉辰を撰み入輿の式に及ばれんと急ぎ其支度をぞ命ぜられける斯て其年も暮て明れば慶長十三年二月朔日關東より大橋長門守松平主水正美川讃岐守等孫女千姫君を守護して大坂に着しければ大坂にては豫て設け有る中嶋の舘に姫君を請じ參らせ夫より目出度婚姻の儀式を濟されける編者曰く千姫君入輿の事は一說に慶長八年七月とせり然る時は本書と頗る年度を異にす蓋し慶長八年は秀頼十一歲にして本書に所謂十六年は即ち十九歲なり然れば其八年は約を結びし年月を言ふ者にして其輿入有しは十六年なる者歟私しに本書を改竄せず因て疑ひを記し置の

深く氣遣はれし故遂に此議に一決しけるを傍側に聞居たる木村薄田堀野々村等は此度上洛爲られざる時は愈々大阪方の威勢衰へんと思ひけれ共我身の微弱なるに因り口を閉て控へ居たりとかや

第三　清正大阪に着する事并清正秀頼公へ上洛を勸むる事

爰に肥州熊本の城主加藤肥後守清正は大御所上洛有て　當今御即位の賀儀を奏上せらるゝと聞我も上洛せんと思ひ本城を打立先大阪に至り家臣飯田角兵衛を城中へ送りて斯と通せしかば淀殿始め諸將大いに悅び急ぎ清正を城中へ招きて定めの席へ通し秀頼淀殿面會せられしかば清正發と平伏し先秀頼公の安全を賀し淀殿にも寒暄の禮を叙べ了て偖淀殿サモ嬉しげなる体にて清正に向ひ此度徳川大御所より秀頼公に上洛の事を申越されけれ共諸將の評議も兎角區々にて候が此儀はいかに致候はんや何分宜敷御思慮こそ望ましけれと申されければ清正四邊を見廻しシテ此評議は如何御取定に相成候やと問ける處に傍らより大野道犬進み出で何分此議は公の御一大事とも存じぬれば御斷り仰遣され候方然る可く存じ候なりと申ければ清正面を正し抑々御一大事とは奈何なる次第にて候や道犬然ばに候大御所は其許にも知り給ふ如く深智にて在ませば此度公に上洛を勧めしは折を以て害さんと爲し給ふ事なる可し然るに因て御斷りの方然る可し

と爲をれば大坂方は其謀計に乘せし狀を爲し却て敵の不意を襲はんと爲すなり此事決して口外有可らずと云捨て且元は奥に入にけり跡にて兩人は且元が智言に感じ猶も種々の評議を爲し夫より兩人も我館へど歸りける時に源君は既に征夷大將軍の職を秀忠公に讓られ駿府に退隱ましまして大御所と稱されける斯て大御所より淀殿へ申送られけるは故太閤紀州攻の時那智山へ佛宇を造營の御約束有ども戰國に取紛れて其儘に指置れたりしが今は四海大に治まり泰平の時節とも成たれば秀頼殿武運長久の爲め執權片桐を奉行に命じ早く造營有れて然る可し且又長谷法隆寺も同時に造營有まほしとの事に淀殿委細承知有て那智法隆寺とも同時に造營と定まり片桐に奉行を命じければ片桐心中に是關東の謀計にて大阪の軍用に事を欠せん爲ならんとは思へ共是又背はざる時は敵の油斷を襲ふ方便に惡かりなんと潔よく命に從ひ那智山へと赴きける斯て慶長も早十六年に及び　後水尾帝御即位在〳〵けるに因て大御所密に上洛せられ安藤帶刀成瀨隼人の兩人をして大阪方へ申送られけるは此度　後水尾帝御即位に付家康は既に上洛致しける所秀頼には內大臣の身を以て上洛なきは上を輕蔑するの理に當れり急ぎ上洛有て然る可し予も久し振にて對面せんと有しかば淀殿始め諸大將大いに驚き先兩使を客殿に止め夫より評定に及びける所に道犬進み出て此度大御所人知れず上洛ありて君を招き給ふ事誠に不審く存ずるなり兎角危きに近づき給はざる方然る可く御斷り有たしと申ければ信雄有樂齋も之に同じ淀殿にも

瓜茄子を切如く討取し此清正なれば少しも御案じばし爲給ふなと勇み切て申けるに淀殿は清正が顏色を染々見て今に始ぬ御身が勇氣は然る事ながら寄る年波は昔と替りほの見え染る兩鬢の初霜に夫と思はれける今は以前には劣り給はん事こそ悲しけれと往時を追懷して暫時泪に沈みしかば清正は屹と容を改めコハ淀殿には値が女性の氣弱き事を宣ふ物哉傳へ聞唐山三國の世の趙雲は七旬に餘る老體にて其量千斤の鼎さへ指上げ戰國の世の廉頗は八旬にして日に十斤の肉を喰しとかや況や今清正は年經りたる容に見ゆれども本年僅か五十一歳尺餘の鯛は骨も殘さず酒は日毎に二升を飮み飯は一升を能く喫盡くして腹中を損ずる事なし然れば世の蠅虫等如き者幾百萬人有とも何んぞ懼るゝに足らんやと張臂をして申ければ淀殿殊の外悦び斯ては氣づかふ事も有ざる可し早々御上洛爲せ申さんと彌々是に決しける爰に勢州阿濃津の城主藤堂和泉守高虎折ふし有馬の湯治より立歸りて有ければ淀殿密かに道犬が室大藏の局を以て申送りけるは此度加藤肥州殿幸ひ當城へ來れり然るに因て秀頼公御上洛の評議一決に及びければ其許にも當地に居らるゝ事故清正と同じく秀頼公に隨ひ上洛せらるれば誠に賴母敷事に存じ入候なりと言葉を盡して賴み込れしに高虎稍打案じ軈て返答に及びける樣は御申越れの事易き事には候得共高虎病氣の爲湯治に相越候位の儀ゆゑ此度の御供には何分隨ひ奉つる事相叶はずとサモ本意なき挨拶に及びければ大藏の局は是非なく立歸り斯と淀殿に披露しける淀殿之を聞き誠に故太閤御

と存じ候なりと申ければ清正大に怒り恐ながら秀頼公には坐ながらにして内大臣の高官に昇られながら是まで一度も御上洛有せられざるは是上を御輕蔑遊し給ふ御事にては候はずや剰さへ此度大御所より態々使節を以て御上洛の事御催促有しに夫さへ御斷り有ては誠に是迄の御威勢も衰へ旁々歎かは敷事にて候年は老て候えども此清正何處までも守護し奉つらん程に急ぎ御上洛有ましと誠心面に顯はれ申ければ道犬が三男小三郎治村傍側より清正殿の御一言實に御道理と存じ候然れ共人心洶々の折からなれば御上洛の上は其日の内に京都御引揚然る可く存じ候と申しけるを清正熟々見るに未だ十五六歳にて在ければ其奇才を感じつゝ如何樣其儀宜しからんと答へけるにぞ遂に此議に一決し彌々上洛の事に定まりける嗚呼奇なるかな治村一言以て主家の安危を斷じ父が恥辱を雪ぎし事誠に類ひ稀なる若者かな

難波戰記等の諸書に據る時は此事治長が言と有なり然れ共治長は斯る英斷を爲す可き人に非ず且治村が賢こき事は末の卷等にも見ゆる如くなれば治長と謂ふは蓋し誤りならんか書して以て識者の教を俟つ

斯て秀頼公彌々上洛と定まりけるに淀殿には猶も是を氣づかはれ清正に向ひて成ほど只今の評議にて上洛との事道理には存じ待れども兎角秀頼公の御身の上心許なく存じ入候なりと申けるを清正聞も敢ず否々此事決して御案じ無し往年賤が嶽にて百萬の敵さへ追崩し大將の首を取事

しと謂ふには非ず又關東方へ阿諛らひたりと申す譯にも之無く全く以て當病の爲め御斷り申したる次第に候えば病を押ても是非に御供仕つらんと始めに替りし返答に清正然ば某しと同道有可とて其儘高虎を伴ひ城中にぞ歸りける夫より彌々上洛の用意に取掛られ時于慶長十六年三月廿七日を出船の期と定められ其日夕七時半に御坐船孔雀丸に打乘れ難波津の花の岡を出船なし給ふ相從ふ面々には加藤清正は同船にて守護し次には藤堂和泉守稻木左衛門尉三浦飛彈守淺井周防守内藤宮内少輔木村源吾薄田隼人槇嶋玄蕃速見甲斐守大野修理同主馬同小三郎織田兵部少輔同武藏守等七百餘人左右の堤には青木民部少輔信重伊藤丹後守重俊片桐主膳正貞隆堀田圖書二百餘人にて警固せり斯て翌廿八日五時半に伏見京橋に着され夫より道を急がれ四時半に清正が邸に着給ひ朝飯を喫られ直樣　參内有て當今　後水尾帝に踐祚の賀儀を奏上し直に御暇を賜はり寺町御門より退參爲し給ひければ宰相義直卿常陸介頼宣卿迎ひに參られて二條の城にぞ入給ひけり

附言秀頼公二條の城に入給ひ大御所に御對面在し時清正大言を放ち大御所を驚かし參らせ其紛れに秀頼公城を立退かせ給ひしかば夫が爲清正は危く平岩主計頭に毒害せられんと爲したる事共之れ有ども其は爰に略しぬ

爰に片桐且元は紀州那智山に佛寺建立の命を承け專ら營繕を急ぎける處に此度秀頼公上洛爲ら

繁昌にて在まさば歡びても來る可き筈なるに然りとは賴なき渠が心根かなと暫時淚に沈みつゝ清正に此由告ければ清正大に怒り惡き高虎が心体かなイデ某し彼を提げ來る可しとて直に飯田角兵衛森本義太夫の兩人を從がへ藤堂が舘へと趣き案内を通じければ高虎は清正と聞より大に驚き是は會ざる方宜しからんか否々氣荒なる清正なれば復如何なる事を爲も計る可らず兎に角會ふ方宜しからんと慄々ながらに急ぎ衣服を更め清正を奥の間に請じける清正は遠慮げも無く直と押通り顏色を變じて高虎に向ひ足下には此度御病氣と有て秀賴殿の御上洛には從がひ給はざる由承まはり清正御見舞の爲め參上致したり然るに御見受け申せば御病氣とも思はれず斯樣に虚言を申さるゝは如何の事に候哉畢竟歡んでも御供に馳せ參らる可に今は關東の聞えを懼れ彼に阿諛らひ是を疎み給ふ事奇怪の至と存じ候なり彌々斯る御所在とならば清正俺までもお相手致さんと聲荒らげて突立上りアハヤ打果さんずる有樣に高虎は大いに驚き慌て狼狽き逃んとしながら此方を見れば飯田森本眼を瞋らし控へ居たれば高虎今は人心地もなく慄へ居たり

片桐且元地藏尊の告を夢る事幷宮田采女を幸村が舘に遣はす事

高虎は大に懼れ清正に向つて頻りに謝入り首を低て申けるは某し決して故太閤の高恩を忘却せ

如何樣先年信州上田開城の後幸村父子此處に隱れたりと閑居ながら頓と忘却せしこそ愚なれと且悅び且歎じ夫より富田釆女を使者として幸村が舘に赴かしむ富田は早速に支度を整へ到りて幸村に對面し片桐が使者の旨云々申ければ幸村片桐殿には何用有て某しを招かるゝや釆女答へて此度且元某しを使者として貴殿へ申し送る樣は貴殿には先考昌幸殿と倶々故太閤の高恩を厚く思ひ遣られ專ら秀賴公の御爲を心に掛て往年關ケ原の一戰より身の辛苦をも厭はず二君に仕へざるの節義を全う爲し斯る山間に蟄居せられし段實に天も感動爲す計りの事にも候へば斯る忠臣を空敷せず願はくは大坂に來りて大元帥と爲り偉功を奏し給はる樣致し度との事なりと辯舌滔々として述ければ幸村は大に笑ひ偖も片桐殿には人の氣も知給はざる事哉某し上田開城の後は早世の念を絕ち寧ろ身を保つの策を案じ見らるゝ如く農事を勵み麁食麁衣にて日を送り只閑日月に歡樂を盡し居る事なれば何とて再び軍三昧の事に從事致す可きや此事好なに反命申されよと富田が再び物言んと爲るも聞入ず幸村は袖を拂ふて其儘奥に入にけり

第四　幸村且元智計符合の事幷大御所碩儒惺窩を招かるゝ事

斯て富田は幸村が返答の意外なりしを大いに怒り立歸りて此由を逐一に且元へ語りければ且元之を聞きアヽ吾過てり實に左樣にて有つらんと云たる儘外に何たる仔細をも語らざれば富田は

るゝとの事を傳へ聞きコハ一大事の事成可しと急ぎ大坂に立歸らんと中途まで來り樣子如何にと尋ねしに加藤清正等附隨がひ早上洛濟しと知れし故清正御供と有ば安心なりと大に歡び其まゝ又那智山へと戻りけり斯て那智山に到り其邊りなる九度村に往昔弘法大師の手製し靈驗著るき地藏尊の像有ければ且元は是を殊に信仰し心を込て秀頼公の武運長久を念じつゝ或夜フト睡りに就かと思へば不思議や峯の松風聲颯々として異相の人現はれ來り且元が枕邊にツト立ち汝知ずや玄德は臥龍を三顧して遂に帝位に昇り漢高は子房の翼け有て馬上に覇業を遂げたり遺賢を捨て問ざる時は天下は獨り得可からざるなり汝宜敷心を注よと云かと思へば夢は其まゝ覺たりけり且元は奇異の思ひを爲し暫時呆然として居たりけり

因みに曰く此地藏尊は其後正德年中九度山より出して京都北野の内七番町の某の舍に安置し之有とかや

且元は靈夢に感じ是必らず日頃念ずる所の地藏尊我に然る可き一將を教へしならんと種々に打案じ軈て土地の百姓を招きて此九度山近傍に若や名高き人の閑居なぞして在者は之無やと尋ねしに百姓答へて外には存じ申さね共眞田左衛門佐幸村殿と申さるゝ人先年關ヶ原合戰の後如何なる事にや浪人して此處に隱れ居り候併ながら父の昌幸と云人病死されし後は氣拔者の樣になり一向に人事も辨まへぬ程にて候と申ければ且元掌を拍ち一人心に歡びてアゝ吾ながら怠たり

の城主淺野但馬守豫て心を配り某し萬一聊かにても大坂方に心を通すと見受なば用捨に及ばず父子を害ひ災ひの根を絶切らんと此近邊にまで隱し探偵を配り置し程なれば白晝に大坂よりの使者なんどゝ言ひ來る共何條是と談合ふ事の成るべきや斯程の事は足下にも能く知り給ふ事なる可と存せし故斯は情無擧動に及びしなり然れば足下使者の衆より此由を聞つらんには我心を悟り夜陰に紛れ一人來り給ふ可しと想ひしかば豚兒大助に命じて出迎を爲しめたりと聲を潛めて申ければ且元實に貴殿の申さるゝ處至極せり某しも最初より一人忍び來る事は合點にて候へども先陽に使者を差越したる事は此使者の應答にて貴殿の大坂に隨はざると云ふ事を隱し探偵等の者共に知らせ置き其後一人潛行して萬々の譚り致さんと計りしなり然ば今こそ互の胸中符合したりと夫より且元は腹中を打明し德川家を覆へして秀頼の天下に爲ん計議を種々に密談し數刻に及びて夜の明ぬ内且元は立歸りけり然ば兩人が面會せし事知者一人も無りしとかや夫より且元は那智山幷びに法隆寺の造營を濟し大坂へ立歸りし處折柄熊本より急使を馳せ清正病死爲したりとの訃來りしかば城中には左右の手を失ないし如く皆憂にこそは沈みけれ關東方には斯と聞き清正既に死去せし上は早く片桐をも害せんと色々工夫を運されけれ共先清正が諸士の心を鎭めんと家督は元の如く嫡子忠廣へ賜はりける此折から關東方にては偏へに大坂を攻潰して天下を德川の有に歸せんと其事を頻に計畫爲しけれ共今德川方に從ひ居る諸大名は皆太閤

最不審に思へ共問ふ術もなく控へたり斯て且元は其夜從者をも召連ず自身九度山に立越え案內者に連られて山又山を分け登り東か西かと見る內に十四五歲なる小童髮を亂し徒跣にて風と傍へ寄り來り如何に爰へ來られしは片桐東市正且元殿にては在さずやと聲掛られて且元は不審を爲しコハ怪しからぬ小童かな我今爰へ來る事は誰とて是を知る可き樣なし汝幼稚の身を以て此山路をも厭はず剩さへ夜に紛れ我に尾き來るは是曲者に有つらん其分には差置き難し覺悟を爲せと云まゝに刀の柄に手を掛アハヤ拔放さんと爲けるを小童は少しも怖るゝ色なく否々小童は然樣の者には非ざるなり兒こそ眞田左衛門佐幸村が一子大助にて候なり父幸村兒に申聞候は今日且元殿の使者を返せしに就ては今夜且元殿必らず尋ね來る事有可し然ば汝道に出迎へ隨分心付伴ひ來るべしとの事に付き先刻より此處に待受居りし處案に違はず君の來られしに因り御姓名を呼び候なりと外貌の卑きにも似ず語遣ひの鋭敏なるに且元は流石名將の兒の奧ゆかしと暫時感涙に袖を濡ほし且は幸村が麁略ならざる心底に驚きつゝ遂に大助に伴はれ其が舘へと入にける幸村は且元の入來るを見て禮を厚うし奧の上座に請待なし軈て其坐に立出て互の口儀も最恭々敷稍有て且元言葉を更めシテ今日富田采女なる者を使者とし貴殿方へ云々の儀申入し處貴殿には頓と取合も無く剩さへ不禮の御接遇に及ばれしとの事は如何なる御所存にて在りしやと問けるに幸村然ば其事にて候某し當山に蟄し居る事柄は關東方にも隱れなく殊には當國和歌山

ば此儀は門弟の林道春に仰付られたじと品よく辭退爲しけるとなり其後先生は京に上り洛北の市原と云ふ所に山莊を搆へ草庵に住して道を樂しみ居ければ里人等其徳を慕ひ米鹽野菜炭薪などの類を持運びしに先生は却て人々の勞を厭ひ小さき籠を出し置きて志ざし有ん者は是へ入られよと認め出し置自分は戸を閉て居られしとかや然る程に大御所は惺窩の言に從ひ道春を召れ斯と命じければ道春は師よりの囑けも有ば辭する事叶はず委細畏まりぬと御請を爲しけるにぞ夫より諸大名を招集せらる其人々には福嶋左衛門大夫黒田甲斐守富田信濃守脇坂淡路守蜂須賀河内守松平兵部少輔平野遠江守加藤左馬之介板倉豐後守大友式部大輔其外井伊本多酒井榊原を始め旗下の者には野呂七之助大見藤兵衛毛谷新內淺野革兵衛松平賴母大久保彦左衛門成瀨隼人安藤帶刀の面々にて何れも左右前後に威儀を正して列座しければ道春聽て設けの席に進み出て文案に向ひ史記周の本紀を繙がへして偖も殷の紂王は無道にして民を虐げ德を亡し天下の人心皆放れしかば是一匹夫なり天下の主には非ざるなり然れば文王之を歎き一夫紂を誅して民を水火より拯はんと太公望を渭濱に求め德を脩め仁を施し時の到るを俟ける內文王は既に沒して武王發志ざしを繼ぎ天下の諸侯と商の師を牧野に破り紂をして鹿臺に燔死せしめ遂に武王位に即て天下の主と爲り給ひしかば天下の人民德に歸し世は靜穩と成たるより聖王と仰ぐも是に因れりと聲高らかに講述しかば諸將も耳を清して聞居たり斯て講義終りければ道春は首尾よく暇

恩顧の者共なれば其心根の程は如何に在やと大御所を始め譜代の諸將常に之を疑ひ懼れ殊に黒田加藤脇坂福嶋蜂須賀等は奈に德川氏に服せしとて事有に臨みては義として從ふ事も無る可しなど取々に云合りしかば大御所は先諸大名の心を試し見んとて其頃碩學の聞え高かりし儒者惺窩先生を招かれ之に命ぜらるゝは願はくは先生諸將に史記の内周武の天下を取たる處を講じ聞せ給はれと有たりけり

大御所の惺窩先生に命ぜられし深意は紂王を以て秀頼に比し武王を以て我身に較し諸大名をして其方向を定めしめんとの事にて抑々此紂王武王の事と言ふは唐山に夏殷周三代とて夏は凡四百五十年殷は凡六百四十年周は凡八百七十年連綿と打續きし内夏には桀王と云る暴君有しを殷の湯王之を打亡ぼし其より殷天下を有ちて二十八代紂王に及び此王亦暴君にて民を虐げ酒池肉林とて飮食の欲を逞しふし其外樣々の惡德有しかば時の諸侯之を惡み天下の人心を放ちたる上は其身是が主たりと雖も是天下の罪人なりイデ其罪人を討平げて民の疾苦を除かんと當時の大諸侯たりし周の文王が子武王外諸侯の望みに應じ遂に紂王と牧野と云ふ處に戰ひ紂王を討亡ぼして夫より周家天下を有ち祀を延く八百七十二年世を經る三十七主に及し事をいへるなり

然れば惺窩は早くも大御所の心を推し申けるは某し事近年衰耄て眼眊み文讀む事難儀にて候へ

し等今日參る事餘の儀に非ず扨も今日殿中にて講義有し事は是大御所諸將の心を試みん爲の事なる可し然れど某し等故太閤の厚恩を承し身を以て何條德川に隨ひ恩家を敵に取事を得んや玉と成て碎くるとも瓦と爲て全からず其許にも太閤の厚恩を承られし御身なる故此事相談致さんと故々是へは來りしなり一味合體の其上にて大御所を害し參らせん事如何に思され候やと口を揃へて勸めしかば富田兄弟は莞爾と打笑ひ是は〳〵各々方の御話しとも覺えぬ物かな死を以て恩に酬ひ臣として忠に死するは成程聞えし事には候得ども是は是古への愚律義と申す者にて當時斯る眞似するはなんと迂濶なる事に候はずや恩を捨義を傷ふても富貴をこそ望ましけれ忠義立して二ッ無き命を失ふ事近頃以て笑止千萬なりとサモ傍若無人に申しければ三人の者は仰天し暫時互に顏見合せて何と言葉もわら〳〵敷血氣に逸る野呂七之助は刀の柄に手を掛て瞋の眼に血を注ぎヅカ〳〵と進み出で人面獸心の富田兄弟言して置ば好氣になり飽まで腐れしその腸をイザ我屠りて首途の血祭爲んずと面もふらず飛掛らんと爲しけるを信濃守は暫時と押止め逸まり給ふな七之助殿是皆僞りの言葉なり各々方こそ疑はしと慮外不禮を顧みず心を引見ん其爲に斯は危言を吐たるなりと云れて七之助もハッと思ひ然れば其許が心根承知らんと爰に三人又居直りて兄弟の者と別間に移り隱謀の計議に時刻を移し互に血を歃り約を定めて歸りけり斯て五人は來る八月朔日賀儀の登城に打揃ひ日頃の大望を遂んものと其日の來るを今や遲しと待居わ

を賜はり後にて大御所大坂を討ん事の評議有ければ諸侯は夫となく大御所の心中を察しけるとなり

富田野呂毛谷大見隱謀の事幷野呂七之助妻に別れを惜む事

斯て諸將は道春の講義を歎賞し軈て暇を乞ひ請我邸へと退出しけるに何れも悅喜の體見えければ大御所は深く悅び給ひける其內富田信濃守は我邸へ歸て弟平三郎を招き申けるは今日の御催しにて林道春武王革命の講義有しは某し察する所大御所故と此講義を爲しめ諸將に聽せて秀賴公を紂王に比し彌々大坂を亡さん計議とこそ思ふなれ然れども他の諸將はいざ知らず某し等故太閤の大恩を承し身を以て假令德川氏威望天下に洽きにもせよ義を忘れ之を從がひ大坂に向つて假にも弓を彎事成可んや然ば某しは是より大坂の怨敵たる大御所と差違へ死を潔ようして地下に故太閤に見えんと爲なり汝も兄の節義に隨ひ明日我と同道して死を鴻毛より輕うせよと忠憤面に顯はれ勸めしかば平三郎も此儀御道理に候某し不肖なりと雖も兄君の芳志に爭で背く事の候可き哉此儀御安心有かしと答へしかば信濃守大に悅び夫より兩人額を交へて談じける處へ大見藤兵衛野呂七之助毛谷新內の三人打連れ來り信濃守が奥の間に通りて三人申しけるは某

じて其不意を刺殺さんと豫て利劍を携へ秦の都咸陽に到り圖を獻せん事を請ければ王大いに悅ばれ荊軻を近く招きて圖を請取り始より段々見給ひ已に其圖終らんと爲る時荊軻は仕濟したりと件の劍を取出し切て掛れば秦王大に驚き脫んと爲すに後は七尺の屛風にて取圍まれしかば秦王急に一策を運らし荊軻に向ひて吾愛妻の琴を今一度聞て死に就んと思ふなり願はくば今生の思ひ出に少時の間を賜はれよとイト打濕て申しければ荊軻さらば早く聞れよと少しの猶豫を爲しける時愛妾琴を彈じ出すを聞ながら王は得たりと荊軻が把し袂を振切り遽だしく屛風を飛越逃出せしに荊軻殘念なりと持たる劍を投付しに銅柱にグザと立たりけるが其內大勢立塞り遂に荊軻は討れけり今御身が唱へし歌は此事にて有ける故思はず荊軻が忠に感じ淚に咽びし次第なりと云做けれし共又堪かねて泣沈みしかば妻は夫の顏つくぐ〵打眺め恨めしや良人には心に大望を企てながら妾にさへも押陰しやがて罪三族に及びし時憂目を見させ給ふ事かと絕入ばかりに取縋りしかば七之助は心も今は散亂し倶に嗚呼と泣沈みて妻に名殘を惜みぬる其物語りは後の條に委敷知れなん

第五　富田信濃守隱謀露顯の事幷平三郎弓勢の事

野呂七之助は妻の切なる心に迷ひ包み藏せし身の大望も今は勿々包兼妻に向ひて偖も此度毛谷

り已にして早七月も晦日と成ければ五人の者打集まり明日こそ我々身命を擲つべき時なれば今宵は飽まで快飲せんと夫より酒汲かはしつゝ悲歌慷慨に打沈み壯烈の氣四邊を拂ひサモ物凄まじく見えにける斯て夜も更け酒宴も已に終りければ皆々明日參會せんと盡ぬ名殘を押切て各々別れ立歸る中にも野呂七之助は今年廿五歳の若者にて明朝こそ天晴討死なし英名を後に傳んと勇み跳つて我館に歸り妻には此事少しも漏さず常の如くに居たりしが抑此妻は本多上野介が乙娘にて今茲やうやく十七歳の其容貌さへ風彩さへ類ひ稀なる傾國の粧ひ擬して嫁ぎしよりまだ三ケ月に成か成ぬの間なれども偕老の契り淺からず今日も亦夫の歸り來りしにまめ〳〵敷も立出て例の如く何角の取成爲てけるが夫に係る大望ありとは神ならぬ身の露知らず何心なく侍べりしに兎角夫の顔色氣に懸りしかば酒肴を調へ待遇つゝ手馴し琴を引寄て調もいとゞ奥床敷「七尺の屛風も越さばなどか越えざらん羅綾の袂も引ば何どか切ざらん」と操返し〳〵唄ひければ七之助は我妻の何も知ずに彈く琴の唱ふる歌さへ身に感され明日死ぬ此身の敢果さと思へば不便彌増り心もほと〳〵消入計りに浮む涙を瞬たきしかば妻は驚きコハ夫御には何を然樣に悲まるゝぞと問れてハツと心付く七之助は急に顔を押拭ひいなとよ然樣に驚き給ふな御身が唄ひし琴歌の歌の意の慷慨さに遂感涙を流したるなり偖其歌の意ろと言ふは往昔燕の國に荊軻と云へる刺客あり主の仇秦王を刺んとして謀計を運し督亢の畵圖と樊將軍の首とを齎らし之を王に獻

せんと躊躇ひければ平三郎兄に向ひ某し防ぎ箭仕つらん兄君には暫時奥へ入給へと玄關に飾り有る鎧投掛け弓追取て屋根に上り大音聲に名乘けるは某し兄弟大坂方の恩顧を忘れず大御所の大坂を攻潰さんと爲給ふを早くも曉り明日こそ八朔の登城に紛れ大御所を討參らせんと工し處一味の内に變心せし者有りと見え爰に軍勢を差向られたる上からはイザ快よく最期の一戰仕つらんと弓滿々と彎しぼり切て放すに虚矢はなく中にも本多が郎黨石田嘉八が胸部グサト射貫きしかば是に怖れて其餘の寄手は進み得ず四度路に成て見えける處に一人の剛の者平三郎に向ひ天晴なる弓勢驚きたりイザ我を射て見よと胸部を擴げて見せけるは本多が郎等眞野兵助と言ふ者なり平三郎憎き彼が言分なりと猶も弓引絞りてヒヨウと計りに切て放てば過またず矢は兵助が胸に突立兵助尻居に動と倒れて死たりけり平三郎は矢の有ん限りと思ひ詰め彎ては射々ては番へ瞬く間に十七騎まで射落して早矢種の盡たりければ今は是までなりと上帶解き腹十文字に搔切死てけり其間に兄信濃守は黄絨の鎧を着し馬に打乘り長刀を水車に振廻し討て出れば續いて郎等の丹内六郎弓削左馬之助岩淵治助等三十六人主從諸共面も振らず寄手の中に突入しかば本多竹腰スハ取圍んで打取と下知すれ共此方は必死を極めし者故右に當り左りに突て難なく一方を切破り一息吐んと木陰に退き見れば郎等も過半討死して餘すは只七騎とぞ成にけり丹内主人に向ひ今は是非もなし是より大坂に落延身を秀頼公に寄せ命を全ふして後日の忠義を盡さ

新内大見藤兵衛が勸めに依り恩家大阪方に義を立んとして斯樣〳〵に工みたりと聞て妻女は驚く體更に無く凡武士の家に生れては義の爲め命を捨る事珍しからず斯る御事に候はゞ隨分潔よく出立給へ假にも妾に心を置れ未練の振舞爲給ふなと流石本多の娘程惡びれもせず申せしかば七之助はやつと是にて心を定め其儘臥戸に入にけり跡にて妻は文認め波江と呼る女中を招き父上野介方へ差遣して事の由を言送りしかば上野介は大に驚き取物も取敢ず密狀を懷にして馬に鞭當城門に至りて一大事の注進なりはやく此門開け〳〵と呼はるに門番は何事ならんと見れば本多正純供をも連ずイみ居しに其まゝ門を開きければ正純は會釋もなくヅカ〳〵と大御所の寢所に到り云々の由述しかば大御所は殊に驚かれ正純が手を執給ひてアヽ天我を捨給はず正純を以て救ひ給ふぞ嬉しけれと夫より富田毛谷大見の邸へ討手を差向けらるゝに富田は逆賊の棟梁なりとて本多正純に竹腰山城守を差添千餘の兵を附て向はせ毛谷が方へは三浦長門守大久保彥左衛門大見が方へは安藤帶刀成瀨隼人に同じ兵を以て向はせ野呂の方へは用心の爲とて固めを附置き夜の明ぬ内三人を討取り來れと嚴敷下知を傳へられしに討手の面々急ぎ支度を整へ向ひたり富田信濃守は謀計の漏しとは露知らず今宵限りの命と思ひ夜と共に酒宴し熟醉して睡りし頃は早寅の刻とも覺敷頃ほひ門外に鯨波の聲喧すしく聞え大勢押寄たる樣子なるに驚破陰謀の漏たるかと玄關に立出向ふを見れば本多の旗風に靡きて見えけるにぞ弟平三郎と倶々如何は

の二人は毛谷が方へ押寄來りて勇氣盛に南の門より亂入しければ新内は大に驚き太刀追取て立上り玄關に走り出てツと見れば早鎧武者五六騎馳來りしかば新内は物具固むる間もなく太刀さし翳し何者なれば夜中に狼藉を働くぞ盜賊にても有つるかイザ首并べて呉んずと切て出れば彥左衛門大いに笑ひ大恩を忘れ恐れ多くも大御所を害せんとする國賊天より汝を誅し給はんと爲るなり早く首級を渡す可し働き立せば手取になして猿繋ぎに爲可きぞ覺悟をせよと呼はれば新内偖は隱謀漏たるか然にても殘念なりと髮の毛を逆立て面色を烈火の如く變じ憎き寄手が雜言哉然云ふ汝が首引拔て呉んずと眼に血を注ぎて先に進みし馬武者一人を切て落せば如何は爲けん太刀はホツキと折れたりけり新内コハ叶はじと玄關の柱を引拔て隻手擲に薙回れば矢庭に七八騎迄討伏たり斯て新内今は是までと奥に駈入り腹切んとする處に守口五兵衛と云ふ者進み來り新内に六手と組付しかば新内之を膝下に引据ゑ兩肌脫で切腹し自ら首をぞ刎たりけり是より大久保三浦が勢は本多の兵と一手になり大見藤兵衛方へと急ぎけるに大見は既に安藤等に討取れしかば寄手は思ふまゝに勝を得て鬨を擧げつゝ引取りたり偖又野呂七之助は熟醉の餘り前後も知らず寢入りたりしに門外に人數の押寄せ來る音を聞つけコハ何事ならんと下僕等を起し問しむるに下僕等答へて那は御主人の隱謀露顯して富田毛谷大見等の三家と同じく寄手爰へ來りしなりと云ひければ七之助は大に驚き何者か是を漏しぬるや下僕餘の者ならず御主人にて候ぞ

れよと勸めし言葉を打捨て信濃守汝が勸めは然る事ながら弟平三郎も既に討死せし上は生延て何樂しからん死す可き時に死せざれば死に增るの恥ありとかや然に因て我は爰にて討死する間汝こそ大坂表に立越秀賴公に我等兄弟の事を申上忠義を盡し申可しと聞て丹內目を瞋らし主の危きを見捨て何阿容〳〵と退る可きや是不忠の第一なるべし某し爰は退き申さずと言ふを信濃守聞もせず忠義〳〵と言ながら主命背くは何事ぞ心得違ひを言んより早く立退き給ふ可しと叱り付られ丹內は再び返す言葉なく然ば今死ぬ命を存へ追付秀賴公の御馬前にて討死なさんと云しかば信濃守莞爾と笑ひ能言ふたり此品は是遺物ぞと今まで用ひし長刀を其まゝ丹內に渡しければ丹內之を押戴き是ぞ主從一世の訣れと互に涕を拭ひつゝ遂に別れて一方の圍みを脫たる丹內は大坂さしてぞ走り行く

富田以下滅亡の事幷大佛殿造營の事

虎は死て皮を殘し人は死て名を遺す富田信濃守は丹內を落延させ今は我死も空しからず早晩は大坂へも我赤心の程知つらんと頓て奥の間に入つゝ妻兒を手づから刺殺し續いて己も兩肌脫ぎ心靜に腹搔切てぞ死たりけり是を見て討漏されし郎等も同時に自殺を爲けるとかや斯て本多正純は富田が首級を難なく揚て夫より毛谷新內が方へ掛りける此時大久保彥左衞門三浦長門守

したる粧ひも果敢なく止ぬる事と成しに群集の者等は何たる仔細を知ざればスハ事こそ起りたれと其雑沓は大方ならず關東より押寄たるなり否僧侶が眩暈たりなど取々に跡方もなき事言ひ散せしかば皆々呆然に取れて居たりけり抑此停止の事と言ふは此度鑄立し鐘の銘に大御所を呪咀へる文有しとて所司代板倉勝重より使者を以て片桐且元方へ停止の旨申し送られし事なれば且元使者に向ひ鐘の銘は東福寺清韓長老の作文にて武人の關る所に非ざれば篤と相糺し申譯致す可しと云て片桐は長老を伴ひ大坂へと歸りけり夫より片桐は諸將を集め評議爲しければ何れも此由を聞き是ぞ大亂の種子に成る可き事と眉を顰め薄氷を踏の思ひを爲し居たりとかや偖鐘の銘は武人の可否する者に非ずとて夫より近國の名僧三十六人を招き寄せ之を撿閲爲しめたり其銘に曰く

洛陽東麓　舎那道場　鑿空瓊殿　横虹畫梁　參差萬瓦
崔嵬長廊　玲瓏八面　焜燿十方　刹甲西域　堂照扶桑
新鐘高掛　爾音千鍠　響應遠近　律中宮商　十八聲縵
百八聲忙　夜禪晝誦　夕燈晨香　上界聞竺　遠寺知湘
東迎素月　西送斜陽　玉筍掘地　豊山降霜　告怪於漢
救苦于唐　靈位惟夥　功用無量　所庶幾者　國家安康

答へけるにぞ七之助偖は我妻に語りしが種と爲りて顯はれしかテモ殘念なる哉口惜や斯ては所詮是までなり思ひの儘に敵を討据潔よく腹掻切て死ぬ可しと突立上るを下僕は暫時と押止め御主人には此事の訴人たるに因り御助命有に相違なし逸まり給ふ事なかれと制する言葉も聞入ず假令助命の沙汰ある共言はゞ婦女の助に因なり何生存て甲斐有んやと舌嚙切て死たりけり斯て大御所には兎角大坂の財を耗さん事を思はれ既に那智法隆寺の兩營繕も濟たる事なれば京都大佛殿再建の事を思ひ出され此事を大坂に申送られしかば大坂にては先例に因り片桐且元を總奉行と爲し彌々大佛殿再建の事に及ばれ慶長十九年の夏に至りて(一說に春と有り)造營の事畢りければ軈て開眼の供養有んとて夫々の用意有しかば之を聞つけ遠近の貴賤老若供養を拜まんと京中に群集する者幾萬人と言ふを知らず斯て彌々供養當日と成ければ役々の者詰寄せ群集の男女は押合〳〵來りて見るに其結構言ん方なく先石段は錦襴にて卷立廻廊の內には疊を敷き堂の左右には七尺五寸の花瓶を据ゑ之に花を挿みて其高さ一丈五尺中央には金燈籠を吊し廻廊の內を區りて東には群集の者群を爲し南の方には　勅使幷に所司代其外殿上人等幷居たり斯て彌々供養始らんと爲ける處に遽だしく騎馬の武士馳せ來り大御所よりの命なり大佛供養止まる可しと群る人を押除け〳〵來りければ僧侶の面々諸役人に至るまで奈なる事かと異しみ居たるに騎馬武者は會釋もなくツッと入て役人僧侶に至る迄皆退參せよと有けるにぞさしも今まで綺羅めか

ゆゑ幸村の忍び來ると聞き大いに悦び急ぎ奥の一間へ請じ入れ其後久々對面致さゞる事共の挨拶萬端相濟て且元扨も貴殿には遠路をも厭はず殊に難行苦行の御有様にて此且元方へ故々尋ね來られしは抑々那なる御事にて候哉と問れて幸村聲を潜め某し此度參りし事餘の義に非ず承まはれば今度大佛殿の鐘の銘文に何やらん不審の廉有とて關東より供養停止の沙汰に及れ貴殿には其中開きとして駿府へ赴かれんとの由に候が此事實にて候歟且元如何にも此事實にて候某しも此事關東の謀計とは疾知り居れ共此中開きに赴く事は大御所を好なに宥め賺し飽まで油斷を爲しめて早晩虚を窺ひ攻下らん爲の意匠に候なりと答へしかば幸村は始終を聞て太息を吐き貴殿關東へ赴かるゝ事なれば幸村に於ても聊氣遣ふ事之れ無しと雖も關東にては專ら貴殿を害せんと思ひ居る處にて候へば理非の沙汰にも及ばず若も苛酷の責に逢れし時は折角の御心入も空敷成給はん事の心許なく思ひ候へば寧此行は御止まり在て亟かに旗揚の御用意こそ願はしけれと有しに且元は首を掉り實に其御心付も然事ながら且元銘文の中開きもせず無解に旗揚を爲す時は第一に大坂方曲となり關東方直と成て人々の方向も之が爲穏かならず然ば一度駿河に赴き篤と銘文の言開きを爲し曲を關東に負せて大坂に罪なき處を衆人に示さんと思ふなりヨシ是が爲且元駿府に最期を遂ぐればとて齡も早五十八歳身に於て思ひ遺す處無ければ一度赴きて存念を遂度存ずるなりとて幸村が言葉を聞入ざれば幸村は再び言葉を發するに忍びず獨り心の内

四海施レ化　萬歳傳レ芳　君臣豐樂　子孫殷昌　佛門柱礎
法社金陽　英檀之德　山高水長
時慶長十九甲寅歲孟夏十六日
大檀那正二位右大臣豐臣秀賴公
奉行　片桐東市正豐臣且元
冶工　京三條釜座名護屋越前少椽藤原三昌
前住東福後住南禪文英叟淸韓謹書

第六　幸村片桐且元を訪ふ事幷且元關東へ赴く事

爰に紀州九度山に住居せし幸村は山本九兵衛を以て此度の大佛開眼に付樣子如何にと聞しむるに供養の儀遽に差止と有て關東より不審申越れ片桐且元申開の爲關東へ赴むく由を告越しゝかば幸村大に驚き今大坂に於て賴みと爲るは片桐東市正且元なり然るに關東にては此片桐をさへ謀計の罠に陷入れ甘々害せんと爲事是大坂方の一大難事とこそ覺ゆなれ危ふし〳〵止めずんば有可らずと夫より急に幸村は形を非人乞食の樣に打扮人目を忍びて大坂に赴き片桐が邸に尋ね行て密に案內を請けるに且元は今關東の難題に種々と心を苦しめ寢食も安からず思ひ居たる處

坂の執權職に在ながら秀頼の不束を助けんともせず如何なれば不調法なる取計ひを爲しけるぞや且元大に驚きコハ思ひも寄らぬ仰を承まはる者哉恐れながら何事有て然は仰けるや委細の尊慮伺ひたしと只謹んで控へたりしに大御所言葉を更められ汝且元能聽よ今秀頼の御臺は此家康が孫女淀殿には姪なり然れば秀頼には隨分歡びて寵愛有る可き處蔑如の所存にも輿入の節只一度の對面有しより其後は中の嶋の別邸に押込め長の年月秀頼とは頓と對面さへ之無き由に聞及ぶ條是何たる事なるや氣に入らぬと有ば速かに離別するも可なり然るに其儘押込置とは第一家康父子を輕んずる所爲と存ずるなり且又忠吉病死の節大坂より弔哭の使節差向けたる時其者の身柄を承まはれば平武士の由なり是家康を侮辱事の甚だしきと謂ふ可きなり其上關東の諸浪人を遠慮もなく召抱し事愈々以て其意を得難し是皆汝が不所存より起りたる事には非ずや如何に〳〵と思ひも寄らぬ難題に片桐は發と計りに平伏し恐れ入て在けるが稍有て首を擡げ恐れながら申上候先般も使節を以て申上候通り故太閤の遺言として大樹幷に前田利家殿に遺孤秀頼を托せられ十五歳を待て天下を讓らる可き筈の處過し慶長五年關ヶ原御陣の後は諸侯の大阪へ參勤するを停められ大阪の御取扱ひは恰かも外諸侯の如くなりしかば關東は日に榮え大阪は日に衰ふ加之ならず將軍職をして秀忠公に讓られ給ひし時大阪方へ一應の御示も之無き段如何なる御事にて候哉前條々に付ては御先約の處何れに在しや此事篤と仰聞け之有候はゞ初に御不審を蒙

にて片桐大坂の城を放れ行く事誠に大坂方の運も是に盡けるかと長歎息を爲しながら幸村は且元に別を告げてぞ退きけり斯て且元は舍弟主膳正貞隆幷びに大野治長清韓長老を伴ひ駿府を指て赴きける是乃ち難波大合戰の基となり幸村が未前の察し違はずして且元畢生の浮沈を極めしてこそ天運の程是非もなしとは後にぞ思ひ知られける

片桐且元駿府に赴き申開の事幷安藤本多且元を圖る事

斯て片桐東市正且元大坂を發して日ならず駿府に着し此旨城中へ通じければ直に城內へ案內有て定めの席に通され稍有て大御所對面に及ばれしかば片桐幷びに副使の面々低頭平身し恐れながら尊顏の麗はしきを拜し恭悦至極に存じ奉つり候偖も小官等此度參向仕つり候儀は大佛殿再與に付開眼供養と相成し處鐘の銘文に於て尊慮に適はせられぬ所有とて供養停止仰出されけれ共銘文の儀は是に召連候清韓長老の起稿致し候處にて秀頼には此事聊かも存じ申さず就ては尊慮の處彼へ宜敷御糺明仰せ付られ何とぞ大坂安堵の御一言願ひたしと言葉を盡して述ければ大御所然らば先清韓を是へ止め置く可しと有しかば且元畏まり候とて清韓を殘し其身幷に大野は旅宿へと歸りけり斯て兩人旅宿に在る事三日にして再び城中へ召れしかば兩人召に應じて出行き大御所の御前に額き返答如何にと待ける處大御所には殊の外なる氣色にて如何に且元汝は大

んと存するなりと差遏られて片桐は餘りの事に何と云ふ可き這葉もなく暫時差俯ひて居たりしが心の中に是謀計の種子ならんとは思へども承知せずんは如何なる害に遭んも計られずと急に色を直し斯程の事とは露知らず今までは辭みしが然ば御親切に從ひ御息女を申し受んと云しかば本多安藤は大いに悅び俄頃に銚子土器を取出し祝言の式取行はんと爲けるに且元は之を辭し此儀は大坂に立戻りて後取行はんと云けれ共兩人は之を聞入ず遂に此座に式を行ひ且元は本多が聟とぞ成にける此事疾くも大坂に聞え人々何となく訝しき事に思ひ居る内大野治長大坂に立歸り父道犬に向ひ片桐は本多が聟となり晝夜酒食に耽り肝腎なる大坂の公用は打捨置候と有し事共一伍一什を語りければ道犬之を聽き扨は流言に違はず片桐は關東方に携貳ありと極つたり再び使者を差立實否を聢と取糺さんと急ぎ登城して此事淀殿に委しく申述しかば淀殿も然ば早速使者を送らんとて夫より二位の局正榮尼大藏の局三人を女使として駿府へ遣はす事と成にけり于時慶長十九年八月上旬に三女は大坂を出立し駿府へ着して直に大御所に謁し使者の口上委細に申し述しかば大御所よりもいと慇懃なる接遇有て聽て大御所は三女に向はれ故々駿府まで來りし事なれば是より江戶表へも立越秀忠に對面して大坂の事共物語りせられ然る可しと有しに三女何かの事は知らね共大御所の命なれば是非に及ばず夫より三女は江戶表へと打立けり斯て片桐は其後大御所よりの沙汰如何にと待居ける處に九月の初旬に至り急に御召なりとの事に

り候儀明かに申開き仕つらんと言葉鋭く述ければ大御所も此返答に礑と逼られ顔赤らめて在せしかば傍らより本多上野介進み出で片桐殿今日は退去有て重ねて言上然る可しと聲掛ければ且元承まはりしとて再び淸韓の事を尋ねじに安藤帯刀彼は江戸表へ遣はされ候と答へしかば且元はツと思ひながら其日は本多が館へと歸りけり跡にて大御所は安藤を召し所詮片桐を生置ては關東の爲宜しからず反間の謀略を以て退く可し就ては其方箇樣〱に計ふ可しと耳に付て密計を授けられしかば安藤委細承知して退きたり斯て且元は本多が宅に在て晝夜心を苦めける處に安藤風と本多が館へ來り夫より兩人片桐が旅寓の鬱を慰めんとて酒饌を調へいと慇懃に饗應し且元が熟醉しける時安藤且元に向ひ承まはれば貴殿には內室を欠れ候由なるが一家に妻なきは屋に梁無きが如しとも云ば某し良妻の紹介をせん片桐殿デハ御座らぬかと興じながらに勸めしかば且元も打笑ひ是は〱近頃御心入の厚き御事かな然れ共某しは既に知命の坂を八ッも越たれば妻好みも些と氣恥しく候間此儀は御免下さる可しと頻りに辭むを安藤打消し否々然樣に辭み給ふな英雄色を好むと云ふ事もあり況て御邊が御身として差たる御老體にも之無に今より無妻に過させなん事某し等に於ても御氣の毒に存ずるなり實は好き折からに付筋目正しき然る可き婦を是へは召連來りしなりイザ見參に供へんと聽て一人の窈窕たる美人を夫へ据置き本多是に指さして不肖者には候へ共是は某しが娘にて候苦しからずば貴殿が起臥の御伽に贈り奉つら

勿れ大坂と關東とは何れ合戰なふて濟べき事ならねば例へ此度の難題無にもせよ無事に治る事叶ふ可らず然ば一日も早く大坂に立歸り軍の用意有可しと申けるにぞ且元も是に激まされ歸城をこそは急ぎけれ斯とは知らず三女は江戸へと出立して品川の驛に至りて見ればコハ如何に嚴敷關門を打固めて大坂方の者一人も入る事叶はずと有て三女をも追歸しければ三女は爲可き樣なく悄々として引返し駿府へ復りて事の由申述べ夫より片桐が樣子を尋ねしに片桐は淀君を江戸に隱居させんと約を定め既に大坂へ立戻りし由なりしかば三女は大いに驚き偖は片桐の逆心彌々以て相違なし早ふ押詰め恨みの數々敷幷べんと支度も怱々駿府を立出水口驛にて漸〳〵片桐に追付しかば三女は片桐に打向ひ臣下と爲りて其祿を喰み平生富貴を極めし身として大恩のある大坂方を背と爲し關東方に一味して淀君を江戸へ人質に贈らんとはテモ聞えませぬぞ片桐殿返答何と爲給ふぞ早々仔細を明されよと口惜涙を振ひつゝ怨み歎きて詰寄りしかば且元は容を更め是は女中衆には何を聞違へばし爲給ふぞや夫には深き仔細のある事不審を晴しし聞給はれ抑此度大御所より難題を掛られしは秀頼公を江戸に參勤せしむるか然なくば大坂の城を明渡すか又は淀殿を江戸へ送りて隱居さするか此事若も聽ざる時は忽ち大軍を以て大坂を攻潰さんとの事なりけり然に因て且元先淀殿を江戸へ御隱居の事評議の上御請申候はんと其場を品よく言ひ紛らして歸りしなり三女衆には是にてもまだ御疑心の晴ざるか夫とも大坂の城明渡すか乃

且元參上爲ければ大御所安藤帶刀に命じ白木の箱を且元が前に据させ偖且元に向はれ此箱の中に委細の書附あり披き見て否やの返答之有可し早ふ〳〵と有ければ片桐は何事ならんと件の箱を披きて見れば第一秀頼を江戸へ參勤さする事第二淀殿を江戸へ退隱さする事第三大坂城を明け渡す事右三ヶ條の內孰れか執行致す可く若違背の事有時は大軍を發し一時に大坂を攻潰さんと有しかば片桐且元大に驚き何れにも思案の上御答へ仕つらんと其まゝ片桐は御前を退きたり

第七　三女江戸へ赴く事幷且元歸城の事

扨も片桐は三ヶ條の難題に何と答へん言葉もなく暫時思案に暮れ果て兎やせん角やと思ふにつけ眞田が諫めを思ひ出し若も那時彼が言葉に從はゞ此難儀には及ばぬ者と獨り後悔爲しながら然にても斯ては所詮穩當の事叶ふまじ一時も早く大坂に立戾り軍の用意を爲んすと夫より本多に面會申しけるは此度三ヶ條仰せ渡されの儀は何れも重大の事件に付容易には御答致し難し然れ共其內淀殿江戸へ退隱との儀は何とか勸め申さんと存する間此儀宜敷御立られ給はる可し就ては某し儀は早く大坂城へ立歸り此旨篤と勸參らせ委細は追付申上んと云置て軈て支度を調へ弟諸共大坂へと立出ける道にて且元貞隆に向ひ我過つて眞田が諫を用ひずして今は關東の謀計に當り大坂の難儀を引出せしこそ殘念なれと落涙なして語りければ貞隆答て阿兄爾憂ひ給ふ事

敢なき死を遂なば且元が運拙なきと思ふまでなり汝氣氣ふ事勿れと云て夫より行列を正しく立京橋より大手に廻りて登城せり斯く道を迂回て登城するは二心なき所を諸人に示さん爲なりとかや城中には大野織田の面々片桐登城せば直に言込んと肩唾を呑で控へたり處へ片桐怯ず憶せず威儀を正して登城しければ其勇氣にや怖れけん大野等は片端に引退り且元を席の上座に通しけり稍有て座定まり織田有樂齋且元に向ひ偖も其許には故太閤の重恩を被りながら能も關東方に心を通じ本多が智と成のみならず淀君を江戸に隱居爲しめんとは約されしぞ今日は何の顏色有て御前には出られしやイザ返答を承まはらんと怒りを發して詰掛しに且元少しも驚かず誠に御邊の所存にては然こそ思はんも理道なり偖此度の三ヶ條は如何なる譯や知り給ふ歟某し之を申さん駿府殿秀頼公を江戸へ參勤爲しむるか又は淀君を江戸へ隱居爲しめんとの意は體よく人質に充られんとの事なり又大坂は皇國の名城なるに因て茲を退去させんとの事にて是鬪君豊臣家に足動きも成ぬ樣にして一擧に攻潰さんと爲し給ふ遠計なりと說聞されて織田其外の面々も只顏見合せてぞ居たりけり

織田常眞石川嘉右衛門大坂城立退の事幷木村重成且元が屋敷へ到る事

至は秀賴公の御參勤を望まれしかと且元に說聞されて三女は只々驚く計り顏見合せて居たりけり夫より且元は弟貞隆幷びに三女を大坂方へ歸し其身は京に上りて一日二日逗留して大坂の諸將の心如何有んと密に之を察し居けるとかや斯て三女は大坂に立歸り片桐が委細の事共語りければ秀賴公淀君大に驚き給ひ偖は片桐の變心彌々相違なしと有けるにぞ大野織田の兩人爰こそ彼を黜けん期なりと尾に鰭着て種々惡樣に罵詈合何分片桐を召捕吟味致す可しとて先青木民部に四百餘人を付け京へと差遣はしける斯て民部は京に抵り且元に面會して秀賴公の召なり急ぎ大坂に同道あれと申すにぞ且元は民部に伴はれ大坂の我邸に歸り民部は直ちに登城して此旨秀賴公に言上せり扨も此度片桐が浮說城の中外に漏聞えしかば心なき者は大に驚き斯ては油斷成難し今にも片桐關東勢を手引して不意に軍を始むるならん用心す可しと狼狽廻り或は山間に家財を運び或は妻孥を遠地へ送りて其騷動大方ならず此時且元は我舘に在けるが登城して委細の儀申立んと爲を見て弟貞隆兄に向ひ此度三女駿府より立歸りて阿兄の事を爾々に讒言なしたる事なれば空然と登城爲し給ふ時は極めて御身に禍ひの掛る事之有可れば關東の委細は此貞隆に御任せ給はる可しと言葉を盡して申けるを且元は之を聞入ず否々汝然程に氣遣ふ事勿れ假令讒人原何たる事を申すにもせよ我忠の心を以て飽まで臣たるの道を盡したる事なれば能々利害を說て秀賴公の御聽に達しなば何とて御疑念の晴させ給ふ事無らんやヨシ夫が爲讒者の手に掛り

成は十九歳なりしとかや斯て重成は智徳院源十郎野根九郎兵衛繁多市之進淺野清兵衛等を從へ片桐が邸へぞ赴きける折から且元は吾邑茨木へ立越んと支度に及びし處弟貞隆幷びに悴出雲守且元の前に出某し等は只當城を枕として死する所存なるに大人には全く關東に御隨身の思召にて任ますや口惜き次第なり生て名を汚さんより死て芳名を遺さんこと某し等の望みなれと兩人は直ちに兩肌押脫切腹爲ん有樣なれば且元大に制してヤヨ汝等何とて然は狼狽しぞ我心中を能く聞よ汝等迄でも此且元を逆心なりと疑ふ程なれば城中の者共が疑ひを起す事も實に無理ならぬと思ふなり然れど此且元如何なれば厚恩請し豐臣家に背き阿容〳〵關東方に隨身する事有可んや今は執權の職を辭し茨木へ引退きて世を安穩に送らんと思ひければ汝等は今死ぬ命を生存へ僞って關東方に隨身し時を見計ひ後陣より討て出で二君の首を携へ來て且元が二心なき旨を顯はし其時死を潔ようして忠を顯し吳よと淚と共々申ければ兩人は始て其赤心を知り暫時感じて居たりけり斯て貞隆申けるは兄君の仰せ誠に恐れ入て候なり就ては某し等兩人は尊命に從ひ是より一旦高野山に立越候はんと已に其用意を爲しける處へ城中より木村長門守重成來ると聞て且元は大いに悅び急ぎ重成を奧の間に請じ互の口儀相濟て偖重成且元に向ひ貴殿此度大坂城を辭されしに因て諸人大いに貴殿を疑ひ百般の取沙汰致し兎角人心も穩かならざれば某し貴殿の御心中を試みんとて推參せり御返答次第にて重成如何樣にも所存相立申す可に付疾々御心

瓜田に履を修め李下に冠を直す事勿れとは古人の金言實に然こそ思はれけれ片桐且元は其智其忠國家の元老たるに恥る事なく使しては能其任を全ふし事に臨んで志ざしを變ぜず君子の人か君子の人なりと雖も運拙ふして嫌疑の誹り免かれ難く小人輩の爲遂に反間の謀計に陷り我赤心の空敷なるも誠に是非なき事にこそ然ば片桐は飽まで志心を述けれども諸人之を肯はざれば誠や大石の下には久敷居難し此上は執權職を辭するより外なしと其場は品よく言做してズッと立出下城を爲に誰一人とて止る者無有樣は大坂方運盡る兆とぞ思はれける爰に大坂方鐵砲組の頭たる石川嘉右衛門と云者片桐が出行後姿を熟々視て偖も故太閤は卑賤よりして天下をも掌握せられし君なるに秀頼君には如何なれば斯る名將を用ゆるの能も在まさゞるやと嗚咽ながらに一人君の運を想像り頓て我邸に歸り太閤の後世を弔はんとて一族にも知せず自ら髪を剃し字を丈山と改め城中を脱出て京都に憂身を忍びしとかや偖又織田信雄入道常眞と片桐が引退く體を見て所詮大坂方の運も是までとや思ひけん嫡子兵部大輔信良次男出雲守高長の兩人を引連何處とも無脱失しかば城中にては片桐織田石川三人城を脱したると聞き大いに驚き偖は片桐一味を徒黨し當城へ寄せ來る事も計られずと其騷動大方ならず時に木村長門守進み出で然ほど騷ぎ給ふに及ばず某し是より片桐が方に赴き心中を篤と探り來る可し其時片桐若逆心に相違なくは某し一人彼と刺違へ死する迄なりと面色も常の如くにて申出ければ皆々其勇に感じける此時重

けり兩人は行々今福堤を通りながら大坂城を打見遣り涙に呉て佇立ける心の内こそ悲傷なれ

第八　片桐且元幸村を重成に勸むる事幷堺中の嶋合戰の事

斯て重成は道すがら且元に猶も再勤の事を勸めけれども且元は此事更に承引せず貴殿某しのみを然程勸むるに及ばず今城中には七組の大將の外薄田隼人抔云ふ義を守る者有ければ此者等を能用ひ給はゞ決て事を欠事有可らずと頓と取合ざる樣子に重成は殊に歎き忠臣既に退き大坂の滅亡旦夕ならんと云つゝ又四五丁を行し處に且元は言葉を更め扨重成殿我其許に一大事を告んと思ふなりと云れて重成一大事とは何事ぞ且元然ばに候某し豫て心に込て置候當時紀州九度山に潜み居る眞田左衛門佐幸村なり此人は幼少の時より其父昌幸に從ひ處々にて奇謀を運し剩さへ居城上田に於ては關東勢を惱ませし事度々にて軍略に長せし事は子房孔明にも劣る可らず殊に忠義の志ざし厚き者にて候へば此人をだに用ひ給はゞ關東百萬の敵も恐るゝに足らず大坂の運も是が爲開けん然ば此人必ず御用ひ有て然る可と申しければ重成某しも幸村が英名は聞及びつれ其今は武を捨潜み居るとの事なれば招きても來るまじと云ふに片桐否々幸村とは某し疾より交りを結び此事を賴み置たれば決して案じ給ふに及ばずと云しに重成大に悅び誠に忠臣とは其許の謂なりと用意の深きを感じつゝ重成は大坂城へと歸りけり斯て重成は登城の上片桐が忠

中明されよと云しかば且元は涙を浮べ重成が側らへ近寄りて偖々大坂城中に諸將多しと雖も忠烈の士と稱するは貴殿なり抑御身が先考常陸介殿には關白秀次公の執事となり君の不義を歎きながら君高野山に御生害有し後は二君に仕へざるの節を立普門寺に於て自害せられし夫に引替此且元は反間の謀計に係りて死にも死ず生にも生られず老後に及びて此難儀を來したる段且元が心底察し給はりたしと跡は歎きに沈みしかば重成は此体を見て且元が精忠の心を深く察し倶に涙に呉にける稍在て重成且元に向ひ貴殿然程に切なる御心なら何とて織田大野等が如き小人原の讒を說伏せざるや今より更に登城して是までの職に就給へと且說且慰藉て申けれども且元は之を聽入ず一旦運盡き斯成行しも畢竟某し職に在し故なり然は再び出仕する共其甲斐なき事鏡に懸て見る如し夫よりは身を退け出家と爲りて先君の後生を弔はゞ却て忠にも成候はんと義を重んじての返答に重成終夜勸めけれ共更に肯ふ氣色なし且元軈て漣月毛と名付し馬に鞍を置せ庭前に引出させて重成に向ひ如何に重成殿此馬を昔北國より秀吉公へ獻上有し名馬なるを此且元拜領せしなりされど且元今は武を捨佛門に入んとせば早用も之無候間乘疲らし不禮には候へ共君よりの賜與にも候へば今日の餞けに之を貴殿に參らせんと存ずるなり願はくは是に乘給ひて關東の軍に馳向ひ天晴大功を立られよと云を重成聞入ず斯ては貴殿某しとも今生の參會心許なし率さらば馬頭を並べて離別の情を盡さんと夫より兩人馬を並べて片桐が邸をぞ出たり

太郎井上大九郎を付添治長を總大將として馳向はせける此事境に聞えければ芝山兄弟大いに驚き此時常眞境に在ければ芝山は早速常眞に評議しけるに常眞申しけるは敵方一萬餘の兵と有ては迚も戰ふ事叶ふまじ寧ろ此處を捨て關東へ落失給へと言せも果ず芝山兄弟大いに怒り武道の身として敵寄來ると聞ながら何ぞ拙なくも退ぞく事の有可やと言込られて常眞は再び返す言葉もなく一族郎等を從へて關東さして迯失たり聞者織田が心底の言甲斐なきを笑ひたりけり偖又堺の町人原は驚破合戰始ると家財道具を取片付老幼を手に携へて山林へ脱れ隱るゝ其中に河内屋正碩と云ふ富豪の町人衆の者を押靜め皆々然樣に騷ぎたまふな某し一つの謀計ありとて諸人を聚めて申けるは大坂へ彈藥千斤と金五萬兩を獻じ堺の町人皆御味方に立んと言込置て十五歲より六十歲までの者を大坂方として廿歲より五十歲までの者を御奉行方と爲し置時は後日關東方勝軍有とても難に遭ふ事有可らずと勸めを聞て何れも此儀に同じけり斯て芝山は各所の城門を固め戰爭の用意を整へ置て豫て片桐が大坂を退き茨木に居る由聞込居ければ井上瀨兵衛を使者となして加勢の事を賴み遣はせしに早大坂勢一萬餘人鯨波の聲擧げ鐵砲を打掛〳〵攻來りければ此時芝山小兵衛眼病を惱と雖も少しも怖れず千五百餘の兵を從へ自ら眞先に進み出ければ大坂勢是を見てスハ敵出たるぞ討取と下知の下より我も〳〵と攻掛れば芝山は直に進みて十三人まで突落し愈々勇み割て入り從横無盡に働きけり

義の心厚くして努々二心抔は塵程も無由申上夫のみならず幸村が事を爾々に勸め候と事の終始を詳らかに述しかば人々は此事を聞て大に安堵し片桐然樣なる心底にて有ならば急ぎ召返しては如何ならんと異口同音に言ひ出せしを重成制して且元は某し頻りに勸めてけれ共頓と肯はざりければはや召返すとも立歸るまじ夫よりは彼が勸めに從ひ眞田幸村が方へ早々使者を以て御賴みの事御申遣し相成方然る可し是片桐を用ひらるゝに同じ事なりと申せしかば秀賴も實に道理なりとて夫より使者の役目を何人にか託す可きと種々評議有し處に明石掃部介進み出で願くは某しに使者の役目仰せ付られたしと申ければ秀賴公然る可しと有て夫より拾萬石の墨付幷に依賴狀を取添へ明石に渡されければ掃部介は之を丁掌し二通を襟に縫込み身を田舍道者の姿に窶し九度山指て打立ける斯て城中にては織田石川片桐退散しければ大野が計ひとして此三人の邸を破却させ夫より本町東詰關東屋敷に押寄けるに門は左右に開けて內には一人も敵無りしかば寄手の者不審しながら倉庫を開き見るに糧米三十石程貯へ有ければ是を城中へ運び入其外家具萬端の取殘し有をも皆運び込ければ大野は是を我倉庫へ收めさせしとかや(織田常眞大坂を立退し時は關東屋敷へ向ふと披露し置本町の宿院へ來りし事ゆゑ爰には一人も居合せざる事なりけり)斯て治長は父道犬に向ひ此氣を脫さず境奉行の芝山小兵衛同五助を御退治有て然る可しと勸めしかば道犬實にも然りとて夫より浪人組を一萬餘人組立南條中務和久半右衛門宮部熊

るを見るより瀬兵衛直に突入り遂に父を取戻し念佛寺に入て暫時父に休息させ事の始終を尋ねなどして居たる處に又も敵大勢爰に押寄來りしかば井口父子は爲可き樣なく遂に爰にて兩人刺違へてぞ死したりけり之に因て多羅尾富田は散々に打負しかば大野は勝軍して大坂に立歸る斯る事とは知ずして片桐主膳は甥なる出雲守に申含め豫て兄の敎の如く關東方の一味に見せかけ大御所に油斷さするは此時なりとて正木六右衛門牧治右衛門今村三左衛門八十河十兵衛等を始として五百許りを引連れ尼ケ崎より船に乘らんと打立し處に關東方よりは豫て片桐を訝しく思ひ池田越前守南部越後守を尼ケ崎に備へ置しかば出雲守等船に乘入事能はず長洲村に徘徊す然るに此地の者共は片桐を關東方と心得庄官の者を先に立て其勢一萬餘人片桐を討取んと詰寄たり是を見て出雲守は大いに怒り土民等何程の事あらん一人も殘ず討取と下知する處に堺より注進來りて芝山が方散々に打負たりと言ひ來りしかば出雲守大に驚き偖は早く茨木へ引退く可と云内に百姓原五百餘人森陰より討て掛るを薙拂ひ切拂ひ辛ふじて伊丹まで引退くと雖も百姓原は此彼に蜂起し拂へども又來りて流石の出雲守も防ぎ倦みて見えにける

第九　片桐出雲守痛手を負ふ事幷明石掃部介眞田が山莊に到る事

多羅尾井口七度ヶ濱合戰の事幷百姓一揆の事

黑煙天を掠め鯨波地を震はし其勢ひは如何なる勇夫も膽寒からんと見えけれ共芝山小兵衞は少しも怖れず散々に戰ふと雖も眼病にて思の儘の働き成ず身には數ヶ所の手疵負たる事なれば今は戰ふ事叶はずと亂軍の中に飛入り討死す舍弟五助は是を見て兄を失ひ何生存て引可きと下人虎八を從へ進み出で芝山五助玆に在り汝等討取て高名せよと呼はり〳〵簇り立たる敵の中へ駈入ければ敵の方より小川治郎兵衞鐵砲を打掛五助が膝を打碎きしかば五助今は是までなりと馬上に腹搔切て死したりけり虎八は主の首敵に渡さじと手早く首を搔切て數多の敵を切拔〳〵何處ともなく落失たり芝山が方の井口宗專先刻より強く戰ひ太刀を折れて躊躇ふ處へ敵より宮部熊太郎と名乘宗專に組付遂に是を生捕しかば大野が勢は今こそ軍に勝たりとて奉行屋敷を燒拂ひ此旨大坂へ注進す爰に又茨木の片桐は井口より堺の加勢を賴まれけれども今は斯る事に立入可きに非ざれば一向に此事聞入ざりし多羅尾半兵衞門富田太郎助の兩人何時の間にか七百餘人の兵を率ゐ井口と諸共堺を指て出發し七度ヶ濱まで船にて來り陸に上らんとする處に大坂勢は旣に雲霞の如く鬨の聲にて攻掛れば多羅尾勢大に驚き散々に戰ふ中にも井口瀨兵衞は早吾主人の死したると聞き力を落して居たる處に敵方の宮部熊太郎瀨兵衞が父宗專を高手小手に縛め來

び百姓に似合ぬ强健の振舞感心せりとて黃金百枚を百姓五十六人に與へ其餘は錢五百文づゝを與へければ皆歡んで退きたり爰に明石掃部介全住は路を辿り紀州九度山に至り幸村が山莊に立寄て某しは播州の者なるが諸國修行の爲廻國して高野山に參りし處道に迷ふて爰へ來りしに空腹耐難く願くば晝飯を惠み給はれと申ければ幸村木綿の紐を打居ながら夫は〳〵嘸御難儀ならん先此方へ入れよ飯にて苦しからずば進ずべしと云に明石内に入て心切の段相謝し頓て食事を濟せしかば幸村訪ねて其許は何國の御人なるや全住某しは播州の者にて候と答へければ幸村打笑ひいな〳〵播州にては之有まじ大阪城中より來られしならんと云れて掃部介は大いに驚き如何して然はのたまひしぞ幸村聲を潛めて實は某し人を遣し大阪の形狀を偵はせしに片桐殿旣に大阪を辭したるとの由なり然ば大阪の危き事累卵の如し且元此危急を知ながら某しを薦ぬ事無と思へば今日や使者來るか明日は來るかと待所に前夜の夢に丑寅の方より日月の形せる物我家を指て飛來り庭の石に止まると見て夢覺ければ今日は必ず大阪より使者來らんと悅ぶ所に果して其許の來られしは是夢の兆に違はず日月は明なり明石の上に止まると有ば貴殿は秀賴公の近臣なる明石殿には非ざるやと云れて全住驚き入暫時言葉も無りしが稍有て掃部介誠に今の御一言相違なし然云其許は眞田左衛門佐幸田殿に候はん偖今までは不禮の段お免の程願はしと云出せしを幸村まづと押止め亭午は人の耳うるさし今宵裏道より忍び來りて委細の事を語られよ

片桐出雲守は大に仰天し今は防ぐに術無然にても名もなき百姓們に討れん事の口惜さよとて主從纔か百二十騎群る敵中へ切て入此方を漸々切拔見れば八十川十兵衛を始め三十騎討れければ今は早九十騎とまで成たりしに出雲守敵勢千餘人控へたる中へ切て入り右往左往に戰ひて駈拔見れば又も減じて四十騎となり斯ては所詮叶はじと愈々進みて二千餘騎控へたる伊丹池田の一揆の中へ切て入同じく切拔來りて見れば又々減して僅か八騎と成しかば出雲守口惜き事に思ひ猶も切て入り茨木へ遁れんと戰ふ所へ流矢來ッて左の股に立しかば何かは以て堪らんや馬より動と落る處に作左衛門飛來り抱き起して見れば出雲守苦しげなる聲を放つて斯る百姓原に討れん內汝早く我が首討て立退吳よと申されければ作左衛門大音にて此事少しも勞し給ふに及ばず某し君を茨木へ御供申す可と馬に打乘せ群る敵を會釋〳〵戰ひ乍らに退きければ其身も數ヶ所の痛手を負て立退事叶ふべし共見えざる所に鬨の聲天を動かし敵陣の後より討て出る者有ければ其內敵散々に亂れ立しに作左衛門は大いに悅び漸々變を切拔見れば鷹の羽の旗を風に飜へし片桐主膳貞隆一揆共を追除來りて出雲守を助けしかば作左衛門漸々に茨木へと退きけりされど出雲守は城中に歸り三日目にして終に空しく成ければ主膳は歎き悲めども返らぬ事の是非もなく野邊の送りを濟せけりアヽ出雲守は深く圖りし事なれ共斯なり行しぞ大阪の運拙きと思はれける扨も一揆原は勝鬨を作りて引揚大阪城へ二百餘の首級を齎らし至りければ大野道犬大に悅

立に付ては隨分格式を立て入城せばやと思ふなり其許等は如何思ひけるやと有ければ諸士何れも仰天して誰一人物云者も無りし處に大助父の前に進み出是は父君の仰せとも覺えぬ者哉當國和歌山の城主淺野但馬守兼て父上に心を配り山本九兵衛なんどをして覘はしむる程なるに格式を立て入城せられんとは思ひも寄ぬ事に存じ候若も和歌山より討て出四方より攻懸られし時は味方敗軍する事必定に候是謀計なきに候はずやと申ければ幸村莞爾と笑ひ然こそ思ふも道理なれども幸村上田を退城せしより以來此九度山に住で數年手製にせし張拔筒は何の爲ぞや斯る時の要心なり然ば此度和歌山より討手の出なば手始に和歌山を攻落して根城となし夫より大坂に赴むく事某しの望みなり然れ共城中には上田主水龜田大隅と云家老あれば追討を懸る事は能ふ有まじ此事安心有て然る可と有ければ是を聞て皆々安堵し彌々門出とはなりにけり干時慶長十九年九月十五日幸村は紺糸縅の鎧に筋金打たる冑を着し正宗の大太刀に貞宗の小刀を手挾信濃鹿毛の名馬に跨がり二間一尺皆朱の鎗を取て乘出す續いて嫡男大助治幸卯の花縅の鎧を着し黑髮を振亂し紅粉綾の布にて鉢卷し緋羅紗の陣羽織を引かけ同じく鹿毛の荒馬に跨り先には六文錢の旗を押立惣勢百五十餘人九度山を出立して和歌山城へと掛りけり斯と見るより近邊の者和歌山へ注進しければ淺野但馬守大いに怒り扨こそ眞田大坂へ入城すると見たるぞ率一人も殘らず討取と下知すれば上田主水龜田大隅兩人之を諫めて眞田は古今の智將なれば並々の事にては

と云れて明石は何となく眞田が方を立出て其日は彼方此方を徘徊して夜に入り幸村が教の裏道辿りつゝ來りて見れば幸田は待設けたる奥の一間に請じ入れ夫より兩人密談にぞ及びける幸村は明石が差出たる彼二通の書面を展閲て十萬石の拜領忝じけなしと押戴けば明石斯る上は一刻も早く參着われと勸めし言葉に幸村何れ不日に參着せんと勇みし体の見えければ掃部介大いに悅び然ば必ず待申さんと兩人爰に約を固めて明石は大坂にぞ歸りけり幸村は明石を歸してより今こそ時節來れりと夫より諸方に觸を回し隱れ居たりし郞等共を招き寄しに聞傳へ集る者は近藤無手之助春田彌十郎穴山小助安治別府若狹海野六郎兵衛穴山新兵衛筧金六郎相木森之助增田八郎右衛門三好新左衛門同新兵衛畔柳九藏明石又五郎由利鎌之助三輔琴之助木辻別右衛門根津甚平同元之進笈川八內同勘平野呂兵內赤坂式部野間日向馬塲惣平淺香鄕右衛門月形主馬岩倉右京布下彌四郎筧十兵衛等を始として其餘の者も九度山にぞ赴きける然程に究竟の精兵百五十餘人眞田が方へ集りければ幸村は大に悅び衆を勞り饗應して此日は皆々歎を盡して退ぞけり

眞田勢白晝に和歌山を通る事幷龜田大隅追討大敗軍の事

斯て眞田左衛門佐幸村は大坂の使者明石掃部介全住を歸し我が腹心の郞等を招きしに我も〳〵と集りければ夫より評定にぞ成にけり幸村諸士に向ひて某し此度秀賴公の招に應じ此地を打

を始め百餘人黒煙と成て死しければコハ堪らずと龜田大隅引んとすれば又も大筒五挺一度に鳴渡り直に百五十餘人打倒され和歌山勢は這々の體にて歸りけり由利鎌之助望月卯右衛門は鬨を揚げ引鐘を鳴して兵を一所にまとめ列を正して引揚たり夫より眞田勢は岸和田の城下に掛り城主小笠原大和守時隆へ海野六郎兵衛を使者として申送りけるは此度眞田幸村大坂表秀頼公の招待を請て父子幷びに郎等大坂へ入城致し候夫に付御城下を通り候に付尋常に御通し有とも又は御支へ有とも御隨意たる可と申遣しける小笠原大和守是を聞て返答には御念の入たる使者なり神妙に城下を通り給はん事勝手次第たるべしと有ける是に依て易々岸和田を越堺を經天王寺に着にけり大坂城内には眞田天王寺に着しと聞き明石掃部介和久半左衛門三百餘人にて出迎ひ眞田は之に伴はれ大手筋より入城しければ秀頼公も城外迄立出給ひて幸村を千疊敷に請じいと慇懃に接遇れけり

一說に曰く幸村九度山を發する時道筋に當る近邊の莊屋年寄平百姓共を招き寄せ假小屋を造りて數百人を並居させ酒を多く強ひ其醉臥たるを窺ひ乘來る馬を引出して兵具萬端を之に負しめ弓鐵砲を前後に押立紀の川を渡り橋本到下橋谷へ臨み木の目嶺を踰へ河内路より大坂に赴きけり斯とは知らず醉臥たる百姓共目を覺し見れば主人は勿論雜具等に至る迄跡方も無く乘來りし馬さへ見ざるに大に仰天し家に戻りて此事を譚たりしに留守の者答て眞田殿は斯々

討取ん事思ひも寄ず然も小勢にて城下を押通る事は定て謀略の有事疑ひなし然ば愍ひ手出を爲て不覺を取んより難なく通し時分を見計ひ追討を懸給ふ事然る可し然ある時は關東への申譯もこれにて立ち候はんと申しければ但馬守無念乍らも諫に從ひ討出す事止たりけり斯て眞田は辰己の板橋を渡り和歌山の城下を會釋もなく通りければ城中の諸士共大に怒り討て出んと犇け共龜田上田の兩人堅く制して許さねば切齒をなして居たりけり眞田勢は眞先に六文錢の旗を風になびかせ先手に張拔筒を荷はせ徐々と通りければ城中より是を見て張拔とは夢にも知ず身震ひなして怖れけり夫より眞田は松原に至る迄城下を易々と越鯛の瀨を渡り新在家に到りけるが幸村俄に謀計を回らし此邊の百姓を集ひ紙幟を所々の山々峯々に立置關を作れと下知し由利鎌之助元幸望月卯左衛門幸忠の兩人に命じて五百目一貫目の大筒十挺を殘し置左右の林に埋伏させて眞田はズッと嶺を指て打立たり此時城中にては驚破時分宜と龜田大隅上田主水森大夫黑川左京等も千餘人にて追討し既に鯛の瀨を渡て新在家に掛る所に山々谷々一同に關を吻と揚其聲遠近に聞えしかば皆々驚き眞田方討出たりと身構なして乾度見れば兵は無して只徒らに旗差物計りなりしに龜田大隅大いに笑ひ幸村は智將と聞しが何故に斯愚かなる事なるや赤子を欺くに似し斯樣の謀計何とて此龜田を欺き得可んイデ追掛て討取と進む處に此方の林の中よりして一聲の鐵砲響くを相圖に件の張拔筒五挺吻と打出せば何かは以て堪るべき一貫目筒に打倒され黑川

あり聞入給はるべきや篠嶋請求とは何事ぞ後藤別の仔細に非ず承まはれば眞田幸村入城の時行列を正して出立せしとの事に因り此又兵衞も入城の時は白晝に行列を立て美々しく出立んと思ふなり此事其許に頼み度と申しければ篠嶋然ば此事主人に頼み候はんとて夫より主人池田武藏守に斯と申し入しに武藏守是易き間の願ひなれ共關東の聞えも有ば白晝にては叶ふまじ夜に入て入城有と申されければ篠嶋悦んで此事を後藤に告基次然らば夜に入て入城せんと頃は慶長十九年九月廿五日の夜我が家を立出る後藤が出立は赤糸縅の鎧に鍬形打たる兜を着し母衣打掛て八寸許りの名馬に徐りと打乘り日本鄕と稱へし穗先三尺の大鎗を馬の平首に引添て續く者には後藤幸左衞門竹又兵太夫石井采女並川新兵衞十川岩之助森太郎兵衞後藤主水井口丹下九代傳右衞門津和相之助幸力門佐柄宗兵衞時嶋熊右衞門唯田兵太夫依田兵藏尾上勘四郎岩瀬權十郎熊井喜八惣勢百五十騎已に打立んとする處に後藤が入魂なる庄屋次太夫酒肴を調へ來り後藤が前に差出せしに後藤は大盃を傾け今一杯と云時に次太夫扇を開き猿樂の一曲を謠ひければ基次其曲の慷慨に感じつゝ又も數盃を傾け出發す斯て住吉迄來りければ大坂城中より眞野豐後守和久半左衞門三百餘人迄まで出迎へ同じく大手筋より入城せり夫より秀頼公基次を千疊敷に請じ盃盞を賜りて基次を副將軍と稱し給ふ長曾我部土佐守盛親は關ケ原の後死罪にも成べきを福嶋左衞門大夫正則命乞して助かり入道して幽夢齋と稱し京都双林寺に住して憂世の中を忍び居る由大

の出立にて此道を通りたるに因り不審には思へ共女兒計りにて是非なく其儘通したりと聞て何れも偖は出し拔れたり實に奇謀を運す人かなと皆々呆れて居たりしとかや

第十　後藤又兵衛入城の事并長曾我部入城の事

爰に後藤又兵衛基次は其頃藝州廣嶋に在て武術軍學等の師範たり幸村槇嶋玄蕃を使者として十萬石の墨付を以て招きしに後藤は使者を得て倩々案ずるに大坂の運は眞田心力を盡すと雖も開く事覺束なし然れ共我一旦井伊に向ひて一言したる事もあれば浪人して餓死せんより大坂に入城し飽まで軍術を現はし其上にて討死し名を後世に揚ん者をと心を定めて委細領承の旨答へければ槇嶋大いに悅びける夫より後藤槇嶋に向ひ眞田は如何して入城致したるやと問しに槇嶋答て幸村は格式を正して九度山より和歌山岸和田の城下を行列して入城致したりと云ひしに後藤されば又兵衛も行列を正し入城致さんと約して槇嶋は城中に歸りけり夫より又兵衛は病氣と稱し一間に引籠りて門弟等にも逢ず居たりしが高弟なる篠嶋將監只一人枕元に來り如何基次殿貴殿然樣に打臥て病の名をも仰せられざるは如何成事にて候やと問尋ねられて又兵衛今は包むに由なく然れば我病の種と云ふは外ならず是見給へと彼十萬石の墨付を出しければ篠嶋大いに仰天しながら偖は貴殿大坂に隨心して近日入城し給ふや後藤然ればに候就ては其許に請求の事

馬之助直行も同じく武術衆に勝れ力量も人に優りて十八歳の時諸國武者修行に立出ける一日木曾山中に掛り日暮に及びて人宿の有ざるに東西と彷徨遂に山中に至りて向ふに幽かなる火の光り見えければ直行此所を目當に辿り行案内を乞けるに内より年の頃三十餘りの男髪を藁にて束ね眼を星の如くに燦らし何用なるぞと立出來れば直行某しは諸國修行の者なり日暮に及びて難儀に及ぶ故一夜の宿を頼みたしと乞ければ彼男夫は最易き事なれ共夜具とてもなき山里の事なれば匆々お宿は成がたしと斷りけるを直行夫は苦しからずと押て一宿を乞けるに彼男是非なく内に誘ひ入爐邊に暫時休ませける直行四邊を見るに家の内は油煙にて燻り然も古びたる有樣なり直行彼男と暖爐の傍らに依て路次の事共物語り居る内彼男土鍋にて何やらん煮て與へければ一禮なして之を喰ふに味は更に無して何品とも知れざれば直行是は何にて候やと問ば彼男是は笹の若葉に麥粉を合せて製へたる物なりと答ふ直行再び野菜を喰ふに是も同じく何物なるか只味苦くして知ざれば尋ねけるに是こそ大切なる食物なり珍客ならでは振舞申さぬ干瓢の鹽漬にて隨分の馳走なりと云に直行も山間の狀實に斯る物かなと思ひながらに其親切を厚く謝し夫より横に打臥し四方山の物語に及びたり時に彼男某し用事有て十六七丁彼處へ參候間留守を頼み度と云に直行心得たりと有しに彼男表へ立出しが軈て立歸り何やらん工風の體にて申けるは旅人必ず屏風の内を見給ふ事勿れと云捨て又出行ぬ直行跡にて大に異しみ聞及びにし安達が原

坂に聞えければ青木民部少輔に命じて同じく十萬石の墨付を以て招待ありしに長曾我部は元來太閤の舊恩を思ひ居る者ゆゑ早速承知しけるに因り青木悦んで歸る此時京都諸司代板倉伊賀守は豫て長曾我部大坂に心を寄る者成んと思ひければ某日人を遣し盛親を招きて其許先年關ケ原一戰の後助命の恩あれば假令大阪より如何樣の賴み有る共隨心し給ふ事は能ふ有間敷と尋ねければ盛親威儀を正し是は珍らしからぬ仰を承まはる者哉假令大阪より如何樣に賴み來る共大恩請し關東方を何とて忘れ候はんや唯大阪征伐の軍勢向られしと有時は盛親年寄たり共一番鎗社仕つらめと然も誠しやかに述ければ此言葉に伊賀守も然こそ有べき事ならんと米十五俵と絹三卷を幽夢齋に與へける盛親は立歸り家老の有井四郎左衛門此節五條橋にて烟草を鬻ぎ居しを呼寄竊に相談して家嫡右衛門太郎次男右衛門二郎三男右衛門三郎等と拔々に大阪城へ忍び入る此事翌朝に至り伊賀守に聞えしかば伊賀守大に怒り扨々欺かれたる哉と切齒をなしつゝ諸士に命じて長曾我部の後追しむと雖も追付事能はず皆々半途より取て返しける板倉伊賀守猶も怒り止ざれどもなす可樣なく居たりしとかや

塙團右衛門武者修行の事幷直行入城の事

爰に遠江國榛原郡相良と云所に武術軍學に達せし時雨次右衛門直重と云者あり直重の嫡子左

じき者を老母の首屏風の上より顯れたるは我を畏したる所爲ならんと其狸を打殺して取せんと四邊を見れば狸の足跡夥多敷有けるに直行は怒りの餘り疊を引上見れば藁左右に別れて何樣狸の通ひし處有けるに直行刀を馬手に提げ爰彼許と突立しに彼の狸頭を突れて朱になり逃出んとする處を取て押へて刺殺したりしとかや斯る剛勇成者故に加藤左馬之助嘉明之を召抱へ後に塙團右衛門直行と改名させける其後關ヶ原合戰の後浪人して諸國を彷徨入道して名を鐵牛と改め洛西妙心寺に住して居たる處に此度大坂より大野が計ひにて招き來りし故遂に是も大坂へ入城致しける

第十一　小幡勘兵衛入城の事幷大御所進發の事

爰に小幡勘兵衛景憲と云者は元武田家の浪人たりしが其後初鹿野傳右衛門と共に德川家に仕へける或時大御所景憲に尋給ふは汝信玄の軍配團扇を知りたるやと小幡答へて信玄の軍扇は某し能く知り居り候と申ければ大御所然は是を調へ我に見せよ小幡畏まりぬとて夫より鍛治職に申付け軍配團扇を拵へ檜の臺に載て差出しければ小性共四人して君の前に持行ぬ君是を見給ひしに總鉄の拵へに日月星阿字不動妙山の守を金銀にて鏤め美しく出來しければ大いに悦び給ひ頓て裏を返し見んとて手を掛られしが大團扇にて匆々持揚らず兩手にて盡畢生之力臺を少し離し

の脚色に似たりし事なるかなと呟き乍らも物に動ぜぬ直行なれば自若として居たる處に俄に屏風の內震動して鳴渡れば直行何事ならんと怪しみながら見て居る內次第に屏風動き出し云ん方なく震動するに直行些も恐るゝ色なく横に寢轉び詠めてければ屏風の中より八十許りの女の首現はれ出直行を白眼し體の凄然さも直行頓と平氣にて有けるに其まゝ首も無なり震動も止たりしかば直行不思議に思ひ居たる所へ彼男走り歸り嘸や待兼給ふらんと挨拶するを直行聞も入ずして膝に敷据ゑ憎き奴能も我を誑惑しな汝が所爲にて何條怖るゝ我ならんや我は時雨左馬之助直行と云ふ者なり動かば摑み殺さんぞと大音聲に呼はりければ彼男大いに驚きコハ何事を爲給ふぞ那何なる怪の有しかは知らねども我等は更に知らぬなり譯を言て聞されよと云れて直行扨は汝の知らぬ事かと一伍一什を物語れば彼男大いに驚き暫時膝をゆるし給はれ氣に掛る事ありと膝を這出て屏風の內を伺へばコハ如何に老母の首計りなつて屍は食散したる樣子なるに彼男ハッと計りに泣沈みしかば直行是は何成事ぞと尋ぬれば彼男泪を流して是は我等が母にて今朝病死致したり此事を一類方へ知らせんと思へ共此邊には狸多く死人ある時は少しも油斷ならぬにつき死骸を守り居たる所に其許の一宿を乞給ふ故止事を得ずして宿を貸參らせけれども母が死骸の事を白地に申さば怖れ給はんと夫故に秘し置きたれど幸ひ御侍士と見し故留守を賴み一類に病死の事を告來りしなりと云ば直行切齒をなし始めより此事打明しなば斯は致させま

四百人長柄二百筋人數九百人騎馬五十騎歩行百五十八人大楯百枚持楯五百枚人數千五百人を率ゐて出發し本陣は使番伊奈筑後守同半十郎數百人次に旗本勢三千餘人次に鷹匠六十人侍士小性三百人儒者祐筆等上下合せて五千餘人其外西尾隱岐守竹腰筑後守板倉内膳正本多上野之介次には駿河中將殿水野備後守山口駿河守永井右近總勢合せて三千餘人鎧得物を日に輝かせ堂々として出立たり其日は田中へ着され十二日には掛川十三日には中泉十四日濱松十五日吉田十六日岡崎十七日名古屋に着され十八日は雨天逗留十九日柏原より廿日に彦根の城へ入給ふ此時江戸表より渡邊半藏石川又四郎の兩人新將軍よりの使者として書簡を携へ來りしに因り大御所急に披き見給ひ何か思ひ入有れし體にて直返簡を認め兩士に與へられ急ぎ江戸へ立歸り將軍に出すべしと有ければ兩士は仰せ畏まりてぞ歸りける夫より廿一日篠原廿二日に大津より廿三日京都に着され二條の城に入給ふ江戸表にては新將軍專ぱら出馬を急ぎ給へども黒田甲斐守長政福嶋左衛門大夫正則平野遠江守長康脇坂淡路守安治を氣遣はれ石川渡邊の歸りを今や遲しと待給ふ所に兩人立歸り返簡を差上ければ秀忠公披見有て大いに悦び給ひ我が父既に一計を授け給ふ急ぎ行はん迚先松平下總守小笠原式部大輔酒井河内守鳥井左京大夫内藤左馬之介五人に江戸の留守を命じ秀忠公五人に向はれ汝等數多ある諸士の内より撰み出せし儘隨分變なき樣に留守を守護致すべしと有ければ五人の者皆々手を低て平伏す夫より福嶋を招き給ひしに正則何事やらんと

けるが忽ち取落され臺を微塵に碎きたり大御所大いに怒り給ひ汝何成は斯樣の者を獻ずるや小幡答て故信玄川中嶋合戰の時謙信が太刀を受止し軍扇は十六貫目に御座候依て其摸形にして獻上致したりと云ば愈々怒り給ひ汝無用の舌を動す事勿れ我を欺く憎き奴哉と之に因て遂に暇を出し給ふとかや勘兵衛は夫より江府を立退上州山科の邊に住し武を輟て町人となり柳行李を製りて商ひす然るに此度大野修理之助方より十萬石の墨付にて招き來りしに因り勘兵衛早速承知して使者を返しけるが跡にて能々思ひ見るに關東の威勢には大坂方いかに力を盡すとも當るべからず是に味方する事は石を懷いて淵に臨むが如し然れども軍の勝敗は豫じめ知る可らず寧ろ鼠兩端を搆へ身は大坂へ入城して心は關東へ寄せ置可しと奇々怪々なる覺悟を定め密かに京都所司代板倉伊賀守へ內通せん事を約し其後大坂へ入城しける偖も此ごろ大坂へ諸浪人入城ある中にも眞田後藤長曾我部小幡塙等名ある者共まで入込しかば近國の人心穩靜ならず何と無殺氣の取沙汰有ければ京都所司代板倉伊賀守より此旨追々に駿府江戶へ注進しければ關東にては此注進を聞き驚て總出軍の評議始まり諸國の大名小名へ陣觸の命櫛の齒を挽が如く道路絡繹其騷動大方ならず斯て慶長十九年十月十一日大御所は駿府を出陣せられ路次の目付としては一日先達て瀧川豐後守山路宮內少輔眞田隱岐守鈴木久右衛門堀周防守初鹿野傳右衛門横田甚右衛門の面々關東代官頭彥坂平九郎を兵糧奉行として眞先に鐵砲六百挺足輕九百人次に弓二百丁足輕

赤坂四日柏原五日篠原七日八日は爰に逗留せられて諸國の軍勢此所に集るを俟て九日に膳所夫より伏見に入城せられたり行列の次第は

一番　諸軍勢宿割　田中久兵衛　足輕二十人
中間四十人
二番　斥候　久世三四郎　與力三十六騎

手勢　三番　楯千枚　中間三千餘人
足輕百二十人
四番　鐵砲八百挺　外に國崩先達て伏見へ出さる

人數三百四十八人　五番　弓五百挺　頭百五十騎　手勢　六番　長柄七百筋　頭三百騎

手勢　七番　騎馬武者　百二十騎　與力七百二十人　八番　歩行立　三百人

九番　疊楯五十枚　小頭三千人
小頭五百人
十番　旗本　五千騎　榊原遠江守　千二百人
土井大炊頭　千二百人

大幟　八幡大菩薩　十一番軍奉行　安藤對馬守　八十人
長岡内記　八十人

但倍臣は後陣に續く

十二番　使番　三十騎　手勢五百人　十三番　小性組　二百五十人

御前に到れば盛宴を開かれ大いに饗應て後秀忠公抔も此度我聟たる秀賴逆心して關東に敵對し天下の亂を引起したるに依て餘儀なく大御所君出馬有せ給ふ然に因て予も不日攻登る可き處黑田平野脇坂等心中如何と氣づかひ夫ゆゑ出馬延引す因ては其許江戸に在て竹千代を守立給はらん樣此事賴み入なりと有て金作りの太刀を賜りしかば福嶋正則大いに歡び委細拜承仕つりしとて退きぬ其後平野遠江守を呼出され我此度大阪へ軍を發せんと思へ共留守中心元なきは福嶋脇坂等なり其許計りは日頃忠義の心厚きを知る我大阪へ出馬せば竊に彼等を殺す可と有て是も同じく太刀給はりければ打歡びてぞ歸りける

新將軍進發の事幷城方諸方手配の事

斯て新將軍秀忠公は大御所より授けられし謀計を以て福嶋平野の兩人を取鎭め其後脇坂等へも右の如く示し置れて夫より江戸を出馬せらる（福嶋黑田等の面々手を束ねて大阪の落城を見て居たるは全く家康公の謀計偉大なる所なりとぞ）斯て將軍の先手としては伊達陸奥守政宗上杉彈正大弼定勝兩人將軍に三日先達て出馬し加賀中納言利長越前少將忠直兩人は一日先達て出馬し將軍は慶長十九年十月廿三日江戸表を出馬せられて其日は神奈川翌廿四日は藤澤廿五日は小田原廿六日は三嶋廿七日は爰に逗留廿八日掛川廿九日吉田十一月朔日岡崎二日名古屋三日

るは關東の大軍半途迄押寄來りしに七組の面々更に出會も無く虚病を搆へて引籠り居る樣にては未だ戰はざるに謀計を失ふと謂ものなり斯の如くにては所詮關東との合戰は叶ふまじ因ては敵に向ひて不覺を取んより寧秀頼千疊敷に於て切腹致す可く存ずる間各々我が自害を見物せよとの事にて某しを此使者に仰付られたりと述ければ七組の番頭此一言の默止難さに是非なく木村と打連立て千疊敷會合の場に出席せり後藤又兵衛基次も諸將の斯不和なるを憂ひ兎角和熟を計はずんば有可らずと夫より諸將を集めて酒宴を催しけるとなり

因みに曰大野治長七組を疑ひ我意を振ひて七組の將士を怒らせし事大野が振舞の惡さは論なしと雖も小幡勘兵衛内に在て之が翼を爲事亦居多なりしとかや

斯て諸將打集ひ軍評定と成ければ大野道犬先進み出て申けるは某し愚案を以て見るに抑々當城は先君太閤御心を込られし名城にして殊に兵粮矢玉の用意澤山なれば籠城して敵を勞らさん事然るべし諸將いかにと述ければ淀君側より今大將の秀頼殿はとかく軍旅の事に委しく在さぬ御質なれば各々方評議して如何樣にも宜しく計ひ給はれ然し乍ら大野殿が申如く籠城の儀は妾にも宜しからんと思ふなりと有ければ諸將は只眞田後藤の顏を見やりて返答する者一人もなし道犬愈々進み出て外堀出丸等の要害斯樣々々なりと誇り顏に述立ければ幸村ッと夫へ進み出如何道犬殿籠城は守を主と爲や戰ひを主と爲や此義如何と申ければ道犬打案じる体にて暫時言葉な

頭三十騎　　十四番　大番組　四　組　上下四百人　　十五番　馬廻　三十騎
頭高木主水正牧野内匠頭　千五百人　　十六番　太鼓方　十人　　外千人
陪臣共　　十七番
本陣　側　衆　上下三百人
取次衆　普代衆　一組五千餘人　調度掛　用駕籠　同　鎧
同持筒　同弓矢　同　床机　同太刀
忍　方　庖丁人　馬醫師　醫　師　祐　筆　武具役
儒　者　茶　道　外　科　繪　師　天　文　　本多佐渡守
十八番
手勢五百人　　十九番　後殿二千騎　酒井出羽守　本多大隅守　都合二萬千四百七十
六人

とぞ聞えたり去程に大坂方には關東の大軍押寄來ると聞色々評議有て持口を固めんと爲所に大野修理我儘を振舞容易に諸將の議を聞入ざりしかば諸將之を立腹し或は虚病を搆へなどして評議の塲に出會せず眞田此事を聞大いに驚き關東の大軍既に半途迄出馬有と聞ながら治長一人の奸曲に依て諸將の心決せざる時は戰備の程覺束なしと一人氣を急ち謀計を定めて木村長門守を招き斯樣〳〵計ひ給へと囁きしかば重成委細を承知して七組の頭方へ立越え秀頼公仰せられけ

りを蒙る事是君の爲惡き事に候はずや然に因て愚案するに大野殿が說の如く籠城を爲して敵を勞らせ居る內には故太閤の舊恩を受し大小名心を變じて御味方に相成ん事必定なれば其時討て出る共晩しとはせざるなり因て打出さん事宜しからずと申せしなり且又京都へ後藤殿を遣されなん事京都には板倉伊賀守ありて匆々幸村殿の說れ給ふ如くには相成まじと憶面もなく述ければ後藤基次小幡が側に直と寄何か云んとするを眞田目配せして是を止めながら何樣小幡殿の申さるゝ如く籠城の方然るべし拙者大いに過ちを申したりとて夫ぎり再び言葉なく終に籠城の事と成にけり幸村は我謀計の行なはれざるこそ是非なけれとは思ひけれ共爲べき樣なく偖は拙者出丸を預り申さんと云て歸りけり斯て後藤は今日眞田が我を止めし事合點行ずと頻りに思案を凝しけるが頓て手を拍てアヽ讀たり〳〵小幡は關東の間者なるよなと始めて悟り夫より其夜眞田が方へ行今日の軍議に於て小幡が一言其意を得ざるに付某し彼を言込んと爲たる時其許目配して某しを止められしは正しく勘兵衛は關東の廻し者にては之なきかと尋ねしに幸村手を拍て其許には如何して是を知り給ふや後藤彼宇治瀨田の軍を不吉と打消たる事何共相分らず在し處其許塲所がらとは云ながら之に逆らはぬを以て間者成事と後に察し候なり斯露顯する上は早く彼を打捨後難を除かんと申ければ幸村笑つて是謀計なき者の爲なり彼の如き者入來りしは味方に取て願ふてもなき幸ひなり此者に城中の事を夫となく知せ置き頓て其不意を襲ひなば是に過

く居たるにより幸村再び言葉を更め某し思惟に凡そ籠城は身に大罪あつて之を脱んとし朝敵となつて城に立籠るか又は人の國家を押領して其攻撃を防がん爲壘を高うし溝を深うする事有と雖も天下の曲直を判たんとして籠城すと言ふ事は未だ曾て聞ざるなり今關東と大坂とは世の人も能知如く合戰の曲直言でも知れし事なるに空しく籠城せん事人の嗤ひを如何せん殊に押寄る關東勢は皆先君厚恩の大名共なれば中には心を大坂に寄る者有事必定ならん是を以て之を觀る時は籠城する事甚だ以て宜しからずつら〳〵謀略を運らすに城中は十分に備を立某し一萬五千餘の兵を提げ宇治瀨田に出張し奇術を以て敵の膽を奪ひなば敵匆々に城邊へ押寄せ來る事有べからず其隙に後藤殿は京都に上り畏くも　當今を擁護し奉つり朝敵征伐の綸旨を請願し大御所父子を朝敵とせば關東に屬せし大小名も必らず心を翻へし降を乞ひ來る者夥多ならん然ある時は江戶に在黑田福嶋平野脇坂加藤等俄に後より起り大坂方となる事鏡に掛て見る如くなり是逸を以て勞を討の謀計に非ずやと辨舌冷しく述ければ諸軍勢大に勇み誠に幸村殿の申さるゝ處至極せり出張の儀然るべしと皆一同に喝采ければ道犬大いに赤面して閉口す時に一人進み出此儀無用〳〵と呼立しに諸人驚き見れば小幡勘兵衛景憲なり幸村之を聞其許には何成ば無用とは申さるゝぞや小幡容を正し抑々宇治瀨田の間は昔より軍を發して勝利を得しと云ふ事を聞ず然ば斯る不吉なる所へ打出ん事宜しからず其上當方より討出す時は我より戰ひを好むに似て人の誹

兒と口吟し樣も今眼前に見る如く大坂方と關東との輸贏いかにと義に杖り忠に心を配り人々安き心ぞ無りける偖て大御所には江戸の新將軍に出馬の催促ありて夫より河内の藤井寺に陣を移され先陣には藤堂和泉守中川内膳正松平因幡守分部左京大夫三千八百人二陣には有馬中務大輔五千餘騎三陣には森右近大夫三百人別所豐後守竹中伊賀守千五百人本多美濃守五千人松平武藏守一萬餘人加藤式部大輔岡部内膳正一萬人次には三浦長門守安藤帶刀一柳監物神保長三郎分部左京其外の諸大名雲霞の如く群り立たる軍勢都合五萬八千餘騎本陣を中に圍み京都二條より鳥羽街道を經て淀に來りし處城將稻葉彦六郎一道城を出て君を伴ひ城中に入參らす夫より本街道を轉じて南都の方へ進發せられけるに此事幸村方へ細作の者より注進に及びければ幸村大いに悅び再び忍の者霧隱鹿右衛門と云ふ者に命じて南の山の手に備へし敵を伺はせしに鹿右衛門立歸り神保長三郎一柳監物分部左京大夫の三將控へ居候と有しかば幸村然らば先奇計を運らし敵の膽を奪はんとて豫て用意の無紋の旗を取出し手自神保一柳分部の旗の紋を畫由利鎌之助淺香鄉右衛門青山彌十郎增田九郎同荒治郎五人の手には分部が旗を持せ其勢三百餘人一手は海野六郎兵衛木辻別右衛門同元之助別府若狹の四人には神保が旗を與へ其勢三百餘人一手は間石又七郎三好淸海入道同爲三筧金六郎の四人には一柳が旗を渡し其勢同三百皆何れも大坂な中の刻に出立山の手を廻り間道を越して進み行且又木村長門守重成塙團右衛門直行薄田隼人

たる妙計わらじ家康父子が首を取事只心のまゝなりと申ければ後藤實にもと悦び幸村が用意の深さに感じけり斯て城中愈々持口定まりて平野口には郡主馬之助山口左馬之助玉造口には長曾我部元親同じく右衛門太郎右衛門次郎茶臼山は大野主馬之助穢多ケ崎は平子主膳正本間仁兵衛伯樂が淵には樋口内藏之助同平三郎本町橋は明石丹後守湯淺右近鱣谷の櫓には薄田隼人平野町櫓は青木民部少輔速水甲斐守高麗橋は大野修理之助越の口は眞野豐後守中の嶋は大野道犬長柄には織田有樂齋父子神崎には中村式部堀田圖書十三峠には淺井周防守京橋には木村長門守宮部熊太郎渡邊内藏之助南手は幸村手下の勇士五十三騎と手勢五百十五騎幷びに根來衆五千餘人を率ゐる唐人笠の馬印に六文錢の旗三十流れを備へける城中本丸には金の千顆瓢簞の馬印に指物は五色の吹貫其外赤旗五十流れ定紋の旗七十流れを押立惣勢五萬八千餘騎持場〳〵を定めて備へたりしは實に勇々敷を見えにけり

編者曰く大坂城軍立の次第は載て難波戰記に有り是に因て本編には其大概を擧る者なれば看官併せ閲して其詳なるを知り給へと云爾

第十二　幸村文珠院大門坊燒討の事幷關東勢敗軍の事

中原に鹿を逐ふ世は殺伐の荒氣だち杜氏の所謂勝敗は兵家の期せざる所恥を包み辱を忍ぶ是男

謀叛の意を達せんと爲しならん憎き分部が振舞かなと切歯扼腕怒り立て居たる處に是に扣へしは神保成すや汝不忠にも不意に變心して大恩を蒙りし大御所を討んとせしな天我手を以て不忠者の汝を誅せんと爲ぞ早々首を渡す可と呼はり來るは京極修理之助なり長三郎大いに怒り我何として謀叛を爲んや見給へ那こそ分部が所居なり憎む可きは彼なりと云へど修理は肯はず汝我が勇力に怖れ僞るとも何條僞り誅せんや謀叛が僞りと有ならば尋常に繩に懸りて引る可し然なくば一討に微塵ぞと詰掛られて長三郎辨解言葉に差逼り口惜ながら馬に鞭ち遁行にぞ愈々長三郎逆心の者と呼做れしなり分部一柳も其如く互に疑ひ疑はれて同士討なすこそ是非もなし斯りける所に大筒を打懸／＼攻懸りければ大御所大いに驚き給ひ急ぎ遁給はんとて西尾豐後守竹腰山城守三浦長門守大久保彦左衛門安藤帶刀成瀬隼人兼松又八郎小栗大六近藤登之助等五百餘人にて奈良を指て打立れしに傍らより分部が紋の旗を指て由利鎌之助進み出で家康公何とて敵に後を見せ給ふぞや返し給へと呼儘に鎗を捻て突て懸れば西尾豐後守近藤登之助竹腰山城守二百餘人取て返して散々に渡り合ひ其間に大御所危ふき所を遁れて走り給ふに又森の蔭よりは神保が旗顯れ林の陰よりは一柳が旗現はれて海野六郎兵衛三好入道六百餘人にて討て出れば大御所案外の事に唯一騎敵の間隙を窺ひ馬に任せて漸々三丁許りを遁延給ふ跡には眞田勢旗本勢を敵手となして火花を散し戦ひける大御所は辛ふして虎口を脱し只恐ろしと計りにて息を休ませ

兼相の三人にも三千餘づゝの兵を與へ大筒を用意して同じく南都に向はしむ然程に關東勢愆ることゝは露知らず明日は大坂へ出張して土地の巡見爲ん者をと勇氣凜々として終夜酒宴を催し森右近松平周防守の手よりは夜廻りを爲し篝火を焚て夜の明るを待構へける斯りける處に眞田勢の中より由利鎌之助三百人を率ゐ分部が旗を指神保が陣に押寄鬨を揚て懸りければ驚破敵夜討を懸たり者共と犇きける處に由利鎌之助大音神揚保長三郎能聞汝先君の大恩を請ながら關東に從ふと云ふ事有べきや分部一柳と心を合せ速かに大御所を圖大坂方に參る可し若も此事聽入ざるに於ては汝を誅して罪を三族に及ぼさんと呼はりければ神保長三郎是を聞て大いに驚き扨は分部一柳は敵となりけるかと俄に騷ぎ出す此時海野六郎兵衛同じく三百餘人神保が旗を指て分部が陣に押寄神保一柳は大坂に同意して大御所を討んと爲るなりと呼はりければ是より陣中大に騷動し同士討のみぞ致しける此隙に一手の軍勢敵の本陣大門坊に押寄ければ陣中大いに騷ぎ神保一柳等逆心せりと呼はる聲の聞えしに大御所大いに驚き給ひ扨は此三人變心よなと呆れ給ひし其內に早大門坊の八面より火は炎々と燃上り中より神保一柳分部の三將旗を飜へして爰に顯はれ彼處に隱れ千變萬化の秘術を盡し戰ひける長三郎保照分部が逆心成事を知せんと先陣へ馳行處に早本陣は火となり其上我が紋の旗散々見えて神保長三郎是に在と名乘を聞て長三郎是に在と名乘を聞て長三郎は大いに驚く偖は分部僞旗を用ひ我を逆心の者と見せかけ己甘々

ぞ早く〳〵と急給へば彼男共やつと安心して門を閉たり夫より大御所は春日の前に到りて見給ふに唯一人早起したる桶屋あり主と見えて男一人店を出し居たれば大御所聲懸如何汝我を暫らく隠置呉よ後に褒美を與ふべしと有ければ此男甲斐〴〵敷立出四邊を見るに三石入の桶ありければ此桶へ入參らせ然在ぬ体にて居る所へ大久保彦左衛門安藤帶刀兩人來り委細を尋て桶より出し參らせ石川河内守方へ伴ひ行ぬ夫より分部左京神保長三郎一柳監物を誅せられんと爲れける社是非なけれ然程に關東勢元の如くに集り來り大御所に石川が方にて出會皆々御無難を賀して扣へたり此時大御所奈良の町にて門を閉たる男を呼寄何なり共望むべしと有ければ此者共晒屋の株を願ふとの事なれば易き望なりとて朱印の株を許し給ふ後に之を三十六軒の晒屋と稱へしなり扨又桶屋の藤左衛門を呼出され同じく望の事願ひ申べしと有ければ町人の筆頭たらん事を願ふと有に由て江戸表にて屋敷を賜はり樽屋藤左衛門とて後の世まで町人の頭を免されしとかや扨又石川が方迄脊負參りし長助と云男には田畑を給はりて後々迄般若坂の長助と呼做れたり斯て段々と此度の騒動を原ねられしに是皆眞田が謀略なる事と始めて知しかば神保長三郎分部左京一柳監物三人の寃を悔給ひて急に罸を止められしとかや是に於て萬端の所置を濟せられ夫より瀧田道を廻り河内路を經て泉州住吉に本陣を据らる是より再び手分を定め給ふに先大坂の城の東嶋野口へは佐竹修理大夫義宣同じく本多出雲守忠朝上杉彈正大弼定勝人數合て

居給ふ所に後より誰やらん追來るに大御所怪み給ひながら振返りて大久保なるか成瀬かと聲かけ給ふに彼武者打笑ひ否々是は舊信州上田の城主たりし眞田左衛門佐幸村なり我此處に在て君を待こと久しイザ御首を申請んと呼はりければ大御所大いに驚きて南無三寶と仰天せられ跡闇まして遁れ給ふは危ふかりし事共なり

幸村一騎大御所を襲ふ事并關東勢攝城を圍む事

大御所は鞭打頻りに走り給へば後より幸村鎗を取て追掛來り返し給へと呼はりつゝ進み寄て持たる鎗を取延し突掛たりしに大御所の運や強かりけん狙ひ下りて鞍壺を突事三四度なり大御所今は生たる御心地なく乘給ふ馬の駿足なるも同じ處を廻る樣に思はれ給ひ殊に前は深き溝にて行べき道外になければ心中に深く八幡大菩薩を念じ給ひ鞭を機に兩角入るれば此馬忽ち一丈許りの溝を飛越向に難なく立ける幸村續いて飛越しに馬諸共に水の深みへ落ければ幸村急ぎ馬を引揚見ば夜は既に曉方となり大御所何れへ行れしか知ざれば是非なく城中へ引取ける大御所は辛くも此場を驅拔給ひ漸々奈良の町南の門に到られし頃は早門の扉開けて四五人の男何やらん物語りして居たりしかば大御所悦び給ひて聲を懸給ひしに鎧を着されしを見て大いに驚き迯出さん体なれば急に之を呼戻され如何汝等我を內へ引入れ早く門を閉て吳よ褒美は後に與ゆる

之介溝口外記旗奉行は三枝土佐守嶋田治平鎗奉行は小林彦之助米津梅干之助なり斯て慶長十九年十月十七日新將軍住吉の大御所方へ赴かれ合戰の期日を來る廿日と定められ其外諸方の手配り密談有て還らせける其夜上難波へ出張せる藤堂和泉守高虎が持場内阿部右近が八百餘騎にて固めたる陣へ蘆原より鐵砲五十挺一度に嘲と打掛ければ思ひも依ぬ事故百餘人の者忽ち手疵を蒙り驚破城方より寄けるぞと一陣大いに狼狽し甲よ冑夫弓よと甲乙の別なく或は足を矢筒と間違引摺倒して急に驚き或は冑を横に蒙り鍜の爲に眼を覆はれ七轉八倒お先眞黒飛出して溝にポチヤンと陥るも有て其騒動大方ならず此物音に井伊が陣も共に驚き城中より夜討を懸しと是も同じく狼狽たり斯て夜も白々と明行にぞ井伊藤堂の兩陣より蘆原へ船を出して探し見るに敵一人も有ざれば急ぎ此由を住吉へ注進す大御所之を聞給ひて不審なし斯ては勿々捨置がたし予自ら巡見して其後軍を起さんとて已に出立んとせられし時佐渡守正信諫て曰臣案ずるに蘆原より打懸し鐵砲は何條怪む事の候や城方は小勢なり味方は大軍なり兵書にも言ずや寡は衆に敵せずとされば城中にては陣中を騒がし虚に乘て討んとするの謀計なれば味方は其陣々を能固め油斷せざるぞ肝要ならんと述けるに大御所も其まゝ思ひ止まりぬ因て藤堂も我陣に歸り一際堅固に守りけり然るに其夜も又々鐵砲百餘挺一度に撃掛來りしかば藤堂心得たりと兼て用意せし小船に三百人を乘組せ打出す鐵砲の煙りの下より船を乘出させ一人も餘さず打取り來れと鳴靜

一萬八千餘騎次に堀尾山城守忠勝五千餘人中濱は京極丹後守高國八百餘人森口村は眞田隱岐守住吉口は淺野采女正長重五千餘人本庄へは松平丹後守重元牧野左馬之助忠成遠藤但馬守常則八千五百餘人玉造口は酒井左衛門家次一萬八千餘人中途村には毛利伊勢守景元菅沼織部正定秀同伊藤修理之助祐則本多縫之助康俊人數合して五萬餘騎奈良街道へは秋田城之介植村主膳小出信濃守都合八千餘人辰己の角櫓は仙石兵部之丞松平甲斐守眞田丸東側には牧野丹後守松平安房守羽柴河內守松平越中守都合三萬五千餘騎手勢八千餘人越前少將忠直卿一萬五千餘騎手勢三千餘人と部署を正しく定められける此惣勢合せて二十三萬八千餘騎と聞けるは實に凄然かりし次第なり

第十三　藤堂陣所へ每夜鐵砲の事幷本多出雲守攻口を願ふ事

斯て諸方の手配も終りければ大御所住吉の本陣右備は駿河中將左備は越前の太守軍師は本多佐渡守忠信軍奉行は永井右近大夫直勝陣廻りは横田甚左衛門安藤治右門衛伊藤忠助鵜殿石見守旗本の前備としては藤堂和泉守井伊掃部頭遊軍は本多美作守松平下總守扨又新將軍には岡山に陣を据られ前備は酒井雅樂頭鳥井大炊頭榊原遠江守右備は阿部備後守左備は高木主水正後備は水野隼人青山伯耆守軍師本多三彌安藤對馬守陣廻りは青山長四郎山田十太夫村瀨左馬

なれば居ながらにして大功の立所とは仰せらるゝぞと押て問たりしに大御所少し顔色を變じ給ひ如何忠朝汝は父に生れ劣りしと見えたるよな是程の事心付ざるかと其座を立せ給ひける私に曰是大御所の智言なり佐竹上杉は元來大閤厚恩の家にて殊に上杉は關ヶ原の時石田に與したる次第なれば此度兩人が心の中いかならんと依て忠朝に命じて其虚實を知んと爲たるに忠朝是を知ずして偏に功名をのみ好む事是大御所の内心には却て虚實を知るに屈竟なりと思さる所なり

斯云捨給ひしかば本多忠朝面目を失ひ退出す既にして大御所彼若年なれば若も予が今の一言に耻て討死せんも計り難しと心付れては堪り得ず早速氣色を直され急ぎ忠朝を呼返されて始めに引替いと懇切に如何忠朝汝穢多ヶ崎の要害を見積り來るべしと有ければ忠朝有難き由を述て早速穢多ヶ崎へと趣き是に依て忠朝少しは面目を施せしとかや

本多出雲守穢多ヶ崎見積の事幷幸村蘆原へ忍ぶ事

然程に本多出雲守忠朝は大御所の命を受け五十騎にて住吉を出穢多ヶ崎へぞ向ひける折節寒氣甚だしくして北風面を撲空は雪催しにて兵器執手も鈍ける出雲守は黄糸縅の鎧に鬼面の兜を戴き中黒と名し名馬に跨り十六貫目の鐵の棒を馬の平首に引添徐々と乘出し穢多ヶ崎に到りて見

まつて控へたりしに敵方よりは愈々劇しく撃掛しに煙を目的に馳付見れは蓑笠着たる者百餘人立居たり扨社汝不埒なり迯しはせじと蘆原へ船を乗込み難なく之を打倒し能見れば人にてはなく藁にて作りし人形なり是はと計りに大に驚き傍を見れ共敵とては一人もなく愈々不思議と彼の藁人形を携へ歸り翌日住吉の本陣へ差出しける此時何人の戯れにや住吉街道に一首の狂歌を張置たり藤堂が勢之を聞て通り掛り其狂歌を見るに

竹藪にあらで蘆原探り行藁人形を捕ふ高虎

と有ければ持歸つて高虎が前に出しぬ高虎見て冷笑ひ引裂けれ共心中には口惜く思ひける斯て大御所には何分此事を氣遣はれ彌々巡見に心を決し給ひけるを伊井本多の兩人固く止て在折からに藤堂が陣より毎夜〳〵鐵砲を夥多敷打掛る由言上有ければ愈々巡見に相成處に鴫野口より本多出雲守忠朝來り合せ面を正し申けるは某し願ひの儀御座候先達て定められし攻口を我が儘に變ん事全く軍法を背くに似たりと雖も今某しが守る所の鴫野口は佐竹上杉の大家控へ居候へば所詮花々敷合戰は之有間敷然る時は高名はとても爲難し箇樣なる攻口は誰にも仰付られ下されば此忠朝には鱠谷穢多ケ崎伯樂ケ淵の内を仰付られ下さるべし良敵の首を取り御感に預り度と申ければ大御所是を聞給ひ汝が持たる鴫野口は究竟の攻口なり此口に控へ居る時は居乍にして大功の立べき所なれば能々心附べしと有しに忠朝は平伏して暫時言葉も無りしが稍あつて如何

の淺深も有者なるが其邊に心を留て來りしかと此一言に忠朝は只赤面して平伏す大御所は深くも之を尋ね給はず面を和らげ忠朝太儀にて有たり早く歸陣して休息せよとて奥へ入給ひければ本多は悄々として我が陣へぞ歸りけるが道すがら住吉岸の姫松邊りへ來りて熟々思ひけるに大御所我を父忠勝には生れ劣りしと仰せありしは是決して謂れなき事には有ざるべし思ひ運せば君我をして上杉佐竹を押へさせ給ふに我之を知ずして徒らに合戰をのみ願ひし事淺はかにも愚なり且又此度堀の探索に汐の滿干にさへ心付ざると云ふ事返す〳〵も殘念の至りアヽ父に劣りしと仰せ有しも道理なる哉イデ此上は花々敷討死なして此恥辱を雪がん物と爰に始て大御所の一言膽に銘じ扨社稷に抽で天晴の武功を立て庚申堂合戰に討死し武名を四海に止めけり斯て大御所には何分敵を訝かしく思されけれ共本多佐渡守の諫言に因て思ひ止り陣代として正信に今宵巡見せよと有ければ正信畏まりぬと夫より大御所の如くに打扮乘物に打乘て井伊藤堂に前後を圍ませ夜中に鰻谷より段々道頓堀邊迄巡見したり然るに此夜も藤堂が陣へ鐵砲三百挺程打掛しかば急ぎ此由を住吉へ言上す大御所愈々不思議に思され今は誰諫むとも聞入給はず彌々自身に巡見と思ひ立られ諸將に此旨觸出されて十一月十九日晝四ッ時に住吉を發馬せられける爰に眞田左衛門佐幸村は大御所を釣出さんと藁人形の謀計を運す處彌々發馬の由を聞大いに悦び偖社家康公を討取時節到來せりと身には南蠻鐵の鎖帷子に筋鐵打たる小手臑當を着し大太刀を帶

れば此持口は城方の樋口淡路守本多仁兵衛が手の者共なり持口の勢是を見てあな淺ましや何者なれば爰へは來りしぞと尋ぬれば本多出雲守なりと答へしに偖は關東に於て無双の勇士と聞えつる本多なるか討取て高名せんと云儘に狹間を開きて鐵砲を打懸ければ本多が郎等大いに驚き遁出さんと犇めくを忠朝之を制し止重き君命を奉じながら斯ばかりの鐵砲に怕遁出さんとは何事ぞ返せ〳〵と云ながら自身眞先に進んで堀際迄到りければ圍の內より討殺さんと鐵砲を擊事雨の如し此時本多仁兵衛は味方を制し本多程の勇士を飛道具に掛ん事不本意なり討取んとならば潔能戰場にて勝負せよ彼此處へ來りしは大將の命を請て堀の深淺を探り知らん爲の出馬なれば捨置可し假令彼之を探と雖も汐の滿干有ければ何條委細に之を知事得可んやと云ければ此號令に鐵砲は止たりけり斯とは知らず出雲守は鐵砲の止たるを訝りながら堀の邊へ馬駈寄て見渡せば實に要害第一の所なりしに忠朝猶も委しく堀の淺深を知んと思ひ馬一疋を引出して堀の中へ追込たりしに堀の中には太繩細繩を引廻し亂杭逆茂木を水底に打込有ければ水はさして深からざれ共馬の四足は件の繩にからみ付進退自由ならざるに因り終に馬は沈みてけり忠朝は水中の仕掛を知ざる故大いに驚き扨も底深き堀なるかと舌を卷つゝ夫より矢倉〳〵を打詠め要害の次第を逐一記し住吉の陣にぞ歸りける夫より大御所に對面して馬の沈みし樣子など委細譚たりければ大御所も眉を顰め給ひ如何忠朝大坂城の河筋は海邊なれば汐の滿干あり夫に准じて水

には何故是に御心つき給はす御馬を進められ候やと申ければ大御所笑ひ給ひ是位の事を恐れて出馬を止まりなば諸將の心を失ふべしと有ければ彦左衛門是決て然有る可らず唐土の楚の項羽我が朝の新田義貞旗の倒れて軍に負し事之有り其外和漢に其例少なからざれば早々御馬を廻らし御歸陣然るべしと諫めけるに大御所是を聞給ひて汝が申條理ありと雖も今斯の如く發馬して半途に歸らんも殘念なりと暫時案じ煩ひ居られし處に米倉和泉守俊茂進み出て申けるは半途にて御歸陣有事殘念に思召段御道理なり因ては不肖ながら某し君の御代りに立御巡見と申觸しなば敵若謀計有て難儀を仕掛候とも恐れながら君の御姓名を名乘某し討死し其時大軍を以て攻立られ然る可し是一ッには君の御不難を圖り二ッには敵の計略を誤らせん爲なりと述ければ大御所大いに米倉が忠心を感じ給ひ能も申たり迚馬上より陣羽織を米倉に授けられ金の采配を免されたり俊茂有難き由申上聽て其手筈整ひければ大御所には大久保竹腰安藤成瀨等僅か千五百餘人を從へ住吉の陣にぞ歸られける是より米倉は行列を立て大坂へ發馬し先藤堂が陣に入て休息を爲葵の旗指物を風に飜翻し城方の要害如何と見積りける斯て幸村は只一人蘆原に隱れ居て是非に大御所を狙撃んと待居たりしに早くも大御所の引還し給ふ事を推圖り我謀計の成ざるを悔ると雖も待暫時今まで工みし千辛萬苦を空しく爰にて止なんより名代の者なりと來らんには丌を擊とめて後日の妨げを除かんと鐵砲を搆へ肩唾を吞で扣へたりアヽ米倉が今の命は朝日に向ふ

して十匁筒を横たへ上には簑笠を掩ひて唯一騎鰻谷より船を下して蘆原に隠れ居るとは知人更になかりけり

第十四　大御所住吉へ出馬爲し給ふ事幷米倉泉州陣廻りの事

朔風凜烈として寒波磨劍の如く曉色冴て遠山近山白堆を爲す幸村は身に染寒威を事ともせず鰻谷より船に打乘り大御所を打止んずと肩唾を呑で待掛たり然程に大御所には先陣松平美作守保科主馬頭三千餘人松平備後守山村信濃守同三千餘人二陣神保長三郎跡部傳內兵衛蜷川對馬守二千餘人一柳監物建部大炊加藤遠江守同二千餘人三陣藤堂和泉守八千餘人安藤治右衛門五百餘人次に軍師本多佐渡守旗本の勢數千人を從へ緞絨の鎧に大鍬形の兜を着なし亂鹿毛と名けし名馬に跨り儼然として打出給へば大久保彥左衛門忠教兼松又八郎小栗大六郎竹腰山城守三浦長門守安藤帶刀成瀨隼人等前後を守り次に松平伯耆守眞田隱岐守安部內記同刑部石見左衛門奥平九八郎五千八百餘人付從ひ其勢都合二萬六千餘騎にて騎馬は馬銜を揃へ歩行立は足並を正し整々堂々として押出たり斯て住吉を離れ五六丁行列を打出たる所に不思議や大旗一流雲風吹來りて打ければ皆人大いに怪しみ吉凶いかにと思ひけれ共大御所には素知ぬ顏にて過行給ふ大久保彥左衛門ツカ〳〵と進み寄り風の爲とは申ながら御旗の吹折しと云事是陣中の不吉なり君

大御所斯自身巡見を急がせ給ふ事は關東勢と雖も皆太閤の厚恩を請し者なる故自然變心の程も量られ難しとて諸將の心を試みん爲の事なりしとかや
一人を悸れては天下を定むる事豈得可んやとて再度其如く決せられたり
然程に大御所は再び軍備を整へ密かに旗本勢許り千八百餘人にて十一月廿一日の夜住吉より藤堂が陣に赴むかれ夫より伯樂ヶ淵穢多ヶ崎等の矢倉迫間を見積り其外味方の陣所〳〵をも巡見有て夫より前嶋表嶋の邊りに到られし頃ほひ又も一聲の鐵砲響くと齊しく思ひも寄ぬ蘆原より眞田が伏兵一度にドッと起り立穴山小助由利鎌之助基幸近藤無手之助友幸別府若狹三好新左衛門入道淸海同新兵衛入道爲三眞田大助治幸海野六郎兵衛覓金六郎等五百餘人我も〳〵と閧の聲にて突て出るに關東勢に魂褫はれ手足慄へ恰も燕雀の鷹鸇に遭ふが如く夫眞田よと計り呼はりて逃んとこそすれ進まんと爲者一人もなく雪顔を打て退けば大御所も此體に驚かれ大久保彥左衛門釜松又八郎小栗大六郎竹腰山城守本多中務三浦長門守安藤帶刀成瀨隼人三百餘人に取圍まれ住吉指て脫延られしに道には由利鎌之助大身の鎗を捻つて葵の紋の大將逃る事勿れ首渡されよと突て懸れば竹腰山城守小栗大六郎爰を專途と防戰しに由利は面倒なりと大六郎を馬より眞逆樣に突落しアハヤ刺殺さんとする處を竹腰然は爲じと基行が鎗を打落す打落されて基行は大手を擴げて組付たり此隙に大御所は虎口を遁れて此方にやう〳〵引退けば又々爰にも穴山小

白露の如く哀れと云も餘りあり斯とは知ず米倉は采配採てツと立出で矢倉迫間を東西と打詠め居たる其所に不思議や四邊に人影とても有ざるに遙向ふに一片の白雲地を這出すと見る間に轟然と響くや否や一個の飛丸米倉が胸膈を打貫けば何條以て堪まる可き馬より眞逆樣に轉げ落撥剌と水中に陷り込でぞ死たりける斯と見て諸將は暫時膽を消し然にても何地に人ありて打懸しやと考へ見ては我足音さへ敵かと計り疑はれて身の毛も竪ち寸時も其處に居堪らず住吉指て逃歸りけるは見苦しかりし事共なり幸村は米倉を打落し死骸を木陰に繫ぎ我身は其まゝ小舟に棹し鰻谷の矢倉にぞ歸りける

大御所御陣廻り再度の事幷眞田勢蘆原より起る事

扨も米倉俊茂敢なく討れければ關東勢我も〳〵と住吉に立歸り此趣き言上致しければ大御所大ひに驚き給ひ和泉守が最期を歎かれ急ぎ俊茂が嫡子治左衛門俊隆を呼出され家相續を申渡され和泉守と名乘せける斯て大御所には此變の有しに因て猶々自身巡見せでは叶ふまじと思され此事再び觸を出されければ松平佐渡守諫申して城方の眞田は兵を用ゆる事奇計多き者にて候へば匆々粗忽に御陣廻りは成がたし米倉既に御身代りに立し上は必ず〳〵此事思し召止まり給はれと利害を盡して陳けれども大御所は之を聞入給はず虎の穴に入ざれば虎の子は得難し然程眞田

一心不亂に念じ在ける其内に幸村は猶も鎗を捻て此彼ことと突て回るに如何はしけん其內大御所の所在を見失ひ途方に暮て居たりけれ共今は是非なく引揚たりアヽ斯る危急の場合にさへ遂に難なく九死を出て一生を得られし事誠に天運に適ひ給ひし君かなと後にぞ思ひ知れける

第十五　大久保忠教鎗摺鎧の事幷蜂須賀家中評論の事

大御所には大久保彦左衛門忠教の鐵心に依て蘆原の危きを遁れさせ眞田が行方も遙に成ければ漸々にして忠教蘆の中より首を指延四邊を見廻しけれ共早眞田と覺しき武士も居ざれば然ば立出んと君を助け起して蘆の中より這出し堤に上りて扨々恐ろしき事哉とはッと一息吐所へ安藤帶刀成瀨隼人二人馳來り君を守護して藤堂が陣へと赴さける所に松平美濃守康秀七百餘人にて尋ね來り藤堂の勢五千餘騎に加はり城方の勢を追崩し君を迎へて本陣に入にけり此時夜はほの〳〵と明渡り住吉に居し者も此由を聞付我も〳〵と參着し道すがらも君は御安体に渡らせ給ふや御行衛知ず討死遊ばされしや抔と樣々に案じ煩ひ心ならず思ひながらに馳來りて御摸樣如何にと伺ひけるに君には御安体にて藤堂が陣に入らせ給ふと聞始めて安堵の思ひをなし皆々藤堂が陣へと立入り御安体を賀し上けり大御所はさして惡き氣色もせられず只莞然と笑ひ給ひて諸大將に向はれ如何其方等よ予既に夜前の變に眞田が爲に討れぬべき所を是なる忠教が我に代〳〵

助顯はれ出五百餘の軍勢にて犇々と突て入るにぞ又も大に敗北なし大御所此度は大久保か脊に双頭隻軀濱手を指て逃給ふ大久保は力に任せ喘ながらに敵の背を潜り拔アヽ任重ふして道遠しと苦き中にも戯言を以て君を慰め四五丁許りを來りし頃ほひ蘆原より只一騎大御所〳〵と呼び掛來りし者あれば大久保聲懸衛云汝は敵か味方か早々名乘給ふ可しと云ば彼者聲高らかに我社は舊信州上田の城主たる眞田左衛門佐幸村なり先刻より君のお首申し請んと此處に待こと久幸此太刀を快々請られよ卑怯にも逃給ふ事勿れ返せ〳〵と呼はれば大久保は氣も魂ひも身に添ず足に任せて遁んとすれば何國迄もと追駈來り遁さじ者と鎗を延して突懸るに大久保堪らず爭に帆を揚韋駄天走りに遁行を追かけ〳〵已に危く見ける處に阿部惣藏岩淵主悅君を尋ねて馳來り此體を見て急に大御所を助けんと幸村に切て懸れば幸村大いに怒りて憎き葉武者め大事の敵を遮る段其分には差置じと鎗を返して岩淵を突て落し續いて阿部をも刺貫き其場に二騎を討課せしが此隙に大久保は君を助けて濱邊の方に出んとして四邊を見れば年古たる柳樹水に臨んで傍に一叢の蘆原ありければ忠教是究竟の所なりと君を脊より下し參らせ柳の陰に息をひそめて屈み居る所へ幸村は既に岩淵阿部を刺殺して跡追駈て馳來り此方彼方と見廻すに大久保と大御所と蘆の中に蠢々然として潛み居けるを見るより幸村スハこそと鎗を逆手に蘆原をグサ〳〵と突て廻る此時大御所心中に然こそと思はれ神佛に祈誓を込め我に運あらば危急を助けたび給へと

に及ばゞ天下は當に豊臣家に還附すべしと是人の能知る所なり然るに家康には此意を体せず秀頼に難題を申掛け軍を差向る事殘念の至なり其許は先君重恩の者にも候へば亟かに城中に來て加勢有に於ては先君黄泉の下に其忠を賞せらる可者なり

慶長十九年十一月七日

內大臣豊臣秀頼判

蜂須賀阿波守殿

同　長門守殿

と有ける家政之を閲了りて先使者を客室に留置返答を打案じ居たる處へ又關東よりも軍勢催促の使者として戶田源五兵衛鳥居軍太夫の兩人德嶋の城中へ來り家政に對面して大御所の手書を取出して家政へ渡しければ家政は先使者の口上を委細に聞き軈て書面を開き見に其文に曰く

此度秀頼逆心に付家康父子大坂へ發向す其方事昔年關ケ原一戰に比類なき功名を立たる者なれば此度も變心無忠義を盡し早々大坂へ打立德川家を右けて高名を遂げ永く子孫の後榮を可受者也

慶長十九年十一月五日

德川家康華押

蜂須賀阿波守殿

同　長門守殿

て死せんと迄爲し我を押隱して翼けたりしに因り眞田が鎗を受し事七八度に及ぶと雖も予には難なく大久保こそ刺殺されつらんと思ひしに天忠心を哀れみしにや是見られよ鎗は鎧に止りて忠敎さへ一ヶ所も薄手も負ざるは奇しき事ならずやと是後に大久保が家に存して鎗摺鎧と名付し品なり是に因て大御所は殊に大久保が誠忠を感ぜられ我難を脱れしは天の助けに因と雖も大久保が誠忠なくんば焉んぞ全き事を得可んやと大いに彦右衛門を賞美有ければ傍へに閑居し諸大將も皆彦右衛門が忠心の程を感心し身の面目只彦左衛門に超る事無と羨まぬ者は無りけり話次生岐爰に阿波淡路兩州の太守蜂須賀阿波守家政入道嫡子長門守至鎮兩人の顚末を尋ぬるに抑々此蜂須賀は外の大名と違ひ先君太閤の厚恩を請たる事山よりも高く海よりも深し然るに因ては陽に關東に降る共心は大坂に味方して先君の恩を報ず可所に然は爲して關東に味方爲耳ならず大坂の攻手穢多ヶ崎を一番に攻落したる事是如何なる事にや蜂須賀蓬庵入道家政背て大坂關東の兩軍より使者を承け遲疑したる次第は先大坂方大野治長より申送りけるは此度秀賴公御身の一大事となる軍始まるに就ては其元には豫て故太閤の厚恩受られしを以て急ぎ大坂方へ御味方之有樣致し度秀賴公の命を奉じ爰に樋口庄三郎(樋口淡路守子息)を遣はし併て公よりの手書を贈ると有て即ち樋口阿州德嶋へ到着し此旨委細に申述ければ家政其書を開き見るに

内大臣豐臣秀賴手書を以て意を陳す我先君太閤德川家康前田利家に遺命して云く秀賴十五歳

に松原内匠が大坂に味方する事を止て關東に隨身然るべしと申しければ家政大に悅びいか樣內匠が云處我心に適へり然らば早々大坂の使者を追返し關東に從ふべしと松原が勸めの如く一決したる所に家老稻田九郎兵衛元賴(今年十六歲)淚を流して申けるは玉と爲て碎けるとも瓦と爲て全からずと申事の候大坂方たとへ軍勢少なく力薄しと雖も何條大恩を打忘れて仇敵たる關東に從ふ事の候はんや恁る不義の名を世に留め候時は御子孫榮へ家國盛なればとて何ぞ悅びと爲に足んや只潔よく大坂方に御加勢有て關東の大軍を引受御合戰然るべし力盡て候はゞ其時速かに御討死有とも晩かるまじ是武士の本望と致す所なりと聊か憚る氣色もなく諫言しけるに家政怒りて已は父大炊が忠義に依て若年ながらも家老職を申付たりしに早高慢の心を起し此家政に諫言ヶ間敷事を口走る段不屆至極なり蓬庵今年七旬に近し豈汝等が諫言に預からんや慮外なりと罵言ければ稻田莞爾と打わらひ其職に居て其職を盡さゞるを素餐と言ふ齡に老少の差ありとも守る所の道は一つにて候今君の惡に進み給ふを見て諫めざるは臣の道にあらず是を以て直諫を申上候なりと容を正して控へければ蓬庵汝よしなき諫言たてして又も舌を動しなば一刀に切て捨んぞ控ろと有しに稻田は更に悸るゝ色なく臣の命は素より君に捧げし者なれば御手打に預るとも何ぞ之を惜み候はん忠諫を入て死なん事某しの望む所にて候早々御手打有させ給へ稻田命ある中は決して不義には從はせ申さじといつかな引ぬに家政は眦を顳顬にまで吊上げ汝來

家政は之を見て大いに悦び先戸田鳥居の兩人を別間へ請じ種々に待遇置關東大坂の兩書を袖にして獨り打案じて居たる所に稻田九郎兵衛赤澤七郎右衛門松原内匠等罷出て君には何を斯打案じさせ給ふぞと尋ねければ家政申けるは汝等も知通り我元來太閤の厚恩を受て阿淡淡路の兩國を領し威名を遠近に振ひ居し事なれば大坂方へ隨身して加勢を爲べしと思ふ所に關東よりも催促を受しに因て如何はせんと思ふなりと聞て兩人も暫時沈案じ居たりしが軈て松原匠内進み出て申けるは大功は細瑾を顧みず大儀は小讓を辭せず今關東の威勢廣大にして大坂は微勢なり然るに拙なくも籠城して關東に當らんとする事豐臣家の運傾きたりと思候なり舊恩有とは申乍ら君にも戰功有ばこそ太閤祿を與へ給ふなり若戰功なかりし時は爭で恩典有可んや然らば强ち舊恩とのみ言ふ可にも非ざる歟且又微勢なる大坂に味方爲し給ふは誠に其危き事卵を累ぬるが如し然れば寧關東方に隨身して忠義を盡され御子孫の後榮を圖らるゝ事宜敷候はん勞同じくして後日の榮枯今眼前に知れながら危きに近寄候事は智者の爲ざる所なりと辨に任せて陳ずるにぞ家政心中に悦びける

稻田九郎兵衛忠義の事幷長門守即智の事

蜂須賀阿波守家政心は疾に關東に隨身して有乍ら諸士の氣を試みんとて兩端の樣子を爲しける

閉口して顔を赤らめ控へけり長門守怒り止ず誰かある松原が首を刎て不忠者を懲戒よと申されければ松原は頭を控へ疊に髄たり平臥て萬歳樂をぞ稱へたり長門守父には却て何とも言ず松原を責て諷諫せしは孝心の爲所なりと人々之を賞たりけり斯て長門守は關東の手書は見向もせず秀頼公の手書を取上恭々しく讀終りて父蓬庵に向ひ古へを引き今に擬へ懇切に利害得失を說出しければ列座の諸士は手に汗を握りて控へたり

第十六　蜂須賀父子大坂着陣の事幷穢多ケ崎夜討の事

斯て猶長門守は落涙數刻に及びて再び申けるは凡孝悌忠信は人倫の重しとする所なり且又其本亂れては末治まらず父君には兩國の主として忠孝の道を糺し給ふべき御身なるに却て舊恩を忘れ忘恩の德川家を助けられ正しく太閤の御血脉たる秀頼公を攻討んと爲らるゝは是忠信の道邪邊に之有候や兩國の政道に有罪を罰し有功を賞して萬人の見せしめを嚴重ならしめてさへ諸民惡道には進み易く善道には進み難く惡事には例を引て我儘を振舞ふ習ひなるに今父君關東に隨身有て秀頼公に弓を彎給ふと有ては諸臣必らず之に倣ひ忠義の心は頓と失せ果て惡き心こそ起らん是影の形に從ふ道理にして淺ましき御事ならずや願はくは何卒御聞入ありて忠義の御心に成給ひ大坂に入城わつて太閤へ手向の御戰ひ然るべしと或は歎き或は慰め諫めけるは殊勝にこ

れと云つゝ刀を拔て立向へば九郎兵衛ッと座に直り首さし延て待ければ家政大音にて打放すぞ覺悟せよと進み寄にぞ一座の者共慌て立出止めけれども家政愈々憤ほり立懸つて一打に爲さんとしければ皆々驚き彼よ是よと騷ぎし處へ嫡子長門守至鎭入來り此體を見て大いに驚き何ゆゑ父君には立腹せられしぞと先父を宥め稻田を制して軈て仔細を尋ぬるに家政委細を語り兩家よりの手書を出し至鎭に示しければ至鎭是を見て松原内匠を近く招き汝何なれば我が父を輕んずるやと大いに怒りければ内匠驚き某し君を輕んずるに非ず君を輕しめたるは稻田にて候と申ければ長門守汝何とて君を輕しめしを稻田と云ぞ若年なれども九郎兵衛は大炊が悴たるに恥ず君を諫たる段古今の忠臣天晴の英勇感ずるに堪たるなり然るを汝は稻田を不忠の樣に云做す事慮外なりと有ければ内匠答へて家政公は老功の智君にて在すを其を憚りもなく强て諫言を入れ御いかりを發させ其上殺し給へなどゝ立向るは不忠不義にては御座なく候はずやと申ければ長門守居丈高になりて己が侫姦の心に比べて忠臣を誹り主君を無する段其分には差置難しいかなれば汝主人を輕しむる而已ならず此長門守までも欺かんとはするぞと語りつけしに内匠申けるは某し全く主君を輕しむる覺えなし長門守汝何を申すぞ今父君は入道せられて御隱居なり家督は我相續して當主なれば此評議は先我に尋ぬべき所を然はなく妄りに父君とのみ相談して此長門守を外と爲す條是主人を輕しめしたるなり汝是にても申分あらば云いかに〳〵と有ければ内匠

者樋口庄三郎を其まゝ座敷牢に入置夫より急ぎ用意を整へ船にて出軍し十一月下旬川口へ着岸しければ夫より豫ての兩使戸田島居に伴はれ住吉の本陣に抵りける大御所は蜂須賀が來ると聞大に喜悦せられ頻に是までの武功を賞しなどせられて遲滯の事共問給はざれば蜂須賀申けるは大坂の攻口は何處なり共御下知に任せ忠義の程を顯し度候と願ひける大御所然らば其許には松平土佐守が向ひし穢多が崎甚だ堅固なれば是を攻落さんや然れ共其許は太閤の恩を受し身なればは此度は後陣に在て合戰の樣を見て居らるべしと有しかば蓬庵入道斯と聞て大いに怒り是まで出軍して先手に向ふ事なく後陣に在て合戰の樣を見て居る事何條以て武門の堪ふ可き處ならんや大坂より使者を以て招かれしが其使者は樋口庄三郎と申して穢多が崎の大將樋口淡路守が嫡子にて候斯樣の御疑ひもあらんかと此者を船底に入連來り候然ば明日明らかに穢多ケ崎を攻落し御覽に入申べしと答へ退きけり家政は數年太閤の昵近にてありしかば此度の攻口は能其地理をも知りたる老功の將なれば只一戰に乘とらんと馬筏には木釣瓶とて壺を木にて拵へ口を能包みたるを數多出來用意を充分に整へ夫より夜討に慣たる武者八百餘騎を撰み出す其頭の面々には稻田九郎兵衞森甚五兵衞同甚太夫長江縫殿同六太夫松原内匠長谷川惣右衞門蜂須賀五右衞門加嶋齋宮赤座治右衞門池田浪江主將蜂須賀長門守至鎭を始めとして我も〱と住吉より進みて穢多ケ崎へぞ向ひける穢多ケ崎には樋口淡路守本間仁兵衞五千餘騎一貫目の大筒二十挺を左右

そ見えたりける然ども家政大いに怒り汝忠義〳〵と兎角口賢く言立れども古昔云ずや時務を知るは俊傑に在と夫太閤は凡下より起りて元はと言へば我臣下なり彼濃州洲股の城主となりしも我々が寸計に依てなり當時秀吉公假令天を地となす奇計ありとても我々無んば爭か洲股の城を取事得可んや其後始めて我秀吉の臣下と成ん事を約し其上數度の軍功に依て阿波淡路の兩國を保てり且又秀吉にも實に忠義の心あらば秀信卿(三法師君なり)成長あらば之に天下を讓り我身は後見と成てこそ然るべきに秀信卿には僅に岐阜の一城を與へて其身は關白の職に昇ると云事是有間敷事ならずや其上信長公追福の燒香場にて三法師君の命を矯柴田瀧川丹羽佐久間德川等に大言を吐き恥辱を與へ乍ら後には其言葉を食たる段是大姦は忠に似たりと言ふに能當り以の外なる人ならずや斯る姦賊に何ぞ忠も義も立る事有べきや汝復諫むる事なかれ我は是より德川家に從ひ家の安否を定むべし家政已に心を決したりとて袖を拂つて立んとするを至鎭止て仰は然事なれども世の取沙汰も口惜ければ是非に大坂方へ力を協せてたび給へと再三再四諫めけれども家政愈々怒りて汝臆病を構へ大坂に入城して却て族滅の慘狀を見んと思ひをるかと言捨て家政は奥にぞ入にける至鎭は此一言を聞只茫然として涙を流し在けるが稍在て稻田を招き父君の御心既に斯決せられし上は今は奈何とも爲べき樣なし然ば關東に從ひ他に勝れし高名爲て諸人の眼を覺さすべしと語り了て退きけり之に依て蜂須賀は彌々關東に心を傾け大坂よりの使

相違なければ扨は仔細ぞあらんと急に鐵砲を差止め庄三郎を救ひ城中へ引入よと繩梯子を下し庄三郎を釣上けるが其隙に蜂須賀勢我も〳〵と馬筏を渡りて砦へ繩鍵を打掛〳〵どつと吶喊て切入ければ城中にては思ひも寄ぬ同勢に切込れ夫大筒よ鐵砲よと犇きけれども今は大筒も打隙なく大いに騷動して狼狽けるこそ道理なれ

樋口本間勇戰討死の事并蜂須賀穢多ケ崎を乘取事

穢多ケ崎の守將樋口淡路守正道本間仁兵衛信高は思ひも因ぬ事ながら早速下知を傳へ夫餘すな假令如何樣に働くとも馬武者はなく歩行立なり馬の蹄に懸て蹴散せと大音に呼はり〳〵味方を勵ましければ蜂須賀勢一まくりに切立られ松原内匠稻田九郎兵衛も少し萎みて見えけるが仕損じては一大事と步卒に下知して急に火を掛是を力に鋭意〳〵と攻掛る一柳監物も千五百人にて犇々と討てかゝるに城兵は新手の兵に切立られ散々に爲る所陣々には火燃あがりければ上を下へと敗走す斯る處に本間仁兵衛信高紺糸の鎧に桃形の兜を着し大身の鎗を橫たへ崩るゝ味方を支へつゝ卑劣者の振舞かな是ほどの敵に後を見する事やある我に續けッと大音揚て下知する所へ蜂須賀が郎等森甚五兵衛能大將御參なれと鎗を捻つて突て掛る本間は乾度見て敵は嫌はぬイザ來れと鎗を合せて丁々發止と打合ふ内本間は聞えし勇士なれば甚五兵衛が鎗を打落す甚五

に備へ狹間には小銃弓矢を透間なく配り其外大木大石を夥だしく貯へ置千筋の繩を掛渡し置き敵船筏にて淵を越んとせば切落して顚覆さんと工みたり蜂須賀は日の暮るを相待所に住吉より一柳監物千五百騎にて蜂須賀が陣へ尋ね來りければ家政如何成用事あつて來り給ふぞと尋ねしに監物答へてされば既に貴殿出行給ふ跡にて大御所某しに命じ給ふは蜂須賀一人にて穢多ケ崎を乘取事覺束なし汝加勢として向ひ候へと仰せられ候なりと申ければ家政大いに打笑ひ然程に大御所我を疑ひ給ふ歟見給へ某し一人にて穢多ケ崎へ押寄攻取べし一柳大いに色を變某しも君命を受來りしに貴殿我を省き一人高名せんとは以ての外の事ならずやいかに〱と詰りたりしに蜂須賀是非なく澁々ながら是に從ふ斯て夜の亥の刻ばかりに成ければ蜂須賀時分は良と馬筏を淵に投込〱扨捕へ置し樋口庄三郎を引出し其方は殺すべき罪有に非ざれば幸ひ此穢多ケ崎は汝が父の守りし砦なるに因て許し返す間筏を傳ひ城中に入べしと武具等を與へて放ち遣ければ樋口庄三郎大いに悦び蘇生し心地して急ぎ馬筏を渡りければ跡より蜂須賀が八百餘人續いて渡る庄三郎是を見て大いに駭き扨は我を先に立て同勢續かんと爲しけるかと魂ひを冷し居たる所に砦にはスハヤ敵夜討を仕掛しぞと鐵砲を透間なく打出しければ庄三郎慌て驚き後に返らんとすれば蜂須賀が勢續て攻付たりしに今は叶はじと聲を張揚城中へ申べき事あり樋口庄三郎歸りたり麁相をすなと呼はりければ是を聞て砦よりは松明を照し能々見るに樋口庄三郎に

第十七　松平勘十郎討死の事并薄田隼人勇戰の事

蜂須賀父子は穢多ヶ崎を乘破りて樋口本間の兩人を討取しかば斯と聞より後藤又兵衛基次八千餘騎を引具し急ぎ穢多ヶ崎へ打出砦を復さんと勝誇たる蜂須賀が勢に當らんと爲ければ蜂須賀も急に備へを立直し双方散々に戰ひけれ共後藤は蜂須賀勢はや砦を乘取し上なれば今は戰ふも益なしと其まゝ軍を收めて引退きける蜂須賀勢も後藤が武勇に怖れて追討もせず軍を引上たり扨蜂須賀阿波守は分捕の大筒二挺と樋口本間の首を住吉の陣に贈りしかば大御所は限りなく蜂須賀が武功を賞せられ當座の賜與等ありて厚く待遇され其上一柳監物にも感狀を與へられける蜂須賀は着陣してより間もなく城方大將の首二級と士卒七十四人程を討取けるゆゑ此度第一の高名と成しかば外諸將みな蜂須賀が手柄を羨やまぬ者無りけり爰に三州瀧脇の城主松平勘十郎源正勝は豫て鰻谷の手に向ひしが家老米田石見松平釆女等を招きて申しけるは抑々我家は德川親忠の三男松平源四郎五代の孫にして大御所とは類葉の緣ある家なるに蜂須賀は太閤の舊臣にして德川方に從ふは是表裏の武士なり然るに其蜂須賀先を越して天晴の手柄を爲に我手にて何の仕出したる事無とは口惜き事なり案ずるに鰻谷の砦は城方薄田隼人衛り居けるが此人は武勇を恃み人を侮る大將なれば士卒の面々必ず戰ふ心有まじ就ては今宵夜討して此砦を乘

堪らず太刀に手を掛拔んとするを本間付入脇腹突んと構へし鎗を取伸さんと爲ける所に穗先をバラリと切者あり是はと驚き見てあれば五右衛門なるに本間は二人を相手に上段下段と戰ふ内甚五兵衛が打込太刀先本間が肩に切込だり本間猶も勇を振ひけるに五右衛門又馬の兩足を薙て本間を引落し終に兩人にて本間仁兵衛を討取たり樋口は眼前に本間を討れ何かは以て躊躇べき淡路守正道朱塗の具足に鬼面の兜を着し萌黄純子の陣羽織を引掛青馬に梨子地の鞍置てゆらりと跨り大太刀を眞向にかざし二百餘人を左右に從へ大音に名乘げるは征夷大將軍田麿利仁の後胤樋口相摸守正久十代の孫同じく淡路守が最期のほどを見て汝が運盡て死する時の手本にせよと吶喊てかゝる有樣は天晴此砦の大將とぞ見えたりけり是を見て松原内匠鎗を持て渡り合二三合戰ひし内淡路守が傍より庄三郎進み出で家政に欺かれて味方に敗を取せし某し何條此耻を雪がざらんや父の馬前にて討死せんと聲高らかに呼はりつゝ太刀打振て出けるを松原は事共せず矢庭に突掛つて庄三郎を串殺す淡路守は馬前に我子を討れ大に怒り松原に打てかゝる其勢ひ猛虎の荒たる如くにて松原も接戰ひ兼既に危く見ゆる時に長門守至鎭はせ來り鎗を以て横合より淡路守が脇腹をぐさと突く突れ乍らに淡路守は其鎗手繰て至鎭を討んとするを長門守鎗を打捨終に淡路守を切て落し首を難なく揚たりけり斯て守將討れければ殘卒散々に落行終に蜂須賀穢多ヶ崎の砦を乘取勇にいさみて本陣へ注進にぞ及びける

水門より船を乗出して後陣の方へ打出たり松平勘十郎川中の難戰を扶んとすれば後に薄田あり是は夢かと計りに肝魂ひも身にそはず大敗と成ければ薄田は勢ひに乘て三十貫目の鐵の棒を車輪の如くに振廻し微塵に爲れと討て掛るを勘十郎今は一支にも及ばず旗本七十餘騎にて引所に薄田は葵の紋所を見て扨は徳川家の類葉ならん敵に取て不足なし迯逸散に馬を馳らせ敵將迯るな兼相一太刀參らせんと敦圉荒く飛かゝつて正勝が馬を尾筒へ掛て切付しに馬は頻りに跳上りて鞍壺に居堪ず正勝馬より眞逆まに落る處を薄田大喝一聲切込しかば哀むべし正勝は一打は打据られ血を吐てぞ死したりける主を討て其場を退ざる松平釆女米田石見梁田惣八成瀬五兵衛等十餘人思ひ〳〵に討死をぞ遂たりけり斯て殘兵共は何を力に戰ふべき皆々四方へ迯出しけり此時安藤對馬守三千五百餘騎にて討て出散々に戰ひしが松平勘十郎討れしと聞今は戰ふとも益なしと早々に軍勢を收めて引退く薄田隼人も再び關東の大軍後押へに來らん事を恐れて急に砦に引取ける是に依て城方は穢多ケ崎の砦を乘取れしと雖も薄田が勢徳川家の一類たる松平勘十郎を討取ける故又々勇みて見えにける

私しに曰く三河國瀧脇の城主松平勘十郎正勝の討死せし事本書の如く成しに難波戰記其他の諸書に此事見えざるは蓋し事繁多なるに因て脫條たる者ならん此時正勝は三州瀧脇に於て十萬石を領し居たれども討死の時子なき故に家斷絕せんとす然るに大御所深く正勝が忠死を

取我等が高名にせんはいかにと有ければ米田松平の兩人誠に義を見てせざるは勇なしとや此御思ひ立然る可く存じ入候何とて蜂須賀等が手柄を餘所に觀て居る事の候や然れ共薄田隼人は去關ヶ原の一戰にも大いに武勇を振ひし猛將なれば等閑の事にては叶ひ候まじと云ければ勘十郎は聞あへず呵々と打笑ひ假令薄田いか程武勇を振へばとて何程の事かあらん今宵一戰に乘取て見すべしと有ければ米田松平の兩人實にもと云て頓て其夜究竟の精兵を撰む其人々には松平釆女米田石見を始めとして成瀨五兵衛秋月兵藏横田新五郎梁田惣八民部權太夫溝口但馬堀田源五兵衛秋月新兵衛猪澤主水等を始めとして千八百餘人用意を整へ筏を川へ浮め我も〳〵と乘入ければ鰻谷の櫓より薄田が諸卒之を見て敵は夜討を掛ぞと靜まりかへつて居たりけり勘十郎は此體を見て敵には何の用意も有ざるぞ味方の勝利疑ひなしいざ攻寄よと下知すれば者共は筏を傳ひて砦の下に到り階子或は熊手飛口を櫓に打掛〳〵乘入んとする所に薄田は兼て用意の大木大石を一度に七八十切て落しければ何かは以て堪らんや先手に進みし三百餘人馬も筏も打碎かれ遠々川へ溺れければスハと言ひ樣塀の内より葵の旗を目掛け五百目筒五挺を一度にどッと打掛けしかば五十餘人の者瞬く間に黑煙と成て失にけり城方は此勢ひに猶も勇んで射下すに空箭とてはなかりけり川中には討るゝ者數知ず關東勢大いに亂れ騷ぐ處に思ひもよらぬ後より亂玉の馬印を眞先に押立鬨の聲を揚て千餘騎群り掛るに關東勢誰ならんと見てあれば薄田隼人兼相

れ共一旦君の御武功立せ給ひし上は自から父君の罪も消并に御養父日向守家成公への御孝道も立御當家の吉兆之に過たる事候まじ此儀呉々も然るべからんと申ければ忠房大に悦び彌々伯樂が淵を乘取べき事に決しける然るに此手は城方青木甲斐守鷲津の十人組平子主膳父子其勢八千餘騎にて要害嚴重に固めける故石川が軍勢僅五百七十餘人にては衆寡敵せざるは勿論敵は要害に備へたる事なれば容易き事にては味方却て敗を取事有んと忠房熟々案ずるに此手に攻かゝらば必定鱣谷の砦より薄田討て出べし薄田に後を圍まれなば折角淵を渡りて攻るとも敗走すべし然ば他の大名に薄田を喰留させ而して此攻口を充分討挫がんと扨其大名を甲乙と考ふるに蜂須賀長門守は若大將といひ天晴の者に之あれば此人を頼むこそ宜らんと夫より密に長門守が陣に行父忠隣の一伍一什を語り何卒此度高名を致し度よしを頼みければ至鎭大いに主殿頭が心底を感じ何如にも此事承知致したり薄田が援兵として向ふならば伏勢を以て是を敗り其元の高名を充分立させ申さんと答へしに主殿頭其深切を悅び我陣にぞ歸りける夫より又主殿頭は伯樂が淵の右備永井信濃守が陣に到りて某し明朝六ツ時に伯樂ケ淵へ軍を掛度候得ば御邊も同時に掛給ふては如何にと申しければ信濃守も實に道理と同意す其後又主殿頭九鬼長門守方へ到り某し此度伯樂ケ淵を攻取天晴高名を顯はし實父忠隣が存念を晴し度候へども手勢小人數にして心に任せず候間何卒船三艘精兵三百人貸給はれと申ければ長門守二言にも及ばず石川が請を聽入鐵

憐み給ひて松平紀伊守忠信の二男丹後守勝信を以て家督相續を命せらる然れども領地は一萬石を賜はる今の駿州庵原郡小嶋の領主松平丹後守の先祖なり

石川主殿頭軍議の事幷石川九鬼船借用の事

爰に關東の寄手の中に大久保相摸守忠隣は先達て大御所の勘氣を受て井伊掃部頭直孝に預けの身と成て合戰の場に出る事能はず忠隣此事を口惜く思へども是非なく拳を握りて居たりけり其二男忠房は聰明英智の者にて石川日向守家成（濃州大垣の城主にて六萬石を領す然るに此日向守家成慶長の初家督を一子右衛門大夫康道に讓り我身は隱居して在しが康道若年にして世を去しかば是非なく再勤して居たりけり）の養子となりて此時石川主殿頭とぞ名乘けり然れば此度合戰に及んで父日向守は國に殘り主殿頭忠房伯樂が淵に向ひけるに附家老近藤帶刀石川宮内平岩圖書その外諸謀士を集めて申しけるは某しが實父相摸守忠隣は德川家普代の功臣なれども林中の高木風に傷めらるゝ習ひ讒者の爲罪に誣され御勘氣を蒙り井伊が方の一室に籠られ此度の合戰にも出給ふ事叶はず嘸や口惜く思ひ暮し給ふらんに子たる某しとして父の心を知ずんば有べからず然ば此度人に勝りし手柄をして敵味方の目を覺させんと存ずるなり汝等如何にと然も勇ましく申しければ諸士等是を聞て誠に此義然るべし御父忠隣公には無實の難を請させ給ひけ

て見えにける此時主殿頭は思ひも寄ぬ裏手より討て出ければ城方青木民部少輔平子主膳同く平三郎大いに驚き前後の敵を支へ防ぎて戰ひける此時鱣谷の櫓より薄田隼人是を見て扨は伯樂ヶ淵の砦に軍始まりしと覺えたり大切の場乘取れては叶はじ援はずんば有べからずと三千五百餘人馬煙りを立て伯樂が淵に馳向ひ已に追付んと爲ける所に思ひも寄ぬ蘆原より卍の旗を颯と計りに翻へし五千餘騎眞先に蜂須賀長門守馬を跳らせ薄田なるか珍しや首を渡せと呼はれば隼人兼相大いに笑ひ汝は厚恩を忘れし人面獸心の蜂須賀よな汝に向ふ刃物なしイザ此棒受て成佛せよと俺まで大言を放し打て掛れば過言なりと長門守太刀拔そばめ兩將火花を散して戰ふたり然ども双方優ず劣らぬ勇將なればいつ果べしとも見えざりけり此時安藤對馬守薄田が蜂須賀に喰留られしと聞時こそ得たれと三千餘騎を引具し鱣谷の櫓に攻懸る是を見るより松平土佐守内山修理亮立田播磨守脇坂兵部少輔等も其勢合せて一萬六千餘騎同時に此手に攻かゝりければ砦の副將丹内六郎勇を振ふて防ぎけれども斯る大軍に攻立られ支へん樣も之無き内に寄手は犇々と攻掛矢倉〳〵に火を掛ければ瞬く内に炎々と燃上り今は叶はじと千五百餘人砦を捨て城中へ引退く此時茶臼山に大野修理亮治長六千餘人にて扣へたりしが鱣谷を援はんともせず火のかゝるを見乍ら早々城中へ逃入けるこそ見苦しけれ一方には薄田隼人は思ひもよらぬ蜂須賀勢に喰留られ心ならずも戰ふ處に我持口の櫓に火の手見えければ南無三寶と大いに駭き取て返さんとす

砲弓に至る迄何不足なき樣にして貸たりける石川主殿頭今は事全く整ひたりとて大いに悅び夫より押寄る手筈を定るに先我身は三百餘人にて此船に打乘傍に潛み居て永井と其外の精兵に嚴敷伯樂ヶ淵を攻立させ敵の不意に船を押寄て攻取んとの謀計なり此時主殿頭十七歲の若冠なりしに家老等の手も借ず我一存にして斯まで圖られし事は誠に聰明英智との譽容しからずと思はれける斯て十一月廿四日曉き方に石川宮内近藤帶刀兩人は精兵五百七十餘人を牽ゐ永井信濃守も同じく千八百餘人にて各々船に打乘攻掛る抑伯樂ヶ淵は水流三方より打込來り底も知れぬ深き淵にて渦卷浪は藍を染出しさしも凄じき川なる中へ此方は臆する色もなく櫓櫂を烈しく乘切〳〵鯨波を揚つゝ攻掛れば城方にても豫て期したる事なれば同じく鬨を合せて大筒小筒を放ち掛黑煙をぞ立たりける

第十八　石川主殿頭伯樂ゲ淵を乘取事幷關東勢鰻谷を攻る事

扨も石川主殿頭は蜂須賀に薄田を押へさせ永井が軍と我手勢とに軍を挑せ其身は九鬼長門守に借請し船に打乘伯樂ヶ淵の裏手に回り謀計を凝し居たりけり然るに永井信濃守は船を出して是非に乘入べしと急りけれども城兵狹間の陰より一度に顯れ拳下りに弓鐵砲を打掛ければ先に進みし者ども矢庭に百餘人打殺され寄付べき樣も有ざれば流石に勇みし永井石川が軍勢進みかね

間汝は城中に立歸り秀頼公の御先途を見屆け奉つるべしと淚を拭ひ申ければ平三郎莞爾と笑ひ何條此塲を捨て生存へ候はん御免候へ某し一足御先をいたし冥途の案內仕つらんと云より早く唯三騎簇り立たる關東勢の眞直中に割て入思ふが程に戰ふて敵三騎まで切て落し其後刀を啣へ馬より逆樣に落貫かれて死しにけり平子主膳眼前に倅の死を見て今は是までなり迚石川主殿頭が備へに脇目も振ず切て入縱橫十文字に馳通り敵兵五六騎討取終に石川が手にて討死す關東勢は勇み悅び討取首級を住吉へ贈り鬨を吻と揚げ引たりけり石川主殿頭は此度伯樂ケ淵を乘取剩さへ平子父子が首を得し事なれば高名拔群なりとて大御所大いに賞美し給ひ種々の賜與ありしかば父が面目まで施しけるこそ勇々しけれ

九鬼向井安宅丸を乘取事幷九鬼向井功を爭ふ事

然程に關東勢東の方に向ひし諸將穢多ケ崎伯樂ケ淵兩砦を攻取ければ西口に向ひける九鬼長門守向井將監小濱民部少輔千賀與八郎之を聞コハ殘念なり我々も手柄を爲んと云合けれども向ふ手先には要害船安宅丸(此船は往年太閤小田原の役の時造られし船にて長八百間有しとかや)を備へ船の外には水棚を結び其外番船數艘にて圍み北村次郎右衛門主將と爲て千二百餘人乘込大筒石火矢を透間もなく固めて要害嚴しくありければ關東方寄付事能はず種々に謀計を凝し有け

れば蜂須賀勢餘さじと取圍む薄田勇を振へども圍みを出る事能はず大いに苦戰する所に一手の城兵五百餘騎にて打て出蜂須賀勢を散々に切破り漸く薄田を救ひ出す是即ち後藤又兵衛基次なり兼相齒を嚙て殘念なり討死せんと數度取て返しけるを後藤基次大いに制し必ず短氣を出す事なかれ我等神崎の砦にて此事を聞と等しく來りしが斯遲滯するは是非もなき事どもなり犬死せんより再度の功こそあらまほしと說聞されて薄田も實もと思ひ夫より後藤と一手になりて又蜂須賀が備へに切入追散し伯樂が淵を援はんと急しに早是も敗しかば今は是非なく夫より平野口の矢倉に引退く此時伯樂ヶ淵には城方靑木民部少輔平子主膳同平三郞浪人組鷲津要人遠藤喜兵衛八田外記(小山田信茂の臣當時浪人)直江內膳本間仁右衛門(本間仁平の嫡子)の面々控へたりしが其內直江本間の兩將永井石川の軍中へ死物狂と成て馳入無二無三に働きければ流石の永井勢も大いに戰ひ疲れて引けるが城方の兵も一息繼んとする所に酒井雅樂頭本多修理丹羽勘介靑木甚藏西山外記闕信濃守三萬二千餘騎にて潮の湧が如く丸備へにして掛りければ城兵大いに苦戰し鍔を割切先をさゝらと爲して戰ふ所に城方鷲津要人八田外記は酒井が手に掛りて討死す靑木民部少輔は叶ふまじきを知り安道寺町口の味方に加はらんと淺手深手を負ながら七八騎にて引退きける又遠藤喜兵衛直江內膳は本多が手にて討死す平子主膳は淺傷を負乍ら七十五騎にて猶又働きしが悴平三郞に向ひ今にして死せざれば生存らへて恥を遺さん我は此所にて討死せん

乘と呼はつて八百餘人鐵砲打掛〳〵進みければ終に北村次郎右衛門叶ずして城内へ引取ける之に因て安宅丸は易々と關東方に乘取れ勝鬨揚て引上る向井は此体を見て仕損じたり一足早くんば九鬼に先は越れまじと後悔すれ共是非なく軍を止九鬼に向ひ高名は我謀計ゆゑなりと云ば長門守大いに怒り其謀計は知ず一番乘は某しなりと云しに向井是は慮外なり某し謀計を以て敵の船底に穴を穿水を注ぎしに因て敵敗軍せし事故我高名なりと申ければ元來短氣の長門守太刀に手を掛人の手柄を羨み忌はしき其一言今一度言て見よ用捨はせじと詰掛たりしに向井は呵々と打笑ひ汝に太刀有ば我も太刀有何ぞ然樣の權幕に恐んやと云ければ長門守彌々怒りて既に太刀を拔んとするに向井も我功を奪はれし事を殘念に思ひ倶に太刀を拔んとする時千賀小濱中に立入り双方を慰藉て兩雄爰に功を角んよりは先々住吉の御陣へ赴き是非の判決を得給へよと云れて兩人然ば住吉にいたり再び角ひを始めければ大御所聞召れ双方の手柄何れも感心せりされど互ひに爭ふは功を奪ふに似て宜しからずとて太刀一振づゝを兩將に賜はりければ長門守面目を施し我陣に歸りける將監は折角骨折し我武功を人に奪れ口惜く思ひ此賜物不足なりと云つゝ我陣に引退くは氣の毒なりし事どもなり然るに關東勢は數度の勝利を得し事なれば諸大將士卒に至るまで勇み悅び之に反へ城方にては諸將を始め數度の敗軍に及びし上安宅丸を奪れしに因て安からぬ事に思ひ如何はせんと評定いたしけれども差掛り謀計もなく思案に呉て居たりけり

る内向井將監は智謀深き大將なれば一工風を案じ出し我雜兵の中にて隨分利發なる者を撰み之を小船に乘せ苫を覆ひて中に酒肴を貯はへ城方の番船の邊りを賣鬻せけるに比しも十一月下旬の事なれば寒氣強く番船の者ども手を縮め足を包みて身動きもせず居し所へ酒賣船來りければ是屈竟の物なりとて飢人の食を望むが如く大いによろこび急ぎ呼寄酒を購ひ飮ければ之に因て寒氣を凌ぐ事大方ならず夫より每夜〳〵彼の船の來るを待程に成ければ向井將監は爲澄したりと此度は雜兵の中の究竟の者共百餘人を皆商人に打扮せ此船に續かせ小船に乘せて出しけるに番船の者共は斯る事とも知ずして十二月二日の夜寒風頻りに吹ければ今宵も例の酒賣來らんと伸首をして見廻し居る所へ案に違はず件の酒船來りければ番船の者共水柵を開き皆々立出て酒を購ひ求めける其隙に彼究竟の者共水柵の中へ潛と一艘を漕入番船の底に穴を數ヶ所鑿て又々元の所へ漕歸りぬ斯とも知らず番船の者共は寒氣に堪かね上戶下戶の差別なく酒を度外に飮前後も知ず臥にけり斯て屈竟の者共立歸りて此由を將監に告ければ將監大いに悅び急ぎ軍の用意を整へ亥の刻の頃はひ討出さんと爲ける所に九鬼九郎兵衛疾くも此事を知り急ぎ我陣に歸りて長門守に告ければ長門守直に用意を整へ向井に先達て八百餘人押出す長門守は元來船軍の達人なれば船を自由に漕回し鬨を作つて番船に切て掛れば番船の者共大いに駭きソレ大筒よ石火矢よと犇きけれども船底より水濕透て煙硝矢丸もしめりければ狼狽騷ぎける所へ九鬼長門守一番

な關東勢に攻落され其外口々を守り居る所の諸將も皆城中へ引退き候と承まはれば貴殿には如何爲るゝやと有ければ矢野作左衛門此由を聞て大いに怒り假令他の諸將守りを捨て引退けるとも作左衛門一人は討死こそすれ引退ざる覺悟に候と返答に及びければ織田有樂齋案に相違し是にては迚も城中へ引取事叶ふまじ如何はせんと思慮を廻し居たりしが軈て諸士に下知して池田が陣に切て入よと有ければ織田主水水瀨左司馬諫めてこは我君には物に狂ひ給ふか池田の方よりも未だ切て來らぬは全く此大河有ゆゑなり然るに其川へ此方より打入なば極寒の時と云水に浸さるれば味方の諸卒身體凍え思ふ樣に働く事能ふまじ其上敵は大軍味方は小勢なれば何に付ても利の有所見えざるなりとぞ申ける

評に曰是は有樂齋無謀の軍を起し池田へ仕掛ると見せ掛是を機にして城中へ歸る工風なりとぞ其臆病も又甚だしからずや

主水左司馬理を盡して諫めければ織田有樂齋呵々と打笑ひ汝等軍の虛實を知ずして妄りに舌を動す事勿れ唐土の韓信背水の陣とて川を背にして戰ひ勝を得しと言ふ事あり我今之に倣はんと欲するなり汝等早く用意し進んで高名を遂べしと申ければ餘義なく此旨夫々へ下知有しに諸勢之を聞大いに驚き日頃さへ堪がたき此寒風に川を渡り戰はん事如何にも情なき軍なりと迷惑に思ひけれ共大將の下知なれば詮方なく押寄んと川に跳り込ば池田勢是を見て那城兵川を渡るぞ

第十九　大野道犬中之島を逃る事并織田有樂齋臆病の事

偖も大坂方南手は穢多ヶ崎伯樂ヶ淵鰻谷の砦まで攻落され其上安宅丸の船さへ關東に奪はれ其勢ひ力なく見えければ久寶寺橋口安堂寺橋口平野町高麗橋口寺町橋口谷町口の固めも大いに氣力を失ひしを見て藤堂和泉守高虎井伊掃部頭直孝等他の高名を餘所に見る事やあると一萬餘騎久寶寺橋口安堂寺橋口に攻かゝれば此程の合戰に勇氣をくじかれし城方一戰にも及ばずして本町平野町口に引退き終に是も奪はれける此時中の嶋に控へし大野道犬大いに騷ぎ未敵の旗色も見ずして退きけるは卑怯至極の振舞なり東國勢は彌々勢ひ廣大なりしに北の手神崎川を守り居る織田源五郎入道有樂齋嫡子丹波守長政次男武藏守尙長南手の敗軍を聞て心悸れて居たる處に此手に向ふ備前岡山の城主武藏守利隆三萬五千餘騎にて兜の星を輝かし中陣に金の馬印蝶の紋の大旗小旗を前後に押立控へ又西手には因伯兩州の大守松平左衛門佐忠俊（是は大御所の御孫にて池田左衛門尉輝政が次男利隆が弟なり）其勢二萬七千餘騎詰掛在しに味方には矢野作左衛門荒井但馬守只五千餘騎之に當りて控たる事なれば是らを見るよりも彌々怖れて今は一日も對陣する事あたはず一刻も早く城中へ引取んと思へども矢野作左衛門が手前を恥て心ならずも對陣爲けるが臆病神に引立られ今は中々對陣叶はず矢野が方へ申遣しけるは城方の南手諸矢倉み

後藤又兵衛薄田隼人神崎接戰の事幷大御所茶臼山御陣替の事

矢野作左衛門は大いに血戰すれども池田勢大軍なれば中に取込散々に揉立しかば終に叶はずして亂軍の中に討れける此時荒井但馬守も松平の手に於て討死す依て池田武藏守松平左衛門佐は矢野荒井が首を刀に貫き此勢ひに城下までも押寄んと鬨を作り勢ひ込で進みける所に城方より後藤又兵衛基次半月の馬印に藤の丸の旗を押立山田幸右衛門後藤釆女同舍人同齋宮林源次郎森伊宗治等三千餘騎鬨を作つて打て出る池田勢是を見て後藤は名に負ふ武術軍學の達人なれば大將利隆を始め馬を返さんと爲る者も無控えたり後藤又兵衛大音にて珍しや武藏守利隆後藤を見忘れたるや又我を怖れて馬を返さゞるやと呼はりければ利隆鎗を取直し向はんとす斯と見て池田勢の中より大木惣太夫猪越左兵衛兩人鎗を取て向はんとすれば後藤基次少しも恐るゝ色なく大木を一鎗に突て落し猶も進みて來りし程に猪越恐れて引退くにぞ池田勢殘念なりと驀直に突入り後藤を討取んと戰ふ所に亂玉の馬印を押立曾根崎の森の那方より三千餘騎薄田隼人兼相眞先に進み忽ちに此處へ押來り双方戰ふ其横樣へ眞一文字に突て入ければ池田松平の兩將備へ亂れて見けるにぞ是に氣を得て右往左往に切て廻れば終に池田松平の兩勢大いに切崩され颯と引

軍法に夏は暑氣ゆゑ水を渡れば氣力を増冬は寒氣故水に入て氣力盡ると云り今迄味方の渡らぬは敵に川を渡させん爲なり然るに織田有樂齋渡けるこそ心地よき事なれ一人も洩さず打取と眞先に武藏守利隆左不利理助篠嶋將監乾主水池田隼人岩座小兵衛等を始として究竟の勢一萬三千餘騎大浪の寄るが如くに馳入ければ織田勢此勢ひを見て大いに慄へ皆々川の深みへ追込れ水に溺れて流るゝ者數を知ず池田勢は思ひのまゝに勝軍して分捕生捕山の如くに持歸り大いに勇みて引たりけり時に有樂齋川中まで馬を出しけるが此勢ひを見て慄ひ怖れ馬を返さんと犇きけるが忽ち馬より逆樣に落て流れしかば織田主水馬を泳がせ主人を助け引退さけり大將斯の如くなれば諸軍は猶更我も〳〵と城中さして引退くを武藏守血氣の大將なれば有樂齋何國へ遁るゝとも遁しは爲じと馬を川中へ泳がせ遁るゝを追て進みければ諸勢も續いて進む所に城方より矢野作左衛門荒井但馬守追來り池田を支へけるが此隙に松平左衛門佐忠俊スハヤ織田方川を渡りたるぞ此方よりも川を渡して攻寄よと逸散に川を渡せば矢野は織田を援はんと出たれば跡には手に立精兵も無に松平左衛門佐忠俊終に矢野が本陣に火を掛たり矢野作左衛門後には鬨の聲夥多しく其上火の手上りければ今は叶はじと荒井但馬守に松平勢を防がせ必死と成て戰ひける

時越前福井より寒鱈を献上す

因に曰寒鱈献上の事は其後恆例となりて年々江戸へ贈る事と相成る抑此寒鱈と云は越前福井にて取たる鱈を網より揚ると其儘奉書紙にて卷直に江戸表へ贈に恰も生てある如く尾をも搖すかと思はるゝ程なりしとぞ每年越前より大雪の中を直走りにして差贈られたるが其後明和八年の頃道中にて雪の爲偸兒に奪はれし事有に因て夫よりは雪中の差送りは止たりとかや

寒鱈獻上の使者は急ぎ茶臼山に抵り主命の趣き披露に及びければ大御所殊の外歡喜給ひ其夜諸將に接伴を命ぜられ此度の勝軍を祝されしとぞ

第二十　後藤基次眞田が心を圖る事幷眞田諸將に心中を明す事

然程に關東勢は城方の南手を攻落し大いに勇み大御所にも既に住吉より茶臼山に本陣を移されければ城中の諸大將之を聞斯ては成じと大野織田等の面々種々評定し此上は城中を手堅く固め持口を嚴重にして出戰ふ事なく其中關東より福嶋黑田等の攻登つて反應するを待より外無るべしと眉を顰めて居たる所へ笹御殿出丸より幸村同大助の兩人登城しければ皆々大いに悅び良策も有べしと囁きて居たる中幸村大助定めの坐に着先秀頼公淀君へ寒冷の挨拶し其外古老七組諸將等へも同樣の禮を述扨幸村口を開き此度味方の敗軍は何としたる事にて候やと邊を見廻し

退くを何處迄もと跡を慕ふて後藤薄田種々に切崩せば何かは以てたまらん池田松平の軍勢元の神崎に引退かんとて淵瀬を厭ふ隙もなく我も〳〵と馬を乘入ければ溺れ死する者數を知ず此時池田武藏守は我軍勢を引纏め靜々川を渡らんとて旗本の備へを立直し猶しも後藤薄田と戰ひつゝ其後川をぞ渡りける薄田は猶も棒追取て武藏守が川を越んと爲す所に打て出んと急りしを後藤制して是程の大將を敢なく討んは惜むべし此場は暫時控へられよと慰め諭して我軍勢を引纏め後藤薄田城中に歸る所に織田有樂齋父子は織田主水水瀨左司馬等に敗卒を集させ歸城せんとするに行逢たり基次急に聲掛て何故に今朝は此手より敗軍せられしやと尋ねければ有樂齋返答に旛と差迫り面目なげに城中へ狐鼠〳〵と入にけり後藤等は只一心に力を盡し必死となりて戰ひけれども城方の諸將關東の大軍に氣を呑れ戰はぬ先に逃足となり矢倉持口を攻落さるゝこそ誠に歎はしき事共なり扨も關東勢は城方南手悉皆く攻落しければ松平土佐守言上して大御所住吉の御本陣は大坂の地に移され然るべしと有しかばいか樣遠路に陣して何角の注進遲滯せんより大坂に移りし方宜しからんとて地を撰み本陣を移すべしと色々評定ありける所に一心寺の後方なる茶臼山こそ究竟の御場所ならんと言上する者有ければ即ち此地を本陣の場所と定められ名を勝山と更め彌々十二月に住吉より茶臼山にぞ移られける大坂表に於て高名爲したる諸大名には爰に來りて勝軍を賀し新將軍秀忠公にも松平越後守を使者として賀を申上られたり此

何に候やと有ければ後藤は聲を微めされば某しも此事甚はだ訝しく思ひしゆゑ只今幸村の方へ參らんと思ふ所に候されど大凡打案じ候に城中にある小幡勘兵衛は正しく關東方へ内通なす者ゆゑ眞田は是に氣を留め深く計りし事とは思ひ候へども何にもせよ御同道にて出丸に赴むかんと申ければ木村是を聞小幡勘兵衛は然樣の者に之有ば何故殺し給はざるや某しも豫て彼を胡亂者と思へども確と分らざるに因り打捨置たれども今は彌々斯と知りたれば猶豫はせまじ此後の災はひばらしに打果さんと云ければ後藤笑ふて彼を今迄殺さゞるは幸村が深き智計に候へば我々三人共に同道して出丸に到り申さんとて夫より三人連立幸村が許に到りければ幸村大に悦び自ら閑室に伴ひ種々に饗應て後備云樣諸君には能も我胸中を察して來られしぞ斯忠良の其許達在せしゆゑ今日城中にて某し日頃の存念を申し出し候なりと申ければ後藤之を聞今日貴殿城中にて茶臼山を攻んと仰せられしは小幡勘兵衛に是を告知せ關東勢に油斷をさせ別に良計を運らさんとの事なるべしと思へ共委細を承知致し度只今三人參りたりと申せば幸村手を拍て大いに感じ誠に其許等なればこそ我胸中を能も洞察たれ如何にも御察しの通りに候と答へければ基次又問樣然らば別の良計とはいかなる御工風に候や幸村答て是外儀に非ず今宵夜討をかけんと存ずるなり基次大いに駭き此度味方諸手の敗軍にて關東方大いに勢ひ付てあり殊に度々夜討に慣たれば關東方にも其用意あるべし然るに今宵夜討とは近頃以て其意を得ず某し等が心中大いに

苦り切て申ければ古老を始め敗北せし諸大將面目なき體にて何の應答も無れば幸村言葉を正し都て軍の習ひにて勝敗は元より圖るべからざる者なれば敗せしとて軍の下手と云ふにも非ず百敗一勝とて終に勝を全くの勝と致すなり彼の碁局を見給へ始に幾許か敗兆の見えし方必至の精力を盡す時は局を了るに及びて勝を取事之有り是に反して始に略利を得たる方は氣の緩にて遂に負る事儘之有り然ば此度の合戰に味方敗兆あればとて譬ば斯の如く必死となれば果して勝利無事有可らず夫は偖置某しも既に一計を案じ置候へば明後日を以て城中より軍を發し茶臼山へ此方より攻掛り候はゞ必ず家康が首級を見る事之有べしと何の苦もなく申ければ諸將之に力を得て何にもせよ御邊然る可く圖り給はれと云ながらも皆々心中には今勝誇たる關東勢に此方より軍を仕向けん事危ふかるべき事なりと呆れ果てぞ居たりけり斯て眞田父子は悠然として城中を出出丸に歸りければ跡にて諸將は幸村の一言を彼是と評議し幸村は智謀の將なれば仔細こそ有んなれども餘りに取ても付ぬ事を申者かな抔と呟やき居るも道理幸村が心中にては小幡勘兵衛に此由を聞せ關東へ有のまゝを知させて其反をかゝんと思ひし計略なればなり後藤基次は然にても幸村が計略心許無と思ひ彼が方に到り心中を尋ねんと已に立出んとする處へ長曾我部元親木村長門守重成來りて元親の申けるは如何に後藤殿今日の眞田が一言を其許には何と思さるゝや某し之を尋ねたく彼が方へ參らんと思ふ所に木村殿尋ね來られし故兩人連にて參り候如

第廿一　眞田治幸父に諫言の事幷幸村一人茶臼山へ忍ぶ事

斯て後藤長曾我部木村等眞田に別れ歸りけれども心中何とも穩かならず眞田いか成働きを以て關東の大軍の中に入大御所を爲留んとは爲や心元無幸村が謀計かなと寢食をも忘れて案じ居ける拐も幸村は君の爲に一命を捨家康を討取んとて悴大助を招き申けるは我今宵關東の陣中に打入思ふ敵を討取り潔よく討死せんと欲する間汝は跡に殘り秀頼公に仕へ忠義を盡すべし必ず我遺命に背く事なかれと有しに治幸涙を流しコハ情なき仰を承はる者かな不肖父上の詞に背くには候はねども千金にも換がたき大事の御身を以て鐵壁の如く取圍みたる天下の諸將の集まりし中へ一人向ひ給はん事是迄斯る例し有を聞ず御不覺の事にては候はずやと諫めけるに幸村冷笑ひ是汝が知所に非ず必ず心を痛むる事なかれとて又宍山望月根津筧相木等をも呼出し我若し討死するあらば此後治幸を我と思ひ隨分忠義を盡すべしと云ければ皆々叩頭して願くは某し等も君と共に御供申べしと云ければ幸村氣色を變一人も供に連る事能ふまじ今は時刻移れりとて幸村は直に雜兵の鎧投かけ陣笠に顏を深く隱し腰には村正の大太刀を佩き手には宿砂筒を提げ徐々と立出けるに大助は悲み歎き然にても父君には我言を聽入給はねこそ是非もなしと涙乍らに出丸に殘りて居たりける斯て幸村は松屋町通り南へと足に任せて急ぎ行所に向ふより本多土

相違せりと申ければ幸村問て曰其許達は如何なる夜討と思ひ給ふぞ某しの申す夜討とは人數を以て寄るに非ず此幸村一人參る夜討なりと申ければ長曾我部木村後藤三人大いに駭き是は物に狂ひ給ふや假令其許勇猛にもせよ關東方へ一人夜討に向はんとは飛で火に入夏の虫只死を招くに異ならず如何なれば斯虚言を述給ふやと聞て幸村涙を流し某し決して虚言を言ず一人夜討に出んとするは是外ならず茶臼山に忍び入り大御所を目掛討取んと思ふなり然ば某しは所詮生ては歸らるまじ大御所だに討取ば日頃の存念是にて足ぬる事なれば我死せし上は悴大助を某しと思はれ目を懸て給はれよ然れども若も此事仕損じたる其時は城中に立歸らん事いと易しと然も悠然として申ければ後藤等三人熟々此事を聞其元には是迄虚言を云はれし事無れば然程に仰せらるゝ上は定めて仕損じは爲らるまじ然にても驚き入し御胸中かなと三人暫時涙にくれて居たりしに幸村は頓て長さ一尺許りの種ケ嶋といふ鐵砲を取出し是は宿砂筒とて兼て我父の秘藏せられし鐵砲にて火繩なくして打事の自由なる鐵砲に候と三人に示しければ何れも涙を流して忠義なる哉眞田義なる哉幸村然らば其鐵砲を以て家康を討取り御身も是にて死する御所存なるらんと悄々として申ければ幸村實に爾なり然れば是が今生の永訣なりとて夫より酒を出し互に盃盞を廻しけるに餘所の見る目も物すさまじく有けれども幸村は少しも愁ふる氣色なく三人諸共申の刻まで酒宴をなして時刻移りしとて三將は別れを告涙ながらに歸りけり

大御所危難廊下鐵砲の事并幸村御陣を遁るゝ事

眞田左衛門佐幸村は既に大御所の間近に忍び入今や大御所の來らんかと心を碎き待居たりし所に大御所俄に圊房へ立給ひ大久保彦左衛門兼松又八小栗大六郎安藤帶刀成瀬隼人前後に附從ひて已に廊下の所まで來掛り給ひしかば幸村得たりと椽の下より鐵砲をソッと差向けアハヤ一撃と思ひけれども大勢の足音にて撃放す事能はず餘儀なく復椽の下へ逼込大御所の復り給ふ廊下の下に屈み居る斯とは知ず大御所は圊房を出給ひ手を清めんと爲ければ成瀬隼人銀の湯桶にて盥水を注ぎ安藤帶刀手巾を差上大久保傍に控へ居し處思ひもよらぬ廊下の下より一聲の鐵砲鳴渡り其丸大御所の左の耳元を掠ければ何かは堪ん大御所はアッと云て倒れ給へば附從ふ面々惶て驚き夫曲者なるぞ搦め取と呼はり〳〵君を圍みて奥へ入ば大小名も是はと驚き釜の湯の沸か如く上を下へと騷動す大御所は其まゝ一間に打臥れ半井路庵駈着て氣付を差上猶能容體を窺ふに差たる重傷には在さねど思ひも寄ぬ事故氣を失ひ給ふなれば皆々種々に介抱いたしける斯て陣中には曲者を搦め捕んと角々隈々まで嚴しく穿鑿有ども曲者と見ゆる者も無其内に幸村逃れ出んと爲所に外の雜兵們皆一同に詮議の爲押込られし其内に幸村も同じく見咎められ終に雜兵部屋に押込られければ幸村も今は籠中の鳥の如く遁るゝ術もなかりける幸村は日頃の存念を遂

佐守が下人挑灯を携へ用事有氣に鰻谷の方へ奔り行しかば幸村天の與へと悅んで前後を顧み宿砂筒を取出し狙ひ澤してズドンと放てば過たず下人の胴腹打貫たり下人は耐らず仰向に反り空を摑んで悶えしかば幸村はツト傍へより挑灯吹消し懷中の割符を奪取り逸足早く立退夫より生玉の方へ赴き伊達政宗が陣に着たりけり此方を見れば燎火を焚居けるに幸村立寄りいかに方々扨々寒き事には非ずや某し鰻谷へ用事有て參りしに道にて挑灯を吹消し難儀に候間少し火に煖りたし許し給へと云ながら手をさし伸して暫時爰に休息し夫より挑灯へ火を點し挨拶なして立退んとするを役人共見咎めければ是は本多の使にて只今歸り道にて候といふに役人共も挑灯に葵の紋有けるゆゑ難なく爰を通しける幸村は夫より井伊藤堂の陣々を其通りにして押通り軈て一心寺の門前に到り直に門內へ入んとすれば陣屋の役人此夜は加納江遠守山村丹下にて有けるが幸村を見るより何所へ參る者ぞと咎むれば幸村は例の手にて是は本多が內の者にて候と云ければ然らば割符ありやと問しに是に候と奪ひ取し割符を出して預け置き終に爰を易々と通り拔け茶臼山の本陣へ忍び入彼方此方と彷徨遂に奥の方へと忍び入けるが知者更になかりける然るに其夜は大御所越前の寒鱈を賞翫あらん迚諸將を招き此度の勝軍を祝しなどせられて酒宴を催され頻に盃を傾け居給ふ時俄に圊房へ赴かんと爲られければ大久保成瀨安藤等公に尾して附從ひ來しこそ誠に危き事どもなれ

に登りて下を見れば一丈許にして芝の上に大勢篝を焚て居ければ南無三寶爰も越る事ならざるかと暫時猶豫して在しが軈て太刀をするりと抜放し動とばかりに飛越れば篝を焚て居し者思ひ寄ざる事なるに慌忙狼狽ソレ曲者よと云所を何の苦もなく五六人切伏跡は八方へ駈散して難なく出丸に遁れ歸りけるは危かりし事どもなり

第廿二　安藤右治衛門陣廻りの事幷佐竹勢鴫野表出張の事

然程に茶臼山の方にては上を下へと騒動して種々と曲者を探すと雖も怪しき者は更になく探ねあぐみて居たる處へ廊下の下より異しき兵器を取來つて是を差出しけるに此時大御所は稍正氣づかれ在せしかば件の品を御覧有に短き鐵砲なるに因て急ぎ眞田を召れいかに其方此品を見覺え有りやと尋ね給ひければ眞田これを見て大いに駭き是は某しが父安房守昌幸が製作し宿砂筒と申て火繩なくして火の發し候鐵砲なりシテ此品御廊下の下に之有候上は正敷幸村夜前此下に忍入しに相違なしと身を慄はして申ければ大御所も殊に驚かれ然にても幸村には斯まで我を害せんと謀るやと心中大いに憎み給ひしとぞ扨も眞田幸村は辛うじて茶臼山の危難を免れ出丸に歸りけるに治幸始め皆々蘇生したる人に逢心地して悦ばぬはなかりけり木村後藤長曾我部の面々幸村が安泰を賀し偖始終の事ども尋ねしに幸村申けるは扨も大御所の高運なるには愕き入た

せんとて心を込し謀計も關東の運強くして又々仕損じたるを口惜やと切歯を爲せども寔に是非なき事なれば如何にもして此場を遁れ城中に立歸りて再び思慮を運らさんと思へども看守の役人嚴重なれば遁れ出べき樣も無如何はせんと考へ居し内皆合詞を以て出るとの事耳に入けれども其合詞も知ざりしかば之を聞出さん事肝要ならんと聽て幸村一人の者に向ひ其許の向ふに居る人は名は何と云や彼の者答へて彼は彌六と云なりと云しかば幸村悦び直に此彌六の方に近寄やれ珍らしや彌六殿其後久く逢ざりしが堅固なるやと云ば深夜と云ひ點燈も無れば彌六爾のたまふは儀兵衛殿なるか幸村可笑さを忍び實に儀兵衛なりと狎々しくなりて物語りしければ彌六幸村に向ひ其方今宵の騷動を聞たるか幸村此騷動にて我々は此中へ押込れたれば委しき故しらず然るに情なき事てそ出來たれ餘りに急ぎて合言葉を忘れたり彌六駭き扨々一大事の事を忘れし者かな夫を知ざれば汝が身の上に難儀掛らん我々は本多家の家來なれば鶴といふ合言葉なれ共其許は關山城守の家來なれば合言葉は知ずと然も氣の毒なる體にて答へければ幸村是を聞て心中に點頭此場を去て待居ける内に小門を開き門前には皆鑓長刀を構へ最嚴重に固めて丹羽組淺野組松平組などゝ段々に呼出し程なく本多組と呼しかば幸村鶴と答へしに因て難なく其場を遁れ出たり斯て此場は遁れたれども外の陣門又々嚴く固て塀際には松明篝を焚匆々浮暇とは越る事能はざれば幸村再び困り如何がはせんと案ずる所に南手の塀に人無を幸ひ是を越んと塀

守が足輕共折から堤の下に篝を焚て手足を煖め居たりしが急に驚き逃込んと爲ける所に鐵砲を一時に打放され七八十人一度に撃れて痿む所へ梅津半右衛門大塚九郎兵衛安田定九郎土屋彌五郎畑一平佐竹内匠等三千餘人馬を並べて駈入たれば何條以て堪んや矢野が備の先手は散々に成て逃出す其中より增田善五郎乾五助と云兩人の者三百餘人にて吻とかへし爰を專途と戰へども梅津が勢ひ猛虎の如く鎗を捻て突て掛るに五助は必死を極めて戰ふ內梅津怒て鎗を取直すと見えしが矢庭に五助を馬より下へ一刺に突落す增田は是を見て大太刀を打振梅津に向ふ所へ安田定九郎片鎌鎗を取て馬を乘出し增田に突てかゝれば增田は太刀を片手に打振双方暫時打合せしが梅津は增田が後に廻りてえいやと一聲突ければ增田は腰のあたりを突ぬかれ馬より落んとする所を安田得たりと太刀に手を掛切てかゝる切れて萎む增田を引寄我鞍坪に押當首をチヨキンと掻切たり是に依て矢野が勢大いに破れ本陣指て雪頽掛れば和泉守大いに怒りいでや佐竹を切破りて捨んずとて自身眞先に進み三星の旗を押立矢野和泉守これに在佐竹義宣何許に在や速かに出合我武勇の程を試みよやと呼はり〳〵大長刀を水車の如く振廻し千五百餘人丸備にて討て出れば佐竹勢是を見るより大いに勇みスハ矢野を討取と犇き〳〵三千餘騎面もふらず向ひければ和泉守も勇を顯し長刀を打振て佐竹勢を切散し人なき所を行如く右往左往に駈散す是に因て佐竹勢も少し淡て見えけるこそ凄じかりし事共なれ

り幸村幼年より鐵砲を試むるに途に打損じたる事を知ず夜前も正しく手ごたへ有ば撃損は之無はずなるに斯樣〱の次第にて有しと語りしかば皆々額に汗を流し扨も怖ろしき目に逢れたる事かなと暫時顏見合て居たりけり斯て幸村は登城して此旨言上いたしければ並居し面々初めて眞田が心中を察し感じ入けるとなり爰にまた安藤治右衛門は大御所の命を受陣廻り致けるに鳴野口佐竹右京大夫義宣が陣に至り尋けるに此時佐竹は軍を爲ずして固を嚴重に守り居たりけるが心の中に思ひけるは此度某し此手に向ひ何の功もなく在は面目なき事共なり殊に我は關ヶ原合戰の時石田方に與したる事なれば今度の合戰には人に劣らぬ功を顯し末代までも高名を遺さん者とて軍師澁江内膳に命じて敵方矢野和泉守飯田左馬之助同靭負が八千餘騎にて控へ居る樣子を探らせしに澁江早速に立出とくと見積り立歸りて申けるは明朝此方より朝がけの軍をいだし候て然る可らんと有所なるに因て義宣安藤治右衛門に向ひ某し儀明日合戰致し度候此儀如何に候やと申ければ安藤暫時打案じて誠に合戰の事は大御所よりの御下知を待可き所なれども此度の合戰は治右衛門君に成代て許し申べし其代り必ず勝利有て城方の大將分の首級を見せられよと勵をつけて申ければ義宣大いに悦び直に軍の用意をなし明日遲しと待かけたり安藤は茶臼山へ歸り佐竹軍を望み候につき捨物にして私しに許し歸りたりと申ければ大御所は却て安藤を賞られける斯て翌朝に成ければ佐竹が軍勢共急に打立卯の上刻頃よりして押寄ければ矢野和泉

屏風倒しに倒れければ飯田忽ち地に落たり是ぞ飯田が運の盡にや右の足を鞍に敷れ身動きもならず苦しみ居ければ梅津は得たりと首搔切て立上り飯田左馬之助を討取たりしは梅津半右衛門なりと聲高かに呼はりて引退んとする所に飯田靭負太刀さし翳して父の敵遁さじと打てかゝるを梅津は合點と後ふり返つて戰ふ所に一人の者進み出其許は其首携へ早々本陣に持行て大將の御感に預れよ我は此敵討取て跡より追付參らんと云れて梅津は靭負を振捨本陣指て急ぎければ靭負は大に怒り汝如何成ば父の敵を討んと爲を邪魔するぞ彼者呵々と打笑ひ假令父の仇にもせよ當り難き敵に當ることそ可咲けれ先我手並を見て其後梅津に向ふべしと大太刀を打振り切て掛れば此方も透さず渡り合三十餘合戰ひしに如何はしけん靭負が太刀は鍔元よりポッキと折ければ叶はじと急ぎ身を引所を彼者一刀に切て落し首を取てぞ引退く是に依て大坂方は飯田父子討れ殘卒大いに切崩されしかば右往左往に敗走す矢野和泉守は眼前に飯田父子を討れ今は猶豫なり難しと又も大いに戰ひけれども既に戰ひ屈して見えにける斯と見るより備前嶋の宮部熊太郎井上五右衛門京橋口の渡邊内藏之助大野主馬之助矢野を援はんと迚五千餘騎圓を作つて鴫野の方に進み來りければ關東勢の内より本多出雲守忠朝豫て待設けたる三千餘騎にて討て出十六貫目の鐵の棒を眞向に翳て宮部熊太郎の手を何の苦もなく喰留猛虎の如くに薙廻りければ矢庭に十三騎打殺されて右往左往になりければ井上五右衛門百餘騎にて本多に向ふ本多又も薙廻れば是

飯田左馬之助父子討死の事幷本多出雲守勇戰の事

佐竹右京大夫義宣先手を以て敵に當らせたりしに城方大いに敗軍してければ是に氣を得て義宣一萬二千餘人の旗本を以て本陣を放れて出張し開き扇の大旗銀の唐人笠の馬印を眞先に立釆配取て下知しけるは三星の旗を進めて味方に向ふ大將は城方矢野と見えたりはや〳〵彼奴が首を取て我に見せよ進めや者共と下知すれば澁江内膳正木大膳小山勘兵衛佐竹城之介平元儀助小野木才若など一騎當千と云れし者共我も〳〵と打出ける矢野和泉守は勇を奮つて戰ふと雖も敵は目に餘る大軍其上新手を入替〳〵攻立ける程に和泉守既に危く見えければ二の手に扣へし飯田左馬之介同靭負二千餘騎にて打て出和泉守殿暫く息を休められよ某し入代りて此手を防ぎ候べし某し又危き事あらば援ひ給へイデ然らばと云つゝ馬を乘出せば和泉守も其意に從ひ飯田に讓り控へたり飯田は新手の事なれば眞先に鎗を取て進み矢庭に三騎突て落し七八度も揉崩しければ佐竹勢も飯田が勵き振舞に攻立られ旗色白けて見えける所に海津半右衛門鎗を捻つて飯田に向ふ左馬之助心得たりと同く鎗をおつ取て發止〳〵と打合しに飯田は荒馬に乘たれば思ふ樣に鎗の働き自由ならず氣を焦ち頻りに鐙を蹴立近く寄んと爲ければ梅津は鎗を取直し急に驅寄せ丁と突ば馬は跳りて止ざるにぞ飯田は之を乘鎭めんとする所を梅津鎗を捨て組んと掛るに馬は

形の冑を着し金作りの太刀に三間柄の大身の鎗を馬の平首に引そへ紅の厚房かけたる信州駒に跨り眞先に定紋の大旗瓢箪の馬印を旭日に輝かせて立出れば智徳院源十郎野根九郎兵衛半田市兵衛淺野治兵衛等我も〳〵と進みける重成は佐竹が備に近づくと齊しく直に突て入ければ佐竹勢是を見て木村が仕掛たるぞソレ討取といふ儘に高名を望む面々我討取んと木村に近寄其中にも梅津半右衛門眞先に鎗を捻て向ひければ木村は之を事ともせず同じく鎗を合せて戰ひしが如何はしけん梅津は鎗を打落され二三間退く所を木村得たりと鎗を取直し梅津が馬の胴中をグサと突けるにぞ馬は頻りに跳上り梅津堪らず轉り落るを重成付入串貫かんと爲ける處に大塚九郎兵衛馳來つて梅津を圍ひ遮りしかば木村怒て大塚と馬を交へ散々に戰ふ中に大塚馬を返して引退くにぞ木村が郎等是に氣を得てスハヤ進めと云程に智徳院半田野根淺野牟禮等我も〳〵と勇を奮つて佐竹勢を切崩す中にも智徳院源十郎は八尺の樫の棒を打振り將士雜兵の嫌ひなく片手薙にして打て廻れば是に向ふ者皆打倒されさしもの佐竹勢少し痿みて見えければ木村勢は猶も勇を奮つて戰ふ程に佐竹が先手は大いに崩れて右往左往に成にけり木村長門守重成は佐竹が先手を難なく切崩して屹度向ふを見けるに佐竹右京大夫義宣本陣に在て開き扇の旗に唐人笠の馬印を押立控へければ重成馬上より敵に向ひて　宇多天皇の後胤木村長門守重成今年廿二歳の初陣なり夫に控へしは　清和天皇の後胤佐竹右京大夫義宣殿と覺えたり互に同じ源氏の苗裔相手

も同じく切崩され大野が備になだれかゝる本多勢は之を見て眞先に七里鐵九郎梶金平本多源兵衛伊崎五兵衛などいふ究竟の勇士我も〳〵と進みければ本多出雲守愈々勇氣彌増て當り難く成けるにぞ今は大野井上等の勢も戰ふ氣力更に無鳴野川の泥中へ追込れ散々になり城中指して引退くこそ見苦しけれ此軍散じて後渡邊を憎む者や爲たりけん鳴野川に

渡邊は汚名を鳴野川水へ流して敵に目もくらの助

第廿二　矢野和泉守戰死の事幷木村重成鳴野表武勇の事

偖も矢野和泉守は漸々三百餘騎にて佐竹が軍勢の中へ割て入要を先途と戰ひしが今は遁れぬ所と思ひ大音に呼はれけるは武内の宿禰が後胤矢野和泉守が最期の戰ひ見知り置て手本にせよと縱横無盡に薙立回り驍て馬上に腹搔切逆樣に落て失にけり郎等等廿四人は主の最期に同じく刺違へてぞ死したりける是を見て佐竹勢は勝鯨波を揚飯田父子幷びに矢野が首を茶臼山へ贈りて實驗に備へけり斯て本多勢は元の陣に退きけれども佐竹方は陣を引ず此勢ひに乘て京橋口までも攻立んと爲し既に軍勢を再び進めけるに京橋口を固めたるは木村長門守重成當年廿二歲の壯丁にして初陣の事なれば武勇の程を現し敵味方の目を覺させんと控へたりしかばスハと云より他の勢を交へず僅の手勢五百人陣を開きて討出ける重成が其日の打扮は四目の紋打たる鎧に鍬

候事も畢竟は君の上覧ありて御感に預らんと思へばこそ軍も仕つれ然るに上覧なくては爭で命を盡す程の事有べきやと道犬を尻目に掛つゝ申ければ大野は赤面して再び何の言葉もなく居たりけり秀頼公には後藤が再びの言葉に然ば見物せんとて伏見矢倉に遠目鏡四挺をかけさせ淀殿大野織田等を引連れ頓て矢倉に赴かれ鴫野の方を見給ふに此時長門守重成佐竹勢を討破らんとて打出たる折柄なれば佐竹勢の中より正木大膳康久二尺許りの斧を片手に提さげ馬を跳らせ木村に向ひ切てかゝるに重成是を見るより莞爾と笑ひ健氣にも打て出しは聞及ぶ正木殿にて候か來り候へ相手は厭はずイザ戰はんと馬を寄れば正木は聞ゆる大力なるゆゑ斧を眞向に振翳し拜み打に切て掛れば木村は鎗の石突を以て大膳が斧を支へつゝ徐々進んで軈て一足引よと見えしに忽ち鎗を文なして穗先を正木の胸膈に差付ければ大膳透さず飛退り双方秘術を盡して戰ひし内重成佯り引んとするを大膳誠と思ひ込斧を翳て追かくる重成得たりと急に返し大膳が眼を目がけ突掛れば過またず大膳眼を突れて馬より撞と落けるにぞ重成折重つて首を唯然切取ける夫より木村は少しく息を休んと金の日章の扇を開き風を入て居る所に關東勢の内にて三勘兵衛と云れし其一人佐竹が勇士小山勘兵衛と云ふ者十貫目の鐵の棒を引提顯はれ來つて關東三勘兵衛の一人小山勘兵衛を知りたるか長門守いでや我等が勇氣の程を知り給へと呼はりければ長門守之を聞て汝等如き鼠輩爭でか重成に敵せんやと聲を掛て突て懸るに勘兵衛は怒を發し鐵の棒を

と成て恥しからずイザ來りて我と戰ひ我が勇の程を試みよやと莞爾と笑ふて呼はりければ義宣は物に堪へぬ大將なれば重成に聲掛られて討て出んと進みけるを澁江押へて止めけるにぞ義宣餘儀なく諸卒に命じて木村を討取せんとする所に上杉彈正大弼景勝が軍勢佐竹が高名を餘所に見居る事やあると直江萩原本庄岡尾等の面々續ては宮部善右衛門梅津小太郎我も〱と討て出ければ佐竹勢は是を見て愈々猛威を奮ひつゝ木村を中に取圍み餘さしとぞ戰ひける然ども木村は少しも屈せず鎗を捻て八方へ當りけるこそ目覺しけれ此時城中には秀頼公淀君諸共に軍議の事は大野織田等に打任せ酒宴に溺れて在ければ後藤又兵衛基次秀頼公の御前に出で申けるは只今木村長門守鴫野に於て佐竹と合戰最中に候へば君には伏見矢倉より御覽遊ばされ候べしと有ければ秀頼公如何にも重成が働きを見物せんとて既に立出給はんとする所を大野道犬制し止め其儀は御無用然るべし大切の御身にて輕々數出給ふ事危ふき事に候敵方にて若も君の御覽ある事を覺り大筒を打掛んも圖り難ければ此義は呉々も御無用なりと諫めけるこそ愚なれ

重成正木小山を討取事并後藤基次今福出張の事

後藤又兵衛基次は秀頼公に戰塲御覽の事を勸めけるに大野が支へけるを大いに怒りて申けるは天下の武將たる御身にして斯臆病なる御事其意を得ざる事に候諸臣共身命を擲ち武勇を顯はし

見て直江の備へを引替後藤を討取んと控たり此時後藤は木村方へ使を馳せ今日秀頼公矢倉にて軍を御覧有に因て後藤基次加勢に來りたり早々引取息を休め給へ基次代りて戰ひ候はんと言送りければ木村使者に向ひ秀頼公御覧とわらば重成猶も勇戰を望み候なり就ては上杉勢は某し乾度切崩すべき間後藤殿には我窘め置し佐竹勢に向ひ給はれよ重成を案じらるゝ事勿れと返答しけるに後藤は斯と聞て彌々木村が武勇を感じ然らば佐竹勢に向ひ申べし迚千五百餘騎を率ゐ木村の側邊を摺違ひ馬上より目禮して立別れ新手を以て勢ひ猛に佐竹が備近くへ向ひければ義宣諸士に下知して木村は勇なりと雖も青年なれば智足ず後藤こそは智謀深き大將なり猥りの軍して不覺を取べからずと或は抑へ或は勵しいと嚴重に備へ居し内軍師澁江内膳五千餘騎にて討て出後藤を目掛進みけるにぞ又兵衞も諸卒を勵し共に軍を進めけり

第廿四　木村重成勇戰の事幷後藤基次佐竹勢を破る事

木村長門守重成は佐竹が方を後藤に讓り自分は上杉勢に當り必死を極めて戰ひければ上杉勢の中より黑皮縅の鎧を着したる法師武者八百餘騎木村を目掛て討て出是は上杉黄門景勝が猛將に萩原常陸入道禪圓と云者なりと名乘も敢ず突て懸るに重成は猶豫ふ氣色更に無鎗を捻つて突てかゝり二人馬を交へて戰ひしが重成勢ひに掛つて突鎗何條もつて堪へん萩原胸元を脊骨へ掛て

取直して重成が眞甲微塵と打て懸れば木村急に馬を乘拔捨ては置じと付寄れば小山は力に任せ鐵の棒を打振〳〵薙回ると雖も重成が武術に敵し難く小山が持たる鐵棒は中程を木村に引摑まれ引も進も成ざれば勘兵衛叶はじと棒を打捨て無手と計りに組付たり心得たりと重成は腕を差伸勘兵衛が總角摑んで右手に差揚立たるは宛ら鬼神の如くに見たりけり重成は軈て小山を左の手に取直し今福川の泥中へ眞逆様に投込だり勘兵衛は投込れ這出る事も叶はずして遂に空しく死失けり是を見て佐竹勢二千餘騎鬨を作りてどつと攻懸れば重成少しも怖れずして半田市兵衛野根九郎兵衛淺野清兵衛智德院源十郎等に命じて上杉勢を防がせ其身は佐竹が軍中へ切て入右を破り左に當り粉骨碎身して戰ひける程に遂に佐竹勢は木村が爲に切崩され元の所へ追返されしは木村が働き凄じかりける事共なり秀賴公は遠目鏡にて遙に木村が武勇を見給ひ大に感じ在せし所に再び上杉の大軍既に木村が背面を遮ぎらんと致しけるに秀賴公思はず大音にて危ふし〳〵後藤基次ソレ木村に加勢せよと有ければ基次正しき御上意を承まはらんと威儀を正して申ければ秀賴公目鏡を離れ給ひて基次汝早々木村を拯ふべしと有ければ後藤畏まり候と御前を立んとする時秀賴公聲を掛け基次暫時と有て金の采配を手づから基次に與へ給ひ是を以て敵軍を破るべし我爰にて見物せんと有ければ後藤謹んで之を頂戴し急ぎ矢倉より下りて千五百餘騎を率ゐ眞先に半月の馬印に藤の丸の大旗を押立今福を指て討出ける上杉勢は後藤が討て出たるを

の功を賞し夫より澁江が首を佐竹が陣に贈りて申けるは基次兼て軍法を正し名ある大將を飛道具にて狙ひ打にする事を誡め置候に足輕組より我軍法を犯して澁江内膳を討取たる事近ごろ殘念に存じいりぬ斯る振舞して大將の首を取は後藤が心には之無依て首は送り歸すなりと慇懃に申送りて一旦軍を引揚ける義宣は後藤が使者に對面して基次殿にはさすが貞義の大將にて深切にも澁江が首を贈り賜りたる段大悦に存じ入ぬ禮の程宜敷申されよと有て夫より義宣は澁江が首を其子右京に賜はり古郷に歸りて厚く葬り得させよと申ければ右京有難しとて泣々父が首を持せ秋田へこそは歸りけれ是よりして佐竹が陣中自然ら哀れを催し何となく愁ひに沈みて今朝木村が爲に討れし者の親兄弟互ひに泪を流して勇氣も更に失せ果ければ後藤は此樣子を見てスハヤ掛といふ儘に千五百餘騎の勇兵一度にどつと掛ければ何かは以て堪らんや佐竹勢一まくりに切立られ右往左往に散亂せり後藤は猶も馬を進め佐竹勢を切立〳〵分捕高名をぞ爲たりけり

木村重成上杉勢を破る事幷重成定勝を追ふ事

後藤又兵衛基次は澁江内膳の首を佐竹方に贈り陣中に悲哀の情起りしをよき機なりと一度に押寄せける程に大軍忽ち敗れ散々になるを見て諸軍に下知しけるは逃るゝ敵は追ふに及ばず大將義宣を討取て高名せよと呼はり〳〵自身眞先に進み縱横無碍に切て廻れば佐竹勢討るゝ者數を

突通されアッと叫んで死したりけり是を見て上杉定勝大いに怒り木村如き若將何程の事かあらん駈破て捨んずと馬を進ませ立出ければ直江本庄立塞り木村を然樣に輕しめ給ふ事御不覺に候彼が軍立を見るに匆々もつて勇のみに非ず侮る時は大いなる過ち有ん進み給ふ事なかれと制しければ定勝然らば如何して木村を打破るべき直江されば候今は昔永祿の頃信州川中嶋にて故謙信公武田信玄を破り給ひしは全く上杉方車掛りの法を用ひ候故なり然れば此木村も車掛りの法にて戰ひ候はゞ如何程重成勇なりと雖も一人も遁るゝ事叶ふまじと申しければ定勝大いに悅び直ちに車がゝりの法にて向ひける重成は之を見て莞爾と笑ひ味方に向つて那見よ上杉方にては謙信が用ひたる車掛りの軍を出したり古への信玄はいざ知らず此重成に向つて車掛を掛たりとて一乘に駈破り我勇武の程を視さんなりと鎗を小脇に掻込み面もふらず向ひければ智德院半田淺野等の者共我後れじと會釋もあらなく上杉勢に突て入る此時後藤又兵衞は佐竹勢に向ひ合戰を始めけるに佐竹が軍師澁江內膳と名乘采配を取て下知なしける所に爰に後藤が足輕皆中半兵衞と云者鐵砲を携へ澁江を狙ひて切て放すに元來手練の皆中なれば其丸過たず澁江が咽喉を打貫澁江はアッと叫んで死したりけり皆中は大いに悅び進み寄て首を揚立退んと爲しける處に渡さじと澁江が郎等我も〳〵と十五六人追來る後藤勢是を見て夫皆中を助けよと破落〳〵と討出支へければ皆中は終に澁江が首を提さげ後藤が陣に立歸り實驗にぞ入にける後藤は皆中

後より太刀を振て切んとすれば重成尻目に屹度見て鎗の石突にて兵馬が眞向礑と突兵馬は突れてアッと計りに馬より撞と落ければ岩城宮内は此勢ひに大いに怖れ遁げ出すを卑怯なりといひ樣後より一刺に突落し上杉定勝に突てかゝれば定勝も遁れぬ所と家重代の小豆長光の一刀を拔翳し重成目掛て立向ひ切て懸れば木村は鎗にて渡り合互ひに劣らず戰ひける定勝は流石景勝が嫡子なれば木村に劣らず見えけれども重成の勇氣虎の如く勢ひ進んで見えければ定勝馬を引返し逃出さんと爲所を重成追駈大いに怒り定勝程の大將いかなれば敵に後ろを見せ給ふぞ卑怯なり返せ〳〵と呼はるを定勝は之を耳にも入ず馬こそ災難鞭の繁さに堪り得ず滅多無性に駈出しければ木村は鎗を取延て勢ひ猛く突事四五度なりけるにぞ定勝は[illegible]魂魄も身に添はず足場の惡きも厭はゞこそ夢路を辿る心地して馬に任せて遁行を木村は急に追かけ〳〵逃さじ者と付入しかば定勝馬を深田に乘入進も退も成ざるにぞ木村得たりと近寄見れば定勝は泥に塗れ恰ら苦しげの體に見えけるにぞ木村聲掛斯まで醜劣き振舞に其容までの爲躰いと見苦しき事共なり然ど重成は斯る難儀に及ばれし其弱手には何とて殘酷き事せんや命は暫く助け置可し後日明らかに勝負せんと呼はりながらに引返す其有樣はさしも情ある武士とぞ見にける此時後藤も佐竹が軍を破り引返して兩人今福の堤に出會互に無事を祝ひつゝ暫く息を休めし時は未下りの頃はひなり

知ず親討るれども子助けず主捕はれても從者返さず恰ら鼠の猫に追るゝ如く我先にと敗走しければ死骸は積で丘をなし血は流れて四邊は一面紅ゐとなり目も當られぬ有樣なり此時木村は上杉が車掛りを引受け鎗を捻て突て懸れば上杉勢アナ可笑木村は車掛りの陣法を知ざるぞ者共中に取込め討取と勢ひ猛く進みければ木村は忽ち車掛りの眞先へ突入て右より左へ突抜矢庭に武者八騎を切落し又左へ立廻りて五騎まで突伏ければ上杉が車掛りも今は大崩となり散々に成て見えければ木村は得たりと大いに勇みソレ續けッと下知して五百餘騎旗本を指て切入れば直江本庄甘粕北條等我も〱と木村に向ふと雖も重成少しも之を怖れず鎗を取て馳廻り一上一下と戰ひしに木村が鎗先に向ふ者一人も遁るゝ事能ず上杉勢一萬二千の其中を人なき所を行が如く東西南北に馳廻りしかば諸軍身を慄はし魂ひを消て見てありければ直江甘粕等も敗軍に引立られ同く敗走なしたりける木村は是を見て卑怯なる振舞かな敵に後を見する事やあると呼り〱遁る者を追駈て突て廻れば同じく續いて智德院牟田野根淺野牟禮等獅子奮迅の勢にて薙立切立追つ返しつ攻立しかば敗軍の習にて上杉勢は味方の足音を敵と思ひ鎗長刀を打捨て遁るをのみ專一に見る影もなく敗走しければ定勝は殘念なりと只一騎取て返し大音聲にて汝等遁るゝとも定勝は踏留つて討死するぞと呼はりながら引返しければ主人を討せじと長坂源三郎臼杵兵馬岩城宮內取て返し重成に立向ふ木村心得たりと鎗おつ取て長坂が胸板を突通す此時兵馬は木村が

度揚て靜々と引上ける所に又々關東勢砂煙りを蹴立て押寄せ來り木村後藤に向ひ申けるは敵の追來るを見て城中へ歸るは臆したる振舞なり今一度取て返しイザ我々が勇氣の程を見られよと藤堤に跳り來れば基次木村は之を聞き面白し今一掛して敵の膽を寒からしめん來れや關東の卑怯武者何萬騎たりとも怖れはせぬぞ來れや來れとサモ事なげに呼はりければ眞先に安藤治右衛門大太刀を振て重成に向ひ切て掛れば重成勵呼と請止て返す刀に一太刀閃りとあびせ掛れば安藤怖れて大いに亂れ退く處を駒木根肥後守二十餘騎にて重成が後より切て懸るを後藤基次得たりや應と千五百騎にて駒木根に討て掛るに天魔鬼神も堪りつ可き肥後守後藤に後陣を切散され漂浪く處に西尾北條岩城の面々五千餘騎にて入替り立替り恐懼つき乍らに詰寄けれども後藤木村が眼の光を見ると其まゝ逃出し誰一人とて刃向ふ者なく戰はざるに敗軍し雪頽を打て逃出すに是を見て本多忠朝立葵の大旗をさし翳し十六貫目の鐵棒を打振〳〵イザ御參なれと付入しかば木村は夫と見るよりも望む所のよき敵なり我が鎗先の薄穗一本參らせんと突てかゝるを忠朝得たりと右手へ避けつゝ左手へ身を替し鐵棒鋭やと振上て眞向微塵と打て掛れば重成隙さず鎗を本多が胸元へ差付互ひに迎る若武者兩人暫は勝負も見えざりけり其内本多は鐵棒に腕勞れ少し疲れて見えければ重成隙を窺ひ本多が馬の頭を刺貫けば馬は驚き立上るに忠朝堪らず鐙を外して頭轉倒と眞逆樣に落けるにぞ重成も續て馬より飛下て討て取んとする所を本多が郎等梶金

第廿五　木村後藤二度懸の事幷關東勢大敗軍の事

上杉定勝は泥中に陷りて苦しみ呻吟居たる所へ上杉勢百騎許り馳來り此體を見て我君にては在さぬかと近寄り來りて大いに驚き助け參らせんと犇きし中小性たる鐵之助今年十六歳の若武者馬よりひらりと飛下りて泥の深みへ這入り込み定勝を引上んとすれども深田の泥の足踏惡く主従諸共泥の中に蠢き居たる其所を心利たる一人の者熊手を持來りて主従に取縋らせ難なく引上て我陣にぞ歸りける其有樣見苦かりし次第なり此時茶臼山の御陣には今日鴫野の合戰始めの程は味方勝軍にして矢野飯田等が首追々實檢に入れければ大御所大いに悦び給ひて安藤が佐竹に軍を勸めし事など賞し居られける所に城方より木村後藤の兩將討出で佐竹上杉の兩軍を攻崩したる由聞えければ安藤は之が爲面目を失ひ大御所へ申出けるは後藤木村いか程の勇ありと雖も今朝よりの合戰なれば疲れずといふ事なし其上新に上杉佐竹を破りしなれば城中へ引入事必定なるべし因ては某し其引入る處へ戰ひを仕掛け今日敗軍したる兩家の恥を雪がんと存じ候なりと有ければ大御所如何樣其儀宜しからんと許されしかば安藤治右衛門は三百餘騎にて鴫野今福に向ひける是を見て西尾山城守北條右近駒木根肥後守三品山城守岩城刑部等の面々も加勢として續きける此時木村後藤の兩將は人馬の息を休ませ打取たる首を鎗太刀に貫ぬき勝鬨を三

關東勢出丸手配の事幷幸村奧村と謀る事

然程に鴫野合戰に於て上杉佐竹安藤等大いに敗軍しければ諸將は之を甚く憂ひ此上は所詮城攻に掛るより外なしとて此事大御所に申出ると雖も大御所は之を一向に聞入給はず其まゝ軍を止めらるゝ事三日程にて扨大御所諸軍勢に諭されけるは予熟々案ずるに城を攻る事は今の謀計に非ず先眞田が籠りたる出丸を攻落すこそ肝要ならん所謂唇破れて歯寒しの道理にて此出丸をさへ攻落しなば城は自から瓦の如く解つらん然らば無用の軍して人を損ぜんより眞田が出丸を落すこそ謀計ならんと有ければ諸軍勢いか樣此儀然るべし然らば是より眞田が出丸を攻落し互に高名を顯さんと勇み立しに大御所再び令を下し眞田丸を攻るに於ては手分拔駈は禁制たるべし進退は之を同うし互ひに功を爭ふ事なく全軍の勝利を以て勝利と爲べし是に背く者は功有とも其功を賞さず強て違ふ者は罰を受べしと有ければ諸將此令に從ひ夫より攻寄る用意を整へ其勢都合十六萬三千餘騎各々持場〳〵の評議有て先東手には奧村次郎右衛門續て加賀家之に控へ南の方へは西尾三宅久留嶋大田原丹羽土方藤堂植村分部越前家（名代として松平庄三郎）六鄕岡部井伊宮部土井牧野松平紀伊守同佐渡守未申には仙臺家と固を嚴にし諸家の面々大御所の御下知を今や遲しと待居たり眞田左衛門佐は矢倉に登りて篤と關東勢の軍立を見積りけるに東手に

平七里鐵九郎立塞つて支へしかば本多は虎口を危ふく脱れ何處ともなく引退く是に因て本多が先手も切崩され今は是に懲果て續く者とては無りけり木村後藤は思ふ存分勝軍して討取たる首ども七八十餘を携へ勇みを顯はし城中さして引退く是を後世後藤木村が二度掛の合戰とは名付たり斯て木村後藤兩人城中へ立歸りければ秀頼公の御感斜めならず重成には太閤の秘藏ありし谷霰と云鎧を賜はり基次には長船の太刀を下され大いに其功を賞し給ひければ兩將は滿座の中に頗る面目を施しけり

一書に秀頼公矢倉に居給ふ時小幡勘兵衛關東方へ通じて大筒を打掛させたりと有ども信じ難し伏見の矢倉へ大筒を打掛たる事は眞田丸攻の後片桐貞隆無二の關東方と成て之を勸めしと古書にも見えたり又小幡方關東方に通じて討せしに幸村疾くも之を知りて秀頼公を櫓より下し奉つるとも有ど何れも其眞を失ふに似たるを以て爰に其説を取ず

斯て鴫野合戰には關東方佐竹勢澁江小山正木の勢には討死千八百六十餘人手負數知ず安藤駒木根北條等の勢には討死八百餘人手負同じく數知れず討死惣勢合せて二千六百六十餘人とぞ城方にも矢野飯田を始千五百人討れける程に其名も鴫野と聞えつる鴫の鳴音の夫ならで白骨の下に鬼夜泣き鮮血修羅の巷を爲し跡は只川風愴然と人をして酸鼻せしむる物哀なる地とぞ成にける

られしに利長答て某し決して軍法に背きしに非ず家老奥村こそ一己に手勢を以て攻懸りたるにて利長一向存ぜざる所に候然るに奥村敢なくも眞田に切崩され某しが本陣に雪頽掛り候しゆゑ是非なく共崩れ致し候なりと委細の事を言上して軈て我陣に歸り大いに怒りて急に奥村を呼出し所領を沒收し暇を出し追拂ひけるにぞ奥村は無念乍らも是非なく浪人の身とはなりにけり此事を聞込餘の諸將は大御所の命を守りて猥りの軍を戒しめ總攻の用意をこそはなしにけれ

第廿六　眞田幸村遠計の事并幸村秘書を忠昌に與ふる事

某日幸村は由利鎌之助基幸を招き未申の方に當つて葵の紋の旗見ゆるは正しく越前家の陣代と覺えたり何人か陣代するや汝尋ね來るべしと有ければ基幸畏まりて只一騎城外に出て夫に控へられしは越前家の陣代と覺えしが誰人にて渡り候ぞ疾返答有と呼れば陣中より松平庄三郎忠昌陣代なりと答ふるにぞ基幸急ぎ立歸り幸村に斯と達しければ幸村扨は秀康卿の次男なる忠昌よな面白し然らば汝斯樣〳〵に計り來れと有しかば基幸再度城外に出て那に此陣に物申べき事あるなり陣中より爰へ一人來り給へと招きければ忠昌何事ならんと訝りながら輕卒を出し應接せしに基幸書簡を取出し幸村よりの命令なれば此書を庄三郎殿へ渡されよと文箱ながらに基幸之を渡しければ輕卒は急ぎ請取り立歸りて斯と申し述ければ庄三郎扨は戰書を贈りしならん

出張爲たる奥村次郎右衛門が陣の前に藪あれば是究竟の事と思ひ其夜輕卒を仕立奥村が陣を討せたりしに奥村が陣には思ひ掛なき襲撃に慌て狼狽き上を下へと返す内鐵砲に中り討るゝ者二十餘人餘の軍勢も之が爲戰ふ事も叶はずして呆れ果たる計りなり此隙に幸村が輕卒は城中へ颯と引揚たりしに奥村が士卒敵は必定藪の中に潜みて在んと我も〳〵と切て入しに人影だにも有ざれば奥村次郎右衛門此藪こそ味方に取て邪魔なりと諸士に命じて急ぎ藪を刈取せけるに矢倉よりは是を見て海野六郎兵衛立顯れ關東の諸士には藪獵をすると見えたるぞ實に此藪には狐狸は居たれども今は戰ひの巷と爲ば何國の地へか立去しなり由なき獵をせらるゝこそ不覺〳〵と呼はりて城中一度にどつと笑へば奥村斯と聞よりも短氣の性質堪難く憎き敵方の雜言かなソレ矢倉を一揉にせよと自身眞先に進み采配取て下知しければ三千餘騎の面々鬨の聲にて攻掛りしに城中には鳴を鎭め敵を近くに引寄て用意の大石大木を一度に四五十投落しければ先手は亂れて引退くにぞ出丸の方より六文錢の大旗を風に翻へし穴山小助安治二千餘騎を率ゐ奥村が旗本指て割て來れば六文錢の旗に驚き旗本勢上を下へと返す處に城中より門を開き眞田大助千五百人にて討て出矢庭に加賀が備へに亂れ掛れば加賀の勢も之に押崩され一萬三千餘騎西尾が備へに雪頽入り散々に討成れければ大助は其まゝ城中へ引退きける斯と聞れて大御所大いに怒り給ひ中納言利長を召れて如何なれば軍法に背き見苦敷も敗軍を仕出來したるや如何に〳〵と詰

一巻は不足せりと有たれば我幸村を知ずと雖も父が物語りにて豫て此事を知所なり汝等無用の諫め立して時を誤らす事勿れと強て止るを聞入ずして鞭を揮ひ徐々と只一騎立出ければ近づく儘に穴山は聲を掛某し書簡を以て申入たる所早速承知の御返答に及ばれし段千萬辱けなしイデ然らば約に從がひ彼の一巻を御渡し申さん是こそ父君の悦び給ふ秘書なりとていと恭々敷差出して渡しければ忠昌有難しと押頂きけるに穴山言葉を更め然にても君此書を得られしと雖も合戰は臨機應變の者なれば隨分と心を込られ手ぬるき事の有ざる樣せらるべしまつた此幸村をもよく見知り置れて後日の合戰に首を討取天晴の高名を顯はし給と云始終を打聞忠昌申けるは幸村殿が言葉にも似合ぬ今の一言かな戰は是公けの事なれば今にても合戰と云ならば庄三郎一番に駈入天晴の高名せん事何ぞ其許が差圖に及ぶべけんや其許の首は暫く其許に預け置なり戰塲にての手術を見給へと云ば幸村打笑ひ何條其許の手術にて某しを討事叶べけんや忠昌コハ心得ぬ一言かないかにも討て見すべしとて互ひに言葉に角だてゝ又再會と引別れける斯て双方持塲へ還り忠昌は幸村より讓り受たる彼の秘書を見て悦ぶ事限りなし是を聞て關東勢は庄三郎只一騎にて立出幸村と晤きしこそ訝しゝ庄三郎こそ必ず城中に心を通ずるならんと云觸ければ此時早くも茶臼山に達し大御所大いに怒らせ給ひ急ぎ庄三郎を招きよせられければ庄三郎は彼の秘書を携へ徐々と御陣に至りしに大御所は氣色を變られいかに忠昌汝いか成ば城方に心を通じ

と紐を解て見給ふに其文に曰く「父君秀康公には曾て愚父昌幸を師とせられ軍學兵法の敎導を承られしに因家に秘する所の軍書三卷の內先達て二卷は公に差上たり其後跡の一卷をも差上候はんと存ずる內に互に呉越と押隔り其まゝ一卷は取置候事なれば此事定めて殘念に思ひ給はん且又某しにも三卷之有ばこそ寶なれ其一卷にては用をなさず然るに依て殘る一卷を此度直々に差上んと存ずる間君直に受取に出られ候へ速かに御渡し申さん」と有しかば忠昌莞爾と打笑ひ扨も幸村は誠の勇士なるかな今に成ても以前を忘れざるこそ奇特なれ何にも請取に罷出べしと有て此由返答に及ばれければ基幸立歸りて忠昌承知の由申述ぶ幸村仕濟したりと大いに悅び夫より穴山小助を影武者に仕立彼の秘書を金蒔繪の箱に納めて之を齎せ打立せければ敵方之を見て幸村には何故只一騎にては來るやと囁き居たるに小助は庄三郞が陣の此方に馬を控へツト城方を詠てければ庄三郞然ば我も立向はんと甲冑に身を固め馬に跨がり徐り〳〵と只一騎旣に陣前まで出し處に本多內藏之助松平釆女の兩家老銜を控へ諫めけるは是は我君の御振舞とも覺えぬ者かな幸村は僞はり多き將なれば君を招き不意を討んとの事も量られず如何なれば斯迂濶には出給ふぞと言爭へども忠昌打笑つて幸村は我一人を討ん迚かゝる鄙しき謀計を爲人ならず何條然事の有べきや父秀康公豫て仰せられしは我若かりし時眞田を師として軍學兵法を學びしが三卷の秘書の中二卷は此方へ讓られしかども其後關ヶ原の一戰より敵味方となり殘念作ら跡

分幸村と心得させ二には秘書の空しく成ん事を憂ひて斯の如くに謀りし事にて後日の合戰に關東勢を欺きしも畢竟是に根據するなり將と成て斯心を用ゐる寸分の怠りもなき振舞は實に賴もしき忠臣ならずや

斯て關東勢はいざや一攻押寄んと本陣よりの下知有ければ惣勢二十萬餘騎同時にドッと攻かゝる頃は慶長十九年十二月六日に東の手には加賀中納言利長西尾山城守久留嶋丹後守太田原備前守丹羽鍋助北條右京大夫南手は土方掃部頭藤堂和泉守分部左京亮松平庄三郎井伊掃部頭西の手は岡部丹後守六鄉伊賀守土井大炊頭安部惣太郎伊達政宗等二十餘萬の軍勢卯の刻計りに関の聲山を崩し鐵砲の音天地も微塵と押掛りし有さまは百の孫呉も當り難くぞ見えにける斯て關東勢は堀際へ近寄三度鬨の聲を揚げ今や戰端を開かんと犇きけれども城中は鳴を鎮めて控へたりしにスハヤ乘破れと諸勢一度に堀へ飛入り熊手鈎綱を塀に打懸〳〵乘入んとする時に城中よりは豫て用意の白粥を熱湯ぐるみに長柄の柄杓に汲出させては浴せ掛しに先手に進む逸り雄は皆燒爛れて塀よりバラ〳〵轉げ落たる有樣は大熱地獄に蜘の子を散せし如く見えにける是に依て三方の寄手は進み得ず上を下へと敗走しければ城中よりは一度に鐵砲を響かせしにぞ暫時の間に關東勢は味方崩れと成たりけり關東勢此戰爭にも打負しかば切歯をなして皆々言けるは斯る大軍を以て攻立ながら僅か白粥位の謀計に敗を取しと云事殘念なりイデ竹束を楯となし驀地に

幸村に面會を爲したるぞ庄三郎是は何故君には忠昌を疑ひ給ふぞ大御所僞るな汝今朝幸村と馬を交へて呼さたるは諸士の能知る所なり是にても云譯ありやと居丈高に成て怒り給へば忠昌は眞田が書簡と秘書とを差出し申しけるは其御不審は然事なれども某し此秘書を手に入し次第は假令此事につき彼と出逢ひ彼に欺き討るとも是が爲め天下に事を欠事も有べからず然ども彼は然様な鄙劣き謀計を爲者に非ずと心得秘書を受なば天下の重寶是に過ずと彼を想ひ是を考へ遂に參會爲したる所果して此書を相渡し其折柄も後日の見參は天下の爲の公けなれば首を預ん渡さじと言葉を固め立歸りしと其有様を語られしかば其時大御所には忠昌を賞せられヂ有たか汝出來たりと一入氣色麗しかりし

關東勢眞田が丸を攻る事幷幸村數度奇計の事

松平庄三郎忠昌は幸村より讓り請し軍法の秘書を大御所に献じ此事委細に言上しければ大御所其明智を感じ給ひ此戰ひ終つて後御舍兄越前宰相秀康公の家督を忠昌に相續を命せられ越前足羽郡福井に於て三十萬石を與へられしは畢竟此功に因し事にて此時忠昌は十七歳なりしとかや然ば三卷の秘書は永く越前家に傳り家の重寶とはなりぬるなり

評に曰く幸村が穴山を我影武者に仕立家の秘書を忠昌に贈りし事には一は穴山を以て敵に十

も向ふたる者こそ一番に討れなん難儀なる謀計やと互ひに首を縮めて有けれども新將軍秀忠公には大に悦び給ひ此儀誠に妙論なり然らば早々番手攻致さんとて其部署を定らるゝに大勢の大名なればとて番手を鬮取に極め十二支の旗を建て段々の備へと定められしかば諸大將は心進まねど此鬮取らざる時は臆病と謂れん事の口惜さに頓て鬮を抽き其鬮の順に從ひ子丑寅と十二段の軍立極りたる其隊伍の次第は

子　三宅對馬守
丑　太田原備前守
寅　丹羽勘助
卯　本多佐渡守
辰　大久保新八郎
巳　六郷伊賀守
午　安部惣太郎
未　松平周防守
申　菅沼新八郎
酉　井伊掃部頭

向ひ一攻に打破らん斯あらば眞田いか成術ありともなど敗軍する事の有べきやと評定なして頓て本陣よりの下知を受八日の朝より又攻登り既に三方より一度に乘入んとて塀に集り登りける有さまは城に只一潰しとこそ見えければ皆人拳を握つて悅びける所に又々眞田が脚色の外れはせず塀はミチ〳〵と云間もなく堀の方へと顚覆かへればなにかは以て堪るべき數千の軍兵風に卷れし雪の如く巴を打て破落〳〵と落ければ是が爲千五百餘人の者共頭足を打碎きてぞ死したりけり是を見て關東勢は物をも云ず舌を卷て居たりしは見苦しくも又怖しけれ

第廿七　關東勢番手攻の事幷幸村奇計小幡を僞計出す事

關東勢は眞田が丸を攻あぐみ評議區々にして一決せざる處新將軍秀忠公も之を憂ひ給ひ味方斯までに敗軍いたす事是全く敢死の心無ゆゑなり死地に入て攻掛らば假令眞田智者なりと雖も味方の大軍を爭で防ぎをほす事を得可んや此儀いかゞと有ければ諸將も二度の奇謀に懲果たる事なれば默然として一言もいふ者なし其時伊達政宗申しけるは誠に此儀然るべし因ては味方の勢を十二段に別ち之を番手と名け只南手の一方より攻立先手討れなば二番目代り二番目危ければ三番目と次序に討て掛らば何條味方敗軍する事有べけんや此儀いかゞと有ければ諸將は之を聞胸中に懼を懷き伊達殿には迷惑なる事を言出されし者かな何れの手が先手に向ふかは知らねど

次第にて候斯申すも敵の備十二段の内七段までは防ぎ候はんなれども殘る五段心許なく候間是に依て斯は申なりと云ければ小幡勘兵衛進み出て誠に眞田殿の御一言道理には候へども然らば木村後藤の兩將を差添其許此兩將と共に防ぎ給ひなば殘り五段は破れ候はんと申ければ幸村答て如何樣此兩將を授け給はゞ十二段の備を打破る事何より以て易しとは思ひつれども此兩將には黑門口を固め候へば此方へ呼寄る事叶はぬ故斯申すなりと云ば小幡不興氣にて其許には何ゆゑ某しを然樣には輕しめ給ふぞ眞田駭き夫は何ゆゑに候や小幡されば候某しは入城してより未だ寸尺の功も之無ければ木村後藤の兩將を眞田が丸に呼寄られ代として某しを黑門口に控置れても然るべきに其計ひさへ無は何たる事に候ぞと說破られて幸村礑と掌を拍ち是誠に心づかざる事にて有き某し御身を輕しめたるにあらず全く其許を忘れたるなり實に此事然るべしとて夫より勘兵衛に黑門口を守らせ幸村は後藤木村の兩將と倶に出丸にぞ歸りける此時後藤木村の兩人眞田に向ひ小幡勘兵衛は豫て關東の間者と知ながら大切なる黑門口を守らせ給ふ事其意を得ずと申ければ幸村打笑ひ是こそ家康殿を欺くべき謀計にして初め某し番手攻を怖れし体を爲も彼をして只今の如くなる所を見せん爲の謀計なり見よ淺香鄉右衛門頓て小幡を生捕べしと云ければ後藤木村は舌を卷き瞬きもせず呆れたる事數刻にして何と言葉も無りけり

戌亥　森山城守
　　　松平對馬守

斯て十二段定まりければ支を畫し旗を建順序を極め備へける其勢十一萬餘騎とぞ聞えける幸村は矢倉より之を見て手を拍て申けるは扨は關東の大軍度々の軍に手懲して此度は番手攻を爲し死地に入て戰はんとは爲したるぞ仕樣こそあれと故と大いに怖れし体にて大助を從がへ急ぎ登城して秀頼公の御前に至申けるは關東勢度々の合戰に打負此度は眞田が丸を攻べき爲番手攻を工しと相見え候幸村隨分防ぎ候はんとは思へども關東方にも是までの敗軍を憤はり必死と成て攻掛る事にて候へば奈に幸村秘術を盡し防ぐと雖も此度は勿々戰ひ勝事能はじと思ひ候へば明日の合戰には眞田が丸も落城いたし候べし就ては幸村父子出丸に於て腹搔切て相果申べく存じ候間今生の拜謁も是迄に候へば御暇乞の爲參上仕つりしと兩人はら〳〵と涙を流しけるにぞ秀頼公を始め城中の諸士大いに力を落し頼み切たる眞田父子殿において討死と有ては何を以てか籠城する事を得べけんと顏見合せて呆れ果たる計りなり中にも大野織田兩人は顏色土の如く見えにけり秀頼公にも今軍師にして斯の如くにては爭で籠城叶はんや然る上は潔能城を開き討死するより外はなし那なれば軍師斯樣に我を捨給ふぞ若我に過誤有ての事なれば改るに豈憚らんやと涙ぐみて在ければ幸村は之を慰諭參らせ何條君を恨み奉つる事の候べき是誠に是非も無き

て眞田が丸を攻亡さんとて諸將皆用意を嚴重にして居たる所へ城中より忍の使者來り間者小幡勘兵衛方よりの密書到來しければ急ぎ披き見るに小幡黒門口を固め居て城門を開かんとの事なれば大御所大いに悦び給ひ扨は此度番手攻に困てさしもの眞田も是に怖れ木村後藤を出丸に伴ひ間者とも知らず小幡に黒門口を固させしと見えしぞ此度こそ甘々眞田を欺きたりさらば黒門口より攻入り秀頼眞田の首級打取て日頃の苦戰の憂晴しせんと夫より十二段の備を黒門口の夜討と定めけり諸將には眞田が丸攻始まらば幸村が爲に鏖殺されんかと屠所の羊の歩行の如く愁哀み居たる所に俄に軍議變り黒門口より攻入事と成ければ再び生たる心地して此攻口と聞ならば我一番乘して城内に打入り思ふ存分高名せんと悦び勇める心の內こそうたてけれ此時小幡勘兵衛は我謀計すでに成れりと露顯し事は夢にも知らず心中大いに喜びて居る其所へ眞田が四十八將の勇士と呼ばれし其一人の淺香鄉右衛門ツト來りて勘兵衛に對面しければ勘兵衛扨は軍師より心付の爲使者を送られしならんと淺香に向ひて御使者御苦勞なり陣中は隨分と心付居候なりと挨拶しければ淺香打笑ひていや左樣なる事ならず貴殿に尋ね問べき事あれば同道して來れと軍師より申付られ參りしなりと云ければ小幡怪み此大切なる持口を渡し置ながら今となつて尋ね問事ありとは心得ぬ事なりと其仔細を押問ば淺香答へて某し其仔細は何とも存ぜず只連來るべしとの事なれば疾々同道し給へと急立しに小幡心中に萬一密書の漏もや爲しかと思ひ出し

眞田が明智關東勢を欺く事幷幸村小幡を拷問する事

小幡勘兵衛心の中には幸村を誑りしと思ひ黑門口の守將山口左馬助が堅め居し所へ加はり密に內通の書簡を認め我手下の小野喜兵衛なる者に通路の割符を與へ書簡を齎し茶臼山の御陣に忍ばせけるこそ愚かなれ斯と知りて眞田が忍の者小野喜兵衛を城下にて生捕急ぎ幸村の前に引出しければ幸村後藤木村を呼出し喜兵衛の懷中せし密書を取出させ開き見るに其文に曰く

密書を以て申述候陳ば此度番手攻の御軍立相成しに就ては流石の幸村も是には大いに當惑いたし十二段の備の內七組迄は破り得べく候へども跡五段は匆々破り候事成難候由申せしに付其時拙者進み出後藤木村の兩人をも眞田丸へ遣はし倶に防戰せらるべし某しは兩人に代り黑門口を守り候と申しければ幸村大いに悅び然ば貴殿兩人に代り給へとて某しを黑門口へ向られ候就ては明朝寅の一刻に朱引の挑灯を以て相圖とし城門を開き御勢を引入申べき間此機必ず御外しなく御人數差向らるべし取急ぎ認め麁文の儘具申候處斯の如くに御座候以上

十二月　日　　小幡勘兵衛

とぞ書たりける是を見て幸村兩人に向ひ見給へ是を以て關東勢を欺く事何條難き事あらんやイデ其手段を爲んとて軈て使者を出立せ茶臼山へぞ遣はしける茶臼山にては明朝こそ番手攻を以

なるかな其事は其時何心なく不吉と心に浮みし故言ぬは却て不忠なりと夫ゆゑ斯云ひたるを夫を其許には然様にまで疑ひ給ひては竭す心も其甲斐の無のみならず間者なんどゝ言れん事の殘念さよ噫是非もなし命なる哉と誠しやかに打歎きければ幸村偖は汝不吉と云しは實意に出し忠言にて全く間者にては無りしか小幡目をむき出し不吉と云し事何にも然様にて秀頼公の御爲を思ひ申出し事は日本の神に誓ひを掛て僞りなし幸村然らば汝此者を見知り居るや夫其者を出せよとて頓て小野喜兵衛を縛め引出せば小幡是を見て大いに驚きコハ隱謀の顯れしかと思へども故と然あらぬ躰にて小野を白眼つけ已れ今朝不調法有て手討にせんと思ひしが人々の止むるに因て助け遣はせしに开を遺恨に思ひ我を軍師に讒言せしと見えしよな憎き汝が振舞かなと切齒をなして怒りければ幸村爾有しか然らば繩を解べしとて急に縛めを解せて小幡に向ひ汝彌々僞はりなしと有ば爰にて神文を書諸將の疑ひを散ぜよと有ければ小幡心得候とて神文をさら〳〵と認め幸村に渡すを幸村受取て密書と引合せ見てスハ小幡を搦よと聲を掛れば從者破落〳〵と立寄り再び小幡を高手小手に縛り揚しに小幡は身を震はし又しても斯る慘状事あるは何事ぞや神文まで認めし上からは何條疑ひの有べきやと云せも果ず幸村居丈高になり汝言せて置ば際限もなき讒言何に辯否を以て僞るとも看よ〳〵汝が今認めし神文と關東方へ贈りし密書と同筆なり汝是にても未だ尙は申開き有やと密書を差付示しけるにぞ流石の小幡も何と言葉もなみだぐ

ては舌震へ身の毛も竦然て恐ろしくなりいや〳〵今日は參るまじ明朝は早天に參り申さんと答ければ淺香大の眼を瞋らせ何とて爾云るゝや是非〳〵同道すべしと腕を差伸小幡が首筋掻摑み蹴倒し置て高手小手に縛めければ小幡勘兵衛叫び出し汝陪臣の分として何故有て斯無禮の働きなすや放せ〳〵と聲立けれども淺香は之を耳にも入ず小幡を乘物に打乘せ出丸に連來りて幸村に斯と云入庭前に引出しければ小幡大いに怒り何ゆゑ眞田殿には我を縛め罪なき者に斯る恥辱を與へられしぞ早々此繩解給へと蠢々廻るを幸村見遣て冷笑ひ汝知らざると思ふか汝は元來關東方の間者なりとは此幸村は疾より知りて居たりしぞ今迄城中に差置しも心得有ての事なりと云れて小幡彌々怒り幸村殿には何ゆゑ有て我を間者なぞゝは仰らるゝぞ定めて我を妬む讒者有ての事ならん然樣の事身に取て覺なしと頻りに叫を幸村は發打と睨視汝辨舌を以て云遁れんとするとも何條此幸村を欺く事能はんや小幡が云く左程に我を疑ひ給ふ上からは何ぞ間者と云證據ありや幸村證據の有無は問に及ばず小幡怒つて證據も無に間者なりと云事其意を得難し幸村一咳して汝爾いふとも先達て城中の軍評定の時に某し宇治瀬田の間に出張し敵を邀へて戰はんと云し時汝不吉なりと云て支へしは是汝が間者なる事言でも知れし事ならずや汝那時何故に宇治瀬田の間に出張する事を不吉とは云しぞ言譯ありや奈何〳〵と問詰しに小幡も今は言葉なく暫時默然として居たりしが涙をはら〳〵と流し申けるは扨も〳〵幸村殿には疑ひ深き事

黒門口より朱引の挑灯を差出し振廻しければ關東勢心得たりと掛橋を向ふより突出し我先にと争ひ勇んで込入たり然るに敵は一人もなく鎮まり切て在ければ一番に進みし三宅對馬守あつけに取れ小幡は居ぬか挑灯は何れより出したるやとキョロ／＼爲ながら尋ねけれども影だにも見ざれば扨はまた謀計に當りたるかと俄に驚き引や／＼と聲掛れども跡より入込む大軍に引にも退れず諸軍勢は僅かの橋の上にて揉合ける其内に橋の掛口外れければ諸軍一度に堀の中へ落入死する者數を知らず上を下へと騒動する時黒門口の矢倉より一聲の鐵砲響くと齊しく城中より木村長門守眞田大助穴山小助一萬六千餘騎にて算盤橋を押出しどつと喚いて切りかゝるに關東勢は慌てふためき右往左往に散亂爲ける其所へ後ろなる杉山より後藤又兵衛基次八千餘騎にて討て出只一挫ぎに掛散さんと聲荒らげて押寄來るに關東勢は人心地もなく逼迷ふを大御所後陣に在て此体を見給ひ偖々此度も又欺かれしか殘念なり是はソモいかにと暫時呆れて物をも言はず在せしが夜軍といひ其混雜の甚だしければ是非なくも茶臼山へ引退かれんとて御馬を返し給ふ所に思ひも寄ず向ふより眞田幸村八千餘騎を引卒して鯨波を揚六文錢の旗押立關東勢の諸將が中へ割て入り人なき巷を行が如く當るを幸ひ切拂ひ薙拂つて本陣近く／＼切入ければ加賀黄門利長一萬餘騎にて之を防ぎ前後より眞田を犇々と取圍みけれども眞田が勢は之を一戰に駈破る中にも眞田が四十八將の一人と聞えし三好新左衛門入道淸海同新兵衛入道爲三由利基幸淺香鄉

み顔赤らめて見えければ幸村は其まゝ小幡を獄中にぞ引せける

第廿八　關東勢黑門口に發向の事并幸村奇計關東勢再度敗軍の事

斯て幸村は小幡を獄中に引せ今は心易しと悦ぶ所に茶臼山へ贈りし使者立歸りて大御所の御返書を眞田に渡すを幸村開き見るに其文に曰く

密書を以て申送らるゝの趣き委細承知いたし候相違なく約束の刻限に黑門口より討入るべき間門を開き案内せられよ忠志の至り過分に存ず事終りての後恩賞は望みに任す可きもの也

十二月　日　　家康判

小幡勘兵衛殿へ

と有しかば幸村大いに悦び扨こそ我謀計既に當れりとて夫より急ぎ用意を整へ黑門口には眞田大助治幸穴山小助安治の兩人に八千餘騎を付て控へさせ城中には後藤又兵衛基次をして八千餘騎にて埋伏せしめ幸村は不意に御本陣に切入る手筈を定めて時刻を見合せ關東勢の寄せ來るを今や〳〵と掛待たり關東勢斯る事とは夢にも知らず茶臼山にて十二段の諸將は大いに勇み既に時刻近くなりしかば皆押詰て控へたり斯て時刻も來りしとて大御所には大軍を引卒して進み出黑門口へ掛りければ眞田は總軍へ下知を傳へ鎭まりかへつて待居ける內寅の刻にも及びし、

棒を眞向に翳して打て掛るを木村は鎗にて受流し退ては突き突ては退り一上一下と掛つ支へつ戰ふ中に木村は手早く棒引摑み力に任せて捻合を渡邊も頗る剛の者なりければ木村が隻手に鎗取伸て突て掛るを面倒なりと棒を打捨て組んと爲れども木村が鎗先鋭くして當り難くぞ見えければ渡邊コハ叶はじと馬を返して退きけり木村は遁る敵をば追ずして八方の敵を切崩せば後藤は眞田大助穴山小助と力を戮せ關東勢を追立けるに關東勢は一支へもせず天王寺指て右往左往に散亂す此時幸村鎗を捻つて本陣に突て入ければ大御所慌て周章て旗本勢を以て幸村を防がせ大久保安藤成瀨兼松等を從へ茶臼山指して退き給ふ然るに關東勢二十萬餘の大軍南手へ敗走しければ味方の大軍邪魔と成り思ふが儘に遁れん事も叶ひ給はず其内幸村は我手勢を他の手に渡らせ其身は七八騎にて大御所を追かけ短兵急に押寄せ來るに大御所は心に弓矢八幡を祈りつゝ引退かんとし給へども南手へは敗卒引も切ず落行しに進まん樣も有ざれば東を指て敗走す跡よりは眞田きびしく寄せ來りしに又々西の方へと赴かれしに此方には所々に川々多くして思ふやうには行はれざれば北へ返され曾根崎村へと落給ふ此時本多土佐守二千餘騎にて馳來り大御所を落し奉つらんと眞田と大いに勇戰す此隊に大御所は所詮味方敗軍甚だしければ大坂へは足を留る事叶ふまじ河口の方へ落延んとて福嶋指て退き給ふ然るに跡より眞田左衛門佐幸村急に七八騎にて土佐守が軍勢を切崩し駈通り追來るに大御所は僅百騎許りにて落延給ふ所に福嶋の天

右行門近藤無手之助相木森之助抔勇を鼓し進めや進めと聲を限りに下知爲しながら郎等を引立自身眞先に顯れ切て廻れば其勇猛に當り難く加賀勢を始め諸軍一度に大敗軍と成て散亂す夫と見る間に幸村が軍兵は旗本へ突て入り大御所目掛て付入してこそ凄まじかりし勢ひなれ關東方は周章狽狽あれ眞田よ幸村が切入しぞと右往左往に敗北し押殺され踏殺さるゝ有樣は不覺なりとこそ見えにけれ

幸村御旗本を切崩す事幷大仁村御難の事

偖も關東勢は小幡勘兵衛が内通を眞の内通と思ひ黒門口へと向ひし所に思ひの外なる次第なればば味方大いに敗軍し右往左往に散亂したる其所へ眞田左衛門佐幸村大御所の旗本さして攻入ければ之に依て關東勢大いに難儀の合戰となり色めき立て遁出すに木村長門守は藤堂和泉守の陣に切て入ば藤堂が陣よりも渡邊勘兵衛とて關東隨一の剛の者顯れ出木村長門守を見るよりも彼こそは先達て鳴野の戰爭に於て小山勘兵衛を投殺したる勇士なり小山は知らず此渡邊は爭で彼に劣る事有べけんやと一丈餘りの樫の棒を打振〳〵進み出いかに木村長門守汝此渡邊勘兵衛を見知らざるや金骨入たる腕の强さを見せ申さんと樫の棒振て打て掛るを長門守心得たりと振返り鎗を捻つて突てかゝる渡邊勘兵衛さらば一棒參らせんと同じく馬を進めて間近く付入り件の

はさんと云捨ながら幸村表に出ければはや夜明なり斯ては關東の大軍大返しに返し來りなば惡かりなんと引鐘を鳴し出丸の陣へと引揚ける此時大御所には危ふき命を遁れ給ひ左平太に向はれ汝が働きにあらずんば我命を失ふべき所に汝能も計りしよな是は當座の褒美なりとて金の冑を賜はりける左平太は有難しと押戴き猶も夜明まで大御所をかくまひ參らせしに夜明ぬれば追追大小名幷びに旗本勢尋ね來り爰に於て忽ち一萬五千餘の勢となりければ夫より茶臼山の本陣へと退き給ひける

私に曰く幸村大御所を逐ふ事急なるに此處まで來りて助け參らせしは是全く左平太が百姓の身分として斯までに云事なれば豈夫爰に在さんとは思はざるに因しならん然に因て罪もなき百姓を殺すも無益なる事と思ひ只柱に三太刀切付之を以て名を後世に留めばやと斯爲し事何となく氣象現はれて奥床敷思はれける此柱後々まで殘りて大仁村に其家在りとなん

第廿九　大御所御即智の事幷眞田隱岐守幸村を說事

然程に關東勢は思ひもよらず敗軍せしかば無念の事と切齒をなし然にても小幡が內通こそ大いなる僞りにて誠は味方を欺きたる段惡みても猶飽足ずと只小幡をのみ恨ける此度の總攻には大御所是非〳〵出丸を落攻さんと思ひ給へども遂に敵の謀計に當りて攻落さゞる而已ならず意外

神の森の蔭よりして六文錢の旗を颯と飜へし眞田左衞門佐幸村討て出けるにぞ大御所向ふにも眞田あり跡にも幸村追來るはいかなる事ぞと前後に心を惱まされ落給ふにも其道なく途方に暮て在せし折から兼松又四郎小栗大六七八騎にて取て返し大いに戰ふ其隙に大御所辛くも虎口を脫し落延給ふ其所へ跡より又々眞田十騎ばかりにて追來る是を見て安藤帶刀成瀨隼人二十騎ばかりを引俱し取て返し暫時は之と挑み戰ふ其內に大御所は尼ケ崎街道を北の方へと落行大仁村へ掛り給ふに何とかしけん又跡よりは眞田何所ともなく出來りて家康公卑怯にも後を見せ給ふか幸村是にあり返させ給へと呼はるにぞ大御所愈々恐れ駭き側傍なる賤が伏家に遁入給へば大久保を始めとして皆々幸村と戰ふ中に大御所には伏家に在して主人に我を救ひ吳よと有しかば主の左平太甲斐〴〵しくも君を奧の一間へ入奉つり我身は外面に素知らぬ顏にて居たる所へ鎧武者一人駈來つて正しく此家に遁入たりと主人を甚く責問ければ左平太答へて全く然樣の方は來られず門違ひ成べしと云に幸村イヤ〳〵正しく遁入たるに相違なし何所へ匿し參らせしや言ずば汝が命をも取べし疾有躰に申せよと嚴しく責れど左平太は胸を据ゑ是全く僞りならず夫にても猶疑ひ給はば我を刺殺し其上にて此家の中を探さるべし幸村合點なり然らば汝を刺殺して殘らず家を探すべしとてツカ〳〵と近寄太刀を左平太が胸に差付今や刺殺さんず有樣にて側はらなる柱へザクリ〳〵と三太刀程切付偖も汝は百姓には珍しき根性者なり其根性を愛て許し遣

度我に惱まされしを以て叔父をして我を說しめ降參させんと工たりしか兎まれ急ぎ城内へ入べしとて城門を開かせければ信尹得意顏にて徐々と城中に入て見れば威儀を正して城兵左右に列び居たり案内に從ひ信尹は奥の方へ伴なはれ聽て設けの席へ通りければ幸村早々出迎へて是は叔父君には珍らしや先々御堅固に渡らせられ恐悅至極と挨拶しければ信尹幸村に向ひ世の中にも其許程無情人はあらじ其許の兄信幸と某しとは關東方に從ひ居れども其許父子は關ケ原合戰に臨みて上田に引籠り新將軍を惱せしより遂に大阪方となり今日まで關東勢を敵に取り不幸の地に沈みしこそ此叔父に取ても氣の毒に存じ候なれ然れども大御所には寛仁大度の君ゆゑ其許等が斯有とも我々を疑ひ給ふ事之無く斯る明君は復とあるまじ夫良禽は樹を撰んで棲と云り其許が今主君と賴む秀賴公は酒食に耽り女色に迷ひて一向に軍議をも知り給はぬ不覺の大將なるに其に仕へて寛仁の長者たる明君に向ひ合戰せんとは到底の勝敗前以て知し事には非ずや然るに大御所には深く其許が才智を惜み數度の罪を恕され今にても味方に參るならば信州一國を宛行はれ上田の城主に爲れんとて此度某しを召れ仰せ有て使者には差遣されしなり其許にはいかゞ思ひ給ふぞ迷ひを去て速かに味方に降參は致さぬか其證據はそれ是なりとて彼御墨附を出しければ幸村押戴き誠に有がたき御仁心恐入候斯る上は何條背き奉つらんいかにも心を翻へし關東の御味方に參るべし然ども拙者是迄浪々の身たりし時さへ高祿を與へて抱へ置候舊臣共

の敗を取られしかば種々心を苦しめられ如何はせんと暫時思慮を運らされしが屹度工夫有て眞田隱岐守信尹を召れ其方が甥なる幸村は城中に在て度々味方を惱すと雖も我却て彼を憎まず憎きは只小幡なり幸村は誠に敵ながらも忠義の心厚き者なれば何卒して味方に招かんと思ふなり今にても味方に參るならば信州一ヶ國は其恩賞として宛行ふべし然に因ては汝幸村方に赴き此事彼に篤と得心させ我味方に付させよと有ければ信尹謹しんで甥にて候幸村度々君を惱まし奉つると雖も君は寛仁大度にまし／＼却て其幸村を慕ひ給ひ助命の恩を蒙るのみならず信州一ヶ國を下し賜はると迄有難き御賢慮を仰聞らるゝに就ては幸村何ぞ之に背き候事有べけんや某し早速出丸に赴き幸村に對面して此由申聞せ降參いたさせ候はんと言上しければ大御所然ばとて筆を執給ひて

逆心秀頼をすて味方に降參あるに於ては日頃の罪をなだめ信州一國を宛行ひ上田の城主と爲す可き者也

慶長十九年十二月　日　　在判

眞田左衛門佐どのへ

と爲れ信尹に渡されける隱岐守は之を領掌し早速に支度を整へ出丸へ立越え城門を叩いて關東方より使者の旨通じければ城兵是を聞本陣に斯と達す幸村之を聞き大いに笑つて扨は家康度

に幸村は從ひしや信尹答へていかにも上意の趣き篤と勸め申候處早速降參の義承知仕つり候然れども幸村申候には是迄浪々の間も主人を捨ず慕ひたる郎等共多く候へば是等の者へ高祿を與へ度候程に信州一ヶ國の外甲州をも相添賜はるに於ては秀頼公を打捨御味方に參らんとの事にて候と申し述しに大御所暫時打案じられしが稍有て兩國の大守と成ん事は勿々重き事なれども汝が受合たる一言もあれば其方が忠心に愛て兩國の大守となすべしとて頓て又兩國安堵の御墨附を信尹に渡されければ隱岐守は天にも登る心地して直ちに眞田が丸を指て急ぎ行き再び城門に到り案内して待間も此度は幸村も我來ると聞時は必ず急ぎ出るならんと思ふ所に案に相違成待遇にて取次の者さへ不興氣にして其上奧に入ば幸村は出來らず海野六郎兵衛一人進み出御用如何と問けるに信尹は何やらん思はし氣にて幸村は何國へ參しぞと有しに海野答て然ば幸村殿には只今登城致て留守に候へ共今にも信尹公御入あらば返答いたし候へと申付て出行候と云に隱岐守然らば何と云置しや海野答て主人幸村申置しは叔父君來り給ひなば最前は心得違にて甲信兩國を望たれども能々案ずるに甲信の兩國にては尙不足なるに付此儀宜しく申述よとの事にて候と申ければ隱岐守大いに驚き扨も幸村は際限もなき剛欲者かな信州一國さへ過分の所甲州をも併せ望むに因て漸々兩國を申受來りしに尙夫にても不足なりとは餘りなる申分かなと呆れかへつて居たりしに海野答て主人申されしは日本六十餘州皆拜領いたし候上は之を秀頼公に奉

數多有ぬれば信州一國の御惠みにては迚も引足申さゞれば甲州をも添賜はらん樣致したく然る時は早速御味方に參り申べし此儀叶ひ候やと尋ねければ信尹仕濟したりと心に悅び推量がましき事なれども成程其儀も隨分叶ふべく存ずる間又々申達せんとて夫より閑話に時を移し隱岐守は茶臼山にぞ歸りける扨幸村は急ぎ登城して言上いたしけるは此度關東より味方に參り候はば信州一國を宛行ふべしと申來り候につき此返答を申度候間恐れ乍ら秀頼公淀君にも出丸に御出駕下さるべしと申述べ夫より大野等をはじめ諸將を出丸にぞ招きけり

眞田幸村忠言の事幷大御所寬仁の事

扨も幸村は隱岐守を歸して夫より秀頼公淀殿其外の諸將を出丸に招きて申しけるは此度關東方より叔父信尹を使者として申來りしは大御所某しを招き信州一國を與へんと申越し候因て某し一言を以て追返す事はいと易く思ひ候へども願はくは諸將の面前に於て返答せん事を欲し故と承知の振に申し做し信州一國にては不足に付甲州をも併せ與へられ候樣返答に及び置候間頓て復隱岐守來らん其時幸村が返答を御聞有て御賢慮下さるべしと披露しければ秀頼公淀殿幷びに老臣七組の諸將も皆々幸村が所爲を賞し一間の内にて酒宴を始め信尹が來るを今や遲しと相待ける信尹は斯る僞りとは夢にも知らず急ぎ茶臼山に歸りて大御所に御目見爲ければ大御所いか

第三十　關東勢大軍番手攻の事幷眞田拔道の事

大御所には幸村を圖り給へども幸村從がはざりしかば今は是非なしとて再度軍の評議ありけるに秀忠公進み出られ味方には先達て番手攻を以て城を落さんと工みしに由なき小幡が内通に依て敗軍を引出せり然れども再度番手攻を掛是非〳〵出丸を攻落したしと有ければ其時伊達政宗誠に此儀至極に候へば此度は先達ての十二段に十段を加へ廿二段に備へを立て攻られ然るべしと申しければ大御所にも如何樣其儀宜しからんとて彌々再度番手攻と定まり又々鬮にて備を取極られける其隊伍の次第は

子　三宅對嶋守
丑　太田原備前守
寅　丹羽勘助
卯　大久保新八郎
辰　六郷伊賀守
巳　岡部美濃守
午　松平周防守

つり其身は快よく腹切て首を大御所に獻ぜんとの事にて候と聞て信尹はバタリと兩手を後につき天井睨んで物をも言ず又居直りて手を拱きづッと其まゝ座を立てぞ歸りけり跡にて幸村立出て其胸中を察し居ければ秀頼公淀君は只涙を流し幸村なればこそ甲信の兩國を受てさへ降る心はなければ今時の人心は爭で斯有べきと大に其忠を感ぜられ外諸將にも感涙を催し皆夫々に城中へ歸りけり斯て隱岐守は悄乎として茶臼山に歸り然にても此由言上爲時には信尹こそ君を欺き幸村と同心ならんとの御疑念を承るならん所詮腹切て相果るより外なしと已に覺悟を極めけれども又思ひ返していや〳〵此由君に告ずして死するは犬死同樣なり寧有の儘を言上して後腹切んこそ宜しけれと聽て大御所の御前に立出來れば大御所信尹を見給ふより待兼しぞ信尹幸村を伴ひ來りしや如何〳〵と有ければ信尹はサモ迷惑氣にて委細の事を言上し就ては某し腹切て果んと存ぜしが夫にては犬死と心得所詮甲斐なき命を生存へ是迄立歸て候憎む可は幸村にて候某し死して惡鬼となり彼に憂目を見させんと存ずるなり早申し上る事も是までに候今生の御いとま賜はれと已に斯よと見えけるにぞ大御所ャョ待しばし逸まるな汝に罪なし何條汝を疑はんや忠なる哉眞田義なるかな幸村余も初めより斯こそあらめと思ひしに果して其如くなる事道理なり太儀にて有し信尹とさしも寛仁大度の温言に信尹は其恩諭の篤きを感じ御前をぞ退きける

惣軍合せて廿五萬八千餘騎東西南北皆敵ならずと云事なし此大軍住吉小妻邊よりして充滿しけることを目覺しかりける次第なれ斯と聞て大坂城中は大いに怖れ十二段の備をだに幸村力能はずと云しに此度は増て廿二段と成ては幸村いか程智謀ありと雖も何ぞ之を防ぐ事を得んやと今は戰ふの心もなく息さへひそめて在けるにぞ木村後藤長曾我部等出丸に入來りて幸村に對面しければ幸村は酒を汲で興じ唯一人微笑て在ければ木村後藤長曾我部訝りながら幸村に向ひ尋ねけるは先頃十二段の番手攻にさへ恐れ給ひて七段までは崩せども跡五段は破り難しと有しに此度は増て廿二段と成たるに憂ひ給ふ氣色はなくて却て喜びを催されしは何事ぞと問しに幸村答へて某し兼てより敵の斯大軍を以て攻寄るを今や〳〵と待居る處に此度こそ願ふ所なれば軈て之を一捲りに追崩すか家康が首討取て見參に供ふるか何れ存分の勝軍せんと思ひしなりとサモ人無げに申しければ三人は餘りの大言に暫時言葉も無りしかば幸村再び三人に向ひ各方は此大軍を何と思ひ給ふぞ三人答へて此度は關東大軍を以て押寄せ來りし故出丸甚だ危しと思ふなり幸村何條然やうの事有べけんや某しを以て之を見る時は簇がりし蟻の如し三人夫は何故然樣なりしや幸村笑つてされば候某し此出丸を預かりしより是程の名城に拔穴のなき事は有まじと先達て所々を尋ねしに果して未申の方に當りて大石あり引起して見れば穴ありて人の往來するに自由自在なれば流石太閤の遠慮と其智を察し入たり然ば出丸を十分關東勢に攻させ置て思ひも

未
申
酉
戌
亥
甲
乙
丙
丁
庚
辛
壬
癸
地
土

森山城守
松平土佐守
井伊掃部頭
加賀中納言
松平庄三郎
山內對嶋守
安部惣太郎
松平右京亮
分部左京亮
土井丹後守
松平隱岐守
眞田河內守
小笠原信濃守
伊達陸奥守
保科彈正忠

校訂 眞田三代記第五編

第一　關東勢番手攻幸村手配の事幷幸村秀頼公を矢倉へ勸むる事

上は天象に達し下は地の理を察し人事の得失を明かにして萬民を子の如く愛撫す是を良將の才といふ慶長元和の際天下の爭亂に方り昌幸が二男眞田左衛門佐幸村は關ケ原の亂後紀州高野山の傍邊なる九度山に蟄居して在しが内大臣豊臣秀頼公の召に依て大坂に入城し關東より五畿七道の大軍をもつて取圍みたる兵を一孤城に在て打拂ふ事數度なるに敵も是が爲め頗ぶる苦しむ事誠に眞田の智謀感ずるに餘り有なり此時若し城中に淀殿大野等が偏執なく諸將心を一致し幸村が采配に任せなば誠に關東は勇々しき一大事なるべきに大坂の天運傾く處是非もなき次第なり然れども眞田が美名は後世の譽とぞ成にける偖も關東にては數度眞田が爲に敗軍し施す術におぐみ果如何はせんと思ひしに伊達政宗の工夫に依て十二支十干の備へ立をなし鬮取にして之を手別し合せて二十將其勢二十五萬八千餘騎仙臺保科を加へて廿二將とし出丸を乗破るべしと備へたり然るに城中にては眞田幸村關東方の備を見積り秀頼公に向ひ出丸の矢倉に於て合

寄ず夜の戌の刻許りより茶臼山の陣を燒立なば假令關東勢いかに死地に入とも本陣の火を見て引退きなん事必定なれば其時一戰に討て出思ふが儘に追散さば敵兵忽ち勇氣を失ひ大軍大崩となるならん是に依て大軍の此番手攻を待兼しなりと申ければ三人始めて拔道の有事を聞て大いに悅び幸村を三拜して誠しに某等愚にして斯る事を知らざりしなりとて夫より打連て未申の方に至り見るに果して大石の下に拔道ありければ三人手を拍て喜び偖は此度こそ大御所の首を取事容易からんと又立歸り幸村に向ひて今は心安く候程に此出丸は木村後藤長曾我部の三人承まはらん間貴殿は此拔道より茶臼山へ夜討して大御所を討取給へ此上は家康が首を見ん事旦夕に有んと三將は勇み切てぞ申しける關東方には斯る事とは露知らず二十五萬八千餘騎頃は慶長十九年十二月十一日我も〳〵と眞田が丸にぞ攻掛りければ木村後藤長曾我部は東西南の三方を防ぎ幸村は彼の拔道より忍び出て茶臼山へと急ぎける

私に曰く世に此拔穴を眞田が拔道と稱へけれども全く眞田が堀しにあらず此城を築きし時太閤秀吉公密かに堀せ置給ふ所なりとぞ嗚呼太閤の遠圖寳に油斷無りけるかな

校訂眞田三代記第四編　終

大野等口を揃へて申けるは敵兵大軍にて攻來らんに出丸の矢倉へ至り給はん事如何なり君子は危ふきに近よらずとの敎訓あり軍師の申し條然るべからずと支へしかば幸村答て某し之を知らざるに非ず是には深き謀計之れ有候へば必ず御心遣ひ爲し給ふなといふに淀殿然らば軍師には秀頼に從ひ矢倉に抵り如何にして下知せらるゝや幸村曰く某しは又外に深き謀計之れ有り候へば明朝より密かに出丸を立出で申すべし淀殿大野曰く軍師秀頼公の御側に居られざるは大いなる僻事なり眞田曰く然らば某しの所存を申すべし抑々德川家康は信玄も武邊第一と稱し故太閤も御心を置せ給ふ程の名將なり然るに秀頼公には未だ御幼年と云ひ閨中にて婦人の手に御成長なし給ひしかば城中の者下々に至まで此度の軍には大將は如何あらんと危ぶみ居る所ゆゑ是等の者の心を勵すにはいと危しと見ゆる矢倉にて酒宴を催され合戰の樣子を御見物ましまさば味方の勇氣を進むる事幾干にて候ぞや又此度の謀計は敵に一二の柵を乘破らせ充分勝矜りたる處を忽地に取返し敵の大將を討取んとの計略なれば一の柵破るゝ時矢倉より下り給ふとも何ぞ之を氣遣ひ給ふに至らんやと委細を語りければ淀殿を始め誠に軍師の申さるゝ所凡人の及ぶ所にあらずと乃ち秀頼公出丸の矢倉より御覽有べきに一決せり幸村又曰く抑々此出丸は當城の咽喉なれば關東勢先之より攻落さんとすべし然れども一時に二十萬餘の勢を指向ると云ふは却て働きを自由ならざる次第にて小勢こそ利あらん是即ち臨機應變の係る所なりと申ければ諸將は皆

戰の狀御覽あるべしと申上げ夫より大野修理亮治長同じく主馬亮治村兩人には松明を多分に用意させ小荷駄を指揮しながら敵の捨たる馬物の具兵器を取入べしと下知し我手の勢望月卯右衛門根津甚兵衛伊勢崎久太夫同友之丞諏訪權太夫都筑角太夫小貝八郎兵衛等には幸村に從つて出づべし望月內藏允同三右衛門川崎內匠小山庄五郎等には我影武者の穴山小助に從つて敵に當るべしと夫々に申渡しける然るに長曾我部進み出て申けるは軍師の手配殘る所なしといへども關東勢は二十餘萬今出丸の受手は僅に一萬に足らざれば諸手の持口を合せて加勢の兵を增さんは如何といふに幸村笑つて出丸は勿々落さるゝ事有ざるなりと云捨後藤木村長曾我部の三將に伊木七郎右衛門御宿勘兵衛伊藤內藏助和久半右衛門名嶋賴母戶田兵庫を加勢として大筒二十挺小銃二百挺紙製の銃百目より五百目までを取交ぜ（因みに曰く此諸銃は眞田が工夫を以て製へたる物とかや）授與て附從はしめ軈て夫々に謀計を傳へけるには敵方近寄り來らば大概に支へ强て手出をせず關東勢を充分に勝ち誇らせ三の柵まで引入れ置き其時我奇謀を回らし敵兵を惱まし散々に打たつる間其圖を外さず追討すべし又我手勢の中三好清海入道由利鎌之助は敵の寄べき道筋を横に入事五町にして今宵より伏勢を設け茶臼山の方に火の手上るを見ば夫を合圖に本道へ切て出出丸より引取んとする關東勢を横合より討取べし尤も鐵砲は小銃を用意して輕便に働くべし大助は斯樣安治は斯樣と殘りなく下知して夜の明るを今や遲しと待かけたり時に淀殿

物分部左京亮第七番は桔梗の旗に庚の指物土井丹後守第八番は梅鉢の旗に辛の指物松平隱岐守第九番は雁金の旗に壬の指物眞田河内守第十番は三階菱の旗に癸の指物小笠原信濃守なり此面々其干支〳〵に隨ひ東西南北の方角に配當し中央は五行土に屬するを以て土の字の指物にて伊達陸奥守保科彈正忠五番の列に當り竹に雀九曜の星の二旗を指立跡押へにて操出す惣勢二十五萬八千餘騎なり諸勢一度に鯨波の聲にて押寄すれば城中よりも眞田が丸にて同じく鯨波を合せたる其聲恰から雷轟の如く山も崩るゝ計りなり城方には眞田を始め木村後藤長曾我部が旗朝風に吹靡かし隊伍整々として星合口平野口黑川口玉造口鴫野口今福京橋口大手伯樂ヶ淵穢多ヶ崎平野高麗橋口に至る迄常よりも鎮り返て控たり斯て幸村は矢倉を下り密に一貫目の銃を仕掛て時刻の來るを相待ける處に關東方の先手三宅太田原丹羽大久保等我劣らじと下知し出丸へ押登る三宅が先陣伊藤彥八郎中川九郎八大井傳八郎等の面々衆に抽んで乘入んと打立しに城中よりは弓鐵砲を打掛ると雖も然のみ防ぐ體にも有ざれば不審に思ひ少し猶豫して態々窺ひ見るに何の手段も見えざれば率や乘入と云儘に森山城守が郎等根津多三郎と云者眞田が丸の一番乘と大音聲に呼はり乍ら塀に手を掛閃と乘上る此体を見て岡部が手より佐久間藤右衛門二番乘と飛越ける森岡部は遥に此体を見て彼討な續け〳〵と下知を掛しに勇氣の盈し者共我も〳〵と名乘りかけ塀に取付ば諸將は身を揉ソレ岡部森が兵に劣るなと氣を急りて同じく下知あれば

眞田が深智の程をぞ感じけり

第二　十干十二支諸將手別の事幷眞田二重塀計議の事

斯て眞田幸村諸手へ觸けるは明日は關東の大軍出丸へ向ふべし就ては隨分と旌旗を嚴重に押立十分城中の威を示し如何樣の事ありとも下知なきに打出る事なかれ敵攻掛る事あらば能防ぐべし猥に軍令に背く者あらば首を切て衆に示さんと嚴重に申渡し其夜は軍事に心を凝し明日をぞ待たりける時に慶長十九年十二月十一日拂曉の霜は雪より深く寒威は肌を刺ばかりなる北風烈きを凌ぎて關東の大軍今日の軍立は先十二支の諸將第一番は輪寶の旗に子の指物三宅對馬守第二番は丸に釘拔の旗に丑の指物大田原備前守第三番は打違短冊の旗に寅の指物丹羽勘助第四番は上り藤に大の字の旗に卯の指物大久保新八郎第五番は龜甲七星の旗に辰の指物六郷伊賀守第六番は巴の旗に巳の指物岡部美濃守第七番は蔦の旗に午の指物松平周防守第八番は鶴の丸の旗に未の指物森山城守第九番は黑だんだら筋に申の指物松平土佐守第十番は、橘の赤旗に酉の指物井伊掃部頭第十一番は梅鉢の旗に戌の指物加賀中納言第十二番は葵の旗に亥の指物松平庄三郎なり次に操出す十干の諸將第一番は白黑一文字の旗に甲の指物山内對馬守第二番は上り藤の旗に乙の指物安部惣太郎第三番は扇の旗に丙の指物松平右京亮第四番は三引の旗に丁の指

出せば冗玉とては一ツもなく暫時の間に百騎許り打落さる然ども大軍の事なれば少しも怖れず死骸を飛越〳〵我先にと乗入らんとするに又右の狭間より百挺許りの鐵砲を一同に打出し城中より嚴く打て出ると雖も關東勢は事共せず先を越れては先手に進し甲斐なし死ねや〳〵と云儘に城門の扉に競ひ集りアハヤ只一揉に破らんと見えし程に跡を押へし諸手の勢に切齒をなし拳を握りて押合壓合攻寄けるは恰も人の酢を見る如し時に眞田は豫て工夫の紙製銃を三挺づゝ揃へて一時に打出せば四邊は一面の黒煙となり咫尺の間も見え分ず漸々烟煙晴行き跡を見れば塀下に進みし者共は皆悉く粉に成て燒死其外近邊に押詰たる者或は燒爛れ又は手足を傷け身体自由ならざる者數を知らず城中よりは之を見て時分はよしと打て出當るを幸ひ切廻り薙倒し其まゝ人數を纏めて城中へ引入たり三宅森岡部太田原丹羽大久保等の勢は之を見兼て後陣へ突て引退けば井伊掃部頭松平庄三郎言甲斐なき者共の有樣哉斯る大軍を以て血戰を爲ながら引退ぞく事やある城兵は小勢なり攻め損じては天下の笑ひ草と成べし先手に進みし者共引分れて一攻せよと云儘に松平土佐守山内對馬守安部惣太郎分部左京亮土岐等の軍兵は十干十二支の旗指物を打交へ押懸る城兵此度は城門押開き眞先には鳥毛の馬印に藤の丸の旗を押立後藤又兵衛基次續ては金の御幣の馬印に四目の旗を指翳し木村長門守打て出縱横に薙立〳〵切倒し戰ひけり關東勢は是を見て遖後藤木村御參なれ我討取つて恩賞に預からんと簇り掛る關東勢を後藤木

スハと言ひ樣皆一同に押懸る押掛りたる面々塀を乗越見てあれば又内にも一重の塀の有けるにぞ此をも乗越んと皆々一同に手を掛たりしに千鳥塀とは夢にも知ず一同は塀と諸共瓦羅利瓦羅利と倒るゝ處を城中よりは得たりや應と突伏るに恰も芋を刺が如く皆悉皆く討れけり斯とは知らず跡より進む者共は此体を見て驚破又塀に仕掛ありと周章退かんと爲けるを塀の上より長柄の鎗にて突立て或は大木大石を投掛〳〵禦ぎければ彌が上に重なりて死する者幾何と云數を知らず

出丸合戰眞田後藤武勇の事并秀頼公御仁心の事

關東勢は少し褰みて見えければ柵を破らんと三宅森岡部の面々正面より打掛ると雖も打出す鐵砲に進む事成難く見合せて居たりけるが森山城守松平周防守の軍兵等今は多勢を賴とせず思ひ思ひに散じつゝ塀を乗越んとて松平周防守が手には岡田大炊杉浦太郎作番場九郎右衛門岡部が手よりは太井剛右衛門猪俣助七など堀に馬を乗かけ既に乗り越んとしければ是を見て諸手の軍兵破落〳〵と備へを亂し加賀山内勢を始め悉皆く堀に馬を乗入しに城中より之を見て或は射落し又は打落し防ぎ戰ふを關東勢は事ともせず難なく五六人塀下に至りけるを眞田は豫て工みし塀なればスハと云ふより押寄來る左の狹間より百挺許りの鐵砲銃口を揃へて一時にどんと打

て押登る續て松平右京亮保科彈正忠眞田河内守小笠原信濃守最初に敗れし三宅岡部大久保森松平等の軍兵再度押掛る此時秀頼公には櫓に在て防戰の體を御覽せられ斯る大軍を能も防ぎし事よと目を離さず見給ふ處に六文錢の旗一流番手の中に見みしかば軍師を呼て來るべしと有けるに幸村は此時矢倉に在て計るべき旨あれば一寸も退かれず依て名代として大助治幸御前に來れば秀頼公指さし給ひ敵の中に六文錢の旗見ゆるは定めて同姓ならん誰成やとの御尋に大助彼事は去年病死仕つりし伊豆守が嫡子某しの從弟なる眞田河内守にて候某し彼とは正く親戚に候へども幼年にして關ケ原亂後東西と引別れ候へば父幸村も未だ河内守には對面仕つらず又紋は同く候へども彼が紋は波形錢六ツ付候と言上す秀頼公聞給ひやがて伊藤丹後守を召れ寄手の中に六文錢の旗見ゆるは軍師の親戚なり鐵砲は勿論矢一ツたりとも向る事を禁制すべしと有ければ治幸は發と平伏て是は有難き上意なれども敵味方となりては何ぞ親戚の私しに預らんや此儀は偏へに御免下さるべし假令從弟にもせよ伯父にもせよ某し對面せば討取歸るべし戰ひは天下の事なりと辭退申上るに秀頼公頭を掉られ大助爾云事勿れ是は軍師への禮儀なりと有て急ぎ此旨を觸べしと有ければ丹後守畏まつて即ち下知を傳へしに諸軍勢是を聞て流石は故太閤の御子なりと各々御仁心を感じけり且又今日の大合戰を御覽有し狀は全く以て勇氣在なさゞるとは見えねども畢竟御側に大野の如き未練者ある故にこそと上下擧つて悦びける淀殿此沙汰を聞き却

村に事ともせず猛虎の群羊を驅が如く四角八面に駈散しければ是を見て松平庄三郎忠昌葵の旗に亥の指物を翳し操出して後藤を目掛追取卷ば先手に進みし大庭小八郎新井太郎右衛門を始めとして英雄の者共我劣らじを切結ぶ後藤が手よりも阿閉太郎右衛門半田次郎右衛門渡り合ひ火花を散して攻戰ふ程に忠昌金の采配を取て馬上より下知し後藤を餘すな打取と有ければ後藤は大身の鎗を水車の如く振廻し薙立るにぞ近付者一人もなく長門守は分部土岐の軍兵を追立首を取事十餘級夫より後藤と一手に成諸勢を追拂ひ靜々と引退くを松平庄三郎是を見てソレ敵は引退くぞ付入にせよと頻りに下知し給へども早後藤木村が手並に怖れ者共は顏見合せて進み得ず空く控へ居たりしかば辰の刻より軍始まり晝過ると雖も何の仕出したる事もなく双方互角の軍とこそ見えにける此時後に控し松平隱岐守小笠原信濃守眞田河內守仙臺陸奥守等は諸手と入替り攻んとす別して陸奥守政宗は番手攻を勸めし由なれば人に先を越れては當家の恥辱なりと眞先に馬を乘出し大音聲に申さるゝは如何に諸手の面々能聞れよ城兵は小勢なり味方は斯る大軍殊に二十二將打向ひながら僅敵の出丸一ッだに拔事能はず浮々長陣せば何の面目有て立歸り主君に申し開きいたさんや政宗は今日討死と覺悟したり心あらん諸將は我と共に討死あれと云儘に竹に雀の旗を靡かせ土の字の指物を翳して諸手に抽んで攻掛く伊達片倉安藤等の手勢を下知してイザヤ出丸を攻落せ然なくば爰にて討死せよ一寸も退なくと呼はりつゝ城の柵を指

在ばこは如何に從者三人耳打碎かれ大將軍の在さゞれば殘念なり此度も又仕損じたり良々今宵今一計を施して討取ん者と切歯を爲して居たりけり此時秀頼公も矢倉を下り立歸らる扨も幸村は之より抜道を忍んで茶臼山へ夜討を掛る用意に取かゝり又柵際には關東勢雲霞の如く押付て戰へば城兵も同く喚いて防ぎ戰ふと雖も寄手は鳶口鎌を打掛〳〵する程に外の柵の木戸を押破り仙臺の手勢白川片倉伊達等竹に雀の旗を門内に押立たり是を見て諸手の面々渠に劣るなと小笠原保科等同く押上りければ先に入し者共内より門の貫木を開き味方を引入吻と喚て押入ば政宗は勇み進んで此圍を外すな押掛て二の柵を破るべしと曳々聲にて攻掛る三宅岡部の面々之を見て押への仙臺に先を越れては我等が指物の甲斐なきぞ生存命て何かせんスハ一番乘と勇み進んで出ければ同じく松平周防守大久保新八郎丹羽勘助太田原等も生て恥辱を取んより當城を枕として骸骨を此土に曝さん者と下知を掛ッゝ押行しに二の門颯と押開かせ出たる武者は紺糸の鎧に同毛の鹿の前立物打たる兜を猪首に着なし軍配を以て月毛の駒に跨し左衛門佐幸村が影武者穴山小助安治なり關東勢は是を見て驚破眞田よと云程こそあれどろ〳〵と崩立て引退きける影武者が左右より御宿勘兵衛伊東内藏介和久半右衛門名嶋頼母戸田兵庫等轡を揃へ鎗を以て突出ければ此鋒先鋭くして關東勢は彌々堪らず色めき立ば長曾我部宮内少輔が一子右衛門太郎と名乘り出て打て掛れば仙臺の手よりも片倉伊達の兩人踏止まり苦戰すれども終に追卷らる其

つて眞田が智慮の深を感じ給ひしとなり

第三　大御所井楼にて危難の事幷眞田大助同内記弓術の事

斯て城中の面々は寄手の中六文錢の旗引取ならば鐵砲を打出さんと狹間配りして待居たる所に仙臺政宗眞先に押來り續て保科小笠原岡部大久保等の面々も必死と成て働き柵門を越んとすればば城兵等は突落し切落し力を盡して防戰すると雖も寄手は元より大軍の事なれば新手を入替入替以前にも懲ず千鳥塀を又々越んとするもありて死者狂ひに働けば難なく塀を押破り保科の一手は土の字の指物を出丸へ押立て後陣の味方を招ぎける續て小笠原が軍兵押來りければ城兵は之を防がんと薙立切廻りし故塀の邊は腕を積揚恰も大根を干たる如し然共必死の軍兵は兼て覺悟と怖るゝ氣色は更になく忽ち塀一重を打破り既に出丸へ乘入んずる勢ひなるに茶臼山に在ます大御所は今日の合戰を見給はんとて生玉の馬場先に組置せし井楼に上られしに俄に震ひ出されしこそ是好運に在ます兆なるらん此時眞田は一貫目の筒に玉を込大御所今日の合戰を見給ん爲井楼に登られしなば一度に打落さんと今や〳〵と待居たる所に夫と見るより件の大筒を打放しけるに源君には早疾大久保彥左衛門を召連下られし跡にて殘りし水野與八郎松平舍人川崎藤五郎の三人のみ微塵に成て失けるこそ危きなんど云ふ可も無き有樣なれ幸村は首尾如何と見て

や掛れと勵せば諸勢は穴山を誠の幸村と心得追取卷我劣らじと切て掛る穴山は大太刀拔翳し馬上に勇を奮つて戰へば向ふ者袈裟掛車切に切立られ暫時も是に敵し難く終に崩れんとしけれども名にし負關東方は雲霞の如き大軍なれば新手入替りて攻戰ふ程に穴山は戰ひ疲れ柵の中へ引退くを關東勢驚破眞田は遁るぞと打て掛れば從ひし手の者望月內藏介同三右衛門川勝內匠小山庄八郎等踏止まりて支ゆれば關東勢又も色めき立處へ木村長曾我部後藤等止まつては戰ひ戰つては退きける故夫付入にせよと二の柵を押破りて入ける中にも三宅對馬守は今日一番の先手子の指物にて打出でけれど仙臺に先を越れしを口惜く思ひ嚴重下知を傳へける程に手の者の內曲淵大九郎は終に二の柵を打破り大音にて二の柵の一番乘は我なりと名乘間もなく柵の內より突出す鎗先に曲淵は終に討死しけり是に續いて旗奉行井戶惣太郎は子の指物を二の柵の中に押立ければ岡部が勢も押入驚破と云程こそあれ諸手の勢ドッと二の柵へ詰よせしに城兵は三の柵へと潜みけり其內日も西山に入ければ關東勢は是を限りに人數を引上んとすれども城兵は又も打出で引取べき樣有ざれば止事を得ず取合けるに今は日も全く暮果て人馬疲れたれば大御所は使番を以て戰ひを引上よと下知有る折柄時分は好きぞと幸村は手勢を引て拔道より忍び出で尻寺の方へ押行寄手の本陣茶臼山に向つて手勢に下知し所々へ火を放ち鯨波を作て打入ければ大御所大に驚かせ給ひ夜討の敵は誰なるぞ若や味方に反應せし者有しかと疑はせ給ふも道理なり然

時眞田河內守は六文錢の旗に壬の指物を挿弟內記も續て手勢を下知して柵の內へ馳入ければ大助治幸は矢倉の上より大音聲に呼はる樣夫に見え給は正く我親戚たる眞田河內守殿と見受たり斯申は其許が一族信州上田の城主眞田安房守が二男左衛門佐幸村が一子大助治幸なり此度秀賴公の御仁心に依て其許が旗の手と見るならば弓鐵砲を停止し給ふと雖も戰場に於ては私しの用捨はなり難しイザ一矢參らせんと弓に矢を矧げひやうと放せば着たる兜の緒を絕て兜は大地に落たりけり是を見て敵も味方も一同に呀と感ずる其聲暫しは止まらず其時河內守が舍弟內記は陣頭に進み出是は河內守が舍弟內記なり大助が弓勢の程駭き入たり然れば初めての見參に某しも聊か手練の程を見せ申さんと强弓に鷲の羽の矢を番へ滿月の如く引堅め切て放てば過たず大助が兜の吹返しの緒を射切たりし其有樣は其昔扇の的を射留たる那須の與市が高名も是には過じと思はれけり

第三　幸村拔道より茶臼山へ夜討の事幷紅屋市右衛門奈良漬名譽の事

扨も關東勢は討死手負多しと雖も入替り立替り必死と成て攻掛る中に松平周防守安部惣太郎兩人は大音にて今日の戰ひに眞田幸村を討取ならば今朝よりの敗軍も一時に勝利と成ぬべし掛れ

るに香の物は幾計も御座候と申しければ源君聞し召軍中に香の物幾計も有とは吉兆〱出來たり〱と宣ひ其香の物を陣中へ贈られけるとかや是より在陣せられし內は御膳の度々紅屋方より香の物を差上し所遂に幸運を得られしかば軍平定の後三百石の地面を賜はり毎年奈良漬を江戸表へ献上するの例となり献上の時々京都の愛宕山長床坊の方にて所司代長床坊市右衛門の三人立合にて吟味し江戸へ下しけるとぞ扨も幸村は源君の立退しとは思ひも寄らず所々探し求めけれども相知れず又此度も討洩せしかと殘念には思へども是非なく引上んと本陣に殘りし旗本勢を追散せしかば旗本勢も思ひ寄ざる不意を討れし事なれば大に駭き周章狼狽るのみにて大將の御身の上如何あらんと行衛を案じ追付んとする者共計りなる其中に高力左近大久保玄蕃同長門守本多兵庫介等馳向ひ防ぎ戰ふと雖も眞田は早引を考がへさのみ合戰を好まざるに成瀨安藤追討するにぞ根津甚太郎伊勢崎久太夫小貝八郎三郎等戰ひ乍ら引上んとしければ旗本の面々も長追せじと止まりし故眞田は其儘城中指て引入ける關東方の諸手此火の手を見て大いに駭き京極秋田仙石相馬水野吉川西尾淺野酒井等を始めとして追々に本陣へ馳付來りしかども最早眞田は引取し跡なれば詮なく思ひ所々の火の手を消んと馳廻りて下知しけり

第四　關東の寄手惣敗軍の事幷大助夜討新將軍家御危難の事

るに火の手彌々熾んなれば透し見給ふに六文錢の旗一流見えて大音聲に眞田左衛門佐幸村今日君の井樓に在すに鐵砲を參せし所本意を遂せざる殘念さに直御首級を申受んと是迄推參致せしなり迯給ふ事勿れと突て掛れば是を聞て大御所大に仰天せられ眞田なるかさるにても何れより來りしや天よりや降けん地よりや湧けんと其騷動は大方ならず大久保彦左衛門君を馬上に助け乘せ住吉指て退くべしと馬を追立〳〵馳行所に跡より御小性近侍等追ひ駈來り住吉にも大亂相起りて今を盛りと敵將眞田大助治幸新將軍の御本陣へ夜討を掛け甚だ御難儀成由なりと申ける故又々道を變給ふに大久保永井唯兩人追付御馬上にては却て良敵と怪しまれん御歩行にて落させ給へと申けるに大御所爰は何國と尋給へば彦左衛門所の者に尋ねけるに片桐市正が領地なる茨木と申けるゆゑ兎角油斷成まじと息を限りに富田まで落給ひ爰にて休息し夫より大久保はトある酒屋へ伴ひ申しける此酒屋は富田の豪家にて紅屋市右衛門と云名高き者なりしが三人の者の体を見て唯人成ずと思ひ奥の間へ請じ樣々御介抱申上る時に大御所には出丸の軍兵引取らざるに氣を揉せられ未だ寢食も爲し給はず在しかば殊の外空腹なりとの事に大久保彦左衛門臺所へ立出て御膳を申付たるに急に仕立るを待兼給ひ何にても苦しからず早々出せと御催促ありしかば奈良漬の香の物にて湯漬を差上るに香の物を殊の外召上られ頓て主人を呼出し候へとの事に永井右近大夫主人市右衛門を伴ひ御前に出れば此香の物殊の外風味よろしまだ有やと問給ひ

軍何かは以て堪るべき番手の指物太刀長刀も取落て散々に成て惣敗軍とぞ成にける此時大野修理亮治長は豫て幸村が指揮に依て小荷駄を下知して在ければ敵の取散したる武具馬具に至るまで悉皆取納め松明を振立〳〵眞田が分捕の品々と合せて馬に背負せ勇み切て引取ける今朝よりの合戰なれども然のみ軍勢を損せず一旦取れし出丸も夜の亥の刻迄に皆悉く取戻しければ城方は勇氣倍々進みけり偖又眞田大助は幸村より謀計を受て密かに住吉の新將軍秀忠公の本陣へ夜討を掛たりしに住吉の本陣にては折から眞田が丸の注進に一度は悦び給ひしが夫ぎり敵の引取らざる事を不審に思され隨分と陣中を堅固にし油斷なく守らせ有し所俄かに茶臼山の方に當り火の手見えしかば是は如何にと駭く所を此圖を見濟し眞田大助は豫て其手に從ふ者ども海野六郎兵衛望月主水益田六太夫を始め究竟の武士二十騎ばかりを從がへ鯨波の聲を揚本陣に切て入大音聲に呼はりけるは眞田幸村茶臼山に於て家康殿を討取たり因て新將軍の首級申し受ん爲に是迄來り候者は眞田幸村が一子同苗大助治幸なりと呼はりければ諸手の軍兵之を聞て周章狼狽各々茶臼山の火の手に駭き駈行し跡なれば陣々空虚の折柄大に亂れ立て秀忠公は急ぎ本陣の裏手へ出給ひ舍人甲斐〴〵敷馬を引來り早ふ遁れ給へと井上右衛門安藤治右衛門僅に五六人扈從して遁れ出されしを眞田大助馬に鞭當て追駈來るに本多中務大輔水野日向守大助を支へ戰ひければ海野望月等渡り合ふ其際に大助は手早く駈拔將軍を目がけ既に追つかんと爲しければ將

扨も眞田幸村は手輕く人數を纏め引退くに豫て丑字の指物を指敵の番手攻の軍勢に紛れ出丸の柵の方へと引上るにぞ寄手の者は何の心もつかず通しければ大敵の中を摺違ひ難なく引揚し幸村が不敵の心ぞ恐ろしけり然るに出丸へ押詰し諸手の軍兵は茶臼山の火の手に駭き是は如何にといふ程こそあれ總軍大に怪み正く味方に返り忠の者ありしか然ある時は此所に居るも敵の謀計心許なし兎角本陣こそ大事なれ救はずんば有べからずと諸手一同に操戻す然るに眞田幸村御本陣へ夜討を掛しと呼はる者有ければ驚破一大事と押合〳〵揉に揉で押來る此時操引に引事なれば森山内小笠原眞先に退く所豫て横道に廻り居たる眞田が伏勢本道へ出手ぐすね引て待掛しに關東勢破落〳〵に成て引來れば横合より鐵砲十五挺銃口を揃へて一時に打出せば山内が勢忽地七八騎打落され前に敵あり備を立よと下知を爲しつゝ制しけれども押合〳〵引取來る故更に耳にも聞入ず其内大將三好清海入道同爲三入道由利鎌之助等も横鎗に成て突崩すにぞ夜中と云ひ思ひ掛ざる事なるに關東勢狼狽廻り或は馬に踏れ或は同士討する者數知れず眞田幸村は丑の指物差て關東勢に紛らし一の柵と二の柵の間に行たりけれども關東勢は幸村夜討に出しとは思ひも寄ざる所に幸村時分を見濟し颯と六文錢の旗を押立松明を燃し眞田左衛門佐幸村爰に在りと名乘出し仙臺保科三宅が勢の中に割て出ければ關東勢是は如何にと駭き騷ぐを幸村得たりと突伏切伏薙立る程に此圖を見て二の柵の門押開き木村後藤長曾我部等も打て出ければ關東の大

之れある間死骸を納め遣されかしと有しかば寄手此札を見て暫時呆れて居たりしが各々評議して敵は昨夜の勝利に油斷してあらん不意を攻寄んと言もあり又城兵等謀書を設けしならんと恐るゝもありて空く其日は合戰もなく昨日の大敗を怒り城を詠めて居たりけり殊更大將御父子には每度眞田が爲に惱されしを安からざる事に思して專ら軍慮に苦み給ひけり

後藤又兵衛叙任の事幷小幡勘兵衛入墨追放の事

扨も大坂城中にては昨日の勝利を大に悅び秀頼公淀殿にも出席せられて出丸の戰將を呼び出され賞たまふ事大方ならず取わけ幸村には秀頼公自ら長光の太刀を賜はり大助にも靑江村正の短刀を賜はり其外長曾我部木村御宿和久以下の面々にも夫々引出物あり且又後藤又兵衛は先達て入城の節諸大夫に任ぜらるゝとの內意ある所に片桐等の評議に只今後藤に任官を命ぜらるゝとも勿々承知有まじければ後日功を立るを待て任ぜらるべしとの事にて捨置るゝ所なれば這回の功あるに依て從五位下隱岐守に叙任せんと有ければ又兵衛謹んで某し任官を望みて入城せしと沙汰せられん事殘念に存じ候間此儀は御免下さるべしとありけるに眞田大助進み出て是は後藤殿の存念とも覺えぬ者かな凡士たる者官爵を望むは常の事なり道に非ずして望むは格別功あるに因て賜はる所の者を何ぞ辭する事あらんや且又軍兵を指揮し給ふにも無官にては輕ろんず

軍は眞田が威勢に恐れ給ひ猶も遁れんと馬に鞭あて急りにあせりて逃げ給ひしに大助は今は危ふく馬を乘寄せんとしければ大久保治右衛門踏留まり打て掛るに此時眞田は弓に矢を番ひ遁給ふ將軍の後より夜陰なれば兜の閃星の輝くを目當に引絞つてヒヨウと放せば狙ひくるひて後に立し松村治郎兵衛が脊にグサと立ち松村堪らず只一矢にて射落されたり此矢跡にて改め見れば豫て用意や仕たりけん矢の根には毒を仕込みて有ければ松村が脆くも死せし事實に然る事と思はれけり扨も秀忠卿は手早く馬を進め遁れ給ふに安藤治右衛門は大助に渡り合戰ひしが大助は新將軍を討洩したる上は強て戰ひを好まず引返すに治右衛門も取て返し君の御跡を慕ひけり眞田は夫より榊原が勢に懸隔られ漸々多勢を打破り郎等を引具して難なく城中へ引入しに諸人は謀計あらんを恐れ追駈もせず見て有りしかば眞田は安々と城内へ引取ける偖今日の合戰には關東方廿五萬餘の大軍を僅に一萬に足ざる勢にて打勝しこそ全く拔道をなし夜討を掛しに依てなり且又關東方にて今日の討死は五萬餘人と聞しも城兵は僅かに三百餘人に過じとかや斯くて眞田は下知して夜の明ぬ間に死骸幷に木石を城中へ運び入させ敵の死骸は堀際に積上旗印と十干十二支の指物は悉皆く拾ひ集めて土手の上に揚させ札を建て書記しけるは敵方には旗印等を失ひ嘸や御不自由成べしと存じ此所に建置候殊に十干十二支の指物は珍しく覺え候其主々御見分有て御持參有べし扨又大木大筒にて討倒されし死骸二萬許りも相見候畢竟討死は忠義の筋にも

の功を立活命の恩を謝せん者と心掛るを知り幸村は密意を申含め置し事故此度小幡が內通の事幷びに城內之に與したる者迄探り知るを得しなり此忍組の內には關東の廻し者多分に在りけるを小幡は追々に手につけ其上星谷口門の鍵預り內藤甚太夫縄手德十郎藏奉行の玉置政藏猪口武助なども皆小幡に引き込れて內謀に組し何時にても關東より攻入ば持口の味方を害し內より討て出んと約せし者諸口に多かりしを山本悉皆く探り知り證據に所持せし小札を奪ひて幸村に斯と告しかば眞田は殿中へ出仕し其罪を糺さんとて千疊敷に秀賴公の座を設け列座には織田有樂齋大野道犬同修理亮同主馬介淺井周防守稻垣右衛門尉速見甲斐守仙石入道宗也齋湯淺右近名嶋民部多田入道藤彌齋戸田民部少輔七組の番頭郡主馬野々村伊豫守堀田圖書介伊藤丹後守青木民部少輔中村式部少輔眞野豐後守等を始め渡邊三浦生駒今木南部後藤木村長曾我部土井なんどの面々を招き寄せ薄田隼人に命じて小幡勘兵衛を引來らしむ薄田は頓て小幡を引來りしかば幸村小幡に向ひ汝は關東の犬と成て當城へ忍び入り關東勢の攻寄るを俟て城中に火を掛んと工み忍び組の內へ廻者を入置剩さへ內藤甚太夫縄手德十郎等の御家人までを自分の方へ引込し條以の外武士道に背きたる者なれば其咎に依て首を刎梟首に掛て諸人の見懲しに成べしとあれば小幡は只首を低れ一言も云ず大野が方に向ひ頻りに目配せしければ大野は彼が平日己に媚諛ひ諂評定にも彼に利を作る樣に成置ける故今日の時宜を餘所に見ても居られざれば進み出て申樣軍師

る所もあり早々御請有て然るべし若年の某し不禮をも顧みずして申所は御用捨あれと申ければ木村長門守側に進み出て大助の申さるゝ所至極せりと言ひしかば後藤も然る上はとて承諾を爲したりしとぞ

或人問て曰く眞田幸村は茶臼山に黄氣の立昇るを見大將井樓に在るを察し鉄砲を打掛しと言ふ事あり然るに大仁村にて敵將危難に迫り賤が家に忍び給ふに幸村主人に欺られ柱に切付證を殘して引取しとは黄氣見えざりしか答て曰く黄氣は天文に現はるゝ自然の氣なり心を鎮めて遠く望めば何邊ともなく立騰るを云なり然れども其所に至り見るとて其氣の其所に有に非ず況てや戰闘咫尺の中に於ては何として黄氣の沙汰に及ばんや又問眞田拔穴より打出て敵將を惱ませし程ならば何處までもと追掛べきに然はなくして引取事は如何答て曰く此時眞田長追ひせば關東の大軍返し來る事必定なりさすれば城中の手筈違ひ追討せし功なければ時刻を延さんより早く引上るを勝とせし者なり問者唯々して退く黄氣は五行の中土に屬するを以て國土を保つ人に向つて立事は和漢其例少なからず漢の高祖宋の趙匡胤等の事併せ考ふへし

扨も幸村は捕へ置し小幡勘兵衛が關東方へ内通したるを疾より知り居たる譯は先年紀州九度山村に於て助けし山本九兵衛は忍びの妙を得たる者なれば免して城中に入れ忍び組に爲し置けるが九兵衛も眞田父子に心服し隨分と忠を抽んで仕へしがいまだ寸分の功も有ざれば何卒して一

月は元照ざるにあらず浮雲の爲に光を失なひ水は元清からざるに非ず泥土之を濁すと爰に大坂の執權職忠心無二と聞えし片桐市正且元は神出鬼沒の妙策を貯へ仁義禮智の道を守り柱礎の良臣たる所に大野が嫉みに因て關東の反間と誣られ忠義は遂に水の泡となりければ止事を得ず舍弟主膳正諸共居城茨木へ引籠り居たりしが然るにても我々斯迄武運に盡たる事かと舍弟主膳正或日兄市正に向ひて申けるは關東の御所存は如何成事にて候や甚だ以て其意を得難し其上兄君關東には如何成御計略か候や且又地面の契約まで有し事扨々不審千萬なりと申ければ市正は莞爾と打笑ひ汝未だ知らざるべし今我深き所存を語りて聞せ申さんまづ本多と緣を結びしは兎角關東の難題を聞んと欲せしなれども其は暫く置きこの方よりは手出をせず和をもつて扱ひ居り其内淀殿人質の事承知返答ありとも新たに四丁四方の屋敷を造りし事なれば地形にも半年餘り掛るべし其上普請の材木を舟廻しと號し難風破船等を申立て夫より普請に掛り又一年も過さば夫是にて一年半年の延引はなるべし斯段々延引する内には大御所には早七十有餘にましませば餘命も永かるまじ其時に臨んで又好謀計も有るなり先當時の有樣にては唯此方は和らかにして彼の方の謀計に就て却て其謀計を用ゆるを上策と爲すなりと秘密を悉皆く申聞せければ主膳正は初めて感心し兄君の奇謀は凡慮の及ぶ所にあらず此上は兎にも角にも我等は關東へ隨身し專ら忠を勵むべしと申せば市正如何にも汝等は是より關東の御陣へ參り仕ゆべしたとへ

の計ひ道理なりと雖も夫にては刑罰酷に過べきか賞は重くし罰は輕くせよと古賢の教訓も之有ば軍師宜敷賢慮有たしと言ふに幸村莞爾と笑ひ山本が注進にて召捕置し御家人內藤縄手玉置等其外小幡が家來月ヶ瀨與右衛門木股甚助瀧長八等の三人をも引出し又串樣斯る人非人の者共は悉皆く首を刎べきなれども畜類にも劣りし者切たりとて何の詮も無れば皆々助命致すべし然乍ら以來の見せしめに印を付て吳んずと小幡を始め御家人幷びに小幡家來其外關東より廻者の忍び足輕共に至るまで悉皆く引出させて左右の指を殘らず切落し其內小幡へは顏に入れ墨して皆追放せしかば四邊は指にて宛から土筆を散せし如く無慘なりける有樣なり偖て眞田は大野に向ひ串樣斯奸謀の者共に古老の御身として內緣の如く入魂あるは甚だ以て其意を得難し大野殿には別して御贔屓にせられし條心得ぬ事に候と詰りければ大野は赤面して何共答ふべき樣なかりけり偖も小幡は面目なくも大坂の城中を追放せられ關東の陣に歸りければ源君には以ての外に怒り給ひ渠元來淺智にして內謀を仕損じ斯る姿となりて此方の陣へ來る事言語に絕し次第なり首を刎べしと有けるを本多佐渡守種々取成て漸々預かりと成て濟けるが後年に至り淺草の藏奉行を命ぜられしとなり

第五　片桐市正高野山へ登る事幷眞田大助火砲を試みる事

へ置たり能々試み給へと云しかば淀殿秀頼公の前にて七組の古老等と列座し大助を召て此銅蓮を使ひ見よと有しに大助畏まつて然らば鼻を掩ひ給へと云て軈て石炭を取寄地に埋め松明を振ければ地中鳴渡りて銅蓮轉び廻る時に水彈を以て水を注れば蓮花の如く開いて其中より蜂の如くなる虫飛出しければ其座の者共臭氣に堪かね色惡くなりて立退りたり稍ありて皆々歎息し若年の大助恁る物迄も使ひ覺えし事流石は幸村が子息驚き入りたりと感ぜぬ者こそなかりけれ

第六　後藤庄三郎登城の事幷淀殿勇氣返答の事

斯て片桐市正且元は既に高野山に登り弟主膳正貞隆は是より關東方と成て寄手の中に加りけるが然にても兄且元が誠忠の程を城中へ知せ度と思ひ居たる所に茨木より家來來りて申樣此一封木村長門守方より差越候間持參せりと差出すを主膳取る手遲しと開き見るに久濶の情を細かに認め扨も貴殿の兄關東にて淀殿人質の事を御受合ありし御内存は幸村疾に察し居る事と見ゆれども淀殿より秀頼公へ内情を申述られ兎角此事も叶ひ申間敷存ずるなり是偏へに御側に不正の者在て夫が爲君の明も暗ませ給ひ遂に誠忠の臣下を失はせけるに因て篤と虛實を正し御用捨有べしと某し諫言を入けれどもいまだ兎角大野が奸曲は止ず然し市正殿の忠節は今更淀殿にも感じ在れ候樣存らるゝなり我貴殿と兄弟に等く交れども其意は幸村が諫言にて初て悟り床しく

關東へ仕へるとも仔細ありての事なれば義に違ふ事有べからずと閑談數刻に及ぶ所に郎等來て關東の御陣より使者として水野日向守來れりと申込しかば急ぎ上座に請じ君命を待に日向守申けるは御用の儀有ば兄弟兩人共來るべしとの上意なりと傳へしかば片桐畏まつて則ち水野に從がひ本陣へ參上せしに大御所且元を召て扨其方只今の所存如何なるや且元さん候某し儀は大坂の臣にて候へば何分御用ひには相成申間敷弟主膳儀は如何にも御召使下され候て然るべしと申上しかば是より兩人を本陣に留置給ふに合戰の度ごと關東勢敗軍すれば殊の外悦び大坂方敗北すれば悲みの色を現はすに依て且元に問はせらるゝは汝我陣に在て何ぞ味方の敗軍を悦ぶや市正謹んで某しは大坂の恩を受る事山の如くに候へば何ぞ大坂の勝利を悦ばざらんやと申せしかば大御所然ば大坂亡びて天下一統する時は如何せんと思ふぞ片桐某しは唯伯夷叔齊が跡を慕ひ高野山に引退くべしと存候なりと御答申せしに大御所聞し召涙をはら〱と流され忠なる哉片桐義なる哉且元今は汝が心に任すべし弟主膳は召使はんと有しかば且元は御暇賜はりて是より高野山へ登りけるこそ哀れ成し次第なれ又爰に大坂城中高麗橋口の矢倉に太閤の時代より赤銅玉を夥多く貯へ置有しを織田有樂齋眞田に問て曰是は何の爲の物に候や眞田是は銅蓮火砲と申して朝鮮攻の時小西攝津守大明の將の爲に之にて大に破られ城を明たる事ありしに加藤肥後守大明勢の後より攻入之を奪ひ取て太閤に奉つる故此所に納め置るゝなり用る法は大助し

御對面なくては如何なり御得心の有無は御心任せに候と述ければ淀殿云く斯まで勝利の合戰に軍師としても何ぞ今更和睦を好む事有べけんや然ば先呼入見申さんとて所々の用心を嚴重にし頓て庄三郎を招き入給ふに庄三郎種々の献上物をなし扨申樣恐ながら斯御合戰の事實に心憂き事に存じ奉り候此儀に付候ては京都宰相高須樣の御室常光院樣(淀殿の妹なり)幷びに阿茶の局の御兩女御登城有て御對面なされ度思し召に御座候と述しかば淀殿扨は幸村が申したる事に相違無と勘付れ態と笑を含みて誠に捨難きは兄弟の好なり常光院爾おもひ呉給ふなら妾にも逢たく存ずる間太儀乍ら其方茶臼山の陣所に行て誘引來るべし男子は入城成難し女子は苦しからず對面せんとあれば庄三郎則ち茶臼山へ立歸り斯と申し述ければ大御所急ぎ常光院を招かれ和睦申入のため城中に到り斯樣〳〵申可とて阿茶の局を添庄三郎には後日恩賞として若狹守に取立んと有て登城爲さしめければ城中には諸將を千疊敷に集め待給ふ所に女儀達は高麗橋より入城し千疊敷に通り坐定まりて後常光院の曰く偖も此度不慮の合戰始まり何れが負給ふとも姉妹の中なれば如何計悲き事共なり何卒和議の御事もがなと此度は故々登城を願ひ御對面を得て此事申上度罷出候とあれば淀殿其御事は然事ながら元是は大佛の鐘の銘の事に付大御所方より樣々難題の事を申掛られ夫が爲軍と成し事なれば今と成ては然る事も叶ひ候まじと答られしに常光院聞て否とよ關東の御方は只今となりては指て其御事に深く御掛念も在さぬ事なれ

存候畢ぬと書てあれば主膳正偖は兄君が忠の程も大坂方へ知たりしかと少は悦びの色を成たるとかや又木村が今片桐の退却せし先へ斯る書を贈りし事の仔細は淀殿彼が誠忠の顯れしを悔居給ふを知せ度二ッには何と無城中の有様を關東方へ知せ關東へ飽まで油斷をなさしめ其裏を欠んとの謀計なりしとかや扨も大御所新將軍には茶臼山住吉の兩所に御陣在て折々は入替り又は茶臼山に兩君居給ふ事もありけるが此度茶臼山に兩君本陣を定め給ふ其仔細は大御所倩々思慮せらるゝに兎角城中に謀計多くして毎度大軍利を失ひしに因て頓ては一旦和議を調へ一度軍を止て其後他の謀計を以て亡ぼし給んとの深意に出し事なる故斯一所に在まし其謀略を相談せられんと爲なり夫より種々評議有て軈て庄三郎を召れ計略を示し給ひしかば庄三郎は委細を承知し城中に至り申けるは私し儀は故太閤殿下より御用仰付られ別して御懇意有難く存じ居り候處計らずも此度關東と御合戰始まり御籠城と相成嘸かしの御退屈と恐察し奉つり候間少々の品献上仕度と此事德川大御所へ度々願ひ漸く免許を得しに因て參上仕つり候間然るべく御取次願ひ度との事なるに斯と淀殿へ披露に及びければ淀殿其外の面々も如何成謀計の使者にや心得ぬ事と早速幸村に意見を尋ね給ふに幸村答て是は關東方毎々利を失ひ候に付和睦を圖て城方の新參者に暇を出さしめ力を減じて其後城を攻落さんとの事ならん其ゆゑは今日本中の大小名皆御厚恩の者すら關東へ諂ふに何ぞや町人後藤が如き者として斯る實意を盡す事の候や然れども

の御母堂信長公の御姪程わりて能も御返答有たり此上は我々が一命を落すとも惜からずと悦ぶ事限りなし偖又其夜大野主馬介美濃守と同道し歸宅しけるに何者共知れず修理亮を抱き止不義者と云樣短刀を拔持懷中を目掛て突けるに鬢鏡に突當りて刺通らず其内郎等共馳來りける故彼者美濃守を切倒し六七人に手を負せ其塀を切拔自分は刀の切先嚙へ堀に飛入死したりけり是何人なりと云に片桐市正が家來山本帶刀と云者主人の事を口惜く思ひ忍び入斯なせしとなり其手引は木村主計頭と云ふ事後に至りて知れしとかや然ば秀頼公淀殿共强く怒りて樣々と吟味有れしが其時は誰が業共知れず皆々大野が大惡の報ひと評判しける扨又大野主馬介は高麗橋を守り居たるに諸手の橋は皆引有に此口計り橋あれば若此口より惣攻有時は難儀なりと思ひ投松明を以て橋を燒拂んと爲ける所に關東方今晩の廻り石川主殿頭是を見て手勢を下知し鐵砲を討せ大野が兵を城中へ追込本陣へ來り永井右近大夫を以て此由言上爲ければ大御所燒ば燒せて置可と有て頓着せられず其まゝ井伊本多藤堂等と物語りして在しければ永井又申述けるは石川高麗橋を燒せざりしに就ては御稱美も候可かと伺ふに大御所以ての外に怒らせ給ひ長刀を取て永井を八打と白眼給へば是に怖れて右近大夫は退きたり井伊本多等傍より進み出永井が振舞御堪忍成れ難く候はゝ臣等に所置仰付らるべしと申ければ之に依て長刀を納められ偖永井を召れて是程の大軍にて惣攻せんに何ぞ橋の一ッ計りを賴みとせんや城中にも智ある者は橋を燒事は好ぬぞ

ば品よく御和睦調ひて國を治め給はゞ萬民の悦びに御座候と有しに淀殿然らば關東の御方人數を御引纏めにて御歸國之有べし此方より追討は掛申候まじと答しに其時兩女詞を揃へ只然樣計の御事にては此事も叶ひ候まじ夫には何とか品を御付有せられよと有ば淀殿品とは何を申され候や兩女外義にも之無く先御城の外堀を埋給ふか新に抱へられし浪人衆を追拂ひ給ふか又は御母儀關東へ御下り有か此三ヶ條の内御得心なくては兵を引上御歸國の事難儀にてござ候はんと有ければ淀殿大に怒り長刀追取鞘を外して庄三郎に向はれ汝は呉服屋の商人にて有ながら人を欺かんと爲る罪人よな又常光院は姉を落し入んと爲奸計成ん能承まはれよ此度の合戰に關東方幾度と無敗軍し戰ふ毎に數萬人亡され其上夜討に陣屋を燒れ兩將遁迷ひ給ふ元來城は日本一の名城にて兵粮は六七年の用意あり然るに何として功ある浪人を追放せよ太閤の築き給ふ外堀を埋立ろよ又妾を人質に參れよなど、聞も惡き事ども並べられしは如何なる御事や斯ては姉妹の好も是までなり長刀にも掛參らせん事なれども其儀だけは免し申さん疾々此座を立れよと居丈高に成て詰寄ければ三人は何と返さん言葉もなく頭を抱へ悄々として茶臼山へと立戻り此由委細に言上せしに大御所聞し召さては中々和議も整ふまじ然らば外に思案あり迚夫より板倉伊賀守を京都より召れ密意を言含め給ひて三人には暇を賜はり阿茶の局は駿河へ常光院は大津へと引別れ歸りける扨も大坂城中には幸村淀殿に向ひ今日の御返答は天晴なり誠に右府公

水甲斐守福嶋賴母と一手に成りて千五百人宛茶臼山へ夜討を勤むべし眞田幸村三好清海入道同く爲三入道は三輪琴之助根津甚八増田兵太夫同三七等を從へ亂戰し透を見合せて本陣の後へ廻り大將の中を取切るべし穴山小助根津甚兵衛川勝内匠諏訪權太夫等は眞田幸村と名乘て百五十騎の手勢を五ッに分け三十騎宛從へ影武者五人となつて大將の通出給ふべき所々の道に分れ居て幸村と名乘討取べしと定めたり又城中には諸口々の櫓へ大筒を置萬一味方追立られ難儀に及びて引入ならば附隨ふ敵に打掛べしと手配り嚴重になし城中には樋口但馬守稲木右衛門尉堀田圖書介矢野肥前守山本新右衛門野々村伊豫守三浦飛彈守南條青木湯淺關金森田中赤座を始めとして織田有樂齋大野修理亮等の下知を以て守しむ斯て夫々の部署終る所に大野修理亮治長申しけるは夜討は如何にも小勢なるを良とする事古來よりの格言なるに如何成ば軍師大勢を以て掛り給ふぞ恐らくは勝利覺束なしと拒みしかば幸村打笑ひ某しの部署好からずして勝利を得ずんば某し貴殿の僕と成て馬の轡を取とも苦しからずと戲れ答へけるに明石掃部介然らば大野殿にも此儀堅く御約束せらるべしと言しに修理亮が云く何とて爾せん此度の軍は秀頼公の御身に懸る事なれば隨分用心有るべきに假令討勝事有るにもせよ軍勢を損せば何を以てか後日の大事を計らはんやと席を叩て申けるは幸村が越度出來有れかしと思ひて斯は云なり明石は又大野が何事にも差出しを憎んで此度こそ尻尾を取て押えんとの下心なるよし幸村改めて曰く大野殿申さ

伏見にて鳥居元忠が橋を引て不覺を取し事毎度予が云所なり以來を心付べしと嚴敷之を戒められたり偖又城中には眞田此事を聞て大野は如何の思慮にて我にも聞ずして無謀の笑ひ種を爲たるや大將の役儀心元なしと有て預りの人數取放し代りとして小野木主馬介を遣し高麗橋を守らせけり

第六　眞田大野軍立爭論の事幷兩公御危難旗本諸人戰死の事

偖も眞田幸村は德川御父子の深く怖れ給ふを密に悅び今一度夜討して勝利を得んと諸將を集めて謀計を議し此度は諸手一同の夜討を掛て縱令大將を討取ずとも好敵を討取か又は大軍を挫いて目を醒さすべしと偖部署の次第を定むるに高麗橋よりは中嶋民部少輔本町橋よりは赤松伊豆守堀留口よりは仁木大膳亮保脊口よりは伊東丹後守星合口よりは槇嶋玄蕃允出丸よりは眞田が家臣海野六郎兵衛伊木七郎右衛門黑川口よりは生駒帶刀をもつて皆何れも五百人宛を率ゐ二十目三十目の鐵砲を用意させ合ひ詞合印を定め置き扨また關東勢の引取口へは木村長門守後藤隱岐守小川土佐守長曾我部宮內少輔等各々千五百餘人を遊軍として諸口の道筋に伏勢を構へさせ關東方の諸陣最初に寄易からん方へは何の陣なり共嫌ひなく棒火矢油火矢を射掛て押寄べし又薄田隼人郡主馬之介眞田大助和久半左衛門米田監物は塙團右衛門木村主計頭長曾我部兄弟速

かり遁れ給ふに又々前路を遮斷て眞田幸村爰に在て待事久しと切て掛る甲斐庄政右衛門笈川賴母幸村を支へて戰へども叶はず爰にて討れけり其間に眞田河内守兄弟走り來り幸村に渡り合て戰へば幸村も數刻の働きに力勞れ新手の河内守に切崩されし所に福嶋賴母助け來り幸村を救ひ出しける眞田河内守は大助が跡を慕ひ追討せんと進む所に新將軍は我爰に在追事勿れ早々來て我側を固めよと呼返し給ふ故河内守は追捨にして止りぬ扨又大御所は這々遁れ落給ふ所に又向ふより眞田幸村と名乘出ければ誠の眞田か如何なるかと大に狼狽走り給ふに何國へ遁れ玉ふぞ遁しはせぬと眞一文字に追來る大久保彥左衛門は君の御行衛を尋ねんと驅來る所に此體を見て大身の鎗を閃めかし戰へば後れ馳に旗本勢驅來り此手を難なく切崩す此隙に公は馬に鞭當て辛く虎口を助かり給ふ然るに加賀井伊藤堂池田越前勢毛利土井水野蜂須賀等の陣屋悉皆く燒落ければ面々所々を驅廻り將軍に廻り合しに又眞田と名乘御首給賜はれと突て入此時本陣には成瀨安藤等未だ塙團右衛門長曾我部等と挑み戰ふ最中なるに旗本勢も助け來らず大に狼狽逃給ふ然るに屋代田宮等手早く公の陣羽織陣笠を着して秀忠爰に在來れ幸村と踏止まりけるに三輪琴之助三好爲三入道我れ首級を申し受んと穗長き鎗を追取延突伏んとするを太刀にて丁と受留穗先をハッシと切折たり折れて爲三太刀拔き放ち切て掛るに三輪も續いて生捕にせんと田宮が馬の太股ぐさと突ば馬は堪らず躍り上りアハヤ田宮が落んとするを琴之助は得たりと進んで生捕

る丶通り此度の軍は大切の御身固めなる事なるに方々の智慮をだに差置き某し大軍を引て夜討するも君の御爲に成べき筋有ての事なれば敗軍せば我は敵陣に腹切て死なん若また我打勝ば貴殿腹切給ふやと問ひ詰しに大野も既に云懸りとなりたれば餘儀なく之を承知せり斯て夜も五更に向々としければ諸手の軍勢押出して一同に火矢を射掛しに寒風肌を裂く如くなりければ火は忽ちに敵の陣々に燃移るを敵兵見るより大いに驚き驚破敵寄たりと言ふ間も有らず既に本陣へも鬨を作りて押懸りければ互ひに救ふの暇も有ず上を下へと騒動なす內火の手は益々強くなり天をも焦すばかり爲るに關東方は仙臺加賀淺野鍋嶋毛利細川黒田加藤立花有馬越前井伊藤堂酒井榊原水野等惣敗軍となり追つ返しつ戰ひける內本陣へは薄田隼人塙團右衛門眞田大助を始め勇を奮ふて突入しかば安藤成瀬水野松平等死力を盡して追崩す入替りて長曾我部速水和久等は命を輕んじ突て入諸陣一同他を顧みる間もなく戰ひける內不意に鐵砲を打掛られ寄手は心ならずも敗軍す斯と見るより本陣に火移りければ德川御父子立退あらんとし給ふ所に何時の間にかは廻りけん眞田幸村此所に在と呼はつて前後より攻立れば猪子專助を始めとして旗本衆二十餘人戰死し大御所漸々に遁れ走り新將軍は成瀬大久保安藤等が防戰する間に遁れ出て暫時呆れて居給ふ所に眞田大助塙團右衛門早くも見付て寄せ來りければ水谷猪之助日根野彌次郎竹中半兵衛淸水一學松平長十郎永井一學鈴木新八等七十三人踏止まりて防ぎ戰ひ討死する內辛くも助

と勝負せよ如何に〳〵と付け寄りしは大膽にこそ見えにけれ幸村諸卒に下知をなし斯る强勇の大將を飛道具に掛ん事無用なりと夫より三好淸海入道を呼び物具を脫せ陣門を開きて使者となし申し送りけるは今晚の御振舞甚だ以て健氣に存じ奉つりぬ依て諸手の者鐵砲にて打落さんと爲すを某し堅く制し置き御勇氣に面じ使者を以て末廣を進上致すなりと遣させければ庄三郎之を取り揚げ無双の勇將眞田殿より贈らるとの事近頃以て忝けなし幾久く武勇に因緣候はん使者太儀なりと挨拶あつて引取給ふは誠に勇々敷次第なり此事大御所聞給ひて殊の外稱美せられ正宗の一刀を賜りけるとなり扨も諸手の面々追々に引取來り此度も關東方大いに敗軍し討死手負夥多く茶臼山には大御所御父子先は御恙なく在まし諸將も追々來りて無事を賀しける此時蜂須賀の陣も夜討の爲に放火せられし所稻田九郎兵衛は若年ながら米田が手の者に渡り合敵兵七人迄打取十七度苦戰し五ヶ所の痛手に堪りかね松の木の下に倒れ伏息を休めて居たりける其身形小具足に腹卷計り故雜兵と見えたる故にや又は九郎兵衛常に八幡宮を信じたる故此時も尊像を頭に捧げ其上に兜を着し居たるに因り加護ありて首を取れざりしにや翌日此由所々へ聞えければ大御所九郎兵衛を召來るべしと有しに折から稻田は蜂須賀の陣にて痛手の加養を致し居たるが公より御召と承まはり乘物にて出ければ大御所此体を御覽じ大に御感在まし運强き物哉汝若恙なくば我が家代々汝が家の具足堅めには祝儀に罷出て兜の緒を締得さすべしと有て義弘の太

にせんと飛かゝるを田宮は手早く起上り太刀打振て切結び既に琴之助危かりしを爲三入道馳寄て切先下りに切付しかば不思議や陣笠より發と火の出たりしは是將軍の陣笠薄金とは雖も鍛ひ良ればなり琴之助續て飛下り切込太刀に田宮は肩先を切割れしかば田宮今は是までと橫擲にせし太刀の切先三好が指を三本切落して田宮は遂に討れてけり此間に將軍落延給ふを幸村猶も追懸しに井伊本多等助け來りしかば幸村其儘引取けり翌日に至り幸村田宮が首を城下に出し札を建君の身代りに立し忠臣の首なりと示しける故關東方取拾ひて一心寺に葬り渠が子孫を厚く御取立になりしとなり

幸村越前忠昌へ末廣を贈る事幷稻田九郎兵衛佳例の事

爰に諸手の諸大名は陣所を燒れて大に忿怒し一人も餘すなと追討し間能ば城中へ突き入らんと追討を掛しに却て伏兵の爲に惱され無念を忍んで引返しければ幸村は靜々と出丸を指て引入ける所に一手の軍兵矢の如くに馳來り大將眞先に馬を進ませ幸村卑劣返せ〳〵と呼はれども幸村は既に出丸に引上たれば柵際迄押付來るを城中の者篝の光に能視れば若やさし大將にて有けるに能敵なりイザ鐵砲にて打留んと犇きけるを幸村制して大音聲に天晴健氣成御大將と見請たり御名乘有れよと呼はれば我こそは越前の松平庄三郎忠昌なり卑怯にも幸村引入たり出て我等

此本陣へは前日に知ければ十四日の晝より安藤帯刀成瀬隼人正の兩人を御迎として差出し置れ翌日巳の刻に至り茶臼山へ御着に成りければ大御所幷に新將軍御對顔あり夫より雜掌を以て大坂城中へ　勅使として庭田柳原の兩卿參向有らせられしかば追つけ御入城に相成るべしと申送らる此時城中には昨夜の軍に勝誇り猶も夜討を掛んなど、評議最中の所ゆゑ幸村は大に驚き偖も大坂の御運傾く時節到來せしか今　勅使御下向と有上は是和議を整へよとの事なるべし是れ滅に是非もなき事なりと歎息し頓て諸將に打向ひ就ては某し一つの存じ寄あり諸將には用ひ給はんや否やと申けるに諸將何條軍師の指揮に背く事有んやと答へければ然ばとて其用意に及びけり其内　勅使は高麗橋より御入に成りしかば秀頼公は鐵門迄御出迎ひ有りて千疊敷へ御通しになり種々御饗應御儀式等最も肅然にして諸將之れに列坐し謹んで命を待ち居たりしに庭田大納言　勅書を捧げられしかば秀頼公是を頂戴有て取上讀上奉つらるゝ　勅文に曰

　家康秀頼和議有べき事

　兩家東西に分れて戰ひ止ざれば上下の難儀鮮からず依て兩家和睦の儀を整へ勇たる家康より讐たる秀頼に此事勸むべし此儀背くに於ては違　勅たり爾等夫れ之を了せよ

と讀終る庭田大納言殿又云く此度關東の本陣茶臼山に至り　綸言を傳ふる處大御所は得心にて候間此旨城中にて違背あらば違　勅の筋成べしと述らる其時眞田幸村進み出て申けるは恐れ

刀を添賜りけるより以來恒例と成しとかや偖も城中には今宵の勝利を大に悦び夫々に感狀を賜はり稱美の數も少からず然るに諸將大野に向て申けるは如何に大野殿軍の始に軍師と約束せられし如く見事御切腹召るべし拜見仕つらんと詰られしに淀殿秀頼公にも偵氣の毒に思召れ軍師へ大野が命乞を仕給ひける幸村承まはり斯る次第に候ては大野氏には大將の器量無きと存らる以來軍兵を預る事叶ひ難しと預りの軍勢を離しける程に大野は立腹爲と雖も云べき言葉の無きに餘義なく默して居たりけり是よりして城中の評定軍議には一切大野兄弟口を出す事相成ずと成ければ諸人大に悦びけるとなり偖も關東方にては先頃板倉伊賀を召て密意を含ませられたる事もあれば兎角に和議を調へて先一旦は圍を解ほぐさんとの事なるに伊賀守其意を得て傳奏方に其由申達し彼是と取計ひける故終に　勅使を大坂の城中に下されけるの議に一決し兩軍和睦の事にして是ぞ大御所の深慮あらせらる寬仁の御所置とかや

第七　勅使參向兩軍和睦の事并木村使節茶臼山にて勇威を顯す事

扨も大御所は兎角和睦の計略をのみ圖らせ給ひし故板倉伊賀守をして京都の首尾を取繕はせ彌々十二月十五日　勅使として庭田大納言秀宗卿柳原大納言資義卿茶臼山の本陣へ參向せられ此

〲々を明渡す事ならば其曲輪を破却仕つらんと御答へ有るべしとて此旨　勅使へ申上げ夫より茶臼山へ更に申し立られしに大御所聞給ひ何の仔細ありて四ヶ國を望まれしか併しながら斯く有るに於ては大和紀伊の二ヶ國を望みに任せんとありしに漸やく和議調ふ運びに成りければ爰に於て來る十二月廿二日誓詞取替せ有べしとの事極まり既に同日に爲りければ城内よりは判元見屆の使者として木村長門守（今年廿一歳）郡主馬助德川方へ罷越し德川方よりは板倉内膳正（今年十八歳）阿部備中守同じく判元見屆として大坂方へ來らる木村長門守は門出に臨み幸村に向ひて我等此度判元見屆の使者に參るを幸ひに兎角先方へ無禮を仕掛け其時我等討れなば使節を討ちし廉にて違　勅と爲りぬれば夫を言立籠城を仕給へ老年の大御所なれば二三年も籠城する内には貴殿片桐など豫て內意ありし通り變起るべし斯の如く某し一命を以て謀略を立なば大坂の御運開くべき期もあらんかと存ずる間某し彌々討るゝと聞ば秀頼公の御運強きと思はるべし併しながら老功の大御所なれば之を察せらる可きは計り難しと申しければ眞田聞て如何にも尤もなり併しながら忠義の御邊を失ふこと殘念なれ共美名の程は末代に殘るべし迚閑談數刻に及び立分れ木村郡の兩人茶臼山指て出城し士卒僅に二百騎許りを召連茶臼山へ到り斯と通じければ關東方にては之を見て餘りに小勢なるを不審し那なる御使者にて候やと尋ねしに御判元見屆の使者なりと答ふ斯て木村郡は藤堂が陣所に差掛りしに御本陣近し下馬あれと有るに郡

ながら太閤秀吉の緒を繼ぎ　天子を補佐し奉つる當主秀賴事爭か　勅命を違背仕つらんや東國の望みは如何なる事かは存じ奉つらず候へども當城主にも望み之れ有り此儀若叶はずと成ば某し等は只一死あるのみに候と申せば後藤木村は眞田を傍へ呼び貴殿の申さるゝ處は無用たるべし夫よりは兩卿を城内に留置て否やの　勅答は何時までも延し置こそ好からめと云ば幸村否々夫にては　勅命に背く道理なり唯我等に任せ置れよと云捨て再び　勅使に云々の義を申上げれども事濟ずして大納言秀宗卿には一人茶臼山へ參り給ひて事の整はざる由を大御所へ御通じ有りしに大御所笑ひ玉ひ兎角双方の願御聞入有べしとて常光院阿茶の局に京極若狹守を差添城内に遣さる幸村は高麗橋より本丸まで弓鐵砲にて固めさせ千疊敷へ通し關東方の望の次第窺ひたしと申せしに秀宗卿關東にて望みの次第は外曲輪を破却するか諸浪人を放逐するか又は淀殿を人質とするか此三ヶ條の中何れ御承知あらば和睦爲んとの事なりと宣へば幸村は之を拜承し軈て秀賴公に向ひ外曲輪の堀を埋め給ふ事御無用たるべし唯浪人を放逐の事然るべし然候はば斯申幸村を始め明日より日本の地に身を置所之無く一同に一死を覺悟仕つる計りにて候と申しければ秀賴公聞給ひ斯の如き有功の輩らを放捨つる事吾が意に非ず外曲輪を埋むる事心には有ねども望に任せんと有りしに幸村を始め面々の者共是非なく然らば其如く爲らるゝにもせよ此方の望も立られ然るべし先大和紀伊播摩丹波の四ヶ國を大坂の領とし尼ヶ崎高槻岸和田の城

と有ければ長門守郡主馬助に向ひ斯の如き御紙面持歸らるべきやと己に座を立んとするに列座の面々コハ一大事なり珍事よと各々刀に手を掛控ゆれば大御所是を御覽じ木村靜るべし我老年に及びて書面を間違へたり夫は下書なり本書は是なりとて又箱より出し給ふを本多上野介持來り長門守に渡す長門守再び見るに

敬白起請文前書

一此度　勅命に依て双方和睦するに因て此以後別意なく水魚の交り致すべき事

一秀頼總堀を埋られ候上は此方より紀州和州を來正月相渡すべき事

一血判誓詞相濟次第陣拂ひして大和路迄引取べき事

右の條々相背き何方にても干戈を動し候へば神罰を蒙り違　勅たるべき者也

長門守之を讀み了り是にて宜敷候と本多に渡しければ本多大御所へ奉つる夫より大御所は血判せられんと指を刺れけれども血出ず年老たれば血の通ひ惡しとて暫時考がへ居られしかば列座の面々は長門守定めて其儀に及ずと申すべく思ひ居たるに木村は空嘯きて頓着せず大御所いろ〳〵に爲られて漸やく血判濟されしかば上野介より長門守に渡す木村は押戴き火鉢に翳し暫時拜見し首に掛たる錦の袋を取出して之に納め偖遙末座へ引下り謹んで平伏し上野介に向ひ誠に御和睦調ひ恐悦至極仕つり候各々方にも此上は底意なく御意得べし先に無禮の事共は恐れ多く

は忽ち下馬せんと爲しけるを木村は知らぬ顏にて馬上の儘打過ぎ井伊が陣所も斯の如くにして通り旣に越前家の陣所に來れば是も同く咎めける長門守下馬せで叶はずば是より立戾らんと馬の頭を立直せば然らば御通り有べしと云に其まゝ本陣に至り靜に下馬し玄關より通るに刀を手に提行けば成瀨安藤等是を押止め刀は指置れよと制すれども木村は陣中の禮儀なりとて諸大名の並居たる中を會釋もなく通り拔け廣間に參る時酒井雅樂頭酒井左衞門尉立出押付御出座に成りければ刀は次へ置れよと云ども陣中の使者軍令は違へ難し各々方にも斯る時は斯樣こそ有べけれと其儘に着座[illegible]時に大御所出座の用意として火鉢褥を持出ば間もなく跡より威儀正しく大御所出座有りければ郡主馬助平伏す長門守はさして頭も下ず居たりしに大御所着座有て如何に長門守駿府以來久し振なり父常陸介以來の馴染別條なきやと尋ねられしに木村は豫て工みし事なれば心にも無き不禮の挨拶今日は秀頼の使節なり大切の使命を勤める身の何ぞ私しの事を先に申さんやとサモ荒々しく申しければ並居たる諸大名は手に汗握る計りなり然ども寛仁大度の大御所少しも怒りの氣色なく實に尤もなりと計りにて誰かある手箱持來れとの申し付に小性の衆持來りて本多上野介に渡しければ上野介即ち長門守に相渡す長門守之を披き見るに

一此度　勅命に依て双方和睦せし證として大坂の外曲輪を破却し外堀を埋べき事

然る上は此以後干戈を動し候方違　勅たるべし

陣驚ひし上は何の仔細有るべき何にも面會の儀勝手次第たるべしと有りしに幸村大いに悦び夫より穴山小助を呼で密に申けるは我其方に對して餘儀なき所望あり叶へて呉べきやと問はれて小助は何事ならんと不審して在しが是は事新しき仰せを承はるもの哉何なりとも君より命せらるゝ事背き申さんや疾く仰せられ候へと答へしに然らば此度汝が一命を乞て秀頼公の御爲めを計らはんと存ずる此儀にても命に從ふや小助小躍して大に悦び何事成やと思ひしに一命は豫て君に奉る臣下なる所に不肖某しが一命を以て秀頼公の御爲と相成る事ならば某しに於ては此上もなき悦びに存じ入り候間速かに差上奉つらんと事もなげに承知しければ幸村然らば汝幸村と名乘り原が方へ至り物語りすべし然る時は越前の松平庄三郎殿は其方を幸村と見覺もあれば是を證據に討取は必定なり然る時は其方が功に依て關東方　勅命に背き大坂方の大將を故なく討取しと云を言立我君を補佐して再び籠城の事相成るべきなり斯なる時は敵を破らん事掌の裏に有る事なれば呉々も此儀汝に賴むなり先年我と名乘せ秘書を渡して庄三郎殿に見覺えさせ置しは我遠計にて萬一の時の爲を思ひてこそ汝に申付たるなり敵方には我を能知る者は隱岐守計りなれども渠は住吉の陣に在ば氣遣ひなしと色々申含めければ小助は大に悦び御名を假て彼陣に死ん事是れ武門の冥加なりと流石忠義の一心勇み立てぞ見えにける（編者曰く眞田穴山を以て身代りに立てし事波難戰記に參照す時は事理矛循すると雖も兩説を存して識者を俟のみ）

存じ奉つると雖も最も主の爲め忠義を重んぜし所なりと挨拶して退出する有樣は實に勇士とこそ見えにけれ大御所にも殊の外御感在まし四方に使して君命を恥しめざるとは長門守が事なりと有しとかや

木村長門守が血判を火鉢に翳したるは萬一や口中に紅抔含み給ひて欺き給ふかと試し見たるなり紅なる時は火に翳せば靑く成故なり

幸村密計關東を圖る事幷穴山小助危難を遁るゝ事

係て又關東方には板倉内膳正阿部備中守兩人大坂城中より立歸り秀賴公血判の誓詞を差上るに勅使の加判も相濟ければ押付御歸陣有べしとの事に城兵は籠鳥の空に翔りし心地して悅びける然るに幸村は長門守と心を合せし謀計もならざれば兎角に關東の高運なりと愁ひける所に大御所には眞田を氣遣はれ卒爾には引取給はず茶臼山に御座ありける爰に眞田は長門守が謀計の成就せざるを憂ひて更に一つの謀計を工風し越前家の陣中にある原隼人正は元は武田の功臣原加賀が孫なれば是を思ひ付大御所へ願ひけるは某し古主武田家に之れ在る節は親安房守原加賀守とは別して懇意に仕つり候へども今は敵味方となり東西に別れ候所此度御和議相調ひ候へば何卒右加賀守の孫隼人正に對面の上舊情の物語りをも仕つり度と申込しに大御所聞し召和

れども何の音沙汰もなく晩景まで長談しすれども別條なければ扨は關東方にて推察せしかと初めて心付忠義の空く成を歎ける

第八　幸村秀頼公に將來の事を洩す事并ニ女兩使駿府下向の事

斯て穴山小助は越前家の陣中に在何時まで待共果しなく後は咄しも盡ければ暇を告て立出んとしながら如何に隼人殿今にも和議破れ合戰とならば某しが首は貴殿に渡さん能々武者振を見置給へと云儘に馬に打乘り一散に城中へ歸り幸村に斯と語りしかば幸村は涙を流し兎角傾く大坂の運是非もなき次第なりと歎きける扨又庄三郎は本陣に出て如何の思し召なれば幸村を遁し給ふやと問參らせしに大御所聞し召て今日の幸村は決して眞の幸村に非らず彼隼人正に對面を乞しは影武者を遣し我に討せて違　勅の罪を負しめ和睦を破らんとの工みなるを察せしなり夫故に止めしなりア丶危き哉と舌を卷て申されければ庄三郎も之を承まはり始て斯と知り御道理至極なりと云ふて退出に及びける實にや名將の心は名將之を知ると公は海內武邊第一の將と呼れ若年より軍事に習天下の智將名將を相手にして運を開き給ふ程の君なれば老功の遠智感ずるも猶餘りあり斯て十九日には　勅使と共に御父子京都へ登られ野々村伊豫守伊東丹後守堀田圖書

扨又大御所には松平庄三郎殿を召れ其方先年幸村より秘書の傳授を受し時定めて幸村が容貌は能見覺えあらんと有しに庄三郎答て仰の如く能見知り之有り候畢竟其節諸臣の諫めを用ひず進んで自分請取しは渠を見覺えん爲にて候ど申しければ大御所然らば幸村此度の願ひに因て其方の陣中に來り原隼人に對面致すわひだ其時に汝鐵砲の兵を伏置討取べしと有りしに庄三郎畏まり候とて急ぎ我陣に立歸り其用意に及びける斯て幸村は約束の通り入來り其形相花々敷小櫻を黄に通したる鎧に桐の紋所を所々に鏤めたるを着し兜は六文錢を前立物にしたるを供人に持せ其身は蘆毛の馬に跨り靜々と手綱搔操來りてければ原隼人正出迎上座を讓り種々饗應して四方山の物語り爲しける時に庄三郎物陰より透し見れば相違もなき幸村なりしに豫て伏置し鐵砲の達人幷びに力士を驚破下知せんと窺ひ居しこそ穴山が今の命は風前の燈火累ねし卵に異ならず危かりける事共なり穴山は態と前後を顧み用心の体をなせば今や火蓋を切て放さんとする所に本陣の方より一散に乘切來る村越三十郎劇然陣外より大音揚公より急御用有と云乍らヅと入り來り庄三郎に對面爲しければ伏勢共何事ならんと暫時其まゝ控えたり村越は庄三郎に對面し幸村に對して少しも無禮有べからず此段下々までへも申付べしとの上意なりと相述けるに庄三郎は大に駭き斯まで仰せ含められし事を俄に止め給ふには仔細こそ有らめと早速内謀を止め夫より村越と同道にて本陣に到り事の樣を伺ひける此方には穴山吾身の上を今や〳〵と待け

賴公は何分宜敷樣にとある處へ淀殿幷びに大野修理亮口を揃へて此度の神文には先に手を出したる方違勅と定めたる上は此方より手出しては秀頼公朝敵となり給はんと言ひしに幸村夫は常體の事なり斯る大事の圖を外さるゝならば臍を嚙の悔あらん先達て以後何事も某しが諫めを御用ひ有れと申せしは爰にて候と爭へども神文の上は爭か天下に信を失はんやと眞田の申條を用ひ給はず幸村心の内に關東より許されし二ケ國は謀計なるを知給はぬこそ是非もなしと思へども淀殿は一向不得心なり時に織田常性寺が曰之は某し駿府に到て願べしと申ければ淀殿大に悅び太儀乍ら御坊宜敷計ひ給はるべしと申さる幸村進み出て織田殿には去年御子息信濃守を人質として關東へ送られ今又貴殿關東へ御越有んと爲は密事を告ん爲の事なるべしア、能體の事をせらるゝもの哉と云に淀殿是は眞田殿不禮なり彼の坊は我伯父なり何故僞り給はんやと少し怒り氣にて申されければ幸村今は何を陳るも詮なしと之より引籠て出仕せざりしかば秀頼公は之を憂ひ自己訪尋ね給ふに幸村悅び禮終りて偖申しけるは此度調ひ候和睦は再度合戰と相ならん事必定と存られ候に恐れながら萬事御母公御口出し有ては事のよく整ふべき時之れ無く漢の呂后唐の武后能き殷鑑にて候然れども臣一旦君の命に依て入城せし上は及ぶ丈は所存を立つる覺悟にて候偖又嶋津氏より豫て申越候は萬一其地にて難儀ならば薩州へ御越あれ其節は軍勢を差向御迎の船をも差出し申すべし就ては起請文をも參らせ置んと書翰を以て細々と申越れ候是

介深村周防守等扈從し諸大名の陣々は皆引拂ひ跡には井伊藤堂金森池田小出高木新庄古田遠藤以下其外奉行役人等相殘りける然るに關東方には幸村を氣づかひ近國の大名は板倉內膳正九鬼丹後守等在城を固む可とて急に本國へ立歸へさる扨又大坂には雲性寺使に來りしかば淀殿幸村を呼で此事を問給ふに幸村答て某し先達ても申せし通り此人大坂の密事を明し駿府に止り再度歸り來る事成難きを察せし故某し止めしかども用ひ給はず是非もなし御內緣の面々有樂齋を始め皆此心持と答へければ淀殿聞て然らば軍師の詞の如く江戶駿府に在勤の大名雲性寺が告口にて俄に歸國したる處へ攻寄ては敗軍の基ゐなり今更何とせん女の智惠の本意なさは斯神文を變じ給ふとも覺えず貴殿の詞を用ひざる事の口惜さよと後悔せられ偖大藏の局二位の局正榮尼此三女を除くの外青山よりは城中の出入を停止し本丸の外には軍兵を備へ大筒を据て萬一不意に入んといふ者は打留候はんと備へたりさしもに豐臣太閤千辛萬苦の思慮を込築き給ひし要害惣門矢倉多門等も一時に破却と成りける事是非もなき事ども也其跡は今にまで空堀と名て存在せり明れば元和元年靑陽の春を迎へて慶賀の規式も終り舊年に替り太平の年を重ね城中にはさゞめく中に眞田木村の面々は內心燃るが如く或時幸村申けるは臣に御軍勢一萬後藤に五千人木村に五千人長曾我部に五千人大野に五千人御預候はゞ臣等之を引卒し岸の和田和歌山郡山等を乘取尼ヶ崎高槻三田等を平定し要地を廣げ寄手を待て一戰に乘挫ぎ候べしと申ければ秀

しと議せらるゝに幸村此事御無用にて候去年も片桐が一件にて三女大坂の煩ひを引出せり決して御無用なりと留めけれども淀殿聞入給はず幸村歎じて云く御爲を思ひ申す事を用ひ給はざるこそ駿府の手便に乘んとは爲すなれ口惜き事かなと座を退ぞき立歸りける斯て三女青木伊東は二月八日駿府に到着せり

三女兩使關東の智謀に落入事并青木民部少輔秀頼公の簾中に付らるゝ事

扨も三女青木民部少輔伊東丹後守等は駿府に到り本多佐渡守正信に就て大阪より來りたる由を言上し大御所の御前へ召出されければ大御所兩人に向はれ其方共は何用ありて參りたるや丹後守謹んで秀頼事去年の合戰に殊の外軍用相嵩み民家も扶疎に相成りその上百姓共も遠方へ迯走り耕作の農具さへ失ひ難澁の極に陷りしを以て御約束の如く大和紀伊の二ケ國を御渡下され候樣願の爲使者申付られ候と述しに大御所偖は秀頼の領地未だ渡さゞるか然らば早速渡すべき樣今日中に申付べし大坂の難儀無理ならず將軍も事多に依て斯樣の事遲なはると見えたりシテ三女には能折柄來りたり此度宰相義直尾州京極菊亭大納言より緣女を求め婚姻も近日なりけれ共尾張は田舍の事なれば禮法古實を能存じたる者なし汝等尾州へ同道すべき間萬端の規式作法を

御覧候へと書翰を出して猶又申しけるは嶋津は故太閤に深く誓を立て背かず其上關東の首尾宜しからずして此度の軍役をも勤ざれば追ては大御所大軍を引て嶋津を攻られん然れば君彼地に入らせられ嶋津が兵を指揮して日本全國を敵に引受け一旗御上け相成候へば某しも必ず粉骨仕まつらんと存じ候好き折柄につき此儀言上に及び候間必らず〳〵他に御漏し給ふ事勿れと申せしに秀頼公得と聞給ひ此義誠に我意に適へり併し其時は母公を如何せんや幸村當城に殘し置れよ秀頼公コハ傷ましき事なり母公を殘し置くは人倫の道に背き誠に忍びざる事なれば如も母公を伴ふ事成ぬ上は寧ろ城を枕として腹切ん幸村是御道理なれ共母公を殘置るゝとも御父君の忌祭を重んぜられ候上は假令如何樣の事有りとも御孝道に欠は之有まじ殊に君の母公は御血脈とはいへ元來御父君の妾にて在ませば正統の御母とは申難しいはゞ君の爲には臣下の御身分に候其臣下の爲御父の御血統を彼是思慮せらるゝ事幸村は未だ其可否を辨別仕つらずと會釋も無滔々と申ければ秀頼公其意を悟り給ひ然らば軍師の申さるゝ所に從はんと有て別れ給ひける斯て秀頼公は猶もいろ〳〵と案ぜらるゝに迚も母公を薩州迄伴ひ給ふ事ならねば當城に殘し置我は一旦此所を遁れ父の祭りの絕ざる樣になすこそ至當ならんと愈々幸村が密計に決定し給ふ然るに織田雲性寺は駿府に到り大坂城中の密事を洩しければ幸村扨は我底意を悟りしならんと落膽しけるとかや扨又大阪城中にては三女と青木伊東を駿府へ遣し紀州大和兩國の事を催促あるべ

云聞せよ併ながら青木民部は用事あり殘り止まるべしと有ければ三女伊東は詮方なく尾州を立て廿三日に歸城し此由委細に申し述しかば淀殿大いに怒り且驚き幸村を召て此事如何せん返す〲も軍師の言葉を用ひざる事後悔なれ此上ながら萬事宜敷賴入候差圖に洩まじと悲み歎き給へば眞田承まはりて某しが前言を御用ひ之れ無きにより斯の事に相成り候某しは再び軍始る其時は只討死せんと覺悟仕つり候然る上は此以後何事も軍事に御口入は御無用然るべし青木は歸り次第姫君の御附人申付べしと申して退出す扨大御所は青木民部小輔を留置かれ密に召れて汝大坂へ立歸りなば如何樣にかして姫を奪ひ來るべし恩賞は十二萬石を宛行ふべしとなり斯て民部少輔は三月朔日に大坂へ歸城し申し立ける樣は尾州にて大御所より三女伊東への御挨拶は大御所御氣鬱の折柄にて無禮有しが實は急々二ヶ國を御渡有可趣きなり然ば先の面々に云はれし事は御用ひ給はざる樣致したしと申しければ眞田は大儀を謝し別して貴殿御手柄なり足下なればこそ斯有らんと夫ゆゑ見立て大切の役を仰せ付られしなり然れば姫君の守護は貴殿に御賴みなりと有しに青木は心の內密に悅び幸村も此度こそ心付ざりしと見えたり眞田が運も盡ぬるかと冷笑ひつゝ夫より松の丸御殿に移り勤番するこそ恐なれ

教へ呉よ頼み入なり其間には江戸よりの左右も有んと有ければ三女は畏まり頓て大御所に従ひ伊藤青木を召連れ十日に駿府を打立ち同十八日名古屋へ着し三女は婚姻の規式を事詳に口傳す夫より二十二日に新將軍よりの返簡來りしとて兩使を召出され之を披見するに其文に曰く

抑々此度秀頼へ大和紀伊の兩國を與ふる事秀頼は天下を顛覆さんとする謀反人なりければ恩賞抔とは存も寄ず尊父には如何成思召にて御座候や斯樣の儀に候ては天下の人皆叛逆仕つり申すべし慈悲も事の次第に寄候事と存じ奉つり候譬へば檻中の虎を野に放つが如く一旦志ざしを得る時は從へ難し御察し下さるべし

と有ければ大御所兩使に向はれ斯の通りなれば誠に是非なき事なり老ては子に從はざるを得ず我心の儘にも成難し早く立歸りて此由を達すべしとの事に兩使は案に相違し呆れ果たる計りなりしが伊東丹後守平伏しながら夫にては去年の御神文に御背き有る事と存じ入り候恐れながら斯の如くにては天下に信を失はせ給ふ筋にて上下の心背かんと存じ候且は神罰をも思召さず候やと述しに公大いに笑はせ給ひ神文に背きたれば迚何とかせん今日本の神恐らくは我に罰を當る事成まじよしや又罰を當たりとも何程の事あらん去年の冬陣に眞田が度々僞計をなし大軍を惱ませし事幾度ぞや然れば我も又僞計を立て返報を致す寸志の返禮參らする處なり大坂の者共我今神文に背く迚仕樣は有まじイザ用事は是までなり早う立歸りて此よし秀頼并びに眞田等に

淀殿去年大野主馬介大將の役を取離されしを本意なく思はれ何卒功を立させ以前の恥辱を雪がせ度と思はれける內愛に故太閤の大工頭に中井大和守と云者あり無二の關東方と成て此節大和の法隆寺に隱居して居たりければ是こそ大野が相應の敵よと思はれ塙團右衛門岡部大學米田監物等を副將として大野に征討を申し付られしに幸村之を止むると雖も承知なく然るに塙團右衛門密かに來りて幸村に謀計を問幸村倚樣〳〵と敎へければ團右衛門限りなく悅び立歸りて大野岡部等諸共に打立ける岡部大學塙團右衛門は去年夜討の時に聊かの事より双方論ずる事有て不和となり居たりしに塙團右衛門法隆寺に到り放火する間我手の者不足なるに付五百騎の兵を貸給へと乞しかば大野は此事を岡部に尋ねけるに岡部が曰く私しの遺恨は兎も角も君の事に何ぞ遺恨を思はんや良き謀計と思さば貸し給はんと云ふに大野は安心して兵を與ふ時に團右衛門密かに手の者に申合せ一手は放火させ一手は郡山の城へ向はせ一手は法隆寺に至り放火して攻入るに中井は豫て此事を聞くより家內を引倶し京都に立退たる跡なりければ一人も敵なし郡山の城主筒井隼人正は魔風に火の手燃ん成を見て法隆寺は大切の伽藍なり我君にも常に大事に思召す處敵の爲に燒れては申譯なしと手勢を引倶し馳行所に塙團右衛門は摺違ふて道を替筒井が留守に向つて塙が郎等坂田庄三郎雜兵一人門前に差掛り城兵の歸りし体に持成門を開けと呼はりければ何者ぞと窺ふ体ゆゑ番人等を六人まで切殺し內に入て門を開き塙が諸勢一同に馳入留守居

第九　法隆寺放火筒井隼人正不覺の事并大野主馬介眞田と賭軍の事

青木民部少輔は眞田が謀計とは知ず姫君の勤番として松の丸の御殿に在し所眞田大助が家來の笈川八内何やらん不禮して大助に刀を以て追懸られ逃迷ひて青木が詰居る隣の御殿へ飛入し時民部少輔御殿に詰合けるに八内御助け下されよと頼故仔細を尋るに元來某しは女色を嫌ひ男色を好みしに主人大助餘りに愛らしく候儘艶書を贈りし所無禮なりとて手討にせられんと爲す事某し存念の叶はざるは是非なけれども斯る衆人の前にて耻辱を與へらるゝ事恨み骨髓に徹り候因ては主人大助めを戀の仇討殺し呉んと存じ候なりと血眼に成て申ける所へ幸村方よりの使者として穴山小助を以て申越けるは家來笈川八内悴大助が機嫌を損じ御殿へ逃込候由然るに此節は家來一人にても大切の節なり大助を宥め候内何卒八内儀は御世話を以て暫時御止置下されかしと頼越ける民部少輔委細承知の由返答し心の内に之こそ屈竟の事こそ出來たりと八内が心を試して關東方の密意を示し聞せ我に與せば關東の御家人に吹擧し得させんと申ける故八内は有難しと悦びて是より髓身の體に見せ掛追々家内の者二十人許りを御殿へ引取ける是幸村が計略にて八内を間者に用ひしなり青木は斯る事とは露知ず八内を復なき者と庇陰ひける城中には

らば軍令狀を認め向はれよと云ふて後藤木村の兩人を證人となし双方軍令狀を取替し大野は又塙岡部米田を從へ二萬五千の兵にて岸の和田に押寄ける然るに十日餘りの合戰に何の仕出したる事も無れば塙は大野に向つて斯數日を送る中に淺野等後を取切ば大事ならん大野答て何ぞ左樣に敵を恐る丶事有んやと事もなげに返答しけるに塙は兎角の一言もなく却て從卒に下知し一人に三人前の兵糧を支度させ翌日兵共に之を腰に付させ手勢百五十騎を引卒して南方へ打立ける此由大野聞込み岡部を呼て尋ねしに岡部是れ道理の事に之れ有るべしとの事に大野が曰貴殿と塙とは豫て不和にて有乍ら又渠を稱美事甚だ不審なりと岡部が曰君子は其事を惡んで其人を惡まず善事は善とこそ言ふべきなれ私しの遺恨を以て何ぞ君の大事を誤らんや貴將にも早く團右衛門に力を合されよと理を盡して述べしかど大野は一向に用ひざれば岡部も今は是迄と塙が跡を慕ふて押行けり此時淺野が先陣田子助兵衛大名新左衛門同く與右衛門藤井六郎太夫等屈竟の兵を撰拔て各々尼ケ崎迄向ひ既に樫井川に陣して居るに端なくも塙團右衛門に行逢先陣上田主水龜田大隅等諸軍を下知し一揉にせんと討て掛るに岡部大學二百餘騎にて駈來り龜田が備へに突入一戰に龜田を突崩し續て團右衛門も武勇を奮ひ敵數人討取淺野が本陣迄切入んと一息吐て控えたり時に塙團右衛門岡部大學に向つて申けるは貴殿と某しは元來竹馬の友たりしに聊かの異論より信を失ふと雖も廉波相如が交りを思へば實に耻べき所なり今より互ひに恨みを晴し

の者共を相手となし戰ひけるに手に立者一人もなく城兵ども防戰叶はずとや思ひけん八方に散亂しける故城に火を掛燒立しを隼人正は道を急ぎて小泉の邊まで行所後陣より報じて郡山の方に火の手見え候と告るに駭き引返さんとすれば塙が伏勢一度に起り立切たりしに筒井は不意を討れて叶はず福住の方へ遁れたり扨又大和勢の植村新八郎寺澤兵庫頭松倉豐後守岡部內膳正等は一時に走行大勢を中に取込戰ふに大野主馬介等散々に追立らるゝ所塙團右衞門馳來て大に苦戰し諸軍を勵し終に敵を追崩し小泉まで押詰て五百餘騎の首を取是皆幸村が謀計より出し事とかや斯と見るより大野は悅びの眉を開き勇み進んで歸陣しければ淀殿大に悅び主馬介が武功今迄知ざることぞ殘念なれと稱美あれば主馬介は己が武功を鼻に掛打取たる首を竹に結付城中を持步行廣言しければ團右衞門は己れが功の目立ずして彼のみ誇り顏の心憎さに申けるは是皆軍師我に敎へられし謀計にて打勝たり武功は眞田にありと觸廻る故大野は奇怪に思ひ乍らも是非なく首を持步行事は止にけり此時淺野金森小出等は君命に依て所々の持城を固め居ければ大野は南方の地を固めんと願ふ故淀殿眞田の意見を問れしに幸村無用の由返答しける然るに大野は達て懇望して止ざれば幸村其許には大和路の合戰も岡部米田等の諸將苦戰しけるゆゑ高名に列なり給ふと雖も是御邊が功には非るなりと云ひしに大野聞て然らば賭して行ん眞田笑つて舍兄治長殿にも去年賭軍して然も命を乞れし此度の賭は如何や彌々敗れて未練なく腹切らるゝと成

に成て討んとするに塙團部は勇猛の者なれば恰がら獅子の荒たる如く縱橫無碍に薙ぎ廻りしかば上田勢四度路に成て引く所に橫關一同にもり返し塙團右衛門逆鬼神にてはよもあらじ首取て大將の御感に預れと鎗を捻つて突懸る團右衛門之を見て威稜しや何程の事かあらんと突出す槍を左右に受橫關が槍を切折つゝと駈入平内が着たる兜の天邊を打据ければ大力の塙に打れ平内は尻居に撞と打倒れ二言共なく死したりけり關谷は槍取直し突懸れば橫關も太刀を拔持打て懸る團右衛門は橫擲に切拂ふ大太刀の切先に咽を切られ逃んとするを透さず踏込み割付るに橫關は終に討れたり關谷今は叶はじと馬を返して遁んとするを塙が郎等坂田庄三郎走り來り後より突落せば塙は夜刄の荒たる如く淺野が大勢の中へ打て入り大音聲に鬼神と呼れし塙團右衛門直行今討死の合戰を爲すぞ我首欲からん者は來れ〱と呼はれども淺野が勢は手並に恐れて左右に崩れ近付者更に無く然るに後陣の方に控えし上田主水が嫡子上田勝吉は士卒を下知して嚴重鐵砲を打懸しかば塙今は是迄と必死と成て働く所に岡部大學助け來り散々に敵を追散し七八騎切て落しけるが其身も深手を負塙諸共後を返り見るに主從僅に十四人に討なされ團右衛門は岡部に向ひ御助太刀忝けなし今は中直りせんと云に大學眼を瞋らし我手負たれども働き息通へり何ぞ遺恨を晴さんやと云に塙聞て迚も叶はぬ所と思ひ今は快よく自害せんと向ひの森へと心ざし樫井川へ乘入んとするに淺野勢惣返しに盛返し鐵砲の筒先を揃へて打立れば塙は引返し

水魚の親しみを本の如くし君の御用に立て共に討死せんは如何と問かけしに岡部聞て合戰は君への恩酬なれば如何にも互に危きを助け合せん然れど和儀の事に於ては思ひも寄ず息の通ひ眼の黒からん限は遺恨なりと申ける故園右衞門も詮方なく岡部と共に土堤へ馬を乘上一息吐て居たりけり岡部が曰淺野勢今の敗軍を怒て大勢にて攻來らん然る時は此小勢にて防戰心元なし大野へ加勢を乞んと云に塙道理なりとて即ち後詰の事を申遣しけるに大野聞て大に怒り軍法に背き拔掛せし者に何とて加勢の兵を差向んやと使の者を嚴しく叱りて返さんと爲しけるを米田監物側邊より如何に大野殿今兩人に加勢なくば渠等必ず討死せん然る時には君への不忠は貴殿に非やと諫めけれども大野少しも用ひず使に向ひて早々に立返り此由主人に申聞せいと追返しけり塙岡部は之を聞て大に怒り斯る不法人にては縱へ如何樣に粉骨するとも迚て勝利は之有まじ眞田が一言今更思ひ當れりイザ潔よく討死し黃泉の下に忠を顯さんと兩人は今ぞ備を繰出さんず有樣なり

大野主馬介臆病の事幷塙岡部武勇戰死の事

斯て淺野紀伊守は龜田上田等の敗軍せしを以ての外に立腹しければ兩人は面目なく又樫井川へ押寄ける塙は心得たりと待設け鋒先鋭く切て廻れば上田が勢は唯一戰に打破られ龜田上田一手

失にけり大野は漸々堺の宿まで逃來りしに船手の四將向井小濱千賀九鬼等此時小家の町に在りけるが大野と見るより是幸ひと打て掛るに大野は驚愕仰天し敵の寄ざる隙を窺い狼狽廻つて大坂へ歸城せり

第十　眞田父子關東の諸將を破る事并大助奇計神崎の寄手敗軍の事

扨も大野主馬介は散々の體にて歸城し母の大藏の局を以て淀殿へ詫言を願ひける淀殿も哀に思ひ給ひて幸村を召詫入んと爲る所へ眞田父子參向し大野殿へ勝軍の悦びを申さん爲に伺候せりと兩人口を揃へて申せしに淀殿流石に如何とは思ひ乍ら捨置き難さに是非なく大野が敗軍の物語を爲し夫に付何卒渠が命を自分に賜り許し呉られよと申されしかば幸村聞て然樣の事承まはる隙は御座なく候茲や南方の敵を打破らん大助來れと挨拶もせず立歸り急ぎ出陣の用意をなしにけり然程に淺野但馬守は樫井川の合戰に打勝岸の和田に出て金森と一手になり堺の南なる湊まで進み船手の諸將と談じ軍の評議をなしける此時幸村南大和路の敵を討んと先後藤隱岐守基次を大將として副將には深村周防守堀田圖書之輔伊東丹後守上村玄蕃允を差添へ其勢都合五千餘人にて所々の敵を押へん爲に神崎川に備させたり一手は長曾我部宮内小輔秦盛親を大將とし

戰はんとせしに銃丸一つ飛來り塙が咽を打貫しかば塙は堪らず馬より落て遂に討死したりけり此戰爭に敵味方の討死幾何と云數を知らず岡部は此體を見て心は彌敢に逸れども其身深手を負たる事故今は軍せん事叶ひ難く川邊へ來り團右衞門〳〵と呼ども塙は急所の痛手に早死したればゞ岡部大音聲に團右衞門今こそ中直りして死出の旅路に同道せんと水中にて腹掻切流れに臨みて死したりしは天晴見事の討死なり時に討洩されし雜兵等本陣へ立歸り此事を斯と告しかば大野聞より大に駭き淺野勢勝誇りたる勢ひにて大軍を以て押來らば如何は爲けんコハ一大事なりと敵の旗色をも見ず逃出すを者共は大に怒り斯る臆病なる大將に隨ひ來る我々まで不覺の名を取事の殘念さよと踏止まり戰はんとすれども引色となりし習ひにて惣崩れとなり敗軍す大將大野は只一人二千許りの勢にもたれ石津川を渡りし時米田大野に向ひ豫て眞田と賭をせられしに斯軍兵を損じ歸陣しては幸村へ何と申さるゝや大野が曰我母を賴んで御母公に願ひ詫言せん米田聞て是れ誠に云ひ甲斐なき事には非ずや斯せんより此川の前にて今一度戰ひ潔よく勝負を決し給へと再三諫れども一向に聞入ざれば米田怒を發して諸勢に向ひ汝等慥に聞け武門に生れては名こそ惜けれ斯闇々と引返し諸人に笑はれては何面目ありて生存へんや塙岡部が弔ひ合戰こそ成すべしと自ら堤を前に取り備を立て控へければ淺野勢五百許り米田の備に衝て掛り四角八面に荒回りければ米田も同じく渡り合ひ敵十三騎まで突伏其後堤の上に馳上り腹十文字に掻切

勢崎等又も四角八面に追散しければ船手の四將小出金森北條淺野等散々に打挫かれ敗兵を集め居たる所へ又々一手の鬨の聲すると見る内大筒を連發懸打込しかば手足も縮むばかりなり眞田大助時分は好と愈々繁く打込ば人馬共に微塵に打倒され暫時の間に死骸の山を成ければ向井以下爰に足をとめ豫て堺を指て引退くを三輪琴之助由利鎌之助猪飼武右衛門三好爲三入道眞先に進んで追崩せば大助暫らく味方を見守り勢を纒めて控へたり船手の四將は此敗軍に小家の町の濱邊より船に乘んと來りて見れば船はいつしか遙の沖に繋りてありしに向井は不審と見て居る内に旗一流れ舟中に飜へり其旗の紋六文錢にて其中より大の男一人立現れ汝知らずや幸村早くも我等に命じて船共を乘取しむ是は眞田が内に海野六郎兵衛望月主人の兩人なり水主楫取皆此方に從へり汝等兜を脱で降參するか命を捨るか覺悟をせよと例の張拔の銃を打出せば其音雷の如くなるに諸將は生たる心地もなく此方には淺野但馬守湊に在て先陣次第に打出んと思ひし處に反正天皇の陵の邊より軍兵の出るを見て不審し眺め居るに近く成て能々見れば是眞田が勢なりしに大いに驚き狼狽處へ青田彌十郎根津甚八津山三七同く元之丞と名乘り淺野が陣に駈立しかば淺野勢は不意を討れ同士打する者少なからず其内敵方より鐵砲を嚴重打掛られ散々に成て敗北す眞田大助扮は此鐵砲正く伏勢の打出せしなり此方よりも攻合せよと云儘に砂石を飛し追行半途に向井九鬼千賀小濱金森に出合しが各々眞田と見よりも是堪らぬと逃支度なせば

て副將にに野々村伊豫守中村式部少輔南條中務大輔町野左近を差添へ五千餘人神崎川の邊に備へ又一手は木村長門守重成を大將として副將には赤松伊豆守津田左近郡主馬介眞野豐後守を差添へ伊丹の邊に備させ幸村治幸の父子は首尾を討んと治幸は僅に千七百騎許にて下海邊に指向ひ幸村は七百騎許にて敵を取挫がんと河内口に向ひ各々立別れて進みける又大野は由利鎌之助近藤無手之助三好清海入道に張拔の銃大小取雜へ阿部の海道大江の岸上荒神の森と天下茶屋邊に伏置其身は住吉の松原に發向し扨又幸村は平野に出て堺の東なる森萬代村を後へ廻りて反正天皇の陵の蔭に潜たり此時關東方には淺野を始め諸將力を勠せて大坂へ攻寄んと評議を定め先一番には向井將監二番は九鬼小濱千賀三陣は金森小出四陣は渡邊北條なり扨も各々一同打立住吉の松原通りより馳向ふ道すがら去年城の外堀深ふして難儀なりしを思ひ出し今年は外曲輪を崩したれば心安し秀頼幸村が首を見ん事遠からじと向井等血氣の面々勇み進んで天下茶屋まで來り向井呵々と打笑ひ我もし眞田ならば此所に伏勢を置ん者をと其詞未だ終らざるに一聲の鐵砲響く程こそあれ左よりは伊勢崎久太夫右よりは同く友之丞敵將首を渡せ我等爰にて待事久しと呼はり／＼切て入しに向井等の面々驚き飛上り驚破敵ありと周立狼狽立騒ぐに向井は震へながらに止踏り敵は小勢成ぞ打散せと下知をなしつゝ自ら槍追取て突廻るに爰彼所より伏勢起り三好清海入道立顯はれ向井に打て懸るに不意を打れし關東勢は大崩れに成る所に三好伊

摸様を探り見るに皆神崎に陣し合戰彌いよ始まらば尼ヶ崎の池田利隆一柳生駒等應援爲ん樣子なるに大助は夫々の手配りを定め後藤は川上を渡りて斯樣〳〵にせよ長曾我部は爾々せよと萬端拔目なく部署を爲しに長曾我部は大助の所分を不審に思へ共流石に大助の事なりとて命を受て出行けり眞田此度の合戰に今里村庄屋三右衛門三谷村の同庄右衛門と云兩人を手に付たりし其次第は此兩人去年眞田方へ來り私し共儀は故大閤樣御在世の時に帶刀を御免にて惣百姓の頭分に仰付られし者にて候へば其御厚恩を報じ奉つり度一命を捨て御味方仕つり候間不肖ながら相應の御用仰付られ下さる樣にと願ひ出たりしに未だ彼等を用ゆべき折なく和議と成し故此度こそ此者の願ひに付て謀計を爲んと考へ大助に斯樣〳〵と申含めたるに因て大助彼者共を招き關東方より諸軍來らば神崎方の軍勢に交り功を立よと申し付しなり然る故に此兩人我組下の同意の百姓等を水汲野菜運びの雜人に仕立神崎の陣に引入置て眞田が向ふ沙汰を聞と鎗の目貫を外し馬具を僞り弓の弦を切り火繩には鹽水を掛置て其まゝ神崎の陣を遁出たり此合圖を得て後藤隱岐守押寄せ來り川を渡りて戰はんとすれば神崎方の寄手も偖大坂方より後藤討て出たりしぞ打取と鐵砲を竝出して待掛たり後藤は豫て工みし事なれば川の半途にして敵陣を見渡しけるに關東勢は鐵砲を揃へ待掛しゆゑ此方も同じく鐵砲の手を眞先に進め押渡れば關東勢之を見て川中にての鐵砲は火繩焔硝濕りて放事叶はず迂濶なる事する者かなと打笑ひ居たる所に此方に

諸將大いに怒り未練成者共哉眞田が來こそ幸ひなれ追取込て討取と犇き下知を爲と雖も引立たる習ひに大崩れとなりにける此時幸村七百餘人にて出來り敵を前後に引包んで討取ける故淺野九鬼向井等は散々になり南を指て落延つゝ岸の和田の城に入んとすれば何時の間にかは眞田が軍兵城に火を掛燒しかば城に入る事早叶はず是非なく紀州和歌山の城へと落行ぬ幸村父子は討取首を竿に結付勝鬨作り靜々と城中指て引取ける此勝軍に淀殿秀頼公には眞田の軍功を賞し給ひ然るにても大野主馬介は一萬二千の軍兵を從へながら武名拔群なる塙團部米田を見殺にして遁歸りしが大助は若年の身を以て大敵を破りたる事大野父子兄弟等何の面目か有りて居られんや秀頼公にも斯と點頭れ殊に眞田を待遇され感狀幷びに酒肴を賜り諸卒までにも賞を賜ひしとなり

第十一　淺野九鬼金森紀州落の事幷後藤木村大助が遠智を感ずる事

扨も眞田父子は又も神崎の寄手西國勢を打破んと木村長門守等を呼び軍議をなして大助を神崎の方へと差向らる此時神崎の寄手は細川越中守毛利大膳大夫山内土佐守立花左近將監森美濃守堀尾山城守等にて眞田大助は木村長門守重成後藤隱岐守基次長曾我部父子等と共に打立先敵の

後藤に會釋を爲すに兩人大いに駭き見れば由利穴山の兩人なれば那なる事やと仔細を段々尋ねるに兩人詞を揃へて主人大助豫て兩君の尼ヶ崎城を燒討し給はん事を氣づかひ某し等を爰まで出張させ置し次第は彼の城は秀頼公御運強く在さば甚だ御用に立べき城なるに燒崩しては味方の頼みにもならず由や敵之に籠るとも攻落す事は幾度にても至つて易く築く事は容易に成り難く然に依て止め奉つるべしとの命に依り先刻より此所に待奉つる所なりと云に木村後藤は舌を卷大助は如何なれば斯思慮の深きぞや我等勿々及ぶ所にあらずと涙を流して感じけり夫より兩人引返しければ大助は中途に出向ひ大に悦び各々打連て城中へ引入ける夫より幸村は淀殿の前に出此度倅大助木村後藤以下の助けに依て大功を立候主馬介一萬二千餘の軍兵を損じ勇士等を數多討死させたるに引比べては孰れをか御滿足に思し召るや忠と不忠とは天道の御存じあらん所なり扨此上は我等父子討死を急ぎ候間何卒場所を定め給へと云捨て御前を立しかば淀殿種々樣々に讒言し給へども幸村は豫て大野等如き佞人を用ひられしを憤ほりし事なれば何の對へもせず立歸りけり其後四月廿四日の夜の事なりしが幸村愈々討死の合戰仕つらんと披露せしに木村後藤長曾我部等秀頼公の御前に出て此事を申上しかば幸村父子を召來るべしとの事にて父子共御前へ出たる所四邊の人を拂はれ木村後藤のみ此座に殘り居て閑談數刻に及び各々眞田が差圖を受て大事の合戰に及ばんと用意しけり

は眞田水中放の手當を成置けるゆゑ後藤下知して鐵砲を打掛しに川端に控えし者ども將棊倒しに打倒され驚き仰天しながらも再度の玉込叶ふまじ掛れ〳〵と山内立花等急て指揮を爲しける處に川下よりは眞田大助押來り大筒を打掛ければ人馬微塵に打殺され關東勢途方に暮て立騒ぐを得たりと長曾我部等は先に進んで面も振ず突入眞田後藤も馳懸つて川を渡り攻掛りしに敵は鐵砲を放んとするに火繩濕て火傳はらずコハ叶はじと鎗追取て掛らんとせば目拔緩んで穗先拔出南無三寳と弓取出すに是また弦は破落〳〵と切たりしかば早すべき樣なく惣崩れとなり足並揃はず迯出せしを跡より追掛首を打事草を薙るに異ならず此時眞田は彼の庄屋兩人に盜ませ置し鐵砲を以て敗北する關東勢の前面より不意に鐵砲を持出させける故敗兵前後に敵を引受今は遁るべき道なく夢路を辿る心地して散々に打なされけり一手の百姓は跡に立歸り陣々に火を掛燒立つるを尼ゲ崎の池田利隆同く忠雄一柳等は伊丹に軍始まると思ふ處へ此火の手見えしかば相圖の狼煙と心得長濱より塚口へ指て繰出す時に木村長門守諸軍を下知して此敵を中途に於て散々に切崩せば敵は驚き尼ケ崎へ引入んとせしに木村眞田眞先に進んで突出るゆゑ終に返す事叶はず橫に馳て遁出す森山内細川等の面々は小濱まで引取けり是に於て木村後藤は尼ゲ崎へ押詰燒討爲んと兩人手勢を一手に合せ一度にどつと押行處に兩人が馳行前路に手勢少々見えしかば驚破尼ゲ崎の加勢御參なれ一人も餘さず討取と一散に駈行ば彼の者共道の側傍に在て木村

知行五萬石を與へ一家の大名と成べきなり夫まで先當座の賞として甲斐守に任ず可と有りしに大助發と平伏し不肖の某し斯迄の上意有難き仕合に存候然乍ら新參の若年任官の儀存も寄ず偏に辭し奉つるとて請を爲ざれば秀賴公是非なく幸村を召て達て勸められしかど幸村も淀殿の我を釣所爲ならんと思ふ故同じく辭して此儀は如何樣に上意御座候共天下一統し目出度御代に相成るまでは拜受仕つるまじと一切請ざれば秀賴公も是非なき事に思召し其沙汰遂に止にける時に四月二十五日後藤隱岐守八千餘騎にて道明寺國府に押出し地理を計りて手分をなす先栗崎には押子源五郎中川河岸今田荒川内山外山の六ヶ所には片山勘兵衛山田幸右衛門落合酒造允山田外記大川平馬嶋田内藏介に三百宛の兵を與へて埋伏させ敵を僞り引入て鐵砲にて討んと用意を爲さしめ其身は龍田に出て敵を待此時大御所は尾州御發駕にて四月廿五日に京都に着せられ先手は伊井侍從藤堂和泉守加州の先勢長九郎左衛門奥州の先手片倉小十郎等を始めとして先着し後陣にも追々と京着せし時敵は早討出たりとの注進を聞給ひてされば大和國を敵に渡さぬ樣に手當せよとて結城少將に松倉豐後守寺澤兵庫頭植村左衛門佐同新六郎新庄駿河守本多美濃守分部左京介甲斐庄喜右衛門高木主水正神保主膳正遠藤但馬守古田大膳亮桑山左衛門杉賀攝津守筒井隼人正を附け其勢七萬餘騎にて國府峠へ向られ一方は藤堂和泉守高虎に岩倉但馬守相馬大膳戸澤上總介南部大膳太夫同信濃守津輕越中守六郷兵庫頭溝口伯耆守高力左近松平内匠頭等

眞田大助任官辭退の事幷後藤出陣の事

斯て幸村は此度平野へ討出關東百萬の軍兵を亡ぼし再度秀頼公の天下になさんと密談に及ぶ所此合戰こそ誠に天下分目の勝負なれば古今稀有の火攻をなし關東の兩大將をも擊ち參らせ若成ずんば首は關東に梟首せられんと覺悟を定め基次に向ひて君には影武者に立つべき者之あり候や基次答て某し兄弟に山田幸右衛門と云者あり此者は能く某しに似たる者にて既に某し去年夜討せし時耳に薄手を負たれば渠も同じく耳を傷け其後眉間に外玉を受し時も渠自ら疵を拵へたり又左の頰先へ矢疵を受し時も同じくす依て右の仔細を問ば渠が曰惣じて一方に將として敵に名を知るゝ者は影武者を用ゆる事其例少なからず某し大事の用に立ん爲斯は爲したりと申したりき幸村聞て然らば足下は八十の兵を引て薄田隼人小川次郎兵衛を左右に備へ斯樣〳〵に仕給へと申せしに後藤承知して是より名を沖之助と變じ謀計をなさんとす此時淀殿には眞田が憤ほりを憂ひ色々心を痛め給ひて秀頼公に對して申されけるは眞田大助事は若年なれども數度の軍功比類なし然るに未だ任官有ざれば此度任官を仰せ付られ然るべし然すれば猶更奬勵の爲にも成べしと述しに秀頼公も道理の事に思され大助を召て其方事父に劣らず我を助去年よりの戰勞は謝するに物なし我運開きし時も有ば幸村は勿論其方迄にも先祖の國なる甲斐信濃の內にて

薄田殿には爰を防ぎ追散し給へ某しは國府の敵を打散すべしとて即時に打立向ふ所に越後殿には先陣七千餘騎を以て進み給ふに後藤に端なく出逢喚き呌んで戰ひける時に後藤基次藤の丸の旗を押立手勢を下知し能武者を六騎まで突落し是を傳へて後藤が六度鎗と云とかや時に藤堂高虎は十三嶺に攻入道明寺口へ向ひて敵の後を襲はんと戸澤相馬南部岩城溝口に下知して先陣三萬餘騎後陣には有馬六郷松平内匠の手勢を合せて七萬五千餘騎を以て押懸る後藤基次は豫て長曾我部盛親に右衛門太郎右衛門次郎等を大將として同じく十三嶺志貴山に打出て魚鱗鶴翼の陣を張せん事を依托せしにつき長曾我部隼人同舍人同氏部石部矢柄等を伏兵と成たりけり又八尾の地藏堂の後には秀頼公の本陣と見せ掛け千顆瓢簞の馬印を輝かせ桐の紋の旗を風に飜へさせたり是幸村が謀略なり又内山岩淵鶴ゲ瀬等の在々には伏兵を設け牧野には長曾我部盛親陣して敵を待懸る藤堂は諸手を下知して後藤が後を取切んとする處に長曾我部が伏兵起りて關東の前軍澤山戸澤相馬等の軍勢を驅散し終に亂軍となりて藤堂が本陣に突入時に藤堂が老臣藤堂仁右衛門同圖書同新七を始め英雄の武士共多く討死す爰に又藤軍の旗頭井伊掃部頭直高は四月廿七日に水口郷鶴ゲ瀬川より東に陣を進め先陣は小笠原兵部大輔二陣は山口伊豆守三陣は本多若狹守四陣は石川近江守五陣は松平下總守夫より本陣は手勢桑石豐後守藤田能登守木股清左衛門庵原主税を隨へ後陣には秋田城之介仙石越前守と手分を定めける此手に向ひし木村長門守諸將

を附け七萬餘騎にて志貴山に向はせ小笠原兵部大輔同大學山口伊豆守本多若狹守松平下總守孕石豐後守藤田能登守近藤越中守石川近江守秋田城之介仙石越前守京極縫殿介等の七萬餘騎は闇峠より差向らる猶も越後殿の手へ片倉小十郎藤堂の手へ有馬玄蕃頭井伊の手へ毛利甲斐守吉川駿河守等を附らる偖廿六日の夜は越後殿大和の大名を召具し給ひ明朝此方より龜田越をして大軍一度に押寄べしと評議一決す依て片倉小十郎第一の先手の臺命を蒙り龍田山の下を越て關屋まで來り窺へば後藤勢と見えて五百騎許り備たりしを片倉打笑ひて斯計りの小勢蹴散して捨よと云儘に鯨波を吶と作りて押懸れば後藤が手よりも鐵砲打掛防ぎ戰ふと見えしが佯り負て後陣より崩れ引を片倉奥州勢に下知して大和勢の高名を此方へ奪へと云儘に何の嫌ひも厭ず追入ければ家來別所源左衛門同主水諫めけるは何樣敵に計略有體なり伏勢の程も計り難しと云しに片倉は五百三百の伏兵何程の事あらんと猶も進んで追駈しに何處とも無く鐵砲一聲響くや否や千五百騎ばかり大筒の備にて繰出し筒先揃へて打拂ふ程に奥州勢は夥多く討れければ引んとするに前路には山田外記同幸右衛門嶋田藏之助大川平馬等鐵砲を揃へて八方なり打懸るに片倉進退爰に谷り縱横に薙回りて苦戰すれ共出る事叶はず既に討死と見ゆる所に後陣の大和勢松倉寺澤を始め助け來りて一方を打破らんとすれば薄田隼人正以下の伏兵又々來りて散々に突崩す薄田は鐵の棒を振て薙立〳〵戰ふ程に討るゝ者數知れず既に關東勢亂れ立て見えければ後藤が曰く

兵部大輔一手を操出しければ木村が先陣山口も喚いて掛り双方戰ひを結びければ關東勢二陣三陣押出して木村を討取んと攻戰ふ程に木村が勢は今日こそ命を捨べき戰ひなりと鋒先鋭く當りければ關東勢は四途路に成て敗走する所に半田牟禮佐久間等の勇士助け來り關東勢に鎗を捻りて打て懸るに關東勢は彌々亂て山口本多石川等も惣崩れとなり引退く斯と見るより井伊の本陣より山口伊豆守手勢を下知して進み出で我々は井伊が先陣山口伊豆守なり敵の先陣も吾が同胞の山口左馬之介イデ花々敷勝負を爲せと呼はりければ山口左馬之介獅子の怒をなし威稜しや兄なれば逆軍は君の爲用捨はならず覺悟有と挑み戰ふ所に左馬之介御參成と伊豆守に引組で曳や〳〵と揉合し内左馬之介手早く刀を引抜て伊豆守が脊より我腹へぐさと貫きて兄弟同じく討死なすこそ同胞の心切なる事と哀なりける戰死なり（某の書に曰く山口左馬之介は關東より兄伊豆守を以て心を改め味方に加はらば相當に取立て與へんと招き給ひけれども左馬之介忠を重んじ此事を肯はず遂に此次第に及びしとぞ）扨夫より双方亂軍と成て挑み戰ふ所に木村方より五行の軍を繰出して井伊の旗本勢を追崩さんと五手に分れ左を攻れば右より救ひ前に當れば左右より後へ廻れば中央より五手の備へ色を別て打出ければ亂るゝ事更になし井伊の旗本之が爲に散々に破られける處に木村長門守は今ぞ最期と緋縅の鎧に鍬形打たる冑を戴き淺黄の母衣を脊に負て薙立〳〵立出たる有樣は天晴勇夫とぞ見えにける井伊が方よりは是を見て馬廻りの者黑

に向ひて某し此度の戰ひは味方一大事の戰ひなれば是より北の社まで敵を釣入先勢を亡ぼし井伊が旗本へ突入て掃部頭が首を揚げ故太閤へ我冥途の土產に奉つるべきなり就ては誰か我に力を協するやと云時に山口左馬之介進み出て願くは某し承まはらんと答へしに長門守大に悦び誠に其許力を協せらるゝに於ては我何をか憂へんやと夫より軍事を種々示し合せけり

第十一　井伊木村合戰の事幷木村長門守重成戰死の事

斯て木村は山口に伊藤團右衛門木村五助等を差添五十目三十目の銃を預け又謀計を示して曰く抑々此度は味方一大事の軍なれば我豐臣家の高恩を報せん爲力限り戰ひ討死を爲んと覺悟を定めたる事故面々にも能く爰を領承有て隨分と花々敷戰ひ後代まで恥かしからざる樣に覺悟をすべきなり因ては五行の陣を布き戰はんに先我は花岡山の後方に陣取を搆へ牟禮彥太郎に二十五騎を隨へ先んじて靑き旗を立て東に備へ黑木藤右衛門は黃旗にて中央を守り四方の遊軍と定め高松內匠は赤旗にて南に備へ智德院は黑旗にて北の方に備へ各々二十五騎をぞ從ふべし是五々の數より出たる軍法なりと懇ろに說き示し夫より重成は根野九郎兵衛を始として勝れたる兵を七百騎隨へ花岡山の後に陣取たり時に東軍の先勢鶴ヶ瀨川の邊を渡り向ふを觀れば四ツ目の旗風に翩翻と打靡きて見えけるに扨は木村長門守出陣せしかイデ御參なれと云儘に先陣小笠原

は其許を立身させんと思ふ故なり決て其許と戰はんとには非ればさ程に怖れず早々首を揚給ふべしもし其許遲回して居るならば他人を招きて代らせんと云けるに長三郎やつと心を定め終に木村が首を打落し已が大小と木村が大小と差替首を太刀に貫き偖命限りの大音を上城方に鬼神と呼はれし木村長門守を安藤長三郎討取たりと呼はりければ其聲を聞つけ敵に首を奪はれじと俄に大勢引返す其が內に智德院血まぶれに成て呼はりけるは主人長門守は渠等如き者に討るゝ大將には非ず故ありて首を遣したるなり高言吐事有べからず我主人に代り此由敵に聞するなりと云終りて腹十文字に搔切て死したりける誠に主從同轍の義膽感ずるも又餘り有るかな

安藤長三郎が事幷片山勘兵衛戰死遠藤手柄の事

扨も安藤長三郎は木村が首を携へ主人掃部頭が前に差出せば直孝卽ち長三郎を召連大御所の道明寺の陣へ參り實檢に備へければ大御所長三郎に向はれ如何に長三郎木村長門守は其方に討るべき大將には非ず其方是は貰ひ首致したるには有ずやと有しに長三郎答て決して然樣には之無く全く自身討取候と申ければ大御所長三郎が太刀を御覽ぜられ此刀は汝が所持にや答て誠に重代相傳の刀にて御坐候と申ければ大御所然れば汝は祿を如何程取や答て百五十石にて候と申けり其時大御所庵原主税に命じ長三郎の討し長門守が死骸を取來れとの事に主税早速走り行持返

川平馬落合藤右衛門青羽武太夫等我討取て高名せんと鎗引提て立向へば木村怒りて下郎め慮外なりと云儘に突伏薙伏必死の働き三人共に討れてけり木村は彌々荒回り已に井伊が床机備へに乘入所に關十左衛門と云者無双の大力なりしが木村に只一刀あびせ掛られ討死す此時木村は井伊と刺違へ死ん物とて一散に突入既に直孝に一鎗參らんとする時藤田能登守馳來りて支へ戰ひ直孝は危ふきを逃れ退きける木大村いに怒りて藤田を暫時に突落し直孝を所々方々と尋ねけれども最早見えず其内に木村が手勢は或は討れ或は手負の者數多く高松半田智德院等が旗ばかり見えて外には附隨ふ者一人もなし然れども井伊が本陣も散々に破られければ今は木村に敵する者更になく依て木村は堤へ馬を乘上暫らく休息し然るべき敵將を相手として我首を遣はし高名させん者と東西を見廻す所に井伊が内に安藤長三郎と云者最前木村に驅立られて蘆の中に隱れ居たりしが此体を見て木村が首を打取り重き恩賞に預り功名を末世に殘さんと思ひ詰けれども又怖ろしく如何はせんと息を詰窺ひ居風と四邊を見回すに味方の捨し鐵砲と覺しく玉藥仕込たる儘捨て有しかば是天の與へと拾ひ上慄々ながらズドンと一發打出せしに長門守が腹をかすり大口を打拔たり長三郎得たりと喜び出んと爲に長門守今は是までと思ひ長三郎を呼汝に首を與ふる間早く打落して高名にせよ併しながら實檢に備ゆる時は兜を脱せず此まゝ出し給はるべし率首を打落せと云に長三郎は慄へ怖れ逃出さんと爲しければ木村打笑ひ我今汝に首を渡さんと爲

せざるは實に然も有ん然れども其使者を殺すは不仁の致し方には候はずやと新將軍聞給ひて是木村が至忠なる所なり何となれば若も使者を其まゝ返す時は大野如き者の疑ひを承け片桐が如き事に成行時は是迄の至忠も水の泡とならんを恐れてなり使者を殺す事は彼も定て不便に思ひつらんと有しに小性組の者君の遠慮有を深く感じけり又大御所にも木村が去年茶臼山にての振舞を古今稀なる義勇の士と賞給ひて太平以後所縁の者を所々尋ね給ふに絕て無れば是非なく打過給ひけるとなり木村が首は死骸に付て厚く葬り石碑まで建させ供養有ければ關東數萬の軍勢歩卒までも淚を流さゞるは無りける然ば木村が美名は千歲の後まで朽る事なく實にあり難き忠臣と呼はれなん

偖も木村が討死と聞より本陣華岡山へ亂入する關東勢は分捕せんと物の具旗指物を目掛て我も〳〵と馳入に木村が五行の陣勢五色の旗ばかり殘りて人は一人もなき體なれば然てこそあらんと面々押入處に何處共なく鐵砲の聲響き渡りて伏兵起り先に進みし雜武者一時に打倒されければ敵有と馳歸りて告る程に仙石越前守秋田城之介等此敵こそ我得物なれと馬を早め手勢を下知して進み行き向ふを見れば五色の旗整々たり然れども何程の事あらんと押詰しに一人の武者四目の旗に御幣の馬印を立て木村長門守是にありと云より早く一散に飛來りて散々に突掛り大音聲に軍は是迄なり木村が內に一騎當千と呼れたる屋根九郎兵衛主人長門守戰死に因て腹切んとせし

る大御所手づから木村の陣羽織を脱し給ひて此羽織は其方着して木村が武勇に因縁と有て彼陣羽織を庵原に賜り夫より歸骸を見給ふに首の切口左右より太刀の當りし如く有ければ是紛れなき貰ひ首とて長三郎を強く叱りつけ殊に巳が太刀は爰にわり汝が重代の太刀と云は信長予に與へ予又秀次に遣はし秀次より長門守が父常陸介に與へし品なるに汝貰ひ首を僞るのみならず太刀まで差替る段不屆なり掃部頭恩賞無用と嚴しく達せられ扨重成が首を見給ひ豫て討死を期したるの不便さよと双眼に涙を浮ませ暫時歎かれ居給ひ稍あつて近侍の者に告給はく凡討死を期する戰ひには忍びの緒を結び切事古實なり木村は討死を期し此古實を用ひ久く兜を脱ずと見えて忍びの緒の痕着たりと又も歎き給ひつゝ内冑を改められしに名香馥郁と薫じけるとなり

一說に曰く木村長門守名香に兜を七日薫らせ置き書付を挾みて誰にもせよ首取者に臭氣無き樣斯香を焚込置たりと認め有しとなり是より先新將軍殊の外木村を惜み給ひ或日大御所へ談合せられ使者を以て木村を招き寄られんと爲しけるを大御所制せられ彼は忠義の心厚き者にして此方より如何に禮を厚うし說と雖ども勿々心を變ずる事有可らず却て恥を與へん事必定なり決して招く事無用なりと有しかど新將軍兎角思ひ切り給はず例へ來らざる迄も一度は申し送り見んとて河内一國の御墨付を以て說しむるに木村果して大に怒り使者を其儘殺してければ新將軍別して感心せられける側へより小性組の者出て申けるは木村忠義に依て招きに應

しが元より剛力なれば振返りて敵を難なく組伏同く首を取んとするに又も眼暈み兩馬が間に落
たりける然れども萎まず其者を組敷首搔んとして見るに三鱗甲の紋付有て初めに討し遠藤武者
之助と同し紋所なれば怪み兜を引除見るに未だ十五六歳の小冠者なれば扨は我手に懸し遠藤が
悴よな優しや父と最期を同くせんとするかと感涙を催し我は是後藤又兵衛が手に片山勘兵衛久
邦と云者なり今は我汝を討に忍びずイザ反返して我首を取父の敵討を爲して高名にせよ敵乍ら
も汝が如き者に首を渡す事は我本意なりと申しければ小冠者其志ざし忝けなしと雖ども貰ひ首
をして何にかせん其儘に某しが首取給へ我は最前討れたる遠藤武者之助が一子龜之助と云者な
り生年十六歳の初陣ぞ急ぎ首討給へと云けるに片山最不便增り戰場にて父の首を取返し直に其
敵を討取ば拔群の高名に成なりと渠が刀を我手に持添脇腹へぐさと突込疾々介錯有るべしと首
指延れば龜之助今は詮方なく斯る勇士の首打取事武門の本意辱けなしと涙乍らに首を討たりけ
り片山が最期は昔熊谷直實にも劣らざりし振舞かな夫より龜之助は片山が首を陣羽織に包み主
人松倉に見せければ松倉主將の實撿に供へんとて龜之助を召連御前に出ければ龜之助は片山が
最期の次第を逐一に申述べ貰ひ首致せし由言上爲に主將甚だ感じ給ひ何にもせよ初陣に父の
敵を討事大功なり殊更武勇の片山なれば汝が武を感じて尋常に首を渡しける段比類なき手柄な
りとて感狀をぞ給はりけり

に雜武者に押隔てられ本意なくも是まで生延たるなり主人今は井伊家の者に首を與へし上は我く々とても是迄なり潔よく腹切て相果る間主人の備へし陣猥りに亂暴する事勿れと一時に六七人刺違へ又は腹切て果たりけり木村の家人敵を追立勇々しき最期を爲す事諸軍一同に感じ合るとなん此時後藤基次は奥州勢を打破りて後山田幸右衛門に我名を名乘らせ其外の者共にも山田を我と思ひ忠と義とを勵むべしと申付其身は熊野新宮へ急ぎける時に將軍家には華岡山に陣を居られ猶も合戰の下知有て藤堂の勢には後を攻させ越前加賀の勢には前を防がせ水も洩さず取卷たり後藤が郎等山田兄弟片山勘兵衛行方兵庫小川重内等右に突左に當て奮戰し大和勢越前勢等を多く討取たり片倉は嚮の戰ひに敗軍せしを無念に思ひ又も鐵砲を打掛〱戰ひければ松倉豊後守同舍弟十左衛門等も自ら先に進んで後藤を討取んと突て入片山山田屹度見て前に進み松倉が將士を突落し豐後守に鎗を付んとするに十左衛門豐後守の前に塞り戰ふ故好き相手なりと片山突て掛れは此鎗先に當り兼十左衛門引返せば遠藤須賀新庄等馳隔て引受るを猶も突破りて豊後守が逃出すを追かけ天晴關東の大將何故に敵に角總を見せ給ふぞ見苦し返せ〱と呼はり乍ら突出す鎗馬の尾筒を貫ぬけば松倉馬に跳落され撞と許りに轉ぶ處を片山續て飛下んとする所に家臣遠藤武者之助馳隔りて馬上乍ら片山と引組曳や〱と揉合しが片山終に遠藤を組敷鞍の前輪に押當首を弗と掻切たり所に後より片山が冑を重ね打に討居しに流石の片山目暈漂浪めき

首を土中に埋めしなり然しながら可惜勇士の首を土中に埋め置んは殘念ゆゑ今迄生殘り居て誰成共來りなば首を渡し遣はさんと思ひしなり然れば此首を汝に渡す間汝好に取計ひ葬り吳よと云て首を堀出し彼書を添て相渡しイデ某しが最期の程を見物せよと云儘に腹搔切て手を差込血綿を摑み出し前に居たりし者の顏へ打付自ら首を搔落し死失たり此事片倉勢早速注進しければ小十郎後藤が首と細書一通とを差添實撿に供ふ時に其書を開き見るに

去冬以來數度の合戰勝負は區々に候得共關東方の運目出度相見え始終の勝利を含めり今月今日諸將悉皆く討死し某しも只今國府の合戰に討死なす所なり城中に佞人大野在て事を計らひ去冬御神文の節は欺かれ城中不和にて我々の諫言用ひられず依て斯相果候也此以後大野氏を立置候はゞ某しが一念惡鬼と成て德川家に仇を成さん就ては渠を重く刑罰あらば某し鬱憤を散じ祝着致し申候　冑の內の書面は黑田甲斐守へ御見せ可被下候以上

月　日　　後藤隱岐守基次

右の通り書たり因て早速に黑田を召出されて後藤の面体を尋させけるに黑田答へて某しも年久く面會致さゞるにつき確とは識別覺束なく候へども全くの後藤なれば左の手の小指半分程之無しと申に依て死骸并に物の具取寄見てあれば小指半分なし依て正かに後藤又兵衛が討死と定まりたり冑の中より一書を取出し見れば

後藤基次の影武者山田幸右衛門の次第

此時双方入亂れ諸手餘隙なく戰ひければ此處に現はれ彼處に陰れ手負死人數多く死骸は積で山をなし暑氣に向ふ時分なれば臭氣鼻を撲き血煙眼を眩し誠に修羅の巷も斯や有んと思はれける時に山田幸右衛門は先刻よりして必死を極め敵を討取る事十一騎にして身には數ヶ所の手負を爲し片山も既に討死と聞此上は一刻も早く死を急がんと弟の山田外記と申合せ後藤隱岐守基次と名乘て縱横に切て回れば加賀勢は追取込て鐵砲にて討取んと爲たれども無双の勇士を飛道具に掛て打取る事は家の瑕瑾と制すれども逸り男は之を聞入ず討出す玉に山田幸右衛門は胸を打貫れしかど流石剛氣の者なれば左の手にて胸を押へ右の手にて采配を採八方に勇を勵しけれども今は是迄と引返し見るに又追々と諸勢馳集りければ弟外記此勢を引倶し敵を追拂ひ來りしに幸右衛門在家に火を掛しめ諸勢一所に集り皆切腹なして果たりけり時に幸右衛門一通の書を竹に挾み我首は此土中に埋むべしと申置山田外記を殘して介錯させ首を埋め後藤の旗に鳥毛の馬印を押立させ其際に外記を空死させて置たりけり敵勢爰に來り此体を見るに旗馬印の外に竹に一通の書を挾み其脇に一人の武士倒れて居ければ首取んと近寄時山田外記直くと立上りしにアハヤと驚き逃出すを外記呼留め我を然のみ恐るゝ事勿れ後藤又兵衛基次討死し我之を介錯して

ならんかと

第十三　薄田隼人兼相戰死の事并豐浦村百姓喜六が事

爰に又長曾我部元親は則久村にて藤堂の大軍を駈惱し又も群る關東勢を喚き叫んで薙立てけれども敵は目に餘る大軍なれば終に崩れて引にけり依て藤堂は八尾の地藏を後に當て陣を取り大御所には道明寺に本陣を据給ひけるに譽田山にて何者とも知ず太鼓を打て朝長の猿樂を謠ふ聲のしければ如何成迂闊者なるやと思され人を遣はし制させけるに是外人ならず薄田隼人なりけるに猶疑ひ給ひて鐵砲を打掛試みらるゝに薄田事共せず結城權左衛門角尾寅之助山川民部小川次郎左衛門小川庄右衛門等を前後左右に從へ同じく三十目五十目の筒を一度に打掛れば關東勢思ひも寄ず痿む處を打破りて馳通り二三の備一つに成て押懸りつゝ終に酒井左衛門尉の備へに切込たり夫より猶も進んで已に本陣近くへ切込しかば酒井雅樂頭蜂須賀長門守押隔て命限りに戰ふ中にも酒井が手に增尾鍋藏と云者薄田と討取んと大長刀を振て馳向ふ薄田小癪なりと例の鐵棒を振わげ眞向微塵と打据ければ增尾が首は胴の中へ打込まれたり之を見て敢て近付者なく其内蜂須賀が手より小道甚内同甚藏とて聞ゆる兩人イザ組留んとて駈寄を結城權右衛門邪魔なりと云儘に甚内が帶引摑んで片手に掀げ抛り出せば馬武者一騎を越て跡なる甚藏に打付二人諸

一筆啓上致候其後久敷不能拜面彌々御堅固之段珍重に存候某し儀貴殿方立退候節祿五萬二千石の内一粒欠ても有付間敷段申置候然處此度秀頼公より御頼みに依て七十二萬石の御墨附を賜はり只今戰死仕つり候段本望之至に存入候御暇乞且は舊主之儀故寸書申進じ候也恐惶謹言

月日　後藤隱岐守

黑田甲斐守殿

とぞ書たり後藤は最初十萬石にて召出され追々加恩有て七十二萬石まで賜はる事に成しとなり依て愈々基次討死との沙汰有て黑田には少しの事にて惜き武士を失ひたりと人々評し合りけり一書に曰基次は田原藤太秀郷の後胤後藤又兵衛尉實基の末孫にして父は信長の時沈落し民間に潛み基次は其時に生れたりされば系圖も正しき家筋にて殊に基次武勇拔群成けるに因り大御所深く之を懇望なし五十萬石を以て味方に招かれたりしが基次之を肯はず因て返答なしける樣は當時の處にては關東方勝利にて大坂の旗の手惡しく候間御請申さゞれども自然大坂勝利にて關東方敗兆之有候はゞ早速罷越候て御味方仕つり御恩を報じ奉つらんとぞ申送りたり大御所は新將軍が木村を招き給ふを止め給ひて後藤を斯く招き給ふ事如何なる事にや蓋し木村は父常陸之介秀次公に附從がひしより代々の恩あり後藤は新參の浪人なれば斯く有し事

るを待掛たり斯る事とは夢にも知らず大御所は旗本勢を前後左右に引纏はれアハヤ此處に差掛られし所に件の伏勢討て出で縦横に薙廻れば續いて長曾我部の兩人旗本勢を切崩し既に大御所危ふく見えさせける所を大久保彦左衛門永井右近五十騎許にて漸々に一方を打破て落し參らせしに又も伏兵起つて散々に突き回れば旗本勢の踏止つて拒ぎ戰ふ者多く討死し此間に大御所は馬を進め給ひて四五丁程を打過ぎられしに一手の勢見えければ水野帶刀其に見ゆるは敵か味方か誰人の勢なるやと聲高らかに問ひ掛れば是こそ長曾我部宮内少輔秦の盛親なり先刻より待詫て爰に扣へたりと答へければ水野是一大事と急に旗本の備を立直すに敵兵烈しく寄せ來りて旗本勢散々に打なされ今は水野帶刀大久保彦左衛門の兩人とまでに成果て力弱くも山路を悄々辿りつゝ落延給ふ其折柄泥道の足掛り悪く水野帶刀側への石に跌いて撞と計りに倒れしかば大御所馬上より千石を取するぞ續け〳〵と有しまゝ豊浦村迄來られし所に大御所の馬も疲れ果前足を折て倒れしかば大御所堪らず横樣に落馬せられ溝の中へぞ落給ふ大久保水野大に駭き急に引起し奉つりしに惣體泥に塗れさせ給ひければ近邊の人家を尋ねて喜六と云者の方へ入參らせしに主人是は唯人ならず正しく關東方の御大將大御所にて渡らせ給ふらんと思ひければ取わけ尊敬を加へ萬端の事に意を注ぎしかば大久保主人に向ひ見らるゝ如く道にて泥に塗れさせたれば何成共御召替を奉つれよと有ければ主人畏まりぬとて木綿布ながら新しきを急ぎ裁縫して恐れ

共死したりけり角尾寅之助も馳來りければ薄田は又も角尾結城と共に本陣指て切入所に越前勢鐵砲を打事雨霰の如く薄田角尾結城山川等之が爲に打据られ終に引退く所に筒井隼人正が勢一散に飛來て薄田に切て掛る薄田血に染て朱塗の如き棒を振上充分に打据れば筒井呀と云て鞍の前輪に伏けるが其内多勢助け來つて筒井を返しけり斯る戰ひに薄田が七百餘の兵今は大方討れ主従僅か十餘人となり漸々切拔再度譽田山に上りて又も猿樂を高らかに謠ひ酒宴を爲てぞ居たりけり其内日も早黄昏と成て薄田も疲れ果たる事故に前後を忘れ打臥したり折から敵兵爰に來り此體を見てスハ撰み討に打殺せと鐵砲並べて打放せば何かは以て堪るべき角尾結城以下皆討死をぞ爲したりけり薄田は今こそ討死すべき所なりと本陣へ忍び入けるを本多三河守見て敵方の紛れ者ぞ討取と云程に加賀陸奥の陣より大勢駈け寄せ薄田を中に取込討んと爲に薄田今は是までなりと大音に薄田隼人兼相最期の一戰を爲ぞ來りて勝負あれと呼はり〳〵夜叉の荒たる如く切て廻り勢ひ鋭く當るを幸ひ刃向ふ者を六騎まで切て落し夫より薄田は馬上にて腹十文字に搔切果たりけり斯と見るより追散されし者馳せ來り首を揚て立歸り實撿の塲に差出しければ大御所其勇氣の程を感賞ありて死骸を厚く葬らせ給ふとなん斯て敵の勇將大半敗北せしかば大御所にも稍心を弛ませられ道明寺の本陣より平野の方へ移り給ふにより油斷の体見えてければ長曾我部右衛門三郎同右衛門四郎の兩人百姓の出立に身を拵へ手勢を所々に埋伏せしめて爰に來

坂の諸將が續々と討出で戰死を遂る事は是其所以あるべし推量るに今城兵本丸に楯籠り戰はゞ味方の難儀なる事數々有に斯く討出で思ひ〳〵に討死を成す處を以て見れば全く大野が淀君と萬端を計らふ故ならん然らば幸村も軈ては戰死を覺悟し近日に討て出る事必定なれば先斥候を出し伺はせし方然るべしと有しかば一同も實に然らんとて夫より忍びの者を出し見せしむるに長曾我部も早引取て敵兵は近邊に見え申さずと使番の長田勘十郎水野六左衛門より申立しかば大御所扨斯樣なる時こそ大切なれ敵の謀計如何なる事を仕出すも計り難ければ自身敵の樣子を見積るべしとて大久保彦左衛門永井右近松平内匠戸田左門横田甚五郎等の近習の者を連られ立出んとなしければ酒井本多井伊藤堂等諫めて曰君是迄度々御危難に遭させ給ふも畢竟斯樣の事御自身に遊ばさるゝ故なり某し等見積り來らんと申しけれども用ひ給はざれば大久保彦左衛門大に怒り君には御若年より兎角斯樣の事好ませ給ふゆゑ危き事あり酒井本多等の諫め道理の事に候此大久保は諫めを用ひ給はざる君の御供は致すまじと苦り切て申けれども是又聽入給はずして危難は軍の習ひなりと有て遂に自身進行せらる時に幸村は關東方陣を平野へ引入ん事近々に有ば先龜井村にて一戰し勝利を爲して夫より平野へ攻入んと先穴山小助春田彌十郎淺見五兵衛陶山三七樫山藤六を龜井の藪の中に三百の勢を以て伏兵とし又大助には五百目の大筒を授け增田三太夫根津甚八を差添同じく要地に伏させ其外手立を一切に調へける處に關東方には大御

多くも御急場の事ゆゑ麁物を省りみず捧げ上つるとて持出せしかば直に之を召替させ其まゝ爰に暫らく休足爲られけり時に五月朔日の事なれば後の世までも此服德川家に傳はり菖蒲木綿と名付られしとなり又此喜六へは軍終りて後帶刀を免され祿八百石を與へられて永く格式の家に立られしとは世の人の能知る所なり

大御所龜井村にて危難に遭給ふ事幷大久保彦左衛門水野五郎左衛門精忠の事

斯て城中にては幸村諸手の戰ひを心元なく思ひ居たりしに木村薄田の戰死爲したる事を聞猶も心樂しまざる所に木村が家臣伊藤團右衛門木村助五郎の兩人馳歸つて幸村に向ひ主人重成我々兩人に申しけるは我は今日討死を爲すに付ては其方等も共に戰死と思ひつらんが今死すべき命を以て天晴君の御大事の時忠死を遂られよ若も此事聞入なく我死出の供せんとならば今より主從の緣を切るべし此儀承知ならば疾城中に立歸り此旨幸村に告られよとの事に是非なく無用の命を生存立歸り候なりと告ければ幸村父子聲を放て泣き沈みアヽ天我片腕を落しけりと歎きつゝ香花を手向居たりし處に引續き後藤が家臣山田兄弟薄田隼人が戰死を告來りしかば幸村早人心地も無只愁にこそは沈みけれ時に關東方にては大御所諸將を集めて評議に及ばれける樣は大

めを用ひざる社後悔なりと一人歎息せらるゝ處へ横手より鎗を入しは眞田が勇臣春田彌十郎馬に諸角入て馳來るコハ叶はじと横道に入給ひければ朱に染たる一將葵の紋の陣羽織に陣笠を深々と着し大音に呼はるは　清和天皇の後胤八幡太郎義家の嫡流新田の後孫前の征夷大將軍右大臣源の家康今討死と覺悟せり我と思ふ者は來つて首取と名乘けるにぞ大御所不審と能々見給へば大久保彦左衛門にて有けるに嗟呼忠臣哉〳〵と云捨て鞭を加へて遁れ給ふ春田彌十郎我今日君を討取り一番の功に預らんと鎗を振て突出す大久保得たりと馬を寄せ鎗を合せて上段下段と突合し内救ひの勢押來りて忽地春田を追立〳〵大久保を助け歸る其內井伊藤堂本多等も出で來りしに敵方にて淺見五兵衛關東方の總大將家康が首を討取たりと呼はるに諸將コハ如何にと驚けども味方の氣折せん事を恐れ馳廻て君には御無難に逃れさせ給ふぞと呼なすに是全くの御無難なる由始て知り君に問て水野五郎左衛門君の御身替りに立たると譯り皆々感涙を催しけるとかや兎角する內敵勢を追散し井伊藤堂の兵前後を固め大御所は道明寺の陣へぞ歸られけり今日の戰ひに馬廻りの戶田彌作內田彌助朝比奈志賀之助松平酒造之丞小川隼人大野木傳內本多助次郎等所々にて戰死す然るに大御所は本陣に入給ひて吐血せられければ藥を嘗て在せし處へ秀賴の簾中千姬君を男の姿に仕立青木民部少輔已れが供の中へ雜へ笈川八內諸共玉造口へ來り南條河內守同外記に向ひ幸村の命にて平野の加勢に出ると僞り道明寺の陣へ參り云々なりと言上

所五百の勢にて自身斥候に出給ひければ大久保は井伊藤堂等に向て城方の眞田必らず何か謀略あるべし然に由て君の御出馬を諫けれ共聞入給ず御出馬に成たり然迚捨置ば一大事なり各々早速勢を出し救ひ給へと言つゝ其身は君の跡を逐行しに長曾我部も引拂て全く敵の影だに無なりしは是幸村の計ひにて敵の氣を弛べん謀計ならんと暫時佇み居たりける此時大御所は龜井村の南より平野の方を見積らせん迚馬を立せ給ふに天下を握られける洪福の備り給ふ故にや召れし馬嘶き出し馬上殊の外心地惡く爲せ給ひければ俄に下馬せらるゝや否や大助大砲を打放しけるに鞍を打碎きしかば馬は伏倒れ近習の勢五六人微塵に成て失たりけり斯と見るより穴山を始め伏兵一度に藪の中より火を掛たれば龜井村は一面に火燃上り凄まじかりける有樣に安藤治右衛門君を手早く扶けつゝ扨こそ大久保が云しに違はず敵は謀計を設けしぞ此藪を切拂へ〳〵と下知すれば甚五郎と云者藪を少し切拂ひ是より漸々後の森迄迯行たり後よりは猶大坂勢攻掛〳〵來る程に火炎は倍々熾となり德川が旗本勢爰に數輩討死す此時大久保彦左衛門は早くも火の手鐵砲の音を聞付て藤堂井伊に軍勢を出させ其身は鎗引提て打て出で敵を左右に突散す大御所堪らず遁れ出ける其後より淺見五兵衛一手の勢を引て追來り既に難儀と見ゆる處に徒士の者たりし水野五郎左衛門と云者急場の義ゆゑ御免あれと云ひつゝ君の陣羽織陣笠を申し受け家康是に在返せ〳〵と呼はりければ淺見飛懸て突殺す此内大御所少し遁延させ給ひ然にても大久保が諫

以て衆軍を勵しける段夫が爲御無難に渡らせられし迚厚く賞美し給ひけり扨又姫君を易々と青木に盗み出させ笈川をも彼に合體せしむるは道明寺の陣を焼ん爲の眞田が謀計と聞えたり斯て幸村は諸臣を集めて申けるは我計略段々調ひ來れども役目を勤むる人に乏しきこそ是非もなしと歎息せしかば何れも皆拳を握り肘を張て控ゆる中より穴山小助進み出で願くは其術を聞んと申すに幸村其方が勤むべき役儀にあらずと云ふ時三好入道爲三進み出て願くは某し此役儀を勤めん聞せ給へと云ければ幸村莞爾と笑ひ然らば其元勤むべし偖其術は汝先此邊の百姓老爺の體をなし辻堂に在て斯樣々々致すべし此計略は味方の者も知る者稀なれば況て敵方知るべき樣なし急ぎ其用意を爲せと命じける時に大御所は忍びの頭根來雷光壬生の青鬼と名付し大膽不敵の兩人を召れ汝等敵の樣子を見屆くべしと有ければ兩人手下の者を引連明方平野へ來り見るに遠く六文錢の旗三本有ければ皆慌て敵は未だ引取ぬぞ早く退けと云に雷光熟々見て云けるは多く烏の群る所を見れば正しく空陣なり鐵砲を恐るゝ鳶烏の爭で群り居るべきや凡て鳥類は能殺氣を知り伏兵ある時は宿鳥驚き行雁列を亂すと兵書にも見えたり然ば大坂勢は引取たるぞと云つゝ平野へ行見れば旗は繩結にて兵とては一人もなし扨こそと旗を拔て持來り此段言上す然るに大御所には此注進を何分不審の事と思され安藤治右衛門に見て參れとの命有しかば安藤七十三人の兵を引彼の忍びの者を案内として平野へ來る時に五つ半時なり町中を見るに全たく兵

しければ大御所殊の外に悦ばれ此姫が事のみ心に懸りて在しに早心に懸る事なければ明朝平野の樣子を見積り早く大坂を打平げんと勇み立て青木笈川の兩人を一方ならず賞られ追て褒美遣はすべしと有たりけり

第十四　三好爲三入道奇計の事幷關東勢平野表陣取の事

斯て大御所は今日戰死せし旗本勢の功を賞して其者共の遺子へ感狀を下され別しては水野五郎左衛門事小身なるに君の身替りに立し段奇特なりとて其遺子を旗本に取立られ千石を下されける時に大久保彦左衛門葵の紋付たる陣羽織を着し血に染し鎗を引提來て御無難を賀し奉つると出來りしかば大御所座を立せ給ひて大久保が手を執り汝が至忠今に始めぬ事ながら此度の戰功は忘れやらぬなりと有て手自膏藥を大久保に貼り下されしとぞ其時安藤永井不審して大久保に問けるは其許には何として君の御陣羽織を着給ふや御陣羽織は水野へ下され殊に今日は茶羅紗の御陣羽織を召れたり貴殿何時の間に拜領有しや彦左衛門答て然ば斯る時の御用に立は臣の役目なり依て我去年冬御陣に眞田が夜討の時新將軍御危難有せられし節御旗本より御身代りに出し者討死せしを敵の方にて見付分捕せんと彼御笠御陣羽織等を持行しかば之を突落して我密に納め置たり夫を以て今日功を立しなりと云ば坐中皆彦左衛門が心掛を感じける又永井は即智を

雖も是計りの手疵に斯も汚穢事をする者哉不屆の奴なりと大に怒りしを安藤制して漸々に道明寺へ荷ひ込せ委細を言上爲ければ大御所も御覽あり成程下郎に違ひなしと有て佐久間能登守に預け給ふ是外人ならず眞田が云付し爲三入道なり斯て爲三は仕濟したりと心に悅びスハと云ば番人共を悉皆く切殺して太刀も馬も奪ひ取り思ひの儘の働き爲て歸んと心を定めて居たりけり翌日は午の刻に大御所道明寺に出陣せられ先手は井伊掃部頭此手の大名十二頭松平市正同采女戸田左衛門小笠原兵部大輔谷出羽守中川大膳脇坂淡路守本多美作守水野隼人正同日向守分部左京亮其勢都合三萬七千餘騎なり二番手は藤堂和泉守此手同じく大名十二頭南部大膳大夫津輕越中守相馬因幡守一柳監物戸田上總介永井信濃守森川民部六郷伊賀守岡部内膳正高力左近長谷川丹波守近藤武藏守其勢都合三萬七千餘騎八幡大菩薩の大旗一對次に井伊藤堂の大旗馬印にて平野桑津を經て陣を取次に越前少將越後中將を兩大將として此手の大名八頭堀尾山城守酒井石見守京極丹後守伊東修理大夫松浦肥前守相良遠江守稻葉伊豫守秋月長門守其勢都合三萬二千餘騎無文の白旗指物馬印を立次に加賀の勢此手の大名には有馬玄蕃頭丹羽左京大夫渡邊民部北條右近都合二萬八千餘騎何れも先陣を八町隔て三段に陣を取梅鉢の大旗指物馬印を押立たり平野東は伊達陸奧守其勢一萬五千南は淺野但馬守金森出雲守八千にて堅め瓜割村を松平長門守毛利吉川一手に成て八千騎馬場町口を松倉寺澤筒井植村等八千餘人天王寺口を松平土佐

は一人もなく辻堂ありて其中に何者か破鐘を鳴して嗚呼〳〵と叫ぶ聲を爲して在けるを聞付治右衞門走り入て見れば八十有餘の老僧横腹少し切て苦痛しながら舌を出して稱名し居ければ安藤汝いかゞ爲たるやと問しに彼者點頭たるまゝ物をも云はずして然も苦しげの體にて砂に何やらん物書を見れば私しは村の五助と云者の父念西と申者なるが此所陣場になり皆々遁行候得共私しは八十に餘れる老人ゆゑ孫子の足手纏ひにならんを恐れ爰に止り地藏を念じ居たる處に大勢來つて殺さんと云を眞田と云情深き大將殺させず兵粮を分て呉給ふ然るに夜前何やら大事の者を關東方に取れたるか又は失ふたるかの樣子にて皆々騷ぎ來り私しを見て若も生置て此事敵に知れては一大事と旣に殺さんと爲しけるを眞田又止めて殺すに及ずと云ければ然らば當分立事の出來ぬ樣に迚腰より横腹まで少々切又口を利れぬ樣とて舌を斯樣に引出して皆々引取候なりと假名を拾ひ〳〵に長々と書て見せければ安藤始終を考へ讀して其意を悟り扨は姬を失ひて城方騷ぎ歸りしならんと心を點頭猶彼者の舌を改め見れば深疵にもあらず少し刃物の疵有のみにて血のにじみし位なれば安藤如何樣武士にも有ならば是程の疵何ぞ恐るゝに足ん土民と云老人の事なれば怖しく思ふも道理かな抔と云つゝ然らば汝は道明寺へ連歸るべしとて大なる戸を出させ是に乘せ用事あらば戸を敲けと申聞せ十人許りに荷擔せ道明寺へと連行ける彼者大に悅び道へ出けるに戸板の上より小便を致し軈て又大便をも致しける故人夫大に怒り何程病氣と

より石火矢を打如くにて空は一面闇夜に均しく黒白も別ぬ計りなりされば召れし具足の糸にも火移りて一方ならぬ危難に渡らせ給ふ所に運の強く在ますにや側傍に大溝ありて折節五月雨水湛て有れば大久保永井横田の三人是へ飛込泥水を注ぎ參らせ各自も頭に泥を塗付又は手拭を水に濡し口にくはへ抔して辛くも其塲を介抱爲し東の口へと出でにけり夫より井路川へ飛込漸く水を飲息を繼稍人心地を生せしとかや抑々此謀計は眞田多年心を盡せし火攻の法にて未だ日本の仕方無れば眞田は此度之を行なひ永く此法を傳へんとぞ思たる由此法先初めに竈を拵へ火を焚置脇より地を堀て竈の下へ堀透し焔硝三斗ばかりを入銅製の壷を三個拵へて其中へ飛龍火とて纏銅巻にしたる粽樣なる物を入置火移れば虚空に上りて火を降する樣になし又別に銅製の管にて三個の壷へ火の移るべき樣拵へたるなり此辻堂の先は塲所廣の所故此所こそ此謀計用ふべしとて人知れず腹心の家來に申付兼々用意なしたるとなり凡地雷火銅連火の類は焔硝土中に濕らざる樣になすを兵家の秘傳とする由にて幸村は其如くに製せし物とかや扨斯迄に眞田が謀りし事も遂に遁れ給ふ大御所の運強く在ますこそ愛度けれ斯て此火の手を見て井伊藤堂駭く所に大坂方よりは三貫目筒三挺打込しかば加賀越後越前の諸將大いに駭き夢に夢見し如くにて只茫然たる計りなり大御所には平野東口井路川にて息を繼給ふ所に平野口より二町許り隔て陣取たる伊達政宗凄然と黒燒に駭き馳付見れば井路川にて蠢爾者有斯は審しと家士本多帶刀をして問

守生駒雅樂頭森美作守八千人平野辰己は松平阿波守五千人龜有村の燒跡は細川越中守　松平山城守大村河内守五嶋淡路守一萬人其外諸大名平野より道明寺まで段々に陣取たり

平野燒討關東諸勢敗軍の事幷大御所必至危難に遭せ給ふ事

此時關東方道明寺の留守居番には酒井左衛門尉同雅樂頭本多内記青木民部少輔等を殘し置れ彌平野へ打立給ふに因り諸軍勢は勇みつゝ我も〳〵と立出けるにぞ平野の町辻堂の先に陣を据させ金の五本骨扇の大馬印銀の半月の小馬印を押立其有樣四邊を拂ふて勇ましくぞ見えにける爰に此間燒殘したる竈ありければ大御所是にて湯を湧し湯漬を出せよと有けるに料理方畏まつて竈の下を焚付るに大御所フト堂の中の地藏を見給ひてアヽ廣大なる神通力を以て方便地獄の呵責を救ふ地藏尊ありコハ穢すべからずと有て此處立退給ふ時に恐ろしや大地に響きて火炎雷聲を發し地底より直に天を焦せしかば彼堂空中に飛揚り石の地藏も微塵に碎けてパッと四方へ散しかば大御所堪らず仰面に反て倒れしに大久保悲しやと小脇に挾み參らせ東を指て遁んとするに飛龍火と云物虚空を幾許となく舞飛火を降すに眼を開かん樣もなく焦熱地獄も斯や有んと思ふ計りの有樣に又しても屑家に込ある焔硝に飛龍火落て燃付しかば屑家は忽地火と成て此彼

る軍略なり然れば後世まで其譽れ空しからざるも亦宜なるかな

第十五　笈川八内三好爲三功を成事幷關東の眞田兩人大御所の危難を救ふ事

扨も平野の燒討に關東の諸勢討死手負擧て數へ難し此時新將軍には若江の本陣に在して彼火の手天地も崩るゝばかりの音しけるを聞給ひ急ぎ軍勢を操出さんと爲けるを本多安藤の兩人之を止め先斥候の者二人を出し平野東口の摸樣を見せけるに敵味方今を盛りと入亂れたる由告來りしかば安藤治右衛門は自身斥候爲ん物と平野に來るに眞田勢は之を見るより驚きし體にて平野の方へ逃入ければ安藤は召連たる七十五人を丸備にして突入を眞田が伏勢淺見青山津山の三人五百餘騎にて取込難なく之を討取たり德川方には新將軍安藤が歸るを待給へども申の刻迄歸らざれば不審なりとて佐竹上杉を先手とし戸澤相馬本多小笠原眞田兩人等を召連出馬爲し給ふ此時幸村は大助治幸を城中へ遣し秀頼公只今御出馬有べしと申入しかば公は直に出馬せられんと夫々に達せられしに淀殿達て止め給ふを秀頼公聞給はず將たる者敵の爲に討死するは本望なりとて馬に召れ既に出られんと爲に此馬頻りに跳上り忽ち落馬せられければコハ如何の事ならんと鞍を改め見るに肌付の下に鐵の尖りたる板三ッ挾みて有り乘ば其板にて馬の脊痛みし故空に

せけるに大久保彦左衛門が旗印の泥に染て之有り其傍邊に大御所休はせ給ひければ帶刀馬より飛下委細の事を問參らせて軈て陸奥守方へ知せける故陸奥守政宗急ぎ馳來つて我陣へ連參らせける大御所は肩息になり給ひ殊に大久保永井横田等は火膨れの爲姿は癩病の如く成て目も當られぬ有様なり其内に東の方葭嶋の中より望月主水五百目筒五挺を打掛來りしかば再び驚き今は戰ふ勇氣もなく陸奥守は大御所を龜井村へ守護し退きけるに井伊藤堂越後勢敗軍を集め來りしかば又敵地を横切瓜割村へ引給ふ斯る所に淺野金森小出北條路次を固め有しかば大御所は此勢を合せて道明寺へ歸り給はんとぞ爲れける時に又增田兵太夫五百の勢にて打て出ければ叶はぬ處と旗本勢命を捨て防ぐに兵太夫四手に分つて鐵砲を打掛〳〵寄來りければ植村玄蕃討死して防ぐ内に井伊藤堂加賀陸奥の勢嚴しく大御所を守護爲すに大將分の者を始め小性の者迄にて僅か五十八人許り從ひけるとなり大御所左右に諭し給ふは古へ我祖八幡太郎義家並に右大將頼朝は何れも七騎にまで討なされ夫にてさへ本望を達したり況んや我今敗軍せしとて數十人隨へり軍の慣ひ勝負は幾度も變るべし兎角軍は始終の勝をこそ願ふ者にて漢の高祖七十餘度の敗軍も烏江の一戰に項羽を亡し天下を治めたるなり汝等決して怖れ氣遣ふ事勿れと

因みに曰く眞田は謀略の凡ならざる中にも火技に頗ぶる妙を得て常に之を用ひて强敵を挫折たり其九度山蟄居の時數年心を込し紙製銃も今に至て功を奏せし事實に當時に取ては類稀な

護し八尾を指て退き向ふを見れば酒井が旗有ける故大に悦び進み近寄見れば忽ち六文錢の旗と替りて七組の番頭速水甲斐守中村式部討て出るに大に驚き本多等と倶々防ぎ戰ひ家臣十八人まで討死す其隙に將軍を扶け向ふの畑へと落延初更の頃漸やく本道にホッと息を繼所に又も一手の勢打出で來るは是大野主馬三百騎にて寄たるなり本多小笠原等必死と爲りて左右の敵に當て打拂ふ然共終日の疲勞に今は危く見えたる所へ榊原が手の者二三百騎馳來りて大野を突崩し追拂ひたれば是に力を得て又も進み行所に御宿勘兵衛伊木七郎右衛門眞木兵庫伊藤野々村増田中嶋白樫等の城兵三千餘騎を率ゐて鐵桶の如く取込散々に鐵砲打掛ける故今は關東勢も討死と覺悟を極め苦戰する事暫時なれば旗本の勢討死手負少なからず將軍も早是までと佩刀を拔給ひければ榊原が家士二江藤八是は勿體なしと無理に諫め申して指押へし所へ又候一手の勢と覺しく人馬の音聞えしかば松明取て透し見るに六文錢の旗見えけるにぞ將軍愈々自害と覺悟せられしを二江藤八又飛掛て差押へ恐れ乍ら君には何とて御短慮に在ますや斯計の難儀に如何なれば御生害爲し給ふぞ暫時は御止まり候とも未だ遲からずと云ひ爭ふて居たる所へ小性の者共追々手負乍らに馳歸りて眞田河内守同内記勇を銜ひ小笠原本多等と倶々敵を四方へ追靡け候と告來るにぞはつと溜息吐せ給ひアヽ二江能こそ爭ひ呉たり以來直參に召使はんと有て直に召出されしかば是より二江は直參とぞ成にける然る所に小笠原本多佐竹上杉等も追々馳歸り大勢と成けれ

跳上りたるなり大助大に怒り急ぎ別當の者を吟味するに淀殿の御内緣たる淺井周防守殿の仰に依て斯計ひしなりと答ければ大助兎角の言にも及ばず先秀頼公を二の丸へ入參せける斯て大御所には所々の危難を經給ひ道明寺へ急ぎ給ふ時に笈川八内は平野の火の手を見て青木民部少輔を呼び那見給へ大筒の音聞え候是に依て申上る仔細ありと云つゝ青木が側へ寄よと見えしが一刀に之を切殺し姫君をも討參せんと切入に山田賴母之助之を防ぎけるをも討果し猶奥深く切入に笈川が十二人の侍士共も所々に切て廻る姫君は本多外記助けわげ退きたり其後笈川は何とか思ひけん所々に火を掛本陣を燒立其火の中へ飛込で死したりける又佐久間肥前守に預けられし老僧の爲三入道も今こそ討出んと番人を蹴殺し太刀を奪ひ馬を盗んで逃去たり此時關東方の本陣無勢なれば者共は逃去り火は熾んに燃上る故大御所ニハ道明寺にも早敵廻りしと見ゆるなりとて急に住吉の方へ落給ふ時に伏勢又も所々より起り立ち鐵砲を打掛來りけるにぞ加賀仙臺井伊藤堂等所々に分れ戰ふ故扈從には永井右近大夫横田甚五郎松平東市正本多三彌田本長兵衞中根隼人大久保彦左衛門同彦兵衞今村藤九郞西村庄助永井助十郞山本十兵衞等五六十騎にて吾孫子村へ掛り給ふ新將軍には平野近く備を寄給ふに安藤が旗進退する體に先手の佐竹上杉馳合さんと跳り入しに五百目筒を打掛是を相圖に葭嶋より眞田が伏勢一度に起り大筒を打掛しかば討るゝ者數を知ず斯てはならずと小笠原信濃守は自身敵に當り東一方を切開いて將軍家を守

る共何かせん是誠に秀頼公御運の傾く時節至れるなり扨も殘念なる事哉と打歎き居たり扨二日の夜に入て大御所には新將軍を心元なく思され吾孫子村へ馬首を進め給ふ然るに先達て此所に伊藤丹後守大將として勢五百餘を伏置きたりしに淺井周防守來りて爰を固めんと云伊藤某し命を請て來る事故渡す事相成ずと爭ひしかば淺井大いに怒て某しは秀頼公の叔父なり何れにも大事の場所は堅むべし貴殿は外樣には非ずやと云返せしに伊藤は詮方なくも西口へ去て堅めけり斯て吾孫子村は淺井氏固め居たりし所に其夜戌の刻に及び大御所此所に來られしかば淺井使者を以て此方へ入給ふ事勿れ直に和泉路へ退き給へと內通し頓て鐵砲打掛鬨を揚ける故大御所は急ぎ和泉路へと退き給ふ伊藤此由を知り大に立腹し淺井に向つて何故敵の遁れ出るを待て鬨を揚給ふぞと云ば淺井敵を見て鬨を作るは誤りかと云に伊藤又も怒り眞田は我に命じて燒草まで用意爲せ置き敵來らば燒討にせよとあるに其許之を妨げる條奇怪なりと兵を纏めて引歸りけり

大御所堺に潛居爲し給ふ事幷織田助四郎久野吉左衛門が事

大御所には和泉路草部村名主大塚傳左衛門と云者の方へ入給ひしに折から傳左衛門軍役に出て留守成が家內の者葵の紋の鎧を召たるを見て尊敬を加へ御世話申ける時に大御所空腹に在ます

ば城方の勢も今は爰に戰死して益なしと御宿初め皆引取たり眞田兩人は將軍の前に跪まつき臣等御危難の場に馳せ付く事遲參したる段恐入りて候なりと淚を流し平伏しければ將軍にも殊の外悅び給はれ汝が忠は忘るべからずと有て馬上より釆配を賜はりける偖も幸村は斯迄心を碎き奇謀を運らしたると雖も關東の運目出度ぞ有けん度々の危難も遂に遁れ課せて無事に過ぬるこそ世を保つ瑞相なれ此時若秀賴出馬有て佐竹上杉を招き給はゞ變心も計り難きに其事なく濟ければ幸村も詮方なく城中指て引入ける時に城內の道筋へ附置きける番兵の內八尾口より怪しき者を捕へ連來りければ幸村懷中を改め見るに一封の書面あり駭き開き見れば

先達て申上候通毒害の事隨分心掛候へ共木村以下側らを離ず其儀延引仕つり候然れ共是非心掛罷在候且又平野邊御出陣は必ず〳〵御無用に御座候幸村種々奸謀何角手段仕つり候樣相見申候何分見合火攻の上彼此の義不日に申し上べく兼々御約束の通り本國拜領の儀に宜敷御取成被可候頓首謹言

五月二日　淺井周防守

永井右近大夫殿

と有ければ幸村淚を浮め口惜き事哉我今一度南北の內へ出軍して猶も秘計を廻らし是非一度は勝利を得んと思ふ所に斯の事なれば城を離れ出る事成難し萬一殺害火攻の事有時は假令勝利あ

叶ひし事なり迚専ら尊敬を加へしとぞ
此織田助四郎と云は城之介信忠卿の落胤なり卿二條城に在せし時側女に手を付られ懐妊す然れども信長公の手前を兼られ菅谷九右衛門なる者に内意有て金銀を賜り生の兒を堺へ隱し一向沙汰なしに養育を爲しめけり依て所の者も信忠卿の落胤とは露知ず彼女其子を産し後藥種屋へ嫁しけるが後には自然と三法師殿の弟なる由知れければ名を助四郎と呼て育つる内信長公本能寺にて生害せられ信忠卿も二條にて自害有しに因て天下は豐臣家の手に歸し織田は次第に衰へ有ども無が如く其後又關東の天下となりし時助四郎も我筋目正しき者と云事を知ると雖も町家に生立武道知らぬ身の憖ひ不覺有ては却て先祖の恥なりと只正直を心掛居りければ此事大御所の方へも相知れ相應の取立あらんとまで有しかど辭して承ざれば扶持を賜り後朱座御免にて惣座頭に命ぜられ後に苗字を書改め小田助次郎と云是なり
其後生蓮寺の濱に久野吉右衛門とて　禁裏御用達の肴屋ありけるが大久保彦左衛門甚だ目を掛置ければ是へも大御所三日程逗留せられ吉右衛門も有難く思ひ種々待遇奉つる因て後年何ぞ望むべしと有しに卑生儀は何とて不足も之無ければ別に望み御座なく候と申せしかば大久保中に立入り若も存外の望之有候ては恐れ多く候間君の思し召にて何成共遣はされ度と願ひければ然らば堺の船に鳥毛の船印を免し遣はすべしと有て元和年中より後の世迄久野吉右衛門は武家乘

故なんぞ進せよと有しに麥飯故差上難しと答ふ然に殊の外空腹に成せし故何成共苦からず早く〱と有けるに餘義無麥飯を奉つる其後此度の褒美として黄金三百枚下さるゝとかや扨大塚が宅にて面々休足し夫より岸の和田へと進み給ふに夜は早寅の刻なり時に岸の和田城中俄かに出火始まり騒動の體故城へも入り給はず直に脇道へ取て返され道すがら新川牛卜とて名有者の前を通り掛られしに永井右近太夫を以て先へ遣はされけるに折節淺野但馬守牛卜が宅に宿し居て倶々書院に請じ稍ありて牛卜御膳を献じ扈從の面々へも飯を出して休足せられし間に金森小出渡邊北條酒井近藤等馳來り其勢五萬餘にぞ成にけり井伊藤堂も使者を以て賀意を表し道明寺表より加賀仙臺の陣々聞傳へて同じく使者を差越たり是より本陣へ還られんと乘物二挺にて茶臼山へ着陣せられける時に竹腰山城守安藤帶刀乘物の戸を開れば京橋下總守大將軍の打扮にて目禮して立出る次の乘物よりは本多美濃守同樣に打扮ければ其次こそ御召ならんと何れも平伏して即ち三番目の乘物を開ればコハ如何に南光坊天海僧正坊主頭を振立出ければ何れも大に仰天しけるを僧正押鎮め是には仔細有事なりと云つゝ腹心の面々を奥へ伴ひ小聲に成て申しけるは眞田が奇計を避ん爲味方奇計を運らし誠は永井大久保等御供にて暫時堺に御座在ければ此事は深く秘し置き御不例と披露して隱密に致すべしとなり依て皆々安堵しける偖大御所には大久保永井等を隨へ堺に赴かれ住人織田助四郎と云者方へ三日逗留せられしかば織田は冥加に

段々危難を經給ひながら漸やく本陣に近づきしかば人々悦び居たりしに思ひも寄らず鼻先へ鐵砲の音しけると齊しく長曾我部左衛門太郎同右衛門次郎二手に分れて討て出しに上杉佐竹の面々大いに駭ぎ乍ら防ぎ戰ふと雖も城兵は勢ひ盛んに必死を極めし者なれば關東勢散々に敗北す斯と見て戸澤相馬も命限りと防ぎ戰ひ諸大將も踏止まつて挑みしが城方の勢は加勢加はり四方より鐵砲打掛喚いて掛るに諸大將散々に討なさる時に信濃守も自身鎗を合せ右衛門次郎も大太刀を振て當るを幸ひ切回り忽ち大亂軍となり何れ劣らず火花を散し戰ふ内に双方の加勢助け來りしかば又物別れと爲りたりけり其折右衛門次郎は透間を見て終に新將軍に廻り逢アハヤと見る内本多出雲守來りて之を防ぎ火花を散して戰ふ所へ又宮内少輔盛親が勢旗本へ切入しかば眞田河内守同内記勇戰して辛くも救ひ東の方を切開き落し參せぬ眞田兄弟此時痛手を負ひ朱に染りて馬も鐵砲疵の爲進み得ず乘捨て歩行立になり新將軍の馬の口を取て退きたり所へ槇嶋南宮伊藤内藤を始め城方の英雄逃すまじと血戰しければ眞田兄弟今は爰にて戰死と覺悟を極めし處に小笠原信濃守援ひ來りて敵を追崩しける其間に眞田も敵を一騎突落し其馬を取て將軍の跡を慕ひ行然るに本多は右衛門次郎と山をも崩す秘術を盡して戰ひければ是が爲天地も轉倒するかと怪まる本多は勝れし勇士なれば右衛門次郎既に危き所に右衛門三郎助け來り防ぎ合本多も所々にて戰ひ勞れ難儀の所へ毛利吉川來て助けたり長曾我部が家臣有井四郎右衛門畑式部今日

船の如く鳥毛船印にて他船を除させ通行爲しめたり

第十六　長曾我部關東勢を打破る事幷眞田河内守兄弟遠智誠忠の事

成敗は兵家も期せざる所なれば是を以て英雄を說くは眞の英雄を知らざる者なり然ば眞田幸村は鬼神も測り知るべからざるの謀略を以てすと雖も空敷圖を外し遂に關東を討損じ奈何共爲事無に至りしこそ是非なき次第なり然ども謀計を幾重にも構へ置長曾我部をして新將軍二度若江に歸り給ふ道すぢに伏兵を設けさせ爰に在て若討洩さば彼處にて討んとの幸村が手段は殘る方なく屆きしかば之に依て令を諸手へ下し關東方の兩大將の內孰れなりとも討取りたる者には望みの國を賜はるべし勿論足輕陪臣は千石にして御旗本に列せん中間小者は新知三百石の武士に取立其名を末代に殘さすべし且又天下分めの軍の內にも此度は取分二つ一つの平野燒討なれば功に因ては大名は百萬石賜はらん旗本小身ならば二十萬石或は一國の主ともせん輕卒ならば一萬石賜らん中間は千石賜らん亦野武士百姓たり共相應に希代の出世させんと觸たる事故元來必死の城方勇み常に百倍せり時に新將軍二日の夜五つ時頃若江の陣に歸り給ふに扈從の面々心付人數を數へるに佐竹上杉戶田內藤相馬京極山內毛利吉川等も追々馳來て頗る多勢となる時に

共御供の者一人も無れば却て御爲惡からんと只今は控え申候君能々思し召るべし某し等今日堅陣を碎き君を救ひ奉つる事都合五ヶ度に候君峠を越給ふ上は味方の大名大御所の御座所をも知れず君の御行衛をも失ふて是非なくも敵と成候はゞ一犬虚を吠て萬犬實を傳ふの習ひに如何なる變事生ぜんも圖るべからず御勘考有べしと申けれども將軍は猶も鞭を打て馬を進ませ給ひければ兄弟の者今は是非なしと思ひ詰然ば某し等腕を切落れて後峠を越給と銜を確と執て放さゞる所へ本多小笠原來り合しければ之に力を得給ひて兄弟が斯の次第なりと語られければ本多出雲守小笠原信濃守涙を流して申けるは誠に眞田が斯く申上候事是神の應護と存られ候君若峠を越給はゞ勇々敷御大事出來なん若年なる身を以て彼等能も止め參らせしなりと頻に稱美しければ君も始めて悟り給ひて誠に兄弟感じ入たるなりと有て峠を越給ふ事を止まり二人の脊中を撫敵味方とも眞田の武勇は諸士の能き龜鑑なりと有ければ兄弟平伏して悅びたり其內夜も皓々と明る處に石川池田兄弟幷びに蜂須賀攝津守等旗御馬印を立て來りて平伏しければ將軍始めて悅びの眉を開かれ松原まで出て是を立ければ諸大名新將軍の行衛知れず途方を失ひ居たりし者此旗馬印を見て大いに悅び上杉佐竹毛利吉川伊東岡部內藤黑田鍋嶋有馬加藤山內等馳來り今は十萬に餘る勢と成ける故將軍殊に悅ばれ此上は早々大御所の御行衛を尋ね求めさせんと爲たりけり

討死と切結び血煙は眼を霞せ死骸の臭氣は鼻を撲く長曾我部盛親中村深原大武等を隨へ切入て亂れ戰ふにぞ關東勢諸手勞れ切て敗走す長曾我部も闇の夜なれば今は深々と進む事も叶はず兵を收めて引取たり本多小笠原の面々も早戰ひに厭倦み將軍の跡を慕ひ追付しに上杉佐竹も一所に退き乍ら斯てはとても城方に勝事能ふまじ寧そ城方へ降るべきかと密談爲けるを臣下共聞付何樣秀賴公是程の勝軍なれば追付御書を以て御招ぎあるべきなり暫時御待あれかしと申せば傍よりは否々夫よりは是より將軍の御跡を慕ひ密かに討奉りて降參せん抔樣々に評議しける大名達の心の內は誠に危き事共なり戶澤內藤石川毛利吉川相馬戶田等一所に集り敗軍の御跡を慕ひ御供せんと云處へ長曾我部隼人同上總二千の勢にて鐵砲を打掛攻立しかば諸大名度々の戰ひに早矢玉を射盡し四方八方へ逃落るを思ひ／＼に追詰首を取てぞ引上たり時に新將軍には馬を早め闇峠を越たまはんと爲ける處に眞田河內守同內記馳來て馬より下兩口に附て是は何方へ御越候やと問ひ掛しに新將軍敵深き謀計有に因て早く嶺を越て危きを遁れんと思ふなりと有しに兄弟が曰く御味方の諸將散々にて君の御行衛知れざれば若敵方になる時は如何なされ候や只夜明て大御所の御座を聞合され君の御座所も觸させ給へと云に心急れし折なれば爰放せ汝が叔父の計略にて斯は敗北するなり止むるは汝等も敵と一體なるかと常に替りし有樣に兄弟は大いに驚き是は口惜き事を仰らるゝ者哉然る仰なれば只今腹切て所存を顯し申さん事いと易く候得

國へは越給ひしぞ隼人雲井を飛で越給ひしなり穴山然ば軍勢は何程隨へしや隼人百餘萬なり穴山汝何故飛下しぞ隼人我は草臥て居眠り吾孫子村の觀音と物語する内に生捕れたり穴山汝心なしめ今より我に仕へんや若從はずんば利劒爰にあり汝が首は立所に胴と別れん如何に〳〵と詰ければ隼人呵々と打笑ひ我は扶持せらるゝ主人は一人の外なし何ぞ大坂方の汚れ扶持を喰はんや武士たる者敵に生捕れし上は首を刎られん事こそ願ひなれと申しければ穴山然らば汝を免し歸さん事如何隼人生捕たる者は生すも殺すも生捕し者の心次第なり何ぞ人に問ふ事有んや其時穴山ツト側へ寄り繩を解て隼人に向ひ貴殿の英雄感ずるに餘りあり我殺すに忍びず疾々歸るべしと云に中根は敢て悦びもせず如何なれば殺し給はぬぞ穴山笑つて我は天命を知る其許を助くるも是忠臣を惜む故なり今にもわれ戰ひに及ばゞ眞田左衛門佐見知りて有ぞと呼掛討取に遠慮はせぬぞ其許にも我面體を能見知り置て我首取て功名せよと云てぞ返しける扨幸村穴山に向ひ我其方に彼を助けさせしも謀略なり冬陣に松平庄三郎を逢せしに同じなり然ば不便乍ら近日其方が命は幸村申し受んなりとあれば穴山は兼て覺悟の事ゆゑに一日も早く戰死して名を千歳に留めんとぞ思ひける時に中村帶刀が曰く彼を捕へば大御所の行衛知れんと言れしは如何に幸村曰く彼が體は我察せしよりも又百倍の勇士なり然ば彼を何程拷問し骨を粉に爲す共努々一言も申さじと思ひければ殺しても詮なき事ゆゑ一計を案じ出し穴山を引合せしなり中村之を聞

中根隼人大言幸村を驚かす事幷眞田七人の影武者の事

爰に城方の士に中村帶刀と云者あり此度大御所の行衞を搜らんとて堺若江傍を密に尋つゝ伺ひ步行て一人の武士に出逢ひ訊ひけるは御自分は何方の武士に候や此者答へて是は眞田が家臣大御所の行衞を尋に參りしと云中村大御所は何方に御座有や然ば四國へ行給ふと承はり候と申て別れければ中村は馳歸りて幸村に此由を物語る幸村が曰く其者召捕て來らば好かりしに何とて然は爲ざりしぞ大御所何とて四國へ行事有んや然るに斯る虚を言者なれば其者は關東の勇士ならん其儘に分れて歸りしこそ殘念なれと云此時中村式部少輔吾孫子村へ掛りフト或堂を見れば前後も知らず伏たる者有しが夢中にて何か物言ふを聞ば井伊藤堂は如何越前加賀陸奥は如何にと呶々するに是怪しき者ならんと生捕て歸り中村帶刀に斯と告ければ帶刀見て是我に大御所四國へ渡り給ふと云る男なりと云ひければ幸村穴山小助を呼び汝某しと僞はり此者を委細に調べよと有ければ小助畏まりぬとて早速に立出調べんと爲しけるに傍若無人の體なりしかば之を制して汝は何と云者ぞと問しに答て曰我は中根隼人と云者なり穴山汝何迚手もなく召捕れしぞ隼人答て戰ひ勞れ伏たる所ゆゑ捕へられたるなり夢中ならずは何ぞ大坂の集り勢の百人や二百人の手に捕はれんや穴山シテ大御所は何れへ行れしや隼人四國へ越給ふなり穴山何れより四

爰に七組の番頭伊藤丹後守は淺井周防守が吾孫子村にて不審き事有しを幸村に委敷物語りするに幸村は密書手に入しに思ひ合せて甚だ怒り直に出仕して淺井が歸り來るを待所に間も無淺井歸り來りしかば幸村淺井を呼出して吾孫子村は大切の持場たるを以て伊藤に謀計を授け堅めさせしに汝は何故押て代りたるやと尋ねしかば淺井彼是言爭はんとしけるにぞ幸村聲を勵し誰かある淺井を搦めよと下知の下より力士共立現れ淺井を高手小手に縛めたり淺井聲を放ち我を搦めるは謀反人成んと叫びしかば淀殿此由を聞給ひ長刀提げ出で來つて自分が弟を搦めたる事如何の事やと呼はりけるに幸村早速速水甲斐守へ目配せする故速水は淀殿の長刀を打落す時に幸村懷中より密書を取出して淺井が關東へ內通の次第より吾孫子村にて伊藤を妨げ大御所を迯したる次第を述立て淺井に向ひ汝は君を毒殺せんと爲し加之ならず城中に火を懸んとし又御廐の別當に申付て大切の御出馬に鐵板を鞍へ挿み御落馬させ申して御出馬を止めたる段言語同斷の曲者なり夫故に某し他へ出る事能はず遂に軍機を外し敵を阿容〳〵討漏したる段返す〳〵も汝が不埒なるに因るなり又秀頼公へ御出馬を勸め奉つりし時早速打出給はゞ上杉佐竹は御使者にて心を傾くる事も有べく然すれば秀頼公の御運も開き給ふべきに肝心の圖を外させぬる極惡人一歩試にしても飽足ず淀殿の內緣として君の伯父君と平常朋友を見下しながら能も此度關東に對し本國を賜れ抔と書しよな今は君の御內緣たるにもせよ免し難しと甚だ怒れる有樣なるに淀

實に道理なりと云て退きける扨幸村は返す〳〵も關東方の高運に驚き百萬の剛敵に泡吹せ何方へも追詰て討亡はさん事目前に在ども斯も危ふきを脱れ給ふは是天命の備る君にや是非もなき事共なりと歎息しけるも道理なり斯て後藤又兵衛は熊野表へ先月中行たれば早國松君（秀頼公の妾腹の子なり關東に遠慮有りて此節熊野に在せしなりしとかや）を連れ參らせ來るべきに未だ後藤歸り來らざれば幸村は是をも打案じつゝ又一計を施し七人の影武者を仕立ける其人々は三浦新兵衛國英山田舍人友字木村が伏し家臣木村助五郎公守伊藤圖右衛門繼基林源次郎寛高鵜幸右衛門祐貞望月六郎兵衛村雄なり偖此七人に六文錢の甲冑を帶させ同じ出立に仕立五十目の鐵砲を十挺宛と人數二百騎づゝを授け置き此方より差圖次第打出すべしと示し置けり此影武者へは穴山小助も加ふべきなれども別に大功の目算あればとて此影武者は省きたり又御宿勘兵衛を呼で其許の忠義は豫て人の知る所なれば此次の戰には必ず必死を盡されよと勸めしに畏りぬと勇みしかば幸村は涙を流し斯人々に戰死せよ討死せよと勸むる我心の內こそ察し給へと云けるに御宿も共々涙に暮世の成行に秀頼公の御運も甲斐なき事かなと暫時歎きし心の內こそ哀れなれ

第十七　淺井周防守內通露顯の事幷七人の眞田討死の事

所と新將軍には道明寺へ着陣有べしとて河州山根を通行せられければ上杉佐竹を始め皆々附隨ひ既に河村と云所まで來り給ふ時は思ひも寄ず五十目筒を左右七ヶ所より打掛るに諸大將大に驚き見れば六文錢の旗七手の勇士散入して聲々に眞田左衛門佐幸村天運を計り知て落城の前に戰死せんと欲するなりと名乘けるに諸將は日頃の手立に恐れて用心しけれ共不意に眞田と呼りたるに驚き如何はせんと慌て狼狽く其所へ伊藤團右衛門本陣を目掛て馳入ければ殘りの六人も諸將の陣々へ切入〳〵火花を散て今日討死と戰ふ程に何かは以て猶豫す可當るを幸ひ突落し切倒し首を取に及ばずと討捨にして働けば關東の諸手色めき立て見たりける伊藤團右衛門は既に本陣へ突入しかば鶴幸右衛門は本多出雲守小笠原信濃守と戰ひ林源次郎は戸澤相馬の陣へ突入森助五郎は望月と共に上杉佐竹と戰ひ火花を散して切卷る其手に從ふ軍勢五十目筒を打掛打掛立向ふにぞ上杉佐竹も備亂れ既に亂軍と成にける伊藤團右衛門は本多と戰ふ事三十餘合頓て伊藤が焦て打太刀本多が馬の平首に當りければ出雲守馬より閃と飛下歩行立と成て戰へば伊藤も馬より飛で下又戰ふ事二十餘合此時伊藤が臣野口十内落合兵助來りて伊藤に力を添んとするに本多は鐵棒打振て野口を只一打に打据たり其内に落合太刀を振上げ本多が兜を力に任せて打けれども厚鐵なれば忍の緒切て後へ落たる計りなり落合は二の太刀を切込し所を本多推參なる下郎めと返樣に鐵棒にて橫擲に打ければ哀れむべし落合は二三間飛で死たりけり伊藤は此内に

殿も今更淺井が身の上謝し給はん樣もなく悄々として立退らんと爲しけるを幸村速水に命じて留めさせ今此惡徒不忠の者の首を刎て御目に掛んと夫より淺井が三族幷びに別當の一類を殘らず呼出して淀殿の目の前にて一々首を刎させ其上淀殿に向ひ去年片桐が忠義を御用ひなく只大野父子淺井等が申事ばかり用ひ給ひて今斯の首尾なりし上は定めて御本望たるべし然らば外に忠義の義士千萬人有よりも大野が一類だに有ば夫にて御心安かるべき間今よりは詰の丸へ御越有べし御膳等は三度づゝ贈り申候べし堅めは南條河內守同外記に申付て百人宛一時代りに勤めさせ申さん又大野父子大藤伊賀守今木彈右衛門にはお內を堅めさせ候はんと定めて大藏の局正榮尼二位の尼に女中八人宛付け詰の丸へ押込出入を留めて勤番を堅く申付たり幸村疾にも斯の如くすべきなれども畢竟は秀頼公の殊の外淀殿を大切にせられ其上眞田は新規入城して軍師と成たる者故始めより斯しては諸將も服すまじと今迄は是非なく堪しとなり扨又大御所には堺より引戻され諸大名も數多馳集りければ其勢七萬餘人に成其上新將軍の御事も加賀の陣より河內若江の松原に在す由使者にて注進有しかば殊の外悅び給ひ此上は道明寺にて兩陣合せ敵を討破るべしと勇まれける又幸村方へは新將軍松原にて三日の早朝より其勢十萬餘人と成り大御所には泉州家原に着陣在まし候由忍の者より告來りければ幸村扨は我察したるに違ひなしと夫より七人の影武者に下知して今こそ出立すべしと其用意をぞなしにける頃は元和元年五月三日大御

御宿勘兵衛戰死の事幷眞田隱岐守病死の事

七人の影武者既に戰死しければ關東新將軍々を收め道明寺へと急がせ給ひ夜に入て漸々着陣せられし御父子對面有て危かりし事共物語りせられ且眞田が影武者七人の首共を持せて候なりと有しに大御所一度は駭き給ひ一度は悅ばれ又は疑ひ給ひて兎に角首を實撿せんと首共を其處へ並べさせて得と實撿爲し給ふに面體確と見認難く燒爛れて有しかば彌々疑ひ給ふて居たる處へ表の方より一人の者を捕へたると告來りしは越前浪人の御宿勘兵衛なりけるに引入て大御所勘兵衛に向はれ汝先年眞田左衛門佐に從ひ無二の者なりしに今何事有て爰に來りしやと尋ねられしに勘兵衛涙を流して先年より每度御呼出下されし所參上仕つらず剩さへ御敵に一味致し候を御捨遊されず召使れんとの儀有難く候得共如何仕つらん眞田の恩は捨難く存じ候夫に付今日御陣へ推參仕つり候は御願ひの筋有て參り候なり餘の儀にあらず今日將軍家の御手に於て眞田幸村討死仕つり候へども切ては首を葬り度と存じ推參仕つりぬと申ければ大御所然ば暫時相待べしとて眞田河內守を召て其方家來中根隼人儀は幸村に逢て歸りし事有ば半燒の首たりとも荒增は面體見分るべし同人を爰へ呼來れと有しかば河內守答て先刻も我陣へ首を持來り候間呼出して見せ候へども何分燒爛れて見分兼候且某しは冬陣に遠く名乘合し儘の事ゆゑ見分け仕つり難

將軍の床机の許に進み來るを長岡九八郎立塞がりて遂に戰死しければ伊藤は長岡が馬に打乘大音揚眞田左衛門佐幸村將軍に見參せんと呼はりながら突來る事急なれば長谷川丹後守駈合せ戰ひけるが是も終に伊藤に討れて果ければ旗本の面々思ひ〳〵に合戰なし伊藤の勢と火花を散して戰ふたり然るに因り伊藤に隨ふ軍兵も大半討れ果けれども伊藤は益々勇戰して當り難くぞ見えにける此時將軍には長谷川が戰死の間に退き給ふ本多は落合野口を討取一散に駈來り敵の騎馬武者一人討殺し其馬に乘て又伊藤に向ひける伊藤は三浦木村に戰ひを讓りて將軍の跡を追來り小笠原石川と証合せて戰へども必死の敵に兩人は當り兼たる其所へ眞田河內守同外記來りて散々に戰ひ漸やく將軍を落し參らせける斯て眞田が影武者は七人共七方へ分れ敵兵數百人討取けるが味方の從卒も早大半討死して討殘されたる兵僅に八人となりければ影武者七人は一所に集り小高き丘に上りて七人大音上て呼りけるは眞田左衛門佐影武者七人只今腹切て冥途に到るなり首取て恩賞に預れと鎧を脫で七人共に腹搔切ければ是を見て諸手より首を取んと駈來るを殘る者共屍を火の中へ投込みたり依て關東の勢半は焦たる首を引出し此內にこそ誠の眞田が首有べしと携へ來りて眞田河內守に見せけるに河內守も冬陣に遠く名乘合し計りにて委細も見認ず殊に影武者共七つの首皆燻ぼり焦て面體分り難ければ其後實撿に備たりけり是幸村が謀事にて晚景掛ての合戰に知者有ても七人の內何れと分兼半信半疑成しめんとこそ工みけれ

招き入て秀頼公に勸め朋輩として愈々深く交はり秀頼公よりも運開けなば大名に取立んとの約束有ける程成に依て御宿は幸村が恩を感て君臣の如く親みしとかや依て此度秀頼公の御爲を思ひ忠と信とを全ふして斯の如く命を落したるなり

爰に眞田隱岐守信尹は風と病の床に臥したりしが追々重病となりしに因て醫術を種々盡したれども終に空敷なりにける此旨土井大炊頭より注進有しかば大御所新將軍殊に歎き給ひ關ケ原合戰より我に從ひ度々の忠義を爲しけれども未だ一統の塲合に至らざるに命を落す事の不便さよ今少し生延び頓て此軍濟たらんには一城の主とも爲すべき者を命數とは云ひながら是非もなき事かなと暫時落涙に及ばれけるとなん

第十八　大坂城惣攻手配りの事幷幸村天文を察る事

斯て御宿勘兵衛腹切て死したるに依關東方にてはさしも是迄妙計奇謀を設け關東勢を惱したる幸村なれ共時節來れば忽地戰死して冥途の鬼と成者哉と陣中擧て評判す然るに大御所は何とやらん未だ疑ひまし〳〵ける此時松平庄三郎忠昌卿は越後中將殿の駿府にて不例に在するを大御所の代りとして御見舞に先頃駿府に赴きたりしに漸々三日の深更に本陣へ歸り給ひしかば大御所早速眞田が討死の事物語りせられ予密に之を疑へ共今更葬りし首を掘出し汝に見せんも器

く候併しながら今一應呼出し上意の通申付候はんとて早速隼人を呼出す隼人即ち罷出ければ前の趣き申付られ猶又實檢してけれども兎角知れ兼候に餘儀なく其由申立ける因て御宿勘兵衛を召て此首共七個の內には眞田が實の首有や否や汝我を欺くとも是幸村が謀計成んと首共を並べ給ふに御宿は伊藤が首を抱きて淚を流し替り果たる有樣哉と歎きながらに扨勘兵衛申けるは此上の御恩に切ては此首拜領仕つり度と乞けるにぞ大御所偖は愈々幸村が首に相違なきやと尋ね給へば勘兵衛淚を拂ひ幸村事淀殿を恨み申して討死の覺悟を爲し遂に此如く成て候なりと誠しやかに申にぞ大御所則ち其首を勘兵衛に賜りければ勘兵衛は有難しと首を抱へて退きけり斯て大御所又考へ申されけるは彼首實に幸村が首ならば勘兵衛は必らず腹切べし密に見て參れと有ければ物見の者尾に付窺ひしに勘兵衛は首を抱へ立出近邊の寺へ行僧を賴みて能々葬り墓を立傍らの木に君が一日の情に因て臣が百年の命を捨ると書し腹搔切て死したりけり是に依て彼者立歸り斯と言上しければ爰に於て大御所扨は誠の幸村に相違なしと思され然らば一刻も早く城を攻落せと再び陣觸に及びたり誠に御宿が忠義は比類稀成事なりけり

御宿勘兵衛如何成ば斯眞田を深く尊みたるやと尋ぬるに勘兵衛は越前浪人にて甲州邊に居たりしに元來武道剛勇の士なれば幸村九度山に蟄居の時穴山を以て尋ぬる事度々にて其後九度山の近村へ密に招き入魂を給び密意を示し合せ幸村謙遜て厚く待遇其上入城の時も幸村密に

りと誠實面に顯はれ語りければ出雲守の曰く然らば貴殿泉下へも一所に伴ひ參るべきや小笠原約を違ふる某しならずと爰に兩人約束を堅うし退きける實に兩人が心の程思ひ遣れて哀れなり

斯て黎明にも成ければ兩人は今日こそ死出の旅路に潔よく衆人の目を愕かさんと勇み切て居る内に早段々と手配り有て井伊藤堂等へ下知を傳へ次第を立て今や出陣となりにけり新將軍は加賀越前伊達佐竹上杉等へ手分の下知を傳へられ二十八段の備にて頃は五月五日早朝より押出したり兩軍の總勢七十三萬餘人誠に日本開闢以來恁る大軍は珍しかりける事共なり其往古は差置て應仁の亂より以來一城へ日本全國の大軍勢を引受ると云事古今例なき軍なり然ば黑白の旗風に飜へり家々の馬印は旭日に輝き劍戟の光は天に映じ殺氣立上りて馬蹄の音は宛ら雷の響が如く平野八尾柏原國分より南は住吉北は諸山の麓迄軍兵成ずと云所なく凄然かりし有樣は過し慶長五年關ヶ原の合戰より同十九年の冬陣にて東西の軍兵數多戰死を爲たるに何國より斯大軍の出來るかと怪み思ふ計りなり時に城内にては七人の眞田が影武者に御宿が切腹爲たる次第等追々忍び告來るに依て幸村は心の中に定めて敵陣總寄に寄來るべしと手分を定め夫々に下知を傳へて待掛たり斯て其夜幸村父子櫓に登り天文を察るに西方の將星微々として光輝薄く東軍の客星其光四邊を拂ひてサモ勢ひ能く其中東國の分野に當つて二個の將星地に隕るの兆を顯はしければ幸村手を拍ち大助治幸を招きて明日の合戰には東國の大將二人戰死を爲すべしと云ける

量の狹さに似たり迚其儘に過させ給ふ扨又今宵新將軍にも危難の事共物語りせられ眞田兄弟は若年の身を以て數度忠勤を爲し剩へ闇峠にて忠諫を爲したる事を能々考へ候へば實に大功の次第匆々他將の及ぶ所に非らずと有ければ大御所にも甚だ之を賞美せられ然にても眞田は如何して一族揃つて斯武勇に秀で忠義の心志厚きやとて軈て兩人へ太刀馬感狀を賜りければ冥加に叶ひし兄弟哉と諸將之を羨み思ひけるとなり時に夜も更けぬれば小笠原本多の働きは重ねて仰上べしと有しに兩人へは今宵何の沙汰にも及ばれず只旗本の面々并びに大久保彥左衛門が忠義の事のみ軍談せられける爰に於て本多思ひけるは扨も去冬の御陣に鴫野に於て一戰の節某しを父の忠勝には劣れりとの仰有しが別して此度は火水に成て敵を碎き御危難を救ひ奉つりしに眞田兄弟の忠義は然事にもせよ渠等には御感狀を下され其上御褒美まで有しに我々には一言の御褒美さへ有ざるは是全たく去冬の事を思し召ての事ならん返す〴〵も口惜き次第なり所詮明日の軍には潔よく討死して名を末代に殘すべしと此事小笠原に語りければ信濃守答て我も去冬の陣には信州松本の城に殘り當夏御陣には父計り御供して我は留守居たり依て思ふに老たる父を軍陣に臨ませ若き身として兩度迄留守居を爲事餘り殘念さに留守の事は老臣等へ申含め拔駈同前に忍びて此度の戰場へは出たるなれば能々私をば腰拔武士と見給ふ者ならん御軍令を背きたる身なれば某しも明日の戰場には貴殿と共に敵中へ入り花々敷最期の合戰して討死を遂げべきな

よりも力士大六郎木村五藏浦野左衞門を始め命を塵芥よりも輕うして勇み猛りて荒廻り右往左往に切つ卷りつ亂軍の中に討死す此時信濃守も敵を討事廿六人其身も數ヶ所に手を負て暫時馬上に體を休めて居たる所に余吾六左衞門と云剛力の者馳來り小笠原と見るよりも三間柄の鎗を水車に廻して突立來るを小笠原心得たりと馬を立直し體を堅めて余語が鎗を掻潛り終に六手と組付しが余吾は之を事ともせず御參なれと小笠原が利腕把て鞍の前輪へ押付首を揚んとする所を小笠原手早く短刀を拔出し押付られしまゝ余吾が横腹へ突通せばさしもの余吾も急所を刺れて眼暈み力弱りて見えければ小笠原ガバと起上り又も組付兩馬が間へ撞と落るを得たりと組伏首掻切て立たるは天晴にこそ見えにけれ斯て小笠原は又々馬に打乘て人なき所を行が如く敵中を驅散し薙立しかば手並に恐れて敵は四方へ散たりけり時に城方七組の大將伊東丹後守是を見て手勢を下知して一散に驅來り追取込て餘すまじと攻立るに此時小笠原は薄手深手數多負心身勞れて今は早働く事も叶はぬながら頓て馬上に突立上り大音に呼はりけるは信州松本の城主小笠原兵部少輔が一子同苗信濃守只今爰にて討死するぞ我と思はん者は來つて首を取べしと馬上ながらに鎧を脱ぎ簇がる敵中へ投懸短刀引ぬき腹掻切んとする所へ大勢來りて鎗玉に突上ければ信濃守笑れ乍らに八方を見て莞爾と打笑ひ

思ひきや道も迷で武士のなこその關を今越んとは

に果して小笠原本多討死を爲たりけり斯て大坂方には秀頼公の名代として木村主計頭庚申堂の南に陣を取夫より七組の番頭諸將旗馬印を押立眞田が旗を隱して備たり幸村又穴山小助を呼び其方豫て申含め置し如く此度こそ戰死の期來れり不便には思へども君の爲には替難し隨分潔よく平生の忠義を顯はし名を後世に輝かせよとありければ穴山小助豫て戰死は覺悟の上の事なれば君の御名を借存分に働きて討死爲すこそ好ましけれ委細畏まりて候なりと躍り上つて悅びつゝ急ぎ其用意にぞ及びけり

小笠原信濃守討死の事幷伊東丹後守信義の事

斯て穴山小助は庚申堂の南に陣して合戰の始まるを今や遲しと待かけたり關東方には小笠原信濃守今日を最期と思ひければ手勢僅に七十五人を率て押寄るに穴山小助是を見て敵方より三階菱の旗を飜し來るは小笠原信濃守が備へなり討取て冥途の土產に持參せよと呼はれば夏目隼人を始めとして大勇の者共打て出追つ返しつ戰ひけるに小笠原は聞ゆる鎗の達人なれば夏目を一突に突落し猶も山田縫殿助同賴母同宮內等の討て懸るを事ともせず三人を相手に左に當り右に突秘術を盡して戰ふ程に其手に從ふ勇士ども高木宇右衛門池田與平治西山丹下下浦藤八谷村藤十郎等の面々我劣らじと火花を散して戰ふ程に敵を討事數知れず忽地死人の山を築たり城方

かや佐大學助は兄の死骸を家人に持せ徐々と引返し近邊の寺院へ葬りて厚く佛事を營みけり

第十九　本多忠朝荒川と勝負の事幷大御所本多が討死を制止せらるゝ事

爰に本多出雲守忠朝は今日の合戰に小笠原と討死を約束し未明より天王寺口へ從卒百五十人を率ゐ打出で朝霧の晴行儘に向ふを見れば五三の桐の旗朝風に吹靡け千顆瓢簞の馬印立たるを見て是ぞ我今日戰死の相手に取りて不足なき敵ならんイザ御參なれと馬を一文字に乘込近寄て既に庚申堂近くなると齊く左右より鐵砲の音聞えて敵軍打て出本多には續く味方は之なきぞ小勢の敵は大軍の獲物なり馳合せて討取れと城兵ども無二無三に犇くにぞ本多が軍勢堅葵の旗を眞先に押立討共射れ共事共せず簇々と出て掛る其先に黑革縅の鎧に同じ毛の兜を着し大太刀を横たへ長刀を小脇に抱へ馬にも乘ず只一人立はだかつて扣えたり出雲守是を見て下郎推參なり我を本多出雲守忠朝とは知ざるやと大音聲に罵詈ければ彼者笑つて我こそは秀頼公の昵近木村主計頭の內にて一騎當千と呼れたる荒川熊藏と云者なり下郎との一言心得ず我下郎ならば其方も亦下郎なり我主人も秀頼公の臣なれば其方が主人も元來秀頼公の大老たり高下は兎もあれ元同列ならずや其家來の其方なれば秀頼公には陪臣と云者なり我も又同じ陪臣汝と我と高下なし禮

と高らかに詠じて死したりしかば見聞人惜まぬ者こそなかりけれ斯と見て其手に隨ふ面々も思の儘の戰ひして同じ枕に討死す然る所に信濃守の弟大學助は跡より討て出んと乘着るを眞田大助聲を掛兄を討れし大學よ我も昨日父を失ひ惜からぬ命存へて今日戰ひを挑まん事は只是忠義に因てなり率一勝負を試みん卑怯未練は互に無き筈疾々來れと進み寄ば大學は元來望む所と云つゝ手並を見せんと云儘に大太刀を以て打て懸る大助心得たりと受つ流しつ戰ふ事三十餘合の久しきにして勝負は更に見え分たず斯る所へ大學が手の者馳來りて眞田が馬の足を拂へば眞田は馬より飛下ける是を見て大學助大いに怒り汝等何とて我尋常の勝負をなすに斯る無禮を爲る事ぞや我馬より落たる敵を討て何とかせん眞田殿疾々馬に乘給へ其上更に勝負せんと云ば大助ツと立て天晴なる哉さすが信濃守殿の御舍弟程有て勇士の擧動感じ入ぬと云ふ所へ伊東丹後守馳來て其許が舍兄の死骸を持參せり是程の勇士の屍を馬蹄に掛んも本意にあらず率々骸を受取て再び勝負を勵まれよと家人に命じて信濃守が死骸を渡しければ大學助も涙ながらに是を受取り伊藤が芳志を深く謝し大助にも慇懃に一禮して此まゝ爰を分れける大學助は伊藤が心に感じ入り秀頼殿には斯迄能大將を持乍ち大野如きの佞人に迷はされて豐臣の天下を失ふこそ微運なれと云つゝ物分れ爲しけるは敵も味方もいと奧床しくぞ見えにける斯て亂軍の中と雖も關東城方双方共に勇將豪士の戰ひなれば天晴の働きして武士の道賴母しく卑しき所業は無りしと

軍に預けし首は請取べしと云ば熊藏主命に因て退くとあらば何ぞ強ての勝負を望まん必ず明日參會せよ其時正に首は請取べしと云乍ら颯と兩人は退きたり夫より本多は戰場を退き我陣へも歸らず直に本陣へ罷出拜謁して歸る所に小笠原が討死花々敷抔と物語するを聞て扨々口惜き事共哉信濃守然こそ泉下にて我を待らん明日是非に討死して追付べしと思ひ立てぞ居たりけり

寺澤兵庫頭原隼人正夜討の事幷幸村謀計の事

爰に又玉造口昨日の戰ひに城兵は此口の堅めとして名嶋兵庫三十人に大筒小筒を持固め二番には中村式部少輔二千人玉造口を少し隔て陣を据控たり幸村は豫て兩將に謀計を授け置ける故敎への如く密に落し穴を掘事數丈にして其土は一斗又は六七升位入べき麻の袋我は叺に盛て悉皆く夜に入城中に運搬し所々に積置たり人夫等は是を何故とも知らず只怪み乍ら命に依て運びたり然るに落し穴出來たるに依て玉造口にも旗馬印を例の如く押立又外の陣所に出張して旗を押立朝夕煙を立賑かに見せければ關東方には是を見て寺澤兵庫頭原隼人正兩將咡きけるは明日は惣攻の由然るに敵此玉造口の外へ陣を据て控へしは迂濶なる次第なり惣攻の邪魔にもなれば御待受の爲今日彼所へ押寄て一時に打潰し明日の軍場を廣くせん事如何にといへば寺澤が家士大庭五郎兵衛原隼人が家士木戸九十九言葉を揃へ此儀尤も然るべく候得共是を見て

義を知らざる下輩者めと飽まで雑言を放ちしかば忠朝是を聞て汝法外の惡言を吐者かなイザ馬蹄に掛て殺さんとは思へ共志しの勇なるに因て死を免し遣はす間我に仕へて身を全ふせよ相應に知行を取すべしと云ば荒川大口開きて打笑ひ汝が馬上より見る通り身の丈は五尺八寸早走りの石を取て一日に行事八十五里されば我乘べきの名馬なければ之に依て歩行立にて出るなり然らば汝も馬より下て問答すべきに無禮にも馬上より我に隨へ扶持する抔とは近頃以て片腹痛し汝こそ我に從へ召仕はん只今捻り殺すは易けれ共勇氣に對して免すなり早々歸りて首失ふなど罵詈返せば本多は腹に据兼憎さ下郎が言分かな其舌の根を切下んと云より早く飛掛るを家士共是を見て何ぞ渠を相手に御手を下す事の候や我々討て取んと突て懸れば荒川大に怒りて長刀を水車に廻し切て掛るに苦もなく五六人薙倒したり本多忠朝是を見て馬乘放し荒川に打て懸るに何れ劣らぬ勇士なれば上段下段と五十餘合戰ひけれども勝負は未だ見えざりける偖も本多小笠原の兩人が拔掛せし事大御所之を聞知給ひ斯てはならじと急ぎ兩人へ使を馳召返すべしと有しに依て使番の者走り行時に小笠原は早討死して弟大學助死骸を持せ徐々と引退き來る是に依て大御所益々駭かれ本多美濃守に命て出雲守を呼返せと有しかば畏まつて馬を飛せ馳來り上意なり只今討死せば御勘氣わらんと大音聲に呼はりければ出雲守是を聞て打合乍ら熊藏に向ひ只今汝が闘通り我討死せば君勘當せんとの事なれば汝が首は暫く汝に預けて退くべし明日の

押掛るに先に進みし軍勢彼阡穽に落入て東西も分ず蠢きつゝ阡穽〳〵と呼はりけれども急に押懸る軍勢なれば揉立〳〵込入けるにぞ彌が上に落重なりける此時穴の向ふに豫て一貫目の大筒仕掛有しが其筒一時に鳴出し玉迸しり黒煙立て瞬く間に百五十人程粉に成て死たりけり斯と見しより表に進みし軍勢共駭き乍らに引取んと還り來れば玉造口より差詰引詰出射す矢先に射落さるゝ者數知らず其内に陣中より百五十騎ほど突て出追討すれば寺澤原は散々と成て迯失ける城中の諸手此体を見て同音に吶と笑ひければ寄手は小勢と云ひ膽を冷せし事なれば只後髮を引るゝ如く迯る味方を敵と心得同士討して果けるも多かりける斯て道明寺にては大御所新將軍會陣に依て新將軍立出られしに道すがら又々眞田に討て出られ危くも其場を切拔恙なく會陣せられしかば諸將集會して御無事を賀しける所に寺澤原の兩將見えざれば面々不思議をなす所に井伊が家士の者寺澤原の兩將は七つ時前に軍勢を引連出けるに途中にて某し行逢仔細を問ば明四日大御所新將軍御兩陣一手となりて惣攻せられんとの御諚なるに依我々駒驅の場を遠見せんが爲出る由申せしなりと云ければ井伊藤堂是を聞さるにても今に至て歸らざるは不審なり早々行先を取調べ來れと手勢に下知を爲ければ庵原助右衛門藤堂主馬の兩人手勢を引倶し玉造の方へ馳向ふに兩將散々に敗北して追立られ來るに行逢しかば兩人は此敵軍を引受け新手を以て戰ふたり城方も新手の救ひ來ると見しより戰ひを好まず引んとすれば此方も同じく原寺澤を

城方打て出る時は此方二手の勢にて如何とも防ぐ事能はざるべし是勇々敷大事成んと申せしに寺澤然らば今宵燒討し手早く引取なば功をなさんと云に原隼人正實に此事宜しからんとて夫より寺澤原は諸手に放れ此口へと向ひたり斯て兩人は其日の昏るを今や遲しと待居る處に黃昏頃に及んで遠く鐵砲の音鬨の聲聞ゆるに扨は何れの口にか軍始まりたると見えたり我も人も功を立大將の御感に預らんと思ふは同じ事ならんと頓て兵粮を濟せ暮に入しかばまづ先刻の鐵砲の音は何れの手にて打出せしかと探らせしに新將軍道明寺へ赴き給ふ道にて眞田が討參らせんと戰ふ由の注進有しかば猶々捨置がたしと伏兵の者を先へ出し跡より馬には枚を銜ませ外の勢には沙汰もせず押行て差圖次第に二手に分つて火を懸べしと燒草少々持せ行彼陣近く押詰見れば未だ夜も早かりし故軍勢は寢もやらず旗馬印夜風に靡き翻へりしかば驚破火を懸一時に押よせて掛散せよと下知を傳へて合圖を定め陣門に階子熊手を打掛〳〵鬨を作つて乘入らんとすれば陣門の番人此體を見て大に狼狽早柝木抔擊乍ら陣中を走り散すに寄手は其內我も〳〵と乘入て門を八文字に押開きスハ乘入と云儘に寺澤原が二手の軍兵吶喊んで押入見れば早敵は一人も無く寺澤大に怪み暫時躊躇ひ扨は敵の謀事に落入しか危し〳〵深入せずに跡より繰引に引〳〵と云時に奧の方にて俄に人聲喧すしく狼狽騷ぐ樣子なれば扨は敵兵小勢にして後方より遁るゝと見えたるなり早く後方に廻り暫時に押入て一人も殘らず打取り所々に火を掛攻立よと又動と

井右馬竹屋六助御參なれと馳塞り双方劣らず戰ひしに終に竹屋は討死す此隙に城兵松嶋五郎作馳來つて寺澤に突て懸る寺澤怒つて推參なりと片鎌鎗を追取延只一突に突落す所へ城兵十餘人馳來り亂刀に切て掛るを寺澤は左へ拂ひ右へ受切ども突ども事共せず火花を散し戰ふ所に寺澤が郎等共主人を討して叶はじと之に向ひて皆討死をぞ爲たりけり斯て寺澤も既に危く見えければ原隼人手勢を引具し寺澤を救ひ出すに寺澤は自ら敵を討事十八人其身も五ヶ所の手を負朱に染て控えたり其内家臣追々に馳來り主人に向ひて戰ひは今日のみに限るべからず討死仕給ふも場所に因ると諫めし言をも聞入ず寺澤怒て某し昨夜口惜き後れを取の殘念さに今日は是非とも敵將の首を打取て花々敷討死するの覺悟なりと爭ふ所へ乘込來る一將黑革縅の鎧に猩々緋のなげ頭巾を被り鎗を引下大音に名乘けるは是は大坂に鬼神と呼れたる湯淺右近と云ふ者なり率一鎗參らんと鎗取延て突て懸れば寺澤が郎等駈合せて戰ふに郎等は只一鎗に突落さる又馳塞る郎等を突伏〳〵寺澤に駈向ひしかば寺澤片鎌鎗を取直し上段下段と三十餘合戰ひしに更に勝負も見えざりしが寺澤の郎等十人許り走り來て湯淺が鎗を切折たり湯淺手早く三尺許りの刀を引拔き鎌鎗を受止て切結ぶ處を寺澤が郎等駈寄て湯淺が馬の胴中ぐさと突通せば馬は忽地跳上り湯淺は堪らず眞逆樣に落ければ走り寄て討んとするに玉造口の二の門を堅めたる中村式部が軍勢村々と折重なりて遂に湯淺を助たり此時湯淺は猩々緋の頭巾を寺澤に取れければ寺澤は彼頭

助け救ひて引返し本陣へ戻りて此始末を委細に申し述しかば井伊藤堂は以ての外に怒りを發し此方へ相談にも及ばず豫ての軍令をも存じ乍ら拔掛同前の次第殊に大事の前に軍兵を多く害ひ臆病氣を付し條軍法に依て屹度罪に處せんと申けるを大御所聞せ給ひ渠等不屆とは申乍ら城方へ合戰仕懸たるにもあらず駒の駈場を廣げんと彼出張の陣へ夜討したる段は元來忠義に因る所なれば此度の處は用捨し後度の功を待て此罪を償はしむべしと有けるに因て原寺澤無事に此事濟たりけり

第二十　寺澤憤戰の事幷原隼人正武勇の事

斯て寺澤兵庫頭原隼人正兩人は思はず眞田が謀計に落入て不覺を取のみならず軍兵を多く損じ物笑ひと成し事口惜く思ひ殊に原隼人は甲州以來の武名も是が爲落すに似たりと無念骨髓に徹し明四日の惣攻には此恥辱を雪ぐが爲討死なして吳んずと屹度覺悟を思ひ詰其夜の明るを待ける內早小笠原大學助が押出したる由聞付て劣るまじと未明に打立見るに本多が旗の手見えければ是非〳〵今日は敵味方の目を駭かす一戰せんと寺澤諸共玉造黑門へ駈懸るに此手の城將名嶋兵庫も押出して戰ひ爲んと詰來るにぞ寺澤一陣に乘込で葉武者は相手に足らず名嶋出よ勝負せんと呼はれば名嶋が陣より黑川太四郎伊川鐵元と名乘て寺澤に打て懸る寺澤が方よりも酒

方の大將なれば何躊躇事の有べきと渡り合せて挑みけり然れども名嶋は防ぎ兼後歩になる所を隼人踏込で内兜を突ければ血は眼中に流れ入逡巡處へ再度突鑓の引合せに突込しかば淺手なれども二ケ所の急所に堪り得ず馬より動と落にけり是を見て原が郎等牧野志賀之助馳寄て首を掻んと爲しけれども名嶋も名に負者なれば手を延して牧野が脛當を引摑みグツト引寄膝の下に敷据て捻首にぞしたりけり隼人正は飛懸て牧野が敵覺悟に及べと已に討掛らんとする時に名嶋聲掛暫らく待れよ抑々我は秀頼公より國俊の太刀を賜はり今日爰に帶したりされば此太刀を以て關東の一將を討取切味を試み君の賜物を謝せんとするに勝負は時の運と云ながら我武運拙くして今は貴殿の爲に命を失はんとす然るに因て我自らの腹を屠り潔能自害して此切味を試みんとす貴殿情あらば介錯頼むと云も敢ず腹へ突立引廻し天晴君の賜物其切味無類なりと莞爾と笑へば原は思ひ掛なき彼が最期に驚きつゝ貴殿の勇氣感ずるに餘りあり此上は是非もなし言ふに任せて介錯せんアヽ惜むべしと云ながら差延す首を打落し湯淺が首と一緒に括り又馬に打乘て四邊を見れば湯淺が郎等主人の仇と馳寄を隼人前後左右に當つて難なく切拔出たるは天晴勇々敷働きなり然るに中村式部は手の者を下知して原が郎等を相手に戰ひけるに隼人が向より引取樣子を見るよりも那洩すなと下知すれば中村が軍勢追取込て引包む原は是を事共せず左右に當ると見えけるが難なく一條の血路を切開き二つの首を腰に付葉武者の首五個は鎗に貫き悠々と

巾を高く指上返せ〳〵と呼はるを郎等共は押止め君は今朝より數度の戰ひに勞れさせ給ひければ是非に引返して休息あれと馬の口を確と扣へ一寸も先へ出さぬにぞ寺澤も今は餘儀なく引取けり湯淺は敵に頭巾を取れ安からず思ひて引返し打取んとすれども早寺澤は引取り軍兵共立塞がつて防ぎしかば湯淺は忽地一騎突落して其馬を奪ひ取り寺澤が勢を數人討取けれども終に頭巾を奪ひ得ず獅子の怒りを爲し乍ら喚き叫んで戰ふ所へ原隼人軍勢を勵し中村式部が勢に驅懸るに湯淺乘込來つて鎗を隼人に向しかば隼人得たりと其槍確と引摑み放しはせじと揉合しが双方劣らぬ大力なる故槍は中より折たりけり折たる槍を打捨て隼人は直と躍り入六手と組付上を下へと角ひて終に湯淺に組敷れたり然共隼人は心速き者なれば下に成つゝ拳を堅め湯淺が佩楯したゝかに打ければ陰囊を強く痛めしゆゑ湯淺は覺えず目眩めきて手のゆるみしかば得たりと隼人は起上り終に首掻切て立たるは天晴成ける働きなり湯淺が郎等主を討れて何躊躇はんと面々隼人が軍に打入同じ枕に討死す隼人は莞爾と打笑ひ湯淺が首を腰に付馬に打乘猶も縱横に馳廻る此時中村が手勢は原が軍勢と火花を散して戰ひしかば死骸は積で山を成血は流れて泉の如く屠所の巷も斯やと計り思はれける斯て又原隼人は城將名嶋兵庫が馬上に控へしを屹度見て好敵ござんなれと一鞭打て一散に乘付無二無三に切て懸るを名嶋が郎等主人の前に鎗襖を作りて立塞がる原怒て突入と見えしが忽地四五騎を突殺し直に進んで名嶋を目がけ突懸る名嶋は一

突出て散々に戰ひしが豫て謀事を受居たれば佯り負て城中に遁入を松倉勢スハ遁すな付入にせよと敎圍荒々追來れば城中よりは矢玉を雨の如くに射かけ撃掛け防つゝ又討て出追立られては引退き隙取內に一手の伏兵後の方へ廻す手段と松倉勢は夢にも知らず爰を專途と戰ひけるが城中にてスハ時こそ好けれと井樓を組上ると見えしが大筒の口火をさして手早に下しを寄手の者不審しく思ひし內に吻と打出す鐵砲の響と諸共先に進みし兵士五六十人一同に擊れ倒れてけり仙石吉田スハ一人も遁すなと打て出寄手を突落す事草を薙るに異ならず寄手大いに狼狽散々に成て敗走す松倉怒て命は義に依て輕し假令大筒なれば迚何程の事有ん踏止まつて戰へと下知すれ共色めき立たる勢なれば押合〳〵耳にも入ず敗走す所へ城兵の伏勢待掛へ橫鎗を入て突落せば最狼狽たる敗兵石に躓き木の根に觸て或は轉び或は傷き足も匆々立難く倒れ馬は道路に充滿を掛て引倒すが如く追掛〳〵突落す松倉勢大半討れ死人傍に充滿せり諸手亂軍の中なれば誰救ひ來る人もなく松倉は兩度まで落馬して這々に遁延たり城兵は敵の捨たる物の具兵器を思ひ思ひに分捕し首を鎗の先に貫き勇み進んで引返す斯て五月四日も戰ひ暮し日も西山に傾きければ眞田幸村諸將に下知して申けるは早日も入て敵方の松明見えければ各々一度に打入べし廿五人の組合は合詞合印を能心得同士討なき樣專ら大御所を目掛け勝負をすべしと嚴しく號令を傳へ置き戰ひの用意を爲たりけり斯て又關東方にも晚景に及びしかば下知を傳へられ惣軍勢を平

して引取り來るは誠に昨夜の不覺に引替目覺しかりし有樣なり中村式部も一旦引上んと夫より城内に入て持場を堅固に堅めけり

秀頼公の籠中千姬君城を脱出られし事柄一說に姬君大坂落城の際秀頼公御母子の助命を乞れん爲板崎出羽守幷に米村權左衛門等に伴はれて本多佐渡守が陣所へ來り同人に就て云々の由を大御所へ言上せられ旣に其頭意叶ひし處に其間も無落城となり御母子共生涯に及ばれしかば姬君は夫より關東へ送られ本多忠刻へ再緣せられしと又一說に大御所姬君を甚く氣遣れ誰にても姬を火炎の中より救ひ出さば妻に遣はさんと有しに板崎城中へ馳入救ひ參らせしかば約束の如く賜はらんと爲けるに姬君其醜男なるを忌避れしに因是非なく本多へ嫁せられしとなり今本卷の說を以て此二說に比照時は頗る異同有と雖も其是非さへ未だ判たず且舊本の趣旨を變更せざるは編次の本色なれば矢張其儘を存して疑ひを闕如するなり看官其異同を考へんとならば他書を併せ見て其詳なるを知り給へと因に云

第廿一　今福合戰の事幷平野陣火砲の事

斯て寺澤兵庫頭原隼人正は本陣に來り昨夜の首尾を謝しければ將軍の御感料ならず爰に松倉長門守は敗軍の恥を雪がんと手勢に申含め必死の覺悟にて攻寄けるに城兵吉田玄蕃仙石宗彌齋

たへ進み出る一人の大將大音に呼はりけるは眞田左衛門佐幸村先刻より是に在て御大所を待請たり率見參せんと云儘に五百餘人を引率し無二無三に突入ば旗本側衆の面々皆討死と心を決し三十餘人踏止まり必死と成て防ぎける然ども眞田勢は新手と云ひ多勢を以て仕掛し事ゆゑ是に取込られ一人も殘らず討死す此隙に大御所は漸く落延給ひ先は恙なく危きを脫れ給ふも旗本の勇士三十餘人忠死を遂し故なりとこそは聞えけれ

大御所譽田山へ落給ふ事幷後藤基次大御所を怯かし參らす事

斯て關東勢は戰ひに勞れし上夜に入て不意に銅連火砲に難儀し漸々遁るゝ時に新將軍は河内路へ落給ひ大御所は和泉路指て退き給ふに扈從の面々には大御所の方大久保永井横田等の付隨ひ大御所彼惡臭の毒氣に當られ血を吐惱ませ給ひしかば太久保彥左衛門之を慰め參らせて申しけるは昔漢の高祖は古井に隱れ我朝の賴朝は土肥の杉山に隱れけれども遂に敵に打勝漢高は四百年の基を開き賴朝は日本武將と仰がれ給ふされば今君の御勢少なしと雖も之に御氣を痛めさせ給ふは何事にて御座候や御心弱くては御本意遂給ふまじ此彥左衛門御付申居る事なれば御氣を張せ給ふべしと臂を張て諫言しければ大御所道理なり然乍ら予甚だ疲れたり此邊に駕籠は有ま

野の北に野陣を張せ諸大名隊伍を正て陣しける幸村は既に日も暮ぬれば花々しく一軍して運の程を試みん其内には後藤も歸り來るべしと其夜戌の刻計りに軍勢を繰出しけり此時平野に野陣したる關東勢兵粮を遣はんとて其支度する折柄畑の中にて鐘太鼓を鳴すが如き音して玉の様なる物見えければ何物ならんと見て居る內其玉飛散る度每に鳴響きて音凄然く聞えければ諸軍等は如何成事ぞと駭き肝を冷しける所に彼玉より山蜂の如くなる物飛出し惡臭き事限りなく諸勢鼻を摘み息をも爲ずして居けれども忽地胸惡くなり吐氣を催し眩暈して其難儀一方ならず飛散し玉の片は諸勢の頭上足部の嫌ひなく當りける故人々の雜沓ワンヤ〳〵と騷立て或は踏殺され或は松明に足を燒上を下へと返しける其內大御所の陣前にも此玉幾個となく飛來りて八方へ散亂する故旗本に備へし軍勢も恐れ悸き臭氣の爲に醉るが如く成にけり是則ち幸村が倅治幸先達て大坂城中にて秀賴公へ御覽に入し銅連火の仕掛なり既に關東の諸軍一同に恐れを爲し是は如何なる火の玉ぞや斯ては此上如何成火攻の仕掛や有らんと戰ふ心も消果て諸軍一同四方八方へ遁退く恁る所に城中よりは七組の面々四手に分れて遁るゝ敵を追掛〳〵討取事恰も人なき堺を行が如く分捕高名數知れず散々に追退ければ關東勢は勇怯の差別も匆々に大軍一同に崩れ立て逃出す事なれば押倒され踏敷れて只平押にぞ敗走す然に因て大御所にも僅計りの旗本勢を引倶して和泉路指て落給ふ所に左の方なる林の中より六文錢の旗の手見ゆると齊く先眞に鎗を横

るに基次是を事共せず八方に當つて戰ひ又四五人を切倒す其内に關東勢追々に馳集り後藤を追取卷基次は此棺に大御所の御座有とは夢にも知らず只國松殿を大切と思ひ強て敵に當らずして馳過たりし有樣は其昔唐土三國の戰ひに趙雲が玄德の子を懷中し必死の戰ひ爲に彷彿たり大御所は斯も危き場所を遁れ給ふ事實に天運の強かりし事と思はれける斯て大久保は切折たる後藤が鎗の穗先を棺に取添行々夜明て譽田に着し八幡宮の拜殿を大御所の御座として暫時爰に休ませ給ふ所に新將軍にも爰へ追付せ給ひ又諸大名も追々に馳付て何れも御不難恐悅とぞ賀し上たり時に大御所諸人に向はれ予年齡既に七旬に餘れば天下を治ると雖も吾身に取ては何にかせん只子孫の榮を願ふのみなり將軍には能此事を心に納め始終の軍を勵むべしと厚き諭しを爲られつゝ扨彼鎗を見給ふに本朝無双なる三條の小鍛冶宗近が鍊たる懷劍を鎗に直せし品にて誰も見覺えの有し太閤より福嶋左衛門大夫へ賜り故有て黑田の家士母里太兵衛が手に入しを其後又故有て後藤又兵衛に預りし品なれば皆何れも扨は後藤又兵衛また存命なるかと始て後藤が襲ひし事と知れたりけり明れば五日關東方には南光坊天海僧正に裝束を賜り大御所の名代として廿八段の備を立られ陣貝を吹立城攻を催されける新將軍にも同廿八段の備たり時に南光坊申しけるは某し南光坊と申すに付ては將軍家の南に備て利あらんとの事に依て天王寺の攻口を急に變じ船場より火を掛て攻べしと評議定まりければ先陣には淺野但馬守同采女金森出雲守小出大和

じきやと有しかば橫田甚五郎馳廻り頓て林の中の寺に至り尋ねけれども駕籠は無して葬送に用ひし明棺ありければ是非なく是を持來りしに大御所は悅び給ひて予若かりし時より難に合し事數知れず大樹寺以來死したる眞似を爲る事度々なれば苦しからず却て吉事と思ふなればイザ爰へ持來れとて直樣之に入給ひければ扈從の面々限りなく心外の事に思ひ乍らも之を舁擔ひて落行けり斯て城兵は廿五人を一組として命限りに戰ひ夜更る迄追討すると雖も大御所の在所知れざれば無念乍ら各々引返しける大御所には和泉路に掛り半田山に入給ひし時は殊に勞れさせ扈從の面々も同く勞れければ件の棺を下し休み居たり時に後藤基次は國府の戰場を遁れ熊野へ赴き影武者山田幸右衛門を討死させ新宮左馬之助に斯と告て國松殿幷に御母公の御供申して今晚半田寺に急ぎけるが行先に人聲して口惜き事の有もの哉今度も又眞田めに計られたりと云を聞遙に城の方を見れば鬨の聲大に響き松明の光夥多しかりしに後藤思ひけるは扨は好處へ來合せたり此紛れに城に乘り入んと左馬之助に國松殿御母公を守護させたりしが又思ひ直して國松殿を自分の母衣の中に入向ふを屹度見てあれば三四十人の武士棺を舁荷ひて押來るに基次不審しながら關東方の者と見るより馳近付て鎗を突入忽地十四五人を谷へ突落し彼棺の中へ鎗を突入たり火急の事に大久保彥左衛門スハと思ひ遽だしく後藤が鎗を半より切折蹈込で討懸るに後藤透さず大太刀を拔翳し二三合渡り合し內扈從の面々命を捨て十餘人後藤が前後左右より切て懸

是非なく荒川は止りて本多を能々見て有ば討死の体にぞ見えにける察しに違はず本多は今日を限りと思ひ居ければ眞先に進み軍始まると其儘敵中に切て入將卒の嫌ひなく縱横無盡に切て廻れば此勢ひに誰一人敵する者なく皆逃出しけるにぞ本多は討死すべき敵手に困り東西詠めて居たりけり城兵今は本多と見れば開き靡いて通しける内渡邊內藏之助は去年大野に組して惡人と云れし事を無念に思ひ討死なして恥を雪がんと手の者僅五十人許りを引具して關東勢を八方へ切散し猶も進んで大御所の陣に間近く切込たり本多は之を屹度見て例の鐵棒振回し打て懸れば渡邊は四尺八寸の野太刀を以て戰ふ事三十餘合本多大喝一聲して透を窺ひ打込む鐵棒鋭くして渡邊が腕をしたゝかに打ければ渡邊痿みて巡逡所を續け打に打据て遂に渡邊は血を吐てこそ死したりけれ是を見て渡邊が郎等共思ひ〳〵に討死す本多は猶も勇んで打て入るに大野小三郎三十騎許りにて討て出本多勢と揉合〳〵戰ひしが小三郎太刀を振て本多を目掛切て懸るを本多心得たりと鐵棒を振上げ小三郎の眞向を打碎きしかば是又血を吐て死したりけり餘る勢共も續いて討死してければ死人の山をぞ築たりける

傳に曰く大野小三郎治村は道犬が嫡子なる修理亮治長が三男なりし道犬幷びに治長は淀殿の意に適ひ威を城內に振ふ事全く修理亮淀殿の內寵を得しに因る事にして此事知る者多しと雖も人皆淀殿並びに大野父子の威光に恐れ誰一人一言も發する者なし然に依て治長猶々淀殿の

守渡邊民部少輔小笠原信濃守内藤丹後守都合五萬餘人二陣には松平下總守戸田左衛門本多美濃守六郷兵庫頭有馬玄蕃頭三萬餘人にて先陣二陣一同に攻寄る扨又幸村は後藤基次が國松殿を御供して歸るを見て今は何をか期すべき迎船來らば早く御供して薩州へ下るべしと其用意をぞなしにける頓て後藤基次幸村に面會し歸路にての物語を爲しながら幸村もろとも落支度をぞなしにけり

第廿二　本多忠朝大勇の事并大野小三郎が傳

扨も大坂城内に於て幸村謀計に身心を苦め或ひは影武者又は火攻其外種々の工夫を以て關東勢を悩すと雖も天命の歸する所何も術計齟齬し流石の幸村も今は如何とも爲べき樣なく薩州へ落んと爲たりけり然れば此度こそ肝心の影武者穴山小助が功をなすべき時節到來せりと其旨穴山に申渡せば小助も豫て期したる事なる故命を捨て漢の紀信が忠に倣ひ美名を千歳に傳へんと潔よくぞ出立たり然る所に關東勢追々に繰出す中にも本多出雲守忠朝今日こそ討死して小笠原信濃守に追付べしと覺悟を定め船場の陣前にて戰死するか秀頼の旗本に切入か又は眞田が陣へ馳入んかと立葵の旗押立ち人に先立て押出す城内にては是を見てスハ本多こそ出陣せりと昨日物分れせし荒川熊藏突て出んとする所を木村主計頭押止め先々敵の擧動を見定むべしと云ければ

るは貴殿の旗を見れば本多出雲守忠朝と覺ゆるなり當城の主君秀頼公には御運開かせ給はねば某し今日討死と志ざし候なり是に因て名高き貴殿と最期の一戰を試み快よく討死して生前の面目死後の譽れを求んと先刻より爰に待受候然ど度々の戰ひに勞れ給ひしと推察致し候間一盞を獻じ度思ふなり聞し召給はゞ幸甚なりと恭々しく口上を述ければ忠朝聞て流石は眞田程有て軍中にても御芳志の段天晴に存ずるなり一ツ賜はり候はんとて已に土器を取上んとする處に家臣の面々押止め御無用なり萬一も酒中に毒など交て有時は不覺なる事此上なしと土器取て擲んとすれば忠朝笑つて之を制し日本全國の勢を一城に引受る程の眞田幸村爭か我一人を殺さんとして然樣なる卑怯の振舞有べきや汝等が知所にあらずと其まゝ土器押頂戴快よく飲了り禮を慇懃に述て則ち返盃し此上は潔よく眞田殿の首を討取か某しが首を下物に參らするか二ツ一ツの戰ひ成んと使者を厚く待遇して返しけり夫より本多は例の鐵棒打振て眞田を一討にして死せん物と家士等に離れて先へ進み向ひければ眞田も同く進み出で秘術を盡て戰ふ事既に六十餘合に及しかど勝負は未だ見えざる内に何思ひけん幸村は急に引外して西の方へと馳出せば本多聲掛眞田殿にも似合ず汚し〳〵返されよと追懸る故又踏止まつて戰ふ内に本多が家來主人の深入するを氣遣ひ跡追慕ふて行ける内幸村又迯出して一心寺の後なる古井の中へ落入ければ忠朝得たりと古井の中を覗きしかば下より飛付鎗の透間を突徹す之を見て家人共馳懸れば藪の中より増

寵愛甚だしく一にも治長二にも修理亮と言々皆用ひられ秀頼公へも淀殿よしなに勸め給ひし故軍の手筈一々喰違ひて幸村が千慮も水の泡と成事多きは皆大野父子が奸惡なるに因てなり其中に此小三郎治村は其心正直にして忠臣無二の若者なりしとぞ先達て秀頼公上洛の節加藤淸正扶け行んと云時も此治村進み出て其日の中に御歸城わらん事を申して淸正に其英才なる事を賞られし次第にて此度の戰死も其潔能事類ひ稀なる事共なり佞惡邪智の大野が一家に斯る珍しき忠孝全き者の生ずる事誠に父祖の汚名を雪ぐに足事なれば爰に錄して其功を永く傳へんとす此事諸書に見る事有ざれば今或家の記錄より實を見出して物する事爾り又二男大野主馬之介を一說に主馬頭とし五位の諸大夫とす然るに此書諸家の記錄に就て書たる事故矢張主馬之介と爲して以て後の訂正を俟つのみ

本多忠朝討死の事幷穴山小助身代討死の事

扨も本多忠朝は敵を討事數知れず八方に切て廻り向ふを屹度見てあれば天王寺の南の門に六文錢の旗押立眞田幸村百騎許りにて扣へたりしに本多大に悅び彼を討取死なんこと本望なりと物をも言はず馳せ懸れば眞田は望む所の敵なりと同じくドッと押出しけるが其備の中より一騎の使番徐々と步み來るに本多は是を見て訝しく思ひ扣へける所に熨斗昆布銚子土器取添て申越け

梶を相手に上段下段と切結ぶ内太刀先鋭く梶が眉間へ切込ければ流石の梶も働き得ず怯む所を踏込で首を難なく掻切たり返す刀に青山をも一刀に切倒す是体を見て今は一人も掛る者無りければ穴山も數ヶ所の疵に勞れを覺え息を吐て馬上に暫時控へたり斯りける處に原隼人走り來り乾度見れば是ぞ去冬初めて對面せし幸村に相違なしと思ひしかば今迄は樣々の謀計にて影武者を出せしも今日こそは誠の眞田必死を極めしと見えたるぞイザ討取て高名せんと十騎許りを隨へて無二無三に突て掛り眞田殿には久し振にて見參せり去冬の返禮に一鎗進上致さんと突出す鎗を穴山發しと受留て仰の如く去冬以來面會せず堅固の段祝着なりと言ふより疾く閃りと計り鎗突出すを原も受留め同じく突入互ひに劣らぬ勇士の必死に三十餘合戰ひて未だ勝負も見えざりけり穴山は先刻より數十騎を突落し隨ひし郎等も所々にて討死し一人も助け來る者有ざる處に原が郎等は十人ばかり主人を助け鎗襖を作つて八方より突出せしを穴山は紺糸の鎧も紅ゐに變じ乍ら猶も七騎まで突落し馬馳寄て如何に原殿其許と我とは共に甲州より出て恥有中なり潔よく一騎打の勝負致さんイザ來られよと云ければ心得たりと原は郎等を退けて二人丁々と渡り合又三十餘合戰ひしが頓て双方鎗投捨て面倒なりと無手と組双方揉合捻合し内原が郎等主人を氣遣ひ馳寄て眞田が足を引倒さんと爲ければ穴山無禮なりと云儘に鐙の鼻にて蹴飛せば郎等は吽と倒れて死しにける又も其餘の郎等馳懸るを隼人制して無禮するなと睨付只二人叓を專途

田兵太夫五十人許りを引具し馳出て家人を中に取込討取たり其隙に幸村は難なく忠朝を討取り首を揚ると見し内手早くも穴山小助と摺替つて幸村は城内に引入たり小助は直に忠朝が鎧を着し替例の鐵棒を振廻して林の中より立出るに増田兵太夫本多が家來を討取る最中なれば其中を割て通り大音聲を張上げ大阪方に鬼神と聞えし誠の眞田幸村を本多出雲守忠朝討取たりと呼はりければ増田は態と穴山を追懸るに穴山は本多の振して一散に乘切て敵の本陣に近付し處諸大名諸士聲々に御前近し其首渡して通られよと留むる聲も聞えぬ眞似して一散に駈入れば諸士の備より引止めんとする故に小助扮は顯れし事なるかと止むる諸士を左右の鐙にて蹴飛しつゝ旗本を指て切て入に越前勢八百人許り犇々と走り懸つて討取んとす然ども小助は必死を極めし事なれば切共突共事共せず瞬時間に五十餘人を切て落し眞田幸村爰にあり討取て高名せよと呼はり〱追散す然るに越前勢の中より西尾仁右衛門梶金左衛門と名乘て左右より突て懸る穴山は心得たりと梶を鎗にて會釋乍ら鐓を差延西尾が冑をしたゝかに突ければ西尾は眼眩みて逡巡めく所を馬馳寄て鐙の鼻にて蹴飛せば吽と倒れて立上り得ず梶金左衛門大いに怒り威稜しやと突出す鎗を小助早くも引外して直と乘入大太刀抜て丁と打ば梶が鎧に切込だり切れて金左衛門流るゝ血汐を事共せず手早く一刀抜合せ火花を散して戰ふ所へ越前勢の中より青山源五郎と名乘て穴山が後より鎧の引合をぐさと突されども其疵一寸許りの事なれば小助は之を意ともせず

爰に又越前勢は城乘を心掛先陣の加賀井伊藤堂に越て城攻をなす抑々越前家は大御所の御子にて新將軍の兄君結城三河守秀康公と申して秀吉公の御養子に成給ひ下野の名家たる結城の家を相續せられ慶長五年關が原合戰の時大御所會津へ進發せらるゝ跡にて石田西國勢を催し旗を揚し故下野より引返し給ふに結城中納言殿には上杉の押へとして武勇拔群成しかば越前を賜はりしに今大坂の攻手に居給ふは其御子越前宰相忠直卿にて父君の武勇を繼給ひ無双の勇將なり又松平庄三郎忠昌は忠直卿の弟なり後に伊豫守と號す然るに此度一番乘を心懸給ふは甚だ深き仔細あり秀康卿常々思ひ給ふは秀頼は我身に取て弟なりされば我生存の中は秀頼と何分苦樂を倶にすべし若誰にてもあれ秀頼を亡さんと計らば我先大坂に籠城して秀頼と死を倶にせんと常に此事人々にも語られしが其後病に罹つて我死せば大坂の滅亡近きにあらんと有けるゆゑ大御所何とやらん心に適ひ給はず有しが其後死去せられ忽ち此亂と成にけり又忠直卿も同じく大御所の心に適はせ給はず既に此度大坂の大亂にも國に引籠られて大御所新將軍を挾み討んとまで爲られしを本多飛彈守同伊豆守大に諫めけるに依て此義を思ひ止まらせ給ひし程なればこそ此度一番乘して御感に預かり大御所の疑ひを解嫡孫の譯を以て大領を賜はらんと思ひ立れしなり然に因て主從心を合せ此度一番乘せずんば生て世に立まじと誓はれ合戰有しかば越前の手に討取し首級は諸手に勝りて殊に多かりけるとかや

と揉合しが穴山先刻よりの戰ひに數ケ所の疵を負ければ身体今は勞れ果終に原に組伏らるされども短刀を手早く拔て原が急所へ突かけしに力弱りて其甲斐なく遂に原が爲にぞ討れけり原は突れし疵所の痛みを押へ大音揚眞田左衛門佐幸村を原隼人正討取たりと呼はる故越前勢一同に吶と鬨をぞ揚たりけり

第廿二　幸村が首實撿の事并越前家一番乘の事

斯て穴山が首は越前家の陣中へ持參するにぞ松平庄三郎存知の事故早速改め見るに是こそ相違なき眞田が首なりと大いに悅び原と同道にて大御所の御陣へ持參して是を實撿に備へければ大御所御覽じて庄三郎其方は先達て眞田に對面せし事なれば定て見覺え有べし眞田が實の首に相違なきやと有ければ庄三郎答て是こそ去冬對面せし眞田に相違之なく候と申ければ大御所淚を波落〱と流され忠臣義士も世に多しと雖も此幸村に優るべき者有ざるなりと暫時は絶入り給ひしかば皆々淚を催しけり斯て幸村此度は誠の戰死と沙汰有ければ最早此上城方何程の事をか爲べけんや早落城も遠からじと關東勢は勇み悅び今てそ心安からんと銳氣はいとゞ增りけり是より戰ひは晝時より始べしとの令有しとかや關東方晝時より戰ひを爲との事は暑の甚だしき頃ほひ晝前朝日に向つて戰ふ時は敵に利ありて味方に利なく暑氣殊に堪難かりしに因しとかや

なり然ば木村は秀頼公と號して緋緘の鎧に八方白の鍬形打たる龍頭の兜を着し虎の皮の尻鞘掛たる太刀を佩蜀紅の錦の陣羽織に白く五三の桐の紋を付たるを打掛眞先へは太閤相傳の金の切裂廿本茜の吹拔十本金の千顆瓢簞の馬印を押立千本鎗を前へ備へて大乘樂と名付し七寸の名馬に黑き梨子地の鞍を置紫の手綱紅の厚總掛て之に打乘り徐々と櫻の門へ押出せば甲冑の武士次第を守り並居たる其有樣は太閤在世の昔を今見る如く思ひ出され譜代の面々坐に涙を催しけり斯て大手の大矢倉に在て合戰の只中關東勢四度路に成し圖へ押出し鋭氣を挫かんとぞ爲したりけり扨も天王寺茶臼山岡山表にては加賀越前の手より軍始まり住吉より船場の方にて亂軍と成しかば旗本の先手井伊掃部頭直孝は一色の赤備にて陣列正しく押出す所に味方と覺しく袖印笠印皆關東勢と見え惣人數二三千許り等く下馬して有ければ井伊が先手も二三百人平伏す是眞田大助顯伏幻の備にて先手の通るに目禮するなり井伊の使者走り來つて大名衆の御目見軍と見えたり誰殿にて候と尋ければ九州嶋津が陣代伊集院右衛門新納武藏守と答ふる故御同勢御構ひなく御通り有といふ所に今迄の旗を急に絞り赤地に六文錢の旗を軍中に颯と押立三千餘人一同に鬨を發し黑雲の起るが如く起り立て進寄中にも陣頭に進む大將小櫻縅の鎧に同じ毛の銀の抱角打たる兜黃羅紗の陣羽織を着し采配取て乘出す若武者疑ひもなき眞田大助治幸左右には三好淸海入道同爲三入道伊木七郎右衛門海野六郎兵衛を從へ進み寄り治幸大音聲に我父幸村昨日

眞田奇謀治幸勇戰の事并木村主計頭出馬の事

斯て越前勢は加賀勢を乘越城邊指て攻懸る本多忠朝の郎等は增田兵太夫が爲に押立られて其外眞田が家臣由利鎌之助等討て出散々に切立猶も進み來るを見て越前勢千五六百騎此方へ向ひて押出し合戰を挑むにぞ增田新手に切立られ叶はずして引入んとするを越前の手より拜郷典膳乘込來つて後より總角の邊を突に增田は本多が郎等を多く討取て其身も勞れたる故忽ち馬より突落されしかば拜郷が郎等折重なりて首を掻んとする所を增田振向下郎に首を渡さんやと發打と睨めば郎等恐れて後歩す由利鎌之助も散々に戰ひ手を負て引揚たり然るに關東勢は幸村が戰死の上は一時に城を乘崩せと烈しき下知に加賀勢は先手の本多安房守長九郎左衛門等諸軍を勵し楯板を並べ竹束を押立進み寄るに城中よりは速水甲斐守長曾我部右衛門太郎諸手を下知して防ぎ戰ふ内に今日も早夕陽に至るまで城の塀一重も破る事能はず双方死人のみ多くして相引とぞなりたりけり明れば五月六日關東の大軍今日こそ城を攻拔んと黎明の頃より例の如くに押寄せ鬨を吶と揚しかば城中よりも同く鬨を合す其聲天地も震動するばかりなり斯て關東方には加賀越前井伊等先登を心掛て押懸るに城中にては幸村同大助謀計を合せ秀賴公御出馬と名乘て木村主計頭を出すべしと有て昨夜より其用意をなす是は味方の諸軍を勵し敵方の鋭氣を挫かんが爲

先驅として毛利豐前守二千許りの兵を率ゐる水の溢るゝ如く一度に吶と攻懸れは井伊直孝も漸々人數を纏めて曳々聲にて戰ふたり然ども眞田が鋒先鋭くして又々崩れ立ければ直孝切嚙をなして言甲斐なき者共哉敵を味方に比ぶれば九牛が一毛なる小勢なれば入替る人數は有べからず未練の奴原返せ〳〵と聲を限りに呼立〳〵人數を勇まし進めども崩れ立たる軍の習ひに六千餘人の人數は更に下知に從はず愈々亂れて盛返すべき樣もなく四度路に成て見ける中に井伊の旗奉行孕石備前廣瀨左馬之助先備に踏止まり鎗を引提大音揚當手の赤備敵に後を見する事なし末世の恥辱を殘さんより花麗に戰死せよと八幡大菩薩の赤旗を自身に取て簇雲の立たる如き敵前へ馳付味方に向ひ返せ〳〵と招きけれども續く味方はなかりけり

第廿四　孕石廣瀨討死の事幷龜井村軍の事

此時關東勢は秀賴公出馬の体を見て大に駭くと雖も眞の秀賴にはあらずとの沙汰追々に聞えければ踏堪へ〳〵火花を散して戰ふたり扨も大助治幸は豫て父幸村に示し合せし事なれば花々しく一戰の上引入て共に秀賴公を助けて薩州へ落ん物との內存有故斯は影武者の仕組有なり扨又井伊方の孕石廣瀨の兩人は味方を勵し勇みけれども返さんと爲者更になく諸手の勢來りて旗本の軍を助けんと爲ども此時加賀越前藤堂佐竹上杉の軍城方の長曾我部速水堀樋口堀田加藤岡大

の軍に討死す悴大助父の命を受續君に忠を盡して甲斐なき命存生たりイザ末期の軍に及ばんと左右に備へたる鐵砲を打出し煙火を飛し馳懸れば先手の旗本不意の事故大に周章狼狽夫眞田と云程こそあれ皆一同に亂るゝ所へ眞田が一軍弓鐵砲の下よりも鎗を突入〳〵喚いて掛り然ばかりの井伊の備を始めとして松平丹後守酒井本多佐久間細川一同に崩れ立已に大御所の御馬前まで亂れ懸るは是嶋津勢と思ひ油斷したる故なり大御所は大に怒り戰場の變化は常の事なり何ぞ駭くべき事有んや今日肝要の軍に退くとは何事ぞ騒ぐな進めと下知あれども或ひは鎗に躓きて又は鐵砲を倒に荷ひて後陣へ逃行敗兵們を追立駈立三好清海入道一散に驅來りければ敗兵們は雲を霞と尾州紀州の陣に雪頽て本陣も共に崩れ出し散々に引退く此內永井右近大夫の一手のみ始終踏堪へたりしとかや是を見て眞田が一軍備を亂し四方八方より旗本へ亂入て忽地亂軍と成眞田方は皆關東方の合印なれば何れを城方と分ち兼關東勢同士討のみして號令ありても傳はらず眞田大助は思ふが儘に追崩し馬を少引上て只今秀賴公御出馬成と櫻の門へ使者を遣しければ秀賴公に替りし木村主計頭五三の桐の旗を繰出し東軍の方へ徐々向つて押出す東軍是を見てスハ秀賴公の出馬ぞと驚く所に大御所大音聲を張揚給ひ味方の面々驚くべからず假令秀賴と名乘打て出るとも眞の秀賴にては非ざるなり是は正く陣代と覺ゆるぞ踏堪へて討取と劇しく下知を傳へられしに今まで慄へし者共も漸々に踏堪へ旗本勢も盛返したる其所へ城中より秀賴公旗本の

の爲に一時は敵に追塞がれて前路自由に駈拔難し然るに眞田は三好兄弟に申含めて已は颯と引上しかば三好は直に六文錢の旗を指て毛利と共に何國までもと追故に旗本の勢は踏堪へ〳〵戰ふ故戰死する者五十餘人大御所も今は叶はじと既に覺悟せられし其所へ南光坊來りて住吉の浦へ伴ひ落し參らせしに敵は猶追慕ふ故に僧正は漕行漁船を呼返し便船を乞て打乘尼ヶ崎へと漕行す時に南光坊申けるは向ふに見ゆる家は又右衛門とて私し能々存候賴母敷者にて候へば那へ御案内仕るべしと先立て行しが終に主と共に出迎へ慇懃に饗應す然るに本多上野介正純漸やく爰へ尋ね來りて御無難恐悅の由申上る太平の後此尼ヶ崎の士民を駿府へ召れ褒美を賜はりし上江戸に於て町屋敷を望むべしと有ければ日本橋の北の町地を望みしに因て願の通り之を賜はり其百姓は町屋敷を爰に建て住居す本住居は大坂天滿に有つて江戸の住居は尼ヶ崎屋の出店と云心にて今に尼店と云なり扨も毛利三好は關東勢を追立終に大御所を見失ひ其内保科內藤酒井榊原其外の援兵來るを見て面々勢を纏めて引取けり此合戰を後に傳へて龜井の御軍と云は旗本惣崩れと成し地名を指て云なり

小笠原兵部大輔戰死の事幷長曾我部危難の事

扨も今日の戰ひには長曾我部右衛門太郎同じく次郎の兩人有井畑の勇士を從へ切て出るに小笠

野神保松田山名金森明石等と亂軍と成て戰ふ故何れ隙有共見えざれば救ふ間もなく討死する者山の如く四邊は一面血と成て難波の城も恰ら朱を注ぎし如く時に廣瀨左馬介孕石に向つて某しは行年七十五歲なりければ命の程も早知れたり然ば戰場に臨みし恥を雪ぐも此度ならでは再期なし貴殿はいまだ年若なれば血戰する事此度のみに限ねば早々爰を退かれよ我は討死なして當家の面目に備んと云を打聞左馬介打笑ひて戰ひの恥に何老若の差別有んや老たるを捨若き某し退く事の成べきや一所に討死こそ望ましけれと兩人互ひに死を決して田の畔に赤旗を立直し亂軍に馳入て思ふがまゝに戰ひ敵十三騎を突落し其外數人に手を負せ終に兩人刺違へ死したりけり是よりして井伊が備も崩れ立ち敗走しければ之に續いて旗本勢も備亂れて動亂し諸方の人數更に鎭まる氣色なしかくて眞田毛利三好兄弟等は勝敗の運は此時なり圖を失ふなと自ら進んで下知すれば關東は愈々崩れ一隊々々雪頽懸つて後に備し十三段も共に逃退今は大御所に付從ふ別當さへも無なりし折から南都の御墨師森若狹此節來り合せしが甲斐〴〵しく立上り御馬に添て守護爲しにぞ大御所馬上より汝噺著氣にて難儀せん苦しからず扇をつかへと御腰に挾みし扇子を取て若狹に之を賜ひしより太平の後若狹江戶表へ出たる時墨の御用永く勤むべしと有て其後銀十枚宛を出府の度に賜はる此扇子は彼家に寶物と成て永く保存せしとかや斯て旗本近侍の面々は追々に盛返して馳付內に諸手も各所を切拔て馳付大名の手も盛返さんと爲けれども敗軍

政面目を施し悦ぶ事限なし夫より色々療治の事など手當に及び山岡幷びに施藥院歸るや否や一聲叫んで大學之助はと尋るにぞ大學之助是に居候と答へしに秀政苦氣の聲にて如何に大學之助今日の戰ひに兜を落たるは殘念なり傳へ聞孔門の子路は死に至れども冠の纓を解ずと我兜を戴き陣中に死なんこそ本望なれと云しかば大學之助烏帽子形の兜を取て着するに是にては未忍の緒の締樣寛く氣味惡しと云にぞ畏まり候とて緒を締直さんと爲れば最早息絶て答へ無りしかば大學之助は父の死骸に取付聲を放つて歎く事大方ならず附從ふ面々にも倶に涕に咽びけり斯て城方長谷我部父子は敵を追靡けて散々に突散し猶も進んで上杉佐竹の勢と挑み戰ひ奮戰するに誰する者一人もなく開き靡きて避けるを佐竹義宣大に怒り僅の敵に見苦しき事共かな敗走して誰に面を合す可返せ〳〵と勵ますに此下知に因て漸々五六十人踏止まり苦戰を爲に右衞門は勝に乘て深入し佐竹勢の堪ゆるを見て在内上杉勢も盛返し右衞門次郎を中に取込八方より押立押立攻戰ふにぞ前を拂へば後へ廻り後を防げば前に顯はれ匆々圍みを出る事能はず茶臼山の脇なる狼谷の邊まで戰ひ入て終に上杉の手の者に前後より突立られ山の樹間に身をよせて長刀にて戰ひつゝ敵十七人を薙伏けれども多勢を相手の事なれば既に鎗疵七八ヶ所蒙り谷の下へ突落さる此時早くも木の枝に取縋り辛くも命は助りたれど馬は遙の下へ落たりけり右衞門次郎は夫より身を樹陰に隱したる事なれば敵は右衞門を死せしと思ひ只城方の外の勢と戰ひける内右衞

原兵部大輔秀政之に渡り合ひ攻戰ふ秀政は嫡子信濃守を先達て討れしかば大坂勢は誰にても我子の仇なり一人も餘すまじと先頭に進み先手を下知するにぞ其手に從ふ加藤由右衞門山江九郎右衞門堀伊右衞門曾我彦左衞門百束十郎右衞門を始め命を捨て攻戰ふ然るに長曾我部兩人は勇猛の若者なれば敵將を討て戰死せんは元より望む所なりと大長刀を打振て一散に乘込來て三階菱の旗を目當に突て入を山本掃部と云大剛の勇士兵部大輔の馬前に出て鎗を合せ二つ三つ突合せしが掃部は先刻より多くの敵を討て甚だ勞れし事故終に右衞門に突落さる斯る所に城兵又五六百人簇り來り兵部大輔を十重廿重に取卷たり秀政の家士二木勘右衞門小笠原主水嶋立內膳岩波平左衞門等散々に戰ひて討死す然れど秀政は少しも退ぞかず自身鎗を以て命限りに戰ふ所を敵勢散々に突出す鎗に十八ヶ所手疵を負血汐鎧を染ると雖ども事ともせず既に十四人まで切て落し猶も進んで戰ひしが其身金石にあらざれば大に勞れ既に討死と見えたる所に秀政の次男大學介忠政と云者武勇は父兄にも劣らず今父が合戰に軍勢多く戰死し危しと聞て手先の敵を打捨助け來つて長曾我部盛親に出合苦戰と爲しに父を救ふ事能はず盛親が手の者を多く突落し漸く一方を切拔父が方へ來りて見れば秀政は早重傷を負引取道に行合しかば倶々介抱して久寶寺の我陣へ引取けり大御所にも今日の戰ひに小笠原父子の勇戰を甚く賞せられ殊に秀政の重傷を負たる由聞しめされ山岡五郎作に施藥院宗伯を添て久寶寺小笠原が陣へ遣され陣見舞有ければ秀

陣頭に乗出し穂先長の大長刀を眞向に振翳し簇る大軍の中へ少しも痿ず乘入て電光の如く薙立るに元來勝れし手の內なれば八方に敵を薙倒す事只蘆の葉を苅如し明石は心中に一方の大將と組打して黃泉の土產に爲ん者と思ひけるにぞ水野を目掛飛懸る日向守勝成味方薙立られて崩るゝを見やり言甲斐なき者共哉乞々日向守が働らきを見せんずと云儘に穂長の鎗を追取延明石掃部介に渡り合戰ふ事三十餘合にして勝負はいまだ見え分かず水野勝成聲を掛面倒なり牽組ん道理なりと互ひに打物投棄て馬押並べて無手と組曳や〳〵と聲を掛揉合ける內日向守は無双の剛力なれば明石が總角の邊を引摑み曳と指上夫首取と云儘に味方の中へ撞と投れば明石早くも立起て近寄水野が郎等を一打に切て落し又來る兵を横擲に切倒す水野怒て馬より飛下明石に向ひ汝我手に死すべき者の何とかして働くぞと明石が切込太刀の下を搔潛り再び無手と組付押伏て首搔切て直立上る其勢ひ人間業とは見えざりけり

明石掃部介は父を三郎左衞門と稱して備前の浦上周防守が臣たり浦上の家老浮田和泉守主人を追出して自ら備前國を領し三郎左衞門を老職として大錄を與ふ掃部介は太閤の小姓に召出されて秀賴公に付られ夫より立身して大名に列せられしかば其恩に感じ戰死する事父の無道に引替義を知るの武士なりと敵も味方も稱美せしとかや

明石掃部介討死して其手の軍兵何かは其まゝ引べきや思ひ〳〵に戰死を遂て同じ枕に伏たりけ

門は木の根草の葉を押わけ底へ下危き命を助かり夜に紛れて密に城中へ歸りける

第廿五　明石掃部介討死の事幷水野日向守勇猛の事

爰に又城方明石掃部介は太閤の取立に預り無二の忠義を懷き秀賴公に昵近して去冬眞田幸村が九度山の隱れ家へ使者の役目を承て秀賴公よりの墨附を携へ行き幸村を呼來りし者にて此度秀賴公の武運拙きを察し關東の旗本へ近寄大御所を討取事叶はずは然るべき將と刺違へて潔能討死し泉下に報恩をなさん物をと豫て秀賴公より賜はりたる唐綾錦にて縅たる鎧を着し(是は唐綾の切にて包たる具足なり)桃形の兜に紫色の母衣を脊負鹿毛の駒に梨子地の鞍置せて之に打乘一散に馳出したる所に水野日向守是を見て好敵なりと手の者を近付追取込て戰ふに明石是を事共せず八方へ突散す斯る所へ細川玄蕃頭酒井安房守相備へ二千許りにて此手へ横鎗を入明石を散々に突立る是を見て郡主馬之介闕丹後守馬を並べて突入細川酒井と火花を散して切立れば水野日向守眞先に勇を奮つて突立るにぞ細川酒井是に勵され自身手を下して戰ふ程に何かは手勢返さゞる可皆盛返して敵の軍勢を突散し後陣の水野が陣より鐵砲を打事雨の如く城兵大いに討るゝを此機に乘じて進み立れば關が手の者遂に散々討なさる一方には郡主馬之介進み兼て控ゆるを追立〳〵攻し程に四途路に崩れて引取にぞ水野は猶も此圖を外さず進みしに明石掃部介

増田毒氣の鐵砲を以て夜討の事幷増田影武者と爲て自害の事

斯て此日の戰ひにも東西の軍勢討死負傷多くして孰れも劣らぬ劇戰に城もいまだ落ずして持耐へたり幸村は豫て増田兵太夫が悴兵藏なる者に謀計を授け置しかば此度此者を呼出して汝斯樣に計らふべし不便には存ずれども皆是汝が父と謀し合し忠義の爲の事なれば隨分健氣に出立べしと委細の事を語りければ兵藏は畏まりぬと潔よくぞ肯ひたり

幸村は穴山小助を以て影武者と爲し己は城内に深く籠り居ければ腹心の者より外知る者なし然るに悴大助治幸は影武者に似寄の者さへ無所に増田兵藏こそ能似たれとて父兵太夫より願はくは兵藏を影武者に立たしと云出せしを幸村聞て子を思ふは我人共に同じ事なれば御自分にも爾爲れ給ふ事無かしと察しやらるゝに付先々此事は御止りあれと申せしかば後藤長曾我部等側らより治幸殿一人は千人にも増るべし就ては此事増田が乞に任さるべしといへども幸村聞入ざれば増田兵太夫此上は父子爰にて切腹仕つらんと既に斯よと見えしかば後藤は之を押止め此上は是非に此事聞入給へと云ど幸村はいまだ之を聞入ざるとかや一說に曰く眞田父子は影武者を多く遣ひ其身は無事を量りて表向を忠に似せて居る事不審と有ども夫大功は細

り郡主馬助丹後守等は細川酒井に切立られて既に城内へ遁入んとする時關東勢直に付入にせんと馳寄來るに作崎宮内少輔踏堪へて下知しけるは敗軍の爲付入にせられなば當城は此手より破られん軍中の恥辱不忠なり牽踏耐へて突返せと大音聲に呼立けるにぞ是を聞て關郡も勇氣を勵まし汚名恥辱を取んより落城もはや近きにあれば死すべき時こそ來りたれイザ引返して討死せんと大返しに馳合せて戰ふたり爰に水野日向守が手の中に水野藤右衛門と云剛の者千裂たる物の具を着し馬に鞭を加へ一散に走り來つて作崎に鎗を合すれば作崎が郎等馳塞つて取卷を藤右衛門は事ともせず郎等を敲き倒して飛込ば作崎も鎗を取て二三十合戰ひし中藤右衛門一聲喚いて突鎗に作崎は太股を突れて痿む所を取て押へ首を弗つと搔切其塲へ首を投出し猶も進んで戰ひしが敵は間遠く退きければ取て返して彼作崎が死骸の鎧を剝取己れが物の具脫捨て手早く着替又敵中へ馳入て首數多討取たり此體を見て郡關は手勢の多く討れしに戰ふ事も成難く相間を窺ひ城中へ引入たり水野日向守勝成は明石掃部介を自身討取本陣に歸り來れば大御所是を御覽せられて殊の外に褒られければ日向守大いに面目を施しけり扨又水野藤右衛門は討出し時の打扮に引替て鎧兜を美々敷粧ひ敵の首級十五六を腰に結付本陣指て引返せしかば見る人其天晴なるを賞しけり

夜巡を欺く事前の如して行過ぬ然るに越前の陣近く成所に原隼人明日の合戰の用事に付て上杉の陣へ行迚七八騎を隨へ挑灯を燈させ出けるが此体を見て咎めける故以前の如く僞るに隼人打笑寺澤殿夫こそ御手柄に候率御意得候はんと云にぞ南無三寶最早欺き難しと矢庭に追取卷て討取んとすれば隼人大に驚き大音に敵夜討を懸るぞ者共餘すな討取と云程に郎等も走り廻り聲限り呼廻りければ越前の陣よりスハ一大事と駈付來りしに此聲を聞付井伊榊原藤堂の陣より鎗追取て突て出餘すなと追取卷ば增田勢早叶はじと今迄繩付と見えし面々一騎當千の兵士となり棹に付し首を打捨爰を專途と勇戰す其隙に增田兵藏一方を突破りて鐵砲の手だれ廿五六人を率ゐ道明寺へ乘込來て本陣へ切入しかば旗本の大久保四郎右衛門松前隼人土方宇右衛門井戸左馬之介花房太七郎等散々に防戰す增田兵藏眞先に進み眞田大助治幸今日大將を討洩したるを殘念に思ひ再度爰へ推參せり迯給ふ事勿れと鐵砲三十挺許り連射かけて打込ければ素より毒焰硝の仕掛なるゆゑ臭氣烈く大久保等氣を受て嘔吐眩暈少しも働く事叶はず其餘の者も周章狼狽其處を增田方得たりと猶も進み寄せ右往左往に驅散しけるにぞ大御所も此夜討に大いに駭き給ひ急に一色賴母間宮庄五郎安藤彥四郎花房外記等を從がへ退き給ふ處に大久保彥左衛門永井右近乘付て君を我馬に乘參らせ這々の躰にて遁けるに增田が勢は三百餘騎諸大名の陣々を駈破りて來りし內增田は三十人許りを隨へ本陣へ乘込鐵砲打掛〳〵攻寄ける故小勢と雖も必死の戰ひ鋭くし

瑾を顧りみず大禮は小讓を辭せず忠を思ふ心の切なるより些少の嫌疑を顧みざる事幸村にしてこそ心に恥る事なからん英雄の心豈尋常を以て論ずべけんや
然ば今日の戰ひに新將軍には大御所の危かりしを見給ひ旗本勢を以て救はれんと打出で給ひし其處へ諸手の合戰を摺拔て何時の間にかは長曾我部右衛門三郎眞田が勇臣根津甚八兩人心を合せ三百餘人にて道を塞ぎ散々に惱しける故旗本勢必死を極めて防ぎしかば之に依て暫時隙取漸々一方を切拔馳付給ふ所へ井伊等の敗軍道筋へ崩れ來り爲べき樣無き有さまを見るより大助猶も勇んで打掛りしに大崩れとなりて道明寺の方へ退き給ふ其内に諸大名追々に馳付しかば之に依て漸やく道明寺に本陣を据給ふ折から日も早暮ければ合戰を止めて大御所の御行衛如何なりやと聞せ給ふに本多正純より早使來りて委細を申上先は安堵せられ給ふに其夜子の刻を過し頃はひ僅三百騎許りの勢を牽ゐ增田兵藏鐵砲五百挺許り携へ來りて本多美濃守が陣に差掛りしかば篝火を焚居し夫卒等之を見付夜中に人數を出し給ふは誰なるやと尋るに是は大御所の御行衛を尋ねて住吉の方へ參りし寺澤が同勢なり然るに大御所には御無難にて還御の由承り引返せしに道にて城兵に出會散々に苦戰しける故夜に入て引上候則ち敵の首幷に生捕等は斯の如くに候なりと眞しやかに欺くにぞ夫卒等其出立を見るに如何樣敵の首と覺しく長き棹に結渡し跡には十五六人繩付の武士共幷居ければ強て問もせず通したり夫より增田勢は相馬京極の陣をも

ん一家の好身嬉敷こそ候へと忽地馬上に腹掻切て相果ければ討残されし面々我も〳〵と刺違へてぞ死たりけり

第廿六　眞田河内守兄弟賞譽に預る事并幸村奇謀を殘す事

斯て眞田河内守が手勢松明を照し首と死骸を引取て歸り偖河内守思ひけるは大助治幸若年乍らも日本の大軍を引受名を轟かす段敵ながらも天晴なり同じ一家に在ながら初めて去年名乘合たる迄にて今其首に面會することも是非なけれと暫し不覺の涙に暮愁傷に及びける斯て大御所は遙かに落延給ふに跡より追々諸大名追付其後夜討の敵も悉皆討亡ぼし大助治幸も討死し眞田が手へ討取由注進有に由て本の陣に還らせ給ひ新將軍にも程なく立還られて頻りに無難を歡び給ひ其上眞田父子滅亡との由を聞せられしかば殊に安堵せられ今は落城もはや近きに有んと宣まひし所へ眞田兄弟來り御無難の段恐悦と賀を申述やがて大助が首を實檢に供へ幸村が首と諸共申受ていと丁寧に弔ふも是穴山小助と增田兵藏が首なり新將軍にも殊の外賞せられて如何成ば眞田一家は其主の爲に忠を盡す事斯もよく揃ひし者なるや實に武士の龜鑑と謂ふべきは此人々ならんと有にぞ兄弟は面目身に餘り諸將も之を羨みける斯て諸大名追々集まり來り種々評議有て明日は一戰に城を攻潰すべしと夫々合戰の手配り相濟皆々退散す夏の夜の短さに早明鳥告渡り

て之が爲井伊藤堂等の兵討死する者夥多し然共大軍に圍まれ戰ふ故に段々に戰死して漸々增田以下十餘人とまで成にける新將軍には步行にて遁れ給ふ處へ旗本馳付來ると雖も皆人心地はなく毒氣に哽びて漸々に隨ひ參らせ來りし處に增田方は死を甘んじ鐵砲打掛〳〵馳寄せしかば又も旗本勢大いに討れ新將軍にも又々非常の危難となり此時討死したる面々には林藤九郎大岡忠四郎其外間宮庄五郎筒井勘十郎一色賴母坂部助十郎安藤彥四郎等の十數名なり斯て增田も今は僅に五六騎に打なされたる所へ關東方の眞田兄弟馳來り此体を見て討取んと追取卷然るに宵月もはや入て闇まぎれに眞田共知らず叶はぬ所ぞ增田兵藏討死は此一戰と五六騎と同じく小高き所へ上り駒を並べ控へる所に眞田勢鎗先を並べ突懸る跡よりは榊原遠江守君の行衛を尋て眞田と一手になり攻懸りければ增田大音に名乘けるは關東勢慥に聞抑々是は淸和天皇の後胤眞田彈正忠幸隆が孫眞田左衞門佐幸村が悴大助治幸なり父幸村と俱に內大臣秀賴公の御賴に依て大坂に來り奇謀を運らし敵を惱す事度々なり然るに秀賴公御運拙なきに因我々父子も早討死爲んと欲す我と思はん者首取て手柄にせよと呼はりければ眞田河內守扨は大助よな見れば小勢なり討取も不便なり自害せば首は我手へ取得させんと流石一家の好身を思ひ聲高かに答へければ增田は再び大音を發し然ば自害して首を渡すべし明らかに大將の姓名を名乘られよと云掛しかば河內守大音に是は眞田河內守幷びに榊原遠江守なりと答へしに然らば首は眞田へ渡さ

爰に主從暇を告て三好兩人は其まゝ我家に歸りけり

眞田が三好に授けし謀計とは牧方に二ノ宮五左衛門と云郷士ありて故太閤の恩を思ひ往日籠城を願ひしを幸村押止置しかば此者を用ゐて地雷火を伏させ將軍の凱旋せらるゝ折一度に燃付樣に爲んとせしなり幸村は豫て焔硝の濕りを止る傳を心得居しに因り三好兄弟に其傳を授け嚴重に謀計を立させて功を奏せしめんと爲たるなりアヽ稀代なる智將かなと三好兄弟も頻りに其志しを感じけるとなり

眞田幸村秀頼公を伴ひ薩州へ落る事幷島津家由緒の事

斯て眞田幸村は腹心の郎等根津甚八を呼出し之にも一計を殘し置夫より秀頼公の御前へ出て申述けるは今宵增田兵藏を夜討に出し候へば豫て申し上置たる如く只今より密に拔穴を御通り有て薩州へ御舟にて落延有さすべし某し何處までも御供仕つらんと勸め參らせしに秀頼公も豫て幸村と謀し合せし事なれば然ば是より立退んと夫より用意を調へられ偖幸村に向はれ母上へは最早今生の御暇乞なれば一たび對面爲して立出度と有しに幸村諫めて御母子の御因縁有ば實に然事には候へども此事は豫て申上たる如く大事の前の小事にて候御對面有ては萬々よろしから ぬ事に候へば只々御父の事を大切に思召され此儀は達て思し召止まられよと申ければ長曾我部

ければ關東勢既に出陣に及びける倩も幸村は城中に在て三好淸海同爲三の兩人を招ぎ申けるは去冬より千慮萬計を盡し關東の大軍を惱しけれども今は秀頼公御運拙く在まし斯難儀に及びしと云ふも秀頼公御柔弱の御氣に渉らせ給ふ其上に淀殿我儘にして大野等の如き奸佞の族我意を振ひ諸將恨みて一和せず夫が爲必勝の圖を外す事度々なれば今ははや施す術もなく斯言ふも關東に天命歸する譯と思ひければ此上は迚も籠城は叶ひ難し某し豫て九度山に在し時薩州島津に課し合せたる事も有ば先達てより密に策略を運らし秀頼公の御供して薩州へ落ん事を心がけ穴山小助を影武者として關東を首尾能欺きしかば今は手筈の如く薩州へ落んとす其許は我旗下となりて毎度忠勤を盡さるゝ段山海も盡ぬ歡びに存ずる所なれば只今更めて言ふに及ばぬ事なれども某し君の御供して西國へ出船せし後は必ず吾に代りて力續かん限り此城を持堪へ呉られよ然れども此城は最早明日か明後日の內には必らず落城すべきなれば其許には如何にもして當城を遁れ引拂ふ時關東の大御所新將軍江戶駿府へ引取給はん其時に牧方佐多の邊に伏して是非〳〵兩大將を討取べしされども是迚も高運の君なれば恐らくは及ぶまじと存ずれども盡す丈盡すは臣子の道なればこそ斯言ふなれ若此事も齟齬なば空敷亂軍の中に死せん事無用たるべし能々心して此事努々疏略になし給ふなと說了りて一ッの謀計を授けゝれば兩人は喜び勇み頭に霜を頂く老の身を以て黃泉の土產に將軍家の首携さへ行事生前死後の面目なるか之に如ものの有んやと

かに産氣付て平産ある今に嶋津が誕生石とて住吉に古跡遺れりされば其地の社家憐みて本多次郎諸共に介抱してゐる内薩州の住人嶋津左衛門と云ふ者此所を通り合て仔細を尋るに男子なる故養子にせん事を望む是頼朝公の三男にして後に嶋津三郎と言れしなり其後頼朝公上洛せられし時京都にて御目見之有り即ち三郎に薩摩一國を賜はりし故代々九州に威を振ふ後年に至り豊臣秀吉本願寺光佐上人を以て一向宗を薩州へ弘めさせ其を以て打入り遂に義弘を攻立て父子兄弟生害に及ぶべき所老臣新納武藏守伊集院右衛門大夫等の勸めに因て降參し父子兄弟出仕して太閤に見參の時太閤義弘が手を把給ひ流石右大將家の名家程ありて秀吉にさへ敵對に及びたる段神妙なり今は降參とある上は本領は其まゝ授け與へて客分と爲べし之に依て今より主從の契約を定め豊臣家嶋津家のあらん限り忠を盡されよと有たり其後關ヶ原合戰の時石田が逆意と以下敗軍せし折嶋津中務が退口の武功は世の能知所なり殊に朝鮮征伐にも莫大の功を顯し太閤は夢にも知らず秀頼公の御爲を思ひ居る所に大老奉行の面々より催促有に因て同心し頓て三成歿し給ひし後も舊恩を忘れず徳川方へ敵對なすと雖ども家名には別儀なし然るに大阪の合戰は秀頼公の一大事なる場所なればとて江戸駿河よりの催促あれども冬陣の節は病氣と稱して軍勢のみを出し夫さへ渡海の難風に遭しと中立時を外して關東に味方せず船を支度してスハと云はゞ秀頼公を薩州へ落し參らせんと船手の九鬼向井等に之を命じ置ぬ又夏陣にも川上左京伊集院

後藤の兩人も辭を揃へて謀事は密なるを良とす君今御母君に御逢在せらるゝ時は御母君に附從ふ女儀の中に萬一助命の者も有ば此口より事洩て落延給ふ事の敵に相知れ候時は追手の爲海上にて御命を殞させ給はん事必定なり然する時は御自害と敵に油斷をさせし謀計みな水の泡とならん事口惜く候間率疾々と勸むるにぞ秀頼公も大に悟り給ひて幸村が差圖に任せ其夜の丑の刻に城内の拔穴より立出られ譽田まで忍び行れし道にて伊集院刑部猿澤監物阿彌陀寺入道等薩州の家人道路の側傍に平伏し豫ての台命に從ひ兵庫の浦に着船仕つりて御待申所御案内に依て今宵是迄出迎ひ仕まつりしと申述ければ遠國より故々出帆の段神妙に存ずるとて夫より秀頼公并びに附隨ふ面々眞田左衛門佐幸村同大助長曾我部宮内少輔同三男右衛門三郎後藤又兵衛眞田が郎等海野三左衛門望月主水笈川與八郎穴山新兵衛相木森之助筧金六三輪琴之介月方平馬布下彌八郎梁田新八郎齋藤左太郎柘植内藏介等船に打乘纜を解しかば海上の風波心に任せ日ならず薩州を落行し人々合せて百五十八人とぞ聞えたり」抑々嶋津家と云は薩摩大隅日向三州の太守兵庫頭義弘其先祖は鎌倉將軍頼朝公の落胤にして頼朝公丹後の局に御手を付られ懷妊したる所に御臺政子殊の外妬み強く畠山重忠に命じて丹後の局を害さんと有しに重忠之を諫むると雖も政子は頼朝公配流の時より御臺に立し者故に甚だ我儘にして諸臣の諫言を用ひ給はず因て重忠本多次郎近經と云腹心の臣下に命じて丹後の局を遠國へ伴はせしに攝津國住吉迄來りし處俄

て江戸へ赴く共何か厭ん早速承知の趣きを使者に返答あるべし就ては跡々の評定宜しく頼み申すなりと云れし處に淀殿の側邊に附從ひ居し宮内卿の局（宮内卿の局は木村常陸介が妻にて長門守重成が母なり常陸介は秀次公に隨ひて公の高野山に於て御最期の時殉死を爲し局は其節より秀頼公の傅となりて常に深殿に出入せし故名をゝ宮内卿と呼做れて淀殿とは殊に親しかりしとかや）進み出て申しけるは是は淀殿の仰とも思ひ侍らぬ御事かな抑々軍の起りしと申すは其方樣の御心より出し事にて夫より斯亂軍とは成し御事に候其をいかにと申すに無二の忠臣たる片桐市正を疑ひ給ひて諫言をも用ひ給はず却て佞人の大野如き者を愛せられしにより實に今日の樣なる御次第とは成しなれ夫に今更命を惜み給ひて諸人の恨みをも顧み給はず關東に降參せられんとは偖々御不覺なる御事にて候殊に此度關東よりの使者は實の和を爲んとの事ならず其仔細は去冬の御陣に定められし起請文の趣き立ざるに今城中大勢討死して落城もはや目前に差掛りしに何ぞ實の和を好み給ふ事の候や是計略なる事必定なりされば生捕になられて耻を曝し給はんより潔白能御生害せらるべし數ならねども婢妾も一緒に從ひ參らせ死出の三途に御手を引て黄泉に早く御供申さん悴長門守最期の合戰に覺悟を定め出陣の其時申遺せしは某しは君の恩を報ぜん爲に今日是非とも討死をなす覺悟成ば拜領の名香を内兜に炷込て忍の緒を結び切出陣せしゆゑ敵方に名香の薫首取しと聞給はゞ某しが討死と思し召候へ母人には此上は只々君

左衛門を陣代として大阪に差向け其後大阪方危殆に及びて潜に船を回し伊集院刑部阿彌陀寺入道猿澤監物等秀頼公を伴ひて引取けるとなり

第廿七　關東方より城内へ使者の事幷宮内卿の局自害の事

扨も五月七日關東方には本陣を茶臼山へ移され諸陣は夫々に隊伍を守て押出す大御所思されしには今城中は眞田父子討死して其他の諸將も追々戰死すれば必死と成て攻るに於ては城を落す事早安からんされば飽まで力を盡し虚勢を張て城中の鋭氣を挫き其機に乘じて一時に攻落すには如じと依て先諸手へ下知せられて戰ひは本陣より沙汰なき内は決して始べからずと堅く之を申渡され夫より城中へ使者を立られ秀頼母子前非を悔ひ降參を爲に於ては其罪を赦し秀頼に大和一國を與ふべし因ては淀殿を人質として關東へ差遣はすべしと申込れしに城中にては此時實に知ずして眞田父子討死せしとの事に將士ども大に氣力を失ひ淀殿にも此事につき早落城近づきたりとて歎かれ何れも憂に沈むのみ生たる心地は更になき所故に諸將の評定もとかく區々なる所一人の者進み出降參の儀宜しからず速に使者の首を刎不意に押出さん事然るべしと申しければ心ある面々は此儀實に道理と言けれども淀君は之を肯ひ給はず將士に向て大御所は元來慈悲深き大將なれば斯の使者を遣せられし事城中を察せられての事ならん然ば妾自ら質となり

其折も折秀頼公よりの御使者として速水甲斐守入來り秀頼公仰せらるゝは今日關東より使者參りて降參の事を勸め來ると雖も是全く關東の僞計なり然に因て此上は潔よく生害を遂る事に一決せしかば御母堂にも御覺悟こそ願はしけれとの御諚にて候尤も今生の御暇乞なれば是非共御對面有せられ度なれども最早差迫り今と成れし御事故御母儀の御不覺あるも却て如何と涙ながらに其儀に及ばず早御自害に及ばれしならんと述置しまゝ甲斐守はツと立て詰の丸へ錠をおろし是より嚴しく出入を戒め外には山の如くに燒草を積若も不覺ある其時は一時に之を燒上んと爲たりけり大野兄弟も此内に閉籠られ如何ともする事能ず居たりけり斯て關東の使者立歸て城方の返答披露しけるは城中は決して降參を願はざるなりとの由申述ければ大御所然らば一時に合戰を始めて乘破るべしと更に軍評議ありて越前家一番乘を心掛給ひけり

幸村火龍の謀計を殘して敵を破る事幷速水甲斐守父子討死の事

斯て關東の諸將は一時に鯨波の聲を以て攻懸るに加賀佐竹藤堂相馬等の兵を始め今日は落城眼前なれば高名なして御感に預らんと我も〳〵と押寄るに城中よりは矢玉を飛せて防ぎ戰ふ大御所には茶臼山に陣を据られ諸手の戰ひを眼下に御覽ある内旣に亂軍と成ば少し陣を進めらるゝ

の御側に在てたとへ此城落候とも御母子に心を添られ御生害を御勸こそ願はしけれ敵の爲に生捕れ故太閤の御恥辱を重ね給はん事返す〴〵も口惜うこそ候へば此事能々御心添有れよかしとて頓て潔よく討死致て候ひき我子乍も心底實に感じ入候然ば女乍らも人並の覺悟は究めてこそ居候君には秀頼公の御母堂として織田豊臣の御恥辱に迄關係候事に今更御最期の御覺悟なく却て降參とは拙く臆し給ふ御心底と存じ參すれば疾々御心を定められて流石は太閤の御目鑑に叶ひ給ふ淀殿と人にも天晴の御覺悟と沙汰せらるゝ樣御生害あれと或は怒り又は歎き言語を盡して諫めしは實に木村長門守が母とこそ覺えけれ時に渡邊糺が母正榮尼幷びに大野治長が母大藏の局言語を揃へて宮內卿の局には何事を申さるゝや餘りに人もなげなる御事かな御降參こそ勸め給ふべきに御生害を勸め給ふとは何事にて候ぞとサモ理窟げに言伏しに宮內卿の局は大いに怒り居丈高になりて申樣貴所方には夫の佞奸悴の惡を押隱されて忠臣の片桐を讒言して終に城を出さしめ今更君をも昏迷奉まつり大事の場所に恥辱も知り給はぬ今の一言心得難く候なりお覺えあれと云樣に懷劍を取出し已に兩人を害せんとする有樣に兩女は驚き物をも言ず座敷遙に遁延ける斯と見て宮內卿の局は跡追もせず再び淀殿の前に來りて率一刻も早く御自害の御覺悟在ませ自らは御先供を致さんと云より早く懷劍を逆手に取斯遊ばされ候へと咽喉の邊へ突通し俯伏に成て死したるは女性には目覺しかりし最期なり淀殿は是を見給ひ暫時恍惚として在せし

新六郎馳拔て未だ返らざるに汝如何して敵と知たるやと有しかばさん候兄の中間候に若敵ならば直に突て懸らん味方ならば戻り來らんと云て出で行しが一散に敵の備へ突入候へば是敵と見受候なりと申し述しかば君之を聞給ひ斥候の法の即智かなと殊の外に賞せられ諸士其の手本此上なし彼を討すなと下知ある下より小栗忠左衛門同又市中山勘解由等走り出て植村を救はんとす爰に速水甲斐守は我子出來丸今日十四歳にて容顏殊に美麗其上發明にて有ければ偖親心に討死さするを不便に思ひ其方はまだ十五歳にも滿ざる少年なれば降人に出るとも耻ならず疾々立出て家名を失ふ事勿れと諭す言葉を打聞て出來丸ハッと平伏し是は有難き父の御深志なれども然乍ら兒不肖には候へども武士の家に生れて父と君とを打捨命を生存候とて何快よき事の候や父君には兒に迷ひ給ふ御志ざしは有難けれども兒も又忠と孝との爲に命を隕さん事望みにて候へば御免あれと云儘一散に馳出さんと爲ければ暫時と引止汝彌々然樣の志ならば今は何をか期すべき父子一手と成て火龍の陣の騷動紛れに關東の本陣へ乘込み折よくば大御所を討て戰死すべしと云ければ出來丸率然らば御先を仕つらんと頓て敵の本陣を指て切入某しは乙葉三郎源の賴季より廿八代の後胤速水甲斐守時行が嫡子出來丸年僅に十四歳なり今日戰死を遂る間首取て高名せよと呼はり〳〵旗本を目懸て飛入ければ中山勘解由渡り合遂に之を突落しけり斯と聞より父甲斐守大に怒り倅を討れて何をか期せん討死せんと旗本の面々に馳合せ散々に苦戰

に城中の諸將は爰彼より討て出必死の合戰に及びしかば矢叫び鐵砲の音天地も碎る有樣なり然るに櫻の門より一散に出る一手の勢あり關東方三十八段の諸勢之を見てあれば馬面は鬼形の如くにして金色の鱗形なる具足を引掛其樣異形の出立にて現はれ出で諸手の面々へ一散に馳入ければ陣々の馬之に怖れて躍上り或は駈出したる故之が爲諸陣の騷動大方ならず是幸村城中に在て此裝束にて軍を練置たる故馬能馴て少しも驚かず即ち此軍を火龍軍と名く見慣ざる馬は駭きて用に立ざるも宜なるかな抑々此敵を誰ぞと見ば赤地に六文錢の旗押立根津甚兵衛惣大將として春田淸十郞淺見五郞兵衛永山藤吉津田山七郞等二百人許り火龍の馬十五疋轡を並べ乘込にぞ關東方スハ又眞田なるぞと云時に火龍は次第〳〵に乘入り來ければ井伊藤堂加賀陸奥越前細川池田毛利黑田鍋嶋蜂須賀山内立花丹羽上杉佐竹等手勢を下知して打留んとすれども味方の馬只駭く計りにて一歩も進む事叶はず狼狽回る其内に本陣にも大將此体を御覽せられ鐵砲を組で打取と下知有とも味方の馬駈回はる故鐵砲を打兼歩行立にて防ぎ戰ふに暫時騷動すると雖も此方は大軍城方は小勢にて駈引進退敵の如くには行屆かず然れど火龍の備も次第〳〵に討取れて關東方は再び備を立直し隊伍を整へ火龍の備を追取巻然る所に速水甲斐守は此騷動の紛れに旗本指て乘込來るに大御所組の植村新六郞に申し付那に見ゆるは敵か味方か見て參れと下知有ば新六郞弟主膳諸共馳出て頓て何やら耳語て新六郞駈拔行ば主膳立歸り敵に候と云に大御所不審し

り扨又今日の戰ひに長曾我部盛親同右衛門次郎は手勢を以て速水が跡より敵の本陣へ乘入んと走り懸る此組の番頭野々村刑部を始め悉者突出して入替り馳替る故に諸手隙なく入亂れ旗本の先手なる井伊が陣も火龍に駈破られ其上速水に乘込れて今は又長曾我部が軍勢勵く突懸る故愈愈四途路になりけり大御所は氣を急り言甲斐無者共かな死や〳〵と下知し給へど盛親が一手は何れも勇猛の者なれば突落し切伏て旗本へ近付けるにぞ辟易所に阿部備中守正次火龍の陣に馬驚き後遙かに走りけるが諸手の敗軍の勢に隔られ歸る事能はず引立られて有けるが石持の旗多く旗本に翻へるを見て陣中に石持の紋有は長曾我部ならん率御大事と一散に乘切り來れば一ッの崖有て行事叶はず向ふを見れば正しく今長曾我部父子散々に切廻りける故是一大事と身を急れども爲べき樣なく切齒を爲しつゝ南無弓矢八幡大菩薩其外天神地祇の擁護に君の爲力を添てたび給へと心の中に念願して馬を十四五間跡へ戻し心徐かに駒の頭を立直し呼吸を圖つて掛聲諸共勇の一鞭當ければさしもに深き十四五間の崖下へ馬は猛りて恰ら中を飛如く四蹄を縮めて跳下身を震はせて立たりしは稀代なりける事共なりされば此まゝに息をも繼ず本陣に駈付て敵を防ぎ長曾我部が郎等二騎を突落す其中に井伊藤堂追來りて諸勢を勵し散々に血戰す流石長曾我部勇なりと雖も多勢には叶ひ難くて一條の血路を遁れ城中に引返さんとなしけるを遁さじ者と追詰來る其處へ又も關東方石谷十藏と云者同じく長曾我部を追掛井伊藤堂が手を越て首三級

して敵を二騎迄突落し終に其身も鐵砲に中つて戰死せり火龍の軍勢は諸手に馳向ひて段々に討死し今は春田淺山永山津山を始め思ふ程に戰ひて討死し根津甚八も散々に討なされ大音に眞田左衛門佐今日は爰に戰死すと呼はつて縱横に驅散し敵八騎迄突落して遂に加賀勢の本多安房守が手に討死す此たび火龍の軍勢に襲はれ味方馬に蹈れ其外討死を爲者二千餘人とかや大御所は先達て幸村戰死して首級は松平庄三郎原隼人正等證據として實撿の上眞田兄弟へ賜りしなれば此上幸村と名乘出る共是皆僞名なりとて此旨諸方へ觸られける

第廿八　長曾我部父子の事幷石ヶ谷十藏の事

爰に長曾我部宮内少輔は幸村が達て薩州落を勸むると雖も固く辭して我今年七十八歲なれば若船中にて病死する事有ては口惜き次第なり尋常に討死こそ好ましとて三男右衛門三郎計りを遣はし其身は次男右衛門次郎と倶に討死と覺悟を定め嫡子右衛門太郎四男右衛門四郎を土佐の國へ遣はし本國なれば民間に隱れ居て再度德川家へ仇せよと言付又五男は國松君の身代に立伏見の邊へ捨置たり斯て關東方にては之を拾ひ上て種々尋しに只殿樣なりと答ふに依て然らば父は何と申ぞと問ば上樣なりと答ふ因て關東勢秀頼公の御子に相違なしとて頓て之を殺害せり夫より右衛門太郎右衛門四郎の兩人は土州へ忍び行けれども蜂須賀が爲に生捕れて遂に刑せられた

し後平愈しければ必ず罰を蒙むる事ならんと思ひの外祿高の加增を賜はり大いに面目を施こしけれども長曾我部を討洩したるを常々殘念に思ひ折々夢中の如くに成て長曾我部を罵言ける事有たるが後年立身して大猷院殿の御代に石谷右近將監と號し慶安の變に丸橋忠彌を生捕しは誠に不思議の事なりけり是則ち長曾我部が六男なれば其鬱意を散ずるに似たり實に稀有成事共なり

越前家一番乘の事并落城に付手配の事

扨も今日の戰ひに城中の諸將は心を定め何れ傾く運なれば死骸は難波石山の土となるとも名は萬代に揚ばやと互ひに勇み勵み合今日討死の門出と關東三十八段の亂軍を事ともせず爰に亂れ彼に狂ひ必死と成て戰ふたり然ば双方の討死其數幾千と云ふを知らず越前の軍勢に於ては是非に今日一番乘と打出たれども城兵猛威に防戰する故何れの手よりも乘込べき處有ざれば急に天滿橋へ向ひたりしに城兵此口の手薄なるに困み天滿橋へ火を掛防ぎしかば此口も又乘入る事能はず其內青屋口鴫木坂本町橋西丸木津今宮道頓堀の戰爭嚴くなりければ越前の軍勢他に一番乘せられては當家の耻辱此上なしと先手の吉田修理一命を擲ち城中へ乘入んと四邊を見れば大和川滔々として渡らる樣も無りければ如何はせんと猶豫しが屹度心を定め此川深しと雖も宇治瀨

を打取つゝ其身盛親が必死の鎗に二ヶ所重手を負て既に危く見えたるを井伊が手にて辛くも救ひ助けたり(此石谷十藏は新將軍の小性にて去冬の陣にも秀忠公に隨ひて手柄をなし偖此度の夏陣には江戸に差置るゝ處是非御供と願ひしがば秀忠公斯ては法令に違背せり却て罪を請るぞと止め給しと雖も御仕置の程は苦しからずと猶又高木主水永井右近を賴み此事言上を爲けれども法令相立ずとて更に用ひ給はざる處いつかな聽ず再び强て申上ければ秀忠公然る上は是非なしとて頓て呼出され仰せけるは汝達て供致し度との願道理なれば願ひの如く供に申付るなれども江戸歸陣の上は法令に從ひ罰に行ふぞと有けるに十藏畏まり候と潔よく御請して出軍の列に加りしとぞ)扨長曾我部は城中へ引入ず其まゝ何國ともなく落にけり(長曾我部が死を遁れて身を退きしは晋の豫讓が如く大御所を不意に討果さんとの了簡にて今死ぬ命を生存しとなり)斯て其翌八日は大坂落城にて九日に至り長曾我部父子八幡にて見顯はされ兩人蜂須賀が手に生捕右衛門太郎右衛門四郎も同じく蜂須賀が爲に土州にて生捕れ父子四人死刑に處せられしこそ哀なりける事共なれ纔に六男のみ乳兒にて母に懷れ古鄕へ歸り居たるに父兄親族殘らず亡びて身を寄るの地さへ無ければ餘儀無深く隱して育ける後年丸橋忠彌と稱し由井正雪に合體して江戸の大將となりしは此人なり然ども盛親が極老になりての子殊に田家にて育ちし者故世に其人とは知ざりしとかや爰に又彼石谷十藏は若年にして武功を顯し此戰ひに重傷を負江戸へ凱旋せ

つゝ引下つて要害を打固め一騎千軍の防を爲すと雖も越前家の剛勇に敵し難く支え兼て見えたりけり此時大御所は之を聞召候こそ我子爲得たりと是よりやつと越前家に心を解させ給ふとなり斯て又片桐主膳を召れ云々の由語られしに片桐は思はず落涙し扨も城方氣の毒千萬と云出して跡は發と平伏ければ公には其中分實にもと思され却て之を賞し給ひぬ扨も城兵は此體を見て今は遁れぬ所なりと組の面々野々村伊豫守郡主馬を始め城外へ打て出必死となりて戰ひしかば手負討死山の如く散々に戰ひたり其內千內野々村郡等は一先城へ引入て防禦を爲さんとする內に越前勢旣に二の丸を乘取んとて猶も城兵と合戰あるに日も西山に傾きければ今日は此まゝ軍を休み塒を守りてぞ居たりけり城內には早是迄と野々村伊豫守詰の丸に馳參りて御母堂淀殿始め局方女中迄にも皆悉く生害を勸めける其面々には淀殿四十歲淺野石見守の女大藏の局和部の局正榮尼圓の局壽元の局右京の局又氏家內膳行廣入道大野修理等男女合せて三十七人皆生害を遂ければ野々村も跡にて切腹す此時如何して出けん大野主馬介見えざりしが後に堺の町人共に生捕れて磔刑に掛られけり斯て諸將には此上は心易しとて輕卒の者に至るまで八千餘人一人も命を延んと思ふ者なく最期の酒宴に及びけり關東方には早落城近ければ輕卒始め未練の者落出る事もあらんと故と京橋口の固めを解ければ此口よりはした無き老若男女落延ける者市の如し斯て元和元年五月八日寄手は早朝より天王寺口西大手口より攻懸りければ城中には此時所々取

田に何ぞ優らんや藤戸の海さへ渡れば渡る勇夫ありと腹帶を確乎と締散浮と計り川中へ乘入て抑々此は結城忠直卿の手に於て吉田修理正純と言ふ者なり大和川の先陣我なり者共續けと呼はりつゝ逆卷水の白波を蹴立搔立乘切たりし此体を見て驚破續けと越前の軍兵一萬餘人一時に乘込銳意〳〵聲にて押渡る然る處に眞先に進みし吉田修理は武運の爰に盡たりしか飛來る銃丸に乘たる馬の胸を射貫れ馬諸共に水に溺れて死せしこそ殘念なりし事どもなれ然ども餘の軍勢少しも怕れず馬強なるは上に立弱きは下に引れつゝ溺れん武者には弓弭を授け鎗の穗先を楯となし一騎も流れず向ふの岸へ打上れば大將忠直進めや進めと武勇を勵まし衆に抽んで下知なすにぞさばかりの軍勢一人も怯ず懸らんとして向ふを見れば靑屋口薄手なる故乘越んとして石垣に縋り先登本多內藏助多ケ谷左近を始め勇士數十八犇々と乘入ば松平庄三郎忠昌原隼人本多伊豆守續いて石垣に傳ひ鎌嘴口を打掛銳意〳〵聲にて攻上る城兵は斯と見て弓鐵砲を力限りに射かけ撃かけ死力を盡して防ぎけれども斯まで進みし寄手の面々親討るれども子助けず主亡びても從者顧みず桐と葵の馬印を押立難なく此手を乘取たり此時水野日向守勝成が一手は同じく城乘を心掛るに越前家の軍勢川を渡るを見てスハ劣らじと同く川に乘入れば續て毛利等も押渡る水野は勝れし剛勇なれば越前勢に先越るなど急る內に終に越前勢の旗一番に立ければ殘念ながらも二番乘となりたりけり城兵此手は川を力に人數配りを爲ざりしより遂乘取られしを悔み

したりけるは助命の者にも眞の秀頼と見せ掛たるなり主計頭今日の形相天晴秀頼公の高官たるに同けれぼ死出の榮此上なしと心に悦び聽て腹十文字に掻切り戸田右衛門尉介錯す行年廿二歳なりしとかや

私しに曰く木村主計頭は其父を木村又藏と云加藤清正に仕へて武功を顯したる事清正實記に見えたる如くなりされば太閤其武勇を稱して之を清正に懇望す清正畏まつて即ち又藏に此由申聞せけるに又藏は頭を掉忠臣は二君に仕へず烈女は兩夫に見えず某しは君に事ゆることそ好ましけれ強てとあらば力に及ばず此所にて切腹仕つらんと申けるにぞ清正も是非なく此旨を言上しければ太閤然ば其子を召出さんとて即ち又五郎を召出され汝主人清正の武勇に類似べしとて名をも主計頭と賜はり大名の末座に列せられたり主計頭は斯高恩を承し身にして殊に年齢容貌迄秀頼公に同ければこそ御名代に立たりしとかや

斯て郡主馬樋口内藏助槇嶋玄蕃赤座内膳嶋川兵庫介等を始めとして諸大將諸士從卒に至るまで同じ枕に腹掻切て死しけるにぞ餘所の見る目も物哀にて流石の廣間も只陰々として其慘狀言ん方なし既に人々最期了れば戸田平右衛門正木帶刀切腹の小屋に火を懸己も火中へ飛込一時に烟となりてぞ消失たり是を見て助命の者共は走り出門に到りて敵方に斯と告ければ寄手然ばと玉造口西大手兩門を開き馬上にて乘込んとするを荒川忿に之を制し右府の御城門へ會釋もなく乘

片付倉庫へは悉皆く緘を付米穀の數を計記し使者を以て申送りけるは大坂方天運盡果今日城將秀頼切腹致しけれども城内にある下々の者に罪之無れば此者等の一命は助け給はる可し勿論城に火を掛候事は致すまじ此義聞入給はる可や若も聞入無之とならば今一度諸軍を下知して命限り戰ひを結び城を燒て討死致さん疾々お返事承まはらんと有ければ城將秀頼最期との事是武門の習是非も無事なり且又罪なき下々の助命との事聞屆く可城は故太閤の心を盡されし名城なれば火を掛る事無用たる可しと答へられしかば使者立歸り斯と注進す之に因て城中には心徐かに切腹の場所を修理次に下々の者に金銀を頒ち與へて汝等が一命は關東方へ申送り置ければ我等切腹の後は皆々城溜りに居て關東方よりの下知を受よ隨分火の元に心を付矢倉〳〵を能見回り申すべしと云渡しければ皆々金を受取涙を流し御運の末を歎きけり

第廿九　秀頼公に代つて木村切腹の事幷城中の諸士自害の事

斯て荒川熊藏町野左馬助は玉造口を固め吉田平馬赤馬伊豆守は大手を固め其日午の中刻に至つて秀頼公の御名代木村主計頭は自害の用意して正面に居直り其打扮は金小實緋緘の鎧に金の鍬形打たる冑を着し赤地錦の垂直表には金だみの佩楯へ黄錦の小手脛當して顏を美々敷化粧粟田口吉光の名刀に虎の皮の尻鞘を掛て之を帯小豆兼光の野太刀は小性衆　後に捧げいと嚴重に坐

扨も大坂の城元和元年五月八日午の半刻に落去しければ安藤對馬守に後藤庄三郎を添て城中の庫中を點撿爲しめけるに黄金二萬八千六十枚銀子二萬四千枚其外米穀數多封印付て員數等は帳面に委しく記して軍師幸村を始め後藤基次七組の番頭等の連判を据ゑ數もその如く違はず有ければ夫々監守を附られたり大御所には二疊敷にて諸大名に對面され頓て庭前に出見給ふに松の間の次に立花床飾りあり古法眼が畫ける三幅對なり中なるは壽老人左右には松と鶴なりければ手を拍せられ壽老人に松とは吉兆なり然にても斯落城繁多の中にも流石優美の設けして諸將の勞を慰むる段感ずるも餘りありとて又上の間次の間等を御覽あるに殘る方なく取繕ひ有けるに再び感賞せられつゝ風と上段を見給ふに一通の書ありければ取上開かれしに其文に曰く

秀頼殿微運に在まし力盡て落城せしかば最期を取急ぎ萬事心に任せずと雖も聊か此席に諸將を饗應の爲一瓶を飾り置候願はくは諸將御見分有て麁忽と御嘲り給はざる樣此事右府の申付に任せ執行仕つりし處斯の如くに候謹言

元和元年五月八日

斯の如く有ければ大御所新將軍にも坐ろ涙を催され操返し兩三度程讀給ひしとかや勇士の最期實に與行しくぞ覺えける然る注意は武士の第一なる事にや後の世に至ても元祿年中淺野家斷絶に及び上屋敷欠所の節彼家士退散に臨みて活花掛物等の出來ありし事皆人の知る處なり偖當城

入段慮外なりと三貫目の筒口を差付しに面々大いに駭き崩れ遁るゝ其内に門々の堅めの兵も皆々自害を爲たりけり夫より藤堂井伊の兩家玉造口西大手より乘込ば諸大名も同じく乘入來るに切腹の小屋は炎火熾んに燃上り其傍らに五百目の筒三百挺逆樣に立置有しに火移て一時に𩍆と發しければ入城の勢肝魂ひを失ひたり然ども井伊藤堂の諸勢之を鎭めて火を消しめ段々と搔わけ諸方を改むるに太閤の常に秘藏したる天下に一振の粟田口吉光の太刀有しが火炎の爲に全体欠損じてければ名を惜む大將は實に如斯なる哉と感ぜぬ者無りしとかや斯て此由大御所の方へ段々と注進に及びける程に未の刻に至りて入城せられ居殘りし者に切腹の次第を尋ありて倉庫に之有兵粮の高書等を御覽有て其所置の宜しきを感心せられける夫より多門櫓等へ兵を揚て諸手を一々取調べ固を嚴重にして千疊敷に座し給へば諸將追々入來りて賀儀を述けるにぞ大御所も將士の勞を慰められ予此千疊座敷に入る事は生ある内に叶ふ可共思はざりしが是全く各々の忠節に因所なりと殊に喜びの眉を開かれけり嗟呼哀哉さしも天下の名城たるも一朝にして敵の有となり昔日は武威世に輝きし太閤殿下の全盛に名將勇士打集ひ深殿には錦衣玉食綺羅めかしたる淀君さへ今は白骨と成て露と消ぬる哀れさは淺猿かりける事どもなり

關東勢大坂凱陣の事幷大坂城中番手固めの事

淺野但馬守　吉田大膳亮　牧野駿河守　寺澤志摩守　堀淡路守　板崎出羽守　永井右近大夫　土方掃部頭　森武藏守
藤堂和泉守　小出大和守　羽柴美作守　松倉豐後守　桑山左衞門佐　石川主殿頭　堀田上總介　稻葉伊豫守　井上左門
有馬玄蕃頭　脇坂淡路守　金森出雲守　丹羽五郎左衞門　遠藤石見守　小笠原大學介　谷出羽守　蜂須賀阿波守　一柳監物

斯て大坂の萬端濟ければ彌々凱旋となり先城中番手の面々は其まゝ差置れ其外中國九州の諸大名にも暇を賜はり夫より大御所には京都より伏見新將軍には御名代として上洛なさしめ駿府にて大御所を待受させ給ひ夫より江戸へ歸らせ給ふ事にて豫て大御所に從ふべき面々は是より上洛すべき旨にて井伊本多等を始め皆々上洛す爰に於て上下皆大御所の密に上京し給ふを感じけるとなり偖又大坂の城には是より修復を始られ凡百日を經て全く成就しければ下知有て諸將を引揚はせ城代を置せ給ふ事とは成にける既に此度の合戰に城兵の首を討取たる事其數凡二萬

の固めとしては芦田廓は片桐主膳正　山里帶廓は井伊掃部頭大手天王寺口は阿部備中守玉造口は青山伯耆守水野隼人京橋口は高木主水正として五味藤五郎には百姓町人の公事を聴しむ又九州中國の諸軍勢は城中修覆の中は在陣す可との下知にて夫々の手當も相濟萬端の內評定は新將軍と板倉內膳正のみ常に之に與かられ其餘の者誰迚知る者無りしとなり是第一には禁庭の守護を重んじ第二には途中の變を氣遣はれしに因る事とかや偖又大坂の諸浪人落延たる者共は最寄の寺院又は洛中洛外に徘徊て爰彼所にて自害する者數多なりければ大御所には頻に上洛を急がれ（大御所は落城後急に上洛せられんと爲事是大坂浪人の內忍び窺ひ害有と雖も未だ其心付ざる內こそ好らめと思ひ込れしに因事にして此等の頓才は誠に人の及ばざる處と覺へたり）且又阿部備中守に命せて凱陣の用意をせられ給ふ因て扈從の順序を立られし事井伊本多酒井榊原を始めとして左の如し

伊東修理大夫	京極若狹守	仙石兵部少輔
相馬大膳亮	六鄕兵庫頭	仙臺陸奥守
上杉彈正大弼	佐竹右京大夫	眞田河內守
眞田內記	水谷伊勢守	松平越中守
黑田筑前守	毛利大膳大夫	吉川駿河守

たれば早燒草の用意も十分に出來竹鎗鐵砲等を持出彼是人數を五六十人集め近所へは路次の警固仰付られしと申觸し手ぐすね引て待居たり斯とは夢にも知し召れず新將軍には先勢牧方を行過る處に五十目筒の玉飛來て右近將監を取卷し小性を一人打倒しければ是は如何に曲者忍ぶと見えたるぞ搜し出せと下知ある程に亂れ立て四邊を見れば赤地に六文錢の旗さら〳〵と卷ほぐし眞先に押立人數三十人餘眞田左衛門佐幸村爰に在て君を待事久しと呼つゝ鐵砲を打掛けるにぞ偖は又幸村が出たるぞと狼狽廻る其處へ此方より一齊に竹鎗を以て突て入ければ扨は野武士共と見えたるぞ踏堪へて討取小勢なるぞと聲々に呼はれ共六文錢の旗に目眩きいまだ戰はざるに諸軍は散々に崩れ立其內に鐵砲手繁く叢へ打込ければ刈たる草に火移て四邊は一面火炎となり燃上れば遁れんとする勢手足を燒れ折節北風烈かりしに火勢は彌々熾んになれば之が爲旗本の死亡夥多く斯と見るより三好兄弟は散々に切て廻り田舍馬に打乘て縱橫無盡に馳立る新將軍にも此体を御覽ぜられ前後の火の手に斯ては匆々勇々しき事ぞと氣を焦立れて見て在れしが面々は右往左往に逃延火の爲に諸大名も押隔てられ急に救ひ來らざれば今は遁れ給ふ事も叶はず川端へ出見給ふに波荒くして越す可やうも有ざる所に敵は聲々に大將を遁すな夫討取と呼はる故進退爰に谷り給ひて有ける內先手の勢火の中を走り歸りて散々相戰ふに後陣の勢も煙を凌ぎ火を除つゝ爰に來りて合戰す此隙に大久保彥左衛門兼松又六二人走り來りて新將軍を助け參

九百四十五級此內越前家へ討取數殊に多し又燒死其外の死人を合せては大凡四萬餘の戰死なりしとかや偖又關東方にも旗本より大名に至るまで小笠原父子本多等を始め諸家の勇士歩卒の死亡夥多かりければさしも繁花なる大坂の賑はひも風悲みて雨涙を催し夜陰鬼火飛人跡絶るに至り物凄き事哀れと云ふも愚にて實に前代未聞の大合戰と謂ふべきなり然ば將軍家には酒井左衛門尉同雅樂頭戸田釆女正榊原兵部大輔本多中務大輔松平丹後守戸田上總介相馬大膳介岩城但馬守南部大膳大夫同信濃守等を召連凱旋ある其道中も用心殊に嚴にして松平右近將監同じ打扮に紛かし小性衆に取卷せ其跡より將軍家打立せ給ふ眞田河內守同外記は眞先へ六文錢の旗を押立二三丁先達て道拂ひを相勤め夫より段々と近江路を經先手は既に佐多牧方迄出にけり

三好兄弟戰死の事幷新將軍牧方危難過書船の事

爰に眞田が無二の旗下たりし三好新左衛門入道淸海同弟新兵衛入道爲三兄弟兄淸海は九十歳弟爲三は八十四歳にて共に老体なりしが豫て戰死を覺悟の上眞田幸村より一計を授けられ牧方の鄕士二宮太左衛門方へ來りて謀事を言合するに二宮委細承知し腹心の鄕士を集合密に一揆を催し萬端の用意を整へ潔よく戰死して厚恩を報ぜんと待處に大坂方落城の沙汰忽地聞えければ偖は今日明日の內には大御所此處に來らる可しと草を刈て夜中見廻を爲し其草の中へ焰硝を入置

本にせよと武の具取て敵中へ投出し腹一文字に掻切返す刀に清海入道我と我手に首掻落す續て弟伊三入道腹掻切ながら最期の一首を聲高らかに

落行ば地獄の釜を踏破りあほう羅刹に事を欠さん

と詠じ了て太刀を銜へ馬より飛下刺貫かれて失たるは天晴兄弟が最期とぞ見にける倩又二宮太左衛門も亂軍に討れ敵皆々亡びければ諸軍新將軍の所在を尋けれども更に何處とも譯らず然る所に兼松又六聲を限に新將軍には樫崎村に在すぞ諸將早々馳參りて警固をせよと呼はれば前後の諸勢追々に駈付ける此戰爭に三好方は僅なる百姓勢なれども忠戰に死を極め其上火攻を用ひたれば關東の諸勢火の爲に駈立られて死討手負殊に多かりしとかや扨も新將軍には平六方にて大久保兼松の兩人に介抱せられ軈て平六を召連駿府へと出立れける夫より駿府に於て平六が功を賞せられ褒美を取すべしと有て自ら筆を執れ此度の功勞に因て褒美は望次第たるべしと認め與へられしかば平六は之を戴き恭々しく持參したれば諸臣之を見て大いに驚き何にもせよ望次第の御墨付とは餘り過分の事哉と皆々眉を顰めけれ共御墨付に疑ひもなければすべき樣なく平六其方には此度御難を救ひ奉つりたる功に因て望み次第との御墨付を拜領之有る上は何品たりとも望み次第申出すべしと申渡しければ平六私し儀は百姓の事故別に望の物之無願くは大坂より伏見迄の通船御免下されば有難しと申出けるに因て其旨言上に及びし處新將軍早速聞濟有

らせ川端を傳ひ遁行んと爲ける處に眞向の岸に樫崎村の平六と云百姓小舟に乘て此方の体を詠め居ければ兼松是こそ天の助けならんと急に此者に聲を掛其舟早く此方の岸に漕寄よと聲を限りに呼はれば平六一散に漕來り大將軍を乘參らせ大久保兼松も共に打乘主從三人向ふの岸へ着しかば大久保其者の住家は何方なるぞと問けるに平六樫崎村にて候と答ければ然らば此御方を暫時其方が家へ入參らせ御介抱申し上よと賴しに平六心よく承知し己が家に伴ひ申して何かとよく饗應けるに大御所始て人心地着せ給へ大に喜悦在ましける扨又兼松は再び彼舟に乘て元の岸に漕返し見れば諸勢入亂て戰ふ其内に火も鎭りければ愈々勇みて諸大名に下知を傳へ僅の野武士們に逃亂るゝは末代迄の恥辱なり一人も殘らず討取と勢ひ猛に呼はれば酒井本多戶田相馬の面々我も〳〵と手勢を下知し三十餘人を取込たれば敵兵勇なりと雖も素是烏合の百姓共なればー旦は不意の火攻に勝得たれ共鎗刀の法を得たる武士に何ぞ敵する事を得べけんや忽ち此處彼所に討果されて失にけり三好兄弟は元より討死の覺悟なれば頭に白髮を戴き乍ら武勇鋭く散々に突廻り兩人して敵八騎を討取猶も火花を散して戰ひけるが敵の大軍薄穗の如く突出す鎗に終に重傷を負ければ兄弟今は是迄なりと大音聲に呼はりけるは眞田左衛門佐幸村が內に無二と賴れたる三好新左衛門入道清海同新兵衛入道爲三幸村が遺謀を受て爰に關東方の大將を待處に大將の運强くして遁れ給ふ上からは今は生存へて何にかせんイザ潔よく自害を爲ぞ見て置て手

弟内記は別して軍功淺からずとて格別に賞譽有ければ伊豆守以來の武名最ど空しからずとて兩人は大いに面目を施しけり

曰く眞田伊豆守信尹は殊の外新將軍の意に適はせられ大御所にも入魂深かりしに依て太閤在世の時大御所忠臣たる本多中務大輔忠勝が娘を御養女にせられ信尹が妻と爲しむ是信尹は天下の大名たれども本多は關東の家人陪臣たるに因斯養女にして嫁せしめ給ふとなり然るに依て信尹は聟の格に取扱はれ位は從四位に昇進し信州松代上州沼田の兩城を領せり河内守信吉并びに内記信政は信尹が子にして信吉家を襲べきなるに信尹は信政を愛するに因て之を家督に定め依て四品に叙じ信州松代に居城して十萬石を領す其子伊豆守幸通同じく四品に叙し夫より代々相續して今に繁昌す信吉には別に上州沼田に於て三萬石を配當ある其後伊賀守信利の代に至り故有て家斷絕す本多忠勝が娘は將軍家の養女に立て小松の姬君と稱せり

爰に又片桐市正且元は高野山に登りて彼所に月日を送りけるに大坂落城の後召出されん迚關東より内使われ共固く辭して之を請ず只閑居を樂しみて居たりければ其子出雲守且重其頃幼年にて主膳正が方に居たるを召出され市正の本領四萬石を賜はりけれども壯年にして卒す其子源五郎幼年にして家督相續爲と雖も是亦十六歲の時疱瘡にて死去し夫より家督なくして終に家斷絕す且又主膳正は五十石にて居たりしが源五郎の家斷絕に因て主膳正を更に取立られ一萬

て通船御免と言渡されける其時新將軍には望次第とは書過たると思されしかば其意にて過書船と名を賜はりけり是後の世まで伏見を上下する船の元祖たり故に船會所を立し處を過書待と云て大川町に在り平六は通船を許されし上三百石の地面を賜はり子孫繁昌せる事世の人のよく知る所なり

第三十　眞田幸村薩州にて病死する事并評論

扨も大御所には京都の首尾も宜敷相濟夫より駿府表へ引揚られける此由駿府表へも嚮に注進有ければ國松君（駿府大納言秀長公なり）幷びに新將軍には加藤式部大輔戸田武藏守本多伯耆守等を從がへられ城外へ出迎はせ給ふ大御所には路次の支障も有せず期日の如くに駿城へ歸らせ給ひて何角との物語せられ夫より新將軍には江戸へ歸城せられたり斯て江戸表には鶴君（此時十四歳水戸家の祖と成給ふ君なり）竹千代君（三代將軍家光公なり）松平下總守福嶋左衛門大夫同備後守（備後守は大坂へ出張して有しが落城後江戸表へ注進の爲歸城せしなり）鳥居左京亮奥平美作守内藤右馬亮酒井河内守黒田甲斐守平野遠江守土井大炊頭等皆々品川迄出迎ひの爲出張し萬事滯りなく歸城せられけり是に於て諸將の面々勝軍の賀を言上し夫よりして諸將に夫々加恩等の評議あり旗本の面々功の上下に從つて加増を賜はりけり此時眞田伊豆守の嫡子河内守

べきなり斯て其年も暮明れば元和二年十月七日より幸村は以ての外に胸痛み血を吐事毎日なり是若年よりして心氣を強く勞せし故とこそ聞えけり是によつて皆々撫恤看病して大助は湯藥を自ら嘗秀頼公にも殊の外駭き給ひ今幸村萬一の事有ば我誰をか頼まんやと寢食さへも安からず在せしと云實に道理と知られけり是に依て種々醫療を盡せど病は愈々差重りて日々夜々に勞れけるにぞ今ははや養生叶ふべしとも思はれざれば自ら夫と覺悟を極め秀頼公を請じ申して遺言せらく偖も不肖某し君に軍馬の間に從ひ奉つりしより雨に浴し風に梳りしと雖も遂に宿志を成事能ず命數早旦夕に近づき今更奈何とも爲事能ざれば恐乍ら君には是迄の御心を折かれ給ず當嶋津家を談合先九州を夷らげられて其上將士と然るべき評議を遂させ給へ就ては隨分尊躰を堅固に攝養せられ天の時到るを御待候へ但し諸臣を憐み嶋津家を偏へに御頼み有るべき事は今更敢て申上るまでもなし早申上候事も是迄にて候斯く申す某しを今更御心に掛給ふべからずと涙と共に申ければ秀頼公も數行の涙にむせばれ我是迄存命たるは汝が忠心に因てなり今汝に後れては更に生たる甲斐もなし汝に別るゝこそ哀しけれと聲を放て歎き給ふに一座の面々も共に涙の袖を絞り暫時は言葉も無りけり時に幸村苦氣なる息を繼嶋津家の諸臣に向ひ申けるは某し勿〱存命叶ふべからず秀頼公の御事偏へに頼み奉つる義弘公御親子へも此旨宜敷申給はれと操返し〱申けるが又々強く苦み出して同く十一日生年四十五歳を一期として終に黄泉の旅へぞ赴

三千百石を給ひて大和國小泉を領させける主膳正は高の内二千石の分地を願ひて子の貞昌をして市正且元が苗跡を立たり是石州流の茶道の元祖なり偖も幸村同治幸の兩人は秀頼公に從ひ後藤基次長曾我部右衛門三郎盛信等と諸共六月廿一日薩州へ落行し處嶋津義弘は慇懃に待遇し城邊の井上谷と云處に土地を高くし新殿を造り本殿上殿伺候間等を金張付にし二重門番所其外役所〳〵を建並べ高石垣に練塀を建立恰も一城の如く爲して是に秀頼公を住はせ井上の御殿と名付て嶋津家の尊敬大方ならず秀頼公此所に居住し給ひて誠に蘇生爲給ふが如しとかや偖も幸村は父安房守よりして上田の籠城に苦しみ其後九度山より大坂の城に入ては數萬騎の軍師となり外には日本全國の大軍を引受内には淀殿大野等が奸曲を防ぎ心身疲れ精氣衰耗し其苦辛幾何ぞや然れ共幸村有てこそ冬の戰ひには秘計を盡して和議を整へ夏の役には城中の寡兵を以て東軍の大敵を惱し其主將をして危ふからしむる事數度にして殆ど志ざしを遂んと爲と雖も天授の盛運を承られし君の奈何とも爲可き樣なく遂に百計も爰に盡世は東雲の威に靡き奉ずるの君をして薩洋に夜半の月を望ましむるは是戰ひの罪に非ず天是をして然ら令る所以なり古へ所謂成敗を以て英雄を論ずる勿れとは蓋し是の謂ならん又曰く薩海に棹さして既に本城を退と雖も本城の敵六文錢の徽號を見る時は戰はずして先敗すとは三國に所謂死せる孔明生る仲達を奔らするなり宜なる哉祖父幸隆よりして三世の偉功を後の人三代を以て目する事實に前代未聞と謂ふ

大御所には幼年よりして合戰の中に生長し給ひ武勇謀略の聞えある信玄さへ海內第一の武將と稱美し小牧長久手の合戰に天下を掌握する秀吉公に對しても不覺を取給はぬ程の名將何ぞ此事を知り給はざらんや又彼地に落たる眞田何程密計を用るとも斯る大事腹心の外一人も洩さゞる樣には決して成難き事なり落城の時落人降參多ければ自然と知るゝは勿論なり且又幸村が影武者を用ふる事度々なる內に穴山小助に至て實の眞田とし給ふも深き思慮在れての事なり何ぞ實に知ずとせんや若も此等の事を知り給はざる程の事なれば勿々天下一統の功は成難し大御所に於て斯る油斷決して有べからず抑々昔より英雄に斯る例ある事珍らしからず義經奧州の秀衡が方へ落給ひしを鎌倉より攻給ふ時には自殺と披露して蝦夷へ落たり保元平治の合戰に鎮西八郎爲朝の落失て其行衛を知らず其外鎌倉の和田合戰に朝比奈義秀が如き擧て數へ難し然ども其保つ處の城滅亡すれば自殺討死同前となるなり況や其身の行衛を隱して跡を晦ますに其先々まで根を抑て尋るは寬仁大度の人の爲す所に非ざるなり名將智將相依時は鬼神も壯烈に泣ばかりにして秀吉公の天下を一時に興し給ふも凡慮の及ばざる所又其秀賴に亡びて家康公の之に續き給ふも尋常を以て知る事能はざるなり或人秀吉の朝鮮を伐しを以て怨を海外の無辜者にまで及ぼせしに因り一時に天下を失ひしと云けれども是等の說に至りては畢竟婦女の詢言に齊しく論ずるに足ざるなり嗟呼眞田父子忠を一圖として薄氷より危さ

きけり團欒居し面々秀頼公を始として大助長曾我部後藤等愁傷する事大方ならず斯て有べきに非ざれば大助は涙ながらに野邊の送りを營み喪に籠りて人の應對を辭し居ける處に其翌十二月に至りて初旬の頃より秀頼公フト風の心地と打伏給ひしが是又次第に重らせて醫藥の丹精を盡されけれ共其効驗更になく遂に同月十八日に行年廿四歲にして敢なく逝去せられし事悲哀なりける事どもなり嗟呼太閤秀吉公には尾州愛知郡中村の一小村より出給ひ匹夫下賤の身を以て內にしては日本の全國を從へ外にしては朝鮮明國にまで英名を轟かし給ふ其御子として斯も墓なく逝れ給ふ事誠に天命の然らしむる處とは云へ是非なき事どもなり偖も幸村卒し秀頼公逝去せられければ嶋津家にても今は早爲べき樣なく世は德川家の武威盛にして殊に中務大輔家督相續有て關東の御聟たれば軈て從三位中納言に叙任せられ松平大隅守宗久と稱し賴朝卿以來の名家連綿と繁昌せり其後大助治幸は關東の聞えを憚かり重く用られず徒爾に老死を遂しのみとかや微運の然らしむる處誰か之を哀まざらんや噫

太閤秀吉公は勃興して天下を握り御子秀頼公に及んで一時に滅す興敗の速かなる一に何ぞ斯の如きや眞田幸村は智將なり大坂城中に籠りて關東の大軍を防ぎ其主將を惱ましたる事其幾許たるを知らずと雖ども運盡きて薩州に落行たる事此書の如くなるに關東　將軍には此事を知り給はず秀頼公等全く戰死せしと思はれけるや曰く武德衆に超絕し英名海內に轟かし給ふ

日本武士鑑序

梓弓八十うぢ川やたけき武士の道は文武二筋の流一筋絶ても不レ可レ有されば君に仕ふまつるに餘力ある時は文を學べとは侍れ共文を學ぶに用有べし必らず是なりとのみも定めがたからん其物によりて其物を費すといへり誠なる哉己少しの書籍を窺ては驕慢の戈を振て主君を褊し親を侮る心高ぶるほどに亢龍の悔ある人世に多しかくいひ立れば文學は無益といふに似たりさにには非ず武道をしらんとあらば文道を學ぶべきといふ心に文武とつゞけて武より文を前にするにてしりぬ文武忠孝は車の兩輪鳥の羽翼あるがごとし孝子の人はおのづから主君に忠信其内に有孝の道にいたりて武家在家と分つ時武家には今一きざみ勝たる所有とやいはん然ども常盤の松の色に出さゝれは常に人知る事なし親の仇を報ひざるは共に

大阪を助けて義に杖り命を輕んせし事誠に末代迄人臣たる者の龜鑑と謂可なり

本書全篇の內關が原合戰より大阪の軍に及ぶまでは關が原軍記難波戰記等に委しく且眞田の與かる所なければ略したる者と知るべきなり

校訂眞田三代記第五編　大尾

と予が見ざる所は力なしやつがれが目にふれ耳に入る所を老の僻みに聞捨んもほいなくてそゞろに書留侍りけらし此中に上つ御方々の御名を無憚も記す事は遠慮たらざるに似たりといへど暫く御免を蒙りなん武のはげみを進るの謀且は其働のかくるゝを惜む故なれば爰に近年武道傳來記と名付て世に弘むるあり窺之見るに一として實なることなし猥がはしき虚妄の說のみなれば人の教になるべき物にしも非ずされば今我が記す所身の才の拙を忘れ實義を正し明めて一隅を擧のみ是を見ん人おちたる玉を拾て後世に傳へよや武のいたれる德を若輩の人にしらせ道をみがゝば瓦礫と見るも卞和が夜光出間敷にもはた非ず今天下久しく干戈を動す事なくて麟鳳も出づべき聖賢の御代にあふて四民腹鼓を打ち鼻歌を謡ひ戯る折からなれば定て武備疎なるべきとおもへど看々今爰に記せ

天を戴かずといへるは是武の一徳ならずや義の重き孝これより大なるはなし町人土民は呉竹の根ざし深きふしの中の義理に疎なる故にたまく親の仇有者も討んと思ふ心等閑なりされば町人とても其種生有には非ず親祖父は歴々たる武士世におちぶれて其子町人となれるもあれど常に武の鏡を琢ざれは心懦弱に曇る譬ば正宗貞宗が鍛も錆腐ては奈良刀の研立たるに益おこり侍るが如し武士の家に生れし人はたゆみなう此心を不﹅忘假にも虚言なく人に謙退し物毎つゝしみ深かれ親居ます時は遠く遊ばずといへるに無益の事あらそひ身を果しなば不忠不孝の科遁れはあらじ其のみならず親子兄弟其仇を含みかれをうち是を討ち修羅の眷屬となれるはあさましきに非ずや堪忍は立身のもと短慮は身を亡す大敵速に不﹅隨﹅之ば有べからず今爰にあらはす所の敵討古より記し置るも猶有べけれ

日本武士鑑目錄

奉レ討ニ眉輪王安康天皇ニ事
平貞盛將門を討事
小　矢　兒
河野通信額入道西寂を討事
平家頸渡の事
曾我兄弟夜討付兄弟宮犬房丸の事
長田庄司忠宗を誅伐の事
公曉伯父實朝卿を討事
阿新殿の事
熊王丸發心の事
長沼長介長八青柳柳之介綠介を討事
宇喜多直家嶋村觀阿彌を討事
放　下　僧

る輩は上古の勇士に勝はする共劣はあらじかゝる武道を師として此面影をうつさばうつらざらんと思ふ心に武士鑑と名付并孝子傳記を加へて二面となし人々のかゞみに立て人々の身のたしなみに見てしがなさこひねがひ書とゞめ侍るのみ

武藝兩國成田椋梨藤原富士丸陰山

難波之陰士一雪謹序

備中柴木村甚助の事
備中喜十郎の事
孝子僞切死丹訴人の事
紀州豆腐屋六左衛門の事
爲レ親盗仕事
紺屋惣太夫孝行付改ニ不孝ニ事
長岡東甫母隱居屋造作の事
矢嶋屋忠兵衛の事
和佐村源三郎の事
日備長次郎の事

望月
渡部數馬河合又五郎を討事
拓植兵左衛門父敵を討事
鈴木安兵衛弟敵を討事　前に出候鈴木外記右衛門弟敵討之事相違故改之
松枝主馬父敵討付家來働の事
松枝久左衛門兄敵を討事
大坂御堂前敵討の事
近藤源太兵衛兄敵討付坂尾夫兵衛事
宮受忠太夫反討の事
江州石部の敵討
向坂平治兵衛子敵討の事
松井三七友達敵討の事
奥平源八同苗隼人親兄弟を討事
孝行女人神明有ニ加護ニ事
今泉村五郎右衛門の事

日本武士鑑

奉レ討ニ眉輪王安康天皇ニ事

安康天皇叔父大草香の皇子を殺其妾中蒂姫を內裏に召て、うあひ淺からず中蒂姫に大草香の御子あり眉輪王といふ中蒂姫其子をいとをしみ深きにより內裏に出入を免し給ふ或時天皇姫のひざを枕として臥給ふ此時眉輪王窺來て天皇を刺ころす雄略聞召て甲冑を帶し兵を率內裏に來り給ふ眉輪王のいはく我全帝位の望に非す父のあたをむくふ斗なりとて葛城の圓の大臣の宅に逃入雄略兄の御子坂合皇子八釣皇子とておはせし是も眉輪王と同心かとうたがひ八釣皇子を斬ころし給ふ坂合皇子おそれて眉輪王と同大臣か宅に逃こもり給ふ雄略使を立て坂合皇子眉輪王を出せとせめ給へどもさすがに出し兼たるを雄略怒て大臣が宅をかこみて火を放ち燒ころし給ふとかや

平貞盛將門を討事

平將門謀叛起し常陸國に攻入伯父常陸大掾平國香を殺下總國相馬郡に都を立將門平親王と自名乘國香の子貞盛一萬九千の兵を率將門に向朝敵殊には親の敵なりとて戰功をはけみ將門を射殺

日本武士鑑目錄畢

平家頸渡の事

壽永三年二月十三日撿非違使共平家の首を請取申範賴。義經奏聞申されしは平家は朝敵とは申ながら保元に祖父爲義平治に父義朝代々の敵なれば平家の首大路を渡し會稽の耻を雪がん獄門の木にかけらるべきよし達願ひ申により行はれしとかや

曾我兄弟夜討付兄弟宮犬房丸の事

伊東入道祐親甥の工藤左衛門祐經が所領を押領せし祐經深く憤り祐親狩に出で歸る所を祐經が郎等大見小藤太八幡三郎に心を合入道を待所に入道は見へやらで惣領河津三郎馬上にて來所をねらひより思ふ矢つぼを射たりしかばしばしもたまらず眞逆に落て死にける是はこれ大見八幡が所爲なりと聞へしかば伊東九郎祐淸八十餘騎にて押寄八幡をば討捕大見は其間に落たりしを追掛生捕て則首を刎父の入道に見せし河津が後家は二人の子を連て曾我祐信に嫁ける兄の一萬九歳弟箱王七歳の時父の敵工藤左衛門をかく射殺さん物をといへば弟大事の親の敵をなとて射殺し候べきなんと恐しき所存の者共なりと祐經傳聞後の仇とならん事を恐れ賴朝卿に支しかば兄弟が繼父祐信に命せられ兄弟をかまくらに召て斬べきに定りしを東國の大名達申受て助た

親の仇を報し

小矢兒の事

法然上人稚名勢至丸美作國久米の南條稲岡の庄漆時國の子なり時國同所の源内武者定明と遺恨の事有て定明夜討に入時國を殺せし時に勢至丸いまだ九歳にして物の隙よりねらひよりて小矢を打はげて敵の眉間に射立定明を殺す其より世擧て小矢の兒と呼侍しとかや

河野通信額入道西寂を討事

治承四年の冬伊豫國河野通清平家を背源氏に志し有て道前道後の境高繩に城郭をかまへ引籠しを備後國の住人額入道鞆の浦より數千艘の兵船を調高繩の城にをしよせ通清を討捕四國をしづめんとて逗留する通清が子息通信高繩城をのがれ出安藝國に渡り奴田口より三十艘の兵船を調獵船の體にもてなし忍びて伊豫に押渡り西寂をうかゞふ折節室高砂の遊君を集め船遊びする所を推寄西寂を虜て高繩城に引往八付にかけ父の仇を報けるとなん又鋸にて嬲切に頭を挽たり共云

公曉伯父實朝卿を討事

元久元年七月に伊豆修禪寺の湯殿にて兄の賴家を實朝卿殺給ふ賴家の子善哉を鶴岡の別當尊曉か弟子となし公曉といふ承久元年正月二十七日の夜實朝鶴岡參宮の時に臨て大江廣元申ていはく束帶の下に腹卷をめさるべし實朝許容せられず義時は御劒の役たりしが俄に違例といひて文章ノ博士仲章に讓て歸る實朝神拜畢て退出の時石階の邊にて別當公曉女の形を眞似てうかゞひより刀を拔實朝の頭を討落父の仇を報と呼て又一刀にて仲章を切殺し是は義時御劒の役たる事を知て仲章にかはりたる事を不レ知故なり

阿新殿の事

後醍醐天皇御謀叛により中納言資朝卿佐渡國に配流せられしを失ひ申に定りし此事京都に聞へしかば御子息阿新殿父御の最期を見屆奉らんと中間一人召具し佐渡嶋に渡海有て守護の本間山城入道にかくと仰入られしかばいたはしく奉レ見内に入かしづきまいらせしかど父御に逢せ申さん事はかまくらの聞いかゞとて免しまいらせず終に資朝卿を失ひ奉り火葬になし御遺骨を阿新殿にまいらせし阿新殿今生の對面叶ざりし事を深憤先父御の遺骨を中間に持せ高野山奥院に

りし其後建久四年五月富士野の狩倉にて兄弟夜討に入祐經を討剰大勢に手を負せ御所中に切入所を仁田四郎忠常に兄の祐成は討れぬ弟時宗は五郎丸に生捕縄目に及びし所を祐經が一子犬房丸來て時宗が面を扇を持て打たりし此事賴朝聞召兄弟の者共はいまだ幼稚の時より親の敵討んと肺肝を碎きしと聞なんぞ今親の敵とても縄目にかゝりし者を侍の似合ざる扇にて打親の仇を報と思ふにや祐經が子には不覺の者なり召仕ふべき者に非ずとて信州下伊奈郡に遠流せられしかれが父能仕へしを捨かたふ思召との御氣色にて彼所の春近五郷を所領にくだされし郎等に棠木氏城氏付まとひ往侍し犬房丸死て塚は殿嶋に有今にいたる迄毎夜其塚燃を予も先年鳥居左京殿に誘れ信州高遠にまかりし比まのあたりに熖を見侍し犬房丸が末葉近比跡絶ぬ棠木氏は今に有城氏は近程に家斷絶しぬ祐成時宗の兄弟は富士の裾野に社を造營有て兄弟の宮と崇置し敵打輩は必詣事にて侍しに越後の上杉謙信老の家臣。直江山城守此所に責入し時神體を亂妨せし内陣には三尊彌陀前立には兄弟の木像有しを奪取今は出羽國米澤の福泉寺に侍るとかや

長田庄司忠宗誅伐の事

源義朝。都を落て尾張國知多郡野間。内海の住人長田庄司を賴まれしに無情討まいらせ首を平家の方へ出しける其後賴朝の世にいたりて親の敵なればとて悉討果されし

吉の合戰に六郎討れ候所に赤松の一門備後守と申人六郎が領地を押領仕其某を追ひ出し候と語
兵庫介あはれに思ひて正儀に告ければやがて召出し仕ひ侍し熊王丸父が七回忌の日正儀を可レ
討と内々思ひし其日に當。正儀がいはくけふ汝元服せよとて和田和泉守に髻をあげさせ烏帽
子親になし和田小二郎正寛と改吉野殿より給はりし鎧に所領を添てあたへしかば其恩を深感し
座を立大なる聲をあげて泣叫し聞其故を尋ね問ば我志しを不レ殘かたりて忽に心をひるがへし
髻切て正寛法師と名を付往生院に入て行すましけるとぞ

長沼長介長八青柳柳之介綠介を討事

甲州西郡今諏訪の長沼長右衛門用の事有て信濃に往座光寺の家來青柳。柳之介弟綠介といふ者
と不斗論を仕出し討れたりし長右衛門が子長介長八とて二人有し幼稚の時より母が。いひ聞せ
しかばいかにもして親の敵を討んと思ひ年月積兄は廿一弟は廿の春。武田の八幡に參り敵を討
せてたび給へ討得ざらましかば二度歸る間敷といふ誓紙を書て神前の杉の枝に結び付て信州に
越て諏訪墻尻のあたりに宿を取百日斗忍びて逗留する此兩人の友達に增城源八石田長藏矢崎新
九郎飯室喜藏とて有し此者共いざや兄弟の者見次申さんと打連れて信州に往尋ねあひ荒增を語
れば兄弟の者共手を打是迄の御志しは難レ忘候へ共生國甲州にてもあらば討。すます事も有な

納めよとて先へ登し其身は違例のよしを披露し晝は日終床に臥夜は敵の閨のあたりを窺ひありき給ふ或夜雨風はげしくて宿直の武士共前後も不レ知伏居たりしを幸とひそかに忍び入て見ればば入道も子息も見へやうで本間二郎とて資朝卿奉討おのこ。只一人臥居たりし是も時に取ての敵よ。かれ成共討んと思ふに燈火あきらかにて寄べきやうなかりしにあかり障子に蛾といふ虫あまたとまりしを究竟の事こそあれとて障子を少引あけ給へばしばしの程に此虫燈火を打消ぬやがて閨に入敵の太刀を奪取て思ふやうに討すまし此上は先落て見んと出られしに搆の外に大なる堀ありて其そこに竹の林の有しをさちの事なりと思ひて竹の末に登給へば向の方になびきしに安々と。とび越へ湊を志して急ぐ所に山伏行合其有樣直人ならぬをいたはりかい〴〵敷負まいらせ湊にいたり便船乞て乘せまいらせしに順風心のまゝにして越後の國に着給ひ都にのぼり後に中納言國光殿と申せしとかや

熊王丸發心の事

楠正儀と赤松太夫判官光範と攝州住吉にて戰ひ光範兄弟討れし家來宇野六郎も共に討死にせし其の子熊王丸主君の敵父の敵是非に討んと思ひ定めて童人つれて赤坂城近く往て徘徊せしを兵庫介。忠元が見て其故を尋ね問へばされば我等は光範が家來宇野六郎と申者の子にて候今度住

りかたく成て討果べきといふ長藏喜歳新九郎三人のいはく兄弟の立服尤なりさりながら源八が邪なる事いふとて打果給はゝ敵討の時の首尾十分ならぬ故と取さた有べしさもあらば無念のいたりなり是は只侍道の事なれば目安を以て信玄の御さばきにまかせよといふ此義然べしとて目安を指上對決に及石田矢崎飯室は信玄の尋ね給ふ時長沼が申に少も不ㇾ違友達の敵討に出しを助太刀の志しはたのもし武士道はかくなふては不ㇾ叶増城が心入は。うは氣にて取しめなしなんぞ命を捨助太刀に出ほどならば始終其道理を立。てこそ侍なれ其を妬むは卑興なりとて増城負しかど別義なく濟侍し其翌日信玄仰に長介長八是に有ては互に意趣殘打果す事も有べしとて義信殿に所望有て兄弟を内藤修理に預られし其後三年經て河中嶋合戰に源八殊外逃て剰傍輩の古屋惣次郎が臆病したりといひし間公事になり對決に及増城負しかば去々年は長沼兄弟に非分をいひかけ又今度非義の虚説を申重々の罪科指置がたし侍の見こらしにせよとて逆張付にせられしとかや

宇喜多直家島村觀阿彌を討事

赤松伊豫守宗景備前の天神山に有し時家臣嶋村宇喜多の何等に意恨の事有て殺害に及びし宇喜多が後家當歳子を抱て福岡に隱れ居ける其頃西大寺の住職の尼は其子が姨なりしかば連往て預

ん爰は他國の事殊に敵の方も遠からざれば討得たり共遁るゝ事かたし然ば詮なき友達の命を失はん事努々有べからずさも有ては尸屍の上の耻辱なり又萬一仕すましたり共四人の内一人にても死する事あらば我等は追腹切らでは成間敷然ば方々以不入事也各歸り給はずば此敵討思ひ止り候べしといなみければ四人の者共懐より連判の起請文を取出し定て其方左樣に申べきと思ひて如レ此かためたり男道琢者。本人の歸れといふとて戻侍らば何國にて男道立んや此助太刀に來程の者死ぬ間敷と思ふべきかは四人の内死したらましかば切腹せんといへる更に心得がたし其方共死したらば四人も腹。切べきか中々切事にてはなきぞ敵だにうち負せたらましかば互に少も搆侍らじといひ切て一味同心の約束かたかりし四五日經て諏訪の市に柳之介緣之介上下十四五人にて出たりし長介方にも十二人有し先兄弟立向名乘て切かゝる敵はかくれなき大剛の者にて兄弟も四人の助太力も手負しかど思ふ儘に敵を討すましけるに甲州の者も市場に多有て頓引取侍し長介長八家來兩人は其場にて討れし飯室が小者は甲州に歸りて死殘輩は疵養生して快氣したりし增城源八と飯室喜藏は太良義信殿。衆なりし長介長八長藏新九郎四人は被官なりしか共信玄の仰にて義信殿衆になりし此の兄弟を信玄見給ふ折節は必詞をかけ給へしを源八妬柳之介は我等が討てとらせたりしと云源八は親類廣き者なれば此事をいひ弘むるほどに上下のさたになりしされ共長介長八初のほとは何條さは申されしとおとなしくもてなしければ堪忍な

其とがめにて在京十三年經て其罪を免され知行安堵の御敎書を給はり本國に下とて近江國守山の宿。甲屋といふ者の方に泊りし此亭主は安田友治が家來なり安田が妻花若といふ子をつれ是も甲屋に宿を借しを亭主見しりて其某は御内に有し者にて候と名乘て心安とゞめ養育せし所へ望月となりしかば天の與へと悅び友治妻を五否に仕立花若に手をひかせ座敷に出し此五否は當所にはやる歌をよくうたひ候とて亭主は樽を持出て酒ををゝめ望月を醉せて安々と討しとなり

渡邊數馬河合又五郎を討事

備前池田宮内少殿御家來渡部八郎兵衛と河合又五郎は傍輩の中にては日來心安かりし此又五郎所持の刀を八郎兵衛一向に所望して後八郎兵衛件の刀を又五郎許に持せ往此頃樣て見るに常に申されし程はおはしまさず然は申受ても益なし返し參せ候又五郎がいはく不思議やそれは切者の手の裏など惡くてにやわらん不審とて拔てしばらく見る由にて試に切味受て見給へとて八郎兵衛を只一討に斬殺やがて安陪四郎五郎殿の方に立退し折節安藤治右衛門殿久世三四郎殿居合給ひ又五郎をかこひ給ぬ宮内少殿より大勢襲來て此者出し給れといへども此方へは不レ來とて取合給はず去程に使者度々に及しかばいかにも我を賴て來候此者出し候ては其某侍道立がたく候間出し申間敷と返答有しかば重ての使者に又五郎出申さずば父を成敗仕べし是にては又五

置其身は宗景に宮仕しぬ彼子年長にしたがひ虚にて皆人わざけりわらひし二八の年ひそかに姨に語しは某等虚には非ず我若利巧なるふるまひ有事觀阿彌聞侍らば後の仇を恐れ我を討むと思ふべきを氣遣ふ故かくはするなりいかにもして敵を討ん姨不ㇾ斜悦び十八の年母宗景に申て小姓に出しけるより明暮隙を窺ひ終に觀阿彌を討て數年の朦霧をはらしけるとなり

放下僧

下野國牧野左衛門と相摸國住人刀根信俊と口論の事有て左衛門討れし其が子小次郎父の敵討んと兄に出家の有しをかたらひ此まゝにては敵に近付かたからんとて放下師の形に身をなしてねらひける折節信俊は伊豆の三嶋に參詣の志し有て往所に兄弟異形の出立目をおどろかす先團扇を持弓を携し信俊此有樣を見てめづらしきふるまひやと興有事に思ひ其故を尋ねしに放下僧のいはれを念頭にかたりて舞乙て面白かりければ左衛門不ㇾ覺眠所を時分はよきぞと兄弟拔つれ是こそ牧野が子共よと名乘かけて思ひのまゝに討しとぞ

望月

信濃國安田ノ庄司友治は同國の住人望月何某に討れし妻子敵を恐て行衛なくまよひ出し望月は

失させ給ひし三日立て荒尾志摩守御老中に參り申ていはく宮内少遺言の趣其某にくだし給ふ領地召上られてなり共又五郎を討果べし假令跡目相違なく仰付させ給ふ共此事埒明ざる中には猥に御請不レ可レ仕とくれ〱申置候中陰の間には憚候へ共庄五郎（相摸守殿御事）奉レ願候依レ之達　高聞候へば忝も爲　上意願の通聞召屆させ給ふ乍レ去其者出せと假令　上意なり共出す間敷出しては男道に違旗本に疵の付事は成がたし重て御思案あるべしとの　上意にて宮内少殿御家督相違なく仰付させ給ひ　暫有て　公儀より河合又五郎といふ者に一夜の宿は借とも二夜とも留置べからず若隱置輩あらば曲事たるべしと日本國を觸させ給ふ程に三人の者も今は抱置給ふ事成がたくして又五郎浪々の身となり一所に足を止る事叶はずして忍びありくに是を見捨がたきとて叔父塚田甚左衛門又五郎妹聟櫻井半兵衛上下十一人にて南都に有由八郎兵衛弟數馬京都にて聞出しける頃は寛永十一年甲戌霜月四日其夜數馬家來又五郎宿の門の脇なる厠に入て聞ども分明ならず明る五日の夜數馬姉聟荒木又右衛門許の厠にて靜に聞居けるに座敷の脇の部屋にて稚聲して甚左衛門（十八歳）左兵衛樣も早奧に御入候明日は江戸へ早朝立給ふ間我も早寢むといふを聞て扨は又五郎名を替たると心得立歸り各はいかにおもふぞや明日江戸へ立を今夜聞出す事是佛神の冥助に叶たり討捕事は掌の内に有當地にて討べきかいや〱爰は武士のなき所なれば相果たり共誰有てかくと首尾を語傳る者も有間敷又討得たり共仔細もしらぬ町人郷民など狼藉に及なば

郎男道立間敷候今一左右承度と有し仰の通承届候勿論親を殺させまいらせては又五郎立がたく候然ば父を御助候へ又五郎を出し候べし去ながらかほど迄御にくみの又五郎疎忽には渡しがたし親を此方へ御渡し候へ又五郎親子引替に仕らんと有しかば頓て親を送りさらば又五郎出し給はれ元來の約束にては侍ども親子此世の別に候間盃をさせ申度候其間の暇を給へと有し請取に來人々其間の事は何か苦しかるべきとて親を渡暫有てもはや時うつり候又五郎出し給はれと使を立し返事に尤相渡し申べけれ共親子の歎有樣見るも餘りに不便に候まげて親子ともに此方へ下され候へ出し申事難レ成候と有し請取に來輩こは無念の事哉切入て死なんといひしかど立歸り一應申てこそとて宮内少殿に告侍しかば以外に立腹仕給ひさては出しぬかれたり堪忍なりがたし此上は踏つぶせとておびたゞしく騷動に及此事諸旗本に聞しかば知もしらぬも旗本は一所の事なりとて末よりするゑに至るとも我おとらじとはせあつまり四郎五郎殿屋舖五六町の間は錐を立所もなく取かこみし御旗本悉一味と披露有ければ宮内少殿御一門他家の大名衆迄も宮内少殿にさしつどひ給ひ評定とり〳〵なりし是を傳へ聞江戶中の僧俗男女かたつを呑で手を握此事やがて達　上聞先双方相退べし上を不レ憚狼藉奇恠なりとの　上意にて各退散せしかども猶憤深てとやせんかくやせんとの評判一決ならずして確執を含是非討果べきとの荒增なりし間　公儀より先三人の衆中に寺入仰付させ給ひて少ほど經る内に宮內少殿俄に煩はせ給ひ終に

衛門伏ながら是を見て我が刀を指出す其をおつ取て半兵衛に息もつかせず切入三人の家來共又右衛門を目にかけ働しかど元來したゝかなる又右衛門なりければ少も臆氣色もなく散々に切て廻る又五郎も又起あがり刀を振て數馬に向へば息つき居けるが立あがりにつこと笑珍しくも參り合たる物かな互に今を限の命ぞいざまいらんといひ捨て切て懸る又右衛門是を見て半兵衛を捨て又五郎に走寄たゝみかけて切伏ければ數馬やがて留目差半兵衛も深手を負殘者共悉追散しける半兵衛小者六介木刀にて又右衛門頭を後よりしたゝかに二つ三つ續て打しかど事共せず六介が後に語りしは某にも能脇指一腰たび候へ下﨟には候へども大事の御用には立候はんと常に申せしかど用に立間敷者とや思はれけん脇指を渡されざりし脇指だに候はゞ又右衛門へ切伏申べき物を口惜候とて泣けるとなん又右衛門は數馬深手なれば側に付居て介抱するうちに半兵衛は一町計退て水を乞息をつく其間に双方の中へ大勢走入手負町屋に入置し又五郎手疵頭に七ヶ所喉一ヶ所左腕切落され當座に死甚左衛門左頰さき後の月代左肩二ヶ所袖すり一ヶ所當座に死半兵衛耳の上二ヶ所左肩一ヶ所目の上一ヶ所臂二ヶ所腕一ヶ所右の人さし指切落され七日の曉死討手方數馬手疵右の大指根少左の足膕一ヶ所胸鎗疵二ヶ所又右衛門手疵右頭指藥指小指臑鎗疵少數馬家來武右衛門左の耳右腕脉所へかゝりて死又右衛門家來森孫左衛門右の指三つ手のかう少臂一ヶ所左首筋一ヶ所肩さき深手袖すり一ヶ所腕少藤堂大學頭殿より諸士大

はいなかるべし伊賀の上野は城下なれば憚有町はづれにて相待んと議定して六日のまだ東雲も明はてぬさきに奈良を出て嶋が原に泊て曉打立上野の端小田町にいたりて酒家に入酒を調て上下四人最期の盃取かはし今や〳〵と待居ける狹小路にて見れば十二三歳の童赤熊をかぶり二人來りて太刀打し一人を切伏其身は町屋の屋根に飛あがり討れし者つゞきて飛あがり何國ともなく失侍しは敵討捕べき前表を示けるにや又五郎も五日に南都を立て笠置にさしかゝり嶋が原に着明る七日爰より城下は氣遣もなし鎖衫は目に立べし殊に寒氣故膚もよからずとて脫で生膚になるこそ運の盡る所なれ前に甚左衛門中に又五郎跡に半兵衛何れも馬にて道具をつかせ弓持せ辰の上刻斗に小田町に來れる所を小路より風と出迎ひ言葉をかくる三人心得たりとて馬よりおるゝ所を又右衛門は聞ゆる大刀三尺八寸の刀今度の用に鍛はせ思ひの儘に樣たるを拔て走かゝり甚左衛門に渡合たゝきあひ甚左衛門を切伏當座に死數馬は鎗にてしばらく戰たがひに手を負し又右衛門數馬を押隔又五郎にかゝりしに又五郎眼に血入て見えず倒るとて股を横薙にせし又右衛門太刀當たると思ひ躍あがり足拍子を踏で見しに鞘にあたりて恙なし半兵衛には家來二人切結ぶ數馬家來河合武右衛門深手負て倒伏半兵衛家來三介主人に鎗を渡さんとせしかど手しげく切入しかば三介又右衛門を二三度鎗にて突しかど鞘ぬけざれば事共せず三介やがて鞘を叩割て突かゝる所を又右衛門踏込て切伏亂合て戰ひしに又右衛門が刀鍔元より折たりし武右

戰場に臨人を謀事は武士の定りたる事なり佐々木が梶原を謀し類不レ可レ勝レ計ましてや今度の事少も謀し事はなき物を不二似合一事いふ者哉と思ひながら聞ぬ顔にて打過けるに余度々いふ程に堪忍なりがたくおもひ源左衛門か小屋に仕懸けしにかへりて彌左衛門討れし美濃守殿委聞屆け給ひ甚怠て彌左衛門子士の十一二になる二人有にいかにもして此敵を討て歸れと暇を給はりしが國々所々尋ねめぐれ共元來敵を見しらず問ふべき人もなし若やと思ふを頼にて年月を送りしに兄は重病を受死にぬ弟兵左衛門力を落しかほど迄武運盡果てはすべきやうなし所詮頭を剃世を遁れ無人の菩提をとはばやと思ひ定高野山を志しのぼるに勢州桑名にゆかり有て尋ねしに其方事何國に有共知ざれば便をすべきやうなくして心ならす打過ぬ汝が敵源左衛門は稲葉伊勢守殿に有と語しかば限なく悦びいそぎ古郷に歸り老母に逢て念頃に暇乞して江戸にくだり縁を求伊勢守殿の歩行の者に出て月代をよく剃ける間新參なれ共側にてつかはれし或時月代をめされしに源左衛門有合刀の切の吟味に其某の刀は嶋原にて拓植彌左衛門を討候恐は切候といふ扨は源左衛門名を替たるよと知て其後暇を取て退日來源左衛門誓願寺前の風呂に入を兼て知ければ道に出向ひ相待所に如レ案小者一人連て來るに立向ひ其某は拓植彌左衛門が世悴なり覺たるかといひて切かゝれば心得たりと拔合切結ぶ源左衛門が小者後に廻りて走寄所を横に拂て切倒けり源左衛門は鎖衫着たりしか共終に切伏て留目刺年來の朦氣を晴し其身も薄手少々

勢差遣し給ふ又右衛門がいはく御家中の彦坂加兵衛はしるべ候逢中度と聞へしかば加兵衛來て首尾殘所なき働大學頭殿も深感じ給ふ由を祝言數馬は藤堂式部賴り又右衛門は藤堂采女預看病せられし宮内少殿御跡備前と因幡國替有て因州に相摸守殿おはしましける御方に此事聞へしかば急ぎ御渡し承候へど使者到來大學頭殿御返事に此敵討の事は天下普しれたる事に候間下にては渡がたく候其元より達　上聞給ふて渡し候へとの　上意を蒙り候はでは渡間敷候と有しかば則公儀へ願ひ給ひしに相渡し候へと忝も　上意にて數馬又右衛門兩人を送の人々藤堂玄蕃を頭中して彦坂加兵衛彼是侍三百人道中泊に外の旅人を不レ留大篝を燒不レ寢の番を所々に居大坂との嶋相摸守殿屋敷迄送屆因州よりは横川治太夫をえらみ出し迎ひ登給て恙なく因州に引取給ひぬ此治太夫は大坂陣に平子主膳を討捕し功の侍故とぞ聞へし

拓植兵左衛門父敵討の事

嶋原陣に岡部美濃守殿使者拓植彌左衛門陣小屋の隣に武藏源左衛門といふ浪人有て折々咄ける何事も申合べきと約束せし彌左衛門無比類手に合松平伊豆守殿御褒美を得たりしかば美濃守殿不レ斜悅び直書給り命全して歸れと念頃に仰下されし源左衛門此事を深く憤侍のいひかはせし詞を違へ我を出しぬきしこそ卑興なれと散々に詈彌左衛門壁越に聞て安からぬ事いふ者哉

來の憤りをはらし侍し

松枝主馬父敵討の事付家來働の事

江戸京橋の土屋五郎兵衛方荒川三郎兵衛といふ浪人有て深かくれ居たりねらふは松枝主馬といふ其母懐妊の中に父を討せければ敵を見しらず奥州白川に伯父有て養育す家來有主馬親と一所に討れし其が子江戸に來て小間物商人になり十三年京橋近きあたりに居て五郎兵衛家に敵持有と聞出し取寄て何成者ぞと立聞しに疑ひなき敵なりいかにもして見知り度思ふ折から三郎兵衛が子鼻紙袋誂しを幸哉と悦びて念を入拵わざと金物不レ打して見せけるにいみしく氣に入しかば其にて金物を打間さま〴〵の物語を仕かけ去程に何なる御浪人にてわたらせ給ふぞ宿にのみおはしまさん事氣鬱も候いなん少境町木挽町の芝居見物仕給へかしさも候はゞ某案内仕候はんなどゝすかしければされば我親に敵有廿年以前の事なり殊に相手見知間敷ければ何事かは有べけれど先は用心する故に無左とは出がたきなどゝ語所へ三郎兵衛ふと出たりしかば畏貌を能く見知て歸り愈さ白川に人を遣し其間に我は宿を替て主馬を待居て町御奉行所に出て十三年以前に御理申上し敵有所見出し候討可レ申候と斷被下人其迄は鬢あつかりしを糸鬢に剃さげ形を替延寶六年七月十三日晩方彼家の表の乘物屋が内に双六を見て居けるを見付て乘物買むと

負し伊勢守殿屋敷近かりしかば家中の輩我も〳〵とはせ來しかと美濃守殿屋敷に恙なく引取しかば美濃守殿喜悅淺からすして長屋の中を大竹にて圍中小性其々足輕など餘多番きびしくせし伊勢守殿は駿河御番にて府中におはしければ美濃守殿御供に兵左衛門召連給はん事はいかゞと家中の諸士あやしみ思ひけるにいつの間にかは登し給ひけん疾岸和田に往て用心深くて置給ひし明暦元年乙未歳とかや

鈴木安兵衛弟敵討の事

延寶元壬子年極月の比尾州名古屋御家中鈴木安兵衛弟同勘助と云有傍輩笠原藤七と云者口論いたす一座の面々取靜かへとも藤七是を意恨におもひ既に大晦日に至り勘介用有て近所へ行戌の刻前後に只一人歸り所を近邊藪影に藤七待請闇討に先太刀を討勘介拔合刀の目釘までおれ申程働といへとも手疵數ケ所蒙り討果ぬ安兵衛乍無念時節を相待何とぞ敵の有所聞出し存念を遂度と數日を送る所に延寶四年卯の春黃門公御在江戶の御供にて安兵衛罷下る然る所に藤七谷中法花寺町屋の裏屋に住するよし年來付置たる者慥に見屆候故同六月八日書置致立退直に件の居宅へおし込言葉を懸け藤七も心得大脇指を拔合候へ共切ふせ終に留をさし則扇子に此ひと遺趣有之討果申候尾張中納言殿鈴木安兵衛と書印扇子表に廣け置近邊妙雲寺へ立退それより引とり年

らば告てたうびよと賄をつかひ頼しに皆人心を合せしかば中々可レ討方便なくて月日をふりけるがよしや此儘にては本意遂かたからん近年の勞をも休め又こそ登らめとて奥州に下向する道にて下人に汝久しう付まとひ來る志しこそ淺からね然共倩思ふに今浪人の身にて何を限共なくかゝえ置ん事も成がたければ暇をとらするぞ命ながらへ又打出ん時志しあらば來れとて金などあたへしかば下人も泪を流しなごりおしみ別て江戶に歸主人誰かれは奥州にくだり二とせ三とせ經てこそ來れみづからは隙を得て歸りしと人每に語程にいつしか宗畔が方に聞え今は心やすしと用心おこたりて爰かしこ遊びに出ける或時扇が谷に住道心者の庵室に行沙汰有彼二人は法師になりて奥州にはくだらで鎌倉の中に忍びて居たりしが此事を聞て願ふ所と支度し宗畔を見知たる下人を召連し頃は延寶五年正月廿九日の夜に入叔父甥黑衣に玉だすきをかけ二尺餘りの脇指を橫たへ扇が谷の內龜か坂の下に宵より待居ける漸更て相作の輩宗畔を中に立て歸る所を下人走かゝつて宗畔が提灯を奪取て是こそ宗畔よと提灯指あぐれば久左衛門名乘かけて討けるに鎖衫を着て切れざりしかば刀を取直ししたゝかに突宗畔も劍術得たる者にて拔合二つ三つ打と見へしが堀の底にがはと落ける久左衛門つゞきて飛おりし宗畔も寢ながら働しかども終に討れけり利兵衛は宗畔同道人下人など追散し心靜に宗畔にとゞめさゝせて久左衛門深手負しを肩に掛宿に引取頓て陸奥守殿屋敷に飛脚を立て敵討候由告たりしかば急ぎ大勢をつ

いひて内に入三郎兵衛ふり返見る所を主馬名乘かけて討下人は後にまわり只一討に仕けるに倒とて主馬を薙りし太刀先足に當りしかば下人肩にひつかけ京橋のつめ迄退けるが大事の敵に留目をさゝざりしとて下人走歸り死骸を引起し二刀刺やがて立歸り主馬を肩にかけて具足町に入敵討たる者ぞ門を打て給べと呼しかばやがて門をさす柳町に入しかば敵の子共竹町の方より來て柳町の門を明よ〳〵と叩主馬は裏町にぬけ御奉行所に出只今敵討候と斷申上ければ大感し給乘物にて送られしとかや。

松枝久左衛門兄敵討の事

江戸に野田宗畔といふ醫師有身代有德にて我金銀に他の金迄取添借ける頃宗畔女色男色に金四百兩餘失ひ弟子の松枝宗順がわざなりといひ掠日來心安き浪人小屋甚兵衛山崎勘六兩人に宗順を討てたびよと賴しかば心得たりとてすかし出して深川の舟に乘出て殺害せしを船頭かひ〳〵しく二人を捕へて奉行所に出しければ宗順が惡事有により宗畔が討せたりといふに故こそあらめ浪人は江戸追放あり宗畔は恙なかりし宗順弟久左衛門叔父岩井利兵衛とて松平陸奥守殿能役者仙臺に有し此事を聞て暇を取て下人ひとり連て江戸に來敵をねらふ仍宗畔も江戸には住がたくて鎌倉に引越浪人を抱置用心きびしく近所の者にも聲高き事あらば出合て給べあやしき者あ

らんと時節を待居けるに貞享四年丁卯歳の夏太兵衛大坂にのぼりしを聞出し叔父甥いそぎ江戸に舟越九兵衛といふ者の有し其元にいひ遣しければ夜を日に次のぼりし太兵衛は實右衛門喧嘩の時右の指を切落されし故に奉公成がたくて弟の惣八に家督をゆづりて其身は目くすしになり本立と名を改めぬ三人の者共は町御奉行所に出て理を申上先道頓堀に往て尋ね芝居のあたりにて見出す藤助早討んといふ九兵衛押留爰は所惡きぞ騒動に及時女童のおやまちあらばいかゞせん先宿を見屆よとて跡をしたひしに東本願寺御堂の前花屋が方なりし翌日彼家のあたりに遠見を付て出し所を兵右衛門名乘かけて討本立心得たりと拔合切結ぶ兵右衛門切先はづれに切付たりしに本立も遁れぬ所と踏込て切兵右衛門跡へしさるとて駒よせにあたりもんどり打て倒しすはや討るゝと思ふ所に藤助後より諸臑を薙ながれて倒ながら働し兵右衛門は深手負藤助も少々手を負たゞ九兵衛は刀の柄に手をかけ跡にひかえて町中さはぎ給ふな敵討にて脇にすこしもかまひなし見物仕給へと高聲に呼若本立に助太刀あらば渡はんと心を付てはしり廻りしかどさる者なくして思ひの儘に留目刺町よりやがて公儀へ注進せしに與力同心あまた來り隣町の會所屋布に引取公義より外科本道付させ給ひ疵平愈して紀州高野領玆尊院に一族有て人あまた迎に來て引取侍し

かはされ江府に迎取疵の養生加へ平愈して親兄弟仙臺に引越今に有其後三四年經て以前宗順を切し浪人師走の末つかた正月用意に江戸に來あみ笠深くかぶり日本橋を南へをり行を宗順が召仕ひし小者其頭は足輕奉公して居たりしが往合是を見知て古主の敵遁さじと切かゝる相手も拔合扣あひしを町人中に入推とゞめ町御奉行所に出し浪人は江戸御搆の者なり何とて來れるいはれなしとて則首を刎られ足輕は志奇特なりとて主人の方へ返し給ひし

大坂御堂前敵討の事

阿州德嶋に嶋川太兵衛本部實右衛門といふ者互に在郷に出でゝ夜相撲を取元來面を包み忍びしかど誰かれとはしれる事なりしに太兵衛實右衛門に番さんじ負しかば深憤其事を不ㇾ忘次でもかな此意趣をはらさんと思ひくらしけるに貞享元年卯月末つ方雨の中に新町橋を渡るとて行合しに實右衛門か傘の滴太兵衛にかゝりたりと尤しを御免あれといへ共息まき惡口に及びしされはしづくのかゝりたればこそ手をさげて侘言はするなれと太兵衛猶も腹をすへかね堪忍ならじと刀を拔實右衛門心得たりと拔合たゝきあふに太兵衛小者實右衛門が後にまはりて切倒しける尤喧嘩の事なれ共實右衛門は從者なりさはなしなどさまぐ〵異義有しかど從者のさたに及で太兵衛は無恙實右衛門弟磯谷兵右衛門甥藤助口惜思ひ心がけしかど國方にては本意遂がたか

かに思ふぞやかうやうにては本意とげがたし先度を引時節を待んと何もを諫退侍し後に年貢納の事を聞て千度悔しとかや討手の方高橋喜兵衛小道具賣に成て村岡邊に二とせ三とせ暮し敵の案内を能く聞屆時節よしとて天和二年卯月廿九日但馬出石郡湯本庄屋喜平治が本に宿を取一日足休五月二日に出立亭主あやしみ其故を問ふされば我々は京東門跡の家來なり丹後の文珠に參り彼地の景氣聞及し見物し頓て歸り緩々と湯治せんといひて其日の晩景に村岡の一里前蒲生峠に着酒肴を調最期の盃し手負行歩不叶は敵の手にかけず刺殺べし一足も引べからずと互に堅くいひかはす丹羽十郎兵衛は大病故駕籠にて道すがら來しが次第に氣色重く見へし源太兵衛がいはく其方の氣分惡きを知ながら是迄伴ひ來る事我々の忘却故か誤是非に及㆑不然ばとて今更すべき方便もなしいかゞせん十郎兵衛がいはくかく煩てけふの全度に不㆑逢しては生甲斐もなしよく武士の冥加に盡たる者哉十年此方春秋寢をやすくせず雖㆓肺肝碎㆒病苦身を責可㆑防力つきぬ只今各我を刺ころし給へ足手まつはりなり時尅のうつり候にはやとく〳〵と涼しけに聞し源太兵衛いしくも申されたり誰も〳〵けふを限の命ぞ四手の山三途の川を手を取組で渡べき今生の余波是迄とて盃をかわし源太兵衛夫兵衛兩人十郎兵衛を引立聲を合左右より突貫死骸を乘物に押入金銀衣類押込上を繩にてからげ遙の谷底にはね落し殘六人一度にわつと泣叫し夫兵衛各を諫かく計なげく所に非ず氣を取直せ人々と地踏して空笑しいざ急げ今は心にかゝる事

近藤源太兵衛兄敵討付坂尾夫兵衛の事

江戸にて山名主殿々兒小姓坂尾造酒之介仲間の兒小姓と喧嘩仕相手を斬殺せしを横目淺田十郎兵衛池田七郎左衛門兩人の才覺にて松平和泉守殿家中近藤源太兵衛は造酒之介親より無二の知音なりしかば彼方へ忍ばせしかど長屋住居に置ん事遠慮有て源太兵衛兄宇右衛門とて浪人本鄉に有し其方へ退置しかど居住せはくて他目忍所なければ上野の珠善院を賴預置しを上野衆取持にて堀田筑前守殿兒小姓に出二年經て後造酒之介は池田淺田が謀にて落したると主殿々聞召横目役には不屆なり造酒之介を討て出し候へさもなくば兩人越度にいひ付べしとて暇を給はりし池田淺田かく浪人せし事造酒之介不ㇾ聞事はよもあらじ其を聞ぬかはにて不ㇾ出合ば曲もなし此行衛宇右衛門能しれりとかやいざ尋んと宇右衛門に逢樣々聞共不通に不ㇾ知と答し其をとかくいひつのり宇右衛門を討て山名殿に歸りしを在所但馬の村岡に遣され屋布を搆門一口にして用心きびしし源太兵衛は兄の敵討んと暇を乞て出る造酒之介是を聞て以前首尾をいひ立て暇を乞其出し給はざりしかば立退て源太兵衛に加はり上下卅五人村岡の近所妙見山に籠り夜討にせんと謀所に百姓共年貢はこぶとて大勢かなたこなたとするを遠見して扨は此事敵の方にもれてかく有にやとおやしむ所に暮に及松明手に〳〵立夥敷さはきしほどに夫兵衛造酒之介がいはく方々い

や鳥取へ引とりしと聞て歸りし五人は鳥取に六七日逗留して曉伯州米子迄送の人々騎馬十八騎足輕五十人雜兵二百五十人道中乘物米子より舟にて本國肥前の唐津迄送屆給ふ暫ほどを經て村岡より宮田夫兵衛といふ使者來て彼者共敵討候とて村岡にふみこみ女童を切殺し敵十郎兵衛堅固に居申候此上は源太兵衛に勝負をさせくだされ候へと有し返事に尤敵討とは承及候へども此方には其かまひも無之事に候今度天下御尋ねの小山田名字有之故若江戸より御尋ねの者にては非ずやと其旨趣詮義いたし候所にさゐる者にては無之由分立候故きのふ國境迄送らせて候との由にてさてやみぬ

鳥取より米子迄送の人々には福原清左衛門北村源五郎毛利惣右衛門諏訪吉左衛門佐分利源左衛門竹村孫太夫佐久間市之丞靑木官兵衛荒川半彌安田金右衛門兄弟澤治部左衛門父子山田權左衛門父子步行十人步行十八人步行目付二人足輕五十人鳥取町奉行岩田八郎左衛門より鎗一筋淸水忠兵衛より長刀一振賜之

宮受忠太夫反討の事

本多伊勢守殿兒小姓宮受齋古留屋小三郎座興の餘齋を後より扇にて打ければ齋立歸り扇を拔小三郎が面を打反是を脇より見て小三郎面をはられたりと取さた有しかば堪忍成がたくて書置し

もなしとて村岡さして行程に町口にかゝり火事よ／＼と呼しかば上下立騒其間に敵の屋敷に無二無三に驅入二手に別れ切入し敵十郎兵衛宿に居合ざるよしにて七郎左衛門と一所につぼみ鎗を持て突出凌を削て戰ひしに池田七郎左衛門長刀にて驅向ひ源太兵衛と渡し合二ッ三ッ太刀を合源太兵衛刀を捨七郎左衛門と引組池田は力勝にて近藤を捕て押へ脇指にて切けれ共鎖衫二重着しければ通らず夫兵衛是を見て走寄拜討にうちける七郎左衛門が妻女夫兵衛が後より抱付を切拂又乳母子を抱ながら取付しも切捨味方の輩誰々と聲を合ていざ退とて門に出所に大男刀を拔待居たるをおつとりこめて斬殺以上男四人女二人討て立退町にいたりて山田又市町屋に入夫兵衛是を見て聲を懸ければ又市ふりかへり見てとかくいはす戶を立たりし脛を鑓にて突れ行步不叶故敵の手にかゝらじとて自害せしと見へし其全度見屆度思ひしかどはや町はづれより二十人許追欠來返せ／＼と呼しかど此方は本望をとげて退なりと答しにいかゞおもひけん其より追さりし道にて馬を借に各朱になりしかば所の者あやしみ爰を通す事成間敷但其故あらば各別也といひしにあら／＼語りしかば其義ならば庄屋喜平治方は搆もよく候是へ落着給へとて通しぬ喜平治より湯治の侍衆近邊の在鄕侍迄ふれ送人多呼集夜もすがら密稠番を勤其內に因州鳥取へ注進せしかば騎馬二十騎足輕三十人雜兵百五十人にて迎に來鳥取へ引取翌日五日村岡より追欠來る人には淺田十郎兵衛片田作右衛門三上久馬雜兵七八十人にて湯村迄來しには

よりしたしく交時分を斗て外に置し忠太夫を密に呼寄修理宿の前なる橋の下に宵より忍ばせ置聴利貞來ていさこよとて奥にいざなひ甚兵衛が閨に入思ひの儘に討て表に出し忠太夫がいはく手鎗を忘て來若鎗にてしたりとさた有ては口おしかるべし利貞其は少も不レ苦といへ共無レ是非立歸鎗提て來それより打つれ安藝國に立退甚兵衛弟細井淺之亟從弟の早之亟敵討んと大垣を退し由藝州に聞しかば忠太夫兄にいはく我等稚て東西も不レ辨を御介抱故に敵討候今又敵の兄弟其某を討申さんと出候て同國高澤に有由遮てこれより仕かけ不意を討候はん此義尤可レ然とて從弟の庄林左右衛門を先尾州津嶋の近所神明津村に遣し手習子をとらせ内々高澤の樣子を立聞て藝州に人を遣しければ宮受忠太夫弟三十郎兩人走のばりし兄は了存弟は瀧本といふ山伏になり時をうかゞひ延寶四年丙辰歳正月十六日に淺之丞從弟の眞野源右衛門三人うちつれ節振舞に行て歸る所を待受名乘かけて二人は雜作もなく討得たりしに源右衛門つよくはたらきて三人に手を負せ散々に切まくる此時神明津村近き宇田須村の池泉院かねて賴置しかば渡しの舟を悉我方につなぎ置只一艘向ひ地に着置しかば急ぎ三人舟に乘押渡しかば深かくし置外科本道を賴み池泉院は其より四里へだてし伏屋に瀧川長門守入道半齋老の本に乘物をとばせかくといひ入指圖をうけ名古屋の瀧川彥左衛門殿に次第を告しかばいそぎ迎を遣すべしとて惣領彌市右衛門殿足輕五十人家來荒井淺右衛門足輕二十人彌市右衛門殿從弟津田權之丞殿足輕二十人同從

て立退し齋も前廉の義を小姓頭に斷て暇を乞勢州殿聞召左禮事をさやうに取成事不レ可レ然相搆て不レ苦只手前の用心して居よと有しかば其儘相勤しに伊勢守殿御暇にて江戸を立給ふ齋は道中傍輩に預給へば何も心を合用心するに相州藤澤の泊にて曉甚兵衛小三郎事齋が旅宿の戸を敲誰誰はや支度して出候といひ入しかば遲なるぞと心得取物もとりあへず脇を聞合すにも不及出行所を甚兵衛待請名乘かけて討てかゝる齋心得たりと馬より下立働しかど終に討れし若黨も二人同枕に死す甚兵衛も若黨一人討せたり齋同道の傍輩は油斷のやうになりて無レ力をのが樣々に立退待りし齋が兄山本加左衛門此事を無念に思ひ弟忠太夫に討せんと甚兵衛が有所を聞共不レ知彼方こなたとする所に甚兵衛兄細井源太左衛門とて美濃大垣に有と聞出し彼地に越商人になり居住しめて源太左衛門が下女をかたらひ妻女となし。心解て後さるにても源太左衛門殿舍弟は敵持のよしいかなる敵ぞ何國におはするぞと問ひしかばされば其人は富士の淺間別當修理といふ人の許におはするなりと語し加左衛門能く聞屆ていまた十四歳になる忠太夫を引連富士の根方に行加左衛門頭を剃利貞と名を替道心者になり方々とするに物每心得たる者にて茶湯なとすき酒宴の座につらなりては一節の謠小歌おかしくうたふほどに人の伽になりて修理所へも心安出入せしかと浪人もまた有てしれざれば思ひわづらひしに或時甚兵衛がいはく利貞我方に來られよ其某兄大垣に有其方より茶を挽てくれたりふるまはんといゐさては敵是なりと知て其

たりとて平本に五六尺斗の木の有しをおつ取扣わひ指を切落されし所へ重次郎走つき切結ふ平八郎跡より走來散々に切合三ヶ所疵を蒙二男は日の下を筋違に切られ二の太刀振上下をくゞり彌五右衛門が脇腹を突貫くり倒す平八やがて押て留目さしぬ此所は本多兵部少殿領地なりしかば膳所に注進せしに諸士餘多來て引取養生有て平愈の後兄弟に百石つゝ恩賞給遊花働奇特なりとて十人扶持給ひしとなん

向坂平治兵衛子敵討の事

向坂平治兵衛といひし浪人の子千之丞御旗本方へ兒小姓に出傍輩の中小姓と懇志にせしを主人聞給ひ兩人に暇給はりし彼男日々夜々に千之丞宿に來親彼が行跡不レ宜を見透向後來給ふなといはれ暫は來らざりしが或時親他行の留主に來しを早く歸られよ今にもわれ親の歸りなば互の爲も不レ宜といひしかば親人こそあれ其方はかくはいふ間敷事なりとて脇指を抜千之丞を突つかれて抜合ければ逃て往を追欠しかど深手にて倒死ぬ親憤りて子の敵討たる樣は有まじけれ共可レ討兄弟もなき者なり某可レ討と公義へ訴許免を蒙ねらひ伊豆の三嶋にて廻合潔く討侍し

弟南部安左衛門殿足輕二十人弓十張鐵砲十挺鎗長刀腰指の小筒十挺上下二百五十人池泉院を案內者にして名右屋の西甚目寺の觀音堂にて待揃若同士討も有べやとて相詞を定宇田須村にいたり手負三人駕籠に乘せ無ㇾ恙名古屋に引取疵の養生を加へ平愈して古鄕に趣道中迯の人大勢を添支度を聞いや〳〵其義に及侍らずとて西國順禮の出立に棒の中に鑓をしてみふりかたげ夜の明方に美濃の高須の町の中を順禮歌高々と謠て通り本國に歸りし誠に勇智兼備の人なりと皆人感じあへりし

江州石部の敵討

京都に畠山善左衛門といひし浪人子二人有惣領平八郞十八歲次男重次郞十六歲親子三人江戶に趣又常に出入せし唐無僧遊花を伴ふ兄弟子共の兵法の師彌五右衛門といふ者此事を聞其某も同道し侍らんと日來彌五右衛門儀行跡正しからざるとて善左衛門踈々しかりければ長途つれ立事叶間敷といなみしを是非に參らん泊々は別宿にあらんと無ニ和利一いふほどに無ㇾ力同道にて京を出江州石部の宿にいたり善左衛門遊花を呼宿をかられよ元來彌五右衛門は別宿におはするそといひしを彌五右衛門聞て尤京にては其約束に待しかと我等一人外にあらん事は難成也一所にあられよかほと迄其某を嫌給ふ事は無ㇾ情といひて善右衛門駕籠より出る所を拔討に切倒す遊花心得

しにあたりの家々より聲を合て出合しかば切捨にして歸る彌市左衞門は死なざりしかど深手にて言舌不レ通翌日市三郎方僉義有しかど不レ知由にて宿に歸りやがて支度して立退侍し彌市左衞門は春にいたり漸〻疵平愈し市三郎討んと山形を退しに市三郎は三年經て病死せし彌市左衞門此由を聞無レ力大坂に有し三七も立退虛無僧に成て彌市左衞門を尋ねめぐるに宿もなければ野山に伏霜雪風雨を凌かねて人家の軒にたゝずめば夜の番人に尤られ里の犬に責らるゝくるしみ何にかはたとえんされども彌市衞左門不レ討ばあらじとねらひありきしに或時道にて往合たり三七懷より一尺三寸の脇指を拔名乘かけて切合終に彌市左衞門を切伏則町御奉行石丸石見守殿に訴ければ殊外に稱美仕給ひ其方身代の事我に任せよと仰られしかど親兄弟にも逢ないらせ度由を願て本國に下向し其後江戸に出たりし彌市左衞門兄弟河原與右門衞三七をねらひ江戸本鄕御弓町にて討三七弟權三郎與右衞門を終に討ぬ與右衞門甥權三郎を討んと打出し後はいかゞなりたりけん不レ知三七他人なりといへども初の約を不レ違して彌市左衞門を討し侍の道かくなふては不レ叶其兄弟甥の身になりては無二是非一修羅の眷屬となりて討つ討れつする事此世ばかりの事にはあらじ過去にいかなる惡緣を結びけるぞや市三郎方には近きよしみの人もなきか方人せしといふ事を聞侍らず

松井三七友達敵討の事

出羽の山形松平下總守殿兒小姓頭阿倍彌市左衛門と兒小姓伴市三郎は兄弟契約淺からざりしに又伊藤太兵衛といふ兒小姓有彌市左衛門日來かなたこなたといひ渡る由市三郎傳聞不ㇾ安思ふ折節殿の用有て夜に入太兵衛許彌市左衛門行侍し翌日小姓列座の所にて市三郎に向ひ太兵衛がいはく夜前彌市左衛門用事に付來られたりと御用に參られしは何か苦かるべきとはいひしか共心中には彌市左衛門御用に事をよせて往しにや不屆なりといよ〳〵鬱憤深くなり隣の松井三七とは無二の友なりしかば此趣を語三七がいはく此義は堪忍なるべからず折を見合討べし其後彌市左衛門市三郎方へ入來し三七も出合咄居けるが親の用有とて歸り勤て閨に入しが過にし頃いひかはせし事思ひ出し密に表に出て見れば雪の夜なるに足跡も見えざれば扨はいまだ歸らざりけるよと門に立添て待居たるに玄關の戸明る音して暇乞の聲聞へしかばすはやと見居たるに彌市左衛門一町斗往し跡より市三郎走出三七やがて立寄こはいかに內々の事にや定てさる事もあらんと思ひ待居たり一所にて討んされば其志しは難ㇾ忘けれ共若其某仕損じたらん時跡を賴む也三七心得たりと領狀して宿に歸る彌市左衛門は小者を先へ戻し雪道をたどる所へ市三郎追付て日來の宿意をいひ立堪忍ならじと切かゝる彌市左衛門心得たりと拔合せしかど終に切倒され

坊主まさりとは何事ぞといひもあへず拔討にする隼人も拔合せ互に手負たる所を兵藤玄番かくれなき大力なりしかば双をかい摑膝の下に布二人の脇指を奪取隼人弟主馬次の間に有しが走より俯外に成て居內藏介が尻より股へかけて切ける所を玄番手を延て主馬を摑ゑいと投ければ三間計前に立し衾障子を打貫かなたにどうと倒て絶死仕起もあがらず其間に大勢欠隔双へ引退しに內藏介とかく堪忍ならじと委書置自害したりし元來喧嘩の事なるに內藏介亂心なりとて隼人は何のさはりもなし此僉義の間源八は玄番預旣落居し双方共に浪々の身と成によしみの輩思ひ〳〵に暇取て立退玄番も退。夏目外記奥平傳藏此兩人源八一所に退しるべあるにより大關土佐守殿方に引取給ふ又隼人弟主馬奥平左馬之丞養子にて家督をとりければ指當ては其事なかりしかど是も程經て寛文十年庚戌歳七月十三日山形を退米澤領にかゝり仙臺にまはり江戶に趣由源八に內通有し其頃源八外記傳藏桑名友之丞弟賴母彼是米澤領の阿賀湯に湯治して居たりしが此事を聞と等取物もとりあへずから尻馬に打乘。上の山指て急ける主馬は騎馬にて鐵炮火繩に火を付弓鎗を持せ大勢打圍上の山にて晝休し其より妻子と道を替て別々になるしばしの名殘や惜かりけん時を移しけるがさてありはつべき事ならねば漸に拵立出る夫婦の契是を限なりけりとは後にぞ思ひしられけるとかくせし間にほど近きたうこう村に着此所は片は在家片は沼田にて道細し爰にて源八往合馬よりおり立ち其へ來は主馬にてはなきか源八是迄出向ひたれと小

奥平源八同苗隼人親兄弟敵討の事

寛文八年戊申二月廿九日奥平美作守殿死去有て三月二日宇都宮にて弔有し其場には奥平隼人同苗源八兵藤玄番列座せし内藏助は持病發て源八は父の名代を勤し隼人がいはく何とて親父は出座非ざるや源八しかぐ\と答しかば惣じて常に學問數寄過申され病者にも有か奉公に替ての學問益なき事なりと額に皺をよせにがく\敷聞へし源八若輩なれ共聞つらく思ひ宿に歸り父に荒增を語れば不ㇾ似合ㇾ事いふ物哉是非なしと漸に拵出にしを隼人けふは持病の指出し由早快氣なり其には日來の學問增長故病氣にも有やされば今朝世悴にも其趣申されしと承るそれには今少僉義不足にや侍らん學者古今に多しなんぞ身の障とならん學問嫌る人の見る所はさてこそ有らめと少も不ㇾ可ㇾ捧學者と世上に免されし人に八十九十の長命有無學の人に短命なるもあり一歲二歲の無心の死するも有必學問にはよるべからず我奉公に替て學問すくとあるは更に心得がたし奉公よく勤度思ひ異國本朝の忠節の道理を辨知てこそとて書籍は見る事なれと不與氣にいはれて其後は互に口を閉て居たりし其日の弔に入室の看板出たりしを隼人が見て入室と讀や玄番は物いはず內藏介がいはく入室とこそよめと隼人聞て常に學問すける程あり坊主增なりと嘲哢し內藏介膝立直し其にはさま〴〵慮外をいへ共故殿の中陰殊には一家の中方々以堪忍する所に

し此時を得て夜討にせんと打立源八に走加一味同意の人々には外記傳藏玄番友之丞弟頼母細井又左衛門同加兵衛を初として金鐵の如なる勇士七十餘人與筋柳村より舟に乘風波にもまれて山川といふ所に着陸路七里を越て又舟に乘漸淺草に着岸し店屋にあがり各旅の勞を休め支度を調其より銘々に鎖衫を着し上に白木綿の袖なし羽織に墨にて丸に一文字を付一樣に出立藥松明あまた持せて隼人が居住にいそぎける道すから番所〳〵にて尤れば火消の夜廻りなりとて通市谷の淨瑠璃坂戸田七之介殿組下の居屋敷惣門に着ぬ頓て押破ん事はいと安けれ共公義の恐あり謀にて通らんとて件の松明に火を付火事よ〳〵と呼しかば番人驚木戸をひらきける所を付入案内を前に立隼人構に押寄て見れば長屋丈夫に立たりし玄蕃忿は我物なりとて大斧のわたり八九寸斗柄には樫木の一握有に筋鐵を入たりしをおつ取門柱二つ三つ打込ゑいや聲を出して押ければさしもの長屋半倒門も扉もあきければ内にも早起合て相待中に鑓を携て居者有源八目にかけ飛かゝらんとする所を後より源八を引退無二無三に切かゝる胴中を突貫其柄をたぐりて切ふせたり其より各亂入て隼人父半齋三男九兵衛輕部六左衛門家來には石下藤介山下吉兵衛藤堂彥兵衛同彥左衛門四郎右衛門作右衛門半平五郎兵衛三五郎四郎兵衛作介を初一人も不殘討捕しに本人の隼人出わはず源八大音あげていかに隼人何迄の命を惜で親兄弟家來迄討せる巳はかくれ居ぞ卑興者かな汝も與平の一家なるにかく計臆るゝ物哉と呼定て隣家の間に逃たるべしいざ

躍して勇進む主馬屹と見て若輩のやさしき志しかな去年此所は足場はろし今少跡へ歸れ美留目ケ原は屈竟の平場なり花やかに參りあはん源八わざ笑何條人の死すべき所に足場の入べき事かは只最期を嗜めといひ捨て面もふらず討てかゝる主馬も馬よりをり立透間もなく矢を放源八少も痿痺ず走より互に討合けるが主馬が運や盡たりけん片足田の中に踏こみし所をたゝみかけて討袈裟かけに切倒す源八味方の輩は過半畔を傳ひ後に廻り前後より切かゝるに大勢の者共立足もなく逃散し主馬か家老同道の人かれ是六人討とり主馬が首は桶に入何も死骸を引双往還にさらし置扨各乘來し馬士共に相構て逃事なかれ若逃たらん輩は討捨にすべきぞと初よりいひきかせければ恐わなゝきふるひ〳〵見物したるに何も馬にひた〳〵と打乘双の阿彌陀堂村に行農民手負を見て逃恐戸をて立出合されは阿彌陀堂に入衫の血をあらひ藥を付などして奈良下の宿に着此所は土岐山城守殿領地にて關所なり兼て主馬が通とならば晝夜に不レ限通して給はれと賴置し此事源八方聞し聞心得て我は奥平主馬と申者なり源八を討て薄手負たりと謀思ふ儀に支度し岩丈なる馬を撰み打乘て猿が鼻を打越仙臺領に引取其より大關佐渡守殿方に居て隼人が有所しらんとて江戸表に人を付置しに松平助左衛門殿に忍びて居よし聞へしかば或夜主馬が首に持を付て長屋より内に投入しを見て扨は敵爰に有と知ぬながくは有とげがたしとて戸田七之介殿下屋敷に忍びて居と聞出しける比は寛文十二壬子歲二月朔日大風おこりて上下躁かへる事夥

二十八足輕三十八外記傳藏同前扱家老三浦與右衛門を以て口上書の通聞屆ぬ始中終殘所なく神妙の至りなり御老中に委可ニ申達一心安存べし與右衛門長屋をあけさせて三人を移し此比の勞を休め何事によらず用事あらば心置なく申べしと懇志淺からず掃部頭殿家老の各に渡し給ふは隼人方の者家中に有か能く穿鑿すべし元來他所から忍び入族も有べし相構て油斷すべからずとて則給人十二人步行十二人二時代に晝夜の番側には茶坊主を置何もには吳服二づゝ夜服蒲團湯かた手拭鼻紙鬢道具銘々に給はり家來六人も相應に被ニ仰付一御老中の御方へは吉川隼之丞を使者にて右の趣御遣されし十五日掃部頭殿登城何の義もなく歸り給ふ翌日十六日には御老中若御老中寺社御奉行大目付衆町御奉行諸役人不レ殘登城有べし掃部頭殿訴訟の事有と觸させ給ひしかば何事の義にやとて掃部頭殿御見廻の方々には松平陸奥守殿松平右衛門佐殿松平阿波守殿伊達遠江守殿伊井伯耆守殿御旗本の歷々大書院小書院に詰給ふ掃部頭殿登城有て御老中に源八口上書を見せさせ給ひ御月番の御老中を以て被仰上候は御尋の三人の者いか計の御折檻も可レ有御事に奉存候然ども此者の事其某に御預奉願候と言上御老中の內より被仰候ば若我々共か樣の事申候共御爲を思召候はゞさは御申有間敷事に候なんぞ片切てかくは被仰候掃部頭殿いはく御爲を存義に至りては誰にか劣申べき此者共御介有と御爲に障は毛頭有間敷候歟討の事は常の義に候此者共の事藥松明を立大勢仕込たる事御城下にては上を不レ憚義不屆と思召計に候はずや其

打入て搜さんと各いや〳〵隼人が居屋敷は不ㇾ苦他所に打入ん事後難いかゞ又重ねて有所を聞出し討べしと源八を諫歸りし友之丞賴母は深手を負其外下人共手負たるは件の羽織を持籠にして助乘せ次第〳〵に退て牛込土橋の前にて腰兵粮をつかふに夜もほの〳〵と明行空に隼人馬上にて廿人計左右にしたがへ襲來各是を見てなにかは少もたまるべき鑓取合立むかへば馬よりおり立鎗を提突かゝる隼人にしたがひ來輩は跡に控て見物す隼人家來太兵衛五左衛門三人三所に別て突合し隼人いかゞしたりけん西側の大溝にがばと落入しを突つらぬき首を取殘二人も突倒されぬ跡に殘し者共此有樣を見て蜘の子ちらす樣に逃失ける其より源八を伴別〳〵に立退し少日を經て公義より源八外記傳藏三人の行方知たる者あらば申來べし一夜の宿せし輩あらばかくすべからずと町々を觸させ給ひし同十四日伊井掃部頭殿へ三人一同に出て玄關にいたり取次廣瀨主殿松井武太夫において去二日夜市谷にて敵討し三人の者共にて候御尋ねと承早速罷出べき所に遠所に立退方々に別忍び候故に心ならず延引仕候漸一日二日前に承出し申合て參候全一命助度心底にては無ㇾ之候右の趣申分仕其上にて御指圖次第に御仕置を奉ㇾ仰候とて口上書を渡す則掃掃頭殿聞屆給ひ三人の大小はいかゞ仕たるぞされば可ㇾ渡と候へ共請取不申候尤なり其儘にて内證の奥の小座敷へ通すべしと被仰膳奉行增田與八郎を召出され三人に料理念を入て出すべしと有て祐筆に仕置紙持來べし若火事等の事あらばとて源八に付人の書付騎馬十騎歩行

ず各年若なれば末たのもしく思ふと被レ仰しに何も忝とて落涙せし外記頭をあげ與右衛門方に向ひ色々御介抱冥加至極奉レ存候と申せば掃部頭殿座を立せ給ふ跡にて與右衛門大嶋遠嶋の由申渡せば畏りて其より在所親類のかた〴〵書狀を調老母の方へ鬢の髮を切て送家來六人も文を思ひ〳〵に認尾張の小笠原治部右衛門殿へ傳藏方より遣はしける其其後伊豆の御代官伊奈兵右衛門殿御舟奉行間宮造酒之丞殿來て明朝舟出し候と告申されし掃部頭殿より賜物品々八木十俵、味噌二桶、香物、鰹節五十、蠟燭三十挺、莨菪盆二通、緣取莚三枚、同六枚、編笠二がい、家具十人前、通盆十人前、同鍋二、鉢一組、箸百膳、塗抄子、鍋三、藥鑵大小、煎茶十斤、茶筅、茶碗、張枕三、同六、酒一樽、油一樽、燭臺、鐵行燈、右之外御奥方より金子、鳥目、衣類色々絹糸、物縫針とまで目錄を以渡レ之廿二日朝三人乘物流人にはためしなき大小御赦免にて家來六人乘物兩脇に付又掃部頭殿給人の子共幷歩行者乘物の左右に十二人宛同心百人乘物の前後にしたがふ騎馬十騎前後にあゆませ又外に宇都木治部左衛門吉用隼之丞跡乘上下四百五十人打圍道々の門々を指固め海賊町間宮造酒之丞殿方へ送屆掃部頭殿御奥方より出船の砌に祝ひ候へとて節分の大豆に熨斗を添て送らせ給ふ三人十四日の朝參りて廿二日の朝迄有し內終に膝を直さず湯茶も不レ呑下々は湯に入時と朝髮を結時より外には呼事なし又三つ出し浴衣の內一を三人用物毎遠慮深く立居もせず挨拶に出し人敵討の事など尋ねしにも詞すくなく中々耻しげに

ほどに不レ仕ば此敵討事かたかるべし全く上を不レ憚と申には非ず敵を可レ討謀迄なり上を恐る證據には御尋ねあれば早速罷出候此義我等身代にかけても申請覺悟に候と詞を放て被仰し時雅樂頭殿いはく是程の事に御身代御がけ候とは無二勿体一御事に候只今　御前に御披露可二申上一候とやがて達　上聞給ひ候へば忝も　上意に思召旨はありながら達而奉願候あいだ掃部頭に被レ下と思召流罪に被二仰付一との義に付掃部頭殿いはく某拜地彦根に屈竟の所候爰につかはし申度候と有し時板倉内膳正殿いはく遠國迄は道中の氣遣もなきに先今度は伊豆の大嶋に遷をき重ねて御訴訟然べし御取次は何時も仕候はん此義宜しかるべしと一決し掃部頭殿歸り給ふ表門の前には大名衆の供人に尺地もあき間なかりしかば裏門より入給ひ書院に通御見廻の御方々に對面の上にて三人を呼出し初て御逢あり各御列座にて今度は手がらせられ殊に掃部頭殿御取持武士道冥加有人なりと一同に稱美仕給ひ御盃出て掃部頭殿御盃源八頭載せし遠江守殿のいはく其方達は冥加に叶へる人なり盃戴申さんと差出て三獻かたふけ給ふ源八傳藏は無類美童にておはせしとかや掃部頭殿大名衆へ向ひ給ひ樣札の若者共に候御見知被レ下候へと被レ仰し其時の働の大に一覽有べきとし召出し見給へば三人の大小實も強働しと見へて刃は鋸の如に見へし時に掃部頭殿より黄金五枚三枚の大小六腰三人に被レ下し御一座の御大名衆も引出物に大小を被レ下御旗本衆中も思ひ〳〵にさま〳〵の引出物仕給ひ何も退散有扨又三人を召出され御懇情あさから

いたう。年ふりたる翁來て出船のあるにいかでかくは寢ぞと告給ふに目打覺し驚たどり〳〵往に程なふ渡舟の有しに笠打着ながら乘合しを關所の人見尤ざりし後に思ひ合すれば彼が孝行の志し神慮に叶ひ御加護や有つらん漸日を重箱根に往いたりぬ關守笠の書付を見て出雲國の者爰に來れる事ゆゑ可ㇾ有事ならずとて押止れば我親の江戸にゐますに逢に下侍る通してたうべよ手を摺てかき口說しかど堅く難成とて追返すにぞちからなく泣々又のぼりける峠の宿の端にいたる跡より馬にて來人笠の書付を見て出雲國にては何なる者ぞと問ひしをあふのき見れば常に鷹野に來て心安く宿をする鷹匠の鴈介也こはいかにとて馬よりをり立其故を問へばしか〳〵と語りし鴈介やがて女を伴ひ峠の宿に歸り江戸に飛脚立んと狀認所に國方より傍輩さへ。來りしをさらの事なりとて文言傳しに六兵衛にあひ荒增事語り文取出し見せければ父も思ひの外の事なりけりと驚荒井の關を女手形なふて越るのみか箱根の關にてはとゞめられつ其を容易通りたらんには江戸にて我有所も知間敷增て親子も見しらざれは往合たり迚もいかで其と名乘もすべきや方々割封を合せたるやうなる事偏に天照御神の御惠にあらずばいかでかくはあらじとたうとさ身に入て坐に泪にむせぶ豐前もあはれに不思議に思ひ頓。小田原に理つゝがなふ木挽町の屋敷に迎取親子一所に住侍しに玉のをのこをさへ安く悅び其後四とせ五とせくらしけるに國方の母あながちに歎しかは豐前も不便に物し人を指添古鄕に送り屆ぬ誠に神明も佛陀も孝行

見えし當世珍しき勇士なりと各感じ給ふ其頃の狂歌に

かたり出す淨瑠璃坂の敵打扨も其後ながされにけり

孝行女人神明有二加護一事

出雲國松江に荒木六兵衛といふ者侍し其が妻女懷妊七月にして夫江戸にくだり甲良豊前家來と成年月を送りける古郷の妻娘を産其子生長二八の年夫にそひ翌年懷胎し月重なり年越ぬ女つくぐと思ひつゞけけるは我いまだ母の胎内に有し時父江戸に趣きぬ今又自懷胎しぬ若難産にて不慮の事もあらば此世にゐます父を見ずして果なん事こそ心うけれ一度行衛を尋ねあはばやと骨髓にしみて思ひ立先伊勢太神宮に詣祈奉らんと獨。女のたゞならぬ身を持ながら我住里を迷ひ出る實や親子の道ならすはいかでかくはあらん其共しらぬ東路にさすらへ往あはれさ。いか斗心ほそからん道往。ふりに誰人やらん細に書付したる笠をくれつ又いかめしき武士の往けるか此有樣を見て汝は伴ふ人もなくて遙々詣志しいとやさしき事なりとて鳥目を多くれつ去程に一日の助の用意もせずして出けるに心苦き事には更に不逢して山田に着ぬやかて内外の御神に詣奉り父に逢せてたうびよと五體を地に投肝膽を碎て祈誓し奉り其より往に果しなき武藏野に草のゆかり求にとてくだる白須賀にいたり晝づかた尻打かけまどろみける爰に。いと。

レ有我にくれよとだにいへばとらするに氣遣しき盜をせんと誰かは思はんよしや其とてもぬすむ者あらばあらせてよ少も痛ことには非ず汝等は農をかせぐに隙なし土を拵塗程のいとまあらば休べしとて塗せざりしかゝる難レ有志し天の冥助や有けん天和元年天下巡見有し時に此五郎右衛門が日來の行跡村々里々より申上しかば忝も達高聞に同二年三月十日江府の評定所に召れてかれが持傳へし所の田地永代被下候との御を蒙しにさのみ悦べる色もなくこは思ひよらずの御事かな。かばかりの御恩を奉レ受程の事我身にとりてさら〳〵おはしまし候はずと申上しかばされば汝が其通の心故に被下ぞ有がたく可レ奉レ存とありしとかや既退出せし同月廿二日に御朱印下給ふ其文にいはく

駿河國富士郡今泉村農民五郎右衛門。父母に孝を盡し行跡宜鋪其上村中の助をなすの由國廻之輩演二說之一因レ茲其所作來田畑九拾石事永代五郎右衛門下授之條全可レ收納者一也

御朱印　天和二年三月廿二日

柴木村甚介の事

備中國淺口郡柴木村の百姓子三人有しに田地を三つに分讓し兄二人は耕作に怠年々未進する甚介は耕作よく勤し程に未進する事もなふて母も甚介に養はるゝ是が妻女又姑に孝行なること

の道には感應いちしるし

今泉五郎右衛門の事

駿河國富士郡今泉村に五郎右衛門といふ者有家有徳にて父母によく仕へ朝夕の飯より初て餘多の下人を指置自身拵拜膳して暑氣寒氣の間は殊に心づかひ深。晝夜仕へしに父は十三年母は八年以前に身まかりしされば其比百ケ日立迄は物をもいはず愁に沈かへりたゞ泣になくより外なかりし年を經も猶生る時のごとく自佛餉を調奉し又父の秘藏せし馬の有しを親の愛せしとて假にもつかふ事なく懇に飼置しに七年經て死しけるを塚に築込弔しかゝる生類の物迄も親の愛せし余波とていたはりし增て人の上はいふにや及我。住里より初て隣郷迄も貧き輩には憐みをたれ金銀八木を貸利足を僅かけて取其利足出し兼る族には利をもとらず元銀濟す償も難レ成者には上か。上に物を貸一日も立兼る。者には人を不レ選我竈にて物くはせおのれ〳〵が農を進ける此今泉に寺有爰に御代々の御位牌立せ給ひしかど幽に見へさせ給ふを住持をすゝめ我は卑き身なれば奉レ成ニ造立ニには恐あり住持の再興は不レ苦金銀は其某出すべきなりとて如レ形莊嚴し奉りしとかや彼が家の土藏落破しを土塗侍らんと下人がいへば。やをら。其には不及とよ屋根だに雨漏ずは其まゝ置べし爰はさのみ火難もなき所なり盜人も此あたりには いかで可

しは前の夜の夢に露違ふ事なし光政殿仰出されしは汝が兄共は常々惡人の聞有レ不殘申上候へ其時甚介大に恐入たる氣色にて全左候者にては無レ之候常に煩がちにして耕作も思ふやうに勤兼候といふ有樣全非分を隱とにはあらで兄が非は見えぬなるべし光政殿にも深感じ給ひ則彼が作り來れる田畠を永代給りし其文にいはく

備中國淺口郡中大嶋柴木村之内抱分田方三段畠方二段都合五段依レ感レ有ニ孝悌之行一永代與レ之素僻地之民雖レ不レ知レ有ニ孝悌之教一天質之靈妙成哉郡中皆至レ稱ニ其美一是亦天之靈妙也故以ニ天祿一賞之者也

承應三年十一月十三日　光　政　判

柴木村　甚　介

是を與られしに忝と斗いひて常の氣色にかはる事もなくして折紙をきたなき袋に入て城を出たりし兄は母に早告んと歸りける甚介は折紙の箱をさゝせてとらせんと郡奉行一日留置し又此僉義の爲に横目の山田市郎左衛門母がやうを見るに年は八十字といへども若見ゆるといへばこれば我はよき子を持何事も心にかゝる事候はねばいかなる大名高家の御上も羨きとは更に思ひ侍らずと答し末代とはいへども昔に耻ぬ孝子なり

夫にかはらず或時二人の兄。いひしは親ながらも依怙をめされて汝にはよき田地をゆづり我々にはわろき所を與られし故にいつも未進するなり向後は此方の田と替てとらん甚介がいはく誠に仰のごとく其方の田畠惡候て笑止に思ひ侍る兎も角も心のまゝにめさるべし我とは不ㇾ苦兄共猶息まき異義いふ共とらでやは置べきとて押て取替けれども少も恨心もなく其惡田を作しかど更に未進する事はなかりし兄共が田は猶かはる事なふ未進いや增ければ庄屋より兄二人を藏に押込しを甚介泣しほれて詫言し負物など漸に償し庄屋も不便の物に思ひ二人を藏より出しける此甚介が金銀借には何僞のあらんやとて手形にも不ㇾ及借ける又或年秋霖雨日をふり洪水せし事の有て田畠損亡夥かりければ國民又に歎き悲む事目もあてられず其中に甚介が田畠のみ少もいたむ事なく穗浪常よりも立增りしかば代官中村平兵衛深感じ是只ごとにあらずとて國主光政殿に訴しかばいみしき事なりとて甚介を召寄給はんと有し其夜甚介が爰に出家みたりよたり月を拜其所の後臺所とおぼしき方に上下着たる人大勢饗應のやうと見くて祝言の粧なりし夢覺て旦母にもあたりの者にも語あひしかゝる所に岡山の。郡奉行より早參り候へといひ來りしに取物もとりあへず出往けるを母も不審思ひ跡より兄に見てこよとてつかはしける其日は光政殿御精進日にて國生寺の僧四五人來れるにめづらかに孝心の者有とて僧達にも見せ給ひし光政殿にも上下をめされし家老の各列座し臺所の方に甚介をめされ物など食せて後召出され

江戸にて或浪人兄弟親を養べきたよりなくして難義に及し頃兄がいはく其某を切死丹と訴人して御褒美を得て親を安樂に育てしかなど密談す弟此義尤然べし乍去兄を訴む事は天の恐も有ぬべし只我等を訴られよと一向歎しかばよしや親の爲に捨し命可惜事かは兎も角もせよとて親には深隱し切死丹御奉行井上筑後守殿に訴しに召出し尋ね給へば其身も切死丹なりといひしにて。訴人には白銀百枚くだされ其者は則禁獄せられしに切死丹の頭はてれんが方より訴へしば今度の者は我等が宗門にては候はず其故は此方の宗門には定りたる呪ど候を此者は不存又何の手筋よりなれるぞと問へども分明ならずと申せしかば其者を召出され僉義せられしかば此上は包に所なし誠は親を養ひ兼兄と談合にて一人身を捨親を養べき謀にて公義を掠申科難遁候はれ願は親と兄が命御助候て其某一人をいかやうにも御仕置に仰付られ被下候ば生々世々難有御事に候とおながちに歎しかば頓達上聞に奇特の者なりとて町年寄樽屋藤左衛門に暫御預有て其後命助させ給ふに井上筑後守殿より金拾兩町御奉行加賀爪民部少殿より黄金一枚。囚獄司。石出帶刀金子三兩藤左衛門金三兩合力有し此義世上にかくれあらざれば彼兄弟を保科肥後守殿召出し給ひて恩賞にあづかりけるとなん

豆腐屋六左衛門の事

喜十郎の事

同國和氣郡そうこう村に喜十郎といふ者有獨の母に孝を盡事又類なしかれが姉二人有是は家富豊なれ共母。娘が方には行やらで貧喜十郎に養はれし喜十郎が妻女姑に志疎なりとて子三人有中を離別せし村の者共佗言し戻べき由一向にいへ共いやとよ母に不孝の者いかて置べきぞかれは眉目も人並には越つ今若き間にいつちへも行たるこそ其身の爲もよからめとて更に同心せざりし喜十郎は毎日柴樵て母を養父が命日には柴を寺に持往て門に捨置を住持の見て又喜十郎が所爲成べしとて禮をいへば我は不レ知といふ又同村の者など此間は薪に事闕といへば柴をもち往て捨置例の事とて禮をいへば努々不レ知とて貌を赤めつ昔時は田地も廣く持しかど賣放て少も持ざりしを代官も不便に物し田畠を取返てとらせんといへばいやとよ初賣し時は嬉しかりし今人の手に入其を便とする物を取返さん事は思ひより候はずとてかへりて佗言をせしかゝる正直光政殿聞召奇特の者也とて八木を給はりし猶重て田地を下さるべきとの荒増なりとぞ

孝子僞切死丹訴人の事

へかへす〳〵母が事いたはしく候とて泣けるかゝる所に九十間町の年寄家主町中來是を見て此者盜などつかふまつる者にてはなく候常々律義第一殊に二親に孝行又類なく候かれが盜仕候上は世上に律義なる者は有間敷候只貧の盜是非なく候と一同にいひ立しを町奉行林市郎右衛門よく〳〵聞屆汝今度の義は曲事なれ共日來の行跡宜故に御助有金をくださるゝぞ是にて母が願ひも叶又商の本にもせよ町の者共何とぞかれが成立やうにはからひ相かまへて宿を替さすべからず能くいたはれとて歸されけるとなり

紺屋惣太夫孝行付改二不孝一の事

備前岡山に紺屋の惣太夫といふ者有し世のかせぎに中頃播磨の阿古に住侍し父にはおくれ母計有し世の中憂に付て母あながちに古郷をしたひ歎きしを惣太夫夫婦悲みいざ古郷に歸りなん母がいはくされば我願は如レ之となししかはあれど加程迄零落力にすべき物とて米四合ならではなしいかにして本國迄行。至べきとさめ〴〵とこぼしける六十字に餘る老の身の目も見えず足も立ざる心の中推量に付て悲さいやまさり思ひにたへ兼道のはごくみは何とぞ成べしいと心安かれとていざないひ手を引腰を押休とては夫婦かはる〳〵門に立袖をひろげ夫婦は食ざれ共母にはあたへぬとかくして日數六日に備前の片上に往いたり爰にて一飯施人なくて三人共に

紀州岡領車坂の豆腐屋六左衛門親清藏は古來稀なると云年にも五つ越て中風を煩言舌さたかならず行歩叶はざりし日來まみにありきし者なれば定て近あたりへも出度心も可レ有とて家業を仕廻ては親を負て野に出れば妻女は蒲団莚を持行其上に親をおらしめふところ兩袖に人形をあまた入行是を廻して慰むるに退屈の氣色見ゆれば又人形を取替機嫌を計て宿に歸る妻女が親夫婦有其方へもあゆみを運孝を盡せし此事黄門公聞召奇特の者なりとて作り來れる田地高六七石の所其身一代可レ被レ下由貞享二年乙丑歳極月十一日に仰出されしとなん

爲レ親盗仕の事

尾州名古屋堀河。鹽町何某といふ者の下々の部屋に晝盗人入しかど物も不レ取して出行を人々追欠る折節町目付往かゝり搦て奉行所に連行盗人は山口九十間町の者なり父はたばこをきざみ母は其某養候此間母限に煩候を難二見離一付添看病仕候程に僅の本手なく成候母の好物候へ共無力打過候せめて一色願叶度事と思ひあはれなる人の方に入下々の布小一つ此風呂布につゝみ思案いたし候に故もなき人の物取て親の願ひ叶たりとても何までか存命所詮身の拙は過去の宿執にてそあれ非義なるふるまひはせまじと思ひ返し如レ本布小を棹にかけ置出候所を如レ此面縛に及候母が命終候まで其某が命助置くだされ候へ母が死期にいたり何なる罪科にも行はせ給

なりとて母には紙衣を與嫁に布子着せよといへば嫁畏り御悉し左も候はゞ先姑の一度めされて後に給りて着候はんとて姑に着せ侍し上代には有もこそせめ末代には又有間敷孝行なり又隣郷に親に不孝第一の者有しを庄屋より呼寄惣太夫が孝行なる行跡を委いひきかせしかば彼者横手を打かゝる事承候に付て某は日來不孝に候誠に耻かしき御事に候向後堅く嗜申べしと泪を流し後悔せし十日斗經て彼が親庄屋が本に來て此間世悴が孝行なる事中々申盡し難く候とて悦びし一人の善故に惡人も心を飜ける古語に其人をしらんとあらば其友を見よといへり朱に交れば赤くなるといふ世の諺も誠なるかな若子もてらん人は心すべき事に侍る爰に阿州の山家の者親を斧にて伐殺せしを搦て德嶋に引連來て仕置所にて僉議しければ彼者のいはく各は心得がたき事宣ふ物かな他人の親の頭を討わりたらばこそ科にも成べけれ我等親の頭切割候事各の何の痛か候べき無體なると仰らるゝと申せし誠に主君に忠をなし親に孝をなすといふ事しらね不レ及二是非一世間の親愛憐にまよひ何事も我子のいふ儘にうかうかと育により年長て我儘にて不忠不孝世人に不禮をなす是しかしながら其身一人の科にあらず稚き時親祖父の育やう道にそむく故也以前の寵愛かへりて或は勘當或首を切あさましきには。非ずや子共のかはゆくば法をよくおしへそだてよ

飢ては福岡村の實經寺に母を負往食を乞にはや母疲て絶入しを夫婦跡枕に居て呼生介抱すれども心ばかりにて泣より外の事なし住持走り出其故を尋ね聞彼が孝心なるを深感じ粥などあたへさま〳〵にいたはり藥を用ひしかば人心地して我は岡山の紺屋なるよし語る扨は同國の者一入不便なりとて一間なる所を補理雜炊やうの物まうけ養ひ何とぞ染物させ度とて貧僧のかひ〴〵しく銀十二三匁とゝのへ道具もなかりしを借集そこらの人をかたらひ染物させけれど中々に阿波の鳴門の浪風は物の數ならで世の渡り苦しく朝け夕けも寺より夫婦は呼て食せ母が方へに持せおくりけるに煖なる内にとて夫婦かはる〴〵袂の陰にしのべて往漸々寒夜に至ては筵薦など重て寢にも母が上に着せ置母目を覺してはなどかうやうにはするぞ我は年老ぬれば死するとても惜むべき命かはふたりは若き身なれば命全して一度人共いはれよとて其むしろを着ざる程に夫婦かしこまり着よしゝて母が寢入を待て又着せ置二人は寒風にあたりて居れ共痛む氣色もなき心の中こそ有がたけれ此事所の代官西村源五郎傳聞不便なりとて八木一俵とらせしを大に悅び其まゝ木綿を調染て母にめせといへば泪をこぼし夫婦の志しいつの世にかは忘べき常にもいふごとく自は宿にのみ居侍れば不苦嫁の事は外へも出寺へも往に餘にあさましく肌もあらはれ風も當りなんに着よといふ嫁がいはく仰はさる事なれ共我は若身にて痛事侍らず是非にめされ候へとて互に讓合て不着事十日斗も過しを又源五郎かへり聞いよ〳〵憐に樣なき者共

しといひ又或人は道往ふりに辻切の刃にかゝり露の命を草葉の陰に落したり共いふ何を聞に付ても安からぬ事やと兄弟は秋の虫の音をのみ泣ける弟權平殊に歎きをこり積て誰が爲に命を惜今迄長き月日を送りけるぞや親の行衛尋ねあはずば二度古郷に歸る間布物をと思ひ定寛文七年丁未歳二月二日母と兄とにかたりていはく我はいまだ東西も辨ざる昔父東に趣給ひしより此方風の便も聞侍らざれば心憂事何にかはたとへん誠に生としいける類。すら。親子の情は知ぞかし推て況於二人倫一をや我々稚時は無レ力今昔に餘てかく等閑に過む事可レ有ことかは我等若他國に引離てあらんには親は定て捨は置給はしかく遠國波濤を凌身を捨給へる事も其と我とを世にあらせ度との憐の心よりかく成果給ひし親の思ふやうに子はなき物といふ事誠なる哉我は河津とやらんに尋ね往ばやとかき口說し母は泪にむせて物いはず兄は打しをれて大息をつきよくこそ思ひよりたれ日來其某もさ思ひしかど自往ては跡にて母を養ふ便なければそゞろにうれしからぬ年月を送りし午去來年迄待侍るべし其某往なん其時汝は跡に殘て母の爲に世のかせきせよ弟泪を押へ來年とは眞に心得すけふ迄尋ねざる事を扨は遅し其思はれぬにや人の命は賴がたし其迄の間に親の身まかり給はゞ尋ねても何の益かあらんさ有時は千度百度悔とも甲斐なからん又其も我も親に先立間敷にも。はた非ずさもあらん時は誰かは親を尋ねんと理を盡して泣々聞し所に何某といふ人など。立あひかはゆくも思ひよりたる物哉いつにてもあれ出往。

長岡東甫母隱居屋造作の事

京五條松原通に長岡東甫といふ人侍し親は伊勢の北畠殿の家來にて信長公一戰の時討死せし東甫十三歲にてかいぐ〳〵敷母と姉とを引連忍びて都に登ゆかりの人を賴て住居しける老母に孝行なる行跡數々聞にしかど昔の事にて其品忘にき爰に一隅を擧にて萬の志し推量ぬべし先家を作るに老母の部屋とて屋布の眞中に立て其より鳥の翼の如に座布も居間も作り付部屋には大なる米櫃を居八木を詰置寺參り錢とて靑銅一貫文つかはし置寺參り友達の姥共來れば部屋にて心靜に物食せなとして遊ぶやうに拵へ東甫妻女にいひふくめ部屋の八木と錢とを折〳〵からせてそれを返すといひては櫃に八木を詰錢も一貫にたして置程に老母一生八木も錢もいか程つかひしやらんしられぬやうにとの謀にて侍し

矢島屋忠兵衛事

阿州板郡五條に八郞右衛門といふ若子共二人有兄は十八弟は十二の年父世渡。たつきに付て東の方に往て一とせ二とせは伊豆の河津に有と告越けるそれより十とせ餘りたつきもしらぬ山中に有やらん非さるやらん覺束なく過侍しに或人其が父は武藏の江戸の町屋の門に立袖をひろげ

おしくもはる〴〵くだり給ふ物哉是より河津の道は八牧山とて難所有木立繁て晝も物のおやさだかならず先けふは伊村といふ迄往てよ道はかくこそあれとまめやかに敎しまゝにしらぬ山路を辿〳〵往心の中こそあやしけれかゝる所に人餘多打連て往是ぞよき道しるべとうれしく覺て頓追付伊村へは今何程に候と問へば伊村にては誰の方に往ぞいや其某は四國の者にて候をさなき頃父此國の河津に下向して有と斗承其を尋ねてまかるなりと答し人石木ならねば一同に手を打撫々もやさしき志しかなと感じ然ば宿有間敷其なるは伊村の名主殿にておはするに宿を賴めといはれてうれしさ無限一夜の宿をと侘しかばいかにも安事ぞ來れとていざなひ行樣々いたはり長途の疲一日二日休よなどいとむつまじく物しけれど片時も早親に逢まほしきよし一向に聞えしかばさもあらば八牧山の案内しらでは往かたからん道しるべの人なくてはとて村のありきに明日泊杣に往者や有と觸させければ杣二人來我々泊杣にまいり候然ども峠より彼方へは往侍らず不知案内の人を推放てはやりがたしいかゞ仕ふまつり候はん名主質にもと思へる氣色にて暫し思案の體に見えし權平がいはくいや峠迄の道しるべし給はゞ其より先は又人も通らぬべし間々往かんに何の苦き事か候べき是非に其迄連させ給へとわりなふ賴てし明日ははや親に逢べき物をと獨笑して明るを待心の中春の夜ながら秋の夜よりも長く覺て漸明がたより杣に伴はれ足引の山路にかゝるに山伏と俗と打連て往に杣人かたらひよれば我々は河津に往なりと

きは。の余波は同しかるべし時不レ待レ人といへり片時も急げといさめられし兄も實もとや思ひけん。心解しかは。やがて首途してまだしらぬ旅の空におもひ立てそあはれなれ里の海士鳴門の浪路を分難波江のみをつくしてもあはんとあらゆる神佛に願立けふと過あすと過さゞ浪や近江の水口の宿近き所にて其かたちおそろしげなる男跡先に往侍しが男がいはく其には何國よりいづくにゆく權平思ふやう是は海道に有と聞し追剝切剝の類にやあらん隱ては中〳〵悪かりなんとありの儘にかたりしかばさしも恐げなる荒夷泪を落しあなあはれや親となり子と成道はかくてそあらめいざとよ我は江戸に往者なり伊豆迄は某送り届なん心安かれといといたうあはれがり朝夕の旅籠の賄賂迄此男償て伴往程に早晩三嶋の宿に着しかば物などしたゝめさてしも此間は不思儀の縁にあひ候に別候事のかなしさよ又何の世にめぐり逢べきぞとてそゞろに鼻をかめば男も目を赤めかいつくり世に奉公の身ほどつらき事はあらじ其の親にあはん迄は何國迄も伴てこそはいならめ心に任ぬ口惜さよ我は松平下野守殿の足輕竹内金五左衛門といふにこそあれ今度もし親に不レ逢して古郷に歸りがたくば我を尋ねて來れよさもあらば組の頭に申て仲間に入なんづ是式にはあなれど志迄なりとて鳥目取出し與しあな思ひよらずの御心づかひや此間の御厚恩こそ返々も有がたけれといたう。いなみけれどさないひそ我に勢あらば何とぞ仕ふまつりとらせん物をと懇に物して袂をしぼりあひて別にけり茶屋此有様を見ていと

下向せんといふを各留め給へるも一理なきにはあらねど倩思ふにかゝる孝行の志しを惠み給はぬ佛神やは有然ば道にて何條事かあらん下らんと思はゞ江戸鐵砲津河津問屋久五郎本に委いひつかはしなん我舟明日出すに乘て行べしといさめられしに力を得づ住持を初め誰かれも此義にをれて今は一向に余波惜てし人の情を賴にてはる〳〵遠き陸奥に思ひ立こそあはれなれ伊豆の海や沖小嶋なぞ妻手に見なし風も靜に吹送り鐵炮津に打あかり久五郎許いたり文共取出て渡し細々と語ればあるじより人を添仙臺宿小兵衛許往し奥州の便あらば此者下してたうびよあるし聞て奥州の便急にはあらじ暫待とてむなしく日を送其間に古郷に文つかはす伊豆國にも跡をとゞめず今は奥州石の卷といふ所におはすると聞て其所にくだる也命全候はゞ再會其期も有べしと泪と共に書とゞめ便を求て送ける二日三日經て又小兵衛許に往てとやせましかくやせましと打詫しあるじのいはく久五郎を引取て此方に來へし急便なぞのあらん時其迄人をしていはん事も成かたからんよき便のあらん迄は其某養置んつ心安思ふべしといとたのもしく聞へしかゝる所に二階より人をりて何といふぞ其八郎右衛門年の程は男ふりはなぞ懇に尋ねやおら其人我は知たるぞや去年石の卷の山口甚兵衛といふ人の本にて逢たりし今に別義はあらじ心安く思べし其志し余まりにあはれなるにけふよりして我等養はん往て逢はむと思はゞ我舟頓て石卷に往ぞ乘てくだれよとまめやかに物せし嬉しさかぎりなく是は偏へに佛神の御加護

答し其こそさちの事なれ此人を河津迄送り屆てたうびよと懇に頼て其より杣人は暇乞て別にけり誠に三嶋の宿がいひけんやうに山路六里が間晝ながら木立の陰深ておぼろ月夜を辿にてとならず辛して麓にくだりて河津の方を見やれば我親の居といふ不動院はあれなりと敎しうれしと無レ限飛立心地して漸寺にかゝぐり付案内して内に入は何國より來れるぞ我は四國阿波よりまかり候八郎右衛門に逢まいらせ度といへば住持出合て何阿波の者とにや先草鞋ぬけ脚半はづせさて其には八郎右衛門が爲には何なる者ぞされば某は世悴にて候年久敷音信も絶候へばあまりに心うき事に思ひ尋ね來候とあるじの僧とかくをいはず泪をはら〳〵と流す扨は父無レ墓なりけるよと胸うち騒袖をかほにあてゝむせかへりし漸有て住持のいはく其が父は此所をさりて今は陸奥の石の巻といふ所に有とかたられし然らはいまだ此世に有ぞと少心もはるけ扨しも其石の巻とかやは是より道の矩何程か候されば慥には我も不レ知凡百五十里も其餘も有るらん四國より是迄來れるとはかはりて奥方の道は獨旅など心の儘には難レ成只依レ之本國に歸り母によく仕へよや我かたより母兄が本へは委文にていひやらんづなどさま〳〵なさけ深く聞へし事の身に入てうれしさやるかたなくそゞろに廿日餘逗留せし猶奥州にくだるべきと打詫し日毎に里人さしつとひ留られし或朝人來て阿波より親を尋ねて來れる者はいづれぞや我は江戸よりきのふ歸りて此事を聞つ世の中の子といふ者にかゝる志しは知せてしかな彼が奥州に

むなしく鳥が鳴東路の果し迄はるゞとくだりしも又かく成果情なの身の程や此末とてもたのまれずと親をかこち身を恨し有様見る人間人泪を流さざるはなかりしかゝる所に甚兵衛が惣領枕がみに立其には道の矩を聞ておどろきしにやしらでは理なり奥方は六丁を一里とする故上方道十二三里ならではなきぞわすは其所へ送届て逢すべきぞ心安思へといと情深く聞て少泪もとゞまりし漸有てあるじのいふ其が父に隙を出しける事次に語なん其某が二男に家督を分譲其後見してくれよさもあらば親に等養ふべし老後の頼となせかしといひしを思ひもよらずといひ放ちける人がらを見て頼をさりとはたのもしからずと心に隔出來ての事ぞしかはあれとかれが心のかはらざるは我等。船關東につかはする時湊にて類船餘多破損せし其某が舟は恙なかりし船の艫は何の辨もあらざりしに汝が父委文認て飛脚に越けるにて荒増を知人安かりし是を思へば。後見をいなみしも若者の仕損たらん時は頼れし詮もなしと彼が實義有によりての故なるべし其これ今に忘がたければ全恨の殘事に非ずしかれば二とせ三とせ爰にてかせぐはどならば國本に歸る便になる。きはの。なりはひはあらんづ金銀は我貸なん夢々疎略はあらじといとむつましく物せられし明る旦になれば水主二人に舟を押せて送られしこぶしといふ湊に至て尋れば阿波屋勘左衛門舟といふに乗て日和待居るぞ其を呼と敎へしそれのとく聲のかぎりよびしかばはし舟指來て本舟に乗移れば人々いかに八郎右衛門其の子の尋ね來れるはと聲ゞによ

にやと有がたく思ひ其の舟の出往に乗りそれより樋口關宿などいふ所ろを經て鹿嶋を弓手に見なし常陸海銚子か口とかやにて日和待して纜をとき舟走らしけるに思ひの外に海上は雪の高山にひとしく浪蓼々として雲霧朦々たり風枝を折り東西更らに辨ざりし水主楫取十方にくれていかゞせんと周章さはぐ事不レ斜此の時は海底に沈む心地して肝を冷し魚の腹に葬むられん事の心憂さ一度親にあはせ給ひて後はいか計の憂目にあふ共可レ惜命かはと大小の神祇に奉ニ祈誓一船長がいはく其には親に孝有人なり神明納受なくてやは有べき急御鬮を揚よ東西を失たりとふるひ〳〵聞へて漸く頭をもたげ潮にてうがい手水して洗米を捧天神地祇を拜御鬮をとれば只此楫にて走べしとをりさせ給ふ各力を得て楫取合帆を二三枚引て走に水主共舟端をとらへてえもいへぬ事をしちらしおめき喚され共楫長えいやらで今ははや何ほどか來つらんと思ふに風も漸なぎ霜も晴て金花山も遙の跡に見へつ方角は違ながら今更楫も直しがたくてはる〳〵と廻りしかど無レ恙事を皆人悦ぶ誠危命を遁衣河の裾干引の石の巻に着しかば頓てかけ上山口甚兵衛を尋ねて八郎右衛門に逢まいらせ度といふ何國より來ぞ四國より世悴まいりたりといふあるじ聞てあな不便や汝が父は子細有て近曾此家を出て關東に趣し今居所は爰より七八十里有と聞しよりひしと胸ふたがり手足痿其儘其に倒伏只泣になきうらめしや世には佛神ましまさぬかや心づよくもあはさせ給はぬ物かな自國を出しより此方そこ共しらぬ伊豆のお山に分入しも

をせし程に日傭の輩常々の志しを申達しければ奉行深く感じ黄門公に申上しかば奇特の者なりとて和佐村に有し久米武兵衛が關所屋布幷此家に付し田畠山共にくだされし其狀にいはく

數年盡ニ親孝一爲レ勝者故叶ニ天命一達ニ御耳一候所奇特成義被思召候別紙の通の仰付候難レ有奉レ存と御申聞可有之候恐惶謹言

小倉惣兵衛

天和三年癸亥歳六月二日　玉井八太夫

田屋團右衛門殿

大須賀九郎右衛門殿

日傭長次郎の事

泉州境の日傭の長次郎父はなくて繼母有病身にて足も立ざりしかば二便をも長次郎取し朝け夕けも拵てすゝめし又本願寺門徒にて朝時に參り度といへば負て御堂に連往我は歸り雇れし業をかせぎて漸勤のすむべき時をかゝなへては迎に往負て歸る世には繼母繼子とてむつましからざるためしにいふなるに奇特の者なりと早晩政所御奉行所に聞給ふて元祿六癸亥歳に召出され夷

ばひしかど更に誠共思ふ心なく高枕して起もあがらざりしを各手を引立て連出し一目見て七兵衛が何として來ぞやいや我は權平にておはするといひもあへず親子手と手を取是は〳〵といふ程こそあれ夢か現かとて額をさし合て泣より外の事なかりし乘合の輩も友舟の人もさしつどひ實道理也あはれなりとて諸共によゝと泣て其日をくらしけるに類船より酒肴など餘多賜れ夜と共に酒呑うたひて明しけるに久敷しけたる空順風にかゝりて心の儘に船走らし關東路にあがり步より親の手を引日數を經て古鄕に歸り今は德嶋佐古町に矢嶋屋忠兵衛とて家富て親子一所に住侍し

源三郎の事

紀州名草郡和佐村の源三郎は十四歲より親に孝を盡し志し深き者にて日傭に出て田の草を取にも晝休とて餘人は寢つ起つすめれど源三郎は其間に宿に歸り親にあふて其儘かへりて農業をつとめし後には人皆これを知ていかに源三郎親にあふてこよ其間は我々勤てとらせんなどいひてかはゆがりしに親も限有て身まかりしに極熱の比は墓にまいり定て暑候はんと生時の如いひては扇をひらきてあふぎ水を灌いたりて寒氣甚しき時は寒く候はんとて莚薦を多重ねて覆し或時在所より一里計隔し所に公用の普請有しに源三郎も出て如レ例晝休に歸りしを奉行見て辛僉議

明治三十一年一月十八日印刷
明治三十一年一月廿一日發行
明治三十五年九月十　日五版發行

眞田三代記
定價金六拾錢

版權所有

編輯兼發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎

印刷者　東京市本郷區丸山福山町六番地　水谷景長

印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工場

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

嶋にて茶屋株をくだされし是を聞傳輩我も〳〵と志しをはこびしに茶屋株十年を金子三十両に借のみか彼是の賄を合田畠五六段求耕作せしに折にふれては政所へめされ金子或は布小やうの物賜給ふとや誠に上聖賢の敎をほどこし給へは下萬民仁の道を行ありがたき今此御代にあひ奉るには非ずや

日本武士鑑　畢

◉第拾九編 甲越軍記

◉第貳拾編 （通俗呉越軍記 通俗漢楚軍談）

◉第廿壹編 楠廷尉秘鑑

◉第廿貳編 風来山人傑作集

◉第貳拾三編 第貳拾四編 西鶴全集（發賣禁止）

◉第貳拾五編 第貳拾六編 滑稽名作集

◉第貳拾七編 第貳拾八編 其磧自笑傑作集

◉第貳拾九編 第卅四編 人情本傑作集

◉第三拾編 氣質全集

◉第卅壹編 第卅參編 珍本全集

◉第卅五編 赤穂復讐全集

◉第卅六編 第卅七編 水滸傳

◉第卅八編 忠臣藏淨瑠璃集

◉第卅九編 第四拾壹編 四大奇書

◉第四拾編 續氣質全集

◉第四拾貳編 近松時代淨瑠璃

◉第四拾參編 大岡政談

◉第四拾四編 佛教各宗高僧實傳

◉第四拾五編 仇討小説集

◉第四拾六編 馬琴傑作集

◉第四拾七編 淨瑠璃名作集

◉第四拾八編 俠客傳全集

◉第四拾九編 續仇討小説集

◉第五拾編 近松世話淨瑠璃

帝國文庫

全部五拾册出版完成

背皮金文字入洋製紙數壹册千頁以上

正價（●壹册金六拾錢●六册金參圓五拾錢●拾貳册金六圓九拾錢●廿五册金拾參圓●全部五拾册金貳拾五圓●郵稅壹册拾六錢●目方四百匁）

全部目次

◎自第壹編至第四編 眞書太閤記

◎第五編 源平盛衰記

◎自第六編至第八編 南總里見八犬傳

◎第九編 東海、奥羽、木曾、江島道中膝栗毛

◎第拾編 梅暦春告鳥

◎第拾壹編第拾貳編 通俗三國志

◎第拾參編 三馬傑作集

◎第拾四編 柳澤、越後、加賀、伊達騷動實記

◎第拾五編 種彦傑作集

◎第拾六編 京傳傑作集

◎第拾七編 星月夜鎌倉顯晦錄 北條九代記

◎第拾八編 通俗十二朝軍談 通俗武王軍談 通俗明清軍談

日本名勝地誌

全部十二冊

第拾編

西海道の部

●正價參拾錢

本誌全部十二冊既刊下記の通○六冊一圓七十五錢○十二冊三圓四十錢○外に一冊郵稅八錢宛

野崎左文君編纂
西海道各名勝及地圖挿入
製本出來

本編載する所は西海道九州及び壹岐對馬の名勝舊跡にして口繪の寫眞銅版は九州の名勝を選びて眞影を見るが如く記事詳細にして筑紫の太宰府より天下の絕勝耶馬溪を紹介し津々浦々の果までも世に知られ人に稱へられたるもの網羅して遺すことなし彼の肥後熊本の名城は以て西南戰役の當時を思遣られ阿蘇山の噴火を望みて本道一の治火山なるを知り薩摩隼人の名殘として城山に英雄の蹟を訪ふ是れ本書の特色なり

第一編●畿內之部
第二編●東海道之部上
第三編●東海道之部下
第四編●東山道之部上
第五編●東山道之部下
第六編●山陽道之部
第七編●北陸山陰道之部
第八編●南海道之部
第九編●北海道之部
第十編●西海道之部
第十一編●琉球之部
第十二編●臺灣之部

910.82
T231
v. 1

COLUMBIA UNIVERSITY LIBRARIES
0057550409

/

JUL 2 6 1966

COLUMBIA UNIVERSITY LIBRARIES

This book is due on the date indicated below, or at the expiration of a definite period after the date of borrowing, as provided by the library rules or by special arrangement with the Librarian in charge.

DATE BORROWED	DATE DUE	DATE BORROWED	DATE DUE
C28/266-50M			